



TITLE:

修羅の作家グギ・ワ・ジオンゴ評伝--20世紀アフリカ文学の遺産--(Dissertation_全文)

AUTHOR(S):

宮本, 正興

CITATION:

宮本, 正興. 修羅の作家グギ・ワ・ジオンゴ評伝--20世紀アフリカ文学の遺産--. 京都大学, 2014, 博士(地域研究)

ISSUE DATE:

2014-09-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r12863>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により本文は2018-07-02に公開

学位申請論文

修羅の作家グギ・ワ・ジオンゴ評伝

－20 世紀アフリカ文学の遺産－

A Biographical Criticism of the Works of Ngũgĩ wa Thiong'o,
a Kenyan Writer :
In the Context of the Growth of African Literature of the 20th Century

宮 本 正 興

2014 年 6 月

博士（地域研究）

学位申請論文

修羅の作家グギ・ワ・ジオンゴ評伝

－20 世紀アフリカ文学の遺産－

A Biographical Criticism of the Works of Ngũgĩ wa Thiong'o,
a Kenyan Writer :

In the Context of the Growth of African Literature of the 20th Century

宮本 正興

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

2014 年 6 月

修羅の作家グギ・ワ・ジオンコ 評伝

ー20世紀アフリカ文学の遺産ー

目次

プロローグ：最初の「出逢い」 1

第1部：幼少年期ー時代と家庭の背景

- I. 小学校入学の夢：カマンドゥラ小学校へ 18
 - ① カミリズ村 20
 - ② 転校：マングオ小学校へ 22
 - ③ 新しいマングオ（キニョゴリ小学校） 24
 - ④ キニョゴリ中等部に学ぶ 25
- II. 家庭的背景 26
 - ① 家系・祖父・父 26
 - ② 四人の母 28
 - ③ 一家の没落：土地の喪失 30
 - ④ 両親の離婚：母の出奔 33
 - ⑤ 兄弟のこと 35
- III. 植民地を生きる 36
 - ① 「非常事態」の発令 37
 - ② 初めてのナイロビ 39
 - ③ 割礼を受ける 40
 - ④ 『宝島』を読む：文学的関心の萌芽 42
- IV. アライアンス高校へ 43
- V. 学業・白人校長・寮生活など 47
 - ① 学業のこと 49
 - ② 校長の横顔：ケアリー・フランシスのこと 51
 - ③ 寮生活 58
- VI. 学校生活・課外活動：演劇と文学への関心 59
 - ① キリスト教 60
 - ② 演劇への関心 61
 - ③ 文学への関心 62
 - ④ 「創作」に取り組む 64
- VII. 戦時下の夢：マケレレ大学へ 65

- ① 拘留を経験する 69
- ② いざ行かん、ウガンダへ 71

第2部：一粒の砂に世界を見る－何を書くのか

- I. 「マケレレ」というオアシス 73
 - ① マケレレ大学 73
 - ② 図書館：地平の拡大 75
- II. 創作への誘い：文芸誌と英語コンペティション 76
 - ① 最初の短篇「イチジクの木」 77
 - ② 幻の短篇「風」 80
- III. 唯一の短篇集『秘めやかな生活』 83
- IV. 初期の短篇と戯曲：伝統と近代の間で 85
 - ① その他、四つの初期短篇 85
 - a. 「そして、雨が降ってきた」 85
 - b. 「日照りとともに去りぬ」 87
 - c. 「村の牧師」 89
 - d. 「黒い鳥」 91
 - ② 三つの初期戯曲 95
 - a. 「反抗者たち」 96
 - b. 「こころの傷」 99
 - c. 「黒人の隠者」 101
 - ③ 初期戯曲の特徴 108
- V. 初期小説『川を隔てて』：社会に走る亀裂 109
 - ① 社会的・政治的背景 110
 - ② ムゾニ、ニャンブラ、ワイヤキを結ぶもの 113
 - ③ ワイヤキの挫折 114
 - ④ 読み方・評価 116
 - ⑤ 小説の問いかけるもの 117
 - 幕間：「英語で書くアフリカ人作家会議」 120
- VI. 初期小説：『泣くな、わが子よ』：家庭崩壊と夢の挫折 122
 - ① 社会的・政治的背景 124
 - ② ギクユの創世神話 128
 - ③ ギクユの土地観 129
 - ④ 「隔絶」の壁 130
 - ⑤ ボロの視点 133
 - ⑥ ジョローゲの位置 135

VII. 中期の短篇と戯曲：アフリカと西欧の衝突 138

- ① 四つの中期短篇 139
 - a. 「殉教者」 139
 - b. 「帰還」 141
 - c. 「闇夜の逢引き」 143
 - d. 「グッドバイ・アフリカ」 146

幕間：リーズ大学留学 149

- ② 一つの中期戯曲 149
 - a. 「明日の今頃」 150

VIII. 中期小説『一粒の麦』：独立にかける夢 153

- ① 再び、ギクユの土地観 154
- ② 時代の背景 155
- ③ 小説の舞台 157

IX. 後期の短篇と戯曲：新社会を生きる 165

- ① 四つの後期短篇 165
 - a. 「瞬時の栄光」 165
 - b. 「十字架の前の結婚式」 170
 - c. 「メルセデスの葬儀」 175
 - d. 「ベンツ族の男」 181

X. 短篇の技巧と特徴 184

- ① 書き出し 184
- ② 推敲の跡 187

幕間：60年代ナイロビ大学 / イリノイから再びナイロビ大学へ 193

X I. 最後の英語戯曲『デダン・キマジの裁判』：「ケニア」の再創造 194

- ① マウマウの「脱構築」 198
- ② 植民地言説の虚妄 200
- ③ 歴史学からの批判 201
- ④ 歴史記述と想像力 202

X II. 最後の英語小説『血の花弁』：裏切られた大義 204

- ① 『血の花弁』のインパクト 226
- ② 『血の花弁』の評価と意義 229

第3部：コミュニティ演劇－過去との認識論的断絶

- ① 生まれ故郷の村 233

I. 村おこし：識字運動からコミュニティ演劇へ 234

- ① 英語から民族語の世界へ 235

II. 「したい時に結婚するわ」：民衆演劇は何を訴えるのか 236

- ① ギクユ語版の場合 238
 - a. 「作品の背景」 239
 - b. 「感謝のことば」 239
 - c. 「序文」 240
 - d. 「演出家と役者と観客に向けて」 243
 - e. 「主要な客」 243
- ② ルーツへの復帰：過去との認識論的断絶 244
- ③ ギクユ語版と英語版の比較 246

III. 演劇活動の波紋：拘禁・釈放・解雇 247

- ① 拘禁：1977年12月31日 247
- ② 拘禁の理由 252
- ③ 刑務所からの手紙 253
- ④ 釈放：1978年12月12日 254
- ⑤ 大学解雇 257
- ⑥ 1981年の来日 266

IV. 幻のミュージカル「母よ、我がために歌え」：抵抗の系譜 268

- ① 劇の基本的性格 268
- ② 時代と場所 274
- ③ 「キパンデ」の意味するもの 275
- ④ 舞台の進行 275
 - a. 第1幕1場 275
 - b. 第1幕2場 283
 - c. 第1幕3場 285
 - d. 第2幕1場 290
 - e. 第2幕2場 292
 - f. 第2幕3場 296
 - g. 第3幕 300
- ⑤ 二つの対立する力：支配と抵抗の弁証法力学 305
 - a. 支配の系譜：カノルの時代 305
 - b. 支配の系譜：ムエンダランダの時代 306
 - c. 抵抗の系譜：カンゲゼ、カリウキ、ニャジラ 308
 - d. 抵抗の系譜：老人と「女」 309
- ⑥ タイトルの意味するもの 311
- ⑦ 文化と抵抗の力学 313
- ⑧ 「母なるケニア」の再定義 314

- ⑨ 余録 318
 - a. ケニア国立劇場での上演不許可をめぐって 318
 - b. ジンバブエ招待公演計画をめぐって 320
 - c. 「部族主義」的演劇か 321
 - d. 出演者・観客の意見 322
- V. コミュニティ演劇の顛末 325

インターラード：マウマウ戦争と土地問題、あるいはケニア近現代史の五つの断面

- I. 19世紀末～第一次大戦前まで 329
 - ① 大飢饉と民族移動 329
 - ② 土地の没収 330
 - ③ 繰り返される討伐遠征 330
 - ④ 鉄道建設 332
 - ⑤ 「白人国家」の建設へ 333
- II. 抵抗の系譜 335
 - ① 初期抵抗 335
 - ② 両大戦間期 335
 - ③ 女子割礼 337
 - ④ 独立学校運動 337
 - ⑤ 第二次大戦からマウマウ戦争直前まで 338
 - ⑥ オレングルオネの危機 340
- III. マウマウ戦争（非常事態）341
 - ① たたかいの萌芽期 342
 - ② 武装蜂起の概要 343
 - ③ デダン・キマジ 347
 - ④ 抵抗歌謡 349
 - ⑤ ラリ村の虐殺 351
 - ⑥ マウマウ戦争の評価 352
- IV. ケニヤッタの時代（1963～1978）355
 - ① 対立する二つの路線 356
 - ② 深まる政治・社会不安 357
 - ③ ケニヤッタ時代の功罪 358
 - ④ 「ワピ・ウフル？」（独立は、何処へ？） 359
- V. モイの時代（1978～2002）361
 - ① 「通り過ぎていく雲」か？ 361

- ② 権力の強化と集中 362
 - ③ 無裁判拘禁の復活ほか 364
 - ④ 政治犯釈放と民主化を求める運動 365
 - a. 文書「ケニア政治犯を釈放せよ」 365
 - ⑤ クーデター未遂 370
 - ⑥ クーデターの背景 371
 - ⑦ 民族浄化紛争 373
- VI. 2002 年以後 375
- ① 選挙後暴力 375

第 4 部：愛と力とは家庭からー民族語小説の世界

- ① 民族語作家への道、あるいは獄中の経験と決意 377
- I. 『十字架の上の悪魔』：新植民地を描く 379
- ① ギクユ語版「著者ノート」 379
 - ② 政財界権力の構図 381
 - ③ 書かれた口承文学 386
 - ④ 西欧文学伝統との繋がり 387
- II. 『マティガリ』：たたたかいは続く 389
- ① メタフィクション：聖者か、キリストか 390
 - ② 評価の視点 394
 - ③ 小説論 395
 - ④ アフリカ小説と「オラチュア」 397
 - ⑤ 『マティガリ』と『十字架の上の悪魔』：小説の構造 397
 - ⑥ 『マティガリ』の意味論 398
 - ⑦ アン・ビールステッカーの読み方 402
 - ⑧ 『マティガリ』の独自性 407
 - ⑨ 豊富な象徴形式 409
- III. 『カラスの魔法医』：20 世紀アフリカの総括 411
- ① 荒唐無稽な政治的笑劇 411
 - ② 社会的・政治的背景 414
 - ③ 構成と登場人物 415
 - ④ 「魔術的リアリズム」という拡大鏡 420
 - ⑤ 源流としての口承伝統 421

第 5 部：文学と思想の軌跡

- I. 初期ジャーナリズム 425

- ① 「サンデー・ポスト」紙の5篇 426
- ② 「初期ジャーナリズム」78篇：内容の分類 428
 - a. 教育関連 431
 - b. 言語・文学・演劇関連 432
 - c. その他 435
- ③ 「初期ジャーナリズム」タイトル一覧 436
- II. リーズ留学時代 442
 - ① 知的雰囲気 444
 - ② 60年代の世界 445
 - ③ 裏切られた独立 447
 - ④ 読書と思索 448
 - ⑤ 西インド文学への関心 450
 - ⑥ 植民地経験：キャリバンとプロスペロ 452
 - ⑦ アフリカ・西インド・メトロポリスを結ぶ 457
 - ⑧ 60年代のケニア 459
 - ⑨ 文化の復権と解放 461
 - ⑩ 文学の視座 463
 - ⑪ 評価の規準 464
 - ⑫ アフリカ人作家の役割 466
 - ⑬ アフリカ文学の目的 469
 - ⑭ 危機の自覚：言語の問題 470
- III. ナイロビ大学在職時代 472
 - ① キリスト教を捨てる：改名 473
 - ② 英文科の改革 477
- IV. アフリカの言語宇宙を開く 481
 - ① スワヒリ語の重要性 483
 - ② 民族語で書く決意 484
 - ③ 批判的意見 485
 - ④ アフリカ小説の源流 488
 - ⑤ 「真のアフリカ文学」への道 489
 - ⑥ 危機言語と文学の権利 492
 - ⑦ 「たたかい」が歴史をつくる 492

エピローグ：20世紀アフリカ文学の意志

- I. チヌア・アチェベの登場 497
- II. 『部族崩壊』という小説 502

- III. グギとアチェベ：運命の出逢い 505
- IV. 「アフリカ人作家シリーズ」(AWS) 507
 - ① AWS の編集者 511
 - ② AWS 燃え尽きる 511
- V. 比較のための 3 人の作家：オクリ、プリנק、ヘッド 513
 - ① ベン・オクリ 513
 - ② アンドレ・プリנק 517
 - ③ ベッシー・ヘッド 522
- VI. アフリカの「作家」たち 524
 - ① 「作家」の数をかぞえる 524
 - ② 文学シラバスの「非植民地化」526
 - ③ 20 世紀アフリカ文学の「御三家」528
- VII. アフリカ文学の意志 530
 - ① アフリカ文学の定義 530
 - ② 文学と「人種・民族・階級」532
 - ③ アフリカ小説の特徴 533
 - ④ 新しい世界の文学 536

全編注 543

参考文献 611

付録

- ① グギ・ワ・ジオンゴ年譜 643
- ② ケニア近現代史年表 655
- ③ 現代アフリカ文学作家紹介 677
- ④ 地図 721

プロフィール：最初の「出逢い」

本稿で、その人物と作品を紹介するのは、ケニアの作家グギ・ワ・ジオンゴ (Ngũgĩ wa Thiong'o) である。約 40 の民族と言語から構成される多言語・多民族国家ケニアで、最も人口稠密なギクユ民族の出身で、この名前は「父ジオンゴの息子グギ」の意である。(この民族の伝統的な命名方式によれば、いわゆる「姓」はない。以下、本人の名前でグギと呼ぶ)。1938 年 1 月 5 日、ナイロビ北西約 28 キロの農村リムルに生まれた。作家活動歴 50 年を超えて、今も書き続けている現役の黒人作家である。

リムルは、海拔約 2,500 メートル、リフトバレーの東端に位置し、行政上は、キアンブ・カウンティ (郡)、同西地区 (旧中央州キアンブ県内) に属している。そこは、なだらかな丘陵が広がる農業最適地で、19 世紀末から白人の定住が始まった。リムルの大部分が、かつては「白人専用高地」(White Highland) であった。ケニア全土でも、最初に茶の栽培が行われた地として有名で、今日でも、ブルックボンドなどが所有する広大無辺の茶畑が地平線遠くまで望めるような美しく、見事な土地柄である。また、東のインド洋岸の大都市モンバサから、首都ナイロビを経由して、隣国ウガンダの首都カンパラと結ぶウガンダ鉄道の通過点となるリムル駅があり、近くには 1940 年創業のバタ靴工場もある。

作家との「出逢い」というからには、まず作品を知ることから始まるのが普通であろう。私が初めてこの作家の作品を読んだのは、1970 年前後の頃で、「殉教者」(*The Martyr*)¹⁾と題する初期短篇の一つであった。大学英文科の学生であった 1962 年に英語で発表されたもので、50 年代の、いわゆる「マウマウ戦争」(Mau Mau) の非常事態下を背景に、アフリカ人 (召使い) と白人入植民 (主人) との間の隔絶された存在状況から生じた悲劇を描いている。

「マウマウ」とは、英領植民地であったケニアを凄惨な血色に染めた反英独立、土地奪還を目的にした、主にギクユ農民による武装闘争のことである。これの鎮圧のため、宗主国イギリスは、1952 年 10 月から 1960 年 1 月まで、ナイロビを含む中央州 (当時) 全土に非常事態を宣言した。

その当時、ケニアを訪れた世界的ジャーナリスト、ジョン・ガンサーは労作『アフリカの内幕』(1955) で「マウマウ団というのは、大部分がキクユ[ギクユ]族で組織されたアフリカ人テロリスト団体の名前である」とし、長びくマウ

マウの流血暴動の結果、秩序という点から見れば、ケニアはアフリカで最悪の問題地点であるとしながら、「ケニアは戦っている。マウマウ団の蜂起は、当然のことながら、ケニアのすべてのものを委縮させている。だが、この悲しむべき、忌まわしく、不快なゲリラ闘争以上にずっと興味ある問題もある。マウマウ団の背景の理解なくしては、何人もその正体をつかむことは出来ない」との認識を示している。彼は、ケニア立法審議会のヨーロッパ人選出議員のリーダーであったある重要人物から聞かされた話を、次のように紹介している。

「夕闇が迫ると、窓はすべて閉ざされ、錠がかけられ、日掩いが降ろされた。集会者は連発ピストルを取り出して、茶碗のそばに置いた。安全装置を外した小銃が実際にテーブルの上に置かれた。誰一人として背を窓や戸に向けて坐る者はない。・・・アフリカ人たちは主人が入浴中か食事中に、不意を襲ってナイフで斬りつけるのだ。ピストルを部屋向こうの外套のポケットに入れておいては役立たないわけだ」²⁾ (土屋哲訳)。

短篇「殉教者」の背景は、これに通じるものがある。入植白人にとって、席卷する黒人のナショナリズムは、無差別の暴力、テロリズム、白人皆殺しの狂気としか映らない。主人公ジョローゲが長年仕えてきた女主人は、第一次大戦後の開拓時代に入植したイギリス人の妻である。だが、夫をマラリアで亡くした後、2人の子供を本国（イギリス）へ留学させて、成長を楽しみにしている。彼女は気丈で、リベラルな人物である。それだけに黒人の召使いに対しては、他のタイプの白人（女性）とは違って、一見温厚で理解を示しているようであるが、これ見よがしの温情的態度に満ちた人物でもある。ジョローゲはマウマウの仲間から密かに闘争への参加を呼びかけられており、彼の決意はすでに出来上がっている。しかし、長年仕えた女主人とその子供たち、母子の絆のことを思うと、彼の決意は揺らぐ。闘争への参加は、この女主人を助けてからでもよいではないか・・・ある夜、女主人の身边に迫った危険を知らせるために、ジョローゲは丘の上の邸宅に向けて走る。戸口に駆けつけたジョローゲの影に向けて、女主人は毅然と発砲してしまう。彼女は、彼がテロリストの団を一団を先導してきたものと信じたのだった。翌日の新聞は「独り住まいの女性が、50人の悪漢と闘う勇気を示した。しかも一人を撃ち殺した」と称賛の記事で賑わう。だが彼女自身に、ジョローゲの行為と死が謎として付きまとうのだった。

この作品以前にも、私は南アフリカの作家 E. ムパシエーレの自伝文学の傑作『二番通り』(*Down Second Avenue*, 1959)³⁾ や、ナイジェリアの代表作家 C. エクウェンシの短篇集などに親しんでいた。しかし、その当時、アフリカ人作家への関心はそれほど集中的でなく、むしろ、ラングストン・ヒューズ、リチャ

ード・ライト、ジェームズ・ボールドウィン、バーナード・マラマッドなど、60年代の日本でも人気の高かったアメリカの黒人作家やユダヤ系作家への関心が先行していた。アフリカ文学の状況に疎かったといえればそれまでだが、翻訳作品などが皆無に近く、作家の名前もほとんど知られていなかった。当時、アフリカ文学への関心といえ、わずかに橋本福夫氏、貫名美隆氏、土屋哲氏などが先鞭をつけられた程度で、年に一冊でも翻訳書が出ればよい方であった。一般の読者には、アフリカ文学などはきわめて馴染みの薄いものであったし、読者層の薄さからも、出版社にとってはとてもペイしない分野であったということである。とはいえ、60年代のその当時は、人間としての自己証明、人種的・民族的なアイデンティティを模索するようなアメリカ黒人、ユダヤ系作家、あるいは在日朝鮮人作家の作品が一般の読書人の間でもようやく脚光を浴び始めていた。

カイロ経由で、初めて東アフリカを旅行したのは、1972年夏の約45日間のことだった。専門の言語学（スワヒリ語）のフィールドを実際に観察し、そこに暮らす人々との交流を実感してみようというのであった。帰国後、私は本来の言語研究を継続するかたわら、アフリカ文学に関する個人編集・執筆のミニコミを出し始めた。第1号は1973年3月の発行で、フランス語で書くセネガルの作家センベヌ・ウスマンについての短文を載せている。自分なりの見方で、アフリカの顔や表情を知りたいという思いに突き動かされたのであろう。初めてのアフリカを経験して、自己啓発のためにも、文学はその格好の材料であることに気付かされたのだった。

ミニコミ「ChemChem」は73年12月に第24号を出した後、個人執筆を止めて、「チェムチェムの会」を発足させ、74年5月から75年9月までの間に、第25号から第29号まで出した（第28号からはタイプ印刷）。その間、広く執筆者を求め、貫名美隆氏や五島忠久氏、橋本福夫氏などを含めて、多数が執筆している。その後、76年4月からは、『ChemChemーアフリカ・文学と社会』と改題、その頃に知り合った岡倉登志氏との共同編集、タイプ印刷で、78年11月までの間に、第30号から32号まで出した。以後、今日まで休業態勢に入った。かわりに、76年12月には、その当時、主に京都在住の砂野幸稔氏、楠瀬佳子氏、元木淳子氏、神野明氏、根本利通氏、ケニア人のゴードン・ムアンギ氏らと「アフリカ文学研究会」(Research Association of African Literature)を発足させた。この会は機関誌『アフリカ文学研究』および『MWENGEーアフリカ文学研究会会報』の発行、公開の例会活動のほか、国際集会を何度か主催し、活動は現在まで継続している。

このミニコミ「ChemChem」（スワヒリ語で「泉」の意）の第19号（73年

10 月)、および第 20 号 (73 年 12 月) に、私はグギの初期戯曲『黒人の隠者』(*Black Hermit*)⁴⁾ についての短文を載せている。この戯曲は、グギが在ウガンダのマケレレ大学 (当時の正式名称は、Univesity of East Africa) 英文科に学んだ頃の作品で、62 年のウガンダ独立を記念して首都カンパラの国立劇場で舞台に上げられたものである。ついで、「『ジェイムズ・ングギ論』のための覚え書」(74 年 3 月)⁵⁾ と題する小論を書いているが、これは短篇「殉教者」の読書経験 (当時勤めていた立命館大学の教室で、この短篇をテキストとして使った) を契機に、主な小説作品と主題、作家的態度などについておおまかな全体像を描いたものである。この小論では、73 年 9 月 4 日から 9 日まで、カザフ共和国の首都アルマ・アタで開催されたアジア・アフリカ作家会議とその運動理念にも触れている。グギはこの会議に招かれており、同会議の最高の栄誉、当時はアジア・アフリカのノーベル賞といわれた「ロータス賞」を受賞しているからである。

その頃、ある新聞社が「近代世界文学鑑賞」と題する長期の企画を考えていた。当時アフリカ文学について先駆的な仕事を手掛けておられた土屋哲氏の勧めで、私はグギについて、主に初期小説三部作を中心に 3 回連載の評論を執筆することになった (この時は、土屋氏の表記法に従って、作家の名前を「グギ」でなく、「エングギ」と表記している)⁶⁾。

以上の諸論説が、まことに簡単・幼稚なものであるが、日本におけるグギとその作品に関する文章の嚆矢であっただろう。当時は、アフリカ人作家の名前の発音、日本語での表記も定まらないものが多く、作品の収集はもちろん、作家の生年ほか、個人情報も正確に知ることがとても困難だった。

私の 2 回目のアフリカ旅行は、77 年夏のことで、約 2 ヶ月にわたった。この時は、グギがナイロビ大学に勤務していること、『一粒の麦』(*A Grain of Wheat*, 1967) の後、10 年ぶりの小説『血の花卉』(*Petals of Blood*) が近く刊行予定であることが数ヶ月前から知らされていた。当然のように、最初の到着地ナイロビで、私はこの作家本人に会えるものと期待していた。

インド航空 305 便で伊丹空港を発ったのは 77 年 7 月 26 日だった。香港、バンコク、カルカッタを経由、ボンベイ (現ムンバイ) で乗り換えて、ナイロビ着は翌 27 日午前 9 時 30 分であった。日本との時差は 6 時間である。11 時頃に市内中心部からウフル・パーク (「独立」公園) を隔てて、やや離れたミリマニ・ホテルに投宿、しばらく休憩の後、午後 1 時すぎ、徒歩 10 分で咲き誇るブーゲ

ンビリアの美しいナイロビ大学構内に入った。教育学部棟の 2 階、いちばん奥に文学科チェアマンの部屋があり、グギ・ワ・ジオンゴの名札が掛かっていた。ノックの後、「カリブ」Karibu（スワヒリ語で Come in の意）という女性の声を聞いてドアを押した。正面に秘書の女性が机に向かっていた。すぐ右手の奥にチェアマンの執務室があり、戸は開け放たれたままで、乱雑に積まれた書類や書籍の机を前に、グギその人の姿があった。

この時、30 分ほど話したが、いま記憶に残っているのは、7 月に出たばかりの新作『血の花弁』のタイトルの話題であった。このタイトルに落ち着く前には、『あるバーメイドの物語』(*A Ballad for a Barmaid*)あるいは『血の色をした花びら』(*Bloody Petals*)などを思案したという。翌日午後 2 時の再会を約束して大学を出た。そのまま、72 年に 1 週間ほど宿泊したことのある都心のブルンナーズ・ホテル（私の気に入りのホテルだったが、今は無い）まで歩いた。雑誌や書籍を置いている同ホテル内の小さな売店で、『血の花弁』のことを尋ねると、欲しがっている人が多いが、在庫切れとのことだった。後でわかったことだが、初版 20,000 部がたちまち売り切れたのだった。出版元のハイネマン教育図書出版社は、同年中に大增刷したという。

翌 28 日午後 2 時頃に再び大学を訪ねる途中、都心のプレスティジ・ブックショップ、カソリック・ブックショップなど二、三の有力な本屋を訪ねたが、何処の店頭にも『血の花弁』売り切れ」の張り紙があった。大学では、再びグギと会い、1 時間以上も話すことが出来た。この日の話では、韓国の獄中詩人金芝河の作品を読んでいるとのことで、日本から私が持参した日米安保問題の冊子に興味深く目を通していった。部屋の壁には、新聞の切り抜きなどが、所狭しとピンで留められていた。自分の顔写真入りのロシア語新聞の記事のほかに、土屋哲氏が朝日新聞に寄稿された日本語の短い記事もあった。本棚には、リチャード・ライトの『アメリカの息子』、ジェームズ・ボールドウィンの『次は火だ』、『もう一つの国』、エルドリッジ・クリーバーの『氷上の魂』、アタウェイの『溶鉱炉の上の血』などが見えた。今は執筆を休んでいるが、いずれはカリブ海域、アフロ・アメリカ、アフリカをトータルに、黒人世界全体を一つに見渡せるような小説を書いてみたいと言う。また、文学作品はポリティカルな問題を包括していることが大切だ、『血の花弁』を好きになってほしいということだった。私がまだ手に入れていないことを知ると、二、三の方面に電話をかけてくれたが、どこにも在庫はないらしい。翌日にダルエスサラームへ飛ぶことを伝え、旅行の無事を祈って、教育学部棟の玄関まで見送りに出てくれた。8 月に再びナイロビへ戻る予定であることを告げると、午後 2 時にはオフィスにいるから、

何時でも会えると言う。別れる時、今度ナイロビへ戻ってきたら何をしたいかと問われたので、私は「リムルのあなたの家へ連れて行って欲しい」と答えた。

この後、私はすでに 2~3 の短篇を発表している若いケニア人青年 G 君を職場に訪ね、『血の花弁』の反響を多少とも知ることが出来た。G 君は、アフリカ人食堂の片隅へ私を連れ出し、周囲をはばかりのように声を細めて、今や『血の花弁』の話題がナイロビ中を席卷していること、自分が持っている 1 コピーが友人同士の間でまわし読みにされて、誰の手元へ渡っているかもわからないと述べた。そして『血の花弁』の内容についてはただ一言、すなわち、イルモログ（小説の中心舞台となる架空の村）の村人の味方に立つ弁護士として登場し、後にナイロビのスラム住民の期待をになって国会へ送り込まれるが、最後に、その反権力・反体制の思想と行動のために謎の死をとげる人物（G 君は、しきりに **minor character** であると断りながら）が、元国会議員 J. M. カリウキ（75 年 3 月に虐殺された）を形象するものであることは明白だと述べ、何人かの登場人物は現在のケニア社会に実在する人物と暗に符合するもので、この小説を読むすべてのケニア人にはすぐに思いあたると言い切った。

約 3 週間後の 8 月 18 日、早朝のエチオピア航空ナイロビ便は、東方海上に昇る大きな太陽を見ながら、ダルエスサラームを発ち、キリマンジャロの山頂を左下に見て、7 時 20 分にナイロビに着陸した。海拔 1,600 メートル。海拔ゼロメートルのインド洋に臨むダルエスサラームと比べれば、寒い。いや、寒すぎる。再びブルンナーズ・ホテルに投宿した。午前中に都心の本屋を訪ねると、『血の花弁』はすでに大量に入荷していた。日本の友人への土産として、インド人経営のプレスティジ・ブックショップで 5 部を購入した。午後 2 時半頃に大学を訪ねたが、グギに会えたのはそれから 1 時間以上経っていた。忙しい様子である。この時、待ち時間にオフィスで話しこんだ秘書の女性はペネロップ・リーさんで、7 月 27 日にも会っていたが、『血の花弁』の原稿のタイピングに協力した女性だということがわかった。作品の謝辞に、この人の名前が書き込まれていた。この日は、短時間の出逢いで、持参した作品の扉に長いコンプリメントを書いてもらい、23 日の午後 2 時に会う約束をして別れた。グギは私の希望を覚えていて、その日にリムルの自宅へ案内するという。

翌 19 日から 23 日まで、私は忙しかった。ケニアについてほとんど知らない私は、リムルからもっと西方に位置するリフトバレーを見渡せるビューポイント、マサイビレッジ、ナイロビ・ナショナルパークなどへ観光に出かけたが、それ以外の時間は、ホテルにこもって『血の花弁』を読むことになった。前作

『一粒の麦』の約 2 倍のボリュームがあり、当時までに出たアフリカ人作家の小説としては、おそらく最も大部なものであった。これを読了できたのは、22 日の深夜 12 時だった。旅の日誌に、「独立以後ケニアの社会状況を描く。社会主義的、革命文学・・・」との、やや曖昧な、短いメモを私は残した。

8 月 23 日。午後 2 時に大学を訪ねることになっていた。午前中は、市場街（キャリア・コー）、いわゆるスラム街（マザレ・バレー）などを訪ねた。ホテルへ戻ったのは昼前だっただろう。ちょうど 12 時に、秘書のリーさんからホテルへ電話があった。グギが午後 1 時にホテルまで迎えに来るという。こうして、予定通りに、当日はリムルを訪ね、グギの運転でナイロビへ戻ったのは、あたりが暗くなり始めた午後 7 時 15 分前のことだった。

リムルは、ナイロビから西北へ伸びる通称ナクル道路（ターマック＝ほそう道路）を突っ走れば、普通なら 30~40 分で到着できる距離にある。しかし、車は途中で何度も道をそれて、あちこち民家に寄っていく。はては、路上を歩いている知り合いを拾っていく。愛用の赤いトヨタ・カローラは相当にくたびれており、ギアが入りにくい。

約 2 時間後、私はリムル・プロパー（インド人やアフリカ人の経営する零細な商店や飲食店が並び、少し離れて靴工場がある。ニュー・アラスカ・バーの看板が見える）から、さらに赤土の道を約 10 分、左手にカミリズ村の家並みを見たところにヤング・ファーマーズ（バーの名前）やサファリ・バーがある。これらのバーは実名で『血の花弁』に登場する。そこで車はメインロードから直角に右手へ曲り、赤土の狭い凸凹道を何度も曲がりくねって行くと、やがてギトゴオジと呼ばれる行き止まりに着いた。そこは視界が大きく開けており、小高く、なだらかな斜面にグギの家ーギクユの伝統的な様式にならって、丸い鉄板の、トンガリ帽子の屋根が三つ連なっている。全体がセメント造りであるーがあった。到着するまでに、たまたま付近の泥道を歩いていたグギの義母（妻ニャンブラの母親）、グギ自身の甥に引き合わされた。

さて、正面の戸口を入ると、セメント敷きのガランとした広い空間があった。リビングである。ソファなどは見当たらない。壁際に大きな暖炉が切り込まれていた。やがて、どこからか、たくさんの人が現れたが、彼の妻ニャンブラ、男の子供たち 4 人（ジオンゴ、キムニャ、ドゥーシュ、ムコマ）、そして一人娘（ワンジク）らだった。

子供たちがどこかへ退くと、まもなく食事が振舞われた。チャパティのほか、鶏肉とジャガイモの入ったスープ、そして主食のウガリである。ウガリというのはトウモロコシの粉で作られたオカラ状のもので、東アフリカの広範な地域での主食である。鶏肉や牛肉のスープなどに浸けて、指で団子状に丸めて食べるのである。手前に置かれた皿に、真っ白なウガリが食べきれないほど大量に盛られている。私が扇の要の位置に腰掛け、少し離れて 3 人の見知らぬ年配の女性が私を取り巻くようにスツールに腰掛けて、それぞれが、前に置かれた料理を食べ始めた。どうも、ぎこちない。グギもないし、ニャンブラも席をはずしている。何を話題にしてよいのやら、時折、私がスワヒリ語で沈黙を払いのけるように話しかけるのだが、ご婦人たちは誰もが恥ずかしげで、声も小さい。やがて大量に残したウガリの皿を片付けに出てきたニャンブラは、チラッと視線を送ってきた。「なぜ、これっきりしか食べないの」と叱られているようで、バツが悪い。口数が少なく、ニコリともしない人で、どうも愛想は良くないというのが第一印象だった。

食事の後、グギが現れて、玄関口の正面右手に円形に造られた書斎に案内してくれた。狭い空間で、それほど多くない蔵書の中に、彼の小説の外国語訳が並んでいた。「日本語訳はないよ」などと笑いながら付け加えた。リビングへ戻ると、今度は暖炉の上に並べ置かれた数枚の大きな木版画を手にとって説明してくれた。マウマウ戦争時の民衆の抵抗をモチーフにした絵柄だった。どこからか、さらに多くの木版画を持ち出してきて、またもや熱心に説明をくわえた。村人が彫ってくれているとのことで、植民地政府側に立つアフリカ人ホームガード（ロイヤリスト）に身を張って抗議・抵抗する女を描いた一枚が特に気に入りの様子だった。父親のジオンゴはすでに死去、母親のワンジクは健在で、（実母が生んだ）三人兄弟のうち、長兄ムアンギはナイロビ近郊で靴屋、弟ジンジュは最近（74 年 4 月 6 日）に交通事故で死んだという。『血の花弁』の扉に、実母と妻、そして死んだ弟への献辞があることを私は思い出した。

その日、リムルを離れる前、グギは『血の花弁』『一粒の麦』『泣くな、わが子よ』などの小説の舞台になっているという周辺地域を案内してくれた。東アフリカ鉄道のリムル駅、作品に実名で登場する「サファリ」「ヤング・ファーマーズ」「ニュー・アラスカ」といった名前のバー、バタ靴工場などである。夕方 6 時前、（ナイロビへ戻る途中にある）妻ニャンブラの実妹ワンジル・ワ・ギギの家の中庭で話し込んでいた時、急に雨がぱらつき、やがて雨脚が強くなり始めた。「祝福の雨（Blessing Rain）だ。さあ、ナイロビまで送って行こう」ということになった。私は助手席に乗り込んだ。ナイロビの都心に到着して別れ際

に、彼は小田実と野間宏のことを話題にした。76年8月に、東京で開催された「韓国問題緊急国際集会」（小田実らが主催）に招かれたグギは、この二人の作家の名前をよく覚えていたのである。この時、グギは「第三世界における韓国人のたたかい」と題して短いスピーチを残した⁷⁾。

私は76年8月のこの集会を、その当時には知らなかった。しかし、後日譚になるが、81年に川崎市で開催された日本アジア・アフリカ作家会議主催の国際集会⁸⁾の期間中に、野間宏氏主宰の私的な夕食会に招かれ、これに参加したグギと野間さんの間の通訳のような仕事を引き受けた。ほかに、針生一郎さん、小田実さん、小中陽太郎さん、竹内泰宏さん、吉岡忍さん、有光健さんら、日本アジア・アフリカ作家会議の中心メンバーの方々がおられたと思う。この時、グギの来日実現に向けて多少尽力した私に、堀田善衛さんが「よくぞケニア政府が出国させたものだ」とつぶやかれたのを記憶している（後で詳述することになるが、グギは78年のほぼ1年間、政治犯として無裁判のまま、ケニアで拘禁されていた）。また、後年(1993)、アメリカに拠点を置く「アフリカ文学会」(African Literature Association, ALA)参加のためにニューヨークを訪れた時、当時ニューヨーク市立大学ストーニー・ブルック校で客員教授をされていた小田実氏の誘いで、同大学での小田の「日本文学とキリスト教」と題するその日の授業で、私は「アフリカ文学とキリスト教」について代講した後、同氏の居宅に宿泊させてもらったことがあった。このほか、この頃のアジア・アフリカ作家会議の運動を通じて、井上ひさしさん、大江健三郎さん、大島渚さん、伊藤成彦さんなどに近づけた。

その後8月25日から9月1日まで、私はケニアのインド洋海岸地方、マリンディ、ゲディ、ラム島などを旅行、8月30日にはラム島の大陸側対岸のモコウェからマリンディ経由で、モンバサ島まで約8時間をかけてバスで移動した。9月1日には、さらに約8時間、18人乗りのモンバサ・プジョー・サービス(MPS)で午後9時頃にナイロビへ帰った。国連の会議期間中とかで、ブルンナーズに空き部屋がなく、都心からやや離れたウェストランドのジャカランダ・ホテルに投宿した。宿賃は高いわりに、慣れていないせいか、居心地はよくない。翌9月2日はブルンナーズに空き部屋が出来て、すぐに移った。またこの日に大学を訪れ、9月5日に、グギ夫妻と「赤坂」で夕食の約束を交わした。ブルンナーズから正面の道路を斜めに渡ったところに位置する日本料理の老舗である。

9月5日、午後2時に大学を訪問した。リーさんもグギも居ない。午後3時半頃、「スマナイ、スマナイ」と連発しながら、グギがやってきた。リーさんも息子が病気で病院に行っていたらしく、ほぼ同じ頃にやってきた。この時、英文で急いで仕上げた私の『一粒の麦』の感想文⁹⁾を手渡した。グギはその場で読み切って、最初の一言が‘Fantastic!’と言うものだった。この語には、い

ろんな意味があるから、私はちょっと不安に思ったことは確かである。この日、安部公房の『他人の顔』の英訳も渡した。後日に知ったことだが、彼は、安部はもちろん、三島由紀夫や漱石の作品にはほとんど興味を示さなかった。「これらの作品が描いている問題は、私の置かれている環境とは違っている。もっと‘Common Masses’を描いた作品を読みたい」とのことであつた。(私は留守宅に連絡し、後日、宮本百合子や小林多喜二の英訳作品を送ることになる)。

5日の会食の約束は、都合で8日に延期することになった。この約束は、さらに10日まで再び延期された。そこで、7日から『血の花弁』の再読を始めた。9月9日、ナイロビ市街の路上の青空古本売り場に、『血の花弁』が出回っているのを見た。『アフリカン・パースペクティブズ』と題する硬派の雑誌が出て、創刊号に『血の花弁』の充実した書評を載せていた¹⁰⁾。それには、「チヌア・アチェベの『部族崩壊』(現代アフリカ小説の原型をつくったと言われる。1958年の刊行以後、1,000万部以上が売れた)以来の最もinfluentialな作品」とあった。このほか、「ザ・ガーディアン」、「タイムズ・リテラリー・サプリメント」などが大きく書評を載せていた¹¹⁾。

9月10日、夕方5時20分頃、雨がぱらつく。夕方、「赤坂」で待っていると、約束よりも1時間以上遅れて、20時30分頃、グギがニャンブラ、ならびに近くイギリスへ旅行するというリムルの村人を連れて、到着した。すき焼きとテンブラがメイン料理である。食後、ブルンナーズのロビーへ戻り、皆でビールを飲んだ。ニャンブラがピルスナーを注文していた。グギは、私の留守宅から送られてきた藤森成吉のプロレタリア小説『何が彼女をさうさせたか』(*What made her do it?*, 1927)の英語版を気に入っている様子である。ホテルのロビーにいた数人のアフリカ人、外にいたタクシー運転手までが握手を求めてやって来た。タクシー運転手は、グギを往来まで引っ張り出し、店頭に置かれた『血の花弁』を見させているではないか。〈人気があるんだなあ〉、というのが私の実感だった。戻ってきたグギは、ビールを飲みながら、私に向かって「君は『血の花弁』よりも、『一粒の麦』の方が好きなのだろう」と言う。この10年ぶりの小説を理解できないのでは、ケニアの現在、いやアフリカの現在を理解できていないのかもしれない、との思いが先にたって、即座には返答せず、「もう一度読み直してみたいと思っている」と私は答えた。

9月12日、『血の花弁』の2回目読了。英文でその感想文を書くことにし、翌13日夜12時に執筆を完了した¹²⁾。14日、大学へ行くが、リーさんに会えただけで、グギは明日に来る予定だという。翌15日は午前中に市内のマクミラン

図書館で本来の関心事であったタンザニアのスワヒリ語詩人・作家シャアバン・ビン・ロバートの関連文献を探した。午後 2 時すぎに大学を訪ねたが、誰も居ないので、近くのノーフォーク・ホテルへ行ってみた。ここは植民地期の白人立役者デラメア卿が愛用したという人力車が展示されていることで有名だ。その屋外レストランで、たまたまグギが二人の人物と話しているのに出くわした。その二人とは、地元のコミュニティ演劇と成人教育の専門家グギ・ワ・ミリエ（1951~2008）と演出家のキマニ・ゲシャウだった。（後年、政治的理由からジンバブエへ移った二人に首都ハラレで会うことになったばかりか、後日、私はハラレを訪れる度にグギ・ワ・ミリエの家に泊まった。さらに 2000 年 10 月には、彼の率いるジンバブエのコミュニティ劇団員他 17 名を日本へ招くなど、思いがけず深い交流を結ぶことになった）¹³⁾。

二人で文学科のオフィスへ戻って、『血の花弁』の英文エッセイを渡すと、読み終えたグギは満足した様子で、19 日にもう一度、**final meeting** をしようと誘ってくれた。その場には、リーさんもいた。17 日、プレスティジ・ブックショップを訪ねると、馴染みのインド人店主の話では『血の花弁』の売れ行きが好調の由、著者の署名入りの作品が山積みされていた。9 月 19 日、インド航空帰路便をリコンファームし、その後、2 時 40 分頃大学へ行き、グギに会った。
‘Write, write to the limits of your pen.’ これがグギに伝えた私の最後の言葉だった。翌々日の 9 月 21 日、午前 8 時 15 分発のインド航空でアジスアベバ、アデンと飛び、ボンベイで一泊。ついでカルカッタ、バンコク、香港と飛んで、9 月 23 日午前 11 時 35 分、伊丹空港に着陸、私の二度目のアフリカ旅行は終わった。

帰国後、私は京都、大阪、神戸、東京などで、グギ・ワ・ジオンゴのこと、その新作『血の花弁』について何度か土産話を語る機会に恵まれた。その一つが、「ケニアの作家グギ・ワ・ジオンゴ氏の生活と意見」と題するものであった（京都大学人類学談話会・日本アフリカ学会ならびに日本民族学会関西支部・近衛ロンド合同例会、京大楽友会館、77.10.12）。おそらく、これは米山俊直先生の従容であったと思う。90 分程度の報告の後、世話役のお一人であった谷泰先生がその場に居合わせた朝日新聞大阪本社学芸部の記者長井康平さんを紹介してくださった。この日の報告の内容を軸に、何か原稿にまとめて欲しい、締め切りは、特に急がないという。

その結果、12 月の中頃に、私は以下の原稿をまとめて長井さん宛に郵送した。

グギ・ワ・ジオンゴは現代アフリカを代表する作家である。気さくな人柄で、町に出れば、

たちまち握手を求める人垣ができる。小型乗り合いタクシーで、生地リムルと首都ナイロビを往復することもあるが、愛用の赤いトヨタ・カローラの調子がよい時は、隣人や知人をかき集めて、遠距離タクシーの運転手よろしくサービスに努めている。

彼はリムルを離れる気がない。「現代ケニアの全容を描き切るには地方的背景から照射することが必要」と確信しているからだ。英語で書き、イギリスの出版社から作品を出すことは、自己が陥っている植民地主義の後遺症であると考えた彼は、1977年 はじめて、彼の母語であるギクユ語によるタイプ印刷の戯曲『したい時に結婚するわ』を書き、この年の秋に筆者が訪れた時は、村びとを集めて舞台練習にはげんでいた。この戯曲は現体制を厳しく批判するものだった。グギの関心の分野は広く、最近では韓国の金芝河や日本のプロレタリア小説に鋭い興味を示し、筆者への最近の手紙では、彼の希望によって届けた小林多喜二の英訳本に魅了されているらしい。

グギは、1977年7月、アフリカ文学史上「最大の影響力を持つ」との評判の高い小説『血の花弁』を発表した。名作『一粒の麦』（1967）以来10年ぶり、5年がかりの長編第4作である。筆者はこの年、この作品が投じた衝撃的な波紋がなお渦巻くナイロビに滞在し、1ヶ月以上にわたって、著者と親しく交わることが出来た。

彼が東アフリカ最初の英語小説『泣くな、わが子よ』で一躍世界の注目を浴びたのは1964年、つまりケニア独立の翌年のことだった。同年、インタビューに答えて「私はこの小説で、マウマウの戦争が、村にとり残された一般庶民に与えた影響を示すことに努めました。マウマウの恐怖は、それが家庭生活と人間関係を破壊したことです。友人が友人を裏切り、父親が息子に疑惑をかけ、兄弟がたがいの誠実さや善意を疑いました」と述べている。

外部世界から、無秩序なテロリスト集団による白人皆殺し運動と規定されてきたこの血なまぐさい民族主義の高揚の時代（1952~1960）に青年期をすごし、身を粉にして働く母親とともに、「森の戦士」（マウマウ）となった長兄の安否を気づかい、叔父や従兄弟がイギリス軍の凶弾に倒れるのを見届けてきた彼にとって、それは当然選択すべき文学のテーマであった。以来、彼の冷徹な眼は、ケニア民衆が西欧の暴力（キリスト教、植民地主義）に運命をもてあそばれる悲劇の歴史状況に注がれる。すなわち、大学時代に書き上げていた事実上の処女作『川を隔てて』（1965）では、白人の到来から1930年代にかけて、ギクユ独立学校運動（ミッション教育に反対するもの）当時を背景として、キリスト教の受容が民衆に及ぼした人間関係の亀裂を描いた。ついで『一粒の麦』では、独立前夜の意気高い時代に舞台を設定しながらも、民衆の脳裏に刻みつけられたマウマウの記憶を浮かび上がらせ、同時に植民地主義にまつわる一切の汚辱の過去を浄化して、新生ケニアを迎える心の準備をうながした。

これら初期三部作は、さながらケニア民衆の年代記風な自伝文学の感があるが、彼の17年にわたる作家生活には三つの重大な転機があったようだ。最初は、東アフリカの名門マケレレ大学卒業後、イギリスのリーズ大学で3年間を過ごしたことである。この期間に、人間の内面を鋭く掘り下げ、自然と人間の一体性を描き切るうえで、D. H. ロレンスから深い影響を受け、また、当時のリーズ大学の進歩的風土から現代世界を批判的に見る眼を培われたよう

だ。当時、彼は自己とイギリスとの出会いについて書くことを試みたが、ロンドン郊外のすばらしい風景を見るにつけても、生地リムルを思い出し、その自然の美しさと恐怖の過去の記憶をかみしめたという。この期間に書いた『一粒の麦』は、フラッシュバックと意識の流れの手法を駆使して、ケニア近現代史の光と影の部分にうごめくギクユ民衆の愛と希望、苦悩と挫折、欲望と失意の物語を、同時代人の愛情あふれる筆で書きとめたもので、その成熟した文体とともに、アフリカ文学の古典的名作の名にふさわしい。

第二の転機は1970年だ。この年の3月、彼はナイロビで開かれた東アフリカ長老派教会の第5回総会に招かれて「教会・文化・政治」と題する講演をした。この時、彼は、キリスト教がアフリカに及ぼした破壊的影響力を述べ、それが植民地主義の侵略に対して全く無能だったばかりか、一体となってアフリカの伝統文化の破壊に加担した聖職者の罪を鋭く告発した。激怒した一人の長老がツエをふりあげて陰しく彼に詰めより、向こう見ずなこの若い作家がどう息巻こうが、その名前がキリスト教徒であることを示している、とののしった（当時、彼は旧名ジェームズ・グギを名乗っていた）。これを契機に、彼は現在のギクユ名に復帰し、アフリカの無垢な土俗性にその根っこがあることを宣言したのである。

第三の転機は『血の花弁』の発表である。彼はかつて「黒人知識人と黒人ブルジョアジーは権力を握った時、農民、労働者の諸要求と一致するような政策をとろうと努めたことはなかった。私は、今やアフリカ人作家がこれら労働者・農民の名において発言するべき時であると思う」と述べたことがある。『血の花弁』は年来のこの主張の文芸的形象であるといつてよい。

この小説は、かつて旱魃に見舞われ、飢饉に苦しみ、地図の上に記されることもなく、政治から完全に忘れ去られていたイルモログという名の架空の村が、過去12年間に外国資本の進出を受け、観光客でにぎわう近代都市となるまでを描いている。

読者は作品の冒頭で、外資系醸造会社の3人の黒人重役焼殺事件にかかわる容疑で、4人の主要人物が尋問を受けているシーンに接するが、すぐ12年前にさかのぼり、暗い挫折の過去を背負ってこの村へ流れ込んできた4人を結びつけている運命の奇妙な糸に、思わず深い嘆息をもらすことであろう。過去が現在に負わせる容赦のない桎梏と内面の苦悩を交錯させて、底知れぬ悲劇の状況に人物を造型していく作者の才能は非凡というほかはない。

『血の花弁』の意義は、近代化の美名の下に進行する資本主義的発展のカラクリを見事に暴露し、白人権力機構にとって代わった黒い官僚の無能と欲望を痛烈に批判していることだけではない。作者は、「富の公平な分配」を約束しえない現体制に終止符を打ち、労働者と農民を中心とする新しい社会秩序の到来にすべての夢を託している。この勇気ある展望は、アフリカ文学史上最初の出来事である。

グギの文学の魅力は、作品をおおう無知、恐怖、背信、敗北のトーンの中に、かならず温かい人間的な救いの手が差しのべられていることだ。『血の花弁』でも、炎上する悪の温床（売春宿）から、女主人公が偶然にも、マウマウの戦いで片足の自由を奪われた男によって救い出されている。不妊に悩み続けたこの女には、この時、マウマウの血を継ぐ子が宿っていた

からである。この人間的なぬくもりこそ、彼の文学が持つ魅力の根源であり、あの果敢なまでの戦闘的知性を生み出す基盤となっているのではあるまいか。

この文章は、「アフリカの代表作家グギーその精神の軌跡」と題して、原文のまま、78年1月11日の夕刊文化欄に掲載されることになる。ところが、掲載されるまでに、グギの身边に、青天の霹靂のごとく、愕然とさせるような大事件が起きてしまった。

78年1月4日の深夜。東京の友人が電話をかけてきて、*The Japan Times* 1月4日号の英文記事を読み上げてくれたのである。詳しくは、本書第3部で紹介することになるが、その記事は「ケニアの小説家逮捕—戯曲作品で尋問中」との見出しで、「アフリカで最もよく知られる作家の一人、ナイロビ大学文学科主任グギ・ワ・ジオンゴがケニア官憲によって逮捕されていること」「ギクユ語で書かれ、地方劇団が上演していた最近作の戯曲『したい時に結婚するわ』が上演差し止めになっていたこと」等を報じていた。

私は、前年8月23日、リムルを訪ねた時、グギの案内で地元カミリズ村のホールを訪れ、熱心にこの劇のリハーサルをしていたたくさんの村人に引き合わされていた。グギの運転で、凸凹だらけのラテライトの道路を進みながらも、行き交う多くの村人を「役者」だとして紹介されてもいた。しかも、グギは、ギクユ語で書かれたこの劇のオリジナル台本1冊を私にくれて、自分の気に入っている一節を声に出して読んでくれていた。当時の私は、彼の母語であるギクユ語はほとんど知らなかった。『血の花弁』の再読を終えた私は、「このような政治的な小説をお書きになって大丈夫でしょうか」と不躰な質問をしていた。彼は「ケニアは民主主義の国だよ。心配はいらない」と笑いながら即座に答えたのだった。また、私が『血の花弁』を「政治小説」(political novel)だという言い方をすると、グギは「社会小説」(social novel)だよと言い直したのだった。

今思い起こせば、77年夏の経験は、私にとって実に貴重なものであった。しかし、小説『血の花弁』の内容に圧倒されるあまりに、ギクユ語による地元のコミュニティ演劇運動の意義について、当時の私はほとんど理解できていなかった。後で知られることだが、この経験は、グギ自身にとっても「過去との認識論的断絶」¹⁴⁾となったのである。

とりあえず、私は長井康平さんに電話して、先原稿の末尾に次のように追

記してもらったことにした。

ナイロビ発の外電が報ずるところによると、グギは 1977 年 12 月 31 日リムルの自宅から連行されたあと、1 月 2 日逮捕された。11 月に地元劇場で上演中のギクユ語の戯曲が上演差し止めになっていたという。この戯曲を含め、グギのこれまでの体制批判が原因と見られる。

【注】Ngũgĩ wa Thiong'o はこれまで日本では「エングギ」などと表記されることもあったが、原音に近い「グギ」とする。

私の「アフリカ文学」との「出逢い」、本当のスタートは、この時から始まったと言えるだろう。以後、私はこの作家の名前を、「グギ」と表記することになったが、幸いにも、今ではこの表記が広く定着しているように思う。本稿では、このケニア人作家、グギ・ワ・ジオンゴとの出逢いを通じて、広く 20 世紀アフリカ文学の世界を背景に、彼の人生と文学の軌跡を追ってみようと思う。

第1部：幼少年期－時代と家庭の背景

1947年、ある日の夕食後だった。母ワンジクが「おまえ、学校へ上がりたいのかい」と息子に尋ねた。今、60年以上も前の、その日を振り返って、母の声だけは、はっきりと耳に残っているという。それが何月の何日であったかは思い出せない。その言葉を聴いて、少年はすぐに言葉が出なかった。その声と、その場の情景だけが記憶に焼き付けられた。母が、ふたたび尋ねた。「お腹が減ったとか、つらいから学校へ行くのが嫌になったなどと、母さんに恥をかかせたりしないと約束できるだろうね。いつだって、精一杯がんばれるのかい」。ようやく、少年は答えることが出来た。「も、もちろんだよ、母さん」¹⁾。

この時の情景は、出世作『泣くな、わが子よ』（1964）の書き出しを髣髴とさせる。作中の母ニョカビを実母ワンジクに、主人公ジョローゲをグギ自身に置き換えれば、そっくりそのままだと言えるだろう。書き出しは、以下の通りである。

ニョカビが息子を呼んだ。彼女は、色の黒い、小柄な女で、物事に動じぬ、物静かな顔つきをしていた。生气のある、温かい小さな眼の表情から、彼女が昔は美しかったことが誰にもわかった。だが、長の歳月と苛酷な境遇は美しさをそこねてしまうものだ。とはいえ、彼女の黒い顔を明るくする溢れる微笑だけは昔と変わらなかった。

「おまえ、学校へ上がりたいのかい」

「そうだよ、母さん」

ジョローゲの胸がはずんだ。彼は、母が今しがた言ったことを引っ込めはしないかと恐れた。ニョカビは少しの間沈黙して、また口を切った。

「うちは貧乏なんだよ。わかってるだろうねえ」

「うん、母さん」

心臓が音をたてて脇腹を打つのがわかった。ジョローゲの声は震えていた。

「おまえは、ほかの友達と違って、昼のお弁当を持っていけないんだよ」

「わかってるよ、ぼく」

「後になって、学校へ行くのは嫌だなんて言って、母さんに恥をかかせたりはしないだろうね」

もちろんだよ、母さん、ぼくは母さんに恥をかかせたりするもんか。学校に行かせてくれさえしたらいいんだ、行かせてくれさえしたら。幼い日からの夢がふたたび彼の眼の前に拡がり、しばらくの間ジョローゲはその夢を追いかけた。彼はその夢の中に身をまかせた。夢はすぐそこにある、ぼくのために。輝かしい未来が・・・。

彼はきっぱりと言った。

「ぼく、学校が好きなんだ」²⁾

I. 小学校入学の夢：カマンドゥラ小学校へ

一夫多妻の大家族にあって、年上の兄たちは、小学校へ上がるには上がっても、たいていは1、2年でドロップアウトしていた。授業料が払えなかった。姉たちの場合はもっとひどかった。入学しても1年と続かず、家で読み書きを習い、やっと聖書が読めるようになっていた。こんな状況であったから、学校は夢のまた夢、地主の子供たち、金持ちの子供たちだけに許される贅沢で、まさか自分が学校へ上がれるとは思わなかった。学校へ行きたいという思いはあったが、その秘密の夢を誰かに漏らすこともなかった。

地主の子弟であれば、女の子はワンピースのドレスを着ていた。姉たちは、スカートの上に、白い木綿の、時には青く染めたラップをまとい、側面は安全ピンで留め、ウール地の編んだベルトを巻いていた。男子の場合、地主の息子たちはシャツとカーキ色の半ズボンをはいて、サスペンダーで吊っていた。グギの場合は、1枚の長方形の綿布をまとい、片側は左の腋の下に通し、両端を右肩の上で結んでいた。半ズボンも下着もなかった。風が吹いたり、勢いよく走ったりすると、綿布はヒラヒラと浮き上がってしまうのだった。学校とは、直ちにカーキ色の半ズボン、サスペンダーを連想させた。

後日、母は近くのインド人商店へグギを連れて行って、制服を買ってくれた。母はシャツと無地の半ズボンも買ってくれた。サスペンダーや肩のフラップはなかった。それでも、嬉しかった。すべては、母親の一存で決まった。母は、自分が世話した農作物を売って貯めた金を授業料や制服の購入に使ったのだった。この時、両親は離婚の寸前にあり、父ジオンゴは、グギの小学校入学については何のコメントもしなかった。

グギはリムルのカマンドゥラ小学校(Kamandūra, ミッション)に入学した。自宅との距離は2マイル(1マイルは1,609メートル)ほどだった。兄ムアングィ(Mwangi)が通ったマングオ小学校(Manguo)でなく、カマンドゥラを選んだのは母の判断だった。カマンドゥラは、地主の子弟が行く学校であった。授業料のせいであったのか、叔父のギシニ(Gicini)が通っていて、グギの面倒を見てくれると母が考えたからなのか、それとも地主のカハフ(Kahahu)の勧めに従ったものか、グギにはわからなかった。

いずれにしろ、彼は地主の子弟と同じ制服を着ることになった。じっさい、

小説『泣くな、わが子よ』の主人公ジョローゲ（Njoroge）と地主の娘ムイハキ（Mwihaki）とそっくりそのまま、地主の娘ジャンビ（Njambi）が登校第一日目に学校に付き添ってくれた。しかもクラスの担任はジャンビの姉ジョアナ（Joana）であった。そして、男性のイサク・クリア（Isaac Kuria）先生が名前を尋ねた時、彼はグギ・ワ・ワンジク（Ngũgĩ wa Wanjikū）と答えた。すでに両親の間に亀裂があって、父親ジオンゴがグギを自分の子としては認めていないことを知っていた。グギ・ワ・ワンジク、つまり「母ワンジクの息子グギ」だというのが、クラスの全員から失笑が漏れた。イサク先生は、その後、父親の名前を尋ねたので、彼は「ジオンゴ」と答えた。以後、彼は学校では、グギ・ワ・ジオンゴで通すことになった。

グギが振り分けられた準 B クラスは、いわゆる第 1 学年（スタンダード 1）より下級の教室であった。彼は第 3 学期から就学を始めたが、他のクラス仲間はずでに第 1、第 2 の学期を済ませていた。1 年生のジャンビは、何かと親切に教えてくれた。

鉄板を敷いた屋根と泥壁に囲まれた教会の空間が教室だった。仕切りもなく、3 クラス合同の授業がそこで行われた。長椅子に座るだけで、テーブルや机はなかった。先生が正面の黒板に数字やアルファベットを書いて大声を発すると、それを真似て生徒たちも大声で繰り返すといった形式の授業が多かった。

ここで、キリスト教のお祈りを知るようになった。彼は、眼を閉じることを学んだが、何をつぶやくかは知らなかった。キリスト教のお祈りは、父が屋敷の庭で、毎朝、地面に献酒してから、ケニア山に向かって何事かを唱え、最後に大声で家族全員の平和と祝福を求めるお祈りとは相当に違っていることがわかった。

最初の 1 年間のうちに、準 B クラスから準 A クラスへ、ついで第 1 学年へと進級した。学校から帰って、母が読み書きの出来ないことも知らずに、習ってきたすべての事柄を母に話したという。何かの本を読んで聞かせると、母は熱心に聴いてくれ、ときどきは助言までしてくれた。試験で満点を取っても、飛び級で進級しても、母の質問は何時でも同じだった。「頑張ったということかい？」。

ギクユ語の読み方が好きだった。教科書の挿絵も気に入ったが、ギクユ語の母音や子音の組み合わせが、まるで歌のように聞こえた。

ギクユの民に、神は美しい土地をくださった
豊富な水と食べ物、そして香り豊かな木々までも。
ギクユの民は、いつだって神を讃えよう
神はわが民にずっと親切であられたから³⁾。

少年グギにとって、文字を習うのは、文章のなかに音楽を聴くことと同じだった。文字は絵でもあった。しかも、絵以上のもの、記述以上のものだった。「それは音楽だった。書かれた言葉がうたい出した」⁴⁾ という。字が読めるようになると、彼は『旧約聖書』の虜になった。数々の物語を、昼も夜も貪り読んだ。聖書中の人物は彼の友達になった。こうして彼は、キリスト教徒がお祈りの初めに、アブラハムやイサクに呼びかける理由を理解するようになった。

カマンドウラ小学校には、のちにウガンダのマケレレ大学へ進学した優秀な先輩もいた。入学当時にグギを導いてくれたジャンビは、後にアライアンス女子高校へ進学し、さらに後には合衆国へ渡って、結婚した。彼女は出産時に、不幸にも死んだという。小学校入学は、より広い社会を見るきっかけを与えてくれた。当時を思い出して、「学校は私を開眼させてくれた。(讃美歌にあるように) それまで、私は眼が見えなかったが、今や眼が見えるようになった」⁵⁾ と述べている。

① カミリズ村

生まれ育ったリムルのカミリズ村 (Kamĩrĩthũ) は、自然の恵みの豊かさを約束するかのよう、美しい、ゆるやかに起伏するいくつもの丘がある。豊穡な真黒い大地がなだらかに起伏し、緑野がはてしなく広がっており、かつて植民地ケニアの首都の候補にあげられたことも十分納得できる土地柄である。おびただしい数のヨーロッパ人入植民を引き寄せ、さまざまなキリスト教伝道団もやって来た。イギリス人だけでなく、南アフリカからはオランダ系白人もやって来た。茶、コーヒー、あらゆる種類の果物、とうもろこし、各種の豆、ジャガイモ、野菜が豊富に育った。住民は牛、羊、山羊などの家畜を飼養し、バナナ、ヤマイモ、ジャガイモ、サトウキビ、タバコ、トウモロコシ、キビ、各種の豆などを植えており、かつてここが反植民地の闘い (マウマウ戦争) の凄惨な流血の舞台になったこと、強制収容村 (非常事態村) であったことなどは、今では想像することも難しい。

後年、幼少期を思い出して、グギは「村の生活」(1967) と題する短いエッセ

いで、フィクション風に、次のように述べている。

「ザバイ (Thabai, カミリズのこと) の村は、西方の高台からゆるやかに傾斜して小さな盆地になっており、そこにルンゲイ (Rungei, 現在のリムル中心部のこと) 商業センターがあった。センターといっても、ブリキ屋根の建物が寄り集まったところで、まっすぐに伸びた二つの列をなして、たがいに向き合っていた。囲われた空間が市場になっており、あちこちの村からやって来た女たちが群がって食料を売り買いし、世間話に興じていた。この市場へはナイロビからインド人商人も来ており、女たちと値段の押し問答をしながら、思わず下品な言葉を吐いて、女たちの失笑を買っていた。彼らは、野菜やその他の商品を仕込んでナイロビへ持って帰り、もっと高い値段で町の住人に売りさばくのだった。この地に住みついたインド人もいた。アフリカ人の店から 2, 3 分も歩くと、インド人地区に入るが、そこもまっすぐに二列をなして、波型トタンの家屋が続いていた。これらのインド人も、収穫時にルンゲイの市場でジャガイモ、エンドウ、豆、トウモロコシの粉などを買い込み、店の裏手に蓄えて、商品が逼迫した時期にそれらを売りに出すのだった。

アフリカ人の店は、ブリキ屋根が腐っていることもあったが、見事な石とレンガの壁で出来ていた。ルンゲイは、そうした建物を擁するギクユの国で最初の市場だということであった。ルンゲイは、他にも誇るものがあつた。鉄の蛇がこの平地を這って進み、やがて急断層をよじ登って、キスムからカンバラ⁶⁾ へ向かっているのだった。長い間、鉄道の引かれていない多くの村の羨望の的だった。マサイランドに隣接する村々の人々までが、ガタゴト、シュッシュポップと走っていく列車を見るために、時折はやってくるのだった。

ザバイの村は、このルンゲイの町を誇りにしていた。村人は、このセンターは村のものだと思っていたし、鉄道線路も列車もザバイの村と不思議に一体となっているのだった。彼らこそが、先頭を切って、鉄道と列車を国の心臓部に招き入れたのではなかったか。ギクユの予言者が見通したように、鉄の蛇が初めて現れた時、老若男女の誰もが、1 週間もの間、ザバイの村から避難したという話は、今に至るまでよその村々で言い伝えられているが、ザバイの村人は慎重にもこのことを語りたがらない。彼らは、隣の村々へ避難したということだが、槍とナイフを装備した戦士たちが様子を伺い、その蛇は無害で、赤い肌色をした異邦人がその身体に触れているとの報を持ち帰ると、三々五々、村人は戻り始めたのだった。

のちに、鉄道のプラットフォームは、若者たちの待合場所になった。・・・日曜日の午後には、カンバラ行きの客車とモンバサ (Mombasa) 行きの客車がルンゲイの駅で行

き違った。人々は駅へ出かけたが、モンバサやキスムやカンパラからやって来る知り合いを迎えに行くというより、皆がそこで顔を合わせ、世間話で談笑するために出かけるという具合であった。

そこでは恋が芽生えた。駅のプラットフォームがそもそもの馴れ初めの場という具合であった。・・汽車は一つの強迫観念になった。もし汽車を見損ねたら、その週はずっと暗鬱とした気分が襲われた。次の汽車を待つほかなかった。やがて日曜日が来て、汽車を見ることが出来れば、直ちに心は癒されるのだった」⁷⁾。

② 転校：マンガオ小学校へ

カマンドウラでの1年と半年が終わる頃、つまり1948年末、まったく出し抜けに、マンガオ小学校へ転校することになった。母ワンジクと兄ムアングの相談の結果だった。

マンガオ小学校は、一家の屋敷が立地する山のスロープと正面に向きあう隣の山のスロープにあった。約2マイルの距離である。こちらの山のスロープを下り、マンガオの沼沢地近くの狭い谷へ下りて、それから次の山のスロープを上ると、校庭にたどり着いた。カマンドウラよりは少し近かったし、弟ジンジュ(Njinjū)も入学すると聞いて、グギはこの転校を歓迎した。

マンガオはカマンドウラと比べて開放的な雰囲気があった。たとえば音楽の授業を例にとると、カマンドウラでは必ずキリスト教の儀礼、たいていはお祈りを伴った。マンガオでは、宗教的要素もあるにはあったが、必ず世俗の楽しみがあった。伝統的なダンスや歌、マイム他たくさんのパフォーマンスがあって、グギ自身も人々の集まりを前に、歌をうたうこともあったらしい。

この転校には、「キロレ」(Kĩrore)と「カリंगा」(Karĩng'a)という神秘的な用語が関係していた。ケニアが帝国イギリス東アフリカ会社の私有地からイギリス政府の植民地になったのは1885年だった。教育はもっぱらプロテスタントとローマ・カトリック伝道団の仕事に任された。なかでも、CMS(英国国教会派)が1799年に創設されている。リムル地区で有力だったのは、町から約12マイルのゾゴト(Thogoto)に本拠を構えた、1891年創設のスコットランド伝道団だった。カマンドウラ小学校は、このスコットランド伝道団が開校したものだ。この伝道団は、読み書きのほか、医療、木工、農業なども教えた。その教育方針は、可能な限り部族の伝統を捨てさせ、近代化させることだった。女子割礼は野蛮なものとして早くから非難していたが、後にはそこに勤めるア

フリカ人教師は、女子割礼に一切関与しないこと、キクユ中央協会（Kikuyu Central Association, KCA）のメンバーにならないこと、ジョモ・ケニヤッタ（Jomo Kenyatta, キクユ中央協会の総書記。当時はイギリスに滞在）に追随しないこと、伝道団や植民地政府が主導する結社以外には参加しないこと、などの誓約を迫られた。

「キロレ」とはスワヒリ語のキドレ「指」（Kidole）のギクユ語での形式である。「キロレ」は、軽蔑的な意味を込めて、女子割礼禁止の誓約に指紋を押した者を指した。誓約に賛同しなかった者は、伝道団を去り、多くの場合、生徒を連れて、後の独立学校へ移った。

ケニア最初の独立学校は、ルオ人ジョン・オワロ（John Owalo）が、1910年、ニャンザ州でスタートさせた「ノミア・ルオ・ミッション」（Nomia Luo Mission「私に託されたルオ伝道」の意）で、たちまち1万を超える信者を獲得した⁸⁾。独立教会、独立学校は、宗教運動の体裁をとりながら、白人支配の拒否、強制労働反対、小屋税・人頭税の支払い拒否、白人追放などをスローガンに掲げるものがあった。中央州では1925年に、商人ムサ・ディラング（Musa Ndirangũ）によってギヅングリ（Gĩthũngũri）に建てられ、ウィルソン・ガヅル（Wilson Gathuru）が初代の教師を務めた。ディラングは、ハリー・ヅク（Harry Thuku）⁹⁾の薫陶はもちろん、マーカス・ガーベイ（Marcus Garvey）¹⁰⁾の「アフリカ人のためのアフリカ」（Africa for Africans）という自助精神に共鳴していた。1929年に女子割礼禁止の宣言がなされてからは、多くの独立学校が地域の長老や教員によって創設された。これの代表格が、1933年にカマンドゥラ近くのリロニ（Lironi）に開設されたキクユ・カリング教育協会（Kikuyu Karĩng'a Educational Association, KKEA）と、1934年にムランガ（Mũrang'a）に開設されたキクユ独立学校協会（Kikuyu Independent Schools Association, KISA）であった。二つの協会はたがいに連携しており、ともに女子割礼を必要とはしなかったが、これを許容していた。

この結果、「キロレ」という用語は、アフリカの伝統を捨て、植民地体制を支持するアフリカ人を養成するミッションスクールを指すようになった。教育は、当初は木工、農業、基礎教育に限られ、英語の能力は、むしろ不必要と考えられた。これに対して、KKEA（「カリング」とは純粋、正統の意）やKISAは、教科に制限を設けず、英語にも力を入れた。植民地政府やミッション経営の学校では、英語が教科になるのは4年か、もっと高学年になってからであった。KKEAやKISAでは、英語は3年か、もっと早く教科として採用された。カマ

ンドウラは「キロレ」の小学校、マングオは「カリंगा」の小学校だったのである。こうしたことは、当時の少年グギが認識できたわけではなかった。彼はただ教育を追い続け、母親との約束を守りたいと思っただけであった。

1928 年創立のマングオの教員の多くは、ミッション・スクールか植民地政府の学校の出身だった。英語の教え方にたいした違いはなかった。しかし、カマンドウラと違って、そこには教会といえる建物はなかった。日曜日には、講堂がお祈りの場となり、伝統的なパフォーマンスにも満ちており、コール&レスポンスの応答が取り入れられていた。

1950 年、マングオ転校後の 2 年目に、第 4 学年への進級試験に合格した。これが同校での最後の試験だった。試験に失敗した多くの生徒は、学校を去り、白人が経営する茶やコーヒー農園の労働者になった。

1951 年、マングオの上級学年（高等部）へ進級し、さらに 3 年間、ここで勉強をつづけることになった。しかし、この期間に、ケニア中央州全土に非常事態が宣言された。実兄ムアング（小学校卒業後大工となり、1954 年森の戦士となる。1956 年生還）や叔父がマウマウ戦士となり、森へ姿を消した。村中が疑惑と背信、欲望と不安に包まれた。「学問を身につけるのだ。アフリカ人がこのような悲惨に突き落とされるのは教育がないからだ」という実兄の手紙が何度もグギの手元に届いた。

③ 新しいマングオ（キニョゴリ小学校）

1953 年、「カリंगा」スクールであったマングオは植民地政府の管理下に吸収され、キアンプ地区教育委員会のもとで再スタートした。KISA や KKEA 傘下の「カリंगा」スクールで、植民地政府の下での再開を拒否するものもあったが、それらは廃校となった。ケニア教員養成学校も閉鎖され、それにかかわっていた者は全員逮捕された。その校庭と建物は刑務所となり、植民地支配に反対する者の絞首刑の場となった。

新しいマングオの教科は、植民地政府が決定した。音楽やさまざまな伝統的パフォーマンスはなくなった。学校間対抗スポーツ競技会も、地域主体の祭典もなくなった。教職を追われる教師もいた。歴史や英語の授業の中身が変わった。シャカ（Shaka）やケチュワヨ（Cetshwayo）といったアフリカの民族英雄の名前は消えた。それに代えて、リビングストン（D. Livingstone）、スタンリー（H. Stanley）、レープマン（J. Lebman）、クラップフ（J. Krapf）らの名

が登場した¹¹⁾。白人がケニア山を発見し、ビクトリア湖を発見したのだった。以前のマンガオでは、ケニアは黒人の国だと教えられたが、今度は、南アフリカと同じく、白人が到来するまでケニアにはほとんど人は住んでいなかったと教えられた。白人が、キリスト教と並んで、医療と進歩と平和を運んできたのだった。

新しいマンガオでは、民族語の使用はご法度だった。以前のマンガオでは英語とギクユ語が共存したが、新しいマンガオでは、民族語の使用は排斥された。教師は民族語を使った生徒に金属札を渡し、それを渡された生徒は、次に民族語を口にした生徒にその金属札を渡すというものであった。こうして、一日のうちに金属札を手にした者が次々と明かされて、最後に罰則の鞭をもらうという仕掛けだった。金属札には「私は馬鹿です」と書かれてあった。

とはいえ、新しいマンガオでは、楽しい経験もあった。英語の能力が高く評価されたし、誰もが教室の外でも英語の能力を競った。当時、情報省から出ていた『パモジャ』(*Pamoja* スワヒリ語で「一致、団結」の意)という雑誌を購読するために、友達にならって、グギは関係省庁に購読希望の手紙を書いたことがあった。その返事が来て、‘James Ngugi, c/o Manguo School, P.O. Box 66, Limuru’ とタイプで書かれてあるのを手にした時、彼は天にも昇る気持ちだった。自分の名前がタイプで印刷されていることに感激し、その印字をじっくりと見つめたという。政府のお役所から手紙が来たことを母に告げると、「どうして、お上がお前に郵便をくれるのかい」と不審そうに尋ねたという。グギは「文通しているんだ」と答えた。「英語でだよ」と付け加えることも忘れなかった¹²⁾。

④ キニョゴリ中等部に学ぶ

1954年、キニョゴリ(Kinyogori) 中等部(インターミディエート・スクール)へ移った。家から6マイルの道のりで、裸足で、たいていは走って通学するのであった。これは、小学校と高校を結ぶ2年制の教育機関であった。昼食の弁当を持たない日が続いた。クラスの仲間は、弁当を持参するか、家が近い者は食べに帰っていた。グギは、どこかへ食べに行くふりをして、本か、本がなければノートをもって木陰に姿を隠した。そんなある日、彼はディケンズの簡約本『オリバー・ツイスト』¹³⁾を手にしていた。主人公のオリバーが、片手に鉢を持って、身の丈の高い人を見上げて、「だんな様、もう少しいただけませんか」とのキャプション付きの挿絵があった。グギは自分の境遇を、オリバーに重ねた。

他の学友から昔話や伝説を聞くことが気晴らしになり、楽しみになった。デイヤ (Ndeiya) やゲシャ (Ngecha) から通っている者がいたが、そこは学校から 10 マイル以上も離れていたから、下校時には、時間つぶしの道草を食う絶好のチャンスが訪れた。そんな時、昔話を知っている者が仲間のヒーローだった。すでに非常事態が宣言されていたから、昔話だけでなく、家族のこと、近所のこと、はてはナイロビで起きていることなど、長い道のりで話題に事欠かなかった。

旧マングオ小学校に上がるまで、グギはキリスト教に関心がなかった。旧マングオ時代には、近くにリムル・ロレート修道院があって、級友ケネス (Kenneth) と二人でカトリック教徒になろうと密かに約束したという。実際には、地主であり、CSM (Church of Scotland Mission。のちに東アフリカ長老派教会と改名) の牧師であったカハフの手で洗礼を受けることになった。その時、洗礼名としてジェームズ・ポールなる名前を欲しいと思ったが、これはカハフの二人の子供の洗礼名であった。洗礼名は一つでよいとのカハフの意見があり、彼はジェームズの名を貰うことになった。

キニョゴリの中等部を卒業すると、1955 年から 58 年まで名門アライアンス・ハイスクールで学ぶことになった。リムル全域はもちろん、ギクユ民族学校出身の唯一の進学者だった。彼の英語の能力がどうやら一人前になったのはこの頃のことである。高校時代については、後で詳述することにしよう。

II. 家庭的背景

現在のリムルは、行政的にキアンブ・カウンティ (Kiambu County) に属している。この地域はケニア全土でも最も肥沃な土壌を誇っており、したがって富裕な人々が多い。政・財界の大物の多くはこの地方の出身であり、「キアンブ出身」といえば特権と富裕の代名詞になっているほどである。ただし、グギの一家は生粋のキアンブ人ではない。母はおそらくカミリズ村の生まれだったが、父はムランガ (ナイロビとケニア山の間) に位置。旧名フォートホール) の出身だった。

① 家系・祖父・父

父ジオンゴは、1890 年から 96 年の間に生まれたであろう。孤高の人で、口数も少なく、自分の過去をめったに語る人ではなかったらしい。四人の妻を娶ったが、妻たちも夫の過去を詮索することはなかったという。

父はムラティナ (mūratina) を醸造する腕で知られた。[ムラティナとは、ギクユの名の知られた地酒。ムラティナの木 (ソーセージツリー)、それにサトウ

キビの絞り汁と蜂蜜を添加したもので、素晴らしい自然発酵の酵母の作用で出来上がり、美しいヒョウタンに貯蔵しておく]。真昼間から酒を飲むような人ではなかったが、週末などにはこれを目当てに人々が群れ集まったという。父には長老の風格と十分なオーラが漂っていた。

父方の祖父はマサイ人だったらしい。戦争で身受けされたのか、捕虜となったのか、それとも飢饉などを逃れた孤児であったのか、いつの日かムランガのギクユの農家に迷い込んで来たのだった。とうぜん、ギクユ語は話せなかった。彼は、ギクユ人の耳に「トゥシュ」(tūcū)あるいは「トゥシュカ」(tūcūka)と聞こえるような言葉を繰り返していたというから、ギクユ語で「ドゥーシュ」(Ndūcū)、つまり「いつも tūcū とばかり言っている子供」という名が付いた。そして、ギクユの世代名としてはムアンギと名づけられた。この少年は長じて 2 人の妻を娶ったが、どちらもワンゲシ (Wangeci) という名前だった。一方のワンゲシは、2 人の息子と 3 人の娘を産んだ。息子の名前はジンジュ (Njinjū) とジオンゴ (Thiong'o) で、後者がグギの父親になる人物だった。娘は、ワンジル (Wanjirū) とジェリ (Njeri) とワイリム (Wairimū) だった。もう一方の妻との間には、カリウキ (Kariūki) とムアンギ・カルイジア (Mwangi Karuithia, 別名「外科医のムアンギ」) という 2 人の息子がいた。「外科医のムアンギ」というのは、この息子が後に、ギクユランドとマサイランド一帯で男子に割礼を施す専門家になったからであった。

グギは、この祖父にも祖母にも会ったことがない。原因不明の病気が地域に流行して、祖父、ついで二人の妻、そして娘のワンジルまでが矢継ぎ早に亡くなった。死の直前、一家が過去から受け継いだ運命的な呪いを受けているか、あるいは嫉妬深い隣人の強力な魔法にかけられていると信じて、祖母は二人の息子に、カベテ (Kabete, ナイロビ郊外、キクユに近い) の親戚の家に身を寄せるように指示したという。その地は、何マイルも離れていたが、すでに娘のジェリとワイリムが身を寄せていた。二人の息子は、ムランガへは二度と戻らず、子孫に向けて出身地を明かさないことを誓ったという。二人の家系を継ぐ者が、ムランガへ戻って土地の権利を主張したり、同じ運命に遭わないようにするためだった。こうして、二人の息子はムランガを捨てた。これは、1910 年頃のことであっただろう。

その後、兄弟二人は、まずナイロビへ出た。その頃のナイロビの人口は 14,000 人で、初めて見る巨大都市だった。二人はワンジルの叔母の家に身を寄せたが、やがてジンジュは都市の喧騒を避けてデイヤとリムルの農村へ向かった。ジオ

ンゴ、つまりグギの父親は白人や黒人の入り混じる都市の魅力に引き付けられ、ナイロビに残った。まもなく、彼はヨーロッパ人一家に雇われた。そこでの生活がどんなものであったか詳細は不明であるが、第一次大戦への出征は、その都度、仮病をつくりだして逃れることが出来たという。あるいは、サーバントとして彼を手放したくなかった白人一家が兵役逃れを黙認したものであろう。ハリー・ヅクが逮捕され、ナイロビ市内ノーフォーク・ホテル付近で、これに抗議した民衆に警察が発砲して、女性リーダーのニャンジル・ムゾニ¹⁴⁾ら 150 人（210~230 人ともいわれる。他に、千単位との説もある。政府の公式発表は 21 人）が射殺された 1922 年 3 月、グギの父親が現場に居合わせたかどうかは不明だが、その後が続いた家事労働者のゼネストの影響を受けたことは確実だろう。この後、彼はナイロビを離れ、兄のいるリムルへ向かった。

② 四人の母

父ジオンゴ・ワ・ドゥーシュ（Thiong'o wa Ndũcũ, ドゥーシュの息子ジオンゴ）はリムルに住みついた。先述したように、4 人の妻〔第 1 の妻はワンガリ（Wangari）、第 2 の妻はガショキ（Gacoki）、第 3 の妻はワンジク（Wanjikũ）、第 4 の妻はジェリ（Njeri）〕を娶った。

母ワンジクは無口だった。ジオンゴと結婚した時、第 1 妻のワンガリには 2 人、第 2 妻のガショキには 1 人の子供がいた。グギは、母親になぜ父と結婚したのか、その理由を尋ねることがあった。

母が言うには、最も大きな理由の一つは、ジオンゴの一家が、2 人の妻、その子供たちの間で、何の分け隔てもなく、いつも一緒に、心をついて生活していたからで、自分もその仲間に入りたいと思ったからだという。もう一つの理由は、ともに畑仕事に熱心で、何時の日からか、仕事をしている自分を、折に触れて手伝ってくれるようになったからだという。2 人は疲れを忘れて、まるで競争するかのようには仕事に精を出したらしい。そんなある日、父がビーズのネックレスを持ち出して「これを付けてくれるか」¹⁵⁾と尋ねたという。母は何も言わずに、そのネックレスを受け取った。

広い前庭を取り囲むように、5 つの小屋が半円状に建っていた。一つは父の小屋（ジンギラ thingira）で、夜間には山羊もそこで寝た。父の小屋は離れて建っていたが、他の四つの小屋から等距離にあった。グギを含めて兄弟姉妹は、真ん中の空き地で縄跳びや石蹴りをして遊んだ。これらの遊びは、兄弟より姉妹の方がうまかった。トウモロコシの乾いた皮と小枝をうまく使って飛行機を

作り、勢いよく駆けて飛ばした。母たちは、かわるがわる父の小屋へ食事を運んだ。

父は 4 人の妻を分け隔てなく扱い、食事の時に、子供たちを自分のジンギラへ招くことがよくあった。昔話は得意でなかったが、食事の作法はうるさかった。「よく噛んで食べるんだ。食べ物は何処へも逃げていかない」¹⁶⁾ というのが口癖だった。母たちの小屋の中は、どれも真ん中に三つの石からなる釜戸があり、寝室の空間があり、食料の貯蔵所があった。また、山羊を入れる囲いや、特別な機会に屠殺することになる山羊や羊を入れる檻もあった。トゥモロコシやジャガイモ、豆などを貯蔵する円い小屋は脚柱で支えられており、壁は細い枝を編んでつくってあった。前庭につづいて、牛を入れる巨大なクラールがあり、小牛を入れるもっと小さな小屋もあった。女たちは牛や山羊の糞を集めて、庭へ通じる大木戸のそばのゴミ捨て場に積み上げていた。そこから木々が連なり、木々の向こうにリムルの町が見え、鉄道線路の向こうには白人が経営する広大な農場があった。そこは、兄や姉が小銭を稼ぐために茶の葉を摘みに行くところであった。リムルに茶の種がインドから持ち込まれたのは 1903 年のことだった。

グギは年上の姉たちに連れられて、白人農園に茶を摘みに行くことがあった。この仕事はそれほど得意ではなかったらしいが、1 日に 30 セントの賃金だったという。兄弟や姉妹と連れ立って、収穫期には、アフリカ人地主の畑に除虫菊を摘みに行くことも多かった。この仕事の方がやさしかった。しかし、背中のサイザル製の袋を一杯にするのに時間がかかった。木登りのほか、自家製の手押し車を走らせたり、除虫菊畑で時折見かける野うさぎ、小型アンテロープなどを追いかけるのが特別な楽しみだった。

第一妻のワンガリは昔話をよく知っていた。毎夜、子供たちは彼女の小屋の暖炉のそばに集まって、話を聞き、週末などは、かわるがわる得意の昔話を披露しあったという。母ワンジクは、昔話は得意ではなかったが、「鍛冶屋と身重の妻」¹⁷⁾ の話などを皆に聞かせたという。

ワンガリには 7 人の子供がいたが、5 番目の子 (2 番目の娘) ワビア (Wabia) は眼が見えず、関節に障害があり、歩くのも不自由だった。ギトゴ (Gĩtogo) は口が利けなかった。小さい頃、ワビアが弟のギトゴを背負って子守りをしていた時に、雷に打たれて、二人はそうなったという。だが、ワビアは昔話や歌が得意だった。

一夫多妻の大家族での、たがいの呼び名が面白い。母同士の間で、たがいの個人名を呼び合うことはなかった。第一妻のワンガリの場合は、ムワリ・ワ・イキグ (Mwarĩ wa Ikĩgu)、つまりイキグの娘、第二妻のガショキの場合は、ムワリ・ワ・ギジエヤ (Mwarĩ wa Gĩthieya)、つまりギジエヤの娘、第三妻で実母のワンジクの場合は、ムワリ・ワ・グギ (Mwarĩ wa Ngũgĩ)、つまりグギの娘、第四妻のジェリの場合は、ムワリ・ワ・カビシュリア (Mwarĩ wa Kabicũria)、つまりカビシュリアの娘と呼ばれた。グギから見ると、ワンガリは「大きい母さん」(maitũ mūkũrũ)、ガショキとジェリは「小さい母さん」(maitũ mũnyinyi) だった。実母のワンジクは、ただ「母さん」(maitũ) と呼べばよかった。これとは別の呼び方もあった。それぞれの実子の名を利用して、「誰その母さん」と呼ぶことが出来た。たとえば、ワンジクの場合は、「グギの母さん」(Maitũ Ngũgĩ) というのであった。ギクユの命名方式は、両親の血統が交互に入れ替わるものであったから、実際には、父方の名前を踏襲する場合、たくさんの子供が同一の名前を持つことも稀ではなかった。さらに別の呼び方もあった。たとえば、グギの場合は「ワンジクの息子グギ」(Ngũgĩ wa Wanjikũ) と呼ばれることもあった。ほかに、自分で決めるか、他人が付けた仇名も使われた。たとえば、ガシュングワ (Gacungwa) 「小さいオレンジ」、トゥンボ (Tumbo) 「大きなお腹」などである。小さい時、グギは、こうした仇名で兄弟姉妹を区別しており、後日、本当の別名があったことを知って驚いたという。

父ジオンゴは 60 年代に死去したが、グギには同じ母親から生まれた兄と弟のほかに三人の姉がいて、彼は第 5 子であった。長女ガゾニ (Gathoni) の次に長兄のムアングイがいた。彼は大工であったが、非常事態時には森へこもり、マウマウ戦士となった。その後、無事生還し、晩年は長くナイロビ郊外のカワングアレ (Kawangware) で靴店を開いていた。末弟のジンジュ (Njinjũ) は学校教育を全うすることが出来ず、あちこちの工場労働に従事したが、1974 年 4 月 6 日、不慮の交通事故で死んだ。なお、次女はジョキ (Njoki)、三女はガシル (Gacir) という名前だった。異母兄弟・姉妹を含めて全部で 28 人がいたというが、うち 2 人が第二次大戦に参加、1 人が戦死、1 人が生還した。

③ 一家の没落：土地の喪失

父は、ナイロビでの生活経験から、多少の英単語を覚えていたらしい。また、多少の牛や山羊を買う金を貯めていたらしく、リムルへ移って来た頃から家畜を飼っていた。彼は何頭かの山羊と引き換えに、口約束であったが、ギクユのしきたりに倣い、証人を定めてジャンバ・キブク (Njamba Kĩbũkũ) という人

物から土地を買った。ところが、この人物が、その土地を、後に現金払いで別の人物、つまり、初期のキリスト教改宗者でスコットランド・ミッション（1946年以降、長老派教会）出身のスタンリー・カハフ（Stanley Kahahu）なる人物とその弟エドワード・マツンビ（Edward Matumbi）に売却するということが起きた。現金による売却は、植民地の法律に基づいており、関係者の署名入りの文書が残された。カハフ側が二重売却であることを事前に知っていたかどうかは不明である。

以後多年にわたって、これが原住民法廷で争われたが、その都度、書記記録が口頭の約束よりも効力のあるものと判断された。「口頭言語の伝統は、文字の近代性の前に屈服した」¹⁸⁾ とグギは後年に述べている。この結果、カハフ側が正当な地主と認められた。父ジオンゴは、相続権のない、自分の生涯期間だけの所有を認められる一区画をあてがわれた。彼は、そこに 5 つの小屋を建てたのだった。勝訴した側にとっては当然であったかもしれないが、カハフ側は自分の権利を主張し、自余の土地は自分のものであるとし、ジオンゴが家畜の放牧や耕作に使うのを拒否した。この結果、子供の養育や家畜の世話がたちまち問題になったが、母ワンジクの父グギ・ワ・ギコニヨ（Ngũgĩ wa Gikonyo）が自分の土地を放牧や耕作用に提供してくれた。こうして難局は一時的に回避され、一家の名誉は保たれたものの、後々まで父ジオンゴとカハフの間に険しい緊張関係が持ち込まれた。

やがて、ある日から事態が一変した。父は、現金よりも、土地と家畜こそが最も大切だと考える人物だった。ところが、まずクラール（家畜用の空地、囲い）から牛と山羊がいなくなった。そうすると、捨てる糞もなくなったから、ゴミ捨て場の山は急激に低くなって、ガラクタだけが残った。つぎに、母たちが耕す畑がなくなった。彼女たちは家からずっと離れた遠くの畑へ移って働くようになった。父のジンギラは空き家同然になり、子供たちと食事を共にすることもなくなった。母たちは、元の屋敷からは遠い、リムルの中心部のアフリカ人商店近くまで父の食事を運び始めた。新しいジンギラがそこに建てられていた。父は、土曜日か日曜日にしか帰ってこないことが多くなり、そんな時には、妻の誰かの小屋に泊まった。やがて、周りの木々が切り倒され、切り株だけが残った。土が耕され、ついで除虫菊が植えられた。木立は後退し、除虫菊畑が前進してきた。父は、こうして財産のすべてを失ってしまった。

兄弟姉妹がその除虫菊畑で働き始めた。一家の土地は、スタンリー・カハフという名前のアフリカ人地主、ロード（卿）の称号を持つ、東アフリカ長老派教

会の長老、通称スタンリー旦那と呼ばれる人物の完全な財産になってしまった。父は、「法律上と金銭上のペテンによってこの富裕地主、ケニアのアフリカ人地主に土地を奪われた」¹⁹⁾ のだった。

地主のカハフの屋敷、叔父ムクル (Mūkūrū) の屋敷、それに父ジオンゴの屋敷は隣り合っていた。とはいえ、叔父ムクルの屋敷は、カハフの地所の境界から数ヤードばかり離れていた。三つの屋敷は、どれもが高い壁を築いて、たがいに見えないということはなかった。これらの三つの屋敷は、伝統と近代の関係から見て、三つのタイプを代表していた。カハフは、初等教育を受けて、牧師になっており、子弟の誰もが学校に上がっていた。なかでも、ジョアナとポールの二人は学校教師になっていた。カハフは、牧師として常に白衣をまとい、他の家族はスーツかドレスをまもっていた。カハフは除虫菊の栽培を許された村で最初のアフリカ人であり、プラム農園も経営していた。牛やロバが引く荷車、ラバに引かせる鋤、ついで乗用車とトラックを所有するに至った最初のアフリカ人でもあった。カハフとその一族は、村の近代の象徴だった。

叔父ムクルは、カハフとは対照的だった。彼にとっては、ギクユの伝統こそが、神聖かつ侵すことの出来ない聖域だった。一家は、割礼を含む伝統的な通過儀礼や、その他の慣行を忠実に実践していた。グギがはじめて女子割礼の現場を目撃したのは、叔父ムクルの屋敷内でのことだった。叔父ムクルの第二妻ムブヅ (Mbūthū) の末娘ニャカニニ (Nyakanini, チビツ娘) の割礼であった。この時には伝統的なギティイロ (gĩtiro)²⁰⁾ の踊りと歌があった。叔父ムクルは、子供の誰かを、教会のミサはもちろん、ミッション・スクールへ送ることはしなかった。そればかりか、彼はカハフとのかかわりを出来るだけ避けようとする人物だった。彼から見ると、カハフは伝統の否定者、裏切り者なのであった。ところが、彼の娘の一人ワンブイが、カマンドウラの教師をしていたカハフの長男ポールと恋仲になり、身ごもるといった事件が起きた。この時、カハフは息子を南アフリカへ留学させて、事件に決着をつけてしまった。

父ジオンゴは、ギクユの伝統からも、キリスト教の慣行からも超然としていた。カハフとも叔父ムクルとも違ってしたが、自分では近代的な人間であると思っていたようである。カハフに対して、父は自分が正当な土地所有者であるとの思いを常に抱いていた。したがって、信仰の道を説く牧師カハフを偽善者だと考えていた。まだ幼かったグギは、こうしたことを常に意識していたわけではなかった。むしろ、時代の転形期にあって、カハフからは近代を、叔父ムクルからはギクユの伝統を、父ジオンゴからは無神論を学んだのだった。キリ

スト教とギクユの伝統から、さまざまな実践的価値を学ぶことにもなった。

土地を失ってから、一家は地主のカハフの農場で自由契約の借地人（ahoi）として働くことになった。つまり、両親は、あちこちのちっぽけな土地を耕して生計を立て、他方で、他人の農場での賃金労働に従事したのだった。

④ 両親の離婚：母の出奔

一家の生活はどん底に落ちた。土地と財産が無くなると、父の風格、以前の超然とした物腰が一変した。それまでは家庭のすべてを妻たちに任せていたが、事細かに注文を出すようになり、娘たちの出入りにも喧しくなった。父が以前のジンギラを捨てて、一番若い妻ジェリの小屋へ移ってから事態はますます悪化した。四人の妻たちの間の力関係が揺らいだ。父は家族の緊張を緩和しようと努めたが、もはや努力の甲斐はなかった。妻や子供を殴るようなことがなかった父が、いつからか家庭で暴力をふるうようになった。誰かれなく当たるようになり、なぜかグギの母親ワンジクが特に犠牲になった。

週末以外に酒を呑んだことのなかった父が、四六時中呑むようになった。それも自分でつくらないで、よそへ行ってムラティナを呑んでくるのだった。市場で野菜などを売ってきた妻たちを待ち伏せして、金をせびるという有様だった。地主カハフの除虫菊農園や白人専用高地の茶農場で稼いできた娘たちの小銭までも当てにする始末だった。

ある日、その父が実母ワンジクの畑の収穫物を横取りし、売却しようとした。母がそれを許さないでいると、父は暴力に訴えて、母を殴り始めた。母は泣きだした。そばにいたグギと兄ムアングも、泣きながら父に暴力を止めさせようとした。他の妻たちも、躍起になって、父の暴力を止めようとしたが、無駄だった。

父の怒りの本当の理由は、一番若い妻ジェリのせいだという噂が立った。ジェリは、白人が所有する茶農場で働いていたが、農場の監督官と不倫に陥ったという。父は、やり場のない憤懣をグギの母親ワンジクに向けたらしい。二人の離婚は、第二次大戦直後の 1946 年か 1947 年のことだった。以後、読み書きも知らず、スワヒリ語も話さない母ワンジクが、腹を痛めた 6 人の子供を育てる全責任を負うことになった。

両親の破局が近いある日のことだった。夕食後、母がグギと弟のジンジュを呼んで、数日の間、リフトバレーのエルバーゴン（Elburgon）²¹⁾ の村へ帰るつ

もりだと言った。そこには、まだ会ったこともない祖母、叔父、叔母が住んでいた。予期しない母の旅行計画であったが、汽車で行くのだという。二人とも付いて行きたかったが、まだ学期の途中であった。母は「学校を辞めて一緒に行くか、それとも後に残って学業を続けるか」の選択を求め、3日後に返事をするようにとのことだった。

母が利用するウガンダ鉄道は、インド洋岸のモンバサから、ギクユランドの心臓部を突き抜けて、ウガンダのカンパラへ通じていた。リムル駅は 1899 年 11 月に建設されたもので、毎日曜日には、カンパラからモンバサへ向かう列車と、モンバサからカンパラへ向かう列車がこの駅で行き違った。その時には、長い警笛が鳴り、もくもくと黒い煙が出るのが家からも見えた。ウガンダへ向かう汽車の音は、「トゥ・ウ・ガ・ンダ、トゥ・ウ・ガ・ンダ」(TO U-GA-NDA, TO U-GA-NDA) と響いてきた。それを思うと、グギは汽車に乗ってみたかった。それまで汽車に乗ったことはなかったが、1 等車はヨーロッパ人、2 等車はインド人、3 等車はアフリカ人が乗るのだと聞かされていた。

やがて、3 日が経つと、弟ジンジュは汽車に乗ること、つまり母との旅行を選んだ。グギは選択に窮した。母が決めてくれたらよいとも思った。結局、彼は学校へ上がる時の母との約束、自分が将来に描いた夢を捨てることが出来なかった。「ぼくは行かない」と答えた時、頬を涙が滴り落ちた²²⁾。

母の父、つまり母方の祖父グギ・ワ・ギコニヨはリムルに住んでいた。グギの名前は、この祖父を継いだものだった。祖父は大柄で、かなりの地所と相当数の牛を所有しており、村では有力者の一人だった。母は夫の元を去ってから、この祖父の地所に小屋を建てる許しを乞うたが、祖父は慎重だった。娘婿ジオンゴから娘の婚資をもらっていたから、離婚となれば婚資（山羊）を返さなくてはならなかった。祖父は、両者の歩み寄りの協議があるものと考えていた。実際のところ、成人を迎えた子供がいるような熟年夫婦の離婚については、共同体でも手続きの術を知らなかったらしい。

母は夫からも疎遠にされ、父の家にも受け入れられないという、宙ぶらりんの状態に置かれた。その後、祖父は 2 エーカーの土地を彼女に譲ってくれたが、皮肉なことに、その地所はカハフの土地と隣接していた。大工の兄ムアングが、彼女のために泥壁、草葺屋根の円形小屋をそこに建てた。グギはこの祖父に相当可愛がられたらしい。祖父宛の手紙を読んで聞かせ、新しい手紙を書くのを手伝ったという。しかし、父ジオンゴの元での大家族生活から、母子だけのつ

ましい生活へと境遇は急変した。この頃には、弟のジンジュと一緒にカハフの農場で除虫菊を摘み、モグラを退治して授業料を稼いだという。また、母と一緒にインド人の店へ仕事を探しに出かけた。母の新しい小屋のそばには、西洋梨の木がポツンと立っていたが、その小屋からマングオの小学校へ通うことになった。

⑤ 兄弟のこと

母の出奔直後に、グギと弟のジンジュの世話をしたのは、他の妻たち、つまりガショキとワンガリの二人だった。兄弟は母が戻ってくること、あるいは父が母の兄弟に助けを求めて、母を連れ戻してくれるものと期待していた。二人が話し合えば、警告か、罰金か、和解に至ることは確実だと思われた。だが、そうならなかった。

ある日、弟ジンジュとグギは、腹違いの兄弟姉妹と空き地でボール遊びをしていた時、突然父親の声が聞こえた。「お前たちは私の子供と遊んではいけない。お前たちの母親の所へ行け」²³⁾。父親の指は、母の行き先、母の新しい小屋の方角を指差していた。グギは母が使っていた小屋に駆け込んで、教科書や学用品や聖書を持ち出そうとした。兄弟二人は父の屋敷では、よそ者になっていたのだった。二人は、この共通の運命によって、いよいよ堅く結ばれたが、心に抱く疎外感は深まる一方だった。

弟のジンジュとはよく遊んだ。遊びの一つに、ケニアの他の民族の言葉を真似るということがあった。近くにバタ靴工場があって、そこではケニアの多くの民族出身の労働者が雇われていた。ルオ (Luo) 人、カンバ (Kamba) 人、ルヒヤ (Luhya) 人などであった。二人はトウモロコシ畑に隠れて、彼らが通りかかると、突然飛び出して、ルオ語で「イーヂ・ナーデ」(*Idhi nade?*)、カンバ語で「ナータ」(*Nata?*)、「ウイ・ムセオ」(*Wi museo?*)、ルヒヤ語で「ムレンベ」(*Mrembe?*) などと声を掛けて、相手の返事も聞かず、すぐにトウモロコシ畑に身を隠すのだった (いずれも「元気ですか」程度の意味)。

実兄のウォレス・ムアンギは 1930 年の生まれで (2011 年 4 月死去)、後には 'Good Wallace' の仇名を得ることになる。1945 年にマングオ小学校へ入学してからは、ボーイスカウトに熱心であったらしいが、タイピスト学校にも通った。後に、腕の立つ大工になり、弟子を取ったほか、リムルで作業場と家具店を持つまでになった。少年時代のグギにしばしば小銭をくれたほか、グギはよく兄の作業場へ行き、木の匂いを嗅ぎ、さまざまな大工道具に興味を示したという。

Ⅲ. 「植民地」を生きる

「ある日、私は歌声を聞いた。その情景を今も鮮明に記憶している。うたっている彼女たちが目の前にやってきたが、彼女たちの顔は悲しみにうちひしがれ、メロディーはもの悲しかった。・・・彼女たちは自分の土地から強制的に追放され、通称『黒い岩の土地』と呼ばれている不毛の地方へ送られていくのであった。彼女たちの歌の内容は次のようなものだった。

でも大きな喜びがやって来るのよ
私たちの土地が戻ってくる時には、
なぜって、ケニアは黒人の国だもの。
だからお前たち子供は
腰のベルトをしっかりと結ぶんだよ
いつの日か、この土地から
白人を追い出すために、
なぜって、本当にケニアは黒人の国だもの。

彼女たちは護送トラックに乗せられ、監禁されてはいたが、一つの声で合唱していた。彼女たちは共通の敗北と希望をうたっていた。私は彼女たちの歌声が大地を揺るがしているのを感じ、身動きひとつ出来なかった」²⁴⁾。

少年グギが、護送トラックを目撃し、この歌を聞いたのは 1949 年 11 月から 1950 年 3 月の間のことであっただろう。この時、リムルの西北ナクル、やや南方に位置するオレングルオネ (Olenguruone, マサイランド内) のギクユ農民の一部 (元リムルの住民であったが、土地を失ってから同地へ強制入植させられていた) が再び強制移住の対象になったのだった。この時に、伝統的な誓約儀礼によって団結した民衆が作った数々の即興歌は「オレングルオネの抵抗歌謡」として今に残り、オレングルオネは「犠牲」と「殉教」のシンボルとなった (本書「インターロード」Ⅱで、これらの歌のいくつかを紹介した)。

これらの歌には「避けられぬ運命を受け入れる」と同時に、「集団的な抵抗」の気概が漲っていた。後年、彼女たちは「我々は必ず勝利する」(We shall overcome) と歌っていたのだと、グギは断言している²⁵⁾。この歌こそ、過去の出来事と同時に、未来を予言していた。これが植民地の実情であったが、当時は、小学校に上がってからも、自分が生きている植民地状況を十分には理解出来ていなかった。

不毛の「黒い岩の土地」とは、ナイロビの東方、カンバランドのヤッタ（Yatta）のことだった。そこは、植民地政府による「白人専用高地」の建設のために、先祖の土地を追い立てられたギクユ農民が強制移住させられた乾燥地で、ギクユランドから 50 マイルも隔たっていた。1934 年に土地没収と引き換えにギクユ農民に与えられた代替地であったが、政府は家畜の放牧に使用料を課した。しかも、そこはもっぱらカンバ人の領地であったから、この地への移住を歓迎する者はいなかった。非常事態時には、ヤッタの南域は、約 1,000 人の拘禁者を抱える強制労働キャンプとなった。「ヤッタ」という地名自体が「黒い岩の土地」の意であった。

一家は窮乏のどん底にあった。砂糖とミルク入りの紅茶は一日のうちの最も贅沢な楽しみであり、一日一度の食事は夕方にするのが普通だった。一家が住む村に向き合った山の斜面には、白人入植民が所有する青々とした広大な農場が見渡せた。そこには、コーヒー、茶、除虫菊など、アフリカ人には栽培が許されない換金作物が植わっていた。少年グギは、わずか 10 シリングの小銭を稼ぐために、その土地を耕し、作物を監視することもあった。アフリカ人の誰もが、そうした仕事を求めて、毎日谷を渡った。稼いだ小銭は、砂糖やトウモロコシや小麦粉を買うために、その日のうちにインド人商店で使われた²⁶⁾。

小学校へ入学した 1947 年といえば、長い間、ヨーロッパ、ロシアを放浪していたケニヤッタが「黒人のモーゼ」と呼ばれて、歓呼の嵐のなかでケニアへ帰国した翌年であり、彼がケニア・アフリカ人同盟（KAU）の総裁になった年でもあった。民族意識は高揚していた。翌 48 年には、リムルの靴工場を拠点に、ケニア人労働者のゼネストが打たれた。

① 「非常事態」の発令

1952 年、非常事態宣言が出てからは、兄の作業場も安心の出来る場所ではなくなってきた。リムルはナイロビに近かったし、当時は、あちこちで人が殺されたこと、強制収容所からの風評、ホームガードによるパトロールと家宅搜索、誰それが逃走して、生き延びたことなど、血生くさい話題が多かった。

このほか、ジョモ・ケニヤッタがリムルへやって来るとの噂もあって、特にインド人商店街とアフリカ人商店街の交差する辺りにあった兄の仕事場へ出向くことが多かった。町に一つしかない拡声器付きのラジオ放送を聞くのも楽しかった。1952 年 8 月 24 日には、植民地政府の主催で、キアンプで 3 万人規模の

大集会がもたれた。この時、ケニヤッタ他の重要人物が演壇に立って、マウマウの批難演説をすることになった。全国に向けての放送の準備もなされた。イギリス女王から M.B.E.(大英帝国勲功章)を受けたばかりのワルヒウ (Waruhiu) 首長が、背広・ネクタイ・山高帽姿で、ケニヤッタを紹介した。この時、ケニヤッタが「マウマウがこの国を滅ぼした。永久にマウマウを葬れ。マウマウはミコンゴエの木の根っこの先に消え去れ」²⁷⁾ と演説したとの報が伝わってきた。1952 年 10 月 7 日、ワルヒウ首長暗殺の報がリムルにも伝わり、そして、1952 年 10 月 20 日、ケニヤッタ他 185 名が逮捕されたこと、着任したばかりの総督イブリン・ベアリング (Evelyn Baring) が非常事態を宣言したことを知らされた。

ケニヤッタを一目見るチャンスはなくなった。非常事態宣言以後、マウマウの愛国歌謡はもちろん、ワイヤキ (Waiyaki)、ケニヤッタ、ムビユ・コイナンゲ (Mbiyu Koinange) を讃える歌はすべてが禁止された²⁸⁾。ギヅングリの教員養成学校、すべての KISA およびカリング・スクールは閉鎖された。学校に通うことも少なくなった。そんなある日、リムルの市場に老若男女が家財を抱えて、群れをなしてうずくまっているのを見かけることがあった。かつてのオレンジルオネから強制移住させられた人々と同じく、長年にわたって住み慣れたリフトバレーから追い出されたギクユ、エンブ、メルの人々であった。数週間もたてば、祖母ガゾニも追い出されてくることを予測させた。

この頃、兄ムアングは、バナナ (Banana ナイロビとリムルを結ぶバス路線のほぼ中間点) 出身のチャリティ・ワンジク (Charity Wanjikū, 1935 年生まれ) を娶り、まもなく長男に恵まれた。それまでは作業場に寝泊りするなど、家に戻らないことが多かった兄は、長男が誕生してからは、ほとんどの夜は家へ戻り、家族との団欒を楽しむようになっていた。

だが、この頃には、リムルの町の喧噪が異常に高まっていた。戦車をはじめ、軍隊車輛のたてる轟音、各戸への襲撃の風景、パトロール隊による職務質問、あちこちから聞こえる絶叫、駐屯所に鳴り響くサイレン、機関銃の連射、これらがしだいに日常風景となっていた。

1954 年 4 月のある日。いつもなら皆で旧マングオ小学校を過ぎて、谷を渡り、山肌を登って帰るのが常だったが、その日は遠回りして、バタ靴工場の塀に沿って、ゴムや皮の腐った匂いをかぎながら鉄道のジャンクションへ向かった。リムルの市場がすぐ近くに見えた。突然、十字路に群衆が集まり、靴工場から

も人があふれ出した。「現行犯だったぞ」「銃弾を持っていた。白昼堂々だ」との声が聞こえた。アフリカ人が銃弾を持ち運ぶことは許されていなかった。そんなことをするのは、テロリストだけであり、捕まれば絞首刑になるのだった。「あいつは撃たれた」「いや、撃った奴らにも銃弾が飛んでいった」「いや、奴は空を飛んで雲の中に隠れたぞ」などと喧しく声が飛び交った。一人の男が手錠をかけられ、警官のトラックの荷台に乗せられたが、隙を見て飛び降りて逃げたという。警官はすぐに発砲したが、アフリカ人とインド人の商店が並ぶ道をその男は逃げて行ったという。男はやがて靴工場の労働者の宿舍のあたりを過ぎて、丘陵を登り、ヨーロッパ人の所有する茶畑に逃げ込んだらしい。

家へ帰ると、母ワンジク、弟ジンジュ、姉ジョキ、兄嫁チャリティが暖炉の前にうずくまっていた。誰もが沈黙していた。グギはひょうたんの鉢に盛られた夕食を手渡された。自分の帰りが遅れた理由を話そうと思った時、突然母がポツリと言った。「今日の午後、ムアンギが何とか逃げ延びたそうだよ」。兄ムアンギは、マウマウのゲリラ兵として、姿を消したばかりだった。

リムルの市場では、銃声が響くことが多かった。義兄ワンガリの末息子のギトゴは不幸な死に方をした。彼は肉屋で働いていたが、ある日のこと、警察の手入れがあつて、数人が銃殺された。ギトゴは、白人警官の「止まれ」と言う制止の声が聞こえず、その場から逃げ出し、その結果、背後から撃たれて死んだのだった。ギトゴは、聴覚に障害があり、警官の声が聞こえなかった。

② 初めてのナイロビ

生後間もない頃は、泣いていることが多かったらしい。仇名は「泣き坊」‘Crybaby’、ギクユ語で‘Kĩrĩrĩ’という。四六時中、母親にまとわりついており、母がいないと何時間も泣きべそをかいていたという。泣いているうちに寝つくのだが、眼が覚めて、母の姿が見えないと、また泣いていたらしい。泣き癖は、1年後に弟のジンジュが生まれるまで続いた。少し大きくなると、今度は眼に持病があることがわかった。涙が絶えず流れ、目蓋が腫れるのである。その都度、母は近くの伝統医に連れて行った。小さな剃刀を使って目蓋の上を切り、血を抜いて薬を塗ると、これでよくなるという。この持病のために、「泣き坊」を卒業した後は、「メカチンコ」‘Gacici’という不名誉な仇名をもらった。

ある日、地主のスタンリー・カハフ卿が、母とグギを乗せて自家用のフォード・モデル T を運転して、ナイロビ市内のキング・ジョージ 6 世病院（以前の原住民市民病院）まで運んでくれた。車に乗るのは、これが初めてであったし、

母子にとって首都ナイロビを見るのも初めてだった。

しばらく入院することになった。2週間か3週間か、それとも1ヶ月だったか、記憶はないという。母の元を初めて離れ、病院の相部屋で寝起きすることになった。その間、カハウ卿と母は一度見舞いに來たというが、退院許可が出てからも、誰一人迎えに來なかつた。連絡の手立てがまったくなかつた。この時、思い出したのは、粘土製の壺の口に好きな子の名前を囁くと、相手に聞こえるという子供仲間の俗信だった。病室にお詠え向きの壺はなかつたが、手近にあった水差しの口に向けて母の名前を囁いた。翌日か、翌々日に、本当に母がやって來た。

この時、母は独りだった。カハウ卿は忙しくて、車を出してくれず、母はとうとうバスで來た。ところが、リムルへの帰りが大騒動だった。バスの数は少ないし、発車の時刻もあてにならない。やがて頼みのバスが來て、二人は座席に着いた。バスに乗るのは初めてだった。車外の飛んでいく景色に見とれていると、車掌が乗車賃を集めに來た。母はなけなしの小錢を払い、「終点のリムル」で降りると告げた。「これはゴング行きですよ。リムルへは行きません」との返事が返つてきた。母子は次のバス停で降ろされた。その時、幸いにも、逆方向へ向かう別のバスとすれ違った。車掌が親切に事情を説明し、母親に運賃を返してくれた。乗り換えたバスは、再びナイロビの市街へ戻り、リムル行きのバスが発車する停留所まで運んでくれた。今度も、車掌は運賃を取らなかつた。少年グギは、この時のナイロビでの経験と興奮が何日も去らなかつたという。眼の病氣は治り、「メカチンコ」という仇名で呼ばれることもなくなつた。独りきりで、ナイロビまで迎えに來てくれた母親の氣丈夫さに敬愛の氣持が強くなつた。

③ 割礼を受ける

1953年末、母ワンジクから、父ジオンゴと連絡を取っている旨の知らせを受けた。もうすぐ、割礼を受けさせるというのである。割礼を受けるには、両親が結婚生活を維持していようが、いまいが、父親の承認が必要であつた。

割礼は、大人になるための通過儀礼だった。ギクユ社会にとって、世代の連続、持続を保障する社会生活上の階梯だった。この儀礼は三段階に分かれた。準備、儀礼行為そのもの、そして治癒の三段階である。伝統的には、割礼の時期はコミュニティの長老會議で決められ、男女ともがほぼ同じ時期に実施された。特定年の、同じ時期に割礼を受けた者は、共通の世代、共通の年齢集団に

属するとされた。割礼によって、誰もが部族の子として生まれ変わり、家族や氏族、地域の別を越えた年齢集団として、より強固な結束を取り交わすのだった。

植民地下では、割礼の意味にもある程度の変化が生じたが、グギの頃には、かつてコミュニティが担っていたような政治的、経済的、法的な意義の多くが失なわれていた。多くの男子が、ギクユの伝統的な意味づけとはかかわりなく、病院で割礼を受けた。グギ自身は、伝統に従って、村で割礼を受けることになった。

割礼の準備作業は、コミュニティにとっての祭礼だった。すべての家々、村々、地域で準備が進められ、誰もが料理やその他の雑用に専念した。特に儀礼の前夜（Mararanja）は寝ずに過ごすことが多かった。老若男女を問わず、誰もが歌や踊りに興じるのだった。

グギの場合にも、歌がうたわれ、踊りを伴った。コール・アンド・レスポンスのやり取りがあり、エロチックな歌と踊りにマイムが伴った。猥雑な声が飛び交うなか、割礼を受ける者は当意即妙に答えなければならなかった。

割礼の前夜は、一睡も出来なかったという。頭髮と陰毛を剃る「メンジョ」（menjo）の儀礼が早朝に行われた。着ているものを脱ぐと、剃った毛は土のなかに埋められた。これは人生の一段階が終わったことを意味した。次に裸のまま、1 マイル半ほど歩いて、マングオの沼沢地に到着した。男も女も、大人も子供も、誰もが押し合いへし合い、踊り、歌いながらついてきた。なかには、緑の葉っぱをかざして、局部を隠している者もいた。

こうして、大群衆を従えて、割礼を受ける若者が水辺に集まった。水は冷たく、空気は冷え切っている。だが、怖いのはナイフである。勇気を持って、痛みを耐えなければ、一生の恥となるのだった。少しでも苦痛の声を漏らせば、家族とコミュニティの恥辱となり、本人は生涯「臆病者」のレッテルを貼られてしまう。割礼を受ける仲間には、学校へ進学している者もいたし、そうでない者もいた。学校へ上がった者は、勉強のせいで、ひ弱になっていると考えられていた。誰もが、自分に視線を向けているように思われた。

誰にもサポーターが付いていて、父の 4 番目の妻の三男ジンジュ・ワ・ジェリ（Njinjū wa Njeri）がグギをサポートしてくれた。最初は、草の上で腰をか

がめる。両足を上げ、ひざは屈伸させて、しっかりと地面に固定させる。両手は、親指を中指と人差し指の間に入れ、両肘は両膝に置く。自分のペニスが、無防備のまま、誰にも見えている。ペニスに関心があるのではなく、ナイフが包皮を走る時の少年の反応に関心があった。サポーターのジンジュが背後に立って、グギの両肩をしっかりと押さえた。ナイフの匠が誰であるか、まともに見ることは出来ない。もしナイフが、誤って深く入りすぎたら・・・ペニスを切り落とすようなことがあったら・・・人から聞かされた、割礼にまつわる怖い話が頭をよぎった。まだナイフは走っていない、と思っているうちに、割礼は終わっていた。ナイフが走るのを感じることもなく、冷たい水が局部を麻痺させていた。サポーターのジンジュが、すぐに白い綿布で全身を覆ってくれた。女たちが、誇らしげに巻き舌の歓声ウルレーションをあげた。〈学校へ上がっていたって、僕は違うぞ、勇敢なんだ！〉グギは誇らしく思った。

その後は、安全ピンで両側を留めたトーガをまとって移動することになる。ギクユの慣習では、包皮を完全に切除せず、ペニスの先端に垂れさせておくという。こうして、治癒するまで、人影の少ない場所に建てられた特別な小屋で、約3週間、隔離生活を過ごすのである。食事が運ばれてくるが、身内の者であっても、サポーターの許可がなければ、戸口までしか近寄れない。この間、時折は娘たちがやってきて、性行為をしているような声を立てるといふ。その声を聴くと、思わずペニスが膨張し、治癒しつつある包皮が伸びて、耐え難い痛みを覚えるという。「もう止めてくれ」と叫ばずにおれなくなると、娘たちは笑いながら出て行く。彼女たちは「我慢すること」を教えているらしい。

傷が完全に治癒すると、トーガをまとった他の仲間と付き合うことが許される。この後、自分の家へ戻ることになるが、その姿を見かけた者は誰もが、道を譲ってくれる。一人前の男性になり、新しい年齢集団に仲間入りすると、割礼を済ませていない者たちとの社会的つながりは終了し、年上の仲間との社会的つながりが達成される。やがて、自分との性交渉を引き受けた娘に会わされて、少年は童貞を失う。これが成人儀礼の最終段階で、「男にしてみよう」と新しい世界へ参入したことになる。

④ 『宝島』を読む：文学的関心の萌芽

文学的関心はすでにカリंगा・スクール（マンガオ）時代に芽生えていた。グギは、その頃に一教師サミュエル・キビチョ（Samuel Kibicho, のちにナイロビ大学教授。『血の花弁』の扉にこの人への謝辞が見られる）が貸してくれたR. L. スティブンソンの『宝島』（*Treasure Island*, 1883）とスワヒリ語への訳

本を繰り返えし読んだという。植民地体制下の教育は、イギリス本国の地理や、その栄光の歴史を学ばせることに主眼が置かれていたし、教材も著しく不足していた。多くの児童が、明けても暮れても、『聖書』か『ブリタニカ百科事典』を読みあさっていたという。『宝島』を読んで、文学的想像力を鼓吹させられたグギは「英語の能力を十分に身につけたなら、アフリカ人であっても、このような小説を書けないはずはない。自分も大きくなったら『宝島』のような小説を書いてみたい」²⁹⁾ と思ったという。

『宝島』を貸してくれたサミュエル・キビチョ先生は新しく再開されたマンガオ小学校の校長だった。彼はカグモ教員養成学校の出身で、マンガオ小学校がキニョゴリへ移転した頃の立役者で、グギにとっては、マンガオとキニョゴリで過ごした最後の2年間の英語の教師でもあった。

同校での英語のテキストは、*Oxford Reader for Africa* と題するもので、テキストに登場する少年と少女、つまりオックスフォードに住むジョンとジョアンがロンドンを訪れ、テムズ川やビッグベン、ウェストミンスター寺院ほか名所旧跡を訪ねるというものであった。それらの地名は魅力あるものであったが、生徒の誰もが見たこともない場所だった。

キビチョ先生は英文法が得意だったが、英文学の作品もたくさん持っていた。ディケンズ (Charles Dickens, 1812~1870) の『大いなる遺産』 (*Great Expectations*, 1860~61) の簡約本、リチャード・ドドリッジ・ブラックモア (Richard Doddridge Blackmore, 1825~1900) の『ローナ・ドーン』 (*Lorna Doone*, 1869) などを借りて読むことが出来たという。そうした本のなかで、最も魅力を覚えたのが、先にも言及した『宝島』だったというのである。簡約本ではなく、たとえ簡約本であったとしても、ほとんど原書に近いものだったらしい。これを繰り返し読んだ。話の筋、登場人物にすっかり惚れ込んでしまい、主人公ジム・ホーキンス、彼の希望、恐怖、才覚と一体化してしまうほどだった。暗記してしまうくぐりもあったという。

しかし、この時の文学への関心は、その後の知的成長に大きな刻印を残したが、ごく一時的に留まり、小学校卒業資格検定試験にパスすることが差し迫った一大関心事となった。

IV. アライアンス高校へ

1954 年は、初等教育の最終年だった。小学校卒業資格検定試験に合格しなけ

ればならなかった。当時は、アフリカ人のための中学校は少なく、競争は激しかった。総受験者のわずか5%が高校、あるいは教員養成学校へ進学できたにすぎない。

この試験のためにどう準備するかが一苦勞だった。英語にはテキストがあったが、他の科目ではテキストが使われず、先生の板書を書き写したノートだけが頼りだった。在学中のノート類を必死に復習するほかに勉強の方法はなかった。1週間ほど先に試験を控えたある夜、突然、武装したマウマウの一団が家に入って来た。母が彼らに食事を振舞った。そのなかに兄ムアングの姿があった。「頑張れ。知識こそが、我々の光だ」³⁰⁾ と言い残して兄は姿を消した。

1954年に、自宅から3マイルほど離れたロレート・コンベント・スクール(Loreto Convent School, 1906年にイタリアの伝道団が建設したカトリック教会が立地している)³¹⁾で受験に臨んだ。輸送手段もなく、10マイル以上も遠隔の地から受験にやってくる者もいた。

試験場のロレート・コンベント・スクールには広々とした芝生と生垣があり、迷いそうなほどに、何本もの廊下が繋がって教室が並んでいた。トイレは水洗式で、キニョゴリやマングオのような汲み取り式ではなかった。赤い制服を着た女子生徒が、各受験者をそれぞれの試験場へ案内してくれた。誰もが美しく、まるで天使のように見えた。受験の登録とオリエンテーション、数学、英語、スワヒリ語、歴史、地理、公民の試験科目があり、これらに4日を要した。英語の試験問題に、出典は明記されていなかったが、明らかに『宝島』のくだりが出ていた。4日間の試験が終わると、心身ともに疲労しきった。こうしてグギは、キニョゴリで中学課程を終えたが、それは同時にキビチョ先生、さらには先生の蔵書との別れでもあった。

試験の結果を、一日千秋の思いで待った。友人のケネスも同様だった。結果が知らされるまでの数週間にいろんなことが起きた。母は絶えずホームガードの駐屯所に出頭していた。兄ムアングの居場所を探るホームガードや白人の役人が自宅を監視し、たえず詰問にさらされた。落ち着かない日々が続いたが、やがて、キニョゴリの副校長スティフン・ジロ(Stephen Thiro、小説『血の花弁』の扉に謝辞があり、「この先生の支援がなければ、作家になっていなかっただろう」とある)から、試験の結果を聞かされる日が来た。合格の知らせは、まず友人のケネスに告げられた。ついで、副校長は、にこやかな笑みを浮かべて、グギに告げた。「君は、アライアンス高校に入学が決まった」³²⁾。ケネスは

合格したものの、受け入れ先はまだ発表されていなかった。アライアンス高校は、他に先駆けて入学許可者を発表したのだった。

アライアンス合格の報に、母ワンジクは、いつものように「そこが一番ということかい」と尋ねただけだった。アライアンスは、キビチョ先生が、グギの受験書類に自分の判断で書き込んだ志望校だった。兄の妻チャリティ・ワンジクはもちろん、一家のうちでこの高校の名前を知っている者はいなかった。それでも、誰もが高校入試に合格したことを喜んでくれた。この年にアライアンスへ合格したのは、リムル全土からただ一人だけであった。後日、キビチョ先生は、アライアンスは、ケニア全土で最高であり、成績優秀者だけが入学出来ると説明してくれた。

とうぜん、授業料、制服その他の学用品を買う資金が必要になった。母ワンジクには金銭的な余裕がなかった。兄ムアングは山にこもっていた。土地の有力者や英国側に立つロイヤリストたちが、マウマウのゲリラ兵の弟がアライアンスに進学するのを邪魔するだろうとの風評が流れた。ところが、まったく予期しない方面から救いの手が伸びた。ジャイル（Njairũ）という人物が、グギの進学を妨害しようとする風評に決着を付けたのだった。この人物は、植民地政府任命のこわもての監督官、兄ムアングの姿を見つければその場で射殺することも厭わないほどのホームガードのリーダーだった。その人物が「グギのアライアンスへの進学を何人にも妨害させぬ」³³⁾と言明し、グギの腹違いの兄弟たちにも、この偉業を説明に回ったのだった。その結果、各方面から進学資金の寄付が寄せられ、授業料他の、入学当初に必要な資金がまかなわれた。だが、靴とストッキングを買う金がなかった。それまで彼は裸足で通学していたが、高校ではそうはいかなかった。やがて、姉のジョキが都合を付けてくれた。彼女は離婚経験があったが、富裕農民の茶や除虫菊の畑で働いて、つましい生活を維持していた。その彼女が、なけなしの金をはたいて靴とストッキングを買ってくれた。

アライアンス合格の報を兄ムアングに知らせる手立てはなかったが、きっと風の便りで耳にしてくれるだろうと思った。母方の祖父に会いに行くと、わずかばかりの餞別をくれた。もう一人、是非会わなければならない人がいた。父のジオンゴであった。父に追い出されて以来、その屋敷に出向いたことはなかった。気まずい思いが蘇った。行ってみると、母ワンジクの小屋が残っていたが、つる草が壁に巻きつき、屋根にまで這い上がって、荒れ放題だった。父のホームステッドへ戻り、まず大きい母さんである第一妻のワンガリの小屋に入

った。入ってみると、腹違いの姉、眼の不自由なワビアがいて、グギの声に気付いて、久しぶりの出合いを喜んでくれた。その小屋は、かつては皆が昔話やなぞなぞ、ことわざに興じ、もろもろの世間話を交換した場所だった。次に二番目の妻ガショキの小屋を覗いた。彼女もグギの帰還を喜んで「アライアンスというのは何処の国にあるのか」³⁴⁾と尋ねた。最後に、第四の妻ジェリ的小屋を訪ねた。彼女は、突然訪ねて来たのでは何もやれないと言いながら、卵をいくつかくれた。最後に、ジェリ的小屋にいた父ジオンゴと対面した。父はスツールに腰掛けて、やつれた様子であったが、「よくやった。祝福するぞ」³⁵⁾と言ったきり、後の言葉はなかった。

父はグギの進学ニュースをすでに村人から聞いて知っていた。グギは黙っていたが、父の前に立っていると、積年のわだかまりが薄れていくのを感じた。小屋を出ようとした時、父は立ち上がり、戸外のゴミ捨て場の山へ連れて行った。そこからは、兄弟姉妹、そして母親たちが働く白人の茶畑が見渡せた。そこに立つと、遠くの靴工場で鳴り響くサイレンの音が聞こえた。朝の就労のサイレン、昼の昼食を知らせるサイレン、そして夕方を告げるサイレンだった。その時、父が見渡している畑は、かつては父が所有していたのであった。「よくやった。歩き続けるがよい」³⁶⁾。父親の平板な声を聞いていると、不思議にも、それまで抱き続けてきた怒りと反発が消えていった。

彼はアライアンス高校へ旅立つことになった。友人のケネスは、ハリー・ヅクの出生地であるカンブイ (Kambui) の教員養成学校へ進学することになった。他にも、同校へ進学する者が何人かいた。

昔は、汽車の往来を見ることだけが楽しみであったが、今やリムル駅から初めて汽車に乗って、12 マイル先のキクユにあるアライアンス高校へ向かうのだった。母は見送りに来なかったが、「最善を尽くすように」との餞の言葉をくれた。姉妹、兄ムアングの妻チャリティ、弟のジンジュらが駅まで見送りに来た。

やがて汽車がホームに入ってきた。ヨーロッパ人専用、アジア人専用と書かれた車両があったが、アフリカ人が乗れる三等車両には、なぜか「アフリカ人専用」とは書かれていなかった。先に乗り込んだ乗客の誰もが白人の駅員に書類を示していた。グギの番になって、書類の提出を求められた。非常事態宣言以後、アフリカ人の移動には政府発行の「パス」が必要だった。グギはこれを取得していなかった。高校からもらった案内の資料にも、その種の注意が書き込まれていなかった。他の同乗客が駅員にとりなしてくれたが、どうにもなら

なかった。

グギはプラットホームに残され、汽車は出て行った。涙が頬を伝い、声をあげて泣き出したくなるのを必死に押さえた。すると、次の瞬間、まさに奇跡が起きた。白衣をまとったアフリカ人の副駅長が現れた。その名をクリス・カハラ (Chris Kahara) という、後の独立ケニアでナイロビ市長になる人物だった。「泣くことはない。キクユまで乗せてやろう」³⁷⁾。すぐに後続の貨車がやってきて、その最後尾の車両に乗り込ませてもらった。窓はなかったから、あたりの景色はまるで見えなかった。やがてキクユ駅に着いた。この駅も、リムル駅と同じく 1899 年に建設されたものだった。グギはキクユ駅のプラットホームに降り立って、辺りを見回した。キクユにはインド人の店もあって、リムルに似ていたが、その規模はもっと小さかった。駅で待っているはずのスクールバスは出てしまっていた。重い荷物を下げたまま、教えてもらった高校までの道を歩いて行こうとした矢先、モンバサから生徒を乗せてやってきたスクールバスが目に入った。後でわかることだが、バスには副校長のジェームズ・スティフン・スミス (James Stephen Smith)³⁸⁾ が乗っていて、新入生グギに間違いのないことを確認してくれた。バスに乗せてもらって、しばらくすると、アライアンス高校の建物が見えてきた。「アライアンスへ歓迎」の垂れ幕が、まるで自分一人のために掲げられているように見えた。

V. 学業・白人校長・寮生活など

アライアンス高校入学は、1955 年 1 月 20 日の木曜日だった。この高校は、リムルとナイロビのほぼ中間点にあり、リムルからの距離は 20 マイルほどだった。リムルを離れる前、「あの子は、ケニア一番の天才少年だ」とはやしたてる村人の声が耳に届いた。だが、そんなことはどうでもよかった。1952 年の非常事態宣言以来、リムルの町でも、カミリズ村でも、警察犬を連れたパトロール隊がそこら中にいて、マウマウの「テロリスト」探しに躍起になっていた。自分のすぐそばで、誰かが英国兵の銃火に倒れるのではないかとの恐怖が、悪夢のように付きまとった。だが、アライアンス高校の石造りの校舎は強固な要塞であった。警察犬が門の内側に入ってくる心配はなかった。それまで住み慣れた泥と草葺きの小屋とは違っていた。警察のパトロールに脅える身から、やっと逃げ延びたのだった。

翌日の金曜日、入学手続きを済ませ、授業料を払った。2 日後の日曜日には、全員に制服が支給された。カーキ色のショーツ、シャツのほかに、2 枚の綿の T シャツ (白はパジャマ、赤は仕事着)、そして青色のネクタイだった。シャツの

胸には、AHS の文字が誇らしくプリントされていた。警察犬の遠吠えは、地平線の彼方へ、遠い響きとなって消えていった。

アライアンス高校は、1924 年のフェルプス・ストークス委員会 (Phelps-Stokes Commission) の勧告を受けて、1926 年 3 月 1 日に開学された。ニューヨークのフェルプス・ストークス基金 (Grant) が出資し、ネイティブ・アメリカン、南部のアフリカ系アメリカ人向けの 19 世紀的な教育システムを踏襲していた。アメリカ黒人のためのタスキーギ学院 (Taskegee, 1881 年創立、アラバマ) やハンプトン校 (Hampton, 1868 年創立、バージニア) などをモデルにしていた。アライアンスの初代校長はグリーブズ (G. A. Grieves、校長在職は 1926~1940) という人物だった。なお、現在のアライアンス高校は約 1,000 名の生徒を擁している。

「アライアンス」(Alliance、提携、連合の意) という名称は、スコットランド教会 (1946 年、ゴスペルミッション教会と合併して、東アフリカ長老派教会と改称)、英国聖公会宣教協会 (CMS。後の Church of the Province of Kenya=CPK)、メソヂスト教会、アフリカ内陸教会などプロテスタント系のミッションの合同で創立されたことに由来する。「アライアンス」は、ケニア初のアフリカ人のための高等学校であった。当時のアフリカ人学童のエリートは、ケニア各地の小学校卒業後は、ここへ進学するか、もしくは各種の専門学校へ進学するかのどちらかだった。

学校のモットーは「たくましい奉仕精神」(Strong to Serve) であり、「強健な肉体、精神、そして人格」(Strength in body, mind and character) が校歌に謳われた。これは、アメリカのハンプトン校のモットー「身体、心、そして手の統合」(integrating body, heart and hands) と通じていた。当初は 2 年制でスタートしたが、1940 年以降は 4 年制に延長された。英国のグラマー・スクールの制度を踏襲したもので、読み書き教育が中心にあったが、「木工」や「農業」などの職業教育も行われた。もっぱら教員養成を目的にしており、卒業生の多くはミッション・スクールや政府経営の諸学校、閉鎖される以前の独立学校などに雇われた。

カミリズ村に近いギズングリにはケニア教員養成学校があった。ムビユ・コイナンゲなる人物が創設したもので、1939 年 1 月 7 日が開校日であった。ムビユはコイナンゲ首長の長男で、後にコロンビア大学から修士号を取得した最初のケニア人であった。彼は 1927 年、バージニア州のハンプトン校に学んだが、

そこはブッカー T. ワシントン (Booker T. Washington) が 1875 年に卒業し、1881 年アラバマ州のタスキーギ学院へ移る前まで教えたところだった。その後、ムビユはオハイオ大学に学び、ついでコロンビア大学にも学んだ。彼は 1938 年にケニアへ帰国し、ハンプトン校やタスキーギ学院をモデルに、「アフリカ人が経営し、コミュニティが管理する」学校をつくりたいと思った。この学校が、ガーベいの「自助」の精神を尊重していたことはもちろんである。ガーベいはワシントンに会っていないが、タスキーギ運動に大いに関心を寄せていた。この教員養成学校へは、ナイロビからアメリカ黒人兵が訪問し、黒人霊歌がうたわれるということもあった。なお、初代大統領ケニヤッタはムビユの妹と結婚した。1960 年代、グギはマケレレ大学時代にムビユに会っている。当時ムビユは医学を専攻していた。

1948 年にアライアンス女子高校が谷を隔てて、すぐ近くに開校するまで、アライアンス高校は少数ではあったが女子生徒も受け入れていた。女子の一期生は 1938 年入学で、最後は 1952 年だった。年に平均 5 人程度の女子生徒がいたにすぎない。その一人のニョカビ (Nyokabi) は、のちにエリウド・マヅ (Eliud Mathu)³⁹⁾ 先生と結婚した。マヅ先生は、修士号を取った 2 人目のケニア人で、アライアンスの最初のアフリカ人教師であり、後には、立法審議会の最初のアフリカ人代表となるほどの人物であった。このほか、初期の卒業生に、後に小説家になるレベッカ・ンジャウ (Rebecca Njau)⁴⁰⁾ もいた。アライアンス女子高校が開設されると、たがいに「お向かいさん」(Acrossians) と呼びかわした。それぞれが憧れ、意識し合う相手校となり、シェークスピアの台詞を真似てラブレターを交わす者もいたという。

① 学業のこと

教育課程は、A と B の二つに分かれていた。成績上位の 20 名が A 課程に振り分けられた。両課程は、教科内容も試験も同じだったが、グギは A 課程に入れなかった。「ケニアの天才少年」のプライドに傷がついた。

授業内容は、かつては農業が中心で、野外観察、伝統工芸の見学などもあったという。しかし、50 年代には、地元の人々の生活とはほとんどかわりのない内容になっていた。以前は、スワヒリ語を含めて、教師はどれか一つのアフリカ語の能力を求められ、伝統的なことわざ、なぞなぞ、歌などが授業内容に組み込まれていた。しかし、しだいにイギリス本国に関する読み書きが中心になり、地元の知識内容は減少した。1949 年以降、隣の英領ウガンダのマケレレ大学がロンドン大学の学位を出し始めると、教科内容も大学受験の準備的性格

をいっそう強めた。マケレレ大学への進学がアライアンスの誇りとなり、受験のための予備校的性格を強めた。英語では、シェークスピア、バーナード・ショウ、H. G. ウェルズなどの文章からの出題が多かったから、そうした方面のテキストが多くなった。試験は、数学を含めて、全 8 科目が必修、他に 1 科目が選択で追加された（この追加選択の数学は難しいことで知られたが、グギはこれを選択した）。他にも「ケンブリッジ受験資格試験」といった試験制度が主要な関心事になり、グギが入学した頃には、わずかに木工教育くらいが残っている程度だった。

入学後の最初の授業は、得意の英語だった。さて、どうなるかと期待と不安で緊張していると、白人の先生は生徒全員を教室から連れ出し、近くの自宅に案内した。そこで見たもの、聞いたことは、ドラマチックの連続だった。それまで見たこともない室内の調度品の説明を聞かされたが、驚くことばかり、自分のどの母親の小屋の中の様子とも違っていった。バスルーム、キッチン、ベッドルームの様子、ナイフやフォークの使い方、それに伴うさまざまなテーブル・マナーは、ウガリとイリオ⁴¹⁾の村の生活と比べて、全く別世界だった。

英語は、それまでから最も好きな学科だったが、ますます学習意欲が高まった。文法の次には、文学の授業があった。先生は「ラテン起源の語彙を避けて、出来るだけアングロ・サクソン語彙を使うよう。とりわけ、聖書から学びなさい。イエスの言葉を学びなさい」と教えたという。「イエスの言葉は短文の連続である」というのであった。先生の説明を聞いて、グギは納得するとともに、「イエスは英語を話されたのではない」⁴²⁾と反論したそうである。とにかく、全科目の中で、英語が一番できたことで、アライアンスに入れたのだと確信していた。以後「ジェームズ王欽定聖書」の英語が理想の目標になった。

英語のほかでは、物理、化学、生物の実験に興味を覚えた。故郷マンガオの沼沢地に棲息する蛭、蛙の卵、オタマジャクシ、各種の鳥などに改めて興味を募らせた。「水」の元素記号を覚えると、誰もが、**Will you pass some H₂O, please ?**などと口癖のように言うのだった。とはいえ、やがて文学的想像力に満ちた読み物に、歴史や理科の実験以上の興味を覚えるようになる。

1 学期の終わる頃、A 課程の 20 人が自分より成績が良いことはわかっていたが、B 課程での自分の序列はわからなかった。せつかく「アライアンス」で学んでいるのに、自信と誇りを感じる事がなかった。4 月になると期末試験が始まった。消灯後も、誰もがベッドのフラッシュランプを点けて、寝るのを惜し

んで勉強するのだった。A 課程のトップ 10 に入ることが、全生徒の目標だった。期末試験の結果、グギは 2 学期からは A 課程へ移ることが決まった。A, B 両課程を通じて、席次が 2 番にランクされたのだった。

② 校長の横顔：ケアリー・フランシスのこと

「世界教育者偉人列伝」にも顔を出すエドワード・ケアリー・フランシス (Edward Carey Francis, 1897~1966. 校長在職 1940~1962) ⁴³⁾ がアライアンスの校長に就任したのは 1940 年だった。この年には、イギリスの伝統に倣った 4 年制のグラマー・スクールのコースが開設された。「アライアンスはケアリー・フランシス、ケアリー・フランシスはアライアンス」と謳われる時代が到来したのだった。

ケアリー・フランシスは、1897 年 9 月 13 日、ロンドンに生まれている。トリニティ・カレッジを卒業、数学の一級合格者であり、ケンブリッジの数学講師でもあった。エリート学究として出世街道を突き進んでいたが、1928 年、その仕事を突如捨ててしまった。しかも、なぜか植民地ケニアまでやって来た。多くが謎に包まれている。彼は第一次大戦に従軍し、イギリスとフランスの戦線に従軍したが、復員すると、将来を誓っていた許嫁が別の男性と結婚していたという。以後、彼は神にすがり、愛犬を手放すことのない生活を選び、自己犠牲の人生を捧げるべくアフリカを選んだというのがもっぱらの風評だった。これが真実か虚構か、どの程度まで両者がないまぜになっているものか、本人が語らない以上、真相は不明である。なお、この校長は男女共学には積極的でなかったらしい。アライアンス女子高校が、徒歩 10 分ほどの場所に離れて開校したのは、校長の意向もあったようである。「女は嫌いだ」という言葉が残っている ⁴⁴⁾。

初期小説『川を隔てて』 (*The River Between*, 1965)、『泣くな、わが子よ』 (*Weep not, Child*, 1964)、そして『血の花弁』 (*Petals of Blood*, 1977) に登場する白人校長のモデルとされるケアリー・フランシスは、キリストの生涯を理想とし、その理想を追い求め、人生の中心にキリストを位置づけた人物だった。彼の教育目標は「卒業後、社会の荒波に耐えることの出来る・・・神に命を預けた、たくましいキリスト教徒を送り出すことだった」⁴⁵⁾。校内誌 (*The AHS Magazine*, 1957.9) に寄せた文章で、彼はこの部分「キリスト教徒を送り出す」 (to send out Christians) をわざわざ太字で書いている。「アフリカ人を教育することは、キリスト教徒のスカウトを指揮することに等しい」⁴⁶⁾ とも述べている。

その教育哲学は「人に服従することの出来る人間、したがって、必要な場合には、人の上に立つことも出来る人間を養成すること」⁴⁷⁾ だった。政治を徹底的に遠ざけ、キリスト者そのものの厳粛な生活を尊重した。「アライアンスの生徒は、キリストの力（ミッション教育）で、（卒業後は）同胞アフリカ人にたくましく奉仕できる（**Strong to Serve**）」と信じていた。

当時の社会では、特にリベラルな白人のなかには、いつか漠たる将来には、アフリカ人もヨーロッパ人に近づくことが可能かもしれないが、ここ当分の間は無理だと考える者が多かった。たが、フランシス校長は違っていた。アフリカ人といえども、教育の力で、今すぐにもヨーロッパ人に追いつけると考えていた。

彼は、グギがアライアンスに入学した 1955 年 1 月にはケニアにおらず、同年 5 月までイギリスへ出かけていた。この間、ロンドン滞在中の 3 月 31 日、王立アフリカ協会 (**Royal African Society**) と王立帝国協会 (**Royal Empire Society**) の合同会議で、ケニアでの教育経験を報告している。興味深い論点を以下に紹介しておこう。

「(ケニアでは) ミッションと政府の、幸福な連携がある。(アライアンス高校は) 全員寄宿制で、ケニアの全地方から、あらゆる部族出身の 200 名の男子生徒がいる。約半数がキクユ、エンブ、メル部族に属し、誰もが現在の非常事態に巻き込まれている」⁴⁸⁾。

「生徒たちは、ヨーロッパ文明の恩恵の少ない家庭の出身であり、無線やモーターバイクを知らず、金持ちではない。知的な会話が乏しく、本や新聞を読むことも少ない家庭の出身である。しかし、これらの生徒も、本質的にはイギリスの少年と変わらない。ケニアのヨーロッパ人の学校、ここイギリス本国の一流校と比べても、知的、剛健さ、勤勉さ、礼儀、勇気、誠実さ、ジェントルマンとして、決してひけを取らない」⁴⁹⁾。

「ケニアの大部分が暗い。その中でここ（アライアンス）だけは、明るい光が当たっている。学校で学んだ若者は経験も浅く、失敗も多く、大いに助けが必要だろうが、すばらしい人材である。能力があり、友好的で、正しいことに熱心で、従順、現在の悲劇に押し潰されていない。私は彼らに大きい希望を抱いている」⁵⁰⁾。

先述したように、校長は、在校生はもちろん、過去の生徒の名前を全部覚えていたという。卒業後何年たってからでも、いったん再会すれば、一人一人の生徒の記憶を辿って、各生徒の過去のエピソードまで持ち出すことが出来たら

しい。彼は、生徒の卒業後の人生にも、止むことのない関心を持ち続けた。これが本当なら、彼こそは生来の教師、その名に値する稀有な、真正の教師だったと言えるだろう。

しかし、このような校長に反発する同僚の教師も少なからずいたようだ。エリウド・マツはその一人であり、校長の「見え透いた温情的態度」(blatant paternalism) に我慢がならない、意見の違いにまったく不寛容⁵¹⁾ だとして、職場を去った。また、マセノ高校 (Maseno High School) ⁵²⁾ の校長時代には、そこで教師を務めていたオギンガ・オディンガともよく衝突があったと言う。

だが、こうした意見の違いを越えて、校長を讃える者が多くいたことも事実だった。晩年の3年間、フランシスは健康を害しながらも、プムワニ (Pumuwani、ナイロビの一角) で教えたが、最期は机に向かって執務中に倒れ、そのまま息切れたのだった。この時、全国会議員が葬儀に参列できるように、ケニア議会は休会を宣言し、その死を悼んだ。葬儀では、ムボヤ、オディンガなどの閣僚が棺を運び、アライアンスの卒業生が多数参加した。彼がケニアで教えた外国人教師の中で最も有名な存在であり、ケニアの運命に最も顕著な影響を及ぼした教育者であったことを誰もが疑わなかった。

彼は、先の訪問先のロンドンで、マウマウ戦争下のケニアの社会状況についても話している。

「放課後が問題である。けっしてバラ色ではない。生徒たちが向かう世界は、肝がつぶされるくらい困難だ。我々ヨーロッパ人と比べようもなく熾烈だ。助けてくれる人はなく、模範として仰ぎ見る人もおらず、足を引っ張る者だけが多くいる。まるで、まだ泳ぎ慣れない者を、荒れ狂う奔流に突き放すようなものだ」⁵³⁾。

「アライアンスの生徒のうち、5人が父親をマウマウに殺された。どの生徒にとっても、家は暗く、危険な場所である。非常事態宣言以来、私は休暇中に実家へ帰るよう無理強いしたことはない。いつも平均30人ぐらいが休暇中でも学校に残っていた。家は大変だ (Home is too hot) と、1日か2日で学校へ戻ってくる生徒もいた」⁵⁴⁾。

「私はマウマウに賛成ではない。マウマウは、まったくの悪であり、アフリカ人にも、ヨーロッパ人にも等しく、著しい害を与えてきた。しかし、それは抵抗運動でもある。いったん、ヨーロッパ人が敵視され、侵略者として、アフリカ人から土地を奪い、アフリカ人を抑圧し、アフリカ人の労働と財産で私腹を肥やしていると思われたなら、抵抗

運動の舞台が整ってしまう」⁵⁵⁾。

「戦時中の抵抗運動と同じく、マウマウはヨーロッパ人侵略者だけでなく、アフリカ人の協力者（注、植民地政府側に味方するアフリカ人）に対して、より激しく闘っている。マウマウは、アフリカの部族の団結を訴えている」⁵⁶⁾。

このほか、以下の発言も注目されるだろう。

「いくつかの地域では、普通のキクユ人は、『マウマウ』と『法と秩序の部隊』（注、政府軍のこと）のどちらが恐ろしいかを区別できないでいる。両者ともが、強奪、殴打、略奪、殺害を行っている。これらを正す希望はない」⁵⁷⁾。

「アフリカ人ホームガードが、容疑者を自白するまで殴っている。自白しないとどうなるか、多くの者がわかっているので、殴られずとも自白している」⁵⁸⁾。

「何人かの生徒がマウマウの誓約をたてていた」⁵⁹⁾。

校長は、市街地での人種差別にも抗議している。同僚アフリカ人教師や生徒を連れて、ホテルやレストランに入れないからである。また、アフリカ人であることを理由に、自由に選べない職種があるが、才能あるアフリカ人が多数いると主張している⁶⁰⁾。

ケアリー・フランシスは、人道的なクリスチャンの立場から、ケニアでの投獄者に対する残虐行為（拷問）や罪のないアフリカ人への虐待に対して、以前から抗議してきた。ヨーロッパ人のなかには、もっとラディカルな立場から批判の声を上げる者もいたが、フランシスのようなリベラルな教育者・熱烈なキリスト者の立場からの意見として、彼の発言は相当に注目されたようである。

なお、当時は、マケレレ大学へ進学する以前に、ギクユの全学生が、ケニア政府から身元調べを受けていた。非常事態の宣言直後には何度か、ケニアの役人がマケレレへ来て、学生に尋問するようなことがあったらしい。そんな時、マケレレ大学は学問の自由の原則を貫き、何人にも大学は開かれていることをあくまで主張したという。当時、マケレレ大学の評議員会のメンバーの一人であったフランシスは、大学に学んでいるギクユの全学生は、マウマウの誓約をたてさせられているのは当たり前と述べ、それ以上の詮索を巧みに免れさせたという⁶¹⁾。

ケアリー・フランシスは、英国時代にはサッカー、クリケット、テニスを楽しんだ。ケンブリッジでもすぐれたサッカー選手だった。当然、アライアンスでもスポーツを大いに奨励した。当時の彼は、競技に参加することよりも、見学を好み、個人プレーよりもチームプレーを大切にしていた。「勝って謙遜、負けて反省」がスポーツ哲学だった。マラソン、クロス・カンントリーなど、走ることも奨励した。グギ自身は、どちらかというところではサッカーやホッケーなどチームプレーは苦手で、むしろピンポン（テーブル・テニス）やクロッケーなど室内ゲームを好んだ。1950年創部のチェス・クラブにも所属した。

先述したとおり、アライアンスに入学した1955年1月、校長は休暇でいなかった。前年の12月から、イギリスへ出かけており、2学期初めの5月21日にケニアへ帰ってきた。そのため、グギが校長の姿を初めて見たのは、2学期の授業のために帰省先から学校へ戻って9日後のことだった。この時、校長は、カーキ色のサファリタイプのコートを着ていた。怖い先生に違いないと想像していたが、そのような印象は受けなかったという。

校長が留守の間から、生徒たちの間では校長の話題でもちきりだった。その仇名（Hiuria, Kihuria「巨大サイ」）を知らない生徒はいなかった。校長は手品が得意で、硬貨やトランプ、ゴルフボールなどを使って、生徒を煙に巻くことが好きだったという。グギも後に手品を見ることになるが、それが手品なるものを知った最初だった。生徒の中には、校長の身振りや声色を真似るものも多くいた。校長は全生徒200名の顔と名前を覚えていたという。いや、1940年に就任以来、全卒業生の名前までも覚えていたという。彼は、アライアンス高校を「通訳者の館」（Interpreter's House）になぞらえていた。白人と黒人の間に立って、両者のコミュニケーションと和合をはかる人材の養成を理想としていたのであろう。

戦時に赴任した校長として、先代校長の方針を変更し、徹底的な自分流を望んだ。制服は、以前の膝までのカーキ色のショーツ、栗色のトルコ帽、黒い房の代わりに、質素なカーキ色のショーツとシャツに変えた。他の教員の妻たちの香水、派手な衣装、ミニスカートなどを特に嫌った。一種の独裁が敷かれ、何人かの非協力的な、特にアフリカ人教師が免職になった。これに抗議して自主的に辞める教員までが出た。

彼は、アライアンスに赴任する前にマセノ高校の校長を務めており、植民地

ケニアの状況にある程度まで詳しくあった。当時、彼はイギリスの友人に宛てて次のような手紙を書いている。

「ケニアでの人種感情はよくない。両者の側に問題がある。ヨーロッパ人は昔よりはよくなっているが、伝道や教育の効果に疑問を持っている。アフリカ人は生来白人を疑っている。・・・この国の未来の指導者の多くが我々の手にまかされている」⁶²⁾。

校長は、イギリス帝国の熱烈な支持者であり、大英帝国勲位の称号（OBE）を授与されていた。彼の帝国への信奉に疑いはなかった。しかし、校長の教えは「何をしようとも、政治家にはなるな。黒人であれ、白人であれ、褐色人であれ、政治家は全くのならず者だ」⁶³⁾ というのであった。

ここに興味深い秘話がある。1956年2学期のある土曜日の午後のことだ。学友の多くはナイロビへ繰り出したが、グギは同じ寄宿寮の友人ジョハナを連れてカミリズ村へ戻り、母の焼くジャガイモでもてなそうとした。2時間以上も歩いて、やがてカミリズ村が見え始めたところで、軍と警察の包囲網にひっかかった。武装した黒人と白人の兵士がおり、軍用車やランド・ローバーが多数の群衆を取り囲んでいた。誰もが日なたにうずくまっていた。アライアンスの制服も役に立たなかった。二人は捕まったが、ジョハナはタイタ人（海岸部の少数民族）の出身で、すぐに解放された。グギはそうはいかなかった。

自分の兄がマウマウのゲリラであることがわかれば、もう二度とアライアンスへ戻れないのではないかと。常に不安と恐怖が付きまとってきたが、その都度、彼はその恐怖を克服してきたのだ。尋問が始まると、グギはすべての質問に正直に答え、兄との連絡の術がないことも話した。やがて解放されたが、友人のジョハナは、賢明にも、すでにアライアンスへの帰路についていた。

グギは急いで実家へ戻り、母に会った。母は事情を知らされると「学期の途中で帰ってくることはない」と注意したと言う。グギは、食べ物を貰って、学校へ向かったが、帰校したのは、門限の夕方6時をとくに過ぎた深夜だった。彼にとって二度目のルール違反だった。翌週の月曜日、グギは校長室へ呼び出された。

兄がマウマウであることを校長に明かせばどうなるか。自分は放校処分になるのではないかと。不安が強迫観念のように付きまとった。校長室に入ると、フランシスはいつものカーキ色のコートを身に着け、射抜くような視線でグギを

見つめた。グギは、すべてを包み隠しなく告白することを決心した。彼は校長の眼をしっかりと見つめて言った。

「先生は、イギリス帝国のお役人です。ぼくの兄は、その帝国を滅ぼそうと誓っています。ぼくを母の許へ返してくださっても構いません。でも、ぼくは兄に反対する気は毛頭ありません。先生のせいでも、学校のせいでもありません。兄は善良な人です。兄は自由になる権利を求めています。先生の国のチャーチルは、イギリス人がドイツ人に支配されることのないように、ヒトラーと闘ったのではないのでしょうか。先生、ぼくの兄は、同じことを求めているのです。兄の願いは、ただ・・・」⁶⁴⁾

ここまで言うと、校長は次のようにグギの言葉を遮ったという。

「その土曜日、君は AHS の制服を着ていたのか」⁶⁵⁾。

校長は、それ以上は尋ねなかった。「よし、出て行きたまえ。しかし、これからもっと注意しなさい」。そう言った後、校長は苦虫を噛みつぶすように付けくわえた。「奴らはやくざ者だ」⁶⁶⁾。

帝国役人を「やくざ」呼ばわりするとは、グギはまったく驚いてしまった。校長にとって、政治家や官僚、警官は「国家の役人」＝「やくざ、ごろつき」だったのである。校長はマウマウの兄のことに触れようとはしなかった。兄の妻が刑務所に留置されていることにも頓着しなかった。

アライアンスの生徒の出身家庭には、植民地政府に味方するロイヤリストもいたし、マウマウの「テロリスト」もいた。ところが、不思議なことに、アライアンスには反植民地的なナショナリストの雰囲気漂っていたという。校長自身が、裏に表に、植民地支配に反対していた。アフリカ人教員は、白人教師と対等に扱われていた。白人教師よりも立派な黒人教師もいたが、それが校長によって正当に評価されていた。これらの黒人教師が生徒たちの未来の模範となった。自信に満ちて、政治に頓着することなく、大学進学準備に専念できる優秀な生徒をつくるのが校長の目標だった。校長の口癖は、「アライアンスは砂漠の中のオアシス」⁶⁷⁾ というものだった。

ある年の学期末に貰った通知表に、自分のことが「パイオニア精神を示した」⁶⁸⁾ と評価されていた。グギはこれを嬉しく思った。やがて、キアンブ地区原住アフリカ人ロケーション評議会が奨学生に抜擢してくれて、授業料納付の必要

がなくなった。

③ 寮生活

全寮制のアライアンスで、リビングストン・ハウスの 4 つの寄宿寮のうち、第 2 学寮に割り当てられた。宿舍は、安全で住みよかった。ベッドが向き合って、二列に並んでいた。かつて眼の病気で入院したナイロビのキング・ジョージ 6 世病院に似ていた。しかし、病院の嫌な匂いはなく、学寮はラベンダーの匂いが漂っていた。生まれて初めて、専用のベッドをあてがわれた。

翌日から、コンパウンドの清掃と草刈り、トイレや浴室の清掃が日課となった。トイレ掃除は難物だった。腰掛式と汲み取り式があった。誰もが後者の掃除を嫌がった。汚物が下に落ちずに、積まれている場合があると、これの掃除は、「チュラ」(chura スワヒリ語で「蛙」の意。大便の掃除係のこと)の仕事だと特に嫌がられ、出来れば避けたがった。皆が嫌がっていると、最後には白人の先生が率先してやってのけた。

起床後のシャワーは、誰もが一緒だった。村の生活では、割礼を済ませた者と、そうでない者が一緒に水を浴び、身体を洗うことはなかった。アライアンスでは、不思議にも、誰もが他人の裸に頓着していなかった。

シャワーの後は、朝礼と行進だった。全員が裸足(靴を履くのは土曜と日曜のみ)である。AHS とプリントされたカーキ色の制服を着て、背の低い者から高い者へと並ぶ。多くの白人教師がいたが、4 人の黒人教師も並んでいた。毎日、身体検査(身だしなみ検査)があった。ついで、太鼓、トランペット、笛の音とともに行進が始まり、ユニオン・ジャックの掲揚と女王陛下賛美の歌がうたわれた。兄が森にこもって帝国と闘っていることを忘れはしなかったが、グギは躊躇なく歌をうたっていた。

行進の後は、全員がチャペルへ入り、聖書と讃美歌の時間となった。「ああ、神さま、私を洗い清め給え。私を雪よりも白くせしめ給え」(Wash me, redeemer, and I shall be whiter than snow)⁶⁹⁾ とうたうのである。お祈りが済むと、食堂に集まって、朝食を摂った。

57 年には、寮の風紀委員に選ばれた。禁煙の学寮で、密かに煙草を吸う学友などを戒めるのである。グギは煙草を吸わなかった。喫煙の罰則は校内の草刈りだった。

こうして、世俗とはほとんど没交渉の世界で、自由と規律を重んじるイギリス式教育のもと、「グッド・アライアンス・ボーイ」としての自己育成をはかることになる。

VI. 学校生活・課外活動：演劇と文学への関心

授業は月曜日から金曜日までで、土曜日の午前中は日課があったが、午後は自由時間だった。この時は、実家が学校近くの者は自宅に帰るのが普通で、他の者は、多くがキクユ（Kikuyu）の町のインド人商店街へ繰り出した。

キクユは鉄道駅から発展した町で、人の往来が盛んで、商店が並んで活気があった。警察のパトロールがあり、警察犬が横行していたが、アライアンスの制服が、尋問から逃れる隠れ蓑になった。級友の多くが何かと買い物をしては、食べ物をほおぼっていた。

特定の土曜日には学校を離れて、午後 6 時までに帰校すればよかった。そんな土曜日は、「ナイロビの土曜日」（Nairobi Saturday）と呼ばれた。たいていの生徒が、ナイロビへ遊びに出たからである。金銭的な余裕に乏しいグギは、ナイロビへ出かけることは少なかった。

2 年の時である。友人を連れて、リムルへ戻り、母に会いに行った。母の畑には大きなムグモ（Mũgũmo, イチジク）の木があって、「生命の持続」のシンボルだと教えられた。母は小屋の外で火を焚いて、ジャガイモを焼いてくれた。その後、友人とロレート女子高校へ女の子を見に行くことがあった。女子生徒たちは赤い制服を着ていて美しかった。アライアンスのシャワーは冷水だったが、ロレート女子高校では温水が出るのも羨ましかった。女の子にはやしたてられるのは気分がよかった。ここで中学入試を受けたことがあった。女の子から茶をもてなされることもあった。その後、友人の家へ寄り、その父親の車で、夕方までに学校へ戻る予定だったが、門限に遅れてしまうことがあった。そんな時は、次の土曜日、罰則として校内の草刈りを命じられた。

ボーイスカウト活動にも参加した。校長もケンブリッジ時代にスカウト活動に熱心だった。ケニアでのボーイスカウトの開始は 1910 年で、初めはヨーロッパ人とインド人に限られた。アフリカ人のボーイスカウトの開始は 1929 年以降だった。グギは 1956 年にこれに参加、神と女王陛下への忠誠、ボランティア活動の意義、権威への忠誠心などを教えられた。1956 年、マーガレット王女のケ

ニア訪問時にはナイロビへ出かけ、ユニオン・ジャックを振って歓迎の行列に参加した。

1957年2月のバーデン・パウエル卿⁷⁰⁾生誕記念には、ナイロビ、ジカ (Thika) 他へ小旅行した。チャニア (Chania) 川の橋を渡ったが、それまでに見た一番大きな川だった。この時、ムランガの自然と風景の美しさにうたれた。さらにタナ (Tana) 川の支流を見て、中央州都ニエリ (Nyeri) へ到着した。最初の小説『川を隔てて』(*The River Between*, 1965) (はじめ、『黒人の救世主』*Black Messiah* のタイトルで地元の懸賞小説に応募したもの) の舞台は、ムランガとニエリの地勢をモデルにしたという。ニエリ出身のマウマウ戦士デダン・キマジ (Dedan Kĩmathi)、さらにはスタンリー・マゼンゲ (Stanley Mathenge) などのゲリラに思いを馳せたのもこの頃だった。

弁論部にも参加した。1939年創部、もっとも古いクラブの一つだった。初期のテーマ「ドイツの植民地支配の主張は、英国によって受容されるべきか」以来、政治的テーマが多かった。先輩のキマニ・ニョイケ、さらにカグモ校のポール・ムエマのスピーチを聞く機会もあって、大いに感心させられた。学校対抗弁論大会があり、たとえば「西洋教育は、アフリカで、よきことを成すよりも、害が多かった」のテーマで白熱の議論が交わされたという。グギはこれに参加して、鉛筆を頭上にかざして「誰かがやって来て、鉛筆をくれたが、代わりに土地を奪い取った。これをどう評価するか」と、声を震わせて力説したという。また、ある時には「平和を望むなら、戦争に備えよ」⁷¹⁾ というテーマを提案したという。チャーチルなど有名政治家のフレーズを取り入れたスピーチが盛んだっただろう。

アライアンスのチャペルに専属の牧師はいなかった。かわるがわる、さまざまな牧師がやってきた。生徒はもちろん、教職員の全員が参加した。日曜学校やボランティア活動などにも熱心に参加した。1957年末には四人チームのリーダーになり、「先生」(Mwalimu) と仇名されるほどだった。日曜学校をサボる生徒もいたということであろう。

① キリスト教

アライアンスでは宗教映画の上映もあった。たいてい救済と地獄がテーマだった。グギは、自分には告白すべき罪はないと思っていたが、それでも、罪を犯しているのだと教えられた。チャペルと聖書、そして祈りを信じ、熱心なキリスト教信者となった。「サタン」(Satan) との闘い、誘惑、性欲の罪といった

ことに不安を感じた。神は何語を話されるのか、キリストと神は同一なのかどうか、神やキリストの肌の色は何かといったことが疑問に思われた。

56年9月、マケレレ・アート・スクールの講師とその学生であったエリモ・ンジャウ（Elimo Njau, 先述のレベッカ・ンジャウは後の妻）⁷²⁾ がアライアンスを訪問し、黒人のキリストの絵を見せ、神は、異文化ごとに肌の色が違っていると説明したという。白人教師の中には、神は無色だという人もいた。白人であるが、白は色彩ではないという意見もあった。後年、グギは次のように述べている。「私は、とてもまじめなキリスト教徒になって、朝5時のお祈りに目を醒まし、・・・この学校での最後の2年間、私の社会的関心の翼を折り曲げてしまっていたかもしれません。言い換えると、キリスト教は精神的感覚麻痺を作り出し、ある時期の私を社会問題に対して麻痺状態にしていた」⁷³⁾。

スカウト活動から生まれた多人種混合のボランティア・ワーク、ユース・キャンプにも参加した。統一ケニア・クラブやヤギ座協会などの人種混合活動団体が盛んで、変革の時代の到来を象徴していた。ボランティア活動を通じて人種協調が叫ばれ、植民地政府への忠誠が尊ばれた。こうした活動を通じて、人種問題への関心を深め、心理的・社会的なアパルトヘイトが人種間に誤解と恐怖を生み出し、相互間の不信と敵意を増幅させていることを知った。ケニア・ユースホステル協会にも参加した。ヨーロッパ人、アジア人、アフリカ人が参加する週末の活動で、グギは自転車でリムル西部の現場と往き来した。

これらの活動を通じて、「家の外を旅すれば、うまい料理を作るのは、自分の母親だけではないことがわかる」⁷⁴⁾ という母の教えをグギは実感することになった。植民地政府による人種・民族間の分断策とは違って、アライアンスのボーイスカウト、ボランティア活動は、全人種・全民族の統合と融和の理想を実行するものだった。これらは、ケアリー・フランシスの言う「アライアンス・スピリット」と共通していた。校長のもとで、全ケニアから生徒がリクルートされ、アフリカ人教員の採用も、出身民族を問わなかった。

こうした雰囲気の中で、ケニアの各民族に興味を持つようになった。「部族間交流部」(Inter-Tribal Society) に入り、一時期、その部長を経験したこともあった。ケニアには、ルオ人やギクユ人がいるのではなく、誰もが「ケニアの子供」、誰もが「アフリカの子供」、いや「世界の子供」だとの思いが深まった。

② 演劇への関心

演劇活動にも積極的に参加した。演劇部は1939年に創設されていたが、1950年代はシェークスピアが出し物の中心だった。1952年「ヘンリー四世」(*Henry IV*)、1953年「マクベス」(*Macbeth*)、1954年「ジュリアス・シーザー」(*Julius Caesar*)が上演された。1955年には、「お気に召すまま」(*As You like It*)のリハーサルがあった。この時は、ダイニングルームが劇場になった。皆が16世紀のイギリス人の衣装をまとい、男子生徒が、女役も兼ねた。誰もが弱強五歩格(Iambic pentameter)で話すのだった。この時、すぐれた演技を見せた先輩ムンガイは、卒業後にマケレレへ進学した。1956年には、「ヘンリー四世」第一部が上演された。2年生のグギは、台詞はなかったが、背景を歩く歩兵の一人として出演した。1958年には『リア王』(*King Lear*)が上演された。

演劇部の先輩には、東アフリカ演劇史上に名を残したスワヒリ語劇作家ヘンリー・クリア(Henry Kuria)⁷⁵⁾がいた。彼の『好きなんだ、しかし』(*Nakupenda lakini*)はアライアンスで初演された。クリアは、小学校演劇祭、キアンブ・音楽フェスティバルなどを組織した人物だった。1955年にもこの劇の上演があって、グギはこれを観た。この年には、4年生のキマニ・ニョイケ⁷⁶⁾がプロデュースしたスワヒリ語劇『人生とは何か』(*Maisha ni Nini?*)も上演された。マングオ小学校時代にコミカルな寸劇を観たことがあったが、アライアンスでは本格的な劇が観られた。アライアンスの最終年には、戸外や室内で演じる政治劇が流行った。ヘンリー・クリア、キマニ・ニョイケ、ゲリション・グギ(Gerishon Ngugi)⁷⁷⁾などすぐれた先輩劇作家たちは、誰もがシェークスピアから多くを学んでいた。誰にとっても、シェークスピアが知的成長の本質部分となった。

演劇への関心は、この頃にしっかりと根付いたと言えるだろう。とはいえ、シェークスピアの内容は、ケニアにそぐはないと思うこともあった。W. ワーズワースの「水仙」(*The Daffodils*)はケニアのものでないと思うこともあった。文学の授業は常に魅力的であったが、どの場合にもヨーロッパが参照枠になっていた。地理も同じだった。ヨーロッパなど文明世界の川の名前は教えられても、アフリカの河川の名は、ナイル川を除いて、文明とは無縁だった。歴史の授業も同じだった。アフリカにやって来た白人探検家の名前を学ぶ度に「暗黒大陸」のイメージが増幅した。イギリス人は奴隷貿易廃止の恩人として登場してきた。シラバスは、ケンブリッジ受験資格試験委員会が決めるものだった。アフリカの未来も、英国が決めるのだろう。まだ見ぬ異国への想像は、現実の厳しさを忘れさせてくれたが、密かに抱いたこれらの疑問に答えてくれなかった。

③ 文学への関心

1955年のある時、数学のアラン・オゴト (Allan Ogot) 先生がピーター・エイブラハムズ (Peter Abrahams) の小説『自由を語れ』(*Tell Freedom*, 1954) を携えて、誰かと話していたのを目撃することがあった。知らない本だったが、タイトルに驚いてしまった。「タイトルの二文字は、アライアンス高校の壁の彼方の世界を語っているように思えた」⁷⁸⁾ という。しかし、先生は8月にスコットランドへ留学してしまい、本を借りることは出来なかった。

音楽も好きな学科の一つだった。音楽は文学、特に詩への入り口だと思った。ベートーベン、モーツァルト、バッハ、そしてスピリチュアルに興味を抱いた。黒人の抵抗歌謡の一節「おお、我に自由を」(*Oh, freedom over me*) は、ケニアの状況と重なると思った。

教室での学習は、常にヨーロッパが文化の尺度であったし、文学に関しても、英文学が中心であった。そんななかで、図書館は別世界だった。初めて見る大量の書籍に感銘した。全部の本を読破する決意をたてた。歴史書や帝国主義の本も読んだが、細かな歴史的内容よりも、物語として読むと面白く読めたという。「ビーグル号シリーズ」(*Biggles*)⁷⁹⁾ などの冒険物語やライダー・ハガード (Rider Haggard)⁸⁰⁾ も読んだ。そこでは、マウマウに参加した兄とは敵対する立場で物語が展開していた。『ソロモン王の洞窟』(*King Solomon's Mines*, 1885) などでは、アフリカ人は常に犠牲になっていた。小学校時代に読んだ『宝島』を思い出させた。どの物語でも、アフリカは犠牲になっていることを知らされた。犯罪小説、探偵小説にも親しみ、一時、アメリカのスリラー作家エドガー・ウォレス (Edgar Wallace, 1875~1932)⁸¹⁾ に魅力を感じた。他に、シャーロック・ホームズ、ロビン・フッドなども読んだ。しかし、これらの作品の多くは、二回と読む必要のないことも知らされた。

その後、自分と同じ「黒人体験」(*Black Experience*) を反映した作品に魅力を感じるようになった。南アのアラン・ペイトン (Alan Paton, 1903~1988) の『叫べ、わが愛する祖国よ』(*Cry, the Beloved Country*, 1948) は黒人牧師クマロの物語であるが、ケニアでも起こりうる話だと思ったという。ブッカー・ワシントン (Booker T. Washington)⁸²⁾ の『奴隷より身を起こして』(*Up from Slavery*, 1901) は初めて読んだ自伝文学だった。これを通して、19世紀アメリカの人種差別を知り、植民地状況と奴隷制は程度の差こそあれ、酷似していると思った。しかし、「黒人は、白人より以上に、奴隷制から得たものが多かった」というワシントンの考えには承服できなかった。ここから「黒人は、白人より以上に、植民地支配から得たものが多かっただろうか」との新たな疑問が生

まれた⁸³⁾。二番目に読んだ自伝は『シュバイツァー伝』だった。シュバイツァー博士とケアリー・フランシス校長は、たがいに似ていると思ったという。

その頃までに、グリム (Grimm)、イソップ (Aesop)、アンデルセン (Andersen) などを読み、エミリー・ブロンテ (Emily Brontë, 1818~1848) やトルストイ (Lev Tolstoy, 1864~1869) などにも親しんだが、図書館の本を全部読む必要があるかどうか疑問を覚え始めた。

マーカス・ガーベイ、ジョージ・パドモア、デュボイス、ケニヤッタなどの著作を知ったのもアライアンスの図書館を通じてであった。デュボイスの「パン・アフリカニズム」に感銘を受け、「20 世紀の問題とは、カラーラインの問題である」(‘the problem of the Twentieth Century is the problem of the color-line’)⁸⁴⁾ という言葉が忘れられなくなった。他にも、アメリカ黒人問題、W. E. B. デュボイスとナイアガラ運動、NAACP、ローザ・パークス、モンゴメリーのバス・ボイコット運動を知った⁸⁵⁾。

④ 「創作」に取り組む

さて、アライアンス時代に画期的な経験をした。在学中の 1956 年に処女作を書き上げたのだった。18 歳の時だ。それが、エドガー・ウォレスばり (模倣作) のスリラー小説であったということ以外、誰にも知られていない (自分でも、その原稿を散失してしまったという)。グギはこれを地元新聞「バラザ」(*Baraza* スワヒリ語で「広場」の意) へ寄稿したのだが、編集者は何かの理由で掲載しなかった⁸⁶⁾。この失敗によって、作家志望の夢を一度は捨ててしまう。だが、文学的関心がすっかり枯渇したわけではなかった。

次に書いたのが短篇であった。これが活字になった。空の壺の口に向けて好きな人の名を呼びかけると、その人に会えるというギクユの俗信にヒントを得たものだった。そこで、兄ムアングィの名をポットの口に向けて囁いたという。この経験から「私の幼年時代」(My Childhood) と題して短い作品を校内誌に投稿した。1957 年 9 月にその短篇が掲載された。驚いたことに、タイトルが「ウィッチクラフトを試す」(I Try Witchcraft) へ変更されていた。編集者が勝手に変更したもので、「キリスト教こそが文明化の力、迷信やウィッチクラフトは無益なもの」とのコメントが付いていた。このコメントを読んで、「創作の火がおしつぶされ、作品にかけたプライドが消えた」⁸⁷⁾ という。

しかし、この経験のお蔭で、小説や文章を書くのにライセンスは要らないこ

とがわかった。ライセンスがなければ、小説や文章は書けない、書けば逮捕されるか、投獄されるものと小学校時代には信じていた。この作品によって新たに 2 人の友人が出来たという。すでに小学校の教員をしていたキマニ・ムニャカ（Kĩmani Mũnyaka）が読後感を寄せてきた。

彼はこの作品をフロイド流に解釈し、欲望の心理学を説いたのだった。作者はキリスト教と白人の世界からの逃避を望んだのだというのである。「子宮に回帰したい」という内的欲求から生まれた作品」だともいう。「壺」は、ギクユ語では「子宮」の意味をも持っていた。子宮＝安全な場所であり、この短篇は、作者の孤独と不安を示すものだと解説した。もう一人の友人は、読後感の最後に「君は作家になったよ」と書き添えていた⁸⁸⁾。

VII. 戦時下の夢：マケレレ大学へ

1955 年 4 月 21 日、1 年の第 1 学期 89 日間が終わり、リムルへ向けて帰省した。同年 1 月、アライアンス高校へ向けて出発した時と違い、今度は 3 等車輛の正規の客だった。列車は満員だったが、アライアンスの制服が他の客との区別を際立たせた。意気揚々、他の乗客は皆がアフリカ人で、疲れた顔が目立ったが、にぎやかな声で、時々笑い声が上がった。

リムル駅が近づいた。60 年ほど昔に建設されたものだが、当時のままの風情を残していた。荷物倉庫、キオスク、待合室があった。少し離れて、トイレがあったが、白人専用、アジア人専用、一般アフリカ人専用に分かれていた。下車すると、家に向かい急ぎ足で歩いた。早く母に会いたかった。

さて、住み慣れた一角に到着したが、肝心の家が見つからない。あたりのすべての建物が破壊されていた。集落全体がなくなっていた。後でわかったことだが、誰もがホームガード駐屯所に移住させられていたのだった。カミリズ村全体が一つの強制収容村（要塞村）になっていた。駐屯所で、母ワンジク、兄の妻チャリティ、姉ジョキ、弟ジンジュの顔を見た時、自分が全くのよそ者になったとの思いを深めた。

「要塞村」の計画が打ち出されたのは 1955 年のことだった。これにより、誰もが決められた場所へ移住しなければならなかった。以前から、家の周りに塹壕を掘らせられることがあった。ゲリラを餓死させる戦略の一つで、ゲリラとの連絡を絶ち、食料などの供給を許さなくするためだった。「要塞村」には見張りの塔がそびえ、ユニオン・ジャックが翻っていた。常に検問があり、身体検

査があった。

要塞村への強制移住について、土地の没収があった。アフリカ人の所有地を一か所にまとめさせるのである。貧しい者の土地が富裕層に手渡された。ゲリラ一家の土地が、ロイヤリスト（植民地体制側に立つ人々）の手に渡った。ロイヤリストは村の一角のトタン屋根の家、土地のない貧困層は泥壁、草葺きの小屋が多く、たがいに密集していた。ロイヤリストの多くはクリスチャンで富裕、教育もあり、核家族が多かった。ゲリラの一家は、たいていが多妻、子沢山であった。

新しいカミリズ村で、家族は泥壁の小屋に住み、地べたに寝た。母がどうかして食物を得ていたが、どうしていたのか詳しいことはわからなかった。特定の日の、特定の時間に、金持ちの村人の畑で働いていたようだ。妹のジョキ、兄嫁のチャリティはヨーロッパ人の茶農場で働いた。1955年1月半ばには、植民地総督がマウマウ・ゲリラの投降を説き、アムネスティを提案した。低空を飛ぶ飛行機が、投降勧告のビラを撒いた。この時も、学校は避難所となったが、兄の安否が絶えず気になった。学校にいても、家へ戻っても、将来にかけた夢が壊れるのでないかとの不安が付きまとった。

第2学期が終わり、8月に村へ帰ると、母はホームガード・ポストに拘留されていた。面会に行ったが、母は寡黙で、家族も多くを語ろうとしなかった。「誰もが私をよそ者として扱っているようだった」⁸⁹⁾という。ゲリラがこもるケニア山の各所への爆撃が激しくなり、町や地元の市場でも不意の手入れがあり、大量の逮捕や公開の処刑が身近なものになっていた。

当時の母は、兄のこと、自分が受けた尋問について多くを語らなかった。彼女はひたすら土地を愛し、農作業に至福を見出していた。畑仕事を手伝えとも言わず、「畑に来れば、ジャガイモを焼いてあげる」と言うのが口癖だった。そんな時、彼女はムグモの老木のそばで火を焚いて、黙々とジャガイモを焼いてくれた。「夜の次には朝が来る」というのが彼女の信念だった⁹⁰⁾。

ある日、母親を訪ねた時、離婚しているはずの父が訪れてきた。父が学校のようにすを尋ねた。母との間にも自分との間にも、多くの会話はなかった。父は、焼いたじゃがいもを食べた後、その場を立ち去った。弟のジンジュは父を恨んでいるようで、父になつこうとはしなかった。母は兄弟をたしなめた。「お前たちの父さんだよ。あれこれ、言うでない」⁹¹⁾。グギは、両親が初めて知り合っ

た時のことを知りたいと思った。母はそれには答えず、そばのムグモの巨木が白人の到来以前からあったと言っただけだった。

1955年のクリスマス直前、兄嫁のチャリティが逮捕された。ゲリラに食料や衣服を提供しているとの罪状だった。彼女は、カミティ最高治安刑務所に収容された（釈放は、1957年8月）。

56年1月に学校へ戻った。1年生の時から、ギクユ・エンブ・メル出身の生徒は、汽車や公共輸送機関での旅行で許可証が必要だった。マウマウの主要勢力であるギクユ・エンブ・メル出身者（GEMA, Gikuyu, Embu, Meru Africans）の移動を規制するもので、教師も例外ではなかった。これは GEMA と non-GEMA の分断策であったが、学校はそうしたことから解放されていた。しかし、2年になると、学外の影響が押し寄せた。まもなく、生徒の指紋を取りに役人がやって来た。アイデンティティ・カード（ID）の携帯が要求された。IDカードが、南アと似たパス帳に変更された。非常事態下で地域間の移動に際して、パス帳にスタンプが押された。マウマウの誓約をしていないかどうか尋問された。56年3月、検問チームが学校へ来て、2週間にわたって教員、生徒、ギクユ・エンブ・メル出身のスタッフを尋問した。グギの場合は、リムルに連れ戻されて、尋問を受けることになった。地区役人からスタンプ付きの証明書を貰ってくる必要があった。そのスタンプを貰うには、ロケーション（アフリカ人居住地）の首長の証明書が必要だった。そんなわけで、2年生になったものの、常に不安が付きまとった。首長は残酷な人だと聞いていた。彼は兄ムアンギのことを知っていたし、その妻が獄中にいることも知っていた。

首長の証明を貰うために、グギはリムルの首長ヒンガ（Hinga）に会いに行くことになった。自分が、マウマウとは何のかかわりもないことを証明する必要があるのである。この首長の兄は、マウマウに殺害されていた。カミリズ村近くまで来ると、1954年に築かれたウォッチタワーが見えたが、そこは母が3ヶ月間拘留され、拷問を受けた場所だった。橋の下に塹壕があり、有刺鉄線がめぐらされ、物々しい警戒網が敷かれていた。胸に AHS と大きく書かれた制服が唯一の頼りだった。首長はフレッド・ムブグア（Fred Mbūgua）なる人物に代わっていた。この人物は学友ケネスの父であり、かつてマングオ小学校に学んだ頃、作文を褒めてくれた先生だった。前の首長は読み書きが出来ず、交替させられていた。

新首長からは何の質問もなく、潔白を証明する証書を書いてくれた。後はテ

ィゴニ (Tigoni) 地区事務所へ行って、公印を必要とするだけだった。そこには長い行列があった。しかし、証書に首長のシールがないことがわかった。「外で待て。もう一度検査だ」。戸外で長く待たされたあげく、グギは指示を無視して、その場を離れ村へ帰ってしまった。しかし、何事も起きなかった。

2 年の最終学期に向けて学校へ戻ろうとした矢先に、兄ムアングが英国軍の捕虜になったとの報が、バナナに住む親戚から伝わってきた。兄は足を撃たれた、頭も撃たれた、いや心臓を射抜かれたなどの噂が飛び交った。ただ、それでも生きているとの噂が共通していた。もし生きていたとしても、その場合には、ギヅングリで絞首刑になるはずだった。

兄は、仲間とともに、ロンゴノット (Longonot) ⁹²⁾ 近くで英国兵の小部隊を待ち伏せしていたところを捕まったという。兄たちは、非常線をくぐって散りぢりに、ギルギル (Gilgil)、ニヤンダルア (Nyandarwa) ⁹³⁾ など南方へ逃げたという。政府軍は援軍を得て、丘や谷、川を昼夜にわたって追跡を繰り返した。何人かが銃弾に倒れたが、兄は銃を手離すことなく逃げ延びた。リムル近くまで逃げて、白人専用高地に広がるブルックボンドの茶農場を匍匐前進したという。敵に見つかりそうになりながらも、その後数日、仲間を探し求めたが無駄だった。自決するか、後日の闘いに希望を込めて降伏するかのも二者択一を迫られた。兄は後者を選び、ムグモの大木の根元に銃を隠し、川と森と、コーヒー農場を通り抜けて、バナナ近くのカルガ (Karūga) 首長の家まで辿り着いた。兄はこの首長の一家を知っていたからである。カルガの妻が戸口に出てきて、夫に知らせる前に兄に食事を進めたという。その後、兄はマニヤニ (Manyani) 収容所へ送られた。

1956 年 10 月 21 日、マウマウの最高指導者デダン・キマジが逮捕された。誰もが、キマジ本人でなく、その影が逮捕されたにすぎないと信じていた。もし、本当に逮捕されたのなら、これで闘いは終わりだと思われた。

キマジ逮捕のしばらく前、1956 年 7 月 26 日のことであつた。エジプトのナセルがスエズ運河の国有化を宣言した。アスワンハイダム建設のためだった。にわかにアフリカが世界政治に登場した。アライアンスにもこのニュースが届いた。校長が緊急集会を呼びかけ、ナセルをごろつき、国有化宣言を泥棒行為と決めつけた。

スエズ運河は 1868 年、フランス人レセップスが建設、英国スエズ運河会社が

所有してきたものだった。10月29日には、イスラエル、フランス、英国がエジプトに向けて軍事戦略を展開した。グギは、エジプトの国土に建設されたものだから、運河はとうぜんエジプトのものだと思っていた。

57年1月頃、学校は、もはや聖域ではなかった。全校集会、クラスルーム、そして *SEP* (*Saturday Evening Paper*) を通して、ケニアと世界の断片的な情報が伝わってきた。*SEP*は、1943年創刊、生徒会の手書きの新聞だった。

スエズ事件は、世界が変わりつつあることを実感させた。57年1月には、英国イーデン首相が引退、マクミラン首相が誕生した。そして3月には、ゴールド・コーストがガーナとして独立した。「変革の風」が着実にアフリカの権力図を変化させていた。ちなみに、北アフリカではリビアが51年に、チュニジアとモロッコが56年に、そしてスーダンが56年に独立していた。ケニア初の立法審議会のアフリカ人代表は、ガーナ独立(1957年3月6日)の4日後に選挙が実施され、8人のメンバーがアフリカ人代表組織 AEMO (African Elected Members Organization) を結成していた。リトルトン計画⁹⁴⁾は破棄され、無効となった。キマジは、57年2月14日に処刑された。

58年3月の選挙後、ナショナリズムの火が燃え上がった。憲法改正後、6人のアフリカ人代表が増員され、全部で14名になった。これはヨーロッパ人代表の数と同数であった。立法審議会の各人種代表数に変化は見られたが、投票比は、ヨーロッパ人1人に対して、アフリカ人は数百人というひどいものだった。6月26日、オギンガ・オディンガ (Oginga Odinga)⁹⁵⁾ が獄中のケニヤッタこそが指導者だと宣言、「ケニヤッタで独立を」(Uhuru na Kenyatta) のスローガンが全土に響いた。こうして、政治の舞台は、ケニア山とニャンダルアの山々からナイロビとロンドンへ移った。

① 拘留を経験する

59年4月、アライアンスを卒業してから4ヶ月後、バスでナイロビからリムルへ向かう途中だった。中間点のバナナでポリース・チェックがあり、二人の警官がバスを制止した。1月に始めたカフグイニ (Kahūgūinī) 小学校での教員生活を終えて、3ヶ月分の給料50ポンドを持ちあわせていた。7月にはマケレレ大学へ入学できる許可証を、肌身離さず携帯していた。アライアンスの制服を脱いだ後は、スーツを新調しなければならなかった。もしマケレレ大学への進学が許されなかったら、彼は小学校教師でなく、ジャーナリストになりたいと思っていた。そのため「イースト・アフリカン・スタンダード」紙 (*East African*

Standard)⁹⁶⁾ の入社試験のインタビューを受けていたが、結果は合格しなかった。

乗客全員がバスから降りて、道路脇に座らされた。身分証明書、納税証明書、パス帳を提示する必要があった。グギは、納税証明書も身分証明書も持ちあわせなかった。マケレレ大学への入学許可証を見せたが、バスに戻ることは許されなかった。バナナから 13 マイル先のリムルの自宅との連絡の方法がなかった。幸い、次に来たバスに知り合いの学友が乗っていた。持ち合わせた大金を彼に預け、事の次第を家の者へ伝えてくれるよう頼んだ。

兄ムアングは、57 年末に釈放され、その後は大工の仕事には戻らず、商人になっていた。腹違いの兄カバエ (Kabae) は元キングズ・アフリカン・ライフル部隊⁹⁷⁾ の一員で、威風堂々としていた。その二人が、一晩の拘留の翌日、警察署を訪ねてきて、グギの身許を保証し、無実を説いた。署内の有力者に賄賂まで渡して釈放を訴えたという。しかし、これが成功せず、グギはキアンプ再留置刑務所へと移送された。この時に聞き及んだ刑務所内でのさまざまな留置人の話は、少年グギにとって、全く異質な経験となった。貧者や留置人の考えている社会正義の概念、無慈悲な政府への納税義務があるのかどうかといった話題は、それまでのアライアンスの生活と倫理観ではとても想像できないことだった。人は、病院内とか刑務所内では、自分を隠さないで赤裸々に話せるのはなぜなのだろうか。

次の日、法廷に立った時には、カフグイニ小学校の同僚教師や、リムルの兄弟姉妹、村人もやって来た。はたして自分にどんな罪があるのだろうか。納税に関係しているのだろうか。多くの者が、言われるままに罰金を払って出所していた。自分も罪を認め、罰金を払って出所するか、あくまで非を認めず、拘留所生活を続けるかの選択だった。罪を認めれば、罰金を支払わずに出所できる見込みさえあった。罪状は、「逮捕の際に抵抗し、警官に暴行した」というものに変更されていたからだ。これが本当なら、非常事態下での大罪であることは間違いなかった。身に覚えはなかったが、Yes か No の二者択一を迫られた。結局、身に覚えがないと答弁し、またもや再留置所へ繋がれた。くだんの二人の警官が、罪状を認めるよう説得しにやって来た。

翌日、再び法廷に立った。前日より多くの人が集まっていた。兄のほかに、弟のジンジュも来ていた。「アライアンスで学んだことを威張っている、ケアリー・フランシスに教わったことを自慢している」⁹⁸⁾ との罪状まであった。くだ

んの二人の警官との押し問答のあげく、とうとう警官の訴えは退けられた。法廷内に拍手が起こり、「無罪」が決まった。

② いざ行かん、ウガンダへ

59年7月、リムル駅からカンパラ行きの列車に乗り込んだ。2等車両は、もはやアジア人だけの専用でなくなり、マケレレ大学入学の夢を掴んだアライアンスの卒業生19人が威勢よく陣取っていた。いざ、ウガンダへ。多くの村人がホームで見送る中、機関車が「ダジエ・ウガンダ、ダジエ・ウガンダ」(Ndathiĩ, Uganda, Ndathiĩ Uganda「いざ行かん、ウガンダへ、いざ行かん、ウガンダへ」)と、ゆるやかに轟音を響かせ始めた。

第2部：一粒の砂に世界を見る－何を書くのか

I. 「マケレレ」というオアシス

「汽車は喘ぎながら前進した。人々はプラットフォームで手を振り、なかには走る列車を追いかけるように駆け出す者もいた。やがて彼らは後方に残され、遠くへ消えていった。たぶん、それでも彼らは手を振り続けていたのだろうが、私たちにはもう見えなかった。これは1959年のことで、私たちはマケレレへ向かう途上であつた。一団の少年は大声でわめき、笑いさざめいた。学友たちは独立と新たな自由を確信していた。彼らは、学校時代には想像も出来なかった贅沢―煙草を喫い、酒を飲んでいた。私は汽車が早くマケレレへ到着するように、後から押してやりたい気持だった。長い、長い夜の間、マケレレは私の夢を満たし続けてきた場所であり、そこは私の終着点、教育への喘ぐような渴望を癒してくれるオアシスだった」¹⁾。

グギは、マケレレ大学で学んだ頃、なかでも1961年から1964年の間に、ナイロビで出ていた複数の有力新聞に、旧名ジェームズ・グギの名で、合計約80篇のコラム記事を寄稿していた（これらの「初期ジャーナリズム」の文章については、第5部で紹介する）。上に紹介したのは、「私の見たまま」(As I see it)と題する「サンデー・ネーション」紙(1963年3月24日付)の連載コラムの一節で、「マケレレ、そこはオアシスだ」(The Oasis that is Makerere)との見出しが付いている。この文章から、「教育への喘ぐような渴望」を抱き続けて、今まさに、その夢を手にした植民地ケニアの若者として、まだ見ぬ未来に託した荒ぶる気概が感じられる。

① マケレレ大学

マケレレ大学(Makerere University)の前身は、1922年、職業専門学校として発足した工業学校(Technical School テクニカル・スクール。後に、Uganda Technical College ウガンダ・テクニカル・カレッジと改称)である。同年1月、第1期生14名の昼間学生が入学し、木工、建築、機械を学び始めた。テクニカル・カレッジになってからは、医療、農業、獣医学、教員養成コースなどが増設され、1935年頃には、東アフリカ英領植民地の高等教育機関として中枢機能を担うまでになった。

第二次大戦後の1949年、ロンドン大学と提携し、マケレレ・ユニバーシティ・カレッジ(Makerere University College)となり、ロンドン大学の学位を出すことになった。ケニア独立の直前、1963年6月には、ケニア、タンガニーカ(後

のタンザニア)の高等教育機関を統合して東アフリカ大学 (University of East Africa) となった。この時に、ロンドン大学との提携は終わり、東アフリカ大学として独自の学位を出し始めたが、1970年に発展的に分裂し、以後、ケニアのナイロビ大学 (University of Nairobi)、タンザニアのダルエスサラーム大学 (University of Dar es Salaam)、ウガンダのマケレレ大学としてそれぞれが独立した。

最近のマケレレ大学は、2011年12月以降、ファカルティ (Faculty) 制度を廃止し、カレッジ (College) 制度を導入、現在では9カレッジと1スクールを擁し、学部生約35,000、大学院生約3,000を抱えている。ブラック・アフリカで最も古く、最も権威ある大学の一つとして評判が高い。1949年には附属図書館が設置されたほか、学内に、聖フランシス教会 (1955年以降、ローマ・カトリックの聖オーガスチン教会) および、1948年以降ムスリムのためのモスクを擁しているが、宗教の自由は保障されている。現在では、西部キャンパス (フォート・ポータル。カンパラ西方320キロ) と東部キャンパス (ジンジャ。カンパラ東方87キロ。ウガンダ第二の都市) でも授業が行われている。「未来をつくる」 (We Build for the Future) が建学の精神、大学のモットーとなっている。

植民地期から現在に至る長い歴史から、卒業生には、綺羅星のごとく各界の著名人が並び、現代アフリカの政治指導者も多く含まれている。たとえば、元ウガンダ大統領故ミルトン・オボテ (Milton Obote, 1925~2005)、タンザニア初代大統領故ジュリアス・ニエレレ (Julius Nyerere, 1922~1999)、ザンビア初代大統領ケネス・カウンダ (Kenneth Kaunda, 1924~)、前タンザニア大統領ベンジャミン・ムカパ (Benjamin Mkapa, 1938~)、前ケニア大統領ムワイ・キバキ (Mwai Kibaki, 1931~)、ケニア政治家故オギンガ・オディンガ (Oginga Odinga, 1911~1994) などはその一部である。

グギが在籍し、東アフリカ三国の独立前後 (1961年、タンガニーカ独立。1964年、ザンジバルと合併してタンザニア連合共和国となった。1962年、ウガンダ独立。1963年、ケニア独立) には、20世紀のアフリカ文学を担うことになる代表的な作家たちが、この大学で学ぶなど、何らかの関係を持った。たとえば、ヌルディン・ファラ (Nuruddin Farah, ソマリア, 1945~)、アリ・マズルイ (Ali Mazrui, ケニア, 1933~)、デイビッド・ルバディリ (David Rubadiri, マラウイ, 1930~)、オケロ・オクリ (Okello Oculi, ウガンダ, 1942~)、ジョン・ルガンダ (John Ruganda, ウガンダ, 1941~2008)、ピーター・ナザレス (Peter Nazareth,

ウガンダ, 1940~)、ミシェレ・ムゴ (Michere Mugo, ケニア, 1942~)、ジョン・ナゲンダ (John Nagenda, ルワンダ, 1938~) などである。

グギは 1959 年、七つの丘の町として知られる首都カンパラの、マケレレの丘に聳えるユニバーシティ・カレッジ に入学した。当時は全寮制で、ノースコート学寮に割り当てられた。こうして、事実上、ロンドン大学予備コース (2 年間コース、中学校フォーム 6 に相当) に籍を置いて、英文学を専攻することになった。

マケレレ大学の英文科は、ロンドン大学英文科の教育課程に基づいていた。そこでは、ケルト時代から T. S. エリオットまで、つまり「ベオウルフ」から、チョーサー、シェークスピア、形而上詩人、復古時代、ロマン主義時代、そして 20 世紀へと続くイギリス文学の全体を学ぶのだった。マケレレ大学英文科の学位とは、イギリス文学史の学位であり、英語史の学位でもあった。

② 図書館：地平の拡大

予備コースに在籍し、本コースへの準備をしていた頃、南アの作家 P. エイブラハムズ (Peter Abrahams, 1919~) の作品を見出した。この作家の『自由を語れ』(*Tell Freedom*, 1954) は、アライアンス高校の時代に、数学の先生が小脇に挟んでいるのを遠くから見て、そのタイトルに「身体が震えた」ことを思い出させた。マケレレの図書館でこの本を見つけて、グギは「狂喜し」、「食べるように読んだ」という。後には、エイブラハムズの全作品を読むことになった。これが、南アフリカ文学への関心の始まりだった。

ここで大事な点は、エイブラハムズだけでなく、図書館を通して、その他のアフリカ人作家、カリブ海の作家の作品を知ったことであつた。ナイジェリアのチヌア・アチェベ (Chinua Achebe, 1930~2013) の『部族崩壊』(*Things Fall Apart*, 1958) は西アフリカ文学への関心のきっかけとなった。アチェベの次に、同じナイジェリアのシプリアン・エクウェンシ (Cyprian Ekwensi, 1921~2007) の全作品を読み、さらに、その他の西アフリカの作家を追いかけた。図書館に頻繁に出かけ、西アフリカ関係のジャーナルや雑誌の記事を貪り読んだ。カリブ海文学としては、バルバドス出身のジョージ・ラミング (George Lamming, 1927~) の『わが皮膚の砦の中で』(*In the Castle of My Skin*, 1953) に特に感銘を受けた。ラミングによって、ナイポール (V. S. Naipaul, 1932~) などその他の作家に導かれた。

図書館のお蔭で、教室とは別の、もう一つの世界、多くの点で自分自身のものであるような別の世界を知った。大学英文科の公式イメージ、ヨーロッパ中心のイメージと、図書館で自分が発見した世界のイメージはたがいに対立していた。アフリカ人作家の存在は、個別指導でもゼミナールでも、決して言及されなかった。したがって、カリブ海のエメ・セゼール (Aimé Césaire, 1913~2008) やセネガルのサンゴール (Léopold Sédar Senghor, 1906~2001) 世代のネグリチュードの作品の存在を知った時、「被抑圧者の世界に、何世紀にもわたる文学活動があった」ことに大きな驚きを感じた。

これらの作家と作品は、一度は消えかけた作家志望の夢を再びかきたてた。当時を回想して、「アフリカ人作家は、真実私に向かって語りかけているように思われた。これはヨーロッパ人作家の作品からは感じられないことだった」²⁾と述べている。アフリカ人作家のテーマは、自己の環境と直接につながるものであり、作者になりかわって自分がアフリカ人同胞に語りかけているような錯覚におちいり、「このような小説を書けるアフリカ人作家がいるのなら、私もまた書けるはずだ」³⁾との確信を抱いたという。

この頃、まだ創作と取組む以前に、ノースコート寮の学寮長ヒュー・ディンウィディ (Hugh Dinwiddy) に、小説を執筆中であると嘘の報告をしたことは、今ではユーモラスなエピソードとして広く知られている。これもまた、つよい文学衝動の証拠となるものであろう。この人物から、人格的に深い影響を受け、後に創作の上でも数かずのアドバイスを受けることになった。なお、この学寮長によれば「ジェームズ・グギには、ケアリー・フランシスの福音伝道の熱情がそのまま吹き込まれており、マケレレへ来た時のグギは、フランシスの教えそのままの学生だった」⁴⁾と第一印象を述べている。

II. 創作への誘い：文芸誌と英語コンペティション

1960 年のある日、キャンパスを歩いていると、たまたま先輩のジョナサン・カリアラ (Jonathan Kariara, ケニア, 1935~1993) に出会った。カリアラは、英文科の文芸誌の編集に深くかかわっていた。グギは、思わず彼を呼び止めて、「短篇を書き上げたので、読んでほしい」⁵⁾と頼んだ。この時、カリアラは英文科の最終学年にいて、グギは予備コースの 2 年目だった。「短篇を書き上げた」というのは嘘で、筋書きを思い浮かべているだけのことだった。

同年、予備コースを修了して、英文科に正式に所属した。この頃から、作家としての才能の芽が開花し始め、同大学英文科学生の文芸誌『ペンポイント』

(*Penpoint*, 1958 年創刊) の編集にもかかわった。『ペンポイント』は、東・中央アフリカの作家志望の学生たちの重要なフォーラムとして発展していく。

この他に、英文科では文芸コンペティション、特に戯曲コンペティションが学寮間で開かれていた。これは、正式には「英語コンペティション」と呼ばれ、戯曲や雄弁術が競われた。グギにとって、最初の戯曲執筆の動機は、この「英語コンペティション」があったからである。また、長編小説でなく、短篇から書き始めたのは『ペンポイント』という雑誌の性格からであった。

① 最初の短篇「イチジクの木」(*The Fig tree / Mugumo*)⁶⁾

さて、話を戻すと、キャリアとの約束から、本当に何かを書かなくてはならなくなった。その結果、最初の短篇「イチジクの木」(*The Fig Tree*) を書き上げ、1960 年 12 月の『ペンポイント』第 9 号に発表した。キャリアは、一読後、この作品に感心し、「君は、D. H. ロレンスを読んでいるのか」と尋ねたという。

当時のグギは、事物の精神と一体化するロレンスの手法に深い感動を覚えており、短篇の冒頭に、次の引用を掲げていた。[なお、短篇集『秘めやかな生活』(1975) への収録時には、この引用を削除し、表題を、同じ意味のギクユ語「ムグモ」(*Mugumo*) へ変更している]。

Great complicated, nude fig tree, stemless flower-mesh, Floweringly naked in flesh, and giving off hues of life. There was a flower that flowered inward, womb-ward ; Now there is a fruit like a ripe womb.

「激しくもつれ合った、裸のイチジクの木、幹のない花の網目模様、肉の中に裸で咲いて生命の色を放つ。内の方、子宮に向かって咲く一輪の花、今、熟れた子宮に似た果実を結んでいる」

主人公ムカミは、ムゾガの四人の妻のなかでいちばん若い。初め、夫の愛を独占するが、いつこうに身籠るようすがない。やがて夫の態度が変わり、他の妻たちからの嘲りや軽蔑に耐えられなくなる。悲しみにくれて、彼女は小屋を抜け出す。密かに中庭を通り抜けていく彼女の背を、沈黙の非難が追いかけるようである。行く先の当てはない。ただ遠くへ、逃げ出したい。愛から転じて、今や暴力をふるいだした夫から、逃げ出したい。あんなに好きだった男を、ムカミは激しく憎み始めていた。

夫のムゾガは、もともと、こわもての男。妻たちへの対応は厳しかった。ムカミの父は

娘の結婚に反対したが、ムカミはこの男に惚れ込んでしまっていた。ムゾガの物腰、巧みな踊り、低い声、立派な体格を称賛せずにはおれなかった。ムゾガには、神秘と活力が漲っていた。短い交際期間の後、彼からオイスターの貝殻を繋いだネックレスが渡された。ムゾガはすでに年配で、誰もが若いムカミの相手として奇妙に思っていた。彼女は「魔法にかかった」と誰もが思った。

ある日、ムカミが畑へ向かう途中、突然3人の男が現れて、驚く彼女を担ぎ上げて、ムゾガの新しい小屋へ彼女を運んだ⁷⁾。

ムゾガはムカミに愛を注いだ。ムカミはムゾガの愛を独占した。年上の妻たちの嫉妬は激しかった。だが、ムカミの頓着することではなかった。何ヶ月か経った。不妊の女「ザータ」(thata)との嘲笑がムカミに浴びせられた。夫は激変し、彼女の小屋を訪ねなくなった。ムカミと他の妻、特に最年長の妻との間にトラブルがあると、夫は、暴力をムカミに向けた。誰もが見て見ぬふりをした。ムカミの居場所がなくなった。

彼女は、茂みに分け入り、谷を降りて歩き続けた。周りの木々や川は、彼女を憐れんでいただろうか、それとも彼女の行為を非難していただろうか。川を渡り、やがて死者が捨てられるという森へ入った。死者の霊が、周囲の木々に混じり合って、あたりを徘徊しているようだった。彼女は、今や世間と夫に怒りをさえ感じていたが、本当は、自分自身に怒りを覚えているのだった。夫を独占した自分に罪があるのだろうか、自分だってすべてを捧げたというのに。

Oh spirits of the dead, come for me !
Oh Murungu, god of Gikuyu and Mumbi,
Who dwells on high Kerinyaga, yet is everywhere,
Why don't you release me from misery ?
Dear Mother Earth, why don't you open and swallow me up
Even as you had swallowed Gumba
the Gumba who disappeared under mikongoe roots? ⁸⁾

「おお、死者の霊よ、私を救いに来ておくれ
おお、ムルングの神よ、ギクユとムンビの神よ
聳えるケリニャガに、いたるところに住み給う神よ
なぜ、私を不幸からお救いにならないのか
おお、母なる大地よ、なぜぽっかりと開いて、私を呑み込んでくださらないのか
グンバを呑み込まれた時のようにーミコンゴエの根っこの先に消えて行ったあのグンバ

9) のように」。

彼女は祈り、死者と生者に呼びかけた。突然、風が起こり、最後の星が消えた。ムカミは恐怖に取り憑かれ、身震いして、かん高い叫びを上げた。すると、あたりに無数の眼が光り、見えない手が彼女を誘い始めた。彼女は祖霊の地に踏み入ったのだった。身体が地中に埋もれていくようである。不思議にも、その時になって、死にたくない気持ちが湧いてきた。もう一度、新たな人生を生きたいと思った。遠くに、フクロウやハイエナの声が聞こえた。風がますます吹き荒れた。雨が降り出し、地も裂けんばかりの豪雨となり、彼女を呑み込もうとした。稲妻と雷鳴のなか、遠くに一本の大木が見えた。聖なるムグモの木だった。そこは聖域だった。彼女は、何もかも忘れたように聖木にめがけて走った、いや、飛翔した。じっさい、彼女の魂は飛んでいた。子宮が燃えているように感じた。彼女は聖木の根元で眠り込んだ。

目覚めた時、ギクユの民の原初の男ギクユのそばに立つ原初の女ムンビの手の感触がムカミの全身を駆け抜けた。夢を見ていたのだろうか。周囲を見渡したが、ムグモの木が見えるだけだった。再び、眠りに落ち、やがて昇る朝日とともに目が覚めた。陽の光を受けて、ムカミはぞくぞくするような感触を覚えた。血管が脈打ち、温もりが全身に満ちた。彼女は自分の妊娠を確信した。物言わぬムグモの、神秘的な、巨大な姿を見ながら、彼女は村へ帰ろうと決意した。

冒頭第 2 パラグラフの最初に、次の文章がある。ムカミが踏み入った死者の森のことである。

All was quite and a sort of magic pervaded the air.¹⁰⁾

「あたりは静まり返り、魔術的な雰囲気が大気に充満していた」

畏れと恐怖と、ある種の神秘的な美を感じさせる表現である。ムカミは、死ぬ意志を固めたからでなく、むしろ先祖の霊に最後の助けを求めて、この聖地へ出向いたのだった。そして、イチジクの木の下で眠っている間に、現実と夢が霊的に紡ぎ合わされたのである。

「イチジクの木」の象徴は大切である。ギクユの神話によれば、イチジクは「原始の生命力」「多産、子宮」「生命の持続」のシンボルである。イチジクの根元で眠るとは、自然の創造力と霊的に交わることを意味しているのだ。

これはギクユの神話に現れる原初の男女ギクユとムンビ、聖書のアダムとイブに対応するメタファーでもある。生命の力は、統一と寛容と協力から生まれ

る。これらが人間関係で失われると、ムカミの動揺に見られるように、社会的・道徳的な混沌が生まれる。この短篇は、民族の神話に寄り添いながら、現在を照射して、基本的な人間的価値への回帰の必要を説いているようである。不妊に悩み、一度は自殺を考えた主人公ムカミは、オカルト的とも言えるこの作品の最後で、儀礼的、宇宙論的変身を経験している。

これが「比較的クリエイティブな3年間の始まり」¹¹⁾だった。以後、矢継ぎ早に、「帰還」(The Return)、「日照り」(The Drought) (後に、「日照りとともに去りぬ」Gone with the Drought と改題)、「村の牧師」(The Village Priest)、「殉教者」(The Martyr)、「闇夜の逢引き」(A Meeting in the Dark)、「そして、雨が降ってきた」(And the Rain Came Down!)を書いた。くわえて、「黒い鳥」(The Black Bird)、「ベンツ族の男」(The Mubenzi Tribesman)の初稿を書き、二つの小説と一つの戯曲を書くことになった。

② 幻の短篇「風」(The Wind!)¹²⁾

「イチジクの木」の後、『ペンポイント』第10号(1961年3月)に短篇「風」(The Wind!)を発表した。同作品は、ナイロビで出ていたヨーロッパ人向けの雑誌『ケニア・ウィークリー・ニュース』(Kenya Weekly News, 1961年3月)にも掲載された。以下に内容を紹介しておこう。

書き出しは以下の通りである。

「カランジャは戸口の外に立って、中庭の先に広がる畑を、さらに谷の向こうに見える村へ視線を送った。川へ下りて行く女たちが見えた。牛と山羊の大きな群れの後方で背をぴんと張っている少年たちは、草場に家畜を連れて行くところだった。向かいに見える村よりもっと先には、友人のジョローゲの小屋があり、煙が空に向かって巻き上がっているのが見えた」。¹³⁾

カランジャは主人公である。彼は思案に暮れている。村へ白人宣教師がやってきて以来、部族の秩序と落ち着きがすっかり破壊されてしまった。白人は、ギクユの神、部族の始祖であるギクユとムンビが崇めた神ムルングに背くような新しい宗教を持ち込んできたのだった。古い秩序を転倒させ、娘は割礼してはならないと説き、部族の神の怒りを煽った。白人宣教師とは、予言者チェゲ・ワ・キビロ¹⁴⁾が語ったとおり、蝶の羽に似た衣服をまとった連中のことだ。

カランジャは、これまでの純粋な部族の慣行、儀礼、生活のことを考えた。未曾有の

飢饉と疫病の後に、白人の宗教と政府がやって来たのだ。この試練の時にこそ「我々は、行動を起こさねばならない。白人を追い出そう。白人を殺すのだ」。カランジャは、自分が部族の救世主になろうと決意した。

小屋に入ると、カランジャは他の戦士や長老に向かって、「新しい宗教に従う者に死を」と叫んだ。誰もが同意した。部族の神の神聖さを犯した村人を血祭りにあげ、シリアナの伝道団を襲撃する必要があった。

だが、こともあろうに、最初の犠牲になるのは、幼い頃からの友人ジョローグだった。カランジャのほかに、三人の戦士がジョローグ殺害の使命を担うことになった。友を救うか、部族の使命に忠実に行動するか。カランジャは悩み抜いた。しかし、決意は揺るがなかった。「彼を殺さなくてはならない」。

カランジャはジャヒイニ村に、ジョローグは向かいのムコロイニ村に住んでいた。ある夜、谷間の川伝いに通り道を挟んで、四人でジョローグを待ち伏せた。カランジャが攻撃の合図を出すことになっていた。まもなく、うたいながら、人影が近づいてきた。

Lead kindly light, amid the encircling gloom
Lead thou me on . . .

(第1小節参考)

Lead, kindly light, amidst th'encircling gloom,
Lead Thou me on !
The night is dark, and I am far from home,
Lead Thou me on !
Keep Thou my feet ; I do not ask to see
The distant scene ; one step enough for me. ¹⁵⁾

たえなるみちしるべの ひかりよ、
家路もさだかならぬ やみ夜に、
さびしくさすらう身を
みちびきゆかせたまえ。
ゆくすえとおく見るを ねがわじ、
主よ、わがよわき足を、まもりて
ひとあし、またひとあし

みちをばしめしたまえ。

(讃美歌 288 番)

うたっているのはジョローゲに間違いなかった。その歌声に、カランジャの恐ろしい決意が揺らいだ。全身が震えた。ジョローゲを殺してはならない。彼は立ち上がって、ジョローゲに警告しようとした。だが、一瞬遅かった。ジョローゲは血にまみれてその場に倒れ、呻き声を上げた。

「風が知らせる」(The Wind will Tell) がジョローゲの死ぬ前の言葉だった。この言葉が、カランジャを呪縛した。道を挟んで向こう側で待ち伏せた二人の戦士が、カランジャの指示を待たずに行動した結果だった。ジョローゲの遺体は、川のそばの茂みに埋められた。帰る途中、カランジャは、風が吹く度に、「たえなるみちしるべの ひかりよ・・・風が・・・知らせる」とうたう声を聞いた。

小屋へ戻ったが、眠れなかった。殺害を仕組んだのは、カランジャ自身だった。突然、彼は、部族の破滅の思いにとらわれた。ギクユの予言者は「罪のない者の血を流すな。ムルングの怒りは、悪事を行う者にこそある。風には耳と目がある」と教えていたのではなかったか。そう、自分こそが悪事を働いたのだ。手を下しはしなかったが、部族を貶めたのは自分だ。部族の呪いを受けるのではないか。逃げ出そう、部族から逃げ出そう。

またもや、風が吹いた。やがて、激しい滝のような音を立てて吹き荒れ、屋根の草葺きが飛んだ。あらゆる音を圧して風が吹いたが、優しい歌声が響いた。ジョローゲの声に、千の人々の声が合わさって「たえなるみちしるべの ひかりよ・・・」とうたっていた。

カランジャは小屋を飛び出た。声が彼を追っかけた。早く走れば、風がいつそう吹いて、声が迫ってきた。やがてその声の一つの言葉「ひかり」に合わさった。その時、カランジャはギクユとムンビの神もまた「ひかり」の神であることに気付いた。ギクユの伝統儀礼は「純粹、光、平和」の象徴だった。カランジャは斜面を下り、谷へ出た。そこは、ジョローゲの遺体を埋めた場所だった。

ジョローゲの遺体を担いで、カランジャは川伝いに走った。川岸でしばらく休憩したが、遺体を降ろすことはなかった。まずシリアナの伝道団へ、ついで政府の警備所へ行くつもりだった。そこに座っている間も、「ひかり」の一語が鳴り響いた。カランジャは思わずうたい始めた「たえなるみちしるべの ひかりよ、家路もさだかならぬ やみ夜

に・・・」

その時、突然声がした。「誰だ」。カランジャは、声の主を確かめもせずに、遺体を担いだまま、闇に向かって走り出した。その後、水の跳ねる重い音がした。

その音を聞きつけたのは、ジェラルド神父だった。神父は何も出来ないことを知っていた。誰かが滝つぼに落ちたことは確かだった。その日、神父はジョローゲの村で病人を診てきたばかりだった。彼は、朝になれば、誰が落ちたのか確かめに行こうと決めた。

この短篇の重要なモチーフは、後の小説『川を隔てて』に取り入れられている。キリスト教の浸透が伝統社会に引き起こした亀裂である。主人公は、この混乱を正すべく、部族全体の救世主になることを決意するが、狭小な世界観から脱することが出来ず、親友の命はもちろん、自分の命まで失ってしまう。時代の移り行きに身を任さざるを得ないギクユの伝統主義者の挫折を描いている。

Ⅲ. 唯一の短篇集『秘めやかな生活』(*Secret Lives*, 1975)

初期の短篇は、70年代に書かれたものと合わせて『秘めやかな生活』に収録されることになった。これは、これまでに発表された唯一の短篇集で、ハイネマン教育図書出版社の「アフリカ人作家シリーズ」(No.150)の一書として刊行された。

短篇の多くは、『ペンポイント』、『ケニア・ウィークリー・ニュース』、『トランジション』(*Transition*)、『ニュー・アフリカン』(*The New African*)、『ズカ』(*Zuka*)、『ガラ』(*Ghala*)、『ジョー』(*Joe*)のほか、いくつかのロシアとドイツの雑誌に出た。後日、その他のアンソロジーに収録されたものも多い。「そして、雨が降ってきた」、「瞬時の栄光」、「十字架の前の結婚式」、「メルセデスの葬儀」、「黒い鳥」は、単行本としては本短篇集に初めて収録された。「ベンツ族の男」(*The Mubenzi Tribesman*)、「グッドバイ・アフリカ」(*Goodbye Africa*)は本短篇集で初めて発表された。なお、先に紹介した「風」は、単行本の形では、なぜか何処にも収録されていない。

これらの短篇は、今日に至るまでの関心の変化、文体的な実験、総じて文学的変遷を知るうえで有力な証拠となる。その多くが、小説形式でより精巧に発展させることになるテーマを先取りしていることも注目される。

短篇集の「はしがき」に、次のように書かれている。

「本短篇集は、この 12 年間の、創作に関する私の自伝 (creative autobiography) だと言える。この期間の、私の思考と情緒を表している。書くことは、自分自身、社会と歴史の中に置かれた私の位置を理解する試みだった。書きながら、父の小屋の中での争いの夜の事、我々の食べる物、着る物、多少の教育をつけるべく、土を耕す母親の苦闘、植民地の警官の発砲を逃れて森にこもった兄ムアングの事、是が非でも勉強し続けるようにと説く森の兄からの手紙、実弾を受けて捕まりながらも、死刑執行の縄を逃れた従兄ギチニの事、マウマウの誓約をたてたために殺された叔父や村人たちの事、英国の帝国主義と無差別テロに対抗して起ち上がったごく普通のケニア人男女の美しいまでの勇気を思い出す。白人のために銃を運び、白人の血のメッセンジャーとなった親戚や村人のことも思い出す。恐怖と裏切り、そしてラケル（注、聖書ヨブ記。ヨブの妻）の涙、闘いの渦中で知った絶望と愛の絆のことを思い出し、これらすべての意味を、私はペンを通じて見出そうと努めた」¹⁶⁾。

各短篇のテーマ、その収録順は、小説家としての成長の跡を反映しているようだ。テーマは、古い時代から現代に近づく。ギクユの伝統文化の性格、道徳的価値、学校や教会でのキリスト教の教えが及ぼす生活への影響、独立闘争の渦中の出来事、新生ケニアでの資本主義、階級意識の発達、社会問題を描くものなどである。この 50 年間の道徳的・倫理的・宗教的意味と変遷、不安定期の社会に結ばれる人間関係を、小説作品（『川を隔てて』『泣くな、わが子よ』『一粒の麦』『血の花弁』）とも共通したヒューマニズムの視点から捉えた短篇が多い。最も広義な意味では、この期間の「政治的・社会的アフリカ」がこれらの作品の背景にあり、それぞれの登場人物に起きることは、ケニア、ひいてはアフリカで起きた実際の出来事のメタファーであるとも言えよう。

これらの短篇が、『血の花弁』（1977）を含めて、英語小説 4 部作の執筆の過程、もしくはそれらの執筆につながる過程の副産物であったことは随所に観察される。テーマと人物形象の点で、小説とのオーバーラップが随所に見られる。じっさい、それぞれの短篇の登場人物は、小説に登場するどれかの人物の局面をふくらませたもののようでもある。

この点について、グギは次のように述べている。「ある時期に何か書いていると、その時の気分や関心から離れられないものだ。同じ時期に、短篇や戯曲や小説を書いていると、どれもが同じようなことに関わってしまうものだ。ある時期の戯曲や短篇のテーマが小説にも表れるのはそのためだ。考えた結果そう

なるというよりは、たまたまそうなっているのだ」¹⁷⁾。

さらに続けて、以下のように述べている。

「とはいえ、短篇は、それ自体独自の独特な形式である。私は、自分でも短篇が得意だとは思わない。しかし、短篇は実験でもないし、後で役立てようとするような何かをスケッチしたものでもない。私にとって、短篇を書く時は、出来るだけ良い短篇になるよう願っているのだ。その後で、小説や戯曲で同じテーマに戻ることもあるかもしれない。その特定のテーマを使い尽くしていない場合には、そういうことがあるだろう」¹⁸⁾。

以下では、13 の短篇を、主としては執筆・着想の時期、副次的にはテーマの性格から、便宜上、初期 5 篇、中期 4 篇、後期 4 篇に分けて検討してみよう。また、マケレレ大学時代からリーズ大学時代に英語で書かれた 4 つの戯曲を、初期と中期に分類して、あわせて検討しておこう（ナイロビ大学勤務時代に英語で書かれた『デダン・キマジの裁判』は、後期戯曲として扱う）。

IV. 初期の短篇と戯曲：伝統と近代の間で

① その他、四つの初期短篇

初期の短篇は、いずれもマケレレ大学時代の執筆で、すでに紹介した「イチジクの木」（「ムグモ」）を含めて、「そして、雨が降ってきた」、「日照りとともに去りぬ」の 3 篇は、短篇集第 1 部「母と子供」（Of Mothers and Children）に収録されている。これらは、伝統的・前植民地期の生活と社会を描き、日照り、飢餓などを扱い、神秘的ないし神話的色彩が濃厚である。3 篇とも、母と子の関係を扱っており、「そして、雨が降ってきた」は「ムグモ」と同様、不妊に悩む女を扱っている。

「村の牧師」「黒い鳥」の 2 篇は、短篇集では第 2 部「戦士と殉教者」（Fighters and Martyrs）に収録されているが、テーマの性格に加え、マケレレ大学時代の執筆であることから、ここでは初期短篇として扱うことにした。これら 2 篇は、キリスト教とギクユの伝統宗教の衝突を扱っている。

a. 「そして、雨が降ってきた」（And the Rain Came Down !）¹⁹⁾

主人公ニョカビが重い薪を背に担いで、小屋へ戻ってくる。ロバさながら、汗だくで働くだけの毎日である。救いはない。自分の人生は何だったのか。精神も肉体も疲れ果ててしまった。髪に白いものが混じるというのに、子供に恵まれない。「不妊」（ザータ、thata）である。割礼を受けた時から、夢は結婚して子沢山になることだったが、神は聞

き入れてくれなかった。自然に芽生える嫉妬心から、村の女とも付き合わず、他人の子供を抱き上げることもしない。今では、昔からの女友達ジェリも敵になってしまった。ジェリが子を産んでも、見舞いにも行かなくなった。

満ち足りぬ思いが胸につかえた。ある日、彼女は小屋を抜け出て、何かに取り憑かれたように村から逃げ出した。山の背に上ると、畑がふもとの谷まで広がっているのが見える。一日の労働を終えた女たちが、荷物を担いで谷から上がってくる。ジェリの姿も見える。ニョカビは彼女たちを避けて、谷へ下りて行く。ほとんど狂気である。あたりは荒廃としていく。

行く先の当てはない。まもなく、入ったこともない暗闇の森へ踏み込む。恐怖がつのるが、急き立てられたように奥へ奥へと進んで行く。大きな岩があり、ようやく落ちて置いて腰を掛ける。その時、声が響いてくる。「女よ、ここにおれば、死んでしまうぞ。孤独な女に亡霊の死が付きまとうぞ」。

死にたいという気は遠のいていた。冷たい風が吹き始め、雲が集まり始めた。稲妻が光り、雷鳴が轟いた。大地が裂けんばかりの豪雨がやってきた。「降れ、雨よ、降れ。私を洗うがよい、冷たい雨よ、私を打て」。雨は、ますます怒り狂ったように降った。

雨から逃れようと、彼女は山の背に向かって登り出した。その時、すぐ近くの麓の方から赤ん坊の泣き声が聞こえた。「知ったことか。よその子を助けるなんて」。ニョカビは、そのまま登り続けようとした。だが、赤ん坊の泣く声が耳元から離れない。後戻りして、下りて行くと、2~3歳の男の子が茂みに見つかった。その子を抱き上げて、ニョカビは再び登り始めた。赤ん坊の体温がニョカビの体温と混じり合い、温みを感じた。新たな活力を得て、彼女は必死で山肌を登った。死んでもいい、赤ん坊を助けよう。赤ん坊は彼女にしがみついていた。

小屋に辿り着いて、ニョカビは赤ん坊を指さすと、そのまま疲労から眠り込んでしまった。夫が赤ん坊をよく見ると、行方がわからなくなっていたジェリの一番下の息子に違いなかった。その日、ジェリは気が狂ったように、赤ん坊を探し回っていたのだった。夫は、いなくなった赤ん坊を見つけて、連れ戻してくれたニョカビを誇らしく思った。

初め『ケニア・ウィークリー・ニュース』（1962年10月）に発表。女たちの日常が克明に描かれている。「ロバさながらに働き続ける」という。しかも、主

人公ニョカビは「不妊」に悩んでいる。「ムグモ」ほどのオカルト的、神秘的要素はない。しかし、ここにも神の仲介が働いている。ニョカビが村から逃げ出し、森へ踏み込むと、嵐が起き、豪雨となる。帰ろうとすると、どこからか赤ん坊の泣き声が聞こえる。無視したい気持ちに襲われるが、雨が激しく彼女をたたく。その結果は奇跡的である。ニョカビは、「雨」に破壊を期待したが、実際には、雨は「新生」をシンボライズしたのだ。「新生」とは、赤ん坊の生還であり、ニョカビ自身の救世主的役割である。彼女は、自己犠牲の勇気によって、村へ戻り、再び生きていく自信と誇りを取り戻すのである。

b. 「日照りとともに去りぬ」(Gone with the Drought) ²⁰⁾

私もまた、あの老女は気が狂っていると信じるほかなかった。じっさい、母を含めて、村の誰もがそう言っていた。何か奇行をしでかすのではない。口数は少なかったが、理由もないのに、笑いの発作に襲われることがあった。人を見つめる眼は、相手の背後に何かを見つけているように、凝視していた。その時、眼は神秘的に輝いて、生気に溢れ、すべてを見抜いているようで、痩せた皺くちやの身体と似つかわしくなかった。彼女が、気が狂っているなどとは思えなかった。

老女のことを父に話したことがあった。「悲しみのせいだろう。焼き尽くすような炎熱、無慈悲な日照りは、誰かれなく、真っ白に、気を狂わせてしまうものだ」と父は語った。その意味はわからなかったが、「真っ白」というのはその通りだ、と私は思った。全土が「真っ白」になり、真っ白は死を意味した。どこもかもが乾ききっていた。ムグモの木までが緑を失った。誰もが雲の動きを気にし、雨を待った。

空腹にひしがれない者はいなかったが、私の家は恵まれていた。兄弟の一人がナイロビで、もう一人がリムルで働いていたからである。

父の言葉が気になった。ある月末、母が買ってきたヤムイモとジャヒ豆 ²¹⁾ を少しばかり携えて、私は老女の小屋を訪ねた。彼女は、暗い隅っこにうずくまっていた。燃えさが少しばかり。怖くなって、私は逃げ出そうと思ったほどだった。「お婆さん」と声をかけたが、本当はそんなに老いぼれていないことがわかった。ヤムイモを渡すと、彼女の眼が輝いた。そして、うつむいて、声を出して泣いた。「息子が帰って来たのかと思ったよ」と言う。「ああ、日照りのせいで、頭がおかしくなってしまったよ」とも言った。耐えきれなくなつて、私は逃げ出した。おそらく、老女は気が狂っているのだろう。父はこのことを知っていただろうか。

1週間後。老女は、自分の息子のことを、暗闇の小屋で話し始めた。支離滅裂なところがあったが、日照りととの一生の闘いの話だった。その話では、最初の雨粒が降り出す前

日のことだった。老女は、暖炉のそばの狭いベッドで苦しんでいる息子を看病していたと言う。火が消えかかると、息子の黒い顔が、真っ白に見えた。幽霊のような影が、壁の上で騒いだ。息子が尋ねつづけた「ぼくは死んでしまうの?」。老女は、ただ祈るしかなかった。「ぼくは死にたくない」。老女はどうすることも出来なかった。「母さん、食べる物が欲しい」。何もなかった。近所に物乞いすることも、もはや出来なかった。近所にも食べ物はなかったはずだ。息子は母を恨んだことだろう。亭主のいない女に何が出来ただろうか。老女の亭主は、非常事態時に死んでいた。あまりに突然な死であったので、毒殺されたとの風評が立った。

老女によれば、1940年代のある夜、二人の息子が相次いで空腹のために死んだと言う。それは「キャッサバの飢饉」²²⁾と呼ばれた年のことで、老女の亭主はまだ生きていた。今、1961年、彼女は独りだった。家系が呪われているのだろうか。老女はそう思っていた。老女の母親は、飢饉の時に伝道団の助けがあって生き残り、彼女を産み落としたという。それは白人がケニアへやって来る直前の頃の話で、その時は「ヨーロッパから来た飢饉」(Ruraya Famine)²³⁾と呼ばれ、ギクユの土地を襲った最も深刻な飢饉だった。老女の祖父母はこの時に死んだ。日照りの怖さが、息子の顔を見ていると改めて彼女を襲った。

老女は小屋を出て、村の首長を訪ねた。だが、首長も手の施しようはなく、しかも老女の言うことがよく理解できなかった。首長は、彼女の息子に持病があると考えていた。たしかに、息子には持病があったが、病院へ行くほどのことはなかった。この時、老女は空腹が息子を苦しめているものと考えていた。首長の話では、地区役所で、飢饉救済計画があり、食料を配っていたというが、老女はその話を知らなかった。翌日、役所の長い行列に老女は並んだ。彼女は食料を貰って小屋へ戻ったが、息子はすでに死んでいた。

この話をしながら、老女は私の顔を一度も見なかった。そして、顔を上げて、「私は齢を取っちゃった。息子の上に陽が沈んだよ。日照りが連れて行ってしまった。神さまがそうされた」と語った。その話ぶりからは、彼女の気が狂っているとは思えなかった。

老女と最後に話したのは2~3週間前だった。1週間くらい雨が降り続けて、女たちは植えつけに忙しかった。昨日からはどしゃ降りになった。何年かぶりの大雨だった。私はサツマイモを土産に、老女の小屋を訪ねた。彼女は何時もの隅っこにうずくまっていたが、火は消えていた。彼女の顔は白く、眼の輝きだけが1,000倍にもなっていた。悲しみの表情はなく、悦び、いや狂喜とも言えるものがあつた。長く失っていたものをやっと見つけたかのような喜悦の表情があつた。老女は笑おうとしたが、その笑いには、こ

の世のものでない感じ、悪魔のような醜悪さがあった。「皆の姿が見えるね。皆が戸口で私を待っている。さあ、私も行くよ」。その時、ランタンの火が消えた。火が消える直前、私は老婆に渡した土産物が、手も付けられずに、隅っこに置かれてあるのを見た。

雨は止んでいた。私は家へ帰った。日照りは終わったが、私は「狂った」老女のことを考えていた。「手も付けられていない食料」のことを考えた。彼女も、日照りと空腹とともに逝ってしまったのだろうか。その時、私の兄弟の一人が、老女の狂気について、面白おかしく話題にした。私は睨みつけながら、「そう、本当に狂っている」と大声で叫んだ。皆が驚いて私を見つめた。父だけは、私から眼を逸らしていた。

『ケニア・ウィークリー・ニュース』(1961年6月)に発表。『ペンポイント』第12号(1962年3月)にも掲載された。日照りと雨の対比が鮮やかである。生存のためのたたかいが厳しい。老女は「死」の中に、新しい生を求めているかのようだ。「白」は「悲惨」「悪」と結びつく。光と闇のシンボリズムが働いている。老女の眼は狂気ではなく、むしろ神秘的で、何もかも知り抜いている感じである。老女の息子たちは、誰もが日照りの中で、空腹にひしがれて死んだ。救いがない。老女の眼には「長く失っていたものをやっと見つけたような喜び、狂喜が漂っていた」とある。老女は息子たちのために食べ物を捧げ続けた。老女は死んだ息子たちの元へ無事に旅立っただろうか。気が狂っていると思われる老女に寄せる語り手の心に、憐れみ、同情、そして愛がある。

c. 「村の牧師」(The Village Priest)²⁴⁾

主人公はジョシュア。村で唯一の黒人牧師である。トタン屋根の長方形の家に住んでいるが、他の村人は、誰もが泥壁、草葺きの丸い小屋に住んでいる。どこからも、夕食を準備する煙が上がっている。何ヶ月も日照りが続き、作物は枯れ始めた。牛や山羊も乳を出さず、多くの村人が空腹でいる。ジョシュアは、空を眺め、家々を回り、雨が近いと説いてきた。今日も、雲の様子を確かめて、彼は家に入った。まもなく雨が降り始めた。稲妻と雷鳴を伴って、どしゃ降りになった。ジョシュアは苦い思いをかみしめた。「奴が勝った」。ジョシュアではなく、村の雨乞い師が勝利したのだった。

舞台はマクユ村。孤立した小さな村で、いちばん近い伝道団の基地からでも、55マイルも隔たっていた。白人の宣教師、農夫、行政官にとってのフロンティアだった。他の村々の雨乞い師、魔法医、呪術師などは、すでにキリスト教の挑戦を受けていたが、マクユでは、まだ雨乞い師の力が強かった。

ところが、何年か前、ザバイニ伝道基地のリビングストーン牧師がこの地へやってきて、まずジョシュアの改宗に成功した。白人の宗教は、力強く、すべてをお見通し、その神は万物の創造主だとされた。雨乞い師は、ジョシュアの手で改宗者が出る度に非難を繰り返した。しかし、ジョシュアはひるまなかった。彼には、リビングストーンという強い味方がいた。

そこへ日照りが続いた。ジョシュアは、雨は必ず降ると説いて回ったが、雨は降らなかった。雨乞い師は、神の怒りだと説いた。今朝、雨乞い師は、聖なるムグモの古木の下で、黒い子羊を犠牲に供したばかりだった。はたして、雨が降った。ジョシュアは、今日ばかりは雨が降らないようにと祈り続けていた。

ジョシュアは狼狽した。訳がわからなかった。キリストの神はどうなっているのか。ああ、牧師さまがここにいてくださったなら。マクユの村の信仰の権威者になれたものを。新しい神は白人だけの神なのか、白人の言うことしかお聞きにならないのか。マサイにはマサイの、ギクユにはギクユの神がおられる。リビングストーン牧師はギクユの神を恐れたのでないのか。自分はどうすればよいのか。ジョシュアは、聖木ムグモの元で、ギクユの神に祈るほかないと思った。

朝早く、ジョシュアは森へ出かけた。ムグモの巨木は、長老たちが、昔から神への犠牲を捧げる場所だった。だが、ジョシュアは犠牲に供する羊を連れていなかった。進んで行くと、目の前に雨乞い師が立ちはだかった。その顔には、悪意に満ちた笑いが浮かんでいた。

Whiteman's dog・・I knew you would come to me Joshua・・You have brought division into this land in your service to the white strangers.

「白人の犬め・・ジョシュア、お前がここへ来ることはわかっていたぞ・・白人に仕えて、お前はこの村に分裂を持ち込んだ」²⁵⁾。

ジョシュアは敗北感よりも、むしろ恥辱を感じた。空虚と自己嫌悪にうたれて、その場を去った。リビングストーン牧師はきっと自分を責めることだろう。

帰宅したジョシュアは、牧師の仕事を投げ捨て、逃げ出したい気持ちに駆られた。その時、妻が客人の来訪を告げた。雨乞い師だろうか、村のキリスト教信者だろうか。もし、リビングストーン牧師だったら、・・逃げ出そう。

客人は、リビングストン牧師だった。ジョシュアは牧師の顔をまともに見る事が出来なかった。「逃げ出せ」の声が心の中に響いた。しかし、逃げ出すことは出来ず、すべてを告白した。黙って聞いていた牧師は、穏やかな微笑を湛えて言った。「二人で祈ろう」。

初め『ケニア・ウィークリー・ニュース』（1961年4月）に発表。後に『ペンポイント』第13号（1962年10月）にも掲載された。ギクユの伝統宗教とキリスト教の価値の対立がテーマになっている。ジョシュアは熱心なキリスト教信者であるが、その信仰は単純で、底が浅い。自分が祈っても雨が降らず、雨乞い師がギクユの神に祈ると雨が降るのかとの疑問、「新しい神は白人のもの、白い肌の者にしか耳を貸さない」との考えは、素朴すぎる。しかし、この経験によって、ジョシュアは心理的屈辱感、恥辱、空虚感、絶望に苛まれる。「お前は白人に仕えて、この土地に分裂をもたらした。今、お前は、ギクユの同胞たちの力でのみ清められるだろう」との雨乞い師の警告を前に、白人の牧師に言われるまま、ただ祈るしかない。だが、彼は誰に向かって祈るのだろうか。

なお、これを掲載した直後に、『ケニア・ウィークリー・ニュース』（1961年8月4日号）が、将来有望な作家として、グギを次のように紹介している。

「彼の短篇は、アフリカ人と周りの環境の特徴をうまく描いている」。また同紙で、マケレレ大学の同僚が次のように述べている。「この若い作家は、村の日常生活を短篇で扱っている。日照りが原因となる諸問題、村の呪術医とアフリカ人牧師の対照、新旧の生活様式の間の緊張などである。彼の成功の秘密は、アフリカ的背景のあるなしにかかわらず、現実の扱い方にある」²⁶⁾。

d. 「黒い鳥」(The Black Bird) ²⁷⁾

恋人のワマイザを含めて、本当の彼を知るものは誰もいない。彼の人生は孤独だった。彼のことを、私はよく覚えている。背が高く強健、眼は大きくて黒く、きらりと輝いた。嘆願するような、力のない、つぶらな瞳が、同情を誘うかと思うと、人を怖がらせた。幻覚に襲われていたのか、あるいは夢から醒めたばかりのように、人を見つめることがあった。

私は、小学校の頃に初めて彼に会った。数マイル離れた村の出身だった。仇名で通っ

ていたが、本名はマンガラといった。ハンサムで、女の子にもてた。しかし、誰とも付き合いがなかった。だが、スポーツは万能で、フットボールでは並ぶ者がいなかった。スポーツが苦手な私は、彼に嫉妬を覚えた。憎んでいたかもしれない。彼の孤高さ、誇らしげな、何か人を侮るような風情が気に入らなかった。

ところが、彼は孤独だった。ある朝、早めに学校へ行った時、彼が近くの墓地にいた。物思いに沈んでいる様子で、私は話しかけるのを止めた。

学校の近くに、小さな森があった。幽霊が出るとのことで、誰も近づかなかった。昔、夫の暴力から逃げ出した女が、この森で死んだということだった。

なぜこの森へ私が入ったのだろうか。昼の食事時間で、誰もが家へ食べに帰り、私だけがここへ来たのだった。その時、マンガラがいた。私を見て驚いた様子で、「黒い鳥を探している」と言う。「この前、墓地で君を見たよ」と告げると、あの時も、「黒い鳥を探していた」との返事だった。これをきっかけに、二人は親しくなった。黒い鳥の話は忘れてしまった。成績のよい彼は、卒業後カレッジへ進学し、医学生になった。私は、地元で就職した。

彼は、いつも何かに取り憑かれているようだった。奇妙に、引き込もっているところがあった。恋人のワマイザと出会ったのはカレッジ時代のことで、彼女は教師をしていた。二人は結婚を約束しており、その頃、彼の孤独感は消えていた。

カレッジの最後の学期の直前、彼が私の家へやって来た。何かに取り憑かれた様子だった。幸福感は消えていた。別のある日、私の家へやって来たマンガラは、ますます引き込もっている様子だった。

彼が切り出した。「黒い鳥のことを覚えているよね」「ぼくはこれまでずっと、黒い鳥に取り憑かれてきた」。「君は、過去のことを考えたことがあるか」「過去が君を追いかけて、君を死へ追いやるのだ。復讐だよ」「ずっと昔、祖父や父親に起きたことが、君に何か影響すると言ったことを、君は信じるか」「君の父にかけられた呪いが、君にも受け継がれるということだ」。

私は尋ねた「先祖の罪が、三代、四代を隔てて、子孫に伝わるというのか」。「その通りだ」。私は答えた「ばかげた話だ」。彼は悲しげに言った。「そうかい、じゃあ、ワマイザがわかってくれなかったのも無理はない」。

彼の話は次のようなものだった。

ずっと昔、祖母の家からの帰り道、月がきれいな夜で、帰宅が遅くなった。母と二人の兄弟が起きており、誰もが楽しそうにしていた。父は珍しく、家にいなかった。食事を終えた頃、戸口を激しくたたく者がいた。幽霊のように、眼を血走らせ、髪を振り乱した父だった。父は倒れ込んで、死んだのかと思った。母が水をかけると、父が眼を開けた。震えながら、「黒い鳥」だと叫び、父は翌日まで眠りこけた。これが「黒い鳥」という言葉を聞いた最初だった。仕事で成功し、信心深かった父は、1ヶ月後に死んだ。

遺体を墓場まで運んだ二人の兄弟は、まもなく肺炎で死んだ。母と私だけが残った。家財を売り払って、二人はキアンプを去り、ガジギイニへ移った。この時、母が「黒い鳥」の話の一部始終を私に聞かせてくれた。

話は、ムランガの頃に遡る。その地が、彼の一家の始まりの土地であった。かなりの地所を持っていたらしい。彼の祖父は、同地で最初のキリスト教改宗者だった。改宗者は、誰もが伝統的なやり方、先祖の慣習は悪で、罪深いと信じるようになっていた。昔のやり方は、何もかもが迷信だ、悪魔の所業だと言われた。祖父たちは、こうした永遠の呪いから部族を救おうと決意した。昔の聖なる場所を踏みつぶし、土俗の神への供え物を放り捨てた。

村には、ムンドゥ・ムゴ²⁸⁾がいた。尊敬を集めた呪術師・魔法医だった。彼は魔術師(Arogi)や、その他の邪悪な人間とも闘ってきた。未来を予言できたともいう。彼の魔術は、よいことにのみ使われていた。彼の父はこの老人の元へ来て、老人の持ち物を壊し、焼却した。老人は復讐を誓って、ムランガの土地から姿を消した。

その老人が、何年か後、「黒い鳥」になって帰って来たというのだ。祖父が死に、次に子供たちと妻が死んだ。彼の父だけが生き残った。死んだ者は誰もが、死ぬ直前に、黒い鳥がやって来たとの言葉を残した。彼の父は、ムランガを去り、キアンプへ移った。黒い鳥が彼を追いかけてきた。

マンガラは話し続けた。「ガジギイニへ来てまもなく、母が死んだ。彼女も、死の直前に、黒い鳥を見たと言った。私の疑問は、父も母も、自分の罪でないのに、なぜ死ななければならなかったのかということだ。以来、私は黒い鳥を探している」。「ワマイザに会ってからは、黒い鳥のことを忘れていた。二人は結婚したいと思った。ぼくは成功すると思っていた。鳥のことは忘れていたし、勉強に精を出した」。

さらに、彼は話した。「ようやく今、ぼくは黒い鳥に出会った。先週のことだ。日曜日に、ワマイザと散歩に出た。初めて過去から逃れることが出来たようで幸せだった。暗くなって、二人は丘の上に座っていた。ワマイザがその場をちょっと離れた。ぼくは横になって、どことなく見つめていると、黒い鳥がにらみついていた。声も出さず、じっと見つめた。鳥は、まるで煤のように黒かった。暗闇の中でいっそう黒く見えたのだろう。しかし、眼は大きく、人間のようだった。赤く血走っていた。鳥はどこかへ飛んで行った」。マンガラは、この記憶を呼び起こして、身体を震わせた。私も震えた。医学生が、キリスト教徒の彼がこんなことを信じるなんて、と私は思った。

その夜、同じ部屋で寝ながら、彼が言った。「ぼくの祖父は、聖木の下で、穢れを浄めべきだった。母が死ぬ前に、そう言ったよ」。その晩、私はなかなか寝付けなかった。

マンガラは、最終学期でカレッジへ戻った。私は転勤があつて、タンガニーカへ出張した。それから 6 ヶ月後、短期間、帰省することがあった。リムルの商店街を歩いていると、ワマイザに出会った。彼女はすっかり変わっていた。痩せて、ひょろ高く、やつれていた。衣服は、何週間も洗っていないようであった。マンガラはどうしたのだろう。彼女の返事は「彼は死んだわ」。「試験に失敗した」「自殺したらしい」。ワマイザは泣き出した。彼が試験に落ちるなんてことがありうるだろうか。

1 週間後、私は、風邪を引いたようで、Dr K に診てもらいに行った。この医者、マンガラと同じカレッジの卒業生であった。彼の話では「皆が、彼は試験に失敗したために、自殺したと言っているが、私は信じていない。誰にもわからないが、最後の学期、彼は勉強を放棄したようだ。日に日に、痩せていった。夕方はカレッジの教会付近によくいたが、生気がなかった。試験期間中、眼が異常に輝いて、何か美しいもの、興奮させるものを見ているようだった。落第を知った時も、特にショックな様子ではなかった。すべてを見通しているかのようだった。彼が聖木の下で死んでいるのが見つかったのは、それから 1 週間後だった。異常に穏やかな眼だった。まるで、過酷な任務を遂行した後のようだった」という。

私は家へ帰って、すぐにベッドに着いた。明かりを消そうか、消すまいか、決めかねたまま、長い間、虚空を見つめていた。

マケレレ大学時代に構想し、スケッチした作品であるという。伝統と近代の確執をテーマにしている。近代医学と土着の呪術的心理学の相克であると言え

ば大袈裟であろうか。伝統的な呪術師の呪いと、近代医学の知識の間に架橋は存在しえないように思われる。医学生マンガラのことを「誰も本当には知らない」という。「黒い鳥」の射抜くような眼は、マンガラの眼と共通している。

「黒い鳥」は、マンガラの祖父の頃に生きていた村の呪術師の復讐の霊である。「黒い鳥」によってマンガラの家系に呪いがかけられた。「黒い鳥」はマンガラを、マンガラは「黒い鳥」を探してきたのだ。

「黒い鳥」を見つけないというマンガラの願望は、死ぬ意志であったのだろうか。同時に、その願望は、復讐の意志でもありえたことだろう。マンガラが学校時代の友人に過去を物語るが、その友人である「私」がこの短篇の語り手である。

マンガラの祖父は、妥協の余地のない厳格なクリスチャンで、呪術師の秘蔵の品を壊した。呪術師の行っていることは、キリスト教から見れば、悪の所業、永遠の呪いであったからである。しかし、祖父の厳格な信仰の殉教者となったのは、皮肉にも、自らの一族だった。

呪術師は「黒い鳥」に身を変えて、マンガラの祖父、父、母に復讐することになる。そして、マンガラ自身も自らの命運を見通していた。マンガラは、身を禊に託して、復讐の霊を鎮めようとしたのだ。彼は聖木ムグモの根元で死んでいるのが見つかった。「彼の眼は、奇妙に安らかな様子であった。困難な仕事を成就できたかのようにであった。それは、信仰復活派²⁹⁾の人々にあるような様子であった」という。

マンガラは生を求めながらも、祖父の罪に常に苛まれたのであろう。呪術師のもう一つの姿である「黒い鳥」は、ギクユの民族的生命の象徴である。マンガラが「黒い鳥」の力に運命をゆだねるのは、民族の価値と掟に従ったからであらう。オカルト的要素が見られるが、死者の霊が生者を罰したのであろう。

② 三つの初期戯曲

この間、演劇部の活動に参加し、戯曲を執筆した。その一つが、ウガンダの独立記念行事の一環としてカンパラの国立劇場で上演された「黒人の隠者」(3幕9場)である。1963年、マケレレ大学出版部から縮約版が刊行され、完全版が、1968年ハイネマン教育図書出版社から刊行された(「アフリカ人作家シリーズ」No. 51)。

この作品を含めて、現在までに、単独で書かれた英語劇は以下の 4 つである。

- a. 「反抗者たち」：はじめ、ノースコート学寮を代表して、学寮間対抗「英語コンペティション」への応募作品として 1961 年に書かれた。受賞は逸したが、翌年 4 月 6 日、ノースコート学寮の学生が演じて、ウガンダ放送の電波に乗った。45 分ものである。
- b. 「こころの傷」：はじめ「わが心の、この傷」と題されて、1962 年度の学寮間対抗「英語コンペティション」演劇部門で優秀賞を獲得した。しかし、ウガンダ演劇祭での上演は拒否されたという。白人が黒人女性をレイプし、子供を産ませたという部分が問題になったらしい。これも 45 分ものである。
- c. 「黒人の隠者」：1962 年 11 月 16 日から 18 日まで、カンパラの国立劇場で、マケレレ大学演劇部により上演された。上演時間は約 2 時間である。

これら、マケレレ時代の 3 作品を「初期戯曲」と呼んでおこう。なお、リーズ留学時代に第 4 作目を書いている（これは、中期戯曲として扱い、後述する）。

- d. 「明日の今頃」：1967 年 11 月、BBC のアフリカ向け番組で放送された（「反抗者たち」と「こころの傷」と合わせて、これが公刊されたのは 1970 年）。

a. 「反抗者たち」(The Rebels) ³⁰⁾

1 幕もの。舞台左右から、長老 (elder) と「よそ者」(Stranger) が登場して、二人の会話で始まる。これが劇全体の中程近くまで続き、その後の主題と状況を設定している。

「よそ者」はムランガの出身で、舞台になっている村へは 2 日前に来たばかりである。たがいのあいさつの後、「よそ者」が昨夜はフクロウが一晩中鳴いて、不吉な予感がしたという。長老は、無頓着で、この日、村の若者が帰郷し、首長の娘との結婚式があり、誰もが準備に追われていると教える。若者は、4 年前にマケレレ大学に進学し、今日帰ってくるらしい。そこで、村の娘をサプライズの贈り物として与え、この日に祝言をあげさせると言う。これが村の伝統的な慣習だった。長老たちは、白人の学問を身に着けた若者であっても、これだけは誰もが断ることの出来ない昔からの掟と考えていた。

これを聞いて、「よそ者」は不安を覚え、落ち着かない。彼は、世間を渡り歩き、見聞を広めてきた物知りである。当世の若者が、村へ帰っても、伝統的な慣習や価値観に背

いて、村の平和を乱す例を多く見てきた。彼らは、多くの場合に「反抗者」になると言うのである。当然、長老はこんな話にはのってこない。若者の父グルは、村で随一の金持ちであり、誰もが畏れ敬う絶対的なリーダーであった。

「よそ者」は、グルという父の名前を聞いて、それが自分と同世代の男で、呪われてムランガを追われたことを覚えていた。グル自身が、自分の父に背いて、穢れた娘「ザーフ」(thahu)³¹⁾と結婚し、父親の臨終の床にも寄り付かなかった男である。「よそ者」は、「このような男が父親であれば、息子の反抗は絶対に許されないし、どちらかが破滅してしまうものだ」と長老に語る。これを聞いて、長老は不安を覚えずにはおれない。

戸外でのこの話を聞きつけて、グルと他の長老たちが外へ出て来て、「よそ者」をなじる。グルは、自分の権威にかけて、今日の佳き日を取りしきろうとしている。しかし、妻になる娘は、結婚を望んでいないとの噂も交わされていた。その娘は、グルの家系が呪われていることを見抜いているとの噂もあった。「よそ者」は、こうした話を聞いて、「立派で権威ある家柄でも、過去の出来事に脅される」ものだと言う。しかも「呪いは、代々伝染する」ことを彼は知っていた。

誰もがビールを飲んで、意気盛んに息子の帰郷を待っている。そこへ、息子のチャールズが、メアリーを連れて現れる。メアリーは、ウガンダから連れて来た大学時代からのチャールズの恋人だった。黒人ではあるが、割礼はしていない。

父グルは、息子の妻として、村の生え抜きの娘が待っていると告げる。チャールズは当然、見たこともない娘、首長の娘であるとはいえ、学校教育を全く受けていない娘との結婚を断る。父グルは、親の面子にかけて、息子の選択を許さない。父親にとって「部族の慣習は、守らなければならない神聖な掟」だった。

「よそ者」がこの様子を見て、「ウガンダから来た娘も、白人でなく、同じ黒人ではないか。われわれ黒人は一つだ」と説得しようとする。「よそ者」は、ムランガでの昔の話を思い出させようとしたが、グルは聞く耳を持たない。グルは、「村の娘と結婚しないなら、末代まで呪いをかけるぞ」と息子を脅す。

そばにいたメアリーは、父グルの恐ろしい剣幕に驚いてしまう。チャールズは、父の言葉に逆らうことが困難で、父への感謝と義務を果たすのが自分の役目だとメアリーに説明する。メアリーがこれを聞き入れるはずがない。チャールズが「君も好きだし、村の同族をも大切にしたい」と弁明しても、メアリーは許さない。「アフリカに部族はない。黒人は一つだ」と説いてきたのはチャールズ自身だった。

耐えきれなくなった彼女は、婚約指輪を投げつけて、舞台から去る。父グルが現れて、息子の決意をたずねる。その返事を聞いて、皆が喜び、女たちはウルレーションを奏し、歌い、踊りに興じる。

そこへ伝令が登場して、村の娘ムンビの姿が見えないと知らせる。ムンビは、父グルが取り決めた意中の娘であったが、チャールズが恋人を連れて帰ってきたことを聞かされていたし、村を出て行った男よりも、村に残ったごく普通の男と結婚したいと思っていた。彼女もまた、長老の思い通りにふるまう娘ではなく、自分の意志を持った、もう一人の「反抗者」だった。彼女は逃げ出し、村の者が追っかけたが、川を渡っている時、にわかに流れが大蛇のようにうねり、盛り上がり、彼女を呑み込んでしまったと言う。

チャールズは、ムンビの死を知って、首長に向かって言った。「あなたの娘は、私以上に強く、勇気があった。私は彼女の相手ですらなかった」。こうして、チャールズは村に別れを告げた。

最後に「よそ者」が言った。「皆さん、驚いてはいけません。初めからわかっていたことです」。そして、グルに向かって言った。「あなたは自分の父親に反抗した。あなたがこの家に不浄を招き入れた。看病もせず、看取することもなかったあなたの父の死が呪いとなった。古い世代が過ぎて行き、新しい世代が登場してきた」。

これを聞いて、グルは、この「よそ者」がムランガでの出来事を知っていたことに初めて驚いた。「おお、あなたでしたか・・・ムランガの？ 呪いですよ。私に・・・私たちに、どうしろと言うんでしょうか」。

チャールズは、大学教育を受けた唯一の青年である。彼の帰郷に際し、村人は、妻を娶らせようと準備している。「よそ者」が、教育エリートは、村の慣習を乱す反抗者である場合が多いと警告している。近代化、もしくは西洋化と伝統文化の価値の相克がテーマである。「反抗者」とは、一つには、西洋教育を受けて、もはや伝統を受け入れられない教育エリートのことである。ここでは、強制的な結婚制度を受け入れない、父に代表される旧世代の価値観への反抗である。文化変容を経験したアフリカ人教育エリートによる伝統的価値との葛藤と言ふべきであろうか。若い世代の自由、自己決定への願望が描かれるが、メロドラマ風の混乱と狼狽がある。

チャールズだけが「反抗者」ではなかった。チャールズの父グルも自分の父親に反抗した人物だった。父は呪いを受け、自分の息子からの反抗を運命づけられた。チャールズの反抗もまた運命づけられていた。チャールズの西洋的教養は、伝統価値と相いれない。チャールズは強制結婚に反対していたが、父の呪いを恐れてこれに従った。結局、彼は「反抗者」ではなくなり、メシア的な役割も果たせなかった。彼が部族の価値から離れられないことを恋人メアリーは責める。チャールズがメアリーに誓っていた夢は「農民を解放すること、アフリカのプロメテウスを解放すること」だった。しかし、村へ帰り、父親の権威を前にした時、彼は「これが私の同胞だ。私は彼らのすべてである。同胞のために自己を捧げることは誇らしいことでないか」と言う。

チャールズはメアリーを追うこともなく、村の娘ムンビとの結婚を受け入れる。ところが、この時点で、ムンビは村から逃げ出している。彼女は水に吞まれて姿を消したという。自殺したのではないのか。チャールズが、彼女を死に追いやったのだろうか。ムンビは、何を語ることもなく、自分の選択も出来ないままに死んでしまった。彼女は犠牲者であり、もう一人の「反抗者」だった。

チャールズとメアリーの部族間の結婚は成立せず、チャールズとムンビの結婚も成立しないのは、何を意味するのか。他部族に対する疑惑、敵意は特に目立たないが、エスニックな純粋性を汚す行為として嫌われたのであろうか。それとも、父親の権威、面子の維持、部族の結束が第一だとされたのであろうか。

チャールズは「父たちよ、さようなら、誰もかれもさようなら」と村を去って行く。チャールズは、よその土地へ行ったのだろうか、それとも、死んだムンビの後を追ったのだろうか。

グルの呪われた家系が崩壊したと言うなら、チャールズの死もここに暗示されているのだろうか。そもそも、村の出来事の証人となった「よそ者」とは、誰なのであろうか。それは、ムランガで寂しく死んだグルの父親の化身ではなかっただろうか。

b. 「こころの傷」(The Wound in the Heart) ³²⁾

1 幕もの。ワンガリの小屋の前。二人の長老が話しながら登場。陽が昇り始め、二人は丸太に腰を下ろす。二人の話から、非常事態が終わり、拘留キャンプで辛酸をなめてきたワンガリの息子ルヒウが今日帰還することがわかる。学校を出たばかりのルヒウは、非常事態以前から、頼もしい若者で、信頼が厚く、村

のリーダーとなることが約束されていた。彼はマウマウの誓いを立てており、ある日、新婚の妻を残して拘引されていった。二人の長老は、その後に起きた顛末に「こころが痛む」と語り合っている。彼の拘留中に、何が起きたのだろうか。

小屋から 3 人の長老が現れて、先の二人に合流する。リーダー格の長老が「ルヒウは村の息子だ、村の指導者になる人物だ」と確かめるように断言していると、小屋からワンガリが出て来て、すぐにリーダーとともに再び小屋に入る。外に残った 4 人が話を続けている。彼らは、ルヒウが拘留キャンプで最後まで口を割らなかったこと、妻を愛した若者であったと褒め称えている。しかし、誰かが、昨夜は、雨は降らなかったが、雷鳴と稲妻が酷かったと言っている。不吉な予感が走る。

小屋からリーダーが現れて「傷は、思ったより深い」と皆に告げる。彼が仔細を話す前に、ワンガリが出て来て長老たちに懇願している。「あの娘を助けてやっておくれ。銃を突き付けられて、男（白人）に連れて行かれたのだから」。

そこへ息子ルヒウが、拘禁時に着ていた衣服のまま、帰還してくる。ルヒウは、5 年間の収容所生活の苦難、強制労働、虐殺事件などを振り返り、これからは自由と勝利に向かって進もうと語り、村の長老たちの意気を高揚させる。リーダーが「昔のことは忘れて、明日を見よう」と言葉を継ぐと、ルヒウは「昔を忘れる」ことは出来ない、母と話し、妻の顔を早く見たいと言う。誰もが沈黙してしまう。事態の奇妙な雰囲気にながら、もう一度ルヒウが妻に会いたいと告げると、ワンガリが「彼女は赤ん坊を産んじまった」と言う。信じられない思いで、ルヒウが妻の小屋に入ると、その日に生まれたばかりの赤ん坊がいた。白人の地区役人が生ませた子だった。

まさかの事態に、ルヒウは、帰還などせず、拘留キャンプで死んだ方がましだったと思うが、ひと目だけでも妻に会いたい気持ちがつる。ルヒウの記憶のなかの彼女は、気立てのよい、優しい女だった。だが、その妻はルヒウの帰還を知らされてから、姿を消していた。

一人の長老がやって来て、「彼女が死んだ」と知らせる。ルヒウは驚き、その場から立ち去る。長老は、不吉な予感からルヒウの後を追う。ワンガリは「もはや手の施しようはない」とその場に泣き崩れる。次に、長老たちが登場し、リーダーが「妻の遺体が見つかった木立で、ルヒウも折り重なって死んだ」と告げる。ワンガリが最後に言う。「私のことを憐れむでないよ。私も、こころの傷に耐えなければならない。さあ、赤ん坊のいるところまで連れて行っておくれ」。

非常事態が終わり、帰還する元拘留者ルヒウの物語である。ルヒウは白人に盗まれた土地を取り戻すべく、闘いを鼓舞した若者だった。自分が捕まることさえ予期していた人物だった。しかし、拷問にもめげず、節を曲げなかった勇気ある拘留者、したがって村のヒーローであった。ルヒウは村のリーダーになる運命を自認していた。長老たちもそれを期待していた。拘留経験が、彼を特別な位置に押し上げていたのである。ルヒウは拷問に耐え、闘いの勝利を確信して帰還した。拘留キャンプから戻ると、こともあろうに、闘いの相手としてきた白人の子を妻が産み落としていた。

ルヒウの帰還の日、出産したばかりの妻は姿を消し、自殺した。ルヒウは、この妻を本当にいたわる気持ちを持ち得たのだろうか。最後は、メロドラマ的結末を導いている。長老たちが、妻の遺体を木立で発見して、現場に立ち尽くしている。そこへ駆けつけたルヒウが、自制心を失い、妻の遺体の上に倒れ、自分も死ぬというのである。

作品をどう締めくくるべきであったろうか。なぜ、ルヒウは死ななければならなかったのか。結末は、非現実的で、未成熟な作品と言うべきであろう。初め『ペンポイント』第13号（1962年10月）に発表された。

c. 「黒人の隠者」(The Black Hermit) ³³⁾

「黒人の隠者」は、その長さ、発表の舞台、プロデュースにかけた努力と期待から見て、初期戯曲の中心に立つ。若い男女間の「愛」に、都市と農村の価値、独立直後の「ナショナリズム」という政治的テーマが絡んでいる。カンパラの国立劇場での初演後、『ケニア・ウィークリー・ニュース』（62年11月2日号）に短評が出た。

「J. T. グギは、マケレレの若い学部生で、短いが、誇り高い作家歴がある。戯曲作家としては、特に『反抗者たち』、『わが心の、この傷』の作者として、マケレレやカンパラの観客によく知られている。前者は、大学の英語コンペティションで今年度の最優秀賞を取った。後者は、ウガンダ演劇祭で公演の予定であったが、検閲で拒絶された。拒絶の場合、理由を著者に知らせるのが通例であるが、グギによれば理由は聞かされていないという」³⁴⁾。（拒絶の理由については先述した）。

先の二つの戯曲と同じく、「黒人の隠者」もまた、凡庸としか言えない作品であろう。とはいえ、東アフリカの小・中高等学校、大学、コミュニティで、地元を根を下ろした演劇活動が乏しい中、当時としては、存在意義があったであろう。1968年に刊行された『黒人の隠者』の「はしがき」で、著者自身が次のように述べている。

「東アフリカの演劇は、まだアマチュアの手にある。ヨーロッパ人のアマチュア演劇は、東アフリカの問題とのかかわりが薄いし、アフリカ人アマチュアの演劇は学校演劇の域を出ない。しかし、東アフリカでは、学校卒業資格試験とかかわっており、16世紀英国の衣装をまとうてシェークスピア劇を上演する学校がいくつかある。マケレレ大学学生演劇部は、こうした慣例と手を切り、ショインカ、ブレヒトを舞台に上げ、1966年には移動劇団がウガンダ、ケニアの各地をまわり、村のホールや教会、野外で上演した。1961年には、アライアンス高校時代にシェークスピア劇などに参加したピーター・キニャンジュイなどの尽力で、舞台を地元を設定して『マクベス』を舞台に上げた。1962年のウガンダの独立記念に、演劇部はオリジナルな劇を上演したいということで、『黒人の隠者』を舞台に上げた。この種の要請の『ひな形』として、この劇が誕生した」³⁵⁾。(要約)

初演は、台本作成の遅れから、独立後しばらく経った1962年11月で、カンパラの国立劇場で上演された。配役は、ウガンダ人、ケニア人、タンガニーカ人、マラウイ人、インド人、イギリス人の構成からなり、このあたりにも、人種協調の理想が込められている。

生まれ育った村を離れて都会へ出て、大学に学び、白人女性と付き合い、安逸と喧噪のなかでアイデンティティを見失った大学出の青年が主人公である。しかし、最後に「村人のために働かなければならない」と帰郷を決意させている。

独立当時は、誰もが新政府に大きな信頼を寄せ、新しい国づくりに期待を寄せた。作者によれば、「当時の最大の課題は、部族主義(トライバリズム)の克服」³⁶⁾だと考えられたと言う。排他的な部族的ショービニズム、人種主義、宗教上の派閥主義を、是が非でも克服する必要があったと言う。

主人公レミは、もと学生活動家で、現在は町の製油工場で働いている。村でただ一人大学教育を受け、卒業後は村の指導者となるはずの人物であったが、今では町の生活に浸っている。後でわかることだが、彼は部族の慣習に従って、

亡兄の妻ゾニ（かつては、自分が密かに愛した女性）と結婚しなければならない。これが、かたくなに帰郷を拒否している理由の一つである。

独立後の村の生活はどうか。税金が重くなり、日照りがつづき、飢饉が迫って、暮らしは楽でない。長老たち、そしてキリスト教牧師が、別々の意図から、同じ頃に、レミを連れ戻しに町へ出かける。ゾニは、亡き夫の弟レミが自分を妻に迎えてくれるかどうか不安に思っている。町へやって来た長老たち、次いで牧師と出会ったレミは、彼らが呪物崇拝の因習や部族主義の枷にはまっていることを知ると、やがて帰郷を決意する。

友人のオマンガを連れて帰郷したレミは、村を超えたもっと広い社会を見ようとし、長老たちを非難し、（国民統一の）全国レベルの政党（アフリカニスト党）に結集せよと演説する。「学校を建てよう。国家を建設しよう。そうすれば、部族も人種もなくなり、すべての人が解放されるだろう」と説く。しかし、同時に、ゾニに会う気はないと断言する。だが、自殺を遂げたゾニの遺書を読んで、彼女が心底から自分を愛してくれていたことを知る。

全体の展開を追ってみよう。

第1幕は「村」(The Country) が舞台である。

1 場：小屋の中。ゾニが、豆を選っている。義母ニョビ（レミの母親）がやってきて、泣いていた彼女を慰め、息子が村へ帰らず、手紙に返事もよこさず、村に残った者を顧みなくなったとこぼしている。ゾニは、慣習に従ってレミの妻となって、子供をもうけ、女らしい生活を送ることを願っている。義母は別の男と結婚するよう勧めるが、ゾニにその気はない。ニョビは、息子が信仰深いクリスチャンであったことを思い出すと、牧師に相談してみようと決意する。そこへ長老がやってきて、レミが部族でただ一人大学教育を受け、部族の指導者となるはずの人物であるのだから、町へ人を送って、呪物の力を借りてレミを連れ戻そうとの長老会議の意向を伝える。ニョビは彼らに期待するが、その後、キリスト教徒の自分が呪物の力に頼ったことに罪意識を感じ、牧師のもとへ知らせに出かける。

2 場：野外広場。長老たちは、レミが戻ってきて、村の指導者になるべきだと話している。彼らは、ウフル（Uhuru, 独立）以後も生活が楽にならず、税金が重くなったとこぼしている。しかも、日照りが続いて、飢饉が迫っている。アフリカニスト党は、何の役にも立たないと不満をぶち、今の苦しみから救ってくれるのはレミ以外にいないと話している。レミを村の、部族の代表として政界に送り出そうと言うのである。3人の長老が

町へ行くことになる。

3 場：同じ場所。牧師登場。牧師を追いかけて、ニョビが登場。彼女は、長老たちがレミを連れ戻すために町へ行くことを牧師に知らせる。ニョビは、レミが村へ戻り、ゾニと結婚することを望んでいるが、牧師は「肉体を通しての救い」はないと強調、政治にかぶれたレミをあきらめ、ゾニと二人で暮らすよう説き、「息子のためにひたすら祈る」ように母親を諭す。しかし、牧師自身も、独立以後の様々な問題を解決するには、村の教会の力になる若い血が必要であると考え、自分がレミを連れ戻しに行くことを約束する。

第 2 幕は「町」(The City) が舞台である。

1 場：街角の広場。

舞台片隅で、さまざまな人種の若者がギターを弾き、ダンスに興じている。突然、舞台が室内に転じ、ソファに転がっているレミが見える。白人の恋人ジェーンが登場。町の生活に疲れ、なんとなく疎外感に襲われたレミは、村に残してきた老母の話をジェーンに聞かせる。彼は「(外国系の) 製油会社で働くのが嫌になった」と打ち明けている。ふさいだ気分を晴らそうと、二人はナイトクラブへ出かける。

2 場：翌日。部屋でレミが新聞の日曜版を読んでいる。突然、ドアにノックの音。友人のオマンゲが登場。レミが読みかけの新聞を彼に渡す。二人の間で、独立以後も続く人種的緊張や部族主義、統一戦線としてのアフリカニスト党への期待や失望について熱っぽい議論が交わされる。レミは、自分が都会に残り、村へ帰らないのは、部族の利害だけを考えている村人によって選挙に担ぎ出されるのを避けるためもあったが、本当は、結婚問題が絡んでいると告白する。レミには、村に好きな女がいたが、愛を告白できないまま町の大学で学んでいる間に、実兄がその女と結婚してしまった。半年ほど経って、兄が交通事故で急死し、部族の慣習上、レミがその女を妻にしなければならないことを知らされる。その後、父がショックで亡くなるが、父の遺言もまた、レミが亡兄の妻を引き受けるというものだった。この話を聞いて、オマンゲは、故郷へ帰るよう勧めるが、レミは聞き入れない。

(長老たちが登場)。彼らは、レミが村へ帰らないことを咎め、村の代表が一人もない新政府への不満を訴え、部族を代表する政党を創りたいと言う。レミは村へ戻ることを断るが、長老たちは、帰郷を促す効能があるという呪物をバナナの葉にくるんで、戸口に落として帰る。

(牧師が登場)。牧師は、神と母親が必要としているから、村へ帰るようレミを説得す

る。「お前の学識は、お前だけのものではない。村人皆のものだ」。これを聞いて、レミは牧師の意向を聞き入れ、決意を固める。「ぼくは長い間、町で隠者の生活を送ってきた。ぼくは自分自身から逃避していた。さあ、村へ戻ろう。民衆のために働かなければならない。村の人々を伝統と因習から救い出そう。部族の枷からあの人たちを解き放とう」。

3 場：2~3 日後。同じ場所。ジェーンが村へ帰ろうとしているレミを咎める。レミは「ぼくの周りには、ぼくの部族の人たちがいる」と弁明するが、「部族って何なの」というジェーンの質問には答えられない。ジェーンは「私も一緒に連れて行ってほしい。あなたと同じで、私もこの国の市民なのよ」と訴える。彼女の父は、南アフリカからの移民であったが、彼女自身はリベラルな人種協調論者である。しかし、レミは「君は、ぼくたちとは違う。君は、本当のぼくを知らない。君にとって、部族主義とか、植民地主義とか、部族や入植民の非道なんてことは、抽象的なことだ。しかし、それは、ぼくの全存在だ」と強調する。「あなたは、愛してくれてはいないのね」とのジェーンのことばに、レミは「愛とは何なのか、ぼくにはわからない」と答え、ついに「ぼくは、結婚している」と告白する。ジェーンはレミを激しく罵倒する。

第 3 幕は「隠者の帰郷」(The Return of the Hermit) である。

1 場：小屋の中。ニョビとゾニが部屋を片付けている。ゾニは、レミとの新しい生活に、希望と喜び、同時に不安を覚えている。(牧師登場)。牧師はレミが村へ帰ってきても、政治活動から手を引かせ、「キリストの子として、長老たちの言うなりにさせてはならない」と語っている。

(隣人 1 登場)。群衆が集会広場でうたい、踊っていることを告げる。(隣人 2 登場)。レミが別の男(オマンガ)と一緒に帰って来たこと、二人が演壇に立って、長老たちを非難し、アフリカニスト党に結集するよう演説していると報告する。やがて、スワヒリ語で国歌をうたっている群衆の声が聞こえてくる。牧師も、ゾニも、ニョビも、うたう仲間へ入る。

(村の広場に転換)。レミが「もっと学校を建てよう。国家を建設しよう。そうすれば、部族も人種もなくなり、すべての人々が解放される」と演説している。盛大な拍手が起こり、やがて群衆が去って行く。この後、ニョビ、ゾニ、牧師、オマンガとレミが舞台に残る。レミは、国家建設の理想を説く演説を続け、ゾニと結婚させようとする母を咎める。母と牧師は、考え直すよう求めるが、レミは母や牧師や部族の言いなりにはならないと断言する。これを聞いて、ゾニがその場から離れるが、誰も気づかない。

2 場：同じ場所。走りながらゾニが登場。後から、村の女が登場。ゾニは、レミに望ま

れていない以上、村に残ることは出来ないと言う。村の女は、レミだけが男ではない、自分と一緒に暮らそうとなだめている。(ゾニが立ち去る)。

3 場：レミとオマンガが話しながら登場。二人は、断固として、部族主義を非難する言葉を交わしている。二人は、演説が成功したことに満足している。(自殺したゾニの遺書を持って女が登場)。それには「親愛なるレミ、私は生涯を通してあなたが好きだった」と書かれてあった。村の女が、政治にかこつけて、部族を侮辱したとレミをなじる。牧師は、レミの失敗は自己を過信して、神を信じなかったからだと咎める。レミは「自分が妻からの隠者でもあった」と悟り、後悔する。4 人の男がゾニの遺体を担架に乗せてやってくる。レミは遺体にひざまずいて「ぼくは部族の因習を打ち壊すために帰ってきたのに、君とぼくの間を切り裂いてしまった」と泣き崩れる。(幕)

レミは劇の初めから、「村」と「部族」の指導者になるものと予定されている。レミを都会から連れ戻さなければならない。長老たちは町へ代表を送る。村の牧師とクリスチャンであるレミの母も、レミを取り戻そうと懸命である。誰もが、レミにメシア的な期待をかけている。レミは、村にいた頃、ゾニに密かに恋心を寄せていたが、愛を告白する前に、彼女は兄と結婚してしまった。しかし、結婚の 6 ヶ月後、兄が不慮の交通事故で死ぬ。ここでレミは、部族の伝統に従って、兄嫁ゾニと結婚しなくてはならない。彼女が自分を愛せるはずがないと思い、レミは村を逃げ出した。

大学で学んだレミは、政治活動に入り、熱烈なナショナリストとなり、部族中心の村人のショービニズムを嫌っている。狭隘な部族の伝統と因習から村人を救うために帰郷したレミは、近い選挙で、部族主義を乗り越えて、アフリカニスト党に投票するよう村人に説く。

舞台はマルアという名の村である。「マルア」(Marua)とはギクユ語で「教育」の意で、ここでは西洋教育を指しているのであろう。この名が示唆するものと、村の実態は矛盾しているようである。村人の「エスノ・ナショナリズム」と主人公レミの「ナショナリズム」「パン・アフリカニズム」の間に葛藤がある。ナショナリズムとは「一つの民族として生きる欲求」のことであるだろう。これこそが国民形成の内実である。マルアの村人の考えはこれに逆行している。

レミの帰郷は、救世主の帰還のように描かれる。キリストの再臨にも似ているが、帰郷したレミは救世主とはなり得なかった。ゾニとの結婚を拒否し、村の指導者になることも拒否した。母親や牧師の言い分を認めず、その果てに、ゾニを自殺に追いやってしまった。レミは、自分に課されたメシア的役割の何

たるかを理解できていなかった。彼は自分流を主張し、理想論を説くだけである。

部族主義をどう克服し、ナショナリズムをどう育てるのか、この作品からは回答がない。教育の力で社会を改革できると信じたレミは、現実社会と対決するには力不足だった。部族主義の枷にはまっているキリスト教に対する批判には聞くべき点も多いが、ジェーンを捨て、今またゾニを失ったレミは何に救いを求めることが出来るだろうか。

「黒人の隠者」は、部族主義を批判しながら、若い教育エリートの傲慢、自己中心主義に警告を発しているようでもある。しかし、この戯曲が、この内容で、部族主義を十分に批判できているのかどうかといった疑問が残る。

その意味では、主人公レミよりも、むしろ友人のオマンゲの役割に注目してよいだろう。オマンゲもまた十分に形象されているとはいい難いが、彼は経済の自立を尊重し、外国からの援助に頼らない国家を夢見ており、早くも独立の意義に疑問を投げかけているように思われる。レミが独立政府に協力的であるのに対し、オマンゲは、労働者のストライキ権を否定する新政府を批判し、「黒人の政府が間違いを起こす」ことを忘れてはならないこと、「新政府は入植民の土地を国民に返還する必要」を説き、「民衆は、植民地体制の慣行を継続する新政府を倒す権利がある」³⁷⁾とまで言い切っている。

いずれにせよ、レミ、ジェーン、オマンゲ、牧師などの登場人物は硬直しており、長老たちは、戯画化され、神話化されている。これに対して、村の女たちの形象は幾分かの生彩がある。特に、母親ニョビと妻ゾニ、そして村の女は生き生きと描かれている。女性の形象に巧みな作者の片鱗が覗いている。

「都会」と「田舎」、「伝統」と「近代」という相対立する二つの価値観の間で揺れ動く一人の青年の苦悩をテーマにしながら、作者はこの作品で何を訴えようとしたのであろうか。エスニシティの必要を無視するようなナショナリズム、パン・アフリカニスト的抱負の非有効性を説いているようである。同時に、若い教育エリートの傲慢、自己中心主義を諷めているようでもある。部族主義と人種主義、そして植民地経験というアフリカの現実のなかでは、古い世代と新しい世代の間の亀裂を埋めることがどれほど困難であるか、新しい社会における全体性、ソリダリティを確立させたいと願う若い世代のアフリカ人の前には、どれほどの困難が横たわっているか、またどれほどの忍耐と努力が要求さ

れるかを教えているのであろう。

③ 初期戯曲の特徴

マケレレ時代に書かれた初期戯曲は、パン・アフリカニズム、メシアニズム、ナショナリズムのモチーフが濃厚である。後述する「明日の今頃」を含めて、50年代から60年代にかけて風靡したパン・アフリカニズムが背景にある。しかし、このパン・アフリカニズムは、作品の中では、ナショナリズム、部族的な抱負と繰り返し衝突し、実現不可能となっている。

村を舞台にしていることも、初期戯曲の主要な特徴である。都会へ出ず、村に残った人々は昔からの伝統を維持している。同時に初期戯曲は、作者が最も感受性が強くかつ柔軟で、高等教育の力が必ずや、意味ある社会変革につながると信じていた頃の作品でもある。

これを裏付けるかのように、初期戯曲の主人公は、誰もが自分のリーダーシップを使命として自覚した教育エリートである。「反抗者たち」「こころの傷」「黒人の隠者」のどれもに、変化の時代にコミュニティを救おうとするメシア的人物が主人公として登場している。彼らは、自分のコミュニティを十分に知っておらず、西洋的知識に染まり、自己の内部に伝統と西洋的なものとの間の抗争があり、自分がメシアになろうとするが、伝統と西洋の両者の仲介が出来ない人物である。彼らが抱くパン・アフリカ的な抱負は、むしろ姿勢にすぎず、彼らの多くはドラマの流れの中で自滅に至るのである。

彼らは、初めから疎外された、特異な人物でもある。「二つの世界」を知ること、文化変容を経験したアフリカ人教育エリートのアイデンティティの問題、あるいは、教育エリートに限定することなく、近代化の中でのアイデンティティの揺らぎの問題、これらが「反抗者たち」「こころの傷」「黒人の隠者」のテーマになっている。

伝統的価値のなかでの「自由とアイデンティティ」の追求が見られるが、「黒人の隠者」では、独立後もナショナリストのアイデンティティを創ることの難しさが劇化されている。伝統と長老支配からの自由を主張して、自己解放をはかろうとしているが、彼らが考える自由とは何なのか。近代化の蹉跎、自由と自己決定への願望の行きつくところに、メロドラマ的混乱と狼狽が見られる。

この意味で、初期戯曲には、小説に見られるようなインスピレーションの卓

拔さ、巧みな技巧が見い出せない。常にある種の緊張と重圧が見える。人物造型も未熟である。主要登場人物はステロタイプ化されている。台詞は予測可能である場合が多い。レミの突然の帰郷の決意に見られるように、アクションが唐突で、その結果はメロドラマの域を出ない。ゾニの自殺に見られるように、背景要因がしっかりと描かれておらず、読者は想像するしかない。全体として、なぜか社会的圧力についての分析が薄弱である。

その結果、作者の倫理的な正義感が前面に押し出されて、ぎこちない教訓劇となってしまうことが多い。初期戯曲には、作者のやや素朴な社会信条や世界観を容易に見て取れるが、どれもが劇的な構成と想像力、技術面で物足りない。

V. 初期小説『川を隔てて』：社会に走る亀裂 (*The River Between*) ³⁸⁾

マケレレ大学入学後まもなく、東アフリカ文学局 ³⁹⁾ 主催の懸賞小説コンクールへの応募を目的に、1961 年 3 月から書き始めたのが『黒人の救世主』(*Black Messiah*) で、締め切りは同年 12 月末だった。懸賞金の 50 ポンド (米価 70 ドル) が目当てだったという。その結果、英語部門の最優秀賞を獲得した。ちなみに、次点は、同じケニアの女性作家グレース・オゴト (Grace Ogot, 1930~) の『約束の土地』(*The Promised Land*, 1966) だった。(なお、『黒人の救世主』の原稿は、1963 年 3 月まで返却されなかった)。

翌 1962 年 1 月から長編第 2 作目にとりかかった。これが『泣くな、わが子よ』(*Weep not, Child*) で、前作に先立つ 1964 年、ウィリアム・ハイネマン社から刊行された。したがって、これが形の上では、処女出版の小説であり、同時に東アフリカ最初の英語小説として歴史的地位を持つこととなった。

『黒人の救世主』は、後日、タイトルを『川を隔てて』(*The River Between*) と改めて、ハイネマン教育図書出版社の「アフリカ人作家シリーズ」の No.17 として 1965 年に出版された。作品の内容には、旧稿との間に多少の改変が見られる。出版された第二作目であるが、作者の事実上の処女作である。

第三作『一粒の麦』(*A Grain of Wheat*, 1967) をはさんで、『血の花弁』(*Petals of Blood*, 1977) に至る四小説はすべて英語で書かれたが、結果的に、20 世紀のケニア、ひいてはアフリカの歴史の時間軸にそった連作と言える。そのような連作を初めから構想していたかどうかは確言できないが、おそらくその意図があったものと想定して間違いないだろう。『川を隔てて』は、20 世紀の前半から後半に至る約 50 年のスパンの最初に位置する作品である。

英語四小説を貫く基本テーマが、すでにこの処女作に現れている。後で考察するように、各作品のテーマの変遷から、20 世紀アフリカの変化のスピードの速さも伺われる。新旧世代の生活様式とものの考え方の相違、古い習俗・慣習の変貌、もしくは消失、伝統宗教とキリスト教の価値の衝突、西欧（ミッション）教育への適応の問題、人間関係を取り持つ伝統的絆の崩壊、そこから生まれる新たな抗争と矛盾、危機に立たされた個人のアイデンティティの問題。これらの解決の処方箋の難しさと多様性が示される。未曾有の転形期にあつて、コミュニティ全体の凝集性、一体性をどう確保することが出来るのか。伝統社会を崩壊させる外来の影響と蔓延する社会的不正義、人間の欲望と背信の前で、どう新社会を構築できるのか。民衆生活の中から生まれる新しい欲求と動き、無私のリーダーシップ誕生への期待。作者の視点は、英語四小説を一貫して、常にそうしたものの萌芽に注がれてきた。

『川を隔てて』を失敗作であるという専門家が多い。したがって、出世作となる第二作目『泣くな、わが子よ』よりも後から刊行されたことが、かえって、作者にとっては幸運だったとも言われる。『川を隔てて』は、たしかに未熟な点、不透明な点をあげつらうことは易しく、技法的にもシンプルな習作と言うべきであろう。しかし、これらの弱点の多くは、『泣くな、わが子よ』にも共通するものだ。確実に言えることは、これら二作が、たとえ習作であったとしても、稀有な才能を秘めた作家の習作であるということだ。

これらの小説には、作者の、その後の長い期間にわたる文学営為を貫く根本理念、文学の主題と目的、作家としての倫理観が凝縮して込められている。したがって、これらマケレレ時代の初期小説に秘められた文学の意志、作者の力量を読み取ることは、グギ文学全体の精髓、その真価を探ることに通じるであろう。作者が人間と社会のあるべき姿、社会に生きる人間のありようを真摯に問うていることは確かである。

① 社会的・政治的背景

1920~1930 年代、両大戦間期の英領植民地ケニアが舞台である。名もない民衆の生き様を描く連作群のなかで、最も早い局面を扱っており、キリスト教、植民地支配、土地の収奪などヨーロッパの影響が忍びよる頃に、共同体に生起した、対抗する二つの勢力間の抗争・敵対関係が素材になっている。

谷間を流れる一本の川。兩岸から、なだらかに起伏して丘陵に駆け上がる二つの村、カメノとマクユが向かい合っている。その様子は、眠れるライオンのものであるという。二つの村を結ぶ川は、「生命」の川（ホニア Honia）と呼ばれている。ホニア川は、二つの村を、ある時は繋ぎ、ある時は切り離す。隣り合う二つの山の背に立てば、カメノとマクユは歴然と敵対しているように見える。しかし、水の流れる谷間へ降りて行けば、そこから見上げる二つの山は連なり、交じり合った一つの美しい大地、一つに結束したコミュニティ、運命共同体であることがわかる。キリスト教の洗礼を受ける者も、伝統的な割礼の儀礼を受ける者も、ホニア川に浸かることで、身が清められるのである。ホニアは「癒しの川」である。

初め、二つの村は、部族の伝統的な習俗、魔術や儀礼をまったく純粹、無垢のままに残したものとして登場する。キリスト教の到来以前、植民地支配以前のことである。二つの村の間に抗争はなく、人々は平和に暮らしてきた。

だが、時代は転換期に入りつつある。ギクユの予言者ムゴ・ワ・キビロ⁴⁰⁾は次のように未来を予測していた。

「異国の人々が大洋の向こうからギクユの国へやって来る。彼らの衣服は蝶の羽に似ている。彼らは、火を発する魔法の杖を持っている。ムカデのようにたくさんの足をもつ鉄の蛇もやってくるだろう。鉄の蛇は火を吹き、ギクユの国の東の大洋から西の大洋にまで届くだろう。異国の人びとがやって来ても、武器をとって反抗してはいけない。反抗すれば部族がみな殺しになるからだ。彼らはギクユの土地をむやみにほしがり、最後にはギクユから一切のものを取り上げてしまうだろう」⁴¹⁾。

ムゴ・ワ・キビロの予言は同時代の人々から無視された。小説の主人公ワイヤキの家系は、この偉大な予言者の末裔にあたるという。父チェゲもまた、白人の到来が近いことを繰り返し警告したが、マクユとカメノの村人たちは取り合わなかった。

時あたかも、「蝶の羽に似た衣服をまとった異邦人」が、ケニアの地、民族同胞の地であるムランガ、ニエリ、キアンブ（いずれも実名）ほかに迫り、やがて小説の主要舞台のすぐ近く、シリアナ（架空の地）にキリスト教の伝道根拠地が築かれることになる。ここに至って、村人たちは、チェゲの予言、したがってムゴ・ワ・キビロの予言が真実であったことを思い知らされる。この頃のケニア人改宗者は、小説の中で「白人の奴隷」「裏切り者」と呼ばれていることから想像されるように、まだ強力な地盤を確立しておらず、キリスト教徒が少数派であったことを示唆していよう。ギクユの伝統的慣習、とりわけて割礼などの習俗は、成人儀礼、勇気の印として誰からも尊ばれていた。人々は

伝説上の英雄、神話や昔話に誇りを持っていた。部族の秘密を啓示してくれる各種の伝統儀礼による純粋浄化が尊ばれていた。

二つの村の社会構造、たがいの間に対立関係を生じさせるまでの細かな経緯、村の宗教的・政治的組織などは詳しくは説明されていない。伝統的宗教、伝統的価値や習俗は、神聖、神秘的なもの、犯すべからざる聖域として無条件に登場している。ホニア川はもちろん、「雨」や「月光」、「聖なる木立」などには神秘的、象徴的な深い意味が隠されている。

チェゲはこうした部族の伝統的イデオロギーを体現する人物である。カメノは伝統文化の本拠、したがってチェゲが村のリーダーである。すでに老齢であるが、自らの先祖にあたるムゴ・ワ・キビロの予言を信じるとともに、この苦境から民衆を救い出す「救世主」の出現を信じている。彼は、当然のように、息子のワイヤキが、その「救世主」となるべく運命づけられた存在であると確信している。彼は、ムゴ・ワ・キビロの指示どおり、白人の学問、その秘密を学ばせるために息子をシリアナのミッション・スクールへ送る。

ところが、白人宣教師リビングストンが経営するシリアナで、ギクユの伝統的成人儀礼、特に割礼が野蛮なものとして禁止されたため、割礼を受けたワイヤキは放校処分になる。同じ理由で放校処分を受けた幼なじみのカマウ（カボニの息子）、キヌジアらと村に帰ったワイヤキは、彼らとともに、ギクユの純粋な伝統を尊重し、実践することを趣旨とした教育を目的に、自主的な学校を建てることになる。史実として、当時のケニアで、ミッション教育と袂を分かちギクユ純粋独立学校運動⁴²⁾が高揚したことを思い起こそう。

二つの村に、まだ白人は住みついていない。植民地政府の役人や伝道団の関係者がやって来ること稀だった。小屋税などの税制がすでに導入されていたとはいえ、白人の入植、土地没収などの実際的な影響も、まだ先のことだった。

やがて、それらに先駆けて、マクユの村にキリスト教が浸透してくる。村のリーダー格、ジョシュアが真っ先に改宗した。彼は熱烈な信者となり、地元建てられた教会の牧師を務めることになる。彼は、シリアナの白人宣教師リビングストンの教えに忠実に従い、伝統宗教の儀礼や慣行を全面的に批判、特に割礼に対して真っ向から反対している。二人の娘は、当然のように、キリスト教の洗礼を受けている。しかし、末娘ムゾニは、自らの意思で、秘密裏に割礼を受け、のちにその傷が悪化して死んでしまう。割礼は、男女とも、ギクユの伝統的な成人儀礼であるが、ことに女子の割礼は、キリスト教

伝道団が厳しく禁止していた。姉のニャンブラが残るが、彼女は父親の命令に忠実で、割礼は受けていない。

チェゲの死後、カメノ村のリーダーになったカボニは、もとはジョシュアと並んで、キリスト教への初期改宗者の一人だった。だが、新しい宗教の信者として、ジョシュアほどの評判が得られないことがわかると、キリスト教を捨ててしまう。チェゲがいなくなっからは、ムゴ・ワ・キビロの予言を知っている唯一の長老として、当初は、自分が「救世主」になるのだと考えていた。しかし、それが不可能なことを知ると、村のなかで世俗の地位と権力を望み、息子のカマウを「救世主」に仕立てようと望む。こうなると、マクユ村のジョシュアの成功に対する羨望と嫉妬から、今度は狂信的なまでに伝統文化擁護へと立場を移し、のちには反白人の秘密結社「キアマ」⁴³⁾を結成、植民地支配に反旗を掲げ、白人の影響の全面排除に乗り出した。

② ムゾニ、ニャンブラ、ワイヤキを結ぶもの

ジョシュアの娘であるムゾニとニャンブラ、そして主人公ワイヤキの間には共通の糸が通っている。先の二人はキリスト教徒であり、ワイヤキはミッション教育を受けている。ムゾニとワイヤキは、ともに割礼を経験している。ムゾニの死後、ニャンブラとワイヤキは恋仲になり、ニャンブラはひたすらワイヤキに救済を求めている。ここから、これら三人には、キリスト教とギクユの伝統的価値をどう整合させうるのか、二つの異なる価値を自己の内部でどう和解させるかといった問題が生じてくる。自己の内部にある二重の人格、二つに切り裂かれたアイデンティティをどう統一させることが出来るのか。自己疎外の問題が浮上してくる。これらは、伝統社会の自律性に対してヨーロッパ、白人が持ち込んできた分断的影響に起因している。この状況に対して、三者三様の仕方で対処し、切り裂かれた二重の人格を一つに回復しようと懸命に努めるのである。

ムゾニは、なぜ割礼を望んだのだろうか。彼女は割礼によって何を獲得したのだろうか。ムゾニは、自己の内部で、キリスト教と部族の慣行を和解させたという。死ぬ前に、彼女は「キリストを見た」とも言う。とはいえ、父親、そしてキリスト教へのムゾニの反抗は、旧約聖書のロトの妻の行為に似ていなくもない。旧約聖書の一節に、「神は悪徳の町ソドムを滅ぼそうと決め、その意をロトに伝えた。ロト一家はソドムを脱出し難を逃れたが、その途中、神から言われていたソドムを振り返ってはならぬと言う禁を妻が破った。妻はたちまち塩の柱になった」⁴⁴⁾とある。シリアナの白人牧師リビングストンにとっては、割礼後のムゾニの死は、ギクユの民の不道徳性、墮落の証となるものだった。

ワイヤキは、白人の到来によって分裂し、統一を失ったコミュニティの再統一をめざす使命を掲げて、自分が聖書に説かれているような「救世主」となるべく、自己の運命的役割に覚醒する。彼にとって、ムゾニの死は、自分が救世主になる使命を急きたてた。シリアナからの放校処分は、この使命の再発見の契機となった。ワイヤキは教育と愛の力でコミュニティの亀裂を修復、癒すことが出来ると信じたのである。

③ ワイヤキの挫折

小説の進行に伴って、コミュニティの団結と和解といったテーマは、しだいに遠景に退いて、ワイヤキとニャンブラの恋物語へとモチーフが移る。ムゾニの死後、ワイヤキはその姉ニャンブラと急速に近づき、二人は恋愛関係に入る。ムゾニの死が、ワイヤキとニャンブラの愛の出発点となるが、ムゾニの死そのものは、部族の亀裂、二つの村の敵対関係をいっそう強化するという矛盾が生じる。ワイヤキにとっては、ニャンブラはコミュニティの団結の象徴的役割を担うことになる。ニャンブラを失うまいと彼は必死になるが、それはニャンブラの存在が自らの救済に繋がるからである。一方、ニャンブラは、厳格な父とキリスト教への忠誠を維持しつつも、満たされぬ精神的必要との間で苦悩し、葛藤しつつ、生身のワイヤキに最後の救いを見出した。

だが、ワイヤキとニャンブラの関係は、当然のここのように、「キアマ」の批判を買う。「キアマ」による審判の場で、ワイヤキはニャンブラへの恋情を否定することは出来ない。「キアマ」が、キリスト教徒に対する愛を公然と禁止しているわけでもない。「白人の宗教によって自分の慣習を捨てたとなれば、同じ価値のものを与えられなければ、人は迷う」。ワイヤキにとって、同じ価値のものとは何であったのか。それは、ニャンブラに対する無私の愛であったのだろうか。

小説の末尾は暗示的である。ワイヤキとニャンブラは「キアマ」の手に委ねられる。二人は、「キアマ」の誓約を破った者の運命から逃れることは出来ないであろう。はたして、ムゾニの死がここで再現されることになるのであろうか。「誓約」を破棄した者の罪、「キアマ」の掟として、ワイヤキとニャンブラはどこかへ連れ去られるだろうか。(旧稿『黒人の救世主』では、二人は自ら死を選んでいる)。

ワイヤキの弁明を聞かされた後、「キアマ」に集まった群衆は去る。人々は、

ワイヤキとニャンブラの「裏切り」を公然と責めることはなく、自分自身の負うべき罪意識と向き合うのでもなく、二人がカボニに騙され、担がれたことを見抜きながらも、沈黙のまま立ち去る。誰もが自分の罪を背負ってくれるスケープゴートを必要としたのだろう。

個人の贖罪、共同体の贖罪の達成のための「愛」は、グギ文学の関心事の一つである。「無私の愛こそが、真の和解の力である」と作者は言いたいのであろうか。しかし、ニャンブラに対するワイヤキの犠牲的な愛が、どう和解の力になったのかは不透明である。ワイヤキの愛と犠牲は、はたして、キリストのそれと似ているだろうか。

ワイヤキは、シリアナのミッション教育と父から教えられた伝統文化擁護の間に立って苦悩した。彼は割礼を受けている。割礼によって、「自分の血が、大地と自分を繋いでくれたという感覚を得た」という。ギクユとムンビの子、部族の子として生まれ変わったのだった。しかし、シリアナでの体験、ミッション教育の経験と知識によって、ギクユの純粋な伝統からも疎外されているとの実感を隠すことが出来ない。シリアナに学んだ分だけ、部族の伝統的慣習との間に違和感を覚えるのである。

Waiyaki felt uneasy . . . Where did he stand ? Perhaps there was no half-way house between Makuyu and Kamenno. Just now he did not know his ground. He did not know himself, . . . 45)

「ワイヤキは不安を覚えた・・自分は、この土地の者でないのではないか。おそらく、マクユとカメノの間に住むべき家などはないのだ。彼は自分の位置がわからなかった。自分自身を見失っていた」

ワイヤキはどのような教育を目指したのだろうか。その教育の実際的な目的は何だったのだろうか。これに関しても不透明だと言わざるを得ない。教育の目的については、むしろキヌジアが明確な考えを持っていた。彼は単なる教育への憧れ以上に、実際行動 (action) の大切さを説いている。奪われた土地の回復、入植民の土地で働かざるを得ない現実、小屋税の支払いなどの植民地支配の現実に対して具体的対応が出来るような教育の必要を説いている。キヌジアは、ヨーロッパ人の到来が、ギクユの土地を略奪したとの認識を明確に示している。ワイヤキはどう考えただろうか。この点についても、ワイヤキには、ほとんど明確な認識がないと言わざるを得ない。作者は、ワイヤキにそこまで踏み込ま

せようとはしていない。

結局のところ、ワイヤキは殉教者として終わる。問題解決への真の道は、その後のケニアの歴史的文脈に照らせば、50年代の武力闘争へと繋がると言ってよいであろう。

④ 読み方・評価

物語は、時間軸に沿って直線的に進行している。構成はシンプルである。出来事と言説は、ギクユの神話や伝説と直接に結びついている。ワイヤキ自身の存在が、こうした伝説の一部であると言っても過言ではないであろう。聖書が説くキリスト、救世主への期待、これと並行する原初の男女であるギクユとムンビをめぐる部族の創世神話、そしてムゴ・ワ・キビロの予言、部族の祖デミ・ナ・マザジ⁴⁶⁾にまつわる神話モチーフが見られる。これらすべては、小説が拠って立つ象徴世界の道具立てになっている。

たしかに、この小説には象徴が多く見られる。「蝶」(butterfly)は「白人」の象徴である。ムゴ・ワ・キビロの予言に「蝶の羽に似た衣服をまとったよそ者」と言うのは「白人」のことである。ギクユの人々は言う「蝶をパンガ(山刀)で切り裂くことは出来ない」「蝶の習性、その動きを知らないとこれを槍で突き刺すことは出来ない」。白人の学問をよく学んでからでないと、白人に対抗し、白人を制し、彼らをギクユの土地から追放することは出来ないと言うのである。

「二つの山の背」のメタファーの解釈は難しい。遠くから見れば、その山の背は、眠れるライオンのように見えるという。カメノは伝統を温存している。マクユはキリスト教への改宗の進む村である。その間に流れる「生命の川」、「癒しの川」、つまり「ホニア川」は、何を象徴しているのだろうか。ワイヤキはホニア川の化身なのだろうか。

ワイヤキは敗者である。その敗北は贖罪と言うべきだろうか。ワイヤキはキリストの化身なのだろうか。それとも、たんなる破壊者なのだろうか。彼は、自分が志したような救世主、対立する二つの価値の間の調停者とはなり得なかった。彼に罪はあるのか、ないのか。彼は、二つの村を隔てる分断者なのか。小説の最後の一文「ホニア川は生命の谷を、音を立て、誰もが知らない歌を囁きながら、流れつづけた」は、どう解釈できるだろうか。

The land was now silent. The two ridges lay side by side, hidden in the darkness. And

Honia river went on flowing between them, down through the valley of life, its beat rising above the dark stillness, reaching into the heart of the people of Makuyu and Kamenno.⁴⁷⁾

「あたりは静まり返っていた。二つの村は、闇の中に並んで隠れていた。ホニア川がその間を流れ、生命の谷を下っていた。暗い静寂を圧して、水の音が響き、マクユとカメノの村人のこころの奥に浸み込んでいった」

ここに、われわれは、すべての人間の苦闘のドラマとは無縁に、二つの村を潤す浄化の雨を集めて永遠に流れ続ける「万物を癒す生命の川」に対する民衆の信念、したがって「民衆の不滅」を感じ取れるのではないだろうか。

何度も言及される「聖なる木立」は何を意味するのだろうか。そこは、ワイヤキの割礼の場であり、ムゾニの割礼の場でもあった。さらには、ワイヤキとニャンブラが初めて出会う場所であり、二人の最初の愛の行為の場所でもあった。また、小説の冒頭、幼い子どもの頃に、キヌジアとカマウの罪のない取っ組み合いの場であり、ワイヤキが仲裁に入った場所でもあった。

⑤ 小説の問いかけるもの

この小説は、若い世代に、新しい国づくりへの責任と自覚を問うているようである。20世紀アフリカの変化の速さの中では、もはや旧世代よりは若い世代に希望を託すべきだと言うのであろうか。チェゲやカボニやジョシュアなどの世代でなく、むしろワイヤキやカマウ、キヌジアなどの若い世代の出番だと言うのであろうか。若い世代は、因習にとらわれること少なく、自己の利益や偏見からもより解放されていると言えるだろうか。

ワイヤキは、最初から、教育以外の運動、特に政治的な運動へのかかわりを避けてきたようである。彼は、カボニが指導する「キアマ」のリーダーになることを恐れた。彼は一度は参加した「キアマ」を、後には脱退している。「キアマ」の活動に含まれる政治的な課題と、自分が抱く教育への夢を繋げることは出来なかった。教育への燃え立つような理想だけに埋没してきたと言ってよい。彼にとって、教育、学校こそは、白人の秘密の魔術と力の獲得をめざす渴望のシンボルだった。

白人の学問の修得に向かった若者に対する、残された村人の側の期待と誇りははかり知れない。この小説と同じ頃に書かれた戯曲「黒人の隠者」が、この

テーマを扱っていることを先に見た。都会へ出た若者が、やがて村へ持ち帰るはずの知識や学問に対する村人の期待は大きい。旧世代は、自分たちが後生大事に守ってきた伝統的価値を、とうぜん若者たちが擁護してくれることを期待している。ところが、実際には、西欧教育を身につけ、都会生活を経験した若者は、新しい、伝統とは矛盾した、ある場合には敵対するような文化価値を身につけてしまっていることがある。教育への情熱をシリアナで獲得し、のちに村へ帰ってから、小学校の運営を始めたワイヤキは、ここで試練に立たされた。

カボニが率いる伝統勢力は、反キリスト教、反植民地政府の結社（キアマ）を結成し、仲裁に立とうとするワイヤキに新たな課題を提起する。カボニはワイヤキが受けたミッション教育の価値を疑っている。ワイヤキの建設した学校は、シリアナで教わったことを教えているだけでないのか。ワイヤキの教えに従うことは、コミュニティ内部のギャップをより拡大させるだけでないのか。外来の宗教に、外来の知識を付け足すだけでないのか。こうして宗教運動の混迷が深まるなか、植民地支配下での政治問題（税制、土地没収など）が絡んで、事態はますます悪化していく。

『黒人の救世主』と題された初稿では、ワイヤキとニャンブラは最後に死ぬことになっている。『川を隔てて』では、解釈の分かれるところであるが、その点は明示的でなく、個人の悲劇に終わらせずに、むしろ読者への挑戦となっている。

They went away quickly, glad that he was hidden by the darkness. For they did not want to look at the Teacher and they did not want to read their guilt in one another's face. 48)

「彼ら（「キアマ」に集まった群衆）は足早に立ち去った。ワイヤキの姿が暗闇に隠れていることが救われた。彼らは先生（ワイヤキのこと）の姿を見たくはなかったし、たがいの表情に罪の意識を読み取りたくなかった」

ワイヤキは、若い頃から、身に過ぎた責任を負わされてきた。自分自身のアイデンティティが確立する以前から、宿命として負わされた「救世主」の役割を引き受けながら、社会の諸問題の解決を迫られている。共同体の分裂、恋人ニャンブラとの間の越えられぬ溝。そして何よりも、コミュニティへの忠誠と個人の自由の間で悩むのである。

人間的レベルで、作者はワイヤキに同情的、共感しているようである。しかし、社会的レベルでは、作者はワイヤキの失敗を容赦なく描いている。ワイヤキの限界は明らかである。洞察力の不足。全体を見ない偏狭さ。これを善意と情熱で補おうとするが、成功はおぼつかない。しかし、ワイヤキの失敗から学ぶべきことが多くある。

この小説は、アフリカでは、どのような教育が望ましいのかを問うている。伝統社会の全体性、一体性をどう守るか。キリスト教（西欧）教育と民族主義的な政治行動が、相互協力的になるのではなく、敵対関係に立たざるを得ないところに、ワイヤキをはじめ、この時代に生きた登場人物に課された試練がある。

グギは、後年、この小説について、「思い出すと、なぜか戸惑う」と述べている。どういう意味であろうか。

「（この小説は）政治的、経済的なさまざまな要因を排除してしまっている。これが弱点だ。世界観が理想論になっている。政治的・経済的な現実を十分に見ていない」⁴⁹⁾と述べている。「今、これを書けば、こんな風にはならないと思う。ワイヤキにそれほど共感しないだろう。カボニについては、違った書き方になるだろう」⁵⁰⁾。

しかし、作者が、この作品で、早くも、新しい社会のリーダー像を模索していることは明らかであろう。旧世代に属し、個人的な野心を優先させているかに見えるジョシュアもカボニも、その役割には不適であろう。そして、主人公ワイヤキでさえも、欠陥を露呈している。

ワイヤキは、自分に課した使命の「政治的側面」を悟るのが遅かった。ニャンブラとの出会いの後になって、彼は二つの村の団結にとって真に必要なものが「行動」であったことを知る。また、団結のためには、集団の意思結集が大切であることも知らされた。つまり、「政治的自由獲得のための団結」、そして「団結のための教育」の必要を痛感させられるのである。

ワイヤキが理解できなかったことは、二つの村、あるいはジョシュアとカボニの和解のためには、政治的な課題が含まれるということだった。ワイヤキは、社会の葛藤の本質をつかめていなかったのである。ワイヤキが「キアマ」に入会する理由や、後日にそこから脱退する理由がそれほど明確でないのは、ワイヤキ自身の政治的なナイーブさが原因なのである。この点では、むしろ、キヌジアが抱く疑問が時代を先取りしているようである。「ワイヤキは、学問だけ

でなく、民衆が行動をも欲していることを理解しているだろうか」。のちの政治的運動の萌芽は、ワイヤキの志よりも、むしろ「キアマ」が掲げた目的に見られるとも言える。

ワイヤキの視野は狭すぎたというほかはない。彼は、民衆のすべてとの接触が出来ていなかった。社会全体が見えていなかった。彼自身が、自分の位置にさえ、懐疑的になることもあった。

しかし、後には、ワイヤキに次のような自覚が芽生えている。

「この新たな意識が、政治のレベルでの動きにまで現れることを誰もが願っていることを、私は見抜けなかった。抑圧された民衆には、教育だけでは不十分なのだ」⁵¹⁾。

ここには、英語で書かれた最後の小説『血の花弁』(1977)で詳細に問うことになる作者の文学の意志が覗いていると言えるだろう。『川を隔てて』では、社会的、宗教的、政治的に錯綜した多様な課題を取り上げている。これらの課題が相互に絡み合って提起する諸問題の慎重な分析は、のちの作品に託される。

作者は、この小説で、ハッピーエンドの結末を用意してはいなかったであろう。むしろ、傷つきやすく、ナイーブな青年主人公の挫折を赤裸々に描くことで、現実世界についての強烈的なインパクトを読者に突き付ける意図を持っていたと言えよう。その意味で、この小説は、結末が想定させるかもしれない絶望を押し付けるのではなく、読者に激しく挑戦してくるような作品である。提起している現実の諸問題の解決の難しさ、しかも課題の緊急性は否定できない。

幕間：「英語で書くアフリカ人作家会議」

『黒人の救世主』を書き、第二作『泣くな、わが子よ』の執筆に専念した頃、特筆すべき出来事があった。1962年6月11日から6月17日まで、アフリカ人作家の集会がマケレレ大学で開催され、これに参加できたのである。「英語で書くアフリカ人作家会議」がそれで、チヌア・アチェベ、ウォーレ・ショインカ、クリストファー・オキボ (Christopher Okigbo, ナイジェリア、1932~1967)、エゼキエル・ムパシエーレ (この会議の主催者代表)、ゲブリエル・オカラ (Gabriel Okara, ナイジェリア、1921~)、J. P. クラーク (J. P. Clark, ナイジェリア、1935~)、コフィ・アウノー (Kofi Awoonor, ガーナ、1935~2013)、キャメロン・ドウオドゥ (Cameron Duodu, ガーナ、1937~)、ブロク・モディサーネ (Bloke Modisane, 南アフリカ、1923~1986)、アーサー・マイマーネ (Arthur

Maimane, 南アフリカ、1932~2005)、ルイス・ンコシ (Lewis Nkosi, 南アフリカ、1936~2010) ら、広く知られたアフリカ大陸の先輩作家たち約 30 名 (ダホメー、カメルーン、英国、西インドなどを含む) が集まったのだった。ケニアからも、ジョナサン・カリアラ (1935~1993)、レベッカ・ンジャウ (1932~)、ジョン・ナゲンダ (1938~)、オコト・ビテック (ウガンダ出身、1931~1982)、グレース・オゴト (1930~) らが参加した。この時、ナイジェリアから来たアチェベとの出逢いは、決定的かつ運命的なものとなった。

アメリカからも、ラングストン・ヒューズ (1902~1967)、ソンドース・レディング (1906~1988) らが出席した。主催は、1961 年にナイジェリアのイバダン大学に結成されたムバリ (Mbari) 作家芸術家センター⁵²⁾ とマケレレ大学だった。前者は、パリの「文化の自由会議」(Congress of Cultural Freedom)⁵³⁾ と連携していた。この時、西アフリカや南アフリカの文学者の活発さに驚いたという。

まだ見ぬ先輩アフリカ人作家の多数がマケレレ大学へ集結することを知り、自分の出席も見込まれてからは、『泣くな、わが子よ』の脱稿が急がれた。特に 1962 年 5 月から、会議が始まる 6 月中旬まで、グギは必死にこれを書き上げて、是非アチェベに読んでもらいたいと思った。彼は、ナイロビ郊外、電灯も引かれていないカンゲミ地区で、暖炉の燃えさしの明かりを受けて、これを書き上げた。彼がノートに書きつけると、その都度数人の友人が即座にタイプしたという⁵⁴⁾。

この結果、グギは会議に参加したアチェベに原稿を手渡すことが出来た。当時のアチェベは、小説第 3 作『神の矢』(*Arrow of God*, 1964) の執筆に忙しかったが、これを読んで、同原稿を会議に出席していたウィリアム・ハイネマン社の編集者ファン・ミルン (Van Milne) に回した。それから数ヶ月後、グギは出版社から刊行受諾の手紙を受け取った⁵⁵⁾。こうして同小説は、1964 年に、イギリスのウィリアム・ハイネマン社から出版され、同年中に、アチェベが編集アドバイザーを務めたハイネマン教育図書出版社の「アフリカ人作家シリーズ」No.7 としても刊行された⁵⁶⁾ (詳しくは、本書「エピローグ」を見よ)。

後日、この会議について「新しい意識の使者たち」と題して、グギはナイロビの有力紙「サンデー・ネーション」(1962 年 7 月 1 日号) に短い文章を寄稿している[後に、「会議に出たケニア人」と題して『トランジション』誌第 2 巻 5 号 (1962 年 7~8 月) に転載]。その大要は以下の通りである。

「私は、エゼキエル・ムパシェーレに会いたかった。彼の自伝『二番通り』を読んで、激しい文学的パワーに衝撃を受けた。チヌア・アチェベに会いたかった。この若いナイジェリアの作家の二つの小説『部族崩壊』と『もはや安楽なし』は新しい社会の誕生を告げるものだ。そこでは、破壊的な植民地支配に対する政治的な抗議や嘲笑といった重圧から解放されて、作家は人間関係のデリケートな、時には過酷な細部にまで、感情を抜きにした視線を投げかけることが出来ている。・・・彼らは台頭するアフリカの新しい息吹を伝える黒人の使者だ。この会議には興味深いことがあった。たとえば、アフリカ文学などといったものが存在するかどうかといった問題について、様々な意見が出たが、植民地支配、帝国主義、その他のイズムについてはほとんど沈黙していた。この点で、1956年、1959年の世界黒人作家会議とは違っていた。この時は、政治的討議が雰囲気を押していた。・・・今や、アフリカ人作家は身近な素材を取り上げて、生きて、持続するものを生み出す必要があった。この点では、ナイジェリアの作家が先頭を切っていた。J. P. クラークの詩について、ある代表が次のように述べた。『ここには、政治的、あるいは歴史的な抗議に関して何のジェスチュアもないし、詩人の肌の色、その意味について何のアドバイスも言明もない。あるのは、抑制のきいた、個人的経験についての忠実かつ美しい叙述である』。もしそうだとすれば、マケレレの会議は、わがアフリカ大陸の文化的覚醒の画期となるものだ。それは、巨大な政治的变化を反映するものである。今や、アフリカ人作家は、腰を下ろして、観察し、完全に実現した社会の欠点や虚栄について、洗練された皮肉を突き付けることが出来るのだ。植民地支配の死とともに、新たな社会が生まれつつある。同時に、新たな文学もまた」⁵⁷⁾。

しかし、ここに紹介した会議への共感、それだけでなく、「サンデー・ネーション」紙はもちろん、この頃にケニアの新聞に寄稿した記事の大部分は、20年以上も後に、全くの懐疑と反省の対象となり、180度の転換を遂げることになる。これについては、第5部で論じることになる。

VI. 初期小説『泣くな、わが子よ』：家庭崩壊と夢の挫折 (*Weep not, Child*)

⁵⁸⁾

1964年5月発表の『泣くな、わが子よ』(*Weep not, Child*)は、1962年1月から書き始めた。ここでも人間のジレンマと葛藤が描かれ、同時に、ドラマチックな社会批評に満ちている。これの最終稿を書き上げたのは、1962年7月のことで、マケレレ大学英文科に学び、同大学ノースコート学寮の寮生であった。発表の2年後、1966年4月にセネガルの首都ダカールで開催された第1回世界黒人芸術祭英語小説部門で最優秀作品賞を受賞しており、もじどおり出世

作となった。ちなみに、この時の審査委員長は、1962 年、マケレレ大学で開催された「英語で書くアフリカ人作家会議」に出席したアメリカの著名な黒人作家・詩人ラングストン・ヒューズだった。

この小説は、第二次大戦直後からマウマウ戦争期を主な時代背景に、この戦いが村人にあたえた傷跡を克明に描くものである。すなわち、40 年代の後半から 50 年代の「非常事態」(Emergency)に至る混乱と破壊と暴力の時代に生きる一人の少年の成長が描かれる。農民が土地を失ったのは、白人に騙されたからだと信じている一家は、家族と部族の将来をかけて少年を学校へ送る。しかし「非常事態」に入ると父は無実の罪を背負って死に、マウマウ戦士として血盟を誓った腹ちがいの兄は、殺戮を繰り返したはてに捕えられ、処刑される。こうして一家は崩壊し、孤立と無力感のうちに少年は自殺をくわだてる。

1964 年、発表直前のインタビューで、この小説の意図を次のように述べている。

「私はこの小説で、村にとり残されたごく普通の男女にあたえたマウマウ戦争の影響を書こうとしました。マウマウ戦争の恐怖とは、家庭生活を破壊し、人間関係を破壊したことです。友人が友人を裏切り、父が息子を疑い、兄弟が兄弟の誠実さや善意を疑いました。すべての人びとがこの恐怖のもとで暮らしていたのです」⁵⁹⁾。

さらに次のように述べている。

『『泣くな、わが子よ』では、あの当時に、小さな村で実際に生きることがどういうことであったか、その雰囲気をつえたいと思いました。・・・それで、多くのエピソードに私自身の体験が活かされていなかったとしても、自分が目撃したこと、聞いたこと、あるいは感じたことが含まれています」⁶⁰⁾。

1952 年の非常事態宣言後から、高校卒業の 1958 年にかけて、グギはこの小説に描かれるような動乱期を生きて、不安と緊張を実感したことだろう。日常化した人の死、逮捕、拘禁、処刑、銃声と警察犬の遠吠えのなかで少年時代を過ごした。小説が描く絶望と挫折、未来に対する恐怖感は、マウマウのリーダーであったデダン・キマジが処刑された 1956 年から、独立直前の 1962 年に至る頃のケニア社会、そして作者自身が置かれた不安の状況を示している。

主人公ジョローゲは、作者の分身だと言われる。時代を包む暴力と混迷を十

分には理解できず、闘争にかかわることのなかった作者にとっては、償いの作、一種の贖罪だとの評もある。もしそうだとすれば、作者はジョローゲと同じく、兄弟のなかであまりに遅く生まれて、この社会的混乱のなかで自分の居場所を見出し得なかったのである。

舞台は、植民地下ケニアの一農村である。近くに靴工場のほか、インド人やアフリカ人の商店が軒を並べるキパンガという架空の町があるとなれば、それが作者の生誕地カミリズ村を含んで、リムルをなぞっていることは明らかである。

この村にも、第二次大戦後のナショナリズムが高揚している。やがて、「土地を返せ」「白人追放」を旗印に、反英独立の「マウマウ戦争」が起り、1952年10月、ナイロビを含む中央州全土に「非常事態」が宣言された。マウマウ戦争は、アルジェリア独立戦争に次いで死者の数の多い激しい武装闘争だった。ケニアは1963年12月に独立を達成したが、この小説は、独立前史を凄惨な血色に染めた不安と恐怖の時代に、土地回復の夢を追う貧農のゴゾー一家を中心に、特に最年少の息子ジョローゲを通して、家庭生活への影響、村に取り残されたごく普通の男女、人間関係などに与えた戦争や非常事態の傷跡を克明に描いている。

① 社会的・政治的背景

前作『川を隔てて』で描かれた最後の出来事から約15年後から始まる。主人公ジョローゲが小学校へ進学する直前の1945年末から、シリアナ高等学校を1年生でドロップアウトする約10年間の出来事を扱っていると考えられる。しかし、前作と同じく、この10年間のギクユの民族的経験、ひいてはケニア社会全体の危機状況の凝縮、縮図でもある。

この時期のめばしい史実を拾ってみると、1946年、ジョモ・ケニヤッタが英国から帰国している。第二次大戦の退役兵が、ビルマをはじめ、世界各地から戻り、身に着けた世界的視野から、もはや母国の抑圧状況に我慢できなくなっていた。1947年のインド独立は、大戦後のナショナリズムの火に油を注いだ。1950年、マウマウ中央委員会が秘密裏に結成された。1952年10月7日には、政府の傀儡であったワルヒウ首長が、ナイロビ郊外で白昼暗殺された。そして10月20日には、中央州全土に非常事態が宣言され、ケニヤッタほか185名が逮捕された。1953年、ケニヤッタが有罪とされ、7年間の拘禁が決まった。作中では、ボロ、コリらのゲリラ闘争へ参加があり、白人農場主との軋轢、屈辱的な人種差別があった。1954年のある日には、実兄ムアングがゲリラ戦争に参

加のため突如姿を消した。一家に対する政府の監視が強まり、母親などが一時的に拘禁に追いやられた。これらすべての社会的および家庭的な背景が、主人公ジョローゲの魂の成長と二重写しになる。

ナショナリズムの高揚の中で、労働運動も活発化し、弾圧のために初めて催涙ガスが使われたという大規模なゼネストが、ナイロビを中心に 1950 年 5 月に起きて、10 万人以上がこれに参加した。この時期は、ちょうどジョローゲの小学校低学年から高学年への進級の時期と重なる。ジョローゲは、さらに 4 年間小学校に在籍しているが、そこでの 2 年間が終わった頃、先に述べたケニヤッタの禁固が確定している。史実としては、それは 1953 年 4 月 8 日のことであったから、ジョローゲは、1954 年末に小学校卒業資格試験（KAPE）に合格したことになる。高等学校は、2 学期間在籍したのみで、その時にジャコボが殺され、ジョローゲの学校生活は終わった。したがって、この時、彼は 19 歳くらいであった。このことから、ジョローゲは作者より 2 歳年上であると想定してよい。作中で、ジョローゲの素朴なマウマウ認識が示されるが、当時の作者の認識と大して変わらなかったであろう。

『泣くな、わが子よ』は、ウィリアム・ハイネマン社刊の初版本で、わずかに 154 ページの短い作品である。全体は二部構成で、第一部「薄れゆく光」は非常事態前、第二部「闇がおりる」は非常事態下の人間群像を描写している。あいだに、ごく短い「インターラード」が置かれている。物語は、ほぼ時間の推移にしたがって、線条的に展開していく。文芸的な技巧は、むしろシンプルかつ素朴である。現代史の重要な時期を、傷つきやすい繊細な登場人物を借りて、平明でバランスの取れた文章で映し出しているとは言えるが、登場人物の内面の描写は、むしろ希薄である。プロットは、村での出来事に集中している。

第一部は、黒人農夫ゴゾ一家の末息子ジョローゲの小学校進学を軸に、非常事態の渦中に至るまでの約 12 年間にまたがる。失われた土地に対する一家の不満、農場ストライキによる抗議運動への盛り上がり、そしてストライキの失敗。これらが、やがて「救世主」と謳われた歴史上の人物ジョモ・ケニヤッタの逮捕という現実の出来事へと推移していく。第二部は、「非常事態」宣言から「マウマウ戦争」へとつながる動乱と混迷の時代である。コミュニティ全体に暴力が蔓延、一家の絆は崩壊し、教育にかけたジョローゲの幼い夢は無残に崩壊する。そればかりか、黒人も白人も含めて、登場人物の誰もが人間的絆を断ち切られ、コミュニティ全体を悲劇が覆う。

作中で、ホーランズがゴゾやジョローゲを拷問により去勢しようとするのは、アフリカ人の権利や力を奪い無力にすることを意味しているのであろう。さらに、第一次大戦後イタリア人捕虜によって建設されたという「ほそう道路」について「この地方をまっすぐに横切って走る一本の道路があった。・・・長いその道路には初めも終わりもなかった。その起点がどこにあるのか、知っている者など、ほとんどいなかった」⁶¹⁾とあるが、これは、この当時のケニア社会を覆った不安、何処へ向かって行こうとしているのか、誰もが感じていた不安を暗示しているのであろう。一家の大黒柱としてのゴゾの位置が揺らぎ、最後に家庭崩壊に至るこの小説の結末は、ケニア社会全体の崩壊を暗喩している。この後には、どんな新秩序が到来するのか、それは示されていない。

キパンガの町は、植民地ケニアの縮図、小宇宙である。そこには、黒人・白人入植民・アジア人（インド人商人など）の間での三つ巴の角逐がある。こうした人種間の亀裂のほかには、黒人農民の間に貧富と社会的地位の格差がすでに生まれていることが明瞭に見て取れる。

物語は、主人公ジョローゲの視点から、貧農のゴゾ一家を中心に、それほど詳しく描かれないが、白人入植民ホーランズ一家、黒人の有力地主ジャコボ一家を軸に展開する。登場人物の誰もが、当時のケニアの農村にごく普通に見られた人物を形象しているのであろう。それぞれの人物、一家は、植民地下の地方農村社会に働いたいくつかの社会的な力（勢力）を代表していると考えてよいだろう。

中心となる三つの家系のプロフィールを紹介しておこう。それらは、当時の社会に早くも現れた相対立する三つの階層を示している。

ゴゾ一家：

ゴゾは、第一次大戦に従軍、生還したが、父親譲りの農地は白人入植民ホーランズの手に移っていた。今は、この白人に雇われて農場労働者として働いている。「土地こそすべてだ」と信じているが、自分の土地はなく、黒人の有力地主ジャコボの土地の借地人（ムホイ）として暮らしている。しかし、「白人は去る。土地は必ず戻ってくる」とのムゴ・ワ・キビロの予言を信じて彼は生きている。最初の妻ジェリとの間にボロ、コリ、カマウの三兄弟、二番目の妻ニョカビとの間に、小説の主人公となる末息子ジョローゲがいる。ボロとコリはナイロビへ出て政治活動に入り、大工のカマウだけが村に残り、一家の家計を支え、ジョローゲの学資を助けている。ジョローゲの実兄ムアングは第二次大戦に出征し、戦死した。

ジャコボ一家：

ジャコボは、数少ない黒人地主の一人である。貴重な換金作物で、通常は白人入植民の独占であった除虫菊の栽培を特別に許可された富裕農民でもある。のちに、植民地政府に雇われて「首長」になる。妻ジュリアナとの間に、学校の先生をしている姉娘ルシアのほか、ケニアでの白人の学問をすっかり修め、本国（イギリス）留学を目前にしている長男ジョン、末娘ムイハキなどがいる。ムイハキはジョローゲとの間に、友情・恋情を結ぶ。

ホーランズ一家：

白人ホーランズは、第一次大戦に従軍。戦後にケニアへ入植した。かつてはゴゾの父のものであった広大な農地を所有している。のちに、植民地政府に雇われて「郡行政長官」になる。長男は第二次大戦で戦死。妻スザンナとの間に、ジョローゲとほぼ同年齢の息子スティーブンがいる。その姉娘は、宣教師になっている。

ゴゾの一家は「奪われた土地の回復」を夢に、貧困にあえぎながらも、一家の命運をかけて末息子ジョローゲを小学校へ進学させる。ジョローゲは、「教育こそがすべて」だと信じて、学業に励む。彼は、自分が世直し人、「救世主」となる特別な使命を託されたものと確信し、家族とケニアの明るい未来を夢見て学業に励んでいる。

ゴゾが教育を大切だと考えたのは、白人の学問を身につけることで、ギクユの民は必ず土地を取り戻すことが出来ると信じたからであった。彼にとっては「土地こそがすべて」であった。兄のカマウやコリがジョローゲに学資をみつぐが、なぜそこまで支援を惜しまないのかは、小説ではそれほど明確ではない。おそらく教育への情熱は、当時のギクユ民衆の共通の願いであり、何の説明の必要もない前提とされたのだろう。ジョローゲは成績優秀で、高校へ進学することになる。

その頃、ボロやコリが参加しているナイロビの若い活動家グループの影響もあって、ホーランズの農場で黒人労働者によるストライキ計画が持ち上がる。ストライキの当日、ジャコボが白人入植民の手先となってこの計画をつぶそうとするのを知り、ゴゾは怒りを抑えきれない。彼が思わず立ち上がり、ジャコボを殴ると、たちまちその場の群衆が暴徒化する。結局、警官隊がこれを鎮圧したが、後日、ゴゾはホーランズの農場を追われ、ジャコボの土地の借地人の身分も奪われてしまう。

やがて 1952 年 10 月 20 日、非常事態が宣言される。そんなある日、ジャコボが殺される

が、ゴゾは、ジョローゲの腹違いの兄カマウの犯行に違いないと信じて、密かにその身代わりになろうと誓う。実際には、長男のボロの犯行であったことをのちに悟るが、激しい拷問を受けたあげく、ゴゾは自宅に戻されて死ぬ。

第二次大戦に従軍後、ナイロビへ出て、土地の奪還、白人の追放、ひいては独立を目指して闘ってきた腹違いの兄ボロは、「黒人社会のなかの裏切り者」ジャコボを殺害した後、さらに郡行政長官に出世していたホーランズをも殺す。やがてボロは捕らえられ、処刑を待つ。こうして、一家の絆は崩壊し、「教育」にかけたジョローゲの夢は空しく潰れ去る。孤独と無力感にひしがれたジョローゲは、小学校に上がった頃からともに成長し、未来の夢を語り合い、ほのかな恋情を寄せてきたジャコボの娘ムイハキに救いを求めるが、もはや受け入れられない。

父ゴゾが死に、兄ボロが捕まり、警察による拷問、放校処分を受けた後、ジョローゲはインド人の店で売り子として働く。しかし、周囲からの憐憫の情に耐え切れず、癒しがたい屈辱感に苛まれて、仕事は長く続かない。描いてきた未来の夢と現実世界のあまりの隔たりの恐ろしさから、ある夜、彼は家を出る。自殺を決意しながらも、迷い、躊躇して彷徨していると、非常事態下の夜間外出禁止令にもかかわらず、燃えさしを片手に、暗闇のなかを探しにやってきた母ニョカビに、ついでもう一人の母ジェリに会い、家に向かって連れ戻される。この時、彼は初めて、自分が現実と向き合うことを避けてきた卑怯者であったことを自覚する。そう覚醒すると、彼は見えてきた家へ向かって走り出し、二人の母親のために戸を大きく開け放った。

② ギクユの創世神話

父ゴゾが、家族の仲間に語り聞かせたギクユの創世神話は、以下のようなものだった。

「・・・雨風がわき起こって、雷が鳴り、激しい稲妻が走ったのじゃ。ケレーニャガ（ケニア山のこと）のあたりの大地や森が揺れ動いた。創造の神様がおつくりになって、そこに住ませた森の動物達は恐れおののいておった。動物達は身動き一つできず、大地にしゃがみ込んで風の音に合わせて、悲しみの声を上げておったのじゃ。草や木も沈黙しておった。古老の話だと、その時、万物が死んでしまい、あるのはただ生命を押し殺す強暴な雷だけであったということじゃ。夜の闇の深さは測り知ることも出来なかったし、陽の光も通さぬその暗黒は、わしもおまえ達も想像すら出来ないほどだった。だが、その暗闇の中で、ケレーニャガの麓に一本の木がによきによきと生えてきたぞ。はじめ、その木は小さかったが、やがて暗闇をくぐり抜けて育っていった。光、そう太陽に向かって伸びようとしたんじゃ。その木には、生命が宿っておった。花を咲かせた木の、あの豊穡な暖みを

放ちながら、その木は上へ上へと伸びていった。これが、雷鳴と嘆きの闇の夜に芽生えた聖なる木ムクユ、つまり神様の木だぞ。

この世の始まりには、唯ひとりの男（ギクユ）と唯ひとりの女（ムンビ）しかいなかった。創造の神様が、この二人の人間を置かれたのがムクユの木の下じゃった。するとたちまち陽が昇り、暗闇は溶け去った。太陽が照り輝いて、その温みで万物に生命と活動があたえられたのじゃ。風も稲妻も雷も止んだ。動物達は驚いてばかりいるのをやめて、動きはじめ、嘆くこともなく、創造の神様とギクユとムンビへの忠誠を誓った。創造主は、聖なる山からギクユとムンビを連れ出し、シリアナの近くの丘陵地へ伴い、高い丘の上に二人を立たせたのじゃ。そして、最後に創造主は、おまえ達もよく知っているあのムクルウェ・ワ・ガザンガ⁶²⁾へ二人を連れて行き、すべての土地を二人に示されたぞーそう、いいかな、神様はギクユとムンビにすべての土地を見せて、こう言われたのじゃ。

『この土地をおまえ達にあたえよう。男と女よ。おまえ達はこの土地を治め、平和に耕すのだ。そして聖なる木の下で、神なる私にのみ犠牲を捧げるのだ…』⁶³⁾

③ ギクユの土地観

この神話に見られるように、土地は、創造神（Ngai, ンガイ）から、ギクユの祖である原初の男ギクユとその妻ムンビに与えられたのだった。「土地」は生命の源泉であり、物質的必要と同時に「精神的必要」を満たすものであった。

ケニヤッタは、その著書『ケニア山のふもと』の「序文」に次のように書いている。

「ヨーロッパ人がギクユの国に渡来して、民衆から土地を奪った時、彼らは単に生活手段を奪っただけでなく、家族と部族をともに結びつける物質的象徴をも奪ったのである」⁶⁴⁾。

「ギクユの問題を理解しようとする者にとっては、土地所有の問題を正しく把握することがなによりも重要である。それはギクユの民衆の生活を解く鍵である。ギクユの民衆の物質的な要求を満たし、彼らは何物にも妨げられずにケニア山に向かって、魔術と伝統の儀式をおごそかにおこなうことを可能とさせる土地を平和に耕すことのできる保証を、それが与えるからである」⁶⁵⁾。

さらに、

「農耕民として、ギクユの民衆は完全に土地にたよっている。土地は生活に必要な物資

を人びとに与え、それによって民衆の精神的・知的な満足が達成されるのである。祖先の霊との交わりも、部族の祖先たちの埋められた土地に接することによって永続化される。ギクユは大地を『部族の母』と考える。母親は、子どもが胎内にいる 8~9 ヶ月間と、子どもに乳を与えるある短い年月のあいだは苦勞するが、土地は子どもを生涯養い、死んだのちに死者の霊を永久に見守るのもやはり土地だからである。したがって大地は、そのなか、あるいはその上に住む者にとって、何よりも神聖なものである。ギクユのあいだでは、土地はとくに敬われ、永遠の誓いが大地にかけておこなわれるのである」⁶⁶⁾。

「土地」は、部族が起源した太古の昔から、「死者と生者」を結び付ける仲介者だった。「土地」を持たないゴゾは、祖霊との繋がりすべを失ってしまった。ゴゾにとって、土地の喪失は、精神の喪失と同じだった。

作品の初めに、「黒人の土地は赤く、瘦せてごつごつしており、白人入植民の土地は青々として、細切れに引き裂かれていなかったから、誰の目にも区別がついた」とある。「土地」は、この小説だけでなく、グギの全作品で基本命題、キーファクターになっている。「土地」問題が、多くの作品で人間と社会の危機を招いている。第二次大戦後の 1948 年頃までに、ギクユの総人口の四分の一が先祖の土地から引き離されていたという。土地収奪に対するギクユ農民の怒りと反発は、大戦後のナショナリズムの高揚とともに、ますます熱気を帯びてくる。土地を奪った白人に対する暴力と敵意が充満し、入植民追放の声がいよいよ高くなっていく。

「土地」への愛着という点では、ゴゾは第三作目の『一粒の麦』（1967）に登場する農夫ムゴを予測させる。ストライキに際して起ち上がるゴゾの姿は、塹壕へ飛び込んで身重の女を助けるムゴのイメージとも重なる。しかも、ゴゾもムゴもともに敗者である。だが、二人は最後に勇気を示した。ゴゾは、ストライキに起ち上がり、ついで殺人犯の息子の身代わりとなる勇気を示した。ムゴは、最後に演壇に駆け上り、自分が村の英雄キヒカを敵に売り渡した真犯人であることを自白した。

④「隔絶」の壁

『泣くな、わが子よ』では、いくつもの「壁」が目立つ。まず、人種間に「隔絶」の壁がある。インド人と黒人の間、入植白人と黒人の間、そして黒人社会の内部にも隔絶がある。一、二の例を示しておこう。

「ジョローゲは、以前彼にお菓子をくれた親切なインド人の少年のことが忘れられな

かった。その時、彼は母と一緒にだった。ジョローゲは、インド人がそんな親切をほどこしてくれるとは思ってもいなかったから、このインド人の少年の親切にびっくりして、そのお菓子を受け取り、口に入れようとした。その時、母がふり返って叫んだ。

『おや、この一年間、何も食わせてやらなかったとでもいうのかい。汚いインド人の子からもらった物まで口に入れる気なのかい』

ジョローゲはお菓子を投げ出した。しかし、少年がその様子を向こうで見ていたから彼の心は痛んだ」⁶⁷⁾。

次は、シリアナ高校のグラウンドでの、ホーランズの息子スティーブンとの出逢いのシーンでのやりとりである。この時、ヒル高校のフットボール選手との対抗試合があり、二人は応援に来ていたのであった。

「ぼくの兄さん達がナイロビへ行って町を歩いたりしたあと、帰ってきて言ったんだ。ヨーロッパ人がおれ達を見るあの眼つきが嫌だって」

「それは君達だけがそうではないと思うよ。ぼくだって、アフリカ人が自分達を見るあの態度が嫌だって言っている友達の話をよく聞いたよ。ナイロビでも田舎の方でも、外を歩いている時、空は青くてよく晴れた好い日でも、空気の中に何だかピリピリするような緊張が気になって、本当に空だの太陽だのを楽しめないんだ。・・触ることも出来ないし、見えもしないけど、何時でもそんな雰囲気が気になっているんだ」⁶⁸⁾。

以下は、ジョローゲとムイハキの会話の一部である。

「ホーランズさんと君の父さんは友達なの」

「知らないわ。そうじゃないと思うわ。白人と黒人は友達になんかなれないわ。白人はとっても偉いのよ」

「ここの農場に来たことがあるかい」

「ないわ」

「ぼくは、時どき、父さんに会いにここへ来たことがあるんだ。ぼくぐらいの背をした男の子がいるよ。ホーランズさんの息子だと思うけど、肌がすごく白いんだ。だけど、あの子が母さんのスカートにまわりついてるのは気持ちが悪かったね。びくびくしているんだ。でも、眼だけはじっとぼくを見つめてる。変だよ。二度目に行った時はその子独りだけだった。ぼくを見たら立ち上がってこっちへやって来るんだ。何をしようとするんだかわからないんで、ぼく恐くなって逃げ出しちゃった。そしたらあの子は立ち止って見てたけど、しばらくしてから帰って行ったよ。あそこへ行く時は必ず父さんのそばにいるようにしているんだ」⁶⁹⁾。

「隔絶」は、一家の中にもある（ゴゾ一家、ホーランズ一家、ジャコボ一家）。なかでも、世代間の「隔絶」が著しい。ボロとゴゾの間の「隔絶」は悲劇的なまでに決定的である。

終戦をむかえ、ボロがもはや少年ではなく、経験も思慮もそなえた一人前の男として家へ帰ってきた時、そこに彼が見つけたのは、能力があっても働くべき仕事もなく、住むべき土地もないという現実であった。ゴゾの話を聞いているうちに、彼の脳裏にはこれらの思い出が怒りとともに甦ってきた。どうして人びとはなすすべも知らずに白人に自分たちの土地を占領させてしまったのだろうか。予言をあてにするなんて何と迷信深いんだろう。叫び声かと思われるほどの激しさを込めて彼はつぶやいた。

「予言なんて、くそくらえだ」

たしかにそれは独り言にすぎなかった。父に向かって彼は言った。

「自分の土地を奪っちまった奴のところでどうして働いてなんかいられるんだ。どうしてそんな奴に使われていられるんだ」

ボロはその返答を待たずに外へ出て行った。⁷⁰⁾

「彼は息子からこれ以上責められなくなかった。大戦に従軍し、自らの兄弟の死をともに目撃した息子から非難の目で見られる時、彼は自分の負い目を感じるのだった。しかしゴゾは、ボロが戦争で苦しい試練に会ったということはよくわかっていたから、いつでも彼にやさしくしようと努めていた。⁷¹⁾

土地に対する意識の「隔絶」が、ホーランズとゴゾの間に見られる。二人が、農場を見回っていた時のことである。

ゴゾは、この土地のことは自分に一切の責任があると考えていた。彼は、すでに死んだ者、今生きている者、またこれから生まれてくる彼の後裔のためにも、この土地を見守っておく責任を感じているのだった。

ホーランズ氏は、自分の土地を歩いている時、いつも征服者としての誇りを感じずにはおれなかった。わしは独力でこの無人の荒野を切り拓いてきたのだ。⁷²⁾

ホーランズ氏は嘆息をついた。彼はスティーブンが自分のあとを継いで　ここをとりしきっていけるだろうかと考えていた。

「わしのあと、一体誰がここを守っていけるんだろう・・・」

ゴゾの胸は高鳴った。彼もまた自分の子供たちのことを考えていた。あの予言はもうすぐ実現するだろうか。

「どうしてですか、旦那様。お帰りになるのですか」

「いや」
ホーランズ氏はびっくりするほど大声で言った。

「・・・お国へ・・・」
「わしの国はここだ」⁷³⁾。

⑤ ボロの視点

ジョローゲの腹違いの兄ボロの視点からこのドラマを照射してみると面白い。ボロは、先述したように、第二次大戦に従軍し、エジプトやエルサレムやビルマへ行っていた。彼は戦争で人が変わってしまった。復員後は、まったく自分の殻に閉じ込もってしまった。そうした青春時代から、彼は部族の民話に疎いことなど、コミュニティに根っこがない若者として描かれている。ボロは無事復員したが、大の仲良しだった腹違いの弟ムアンギは戦死した。彼の疑問は、なぜ、大人たちは土地を奪われてしまったのか。なぜ、闘わないのかということだった。

コリもまた、第二次大戦に従軍し、復員後はナイロビへ出て、政治運動に参加していた。二人は、土地が戻ってくるのを受身で待っていることは出来ない。ボロは自分の戦争体験から父の生き方を軽蔑していた。

「父は自分の土地から追い出されるために戦争に行ったようなものだ」⁷⁴⁾。

ボロは、マウマウの戦士として森に入ってから、大胆不敵な行動の結果、自由戦士のリーダーになっていた。彼は、自分がマウマウ戦士になった本当の理由は、独立のために戦いたいという気持ちからだといつも自分に言いきかせてきた。しかし、その情熱は間もなく冷め切ってしまい、彼の使命はただ復讐だけとなり、復讐の権化となってしまった。復讐の思いだけが彼に興奮と勇気をあたえていた。

「俺がひとりの白人を殺せば、それだけ殺された仲間の仇を討つことになるのだ。(独立なんて) 幻想にすぎない。殺すために戦うのだ。殺さなければこっちが殺される。それが自然の掟なんだ」⁷⁵⁾。

とはいえ、最後にボロは、ゴゾの祝福を受けることになる。暗闇が小屋にしのび寄っていた。激しい拷問を受け、瀕死の状態で家に戻されたゴゾは、今や死ぬ寸前である。ゴゾが話を続けた。

「ボロは行ってしまいおった。あいつは、わしのことを一役にも立たん老いぼれだと見抜いたんだ。しかしわしは、奴らがあいつをすっかり変えてしまったことがわかっておった。あいつは、このわしのことがよくわかっていなかった—いいか」

ジョローゲはあたりを見まわし、部屋の中に誰かが来ているのに気づいた。ボロが戸口にたたずんでいた。ジョローゲは彼が家の中へ入ってくるのに気づいていた。ボロの髪は長く乱れていて、ジョローゲは思わずぞっとしてたじろいだ。

ボロは、燈火を避けるようにためらいながら父に近づいた。二人の女は根が生えたように立ちすくんでいた。ボロはゴゾが横たわっているベッドの脇にひざまずいた。その時、突然、ボロが口を開くより前に、ジョローゲにはすべてがわかった。彼は息をころして見つめた。

ゴゾは、最初、それがボロだとわからなくてためらっている様子だった。

それから急に瞳に生氣を取り戻した。

「父さん、許してくれ。—おれは知らなかったんだ。—おれは—」

ボロは顔をそむけた。

ゴゾの言葉は奇妙に抑揚がなく、口ごもりがちであった。

「何でもない。ふっふっふっ—おまえも帰って来たのか—わしを笑いものにするためか。おまえの親父を笑いものにしたいか。いや、ふっふっ、わしはただ、おまえ達皆によかれと思っただけだ。行ってほしいなどとは思わなかった—」

「おれは戦わなきゃならなかったんだ」

「ふっふっ、じゃあ、もう行ってしまったりするな」

「おれはここにはいられない。それは出来ない」

ボロはうつろな声で叫んだ。

ある変化がゴゾに現れた。ちょっとした間、彼はかつての毅然として、自信にあふれた一家長の風格を取り戻した。

「ここにいないければいけない」

「いられない。父さん、ゆるしてくれ」

ゴゾは力をふりしぼってベッドの上に座り直した。そして、やっとのことで片手をあげ、ボロの頭の上に置いた。ボロは子供のように見えた。

「よし、しっかり戦うがよい。神と部族に向かって目を開くのだ。おまえ達皆に平安あれ—ふっふっ、あ、ああ、ジョローゲ—おまえの—母さん—頼むぞ」。

この後、ボロは素早く外の暗闇へと走り去った。皆がゴゾに視線を移した時、ゴゾはすでに死んでいた。誰も泣く者はいなかった⁷⁶⁾。

作者はこのシーンの後、小説を急速に結末へもっていく。ボロは父親との和解の後、ホーランズの家へ向かう。ホーランズは、夜間のパトロールに同行する警官と自警団員達を待っているところだった。

戸が開いた。ホーランズ氏は鍵をかけておかなかった。彼はちらりと腕時計を眺めてからふり返った。ピストルが彼の頭を狙っていた。

「動くで一生命はないぞ」

ホーランズ氏は檻に入れられた猛獣のように見えた。

「手を上げろ」

彼は言われた通りにした。いつものあの用心深さはどこへ行ってしまったのだろう。

「ジャコボを殺したのはおれだ」

「わかっている」

「奴はわれわれ黒人の裏切り者だ。おまえはぐるになって、土地の者をしこたま殺し、おれ達の女を汚した。それから最後に、おまえはおれの親父を殺した。何か弁解することがあるか」

ボロの声は平たく、抑揚がなかった。憎しみも怒りも、勝ち誇った調子もなかった。同情の色さえなかった。

「ない」

「ないか。何もないと言うんだな。おまえがおれ達の祖先の土地を奪った時――」

「ここはおれの土地だ」

ホーランズ氏は、〈これは、おれの女だ〉というような調子で怒鳴った。

「おまえの土地だと。ならば、白人の犬め、おまえの土地で死ぬがよい」⁷⁷⁾。

ボロはホーランズを撃ち殺した後、外へ出たところで、行く手を阻んだ警官と自警団員に向かって死に物狂いで発砲し、最後に観念した。彼は「奴は死んだぜ」と言いながら、その時はじめて自分は勝ったと思った。

⑥ ジョローゲの位置

Weep not, child

Weep not, my darling

With these kisses let me remove your tears,

The ravening clouds shall not be long victorious,

They shall not long possess the sky . . .

泣くな、わが子よ

泣くな、愛し子よ
私の接吻で おまえの涙を拭わせておくれ
食欲な雲に いつまでも勝たせておいてはならない
いつまでも空を独り占めさせておいてはならない。

これはウォルト・ホイットマンの「夜の渚にて」(On the Beach at Night)の一節である。小説のタイトルはここから取られている。この一節は、父親の台詞であるから、この小説に戻せば、父ゴゾがジョローゲに聞かせることとなる。にもかかわらず、この小説は、ジョローゲを主人公に、その成長を物語る作品である。

それというのも、ボロが父親と和解したところで小説は終わらず、次の世代、つまりジョローゲに作者の視点に移る。50年代ケニアの非常事態の直前及びその渦中に生きる家族の、そして村人の不安、動揺、失意、希望、落胆、苦悩のすべてが、主人公ジョローゲの幼い人生体験に凝縮される。作者の容赦のないリアリズムは「ぼくの明日は幻想だった」と自覚せざるを得なくなった、作者の分身ジョローゲに向かうのである。

ジョローゲは聡明かつ繊細で、感受性に富んだ、心優しい少年である。物事の暗い面よりも、むしろ明るい面を見つけて、常に「教育」を身につけることで、未来に希望を託して生きようとする。だが、現実の世界は、残酷で、不正義に満ちていることを最後に知らされる。ジョローゲは自己の罪意識と対峙することになる。「自分は卑怯だった」。未来を夢見ているだけでは、現実には対処できないことを思い知らされる。最後に、自殺から救われて、母親たちに家へ連れ戻されるとき、自分が卑怯者であったことに気付くと、彼は家に向かって走り、「二人の母親のために家の戸を開け放つ」(And he ran home and opened the door for his two mothers)⁷⁸⁾。

小説最末尾のこの一文は、自己に課された責任の覚醒と受容の現れであろう。少年の素朴な夢を超えて、そこからの再出発、現実へのコミットメントを予測させ、成熟への道が開かれることを暗示しているように思われる。「二人の母親のために戸を開け放つ」というのは、過去と未来の二つの世界の統合を意味しているだろう。これにより、一家の未来が保障され、二人の妻(母)の間に存在したこれまでの緊張関係が消し去られ、同時に、伝統的な大家族の価値を肯定し、再創造し、アフリカ社会の根底に横たわる一体性が確認されている。否定的な社会の流れを、希望の方向へ振り向ける、積極性を持ってジョローゲ

は未知の未来に向けて生きる意志を取り戻すのである。

最後にジョローゲに教育への道を歩ませた母が登場しているのは一つの救いであろう。彼は自殺から救われる。実母ニョカビは偶然彼を見つけたのではなく、ジョローゲのここに至るまでの気分、心の動きを十分に察知していたのである。ジョローゲは最後の失敗を犯すことから救われた。彼は「自己の責任から逃れる」という間違いを犯し、父親の最後のことばを忘れようとしていた。

しかしながら、ジョローゲの人物形象はこの小説の最大の弱点の一つだと言うほかない。彼の子供っぽい夢は未熟で青臭い。ジョローゲの視点は、あまりにも狭く、限界があるようである。彼は知的な成熟段階にまでは達していない。モラル的な洞察力、勇気、活力に欠けている。ジョローゲは闘争の傍観者である。英雄的な、個人主義的な夢を追っている。教育の力によってのみ民衆を救おうとの彼の夢、キリスト教への期待は、ロマンチズムに支えられている。それが社会的圧力の前に崩れるのである。その夢が破れたときにも、読者にそれほどの同情は生まれない。しかし、幼い彼を押し潰した時代の恐怖だけは、読者も共有できるであろう。作者は、自分で制御できず、理解も出来ない社会の力に苦悩する各登場人物への強い共感を持つ。だが狭い共感だけにはとどまっていない。作者は、決してセンチメンタルにならない冷徹さを維持している。

聖書のイメージが豊富に利用されるのも、次の小説『一粒の麦』と同じである。キリスト教の教えが、ジョローゲの信仰のままに賞賛されているが、一方で宗教への盲目的帰依による現実逃避が批判的に見られている。最後にキリスト教の権威は失墜し、その内容が空疎なものであることを思い知らされる。ジョローゲが自ら信じる聖書のことばを唱えても、読者はその真意、信憑性を疑うように書かれている。現実はそれほど甘くないことを、読者は容易に予測してしまうのである。

だが、ジョローゲは状況全体を見据えるポジションに立たされている。過敏なまでに繊細。常に夢見る少年、困難に出逢うたびに、来るべき佳き日の到来を信じている。しばしば、曖昧な言説、自分の運命を御せない人物造型がのぞく。しばしば、行動力に欠けて、生活の現実を見つめ得ない弱点がのぞく。そのジョローゲこそは、状況の典型的な犠牲者である。作者は、この年齢の少年には理解も対応も不可能に思える課題を突き付けているように思われる。グギ自身が、この闘争のすべての意味を、その当時には理解していなかったと述べているほどだ⁷⁹⁾。

ジョローゲが抱いた素朴な夢は挫折した。しかし、ジョローゲは失敗したのだろうか。あまりに若すぎる。夢が行動にまで結びつかない。安全に守られた世界のなかで、将来の夢、英雄的な夢を描いている。そして、ついに現実世界へ放り出されたとき、その広がり、問題の複雑さの前に、彼は自殺を考えるのである。

その意味で、『泣くな、わが子よ』は、若い世代に、独立へ至るまでの暗い夜の記憶を突き付けたと言えるだろう。ジョローゲの世代はどうすればよいのか。絶望にくれるのか、平等と正義の社会実現のための闘いに参加するのか。

この小説は、ゴゾ一家の一人ひとりの経験、コミュニティ全体の集団の経験と記憶を踏み台に、新しい時代を生き抜かねばならないという決意を、ジョローゲの世代に突き付けたのだった。個人の主張や行動でなく、コミュニティの共同行動の必要を説いている。団結の必要。社会の不一致と社会的調和の欠如を説いている。背景にマウマウの武装闘争がある。「すべては闘い取るものだ」とのメッセージがある。絶望や退却はありえない。当然ながら、この小説は子供の読み物ではない。

『泣くな、わが子よ』は、プロットも人物形象もシンプルな小説である。難しい語彙の使用はほとんどなく、多くの文章は短く、単純である。短いエピソードが連続して、並列的に繋がっていく。場面の転換、登場人物の交替は急で、同一チャプターで、急に事件が転換していることも多いが、最後にはきちんと纏め上げられている。

『川を隔てて』を含めて、この作品には、その後の代表作『一粒の麦』『血の花弁』で成熟を見せる人間観察のブループリントが込められている。力強く、純粹で飾らない文体を通じて伝わってくる徹底したリアリズムは、鋭い迫力を持っており、読者に最後のページまで一気に読ませるだけの力量を見せ付けている。

Ⅶ. 中期の短篇と戯曲：アフリカと西欧の衝突

短篇集第2部は「戦士と殉教者」(Fighters and Martyrs)と題されて、6篇を収録している。うち5篇はマケレレ大学時代の執筆であるが、「グッドバイ・アフリカ」は、卒業後の海外留学を終えてケニアへ帰国した1967年以降の執筆である。なお、「黒い鳥」と「ベンツ族の男」は、マケレレ大学時代に最初のス

ケッチが構想されたとのことであるが、その内容から、便宜上、前者を初期に、後者を後期に分類した。ここでは残りの 4 篇を扱う。

① 四つの中期短篇

これら中期 4 篇は、白人の到来から、ケニアを去るまでの時期を対象にしている。とりわけ、「闇夜の逢引き」、「グッドバイ・アフリカ」などは、アフリカと西洋の二つの世界の衝突、新しいキリスト教教育、それに伴う西欧的生活様式が伝統的な生活や価値観に及ぼした影響を扱い、そこから生じる緊張、価値の衝突を描いている。これらの短篇には、小説作品のモチーフの一部を強く想起させるものがある。

これら中期短篇では、初期 5 篇で見られたような神秘的モチーフは影をひそめて、動乱期の〈個と社会の軋轢〉に焦点が移っている。「殉教者」と「帰還」は、マウマウ戦争に取材している。

a. 「殉教者」(The Martyr) ⁸⁰⁾

暴力が全土に広がる中、入植民ガーストン夫妻が殺害される。だが、この事件は、物語の本筋を誘うための導入にすぎない。

丘の上に立つ見事な館に、ヒル夫人が独りで住んでいる。夫は初期の入植民だったが、すでに病死。一人息子と娘は「本国」、つまりイギリスへ留学している。彼女は、広大な茶農場の経営者で、多数のアフリカ人を雇い入れており、他の入植民の尊敬の的である。

ヒル夫人は、原住民は本来従順で、親切に扱ってやるに限ると考える「リベラル」、「進歩的」タイプの白人である。茶飲み友達に、スマイルズ夫人とハーディー夫人がいる。スマイルズ夫人は、宣教師肌で、原住民を開化させる白人の役割を信じている。ハーディー夫人はオランダ系（ボーア人）で、南アフリカからの移住者である。自前の意見は持たず、夫やボーア人一般の平均的な意見に追随している。この日は、もっぱらスマイルズ夫人の意見に同調している。

ヒル夫人は、農場労働者のために煉瓦造りのクォーターを造り、彼らの子弟のためには学校を建てたことを誇りにしている。スマイルズ夫人は、「アフリカ人が文明化するはずがない、そもそも文明を受け入れる能力がない」と自説を曲げない。ヒル夫人は「寛容」を説いている。この日の三人の話題は、とうぜんガーストン夫妻殺害におよんだ。夫妻が長年使ってきたハウスポーイが暴漢を導いて、犯行に至ったという。

ティータイムとなり、ヒル夫人がジョローゲを呼ぶ。彼は中年のハウスポーイで、すでに 10 年以上勤めている。ヒル夫人は、ジョローゲが忠実な召使いであることを吹聴する。

夕闇が迫り、スマイルズ夫人とハーディー夫人は帰っていく。後に残ったヒル夫人に、たちまち不安が襲ってくる。肌身離さないピストルだけが頼りである。夕食が終わり、ジョローゲの一日の勤めも終わる。背後にヒル夫人の大きな館のシルエットを見ながら、その日の労働を終えて、麓のクォーターへ急ぐジョローゲの心中に怒りが、土地を奪った白人に対する憎悪が込み上げてくる。闇の中で、不吉な鳥が鳴いている。

ジョローゲの父は、「ナイロビの大虐殺」(1922)⁸¹⁾で殺されていた。アフリカ人の指導者の逮捕に抗議し、土地の奪還を求めるデモだったが、警官が発砲したのだった。以後、ジョローゲは各地の白人農場で働き、いろんなタイプの主人を見てきた。誰もが威圧的だった。そして奇しくも、今のヒル夫人の土地は、父が一家のものだと言っていた土地だった。飢饉のために、かつて一家がムランガへ疎開していた間に、奪われたのだった。父は、ヨーロッパ人はいつか去る、そうすれば土地は必ず戻ってくる、と子供のジョローゲに言い聞かせていた。

父の死後、ヒル夫人の家で働き始めると、昔の記憶が蘇った。ジョローゲはヒル夫人を好きになれなかった。もっと残酷なタイプの白人には慣れてしたが、ヒル夫人が示すような、これ見よがしの温情的態度、偽善は好きになれなかった。そうした温情は、結局のところ、他の誰とも変わらない、むしろ、もっと酷いと思った。ジョローゲは、突然声に出して叫んだ。「みんな嫌いだ」。「今晚、ヒル夫人は死ぬ。入植民の罪を背負って、死ぬのだ」。

ジョローゲは自分の住居へ戻った。同僚の使用人は誰もが寝ているか、原住民リザーブへ飲みに出かけていた。部屋は狭かった。ここに、二人の妻と子供たちと一緒に住んで、いつかは父の仇を打ちたいと思っていた。それで、妻と子供たちは、すでにリザーブへ戻っていた。復讐の足手まといになると思ったからだ。自由の戦士の仲間(Ihĩĩ)⁸²⁾が、今にもやって来そうだった。彼は、仲間を先導する約束だった。鳥が不吉な声で鳴いた。その時、ヒル夫人のこと、その夫、子供たちのこと、この一家の絆がジョローゲの頭をかすめた。突然、ヒル夫人が一人の女、妻、とりわけ母親に見えてきた。「女を殺すわけにはいかない」。「母親を殺すわけにはいかない」。ジョローゲは自分の心変わりを自分に責めた。入植民としてのみ彼女を見るべきだと思った。自分は、入植民とすべてのヨーロッパ人を嫌ってきたのでなかったか。ジョローゲの中に、二人の自分がいた。苦しみと恥辱の年月は確かだ。どうすればよいのか。「今は出来そうにない」。ならば、「自

由の戦士仲間を裏切るのか」。ジョローゲは、館に向けて登り始めた。天には星々があったが、周囲は鬱蒼とした闇だった。「ヒル夫人を助けよう。その後で、戦士の仲間に入ろう」。猶予はなかった。仲間が今にもやって来そうだった。ジョローゲが走り出した時、大勢の足音が遠くから響いてきた。仲間が裏切りを知れば、自分が殺されることはわかっていた。急がなければならない。

ジョローゲが去った後、不安に襲われて寝つけなかったヒル夫人は、ピストルを用意した。ジョローゲに妻はいるのだろうか、家族がいるのだろうか。不可解な男だと思った。ジョローゲのことをこんな風に考えたのは初めてだった。この時、「奥さま、奥さま」(Memsahib)⁸³⁾と呼ぶ声が聞こえた。その声は、間違いなくジョローゲだった。ガーストン夫妻殺害のシーンがヒル夫人の頭をよぎった。覚悟した彼女は、戸を開けて、「さあ、私を殺すがよい」と叫ぶや、発砲した。

翌日、スマイルズ夫人とハーディー夫人が見舞いにやって来た。新聞は、勇気ある独り住まいの女性が、50人の暴漢と闘い、犯人の殺害に成功した、と偉業をたたえた。スマイルズ夫人が言った「みんな悪い奴らだと言っておいたでしょう」。ハーディー夫人が同調した。ヒル夫人は沈黙していた。ジョローゲのことを考えると、ますます不可解になった。「わからないわ」。スマイルズ夫人が「その通りよ、あてに出来ないのよ。誰もかれも、鞭で懲らしめてやるべきだわ」と言うと、ハーディー夫人が同調した。「そうよ、鞭で懲らしめてやるべきよ」。

ケープタウンで刊行されていた『ニュー・アフリカン』第1巻6号(1962)に発表。この短篇集の中で最良の作品だとの評がある⁸⁴⁾。マウマウ非常事態下での殺人事件を扱っているが、アフリカ人の視点と白人の視点の両者が提供されており、非常事態下のケニアの小宇宙をえぐる作品である。登場人物のヒル夫人、スマイルズ夫人、ハーディー夫人は三者三様に、人物像が類型化されている。物語は、ヒル夫人の視点から、最後に主人公の召使いジョローゲの視点へと移っていく。ヒル夫人に危険を知らせに行くのは、自由の戦士仲間への「裏切り」である。聞こえてくる不吉な鳥(フクロウ)の声は、ヒル夫人でなくジョローゲの死を予告していた。

b. 「帰還」(The Return)⁸⁵⁾

男が、埃の立つ長い道路を歩いている。拘留生活を終えて、今、故郷へ向けて帰るところである。男の名はカマウ。周囲には、痩せた黒人の土地が見えるが、白人入植民の

青々とした肥沃な土地と対照をなしている。だが、その景観は、非常事態以前と特に変わらない。

村が近づいてきた。木々が繁茂し、ホニア川が息づいて流れている証拠だ。そこは、幼い時からの思い出に満ちた川だった。数人の女が水を汲んでいた。一人、二人は、故郷の村の、記憶に残る女であった。皆が自分の帰還を喜んで迎えてくれるだろうか。白人に奪われた土地の奪還のために闘った村のヒーローを歓迎してくれるだろうか。

女たちに声をかけてみたが、なぜか返答は鈍い。「私のことを覚えていないのだろうか」。冷たく、陰しい表情である。私のことを、知らないと言っても言いたげである。顔なじみのワンジクがいた。「カマウね」。だが、その後、彼女の言葉は途切れた。女たちの間に取り交わした秘密があるのだろうか。「もしかしたら、私はもう村の仲間ではないのだろうか」。古い村のたたずまいはなく、何もかもがすっかり変わっていた。

カマウは、家族との再会を思い描きながら歩き続けた。妻のムゾニのことが自然と思い出された。彼女とは 2 週間、一緒に過ごただけで、その後、植民地軍の手で、裁判もなく拘留されたのだった。拘留中も、村と新婚の妻のことだけを考えていた。

拘留中は、誰の思いも同じだった。身重の妻を残してきた男もいた。別の男は、生まれたばかりの赤ん坊と妻を残してきた。誰もが帰還の日を夢見ていた。カマウは、妻への婚資さえ払い終えていなかった。帰還すれば、ナイロビで働いて、婚資を払いきろう。人生を新しくやり直そう。これまでの人生は、怒りと苦痛の連続だった。だが「いつか、白人は出て行く」「いつか、自由になる」との信念を捨てなかった。

新しい村が見えてきた。泥壁の小屋が密集していた。太陽は沈みかけていた。カマウは自分の家を見つけた。年老いた父が目に入り、声をかけた。父は黙っていた。突然、われに返ったように父の全身が震え始めた。眼に恐怖の表情があった。母が姿を現し、次いで兄弟が集まってきた。母はカマウにしがみついて激しく泣いた。「お前が帰ってくることはわかっていた。死んでなんかいないとわかっていた」。「カランジャが、お前は死んだと触れまわったのよ」。

カマウは、この時、すべてがわかった。カランジャは昔からの恋敵だった。だが、カランジャと同じ拘留キャンプにいたのではなかった。妻のムゾニの姿がなかった。母が言った「ムゾニは出て行った。いい娘だったよ。長い間、お前を待ち続けたが、カランジャが戻ってきて、お前は死んだと知らせたよ。やがてあの娘にカランジャの子供が生まれた。ここには土地もないし、食うものもない。カランジャがあの娘を連れて町へ行

った。身体の悪い者か、年寄りしかここには残っていない」。

カマウは聞いていなかった。苦い思いがこみあげた。皆が彼を裏切ったのだ。キャンプの 5 年間は短くはなかった。しかし、なぜ、彼女を行かせてしまったのか。誰彼なく非難したいと思ったが、苦いものが喉につかえて、言葉が出なかった。

カマウは家を出て、ホニア川の前に立った。地平線に黄色い月が出ていた。流れは速く、止まることなく、単調な音を立てていた。森では、コオロギやほかの虫が止むことなく鳴いていた。コートを手を脱ごうとした時、それまでしっかりと握りしめていた小包が手を離れて、ホニア川に転がり落ちた。それまで後生大切に持ち続けたムゾニの思い出の品が包まれていた。一瞬、取り戻したいと思ったが、あとは流れるままにまかせた。なぜか、安堵の気持ちが湧いてきた。川に溺れて死のうとの思いは消えた。再びコートを身に着けながら、彼はつぶやいた。「私の帰還を待ち続けなければならないだろうか。私の帰還まで、どんな変化も起きてはならないなんてことがあるものか」。

『ペンポイント』第 11 号 (1961 年 10 月) に発表された。カンパラで出ていた『トランジション』第 2 巻 3 号 (1962 年 1 月) にも掲載された。非常事態から生じた、村の、そして家族の緊張を扱っている。拘留キャンプから帰還する主人公カマウの心中が連続的に描写される。怒りと苦痛、不安な予測。「帰還」(return) は、「帰郷」(homecoming)、「裏切り」(betrayal) などと並んで、長短篇を通じてグギ作品の馴染みのモチーフの一つである。だが、ここでの「帰還」は残酷である。昔の恋敵カランジャが新妻のムゾニを横取りしてしまっていた。ここに見られるのは、小説『一粒の麦』のギコニヨ、カランジャ、ムンビの関係と似ている。妻ムゾニは、カマウが刑務所で死んだとのカランジャの嘘を信じたのであろう。カマウの小包が、ホニア川に流れていくが、これは過去が水に流されるということであろうか。犠牲者はカマウだけではなかった。誰もが殉教者なのだ。カマウは、生き抜かねばならない。

c. 「闇夜の逢引き」(A Meeting in the Dark) ⁸⁶⁾

父が村の通りを歩いて来るのを、息子のジョンが戸口から見ている。父はいつものバッグを携えている。聖書と讃美歌集、そしてノートとペンが入っているのだ。父はカルビン派の厳格な牧師だ。部族の伝統宗教を捨ててからは、母がギクユの昔話を語ることさえ禁じてしまった。ジョンは小屋に入り、父の帰りを母に知らせた。父の帰宅と入れ替わりに、ジョンが小屋を出て行こうとすると、父が呼び止めた。ジョンの胸が騒いだ。

「知っているのだろうか」。ジョンは父の視線が嫌だった。「なぜ、顔をそむける、何かあったのか」と父が尋ねた。父が知っているはずがない、とジョンは思った。「出発は何時だ」と、また父が尋ねた。「来週、火曜日です」。「村をうろつくでないぞ」と父が忠告した。

ジョンが出て行ってから、母が夫に言った「どうして、あの子にそんなに厳しくあたるのかい」。二人の結婚生活は長く、幸せだったが、夫のキリスト教への改宗以後、家庭の雰囲気がすっかり変わった。やがて、母も改宗した。しかし、母はジョンの味方であり続けた。ジョンは父を恐れて育った。ジョンは、両親が改宗する前に生まれた息子だった。

通りへ出たジョンは、村を見渡した。草葺きで、泥壁の醜い小屋が密集していた。日没が近かった。一家が住むマケノ村は、マウマウ戦争時に造られた新興村の一つだった。すれ違った女が「元気かい」と声をかけてきた。ジョンは丁重に答えた。彼は、生来、礼儀正しかった。外国へ留学して、白人女や、英語を話す黒人女を連れて帰るような青年ではなかった。ジョンは、キリスト教牧師の息子ではあったが、部族を裏切ることはないと、誰もが信じていた。来週にもウガンダのマケレレ大学へ留学する予定だった。村の誰もがそのことを知っていた。だが、彼は不安に苛まれていた。「父は気付いているのではないか、村人に知られてしまうのではないか」。

ティーショップに入ると、居合わせた誰もが、牧師の息子ジョンが、ケニアでの白人の学問を終えて、ウガンダへ留学することを知っていた。彼は村の誇りだった。暗くなった頃、家へ帰ると、父はまたも聖書を開いていた。

ジョンは、恋人のワムフが二人の秘密を漏らしていないことを願った。食事の後、自分の小屋へ戻ると、コートをまとい、帽子をかぶった。ランタンを点けたままにして、中庭を通り抜け、通りへ出た。若い男女が、往来で笑い、さざめいていた。「この人たちは、僕よりも自由だ」とジョンは羨んだ。彼は、村の中ほどの、ある小屋に着いた。そこは恋人のワムフが住む家だった。ワムフはいなくて、家族の者がいた。ワムフは学校教育をほとんど受けていなかったが、魅力的な娘だった。ワムフの両親、とりわけ母親は、ジョンとワムフの仲を見抜いていた。ジョンは引き返そうとして、茶摘みから帰ってきたワムフと出会った。

ワムフは割礼を済ませた一人前の女性だった。しかし、白人の到来以後、部族の慣行が揺らいでいた。キリスト教に改宗した者は、娘に割礼をさせてはならなかったし、息子をそのような娘と結婚させてはならなかった。男女の間のモラルがすっかり混乱して

いた。ワムフの母は娘とジョンの結婚を望んだが、父親はあくまでありえないこととして反対していた。

ジョンはワムフと連れ立って歩きながら、恥辱を覚えた。ワムフは、リムルでも、最も美しい女性だった。その彼女と一緒にいるところを、他人に見られたくないと思った。村はずれまで来て、二人は立ち止った。暗闇が二人を包んだ。「あなたは1週間だけ、待ってほしいと言ったわね。今日で1週間が経つわ」。「君のせいだよ」と、ジョンが彼女を責めた。ワムフは妊娠していた。ワムフの母はそれに感づいていた。もう待てなかった。「もう3週間待ってくれないか。いや、明日まででいい。明日には家の者に話すから」。彼女は帰って行った。

ジョンは罪意識にひしがれながら、家路についた。星々が冷たく輝いていた。祈ろうとしたが、誰に祈ってよいのかわからなかった。ワムフと結婚すれば、大学進学は夢は破れるだろう。小屋へ戻った彼は、その夜、自分が割礼を受けた夢を見た。誰かが憐れんで、割礼をしてくれたのだった。

翌朝、濃い霧が出た。その日の夜が「最後の審判の日」になるのだった。昼の間、ジョンは父と一緒に留学準備の品を買いに出かけた。父は、昨晚の祈りに出なかった息子を責めることを忘れなかった。夕方になって、ジョンはふりかかる自滅を思った。救いの道があるだろうか。約束の場所でワムフに会うと、彼は言った。「君にお金を渡す。誰か他の男のせいだと言ってくれないか」。

当世では、多くの若者がこんな風だった。金を貰った男は、金をくれた女との結婚を了承するのだった。ワムフは、金を受け取ろうとしなかった。「200 シリング」「300 シリング」。彼女は泣き出した。彼女が泣いているうちに、ジョンは初めの200 シリングから、50,000 シリングまで吊り上げていた。ジョンは必死だった。気が狂っていた。彼女の両肩を掴んで、激しく身体を揺すった。50,000 シリングからなお増え続けた。ジョンは、逃げ出した彼女を追いかけ、身体を揺すり、激しく締め付けた。彼女は恐ろしい叫びをあげて、その場に倒れ、動かなくなった。ジョンは震えて、その場に立ちつくした。

厳格なクリスチャンの牧師である父親が登場する。その息子が主人公のジョンである。彼はケニアで出来る白人の学問をすっかり修め、マケレレ留学も近い。彼の謙虚さ、道徳的完璧さは、村人の期待と尊敬を集めている。だが、ジョンは二つの世界の子供である。彼は自分の罪をなじる世界に対して、自分の

行動を弁明しようと努めるが、キリスト教の神に祈ってよいのか、部族の神に祈ってよいのかわからない。白人の慣習に接したこともなく、ひたすらロバのように働き、人生を信じているとも、部族を信じているともわからない老婆に、ジョンはむしろ確かなものを感じ、高等教育を受けていない、ごく普通の青年男女の自由闊達な感情の発散を羨ましく思うのである。彼は、今やそこから飛び立とうとしている。手にした成功のチャンスを逃したくはない。二つの世界の精霊に引っ張られ、憔悴し、錯乱した主人公は、ついに自分が身ごもらせた娘を絞殺し、自分の将来を破滅させてしまう。不毛の結末である。彼が見た割礼の夢は、むしろ死の予兆だった。

d. 「グッドバイ・アフリカ」(Goodbye Africa) ⁸⁷⁾

独立以前の 15 年間、ケニアで暮らしてきた白人夫婦の物語である。明日にはイギリスへ帰国しなければならない、ケニアでの最後の夜である。夫婦の絆は、とおの昔に崩れている。だが、今夜こそ、アフリカでの秘密を告白して、たがいに許し合いたいと思っていた。

妻は台所でコーヒーをたてている。夫は居間のソファに腰を下ろし、本を開いている。しかし、読んでいる様子はない。彼女がコーヒーを運んで来た。夫は目を合わせるのを避けているようである。

植民地の 15 年間は短くなかった。妻は、夫もまたアフリカとの別れを惜しんでいると思っていた。「夫のことを、もっとわかってあげよう。今夜こそ、秘密を打ち明けよう」。彼女は夫のそばへ行き、声をかけた「さあ、やすみましようよ、パーティの騒ぎで疲れたでしょう」。夫は、カップを置いて言った。「先に寝たまえ、すぐに行くから」。

夫はウィスキーを飲み始めた。何ヶ月か前まで、彼は事件のことをすっかり忘れていた。ところが、こここのところ、何度も男が夢に出るようになり、幻影に取り憑かれた。最初は、夜間に顔が現れるだけで、ベッドに横になるのが怖かった。ここ数日は、真昼間から男の顔が現れる始末だった。彼が殺害を命じた多数のテロリストの霊が現れることはなかった。なぜか、この男の霊だけが、今頃になって現れるのだった。男は、彼の農場に雇われたシャンバ・ボーイ（作男）だった。もとは従順な、模範的な使用人だった。古靴や古着をやると、ことのほか喜んでいた。

あるクリスマスの日、そのシャンバ・ボーイが、くれてやったコートと 10 シリングを投げ返し、嘲りの笑みを浮かべながら、屋敷から姿を消した。妻の悲嘆は、尋常でなかった。夫は、後にテロリストの尋問にあたった時に、偶然にも、このシャンバ・ボーイ

と再会することになる。

すっかり酔いがまわってきた。暗闇の中、車を走らせたが、行く先はなかった。気が狂ったように乱暴に走らせた末、やがて木立の中に車を止めた。彼は、アフリカの呪術や呪いの話を思い出した。この暗闇の中で、呪い除けのお祓いをしようと思った。裸になり、車から出ると、森の奥へ進んだ。シャンバ・ボーイの蠟人形を作って、呪いをかけたいと思ったが、その用意はなかった。彼は、怒りに狂って踊り始めた。

ケニアでは万事が転倒していると思った。植民地政府の崇高な任務を辞めて、黒人に引き渡すなんてことは予想も出来なかった。妻の嘲るような表情と視線も耐えられなかった。彼は、車へ戻り、妻に宛てた手紙を書いた。「俺があの子の顔を恐れていることは、お前の知っている通りだ。お前は俺をずっと嘲笑してきたではないか。確かに俺は敗残者だ。職場の地位だって、シニアどまりだ。アフリカで俺は挫折した」。

彼は書き続けた。「どこかで間違いが起きた。暗黒大陸を歴史の舞台へ引き上げてやろうとして、俺は努力した。絶望のどん底に沈むこともあった。そんな矢先、シャンバ・ボーイに会った。あの男は、私がくれてやろうとしたものを投げつけて、そのまま姿を消した。マウマウで森へこもったのだろうか。その後、あいつは悪魔の表情をして、オフィスに現れた。屋敷で働いていた時のような従順な表情はなかった。俺は激しい怒りを覚えた。顔に唾を吐きかけてやったが、奴の傲慢な眼つきは変わらなかった。その眼には暴力が宿っていた。にんまりと冷い笑いが浮かんでいた。彼は何一つ自白しなかった。しかし、俺は命令を下した。奴は森へ連れて行かれ、以後、見られなくなった」⁸⁸⁾。

彼は怒り狂って書きつけた。何もかも告白するかのように書きつけた。「俺は、アフリカと別れて、イギリスへ戻ろう、お前ともう一度やり直すのだ」。彼は、今夜こそ、妻と一つになろうと高ぶっていた。

妻は寝ずに待っていた。アフリカでの最後の夜を、夫と共に分かち合おうと願っていた。彼女は15年の生活を振り返った。初めの頃、夫が抱く野心、アフリカ文明化の仕事に心から共感した。彼女自身も、黒人女性の集会に出たり、片言のスワヒリ語を話したりした。アフリカをもっと知りたかった。その頃、二人が目指したものに、大した違いはなかった。何年か経つと、夫はもっと遠くへ行ってしまうていた。妻は当初の熱気を失っていた。「誰かを、誰かが文明化するとは、どういうことなのだろうか」。「そもそも、文明とは何なのだろうか」。「なぜ、夫は出世にこだわるのだろうか」。彼女は足手まといになりたくなかったが、アフリカを理解したいなどとも思わなかった。ヨーロッパだって、自分が生まれたオーストラリアだって、丸ごと理解したいと思ったことはなかった。

一つの大陸を理解するなんて、所詮不可能なことだった。

非常事態の前、彼女は散歩に出かけることが多くなった。夫との間に子供は恵まれなかった。その頃、彼女はシャンバ・ボーイとバナナ園で関係を結んだ。以後の日々、まるで熱に浮かされたように、彼女は抱擁を繰り返した。夫だけの世界から引き離されて、これまでにない解放感を経験した。

帰宅した夫を、妻はベッドに誘った。今夜こそ、自分の秘密を夫に明かそうと思った。彼女は愛撫しながら夫に言った。「私を許してくれる？」「もちろんだよ、どんなことだって」。彼が手帳にしたためた以上の秘密が、妻にあるなどとは想像できなかった。彼は、シャンバ・ボーイの亡霊のことを妻に話したいと思っていた。彼女の方から、自分の不貞の話を持ち出した。彼の全身から力と血が引いた。彼女は、何もかも告白して、イギリスでやり直すことを願っていた。話が終わると、夫は起き上がり、沈黙のまま、居間へ向かった。妻は暗い恐怖を覚えた。「行かないで。ずっと昔、非常事態よりもっと前のことなのよ」。

夫はソファに座り、飲み残したコーヒー茶碗を握んだ。もともと虚栄心の強い男だった。自分でも完璧な夫だと思っていた。彼女の貞節を疑ったことはなかった。植民地ケニアの官僚として、自分の出世とアフリカ人の向上を願っている間に、家庭をおろそかにし、黒人の男に妻を寝取られたのだ。コーヒー茶碗が手元から滑り落ちて、粉々に割れた。

手帳を取り出して、パラパラと開いた。「アフリカに住む白人は、家庭でも、世間でも、いっそう厳しい道徳基準を受け入れなければならない。帝国臣民が熱望する理想を定めなければならない」と書かれてあった。立ち上がると、彼は台所に入り、ノートに火をつけた。炎が指を焼いたが、苦痛はなかった。男の亡霊、アフリカは、いつまでも彼を追いかけることだろう。

ケニアを後に、本国へ帰る前夜である。白人夫妻には、それぞれの思い出が付きまとう。夫は、アフリカ文明化の使命を自らに課した植民地政府の役人だった。この夜、隠し持つ秘密を妻に打ち明けて、帰国後の生活を再スタートさせたいと望んでいる。

マウマウの非常事態時に、嫌疑が曖昧なまま、私恨が絡んで、殺害を命じた元シャンバ・ボーイの亡霊が、ケニアを去る日が近づくにつれて、昼夜の隔て

なく、悪夢のように付きまとった。妻もまた、夫に告白しなければならない秘密があった。こともあろうに、そのシャンバ・ボーイとの情交であった。たがいが知らないまま、それぞれが隠し持ってきた秘密が、同家で働いていたシャンバ・ボーイをめぐるものだったとは、皮肉というよりも、運命の悪戯とすべきであろうか。非常事態は、夫から人間性を奪った。今、この二人を結ぶ絆は何だろうか。夫婦は、「グッドバイ・アフリカ」と心から言えるのだろうか。

幕間：リーズ大学留学

1964年4月、マケレレ大学英文科を卒業した。同年9月に、イギリスのリーズ大学大学院コースへ留学した。まだ見ぬ旧宗主国への留学を前に、次のように述べている。

「もはや、短篇を書く泉は枯渇した。今度は、イギリスとの出会いについて書こう」⁸⁹⁾。

だが、この決意は空しかった。書くことが出来なかった。そればかりか、研究テーマ「西インド文学」で修士の学位を取ることも出来なかった。ヨークシャの沼沢、ブロンテが描く田舎風景、スコットランドの高地、特に黄色いハリエニシダと銀色のカバの木の茂るインバネスはどこも美しかった。しかし、これらの風景は、故郷リムルの景色と重なった。突如西の方でリフトバレーへと急降下する生地リムルの自然、その美と恐怖の記憶を反芻する中で、彼は後に作家としての国際的地位を不動のものにする、名作の誉れ高い小説『一粒の麦』の執筆に専念した。

リーズ大学の知的・イデオロギー的雰囲気は、政治的・文学的傾向の一大転機となった。それまでの作品に見られたような、一人の救世主的人物、教育エリートは退場し、農民や労働者に対する集団的な関心、個人よりも群衆、エリートよりもごく普通の民衆に関心が向かった。個人が描かれる場合でも、大衆との関係が重要視され、個人は、大衆の代理行為者と言えるような性格が濃くなった。過去と現在、そして未来とのつながりが重視された。一言でいえば、歴史の考察の枠組みが拡大した。それに伴って、文芸的手法にも革新的な発展が見られた。『一粒の麦』に顕著にこの傾向が表れる。リーズ大学時代の文学と思想の発展については、第5部で詳述することになる。

② 一つの中期戯曲

『一粒の麦』執筆と重なる時期に一つの戯曲を書いている。先にも触れた「明日の今頃」である。これは、リーズ大学留学中に書かれた第4作目の戯曲で、

1967 年 11 月、BBC のアフリカ向け番組「アフリカ演劇シリーズ」で放送された（11 月 27 日に東アフリカ向け、11 月 30 日に西アフリカ向けに放送）。この作品は、「中期戯曲」として扱うことにしよう。

a. 「明日の今頃」(This Time Tomorrow) ⁹⁰⁾

1 幕もの。舞台片隅で、「ジャーナリスト」が激しくタイプを打っている。スポットライトがその姿に焦点を絞り、ほかは暗闇である。「早く仕上げろ」との編集長の声が響く。やがて、タイプの音が止み、出来上がった原稿を満足げにジャーナリストが読み直している。昨日取材したばかりの「スラム取り壊し」の特集記事の原稿である。「クリーン・ザ・シティ」キャンペーンが始まり、「エリコ」の壁が崩れるように、スラムの一角が取り壊された。以下で、原稿を追いつながりながら、観客（読者）は昨日のジャーナリストの取材を追体験することになる。

場所は、未明のカントリーバス・ターミナルに近いスラムの一角、「ウフル・マーケット」（注、Uhuru「ウフル」とは、「独立」の意）と言われる場所。ダンボールと腐ったブリキで組み立てた粗末な小屋が密集している。母親ジャンゴが娘ワンジロをたたき起こしている。暗い中、ジャンゴが薪を割り、火を起し、ワンジロが戸口で掃除を始める。二人は、朝のスープをつくり、これを売って生計を立てている。やがて、陽が昇り、鶏が関を告げ、赤ん坊の泣き声がして、あたりが急に騒がしくなってくる。小便のきつい臭いが漂ってくる。スラムが起き出したのである。

ワンジロは 16 歳。兄は叔父の家に身を寄せ、学校に通っていると言う。自分だけがスラムに残り、ボロをまとい、毎日母の仕事を手伝わされている。母は子育ての苦労話を聞かせるが、「生んでくれとは言わなかったわ」と娘も遠慮がない。ワンジロには、アシンジョという名の好きな若者がいるが、仕事がなく、しかもよその部族の男だと言うことで、母は交際を許さない。ワンジロはきらびやかな都心を歩いてみたいが、「この町は私たちのものではない」と母が言う。しかし、ワンジロはある人物「よそ者」(Stranger) が、「町はわれわれのもの。独立のために闘った人々のもの」と主張しているのを聞いていた。ジャンゴは、そんな考えは信じない。スラムからの立ち退き期限が迫っているが、自分はここに留まると言う。その日、立ち退き反対のデモが予定されていた。

やがて、人声が騒がしくなり、往来するバスの音が高くなる。焼肉がたてる音も聞こえる。ジャーナリストがスープを飲み、屋台に立ち寄る。一杯 20 セントの安値である。商売の競争は激しいが、ジャンゴは「おふくろ」と親しまれ、客も多い。そこへ、拡声器を持って、市役所の役人であるキオンゴが来て、スラム取り壊しの猶予期間が今日の正午に終

わると触れ回る。

ジャンゴは「よそ者」の話を聞いたことはないが、危険な人物だと疑っており、娘がその人物と接触しないよう警告している。彼女の夫も、生前に「よそ者」と同じことを主張していたからである。彼女の夫、つまりワンジロの父は、マウマウ戦争で森へこもり、デダン・キマジと一緒に闘った末、処刑されたのだった。

客のなかに、「われわれの家を潰させるな」「これが黒人の政府のすることか」と声を張り上げている者がいる。キオンゴが「クリーン・ザ・シティ」キャンペーンの開始を告げ、観光客誘致のために「アフリカの真珠」に譬えられるこの町の恥にならないように、スラムを壊そうと触れている。キオンゴは、昔は、ジャンゴの店の常連客だったが、植民地政府に協力してから、出世し、成功を収めていた。

ジャーナリストがカメラとノートを持って登場。写真を撮り、スラム住民にインタビューしている。元はリフトバレーで借地人生活をしていたというブリキ職人、元マウマウ戦士であったという靴職人などが、スラムに落ち着くまでの半生を語る。誰もが植民地下の苦渋の経験を反芻し、独立の闘いの目的が見失われた現在に失望している。

ジャンゴが「よそ者」の話を聞きに出かけるという。スラムからの脱出を願っているワンジロは、「よそ者」が率いるデモが成功することを、むしろ望んでいない。店に残っていたワンジロのところへ、突然アシンジョが姿を見せる。今ではタクシー運転手になっていると言う。彼はワンジロをスラムから連れ出し、町で暮らしたいと思っている。

デモの群衆が舞台に現れ、「よそ者」が演説を続けている。その男もまた元マウマウ戦士で、独立の意義を再び問い直している。彼は言う「私たちの権利を主張しよう。白人と闘ったことを思い出そう。土地は何処へ行ってしまったのか」。

そこへ警察のサイレンの響き。逃げ出そうとする者がいたが、「よそ者」が「逃げてはいけない」と叫んでいる。警官隊が棍棒で襲いかかってくる。皆が逃げ惑う。「よそ者」が逮捕される。

ジャンゴとワンジロが登場。『よそ者』の主張は、夫とそっくりだとわかる。「今やリーダーがいなくなってしまった」とジャンゴが嘆く。ブルドーザーの音が迫り、ワンジロが「ここから逃げ出そう。私はアシンジョの所へ行こう」と告げて去る。母は、「行かないで。私を独りきりにしないで」と叫んでいる。

役人のキオンゴが「早くしろ」と怒鳴っている。ジャンゴは「まるで家畜を追い立てるように、追い出す気なのかい。今晚、私はどこへ行けばいいの。明日の今頃は、私はどこにいるの。ああ、もっと早く起ち上がっていたなら。皆が力を合わせていたなら」と漏らしている。ブルドーザーの音が高くなり、やがてジャンゴの小屋は音を立てて崩れ落ちた。

市のクリーンキャンペーンがテーマで、スラムの問題を扱っている。政府の観光客誘致政策をめぐって、登場するジャーナリストがコメンテーターである。この作品には、後の『デダン・キマジの裁判』に通じるような、裏切られた独立に対する怒りがある。マウマウ戦争の大義と社会的現実が矛盾している。スラムで、下級労働者に朝食のスープを売る女などが、生き生きと形象されている。スラム一掃のためにブルドーザーが入るなど、ある種の緊迫感があって、ラディカルな社会変革の必要も説かれている。

登場人物の一人に、元マウマウ戦士の靴職人がいる。スラムから出て行きたいが、行くべき先がない。もう一人は、スラム住人に政治的覚醒をもたらそうとする「よそ者」である。スラム住民は、「よそ者」がスラム立ち退きに反対して、自分たちを救ってくれるものと期待している。

アシンジョはワンジロに恋心を抱いており、彼女はアシンジョが自分をスラムから連れ出してくれるものと期待している。ワンジロの母ジャンゴが二人の結婚に反対している大きな理由は、アシンジョが別の部族の出身で、しかも失業者であったからである。さらに、彼女は、都会の人間を信用していない。ブルドーザーがスラムに入ってくると、ワンジロは母を残して逃げて行く。後に残ったジャンゴは、スラム住人の間に立ち退き反対の団結がなかったことを後悔している。

この劇は、スラム住民の団結の必要、エスニック・ショービニズムの克服の大切さを説いているようである。(これは「黒人の隠者」のテーマとも共通していよう)。しかし、デモを導き、スラム住人の政治的覚醒を訴える人物「よそ者」がどんな人物なのか、背景の説明がない。なぜ、その人物は「よそ者」でなければならないのだろうか。

早朝のスラムの描写、ジャンゴとワンジル母娘の確執、住民のありようなどは、実にリアルに描かれている。さらに、ジャーナリストによるコメントやブ

ルドーザーの進入は、臨場感と緊張感を生み出している。マケレレ時代に新聞部に属し、取材のためにカンパラのスラムに住み込んだことがあったが、この時の経験も活かされているのであろう。

VIII. 中期小説『一粒の麦』：独立にかける夢 (*A Grain of Wheat*)⁹¹⁾

『一粒の麦』は、ケニア独立の誕生の苦しみともいえるべきマウマウ戦争—すなわちケニア近現代史のあの暴力と混乱の時代を生き抜いた名もない民衆の生きざまを、同時代人の愛情あふれる眼を通して、迫真力をもって描いている。この小説には、特定の主人公といえる人物はいない。泥と汗と血にまみれてうごめく多数の民衆の姿が見られるが、彼らがアフリカの運命の光と影の部分に交差して識りなす複雑な人間模様—ひとつの状況全体—こそが、この作品の主人公と言えるであろう。

この小説は、1964 年リーズ大学留学後に執筆を開始、1966 年に脱稿、1967 年 4 月に公刊された。内容の一部が、*The Trench* と題して、1965 年に、リーズ大学学内誌 (*Africa : Tradition and Change*) に掲載されている。

ケニア独立 (Uhuru) の直前。主に 4 人の人物、ムゴ、ギコニヨ、カランジャ、ムンビの独立闘争期の経験を辿っている。これらの人物の心の葛藤、特に植民地政府の手で絞首刑にされた村の英雄キヒカとの関係が問題になる。政治的テーマであるが、裏切りと正義をめぐる人間関係のドラマとの均衡がある。個人の罪が次第に明らかにされ、つづいてその贖罪が続く。独立後のケニアの問題がすでに予知されており、以後の作品のテーマが見えてくる。

アフリカ小説にかなり特徴的な傾向であろうが、この小説でも、個人の意識 (一人称単数) が、いつのまにか集団の意識 (一人称複数) にかわっていることが多い。アフリカ社会にあっては、個人の存在と集団の存在とが分かちがたく結びついているからであろう—というよりも、個人の存在と行動は、集団のなかに位置づけられることではじめて社会的意味を発揮するのであろう。現代アフリカ文学の一つの重要な特徴—エスノグラフィックなドキュメントとしての性格がここから生まれる。『一粒の麦』においても、作者の関心は、個人を描くことで集団の体験・意識・状況を描くことにあってよい。登場人物を歴史的・社会的状況のなかに客体化して造型しようとするこの意図のために、個人の独白やつぶやきは状況全体のものとなり、作者自身の発言にも容易に転化している。

これとあわせて、伝統的・土俗的価値が神話・伝説・ことわざ・警句・昔話などの形式を借りて現れることにも注意しておく必要がある。それらは、便利さのために借用されているのではなく、作品全体の構造的な深みのなかへモザイクとしてはめ込まれ、機能している。これは、ひとつには作家が、ヨーロッパに汚される以前の無垢の土俗的価値のなかに自己のアイデンティティを志向しているからであろう。グギの場合、この土俗性の表明は神話的・聖書的モチーフとして現れることが多い。この傾向は、あとでも述べるとおり、ギクユ人独自の世界観とも深い関係がある。

『一粒の麦』の成功の要因の一つは、第三者にも比較的理解しやすい素材（植民地主義の暴力）が、小説形式ならではのドラマチックな展開のなかで、ギクユ民族に特有な土俗的思考（ここでは、これを「ギクユネス」(Gĩkũyũness)と名づけておこう）と見事に調和していることである。「ギクユネス」を検討することは、グギの作品を解くひとつの鍵となるであろう。もちろん、この「ギクユネス」を特別視しすぎてはならない。およそ農耕民族にあつては、こうした傾向はある程度まで普遍的に現れている。

① 再び、ギクユの土地観

「ギクユネス」の根源は土地観にある。農耕民であるギクユ人にとって「土地は部族の母」である。彼らの神話によれば、原初の時代にギクユ (Gĩkũyũ) という名前の部族の創始者が宇宙の分配王ンガイ (Ngai) から、谷、森、鳥、獣その他あらゆる恵みのある土地を与えられた。ンガイはギクユの安息所、また自らの奇蹟のしるしとしてケレーニャガ (Kerenyaga 神秘の山、ケニア山) をつくり、ギクユを頂上へ連れて行き、彼に与えた土地の美しさを眺望させたという。農夫ギクユは、ンガイから命じられたとおり犠牲を捧げ、両手をケニア山に向かってあげ、その結果、美しい妻ムンビ (Mũmbi, 創造者の意) を得る。この二人が今日のギクユ人の始祖となるのである。

ジョモ・ケニヤッタは、ギクユの伝統的な生活と文化を紹介する著書『ケニア山のふもと』(1938) で、以下のように書いている。

「アフリカの諸部族のなかでも、ギクユ人ほど『土地』に依存し、『土地』を媒介として祖霊と交感する民族は稀であると言われる。彼らは太古の昔から、ギクユ民衆の歴史を形成してきた精神力の象徴であるケニア山に向かって伝統的儀礼を行ない、永遠の誓いを大地に対して行なってきた。割礼の血が土に浸み込む時、彼らは大地と宗教的なつながりを結んで、ギクユとムンビの子—つまり部族全体の子として再生するものと信じ

ている。彼らは、自分の土地やその他一切のものを『われわれのもの』と呼んで、集団的に使用することに楽しみを見出した。したがって、死者と生者と、あとに生まれてくる者たちのために土地を守ることは、個人の最高の使命とみなされた。土地は生活に必要な物資を人びとにあたえ、それによって、民衆の精神的・知的な満足が達成されるのである。祖先の霊との交わりも、部族の祖先たちの埋められた土地に接することによって永続化される」⁹²⁾ (要旨)

植民地支配による土地の略奪が、どれほどの衝撃を彼らに与えるものであったか、作品に登場する反植民地主義の運動組織〈パーティ〉や、非常事態下の「森の戦士」たちの悲願がどのようなものであったかということは、この文化的脈絡のなかで洞察しておくことが必要であろう。土地に対する感情、意識は、彼らの思想の根底となり、行動の基盤となっている。土地と自己の関係は、彼らの存在の全的意味を持ち、彼らの実体論を形づくっていた。したがって、「母なる大地」を失なうことは自己の精神のありかを見失うにひとしい。「森の戦士」たちは、右手に土くれを握り、ケニア山に向かって戦いの成功を祈ったというが、ヨーロッパ人はその姿に「野蛮なアフリカ人」「近代文明の落伍者」を見ることしか出来なかった。西欧近代の物質文明においては、自然でさえも征服の対象であり、土地は経済的価値によって人の手から手へ譲り渡される商品にすぎない。自然や土地との精神的接触を結ぶことはなく、それらは人間存在の外界に客体化して眺められる一個の事物にすぎない。土地は死そのもののよう生命のぬくもりを持っていない。

② 時代の背景

ケニアは、1963年12月12日、英連邦内の自治国として独立した。この日の夜半、前日から降り続いた雨はしだいに止んで、首都ナイロビの町は全国からおしかけてきた人びとの熱気と興奮で充満したという。午前零時の1分前には、ナイロビ市街のすべての明かりが消され、ほの暗い薄闇のなかでユニオン・ジャックが静かに降ろされた。つぎに明かりがともされた時、国歌を演奏する警察の音楽隊と民衆のどよめきのなかで、黒と赤と緑のケニアの三色旗が高々と夜空にはためいたのである。歴史が歯車を一つ回転させた決定的な瞬間であった。しかし、この歴史的瞬間をむかえるまでには、少なくとも12,000名のアフリカ人の生命が失なわれ、80,000名のアフリカ人の苦渋に満ちた収容所生活があったことを忘れることは出来ない（これらの数字は、植民地政府側の発表である。逮捕されたアフリカ人の数は、実際には何十万にのぼるだろう）。これが世に名高い「マウマウ戦争」と言われるものである。「マウマウ戦争」については、後で詳述する（「インターロード」Ⅲを見よ）。

ヨーロッパ人の到来以前に、ギクユ人の予言者ムゴ・ワ・キビロは、ギクユの土地をほしがる蝶の羽根に似た衣服をまとった異邦人が、火を吹く魔法の杖を持ってやってくることを、そして、ギクユ人の東の海（インド洋）から西の海（ビクトリア湖）まで、火を吹く鉄の蛇が通過することを予言していた。はたして 1869 年のスエズ運河開通後、ヨーロッパ人（蝶の羽根に似た衣服をまとった異邦人）の渡来が急速に始まり、年々その数は増大した。1895 年、イギリスがケニアの植民地化を宣言すると、やがて冷涼な気候に恵まれた高原地方約 40,000 平方キロ（主としてギクユ人の土地）は、白人植民専用高地（ホワイト・ハイランド、**White Highland**）の名のもとに非ヨーロッパ人の所有が禁止された。白人は小麦の栽培に成功し、ついで近代的酪農法を開拓して、しだいに経済的地歩を築いていく。

こうして、「ケニアと恋に落ちた」白人たちの別荘化が進められた。1897 年に着工されたウガンダ鉄道（「火を吹く鉄の蛇」）は、モンバサを起点として 1901 年にはビクトリア湖畔のポートフローレンス（現キスム）まで開通した。「力は正義」とはこのことである。ヨーロッパ人の鉄砲（火を吹く魔法の杖）の前ではアフリカ人の槍は無力であった。ヨーロッパ人の近代的技術に、アフリカ人はわが目を疑うほかなかった。アフリカ人は、白人に教えられるままに、自己の暗愚を恥じてひたすら神に救いを求め、祈りを捧げたが、目を開けてみると、土地がなくなっていた。これは、彼らの伝統的世界観では理解できない災禍であった。彼らは、この悲惨な運命を祖先の怒りによるものと信じるほかなかった。

農地と放牧地を失なった約 11 万のギクユ人は、借地人兼農場労働者として白人農場に雇われるか、『一粒の麦』に登場する多くの村びとのように、「指定居住地」としてあてがわれた不毛の荒地にしがみついて生きるか、あるいは都市に流入して下級賃金労働に従事するほかなかった。これと同時に、作品中のトンブソン夫妻とカランジャのような〈主人〉と〈召使い〉という不毛の植民地的親子関係が出来上がる。

キリスト教会が押し付ける教義と実践（聖書に書かれている内容とは必ずしも一致しない）は、ギクユ本来の社会的価値の転倒として受け取られた。たとえば、女子割礼の禁止がそれである。これを強制されることで、彼らの文化は根底から崩壊してしまう。いっぽう、キリスト教を受容した彼らが、聖書の物語をものの見事に自分たちの論理（世界観）に組み入れて説明しているのは愉快というほかない。アダムとイブは、そのままギクユとムンビのことであると

映ったし、ギクユの民こそがイスラエルの幻の 12 種族の後裔であると信じられた。さらに彼らは、ギクユ人の支配を企てるイギリス女王の自己中心の世界観を、部族の女権崩壊伝説に照らして、「火傷により黒い肌が剥ぎとられた者」「熱湯を頭のなかにあびせられた者」⁹³⁾ (『一粒の麦』) ときめつけることが出来たのである。なお、作品に現れるおびただしい聖書からの引用、また聖書的イメージの暗喩が作品につよい普遍的理解を呼び起こすのに役立っている。

植民地主義の受難を背負わされたギクユ民衆が「モーゼ」の出現に夢を託したのは当然であった。予言者キビロは「よその国の人びとの魔法の力をよくみきわめて、彼らの力と知識を使って自らの力をたくわえれば、いつかは黒人のなかに救世主が現れて、外国の拘束から解放してくれるであろう」⁹⁴⁾ と語っていた。

③ 小説の舞台

作品で何度も触れられているとおり、植民地主義の抑圧に対する抗議行動 (パーティ) は早くからあった。ハリー・ヅクが指導したキクユ中央協会 (KCA, 1924 年結成) や、のちにジョモ・ケニヤッタが総裁を務めたケニア・アフリカ人同盟 (KAU, 1944 年結成) などはそうした運動組織であり、土地問題や賃金問題の解決のために何度もロンドンの植民地相とかけ合っている。しかし、要求はつねに無視され続けた。

1946 年、ケニヤッタがイギリスとロシアの旅を終えてケニアへ戻ったが、ギクユ民衆にとっては、まさに「黒人のモーゼ」「アフリカの救世主」の帰還だと信じられた。ケニヤッタは、「私はムンビを率いる者である。お前たちは大地である。大地はわれわれのものである。私が語る神の言葉を肝に銘じよ」と述べて熱狂的歓迎を受けた。まことに、ケニヤッタは神の化身なのであった。「彼らはジョモのことを〈燃える槍のごとく、われわれのところへ帰ってきた〉、彼の英国滞在のことを〈モーゼはファラオの国に逗留した〉、彼の帰還のことを〈火と煙の雲のうえに乗って帰ってきた〉とうたった。・ ・彼は戦車に乗って帰ってきた。地獄の門も彼を止めることは出来なかった。今や天使たちは彼の目で身体をうちふるわせていた」と言う。⁹⁵⁾

まさに機は熟していた。彼らの脳裏には、19 世紀末のイギリス帝国主義に対するワイヤキの抵抗⁹⁶⁾ はもちろんのこと、アフリカのはるか南方地域での反植民地闘争の記憶—たとえば、オランダ入植民に対するズールー人の戦い (19 世紀後半)⁹⁷⁾ や、タンザニア南部でのドイツ帝国主義に対するマジマジ反乱

(1905~1907) ⁹⁸⁾ —さえ鮮明に息づいていたことであろう。さらに多数のケニア人の第二次大戦への従軍経験も見逃せない。のちに「森の戦士」となった人々の多くが、1946 年当時を回想して、「星がひとときわ輝いて、南の空から北の空へ飛ぶのが見られた。それこそは、白人の運命を予兆するもので、キビロの予言が実現する日が近いこと」を知らされたと述べている。 ⁹⁹⁾

イギリスは、この盛り上がる民族意識の高揚を恐れて、1952 年 10 月 20 日、テロ団「マウマウ」をでっちあげて、ケニア中央州全土に非常事態を宣言した。これが世に、「マウマウ戦争」と言われるものである。マウマウ戦争については、「インターラード」Ⅲで詳述することにしよう。

マウマウ戦争は、1956 年 10 月、指導者デダン・キマジが逮捕され、翌年 2 月に処刑されることで一応の決着はついたが、50,000 の軍隊を派遣して鎮圧にやっきとなったイギリスは、1960 年 1 月まで非常事態を解くことは出来なかった。

作品では、非常事態は終わり、独立 4 日前（1963 年 12 月 8 日）の意気軒昂とした時代に取って代わっている。しかし、過去の恐怖の記憶が登場人物の脳裏に鮮明にきざみ込まれており、まるで亡霊のように彼らの現在を支配している。作者はフラッシュバックを駆使して、時間と視点を絶えず移動させて登場人物の意識の流れを追跡し、ケニア近現代史の裏側に影法師のように揺らめく民衆の生きざまを照射する。登場人物の心理的内面が克明に描写されるが、フラッシュバックと意識の流れの重層的な効果が、さながら、底知れない混沌を映し出す鏡として機能している。

舞台はナイロビから少し離れたザバイという架空の村。そこは、いくつかの山の背（ギクユ人はここに村をつくる） ¹⁰⁰⁾ を含む大きい村で、西方の丘陵がなだらかに傾斜して盆地をつくり、そこにルンゲイ交易センターがある。トタン屋根の建物が二列に向かい合って並んでいるところに市場があり、アフリカ人商店とまじってインド人の経営する店舗も見られる。後者は鉄板の屋根が敷かれているので、トタン屋根の前者とはすぐに区別がつく。インド人商人のなかにはナイロビから来る者がいる。ここは、村の各地から食料を買いに来る女たちの世間話の交換の場所でもある。ルンゲイの市場は、鉄の蛇がキスムとカンパラへ向かう通過点にあたっている。市場を中心にして、草葺き屋根と泥壁の家並みが四方に広がっている。そのありさまは 1955 年当時とかわらない・・・。

村人は、間近に迫った独立記念の祝祭の準備に忙しい。彼らは、非常事態下に「森の戦

士」となって白人と戦ったが、仲間の裏切りのために捕えられ、植民地政府によって絞首刑にされた村の若い英雄キヒカの名前を永遠にとどめようと真相の究明に努めている。

村はずれの小屋で独り暮らしているムゴは、収容所生活のあと、自分の土地を失ったために、長老から借りた痩せた土地を耕やしている。彼は、父母に早く先立たれ、酒乱の叔母に育てられたが、叔母の死後は、もじどおり天涯孤独となって外界との一切の交渉を絶っている。

「天は自ら助くる者を助く」のと通りの刻苦精励型の人物ギコニヨは、本来、木の感触を覚えるだけで創作衝動を燃えたたせるほどの大工であった。収容所生活以後は商人に転じ、その人柄と努力のお蔭で村人の尊敬を集め、事業にも成功している。だが、彼にとって「富は苦い水」となっている。収容所から帰還した時、愛する妻ムンビにはかつての恋敵カランジャとの間に生まれた子供がいたのである。戻って来たザバイの村は、彼にとっては、「もう一つの拘留キャンプ」同然であると映る。

幼い頃から政治的関心にめざめ、ガンジーを慕い、祖国の解放を夢みたキヒカは、ケニヤッタの逮捕後、「森の戦士」となり、刑務所や警察署を襲撃して囚人を解放、その神出鬼没の活躍は「山を動かし、雷鳴を呼ぶ」とまで謳われた。植民地政府から懸賞金つきの戦士となるが、最後には仲間の裏切りにあい、ルンゲイの広場で絞首刑にされた。

ギコニヨの妻で、キヒカの妹であるムンビは、村随一の幸福な家庭に育った美人であるが、非常事態とともに家庭崩壊という苛酷な運命にさらされる。夫の拘留中、ひたすら貞節を誓い、村の焼打ちの時も、空腹にひしがれる一家を支え、弟に学資を送って未来に一条の夢を託していた。夫のかつての恋仇きでもあったホームガード（自警団員）のカランジャからの執拗な言い寄りを断固拒んできたが、夫の無事生還の報を告げるカランジャに身を許し、その子を生みおとす。

白人権力に身をよせて生きる男カランジャは、図書館に勤務するかたわら、イギリス人官吏トンプソン夫妻の忠実な下僕として働いている。彼は、キヒカ逮捕のあとまもなくホームガードとなり、白人権力機構の手先として「マウマウ戦士」狩りをつとめた。村人は、彼こそがキヒカ裏切りの真犯人であるとの疑惑をかけており、独立記念日に彼の罪を粛清しようとしている。

白人官吏トンプソンは、妻とともに本国へ帰る日も近い。彼の青年時代の夢は、「イギリス帝国を一つの国家に組み改めること」であり、「アジアとアフリカの農民をリハビリする」ことであった。彼の若い日のアフリカ駐在日誌には、シュバイツアの言葉を引用

するなど、植民地哲学ともいうべき文章がしたためられている。妻との間に生じている断絶状況に苦悶しているが、妻の方は、ケニアを去る日を目前に、ふと夫以外の白人との抱擁を思い出さずにはおれない。

独立記念の祝祭が迫ると、それまで社会のアウトサイダーとして孤独な生活を送ってきたムゴの周辺がにわかに騒がしくなる。行きかう村人は「黒人の自由」「独立と仕事」の名においてムゴに尊敬に満ちたあいさつを送ってくる。だが、ムゴは動揺と不安を隠しきれない。彼が暗い過去を秘める謎めいた人物であることは、小説の冒頭—ムゴの夢のなかのシーン。早朝、天井のススを集めて、しだいに大きくなる水滴が、寝台に横たわっている彼の眼に向かって落下しようとしているが、彼はどうしても眼を閉じることが出来ない、あの印象的なイメージを読むだけで想像される。

Mugo felt nervous. He was lying on his back and looking at the roof. Sooty locks hung from the fern and grass thatch and all pointed at his heart. A clear drop of water was delicately suspended above him. The drop fattened and grew dirtier as it absorbed grains of soot. Then it started drawing towards him. He tried to shut his eyes. They would not close. He tried to move his head : it was firmly chained to the bed-frame.¹⁰¹⁾

「ムゴは脅えた。彼は仰向けになって、天井を見つめていた。シダと草で葺いた屋根から、煤けて黒くなった束が垂れ下がり、どれもが彼の心臓を狙っていた。澄んだ水滴が一つ、彼の真上で細くぶら下がった。やがて水滴は大きくなり、煤を集めてしだいに黒さを増して、彼に向けて落ちてきた。眼を閉じようとしたが、出来なかった。頭を動かそうとしたが、ベッドの枠に固く繋がれていた」

ムゴは薄幸の少年時代を送り、ただ土とともに、失楽の孤独のなかに生きる農夫である。彼は、生涯を通じてあらゆる抗争を避けてきた。家庭でも、学校でも決して仲間をつくらなかった。そうすることで、自分のよりよい未来を獲得できる機会を失なうことを恐れたからである。非常事態に際して、キヒカが彼に闘争への参加を呼びかけた時にも、ムゴは思う。

Kihika who had a mother and a father and a brother and a sister, could play with death. He had people who would mourn his end, who would name their children after him, so that Kihika's name would never die from men's lips. Kihika had everything ; Mugo had nothing.¹⁰²⁾

「キヒカには母もあれば父もあり、弟妹もある。彼は死と戯れることも出来る。彼には死をとむらってくれる家族がおり、名前を継いでくれる者がいる。自分の名前が失われることはない。キヒカにはすべてがある。自分には何一つない」。

ムゴがキヒカ裏切りの罪を告白しえないのは、「死ぬ覚悟は出来ていない。俺はまだ生きることさえしていない」(I am not ready for death, I have not even lived) ¹⁰³⁾ と思っているからである。

この内面の苦悩を知る者はいない。それとは逆に、ムゴが拘留生活で示した恐るべき忍耐と果敢な人間性、トンプソンの集中的な問責にもかかわらず、断固としてキヒカの所在を明かそうとしなかったこと、そして強制労働の現場で身重の女に対する肉体的拷問に敢然として抗議しえた勇氣は、すべての村人の記憶に残っていた。村人は、彼こそはキヒカが最も信頼を置いた同志であるはずであり、キヒカとともに独立の榮譽をまっ先にいただくべき人物であると信じたのであった。彼は、キヒカの生まれかわりであるときへ信じられていた。

しかし、ムゴが、キヒカを讃える演説を頑迷に拒むことがわかると、かつて非常事態に女闘士として気丈夫な活躍をみせたワンプイは、今や女の出番であると決断して、ギコニヨと別れて実家へ戻っているムンビを最後の切札としてムゴのもとへ送る。そしてこの時に、ほかならないキヒカの妹であるムンビに対して、ムゴは自分が真犯人であることを告白するのである。ムンビは驚きを隠すことは出来ない。だが、彼女はムゴの告白を他人に打ち明けようとはしない。これ以上の血を流すことは無意味であると悟るからである。

12月12日。ムゴの参加を見ないままに、独立記念の祝祭が始まる。娘たちは、着飾った衣装をまとい、周囲の男性を挑発するかのようには踊り狂う。予定されていなかったマラソン競技に出場したギコニヨとカランジャは、かつてルンゲイの駅を通過する汽車を見るために駆け比べをした遠い日々のことを思い出しながら、はげしくライバル意識を燃やす(この時、ゴール寸前で2人は折り重なって倒れ、ギコニヨは左腕を折って入院することになる)。さて、祝祭はいよいよクライマックスに達し、「キヒカ殺害の真犯人は名のり出よ」との声が乱れとぶと、皆の視線がその場に居合わせたカランジャに集中する。この決定的瞬間にムゴが到着して演壇にのぼり、自分の罪を告白し始めるのである。

思いがけない顛末に、村人たちはなすすべも知らず散っていく。ムゴは、そ

の夜、しょぼ降る雨のなかを、一度はナイロビへ向かって逃走を試みる。だが、ふと村はずれの老婆のことが思い出され、その小屋を訪れるが、老婆はムゴの姿に、凶弾に倒れた自分の息子の幻影を重ねながらその場で息を引きとってしまう。ムゴは考えをかえて自分の小屋へ戻り、やってきた二人の長老に拘引されていく。この時、ムゴは罪と向き合う覚悟が出来ていたのであろう。長老の一人は「お前の行為の責任を免れることは出来ぬ」と語っている。ムゴの裁判は、その夜のうちに、ワンプイの立ち合いのもと、かつての「森の戦士」であるジェネラル・Rとコイナンドゥ中尉によって行なわれたという。だが、その現場を目撃した者はいない。

マラソン競技で転倒し、左腕を折って入院しているギコニヨは、見舞いにやってきたムンビからムゴの告白を聞いて、驚くとともに、自己の罪と直面し、すべてを失なう勇気を持ちあわせたムゴを賞賛せずにはおれない。これを契機に、ムンビに対する彼の態度はしだいにやわらぎ、ムンビとともに、ムゴのこと、自分の収容所生活のことを語り合いたいと思い、また、ムンビとの間に生まれるであろう子供を想像したりする。やがてギコニヨの心のなかに、ムンビへの結婚の贈りものとして「スツール」を創りたいという衝動がつのっていく。

カランジャは、非常事態下にホームガードとなって民衆に敵対することに反対した母親の小屋で荷物をとりまとめている。これまで弾くことを忘れていた古ぼけたギターをかかえて、雨のなかをギジマの村へ向かって旅立つ。途中、彼はムンビを訪ね、自分の子供を一目見せてほしいと頼むが断られる。彼はムゴこそが真の勇気ある男であると思いながら、なぜムゴが自分を助けてくれたのかわからない。バスから降りて、道端の食堂で冷たくなった紅茶をすすりながら、人生は闇のように虚ろで、地球をとりまく霧のように空しいと実感するのである。彼は「自由とは何なのか。死とは自由のようなものではないのか。収容所へ行くことが自由なのか。ムンビとの別離が自由なのか」¹⁰⁴⁾と自問した若い日の苦悩を反芻しながら、近づいてくる汽車の轟きに遠い記憶を思い出す。魂の抜け殻のように、彼は真近に迫った汽車の前に一歩踏み出すが、汽車は烈しい風圧を残して通り過ぎていく。大地が揺らぎ、あとは静寂と闇が彼をつつみ込む。

ケニア民衆の長い歴史から見れば、植民地支配の時代は取るに足りぬほどの短い期間であったかもしれない。しかし、それは、ギコニヨ (Gikonyo) とムンビ (Mumbi) —彼らの名前はギクニョ神話に登場する原初の一組の男女の名前と同じか、あるいは、似かよっている—の断絶として象徴的に描かれなければな

らないほど痛苦に満ちた混沌として存在した。だが、すべてが生まれかわる。ほとんどすべての人物が、非常事態をくぐるなかで、村よりも広い世界を知り、新しい人生が開かれることに気づいている。ムゴの生きざまと対峙して、苦悩の末に自己の変革を遂げている。

これを成長・脱皮と呼ぶことが出来るならば、この変化を示さないのは、ケニアを去るその日まで、「アフリカはヨーロッパなしには絶対にやっていけない」との確信を固持しているトンプソンくらいのものだろう。ムンビは、復縁を迫るギコニヨに対して「私たちの間に起きたことは、一言の文句でうちすごすことは出来ません。私たちは腹をわって話し合い、ものごとをよく見つめて、そのあとで将来のことを計画しましょう」¹⁰⁵⁾と冷静に答えうるほど、自立した、たくましい女に成長している。そして、ムゴを葬ったと想像される人物、ジェネラル・Rはザバイの村から姿を消してしまった。

作者が、独立の影の部分に生きた転形期の人間の心のもつれを克明に描いて、しかも未来の世代に一条の希望を託したことは、作品の結末部が象徴的に示している。

入院中のギコニヨは、ムンビへの贈りものである「スツール」のイメージを構想する。はじめ、彼は、神の山（ケニア山）やニャンダルア山脈の周辺に育つ硬木ムイリを使って、重荷の下で汗を流し、苦渋に満ちた表情を見せている三人の姿がある三脚の「スツール」をつくり、その台座には、川と運河を彫り、運河のそばに鍬か鋤の像を彫り込もうと考える。次に、彼はその考えを捨てる。彼は、顔に苦労の皺をきざみ、重荷に耐えて両肩と頭を前に傾けている痩せた男がさし伸べている右手が、男と同様、表情に皺をよせている女の手と繋がれ、その間に立っている子供の頭か肩の上で二人の他方の手が結ばれている絵に改め、台座には、雑草の茂る畑か、それとも収穫が間近い畑を彫り、そこに鍬か豆の花の絵をそえようとする。

やがて、彼は、さらにその構想に最後の修正をつけくわえる。

I'll change the woman's figure. I shall curve a woman big—big with child.¹⁰⁶⁾

「女の像の姿をかえよう。子供を身ごもって、おおきな、大きな腹をしている女を彫ろう」

この生まれいずる子供こそ新生ケニアの子であろう。「一粒の麦」（ヨハネに

よる福音書第 12 章 24 節「よくよくあなたがたに言うておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」から引用。キヒカは自分の聖書のこの一節に下線を引いていた）は見事な再生を約束されたと言うことが出来る。

創作衝動に駆られたギコニヨは、ムンビ¹⁰⁷⁾のために「スツール」を創ろうとしている。「スツール」は伝統的アフリカ社会では権威の象徴である。したがって、これを贈られるムンビは、部族の新しい母親（創造者）として生まれかわることが含意されていよう。スツールを支える三脚の人物像は、「重荷の下で汗をかいて苦渋に満ちた表情の三人の姿」（拘留体験と非常事態下の苦悩を象徴するもの）から、この苦渋の体験を容認し、新しい未来に夢を託する（不条理の子供を独立した姿で描き、母親の像を身ごもらせる）ものに変化している。この意味で、ギコニヨとムンビは「浄化」をつかさどる神格化された存在に高められていると言えよう。

『一粒の麦』には、一つの神話化作用、別言すれば儀礼的浄化の意図が働いていることが明白であろう。ケニア独立の光景を描写する第 14 章の扉に、（一部は先にも触れた）『新約聖書』（「ヨハネによる福音書」「ヨハネの黙示録」）から引用された二つの文章が見られる。以下に原文とあわせて、それらが担う神話的な象徴性を強調しておこう。

Verily, verily I say unto you, Except a corn of
wheat fall into the ground and die, it abideth
alone : but if it die, it bringeth forth much fruit.¹⁰⁸⁾

St John 12 : 24

「よくよくあなたがたに言うておく、一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒の麦のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」（「ヨハネによる福音書」 12:24）

And I saw a new heaven and a new earth : for
The first heaven and the first earth were
passed away.¹⁰⁹⁾

Revelation 21:1

「私はまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消えさり、なくなってしまった」（「ヨハネ黙示録」 21:1）

この「浄化」、この「転生」なくして、新生ケニアは生まれ得なかったであろう。いや、「独立ケニア」の明日にこそ、この「浄化」による「転生」への期待が込められたと言うべきだろうか。

IX. 後期の短篇と戯曲：新社会を生きる

短篇集第3部は「秘めやかな生活」(Secret Lives)と題されて4篇を収録している。

① 四つの後期短篇

後期4篇のうち、「ベンツ族の男」は、先述したように、時代的には、マケレレ大学時代にスケッチされたというが、その内容から、ここで扱う。「瞬時の栄光」、「十字架の前の結婚式」、「メルセデスの葬儀」、「ベンツ族の男」の4篇は、独立以後ケニア社会の貧困と腐敗を描く点で共通しており、小説『一粒の麦』で示唆される独立以後ケニアの国づくりへの疑問、『血の花弁』で扱うことになる独立社会のいくつかの局面と通じている。

これら4篇は、現代ケニアが舞台である。教育、宗教、ビジネスでの近代的価値の導入がテーマとなっている。どの主人公も、希望から絶望へと向かうが、ここにケニアの現在の縮図が見える。一見、成功者に見えても、内奥ではずさんであり、孤独である。彼らは社会的な犠牲者である。借り物のクリスチャン名に喜びし、高級衣装をまとい、外車を乗り回すような新興ブルジョア階層、つまり「ベンツ族」が自らの同胞を犠牲に仕立て、見下している。作者が軽蔑と憐み、怒りの感情を抱いていることは明白である。このように見てくると、グギがギクユの伝統的な文化価値から出発しながら、やがてその域を抜け出て、独立ケニアの社会状況に目を移し、新たな危機に警鐘を鳴らしていることがわかる。

a. 「瞬時の栄光」(Minutes of Glory) ¹¹⁰⁾

主人公はバーメイドとして働くワンジル。彼女はクリスチャン名ビートリスを気に入っている。客の色目を引くことなく、各地のバーを渡り歩いてきた。醜いわけではないが、どこか男の注目を引かない。心に傷を負った飛ぶ鳥といってよかった。生气に富んだ魅力に乏しいために、解雇されることもあったが、自分の方で、一ヶ所での長居を嫌った。看板の時間には、客がメイドを奪い合ったが、ビートリスを相手に選ぶ者は滅多にいなかった。せいぜい、誰一人ひっかけることの出来ない男の、最後のお相手になるのがやっとだった。

どこのバーへ移っても、同じことの繰り返しだった。誰もがライバルだったが、客の一番のお気に入り、美人のニャグジイを特に嫌った。彼女はツンと高くとまり、高慢に見えた。冷たく、軽蔑的に男たちをあしらっていたが、そんなところが男の欲情をいっそう高ぶらせたらしい。しかし、ニャグジイも、一ヶ所にとどまれない、傷ついた鳥だった。暴力とセックスのバー生活に完璧に染まりながら、しかもそこから超然と振る舞うことの出来る女だった。ビートリスは彼女のようにになりたいと思った。

ビートリスは、リムルから、イルモログ (Ilmorog) のバーへ移った。そこは、昔はゴースタウンだったが、今では活気があった。疲れた誰もが、休息を得るためにやって来た。やがて、ニャグジイも移って来た。

ビートリスにとって、イルモログもリムルと変わらなかった。バーの俸給は安く、アンビ、つまり肌を白くするクリームを十分に買う金もなかった。彼女はイルモログ・スターライト・バー&ロッキングで働いた。身を飾りたてたニャグジイもそこで働いた。イルモログの有力者でキリスト教徒でもあるバーの経営者は、ニャグジイに付きまとい、こっそりとプレゼントを渡していた。他のメイドは、80 シリングの月給だった。しかし、ニャグジイは自分の部屋を貰っていた。ニャグジイを除いて、誰もが 5 時頃には起床して仕事を始めるのだった。午後 2 時に交替、5 時から 12 時まで、あるいはそれ以上、また働くのだった。メイドたちはバーで寝泊まりするよう求められていた。夜の客を取らせるためだった。

ニャグジイたちはこれに反発した。ウォッチマンに金を渡して、好きなところで夜を過ごすのだった。ビートリスは、外泊はせず、時々客を取ったが、最低の金しかくれなかった。ニャグジイに断られた腹いせに経営者がアプローチしてきた時は別だった。彼女は外出して、他のバーで夜を過ごした。翌日、経営者は彼女を解雇した。

その後、1 ヶ月、彼女は女友達の部屋を渡り歩いて、夜を過ごした。しかし、イルモログを去る気はなかった。移りまわることによりすっかり疲れ果てた。もはやアンビを買う金もなかった。まともな仕事、自分の面倒を見てくれる男が欲しかった。家庭と子供が欲しかった。

故郷が懐かしく思い出された。ニエリに住む農民の両親。しかし、素手で帰郷は出来なかったし、彼女自身、町の生活、バーの生活に馴染んでしまっていた。町で金持ちの愛人になったあげく、ガス自殺した同郷の女を知っていたし、当世では、産み落とした嬰兒をトイレに捨てるような未婚の女も多々いた。

ビートリスは、本当の愛が欲しかった。そんな頃、イルモログに新しいバー、ツリートップが開店した。1階はティーショップ、最上階はビヤホール、その他の階は宿泊、もしくは短時間（5分間の「インスタント・セックス」）の「ご休憩」に使われた。経営者の男は、元公務員で、今は政界に出た実業家で、大変な金持ちだった。各界の大物が、ベンツなどの高級外車で、各地から集まってきた。それほど大物でないが、大物に挨拶するためにやって来る者もいた。話題は政治とビジネスのことで、客の多くが、新興成金（nouveaux riches）だった。

ビートリスは掃除婦、ベッドメイカーだった。これまで名前しか知らなかった著名人が部屋を使うのだった。まもなく、他のバーから、女たちがツリートップに群がった。誰もが有力な客の相手を務めていた。ニャグジイは皆の注目を集めていた。他のメイドはビートリスに構っていなかった。むしろ、彼女を無視するか、蔑んでいた。

ビートリスは、部屋の掃除やシーツの取り換えをしながら、窓から見える高級車の持ち主、そのお抱え運転手などを覚えてしまっていた。彼女の夢は、光り輝くベンツでナイロビや、モンバサへ連れて行ってくれる男に恵まれることだった。男からハイヒールや靴下やかつらを買ってもらえる生活を夢見た。

ある土曜日。5トントラックを運転して、一人の男がやって来た。大物が集まるバーにふさわしくない風采だった。常連客はこの男を相手にしなかった。明らかに、男は疎外された。夜遅く、この男は100シリング紙幣の新札を、ニャグジイに預けた。皆が驚いた。彼はルーム7へ向かった。ビートリスがキーを渡したが、男は彼女に関心を示さなかった。

その後、この男は、決まって土曜日にやって来た。いつも同じふるまいをしたが、他の客から無視され続けた。男は何時でも、ルーム7を借りた。ビートリスは、この男を意識し始め、男もビートリスに話かけるようになった。

男は、学校を出ていなかった。彼の父はリフトバレーの白人農場の借地人で、マウマウ戦争に出かけ、拘留経験もあった。独立後、炭焼き、屠殺業などに付き、野菜やジャガイモをリフトバレーからナイロビへ運ぶ運送業で成功した自力独行の男だった。彼は、自分のような、教育のない、成り上がり者を認めない他の連中に反感を抱いていた。

男は独身だった。ある夜、ビートリスは彼と寝た。翌朝、男は20シリングをくれた。何週間か、こんなことが続いた。ビートリスは、金が欲しいわけではなかった。男は、彼女の身体に払っているのだった。ビートリスは、次第に男のエゴといつもの話に飽き

てきたが、この男も自分と似た犠牲者なのだと思います。

彼女は、ある雨の土曜日、自分の身の上を男に話した。男に聞いてもらいたかった。彼女は、ニエリのカラチナ出身。二人の兄はイギリス兵の凶弾に倒れていた。もう一人の兄は拘留中に死んだ。彼女だけが残ったのだった。両親は貧しかった。なけなしの金で、彼女を小学校に上げた。彼女は第 7 学年でよい成績が取れなかった。何のコネもない以上、進学は出来ず、家事を手伝っていた。そのうち、彼女はカラチナやニエリへ仕事を求めて出た。タイプも出来ないし、速記の特技もなかった。そんな時、ニエリでナイロビから来たある男に出会った。ナイロビなら仕事が見つかるという。男の車で、ナイロビへ出た。その夜、男と寝たが、翌朝、目が醒めると、男はいなかった。こうして、彼女はバーメイドになった。村を出てから 1 年半が経っていた。

ここまで話すと、ビートリスは男が眠り込んでいることに気づいた。自分と同じ犠牲者だと思っていた男が、自分の話をまるで聞いてくれていなかった。土曜日ごとに、この男に尽くしてきたではないか。彼女の内部の、何かが切れてしまった。バー生活の一切の屈辱と苦痛のはけ口が累積して、今、この男に集まった。

彼女は男が眠っているのを確かめると、枕許から金を取り出した。雨の中、彼女はニャグジイの部屋へ向かった。その夜は、ニャグジイの部屋に泊めてもらうことにした。ビートリスはニャグジイと話してみたかった。

二つ知りたいことがあった。ニャグジイはなぜ故郷を離れたのだろうか。彼女の両親は、富裕だったと言う。二人とも敬虔なキリスト教徒だったと言う。キリスト信者として家庭内での躾は厳しかった。ある日、学校からの帰り、学友の女の子と一緒に、ニャグジイはナイロビの下町へ逃げた。4 年前のことで、以後、故郷の家へ帰っていないと言う。

次に「あなたは私を憎み、軽蔑していたでしょう」と尋ねた。この質問に、ニャグジイは「誰も憎らしく思ったことはない」と言う。「何にも興味がない。男にも興味がない」とも言う。自分の存在を感じるために、男のおべっかや、興奮が必要なのだと言う。「あなたは、こうしたことから超然としていた。私にないものを、あなたは持っていた」と言う。

翌朝、ビートリスはバスでナイロビへ向かった。あちこちの通りを歩き、高価な衣類や靴、イヤリングなどを買い、身に着けた。彼女の目に輝きが生まれた。料理店に入ると、たちまち男たちが視線を送ってきた。彼女は身体が震えた。彼女はイルモログへ戻

るためにバスに乗った。バスの中では、男たちが席を譲った。ツリートップ・バーへ入ると、馴染みの著名人たちが、話を止めて、みだらな視線を彼女に送った。ニャグジイでさえも驚いていた。ビートリスは、皆に飲み物をふるまった。マネジャーが来て、店で働く気があるかどうかを確かめた。バーメイドが、他の客からのメモを彼女に持ってきた。同じテーブルにジョインしないか、今晚お暇かどうか、ナイロビまでドライブはいかが、など。

ビートリスは、いきいきと活力が漲るのを覚えた。ジュークボックスの音楽をかけた。男たちが彼女と踊りたがった。彼女は腰を振り、これまでにない解放感を味わった。

6時頃、突然、5トントラックの男が走り込んできた。後ろには警官がいた。ビートリスは踊り続けた。はじめ、男はビートリスに気が付かない様子だった。ビートリスは、瞬時の栄光を祝っていた。「この女だ」。警官が彼女に手錠をかけた。彼女は抵抗しなかった。警官は彼女をしょっぴいて行った。

驚いた客たちが、やがて笑いを取り戻した。トラック運転手は英雄扱いされ、彼の周りに客が集まった。男は、初めてみんなの仲間として迎えられ、事件の顛末を面白おかしく語っていた。ただ一人、ニャグジイだけがカウンターの背後で泣いていた。

バーを舞台に、独立ケニアの社会、経済的变化を映し出している。主人公ビートリスは町から町へ、バーからバーへと渡り歩く。俸給は低く、他の誰とも同じように、売春で補わなければならない。しかし彼女を相手にする者は少ない。バーの常連客で、メルセデスを手に入れたような新興成金の多くは、いっそうの社会的上昇を求めている。バーメイドにとっては、かつら、肌を白くするクリームは必需品である。ビートリスは男の愛が欲しい。貧乏人は、大物からふるまわれるビールが欲しい。駆け出しの新興層に属するトラック運転手は、バーへの出入りの承認を求めている。彼らの生活に漂う空虚感。ビートリスは、独立後社会の犠牲者である。彼女の墮落、自尊心の喪失、そして盗みから墮落へと突き進む。同じバーメイドのニャグジイも犠牲者である。キリスト教批判と植民地主義批判もある。独立後の社会に幾つもの階層が誕生していることがわかる。

ビートリスは、もはや農民の両親と同じ生活を送ることは出来ない。しかし、町の新しい生活も自己実現を保証するものではない。ある日、生活に疲れた彼

女は、酔いつぶれて寝ているトラック運転手から金を盗み、ナイロビへ出る。そこで高級衣装を買い、高級料理を食べ、その後バーへ戻るが、金を盗まれた男に見つかる。『血の花弁』のワンジャに似たところもある。ビートリスは、もともと愛のないキリスト教徒の家から逃げ出した女性である。しかし、世の中は教育や資格中心になっており、まともな仕事はない。独立ケニアへの幻滅が濃い。

b. 「十字架の前の結婚式」(Wedding at the Cross) ¹¹¹⁾

ワリウキとミリアムの夫婦物語である。ワリウキは材木商人として成功、二人は熱心なキリスト教徒で、世間から理想的な夫婦だと見られている。結婚前、ワリウキは白人農場のしがないミルク絞りだった。たいした学歴もなければ、物欲や権力欲もない。もちろん、貯金もない。しかし、スポーツ万能、愛用の自転車の曲乗りを見せたり、ヨーデルをうたったり、白人のボスの物真似、ギクユの伝統的な踊りをたまり場で見せるなど、自由闊達、屈託がなく、職場の同僚はもちろん、若い女の子から人気があった。

そんな彼に、ミリアムが惚れ込んだ。ミリアムは、日曜日の午後は商店街に出かけ、ワリウキの芸を称賛する仲間に加わった。一家は、リフトバレーでは、たいていの借地人一家より抜きん出て裕福だった。父ダグラス・ジョーンズは、いくつかの食料雑貨店とティールームを経営していた。両親とも熱心なキリスト教徒で、近隣の白人入植民からもひいき目で見られていた。ときどき、地区役人が訪ねてくることさえあった。娘が、日曜日ごとに出かけて、貧乏で、罪深く、飲んだくれ男の所業を見に行くなどと言うことは、許せなかった。

ミリアムから見れば、キリストの教えに基づいた、父の厳格なイギリス風の家庭教育よりも、ワリウキの自転車芸や伝統的ダンスの方に魅力があった。父は、教育も中途半端な、駆け出し者との結婚を認めなかった。ワリウキは、社会の秩序を乱し、やがてブタ箱に終わるような類の男に思われた。

ある日、ミリアムの父は、親しい有力者を集めて、自宅へワリウキを呼び出した。ワリウキの値踏みをして、人前で懲らしめ、辱めるのが目的だった。父は、鷹揚な態度を振りまきながら、ワリウキの仕事、月給の額を尋ね、最後に言った「君たちの結婚に反対しない。しかし、結婚するなら、教会で式を挙げてほしい」。十字架の前の結婚式は、金がかかった。「君の貯金通帳を見たいものだ」。ワリウキに貯金などなかった。その場の有力者たちが、せせら笑った。激しく侮辱され、ワリウキは追い詰められた。彼は傷つき、その場から逃げ出した。

ミリアムが追っかけてきた。二人は駆け落ちしたのである。その後、ワリウキは、イルモログの材木商会に仕事を得た。経営者はインド人だった。木を伐りながら、彼は昔の歌をうたっていた。彼がうたうのを聞いていると、ミリアムは嬉しかった。森の中で、ワリウキと踊ることもあった。草むらで結ばれることもあった。

ワリウキも楽しかった。父がおらず、ストリートボーイであった自分が、金持ちの娘の愛情を勝ち取ったことは、奇跡だった（父は第一次大戦に従軍し、タンガニーカでドイツ人と闘い戦死していた）。少年の頃から除虫菊を摘み、やがてミルク絞りになったのだった。しかし、ミリアムの父ジョーンズに会って以来、彼の自尊心は砕かれた。満たされぬ希望と約束の日が続いた。彼は、材木商会を辞め、ミリアムを連れて、リムルへ移った。やがて彼は、年老いた自分の母にミリアムを託して姿を消してしまった。ミリアムは妊娠していた。

彼は、ナイロビ、モンバサ、ナクル、キスムを渡り歩いたとの噂が流れた。カンパラ（ウガンダ）へ行ったとの噂もあった。ブタ箱に入ったとか、ガンダ人（ウガンダの有力な一民族）の女と結婚したとの噂さえあった。しかし、ミリアムは待ち続けた。両親からは、とっくに勘当されていた。やがて息子が生まれた。

第二次大戦が勃発した。ひょっこり戻ってきたワリウキは、すっかり人が変わり、無口になっていた。出征するという。

彼は、エジプト、パレスチナ、ビルマ、マダガスカルに出征した。戦争が終わると、リムルへ復員した。やつれたが、再出発の決意は固かった。しかし、ワリウキには強迫観念がまわりついていて、ミリアムの父との出逢いの記憶を掻き消したかった。

ミリアムは、復員してきた夫に期待した。二番目の息子を身ごもった。その頃、リムルの靴工場でストライキがあった¹¹²⁾。警察との衝突があり、全労働者が解雇された。新規に労働者の募集があったが、ワリウキが雇われることはなかった。彼はナイロビへ出て、復員してきた失業者の群れに加わった。黒人に仕事を求める抗議運動もあったが、ワリウキはそうした運動に興味はなかった。「ミリアムとその母親の前で、ミリアムの父から辱められたこと」が悪夢だった。トラウマとなった。ただひたすら、ミリアムの父を見返すために、彼は仕事を選ばなかった。だが、どれもが中途半端な仕事だった。

マウマウ戦争が勃発し、非常事態が発令された。ナイロビの路上から、数えきれな

いほどのアフリカ人が拘留キャンプへ送られた。ワリウキは逃れて、リムルへ戻った。彼は白人も、インド人も憎んでいなかった。むしろ同族のアフリカ人に激しい怒りを覚えた。今自分は再スタートを切ろうとした矢先でないか。なぜ、平和をかき乱すのか。

そのうち、植民地政府の関係者とコネが出来て、何かと協力できるようになった。お蔭で、彼は拘留キャンプを免れることが出来た。選択した世渡りの道が確実に成果を結び始めた。土地を接収されることもなく、それどころか、政府の協力者として、さらに土地を与えられた。事業を開くことだけが夢になった。

ケニヤッタが拘留されていたロドワの地から釈放された¹¹³⁾。独立が近づくにつれて、どうやら白人の地位が怪しくなり、ワリウキは気がかりだった。退去していく政府から、彼はローンを得た。彼はチェーンソーを買い、材木商人に転身した。

多くのマウマウ戦士が帰還するなか、ワリウキは事業の成功が見込まれた。実際に独立のために闘った者より、うまく再スタート出来たのだった。彼はこの幸運に感謝して、キリスト教に入信し、ミリアムをもキリスト教に誘った。二人は教会に通ったが、ミリアムは昔のワリウキを忘れることが出来なかった。二人の息子は、シリアナ高校に通っていた。

ワリウキは教会で讃美歌をうたい始め、まもなく聖歌隊の中心メンバーになった。彼は洗礼を受けて、ドッジ・W・リビングストン・ジュニア (Dodge W. Livingstone Jr.) を名乗り、事業が成功するとともに、教会の長老にまでのし上がった。

ミリアムの両親は、家運が傾き始めていた。娘婿ワリウキの成功を知って、娘に実家へ戻るよう誘った。ミリアムは拒否したが、夫のワリウキが翻意を求めた。彼はミリアムの両親への復讐の機会が近いことを知らされた。

まもなく、アジア人の東アフリカからの追放が始まった¹¹⁴⁾。ワリウキが以前に勤めていた材木商会の経営者はケニアの市民権を持っておらず、営業権が撤回されるはずだった。その経営者が、リビングストンに対等の提携を持ちかけてきた。リビングストンは、ローンを得て、リムルの元白人所有の大農場を買い取り、材木商人仲間の大物となり、教会のシニア長老まで登りつめた。

ミリアムは、昔の夫に戻ってくれるのを待った。彼女は、朝早く起き、使用人と一緒に茶畑で、裸足で働いた。使用人に昼食とお茶を用意してやることもあった。彼女

は使用人とともに働くこと、会話を交わすことが好きだった。夫はそれが気に入らなかった。

使用人は、ミリアムを好きになった。夫を好きになる者はいなかった。使用人は次第にミリアムを自分たちの内側に迎え入れた。彼らは自前のキリスト教サークルを作っており、夫の留守中に、ミリアムは何度かそのお祈りの集会に出るようになっていた。ドラム、ギター、ベル、タンバリンを鳴らし、踊りも取り入れ、憑依状態もあるような新興宗教だった。ミリアムはこれに魅かれた。しかし、夫の前では模範的なキリスト教徒の妻を演じ続けた。

ある日、ワリウキが帰宅するや、ミリアムの父ジョーンズから招待の手紙を貰ったと言う。ワリウキは勝利感に浸った。彼は、ベンツを手に入れ、妻を連れて、高級品をナイロビへ買いに出た。自分の母にもフロックと靴を買った。学校の制服姿の二人の息子は英語しかしゃべらなかった。こうして一家で、ミリアムの両親に会いに出かけた。久しぶりに出会ったジョーンズとリビングストンの二人は、ひざまずいて祈り、たがいに涙して抱擁した。過去が涙と祈りのなかへ沈んでいった。

リビングストンは、ジョーンズとの最初の出会いに舐めた屈辱を覚えていた。それは忘れがたい苦痛だった。最初の出会いの記憶を消したかった彼は、ミリアムの父に提案した。「十字架の前で、改めてミリアムと結婚式を挙げさせていただきたい」。ジョーンズはすぐに賛成した。しかし、ミリアムには理解できなかった。すでに二人の息子がいるではないか。過去の結婚の、どこに罪があると言うのか。しかし彼女は折れるしかなかった。

十字架の前での結婚式。ワリウキに澁刺とした若さが戻ってきた。十字架の前で指輪を交換するのだ。過去の屈辱の記憶を消し去ってくれるに違いない。彼は妻をナイロビへ連れて行き、花嫁のドレス他、高価な買い物をした。

ミリアムは誰かに招待状を出す気にならなかった。もう一度、無垢な花嫁に戻るのは、奇妙な感覚だった。当日、たくさんの人々が祝いにやって来た。ミリアムの父は黒い燕尾服姿。彼女は恥ずかしかった。教会の外には、「悲しみの宗教」(Religion of Sorrows)¹¹⁵⁾の一団が控えていた。夫リビングストンにとっては、これぞ至福の瞬間だった。復讐より以上に甘美な瞬間だった。これまでの人生は、この日のためにあったのだ。たくさんの国会議員、牧師、ビジネスマンが集まっていた。労働者や、普通の連中は教会の外にいた。「悲しみの宗教」の一団は、赤いワイン色のドレスをまとい、ギター、太鼓、タンバリンを携えていた。一瞬、花婿は彼らに厳しい視線を注いだ。

ミリアムは十字架の前に立った。白いベールをかぶる彼女は、この茶番劇が早く終わることを望んでいた。牧師が夫に言った。「病気の時も、健康の時も、死が二人を分け隔てるまで、この者を妻として認めますか」。夫ははっきりと、声に出して「イエス」と答えた。次はミリアムの番だった。彼女は答えようとしたが、唾が喉につかえた。答えられずにいると、教会が静まり返った。

突然、教会の外から、沈黙が破られた。式が終わったと思ったのだろうか、「悲しみの宗教」の一団が、霊に乗り移られたように、太鼓、タンバリンを打ち始め、ギターを激しく奏でた。教会の執事が止めに入ったが、無駄だった。

ミリアムが初めて顔を上げた。どうして彼らはここまで来たのだろうか。一瞬、罪意識を覚えたが、問題でなかった。この時、彼女は故郷にいた頃のワリウキの姿を思い描いていた。自転車に曲乗りし、たくさんの取り巻きがいた。彼女は、主を見つけた思いだった。あの時は、全身に活力が漲った。イルモログの森での楽しかった思い出が蘇った。彼女は昔のミリアムに戻っていた。牧師がまた、同じ質問をしてきた。彼女は「いいえ」と答えた。

この返事に、牧師は動転した。もう一度同じことを尋ねた。「いいえ、出来ません・・・リビングストンとは結婚できません。私は、以前に結婚しています、私は・・・ワリウキと・・・しかし、彼は死にました」。

リビングストンは、その場に立ちつくした。彼女の父も、母も泣いた。彼女は気が狂ったと誰もが思い、誰もが悪魔を崇拝するキリスト教の一派を罵った。外の男女の群れが、太鼓とタンバリンを激しく打って、うたい、踊り続けた。

貧乏からの成功譚である。伝統と西洋かぶれ。主人公の復讐譚。妻ミリアムの両親からの恥辱への復讐。主人公ワリウキは本来、伝統的価値に生きた男である。一方、ミリアムの父ダグラス・ジョーンズは「白人」と化した黒人である。教育もないワリウキとの結婚を許さず、娘の恋人ワリウキを公然と人前で辱める。その結果、ワリウキとミリアムは駆け落ちした。野性味のあるワリウキにミリアムは恋したのだった。その後、ワリウキは従軍して各地を転戦、帰国してからも苦労の連続の中、ようやく成功の機会に恵まれる。材木商人として成功し、夫婦は、理想的なカップルとして、尊敬を受けるようになった。マ

ウマウ戦争時も植民地政府側に身を寄せて、金儲けに専念した。インド人追放の動きに乗じて、商売にも成功、今では熱心なキリスト教信者になって、教会での地位も高い。やがて、落ちぶれたミリアムの父を訪ねることになり、キリスト教会での結婚式、いわゆる ‘White wedding’ を挙げることを提案したのだった。積年の屈辱を晴らすためだった。

妻ミリアムは、貧乏であった頃の、屈託のないワリウキに憧れている。ワリウキは、独立後、名前をクリスチャン名に改めている。結婚式の宣誓で、彼女はクリスチャン名を名乗るワリウキを生涯の夫にするかとの牧師の問いに、‘No’ と答える。

現代ケニアの風潮へのアレゴリーであるとはいえ、メロドラマの域を出ず、ワリウキもミリアムも、それほどリアルな人物像に描かれていない。

c. 「メルセデスの葬儀」 (A Mercedes Funeral) ¹¹⁶⁾

舞台はイルモログの下町のバー。近くには元ヨーロッパ人専用のゴルフクラブもある。土曜や日曜の夜は、もっと高級なバーから場を移してきた各界の大物で賑わう。ある夜、一人の顧客が、ほろ酔い加減で、仲間に話しているのが聞こえた。私は町の者で、その人物を知らなかったが、大声で話しており、最後までその話、「メルセデスの葬儀」にまつわるある男についての話を聞いてしまった。

事件は、イルモログの住民を驚かせた。新聞の片隅にも出るほどだった。男の死が、辺鄙な村の選挙結果の決め手になった。男の死、むしろ男の葬儀が、国会議員の選挙キャンペーン中に起きたからだだった。候補には、まず現職のジョン・ジョー・ジェームズ (JJJ) がいた。この男は、以前はジョン・カランジャと名乗っていたが、当選後にアフリカ名を捨てていた。彼は、競争相手のいない無投票当選を望んでいた。ところが、現職のほかに、三人が立候補した。一人は大学生で、全労働者の味方だと自分で主張していた。もう一人は実業家で、イルモログにスーパーマーケットを開くローンを手に入れたばかりの男だった。ローンの一部を選挙資金にまわしているとの噂もあった。金儲けが人生の目的だと言って、自分がそのお手本になろうと言っていた。もう一人は、元植民地政府の首長をしていた農夫で、最高級の牛を三頭まで売却して、選挙資金にしていた。

三人の新人候補は、たがいに相手をけなし合いながら、現職を非難する点で力を合わせた。現職の JJJ は、自分の一族郎党を富ませ、蓄財に専念したという。実業家は「JJJ は、1,000 エーカーの土地を含めて、私財の獲得に成功した」と暴露した。大学生は「JJJ は、

労働者のために何をしたか」と問うた。元首長は「JJJは、自分の選挙区を訪ねてくれたことがない」と批判した。JJJは「私は、道路や病院や工場を建設した」と訴え、他の新人候補をこき下ろした。

そんな矢先、誰もが選挙に興味を失いかけていた頃、イルモログ・バー&レストランのウォッチマンがアル中で死んだ。ワヒニャという名の男で、その死が選挙結果を左右することになった。候補者たちが「我々労働者」と声を張り上げている時に、痩せこけた酔っ払いが「誰が貧乏な労働者の味方なんだ。この頃じゃあ、貧乏人は死んでも、埋めてもらう墓もなければ、まともな棺桶もないではないか」とヤジを飛ばした。彼は、ワヒニャのことを引き合いに出していたのだった。その夜、4人の候補者全員が、ワヒニャの妻を訪ねて、葬儀を請け負うことを約束した。

非常事態以前、人が死ねば、沈黙と涙のうちに葬られた。誰もが死を畏れたからであった。生き残った者の間には共感と同情があった。誰もが、かわるがわる死者のために墓を掘ったものだ。非常事態が来ると、人は銃殺され、死体は秃鷹やハイエナの餌にされるか、でなければ集団で埋葬された。人の命に、誰もが関心を払わなくなった。命よりも、金の方が大事になり、金儲けと地位が物をいう世の中に変わった。

貧乏な死に方は、誰にとっても恥だ。嘘か本当か、各候補者は、ワヒニャの葬儀の手筈をまかせてくれたら、金を渡すと彼の妻に約束したという。彼女は、夫の葬儀を競りにかけたのだろうか。突然、妻の行方が不明となり、夫の遺体が消えてしまった。この騒ぎに、警察が出るほどだったが、JJJが絡んでいるとの噂もあった。学生候補の提案で、調査委員会が発足し、貧者の葬儀についての一般的対策も練られることになった。この委員会は、党支部委員長が取り仕切ることになった。そこで、どの候補者も党支部長のご機嫌を取り始めた。

しばらくして、突然ワヒニャの妻が姿を現したが、何処に居たかは明らかにしなかった。遺体は市の墓地に移送された。支部長を通して、葬儀の手筈が逐一、住民に知らされた。死んだはずのワヒニャが、話題の中心になっていた。

私は、昔からワヒニャを知っていた。彼はポーター、ターンボーイ、ウォッチマンと職を転々とした。この間に、ワヒニャは希望の星からずさんだ飲んだくれに落ちぶれた。ワヒニャのような死を急ぐ人生は、今の世によくある話だ。バーにいた誰もが、グラスを置いて、この話に聞き入っていた。

私は、1960年代にワヒニャを知るようになった。当時はウフル（独立）の夢で、誰もが

明日に希望を持っていた。ワヒニャも未来を夢見ていた。ポーターの仕事をこなしながら明日を夢見ていた。眼は希望に輝いていた。インド人の雇用主は厳しかった。その頃、私は彼によく会った。私はシリアナの貧乏高校生で、土曜の午後に、彼が働いているチュラの町へ出かけたのだった。ファンター本さえ買えないほどの貧乏学生だったが、ワヒニャは、私以上に貧しそうで、ぼろをまとっていた。学校教育は、いとも簡単に人の境遇を分け隔ててしまうものだ。

ワヒニャと私には共通点が多かった。ともにイルモログ出身だった。ともに父がいなかった。私の父はアル中で死んでいた。彼の父は、マウマウ兵士として森で戦死した。二人とも母に育てられ、二人とも独立学校で学んだ。私が通っていた学校が植民地政府に接收された時、彼の学校は閉鎖され、焼き払われた。アフリカ人経営の学校は、マウマウのテロリストを援助していると思われたのだった。

その結果、二人の歩む道が違ってしまった。私は優越感さえ持っていたが、時々、彼は小銭をくれた。私は、彼が未来にかけた夢を貰うことになった。

ワヒニャは学校が好きで、勉強が出来た。彼は、アフリカ人の英雄の名前、イギリスと闘ったシャカやワイヤキ¹¹⁷の名前を知っていた。私がシリアナで教わったのは、イギリスやヨーロッパの歴史だった。彼はシリアナの教育を知りたがり、シリアナの制服に興味を持った。二人は、白人がケニアを去っていくことに未来をかけていた。

ワヒニャは高等教育に夢を託していた。ポーターをしながら、彼は金をためた。「他人に出来ることは、君にも出来る」が信条だった。彼は英語の勉強にも希望を託していた。

チュラで最後にワヒニャを見たのは土曜の午後だった。彼は古い新聞を取り出して、海外のカレッジの通信教育の記事を見せた。彼は独立後にその夢を果たそうと期待していた。

私はマケレレへ進学することになった。独立がやって来た。マケレレの卒業生の多くが、地区役人、労働局、外交官、など、かつてのヨーロッパ人の職を占めた。会社の重役になった者もいた。マケレレの学生は、そうしたエリートの予備軍だった。高級外車、ヨーロッパ風のマンション、ホテル、海岸地方のリゾートが視野に入って来た。

卒業前の休暇中のある土曜日、私はバスに乗っていた。客を奪い合うバス同士の騒ぎの中で、ターンボーイになったワヒニャが私の乗っているバスに客を奪いに入ってきた。私は彼を避けたかったが、見つけられてしまった。その時の話では、インド人経営者は去らず、自分は解雇されたと言う。これらのバスの経営者は JJJ だと言う。将来は、自分も運

輸業に関わって、金を貯めたいらしい。当時は、人に家を貸すことに次いで、運送業がもうかる仕事だった。彼はバスから出て行った。

私はマケレレを卒業して商社に勤めた。しかし、役職は白人が占めていた。私は、この安っぽいバーの常連になったが、慰めはバーメイドだ。お気に入りのメイドに伝言を渡すために、私はウォッチマンに頼んだ。紙幣に「今晚、お暇？」と書いた。驚くなかれ、そのウォッチマンがワヒニャだった。

彼は一瞬、驚いた様子だったが、「イエス・サー」と私に答えた。私は当惑した。「私がおごるから、何か飲むか」と誘った。「客がいる間は飲めません」との返事だった。彼に小銭を渡すことも出来なかった。逃げるように、私はメルセデスで帰宅した。

翌週末、私は再び出かけた。例のバーメイドが目当てだった。ウォッチマンを呼んで、彼女に知らせてもらった。「イエス、ルーム 14、現金払い」と書かれた紙片が返って来た。ウォッチマンに、20 シリングのチップを渡した。普通なら 2 シリングでよいところだ。ワヒニャはその金を受け取った。

その後のワヒニャは、勤務中から酔っぱらっているのが見られた。彼がターンボーイの仕事を辞めたのは、バスが衝突し、運転手が死んだからだと言う。経営者の JJJ は何の補償もしてくれなかった。酒量が多くなり、金使いが荒くなった。密造のチャンガア¹¹⁸⁾にも手を出した。死んだら「メルセデスに乗ってやるよ」が口癖になった。

ある土曜日、ワヒニャが飲んでいいる私の隣に来た。彼は酔っていないかった。彼は「君は僕のことを敗残者だと思っているだろう。通信教育をしようにも金がなかった。他人に出来ることは君にも出来る、と先生は教えてくれたが、ある日、何人かの白人が来て、先生を教室の外へ連れ出した。僕らが泥壁をよじ登って見ている前で、奴らは先生を銃殺した」と話した。

ワヒニャはアル中を理由に解雇された。それ以来、私は彼を見なくなった。聞いていた誰かが言った「その男が、メルセデスを手にすることが出来なかったのは、気の毒だったな、乗ってみることもなかったのだろう」。

そんなことはなかった。候補者たちのライバル意識のご利益があった。誰もが自分流の葬儀を請け負うことを約束した。自分の名前を売らなかったのだ。そこで委員会が次のように取り決めた。①寄付金額を葬儀の日に公開する。②搬送については、JJJ が妻のショッピングカーを供出し、遺体を埋葬場まで運ぶと申し出たが、他の候補者が反対した。そこ

で、車を貸切り、費用を四等分することになった。③墓を掘り、セメントで固める費用は四等分することにした。④棺桶と十字架は、四人の意見がまとまらず、各人が自分の思うものを持ち寄り、参加者が決めることになった。⑤葬儀のスピーチ。棺桶と十字架を披露する前に、各候補者は5分の持ち時間を割り当てられた。⑥実施は日曜日と決まった。

町は葬儀の話でもちきりとなった。当日、誰もがイルモログ長老教会へ集まった。牧師のお祈りの後、誰もが、徒歩、車、ロリー、バスで墓地へ向かった。墓地にはもっとたくさんの人々が待ち受けていた。拡声器が置かれていた。各候補者が寄付した金額が読み上げられた。実業家は750 シリング、元首長は250 シリング、JJJ は1,000 シリングだった。これを知って、実業家はさらに300 シリングを足した。大学生は、20 シリングだった。

誰もが、棺桶と十字架を見たがった。抽選の結果、大学生、元首長、ビジネスマン、JJJ の順で用意したものを披露することに決まった。

「簡素と勤勉」をモットーに掲げる大学生は、シンプルな木製の棺桶と木製の十字架を披露した。農夫の元首長は、簡素と勤勉を大切にしながらも、土にすべてを託していた。彼は農業に力を入れていた。彼もまた、シンプルな木製の品を披露した。棺桶には、大きな乳房をした緑色の牛の絵が描かれていた。実業家は、男は死んでも、妻や遺児に、まともな家を残さなければならないと話した後、棺桶を披露した。ガラス窓がはめられ、幾重に何階もあるヒルトン・ホテルを模した棺桶で、一点の汚れもない白いシーツが敷かれてあった。次はJJJ の番だった。彼は6年間の国会議員生活を経験していた。貧者のために奮闘してきた旨を訴えた後、死者の意志を尊重したいという。彼が用意した棺桶は、メルセデス・ベンツ 660S の完璧なレプリカだった。

しかし、この時は、なぜか拍手が沸き起こらなかった。誰もが、何かおかしいと思った。死者に対する不敬、慎みに欠けた行為でないかと思われた。誰もが、この場に関わりたくないと思った。

JJJ は、自分のメルセデスへ戻り、走り去った。他の者も、その場を去った。結局、ワヒニャの遺体は、シンプルな棺桶に入れられ、身内の者と友人が葬った。

選挙の結果、JJJ が議席を守った。しかし、いつもの不正があったと言われている。大学生は100 票で、大学へ戻り、卒業後は、銀行に勤めた。ローンを借り、市民権を持たないインド人から家を買ひ、今では有力な賃貸業者になっている。ヨーロッパ人が経営する不動産会社が借家を管理しているということだ。実業家は破産した。ローンを借りすぎた結果、店と土地が競売に出された。JJJ がそれを買ひ上げ、すぐに売却して高利を得たという。

農夫の元首長も破産し、牛を売却した。

晩年のワヒニャがよく飲んでいて、チャンガア・バーへ行くと、破産したこの二人、今では仲良しのこの二人をよく見かけるといふ。誰かにキル・ミー・クイック（チャンガアの別名。「早く俺を殺してくれ」）をおごってもらふのを期待しているのだ。JJJは、メルセデス、それも、私と同じ660Sに乗っているが、疑いの眼で私に視線を送ってくる。

「さあ、4年後はどうなっているでしょうか。紳士諸君の皆さん、メルセデスを飛ばすというのは、いかがですか」。

「黒い鳥」と同じく1人称の語りで、より洗練された「ストーリーテリング」の形式を取っている。バーの中でのリアリティ、サスペンス要素も濃い。語り手の話を聞くバーの客たち、語り手とワヒニャの関係。ワヒニャの抱いた希望と抱負は、独立ケニアにかけたごく普通の人々に共通したものだ。ワヒニャはアフリカ人経営の学校で学んでおり、教育と新車とヨーロッパ風のマンションの夢を描いていたが、最後に転落した。四人の国会議員候補は、四つの政治的立場を表している。これら四つの立場の間には相克がある。学生、元首長、ビジネスマン、現職の四人の候補は、ワヒニャの死に際して、それぞれが自分流の棺桶を準備したが、最後はグロテスクなクライマックスを迎えている。

「死」、したがって「生」に対する伝統的意味付けに変化が見られる。かつては、「死」に対する畏れがあった。今は、生よりも、金が重要視される時代になっている。死に対する無関心は、生に対する、特に他人の生に対する無関心に通じる。生と死が、人工化され、商品化されてしまった。プラスチックの花、そして、涙までがプラスチック製だという時代が来たのである。この空虚感、シニシズム、非常事態下の大量殺戮。ワヒニャが絶望に至る道筋は、近代化を急ぐケニアとアフリカの縮図と言うべきであろうか。

「瞬時の栄光」の主人公ビートリスの男性版が、ワヒニャであろうか。ここでは、ワヒニャと似た半生の男が、今は成功して「ベンツ族」に仲間入りしている。この男が、イルモログのバーで、元親友、自分の分身でもあった男の人生を物語るのである。「教育は、成功の扉を開く」鍵である。語り手は、マケレレ大学まで学んだが、ワヒニャは、ほぼ同じスタートを切りながら、高等教育を受けることがなかった。転々として、最後は酒に浸り、元友人を含む金持ち

層に売春の仲介をするようなウォッチマンに落ちぶれたのである。彼の死は、たまたま四人の立候補者、つまり不正に汚れた現職議員、知識人を代表し、労働者の味方だと主張しているだけの未熟学生、万人に平等のビジネス機会を説く金権実業家、国民すべてに平等の取り分を主張する元首長の間で、政治問題として利用された。

学生は少額の金と木製の棺桶と十字架を提供した。元首長は、高額の花と木製の棺桶（はちきれんばかりの乳房をした緑色の牝牛の装飾がある）、実業家は、もっと高額の花とナイロビのヒルトン・ホテルを模した棺桶、JJJは、もっとグロテスクな、非の打ちどころのないメルセデス・ベンツ 660S（ドア、ガラス、栗色のカーテンとブラインドがついている）のレプリカの棺桶を贈ろうとしたのである。生涯を通して、ワヒニャがメルセデスに乗ることを願っていたからだ。

しかし、その場はしらける。金が人の命よりも優る価値を付けられている現実を見て、誰もが空虚感に襲われたのである。誰もが事態を承服しないし、拍手を送る者もない。事態の猥雑さ、不体裁にかかわることを拒否して誰もがその場を去る。候補者と雇われた支持者が、後に立ち尽くしている。突然、JJJが自分の車で立ち去ると、他の連中も速やかにその場を去る。JJJが当選するが、不正選挙のうわさが立つ。学生は、経営学の学位を取り、資本主義に仕え、最後にはヨーロッパの会社に管理を任せた大家主となる。実業家は、資本主義の犠牲者となり、社会的下層者に食いつぶされる。農民は、財産をすべて失う。JJJは国会議員として再選されるが、選挙区の厄介事に関わらないように決意する。

この短篇で、素材は十分に生かされている。しかし、よりよい社会が生まれる気配は皆無である。既存の社会秩序が延命するだけであろう。教育の機会の一部の層に開かれているだけである。大衆は、社会を突き動かしている諸力に覚醒していない。「JJJは今もメルセデスに乗っている、今では、私と同じく 660S型である。彼は私に、そう疑いの眼を向ける。これから先、4年たったら・・・それは誰にもわからない」。語り手は、どんな未来を予測しているのだろうか。メルセデスを走らせて、何かがわかるのだろうか。ワヒニャの人生の迫体験を勧めているのだろうか。

d. 「ベンツ族の男」(The Mubenzi Tribesman) ¹¹⁹⁾

刑務所の記憶は悪臭である。糞と小便、汗と息の臭いだ。ワルヒウは、人々との接触

を避けて歩いた。普通なら近寄らない、都心から離れ、焼肉がたてるジュージューという音、漂う独特の臭い、バケツから溢れた排泄物の臭いがたちこめ、下層の人々の笑いや叫びで喧しいアフリカ人ロケーションを通り抜けようとした。6ヶ月の刑務所生活を終えて、念願の自宅に戻るところだった。身体と粗末な衣服に染み込んだ刑務所の臭いを嗅ぎつけられないように、帰る必要があった。

ワルヒウは、故郷の村で、ただ独り大学に学んだ男だった。村の誰もが彼を讃え、期待した。彼は村の皆の息子であり、村人の期待を裏切ってはならなかった。

大学は別世界だった。国の独立は近く、白人は去りつつあった。ワルヒウは村へ戻り、村人のために働く決意を忘れなかった。在学中に、彼は女子学生ルスと恋仲になった。ルスは富裕な家庭に生まれたアフリカ人で、先んじて髪を直毛にし、かつらの使用を流行らせていた。二人は在学中に結婚した。

ワルヒウは村の生活に馴染んだ女性を選ぶべきだっただろうか。しかし、村には、彼にふさわしい高等教育を受けた娘はいなかった。ルスは、キリスト教徒で、町の生まれだったが、田舎の方が好きだと言う。

こうして、卒業後、二人は田舎へ移り住んだ。村人は二人を歓迎し、白人と変わらないアフリカ人であるルスを称賛した。ワルヒウの両親も、息子と嫁に期待した。ルスが、息子と同じく白人の知識を身に着けていることも自慢の種だった。ワルヒウは地元で小学校教師になり、ルスは町との間を往き来して働いた。二人は幸せだった。

そのうち、彼女は落ち着かなくなった。泥壁の小屋、電灯もなく、音楽も聞こえない。村人が夜遅くまで押しかけてくる。身内の者があれこれ問題を持ち込んでくる。プライバシーがなくなった。夫は、これが村の慣習だと言うが、彼女は窒息を覚えた。ワルヒウは妻を愛していたから、教師を辞め、二人は町に家を借りて移り住んだ。

ワルヒウは、町の石油会社のセールス部門に再就職した。教師の給料よりはよかったが、町の生活は、金がかさんだ。田舎の身内への仕送りは出来なかった。町での新生活に対応する必要が生じた。まず、メルセデス S220、妻のショッピング用にもう一台を買った。彼は、どうやら「ベンツ族」の一員になった。町の新興層の仲間入りに必要な準備だった。家具も揃え、以前は白人専用だったクラブの会員にもなった。

ルスは、自分の給料で、食費と衣類をまかなった。やがて、ワルヒウは、会社の金に手を出し始めた。横領である。初めは、秘密裏に返済するつもりでいたが、発覚した時、

金額は巨大になっていた。

横領事件は世間の注目を集め、新聞の取材もあった。法廷に来た母が涙を流しているのが見えた。牧師をはじめ、村人も多く来た。ルスが法廷に来ていないのは、慰めだった。6ヶ月の戒告留置だった。

ワルヒウは、暗くなるまでロケーションで待った。以前の「ベンツ族」の仲間に合わせて、今の自分の姿を見られなくなかった。その夜には、ルスと再会し、恥も悪臭も消え去るだろう。彼はバスを待った。

バスが来た。あたりは暗くなっていた。彼はルスとの再会を想像した。町を出て、二人で近隣の外国へ行き、生活を立て直すつもりでいた。村人や両親の期待を裏切ってしまったが、妻を失望させたくなかった。

バスから降りた。バラとブーゲンビリヤの臭いがあたりに漂っていた。ロケーションとは違う別世界だった。彼は住み慣れた自宅に向かって歩いた。戸口の近くまで来ると、なかから男の太い声が聞こえた。ルスはこの家から引っ越したのだろうか。彼は勇気を出してノックした。戸が開いて、女が出てきた。ルスに間違いなかった。ワルヒウは彼女を抱擁しようと両手を広げた。「来ないで。誰なの」。ルスは泣いていた。次には、いっそう厳しい口調で「警察を呼ぶわよ。ここの敷地に入らないで」。戸がピシャリと閉められた。

全身から感覚が消えた。身体に浸み込んだ悪臭が耐えきれないほどに、強く臭った。その場から引き下がりながら、ワルヒウは、突然、枯れた、醜い笑い声をあげた。その笑い声は、やがて自己嫌悪と苦痛の涙に変わった。

元学校教師の男の転落が語られる。大学の同級生と結婚したが、彼女は白人の生活にあこがれており、村の伝統的生活、人間関係に適応できない。男は教師を辞め、二人で町へ移り、独立後の新興階層の生活に倣う。ベンツなどを購入するが、町での生活は苦しい。職場の金の使い込み。男は救いようのない犠牲者として描かれる。社会の価値が分裂し、伝統的家族生活、伝統的人間関係の崩壊が描かれている。「メルセデスの葬儀」と似た展開があるが、主人公は教育エリートで、ある期間は成功者である。ベンツ族の一員として、体面を維持することに汲々としている。妻の元に向かう途中で、主人公は自分の半生を思い描く。道徳的規範の失われた社会が描かれている。第3部の作品群は、近

代化に伴う人間的価値の喪失、文化的・精神的な根無し草の生活を描き、誰もが人生に対して満足できるような対応が出来ていない。誰もが犠牲者である。だが、自分が犠牲者であることに気付いていない者もいる。

X. 短篇の技巧と特徴

これらの短篇では、登場人物、特に主人公の内面、精神状態が天候や風景、自然環境でシンボライズされることが多い。「ムグモ（イチジクの木）」や「日照りとともに去りぬ」などに顕著に見て取れるが、闇、雷鳴、雨（小雨もあれば豪雨もある）、雲、風、光、霧、森、畑、川（谷）、鳥の鳴き声、ムグモの木などである。これらの描写が必ず主人公の行動、心理に象徴的に関係している。

たいていの短篇は、事件の核心から始まる（*in medias res*）。その後、核心に至るプロセスが述べられる。たとえば、「そして、雨が降ってきた」では、冒頭第2、第3パラグラフに主人公ニョカビの内面が描かれる。

Her life seemed meaningless and as she sat there looking vacantly into space, she felt really tired, in body and spirit . . . So old. And no child !.¹²⁰⁾

「彼女の人生は、意味がないようであった。そこに座って、ぼんやりと虚空を見つめていると、疲れ切った自分を感じた。身体も、心も・・・すっかり老け込んでしまった。しかも子供がいない」。

短篇の多くで、生きていることに意味がない、と思い込んでいる主人公が多い。視線は、社会集団から切断され、独りで思い悩む人物に向けられる。不妊の女やバーメイド、貧しいウォッチマンなどである。「黒い鳥」のマンガラ、「闇夜の逢引き」のジョン、「殉教者」のジョローゲ、「帰還」のカマウ、「村の牧師」のジョシュアなど、多くは自分の力だけでは解決しようのない苦悩に苛まれている。

① 書き出し

作品書き出しの文章を検討してみよう。

a. 「ムグモ」

Mukami stood at the door : slowly and sorrowfully she turned her head and looked at the hearth.¹²¹⁾

「ムカミは、戸口に立った。ゆっくりと悲しそうに振り返って、暖炉を見つめた」

- b. 「そして、雨が降ってきた」

Nyokabi dropped the big load of firewood which she had been carrying on her frail back.¹²²⁾

「ニョカビは、か細い背中に乗せてきた薪の大きな束を降ろした」

- c. 「日照りとともに去りぬ」

At long last, I also came to believe that she was mad.¹²³⁾

「とうとう、私もまた、彼女は狂っていると信じることになった」

- d. 「村の牧師」

Joshua, the village priest, watched the gathering black clouds and muttered one word: 'Rain'.¹²⁴⁾

「村の牧師ジョシュアは黒い雲が集まって来るのを見つめて、『雨だ』とぼつりとつぶやいた」

- e. 「黒い鳥」

Nobody really knew him. Even Wamaitha, who may claim to have been most close to his heart, never understood him.¹²⁵⁾

「誰も本当の彼を知らなかった。最も近い関係にあったはずのワマイザでさえ、彼のことを理解していなかった」

- f. 「殉教者」

When Mr and Mrs Garstone were murdered in their home by unknown gangsters, there was a lot of talk about it.¹²⁶⁾

「ガーストン夫妻が見知らぬ暴漢たちに自宅で殺害された時、事件についていろんなことが言われた」

- g. 「帰還」

The road was long. Whenever he took a step forward, little clouds of dust rose, whirled angrily behind him, and then slowly settled again.¹²⁷⁾

「道は長くつづいた。一歩足を運ぶ度に、砂埃が上がり、後方に激しく舞い、やがてゆっくりと沈んでいった」

- h. 「闇夜の逢引き」

He stood at the door of the hut and saw his old, frail but energetic father coming

along the village street, with a rather dirty bag made out of a strong calico swinging by his side.¹²⁸⁾

「彼が戸口に立っていると、老いてはいたが、かくしゃくたる父が村の通りをやって来るのが見えた。丈夫なキャラコの布でできた汚れたバッグが脇腹で揺れていた」

i. 「グッドバイ・アフリカ」

She was in the kitchen making coffee. She loved making coffee even in the daytime when the servants were around.¹²⁹⁾

「彼女は台所でコーヒーをたてていた。日中から、召使いたちがそばに居る時でも、自分でコーヒーをたてるのが好きだった」

j. 「瞬時の栄光」

Her name was Wanjiru. But she liked better her Christian one, Beatrice.¹³⁰⁾

「彼女はワンジルといった。しかし、クリスチャン名であるビートリスの方が好きだった」

k. 「十字架の前の結婚式」

Everyone said of them : what a nice family ; he, the successful timber merchant ; and she, the obedient wife who did her duty to God, husband and family.¹³¹⁾

「誰もがその一家のことを褒め上げた。何とすばらしいご家族でしょう。ご主人は材木商人として成功され、奥様はおしとやかで、神さまはもちろん、夫と子供さんに尽くしておられる」

l. 「メルセデスの葬儀」

If you ever find yourself in Ilmorog, don't fail to visit Ilmorog Bar & Restaurant : there you're likely to meet somebody you were once at school with and you can reminisce over old days and learn news of missing friends and acquaintances.¹³²⁾

「もし、イルモログへ行くことがあれば、必ずイルモログ・バー・&レストランへ行かれるとよい。そこでは、学校時代に一緒だった誰かと会うかも知れず、そうなれば、昔話に花が咲くだろうし、消息のない友や知り合いのことがわかるかもしれない」

m. 「ベント族の男」

The thing one remembers most about prison is the smell : the smell of shit and urine, the smell of human sweat and breath.¹³³⁾

「刑務所にまつわる記憶の最たるものは、その臭いだ。糞と尿の臭い、人間の汗と息の臭いだ」

なお、短篇集に収録されていない初期短篇「風」の書き出しは以下のとおりである。

Karanja stood outside the door of his hut and looked across the courtyard, across the field and beyond the valley to the opposite ridge.¹³⁴⁾

「カランジャは戸口の外に立って、中庭から畑の向こう、谷を越えて、向かいの丘陵を見つめた」

これらを見ると、多くの短篇で、冒頭に主人公の固有名詞が登場している。「ムグモ」、「そして、雨が降ってきた」、「村の牧師」がその典型である。「風」も例外ではない。(第2パラグラフに現れるものも1例ある)。ちなみに小説では、たいていのチャプターは叙述から始まるが、例外が二つの小説に見られる。ここでは、重要な登場人物の固有名詞が冒頭に現れる。[『一粒の麦』では、「ムゴは脅えた」(Mugo felt nervous)¹³⁵⁾で始まる。『泣くな、わが子よ』は「ニョカビが息子を呼んだ」(Nyokabi called him)¹³⁶⁾で始まる]。

文章は、概して短い。一見、シンプルに見えるこの手法が、ストーリーへの導入を容易にし、簡潔で、きびきびした、力のこもった文体効果を発揮している。欽定英訳聖書の英語が高校時代から彼の理想の英語であったことも、どこかで影響しているのであろう。どの作品も、男性よりは、むしろ女性の描写により生彩がありそうである。

「ロバさながらに働く一日の重労働のあとに、やっと休憩を取るのはすばらしく、快適だった」¹³⁷⁾（「そして、雨が降ってきた」）、「ジョンは、彼女を見つめて、その場に長く立ち尽くした。このような女性が、懸命に働いて、なおかつ幸せに日々を送っているのは、なぜなのだろうか。人生を信じているのだろうか。部族を信じているのだろうか。白人の生活に一度も、染まったことのない彼女のような人たちは、何かしがみついて離さないものを持っているように見える」¹³⁸⁾（「闇夜の逢引き」）と言った観察は、外部の者にもリアルで、アフリカ女性の運命を物語っているようだ。女性は、長短篇に無数に現れるが、グギにとって、女性の形象の原型は、村に生きる女であり、ことに母親であると言っても過言ではなさそうである。

② 推敲の跡

これらの短篇の一部について、後日、各種のアンソロジーに収録される場合

に、語彙や表現の一部を中心に、初出の内容を改訂している場合がある。短篇集収録の 13 作品のうち、4 篇（「帰還」、「村の牧師」、「日照りとともに去りぬ」、「イチジクの木」）が、最初は『ペンポイント』に、ついで、デイビッド・クック編『オリジン・イースト・アフリカ』（1965）¹³⁹⁾ に、そして最終的に『秘めやかな生活』（1975）に収録された。これらは、最多の場合に 3 種類のバージョンが残っていることになる。各バージョンを通じて改訂のない例は皆無で、2 種類のバージョンしかない場合もあるが、その場合は、たいていが『オリジン・イースト・アフリカ』への収録時に決定稿になっている。余分な語彙、冗長な表現を削除し、簡潔明瞭にすることで、文体を引き締める場合が多い。witch-doctor, black-magic workers などの語は、それぞれ medicine-man, magic workers に改められている。しかし、語彙・表現技巧上の改変にとどまらず、作品の内容、メッセージそのものが決定的に変更される場合もある。

以下でその種の例の一端を見ておこう。「村の牧師」の例である。

① 『ペンポイント』第 13 号（1962）

A big raincoat was the only thing that Joshua had put on, on top of his usual clothes and trudged quietly across the courtyard.¹⁴⁰⁾

『オリジン・イースト・アフリカ』（1965）；『秘めやかな生活』（1975）

Joshua had just put on a big raincoat over his usual clothes. He trudged quietly across the courtyard.¹⁴¹⁾

* 人物を冒頭で明示し、文章を二つに分けることで、シンプルで引き締まった文体効果が見られる。

② 『ペンポイント』第 13 号（1962）

Early in the morning, he would go all the way to the sacred tree and there make peace with the tribal god.¹⁴²⁾

『オリジン・イースト・アフリカ』（1965）

* 先の文中、冗長と思われる all the way を削除。the tribal god を his tribal god に変更¹⁴³⁾。

『秘めやかな生活』（1975）

* 先の文中、his tribal god を his people's god に変更している¹⁴⁴⁾。なお、ある時期から、全作品を通じて、tribe という用語の使用を排除する傾向が強い。

③ 『ペンポイント』第13号(1962)；『オリジン・イースト・アフリカ』(1965)

‘Hmm ! So the fox comes to the lion’s den. Ha ! Ha ! So Joshua comes to make peace. Ha ! Ha ! Ha !..¹⁴⁵⁾

『秘めやかな生活』(1975)

*先の文中、the fox を the whiteman’s dog に変更¹⁴⁶⁾。元の文章は、イソップ寓話を思い起こさせる。「白人に忠実な犬」と直截に蔑んでいる。この文章のすぐ後に、以下を新たに追加している。ジョシュアの罪をなじり、雨乞い師の勝ち誇った自信が伺える。

I knew you would come to me Joshua・・ You have brought division into this land in your service to the white strangers. Now you can only be cleaned by the power of your people.¹⁴⁷⁾

④ 『ペンポイント』第13号(1962)

The old sternness and apparent hardness of Livingstone was no longer in his eyes but only a softened, sympathetic understanding of a man who seemed to be looking at a new Joshua・・

Suddenly the two men met in a hand-shake, hand-shake that made Joshua’s heart and love go to [sic] Livingstone for in him, he saw not just a man with a white skin, stern and unpredictable, but a man who could understand another man. For them both it was a great moment, a moment of understanding・・¹⁴⁸⁾

『オリジン・イースト・アフリカ』(1965)

*上記の最後の二つの文章。二人の行動と様子を外側から客観的に描写するにとどまり、抑制のきいた、控えめな表現になっている。

Suddenly the two men met in a hand-shake, a hand-shake that made Joshua’s heart and love go out to Livingstone. They mutely looked at one another ; none broke the silence that settled about them.¹⁴⁹⁾

『秘めやかな生活』(1975)

The old sternness and apparent hardness of Livingstone was no longer in his eyes but only a softened, condescending sympathy of a man sure of a new and stronger follower・・ With slow deliberation, Livingstone took Joshua’s right hand in his and with the left patted him on the shoulder. He muttered something about a broken heart and contrite spirit. Joshua looked mutely at him. ‘Let’s pray’, Livingstone said at last.¹⁵⁰⁾

*最後のシーンである。『ペンポイント』(1962) では、ジョシュアとリビングストーン牧師との間に、堅く、友好的な絆が確認されている。この点で、ジョシュアは積極的な役割を担っている。1965,1975 年版では、ジョシュアはむしろ沈黙している。二人の間に友好関係を示唆するような会話が途絶えている。キリスト教に対する作者の毅然たる態度がにじみ出ている。

最末尾の文章の比較も興味深い。

⑤ 『ペンポイント』第 13 号 (1962) ; 『オリジン・イースト・アフリカ』(1965)

When she came back a few minutes later, she found them both busy talking about the problems of Makuyu now that the rain had come and the menacing drought was over.¹⁵¹⁾

『秘めやかな生活』(1975)

When a few minutes later she came back she found Livingstone talking about the problems of Makuyu now that the rain had come and the drought was over. Joshua listened.¹⁵²⁾

* ジョシュアは、牧師と話しているのでなく、脇役にまわっている。

もう一つの例を示そう。「帰還」では、冒頭に多少の、末尾には顕著な変更が見られる。

⑥ 「帰還」冒頭

『ペンポイント』第 11 号 (1961)

The road ! It was long and dusty. Whenever he took a step forward, little clouds of dust were raised up, whirled angrily behind him and then settled down again.¹⁵³⁾

『オリジン・イースト・アフリカ』(1965) ; 『秘めやかな生活』(1975)

The road was long. Whenever he took a step forward, little clouds of dust rose, whirled angrily behind him, and then slowly settled again.¹⁵⁴⁾

* 「道」は、作品の多くで象徴的なモチーフの一つである。先に使用した dusty は冗長として削除されている。次の文章では、受身表現を改め、little clouds of dust を能動主語に改めている。

⑦ 「帰還」最末尾

『ペンポイント』第 11 号 (1961.11) ; 『トランジション』(1962, vol.2, no. 3)

The big yellow moon dominated the eastern horizon. It looked like a big, yellow eye, watching his grief-stricken parents as they helplessly beheld their son glide away in bitterness and rage !

He stood on the bank of the Honia River. He gazed fixedly at the river without actually seeing it. He was seeing his hopes dashed on the ground, instead. The river moved swiftly, making the same ceaseless murmurs. Rather soothing. In the forest the crickets and other insects kept up an incessant buzz. And above the moon shone in all her brightness. His heart began to thaw. He tried to remove his coat and the small bundle he had held on to so firmly, fell. It rolled down the bank and before Kamau knew what was happening, the small bundle was floating swiftly down the river. For a time he was shocked and wanted to retrieve it. What would he show his —Oh, then he remembered. He had forgotten so soon? His wife had gone. And all of the little things that had so strangely reminded him of her and that he had guarded all those years, had gone ! He did not know why. But somehow he felt relieved. Warmth began to rise in his heart. He felt as if he would dance the magic of the night, the ritual of the moon and the river. All thoughts of drowning dispersed. Life was still sweet. He began to put on his coat and all the time murmuring to himself —why should she have waited for me ? Why should all the changes have waited for my Return ?

“My son !”

He quickly turned round. There, standing and looking resplendent under the waning moon, was his mother. For the first time he saw sorrow and untold hardships written all over her wrinkled face. He felt like weeping, yes, weeping like a woman. She had all the time followed him. He looked at her and forgot all about himself.

“Mother !” It was a softend voice full of emotion. He went towards her and took her by the arm. “ Let’s go home !” he murmured again. This was truly his “ Return”, and as he peered into the future, as he became aware of the beauty of life, in spite of its hardships, he could see no possibility of his going away again.¹⁵⁵⁾

『オリジン・イースト・アフリカ』 (1965)

The big yellow moon dominated the eastern horizon. It was like a great eye, watching two grief-stricken parents as they helplessly watched their son slip away in bitterness.

He stood on the bank of Honia River. He gazed fixedly at the river without actually seeing it. He was seeing his hopes being dashed on the ground instead. The river

moved swiftly, making the same ceaseless murmurs. In the forest the crickets and other insects kept up an incessant buzz. And above, the moon shone in all her brightness. His heart began to thaw. He tried to remove his coat, and the small bundle he had held on to so firmly fell. It rolled down the bank and before Kamau knew what was happening, it was floating swiftly down the river. For a time he was shocked and wanted to retrieve it. What would he show his — Oh, then he remembered. Had he forgotten so soon? His wife had gone. And all the little things that had so strangely reminded him of her and that he had guarded all those years, had gone! He did not know why, but somehow he felt relieved. Warmth began to rise in his heart. He felt as if he would dance the magic of the night, the ritual of the moon and the river. All thoughts of drowning dispersed. Life was still sweet. He began to put on his coat, all the time murmuring to himself ‘Why should she have waited for me? Why should all the changes have waited for my return ?

“My son !”

He quickly turned round. There, standing and looking resplendent under the bright moon, was his mother. For the first time he saw sorrow and untold hardships written on her wrinkled face. He felt like weeping, yes, weeping like a woman. She had all the time followed him. He looked at her and forgot all about himself.

“Mother !” It was a softend voice full of emotion. He went towards her and took her by the arm. “ Let’s go home !” he murmured again. This was truly his ‘return’, and as he peered into the future, as he became aware of the beauty of life, in spite of its hardships, he could see no possibility of his going away again.¹⁵⁶⁾

『秘めやかな生活』 (1975)

The big yellow moon dominated the horizon. He hurried away bitter and blind, and only stopped when he came to the Honia river.

And standing at the bank, he saw not the river, but his hopes dashed on the ground instead. The river moved swiftly, making ceaseless monotonous murmurs. In the forest the crickets and other insects kept up an incessant buzz. And above, the moon shone bright. He tried to remove his coat, and the small bundle he had held on to so firmly fell. It rolled down the bank and before Kamau knew what was happening, it was floating swiftly down the river. For a time he was shocked and wanted to retrieve it. What would he show his — Oh, had he forgotten so soon ? His wife had gone. And the little things that had so strangely reminded him of her and that he had guarded all those years, had gone ! He did not know why, but somehow he felt relieved. Thoughts of drowning himself dispersed. He began to put on his

coat, murmuring to himself, ' Why should she have waited for me ? Why should all the changes have waited for my return ? ' ¹⁵⁷⁾

＊顕著な変更である。1975 年版では、先の版と比べて著しい削除、変更がある。1965 年版では、先と比べて若干の使用語彙の変更、削除のほか著しい変更はない。ただし、最後のパラグラフで主人公が母親の存在に気付いた時、天に浮かぶ月は、初出では *waning moon* であったが、1965 年版では *bright moon* に代わっている。主人公の生き抜く意志、母と息子の揺るぎない絆をこれによって象徴したのであろう。*Bright moon* は、母を形象したものであろう。1975 年版では、そもそも傷心の息子の前に母親が登場しない。「お前」と呼びかける声もなく、「明るい月」もない。主人公は何によって救われるのかは明示的でない。しかし、彼が生きる意志を失っていないことは確実である。人は試練に耐え、生き抜かなければならないとのメッセージが読み取れる。

幕間：60 年代ナイロビ大学の頃 / イリノイから再びナイロビ大学へ

リーズ大学留学後、ケニアへ戻ってからは、ナイロビ大学英文科の特別講師を 1 年半経験した。1969 年 1 月、学生ストがあり、同月 27 日に大学が閉鎖された。この時、大学当局による学問の自由の侵害、学生組織への専制的弾圧、副大統領オギンガ・オディンガの学内での講演の拒否に抗議して、辞職した。なお、この頃、タバン・ロ・リヨン、ヘンリー・オウール・アニュンバ と「英文科の廃止」を計画したが、これについては第 5 部に譲る。

その後、短期間、マケレレ大学の創作文学コースに招かれたが、1970 年から 71 年までの 1 年間、客員准教授として合衆国イリノイ州のノースウェスタン大学へ招かれた。この時に、最後の英語小説『血の花弁』の執筆を始めている。

ノースウェスタン大学でアフリカ文学を教えた後、1971 年 8 月にナイロビ大学へ復職した。1 年ぶりのケニアで、「疲れ、当惑している人々の表情を見た」¹⁵⁸⁾ という。「私は、リムルのバーを渡り歩き、飲み、歌い、踊っている人々を見た。そんな時、一晩の客から金を盗んだバーメイドの話を聞いた。そのバーメイドは、逮捕される前に、バーへ戻り、一日中、金を見せびらかして遊びほうけたという」¹⁵⁹⁾。この経験が、短篇「瞬時の栄光」、「十字架の前の結婚式」、「メルセデスの葬儀」執筆の契機となった。

アメリカからナイロビへ戻ったこの時期、マケレレ大学時代の同僚学生であったミシェレ・ギザエ・ムゴとの間で、マウマウの指導者デダン・キマジを描く合作劇の構想を持っていたという。それは、1971 年頃のことであったが、当

時ミシェレはアメリカのニュー・ブランズウィック大学に籍を置いており、共同執筆が具体的に実現したのは、彼女がナイロビ大学の同僚としてケニアへ戻ってきた 1974 年以降のことだった。この結果、二人の戯曲『デダン・キマジの裁判』が 1976 年に出版された。

X I. 最後の英語戯曲『デダン・キマジの裁判』:「ケニア」の再創造 (*Trial of Dedan Kimathi*) ¹⁶⁰⁾

この劇は、外国による支配と抑圧からの全面解放のために闘ったマウマウ戦争のリーダー、デダン・キマジを民族のヒーロー、ケニア独立闘争の真の英雄として讃えるものである。キマジをケニアの解放闘争史上に位置づけ、彼の闘いの遺産を現代ケニアの革新的な大衆運動に結び付けようとしている。

オープニング、三つのムーブメント、14 のシーンからなる構成である。アクションは、主要には、法廷、裁判所外の通り、刑務所内独房で起きるが、時間的・空間的に自在に動く。時間的には、独立闘争の時期から、政治的独立後の現在の革新運動までを覆っている。つまり、現代と過去を随所で対話させている。過去が現在に、現在が過去に流れ込む。空間的には、非常事態の渦中の森の中でのキマジのキャンプシーンを含んで、通り、独房、法廷が相互に流れ込む。

黒人の過去、歴史を暗黙裡に演じるマイムやダンス、シルエット、ドラム演奏、歌、音楽、突然の暗転、巧みな照明などが芸術的効果を高めている。マイムや数々のシンボリズム、幻想とリアリズムのコンビネーションによる演劇効果はすばらしい。キマジの情熱的なスピーチは、レトリックの力にあふれている。

4 度の裁判シーンがある。どれもが「許可なく、火器、すなわち連発銃を所持していた」とのキマジに対する罪状の読み上げで始まる。

Dedan Kimathi s/o Wachiuri, alias Prime Minister or Field Marshal, of no fixed address, you are charged that on the night of Sunday, October the 21st, 1956, at or near Ihururu in Nyeri District, you were found in possession of a firearm, namely a revolver, without a licence, contrary to section 89 of the penal code, which under Special Emergency Regulations constitute a criminal offence. Guilty or not guilty ? ¹⁶¹⁾

「ワシウリの息子、首相もしくは陸軍元帥にして、住所不定なるデダン・キマジ、この

者は 1956 年 10 月 21 日の日曜日夜、ニエリ地区イフルル付近にて、許可なく火器、すなわち連発銃を所持していた。非常事態下取締り特別令のもと、本件は犯罪にあたるものである。罪状を認めるや否や？」

オープニングでの、この罪状言い渡しは全体のライトモチーフになっている。「女」、「少年」、「少女」が囚われのキマジを、刑務所から救出しようとしている。キマジへ運ぼうとする「パン」の中には拳銃が隠されている。「女」からこれを預かった「少年」と「少女」は中身を知らない。「女」はキマジの同志なのであろう。名前はない。ただの「女」である。キマジと同様、「女」も、象徴的存在である。「女」は「働く母親」「たたかう女」として「少年」、「少女」と向き合っている。「少年」「少女」にも名前はない。「少年」と「少女」がマサイ人の風采でいるのは、森のたたかい（マウマウ）の民族的広がりを示すためであろう。

過去 400 年の黒人の歴史が、マイム、あるいはシルエットとして背景で演じられる。たとえば、金持ちの黒人首長が、欲深い白人商人へ黒人奴隷を売り飛ばしている。無慈悲な黒人の奴隷監督官がプランテーションで黒人奴隷を取り仕切っている。背後では、白人が監視している。しかし最後に、歌と雄叫びが上がり、反帝国主義のスローガンが掲げられる。キマジが拷問にあっている時にも、歌と雄叫びが何度も繰り返される。

もう少し、違った角度から見直してみよう。四つの局面が現れる。

第 1 局面：黒人首長と強欲な白人商人のやりとりがある。数人の強健な男子奴隷と二、三人の女子奴隷が、いかにも上等な綿布、大量の飾り物と交換されている。身内の者や子供たちが、地面に泣き崩れている。なかには、怒りと悲しみのあまりに、威嚇するように、こぶしを天に突き上げている者もいる。

第 2 局面：疲労困憊した黒人奴隷たちがロープで繋がれて、観客席をねり歩く。やがて重い荷物を運んで、舞台に上がる。ひどく鞭打たれながら、次にはボートを漕いで舞台を横切る。

第 3 局面：残忍、無慈悲な黒人の奴隷監督官の指揮下で、黒人奴隷がプランテーションで働いている。白人の奴隷主が見回りに来ている。

第 4 局面：戦闘的な黒人たちの行列が続く。うたい、雄叫びをあげて、反帝

国主義のスローガンが舞台に漲る。

さらに違った角度から見直してみよう。三つのムーブメントが現れる。

第 1 ムーブメント：キマジがニエリの刑務所に監禁されている。舞台に、異様な緊張感が漂う。「女」がキマジ救出作戦を練っている。キマジの少年時代、教師時代、そして民衆のリーダーになるまでの人生を「女」が語る。二人のキングズ・アフリカン・ライフル部隊兵¹⁶²⁾のやり取りが、ある程度まで劇全体の輪郭を描き出す。二人は、「黒人分断策」など、植民地政府の統治政策を語っている。刑務所内の二人の黒人看守の対話がある。二人の間で、マウマウに対する評価が異なる。一人は、キマジを軽蔑している。もう一人は、キマジを尊敬・評価している。最後に、二人ともが植民地政府への奉仕に疑問を覚え始める。

第 2 ムーブメント：入植民を代表して、白人が、恩知らずなキマジを「気違いブッシュマン」「黒いエテ公、糞くらえ」などと罵倒している。

第 3 ムーブメントを含む三つのムーブメントを通して、キマジへの拷問がある。拷問に際して、突然の暗転がある。鞭の音について、過去の拷問のシーンがシルエットで浮彫りにされる。植民地支配に順応する黒人の姿も見られる。これらの技法が臨場感を盛り上げている。

構成上から、6 つの特徴的なシーンを取り出せる。

最初の二つは、奴隷制を示すマイムによる野外劇である。「女」「少年」「少女」が登場する。三つ目は、裁判所外の通りと刑務所内の通路が舞台である。四つ目は、フラッシュバックで描かれる森の戦場シーンである。このシーンは長く、全体の約 5 分の 1 である。舞台はニャンダルアの山中である。五つ目は、キマジが罪状を言い渡される裁判所内の三つの部分からなるシーンである。六つ目は、キマジの独房内での四つの部分からなる裁判シーンである。

全体を通じて、キマジの主張を検討してみよう。

「刑事法、抑圧の法によって作られた刑事法廷での刑事裁判に対して、私は言うべき言葉を持たない。私はあなた方の法律と裁判所を軽蔑する。我々黒人に対して何をしてくれたというのだ。私はわが自由を要求する。それこそが、抑圧された者、辱められた者、傷つけられた者、侮辱された者の永遠の法律である」¹⁶³⁾。これがキマジの基本的主張である。

「法律は一つ、正義は一つしかない」との裁判官の意見に対しては、「二つの法、二つの正義がある。資産家、金持ち、外国の搾取者を守る法と正義がある。もう一つは、貧しい者、飢えた者、私の同胞を沈黙させる法と正義である」と答えている。「打たれ、飢えて、軽蔑され、唾を吐かれ、鞭打たれても、新しい夜明けを待って、くじけることを拒否する」¹⁶⁴⁾と反抗している。

「法と秩序なくして自由は存在しない」¹⁶⁵⁾との裁判官の言辞に対しては、「自由なくして、秩序と法は存在しない」¹⁶⁶⁾と言う。ここでは既存の法律を絶対視し、「法の番人」を貫こうとする白人の裁判官を、「法匪」として、やり返している。

ゲリラ兵士たちへの発言も注目されてよい。

「貧しい者が戦闘に送られて死ぬ。寄生階級が富を蓄えて生きている。我々はイギリス人と闘っているのではない。英国の植民地主義、我々の土地、工場、富を盗む帝国主義者と闘っているのだ。君たちは、英国の帝国主義と立ち向かえるか」¹⁶⁷⁾。

「我々は歴史を知らなければならない。特にこの美しいケニアをレイプさせまいと闘ってきた人々の行為を。抑圧と搾取に対抗してしっかりと立ち上がった人々の行為を」¹⁶⁸⁾。

「ここに未来の社会の種をまこう。黒人は何も発明したことがないという嘘を抹殺し、何世紀にもわたる抑圧が我々の心に植え付けた劣等意識を捨て去ろう。起て、立ち上がれ、ケニアの労働者と農民たち。われらの勝利は働く者の勝利だ、全面的な解放のために世界中で闘っている者の勝利だ」¹⁶⁹⁾。

「この国を建てたのは、お前たちの金であるというのは真実ではない。我々の汗が、この国を建設したのだ。我々の手がこの国を建設したのだ」¹⁷⁰⁾。

これを要するに、キマジの認識を敷衍すれば、ケニアの「独立」は新興の黒人エリートとかつての植民地主義者との間の談合・譲歩によって与えられた「国旗の独立」であり、我々が期待した真の独立ではないと言うのである。

作者にとっては、キマジのこの認識を未来に生かし切ることが肝要なのである。歴史は静止していない。そこから、社会的・経済的現実が生み出されている。さらに未来が紡ぎ出される。その意味で、キマジのシンボリックな存在が大切なのである。

これを確証するかのように、「我々にとって最も大切なことは、我々の歴史を想像的に再建すること、マウマウとキマジの世界を憲法上の独立の前後の時期の農民と労働者の闘いの名で描くことであった。この劇は、英国支配階級による 60 年にわたる植民地支配の拷問と無慈悲な抑圧のもとで、くじけることなく、今に続く搾取と抑圧と新たな奴隷化に抵抗する決意を持ち続けてきたケニアの農民と労働者の集団的な意志を想像的に再創造し、解釈することである」¹⁷¹⁾と序文にある。

さらに序文から引用しよう。

「外国による搾取と支配の勢力と闘うケニア人の英雄的な抵抗の輝かしい歴史、ヨーロッパの植民地権力—ポルトガル人による征服と殺戮と略奪に対して初めて武器を取って戦ったケニア人と他の東アフリカの人々の 15 世紀から 16 世紀にさかのぼる抵抗運動を語るような歴史は、ケニア人によって全く書かれていない。我々の歴史家、政治学者たち、そして文学者の一部を含めて、誰もが、伝統的にケニア人は目的もなく各地を放浪し、無益な戦争に従事してきた、つまりケニア人はいとも簡単に、英国の占領に身をゆだねたといった植民地主義者のでっち上げた神話を作り出し、粉飾し、記録することに専念してきた。これらの知識人は、だれの利益のために書いてきたのだろうか。恥知らずにも、帝国主義を真っ向から擁護し、日向ぼっこしているアングロ・アフリカ・コモンウェルスの植民地総督の言い草をほめそやす者までがいたのである」¹⁷²⁾。

この戯曲は、キマジへの罪状の言い渡しが行われる最後の法廷シーンで終わる。キマジは「今こそ、私は知った。どの裏切り者に対しても、千の愛国者がいる」。「さあ、進むがよい、家々で団結せよ、山々で団結せよ、汝と血の絆を結ぶのは、闘いに立ち上がる者だけだ、ケニアの民衆は必ず解放されるだろう」¹⁷³⁾と述べている。終盤で、裁判官の罪状言い渡しの声が、キマジの辛辣な哄笑でかき消される。ついで反抗的な銃声が響く。最後にスワヒリ語で解放のコーラスが押し寄せる。罪状言い渡しとともに、キマジ救出作戦は成功する。こうして、キマジの抵抗精神が民衆の手元に引き渡される。

① マウマウの「脱構築」

この作品は、ケネス・ワテネ (Kenneth Watene, 1944~) ¹⁷⁴⁾ の戯曲『デダン・キマジ』 (*Dedan Kimathi*, 1974) へのアンチテーゼとして書かれたという。ワテネの作品は、これより 2 年前の 1974 年初めにナイロビの国立劇場ほかで上演されていた。ワテネはキマジを英雄として描いてはいるが、一方で、キマジを

無慈悲な利己的人物として描いている。特に、敵との和解を提案した部下ニャティの殺害に関連して、キマジの形象に疑問を覚えたという。ワテネは、キマジの情熱的・革命的理想主義、カリスマ的指導力、無条件独立の意志を強調してはいる。同時に、キマジの人間的弱さを描き、全体として、マウマウの達成についての歴史的評価が曖昧であることに疑問を覚えたという。

グギとミシエレは、ケニアの労働者階級の抱負をキマジに体现させること、マウマウ戦士の闘う意志を通じて、現代史のなかにキマジを再創造すること、キマジの現代的意義を問うことを狙った。『デダン・キマジの裁判』は、社会正義を求める闘いの遺産をケニア民衆に教えること、現代に生きる人々に、この闘いの系譜を知らしめることであった。キマジは革命のリーダーである。人民を代表する声である。最後の場面で、「女」が導く「少年」と「少女」は、ケニアの未来の可能性を示している。「少年」と「少女」は、労働者と農民の力強い群衆の中心に位置づけられている。

次の文章は、アフリカ人作家の創造の意志として、「アフリカ文学」の主体性の宣言として迫真力に富んでいる。

「なぜ、ケニア文学は全体として、かくも服従的で、歴史を形づくり、変革する力をもつ民衆を描こうとはしなかったのか。・・・なぜ、われわれ芸術家は、これらの人物（ワイヤキ、キマジなどの過去の英雄）と彼らの抵抗の叙事詩的行為を賛美する歌をうたわなかったのか。・・・我々は、ケニア文学—じっさい、すべてのアフリカ文学とその作家は試練に立たされているものと信じている・・・我々は民衆の側に立つか、帝国主義の側に立つかのどちらかである。アフリカ文学とアフリカ人作家は、民衆とともに闘うか、帝国主義と民衆の階級的敵を助けるかのどちらかである。我々は、優れた演劇とは民衆の側に立つものであり、失敗や弱点を覆い隠すことなく民衆に勇気をあたえ、彼らに全面的な解放に向かう闘争のより高邁な決意を促すものであると信じる。したがって、問題は、キマジに象徴される民衆をひとえに歴史的に正しい見通しのなかで真に描き切ることであつた。肯定的に、英雄的に、そして歴史の真のつくり手として」¹⁷⁵⁾。

この劇は、ナイロビ大学の同僚セス・アダガラ (Seth Adagala) の演出で、1977年2月、ラゴスで開催された「第2回アフリカ文化芸術祭」(Festival of African Arts and Culture, FESTAC77) へのケニアからの公式参加作品となった。前年10月には、自由移動劇団が地元の国立劇場、ドノバン・モールシアターで一部を上演した。ちなみに、国立劇場は450席であるが、76年10月20~30日の間の公演では、連日満席だったという。「スタンダード」紙 76年10月27

日号によれば、舞台が引けた後、連日のように観客が「マウマウ」の愛国歌謡をうたってナイロビの通りへ繰り出したという。

「序文」に、以下のように書かれている。

「これは、ニエリで実際に行われた（植民地政府による）デダン・キマジの茶番的な裁判を再生産するものではない」。「60年に渡る抑圧を断とうとするケニアの農民・労働者の集団的意志を想像的に再創造し、解釈しようとしている」。したがって最も大事な点は「憲法上の独立前後の時代の農民と労働者の名において、マウマウとキマジの世界を取り巻く我々の歴史を想像的に再構築することである」¹⁷⁶⁾。

つまり、歴史を、民衆の視点から、想像力をもって再構築することが課題だと言うのである。

たしかに、劇中のキマジは再解釈され、神話化されていることは事実であろう。しかし、神話化することは、偽物をでっちあげることではない。キマジは、革命的人物として再創造されている。それは、コロニアリズムが描いてきたキマジ像ではない。

著者たちは、歴史の中のキマジ像を、文学を通してリハビリさせ、マウマウの闘いを再構築することで、ケニア史を問い直し、ケニア人としてキマジ像の再創造を意図したのだった。ケニア史におけるマウマウの表象を再吟味し、脱構築している。

② 植民地言説の虚妄

植民地主義は、被抑圧民族の過去を歪曲し、捻じ曲げ、破壊するものである。植民地支配のイデオロギーは、支配を正当化するために、さまざまな発見と発明をでっち上げるのである。まず、支配される側の経験を自分たちの用語で定義し、他者の過去をつくりだす。支配の論理が理解できないことは、不合理、前論理もしくは没論理、無価値なものとして未開の世界に追いやるのである。彼らは、歴史学の立場からも、文学の立場からも、支配下の諸民族の人間性、合理性を否定し、一切の価値の全面否定へ向かう。人類学は、功罪織り交ぜて、こうした未開の心性に論理を見出そうとして、西欧近代に誕生した学問であった。

支配下の人間の過去の否定や歪曲を伴う歴史学や文学の例は、無尽蔵に見出

される。ケニアの場合、そこは「アフリカ人の国」ではなく、「白人の国」(Whiteman's Country)と呼ばれた。「原住民」は「荒野に住む野生動物」同然だった。その一例が、デンマーク出身の国民的作家カレン・ブリクセンの作品群に見られる。彼女は、原住民を「動物」に譬えて書いている。エルスペス・ハックスリー、ロバート・ルアーク、ジョイス・ケアリー、ライダー・ハガード、ジョゼフ・コンラッドなど、植民地を舞台に作品を書いたヨーロッパの大作家たち¹⁷⁷⁾も、こうした「植民地主義のでっち上げ」(Colonial Invention)に力を貸した。「マウマウ」に限っても、イアン・ヘンダーソン『デダン・キマジ狩り』¹⁷⁸⁾やイオネ・レイ『マウマウの影で』¹⁷⁹⁾など、植民地主義に迎合した作品が多くある。前者は、キマジを人間的に汚辱する内容であり、後者は、ケニア人の闘いを悪魔の所業と決めつけている。これらは、コロニアル・プロパガンダの代表的な作品である。

ケニアだけが植民地的言説の犠牲に供されたのではなかった。たとえば、ナイジェリアのチヌア・アチェベは、一連の小説で、埋もれたナイジェリア(イボ)人の歴史を掘り起こそうとした。現代アフリカ小説の原型と言われる記念碑的小説『部族崩壊』(*Things Fall Apart*, 1958)¹⁸⁰⁾で、彼は白人到来の転換期に生きる主人公オコンクオの悲劇を見事に描いたが、白人の地方長官は、この小説の最末尾で、オコンクオの悲劇とは別に、イボ社会での自分の経験(手柄)を『ニジェール川下流域未開部族の平定』(*The Pacification of the Primitive Tribes of the Lower Niger*)と題する書物にまとめたいと考えている。

見方が変われば、「平定・征夷」であり、「文明」でなく「未開・野蛮」であり、「民族」でなく「部族」なのである。これが実状であるから、ポストコロニアル時代の作家の課題は容易ではない。彼らは、従前のアフリカの歴史、アフリカ人の表象を改めて問い直し、再創造の必要を感じる。

二人の著者は、ケニア人の過去について、植民地主義が捏造した歪曲を是正し、ケニア人の過去に恥ずべきことはなく、むしろそれが尊厳と栄光に満ちたものであることを示す必要があった。支配下に置かれた側の威厳ある過去を再発見し、それを「ケニア」の現在に繋いで、民族の一貫した歴史として再創造に努めたのだった。換言すれば、プロスペロの歴史でなく、キャリバンの歴史の回復に努めたのだった。

③ 歴史学からの批判

こうした意図から書かれた『デダン・キマジの裁判』に対して、興業的な成

功、演劇的に勝ちえた高い評価にもかかわらず、喧しい批判と論争が、それもケニア国内から湧き上った。

主な論点は、ケニアの歴史研究者が提起したものである。彼らは、二人の著者の歴史認識に疑問を呈した。作品に描かれるキマジ像に対して、非専門家による歴史研究への参入として容赦のない批判の声が上がったのである。

広く知られているように、「マウマウ」の評価は一つではない。詳しくは、本書の「インターロード」で述べることになるが、大ざっぱに言えば、ケニアの歴史家の間には、アンチ・マウマウ派とプロ・マウマウ派の陣営がある。同国歴史学界の重鎮ベスエル・オゴト、B. キプコリールなどが前者の代表であり、マイナ・ワ・キニャティは後者の代表である。マイナによれば、「マウマウ」は、ケニア民族主義の頂点（ピーク）であるとされる¹⁸¹⁾。

アンチ派のもう一人の典型は、歴史家アティエノ・オジアンボに見られる¹⁸²⁾。彼によれば、「マウマウ」は、ナショナリストの意識、パン・アフリカニストの自覚を持っていなかったと言う。二人の作家が強調するような階級意識とも無縁であったと主張している。キマジは、ナショナリストでもないし、革命戦士でもない、したがって、彼が独立へ導いた人物であるなどとは言えないとする。この戯曲は、歴史を読み違え、改ざんしているとも言う。マウマウは、ケニア独立に対してなんら貢献していないというのは、当時の植民地政府や大多数の白人の歴史家と同じ意見であるし、独立時の大統領ケニヤッタの見解とも共通している。

もう一つは、「マウマウ」を純然としたギクユ人だけの闘いであるとする立場である。ギクユ人だけの、いわば「エスノ・ナショナリズム」を、ケニア全体の「ナショナリズム」と取り違えていると言うのである。

④ 歴史記述と想像力

『デダン・キマジの裁判』は、ことにアカデミズムの間で物議を醸したが、ケニアの歴史家たちの間にも、新しいキマジ像に批判的な立場の者を含めて、「歴史は事実の羅列だけでよいのかどうか」「歴史記述とは、事実の選択、順序付け、秩序化、解釈、分析を伴うのではないか。歴史記述とは、所詮、想像力によるものでないのか」との反省が生じた¹⁸³⁾。歴史が常に勝者によって書かれてきたことは誰もが認める事実だった。すべての「植民地言説」（コロニアル・ディスコース）は勝者の物語になっていることは否定のしようがなかった。

ところで、歴史は現実と、文学は可能性とかかわるものであろう。しかも、表象芸術にあつて、特に過去の表象は、常に特定のイデオロギーを含むものだ。歴史記述も文学表現も、ともにこの制約から逃れることは出来ない。

「ケニア」は、植民地主義が生み出した領域国家の名称であり、ベルリン会議以前には、「ケニア」という実体はなかった。「ケニア人」などは何処にもいなかった。じっさい、第二次大戦勃発の頃にも、自分が「ケニア人」であると意識するよりも、エスニックなアイデンティティ、つまりギクユ、カンバ、ルオなどと意識している人々の方が圧倒的に多かったのである。「ケニア人」というアイデンティティは、一部の教育エリートなどを例外に、当時のごく普通の（英語を話さないような）人々にとっては馴染みが薄いか、必要のないものだった。

「ケニア」(Kenya)とはヨーロッパ人が使い始めた用語である。ちなみに、ギクユ人はケニア山のことをギクユ語で「キリ・ニャガ」(Kiri Nyaga)と呼んだ。「キリ」(Kiri)とは「白い縞模様」、「ニャガ」(Nyaga)とは「黒い縞模様」の意である。白は「雪」、黒は「火山活動で出来た岩石」を指している。また、カンバ人はカンバ語で、同じ意味で「キリ・ニャア」(Kili Nyaa)と呼んだ。白人はこれをそのまま発音しないで、「ケニア」という新しい語を国際社会に向けて作り出したのである¹⁸⁴⁾。

したがって、植民地支配によって、白人が使い始めた「ケニア」が表象する内容、その後、この語に込められた意味は、ケニアの各民族が抱いてきた自己像とは違っていた。「ケニア」「ケニア人」というコンセプトがたとえ外来のものであっても、とりわけポストコロニアルの時代には、その意味内容を点検しないわけにはいかない。植民地国家「ケニア」が表象するものに対するアンチ表象を創り出さなければならない。

「ネーション」(nation)の概念、その起源や発展は本書の埒外である。とはいえ、「ネーション」の想像、もしくは創造は、歴史家だけでなく、作家の仕事でもあるだろう。西欧近代においても、小説はナショナリズムの台頭期に発達した。ベネディクト・アンダーソンが述べているように、ナショナリズムが小説を育て、小説がナショナリズムを涵養したとも言えるのである¹⁸⁵⁾。

ケニアには42の言語共同体(コミュニティ)が存在するとされるが、植民地

国家「ケニア」が出来るまでは、むしろ、それぞれが「ネーション」であった。逆に、「ケニア・ネーション」(Kenyan Nation)の実体はなかった。

この劇では、ナショナリストで、かつパン・アフリカニストとしての抱負がマウマウの指導者キマジの行動と言説に凝縮されている。キマジは、さまざまなエスニシティ、ジェンダーの区別を超えて、「ケニア・ネーション」を紡ぎ上げる人物である。コイタレル(Koitalel, カレンジン)、ムバティアニ(Mbatiani, マサイ)、メ・カティリリ(Me Katilili, ギリアマ)、ワイヤキ(Waiyaki, ギクユ)など過去の各民族のリーダー¹⁸⁶⁾の気概が、キマジ一人の人物像に流れ込むのである。

このような見方に立つならば、過去の共通の栄光と挫折、現在の共通の意志、ともに何事かをなし、なお何事かをなそうという未来への共通の願望が歴史を創り、この歴史の中で「ケニア・ネーション」が紡がれるということになる。つまり、抑圧に抵抗するたたかいのなかで、「ケニア」を統一する歴史が形成されるのである。たたかいのなかで、個別のエスニシティ(ethno)が、より高いレベルの民族(natio)へと昇華していく。これがキマジの確信である。たたかいが、歴史を創り、「ケニア人」(ネーション)を結晶させるのである。

XII. 最後の英語小説『血の花卉』: 裏切られた大義 (*Petals of Blood*)¹⁸⁷⁾

南アのノーベル賞作家ナディン・ゴードィマは、英語圏アフリカ文学に関する評論書『黒人の心を伝える者たち』(1973、土屋哲訳『現代アフリカの文学』、岩波新書、1975)¹⁸⁸⁾で、「自由の存在しない処では、政治は宿命である。政治は、環境であり、性格であり、足かせであり、目的である」とのアメリカ人批評家アービング・ハウの言葉を引用して、次のように述べている。

「アフリカ文学では、政治は決して〈人生の追求〉という、より高尚なテーマに割り込む俗悪なテーマとして、描かれてはいない。政治活動を主題とする小説、つまり政治小説の中心テーマは、白人支配からの解放闘争であり、独立以後の内部権力闘争である」¹⁸⁹⁾

政治が、文学一般にとって俗悪なテーマとなるのか、彼女がより高尚なテーマだという〈人生の追求〉に、そもそも政治は全く関与しないものなのか、いまこれら二つの問題を保留するなら、ほぼ誰もが「アフリカ文学に政治は宿命である」とのゴードィマの見解を首肯することであろう。このように述べたあと、ゴードィマは、現代のアフリカ(政治)小説の源流を、20世紀はじめにソ

ト語で発表されたトマス・モフォロの歴史小説『シャカ』(1925)¹⁹⁰⁾にまで遡っている。

筆者の理解によれば、政治が宿命であるように、現代アフリカ文学にとって、歴史は強迫観念のようにまとわりついている。政治と歴史は、この意味では一体だと言ってよい。アフリカ文学の一つの重要な特質は、森羅万象のすべてが、われわれの美意識の対象にとどまらず、深い歴史性を持つ存在、人間の経験的世界の事象として描かれることだ。それらは歴史の一部ですらある。したがって、作家が透徹した歴史認識を示し得ているかどうかという問題は、その文学的技量とともに、作品の価値決定上の重要な尺度となると言っても過言ではないだろう。

ゴードイマは、独立後の政治的テーマを扱う現代アフリカ小説（ここでは、アチェベ、アウノー、アーマらが名指しされている）について、次のような理解を示している。

「(これらの作家、特にアチェベは) アフリカの腐敗した政治体制の原型を痛烈に風刺してみせてくれるのだが、現実には目の前に現出している怪奇な現象の、政治的、イデオロギー的意味について、解明のメスを入れようとはしないのである。同じことが、鮮烈なアイロニにみち溢れたすばらしい小説、『通訳者たち』(ウォーレ・ショインカ作—筆者注)¹⁹¹⁾にも言える。この小説の主役たちが結論として到達した、あるべきアフリカの姿とは、アフリカの知識人の理想とする、アフリカ的世界と西欧的世界の総合であり、しかも両者は精神面で決して整合しないことに彼らは気付いている。しかしここでも政治的表現で、社会を再編成して、可能な解決の道を模索するといった方策は、一切暗示されていない。・・・植民地支配以降の政治小説が、植民地闘争をテーマとした政治小説を含めて、アフリカ的情况の表面を、確実に引っ搔いたとは、とても思えない」¹⁹²⁾。

以上、ゴードイマの明晰な認識を借りて、当時のアフリカ文学、特に小説が直面していた課題の一つを確認しておこう。

表題『血の花弁』は、西インドの詩人 D. ウォルコットの「沼地」(The Swamp)と題する詩から取られている。

Fearful, original sinuosities ! Each mangrove sapling
Serpentlike, its roots obscene

As a six-fingered hand,

Conceals within its clutch the mossbacked toad,
Toadstools, the potent ginger-lily,
Petals of blood,

The speckled vulva of the tiger-orchid ;
Outlandish phalloi
Haunting the travellers of its one road.¹⁹³⁾

原始からの、恐怖を誘う捩れ、マングローブの若木のどれもが
蛇のよう、猥雑なその根は
6本の指の手に似ている

背に苔むす墓の蛙を掴み隠し
傘状のキノコか、勃起した花縮紗
血の色をした花びら

蘭の花に似た女陰
怪しく勃起した陰茎
膺の一本道を辿る旅人たちに付きまとう。

詩人ウォルコットは、毒蛇にも似て、六本の指の手をもつマングローブの陰で光の方向へ伸びていくことを妨げられている **ginger-lily** (ジンジャーリリー、花縮紗) の宿命として ‘**Petals of Blood**’ を見事に視覚化している。グギはこれを、帝国主義という怪物のために小さい花 (ケニアとアフリカの労働者・農民) が栄光と尊厳のなかで開花することを阻まれている現代アフリカの象徴として使っている。グギのもくろみは、小説上の舞台として設定された架空の村イルモログの運命を克明に描き、同時にこの村を、ケニアはもちろん、東アフリカ、アフリカ全土、ひいては第三世界全体の現実を映し出す鏡とすることであった。

登場人物は、状況の推移のなかで、アフリカ人としての文化的ナショナリズムの覚醒の段階から、しだいに階級意識の覚醒の段階にまで引き上げられていく。つまり、文化の抑圧状況についてののはじめの認識が、経済的・政治的な枷から由来するものであるとの自覚にまで高められている。これは、登場人物のひとりであるカレガの場合によりはっきりと現れる。ここから、グギの現状認

識—農民・労働者と、帝国主義とその同盟者との間の対立状況下にある現代アフリカ社会が浮かび上がる。

『血の花弁』は4部13章からなる。第1部「歩く・・・」(1~6章)、第2部「ベツレヘムへ向かって」、第3部「誕生」(7~10章)、第4部「再び、たたかいは続く」(11~13章)である。全体の約5分の1の量を占める第2部は小見出しに「徒步行進」とあり、この部分は章外に置かれた、いわば‘interlude’である。

作品の冒頭で、4人の主要人物が警察へ連行されるか、あるいは尋問を受けているシーンに接する。舞台はイルモログ。12年間この地に住みついている敬虔なキリスト教牧師で、ニュー・イルモログ小学校の教師ムニラ、左手の包帯も痛々しいアブドゥラ、イルモログ・テンゲタ醸造会社労働組合の専従書記カレガの3人が、ある日曜日の早朝から警察に連行されていく。もう一人は、病院に収容され、精神錯乱症状を起こし、うわごとをくり返しているワンジャである。彼女は尋問に応じることが出来ない。これら4人は、イルモログ・テンゲタ醸造会社のアフリカ人重役であり、イルモログ近代化の恩人と讃えられたムジゴ、チュイ、キメリアの3人の焼殺事件の容疑者である。この日、テンゲタ醸造会社のストライキ禁止令が出されたため、労働組合員たちはカレガの逮捕をストライキ妨害を目的とする企業側の陰謀であると抗議して、はげしいデモを起こし、その鎮圧をはかる警察側と応戦している。警察は、ついに武力を行使して、組合員を撃退し、負傷者が何人か出ている。

『血の花弁』は、上のような衝撃的な状況で始まる。そして、以下では新興都市イルモログの発展の跡を辿り、ここに登場したムニラ、アブドゥラ、ワンジャ、カレガ、ムジゴ、チュイ、キメリアの計7人の主要人物が織りなす過去の複雑きわまりない絡み合いが描かれ、最後に、焼殺事件の真相が明るみに出されるのである。

このように説明すると、推理小説（たしかに、ケニア、広くアフリカでは推理・犯罪小説が流行している）の手法を思い起こさせるが、『血の花弁』は、けっして下手人さがしの推理ドラマではない。はじめの4人の人物が、イルモログの過去—独立以後ケニアの近代化—のなかで、いかほど苛酷な運命に弄ばれてきたかがやがてわかるだろう。第1部2章以下で、時間は12年前にさかのぼり、これらの4人が底知れぬ悲劇の状況を生き抜いてきたことが知らされる。ムニラの自白ノートがその状況の一部を解き明かすこととなるが、ほとんど章ごとに時間と空間が入れ替わり、その複雑さは、アフリカ小説のなかでも最も

込み入ったものと言われた前作『一粒の麦』をはるかに凌いでいる。4 人の数奇な過去がこの混沌のなかから立ち現れる。

イルモログは、グレート・リフトバレーの一翼に位置するとはいうものの、小説上の架空の空間である。しかし、それがリムルからそう遠く隔たっていないことは、ムニラがこれら二つの村の間を何度も自転車で往復していることから想像がつく。しかし、リムルとちがって、イルモログは地図に記されることもなく、政治から完全に見忘れられた土地、つまりはケニアの孤島である。

12 年前、この村へやってきたムニラが、崩れ落ちた泥壁と赤茶色に焦げたトタン屋根の廃屋に分け入ってみると、蜘蛛やその他の昆虫の死骸が四方の壁にへばりついて、うち忘れられた僻村の荒廃と貧困を象徴しているかのようだった。村人は、新任教師ムニラに冷たい視線を送り、この変わり者がすぐにも「風とともに去る」ものと信じたほどだ。村人は、学校教育に全く関心を示さなかったし、子供たちは父親とともに牛を追って果てしない平原を放浪することしか知らなかった。水飢饉と牧草の不足に悩んでいる村人にとって「教育」は何の意味ももたないように思われた。

しかし、この僻村にも繁栄の過去があった。稠密な人口を誇り、熱心な農夫たちが自然をわがものとして、あらゆる種類の作物を栽培できた過去があった。旱魃の危機や疫病の流行もあったが、そんなときには、すべての村人は天に祈り、雨と救済を乞い願った。収穫の時期には、誰もが歓喜して踊り狂い、村の始祖デミ¹⁹⁴⁾の偉業を讃えた。老人たちは、はち蜜酒をすすりながら「家族の木」の周りに集まった子供たちに、デミや、伝説上のヒロインたち—ニャンゲンドやニャグジイ¹⁹⁵⁾について語ったものである。イルモログは、牛を追って放浪する近隣の村人の憩いの場所となり、やがてその地方の取引の中心地となり、その名を周辺の村々にまでとどろかせた。

ところが、20 世紀の初め、恐ろしい征服戦争が持ち込まれた。ある日、突然に襲ってきたヨーロッパ人の交易者たちは、イルモログの村を完全に包囲し、鉄砲を撃ち込んで、大人も子供も無差別に殺害した。村人の必死の抵抗も空しかった。以後、イルモログはイギリス軍の新兵供給地となった。多くの若者が村を捨てた。彼らの行方も知らされず、あとに残された老人たちは、土地の窮乏があっても移住するあてもなく、白人たちがたがいに殺し合っているその目的も理解できなかった。ウガンダ鉄道の支線がイルモログへも引かれ、森林の農耕地を破壊していた。共同の財産であった土地は、金で売り買いされるものとなった。こうしてイルモログは衰退期に入る。

第二次大戦はこの傾向にさらに拍車をかけることとなった。若者たちは、両親の制止の

声も聞かず、村を離れ、ナイロビ、モンバサ、キスムなどの大都市へ逃げていった。こうして、60 年の間に、デミの開拓事業は跡形もなく破壊され、イルモログは過去の繁栄の残骸でしかなくなるのである。

したがって、ムニラがやつのことでかき集めた児童は、飢えと栄養失調におかされており、イルモログの外の世界については何一つ知らなかった。彼らは、ケニアという国が、村の外にあるやや大きな別の村であるとは想像できなかった。

それから何年か経って、イルモログの運命は一変する。独立ケニアの近代化の象徴ともいべきアフリカ横断道路¹⁹⁶⁾がイルモログを通過することになった。道路建設と新しい都市計画が、村人を「近代」へ無理矢理に運び入れることとなる。イルモログの村は二つに分断され、ニュー・イルモログは、石と鉄筋とコンクリートのビルが建ち並び、ネオンが輝く近代都市に生まれかわった。バーやホテルが繁盛する一方、殺人、強盗、売春などあらゆる社会悪がはびこりだした。マタツ・タクシーやバスやトラックが各地から多くの観光客を運んできた。観光センターが建設され、動物の保護区も出来た。アフリカ経済銀行が建った。村人はたがいに見知らぬ者同士となり、かつての共同体の結束は完全に失われた。すべてが金の世の中になっていたのである。

多くの村人が金のために先祖伝来の土地を失っていた。村の呪術師ムワジ¹⁹⁷⁾を祭る聖堂が「イルモログの考古学的遺跡」として取り払われたことはこの間の事情を象徴的に物語っている。村人の醸造技術をペテンによって買い上げたテンゲタ醸造会社は、イギリスとアメリカの合同資本で経営され、いまや 600 人の労働者を雇い入れて、アフリカ人重役がその管理にあたっていた。村人は、賃金労働者になるか、小売商を営んで活路を見い出そうとしたが、「食うか食われるか」の資本の力の前にやがて屈服させられていく。イルモログの運命は、村人を嘲笑しているかのようだ。

以下には、4 人の主要登場人物ムニラ、アブドゥラ、ワンジヤ、カレガのそれぞれについて、その人物像に迫ってみよう。作者は、この小説の主人公ムニラにイルモログ行の動機を次のように語らせている。

「高等教育を受けた者たち・・・我々は、独立を目指す闘いを一般民衆にゆだねておくくらいがありました。我々は、私がうたうべき歌の・・・外側に立ちつくしていたのです。しかし、今や、独立の到来とともに、我々は償いを支払う機会を手に入れたのです・・・。つねに傍観の立場をとっていた・・・のではないことを示すために。それが、その・・・私がこの・・・イルモログへの配属を選んだ理由です」¹⁹⁸⁾

ムニラは、イルモログへ到着した日に、この言葉をアブドゥラに語っているのだが、何ともぎこちない決意の表明である。彼は決意の高邁さに、自分でも驚き、気負いを感じて、何度もこれを言いよどんでいる。彼はさらに、「我々は、皆の力で、独立を真のものとするために何事かをやれるはずです」¹⁹⁹⁾と言葉をついでいるが、この高邁な理想と抱負は、ムニラ自身がイルモログにかけた自己の人生の再出発の決意表明以上のものではなかった。

「光明と進歩」の方向へ村人を導こうとする彼の決意が、村人の猜疑心、よそ者に対する警戒心、変化を好まない性向によってたちまち打ち砕かれてしまうと、彼は「神に見捨てられた」この土地へ二度と戻ることはないとの誓いをたててイルモログを去ってしまう。そのあと、ムニラは、上司であるムジゴを訪ね、イルモログの荒廃ぶりを伝えるが、結局、配属変更の申し出を断念して、代用教員採用の約束を取り付けると、再びイルモログへ舞い戻る決意をする。なぜ、ムニラはこうまでもイルモログに執着したのか。

牧師ムニラの心のなかで、「汝、この地球上の村々と暗い場所へ赴き、聖霊の火で明かりをともせ」というキリストの言葉が使命感をかきたてていたことは言うまでもないが、イルモログ行の真の動機は次のようなものである。彼は敬虔なキリスト教徒である妻にこれを明らかにしている。

「私はこれまで決してこの世間に身を置くことはなかった・・・リムルにさえも・・・おそらくイルモログこそは・・・変化のために」²⁰⁰⁾

ムニラは家族の反対を押しきって長年住みなれたリムルを離れ、単身イルモログへ赴任することとなる。イルモログ行を敢行することはムニラにとって、それまでの人生の「没存在」の感覚を断ち切るはじめての「意識的・積極的行為」であった。

二度目のイルモログ行でムニラはようやく村人に受け入れられる。彼は教育事業に専念し、しだいに尊敬を受けていく。子供たちの未来に夢を託し、過去の恐怖と罪意識に苛まれた歳月の記憶を忘れようと努力する。彼は、イルモログの平穏のなかに自己の「世界」「王国」を築いていく。イルモログはムニラの‘escape-hole’となるのだ。こうして、父や妻子が住むリムルや、ムジゴが住むルワイニは別個の世界、疑惑と敵意に満ちた世界へ変化してしまう。

ムニラにとって「没存在」の感覚とは何であったのか。彼は、何から「逃れ」、

どのような「変化」を求めているのだろうか。この疑問に答えるのは容易ではない。ムニラ自身が答えていない。彼はシリアナの高等学校在学時代からリムル周辺での小学校教師の時代を通じて、自己の半生は、‘so vague, unreal, a mist’であったと述べているが、なぜそうであったのかは自分でもわかっていなかった。彼の意識にあるのは、自己の人生が満たされぬ思いと、緊張の連続であったということである。この緊張感を解きほぐしたいと望んだが、つねに躊躇があった。「自分が何から逃れたいのか、何に向かって駆け込んでいきたいのか」自分でもわからなかった。ただ満たされぬ思いから生じる不気味な「衝動」だけが彼を突き上げていた。

ムニラの内面の苦悩を洞察するためには、彼の家庭環境に注目しなければならない。父ワウエル（洗礼名エゼキエリ）は初期のキリスト教改宗者であった。一家はムランガの土地を追われてから、キアンブへ移り住み、刻苦精励のあと財産を築いている。ワウエルは広大な土地を獲得して多くの労働者を雇い、どうじに長老派教会では「キリスト」とまで尊敬される人物にのしあがった。しかし、ムニラは、父の成功が、白人権力と結託して、多くのアフリカ人貧農から奸計によって土地を略奪して得られたものであることを知っていた。農園の労働者のなかには賃金改善のために紛争を起こす者もいたし、ストライキを計画する者もいたが、ワウエルは、これらの危険人物を即座に解雇していた。このような父親にムニラはつよい反発を覚えている。しかし、なぜ反発を覚えるのか、自分でも理由がわからない。ムニラは、農場労働者の宿舎で、くったくのない話題に聞き入っているときがいちばん幸福であり、緊張がやわらぐのを感じた。だが、そのあとは、必ず父のつよい牽引力の内側に連れ戻されるのである。

ムニラには、一度だけ、父の拘束から解き放たれようとする試みがあった。すなわち、彼はシリアナの学生時代に、学校中の人気者で信望の厚かったチュイとともに、厳格な白人優越主義者の校長フロードシャムを追放するストライキに参加していた。しかし、これも警察の警棒と催涙ガスの前で失敗に終り、ムニラはチュイを含めて他の 5 人の学生とともに放校処分を受けたのだった。これにより、ムニラに対する父の態度はますます厳しいものとなった。弟妹たちは誰もが成功の道を歩んでいた。3 人の弟のうちひとりとは英国留学の後、銀行に勤め、もうひとりの弟はマケレレ大学を卒業後製油会社に勤め、さらにもうひとりの弟はマケレレ大学で医学を学んでいた。2 人の妹は高等学校を出てから、ひとりとは英国で看護学を学び、もうひとりとはアメリカ合衆国へ留学し、学位を得ていた。したがって、ムニラは、父にとっては不肖の息子であり、人生の敗

残者なのであった。ただ、いちばん下の妹ムカミだけはつねにムニラの味方になってくれたが、彼女は、ムニラにはわからない理由で高等学校時代に自殺していた。

さて、ムニラは、イルモログの村人に受け入れられたが、村人と心からうちとけることは出来なかった。ムニラが村人の営み―農業を知らなかったことだけが理由ではない。アブドゥラの店へ飲みに来てくる農民や牧民たちの話題―たとえば、植民地行政にまつわること―は、ムニラに過去の不安をよび起こした。

ムニラの不安定な内面は、彼が生徒を野外観察に連れ出したときの次の出来事に象徴的に現れていよう。生徒のひとりが、害虫に蝕ばまれて変色した花弁を見つけ、‘Petals of blood’と驚きの声を上げたとき、ムニラは「‘blood」という色はない。その花弁は、柱頭も雌ずいも害虫に蝕ばまれたために変色し、種子を結ぶこともない」と説明してやるが、「なぜものはたがいに食い合いをするのか。食われるものは食いかえさないのか」との質問を返されて動揺する。このとき、ムニラは、それは「自然の法則」であると説明しているが、ムニラ自身、心のなかで「法則とは何なのか。自然とは何なのか。それは人間なのか、神なのか」とつぶやいている²⁰¹⁾。この事件のあと、ムニラは野外観察をやめてしまう。教室の外には説明不可能な疑問があまりにも多すぎたからであった。

イルモログで、ムニラは、はじめてアブドゥラと出会い、ついでワンジャ、カレガと出会うことになるが、彼らとの出会いはムニラの運命にも大きな波紋を投じることとなる。それぞれの出会いが深い意味をもつが、なかでもワンジャとの邂逅は決定的であった。ムニラは、やがて彼女の官能の世界にずるずると引き込まれていく。イルモログは、ムニラにとって‘escape-hole’ではなくてなってしまう。

乞食同然に零落し、掘立小屋に住むアブドゥラは、4人のなかでは、いちばん早くイルモログへやって来ている。彼はケニア独立のすぐあと、少年ジョゼフと一頭のロバを連れてここへ流れ込んで、かつてインド人が経営していたが、長く捨て置かれてあった旧店舗を改造して、茶、塩、砂糖、カレー粉などを売り、ついで飲み屋を開いた。放浪する牛飼いや、村人を集めて、それなりに繁盛し、ムニラがやってきた頃には完全にイルモログの住人になりきっていた。彼は、不自由な左足に秘密の過去を宿しているが、やがて小説の展開のなかで、彼がマウマウの指導者デダン・キマジとともに戦ったことがわかる。

マウマウの誓いをたてる以前から、アブドゥラはカレガの兄ディングリと親しい仲だった。ディングリは、彼よりも前から森の戦士に銃や弾薬を運んでいた。二人は、植民地警察と陰で通じたある人物から弾薬を受け取ることが役目であったが、その人物は植民地警察に女を世話することで弾薬の横流しを受けていたのだった。だが、何度目かに、この人物の裏切りに会い、アブドゥラは群衆のなかへ逃げのびるが、ディングリは逮捕され、一週間後に絞首刑にされてしまった。のちにアブドゥラはマウマウ戦士となり、中国、朝鮮、ロシアでの農民・労働者の闘いに夢を鼓舞され、世界観を広め、自己の役割についての確信を深めていく。やがて、ナクルの刑務所を襲撃し、囚人の解放に成功したが、このとき勇士オーレ・マサイは殺害され、彼もまた左足に銃弾を受けたのだった。

アブドゥラはマウマウの戦いに関係する頃、靴工場の工員として働いていたが、工場では賃金改善と住宅供給を求めるストライキが連日のように続いていた。この闘争は、その度に警察の武力的行使によって挫折させられたが、この頃、彼は何度も次のように自問している。

「一度たりとも荷物をもち上げたこともなく、製革所やその他の工程のどこでも、一度たりとも臭い水や空気のなかで手を汚したこともない親方が大邸宅に住み、自家用車と運転手をかかえ、屋敷内の草刈りをするのに四人以上もの人間を雇うことが出来るのは、どうしたことだ」²⁰²⁾

この疑問は、彼を次の決意に導いている。

「土地を奪い返すのだ。自分の汗を吸いとっている靴工場のような産業が、民衆のものとなるよう闘うのだ。子供たちが、いつの日か腹一杯食べて、雨をしのげるだけの服装を身につけることが出来るように。子供たちが、ぼくの父さんは、ぼくが生きるために命を捨てたと誇りをもって言えるように」²⁰³⁾

彼はもはや親方の前で奴隷ではなくなった。アブドゥラは「割礼を受けて真の男になった」と確信した。

負傷して逮捕されたアブドゥラは、独立直前まで強制収容所に拘禁されたが、やがて、新しいケニアの夜明けを信じ、マウマウ戦士としての誇りに満ちて故郷へ帰還する。彼は残された 1 エーカーの土地の半分を売却して、ロバと荷車

を買って運送業者として再出発を志すが、すべてが金の世の中に変わり、人びとは土地を買うための銀行ローンに群がっていた。「すでに民衆の血で取り戻した土地をなぜ買い取る必要があるというのか」。独立に狂喜する群衆は早くもマウマウの記憶を完全に忘れ去っているかに思われた。アフリカ人の間では、利権をめぐる激しい分捕り合戦が始まっていた。アブドゥラは仕事を得るためにほっつき歩いた。だが、片足の不自由な彼に、どこでも冷笑が返ってくるだけだった。今しがた仕事を拒否された会社の建物のなかへ、メルセデス・ベンツに乗った一人のアフリカ人が大勢の使用人に迎えられて姿を消していった。その男こそは、ディングリとアブドゥラを裏切った人物ーキメリアだった。アブドゥラは、残りの 0.5 エーカーの土地を売却し、苦い過去の記憶を忘れるためにイルモログへ向かった。

ムニラのあと 6 ヶ月後にイルモログへやって来たワンジャは、ムニラには「イルモログ平原の雌かもしか」と映った。彼女の美貌、自由奔放な態度と性格、都会風の身のこなしを前にして、ムニラは「6 ヶ月の安全が脅威にさらされるのを感じた」。彼女が自分の秘密の過去を知り、心中の苦悩を見抜いているのではないかと思われたからであった。ワンジャは、学校時代から逆立ちや木登りが好きなお転婆娘であり、男生徒とも取っ組み合いをしたり、自分の宿題をさせたりする勝ち気な娘だった。彼女は、イルモログへ来てから 1 週間と経たないうちに村の人気者になり、歳とったニャキニユアを助けて熱心に働いた。彼女は、やがて、店で働くかわりに少年ジョゼフをムニラの学校へ上がらせることをアブドゥラに約束させる。だが、村人にとって、彼女は神秘的な存在だったことは言うまでもない。

「どうして町の女が手を汚したりできるのか。黒く艶びかりする髪の毛に、水汲み用のカンをどうしてのついたり出来るのか。若者たちが村を離れていく時勢に、何が彼女をイルモログへ戻らせたのか」²⁰⁴⁾

ワンジャは、しだいにムニラの心を惹きつけていく。アブドゥラとワンジャの親しさに嫉妬を覚えながらも、ムニラは彼女を夢にまで見て、朝方にはシーツが汚れていることさえ知らされたほどである。ワンジャによって、ムニラは「危険」へ落とし込まれた。ワンジャがアブドゥラの店でバーメイドとして働くことになると、彼女の魅力と熱意で店はますます繁盛する。

ワンジャは小学校時代に初恋を経験していた。相手の少年は、独立の夢に胸をふくらませて、大学へ進学し、技師になることを夢みていた。その抱負を聞

かされたワンジャもまた将来に光明を見出し、勉学にも熱がはいったのであった。だが、二人の仲を知った両親は、少年がキリスト教徒ではなく、しかも貧しい家の子であったことからこれを許そうとしなかった。両親に叱られたワンジャはこのとき次のように考えている。

「貧しいことは罪になるのだろうか。私たちだって金持ちではないわ。私たちは罪人なのかしら。キリスト教徒でないことも罪になるのかしら」²⁰⁵⁾

これが、人生に対する彼女の最初の疑問であった。両親の仲はしっくりいかなかった。ワンジャは、自分が両親の間のカスガイとして使われることに反発した。彼女は学校と学問がますます我慢のならないものに思われた。それらは、もっと興味深い、もっと広い世界から彼女を閉ざしているもののように思われた。彼女もまた、独立直前の期待感あふれる社会の風潮に反応していたのである。

彼女が住むカベテの家の近くに移り住んできた妻子のある男（キメリア）は、村ではじめて石造りの家を建て、天水タンクを備え、小型トラックと乗用車を所有していた。父親とちがって背が高く、たくましいこの男にワンジャは魅かれていく。勉学はおろそかになり、男に連れられて町へ遊びに出ることが多くなった。早熟なワンジャに目をつけた数学教師は、自分の思いがとげられないことを知ると、ワンジャとこの男の仲を両親に告げ口した。このとき、ワンジャはすでに身ごもっていたことをあとで知らされる（のちに彼女は、生まれた嬰兒を公衆便所へ捨てた）。家を出たワンジャは男のもとへ走るが、相手にされなかった。悲しみにうちのめされたワンジャは、イシリー（Eastleigh、ナイロビ東部郊外。ソマリ系住民が多い）に住んでいる従姉のもとへ身をよせる。「孤独の者よ、私のもとへおいで、最後のやすらぎをあたえようという羊の声が、深い深い谷間から私の耳に聞こえてきた」という。この従姉は、残酷な夫のもとを逃げ出し、ナイロビへ出てバーメイドとして働いていた。ワンジャもまた、さまざまな仕事を転々としたあと、最後にバーメイドとなった。

ワンジャは、バー生活から逃れたいと思うこともあったが、ほかの仕事は自分には適していないと信じていた。男たちが自分の肉体のとりこになり、だらしない愚か者と化するのを見るのが彼女の楽しみだった。しかし、彼女は心の奥では‘peace’と‘harmony’を探し求めている。悦楽の忘我のあとに残るのは、つねに‘emptiness’と‘void’であった。この空白を埋めようとして、彼女はなおも男性に対する瞬間的な‘conquest’を求めた。従姉はこのようなバ

一生活に満足しきっているように思われた。しかし、ワンジャは違った。

「(バーメイドたちの) 顔の裏には孤独、不安、苦悩があることに彼女は気づいていた。それを知ると彼女は悲しくなり、泣き出したかった」「彼女はいつも何かをしてみたいと思った。それが何かわからなかったが、やりきりだけの力は自分にもあると思った」²⁰⁶⁾

彼女は「それ」を求めて転々と放浪した。「それ」を教えてくれる男を欲しいと思った。「それ」とは何であったのか。やがてワンジャは、自分がさがし求めているものが「子供」であることに気づく。まともな結婚生活をすでに断念していた彼女は、1年以上も「それ」だけを追い求めたが、ついに身ごもることはなかった。そこで、ワンジャは、イルモログの祖母にこのことを相談しようと思いついた。ニャキニウアとともに村の呪術師ムワジ・ワ・ムゴの聖堂へ参拝し、満月の夜に結ばれれば子供を授かるとの託宣を得た。ワンジャが身のまわりの物を持ってイルモログへ再び戻ってきたのはこの後のことだった。当時の彼女は「苦痛」と「喪失感」、過去の「勝利感」と「敗北感」、瞬間の「征服感」と「屈辱感」が入り混じっていた。新たな決意は、つねにあてどもない錯誤の世界へと彼女をあおりたてた。彼女の過去もまた恐怖と悲慘に満ちたものだった。

従姉の夫は、マウマウ戦争当時ホームガードとなり、村人を恐怖におとしいれていたが、のちに従姉がナイロビからきらびやかな装いで村へ帰ってくると復縁を迫っている。しかし、これを拒否されると、男は従姉に対してはげしい憎悪を宿すこととなった。男はのちに従姉を焼き殺そうと家に火を放ったが、犠牲になったのは従姉の母親であった。この事件を目撃して以後、ワンジャには火に対する恐怖が宿ることとなった。しかし火に対する恐怖は、同時に火に対する憧憬の思いと入り混じった。「創世の水と火、再降臨の時の水と火は、現世での人間の残酷さと孤独を洗い流し、浄化をもたらす」と彼女に映じた。ワンジャはムニラに次のように述べている。

「私は自分の身体に火を放つことも出来るような気がしました。そして、その後、山の上に駆け登り、皆が、骨の髄まで私が浄められるのを見ればよいと思った」²⁰⁷⁾

ワンジャは、父親とはちがって、マウマウの戦いに参加した従姉の父と、銃と弾薬を運んだ従姉の母を誇らしく思っていた。だが、彼女の父親は、従姉の母の死を「テロリストたちに援助したための神罰である」と冷笑し、ののしることしか知らなかった。

さて、ワンジャはジョゼフを学校に上がらせたその日、満月の夜にムニラと結ばれた。しかし、子供を身ごもることはなかった。これにより、ワンジャは村人の悲惨な生活にあきて、イルモログを離れ、再び都会生活にあこがれることとなる。彼女は、親しかったアブドゥラとも口げんかを始め、ムニラにもくってかかり、「教師が本当に村の明かりなの。あなたは灯をつけておいて、その傘の下に隠れているのね」とやり込めている。彼女はますます冷笑的になり、「私たちは皆どうしてこんな穴のなかに隠れているのよ。こんなに呪われた穴のなかにいるなんて本当に嫌になってしまったわ」と言っている。このとき、アブドゥラは次のようにワンジャに述べている。「生々しい傷をさげているのがどんなことか私にはよくわかる。お前さんが穴と呼ぶものに皆で直面してみようではないか」²⁰⁸⁾。しかし、ワンジャはこの言葉も聞かず、イルモログ行の秘密の動機を隠したまま、村から姿を消してしまう。

その後、ワンジャはナイロビへ出て売春生活に明け暮れ、あるいは白人の妾としての一時期を過ごしたりするが、あいつぐ挫折にますます荒んでいく。やがて、彼女はナイロビを離れ、リムルのバーへ戻るが、このとき、ワンジャを探してやって来たムニラと再会することとなる。政財界の大物たちが出入りするリムルのバーでの話題は、商売や教育や部族本位の利権争いであり、バーメイドたちは、争ってこれらの大物たちに身体を売っていた。だが、ワンジャは違った。

「私たちにとっては、誰がメルセデス・ベンツに乗っているかなどは問題ではなかった。彼らは皆が一つの部族、メルセデス・ファミリーの人間であった。私たちは別の部族、別のファミリーに属していた」²⁰⁹⁾

ムニラに再会したとき、ワンジャはすでにリムルを離れる決意を固めていた。そして、行く先はイルモログのほかになかった。

久しぶりの邂逅を喜び合った二人は、リムルのバーを飲み歩くうちに、偶然にも、酒にいりびたっているカレガに会っている。ワンジャはこのとき「私の過去は悪に満ちたものです。今日、人生をふり返ってみると、私には荒廃の歳月しか思い浮かばない」「バーの女給は自分では売春婦だなどと思っていない。皆、仕事と一人の男を探している女なのよ」と述べている。こうして、彼女はムニラとカレガとともに再びイルモログへ向かうのである。「もう二度と結婚などしたいとは思わない」²¹⁰⁾との決意で。

イルモログ・テンゲタ醸造会社労働組合専従書記の身分のまま殺人容疑で連行されたカレガは、リムルのカミリズ村出身であったが、イルモログでの最初の出会いでムニラにある恐怖感—過去の蘇生—をあたえている。カレガの父が2人の妻を連れてリムルを離れ、リフトバレーへ移り住んだのは1920年代、カレガが生まれる以前のことだった。一家は白人農場に雇われた借地人であり、ひどい荒地の開墾がすむと、さらにいっそう不毛の土地へ追い立てられるのが宿命であった。一家が最後に住みつけたのがエルバーゴン（白人入植民の最辺境地方）であった。生活は苦しかった。父親の無慈悲な性格とあいまって、両親の間にもめごとが絶えなかった。のちに、母マリアムが長男のディングリを連れてリムルへ戻り、ムニラの父ワウエルの農園でムホイとして働くことになったのはこの結果だった。マリアムに心を奪われたワウエルは、秘めやかな欲望から彼女のために小屋を建てて住まわせるが、誇り高いマリアムは彼を相手にしなかった。ワウエルはマリアムに寄せる満たされぬ思いが世間に知れ渡るのを恐れていた。この2人の愛憎の確執が、その後の二人の関係を人知れずとりしきることとなる。

のちにマウマウの戦士となる長兄ディングリは、マリアムを助けてよく働いた。夫との復縁をマリアムに説得したのも彼だった。こうして、マリアムはエルバーゴンへ戻るが、夫との仲は一月しかもたなかった。マリアムは再びリムルへ戻ったが、この短期間の復縁の結果生まれたのがカレガなのであった。こうして、カレガは、母マリアムのもとで、非常事態下の1955年に強制疎開を命じられるまでワウエルの農園で育つこととなった。カレガの脳裏には、家庭の崩壊がもたらした恐ろしい記憶だけが残った。正義感のつよいマリアムは、農園でのワウエルの暴力に黙従しなかったが、ワウエルは、2人の間の秘密のためにマリアムに断固とした措置をとれなかった。

カレガはマングオの小学校時代のムニラの教え子であった。カレガは全校で最も優秀な生徒であり、シリアナの高等学校へ楽々と進学した。そのあとは、当然マケレレ大学へ進み、出世の道が約束されているものと周囲には思われた。シリアナ時代のカレガは、白人校長フロードシャムを追放するためのはげしいストライキに参加したことがあった。このストライキは、主要には、カリキュラムの改正を要求するものだった。

「我々は、アフリカ文学やアフリカ史を教えてほしかった。自分自身のことをもっとよく知りたいと思ったからだ。我々はアフリカ人校長と教師をほしいと思った」²¹¹⁾

ストライキは成功した。フロードシャムが学校を去ると、生徒たちはシリアナの伝説的英雄である大先輩のチュイをむかえることを決めた。だが、赴任してきたチュイの変貌は皆を驚かせた。カーキ色のシャツとヘルメットをかぶったチュイは、何一つフロードシャムと変わりはない。失望した生徒たちはチュイ追放のためのストライキを決行した。学校は閉鎖され、カレガは仲間とともに放校処分を受けた。シリアナを追放されたカレガに就職の道は閉ざされた。彼の出世を願っていたマリアムの夢は無残にも打ち砕かれた。カレガには何のコネもなかった。独立の甘い汁を吸っているチュイをうらみながら、彼「ロードボーイ」「roadboy」となり、路傍に立って、外国人観光客相手の物売りを始め、彼らが投げつけるコインに飛びついて喜ばせた。

「我々は、彼らが銀貨と札束をもって来てくれることを願い、そのあと彼らに呪いの言葉を吐きつけた」²¹²⁾

カレガは、やがて自分の土地で外国人の慈悲にすがりついている生き方に疑問をいだくようになる。小学校時代の恩師であり、シリアナの大先輩にあたるムニラを思い出してイルモログへやって来たのは、この疑問を解いてもらうためだった。ムニラから何の解答も得られなかったカレガは、イルモログを去り、再び「roadboy」の生活へ戻り、酒に溺れていく。リムルでワンジャとムニラに会ったのはこのときだった。

イルモログへ戻ったカレガは代用教員として、ムニラのもとで働くことになった。「自分が持っているものすべてを生徒に捧げよう」と彼は決意している。カレガの支援で、学校は午前 2 クラス、午後 2 クラスが設けられ、カレガが担当する夕方の補習クラスも開かれた。

だが、カレガが 6 ヶ月の放浪のすえに戻ってきたイルモログには旱魃の危機が迫っていた。迷信深い村人たちは、アブドゥラのロバを犠牲にして雨乞いを提案していた。カレガは、イルモログの世界しか知らない生徒たちにエジプト、エチオピア、モノモタパ、ジンバブエ、トンブクツ、ハイチ、マリディ、ガーナ、マリ、ソンガイなどアフリカ人の過去の栄光の歴史に目を開かせた。しかし、イルモログの荒廃を見るにつけても、彼の脳裏にはシリアナの苦渋の記憶が蘇るのだった。イルモログの貧困のなかで、教育は無意味なもののように思われた。子供たちが、やがて村を去り、自分と同じ運命を辿ることがカレガにはわかっていた。

「旱魃と子供たちの顔と、この地方の発展の遅れを眺めていると、現代科学の恩恵などどこにあるのかと思われた。これは誰もが宣告された共通の運命なのであった」「希望などなかった。それは巨大な欺瞞であった。彼とムニラは、戸外に吹きすさぶ風と太陽を無視して、教室という砂のなかに頭をうずめている2頭のダチョウなのであった」「これこそ、自分たちがシリアナでチュイを告発したのとおなじ罪ではなかったか。小学校の教師ではあっても、どうして旱魃と、目の不安な顔は無視できるというのか」²¹³⁾

このような疑問がカレガに付きまとうことになる。子供たちはすでに斃れ始めていた。だが、ムニラは「自分に何が出来るというのか。これは私の罪ではない。誰の罪でもない。時節がよくなるまで学校を閉鎖するしかない」と考えていた。ムニラにとって、旱魃や貧困は「神の所業」なのであった。

カレガの胸中を去らないものにムニラの妹ムカミの面影があった。ムニラの父ワウエルの農園で除虫菊を摘んでいた頃に二人は知り合った。カレガに学校の楽しさを教えたのもムカミだった。2人は学校のこと、家庭のこと、独立のことを話し合い、将来、幸福な家庭を築くことを約束し、愛を確かめ合ってもいた。しかし、ムカミの父は、カレガがマリアムの子であること、自分の耳を削ぎ取ったのはカレガの兄ディングリであると思い込んでいたこと、そして何よりもカレガの家の貧しさのために、二人の仲を許そうとしなかった。ムカミがカレガとの初めての出会いの場を選んで自殺したのはこの直後だった。

イルモログの旱魃の危機を目前に、カレガは地区を代表する国会議員デリ・ワ・リエラに窮状を訴えることを提案する。アブドゥラがすぐに同意し、ワンジャも賛成し、ムニラもこれに従った。ナイロビへ向かう村人が一丸となったこの大行進は、小説中の圧巻であり、「知識の王国」(Kingdom of Knowledge)へ向かう‘exodus’であった。「われわれは一丸となって行くのだ。民衆の声は本当の神の声だ」とカレガは思っている。また老ニャキニユアは、マウマウ戦士であった亡夫の姿を思い浮かべ「私たちは町を包囲し、分け前を要求するのだよ」²¹⁴⁾と語っている。

しかし、このナイロビ大行進も、結局は失敗に終り、村人はデリ・ワ・リエラの背信に煮え湯を飲まされ、またそれぞれが深い屈辱感をなめさせられた(たとえば、この時にワンジャはキメリアと再会している)。しかし、この大行進で、カレガは、はっきりと世の中に目を開かれた。人間にとって過去とは何か、歴史を動かす力とは何かとつねに問い続けてきたカレガは、この時、老ニャキニ

ュアからイルモログの栄光の過去を教えられ、またアブドゥラからマウマウの戦いの歴史を聞き出している。したがって、希望と約束に支えられたこの大行進は、カレガにとっては「確かめたいと考えていた過去が、今や村を救出するこの徒步行進のなかで生々とした形をとる」ことになった。老ニャキニュアの話を聞いたカレガは「60年の歳月がデミの事業を、その努力と知性の跡形もなく破壊してしまうものなら、400年に渡る奴隷制と殺戮はいかばかりであったか、吸血の蛇はただ毒の色を変えているだけではないのか」²¹⁵⁾と考え込むのである。アフリカが自らの運命をとりしきった栄光の過去に思いを馳せるカレガの認識は、やがてははっきりとした形を取ることになる。

カレガとアブドゥラとムニラの三人が、ナイロビの治安を乱したとの罪状で牢獄に留置された時のことであった。この三人を助け出してくれた一弁護士との出会いは、カレガにとって決定的な意味をもった。「黒人の間の連帯や団結は今やどこへ行ってしまったのか」と思い悩むカレガは、過去を批判的に意識化することで、未来への展望があたえられることに漠然と気づいている。

「歴史は現在への鍵をあたえてくれるのではないか、歴史を学べばいくつかの問いへの解答が得られるのではないか、と思われた。我々は今どこに立っているのか、どうして現状のようになっているのか。食料と富を生産する75パーセントの人間がかくも貧しく、生産にかかわらない少数者がどうして富裕なのか」²¹⁶⁾

「なぜ、有益な仕事をしていない寄生虫がやすらかに暮らし、24時間の労働に従事している者たちが空腹で、着るものをもたないのか。これらの事実からどのような教訓が学び取れるだろうか」²¹⁷⁾

カレガはさまざまな書物を読みあさった。しかし、解答はどこにも見出せなかった。

「知識人は、植民地主義や帝国主義のもっている意味との対決を避けていた」「大学教授は、過去の民衆の努力や闘争をののしり、汚辱しているように思われた」²¹⁸⁾

カレガには、アフリカ人の抵抗はどうなっているのかとの疑問が絶えずあったが、それを書きとめた本はどこにもなかった。このような疑問に対して、カレガは弁護士から次のような文面の返事を受け取っている。

「君は闘う民衆のために役立つか、それとも民衆から搾取する者たちのために役立つか

のどちらかだ。奪う者と奪われる者がいる状況では、中道的な歴史も政治もありえない。君が学びたいければ、周囲を見渡し、君の取るべき立場を選ぶことだ」²¹⁹⁾

ムカミの自殺の直接の原因を知ったムニラはカレガを許すことが出来なかった。さらに、カレガとワンジャの親しい関係も見逃すことが出来なかった。しかも、カレガが、売春婦ワンジャにムカミへの思いを重ねていることは我慢がならなかった。ムニラは、もはや、カレガとおなじ場所で教育の事業をやっていくことは出来ないと言明する。このとき、カレガはムニラに次のように答えている。

「あなたが、結局のところ、我々は自分の過去から逃げ出し得ないと言われたことに私は賛成します。しかし、我々は、他人への侮辱をこれ以上積み重ねてはなりません。我々は誰もが売春婦なのです。なぜなら、略奪と奪い合いの世界では、不平等と不正義のうえに成立している世界では、一部の者が食い、他の者が苦役している社会では、貴族と君主と商人が札束のうえに腰かけ、民衆が教会の壁に向かって頭をうちつけ、空腹からの救いを神に求めている社会では、そう、この大地に足を踏み入れたこともない者が、ニューヨークやロンドンの事務所に腰をおろし、彼らが札束のうえに腰をおろしているという理由だけで、私の食うもの、読むもの、考えること、することを決定しているような世界では、そのような世界では、我々は誰もが売春行為をさせられているのです。一人でも牢獄に閉じ込められているかぎり、私も牢獄にいます。空腹で着るものもない人がいるかぎり、私もまた空腹で着物をもたないのです。それなのに、なぜ犠牲者である者が他の犠牲者に侮辱をあびせるのですか。徒歩行進のとき、私はチュイとおなじ多くの人間を見ました。人は成長しなければならないのです。歴史とは、結局、勇ましい英雄の陳列館ではありません。私は、来たるべき闘争のなかで自分の立場を選択したいと思います」²²⁰⁾

だが、ムニラは、このような信念に支えられたカレガの教育は偏向であるときめつけ、カレガを追放してしまう。カレガがイルモログを離れるのは、アフリカ横断道路建設のための予備調査で飛来した小型飛行機が墜落事故を起こし、イルモログの名前が、ナイロビ大行進以来、再び新聞紙上で騒がれることになった直後のことだった。イルモログへの関心が急速に高まり、ナイロビからさえ見学にやって来る者がいた。この変転の時期に、ニャキニウアから秘伝を授かり、アブドゥラとワンジャが造る地酒テンゲタはイルモログの名物となっていた。

イルモログを去ったカレガは 5 年間の放浪生活を体験する。彼は、はじめナ

イロビへ出て、弁護士のもとで働き、彼を国会へ送り込むためにスラム街の選挙キャンペーンに乗り出す。弁護士は、カムウェネ文化組織（KCO）²²¹⁾のあらゆる奸計と妨害にもかかわらず圧倒的支持を受けて当選する。弁護士はケニアの社会悪と闘い、独立以後の‘monsters’とその‘angel’を敵にまわして奮闘することとなる。

弁護士によって目を開かれたカレガは、モンバサへ移り、沖仲仕やその他さまざまな仕事につくが、ストライキに参加する度に解雇される。この放浪生活のなかで、カレガは、労働者のなかにさえ民族対立や職種間差別があること知る。そして、やがて放浪生活の悲惨さにうちひしがれて、イルモログへ舞い戻る決意をするのである。「労働者には特定の住み家はない。労働者はどこにも属しているし、また、どこにも属していない」と彼は述懐している。

ワンジャは、イルモログへ帰還したカレガに次のように述べている。

「たしかに、あなたは私たちとおなじ放浪を経験してきた・・・。あなたは私を非難してもかまわない。私は同情も許しもほしいとは思わない。この世間・・・このケニア・・・このアフリカはただひとつの法則を知っているのよ。誰かを食うか、でなければ、あなたが食われる。あなたが誰かのうえに座るか、でなければ、誰かがあなたのうえに座るのよ」²²²⁾

アブドゥラとワンジャが始めたテンゲタ酒醸造の権利は、やがて大資本の手に奪われ、その醸造会社のアフリカ人重役としてムジゴ、チュイ、キメリアが座ることになる。この運命の皮肉に我慢が出来なくなったワンジャは「食うか食われるか」の世の中に対して挑戦状を突き付け、「もう私は犠牲者の群れのなかへ戻るものか」と決意して、アブドゥラの店を辞めてしまう。一方、カレガは、「これが、我々の建設していた社会なのか。ヨーロッパの利権と結びついて、少数の黒人が他人の労働を搾取し、略奪の植民地主義のゲームを続けている、これが我々の社会なのか」と問い、やがて、この社会を変革し、新しい秩序を求める決意を抱く。

だが、「新しい世界、新しい秩序」とは何なのか、ムニラにはわからなかった。ムニラにとって、この世は本質的に非論理的で、邪悪なものなのであった。彼にとっては、この世が非論理的で邪悪であるがゆえに、反発を感じさせるのであった。「新しい世界」とは、キリスト信仰のなかで民衆が一つに結ばれる世界でなければならなかった。「自分は‘happening’、‘mistake’の産物であり、

高層建築物の窓から外を眺める観察者の役割を運命づけられた」と信じるムニラは、この状態から抜け出すためにひたすら神に救いを求めるが、答えは得られない。彼は、今こそ決断のときであることに気づいているが、どう行動してよいかわからない。ムニラにとって、カレガの夢は悪魔であり、幻想にすぎないことだけがわかった。したがって、この許すことの出来ない罪からカレガを救い出すことがキリスト者としての自己の使命であると悟った。

「彼と労働者は、どうしてこの世を変えることが出来ると考えているのか。神の力によらず自己を変革し、世界を変えようとは神に対する何という冒瀆であるのか」²²³⁾

この頃に起きた弁護士（国会議員）の暗殺事件²²⁴⁾は、カレガに大きい恐怖と衝撃をあたえたが、どうじに弁護士の遺鉢を受け継いで生き抜くことを決意させた。テンゲタ醸造会社に雇われたカレガは、そこでも労働者の間に団結がないことを知るが、やがて、おのずと組合結成の動きが出て来たとき、彼はその運動に身を投じた。ストライキを指導したカレガはたちまち解雇されたが、組合はすぐに専従書記として彼を雇った。組合運動の高揚はめざましく、バーの女給やダンサーまでが運動に結集した。カレガは教会の権力とも闘わなければならなかった。これらの信仰復活運動派²²⁵⁾は、アメリカに後押しされて、万人の平等を説き、現世でのいかなる闘争をも拒否していた。万人がキリスト信仰のなかでのみ解放されると強調していた。

「犠牲者の群にくわるものか」と決意してアブドゥラの店を辞めたワンジャは、巨大なバンガローを建て、売春宿の経営に乗り出し、女王として君臨し始めた。アブドゥラは、この罪からワンジャを救おうとして、結婚を申し込むが、それも無駄だった。ワンジャが自己の罪の深さを知らされ、この泥沼から這い上がろうと秘かに決意するのは、カレガの次の言葉を聞いてからであった。

「あなたが誰であれ、あなたは自分の立場を選択した。私はあなたを憎いとは思わない。私には、あなたを裁く気はない。しかし、われわれは、キメリアのような人物になることで、キメリアたちを忘れ去ることは出来ないことは確かなのです。われわれは、キメリアやチュイのいない世界をつくるために闘わなければなりません。われわれは、国の富がわれわれ皆のものとなるような世界、誰もが同胞の幸福と福祉のための働き手となるような社会をつくるために闘わなければならないのです」²²⁶⁾

ワンジャの秘密の決意とは、売春宿の常連客であるムジゴ、チュイ、キメリアの3人を呼び出し、この3人のいる前で自分の正式の夫がアブドゥラである

ことを明らかにして、3人を辱しめようとしたことだった。これによって、それまでの自分の生活と訣別しようとしたのであった。彼女はおなじ日の夜、3人を別々の部屋に招き入れて、外から錠をおろし、アブドゥラがやってくるのを待った。

これより先、カレガとアブドゥラがワンジャの虜になっていることを知ったムニラは、一週間に渡って神に祈り、ついにワンジャの売春宿に火を放つことを決意した。「大切なことは、神の掟に受身で従うのではなく、積極的に従うことだ」。神の所業を嘲笑するワンジャの売春宿を炎上させることは、神の意志に従うものであると思われた。彼は、売春宿のすべての戸口に石油をまき、火を放った。

ワンジャとの約束でアブドゥラは売春宿へ向かう途中、炎上する館を目撃する。彼は、片足が不自由であることも忘れて、屋内に入り、窓際に倒れていた人影を救出する。イルモログの丘の上では、炎上する売春宿の四隅から立ちのぼる火炎が、夕暮れの空を焦がし、血の花卉さながらに燃え上がるのを眺め、その場にひざまづいて祈っているムニラの姿があった。彼は、もはや自分が社会のアウトサイダーではないという気がした。ムニラは、このとき、はじめて「神の掟と一体」となる自分を確かめることが出来た。

精神錯乱症状から回復したワンジャは、自分が身ごもっていることに気づく。はたして誰の子なのか。ワンジャの記憶のなかである姿がしだいに形を整えはじめる。そのイメージは、やがて、かつてナイロビの弁護士事務所の壁に見たデダン・キマジの姿—だが、片足が不自由である—に凝縮していく。

アブドゥラはムニラを礼讃することも、憎むことも出来なかった。ムニラは、彼が企図していたことをかわりにやってのけたからだった。アブドゥラは、ワンジャを救出できたことで満足していた。少年ジョゼフ（実はアブドゥラが拾った身なし子）は若々しい青年に育ち、将来に大きな夢を抱いていた。チュイがいなくなった学校では、学生委員会によってすべてが運営されることが決まり、生徒たちは、学問は民衆の解放につながるべきものとの信念をいっそう固めていた。アブドゥラの胸を去来するのは、森での戦いであり、ディングリの思い出だった。シリアナに進学したジョゼフは、大学へ進学し、アブドゥラのような人間になることが夢だった。アブドゥラは、もはや自分の時代ではないことを悟っていた。「それでよいのだ」。彼はジョゼフの将来にすべてをかけていた。カレガは、高まる労働運動のなかで、母マリアムの死の報を聞くが、そ

の悲しみを乗り越えて「明日には・・・、明日こそは・・・」とつぶやいている。

① 『血の花弁』のインパクト

激しいフラッシュバックと意識の流れの手法のなかで、これらすべての物語とドラマは、小説を最後まで読み終えてはじめて一つに収束し、理解できるのである。したがって、以上の紹介とコメントは、作者の文学的技法を完全に無視したものであることを断わらなければならない。しかし、それでも、この作品に込められた思想、そこからうかがわれる作者の人間性は鮮明に浮かび上がる。作者が、ケニアの新しい社会像をうち出していることは疑いえない。現在の社会体制が必然的に生み出している悲劇を克明に描き出しており、支配する側と支配される側の人間の心理を的確に照射している。

読者は、この四人の人物が、鋭く自己と社会を凝視し、その鋭さのゆえに自ら傷つき、苦悩していることを知る。彼らはけっして秀才型の人間ではない。どのような社会にも楽々と適応力を見せる、かわり身の早い人間ではない。自己と自己をとりまく環境にここまで執拗な問いかけをしなかったならば、彼らもまたムジゴやチュイやキメリアとおなじ地位と特権を約束されていたとも言えるのである。しかし、彼らはその道を選ばなかった。そう出来なかった。彼らはまっとうな人間形成をつよく望んだ。苦闘し、もがき、挫折し、悩み、なおも「人間」を求めて生きる彼らの姿は、烈しい衝迫力をもって訴えてくる。

『血の花弁』は重苦しい。一息に、軽快に読み切れる小説ではない。社会とは何か、政治とは何か、人間の過去とは何か、人間の結びつきとは何か、文明の進歩とは何かと絶えず問い続けなければならないだろう。人間の希望や夢をこともなく踏みにじってしまう現代社会の目に見えない力について何度も考えさせられることだろう。同時に、挫折の過去を背負いながらも、なお人間的なものを求めて必死に努力するイルモログの人びとに強い共感を覚えずにはおれないだろう。

労働運動の若い指導者カレガ（Karega とは「反逆する者」の意である）は希望に満ちており、ジョゼフや、やがて生まれるであろうワンジャの子もまた未来の星である。アブドゥラは輝かしい過去の栄光につつまれた人間であるが、偶然にもせよ、「血の花弁」につつまれた悪の温床（売春宿）からワンジャを救出できたのである。いや、アブドゥラこそは、自分の子を宿しているワンジャ

を救わなければならなかった。

もとより、『血の花弁』は単なる同情の作品ではない。作品に登場するすべての人物—イルモログの村—の運命を狂わせる恐ろしい力は、この地球上のどこに住んでいようともつねに感じられるであろう。その意味でも『血の花弁』は、現代社会に対する警告の書であるだけでなく、現代に生きるすべての人間が、自己のアイデンティティを確立し、新しい人間の道を模索していくためには問いかねなければならない疑問を提起している。作者は、現代ケニアの問題に深く入り込むことで、素材を普遍化することに成功したと言えよう。

冒頭と末尾に、わずかに姿を見せる労働組合の娘アキニ（Akinyi「夜明け」の意）の存在は暗示的である。ルオ人と思われるこの娘が、今後カレガとどう関係するのかは何も明らかにされていない。明らかにされる必要もないのだろう。カレガの人生、カレガの夢は彼女の存在によって普遍化されている。

He looked hard at her, then past her to Mukami of Manguo Marshes and again back to Nyakinyua, his mother, and even beyond Akinyi to the future ! And he smiled through his sorrow, ‘Tomorrow . . . tomorrow . . .’ he murmured to himself. ‘Tomorrow . . .’ and he knew he was no longer alone.²²⁷⁾

「彼は彼女を凝視し、ついでマングオのムカミの姿を思い浮かべ、ふたたびニャキニユアと母の姿を思い浮かべ、それからアキニの彼方の未来を見すえた。彼は悲しみのなかで笑みをもらした。“明日・・・、明日には・・・”。彼は声に出して呟いた。“明日こそは・・・”。彼は自分がもはや孤独でないことに気づいた」

『血の花弁』の執筆を始めたのは、先述の通り、イリノイ州エバンストンのノースウェスタン大学の客員教授として招かれていた 1970 年 10 月であり、これを書き上げたのは、ソビエト作家同盟の招きでヤルタに滞在した 1975 年 10 月のことだった。この間に、ナイロビ大学に常勤スタッフとして復帰しているが、実に、完成に 5 年の歳月をかけたのだった。

この期間、グギは、「時おり頼まれる論説の執筆とか、講演のほかには何もしないでこの小説に専念した」²²⁸⁾と述べているが、これはすこしばかり事情がちがう。アメリカから帰国した 1971 年 8 月以来、同僚のミシェレ・ギザエ・ムゴとともにマウマウ戦争の指導者デダン・キマジを主人公とする戯曲の構想をねり、キマジに関する手に入れうるかぎりの情報を得るためにケニア各地を訪れ、

1974 年からはその執筆に取り組んでいるからだ。

このように、『一粒の麦』から『血の花弁』に至る 10 年間にも、グギの活躍は多彩をきわめている。したがって、先の発言は、グギが『血の花弁』にかけた意欲のなみなみでないことを物語るものとして受け取らなければならない。しかし、この 10 年の間に、アフリカ全土はもちろんのこと、ケニアにおいても、G. オゴト、オコト・ビテック、R. ジャウなど既成の作家がつぎつぎと新作を世に問うていたし、レナード・キベラ、サミュエル・カヒガ、トマス・アカレ、デイビッド・マイルなどの若手作家が矢継ぎ早に登場し、なかでも M. ムアンギ（1948 年生まれ）の台頭は、ケニア文学界の期待の星として大きい注目を集めていた²²⁹⁾。この趨勢のなかで、グギはもはや 60 年代の文学的勃興期を象徴するカリスマ的人物として君臨するにとどまり、ケニア文学の潮流は「マウマウ」の闘いを知らない「戦後世代」が主流を占めている観さえあった。グギは小説を書くのを断念したのではあるまいかとの観測が流れたほどである。この時までには、彼は小説家としてよりも、むしろ哲学者、思想家、歴史家、警世家としてケニア文化界の大御所的存在になってしまっていた。

したがって、『血の花弁』の発表は、何よりも「グギの再浮上」「小説家グギの健在の証し」として受け取られ、ケニア文学の真の代表者としての彼の地位を再認識させるものとなった。いくつかの雑誌が、これの刊行以前から注目すべき作品となることを予測し、書評掲載の予告記事まで出している。7 月にハイネマン教育図書出版社からナイロビへ届いた分が 1 ヶ月と経たないうちに品切れになったことはこの間の事情を物語っている（なお、この時期の「アフリカ人作家シリーズ」の通常の発行部数は 6,000~8,000 ということであるが、『血の花弁』は初版約 20,000 部が刷られた。出版社は 2 ヶ月後に早くも増刷した）。

グギは、『血の花弁』発表直後のインタビューで次のように述べている。

「私は、1970 年から『血の花弁』を書き始めました。もっとも、その構想はそれより 1 年前に出来上がっていました。それで、1970 年から 1976 年まで、私は完全にこの小説の執筆に専念しており、作家としての私の発展は、この時期の『血の花弁』の発展とかかわっています。なかなか書きにくい小説でした。たえず構想が変わりました。私もつねに変化していたのです。書き上げるのに長くかかったのはこのためです」²³⁰⁾。

この答弁から、足かけ 7 年の歳月を必要とした理由が、単に執筆時間の不足のせいでなかったことがわかる。別のインタビューで、若い作家と作家志望の

青年への助言を求められたとき、これの解答をあたえている。

「作家は、執筆にあたっては忍耐づよくなければなりません。けっして、急きたてられてはならないのです。どうじに、作家はあらゆる機会をとらえて書かなければなりません。私の場合、仕事のないときには、一食事中であろうと、真夜中であろうと、また朝方であろうと、この機会を利用しました。私は、マタツ・タクシーやバスに乗っているとき、友人と一緒にテーブルに向かっているときにも、二、三のことをノートに走り書きしています」²³¹⁾。

② 『血の花弁』の評価と意義

『血の花弁』は、独立以後ケニアの混迷を深める政治・社会情勢を背景に、政治に見離され、地図に記されることさえなかった架空の僻村イルモログの村びとの「地に呪われた」生活を克明に描き、それによって、現代ケニアの施政者と特権階級の無能と腐敗を痛烈に逆照射している。脳裏に深く刻まれたマウマウの英雄的闘争の記憶が、ひたすら人間的なものを希求してやまない村びとの行動の原動力となって、彼らに自己の主体性と環境を的確に把握させ、しだいに階級意識に覚醒させていく。大小 70 人以上の登場人物が、時間と空間のめまぐるしい交替のなかで、複雑無比に絡み合っている。この人物造型の鮮やかさ、過去が現在に負わせる容赦のない桎梏、そして思わずもらす深い嘆息のなかでは、この作品を一息で読み切ることはむずかしい。

『血の花弁』は出版以前から注目すべき政治社会小説になることが予想され、グギ自身も自己の代表作となることを言明していた。この小説を「爆弾的作品」「独立以後アフリカの最も衝撃的な作品」と受けとめたジャーナリズムは、おびただしい書評と直撃インタビューをくり返した²³²⁾。

そこには、はっきりと二つの傾向がうかがえる。筆者なりにまとめると、①文学の名を借りた政治的アジ文、②独立以後アフリカの最高の話題作、ということになろう。作品の文学的価値を認めながらも、現状分析の偏向を指摘するものなど、この中間的位置に立つ受けとめ方も多い。そして、数の上では、むしろ前者①が多く、海外の論調も似た傾向を示した。

はじめ『あるバーメイドの物語』(*A Ballad for a Barmaid*) との仮題を考えたとこのこの大部な小説で、グギは「ケニア社会を別の角度から眺める」²³³⁾ ことを意図したという。これは彼が生地リムルを離れないことと関係している。「現代ケニアの全容を描き切るには地方的背景から照射することが必要である」

234) と彼は語った。つまり、ケニア近代化のめざましい発展のなかに身を置くのではなく、影の部分に生きる民衆のありように目をすえて、たとえば、バー生活の実態や外国資本の侵入、また観光立国主義が国民生活にもたらしている荒廃的影響などすべてをひっくるめて現代ケニアの全体図を構築したという。そして、この全体図を歴史の見取図のなかに正しく位置づけて、すべてのケニア人の物質的ならびに精神的生活にしのびよる社会的諸力を検討し、その歴史的来源を追求しようとしたと述べている。つまり、彼の意図は、現在のケニアが選択している社会体制が必然的にもたらしている論理的帰結をえぐり出し、それらの荒廃要因を生み出さざるをえない現在の社会体制に警告を発することであった。

したがって、登場人物の誰それが、現実のケニア社会の誰を指すかは問題外であり、いわんや、登場人物の誰かに自己のメッセージを託したこともないと言い切っている。弁護士に J. M. カリウキの形象を感じ、カレガに作者の分身を重ねるのは読者次第ということになるが、そう単純にわり切れるものでもないことは、どんな文学作品にもよくあることである。

『血の花弁』発表直後の別のインタビューで、グギは次のように語っている。

A writer tends to raise more questions
than he can offer answers to,
because answers can only be found
by the collective 'we', us Kenyans.²³⁵⁾

「作家は自分でも答えることの出来ない
多くの疑問を提起するものだ。
その答えは、集団としての我々
ケニア人によって見つけ出すことが出来るでしょう」

グギが社会主義的傾向の強い、体制批判の作家になることは早くから予測された。『泣くな、わが子よ』発表直後に、これを読んだマケレレ時代からの同僚ピーター・ナザレスは、グギが次の作品で必ず社会主義作家の風貌を整えるはずだと予言した²³⁶⁾。その予言は、『一粒の麦』を経て、13年後に的中したと言えよう。

ここに至るまでの思想的・文学的な軌跡については、主に第 5 部で検討する

ことになる。この軌跡もまた、作家として「変化してやまない社会環境に全人格をもって反応」してきた証拠であり、「歴史のなかに生き、歴史によって形づくられる作家として、アフリカ人大衆の闘争に組みして、新しい国をつくるために、ささやかながら、この闘争の背後の感情を表現することに役立とう」²³⁷⁾とした結果であった。

第3部:コミュニティ演劇－過去との認識論的断絶

コミュニティ演劇の舞台となったカミリズ村は、リムルの数ヶ村の一つで、50年代には、ケニア土地自由軍（マウマウ）のゲリラと一般住民との連絡を断つために植民地政府によって造られた要塞村（非常事態村）だった。独立後も、村の様子はたいして変わらず、人口だけが著しく増大した。75年頃には約1万に達していたという¹⁾。「カミリズ」(Kamĩrĩthũ)とは、ギクユ語の名詞 *Mĩrĩthũ* の縮小形 (diminutive form) で、「涸れることのない水を湛えた小盆地」の意である²⁾。

① 生まれ故郷の村

カミリズ村へは、ナイロビからの直行バスやマタツ・タクシーはない。ひとまず、英語で「リムル・プロパー」(別名ルンガイ)と言われる商業地域まで来てから、後は徒歩で向かうか、あるいは地元発の小型のマタツ・タクシーに乗り換えなければならない。その後、ラテライトの凸凹道を約10分も走ると、左手奥の方に、群小の家並みが見えてくる。赤土の道路脇に小さな給油所があるほか、「サファリ」(Safari) や「ヤング・ファーマーズ」(Young Farmers) といったバーの看板が目につく。これらのちっぽけなバーは、小説『血の花弁』に実名で登場している。そのあたりが、カミリズ村への入り口にあたる。道路の右手は、わずかな戸数を数えるのみで、前方遠くまで開けている。以上は、この村でコミュニティ演劇活動が行われた1970年代から80年代初め頃の風景である。

村の住民については、グギが次のように詳しく説明している。

「大半は、労働者か農民であるが、主に三種類に分かれる。まず、多国籍のバタ靴工場やナイル・プラスチック導管工場、小規模の製塩工場、製材所、とうもろこし製粉所、自動車・自転車修理工場などで働く労働者がいる。次に、小規模なホテル、商店、給油所、乗り合いバス、マタツ・タクシーなどの被雇用者がいる。このほか、ロバに引かせた荷車や手押し車を使っているような賃金労働者や家事労働者がいる。次には、少数の富裕なケニア人のほかに、ロンロなどの多国籍企業が経営する広大な茶・コーヒーなどの大農場、その他大小さまざまな農園に雇われた季節労働者がいる。借家住まいの者や自分の家を持つ者を含めて、彼らの多くは、自分の土地を持たない農業プロレタリアートである。

圧倒的に多いのは自営農民である。家族労働のほかにも労働力を雇用している富裕農

民、もっぱら家族労働だけに頼っている中産農民、ちっぽけな自分の田畑を耕しながら、同時に労働力を他人に売っている貧農がいる。この他に、田畑を借りながら、労働力を売っている自分の地所のない多数の農民がいる。他には、失業者、パートタイムもしくはフルタイムで働く売春婦、そして軽犯罪者が多くいる。その他は、教師、秘書、下級官吏、小さなバーや商店の経営者、職人、大工、音楽家、市場商人などの自営業者、あるいは臨時の商人である。富裕地主や商人、会社や行政機関の上層部の大半、土地所有農民の大部分は、村の外に住んでいる」³⁾。

I. 村おこし：識字運動からコミュニティ演劇へ

さて、この村の一角に、「カミリズ教育文化コミュニティセンター (Kamiriithu Community Educational and Cultural Centre) と呼ばれる建物があった。77 年 8 月 23 日、筆者はグギに連れられて、この建物を訪れた。古ぼけた、ただっ広い木造の建物であったが、なかでは、村人たち十数名が、ギクユ語劇「したい時に結婚するわ」(*Ngaahika Ndeenda*) のリハーサルに励んでいた。

この建物は、非常事態が宣言された 1952 年、「原住民」(‘natives’) の福祉向上施設として、植民地政府によって設けられたものだった。その後約 20 年、ときたま木工技術の訓練教室として使用されるほかは、ほとんど顧みられることもなく、荒廃のままに放置されてきた。

これの新しい用途をめぐり、1974 年に 22 人からなる委員会(地元役人、KANU 幹部、農民、小学校教師などで構成)が発足し、住民の教育・文化の振興と発展を期して、失業者や読み書きの不自由な人々を集めて夜間の識字教室を実施することを決めた。この委員会は、古ぼけた建物を再活用して、村の発展に役立つ新事業を起こすことを決めた⁴⁾。

村おこしの活動に、グギが誘い込まれたきっかけが面白い。76 年の、ある日曜日の早朝のことだったと言う。カミリズ村の中心から道路を隔てて、やや遠く離れたグギの家を一人の女性が訪ねて来た。日曜日には、彼がたいてい在宅していることを知っていたからである。その女性が、いきなりこう切り出した。

「あなたは教育を受けて、本を書いていると伺っています。それならば、なぜその教育の一部をこの村に分け与えようとはなさらないのですか。まるごと欲しいなどとは言いません。ほんの少し、そして、あなたの時間をほんの少し欲しいのです」⁵⁾。

彼女は次の日曜日、その次の日曜日、そのまた次の日曜日とたてつづけにや

ってきたという。こうして、グギは身を持って村の活動に参加することになった。

村には多くの失業者と、読み書きの不自由な人々がいた。こうした現状を常に憂えていた村人は、何のためらいもなく、住民の文化と経済生活の向上をはかる「村の精華」としてセンターを発展させることを決めた。とりあえず成人識字教室を開くことになったが、資金調達をめぐり、大きな困難が横たわった。幸いなことに、ケニア・キリスト教協議会(National Christian Council of Kenya)から担当教師の賃金支払いやガス灯設備などのための援助を取り付けることが出来た。

委員会に参加した指導的なメンバーの一人に、グギ・ワ・ミリエ(Ngũgĩ wa Mirii, ミリエの息子グギの意。グギ・ワ・ジオンゴの親戚ではない。ギクユ人の間で、グギはありふれた名前である)⁶⁾がいた。彼は成人教育の専門家として、この委員会への参加を買って出た人物であった。識字教室には当初 55 人の参加者がいたが、多くは農民か、失業中の若者であり、しかも担当者の本業は、小学校教師である者が多かったことから、授業は夜間に実施された。

成果は著しかった。途中で落伍する者は僅かで、6 ヶ月後にはほぼ全員が読み書き能力を身につけることが出来た。順調に進んだが、次に新たな問題が起きた。能力を身につけても、修了生の多くは、識字力を活かすような仕事を容易には見出せなかった。能力は使わなければ枯渇してしまう。

① 英語から民族語の世界へ

グギ・ワ・ミリエとグギ・ワ・ジオンゴは、協議の結果、修了生を中心に、村レベルで新たな文化活動を起こすことを決めた。民族語を使った語劇をやろうというのである。二人は 76 年 12 月から、その台本執筆にとりかかった。当然のことだが、この劇は圧倒的多数の村人が理解できる言語、すなわち彼らの日常言語ーギクユ語ーで書かれなければならなかった。

台本のアウトラインは、77 年 4 月頃に出来た。その後 2 ヶ月、村人がこの台本に対して何かと注文を出し続けたという。これにより、内容や表現の修正、追加と削除、再修正などが行われ、ようやく「カミリズ村の全エネルギーと創造力を結集」した台本が完成した。

77 年 6 月 5 日に最初の読み合わせがあり、6 月半ばに配役も決まった。関係

方面へ提出した上演許可申請は文句なしに認可された。村の空き地を利用して演じるものであったが、舞台と観客席（約 2,000 席）を造るのに多額の資金を必要とした。幸い、東アフリカ文学局⁷⁾が、将来の出版を見込んで、20,000 シリング（約 60 万円）の前払い金を貸与してくれたが、それだけでは照明設備を施し、管理人を雇うことしか出来なかった。委員会は各方面に働きかけて、さらに 75,000 シリング（約 225 万円）を借用する必要があった。

センターの創立 25 周年、非常事態が宣言された 10 月を記念して上演に踏み切ることになった。開演は、マウマウ戦争の勃発を記念して 10 月 2 日。以後約 1 ヶ月半の間、毎日曜日の午後に超満員の観客を集めることになった。筆者の友人で、ナイロビに住む作家志望の G 君は、三度までこの劇を見たという。また、ナイロビからは、観客を運ぶために特別のバスが仕立てられた。劇は、この期間に、全部で 14 回上演され、約 20,000 人が観たというから、ケニア史上最大の観客動員数を誇る舞台だった。

Ⅱ. 「したい時に結婚するわ」：民衆演劇は何を訴えるのか

さて、どのような内容なのであろうか。77 年 9 月、筆者がグギから貰った台本に従って見ておこう。タイプ印刷の私家版で A4、132 ページ、上演時間にして約 3 時間である。

主人公キグンダ (Kīgũnda, 「畑＝農民」の意) は、金持ちの事業家アアハブ・キオイ・カノル [Aahabu Kīoi Kanoru, イスラエルのサマリア人の王アハブ King Ahab of Samaria を思い出させる。この王は、隣人ナボスが所有するブドウ畑を欲しがり、妻のジェゼベル (Jezebel) を巻き込んだ詭弁によって、そのブドウ畑を奪う] の農場で働く貧乏農夫である。キオイは、マウマウ戦争時には植民地政府側に立つホームガードであり、「独立」の甘い汁を吸ってきた野心家の一人である。今では、信仰復活運動派⁸⁾の厳格なキリスト教徒となり、巨大な富を蓄積している。彼は、外国人と提携して、殺虫剤製造工場を建設するために、キグンダの 1.5 エーカーの土地を我がものにしたいと考えている。ジェズィベリ (Njeethiberi) という名のキオイの妻は、ギクユ語独特の綴りと発音に変化しているが、先のサマリア人の王アハブの妻の名と酷似している。

キリスト教とは無縁のキグンダは、ちっぽけな 1.5 エーカーの土地権利証書を後生大切に守っている。彼の粗末な家の部屋の壁に、土地権利証書が、観客席からよく見えるように、これ見よがしに掲げられている。「どんなに小さくても、男は自分のペニスを自慢する」 (Mũndũ ainaga na gatiirũ gaake ; A man

brags about his own penis, however tiny.)⁹⁾ というのではないか。貧乏で、どれほどみすぼらしくても、自分の土地こそは、彼が男であることの証になっている。

キオイは、事業仲間のサミュエル・ドゥギレ (Samuel Ndugire) と談合して、この奸計を実現させるために、まず息子のジョン・ムフウニ (John Muhuuni, 「ムフウニ」とは、「不良、ならず者」の意) を、キグンダの娘ガゾニ (Gathoni, 「ガゾニ」とは「内気、はにかみ、恥」の意) に近づかせ、両家の婚姻もありうることをちらつかせながら、ムフウニとガゾニをインド洋岸のリゾート地モンバサへ遊びに行かせる。この間、キグンダは、キオイの勧めに従って、1.5 エーカーの土地を担保にローンを借り、キリスト教徒に改宗して、改めて妻と結婚式をあげようとする。

異教徒の頃の、ギクユの野蛮な儀礼にのっとった過去の結婚の罪を浄めることが必要なのである。この結婚式では、婚礼の儀式を執り行う新婦は、処女の純潔を象徴する純白のドレスをまとうことになる。これは「ホワイト・ウェディング」 ‘white wedding’ と言われるもので、当時の流行だった。やがて、夫婦はキリスト教信者に生まれ変わり、キグンダはウィンストン・スミス・キグンダを名乗り、妻ワンゲシはローズマリー・マドレーヌ・ワンゲシを名乗る。

その後、キグンダは、とうぜんのようにローンの返済に行き詰る。銀行が彼の土地を競売に出すと、キオイがそれを買上げる。ムフウニはガゾニを身ごもらせ、その後、彼女を捨てる。ガゾニはバーメイド、ついで売春婦に落ちぶれていく。土地を失ったキグンダは、自暴自棄のあげく飲んだくれになり、一家は絶望に暮れる。

最後に、キグンダはキオイの工場で働く労働者ギシャンバ (Gĩcamba 「勇気ある人」の意) に慰められ、工場労働者が突き落とされている非人間的な境遇を知らされ、それが自分の境遇とも結びついていることを自覚する。

この劇は、金持ちの農場で働く貧しい農夫キグンダが、外資系会社の金権と結びついた支配階級の謀略によって自分の土地を失い、絶望の淵に陥れられるが、やがて名もない労働者・農民が突き落とされている運命を共有することに目覚め、現代ケニアの資本主義的メカニズムに開眼するまでを描いている。

作者は、金銭欲と物質欲こそが社会悪の根源であり、人間関係が金で左右さ

れるかぎり、果てしなく「非人間化」の道を突き進まざるを得ないと説いているようである。したがって、観客（読者）は、金と権力の偏在をまねき、その結果、社会の分裂を惹起せざるをえない現在の社会の仕組みに深い懷疑を抱かされるのである（同時に、キリスト教がこの社会的欺瞞と不正義に加担する勢力であることも鋭く告発している）。最後に、この社会的不正義のなかでは、中道の立場が存在するはずはなく、すべての観客（読者）は、強者（キオイやドゥギレ）の側に立つか、抑圧されている弱者＝民衆（キグンダー家やギシャンバ）の側に立つかの明確な態度決定を迫られる。

① ギクユ語版の場合

カミリズ村での上演活動の3年後の1980年、この台本は、推敲・修正等を実施してハイネマン教育図書出版社から公刊された。B6版118ページで、表紙に、素足でぼろ着をまとい、痩せ細った貧乏農夫キグンダが、自分の土地をくすね取る事業家キオイ（彼は背広姿で、革靴を履いた太鼓腹である）と有刺鉄線で囲まれ、占拠された自分の土地のそばで言い争っている場面が描かれている。苦勞のしわの目立つ農夫の額と情容赦のない事業家の厳しい表情が対照的である。

表紙をめくると、はじめに一枚の大きな写真があるが、これはマウマウ戦争時に設けられた強制収容村＝「カミリズ村」を写したもので、ものものしい警戒と、村人の恐怖と不安の表情を伝えている。「1952年から1962年まで、白人とその追従者から迫害を受けたギクユの人々が収容された強制収容村」とのキャプションがある。

さらにページをめくると、サービス版の8枚の写真が載っている。これらは、この戯曲の制作と上演風景を示すもので、それぞれ①村人たちがマッチ棒で舞台の見取図を地面に描くもの、②2人の女性と一人の男性がそれぞれの役を演じるもの、③女性たちによるギティイロ舞踊のシーン¹⁰⁾、④3人の男性がそれぞれの役を演じるもの、⑤2人の女性と2人の男性がそれぞれの役を演じるもの、⑥賃金値上げを要求してデモに立ち上がる労働者たち、⑦マウマウ戦士たちが勝利を祝うシーン、⑧観客席の一部を写したものである。なお、ハイネマン教育図書出版社は、初版3,000部を刷り、発売後2週間で売り切れたという。すぐに5,000部を増刷したが、これも1ヵ月で底をついた。同出版社の「アフリカ人作家シリーズ」中の英語戯曲で、これほど敏速な売れ行きを示したものはなかった。

話を元へ戻そう。カミリズ村での「したい時に結婚するわ」の上演は、77年

11月16日に突然の禁止命令が出た。その事情については、後で詳しく述べるが、主として土地の再分配をめぐる独立後も温存された植民地支配の遺制を暴露し、イギリスの勢力と結んで今日の特権的地位を築いた黒い支配階級を断罪している点が、国民の間に旧い敵対感情をむし返す恐れがあり、したがって、国家の統一を脅かすものであると政府に映じたい。

以下では、ハイネマン教育図書出版社のギクユ語版に見られる「作品の背景」「感謝のことば」「序文」「演出家と役者と観客に向けて」「主要な客」と続く「まえがき」の重要部分をほぼ全面的に訳出しておこう（これらは、後日刊行された英語版では全面的に削除されている）。

a. 「作品の背景」 *Rũgano rwa ũrutĩ wa ibuku rĩĩrĩ* (p. 1)

「私たちは、この作品の執筆にシンボルとして参加してくれたすべての村人に感謝します。私たちは、この作品をいくつかの出版社とかけあいましたが、一見、愛国的なポーズを取っているそれらの出版社は、民族語で書かれた本には買い手がつかないことを理由に、出版を拒否しました。それで、ほかの出版社ともかけあってみたところ、いくつかは作品の内容に深い関心を示し、出版を約束してくれたのでした。

しかし、キアンブ地区の長官が、カミリズ村の知識社会ホーム (*Mũciĩ wa Mũingĩ Mũũgĩ [MMM] wa Kamĩrĩĩthũ*) の広場で上演していたこの劇の許可を 1977 年 11 月に撤回し、作者の一人が逮捕・拘禁されてからは、刊行を約束していた出版社はこの作品と手を切ってしまいました。ケニアの出版社は、ケニアの諸言語で書かれた本を出版する責任を負うべきです。なぜなら、「愛はまず家庭から」 (*Ngemi ciumaga na mũciĩ*) と言うではありませんか。

外国人はつねにアフリカ人を指導する立場にあると私たちにふれこみ、決して彼らよりも先頭に立てなどとは言わないものです。したがって、私たち民族語による作家と出版社と読者は、自らの道を見つけて進むことにしましょう。私たちケニア人は、外国語で書かれた外国人の作品に満足するのではなく、私たちの民族諸言語で祖国のための歌をうたいましょう。

b. 「感謝のことば」 *Ngaatho* (p. 2)

この戯曲は、二人の著者の手と頭だけで書かれたものでなく、「団結は力である」ことを示した村びとたちの集団的産物です（以下、個別宛への謝辞と激励の文章が続く。たとえば、この劇に出演した妻ニャンブラたちへは、「あなた方は、本作品執筆の過程でたくさんの助言をくれ、私たちを励ましてくれた。あなた方は、つねに大道の真ん

中を進め、決してターマック道路は歩むな」とある。また、カミリズ村の農民・労働者たちへは、「私たちと手を組み、この劇を支援し、知らないことをたくさん教えてくれた。祖国と、私たちの文化と、私たちの言語のために、感謝のこたえを受け取ってほしい」とある)。

c. 「序文」 ũhoro ũrĩa ũtoongoirie (pp. 3~6)

この現代劇は、カミリズ村の知識社会ホームの発展のために書かれました。このホームの目的は、共同体の教育と文化発展に置かれています。このホームは、カミリズ村の住民にとって新しいものではありません。その歴史は、非常事態下の 1955 年、各地に強制収容村の建設が行なわれた頃にさかのぼります。当時は、どの収容村にも、教会・学校・公民館の建設用地がありました。それで、カミリズ村にも農民と労働者のために 4 エーカーの用地があり、そこが社会と文化の発展にかかわる諸問題を語り合う集会場となっていたのです。ここに、トタン葺き、泥壁の建物が建てられ、それが一種のユースセンターとなって、若い男女がルンバなども含めて、あらゆるギクユの伝統的な踊りを楽しんだものでした。しかし、非常事態の影響下で、これらの踊りは下火となり、やがて消滅してしまったのです。

さて、独立とともに、リムル地区評議会の援助でここに木工教室が建てられました。73 年、地区評議会が解散してからは、この教室は後援者を失い、資金と教師と指導者の不足のために閉鎖されることになりました。そこで、カミリズ村の住民が集い、村の社会・文化問題をあずかるセンターの復活について議論を重ねたのです。何度目かの集会のあとで、運営委員会が発足し、元の名称をカミリズ教育・社会・文化問題センター、略して知識社会ホームと改称したのです。運営委員会は、この知識社会ホームをカミリズ村の「砥石」にしたてようと努めました。なぜなら、ギクユのことわざ「砥石のある家庭には、なまくら包丁は宿らない」とあるからです。この砥石は、私たちの生活様式、文化・歴史・文学・指導力・知識・歌・祭り・現代演劇・言語などが決してなまくらとはならないように、カミリズ村の住民がつねに思考をとぐ道具となったのでした。

今日、外国の諸言語がケニアの諸言語を蹂躪し、たいていの子供たちが英語やフランス語やドイツ語などの外国語を話しています。私たちの生活様式もこれと同じ運命をこうむってきました。子供たちは、生活様式も伝統も文学も文化も、事実上外国のものばかりを学校で学んでいます。一民族にとって、自らの生活様式は、自己と自分の国の歴史を映し、現在の位置と未来の進むべき方向を映し出す鏡であり、まなこであるのです。したがって、私たちが外国の生活様式を受容するならば、自己と祖国を見つめるのに、自分のまなこでなく、外国人のまなこで見ることになります。ヒョウ

の目を借りて、どうして羊を探しあてることが出来るでしょうか。羊をくろう者の目を借りて、どうして羊を探しあてることが出来るでしょうか。私たちの羊とは、若い農民にとっては労働とその収穫のことです。外国人のまなこを借りて、どうしてそれを手に入れることが出来るでしょうか。

私たちの生活様式は、たんなる伝統ではありません。それは、私たち村びとが伝達し合い、着物をまとい、飯を食い、祭りを祝い、歌をうたい、踊りをおどり、旅をする様式のことです。それは、私たちが森羅万象の豊かな自然力のなかで、これと闘い、物質的な富を求めて自己を発展させる様式のことであるのです。それは、私たちケニア全土の農民と労働者が畑を耕し、天然の資源を生み出す様式のことでもあるのです。

私たちの生活様式は、私たちの行動・文学・指導力・知識・祭り・歌の総計、つまり国家発展のために私たちが農場と工場で労働によって生み出す一切のものであるのです。したがって、すぐれた生活様式とは、私たちに自らの労働の豊かさを示しうるものであるはずです。私たちが自らの羊をくろう者の生活様式を身にまとうならば、私たちの羊がどこへ連れ去られたのか、どこの方角へ連れ去られていくのかをさえ、どうして知ることが出来るでしょうか。民族の生活様式は、その民族の心であり、今日も、過去も、未来も、自己を映し、祖国を映し出す鏡であるのです。「力は自らの家庭から」と言います。民族の生活様式は民族自らの手でとりしきるべきです。かくして、運営委員会は、このホームで、農民と労働者の目を開かせるための教育を行なうことを決めたのでした。

私たちの目は開かれ、思考は甦りました。私たちは自らを発展させるために、自らの村を発展させよう。こうして、カミリズ村の農民と労働者たちは、ヤム芋の芋づる式に集会を重ねて、これまで読み書きを知らなかった農民と労働者たちへの教育を始めたのです。

運営委員会は、この事業を進めるために、教育問題小委員会と社会問題小委員会を発足させました。教育問題小委員会は労働者・農民のための識字教育、特に成人教育向きの書物の執筆と出版を担当し、社会問題小委員会は、私たちの生活様式を描く現代劇の執筆を引き受けることになりました。これが、この戯曲執筆のきっかけです。

私たちは、執筆にあたって、多くの問題をかかえ、どこから、どうやって書き始めればよいのかわかりませんでした。農民と労働者の暮らしぶりを描くために、私たちは彼らと長時間の話し合いを重ね、ことば使いや生活様式、歌、さらには私たちがかかえている諸問題についての助言を要請したのでした。実際、i と e の区別すら知らな

い全く文盲の一農夫が、助けも借りずにギティイロの歌をこしらえてくれました。そんなわけで、この作品は、たくさんの協力者、特にカミリズ村の農民と労働者の共同の産物であると言えます。

この現代劇は、労働者と農民の生活、さらに今日のケニアとその国民のありのままの姿をかくしへだてなく語っています。私たちはこれを恥かしがることはないし、恥かしがっていることも出来ません。なぜなら、この作品を好むと好まざるとにかかわらず、農民と労働者こそが独立のために闘った人びとであるからです。

この戯曲は、ケニアの諸言語の一つで書かれています。その理由は、一民族の生活様式は彼らが話している言語の上に浮遊しているからであり、ケニア人の生活様式はケニアで話されている諸言語の上に浮遊しているはずだからです。これまで、何年にもわたって、ケニアの言語で文学作品が書かれることはありませんでした。なぜでしょうか。

イギリスの植民地主義者がはじめてケニアへやって来た 1885 年、彼らはケニア人の文学は邪悪である、ケニア人の文化は悪魔であると宣伝しました。また、私たちの言語が担っている生活様式は地獄の劫火で燃え尽きるよう宿命づけられていると教えたのです。植民地主義者たちは、彼らの言語の上に浮遊している生活様式を採用するよう私たちに強制し、その結果、私たちは彼らの人格を身にまとったのです。この植民地的パーソナリティは、私たちアフリカ人のパーソナリティ、生活様式、言語の命綱ともなりました。これにより、カンバ語、マサイ語、ルオ語、ルヒヤ語、ギリアマ語、カレンジン語などケニアのすべての言語に対する抑圧が始まったのです。

ローマ字がケニアに普及する以前、私たちの文学一つまり、ことわざ、昔話、伝説、なぞなど、さらに警句や金言などを含むかけあいの歌と踊りは、口言葉を通じて、世代から世代へ受け継がれていました。したがって、イギリス人やその他の外国人が文学の創始者というわけではありません。彼らがアフリカ人に現代劇を紹介したのでもなければ、それをアフリカへ運んできたのでもないのです。植民地主義者がケニアへ到着する以前から、私たちは自前の劇と踊りを、娯楽として、教育として、助言として、他の有益な文学とともにあわせ持っていたのです。ギクユ語はすこぶる古い時代にさかのぼり、たくさんの知識と教えを蔵しています。

この戯曲は、カミリズ村の知識社会ホームが文学作品を書くことで、ケニアの一言語の発展を試みた第一歩にすぎません。ケニアのすべての農民は、土地の諸言語を話しています。したがって、これらの農民と手を握り、私たちの国と生活様式の発展を

望む者は誰もが、土地の言語を書き、話す必要があります。植民地主義者の諸言語を話し続けることは、外国の生活様式への隷属状態で暮らし続けることです。そうすることで、私たちは、これらの外国人が望んでいるとおりの仕方と世界を眺めることになってしまうでしょう。そう、そのとおりではなかったでしょうか。私たちは外国人の目を借りて、彼らのパーソナリティを身にまとい、アフリカ人のパーソナリティは邪悪な悪魔であるとののしってきたのです。

ケニア民衆の皆さん、時機が到来したのです。私たちは自らの知識と英知と勤勉と勇気をもって、この国を発展させましょう。子供も大人も、誰もが集まってきてください。私たちは手を握り合い、私たちの生活様式を発展させましょう。なぜなら、誰もが知っているとおりの、「一本の丸太では暖炉の火を夜通し燃え上らせることは出来ない」(Rūtungu rūmwe rūtiraaragia mwaki) のですから。「この戯曲を豊かなじゃがいもの収穫の嚆矢としましょう」(Ithaako rĩrĩ nĩ rĩtuĩke kīambĩrĩria ngwacĩ nyiingĩ)。

d. 「演出家と役者と観客に向けて」 **Kūrĩ athaakithia na athaaki na eeroreri ithaako rĩrĩ (p. 7)**

この劇の演出にあたったのはキマニ・ゲシャウ (Kĩmani Gecau) ¹¹⁾ 氏です。ここにはたくさんの歌が含まれていて、歌をうたえる役者が必要です。しかし、この作品に書かれている歌に限定されずに、それぞれの地方でよく知られる歌とさしかえることが可能です。大切なことは、歌や台詞がこの劇の目的とテーマに合致しているかどうかということです。また、この戯曲で使われている革命戦士の歌では、それぞれの地方で知られる人物の名前とさしかえることが可能です。演技は、私たちの伝え合いを豊かにするためにあるのです。「ほかの人との対話は愛を生み出す。対話のある家は、対話のない家よりも長続きする。一千の敵も一本の棍棒で打ちのめされる」(Kwaranĩria nĩ kwendana, na kwa mwaria gũgĩkoora kwa mũkiri kuorire tene. Na niingĩ ita rĩtarĩ nduundu rĩhũuragwo na njũgũma ĩmwe) と昔の人びとは語りました。

e. 「主要な客」 **Eene iruga (p. 8)**

「どんなビールも誰かのために醸造される」(Gũtirĩ njoochi ĩtarĩ mũrugĩrwo)。この劇のために醸造されたビールは、これまで、歌や書物でギクユ文学の振興をはかってきた人びとに捧げられます[伝統的な歌や、マウマウ戦士の歌などの作詞家、そして歌い手。特に非常事態宣言以前からギクユ語で書物を著わしたガカアラ (Gakaara wa Wanjaũ) 氏。¹²⁾ 彼は拘禁の憂き目にもかかわらず、ケニア国民とマウマウ戦士のためにギクユ語で書き続け、釈放後も新聞と本を出してきた]。

この後、この劇に参加した役者ほか、全員の名前のリストが続く。演出を担当したキマニ・ゲシャウを含めて 111 名のフルネームが上がっている。

② ルーツへの復帰：過去との認識論的断絶

先述のとおり、この劇は非常事態宣言 25 周年を記念して 1977 年 10 月 2 日に開演された。それはマウマウ闘争の開始の日でもあった。この日の感慨をグギは以下のように述べている。

「私は、民衆と一体になったと感じた。77 年 6 月から 11 月までの 6 ヶ月間は、私の人生で最も興奮に満ちたもの、私にとっての真の教育の始まりだった。私は自分の言葉を改めて学ぶことになった。集団的作業の創造性と底力を再発見できた」¹³⁾。

「カミリズの村人たちと一緒にってから、私は新しく生まれ変わったと感じた。これによって、長年の植民地教育によって植えつけられた疎外感を私は克服できた」¹⁴⁾。

これが、彼にとっての「過去との認識論的断絶」(an epistemological break with the past)¹⁵⁾を誘発したのだった。演劇への関心はマケレレ大学時代からであったが、70 年代に入ってから的情熱は、以前とはその意味づけがちがってきた。すなわち、それはただちに上演活動と結びつくだけでなく、地方農村のずぶの素人が舞台にのせるのである。

演劇は集団芸術であり、視覚芸術でもあるから、文盲率（当時）80 パーセントに近いケニアにおいては、民衆との結びつきのメディアとしては小説の比ではない。しかも、英語の能力のある者は、全識字者の 10～30 パーセントにすぎない。ここに、ギクユ語劇『したい時に結婚するわ』のもつ特殊な存在価値があることを見逃してはならない。演劇活動に注ぐグギの熱意は、より広く、より深く民衆との接触を求めて映画製作の道を拓いたセネガルの作家センベヌ・ウスマンの例をただちに想起させるものである。

劇中の時間軸は、白人の到来から植民地期へ、ついで独立を求めるマウマウの民族意識の高揚へと上り詰め、ついで大義を裏切られた「独立」を経て、いっそうの正義に基づいた未来社会建設の夢へと繋がる。この一連のプロセスに、ギクユの伝統歌謡、ダンス、儀礼が多く取り入れられている。マウマウ闘争が生み出した数多くの抵抗歌謡、キリスト教の儀礼と讃美歌、民族のことわざもある。全部で 34 の歌があり、うち 10 がマウマウの抵抗歌謡である。なかでも、伝統的なギティイロのオペラは、読み書きの不自由な農婦が記憶の中から口述

したものだった¹⁶⁾。

この劇はミュージカルであり、オペラでもあり、形式と内容は、ビクトリア朝のメロドラマに似ている。じっさい、台本全体の四分の一以上が歌と儀礼で、3時間の上演舞台で最も多くの時間がこれらにあてられている。劇の活力は、歌と踊りにあると言ってよい。

しかし、その目的は、資本主義体制、新植民地体制下での農民と労働者の苦しみを生み出す社会的不正を暴くことである。同時に、キリスト教の偽善、ブルジョア階級の拝金主義、物質崇拜への痛烈な批判がある。これに対して、ギクユの伝統文化、アフリカの伝統儀礼、歌、踊りの美しさが強調されている。古い伝統歌謡は、闘争のなかで新たに生まれたマウマウの抵抗歌謡と融合して、新しい環境で、新たな意味を獲得していく。一方、キリスト教権力機構の偽善、キリスト教会が取り仕切る結婚式の薄っぺらさ、その他の宗教儀礼が非人間的なものとして対照的に表象されている。

全体として、舞台は社会問題を検討する場となっている。独立のための闘い、その闘いの大義、現在の苦境の原因が問われ、搾取と抑圧の社会の仕組みがメロドラマ的なシンプルさで展開する。現代の多国籍資本主義へと移る国際社会を背景に、植民地の搾取から、新植民地の搾取へ、白人入植民による搾取から、国内の買弁層による搾取へと舞台は展開していく。多国籍企業と協力する黒人の買弁層、スノビズムの上流階級の罪が暴かれ、労働者の断固たる抗議、農夫キグンダと労働者ギシャンバの共通の運命の自覚が対置されるのである。

この劇は、土地、財産、森のたたかい、ナショナリズム、工場の労働条件、多国籍企業、階級闘争などハードなテーマ、どちらかと言えば男性的なテーマを扱っている。しかし、出演者の3分の2は女性である。彼女たちは、薪ひろい、水汲みなどの仕事に従事しているが、これらはむしろ副次的で、女性は儀礼的な伝統につながるダンスや歌謡などで圧倒的な役割を担っている。

カミリズ演劇には、ギクユ語を理解しない者も観客にいたが、主には、地元の農民と労働者に向けて書かれ、上演されたもので、内容が彼らにアピールする必要があった。教育を受けておらず、演劇を観たこともないような観衆を満足させる必要もあった。したがって、村人にわかりやすい役柄を登場させている。題名に、誰もが知っているようなポピュラーソングをなぞり、日常的なギクユ語のスピーチリズム、歌、ことわざなどを駆使している。ヒーローと悪役、

金持ちと貧乏人、生産を引き受ける貧者、消費にまわる富裕階層、伝統、歌、踊り、ことわざをよく知っている貧者、キリスト教を信じるかたわら、西欧の半端なガラクタ的知識をふりかざす金持ち、といったマニ教的二元論に似た配役構成である。なお、劇のタイトルからは、キグンダの娘ガゾニの物語であることが予想されるが、作品の結末は、彼女の物語でなく、民衆の政治的覚醒を讃える階級闘争の物語に転じている。

作品のタイトル『したい時に結婚するわ』(*Ngaahika Ndeenda*) は、1975年に地元ケニアでリリースされたギクユ語のポピュラーソング「したい時に割礼するわ」(*Ngarua Ndeenda*) をもっていることは確実である。これは当時最高の人気を誇った歌手ダニエル・カマウ(DKの愛称で親しまれた)¹⁷⁾が歌ったものだ。

③ ギクユ語版と英語版の比較

ギクユ語オリジナルと、1982年に出版された英訳本(*I Will Marry When I Want*, Heinemann Educational Books)を比較してみるのも面白い。

ギクユ語版は、役者や演出家、時には観客に向けた指示が多く見られる。ギクユ語による実際の上演を地元で観る機会に恵まれなかった英語版の読者の多くは、この劇のあらすじ、もしくは地元で上演を禁止されたその理由を知りたかったというのが、おそらく本当であろう。英語版の読者と、元のギクユ語劇の観客は、理解できる言語の相違を超えて、とうぜん社会階層が異なっていたと考えるべきであろう。英語への翻訳は、この事実を配慮していると思われる。

ギクユ語版と英語版の間では、細部で若干の違いも目立つ。ことわざ、箴言、一部の対話、歌、言葉のリズム、これらの英語への等価の翻訳は難しいことはもちろんである。ことわざなどの翻訳は、意味論、統語論、語彙形式の点から不可能と言え、不可能であろう。そこで、文体を無視して、英語では二つ以上の文に分けるなどの方法が取られている。その他、英語版では完全に削除してしまう場合もある。

一例として、ギティイロの歌と踊りでは、ギクユ語版に見られる反復は省略されている。ムシュングワ(Mucung'wa)¹⁸⁾のリズムなども省略されている。その意味で、英訳本は、どちらかと言えば、「観客」でなく、「読者」を意識したものになっている。また、ギクユ語原題 *Ngaahika Ndeenda* からは、女性の結婚が問題になっていることがわかるが、英語タイトル *I Will Marry When I*

Want では、その点は不明である。ギクユ語動詞・hika は、女性が結婚する場合に使われる語形式であるからである。

なお、上演は禁止されたが、ギクユ語版も英語版も、書籍の形では、ケニアで発禁処分を受けることはなかった。

Ⅲ. 演劇活動の波紋：拘禁・釈放・解雇

初の民族語によるコミュニティ演劇の実践は、ケニアの文化史、アフリカ文学の歴史、作家自身の人生にとっても、特筆すべき意味と意義を担ったが、誰にも予想できないような、思いがけない衝撃的な波紋を描くことになった。1977年11月の上演禁止命令は、作者にとっての不吉な運命を予告するものとなった。以下には、グギ・ワ・ジオンゴの政治拘禁、大学追放に至る経緯を詳述しておこう。釈放後は、コミュニティ演劇の第二作への取り組みが続いたが、その顛末には、祖国からの亡命というより過酷な運命が控えていた。コミュニティ演劇の第二作については後述する。

① 拘禁：1977年12月31日

グギ・ワ・ジオンゴの逮捕を知らされたのは、1978年1月4日夜のことであった。東京の友人が電話をかけてきて、その日の *The Japan Times* が掲載している英文記事を読み上げてくれた。以下に全文を訳載しておく。なお、筆者による注を〔 〕として挿入した。

ケニアの小説家逮捕－戯曲作品で尋問中

ケニア・ナイロビ発 (UPI) 警察は、月曜日〔78年1月2日〕、アフリカで最もよく知られる作家のひとり、グギ・ワ・ジオンゴがケニア官憲によって逮捕されている旨発表した。警察発表によれば、ナイロビ大学文学科主任でもあるジオンゴ〔グギと書くべきもの。以下同様〕は、土曜日〔77年12月31日〕早朝、近郊農村リムルの自宅で拘禁処分を受けたという。警察は、彼を尋問中であると発表した。罪状質問には答えなかった。

64年発表の小説『泣くな、わが子よ』で文壇の国際的名声を勝ち得たジオンゴは、地元劇団がキアンブで上演していた最近作の戯曲が上演差し止めになった先月〔77年12月にあたるが、実際は同年11月〕以来政治的論議の中心人物となっていた。

この戯曲『したい時に結婚するわ』は、ケニアで最も人口稠密な部族語であるギクユ語で書かれており、独立に先立つマウマウの動乱期を克明に描いたものである。

上演差し止めの命令をくだした地元役人は、独立以前のこの闘争で、イギリス人と結託したとしてホームガード〔自警団員。植民地政府側に雇われたマウマウ戦士狩りの末端機構〕が〔この戯曲のなかで〕アフリカ人民族主義者たちによって告発されていることに異議を申し立てている。

一方、地元ナイロビではどうだったか。78年1月3日、グギ連行のニュースが各紙のトップ記事として全土に報道された。しかし、その後約10日、彼の所在と生死が不明の状態が続いた。「サンデー・ネーション」*Sunday Nation* 紙（1月8日号）は、第1面トップに「グギ：依然公式発表なし」との見出しで、事件を解説するとともに、妻ニャンブラの証言を載せている。同時に、同紙記者は「あらゆる努力をもってしても、政府関係筋との接触を拒まれている」と述べ、「グギの所在はもちろん、その生死さえも確認できない」と書いている。最有力週刊誌『ウィークリー・レビュー』（78年1月9日号）は、表紙にグギの顔写真を大きく載せて、いち早く「特集号」を組んだ。

ケニア政府が「拘禁」を公式に発表したのは1月12日だった。1月6日付「ケニア官報」が、憲法第83条「治安維持法」（Public Security Act）によって拘禁に処した旨を布告し、国務省常任書記 N. S. クングの署名入りで告示したのである。同国の「治安維持法」は、国家の安全と秩序を脅かす者を「政治犯」として、裁判なしで無期限に拘禁できることを定めていた。

「政治犯」（political prisoner）とはどんな人物のことだろうか。この疑問に対して、「サンデー・ネーション」紙（77年9月18日号）が解答を与えてくれる。この日の第一面トップ記事で「ケニア政治犯に裁判はない」との大見出しで、司法長官 C. ジョンジョ¹⁹⁾（当時は、次期大統領の呼び声が高かった）の談話が載っている。これは、「治安維持法」の廃止と「政治犯」の正式裁判を要求するある国会議員からの提案に対する政府の公式回答である。この談話で、司法長官は「政治犯を裁判にかけろ気はまったくない」こと、「政治犯は、ケニヤッタ大統領によってつくられた平和と政治的安定を覆えすか、もしくは掘りくずそうとするものであり」「大多数の国民の利益を守り、平和と安定を保つために治安維持法を廃止することは出来ない」と述べている。彼は、当時拘禁中の4人の政治犯（実際には、何名か知らされていない）J. M. セロニー、M. シクク、W. シジェヨ、G. アニョナーすべて元国会議員²⁰⁾が「手厚くもてなされている」と付け加えることを忘れなかった。

さて、話を戻すと、「タイムズ」*The Times* 紙（1月13日号）、「デイリー・ネーション」*Daily Nation* 紙（1月13日号）などがグギの拘禁を報じたが、「ナイロビ・タイムズ」*The Nairobi Times* 紙（1月15日号）によると、この日までに、タンザニアの作家、出版社、およびダルエスサラーム大学の学生・教員約300名が連名でケニア政府に釈放をアピールしており、ヨーロッパ諸国、アメリカ合衆国からもどのような抗議文が届いた。この日の同紙社説は、拘禁の理由を明らかにすべきだと政府に要求している。しかし、逮捕の理由は「彼の創作活動にあるのではなく、その活動〔民族語劇の上演運動を指しているものと思われる〕にあり、その証拠に、作品を発禁処分していない。これはケニアの国家安全の問題だ」との同紙記者に対するある大臣の談話を匿名で掲げた。

このようななかで、1月11日に計画されたナイロビ大学の四つのキャンパスでの授業ボイコット計画も、前日にビラがまかされただけで、しかも医学生の間から反対の動きが出るなど、ナイロビ警察の徹夜の警戒によって実現しなかった。しかし、国際アムネスティが78年1月中に「良心の囚人」に指定したほか、日本アジア・アフリカ作家会議が、ケニヤッタ大統領他に抗議電報を、妻ニャンブラに激励の電報を打った²¹⁾。

このほか、西ヨーロッパ諸国、アメリカ、タンザニアなどからも大統領に抗議電報が打たれた。ロンドンでは、1978年1月中に、グギを守る委員会（Ngũgĩ Defence Committee）が結成され、パン・アフリカ作家・ジャーナリスト協会とともに、ケニア・ハイコミッション前で抗議のピケをはった。マルタでは、コモンウェルス文学言語学会が声明を決議し、アフリカ、ヨーロッパ、アジア、北アメリカでも抗議声明が続いた。その後、サセックス大学アフリカ人学生演劇グループは、キャンペーンの一環として『デダン・キマジの裁判』を上演して英国内を移動することを決めた。また、同年7月には、日本ペンクラブが韓国の獄中詩人金芝河とともに、グギを客員会員に決めた。7月に「第2回オラウダー・エキアノ²²⁾ 記念講演」を予定していたイバダン（ナイジェリア）では、グギ招聘の予定が変更され、急遽「民族文化の基盤としての民族諸言語」のテーマで討論が実施された。11月には、グギを守る委員会がロンドン（コベント・ガーデン）のアフリカセンターでワークショップを開催した。

さて、ここに至るまでに、キアンプの地方長官は、1977年11月16日、この戯曲の上演禁止を命じていた。彼によれば、先の新聞記事にある通り、この戯曲は「過去の敵対関係をむしかえし、階級闘争を呼びかけるもので、国家の統一を脅かす」²³⁾ というのが理由だった。後日、警察は、戯曲の内容に疑問をい

だいた観客の一人からの投書が逮捕の契機になったと発表しているが、真偽のほどはわからない。

逮捕・連行された 77 年 12 月 31 日のありさまは、以下のようである。

深更 0 時 15 分頃、リムルに近いティゴニ警察署から 2 台のパトカーと数台の車に分乗した警官が、カミリズ村ビビリオニ地区ギトゴオジのグギの自宅へ突然やって来て、家人をたたき起こした。銃を装備した 11 人の制服警官が家宅捜索のために屋内に侵入したが、戸外でも（私服を含めて）相当数の警官が警備にあたっていた。警官たちは、2 時間ほど書斎を捜索した後、約 100 冊の蔵書を没収したという。これに立ち合った妻ニャンブラ（二人は 1961 年に結婚し、5 人の子供がいた。拘禁中の 78 年 5 月に、次女で末娘のジョキが誕生。計、男子 4 人、女子 2 人）の談話によると、マルクス、レーニン、毛沢東関係の文献（これらは禁書に指定されているわけではない）が多く含まれていたという。他に、「したい時に結婚するわ」の台本 20~30 冊が含まれていた。

この時、グギは、没収される蔵書のタイトルをメモさせてほしいと申し入れたが、断われている。警察は「著作ではなく、所蔵している本を検閲する必要がある」と説明し、その後、出頭を要請した。この時、「私は逮捕されるのか」と尋ねると、罪状説明はなく、「いや、ちがう、普通の尋問だ。今晚中に家へ帰れるはずだ」との返答だった。これを聞いて、グギは「**‘Do your duty!’** だが、どこへ私を連れていくのか、妻に教えてやってほしい」と要求した。警察は「尋問の必要から、会いたいと望んでいる人物が署に来ている。キアンプ警察署まで行くが、心配することはない。明日になれば、いやもっと早く、帰ってくることもあるだろう」と言い残し、午前 2 時半頃にグギを連行して去った。

早朝 8 時頃、妻ニャンブラは、ナイロビ郊外カワングアレ（Kawangware）に住むグギの長兄ムアングや身内の者に付き添われて、キアンプ警察署を訪れた。「グギの身辺は安全であるが、正午までは会うことが出来ない」²⁴⁾と告げられた。

正午に再び署を訪ねると、はじめの係官の姿は見え、別の人物が現れた。「会うことは出来ない。1 週間ほど経てば会えるだろう」と語ったという。以後 12 日間、グギの行方は不明となり、生死を確かめる手だてがなくなった。

さて、後日に明らかになった事実から、当日の様子を再現してみよう。

自宅から連れ出されたグギを乗せて、パトカーは近くのティゴニ警察署で小休止し、ついでキアンブ警察署へ到着した。2~3 分すると、ムブルと言う名の警視が現れ、「逮捕」だとグギに知らせた。ついで「拘禁」が決まっているとも告げた。やがて、別の車に乗せられて、ナイロビのキリマニ警察署へ運ばれ、そこで独房に入れられた²⁵⁾。

その独房で、まず眠ろうとしたという。だが、眠れるはずがなかった。

「これは、国家による拉致ではないか。妻のニャンブラはお金を持っていない。彼女は妊娠している。子供たちはどうなるのか」²⁶⁾。

31 日の陽が昇った。午前 10 時頃、ムヒンディ・ムネネと名乗る担当役人が来て、77 年 12 月 29 日付の「拘禁令」を渡され、12 月 31 日付でその紙片への署名を求められた。2~3 分後、手錠をかけられ、車の後部座席に乗せられた。左右にライフル銃と機関銃を持った二人の警官が寄り添った。車はナイロビの都心を通り抜け、カミティ最高治安刑務所へ到着した。そこは、かつてマウマウのリーダー、デダン・キマジが収容され、処刑された場所だった。ここで刑務所の役人に引き渡され、沈黙のうちに第 16 房に入れられた。精神病棟と死刑囚収容棟に挟まれた場所だった。

グギはもう一度「拘禁令」を読み直した。

「この者は、ケニアの善良なる政府とその諸制度にとって危険な活動と言説に関与した。この者の意図を阻止し、公共の治安の維持のために、この者の拘禁を必要とした」²⁷⁾。

読みながら、怒りが込み上げてきたと言う。

「ケニアの善良なる政府とその諸制度にとって危険な活動と言説に関与した」とはどういう意味なのか。どの活動、どの言説を指しているのか。私に裁判はなかった。『拘禁令』には『その者の理解できる言葉で』拘禁の理由を説明するとある。私は、ここにある文章の意味を理解できない。『この者の意図を阻止し』とある。どんな意図なのか。私の、どんな意図が、どう解釈されているのか。

私は、自分の逮捕と拘禁の理由を推測するほかない。どうやら『したい時に結婚するわ』の上演活動と関係しているのだろう。上演禁止の処分は、誰か有力者の圧力と関係しているであろう。私の逮捕は『正義と民主主義を標榜する政府の完全な茶番

劇』だ。逮捕の理由を公然と発表できないのは、なぜか。あの戯曲が『ケニアの社会的現実を的確に写している』がゆえに、政府は公開の裁判をしたくないのだ²⁸⁾。

「(社会的現実を的確に写し出す) 鏡を掲げた作家を逮捕し、拘禁しても成功するはずはない。中世ヨーロッパの支配階級がコペルニクスやガリレオを投獄しても、自然の真理を否定できなかったのと同じことだ」²⁹⁾。

「今、こうして刑務所で苦しんでいるのは、国内の観衆 (national audience) に向けて、民族の言語 (national language) で、民族のための演劇 (national theatre) を集団的に作り出そうとする仕事に私がかかわったからだ。私は後悔しない」³⁰⁾。

「ケニアの、アフリカの、第三世界の作家は、新植民地主義と帝国主義の文化に対抗して、真実の声を張り上げることが運命づけられている。その代価として、我々は、投獄、亡命、そして死さえをも覚悟しなければならない現代のカッサンドラ (注、ホメロスの詩に現れるトロイの女予言者。トロイの滅亡を予言したが信じられなかった) なのだ」。「自白することも、後悔することも、何もない」。「何を悔い改めよと言うのか。慈悲を求めることもない。ケニアの一市民として、民主的な正義を求めるだけだ」³¹⁾。

② 拘禁の理由

逮捕・拘禁については、公式の罪状説明も、裁判もなかったから、その理由は、現在においても、あくまでも推測の域を出ない。彼が植民地時代の旧い敵対関係をむし返し、ありもしない階級対立を宣伝したなど、さまざまな非難や憶測が流布した。だが、アメリカやイギリスを含む世界の世論の一致した見方では、小説第4作『血の花弁』とギクユ語劇「したい時に結婚するわ」の上演活動が原因だとされている。

これら両作品は、ほぼ類似した政治的社会的テーマを扱っており、小説と戯曲の相違はあっても、イデオロギー的な観点から見れば、同じジャンルに分類することも許されるであろう。しかし、英語で書かれ、本の形で出版された前者と、民族語のギクユ語によって表現された演劇とでは、コミュニケーションの広さと深みにおいて大きな隔たりがある。前者は、海外は言うまでもないが、ケニア国内の一握りの読者層 (英語を読めるエリート層) に訴えるものであり、後者は、英語はもちろんのこと、母語の読み書きさえ不自由な者にも伝達可能なメディアである。

演劇は、人々と協同して、社会的に何らかの意志を創成していく芸術形式である。ケニアでは英語でならどんなに痛烈に政府を批判しても許されるという（『ニューズ・ウィーク』誌（*Newsweek*, 1978年1月22日号）³²⁾。これは明らかに穿った見方であろうし、政府がグギの思想を裁いたものである以上、間違った認識ですらある。にもかかわらず、民衆のなかへ入り、ギクユ語による文化運動を起こし、村人の意識の高揚をはかりかけたその時点で、拘禁に踏み切ったことを考えると、この認識にも一面の真実があるかもしれない。グギの現状認識は『血の花弁』に十分に盛り込まれている。政府がこの英語小説を名指しで批判できないのは、対外的な配慮から、「民主国家」のイメージに傷がつくことを恐れたためであると言わなければならない。

1977年は、生涯のなかでも輝かしい評判を勝ち得るとともに、予測すらしなかった奈落の底に突き落とされる年となった。ナイロビ大学の同僚ミシェレ・ギザエ・ムゴとの合作戯曲『デダン・キマジの裁判』は、前年9月から10月にかけて自由移動劇団がケニア国立劇場で上演し、大成功をおさめていたし、77年1月ラゴスでの黒人文化芸術祭でもケニア側からの公式参加作品として絶大な評判を得ていた。7月の『血の花弁』の発表がこれに続き、もじどおり、グギは「渦中の人」となり、「再浮上」どころか、アフリカ人作家の最前線に立つこととなった。しかし、『したい時に結婚するわ』の上演禁止令が出た11月、二人の役人が自宅に台本を探しにやってきた12月半ば（この時、グギは留守であり、台本は見つからなかった）から身边に暗い影がさすこととなる。演劇運動の挫折により約6万シリング（約180万円）の負債を背負い込むことになったばかりか、逮捕と拘禁がその後に続いた。

③ 刑務所からの手紙

1981年発表の『拘禁—作家の獄中記』（*Detained : A Writer's Prison Diary*, Heinemann Educational Books）は、獄中での経験と思考をまとめた記録である。獄中で取り交わした文書や手紙のうち5通が収録されている³³⁾。妻ニャンブラへの手紙1通（78年11月13日付）、刑務所内保安役人（Security Officer）宛の文書2通（78年6月15日付および8月21日付）、再審理法廷裁判長（Chairman, Detainee's Review Tribunal）宛の文書2通（78年7月23日付および6月23日付）である。このうちから2通の内容を簡単に見ておこう。

妻ニャンブラへの手紙³⁴⁾は、所内の検閲によって送付することが出来なかったもので、77年9月19日付の妻からの手紙への返信である。

まず、同封されていた 5 月 15 日に生まれた末娘ジョキ (Njoki, 村人が、ワムインギ Wamūingi という愛称を与えたという。「村人みんなの娘」の意である) の写真への感謝のことばがある。「元気そうで、美しい! 名前の通り、ケニアの人々に好かれ、献身できるようになってほしい。子供たちの全員に私の愛を伝えてほしい。誰もが、自分のため、この美しい母なる国のために頑張ってもらいたい」と書かれている。

ついで、1 月以来、歯痛に苦しんでいるが、まだ治療の機会がないという。歯科医に行くには、手錠をかけると言われ、これを拒否したからである。裁判にかけられたことはなく、自分は犯罪者ではないからだ。それならば歯科医を刑務所に呼んでほしいと要求したが、返答もなく、治療もないという。7 月には、家族が来ていると告げられたが、面会したければ鎖で繋ぐことが条件だと言われ、これを拒否したため、面会は出来なかった。

新聞、ラジオはなく、世間で何が起きているかわからないと言う。「永遠の沈黙の墓場」に住んでいるようなもので、「歴史が 77 年 12 月 30 日深夜に停止した」と書いている。再審理法廷には 2 回出たが、「何か言い分はあるか」との問いが発せられるのみで、3 分半程度のおざなりなものである。しかし、「昇る朝日を見ないような、長く暗い夜はない」(Gūtīrī ūtukū ūtakīa) というギクユの箴言を励ましに、「必ず、民主主義がケニアにやって来る」ことを信じていると書いている。

もう一つ、7 月 23 日付の再審理法廷裁判長への手紙³⁵⁾は、以下の内容を含んでいる。

再審理法廷への 1 回目の出廷は、78 年 1 月 13 日だった。罪状説明は行われず、恣意的な逮捕と拘禁に抗議する。カミリズでの演劇活動は、住宅・社会サービス省 (Ministry of Housing and Social Services) の認可を得て実施した文化活動だ。24 時間のうち 23 時間の獄窓に繋がれ、食事は粗末で、ラジオ、新聞はない。獄中閉じ込めりは、23 時間から 13 時間に減ったが、裁判は未だ行われていない。一時期、新聞とラジオに接し得たが、これも突然取り下げられた。歯科医に連れて行かないのはなぜか。家族に会わせないのはなぜか。逮捕拘禁によって、民主的人間的権利が蹂躪されていることを抗議する。

なお、獄中では、初のギクユ語小説『十字架の上の悪魔』(*Caिताani Mūtharabainī*) をほぼ書き上げることになるが、これについては、第 4 部で述べる。

④ 釈放 : 1978 年 12 月 12 日

1978 年 8 月 22 日、初代大統領ジョモ・ケニヤッタが療養先のモンバサで死去した。彼の正確な年齢は不詳だが、一般には 1889 年生まれとされ、当時の世界では最高齢の国家元首の一人だった。この結果、副大統領のダニエル・アラップ・モイが規定に従って大統領に昇格し、約 4 ヶ月後の同年 12 月 12 日、独立 15 周年記念日に恩赦が実施され、グギを含む 26 名の政治犯全員が釈放された。他の 25 名は全員が政治家だった。

釈放のニュースを聞いて、筆者は「アフリカの金芝河ーグギ：ケニアで体制批判続ける人道主義作家」と題する以下の文章をある新聞に寄稿した³⁶⁾。

昨年（1978）末、韓国政府は金大中・元大統領候補の釈放、詩人金芝河の減刑を含む大量の政治犯の赦免を発表した。私は、朴政権のもと 5,000 人を越える収監の事実には驚き、減刑とはいえ 20 年の刑を宣告された金芝河が、獄中で「苦行」を続ける孤独な姿を思いうかべて新たな怒りを覚える。

アフリカ文学に関心をもつ私にとって、金芝河の名はケニアの作家グギ・ワ・ジオンゴとのかたき結びつく。彼もまた 77 年末に、治安維持法に触れる政治犯として逮捕・拘禁された。一時生死不明とさえ伝えられたが、約 1 年後の昨年 12 月 12 日（独立 15 周年記念日）に他の 25 人の政治犯とともに釈放された。同国の政治犯としては前例のない早さだった。

「アフリカのトルストイ」といわれる人道主義者グギは「アフリカの金芝河」であるといえよう。透徹した歴史認識と鋭い自己省察を通して時代の危機を撃つグギは現代アフリカ最高の作家だ。

グギも金芝河も、闘うアジア・アフリカ人作家の最高の栄誉ともいえるべきロータス賞を受け、ともに日本ペンクラブの客員会員である。

グギは、独立以後ケニアの政治・社会問題を痛烈に描く長編『血の花弁』（77 年 7 月刊）および村人の識字教育と演劇運動を指導する戯曲「したい時に結婚するわ」（同年 10 月初演）の体制批判的な内容のために、逮捕されたのだった。

グギを金芝河と結びつけるものは、この似かよった境遇のためだけではない。グギはここ数年の韓国の状況に深い関心を持ち続けてきた、おそらく唯一のアフリカ人作家だ。76 年夏、東京で開催された韓国問題緊急国際集会（小田実らが主催）に出席したグギは、韓国の民主化闘争を第三世界の闘いに位置づけ、拷問の危機に立つ韓国芸術家の立場こそ第三世界芸術を象徴する特異な状況にほかならず、金芝河の声は新植民地主義の支配下にあるすべての民

衆を勇気づけていると語った。後日、彼はこの会議の様様をケニアの週刊誌に寄稿し、米日資本の勢力下にある韓国が第三世界の最たるものだと明言している。

訪日体験で「目を開いた」グギは、77年9月学期から勤務先のナイロビ大学文学科で「金芝河」を取りあげた。このころナイロビに滞在し、グギと交遊を持った私は、日本の友人から大量の関係文献を彼のもとへ送ってもらった。グギは、金芝河や小林多喜二に魅了され、「ここに描かれている問題は私自身の問題だ。民衆の生きる姿を描く作品をもっと知りたい」との感想を何度ももらしていた。第三世界全体にかかわる「民衆の文学」を書くことがグギの念願であり、じっさい『血の花弁』と「したい時に結婚するわ」は、この抱負の実現を図る野心作だった。両作品とも現体制への容赦のない批判を必然的にともなった。

前大統領ケニヤッタの死（8月22日）が釈放を早めた。旧体制のもと、副大統領としての外交手腕を買われていたモイ新大統領は、就任後100日までに欧州各国を訪問し、さらに、文化大革命以後閉鎖された北京の大使館を再開し、カナダ、日本への大使館新設を決めた。国内的には、民主主義と議会制を強調し、とかくのうわさのあった政府高官や警察官を更迭し、腐敗根絶キャンペーンに乗り出した。役人の綱紀肅正を説く施政演説（11月21日）や、文盲退治、失業救済、教育設備改善などを約束する独立記念演説には、政権交代期の動揺（新大統領を含む高官の暗殺計画など）を克服した自信がうかがわれる。

釈放の翌々日、やつれた姿を大学のキャンパスに現したグギは、たちまち学生から熱狂的な歓迎を受けた。胴上げを受けた後、彼を乗せた車が市街へくり出すと、大勢の学生や市民が歓声をあげて後を追ったという。

「政治犯拘禁は恐ろしい制度だ。それは廃止されるべきだ。ケニアが外国の資本と文化の攻勢下に放置されてはならないという私の信念にいささかの变化もない。農民と労働者は私にとっての永遠の教師なのだ」とグギは語った。

彼の目がこの時見ていたものは、かわりに外国商人がますます増えた首都ナイロビの現実であり、外国の借り物文化の陰で健全な発展を圧殺されている民族語・民族文化の実態だった。他の25人の政治犯は、新政権に釈放を感謝し、あるいは忠誠を誓ったと伝えられる。だが、グギは今年に入ってからただ一人、敢然として政府批判の火ぶたを切った。

「この1年間に、ケニアに根本的な変化があったとは思われない」と述べ、粗末な食事と医療、不衛生な環境のもとで、持続的な肉体的・精神的拷問によって植物人間をつくり出すことをねらう政治犯拘禁の実態を暴露した。また、理由のない拘禁によって、市民としての民主的権利を凌辱されたことに激しく抗議する。

そんな彼には、外国から口がかかっている好条件の仕事を受ける気は起こらないらしい。「私は、小さな村で、農民や労働者とともに真の民族文化を構築する仕事に従事しているほうがずっと楽しい」と言う。「ギクユ語劇上演活動こそは、過去 17 年の作家生活で、自分が歩むべきであった道程をはっきりと指し示してくれた」との強い信念があるからである。この言葉には、農民の子として土に育ち、民衆と哀歓をともにしてきた彼の思想と行動の原点が集約されている。

だが、彼に、どれほどの自由が保証されているのだろうか。新大統領は「平和と秩序と安定を脅かす者は再び収監する」と断言しているし、悪名高い治安維持法を廃止するとも言っていない（以下省略）。

釈放後、ギクユ語劇の再上演を求める努力を重ねたが、79 年 6 月に再上演申請の却下が決まった。この間、地元の新聞・雑誌の投書欄にはグギの身辺をめぐる文章が連日のように掲載された。曰く、「グギは危険なマルキスト」、「偏狭な部族主義者」である。「その文学的資質は処女作以後、凋落の一途を辿り」、今や「墮ちた偶像」だときめつけるものさえ見られた。

「デイリー・ネーション」紙を舞台に、ほぼ連日 2 ヶ月にわたって展開された読者論争³⁷⁾は、これらを「文学に無知で、素朴な幼稚園の批評家たちのガラクタの文章」だと断をくだし、無批判に掲載を許してきた編集者に警告を発する、著名な文芸・社会評論家クリス・ワンジャラ（ナイロビ大学教授）³⁸⁾の投書が契機となって、9 月 18 日に編集者側の一方的終結宣言を誘うこととなった。

⑤ 大学解雇

拘禁中は、グギの全著作は学校教科書の公認課題図書リストから抹消された。また、釈放後半年ほどの間、グギ自身を含めて家族への嫌がらせ、投石などが頻発し、なかには「殺すぞ」と言った強迫までが相次いだという³⁹⁾。79 年 3 月には、グギ・ワ・ミリエと一緒に「営業時間を超えて深夜飲酒」をしたとの容疑で一時逮捕され、鞭打ち刑に処されたともいう⁴⁰⁾。しかし、この件については、同年 4 月の裁判で無実が証明された。

ところで、全政治犯の釈放は、「無条件」に実施された。誰もが完全な釈放だったのである。だが、釈放された者の中には、元の職場に復帰できない者がいた。グギはその一人だった。

拘禁以前、彼はナイロビ大学文学科の（常勤）准教授だった。「政治拘禁」がこの職務を剥奪するとは、「雇用契約」のどの条項にも明記されていなかった。

釈放後、グギは復職に向けて敏速に対応した⁴¹⁾。まず、副学長カランジャ宛、79年1月30日付で大学側の立場と対応を問う手紙を送っている。同じ文面が、文学部長と文学科長へも送られた。しかし、何の返答もなかった。（周知の通り、アフリカ諸国の多くの大学では、時の大統領が学長を兼ねている）。次に、5月31日付で大学理事会理事長宛に同様の手紙を出したが、これにも対応がなかった。ところが、6月13日、大学事務本部から自宅へ電話があり、副学長ムンガイに会うことになった。

同副学長は友好的で、復職を考慮しているとの説明があった。同時に、これは大学を超えた問題であるとの説明も行われた。釈放以前に、「国家の法」(Act of State)により、グギと大学の従来との関係は自動的に消滅しているとの説明を政府から受けていること、大学はこの問題を預かる権限がないこと、「国家の法」は至上であること、大学としてはポストの再募集が出来るので、応募は可能であること、その場合には、クリアランスが必要であるとの説明が行われた。

79年7月9日付のナイロビ大学教員組合委員長宛の手紙⁴²⁾では、復職について大学当局と折衝中であること、それまでの経緯を逐次説明し、自分は辞職していないし、公式に解雇されてもいないこと、大学から何の応答もないことなどを記している。さらに、以下のような意見を述べている。

「自分は大学を辞職していないし、解雇されてもいない。釈放は『無条件』だと聞かされている。治安維持法と復職問題がどう関係しているのかは不明である。クリアランスは何のため、誰からクリアランスを求めればよいのかが不明である。現在でも、拘禁を不当だと考えている。自分が解雇されたのか、そうでないのかを文書で知りたい。解雇ならば、その理由を知りたい。解雇されていないのなら、大学の教壇に戻りたい」⁴³⁾。（この手紙は、副学長、大学事務本部へも送られた）。

7月中頃には、ナイロビ大学の600名以上の教授陣が連名でグギの大学復帰を大統領に直訴した。地元の各新聞は第一面トップでこれを報じ、事態の解決は時間の問題かと予測されたが、その後の経過は、大統領を学長にあおぐこの大学の自治、学問の自由の基盤の脆さを露呈し、官僚支配の強権を見せつけることとなった。

79 年 7 月 31 日には、国会で教育副大臣の答弁があった。以下は、なぜ大学への復職がないのかとの質問に対するやり取りの一部である⁴⁴⁾。

答弁：グギ教授と大学の間、再雇用の条件について誤解がある。大学は当人との契約が切れた、当人は期末手当を受け取っている、新人として再応募の必要があると考えている。当人は、以前の条件で復職できるものと考えている。

質問：グギ教授は「良心の囚人」である。裁判もなかった。犯罪者ではない。

答弁：公務員は、選挙に立候補して落選した場合、再立候補が必要だが、これと同じケースだ。

質問：大学当局は復職させたいと言っている。しかし許可が出ないと言っている。真相はどうか。

答弁：グギ教授と大学の間で不一致があると言っているのではない。誤解があると言っているのだ。

質問：大学当局は復職を望んでいると言う。誰かがそれを許可しないと言うが、誰なのか。

答弁：私は、自分が言ったことだけに責任を持つ。雇用条件について、両者の間に誤解があるということだ。ほかの点については大学が何を言っているが、私に関係がない。

質問：グギ教授の雇用契約はいつ切れたのか。いつ給料が支払われたのか。

答弁：これに答えるには時間が欲しい。手当が支払われたことは知っている。いつ雇用契約が切れたかは、調べさせてほしい。

質問：ナイロビ大学は教育省の管轄下にある。国会でこの大学のことを答えるのは教育省の役目だ。グギ教授のような世界的著名人が海外に亡命しないように手段を講じる手立てはないのか。

答弁：グギ教授には我が国の大学で教えてほしいと、私も思っている。しかし、コインには両面があり、調停が必要だ。

ナイロビ大学事務本部から公式の手紙が届いたのは 79 年 8 月 3 日付だった。これは、同年 1 月 30 日付の大学宛の手紙に対する返答であり、5 月 30 日付の手紙への返答でもあった。内容は、先の副学長ムンガイの説明を繰り返すもので、「拘禁と同時に、『国家の法』により、大学との雇用契約は切れている」と言う。つまり、78 年 1 月 2 日付の解雇であると言う。したがって、「拘禁の日までの手当を支払うべきであったが、78 年 2 月 2 日開催の理事会で 6 月 30 日までの期末手当を支払うことが決まった。あなたの妻がそれを受け取った。大学は、文学部を含めて、新規雇用のポストがあるから、これに応募されたい」という内容だった⁴⁵⁾。

これに対して、79 年 8 月 18 日付で、グギは大学事務本部宛へ手紙を送った。以下はその要旨である。この手紙は、理事会理事長、副学長、教員組合委員長へも送られた。

「問い合わせしてから約 8 ヶ月後の返事で、自分が解雇されていることを知った。なぜ、こんなに遅れたのか。拘置中は、私との接触が出来なかったというが……。期末手当なるものも初めて知った。『国家の法』とは何か。大学と私との双方の間の契約を破棄させるものは何なのか。期末手当なるものは解雇の印だったのか。大学側の一方的、恣意的、非合法的措置に断固抗議する。契約違反であるばかりか、抑圧的である」⁴⁶⁾。

8 月 20 日、グギは記者会見し、「国家の法」〔具体的にどの法令を指すのかは明らかでない〕によって、拘禁と同時に首切りが決定しているとの大学当局からの通達（8 月 3 日付）を受けていることを公表し、この問題をめぐる政府と大学の欺瞞、ジャーナリズムの不鮮明な論調を批判した。以下はその要旨である。

「大学が秘密の、恣意的な解雇を認めた。大学は、これまで、私と連絡を取ることをあくまで避けてきた。長く返答がなかった。『国家の法』によって私は拘禁されたのであり、その時点で大学との雇用契約は解消されたという。『国家の法』とは何か。教育副大臣は『契約期間切れ』と説明したが、これは嘘で、私は常勤、年金資格のあるスタッフで、『契約期間』などは存在しない。大学は、権威当局の判断によらず、78 年 1 月 2 日付で私を解雇したと言う。退職金を支払ったと言う。このことは大学が一方的に解雇したことを証明するものである。復職にあたって大学が提示した新条件を私が拒否したとも言う。しかし、そのような文書を受け取ったことはない。犯罪行為によってのみ、解雇はありうることが明記されている。私に裁判はなく、罪状も不明である。大学と教育省は、真実を国民に説明する責任がある」⁴⁷⁾。

大学復帰問題の成り行きが注目されたその頃、筆者は約 40 日間、ケニアに滞在していた。この間、リムルのグギの自宅にも何度か、断続的に泊めてもらうことがあった。帰国後、その頃のグギの身边をめぐる情勢について、次のような一文をある新聞に寄稿した⁴⁸⁾。

「仕事もなく、ごらんの通り暇をもてあましていく。何時だって遊びにきてくれ給え」。ケニアの作家グギ・ワ・ジオンゴの明晰な口調、深い安堵をあたえる人なつこい笑顔を見ていると、1 年間の獄中体験がまるで嘘のように思われた。

1979年7月、2年ぶりにリムルを訪ねた私は、以後40日間、何度かの宿泊を含めて、グギとその家族との友情を温めることが出来た。この間、寄宿学校に籍を置く年上の子供たちが帰省して、家族全員が久しぶりの賑わいを取り戻していた。拘禁中に生まれた末娘と無心に戯れているグギは、まるでその期間の空白を埋めるように陽気にふるまい、「日本の作家は偉くて気難しいそうだが、アフリカの作家はそんなことはないんだ。君、子守唄をテープに入れたりしてほしいでくれ。私は歌手じゃないんだから」などと冗談じみた注文を出すのだった。

一家の生活はかなりつましいものだった。度重なる訪問を「迷惑だなどと心配する方がおかしいのよ」と夫人のニャンブラが愛想よく言ってくれるのだが、それでも私にだけ手の込んだ料理が出されるたびに、居候めいた生活を心の内で詫びなければならなかった。

グギの家では電灯がともらないから、陽が落ちて暗闇と冷気がにわかにおし寄せてくる頃には暖炉に火がたかれた。そんなある夜、三匹の飼犬が激しく吠え騒いで目を醒まされることがあった。しばらく暗闇の奥をじっと凝視していると、なぜか、2年前の年末の夜、グギが秘密警察に強制連行されていく光景が、目撃していたわけでもないのに眼前に浮かび上がり、とうとう私は朝方まで眠れなかった。グギはすでに乗用車を売り払っていたし、ニャンブラは夜も明けぬうちからナイロビの市場へ卵や野菜を売りに出かけることがよくあった。

釈放後のグギは、ナイロビ大学での以前の地位の回復に努力し、それが民主国家の一市民としての当然の権利であると信じてきた。「政府は今も私に敵対しているんだ。しかし、民衆が私を支持してくれている。それに、作家の逮捕がどれ程の国際的反響をよび起こすものか、政府は思い知らされたことだろう」。この言葉には、世界的名声を確立した作家の自負と同時に、不屈の抵抗精神、民衆に寄せる絶対信頼が読み取れる。

ところで、彼の大学復帰の可能性は絶望的だ。ナイロビ大学の600名以上の教授陣が名を連ねてグギの大学復帰を大統領に直訴した7月中頃、地元の各新聞は第一面トップでこれを報じ、事態の解決は時間の問題かと予測された。

その後の経過は、大統領を学長にあおぐこの大学の自治、学問の自由の基礎の脆さを露呈し、官僚支配の強権を見せつけることになった。8月20日、グギは記者会見し、「国家の法」[具体的にどの法令を指すのかは明らかでない]によって、拘禁と同時に首切りが決定しているとの大学当局からの通達(8月3日付)を受けていることを公表し、

この問題をめぐる政府と大学の欺瞞、ジャーナリズムの不鮮明な論調を批判したのであった。

この夜、酩酊して帰宅したグギは、私を誘い出してリムルのバーを深夜まで飲み歩いた。グギの国外亡命を懸念する投書がすでに新聞に出ていた。「アメリカやイギリスへ渡ることはやさしい。しかし、私はリムルを離れない。亡命は私の文学を自滅させるだけだ」。彼がビールを呑みながら、牢獄で絶えず口ずさんだというギクユ語の讃美歌の一節「苦しみの時に眼を逸らすな、涙の時に顔を覆うな」を何度も大声でうたっていたのが印象的だった。

村人を対象とする識字教室は依然と続いていたが、ギクユ語劇「したい時に結婚するわ」の再上演申請はこの6月に正式に却下され、一時逮捕されていた共作者のグギ・ワ・ミリエも大学の身分を剥奪されたと言う。なお、刊行が遅れていた長編第五作『十字架の上の悪魔』はすでに書き上げられており、私はその驚嘆すべき手書き原稿とタイプ原稿を見せてもらったが、約束により出版されるまでは一切の論評も差し控えることにした。

この夏、グギは民族文化の現状に関する長文の評論をイギリスの新聞に寄稿したほか、釈放後はじめての講演を引き受けた。7月17日、200名近い聴衆を集めてナイロビのプレスクラブで行われたこの講演で、彼は言語と民族文学について語り、これまで英語やフランス語その他の外国語で書かれてきたアフリカ人作家の作品（彼自身のものを含めて）はアフロ・サクソン文学ないしアフロ・ヨーロッパ文学であると概念規定し、その名に値する真のアフリカ文学はアフリカの民族言語で表現されなければならないことを主張した。

この種の意見は、1963年、アフリカ文学の高揚期にナイジェリアの作家オビ・ワリがすでに提起していたが、E. ムパシェーレ、W. ショインカ、C. アチェベなど高名な作家たちからの徹底的な批判を誘発し、その後は完全に無視ないしは冷視され続けてきたものである。「アフリカ人作家が英語やフランス語を無批判に採用した結果、その文学はヨーロッパ文学の単なる支流に過ぎないものとなり、本来のアフリカの文化と文学の発展の機会は閉ざされてしまった。この種の文学には不毛と非独創性と欲求不満の末路しかない」とのオビ・ワリの警告をグギが無条件に拾い上げているわけではないが、ほぼ同様の結論を導いて、今こそアフリカ人作家はこの挑戦に応えるべきであると強調したのであった。

オコト・ビテックやマジシ・クネーネなど、民族語で書く高名な小説家・詩人が何

人かはいるが、グギのこの主張は既成の「アフリカ人作家」の間で、ここ暫くは少数意見として冷遇されざるを得ないと私は考える。「言語の選択は作家の自由の問題であり、しかもアフリカの民族語は、文学表現の道具としては成熟に達していない。アフリカ人作家が外国語を選択したのは賢明な判断であり、これらの外国語こそがアフリカの民族主義を育てたのだ。それに、アフリカ人作家は、宗主国の言語とは異質なアフリカ英語、アフリカ・フランス語を創造している」といった意見は、今日までの「アフリカ文学」を支えてきた圧倒的多数の作家が抱いている強い信念でもある。

だが、文学の性格と内容が作家と読者との特殊な関係のなかで成立するものであることも見逃してはならないだろう。たとえば、W. ショインカの戯曲『森の舞踏』を読み得る英語能力を持つナイジェリア人は全人口の 1 パーセント以下であったという事実はどう解釈すればよいのか。グギは「言語の選択は必然的に作家の想像力を規定し、文学の内容に制限をくわえる。アフリカ人作家の想像力とイメージは、アフリカ人の歴史意識の結晶であるそれぞれの民族語を通じて形をとるのだ」と断言している。この主張の論理的帰結はおのずと明らかであろう。ある夜、グギは車を走らせながら隣席の私に言い切った―「私は今後絶対に英語では小説を書かない」。

グギのギクユ語による文学活動がケニアの民族的・言語的統一を乱し、部族主義を煽るのではないかとの批判が予測されるが、これは彼の真意を全く理解しないものである。公用語である英語とスワヒリ語による言語生活の充実は、逆説的ではあるが、各民族語の豊かな発展との相乗作用によって最も強力な保障を得ることになるのだ。ちなみに、戯曲『したい時に結婚するわ』には作者の全く新しい想像力の世界が開示されている。私は、アフリカの重要な民族語の一つがこのすぐれた作家によって表現上の彫琢の好機を獲得することを喜ぶたい。

以下には、もう一つ、翌 1980 年 7 月から 9 月にかけて、筆者がケニアに滞在した頃のグギの身辺について、若干の重複をおそれず、ある新聞に寄稿した文章を紹介しておこう⁴⁹⁾。ちょうど、最初のギクユ語による戯曲作品と小説が刊行された直後の時期だった。ナイロビ大学への復職の道が完全に断たれ、「プロの作家」になろうとの決意を固めた頃である。

1980 年 7 月から 9 月にかけて約 2 ヶ月間、ケニアで最も人口稠密なギクユの人々のことばと文化の調査のために各地を旅行してきたが、その際、グギ・ワ・ジオンゴとも 1 年ぶりで会い、親しく話し合うことが出来た。

第一に注目すべきは、初めてのギクユ語による二つの作品がその年の 4 月にハイネ

マン教育図書出版社（東アフリカ）から出て、どちらも好評を得ていたことをあげなければならないだろう。二つの作品とは、戯曲『したい時に結婚するわ』（*Ngaahika Ndeenda*、グギ・ワ・ミリエとの共作）と小説『十字架の上の悪魔』（*Caitani Mũtharabainĩ*）である。

戯曲のほうは、3年前の10月から約1ヶ月半にわたって、地元カミリズ村の農民・労働者たちが村の文化の振興をはかるために野外で上演したコミュニティ演劇の完成本で、その年の暮れ、ケニア政府がグギを拘禁に処した主な理由になったと言われるものである。グギはこの作品の序文で、商業ペースを理由にするばかりか、微妙な政治問題にかかわることを恐れて、本書の刊行を拒絶したケニア国内のすべての出版社に対して厳しい反省を求めている。彼は「愛はまず身近なところから」と出版社の良心に訴え、「われわれケニア国民は、外国人によって外国語で書かれた本を喜ぶことをやめ、民族の諸言語を使って祖国のための歌をうたおう」と呼びかけている。

さらにグギは、この作品が二人の作家だけの手によるものでなく、自ら台本づくりに参加し、演出を引き受けることで、「団結は力である」との真実を証明した村の農民・労働者たちとの共同の産物である点を強調し、この作品をもって「われわれ民族語による作家」が今後かず多くの民族文学を生み出す嚆矢としたいとの抱負を述べている。なぜなら、「一本の丸太では、暖炉の火を夜通し燃やし続けることは出来ない」からである。

『十字架の上の悪魔』は、拘禁以前から出版が予告されていたもので、まさにわれわれにとって待望の書である。グギは当初これを英語で書くつもりでいたらしいが、拘禁中にギクユ語で書く決意を固め、大量のトイレットペーパーに下書きし、その原稿を獄中のマットレスの中に隠していたと言うものである。ワリインガという名前の若い女性が主人公で、彼女の人生と社会への目覚め、自立に至る過程が現代の荒廃した世相の中に位置づけられ、口承文学の手法で語られる。

「見る人」（作者）の口を通して、ワリインガの悲しくも力強い人生が明るみに出されるが、それとあわせて現代社会の金権階級（日本のそれも含まれることに注意）に対する痛烈な風刺が込められるのである。グギはこの作品の序文で「文学は真実を語るもの」というギクユのことわざを持ち出し、「笑い、そして学ぶことが文学のエッセンスです。さあ、私のお話を聞いてください」と述べて、読者を作品の世界へ導入していく（この小説は、金芝河の譚詩『五賊』との比較で考察してみると、有益であると思われる）。

「帝国主義の最終段階、すなわち新植民地主義と闘っているすべてのケニア人」に捧げられる本書は、内容面で『デダン・キマジの裁判』(1976)、『血の花弁』(1977)、および先のギクユ語劇と同一の系譜に収めうるものであろうが、試みられている新しい文体と形式、語彙の選択は、これまでのどの作品とも相違している。それは、従来、文学作品などに親しむ機会の乏しかったケニアの農民・労働者をテーマとして扱い、これらの人びとを第一の読者に想定して書いた結果であるのだろう。

現在、この小説のスワヒリ語訳原稿が完成し、追ってルオ語訳のほか、スウェーデン語訳の刊行も決まっていると言う。また、英語訳はグギ自身が手がけているが、文学的評価と外国語への翻訳はギクユ語版によってほしいとの希望であった。ついでながら『したい時に結婚するわ』の初版 3,000 部は発売後 2 週間で売り切れ、第二刷 5,000 部も 1 ヶ月で底をついた。ハイネマン教育図書出版社の「アフリカ人作家シリーズ」中の英語戯曲で、これほどの売れ行きを示したものはなかった。『十字架の上の悪魔』は、7 月末までに 8,000 部が売り切れたという。

第二評論集『政治の中の作家』(*Writers in Politics*) が近く刊行されるが、ここには、タイトルエッセイのほか『ホームカミング』(1972) 以後の評論が収められる(たとえば、民族語で書く必要と意義を説く最新の文章「ルーツへの復帰」ほか)。それと同時に、韓国問題を扱う 2 編の論文の収録が予定されていて、この書が金芝河に捧げられるというから、アフリカ人作家として画期的である。

ナイロビ大学への復帰の望みを絶たれたグギは「私の選択ではない」と断りながら、「今後はプロの作家になる努力をするつもりだ。ギクユ語で書く決意にかわりはないが、児童文学、ことに口承文学を現代風書き改める仕事なども始めてみたい」との抱負を語った。このことばには、苦難の状況のなかで、民族文化の創造のために自己の才能と努力のすべてを傾けようとする強靱な精神、そして確固たる自信のほどがうかがえる。

その年の夏、グギは、私をも含めて外国からのたくさんの訪問客を受けていた。なかでも、かつてマケレレ大学在学中に、自己の作家志望の夢をひそかにうちあけたというイギリス人学寮長夫妻とか、あるアメリカ黒人作家の訪問などは、彼にとって懐かしく、また楽しい一時であったことだろう。しかし、グギは、私にも少しは責任があるとも言える苦い経験を味わうこともあった。

リムルの自宅を何度目かに不意に訪問した日のことだった。家族の人々は留守で、かわりに、一人の白人ががらんとしたリビングの長椅子に腰をおろしていた。しばらく

く話しているうちに、その白人がナイジェリアの中学校でアフリカ文学を教えているカナダ人で、休暇を利用してグギを初めて訪ねてきたということがわかった。私はその白人を連れ出し、その後、村人の案内で、グギが飲んでいるというリムルの町のバー「ニュー・アラスカ」へ合流することにした。月末の日曜日とあって、そのバーは昼間からごったがえしていた。私はすぐに馴染みの村人につかまり、ビールのピッチをあげてしまい、この白人がどんな話を始めたのか全く頓着していなかった。

しばらくすると、その白人が突然立ち上がり、20 シリングの紙幣をテーブルに叩きつけて、外へ飛び出してしまった。グギは、啞然としている私に向かって、とても困惑した表情で、例の白人から「ケニアにおいて白人がしめる場所はあるのか」と問われ、その真意をはかりかねながらも、「白人の居る場所はない。Be Yourself!」と答えた私に説明した。遠いナイジェリアから、奇妙な質問をたずさえてやって来たその白人はどんな解答を聞き出したかったのだろうか。それにしても、Be Yourself!ということばは、日本人であるこの私の胸にも鋭く突き刺さったのだった。

⑥ 1981 年の来日

81 年 11 月 4 日から 7 日まで、神奈川県川崎市ほかで「アジア・アフリカ・ラテンアメリカ文化会議」（日本アジア・アフリカ作家会議主催、川崎市・神奈川県後援、実行委員長＝針生一郎）が開催された。この会議へ、16 ヶ国から 27 名の外国人作家や芸術家たちが招聘されたが、そのなかにグギ・ワ・ジオンゴもいた。日本からの参加者には、堀田善衛、大江健三郎、井上ひさし、小田実、大島渚、小中陽太郎、吉岡忍、栗原幸夫、竹内泰宏ら、当時の日本アジア・アフリカ作家会議に結集した多数の作家・詩人・評論家がいた。野間宏、加藤周一、岡本太郎らが呼びかけ人に名を連ねていた。

グギの来日は 1976 年 8 月（韓国問題緊急国際集会、東京）について、これが二度目であった。釈放以後 2~3 年の間に、戯曲『したい時に結婚するわ』（ギクユ語版、1980）、獄中でほぼ書き上げた長編『十字架の上の悪魔』（ギクユ語版、1980）、評論集『政治の中の作家』（1981）、『拘禁—作家の獄中記』（1981）の四つの作品を、いずれもハイネマン教育図書出版社から出していた。

二度目の来日で、彼は「帝国主義と文化の危機」と題する短いスピーチを行い、その冒頭で、今回の来日は日本での釈放運動に対して感謝を述べるためであったと、以下のように述べている。

「先週まで、私は日本に来られるかどうか定かではありませんでした。そういうわけ

で私は、正式な論文というものは準備してまいりませんでした。しかしながら私は、ぜひ日本に参りまして、個人的に、日本 AA 作家会議の皆様方、また日本の作家全員に対して、特に私が 78 年にケニアで政治的な問題で囚われの身になっていたことに対して、大きなお働きをいただいたことに、心から感謝しなければいけないと思っておりました。このような作家の連帯というものは、政治犯の釈放に極めて重要な役割を果たすものであります。また、人間としての連帯と友情という意味でも重要な行為であります」⁵⁰⁾。

川崎集会の後、グギは初めて京都を訪れ「第三世界の民衆と文化運動」と題するシンポジウム（11 月 14 日、四条烏丸のシルクホール。呼びかけ人は、大島渚、河野健二、多田道太郎、鶴見俊輔、奈良本辰也、日高六郎、米山俊直、伊谷純一郎ほか）に招聘され、「第三世界における教育と民族文化」と題して講演した⁵¹⁾。針生一郎などがコメンテーターを務め、筆者が司会を担当した。このシンポジウムは、アフリカ文学研究会、京都イングリッシュセンター、京都大学アフリカ研究会、京都大学ラテンアメリカ研究会、南部アフリカ問題研究会の 5 団体を中心に主催したものだった。

これに先立つ 11 月 11 日、京大楽友会館で開かれたレセプションへは、国際アジア・アフリカ作家会議議長のアレックス・ラ・グーマ（南ア出身、当時は在キューバ）⁵²⁾ やメキシコの漫画家リウス（エドワルド・デル・リオ）もやって来た⁵³⁾。これには、日本のアフリカ研究者や学生も多数参加していた。

川崎市や藤沢市、その後の京都での講演では、コミュニティ演劇の第一作「したい時に結婚するわ」の経験から、第三世界での民衆演劇運動の役割を述べるとともに、ケニアにおいて、その種の活動が政府の弾圧を受ける経緯を、自分の政治拘禁の体験から、雄弁に語りかけた。また、リハーサル中の第二作のこと、さらに将来の映画制作への抱負を熱っぽく語った。

京都では、京大西部講堂で上映されたボリビア映画（ホルヘ・サンヒネス監督作品「ここから出て行け」）⁵⁴⁾ を熱心に観ていたが、それは後日の映画制作への抱負からだけでなく、歌と踊りをベースにしたミュージカル劇「母よ、我がために歌え」（*Maitũ Njugĩra*）の映画的手法とも関係していた。

グギは、この会議参加のためにケニアを出発するまでに、「母よ、我がために歌え」とミシェレ・ギザエ・ムゴとの合作による「デダン・キマジの裁判」の上演許可申請（前者は、82 年 2 月 19 日から 3 月 20 日まで、後者は、同年 3 月 10 日から 3 月 20 日までを予定）、ならびに興業税の免除措置申請の仕事をグギ・

ワ・ミリエ（『したい時に結婚するわ』の合作者）に依頼していた。

来日当時、グギは地元ナイロビとリムルで、ギクユ語によるコミュニティ演劇の第二作「母よ、我がために歌え」のリハーサルに忙しかった。しかし、その後の展開では、82年2月19日に、ナイロビの国立劇場での上演拒否が決まり、同25日には、ナイロビ大学でのリハーサルも禁止された。82年3月10日、「母よ、我がために歌え」の上演禁止に至る経緯を記者会見で公式声明したが、その日までの大学での公開リハーサル（上演は約3時間30分）には約12,000~15,000人が駆けつけていたという。しかし、その後は、現在に至るまで上演されることも、台本が出版されることもないまま、ついに幻の作品となってしまった。

IV. 幻のミュージカル「母よ、我がために歌え」：抵抗の系譜 (*Maitũ Njugĩra*)

アフリカ文学研究会の仲間の一人、楠瀬佳子さんは、それから4年後、1986年にロンドンを訪れた折に、当時同地に滞在中のグギ・ワ・ジオンゴと会って、この劇の概要を記したドラフト⁵⁵⁾を譲り受けた。これは、ギクユ語オリジナル台本を、著者自身が英語に翻案したもので、ロンドンでの上演をもくろんだものであった。ただし、ロンドン公演も実現しなかった。以下では、この戯曲の内容について、英語版ドラフトを基に、やや詳しく紹介しておこう。

① 劇の基本的性格

英語のドラフトは、A5版117ページ（A4用紙に2ページ分を印刷）。タイプ印刷で、著者による書き込みが随所に見られる。扉に次の注意書きがある⁵⁶⁾。

- (1) これは、ギクユ語のオリジナルを、概略、英語に翻案したものである。
- (2) 演出家は、劇全体に、マイム、歌、踊り、視覚効果（スライド、ポスターなど）を取り入れる可能性を探る必要がある。言葉による対話は、音楽と沈黙に続くものとしては大切であるが、あくまで二次的である。
- (3) 20年代、30年代のケニアの農園が舞台である。しかし、第三世界のどこであってもよい。スリランカ、南アフリカ、韓国、フィリピン、アルゼンチン等、どこかの奴隷農園であってもよい。
- (4) このミュージカルは、植民地ファシズムが「沈黙と恐怖の文化」(Culture of Fear and Silence)⁵⁷⁾を押し付けることで、どれほど民衆の意気を喪失させ、民衆に疎外感を植えつけ、彼らの抵抗を弱体化させるかといったことについて書かれた実験的作品である。ただし、民衆の側の抵抗についても検討を加えている。
- (5) 植民地ファシズム（あるいは新植民地時代の権威主義）に対抗できるのは、民衆

の抵抗である。このミュージカルは「抑圧と抵抗の弁証法メタファー」(metaphor of the dialectic of oppression and resistance) として観るべきである。

- (6) 英語版は、役者と演出家のための手引きにすぎない。実際の演出では、コミュニティごとの歴史遺産を利用すべきである。言葉は、どの言語（たとえば、英語）であっても、最小限にとどめるべきである。

ブレヒトの詩 2 篇（「モットー」Motto と「第三帝国の不安」The Anxieties of the Regime）、さらに M. ニーメラー牧師（1892~1984, ナチの犠牲者）の詩一編が扉に引用されている⁵⁸⁾。ブレヒトの短い方の詩「モットー」とニーメラー牧師の詩を以下に紹介しておこう。

ブレヒトの詩

In the dark times,
Will there also be singing ?
Yes, there will also be singing
About the dark times.⁵⁹⁾

暗い時代に

歌をうたうことがあるだろうか。
あるとも、歌はある
暗い時代についての歌が。

ニーメラー牧師の詩

First they came for the Jews
And I did not speak out
Because I was not a Jew.

Then they came for the communists
And I did not speak out
Because I was not a communist.

Then they came for trade unionists
And I did not speak out
Because I was not a trade unionists.

Then they came for me,

And there was no one left
To speak out for me.⁶⁰⁾

彼らは、はじめユダヤ人を捕まえにやって来た
私は、ユダヤ人でなかったから
抗議しなかった。

それから、彼らは共産主義者を捕まえにやって来た
私は、共産主義者でなかったから
抗議しなかった。

それから、彼らは組合の活動家を捕まえにやって来た
私は、組合の活動家でなかったから
抗議しなかった。

それから、彼らは、私を捕まえにやって来た
この時に抗議する者は
誰も残っていなかった。

これらの詩は、暗黒の時代にも、時代を歌で語り継ぐ民衆が存在すること、
彼らの真実の言葉は、支配者に恐怖と不安をあたえ、一片の真実の言葉が歴史
を変える力ともなりうることを、何事も他人事として無関心でいるならば、いつ
か必ずその報いを自分が受ける、ということを教えている。これらの詩のメッ
セージは、「母よ、我がために歌え」のモチーフとも結びついている。

「母よ、我がために歌え」は、20、30年代のケニアの白人農場の出来事を扱
いながらも、たとえばニーメラー牧師の詩に暗示されるように、第三世界に共
通する状況を逆照射した現代的な作品である。歌と踊りを中心に構成し、台詞
を最小限にしているのは、ファシズム体制下の「沈黙と恐怖の文化」の何たる
かを伝える意図からである。

キリスト教伝道と植民地支配下で、アフリカ人は伝統的な自前の文化表現の
多くを禁止され、逆に、キリスト教、西欧近代が教える価値を礼賛させられた。
しかし、民衆はこれらの文化的・精神的攻勢に屈することなく、歌や踊りに独
自の価値と願望を込めて、民族のルーツに繋がる精神的・文化的価値を捨てる
ことはなかった。彼らの伝統的な歌や踊りは、植民地主義の暴力に対抗する強

力な武器となった。

アフリカの伝統文化表現の禁止ないし弾圧の例には、こと欠かない。たとえば、1930 年頃に、ギクユの人々のイトゥイカ文化祭⁶¹⁾が禁止処分を受けた。これは 25 年ごとに行なわれる歌と踊りと詩と演劇の祭典で、昔のイレギ世代⁶²⁾が封建的独裁権力を打倒したことを記念して行なわれるものであった。ほぼ同じ頃に、ムジリグ・ダンス⁶³⁾の作曲者と歌手が禁止処分にあい、その多くが刑務所へ追いやられた。その歌や踊りは、反帝国主義を内容とし、きたるべき新生ケニアを語るものだった。ムンボイストの芸術家たち⁶⁴⁾(ケニア西部、グシイ人の間で反植民地運動を組織した。1954 年禁止)や、反植民地主義のディニ・ヤ・ムサンブア運動⁶⁵⁾にかかわった人々についても同じことが起きた。

「母よ、我がために歌え」は、本格的なミュージカルである。それまでも、ミュージカルの手法は部分的に取り入れられていた。たとえば、「デダン・キマジの裁判」は、提示部、展開部、再現部とあるように、ソナタ形式の三部構成で、50 年代のマウマウ闘争でうたわれた歌や踊りがふんだんに取り入れられていた。この民族解放戦争の下で、誰もが共有した経験(土地の喪失、肉親の死、家族離散など)を掘り起こすものとして、歌と踊りが相乗的に働いて、沈殿していた民衆の怒り、苦悩、そして願望を一気に噴出させるのである。

しかし、この劇のミュージカルとしての性格はその比ではない。「母よ、我がために歌え」の第 2 幕 2 場⁶⁶⁾は、その一例であろう。ここでは、カリウキが銃を造り、労働者たちに手渡している。歌いながら踊る労働者のムジリグは、カリウキ自身の武装闘争への決意を表し、同時に労働者たちの同じ決意を強化するのに使われている。この場面は、当時禁止されていた民族舞踊を演じることで、イレギ世代の革命の伝統を継承して、民衆が植民地支配との闘いに立ち上がったことを表している。

ここでは、ケニアの各民族集団が、植民地支配の非人間化に対抗する闘いになどどのように係わってきたか、その全体像を示すために、カンバ、ルオ、ルヒヤ、その他多数の民族集団の歌が取り入れられている。じっさい、この劇では約 80 回も歌がうたわれ、その都度踊りが伴う。ギクユ語の歌と踊りが多いが、カンバ、ルオ、ルヒヤ、カレンジン、グシイの歌と踊りも多い。

圧巻は何と言っても、歌と踊りの数、そのバラエティであろう。ギクユだけでなく、10 を超えるケニアの代表的な民族の、植民地期の自然発生的な抵抗歌

謡と踊りが繰り返される。馴染みの曲調に合わせた即興の歌も多いが、それらの多くを観客が知っていて、舞台に合わせて歌い、踊れると言うのだから見ものである。たとえば、幕が下りる度、アンコールに応じて、カンバ語の抵抗歌謡「カレソ」(kaleso) が歌われ、踊られるが、この時には、多数の観客が舞台に殺到して、ともに歌い、踊ることになる。

先述の通り、この作品は「抑圧と抵抗の弁証法メタファー」である。このことは、たとえば、リヒャルト・ワグナー⁶⁷⁾ のヨーロッパ音楽とアフリカ人労働者がうたう歌、スクリーンに写し出される抑圧的な法律条文と、それに対抗する労働者の気概、英語とケニアの民族諸言語の拮抗、支配者と労働者の対抗関係などに見ることが出来る。アフリカ人民衆の願望は、伝統的な民族歌謡に託されるが、対照的に、ワグナー音楽が響き、各種の抑圧的な法律がスライドを使って効果的に写し出される。ワグナー音楽や、たびたび演奏されるイギリス国歌は、ヨーロッパ音楽、白人文化、ファシズム、植民地軍国主義を象徴するものとして、舞台に威圧的な雰囲気を高めている。アフリカ人労働者の歌声が、ヨーロッパ音楽を奏でる楽器の音にかき消されそうになることもあるが、完全に消滅することはない。この間にも、民衆の連帯は強められ、抵抗の力が静かに蓄えられる。「カレソ」のモチーフは、先のブレヒトの詩に合致している。

スライドは、植民地下に導入された各種の差別立法を写し出していく。条文に対応して、現実を展開する残虐行為、抑圧、窃盗、強盗、差別の実態が示される。スクリーンは、スライドを写し出す装置であるだけでなく、背後に役者を隠しておく小道具としても役立っている。

以下に、スライドが写し出す差別立法の一部を挙げておこう。

1800 年：ザンジバルのアル・ブン・サイードによる奴隷制禁止令 (Anti-Slavery Decree)。

奴隷売買の禁止。ただし、合法期に取引のあった奴隷は除外される。

1896~1919 年：労働法 (Labour Ordinance)。

1896 年：浮浪者取締り法 (Vagrancy Law)。

1900 年：原住民パス法 (Native Pass Ordinance)。

1901 年：小屋税法 (Hut Tax Ordinance)。

1902 年：原住民運搬人夫および労働者法 (Native Porters and Labourers Ordinance)。

1904 年：マスター・サーバント法 (Master and Servant Ordinance)。

1910 年：家事使用人登録法 (Registration of Domestic Servants Ordinance)。

1914 年：原住民登録法 (Native Registration Ordinance)。

この間 1897 年には、東アフリカ保護領の初代弁務官 A. H. ハーディングが、権力に関する植民地主義の哲学とも言うべき発言「権力、権威は人民を操れる唯一の道具であり、人民は銃弾や学校により従順を学習すべし」⁶⁸⁾を残している。1919 年には、主教（ウガンダ主教、モンバサ主教）からも強制労働を支持する宣言があった⁶⁹⁾。

法律を英語で読み上げる声が、舞台の労働者と観客に、凄味のある威圧感を醸し出す。その内容を理解させるために、支配者側にかからめ取られたアフリカ人が教師や説教師として登場し、各民族集団の共通語であるスワヒリ語への通訳を担当している。次に複数の労働者が、スワヒリ語からいくつもの民族語に通訳することになるが、彼らは敏速に訳すことを躊躇したり、正しく通訳しないことで、暗黙の抵抗を示している。

英語から、スワヒリ語を媒介に、アフリカの民族諸言語へ順次移し換えていく過程は、アフリカの言語文化に刻印された植民地化（汚辱）のプロセスを表象しているとも言える。言語コードの段階的手順が、支配者の抑圧的価値をアフリカ人に押しつけ、アフリカの民族文化伝統に楔を打ち込むことを意図しているのは明らかである。これに抵抗する手段として、アフリカ人の側は、伝承されてきた歌と踊りを使って自らの伝統を再確認し、支配者の理解できない民族語を通して、抵抗する側の連帯を強めている。

言語コードの段階的变化のプロセスとして、四つのバリエーションが示されている⁷⁰⁾。

- (1) 英語は、ジョージ・スコットのような白人入植者、もしくは白人に奉仕しているムエンダダのようなアフリカ人支配層によって読み上げられる。これをアフリカ人監督官のニャバアラがスワヒリ語に通訳し、その後、舞台にいる労働者たちが各民族語に通訳する。
- (2) スクリーンの文字がはっきりと読み取れるなら、英語を読み上げる必要はない。スワヒリ語から直接、民族語に通訳してもよい。
- (3) スワヒリ語が話されていない国で上演される場合は、スワヒリ語と同じ役割を果たしているその国のリンガ・フランカ（共通語）を使用する。
- (4) ニャバアラのような人物が英語を読み上げ、労働者が民族諸言語で繰り返してもよい。

この劇は、前作「したい時に結婚するわ」と違って、ギクユ語、ギクユのフ

オークロア文化だけが中心ではない。マイム、歌、踊りはマルチ・エスニックな要素をふんだんに盛り込んでいる。観客もまたギクユ人にとどまらず、マルチ・エスニックな構成を想定しているからである。

そのため、ギクユ語の台詞は最小限にとどめ、かわりに視聴覚に訴える特別な手法が取られている。ケニアの 8 つの代表的な民族の歌や踊りを積極的に利用しているが、歌の多くは、各民族の伝統的な歌謡である。観客に馴染みの深い歌と踊りに乗せて、抵抗のメッセージが届けられるのである。

言語コードの転換方法についても詳しい指示がある⁷¹⁾。これは、この劇をギクユ地域だけでなく、ケニアの全民族集団の居住地域、さらにはアフリカやその他第三世界のどこでも上演可能にするためである。

実際には、どの方法であってもよい。形式は違っても、スワヒリ語のような超民族的リンガ・フランカを使用することで、植民地化が地元の一部の仲介者を通して進められた歴史過程を見ることが出来る。

② 時代と場所

1920, 30 年代ケニアのジョージ・スコット農場。労働者は、彼のことを「カノル」、農場を「カノル農場」と呼んでいる。「カノル」とは「太っちょ・デブ」の意である。さらに別の意味も付加されることになるが、これについては後で示すことにしよう。

当時は、ケニアを完璧な白人の国 (Whiteman's Country) に仕立てるために、主としてイギリス本国、南アフリカ、オーストラリアなどからの白人の入植計画が進められ、さまざまな法律が整備された時期だった。この結果、特にリフトバレー州、中央州などに住むカレンジン人、マサイ人、ギクユ人の土地が取り上げられた。白人の入植に合わせて、アフリカ人に対する各種の税制度が導入または強化された。たとえば、「乳頭税」(スワヒリ語で **Matiti** ; ギクユ語で **Egoti ya Nyondo**)⁷²⁾ は、やや奇妙な一例である。若い娘たちは、乳房が膨らんでくると、一人前とみなされ、これに税金が課せられたのである。年 6 シリングだった。人頭税の一種と言うべきであろうが、その結果、娘たちは、課せられた税を支払うために町へ出て、自分の税を賄うために売春に向かう場合が多かった。植民地支配以前のケニアに、売春は存在しなかったと言う。

現金経済の浸透とともに、多くのアフリカ人が都市へ出て賃金労働に従事し

た。土地を失って、白人農場の労働者として雇われた者も多数いた。30年代、40年代のケニアでは、およそ 4,000 人の白人入植農民がいて農園経営に基盤を置く植民地経済が発展した。「カノル農場」はその典型例の一つである。

③ 「キパンデ」の意味するもの

1920 年の原住民登録法（改訂）により、「キパンデ」（Kipande）制度が導入された。これは差別立法の中でも最も酷いものの一つであった。この制度の政治的意図と、それがケニア人に与えた精神的、物理的影響が「母よ、我がために歌え」の主題となっている。

「キパンデ」とは、スワヒリ語で「ものの片」を意味するが、ここでは特殊な歴史的意味を持っている。それは 16 歳以上のすべてのアフリカ人男子が金属容器に入れて首から吊しておかなければならない身分鑑札証で、登録時には指紋を取られた。「キパンデ」には、名前、民族名、居住している州、地域、地区、番地、首長名、雇用者名、その他諸項目（農場名等）が記入登録された。

「キパンデ」制度は、強制労働や各種の賃労働を含めて、アフリカ人を労働者（もしくは労働予備軍）として指定保留地（リザーブ）から移動させ、白人農園で働かせたり、白人の召し使い身分に固定しておく監視政策の一つであった。これは、植民地支配のイデオロギーを具体化し、支配を強化するための象徴的な制度であった。劇中で、農場労働者は、隷属状況からの解放を願って二度までキパンデを焼き捨てている。

「母よ、我がために歌え」の内容を見ておこう。

④ 舞台の進行

a. 第 1 幕 1 場 (pp. 1 ~ 30)

暗闇。突如、鋭い叫び声が静寂を破る。カーテンが上がり始めると、苦しみ呻く声に混じって、カンバ語の抵抗歌謡「カレソ」（Kaleso）が聞こえる。

How can I sing songs in bondage ?

I began to sing the following :

I will prepare the way to go home

No matter how far the home

I will start the journey

I will start my homecoming

For I will not endure this suffering anymore.⁷³⁾

囚われの身で、歌などうたえるでしょうか
でも、私はうたおう
故郷へ帰る支度をしよう
どんなに遠くても
さあ、歩き出そう
故郷へ向かって
こんな苦しみには耐えられないから

舞台は徐々に明るくなり、労働者たちが照らし出される。柱に括り付けられている者、石の上に座らされている者、鎖に繋がれた者などがある。身重の女もいる。照り付ける日射の下での拷問の7日目である。ボロをまとい、誰もが疲れ切っている。目立つのは、カンゲゼ（油で汚れた作業着姿の機械工）である。カリウキ（赤シャツ）、ニャジラ（髪をビーズで美しく飾っている）、ムエンダンダ（破れたジャケツ）も見える。

後方で、二人の労働者が大きな板、ないし布を掲げている。そこにケニアの地図が写し出され、「ジョージ・スコット・カノル農場 1930」と大きく書かれている。職工長のニャバアラが、棒切れでその文字を指している。「カノル農場」は、当時のケニア全体の縮図である。

突然、「カレン」を圧倒して、ワグナーの作曲歌（ファシスト的、好戦的なもの）が響き、「カレン」の悲痛な調子と混じり合う。曲と歌が鎮まると、スクリーンに各種の労働法が写し出される。条文の原文のほか、関連する新聞記事、広告、写真などもある。それらは、残虐、抑圧、盗み、差別の実態を証明する歴史資料である。条文を英語で読む声が聞こえ、ニャバアラがスワヒリ語へ訳していく。命令を受けた数人の労働者が、彼のスワヒリ語を各民族語へ訳していく。

スクリーンがはずされると、ワグナー音楽がいつそう高まり、スクリーンの背後から人力車を引いてアフリカ人ムフウンジアが登場する。彼はのちに農場の牧師になる人物である。人力車にはカノルとその妻が乗っており、二人の武装警官が護衛している。音楽が止むと、カノルと妻が人力車から降りてくる。ファンファーレが響き、ラッパが吹かれ、眼に見えないがユニオン・ジャックが掲揚される。カノルは、日よけ帽をかぶり、懐中時計の鎖が腹にまで垂れている。これは、典型的な入植白人の恰好である。彼が鞭か笛で合図すると、ニャバアラがその意図を察するのである。

ラッパが止むと、カノルが鞭を鳴らす。ニャバアラがすぐに労働者を枷から解く。労働者は、ギクユ語の哀歌「手を繋ごう」(Twīyũmĩrīe) をうたい始める⁷⁴⁾。(一部抜粋)

独唱者 A：おお、長の年月、私は拷問に耐えてきた
この土地を明け渡せという
起ち上がろうではないか

全員：そう、しっかり起ち上がろう
カノルの奴を警戒しろ
あいつは、鞭に頼る男
切り株を掘り起こすのに疲れたが

独唱者 B：悲しみにへこたれるな
神さまはいつか戻って来てくださる
起ち上がろうではないか

全員：そう、しっかり起ち上がろう
カノルの奴を警戒しろ
あいつは、鞭に頼る男
切り株を掘り起こすのに疲れたが

カノルが、またも鞭を鳴らす。歌声が止む。

ニャバアラ：人間の屑ども、耳を持たぬか
人間の屑ども、聞こえないのか
二列に並べと言ってるんだ
地べたに座れと言ってるんだ

赤シャツを着た労働者の一人、カリウキが恐怖で震えている。

全員：我々ケニア人は泣かされた
人間の屑だと言われて
そんな日が本当に来るのだろうか
人間の屑が自由を得る日が

我々は悲しい沈黙につつまれ
愛国の感情にとらわれながら、不安に思った
我々が一掃されたなら
誰がこの国を解放するのか

この時、口もきけず、耳も聞こえない一人の老人が登場。それに気づかない一人が、うたい続けている。

独唱者：

And then one man stood up

And he spoke like a true patriot.

He told us : Stop weeping

Our women are daily giving birth to liberators.⁷⁵⁾

その時、一人の男が立ち上がり

愛国者の声で語った

泣くのは止めよ

女たちが、日々、解放者を産んでいるではないか

老人は、少し離れた場所に腰を下ろし、赤い紐で束ねた棒切れを地面に置く。その束を折ろうとするが折れない。やがて、老人は束をほどいて、棒切れを一本ずつ折っていく⁷⁶⁾。この間、労働者たちがギクユ語の抵抗歌謡「手を繋ごう」をうたっている。ニャバアラとムエンダンドが、老人を農場から追い出そうとする。

突然、犬の吠え声。カリウキが、犬に追われたように舞台を駆け回る。

次に「キパンデを首の周りに吊るさないのは罪。違反者は起訴」とスライドで写される。老人は、棒切れで前と同じ仕草を続けている。

ここから、初めて台詞のやりとりが始まる⁷⁷⁾。

カノル：(鞭を鳴らす)

ニャバアラ：カノルの旦那がお知りになりたいのは、どいつがキパンデを燃やせと言ったかということだ。

労働者：キパンデは奴隷の鎖だ。

カノル：(鞭を鳴らす)

ニャバアラ：どいつだ、平和をかき乱す奴は？

名を教えた者には、大した褒美があるぞ。

「キパンデ」は、南アフリカ出身のボーア人であるカノルにとって、「パス帳」⁷⁸⁾に代わるものであり、「キパンデ」を焼き捨てる者は放置しておけないのである。

労働者たちは、この取引に応じず、第一次大戦当時の抵抗歌謡をうたい始める⁷⁹⁾。

1914年から1918年までの大戦争で
おれは惜しみなく奉仕した
おまえたちは褒美を約束したが、
何一つもらってはいないぞ！
もらったのは鞭と鎖だけだ！

おれを採石場にしょっぴいて
あげくに刑務所に閉じ込めた
おれは褒美など欲しくない
お返しは裁判ざた
繋がれた動物さながら、キパンデが首にぶら下げられた

隷属を拒否するぞ
おれたちは人間だ
阻止するぞ
おまえたちの強盗と搾取を
おまえたちの窃盗と奴隷制を

白人帝国主義者どもよ、何と悪運の強い奴らだ
黒人はおまえたちのために闘った
おまえたちは、戦利品をヨーロッパへ持ち帰った
おまえたちのために闘うのは、もうごめんだ
褒美なんか欲しくないぞ、いつまでも！

次に、労働者は、ミジケンダ⁸⁰⁾の抵抗歌謡をうたう。

白人の帝国主義者は、黒人の血を吸う
白人の帝国主義者よ、去れ

ケニア人から見れば、白人は「流れる川」(passing river)、「通り過ぎる雲」(passing cloud)である。⁸¹⁾つまり、彼らのケニア滞在は一時的にすぎないと言う。なぜなら、ケニアは「黒人の国」⁸²⁾だからである。拷問の苦しみの中で、労働者たちの確信はいつそう強まる。

ニャバアラが叫ぶ：

そいつを引き渡せ！

5分待つてやろう。

その男の名を明かせ

この極悪人！

このぶち壊し野郎！

労働者たち：帝国主義者カノルのために、平和をぶち壊す野郎

帝国主義者カノルのために、愛をぶち壊す野郎

ニャバアラ：帝国主義は、流れる川ではないぞ

帝国主義は、通り過ぎる雲ではないぞ⁸³⁾

カノルが懐中時計で時間の進行をはかっている。

ニャバアラが「カノルの旦那は寡黙、行動の人だぞ」と脅迫する。老人は、アフリカ人にも銃は造れると生意気な主張をしたために、カノルによって舌を抜かれ、鼓膜を破られていた。

5分経過。労働者の一人ムエンダダが「キパンデ」の焼き捨てを扇動したのは、機械工のカンゲゼだと口を割る。その結果、カンゲゼは牢にぶち込まれる。秘密を明かしたムエダダは褒美を貰い、のちには法廷の通訳になる。

ニャジラがうたい、労働者が唱和する。

Belly's lover

You have sold your child

Because of Belly.

Hyena also lover Belly[ママ]

But he never gives her

His offsprings.

Belly's lover

You have betrayed the land

Because of Belly.

Hyena loves Belly

But he never gives her

His offsprings.⁸⁴⁾

腹を太らす輩

お前は子供を売り飛ばした

自分の腹を太らすために

ハイエナも、腹を太らす輩

でも、自分の子供だけは

他人にやらない

腹を太らす輩

お前は、祖国を裏切った

自分の腹を太らすために

ハイエナは腹を太らす輩

でも、自分の子供だけは

他人にやらない

テーブルや椅子を使って、舞台が法廷に造り変えられる。カノルが裁判官の衣装で登場。ムエンダダが通訳を務めている。

法廷に立つカンゲゼ：

なぜ、我々黒人が、自分の国で奴隷に甘んじなければならないのか

何があろうと、奴隷身分を拒否するぞ

奴隷の鎖を拒否するぞ

奴隷は死ぬことよりも酷い

処刑される前に、カンゲゼはこう語っている。

「おれは奴隷の身分を拒否するぞ。そんなおれの首に、鎖を掛けようとするのか。キパンデは肉体を縛る鎖だ。それは精神をも苦しめる。自分を奴隷だと認めない限り、俺は奴隷ではないぞ。キパンデを焼き捨てろと言ったのは、そのためだ。奴隷として生きるよりは、たたかって死ぬほうがまだ。奴隷を拒否することが犯罪なら、おれは何度でも刑に服そう。おれは裏切り者になりたくない。同胞を裏切ったりはしないぞ。時計、服、靴、ペンが欲しいからといって、守銭奴になったりはしないぞ。胃袋を満たしたいとも思わないぞ。太鼓腹を突き出して、わが賢明な指導者と愛国者の前にしゃしゃり出ることなど出来るものか、絶対に。何が起ころうと、隷属は拒否するぞ」⁸⁵⁾。

ニャジラがうたう：

カンゲゼを見捨てないで
彼は私たちの声
彼は私たちの舌

ニャジラがうたい続けるが、誰からも反応がない。彼女は、最後にカリウキの前でうたう。

カリウキ、カリウキ、戸を開けて
カリウキ、カリウキ、戸を開けて

しかし、カリウキは、何もしない、何も出来ない。

カンゲゼの処刑が迫ると、労働者がうたう⁸⁶⁾。

愛国者カンゲゼが捕まり
月と星々が血の涙をこぼした
暗闇が全土を覆った
神さま、我らに慈悲を

処刑の前に、カンゲゼがうたう⁸⁷⁾。

おれのために祈るな

お前たちの臆病風がなくなるように祈れ
ギクユの箴言を忘れるな
臆病でいると、貧乏神が住みつくぞ
神は、自ら助けるものを助けられる

カンゲゼが処刑されると同時に、英国国歌が流れる。

カノルが、労働者に新しい身分証の携帯を指示する。身重の女が日照りのなか、身分証更新のために列をなして並ぶことに不満をぶつ。彼女は殴られて、流産してしまう。この時、ルヒヤ語の子守唄がうたわれる。女は気が狂ったように赤ん坊を探し回る。劇が終わるまで、女は生んだはずの赤ん坊を探し続ける。

この女は、折々に登場し、ケニアの幾つもの言語で子守唄をうたう⁸⁸⁾。

労働者がルヒヤ語でうたう：

カノルが、ひとりの赤ん坊を食っちまった
カノルは、俺たちの赤ん坊を食っちまうぞ
そう、カノルの奴が！

帝国主義者が、ひとりの赤ん坊を食っちまった
そう、帝国主義者は、俺たちの赤ん坊を食っちまうぞ
そう、カノルの奴が！

労働者の全員に新しい「キパンデ」が支給される。カンゲゼが処刑された後は、農場の機械工は、カリウキ一人である。ニャバアラが、カンゲゼの作業着をカリウキに着させる。死者の衣服をまとうのはタブーだが、カリウキは拒否できない。以後、労働者の仲間は気味悪がって、カリウキに近寄らなくなる。

b. 第1幕2場 (pp. 30~35)

農場労働のほか、植民地下の各種の労働現場が繰り広げられる。鉄道建設、道路建設、カカメガ地方の金鉱労働などである。これらは、植民地資本主義の現場を表している。各種労働がマイムで表現され、多くの労働歌がうたわれる。

鉄道建設のシーンでは、カンバ語の歌がうたわれる。皆が草を刈っている。

キアマンガ (kyamanga) の歌⁸⁹⁾。

逃げろ、逃げろ
逃げろと言ってるんだ
監督官よ、こんな仕事は殺されちまうぞ
逃げろと言ってるんだ

逃げろ、逃げろ
逃げろと言ってるんだ
逃げなきゃ、汽車に轢かれちまうぞ
情け容赦のない野獣だぞ
逃げろと言ってるんだ

ギクユの WAMŪGO の歌。石を運んだり、レールを敷く時の歌⁹⁰⁾。

ワ・ムゴは予言した
そう、彼の予言だ
ワ・ムゴが予言した
そう、彼の予言だ
やって来るぞと
そう、彼の予言だ
巨大な匍匐する獣が、やって来るぞと
そう、彼の予言だ

今、わかったぞ
そいつは、人間の顔をした獣だ
我らの血を吸う奴だ

我々は鉄道を建設した
それは、イギリスの帝国主義者のもの
どこまで達しているのやら
我らは知らない

我らの土地を守ろう
我らのものだから

イレギ世代⁹¹⁾の革命家たちから譲り受けたもの

ギクユの歌（レールを固定したり、木を伐る時の歌）GATHUKIA REERI。
6つの歌が示されるが、その一つを紹介しておこう（一部抜粋）⁹²⁾。

同志カブギよ
心臓が呻くぞ
汗が吹き出るぞ
全身の骨が痛むぞ
関節に疲労が溜まる
休息のない労働だ
かぎ煙草を吸う時間もない
こんな目にどうしてあっちまうのか
レベルメジャーを頼んだぞ
時間になれば、知らせてくれ
気絶しそうだ
同志カブギよ。

カンバ語の歌 VEVELA NGALI。敷いたレールの上を列車が通りすぎる時に
うたわれる（一部抜粋）⁹³⁾。

仕事を拒むと
おれは殴られた、この脳天まで
白人が汽車を動かす
仕事はきつい
昼も夜もつづく
白人が汽車を動かす
しかし、白人は、いつかはおれたちの労働の償いにまわるだろう
白人が汽車を動かす

この後、道路建設の歌、カンバ語の歌 TUSYOKEE MUTHANGA、カカメガ
の金鉱発掘の労働歌などがうたわれる⁹⁴⁾。

c. 第1幕3場 (pp. 35~76)

冒頭で、「女」が赤ん坊を探す場面が再現される⁹⁵⁾。

「雷鳴、稲妻、風、雨。赤ん坊の泣き声。流産した女が登場。赤ん坊を探している。彼女は無事出産したものと信じ、赤ん坊の姿が見当たらないだけだと思っている。いなくなった赤ん坊の泣き声が、そこら中から聞こえてくる。ときおり、彼女は赤ん坊を見つけたと思い込む。この時には泣き声が止んでいる。母親が赤ん坊を抱き上げ、二、三の歌をうたう。赤ん坊を抱いていないことに気づく。また泣き声が聞こえる。彼女はあちこち駆け回る。赤ん坊を見つける。赤ん坊を抱いて『お前は、どこへ行ってたの』（Watinda kū mwana wakwa）とうたい出す」。

Where have you been my child
Where have you been my child
And you did not come home.

お前は、どこへ行ってたの
お前は、どこへ行ってたの
家へ戻って来なかったじゃないか。

You left me alone
You left me alone
And you did not come home.

私を独りぼっちにして
私を独りぼっちにして
家へ戻って来なかったじゃないか。

Ooh, how I have been tortured
Ooh, how I have been tortured
And you did not come home.

おお、私はどんな拷問にあったことか
おお、私はどんな拷問にあったことか
お前は、家へ戻って来なかったじゃないか。

ムエンダダが、カノルの恐ろしい眼を描いた大看板を農場に立てる。労働者を威嚇し、絶えず見張りが立っていると思わせるためである。労働者は、サトウキビを伐っている。ここでは、ルオ語の労働歌（En Nyamrii）がうたわれる⁹⁶⁾（一部抜粋）。

この仕事は、手を怪我するぞ
さあ、仕事だ
朝早くから
家へ帰るのは、夜が遅くなってから。

朝の冷気が肌を刺すぞ
さあ、仕事だ
朝早くから
家へ帰るのは、夜が遅くなってから。

カリウキがカンゲゼの作業着を着て、登場。恐怖に取り憑かれ、夢遊病者のように歩いている。

この作業着は死のしるし
この作業着は血まみれ
この作業着は死神
この作業着は仕事漬け。

カリウキがポケットからスパナを出し、機械工の激しい労働に従事する様子をマイムで演じる。すると、作業ズボンのポケットから、紙片が出てくる。秘密結社キクユ中央協会（KCA）⁹⁷⁾の会員証である。死んだカンゲゼが反植民地運動のメンバーだったことがわかり、カリウキは脅える。

会員証は何処へ捨てようか。カリウキは農園からの脱出を試みるが、労働者がブロックしている。彼らが舞踊歌 *kireembereembe* をうたう⁹⁸⁾。

独唱者：Kireembereembe 壺が壊れた
コーラス：原住民リザーブを後にした時
思いもしなかった
こんな臆病者が産まれるとは
独唱者：その名はカリウキ
コーラス：原住民リザーブを後にした時
思いもしなかった
こんな臆病者が産まれるとは

さらに歌が続く。

ニャジラ：白人はどこから来たの？

独唱者 1：海の向こうから。ついで、陸路でワイヤキの家まで

ニャジラ：白人はどんな鳥なの？

独唱者 2：帝国主義の同盟者。我らの土地を奪った奴ら。

全員：我らはどうすればいいのか？⁹⁹⁾

この後、看板の裏手からカノルが現れ、ニャジラを連れ出し、レイプする。

カノルが舞台に現れる。警官と監督官が付き添っている。カノルが司教の衣装をまとい、人力車夫ムフウンジアが牧師の衣装をまとう。舞台は教会に変わり、改宗の儀礼が進行する。改宗した者たちが讃美歌をうたい始める。キリスト教のさまざまな宗派が、たがいに敵対している。

カリウキがうたう¹⁰⁰⁾。

どうなっているんだ

宗教が我々を分断しちまった

神さまは、ただお一人ではなかったか

何人もの神様がおられるなんて。

さらに、カリウキがうたう¹⁰¹⁾。

宗教、民族の独りよがり

これらがカノルの鞭の力になるのだ

すべての銃よりも手強いぞ

どうなってるんだ

いや、いや、いや

おれの手には負えない

こんな重荷はもうごめん

ここから逃げ出そう

今がチャンスだ

カノルに見つかるだろうか。

この時、舞台の袖から、何度も声が響く：

カリウキ：ここから逃げ出すぞ

声：それは出来ない！

カリウキ：なぜ、どうして？

声：帝国主義者が立てた棘の壁があるぞ。それは出来ない。

カリウキ：突き破ってやる。

声：お前には出来ない¹⁰²⁾。

カリウキが、眼に見えない壁を突き破ろうとする。壁の弱いところを破って、逃げようとした時、老人とぶつかる。カリウキと老人の間にマ임が始まる。老人がカリウキに棒切れの束を渡す。カリウキは、その束を折ることが出来ない。棒切れを束ねる紐をほどいて、一本ずつにすると、たやすく折れることがわかる。老人は、棒の一本ずつが個々の労働者だ、束ねる紐は文化だと説明する。老人は銃の造り方をカリウキに教える。老人は棒切れの束を銃に見立てて、「カノルの眼」に狙いを定める。突然、銃声が聞こえ、老人が倒れ、死ぬ。看板の裏手からカノルとムフウンジアが現れる。

老人の埋葬の混乱の中で、カリウキは、今こそ逃げ出そうと決意する。彼が走り出したところで、ニャジラとぶつかる。美しく着飾ったニャジラ。二人は踊り出す。たちまち、ダンス音楽が鳴り、ギター やその他の楽器を抱えた人々が登場する。舞台はバーかナイトクラブにかわり、ニャジラを中央に、人々が踊り、飲んでいる。牧師が登場して、舞台の人々を追い散らす。カリウキとニャジラは残っている。

ニャジラがうたう¹⁰³⁾。

忘れるな、私を夜鷹、淫売に迫りやった奴ら

カノルにレイプされた時

お前は、どこにいたか、清い身体、聖なる魂のお前さんは。

声を大にして

止める、その女は我らの娘でないかとでも言えたか。

カリウキとニャジラの斉唱が続く。しだいに他の者も声を合わせてうたう。うたいながら、彼らは運命が一つであること、団結の大切さを自覚していく。

皆が教えてもらおう

我らの団結の力を

団結の力
我々労働者の。

イレギ世代の革命家たちの時代から
我らは決意したぞ
団結の力を忘れないと¹⁰⁴⁾。

皆が意気高く、踊りうたう。彼らはカノルの眼の看板をズタズタに破壊する。突然の銃声と装甲車の響き。皆が逃げ出し、兵士とニャバアラが彼らを追う。舞台に人影がなくなる。

ラジオのニュース：

こちらは、ケニア放送局。本日、ジョージ・スコット農場で、激しい暴動が起き、酔っぱらった労働者が意味不明の部族の歌をうたい、コーヒー、茶、麦、綿の農園に火を放ちました。部族の暴徒に対抗して、法と秩序を守る部隊が戦闘中です。

警官が抵抗するニャジラを引きずって登場。ニャジラに対して欲情を露わにする。

警官：いくら払えばよいのか。
ニャジラ：1,000 シリングでも、だめ¹⁰⁵⁾。

号外を売る新聞少年が登場。「21 人の労働者の殺害だよ」¹⁰⁶⁾ と叫んでいる。警官とニャジラが言い争っていると、カノルが登場。「ニャジラは、おれの女だ」と一喝し、警官を舞台から蹴り出す。

d. 第 2 幕 1 場 (pp. 63~ 76)

ジョージ・スコット (カノル) 農場。第 1 幕と同じ拷問のシーン。カノルの「恐怖の眼」の看板を破壊したために、労働者たちが罰を受けている。柱に繋がれたカリウキへの拷問が目立つ。皆が「カレソ」をうたっている。ニャバアラがうたうのを制止している。

突然、赤ん坊の泣き声。「女」が狂ったように走り回り、やがて赤ん坊を見つける。「女」は、子守唄 *Lulu mwana*¹⁰⁷⁾ をうたい始める。他の者も彼女に合わせうたい始める。誰もが未来の解放者となる子供たちを探すと言う含みであ

る。

カノルが登場。警官、兵士、ムエンダダ、ムフウンジア、ニャバアラが付き添っている。「女」がうたう子守唄をワグナー音楽が圧倒する。スライドが投射され、ムエンダダが英語で読み、ムフウンジアがスワヒリ語に訳す。ニャバアラが一人の労働者に、自分の母語に訳すよう命令する。

1枚目のスライドにはこう書かれている。

「植民地化とは、ニグロに働かせること」「文明＝キリスト教、商業、プラス何か5%」¹⁰⁸⁾。

2枚目のスライドにはこう書かれている。

「この50年間の伝道事業に費やされた何百万ポンド以上に、健全な強制労働は黒ん坊の向上に効果がある」¹⁰⁹⁾。

警官と兵士とニャバアラが労働者を枷から放つ。カリウキだけが柱に繋がれたままである。女たちは **Lulu Mwana** をうたい続けている。カノルがテーブルに向かって座り、ムエンダダが事務を執っている。

カノルが「原住民労働者の何人かが逃亡した。毎月賃金を払うと逃亡する奴が増えることはわかっている。税をもっと多くすれば、もっと働くだらう。一番忙しい時期だ。頭に来ている。黒い肌の奴を見たら殺してやりたいくらいだ。逃亡した奴は絞首刑だ。ナイロビは、入植民の中心地域だ。原住民の反乱を早い段階で封じるために、守備隊を固めなければならない」¹¹⁰⁾ などと言うと、それらが逐次、スワヒリ語やギクユ語に訳されていく。

ワグナー音楽が止むが、労働者たちは抵抗歌謡を、「女」は子守唄をうたい続けている。

カノルが笛を吹く。ニャバアラが労働者に歌を止めよと命令し、兵士が銃撃の用意をする。

スライドが消えると、カノルが裁判官の制服をまとい、法廷のシーンとなる。ムフウンジアが「法がなければ、文明はない。聖書は何と言っているか。召使

いは主人と同等ではない。平和、愛、法の下での統一。これら三つが社会の土台だ」と説教する。これに対し、カリウキが反論している「誰の法律か。誰が施行したのか。誰のために」。ニャバアラが答える「黙れ、この知りたがり屋。法は法だ」¹¹¹⁾。

こうして、ムフウンジアやニャバアラと、カリウキの間で植民地状況についての応酬が続く。カリウキの言葉に、労働者が加勢する。

これらの全場面で、カノルは裁判官、ムエンダダは法廷事務官兼通訳、ムフウンジアは聖書をかざす牧師である。キリスト教もまた権力的な抑圧装置の片棒であることがわかる。カリウキは、弁論の度に「神よ、我らはそなたを褒めまつる」(Thaai thaathai ya thaathaiya Ngai thaai)¹¹²⁾と締めくくる。労働者たちがこれに唱和する。この一句はギクユの祈り文句であり、50年代のマウマウ戦士たちの常套句でもあった。

ニャバアラ：カノルの眼の看板をなぜ壊したか。

カリウキ：沈黙と恐怖の眼。我らは恐怖支配を拒否するぞ。帝国主義は、
通り過ぎる雲にすぎない。

カリウキの死刑が宣告され、処刑のシーンとなるが、カリウキは最後まで銃弾に倒れることがない¹¹³⁾。カノルは、カリウキが農場でただ一人の機械工であったことから、死刑をあきらめ、職場へ復帰させる。労働者たちがカリウキの勇気を讃えてうたう。仕事へ戻る労働者たちの抵抗歌謡や労働歌が続く。

e. 第2幕2場 (pp. 76~95)

「女」がルオ語の子守唄をうたいながら、赤ん坊を探している。カリウキが棒切れの束を持ってうたいながら登場。反対側からニャジラが登場。カリウキとともに唱和する。二人は腰を下ろし、棒切れの教訓をカリウキがニャジラにマイムで教える。そこへ「女」が現れ、次のようなシーンを演じる。

女：あなたは誰？

カリウキ：カリウキだ！

女：カリウキ、カリウキですって！¹¹⁴⁾

「女」は、カリウキの頭を震える両手で触る。カリウキの背後に座り、カリウキの身体を挟むように両脚を広げる。ついで、カリウキの二度目の誕生儀礼

が執り行われる。

カリウキは、両手両脚を折り曲げ、横向きになって、胎児の恰好で眠りに入る。ニャジラが「女」の背後に立って、彼女を支えている。「女」が陣痛に耐えている。突然、赤ん坊の泣き声。女たちが男児の誕生を告げる 5 回のウルレーション。二人の女（ウルレーションをしたまま）が入場、赤ん坊を産湯につける。その二人が、赤ん坊の耳から汚物を取り除いているのが見える。女たちのウルレーションが始まるや一人の長老が、ビールを入れた角製の杯と緑の葉っぱを持って入場し、ウルレーションの数をかぞえる。5 回目のウルレーションが終わると、長老が大声で尋ねる¹¹⁵⁾。

長老：誰がやってきたか？

ニャジラ：カリウキですよ。

長老：カリウキだって？

ニャジラ：そうですよ。

長老が、床に酒を撒いて浄める。

長老：その子が元気に、たくましく育ちますように

大きくなって、この国を解放しますように！

この後、舞台のニャジラと「女」がうたうグシイ語、カンバ語の子守唄が聞こえる。

ニャジラが寝ているカリウキを起こす。カリウキは覚醒し、老人の教えが、カノルを撃ち倒すことだったと悟る。

カリウキとニャジラが唱和する：

お前たち切り株よ

我らのただなかにいる棘どもよ

明日には劫火が待ってるぞ

我らがケニアの夜が明ける時に。

この後、ニャジラの助けを得て、カリウキは銃を造ることになる。

その手順はこうである。ニャジラが、カノルの護衛警官に媚を売り、二人でおどり続けているうちに、カリウキが警官の銃を調べ上げ、銃の仕組みを見抜く。

カリウキと労働者が棺桶を担いで登場。棺桶には木材、パイプ、蝶番、ばね、など銃を造る材料が入っている。皆が歌をうたって、銃造りの音を掻き消し、出来上がる度に、銃を森や山に隠そうと言う。武装蜂起の準備である。ニャジラが見張りに立つ。労働者たちがムジリグをうたい踊る。すべての銃を造るには、数日かかる。一丁の銃が完成する度に、一、二の労働者が隠し場所へ運び、再びムジリグの踊りへ戻る。

見張りに立っていたニャジラが危険を知らせると、カリウキは道具を持ったまま棺桶へ飛び込む。他の者が、Mahooyahooyaga¹¹⁶⁾をうたいながら、棺桶を注意深く毛布で覆う。

調べに来たニャバアラと警官たちは、誰もが十字を切って、讃美歌をうたい、吊いをしているのを見て油断、ないし安心する。農場では、5人以上の集会¹¹⁷⁾が禁止されているが、敬虔なキリスト教徒へ戻っていると思い込むのである。

ニャバアラと警官が去ると、棺桶からカリウキが跳び出て、銃を造り始める。ニャジラは再び見張りに立つ。再び、ニャジラが危険を知らせる。彼らは前と同じように演じる。

カノル、ムエンダダ、ニャバアラ、警官、ムフウンジアが入場。皆が聖書の一節をうたっているのを知って、満足して退場。棺桶からカリウキが出てきて、前と同じシーンへ戻る。

カリウキがうたう：

土地
土地、この大地
おお、この美しい大地
イレギ世代の革命家たちから貰い受けたもの。

我らは帝国主義に売り飛ばされた
それは確実

我らとこの国は、金で売られた
「切り株」野郎、「棘」野郎、この裏切り者ども。

ムエンダンドは、愚かな痴れ者
ニャバアラは、間抜けな痴れ者
ケニアの民衆を帝国主義に売り飛ばした奴ら
わが民衆を帝国主義の犠牲に仕立てた奴ら。

この土地の者が力を得たら
この土地の者が権力を獲得したら
お前たち、帝国主義の小姓どもは
生き埋めになるだろう¹¹⁸⁾。

皆の手に銃が渡ると、カレンジンの抵抗歌謡がうたわれる。ついで、皆が隊列を組んで、戦意高揚の歌をうたう。カリウキが皆に銃の扱い方を教える。あらゆる農場へ出向いて、今夜、そろって「キパンデ」を焼き捨てようと言うのである。

彼らは戦意高揚のダンス MŪTHUŪ をうたい、踊る¹¹⁹⁾。

奴らは裏切って、私を 6 年の牢にぶち込んだ
奴らは裏切って、私を 6 年の牢にぶち込んだ
7 年目に、私は釈放された
7 年目に、私は釈放された
国のために、戦い死ぬ覚悟はあるぞ
国のために、戦い死ぬ覚悟はあるぞ

皆が踊りのステップを変えて、うたう：

Mother sing for me
Mother sing for me
With fists clenched in courage
With my fists clenched in courage
For I was being initiated into a patriot
For I was being initiated into a patriot
Mother sing for me.

Mother sing for me
For unless I die I will come home victorious
For unless I die I will come home victorious.¹²⁰⁾

母よ、我がために歌え
母よ、我がために歌え
私はこぶしを勇敢に握りしめた
私はこぶしを勇敢に握りしめた
割礼して、愛国者になるのだから
割礼して、愛国者になるのだから
母よ、我がために歌え。

母よ、我がために歌え
死ななかつたら、私は故郷に凱旋するぞ
死ななかつたら、私は故郷に凱旋するぞ。

f. 第2幕3場 (pp. 95~ 117)

武装したゲリラ兵の姿で労働者たちが登場。キパンデを高く掲げている。ニャジラは、売春婦の服を掲げ、歌をうたいながら、キパンデ、売春婦の服、筆記机、掲示板、標識などをその場に積み上げて燃やす。彼らは、Njookerio Maciaro をうたう。

首にかけたキパンデ、それは私の鎖
すべての富を取り戻そう
キパンデや奴隷制を燃やし尽くし
おまえたちが奪った富を取り戻そう。

おまえたち、ケニアの搾取者たち、ケニアの帝国主義者たちよ
すべての富を取り戻そう
おまえたちこそが、わが民衆の火で燃やすに値する
おまえたちが奪った富を取り戻そう ¹²¹⁾。

夜。武装した労働者が登場。ゲリラのスタイルでキパンデを高く掲げている。ニャジラが、売春婦の衣装を抱えている。キパンデや売春婦の衣装、身分証明書、猛犬注意の看板などが燃やされる。

皆が Njookerio Maciaro をうたっている：

お前たち、ケニアを搾取する者、ケニアに住む帝国主義者よ
すべての富を返せ
解放の闘いで死ぬ覚悟は出来ている
私から奪った富を返せ¹²²⁾。

彼らは火に油を注いで、一気に燃え上がらせ、ギリアマ語の歌 Na Kuche を
うたう：

May it dawn quickly
Hurrah
So I can fight
Hurrah
The White imperialists
Hurrah
May it dawn !¹²³⁾

夜が明けよ、早く
万歳
闘いだ
万歳
白人の帝国主義者ども
万歳
夜が明けよ。

ついで、銃声が聞こえ、カノルの勢力とカリウキの勢力の間に凄まじい戦闘
が起きる。この戦闘で、ニャジラがニャバアラを、次いでカリウキがカノルを
銃殺する。

少女たちが登場して、凱旋歌 Ithuĩ nĩ ithuĩ をうたう：

My name is patriot
For I am every ready to defend my motherland.¹²⁴⁾

私の名は愛国者
国を守る覚悟でいるから。

少女たちが別の歌 **Kanyegenyūri** をうたう¹²⁵⁾。

私は左足で踊る
そう、踊ってみるわ
だって、右足は刑務所へ向かっちゃった
ハリー・ヅク¹²⁶⁾に会うためよ
拘留された私たちのリーダーよ

少女たちが、次々に歌を変えながら退場していくと、別のグループが凱旋歌 (**kagica**) をうたい、踊りながら登場する。独唱者がうたうと、他の者たちが斉唱する。6人の独唱者とかけあいながら、カリウキもうたう。ここでは、マウマウ戦争時の歌も含まれている。

Soloist C : Kagica oh Kagica
Where were you when the colonialists invaded Kenya ?
Soloist D : Kagica oh Kagica
I was sitting in Nyandarwa hills.
Soloist D : Kagica oh Kagica
Holding a gun ready to fight for the motherland.
Soloist E : Kagica oh Kagica
Where do you hail from ?
Soloist F : Kagica oh Kagica
We hail from our guerrilla hideouts in Nyandarwa mountains, etc.¹²⁷⁾

独唱者 C : カギシャ、おお、カギシャ
植民地主義者どもがケニアへ来た時、お前はどこにいたか
独唱者 D : カギシャ、おお、カギシャ
私は、ニャンダルアの山にこもっていた
独唱者 D : カギシャ、おお、カギシャ
祖国を守る闘いで、銃を構えた
独唱者 E : カギシャ、おお、カギシャ
お前たちは、どこから雄叫びを上げるか
独唱者 C : カギシャ、おお、カギシャ

ニャンダルアの山のゲリラの隠れ家から雄叫びを上げるぞ。

彼らが退場すると、ムエンダダとムフウンジアが登場。カノルとニャバアラがいなくなった後の農場について、労働者の懐柔を図ろうとする。

ムエンダダは平和裏に問題を解決するために奔走し、植民地政府の意向と譲歩を農園労働者に伝える。彼は「すべての黒人は同じ仲間ではないか」と述べ、労働者が武器を放棄し、森や山から出て来て、植民地政府との会談に臨むように説得する。代表に選ばれたカリウキは、英語が解せないために、通訳・弁護士のムエンダダとムフウンジア牧師とともに、キパンデ制度、拷問、搾取、奴隷賃金、1900~1919年の抑圧法、女たちへの売春強要、民族文化への介入等の停止、民衆文化の発展、カノルが略奪した農園の返還等の要求を掲げて交渉に出かけた。

We sent three delegates
We sent three delegates
We sent three delegates
To the Governor
To the Governor
So that we the workers, the masses
Can say farewell to exploitation
So that our country, our lands will
Be liberated.
And we the Kenyan people will wake up
Mmmm ! Kenyan people, wake up
Mmmm ! Kenyan people, wake up
And to demand the return of the stolen lands
So that this beautiful Kenya
Shall be in the hands of Kenyan children
And we the people must now unite
All the workers in Kenya
All the peasants of all nationalities.¹²⁸⁾

三人の代表者を送った
三人の代表者を送った
三人の代表者を送った

総督のもとへ
総督のもとへ
搾取と別れるために
キパンデの拒否を知らせるために
我が国が解放されるために
ケニアの人々は目覚める

ケニアの人びとよ、目覚めよ
ケニアの人びとよ、目覚めよ

求めよ、盗まれた土地の回復を
この美しいケニアが
子供たちの手に戻るように

今こそ団結しよう
ケニアのすべての労働者
あらゆる民族の、すべての農民よ。

ムエンダダが、労働者に向けて、闘いの勝利、カノル農場の売却、キパンデの廃止など、勝利を宣言している。しかし、金のあるものだけが農地を自由に買い戻せると語った時、労働者たちは騙されていたことに気付く。「盗まれた土地を、なぜ金で買い戻さなければならないのか」¹²⁹⁾。

その結果、キパンデ制度の廃止を勝ち取り、カノルの農場は没収されて、アングロ・アメリカン果物倉庫会社のものとなったことが知らされる。しかし、この会社はカノル農場と同じく、ストライキの禁止、不法侵入者の排斥を定め、「猛犬注意」(Mbwa Mkali)の看板を掲げるとともに、労働者全員に新たな身分証明書の携帯を義務づけた。ムエンダダが、この会社の重役におさまる。

この時、カリウキの姿が見えない。ムエンダダは、カリウキが総督の元で協議を続行している、とその場しのぎの嘘をつく。

皆が歌い、踊りながら退場。

g. 第3幕 (pp. 108~117)

第1幕と同じ始まり。労働者たちが拷問を受けている。赤ん坊を探し続ける

女が目立つが、彼女は妊娠している。ニャジラの姿も見える。舞台後方で二人の労働者がスクリーンを掲げている。そこにケニアの地図が写され、「アングロ・アメリカン果物倉庫会社」とある。スクリーンの近くにムフウンジアが立って、棒切れで文字を指している。労働者が「カレソ」を歌っている。

アメリカなまりの英語¹³⁰⁾が響く。ムフウンジアがスワヒリ語に訳し、他の労働者たちが各民族語に訳していく。スライドで「ストライキ禁止」「違反すれば告訴」「身分証明書を携帯せよ」「猛犬注意」などと写し出される。犬の恐ろしい吠え声。犬の群れが身重の女を追いかける。「女」はスクリーンに向かって逃げる。

スクリーンが取り払われると人力車に乗ったムエンダダと妻マリザブが現れる。ムエンダダは黒いスーツを着て、鞭と笛、日よけ帽、鎖付きの懐中時計を持つなど、カノルとそっくりの姿である。彼は、多国籍倉庫会社の地元の重役である。妻は、紙幣でこしらえた扇子を煽ぎ、化粧に余念がない。二人の武装警官が付き添っている。その様子は、カノルの妻とそっくりである。

ムエンダダが犬を制止し、笛を吹くと、警官が労働者を枷から放つ。突然、身重の「女」がうたい出して、後方に退く。彼女の歌声に他の者が合流して、ギクユの抵抗歌謡「手を繋ごう」が歌われる。

女：おお、長の年月、私は拷問に耐えてきた

この土地を明け渡せという

起ち上がろうではないか

全員：そう、しっかり起ち上がろう

ムエンダダの奴を警戒しろ

あいつは、帝国主義の小姓だ

夜明けは近い、切り株どもを引き抜こう！

女：ああ、肉体の拷問、心の涙

神さまは、異国に追放されておしまいなのか。

全員：そう、しっかり起ち上がろう

敵の連中から身を守ろう

独唱者：泣くな、わが同胞よ

神さまは、いつか戻られる。¹³¹⁾

ムエンダダが笛を吹く。警官が銃の撃鉄を引く。労働者は沈黙し、ムエン

ダンダがムフウンジアにキリストの祈りを先導するよう命じる。

天にまします神よ
われらの心に平安を与えたまえ
たがいに慈しみ
愛と平安で結ばれますように
われらにお慈悲を
われらは罪を悔い改める
この農場に祝福を。¹³²⁾

この間、人力車から降りたムエンダンダは、労働者の間をねり歩いて、説教を垂れている。彼は「カノル農場」が「アングロ・アメリカン果物倉庫会社」に変わり、自分が重役であることを触れまわる。彼はこれを自ら祝うために、ニャジラに目をつける。彼女は抵抗し、誰もが彼女を助けようとするが、警官が銃を構える。

ムエンダンダ：
この女はおれのものだ
彼女が何と言おうが
おれはものにするぞ。

ムフウンジア：
お前たちは知ってるはずだ
ここでは、許可がなければ、
5人以上の集会は禁止だぞ。¹³³⁾

舞台の袖で、ムエンダンダがニャジラをレイプする。ニャジラの叫び声が聞こえる。ムフウンジアは、ムエンダンダを讃える説教を続けている。

(ムエンダンダの旦那は)
慈悲深いお方
神を愛し
教会を慕い
子供たちを愛する
時に涙し
飢えた子に

お金を恵まれるお方。¹³⁴⁾

ムエンダ نداが登場して、こう述べている。

Yes, money settles, decides everything
I'll wipe off her tears with money
Money straightens mountains
Money turns ugliness into beauty
Money rules the world
Every woman has a price !¹³⁵⁾

そう、銭が万事に決着をつける
ニャジラの涙を銭で拭ってやろう
銭は山をも平らに
悪を善に
醜を美に変える
世界を支配するのは銭だ
どの女も銭でけりがつく。

I want your loyalty
I want peace
I want unity
Do you hear ?
Love in unity and peace.¹³⁶⁾

俺に忠誠を尽くせ
平和だ
統一だ
聞いておるか
統一と平和、そして愛だ。

ムエンダ نداが、カリウキを引っ張って来るよう命令する。

こいつは牢に居た
今では、手も、舌も、耳もないぞ
なぜか。

知りすぎたからだ
分際を忘れ
銃を造るとは何事だ。¹³⁷⁾

人力車に乗って、ムエンダダが舞台から去る。誰もが驚きのあまりに沈黙している。カリウキが、束ねた棒切れの教訓をマイムで演じ始める。女が棒切れを集め、ニャジラに渡す。ニャジラが棒切れを一本ずつ拾い上げ、折っていく。束ねた棒は折れない。

ここで、一気に ÛÛRÛMWE「団結」の歌声が上がる。

Unity ! Unity !
Of us workers and peasants
And our fearless courage
Are what will liberate Kenya
Are what will liberate Kenya.¹³⁸⁾

団結、団結！
労働者と農民
恐れを知らない我らの勇気は
ケニアを解放する
ケニアを解放する。

ニャジラが、束ねた棒切れを高く掲げる。ついで、それらを銃に見立てて構える。彼女が、MÛÛNGÏKAIGUA TU ! TU ! TU ! とうたい始めると、皆が唱和する。武装闘争は近いとのメッセージである。

If ever you hear Tu ! Tu ! Tu !
It is not rain or thunder
It is the blood of us workers
Crying for Kenya our motherland.

And you the stumps
And thorns of the land
Fire awaits you tomorrow
When dawn breaks !¹³⁹⁾

ツ！ツ！ツ！という音が聞こえても
雨でもないし、雷でもない
我々労働者の血潮のざわめきだ
母なるケニアを求めて叫ぶ声だ。

お前たち、切り株ども
大地に生える棘ども
明日は火だぞ
この夜が明ければ。

幕

⑤ 二つの対立する力：支配と抵抗の弁証法力学

植民地支配の力関係を、カノルとその手下であるニャバアラ、ムエンダダ、ムフウンジアの視点から見てみよう。

a. 支配の系譜：カノルの時代

農場主カノルは、南アフリカ出身のボーア白人で、ジョージ・スコットというのが本名であった。しかし、アフリカ人労働者は、彼のことをズクム・カノル、つまり「太っちょ、デブ」と呼び、その農場は「カノル農場」と呼ばれた。カノル（Kanoru）とは、ギクユ語で「太っちょ、デブ」の意であるが、植民地期には意味が拡大して「帝国主義者」をも指すようになった。彼は、キパンデを焼き捨てた労働者を容赦のない拷問にかけ、この騒擾の首謀者探しに躍起になっている。カノルは直接に手を下さない。犬をけしかけ、アフリカ人の手下を使い、自分は鞭と笛で命令をくだすのである。

彼は情け容赦のない残忍な男である。「カノルは自分の息を無駄使いしない。言葉少なく、主義信条は行動で示す」¹⁴⁰⁾という。彼は、キパンデ制度を南アのパス法に代わるものと考え、高く評価している。ボーア白人の選民意識¹⁴¹⁾と冷酷無情さをむきだしにする男であり、銃を造ろうとした老黒人を虐待し、カリウキに銃の造り方を教えたという理由で、最後には銃殺してしまった。

カノルは、自分の似顔絵「恐怖の眼」を描いた大看板を農場に掲げさせ、次のように書き込ませた。「カノル農場。どこにしようとも、何をしようとも、お見通し。食事中でも、酒を飲んでいる時でも、働いている時でも、道端にいる

時でも、たとえ寝ている時でも、おまえたちの考え、おまえたちの話していることはわかる。猛犬注意。銃弾が待っている」¹⁴²⁾。

カノルは、若くて美しいニャジラをレイプした。牧師としては、アフリカ人の改宗に熱心である。

農場では、労働者の逃亡を防ぐために、各種の法規が定められている。低賃金のうえに、重税、厳罰（絞首刑または銃殺）が課され、監視体制が強化されている。法に違反する者は、カノルが裁く。アフリカ人（「原住民」と呼ばれる）の蜂起に備え、ナイロビには駐屯軍を常備し、厳重な警戒体制が取られている。カノルは農場主であるが、同時に牧師であり、裁判官でもある。つまり、植民地の全権力を一身に集める人物である。農場経営は植民地経済の根幹をなし、低賃金と強制労働によって、アフリカ人から搾取し、植民地と宗主国に富をもたらした。キリスト教は、アフリカ人の宗教的・精神生活を支配し、現実の隷属状況から眼を逸らせ、自己の文化価値の否定に向かわせた。司法権力は、植民地体制の法と秩序を保証し、強者による支配を固めさせた。

しかしながら、カリウキに指導された「マウマウ」を想起させる武装闘争によって、強権支配は終わり、農場は国際資本が経営する倉庫会社になった。

b. 支配の系譜：ムエンダダの時代

ムエンダダは、カノル農場で働く労働者である。ムエンダダ (Mwendanda) とは、ギクユ語で「自分の腹を肥やす男」の意である。私利私欲から、同胞を裏切る人物であることが名前から明らかである。彼は、カノルの鞭で動くロボット人間であるが、英語が理解できるために通訳として働くばかりか、カノルと一体化した存在であった。彼は、労働者のリーダーであったカンゲゼを売り渡し、報償を貰い、カノルの手足となった。

カノルの死後、ムエンダダは、農場の騒擾を解決するために、英語の能力を活かして植民地政府との交渉に一役かっている。彼は、キパンデ制度の撤回という政府の懐柔策に手を貸し、労働者に要求を取り下げさせ、政府との対決を回避させた。ムエンダダは、その見返りとして「アングロ・アメリカン果物倉庫会社」の重役にのし上がる。

肌の色は違っても、ムエンダダはカノルとそっくりである。カノルと同じ服装をまとい、アングロ・アメリカン果物倉庫会社のマーク（鷲と AAFSCO の

イニシャル) ¹⁴³⁾ の入った日よけ帽を被っている。人力車に乗ったムエンダダの側には、妻のマリザブがいる。彼女は紙幣をはり合わせて作った扇子を煽ぐだけで、周囲の出来事にはまるで無関心である。二人の武装警官が、常に彼らを護衛している。彼は警官を使って労働者を支配する。人力車夫であり、牧師でもあるムフウンジアは、ムエンダダの意のままに、労働者の宗教生活を司るのに忠実である。

こうしてみると、ムエンダダはカノルと同じ道を歩んでいることがわかる。南アフリカの貧しいボーア出身のカノルは、ケニアへ入植し、植民地政府に協力して成功を収めた。ムエンダダも、もとは貧しい農場労働者であったが、カノルがいなくなっからは、政府と外国資本をバックに、権力の階段を登った。

カノルの時代も、ムエンダダの時代も、キリスト教は抑圧装置として働いている。キリスト教は、常に支配者の側にある。ムエンダダは「文明化とは、キリスト教徒になることである。文明化の根本は、法と秩序である」と強調している。彼は、道端、山々、平原、あらゆる街角、村々に教会を建てる夢を実現するために、牧師のムフウンジアに大金を与えて、石造りの教会を建てるように命じている。「金が山を平らにし、金が腐った膿を、甘くとろける蜂蜜に変える」¹⁴⁴⁾ と主張してはばからない。

だが、ムエンダダは金でニャジラをいいなりにすることは出来ず、銃で労働者を沈黙させることも出来なかった。彼の常套句「愛・平和・統一」は絵空事となる。彼は、腕も、舌も、耳も奪われたカリウキを「見せしめ」として、強権支配の延命に利用しようとはかる。

ムエンダダは、キリスト教権力の代弁者であり、白人文明のスポークスマンでもある。キリスト教は、社会を統一する力でなく、分断する力になっている。大衆を無力化し、現実からの逃避を誘う役割を担っている。

このように考えると、ニャジラが舞台袖で、カノルにレイプされるのは、キリスト教が民衆の魂、伝統の価値を凌辱することを表しているのだろう。キリスト教にとって、黒人が抱く自己解放への願望、伝統への復帰は常に罪深い。じっさい、キリスト教権力は、常に支配階級による搾取に大きな役割を担ってきた。

c. 抵抗の系譜：カンゲゼ、カリウキ、ニャジラ

カンゲゼは、最初の指導者であった。機械工の象徴とも言える油のしみついた作業ズボン姿のカンゲゼは、7日連続の拷問に耐えた。しかし、裏切り者ムエンダンダによる暴露により、キパンデの焼き捨てを扇動したとして、銃殺された。カンゲゼの勇気と確信は、処刑前の彼の言葉から推察できるが、その抵抗精神は、ハリー・ヅクや多くの指導者たちから譲り受けたものである。カンゲゼの名は、歴史上の人物、KCAの創設者ジョゼフ・カンゲゼ (Joseph Kang'eze)¹⁴⁵⁾ の名を髣髴とさせる。

カンゲゼを継いで、二代目のリーダーになるのがカリウキである。カリウキ (Kariuki) とは、先述したとおり、ギクユ語で「再生・復活」の意である。しかし、劇の前半では、カリウキは拷問に脅え、カノルの「恐怖の眼」に取り憑かれた臆病で、ひ弱な人物として登場している。彼は、カンゲゼの作業ズボンを無理やりに着せられる。ギクユの俗信では、「死者の服を着てはならない」とされるため、この禁忌を破るのが怖くて仕方がない。ポケットから出てきた KCA の会員証は、彼の恐怖をいっそう煽るだけである。ここまでのカリウキは、カンゲゼの衣装を着せられていても、いわばその「亡霊」にすぎず、実体がない。

カリウキは、現実からの逃避を何度も試みている。劇の初めでは、農場労働者たちの抵抗に方向性は見られない。「どうすればよいのか」といった疑問に終始しており、その対応は「キリストに祈る」ことだった。

しかし、カノルにレイプされ、売春婦に身を落とした後にニャジラが示した勇気と決断、カンゲゼや老人の、死をものともしない決意、これらがカリウキに自分の生き方を考え直す機会となった。カリウキの「再生」儀礼を司ったのは、赤ん坊を失った「女」であり、ニャジラは「女」の背後から、この「再生」を手伝った。

最も決定的なのは、老人の存在である。一本の棒は弱くても、束ねた棒は誰にも折ることが出来ないと教える老人から、カリウキは労働者の団結の必要、自分に対する他の労働者の期待の大きさを知ることになる。カリウキは老人から銃の造り方、狙いの定め方、発砲の仕方等を教えられる。しかし、老人は、農場に建てられた大看板「恐怖の眼」に狙いを定めて発砲する姿勢をとった所を見つかり、射殺されてしまう。この老人ムズウリは、以前は、実際に銃を造っている現場を見つかったために、見せしめとして、耳が聞こえず、口がきけなくされていた。今度はカリウキに銃の造り方を教えたために、殺されてしま

った。

この後、カリウキは、老人に教えられた通り、農場で武装決起を促し、カノルの「恐怖の眼」を描いた看板を壊してしまう。

ニャジラは、若くて美しい、聡明な女性である。ニャジラ (Nyathira) とは、スワヒリ語で「美しい娘」の意である。植民地下の女性として、二重に搾取されてきたケニア女性を象徴していよう。カノルにレイプされ、売春婦に落ちぶれるが、最後にたくましく民衆のもとへ戻ってくる。

カンゲゼの死後に労働者の取るべき行動は、ニャジラの言葉に託されている。

「どうして、彼を死なせてしまったのか。これからどうすればよいのか。人喰いのカノルから私たちを救うのは誰か」¹⁴⁶⁾。

d. 抵抗の系譜：老人と「女」

「女」が暴力によって流産させられたのは、実際には、権力者が抱いている恐怖をあらわしていよう。「女」が、産み育てることの出来なかった「我が子」にうたう歌は、ギクユ、ルオ、カンバ、グシイなどの子守唄であるが、これはさまざまな民族集団が結集して、彼らの「子どもたち」、つまり未来の「戦士」「解放者」を集団で奪い返えそうとしているのだと読み取ることが出来る。

「女」がとりしきったカリウキ「再生」の儀礼は、ギクユの成人儀礼である「割礼」に似ている。カリウキは、これによって、成熟した戦士に生まれ変わるのである。「再生」後のカリウキは、銃を造る作業にとりかかる。労働者たちは「新しい力と決意」をカリウキに吹き込む歌をうたう。この歌とともに、武装闘争の必然性が再認識される。

老人の役割は象徴的である。カリウキに武装闘争の大切さを教えたのは、この老人だった。耳が聞こえず、口もきけないが、老人は十分なメッセージを送っている。彼は、三本の棒の教訓をマイムで演じるだけである。しかし、それらを一つに束ねる赤い紐は、労働者が共有する文化、伝統だという。老人は、マイムを演じて、団結の力、統一の力としての文化、伝統を教えていたのだった。文化の共有意識が武装闘争への跳躍台となること、それが、共通の階級意識へと高まることを教えていたのだった。この教えがなければ、カリウキの成長はなかった。

カリウキは、「お前たちが、われらの伝統、われら労働者の伝統、イレギ世代の革命家たちから受け継いだ伝統を拒否しても、私の決意は揺るがない。われらの伝統を捨てはしない」¹⁴⁷⁾と叫び、キリスト教の聖書を払いのけ、「私は黒人の神の前で、真の人民の裁判の前で、真実を述べることを誓う。真実以外には何も述べない」¹⁴⁸⁾と声明する勇気を示した。

しかし、カリウキが死んだ老人の言葉を本当に理解するのは、「再生」の儀礼の後である。この時、彼は「勇気の歌をうたうだけでは十分でない。権利の歌をうたうだけでは十分でない。権利を要求し、勇気を持って団結することが大事だ。歌だけでは、首にぶらさげたキパンデの鎖から解放されない。あらゆる権利を要求する時、我々の勇気と団結は新しい力となる」¹⁴⁹⁾ことを悟った。

その後、カリウキはすべての農園労働者にキパンデを持って集まり、キパンデを焼き捨て、新しい人間、愛国者に生まれ変わろうと呼びかける。こうしてカノルの側とカリウキの側の激しい衝突となり、カリウキはカノルを射殺する。

このシーンは、30年代ケニアの民族闘争の気概を示すものと読み取れるが、この時にうたわれる歌は、50年代の「マウマウ戦争」の歌が多い。したがって、カノルが殺され、その後に欧米の多国籍企業の進出、財政界、教会などの指導者がアフリカ人に代わっていることなどから、ケニアが植民地支配からの独立を獲得した後の社会状況と二重写しになっていると言えるだろう。

これを示すもう一つの例として、劇中カンゲゼの銃殺は、1922年3月のハリー・ヅクの投獄になぞることが出来るが、これに対し、カリウキの殺害は、1975年3月の反体制国会議員 J. M. カリウキの殺害を髣髴とさせる¹⁵⁰⁾。

したがって、この作品は20~30年代の植民地期、50年代のマウマウ戦争、そして60年代以降の独立の時代へと、ケニアの20世紀状況を俯瞰するものでもある。新しい時代のキパンデとは、現在も16歳以上の男女に携帯を義務づけている「身分証明書」のことであろう。ここには、植民地時代そのままの記載事項が記入されている。これは、単なる身分証明書ではなく、アフリカ人の自由な移動を制限するものでもある。それは、正規の労働力として認められないアフリカ人を、白人の居住区から締め出す目的で作られたアパルトヘイト下南アフリカのパス制度と同じものである。また、「過去を忘れ、愛と平和と統一」¹⁵¹⁾とのムエンダンの主張は、初代大統領ケニヤッタのマウマウについての言説

「赦して忘れよ」、第二代大統領モイの政治哲学とされたニャヨイズム (Nyayoism)¹⁵²⁾ (ケニヤッタ路線の継承)「愛・平和・統一」を思わせる。さらに、ムエンダンダが身につけた「赤いシャツ、黒いスーツ」は、当時の KANU の制服でもあった。

カノルの死によって、次に黒人のムエンダンダが権力の座へ登った。労働者は、これによって、植民地期の抑圧は終わったと思った。だが、カノルは制度を支える一員にすぎなかった。カノルの死後も、社会構造に何の変化もなかったのである。したがって、その後に起きる出来事は、独立後の問題でもある。労働者の代表に選ばれたカリウキは、通訳ムエンダンダ、牧師ムフウンジアとともに、キパンデ、拷問、搾取、奴隷賃金、1900~1910 年の抑圧的な労働法、強制労働、女たちへの売春強要、民族文化への介入などを阻止し、伝統文化の発展、カノル農場の返還要求を掲げて政府との交渉に出かけた。その結果、キパンデ制度は取り下げられるなど、一定の成果を得たが、政府と提携したムエンダンダは、カリウキの腕、舌、耳をもぎとることに手を貸す。カリウキは、老人と同じく「見せしめ」とされたのだった。

独立達成の幸福感と、その結果の偽善。これがこの劇の皮肉な構造の一部になっている。死んだはずのカノルが生き返るのである。「独立」は、達成、再生とはならず、むしろ悪夢、喪失となった。ケニア (アフリカ) が獲得したとされる「独立」「脱植民地化」は失敗、ポストコロニアル時代の反ユートピアとして描かれている。

⑥ タイトルの意味するもの

「母よ、我がために歌え」は、もとはマサイ人の村に牛の略奪遠征に出かけたギクユの若い戦士たちの凱旋を讃える歌である。戦士が無事の帰還を知らせ、母親から歓迎のウルレーションを期待してうたわれる歌である。この劇では、植民地、新植民地期の強権支配に対抗して闘っている息子、娘たちを讃えて、ケニアの全母親がウルレーションを発することを期待している。

タイトルにある「母」とは、誰のことであろうか。流産させられた「女」とニャジラは、劇中で歌をリードする重要な役割を担っていた。「女」は赤ん坊を失ったが、「再生」の儀礼を通して、母の役割を果たし、カリウキを闘争の指導者へと脱皮させた。ニャジラは、農場での苦役の後、売春婦へ転落させられたが、最後には、カリウキを助けて労働運動の指導者へと自己変革をとげた。

劇中「我々の母は誰か」とのカリウキの問いに、労働者たちは「ケニア」、「われわれの土地」だと答えている。「ケニア」を「母なる祖国」「母なる大地」ととらえる観点から、ニャジラは自分が受けたレイプを、自分の肉体、つまり「ケニア」が植民地主義者により凌辱されたと考えている（ちなみに、ギクユ語やスワヒリ語では、「国民」のことを、字義通りには「大地の子」Mwananchi / Wananchi ; mūdũ mūrĩmi / andũ arĩmi という）¹⁵³⁾。

彼女は、次のように歌った。

And then one man stood up
And he spoke like a true patriot.
He told us : Stop weeping
Our women are daily giving birth to liberators.¹⁵⁴⁾

その時、一人の男が立ち上がり
愛国者の声で語った
泣くのは止めよ
女たちが、日々、解放者を産んでいるではないか。

この歌は、女たちが新しい闘争の担い手となる子供を日々誕生させていると歌い、現在の隷属状況を嘆くのではなく、希望を持って解放闘争に立ち上がることの重要性を呼びかけている。

ムエンダンダが、レイプしたニャジラに札束を渡そうとする。彼女はその札束でムエンダンダの顔をまともに叩く。散った紙幣を、恥しめを受けたムエンダンダがかき集める。身重の「女」が、ニャジラをしっかりと抱きしめる。この時、労働者たちは、喜びの声を上げて歌う。

Nyathĩra oh our mother
You have been tortured and humiliated
So that you would let this land go
Stand firm and know that
We the masses are with you ! ¹⁵⁵⁾

ニャジラ、われらの母よ
あなたは拷問を受け、辱められた
この国を生かすために

しっかりと立ち上がれ
我々は皆お前の味方だ。

ニャジラに対して「われらの母よ／あなたは拷問を受け、辱められた」と歌うのは、ニャジラ個人のことを指しているのではない。植民地支配の屈辱を浴びたケニアの大地のことである。カリウキがムジリグの歌と踊りから勇気を得たように、ケニアの解放闘争に労働者・農民が団結して立ち上がる勇気を奮い立たせたいとの願いが、この劇の表題『母よ、我がために歌え』に込められている。

⑦ 文化と抵抗の力学

このミュージカルは、他のどの戯曲と比べても、より実験的な性格が強い。それだけに、作者にとって最も野心的な作品だと言えるだろう。台詞を出来るだけ少なくし、歌と踊り、マイムを最大限に活用している。法令の文章、写真、新聞記事などを投射するスライドを多用している。これらは、ブレヒト劇の手法を思わせる。

登場人物に関して言えば、カリウキとニャジラ以外の人物は、相当にステロタイプ化されている。カノルとムエンダダを繋ぐ支配の系譜は、カンゲゼとカリウキを繋ぐ抵抗の系譜と並行している。こうしたシンプルな手法は、コミュニティ演劇としてのわかり易さ、娯楽性を優先した結果であるのだろう。

カリウキがカンゲゼの作業着を着せられるのは、結果的に、カンゲゼの復活に繋がる儀礼的意味を持つ。それは、キリストの復活にも似ている。よく知られるように、十字架に磔になる前に、キリストからはぎ取られた着物は、磔にした者に分け与えられた。じっさい、第 2 幕に登場するカリウキには、キリストの風情が伴っている。

これに対し、ギクユをはじめ、ケニアの諸民族の伝統文化、とりわけ歌や踊り、幾つもの儀礼や宗教は、諸民族のルーツとして、民衆の自由への渴望、抱負、希望を象徴するものとなり、彼らの闘いを鼓舞する原動力となっている。カリウキの裁判シーンに見られるように、支配階級との闘いは、ギクユの神とキリスト教の神とのたたかいに似せられる。民衆は、「ザーイ・ザーザイーヤ・ンガイ・ザーイ」（「平和を、平和を、神よ、平和をしろしめ給え」）¹⁵⁶⁾と民族の神が仲介することを祈っている。

この劇を含め、カミリズ劇は二つともが、植民地支配に対するケニアの土着の抵抗形式に根を張っている。伝統文化が、抵抗の力になることを示す典型例の一つが、「ムジリグ」(Mũthĩrĩgũ)の歌と踊りだ。

「ムジリグ」は、力強く、情感に富んだ政治色の濃いバラッドである。女子の割礼時に歌い、踊られるもので、スワヒリ人の「ムセレゴ」(Mselego)¹⁵⁷⁾を応用したものと言われるが、その場の状況に合わせて即興的な歌詞が多く挿入されるのが特徴である。ギクユの割礼、特に女子割礼の是非が問題になった20年代末期頃、これに反対する伝道団とアフリカ人キリスト教徒らを批判・揶揄して、29年10月にナイロビに近いカベテで踊り、歌われたのが「ムジリグ」の最初だと言われる。翌年1月に政府は禁止令を出したが、効力は乏しかった。あるヨーロッパ人宣教師によれば、ムジリグは「ジャズ風の曲調で、原住民が好む悪魔的なもの」¹⁵⁸⁾だと言う。禁止令が出てからも、強制労働の拒否、キリスト教への反発、政治的抑圧、植民地支配に協力するケニア人への批判を込めて、抵抗歌謡として受け継がれた。

⑧ 「母なるケニア」の再定義

カリウキが解放運動の指導者として生まれ変わり、銃造りに専念している時、労働者が植民地政府から禁じられていた「ムジリグ」を踊り、歌っている。これは、植民地支配を受ける以前の「母なるケニア」を取り戻そうという願望の表明でもあるのだろう。

30年代に歌われ、踊られた「ムジリグ」はその典型例の一つである。以下に、歌詞の一部を紹介しておこう。

We dance in our national dress
And dance fearlessly, proudly
Till the missionary
Bites his lips in envy and anger. ¹⁵⁹⁾

民族衣装で踊ろう
怖がらず、誇り高く踊ろう
宣教師が
羨望と怒りで唇を噛むまで。

My father is circumcised

Baba ni muruu

And my mother is circumcised	Na maitũ ni muruu
I a [true] Gikuyu	Nii Mugĩkũyũ
Will not change my beliefs. ¹⁶⁰⁾	Ndingigarura ndini.

父は割礼を受けた
母も割礼を受けた
私は、正真正銘のギクユ人
我が信仰を捨てたりはしない。

The deacon's uncircumcised daughter	Kirigu kia ndikohi
Gave birth to only one child	Kiragiire mwana umwe
For whom she chews roast maize	Kiratanukira ng'ara
And when she goes to the farm	Na giathui muguunda
She climbs castor oil tree. ¹⁶¹⁾	Gikahacia miariki.

教会執事の、割礼を受けなかった女は
一人の子供しか産めなかった
焼いたトウモロコシは、誰のために嚙んでやるのか
畑に行けば
自分がヒマの木によじ登る。

以下は、「ムヅウ」(Mũthũũ) ¹⁶²⁾ と呼ばれる歌と踊りである。

剣を掲げて、ムヅウを踊ろう
裏切り者の剣ではないぞ
裏切り者の剣は箱の中にしまった
鍵を探し求めよう。

この国の解放のために
植民地主義の使者どもの骨を打ちくだそう
裏切られて、6年間も私は牢にぶち込まれた
7年目に釈放されたが ¹⁶³⁾。

この立派な武器を見てくれ
土地のために闘い、死ぬ覚悟は出来てるぞ ¹⁶⁴⁾。

以下では、ステップが変わり、もう一人の独唱者がリードする。

母よ、我がために歌え
植民地主義者の妻である女が
心血を注いできたこの大地に
私が不法に侵入したと主張する
私は勇気の鉄拳を固めるぞ
愛国者になる儀式をすませたから¹⁶⁵⁾。

おまえたち土地の切り株よ
私たちが帝国主義者を打ち倒せば
おまえたちはどこへ行くのか¹⁶⁶⁾。

母よ、我がために歌え
私が死ななければ
勝利の帰還が出来るから¹⁶⁷⁾。

「ムジリグ」のほかにも、キマジの「ギシャム演劇」(Gicam Theatre)¹⁶⁸⁾、ルヒヤ人起源の「ニヤングイシュ」(Nyangwicu)¹⁶⁹⁾など、多くの民族舞踊と民族歌謡の伝統が取り入れられている。

植民地下での文化と表現について、グギは別のところで、以下のように述べている。

「帝国主義からの全面解放を求める闘いの中から、新しい文化が生まれています。このことは、発展途上国の都市地域に住む労働者たちの詩や歌や演劇にはっきりと見て取ることが出来ます。それは闘いの文化です。さまざまな要素を融合していますが、この文化は農村の抵抗の文化と基本的に一致しています。都市と農村との闘いは、奴隷身分的な土着の支配階級と帝国主義との提携による搾取と支配に対して、実際には一つになって反対しているのです。労働者と農民は、発展途上国にあつては、真に現代的な文化の担い手であり、生み出し手となっています。なぜなら、植民地、新植民地段階を通じて、彼らは西洋ブルジョアジーの価値や世界観の真っ赤に燃えた焼きごてを自分に押されることのないよう抵抗してきたからです。これらの労働者、農民の文化の性格は民族的なものであり、あらゆる形の外国支配とは根本的に対立しています」¹⁷⁰⁾。

このように見てくると、植民地経験を抜きに、「ギクユ」（ひいてはケニア、アフリカ）の民族と文化を語ることは不可能であることがわかる。もちろん、植民地以前から、「ギクユ」は、共通の言語、共通の血縁・出自、信仰体系を持っていたことだろうが、それが共通の民族意識、「我々是一只だ」という確実な民族アイデンティティの創出には繋がらなかった。したがって、それにふさわしい社会機構を作り出す必要もなかった。

よく知られるように、もともと「ギクユ」は無頭制社会であった。それが、植民地経験という共通の試練の中で、新たな抑圧体制への抵抗であれ、協力であれ、おそらく 20 世紀の初め頃には「ギクユ」としての集団意識が確実に顕在化し、実体を持ち始めたものと考えてよいであろう。この劇でも、労働者は、自分たちが「一つの文化集団」に属することに覚醒し、支配に抵抗する中で、プロレタリア意識とともに、ナショナリスト意識を醸成し、これが彼らの民族的再定義に繋がったことが読み取れる。文化の共通認識が、やがて階級的な連帯意識を生み出している。たたかいが、民族のアイデンティティの確立に繋がっている。

ひるがえって、グギの戯曲作品は、初期のものから現代まで、批評の対象になることが少なかった。彼の文学的力量が、もっぱら長編小説に結晶していることは確かだろうが、短篇や戯曲は決してその付属物というわけではない。何といっても、戯曲作品は彼の文学歴で先行したものであり、1977 年の拘禁、1982 年の海外亡命へのきっかけになったのも戯曲だった。

ここで大切なのは、初期の英語戯曲とカミリズ村のコミュニティ演劇活動が一つの連続として繋がっていることである。演劇テキストの意味、その重要性、舞台の美学批評が大切である。これまでは、作品の社会学的説明、社会政治的意味の究明が支配的であったように思われる。

グギの場合、すべての戯曲は、初めから上演（パフォーマンス）のために書かれてきた。パフォーマンスは、ある文化の中、ある社会状況のなかで実現されてきたことを留意しておかなくてはならない。別言すれば、テキストとコンテキストの相互影響に注目しておかなくてはならないということである。テキストの意味は、テキストが置かれた歴史状況を再建することで、より深く理解されるであろう。カミリズ村のコミュニティ演劇の場合、役者や観客は、ごく極限された、身元の明確な人々であった。彼らは、著者と共通する過去の体験を持つと同時に、より広く、民族的、言語的、文化的背景を共有する人々であ

った。

カミリズ演劇では、登場人物の類型化（登場人物の名前から明白である）があり、同時に教育とエンターテインメントの要素も濃い。ギクユ語で「演劇」を意味する *Ithaako rĩa ngerekano* とは「比較・アレゴリーの遊び」が原意である。こうした特徴は口承文学とも共通していよう。カミリズ劇二つは、役者や観客の証言に見られるように、民衆の意識化の最も成功した先端例と見る事が出来るだろう。

⑨ 余録

a. ケニア国立劇場での上演不許可をめぐって

先述したように「母よ、我がために歌え」は 82 年 2 月 19 日から 3 月 20 日まで、「デダン・キマジの裁判」は同年 3 月 10 日から 3 月 20 日まで、いずれもナイロビの国立劇場で上演される予定だった。ケニアでは上演活動をする場合、演劇グループは登録手続きをとり、政府から上演許可を得なければならない。この制度は、植民地時代から受け継がれたものである。

カミリズ村の野外劇場でなく、ケニア国立劇場での上演を望んだのは、主にスライドによる映写、ヨーロッパ音楽の演奏にオーケストラを必要としたからだった。リハーサル期間中は、これらは割愛された。しかし、上演許可申請の努力や熱心なリハーサルにもかかわらず、公開されることはなかった。この間の経緯を見ておくことにしよう。

カミリズ演劇グループは、82 年 2 月 15 日（月曜日）に、約 40 人の役者と機械技術者がリハーサルのためにナイロビの国立劇場前に集まった。しかし、劇場使用の許可が必要とされ、リハーサルは出来なかった。リハーサルはその週の月曜から金曜までの予定だったが、文化社会大臣の秘書が「大臣は、カミリズ村のことで誰とも話し合う用意はない」と対応して、リハーサルのための劇場使用許可は得られなかったと言う。

そこで、2 月 19 日以降は、国立劇場に隣接するナイロビ大学構内第二シアターでリハーサルを続けたが、ここでの 7 日間のリハーサル期間中に約 10,000 人がこれを観たとされる。ところが、2 月 25 日、大学側が構内施設の使用を禁じる旨を電話で通達してきた。この時点でも、政府からは、国立劇場での上演許可申請に対して公式文書での返答を受けていない。

3月10日、グギ・ワ・ジオンゴがカミリズ演劇グループを代表して抗議声明を発表した。この日の記者会見で、読み上げられた声明文に従って、ここに至る経緯を紹介しておこう。要旨は以下の通りである。

「81年11月2日付でナイロビ地区行政官に、上演許可申請書を提出し、同年11月12日付でも督促状を添付して、再度の申請をした。(カミリズ演劇グループの) コミュニティセンターがキアンブ地区にあることを理由に、キアンブ地区行政官からの推薦状が必要であるとの返事を、同年11月18日に受け取った。そこで11月23日付で、キアンブ地区行政官に書類を提出した。返事がなかったため、同年12月と82年1月中は、カミリズ演劇グループの代表グギ・ワ・ミリエが結果を聞くためにキアンブ地区とナイロビを往復した。82年2月3日、ナイロビ地区行政官宛に督促状を出した。さらに2月16日、三度目の督促状を出した。申請書や督促状には何の返事もないまま、2月15日にはケニア国立劇場でテクニカルなリハーサルを行なう予定でいたが、これの使用に関して国立劇場側に許可しないようにとの政府の通達があったと聞かされた。2月19日当日は、開演予定の6時まで、許可が下りるのを期待して、カミリズ演劇グループが国立劇場の前で待機している間、警察が警戒を強めていた」¹⁷¹⁾。

記者会見の翌日、すなわち82年3月11日、政府はカミリズ教育文化コミュニティセンターの登録を撤回し、同地域での一切の演劇活動を禁止した。この日、中央州行政長官デイビッド・ムシラは、カミリズでのすべての演劇活動を禁止する命令を出し、識字教育計画の実績を強化するため、野外劇場跡に技術訓練所を建設する政府計画を発表した。センターを運営してきた委員会を解散して、あらたに選ばれた9人の委員が運営にあたり、議長が州行政官によって指名される旨が発表された。

この措置が発表されると直ちに、キアンブ地区社会発展行政担当官ムニャシアは、センターの指導者グギ・ワ・ミリエに、カミリズ演劇グループの登録を取り消す旨を決めた文書を手渡した。そこには、「登録2104号は、この書簡(1982年3月11日付)の日付をもって無効にする」¹⁷²⁾と書かれていた。3月12日午前11時頃、リムル地方長官が、三台のトラックに乗り込んだ武装警官を送り込み、カミリズの野外劇場は取り壊された。取り壊しの際に、手が付けられなかったのは、劇場を取り巻く竹垣だけだった。カミリズ教育文化コミュニティセンターの名称は、カミリズ・ポリテクニック識字教育センターと改名された。

「デイリー・ネーション」紙(82年3月12日号)によれば、州行政長官ムシラは「リムルの人々は開発を望んでおり、演劇活動は人々に識字教室離れを

誘発している。演劇の専門家はどこか他の場所へ行けばよい」¹⁷³⁾と述べたと言う。また、モイ大統領は「カミリズ演劇グループは、文化の隠れみのを着て、政治を教えようとしている」¹⁷⁴⁾と演説し、その演劇活動を禁止する正当性を宣伝した。

ハイネマン教育図書出版社に勤め、同社の「アフリカ人作家シリーズ」の卓越した編集者として知られたジェームズ・カーリーは、実際にこのリハーサルを観ることが出来た。彼によれば、「リハーサルを観ていた多くの人々が、最後の場面では、役者と一体になって、歌に加わり、踊りに興じた。ケニア政府が上演申請を認めなかったのは、この劇の内容よりも、この劇に結集した民衆のエネルギーを懸念したのであろう」¹⁷⁵⁾と言う。

b. ジンバブエ招待公演計画をめぐって

1981 年、前年に独立したばかりのジンバブエの首都ハラレで、「ジンバブエにおける教育—過去・現在・未来」と題するセミナーが開かれた。ケニアからグギ・ワ・ジオンゴや、当時のナイロビ大学文学部長ミシェレ・ギザエ・ムゴらが出席したが、この時、ムガベ首相や教育文化相のンジンガイ・マツムブカらがグギのスピーチに大いに感銘したと言う¹⁷⁶⁾。

そこでジンバブエ政府は、翌年 4 月の独立 2 周年記念の取り組みの一つとして「母よ、我がために歌え」の招待公演を計画した。

これにともなって、82 年 2 月 17 日、ジンバブエの文化担当官らがカミリズ演劇グループのリハーサルを見学するためにナイロビを訪問することになっていたが、ケニアの高等弁務官はこの訪問を中止するよう求めた。ケニア政府の説明では、カミリズ演劇グループは政治的理由で活動禁止処分にあるために、外交問題を懸念するとの意向であったと言う。

ジンバブエ公演の約束は、同国の教育文化相とグギ・ワ・ジオンゴとの間の直接交渉によるものであったが、ケニアで上演が禁止され、カミリズ演劇グループの登録が抹消された結果、この件は白紙に戻ってしまった¹⁷⁷⁾。

82 年 3 月 27 日、ケニア政府によって、カミリズ演劇グループのジンバブエ公演は正式に中止と決定された。ジンバブエでは、自国の演劇グループの育成のために、カミリズ演劇グループの公演が同国の、特に農村地域のコミュニティ文化運動を刺激し、ジンバブエが経験してきた独立闘争のドラマ化に役立つ

と考えたようだ。ジンバブエ側の最大の関心は、カミリズ演劇グループの演劇方法—あらゆる村人が参加でき、歌や踊りの振り付けを皆で創造的に行なう—にあったとも言われている。

ケニア政府が、「母よ、我がために歌え」のような民族的文化活動を弾圧し、むしろ外国の文化を奨励し、擁護する例として、グギは、かつての入植白人、イギリス人作家エルスペース・ハックスリーの『ジカの火炎樹』¹⁷⁸⁾のテレビ放映を上げている。これは、82年の4月から5月にかけて放映された。この作品は、『母よ、我がために歌え』と同時代を扱い、ケニア人を「物言わぬ生き物」で「抵抗能力もなく、黒人は荒れ野の一部にすぎない」¹⁷⁹⁾と描いていると言う。これとは対照的に「母よ、我がために歌え」は、抑圧的な植民地労働法に対するケニア人労働者の闘いを描いたものだった。ケニア人による「母よ、我がために歌え」の上演は、国の施設を利用する許可が下りず、『ジカの火炎樹』の放映のためには、国家の施設と予算が用いられるという理不尽な状況を指摘した後で、グギは「悲しいかな、カミリズ村の農民は、自分の裏庭でさえ、芝居を上演する権利がない」¹⁸⁰⁾と述べている。

c. 「部族主義」的演劇か

「母よ、我がために歌え」がギクユ語によるものであるために、「部族主義的」という批判が一部にある。ジャーナリストのジョー・カディは「グギの支持者がどう言おうとも、「母よ、我がために歌え」は部族主義的であり、ギクユ語を理解する人々だけを引きつけるものであるから、ギクユ語が話されている農村で上演するべきで、国立劇場で上演するべきではない。・・・すべてのケニア国民が観られるように国立劇場での上演を望むならば、なぜケニアの国語であるスワヒリ語か英語でやらないのか」¹⁸¹⁾と述べた。これに対する反論が、読者からの次の投書に示されている。

「農村地域や都会でも、かなり多くの人が文字を読めず、彼らにメッセージを伝えるには母語を使う必要がある。・・・ケニアの劇場で上映される映画は、ヒンディー語、ドイツ語、英語、フランス語などのものであるが、誰もこれらを人種差別的だとは言わない。私たちの指導者は、我々の文化を取り戻し、西欧の猿まねは止めるように繰り返し主張してきた。カミリズ演劇グループの文化発展の努力を妨害するのはなぜか」¹⁸²⁾。

『母よ、我がために歌え』を部族主義的と呼ぶのは、偽善、無知、宣伝にすぎない。私は二度までこのリハーサルを見た。私はギクユ人ではないが、私はすべての言葉が理解できた。顔の表情や演技から、言葉で表現しようとしていることがわかった。・・・英

語でこの劇が書かれたとしたら、ケニアのごく少数の人にしか理解されないだろう。じっさい、『母よ、我がために歌え』はすこぶる民族的である。30年代にギクユの人たちに起きたことを示しているだけでなく、私たちの民族文化がどれほど無慈悲に、外国人によって侵害されたかを示している。この劇はケニア人を教育しようとするものであるのに、なぜ、カディは部族主義的だと言うのだろうか」¹⁸³⁾。

カミリズ演劇グループの若いメンバーの一人で、ケニヤッタ病院の秘書をしているワンジル・ワ・ギギ¹⁸⁴⁾は、『したい時に結婚するわ』ではキグンダの妻ワンゲシの役を演じ、『母よ、我がために歌え』では流産させられた女を演じた。彼女はこう述べている。

「見てごらんなさい。カミリズの私たちはギクユ語で劇をやっていますが、歌はケニアの8つ以上の言語でうたっています。その歌が、私に語りかけてきます。私がギリアマ語の劇を見ても、かならず内容を理解することは出来るでしょう。なぜなら、誰もが同じ経験をした人間だからです」¹⁸⁵⁾。

「母よ、我がために歌え」は、ギクユ語を話す人々にしか理解できないという意見に対して、この劇を見た多くの人々がワンジルと同様の発言をしている。ハイネマン教育図書出版社の編集者イギリス人ジェームズ・カリー¹⁸⁶⁾は、「最初は劇の内容が理解できなかったが、しだいに引き込まれ、休憩なしの3時間半のリハーサルに釘づけにされた」と述べている。力強い歌、踊り、マイムが一体となって、言葉を解せない者にとっても理解の手がかりとなる象徴などが有効に働きかけて、劇のメッセージを十分に把握させたのだろう。

d. 出演者・観客の意見

「したい時に結婚するわ」のオーディションへは300~400人、「母よ、我がために歌え」のオーディションへは、その倍の村人がやって来たと言う。

ポスターや宣伝のビラなどが皆無であっても、リハーサルがナイロビで行なわれることを口コミで知った多くのケニア人が、遠隔の地から駆けつけたとも言う。前作「したい時に結婚するわ」を見た村人たちが、今回もバスやマタツでナイロビまでやって来た。

70歳のジョキ・ワ・ジュキラ（女性）は、長時間のリハーサルに耐え、60歳のフラ・ワ・キアリエはこの演劇に参加することで、自分の時間を創造的に、しかも有効に使うことが出来たと証言した。

「カミリズ演劇グループが活動を始めた時、私たち老人は、若者に知らないことを教え、自分たちが役に立っているという実感を得ました。私は『したい時に結婚するわ』の時には、若い人たちに歌を教えて、何か大切なことをしているという気がしました。そんなわけで『母よ、我がために歌え』にもかかわりました」¹⁸⁷⁾。

役者の一人、60歳の農民ワイリム・ワ・マチル（女性）はこう述べている。

「この劇は、私たちの祖父母や、両親、今世紀初めに生まれた世代の人々の生活を写し出す鏡です。その鏡は、今の私たちの生活をも反映しています」¹⁸⁸⁾。

さらに、彼女は、以下のように述べている。

「私は、子供たちや年寄り連中と一緒にやっている時、自分が何かの役に立っているのだという実感を得ました。彼らの知らないことを、私は教えることが出来ました。学校に通っている者、大学生でさえもが、若かった頃に私たちがおどった踊りを知らないのです」¹⁸⁹⁾。

これらの意見は、演劇というメディアと接する機会の乏しかった人々が、自分たちの言語で共同体を描いた演劇を、自分たちの手で創造する機会を得て、自らが「生きていること」の意義を改めて発見したことを雄弁に物語っていよう。内容と言語媒体が彼ら自身のものであるために、疎外感を味わうことなく、彼ら自身の蓄積された経験の表現として、この劇を捉えることが出来たのである。

演出を担当したワイグア・ワチイラはこう発言している。

「この劇が他の劇と違っている点は、役者が想像上の歴史ではなく、現実の経験を演じていることです。脚本家は、当時に制定された法律や条例を調べるために、公文書資料館や図書館に出かけました」¹⁹⁰⁾。

これらの法律や条例は、スライドで文章が再現され、役者がその法律の内容をマイムで表現している間に、さまざまな民族諸言語で読み上げられた。ある歴史状況を視聴覚的に理解できるよう、こうした映画的手法を導入したことは、この劇の斬新さの一つであった。

カミリズ演劇グループには専門の振り付師も、声楽家もいなかった。誰もが、自分で振り付けをせざるをえなかった。ワイグワ・ワチイラはこう述べている。

「我々は、訓練を受けた特別の振り付師の必要がないと気づいた。結局、振り付師も誰かからインスピレーションを引き出すのです。専門的な振り付師は、手近な解決を求めてしまうものです。同時にこのことは、いわゆる専門家と呼ばれる人への依存心を生み出すことになります」¹⁹¹⁾。

新しい試みの中で、人びとはたがいに意見を出し合い、助言し、批判し、褒め合って、自前の歌や踊りを創り上げたのである。全員が、誰かに指示されるままに演技するのでなく、自分たち自身の創意で演じているという実感をつかみとったのである。それならば、カミリズは、民衆の、民衆による、民衆のための実験劇場であったと言えよう。

ジャランバ・ワ・カグオロは、小学校7年までの教育しか受けていないが、「この演劇グループが示したようなエネルギーの発散方法がなければ、自分は他の多くの者たちと同様に、村から姿を消し、いずれ村の人びとに忘れ去られたかもしれない」と述べている¹⁹²⁾。彼は、この劇で、役者、歌手、作詞家として驚くほどの才能を発揮する場を見出した。

とはいえ、個人の力量より、むしろ集団の力量を重視するこの演劇は、とりわけスターと言われるある種のキャラクターを売り出す傾向の強い西欧演劇とは対照をなしていた。個人の才能を評価しながらも、集団的努力がいつそう尊ばれたのである。

「したい時に結婚するわ」で貧しい農民のキグンダ役を演じたギジガ・ワ・ムワウラ（男性）は「母よ、我がために歌え」にも出演して、以下のように述べている。

「私は、この劇に強い一体感を感じました。私は、ホワイト・ハイランドの一部だったロンディアニで育ちました。それは50年代のことでした。この劇は30年代とそれ以前の時代を扱っていますが、劇に登場する残酷で無慈悲な白人入植者は、私の一家が借地をしていた農場主とまるで同じ振る舞いをしていました」¹⁹³⁾。

ギジガにとって、特に印象的な場面があると言う。その場面で、彼は苦い記憶を呼び戻し、演技というよりは、むしろ過去を追体験しているような気持ち

になったと言う。

「劇の中で、『不法侵入』の嫌疑で、白人の入植者が幾人かの労働者に犬をけしかける場面があります。子供の頃、私は白人農場で働くケニア人が使っていた藪のなかの道を通らずに、主人が使っていた近道を利用したことがありました。そのため、私や他の借地人の子供たちが犬をけしかけられました」¹⁹⁴⁾。

バタ靴工場で働く労働者でもあるギジガは、さらにこう述べている。

「この劇は私たちの歴史をまともに写し出しています。かつて存在した奴隷労働、そして私の両親がそれに対してどう闘ったかを示しています。私は歌をうたう時、心からうたいます。というのも、これらの歌は、30年代にリムルやティゴニ地域で鉄道労働者がうたった歌だからです。今でも、この地域で紅茶の葉を摘む労働者たちは、自分たちの歌を創り続けています。私たちは過去を忘れることは出来ません。なぜなら、過去のことは現在と強く結びついているからです」¹⁹⁵⁾。

先にも引き合いに出したワンジル・ワ・ギジガは、次のように述べている。

「これまでのリハーサルで、私は自分の歴史について知らなかったことをたくさん発見しました。自分自身の文化について大いに知り、今なお学んでいると自信をもって言えます。私の過去をもっと知るということは、私の現在の状況、私の未来や、私の子供たちの未来についてもっと敏感になるということでしょう。・・・結局、ケニアの地方農村の問題は、海岸地帯であろうとも、湖岸地帯であろうとも、あるいはその中間地帯であろうとも、私たちが話すケニアのどんな言語の違いをも超えて、皆同じだということです。私たちは意見を交わし、問題を共有し、たがいの問題を見つめることが大切です」¹⁹⁶⁾。

V. コミュニティ演劇の顛末

釈放以後、大学復帰の努力のほかに、精力的な活動と執筆、そして身の周りの著しい状況変化があった。そのごく一部を紹介しておこう。

まず、80年5月から6月にかけて「デダン・キマジの裁判」がタマドゥニ劇団によってナイロビ大学で上演された。「したい時に結婚するわ」と同じく、キマニ・ゲシャウ¹⁹⁷⁾がディレクターを務めたが、この時はスワヒリ語が使われた。同年12月には、ロンドンのアフリカセンターで「作家の世界」について講演し、同じ12月にデンマーク図書館協会75周年記念で同国に招かれ（この時、「エピ

ログ」で紹介するボツワナの作家ベッシー・ヘッドも同行した)、作家カレン・ブリクセンのケニアを舞台にした作品について、容赦のない批判を行った¹⁹⁸⁾。

81 年に入ってから、「デダン・キマジの裁判」のスワヒリ語版 (*Mzalendo Kimathi*) が上演されたが、この時はムンビ・ワ・キニャティ (女性) が演出を担当し、ナイロビの近隣地域を移動上演した。同年には、『十字架の上の悪魔』ギクユ語版が野間賞¹⁹⁹⁾ に特別メンションされた。同年 8 月には、ジンバブエ大学で講演し、来日中の 11 月には、カミリズ教育文化コミュニティセンターで「母よ、我がために歌え」のリハーサルが開始されていた。82 年 5 月には、小説『川を隔てて』を素材にした改作劇がナイロビ大学で上演された。

この間、ヨーロッパ各地で開かれたアフリカン・ブックフェア、アフリカ演劇祭、反戦反核集会などへも参加してきた。なかでも、82 年 6 月、反戦反核を基本目標において、西ドイツのケルンで開かれた文学者の集会「インターリット '82」(西ドイツ作家同盟主催) でのグギを含む第三世界作家の発言は、日本を含む先進諸国での「反核」「反戦」の運動理論と、第三世界での飢え、貧困、抑圧、侵略、搾取などによる危機の問題とのかかわりを考えさせる上で注目すべきものであった。作家の小田実がこの集会のインパクトを克明にリポートしている²⁰⁰⁾。

そして、同年同月のことである。グギは『十字架の上の悪魔』英語版出版のためロンドンに滞在した。さて、帰国便を待って、空港ロビーにいた時に、ケニアの親しい友人から緊急の連絡があった。このまま帰国すれば、ジョモ・ケニヤッタ国際空港到着と同時に緊急逮捕、拘禁が待ち受けていると言う。彼はそのままロンドンに留まらざるを得なかった。先に見たように、82 年に入ってから、政治犯の拘禁が目立って復活し始めていた。

こうして、82 年 7 月 2 日、「亡命」知識人・作家を中心に、ロンドンで「ケニア政治犯釈放運動委員会」²⁰¹⁾ が結成され、グギはこの活動の中心人物となっていく。

それから 1 ヶ月後。ケニアでは、未曾有の危機が持ち上がった。独立以来初のクーデターが発生したのである。これについては、本書「インターロード」で詳述することにしよう。

グギは、88 年まで、ロンドンを拠点にイギリスに留まり、同年中に渡米、エ

ール大学等で客員教授(1989~1992)となり、ニューヨーク大学(1992~2002)、2002年からはカリフォルニア大学アーヴァイン校に勤め、現在に至っている。同大学の創作・翻訳国際センター(International Centre for Writing and Translation)所長を兼任しているほか、ニューヨーク大学時代からのギクユ語雑誌『ムティイリ』(*Mūtiiri*「支柱・大黒柱」の意)を編集発行している。

結局、1982年6月以降、モイが大統領を退いてから2年後の2004年8月に一時帰国を果たすまで、じつに22年間に渡って祖国ケニアの土を踏むことがなかった。

この間に、故郷リムルでは、母ワンジクがこの世を去り、妻ニャンブラも病死していた。彼自身は、アメリカへ渡ってからジェリ・ドゥング(Njeeri Ndungu)なるギクユ女性と再婚し、彼女との間に二人の子供(ジオンゴ、Thiong'o とムンビ、Mūmbi)をもうけた。なお、最初の妻ニャンブラとの間に生まれた6人の子供のうち多くは、ある時期にケニアからアメリカへ呼び寄せて、教育的支援他にあたった。現在、その多くがアメリカに在住しているが、長女ワンジクは結婚してフィンランドに、長男ジオンゴ、二男キムニャはケニアに住んでいる。ワンジク・ワ・グギ、そして三男のドゥーシュ・ワ・グギ、四男のムコマ・ワ・グギ²⁰²⁾は、有望な作家として、すでにデビューしている。

インターロード：

マウマウ戦争と土地問題、あるいはケニア近現代史の五つの断面

I. 19 世紀末~第一次大戦前まで

19 世紀後半、今日のケニア、特に首都ナイロビを中心に、西はリフトバレーに至るまで、北はケニア山を取り囲んでニャンダルア山系に至るまで、ケニアで最も肥沃で広大な土地を耕していたのは、現在と同じく、農耕民のギクユであった。その頃までに、探検家やキリスト教宣教師のほかに、この広大な土地に住み着き、農場経営の成功を夢見るヨーロッパ人、特にイギリス人が相当数この地方に姿を見せていた。

しかし、この頃東アフリカはまさに内発的な変革の時代に突入していた。アラブ・スワヒリ商人の内陸部への進出、カンバ人、ミジケンダ諸民族の経済活動の隆盛、マサイ社会の分裂と離散、ナンディ人の強大化、ルオ人の拡大と周辺諸民族の同化などが進行していたのである¹⁾。

① 大飢饉と民族移動

当時から世紀交替期へかけて、同地方では旱魃、家畜の疾病、イナゴの災禍（特に 1889 年）、コレラ・天然痘・ペストの流行、そして未曾有の大飢饉が発生し、人口が激減した。ギクユ農民のなかには、先祖伝来の土地を離れ、主に南へ向かって移動する者が少なくなかった。

1898 年から 1900 年まで続いた飢饉は、「大飢饉」、もしくは「ヨーロッパから来た飢饉」(Ng'aragu ya Ruraya) と呼ばれたが、それこそギクユ農民を襲った最も深刻な飢饉だった。「2~3 フィート毎に、死体と瀕死の肉体が転がっていた」²⁾と言われ、その有様は「髑髏と骨のゴルゴタ」³⁾と形容されるほどだった。後年、その当時を思い出して、克蘭ワース卿は「衰弱した瀕死の肉体が、木々の下に重なって積まれていた。木の陰まで這い寄って死を待ったのであろう。木々の枝に止まる卑劣なハゲワシどもが、私が近づくのに気付くと、物憂げにバタバタと飛び立った」⁴⁾とその光景をしたためている。

この時期、ギクユの民族移動の波は、最南方、つまり現在のキアンブ地域にまで達した。彼らは、もっぱら山羊と引き換えに先住のドロボ人⁵⁾から土地を買い取り、このフロンティア地域を開拓した。1903 年以後、この地域へは南ア

フリカからのヨーロッパ人入植者も到着し始めた。入植民の多くは、そこを処女地とみなしたが、実際にはすでにギクユ農民の耕作地であった。ヨーロッパ人は「占拠されていない土地」は「未所有」の土地と考えたが、ギクユの土地慣習では、自分が耕す土地は自分が「所有」するものだった。

② 土地の没収

この時期に同地方を訪れたヨーロッパ人は、そこが無人で、土地の持ち主がいなかったのも無理はなかった。ナイジェリア総督を務め、英領植民地での「間接統治」の提唱者として知られるフレデリック・ルガード卿(1858~1945)は、「遊牧民たちは確かに強くて好戦的だが、彼らの誇りも傷ついている。この恐ろしい災禍は我々の進出にとっては味方である」⁶⁾と述べている。また、保護領弁務官チャールズ・エリオット⁷⁾は「放浪部族(マサイのこと)が、自分で役立てることも出来ない広大な地域をうろつく習慣があるからといって、他の優秀な人種にそうした地域へ寄せ付けられない権利などあるはずがない」⁸⁾と述べている。

この結果、1903年から1906年の間に、植民地政府は、キアンブ・リムル地区の約60,000エーカーの土地を入植民に譲渡した。白人入植民のなかには、デラメア卿(1870~1931)⁹⁾のように、初めから10万エーカーを所有する者、アップランド・オブ・イースト・アフリカ・シンジケートのように35万エーカーを所有する場合が見られた。やがて、耕作可能地の大半が入植民によって専有されることになった。¹⁰⁾じっさい、1903年に入植したデラメア卿の場合、王領地条令により、10万エーカーの土地をリースされたが、1エーカーのリース価格は、年間0.5ペニーだった。しかも、その土地は、ナクル湖とナイバシャ湖の間の、マサイ人にとっての最良の放牧地を含んでいた。

入植民による土地没収により、マサイ人が最も広い土地を失ったが、農耕民ギクユ(特にキアンブ地区農民)は、マサイ人と比べて、余剰の土地がはるかに乏しかった。こうしたことが、特にキアンブ地区における人口圧の上昇、さらにはイギリスと協力する首長の擁立に対する反感とあいまって、やがて反白人・反植民地運動へと繋がっていく。多くのギクユ人は、初めの頃は、ヨーロッパ人の滞在は一時的なものと考えていた。しかし、その結果は、ある日突然、やって来たよそ者が土地の所有権を主張し、本来の土地の所有者であったアフリカ人を借地人の身分に追いやることになった。

③ 繰り返される討伐遠征

「アフリカ分割」を決めた 1884 年から 1885 年のベルリン会議の目的は、条約批准国の言い分では「原住民の精神的・物質的福祉」¹¹⁾の向上ということであった。「野蛮」を退治し、アフリカ人を「文明へ導く」ために、「アフリカ争奪戦」は正当化された。1890 年以降、約四半世紀にわたり各地への討伐遠征が繰り返された。住民の大量虐殺が日常化し、家畜（牛、山羊、羊）の没収を伴った。なお、1895 年頃のギクユの総人口は、約 30 万と見積もられている。

この前後には、白人入植民の安全維持と称して内陸諸民族に対して繰り返し討伐遠征隊が送り込まれた。先住民への討伐遠征は、比較的早いものでは、1890 年、海岸地方のタイタ人に対してなされ、首長ほか多数を殺害した。1892 年には、ナイロビ郊外ダゴレッティのイギリス軍基地を攻撃し、火を放ったギクユのワイヤキ・ワ・ヒンガ首長¹²⁾が逮捕された。一説に、生き埋めの刑だったと言われる。1894 年には、内陸のギズングリのギクユ人 90 名を殺害、同じ年に白人入植民第 1 号として J. スチュワート・ワット夫妻が入植し、翌年ナイロビ東方のマチャコス近くに住み着いた。1895 年には、西ケニアで、ルヒヤ人（ブクスほか）への討伐があり、420 人を殺害、1,900 頭の牛を奪った。¹³⁾ 同じ年に、西ケニアでナンディ人の抵抗に対する討伐があり、1897, 1900, 1903, 1905, 1906 年にも行われた。彼らは、鉄道が自分たちの領地を通ることにあくまで反対した。いずれの場合も、住民の殺害は、ほとんどが機関銃による銃殺だった。

1902 年 9 月 7 日、羊の売買に従事していたある白人入植民が殺されたことを理由に、リチャード・マイナーツァーゲン大佐（1878～1967）¹⁴⁾がギクユの一村落的討伐を試みた。「その白人は、地面に掘った穴に放り込まれ、立ったまま、口は楔をかませて大きく開かれた。その後、村人全員がその口に小便を垂れ流し、ついに窒息（溺死）させた」¹⁵⁾という。

翌日、マイナーツァーゲンは子供と若い女を除いて、村人全員の殺害を命じた。誰もが撃たれるか、銃剣で殺害された。さらに小屋という小屋に火が放たれ、すべてのバナナ農園が荒らされた。12 月には、マイナーツァーゲンがマルカ地区の討伐を指揮し、約 20 人を殺害、665 頭の牛を略奪した。「銃剣が人間の肉体にやすやすと、握りの部分まで突き刺さることに驚く。だが、引き抜くのには相当の力が必要だ」¹⁶⁾とマイナーツァーゲンは記している。

1904 年 2 月のマイナーツァーゲンによる北部のギクユ人討伐では、1,500 人の「黒ん坊」を殺したという。¹⁷⁾「だがその日の圧巻はまだ終わらなかった。黒ん坊が姿を現す度に、ライフル銃で狙い撃ちした。頭がぼっかりと割れて、

生温い脳みその一部が飛び散って、私の眼にあたり、忌々しかった」¹⁸⁾と彼は書いている。エンブ地区への遠征は、満足できるものではなかった。「(250 人の殺害だけでは) エンブ人はまだ十分に懲らしめられていない」「北部ギクユ地域の遠征では、782 頭の牛、2,150 頭の山羊と羊を手に入れた。だが、エンブ地域では 498 頭の牛、1,500 頭の山羊と羊にとどまった」¹⁹⁾と言うのである。だが、討伐の翌日、ギクユの地を去るにあたって、マイナーツァーゲンは次のように述べている。

「私は、ギクユの連中が好きだ。彼らは賢い。彼らは、ヨーロッパ人の指導の下で進化するだろう。そして、いつかヨーロッパ人の影響から逃れる自由を要求する最初の部族になるだろう。大変なトラブルの元凶になるということだ」²⁰⁾。

1904 年 9 月から 10 月にかけて、グシイ人への討伐があった。約 100 人を殺害し、3,000 頭の牛を接収した。²¹⁾ この時の討伐隊のリーダーは、ロバート・フォランという人物で、彼によれば「虐殺である、しかし、これは避けることが出来ない」²²⁾と言う。

鉄道建設に頑強に反対するナンディ人への 1905 年の討伐の際、マイナーツァーゲンの部隊は、キングズ・アフリカン・ライフル部隊 1,320 人、警官 260 人、マサイ・ソマリ・トゥゲン混成部隊 1,500 人であった。この時、ナンディ人の首長コイタレル・アラップ・サモエイ²³⁾を含む 1,117 名を殺害、16,210 頭の牛、36,200 頭の山羊・羊を没収したという。マイナーツァーゲン側は 97 名の死者を出した。²⁴⁾ 彼は、この成果に「まずまず満足」²⁵⁾できたという。1906 年 1 月、2 月にもナンディ人への討伐があり、ほぼ所期の目的を達成した。1906 年 6 月のエンブ遠征では、407 名を殺害、3,180 頭の牛、7,150 頭の羊を没収した。²⁶⁾ 1908 年、グシイ人への討伐では 250 人を殺害したが、これも「礼儀作法」を教えるためと説明された。²⁷⁾ 当時、植民地省の次官だったウィンストン・チャーチルは、この時の大量虐殺を「屠殺行為」(butchery)²⁸⁾と形容した。

④ 鉄道建設

東アフリカ保護領が宣言されたのは 1895 年だが、当時のイギリスの関心はウガンダとナイル峡谷での戦略に限定されており、ケニア内陸諸民族の支配を意図するものではなかった。イギリスは海岸地方でアラブ人やソマリ系住民を懐柔したあと、J. アインズワースや F. ホール²⁹⁾ など内陸事情に明るい人物の協力を得て、モンバサとカンパラを結ぶウガンダ鉄道（東アフリカ鉄道）建設のために、アフリカ人労働力と食料の調達に努め、これの早期完成を至上目標

とした。

パンジャブ人クーリーを移入して、1895年から鉄道の着工準備が進んだ。建設委員会の最終報告によれば、「鉄道建設は奴隷貿易に対抗するため」³⁰⁾とあった。1880年に奴隷貿易はすでに廃止されており、鉄道建設が商業的な利益を得るためであったことは明らかである。1899年、ハリー・ジョンストンは、この鉄道建設について「モンバサからビクトリア・ニャンザまで、東アフリカを横断してインドの楔が2マイル幅で打ち込まれた」³¹⁾と形容した。それは、イギリス帝国主義の楔でもあった。

1896年には、鉄道建設の現場が大陸側で始まり、やがて1899年5月、鉄道がナイロビへ達した。この頃の一技術主任によれば、当時のナイロビは「荒涼として、風が吹きすさび、雨の多い沼沢地が広がり、人影はなく、ありとあらゆる野生動物の棲家であった。ときおり、平原の泥沼の縁に行く隊商が見られる程度であった」³²⁾という。鉄道がナイロビへ達した頃、鉄道会社は、金のかかるインド人移民労働者の代替措置として、「粗野な野蛮人」(ギクユ人のこと)の雇用を見込んで、訓練を施し始めた³³⁾。

1901年12月20日、鉄道がビクトリア湖畔のキスムまで達したが、完成が近づくにつれて、沿線各地にインド人やヨーロッパ人が橋頭堡を築き始めた。南アフリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダなどからの白人入植強化策がとられた。また、1902年にウガンダ東部高地が保護領に併合されると、同時に王領地条令が公布された(これにより、先述したように、デラメア卿のような「ケニアと恋に落ちた」一白人に10万エーカーの土地が譲渡された)。1905年、保護領の首都がモンバサから新興都市ナイロビへ移ったが、これは海岸地方で根強いインド人の氣勢を削いで、将来の「白人の国」(White man's country)の建設を準備するものだった。

⑤ 「白人国家」の建設へ

1900年には、アフリカ人の移動を制限する「パス法」が制定されたほか、伝道団がナイロビに最初のコーヒー農園を建設した。このことから、「ヨーロッパ人とキリスト教宣教師の間に相違はない」(Gutiri Muthuungu na Mubia)というギクユの箴言が生まれた。³⁴⁾1901年、主に鉄道の出費を補うために導入された小屋税は、原住民に現金収入を求めさせ、保留地から移動させることを意図したものであり、「文明化」に寄与する「パックス・ブリタニカ」(Pax Britannica)の恩恵と引き換えになるものとして正当化された。

ケニア高地に「第二のイギリス国」建設を夢みた白人植民は、1906年、冷涼な気候に恵まれた肥沃地約 450 万エーカーをホワイト・ハイランド（白人専用高地）に指定、非ヨーロッパ人の所有を禁じ、翌年に設置された立法審議会へ民間代表を送り、インド人移民を制限させるなど自らの人種的地位の確立を目指した。彼らはアフリカ人を民族集団ごとに指定保留地（Reserve）に閉じ込める一方、貧しい白人階層の入植は人種の優位を危機に陥れるものとして、たとえば南アフリカ出身のボーア農民の一部をボンベイ（現ムンバイ）へ強制追放しさえした。一方、白人との諸種の不平等是正に努めるインド人の間には、東アフリカを「第二のインド」たらしめようとの文化的・経済的併合論があった。これは「大インド」（Greater India）構想と称される。

1902年には、キングズ・アフリカン・ライフル部隊³⁵⁾が結成された。1906年には、「マスター&サーバント法」が施行され、労働契約違反などに対して、サーバントに対する罰金・投獄を規定した。

ギクユ以外の諸民族も、とうぜん植民地支配の犠牲者であったが、この時期、ギクユほど政治意識に目覚めた例は稀だと言われた。植民地政府による首長制の擁立に対する反発はその一例であろう。ギクユ人は、植民地化の始まる以前に、伝統的な首長制を廃止し、「部族的民主主義」を達成していたとされる³⁶⁾。首長制はこうした社会の権力構造とは相容れなかった。にわかづくりのカイライ首長の多くは、白人のためのキャラバン・リーダー、アフリカ人労働力の調達者であり、あるいは単にスワヒリ語を話せるだけの抜け目のない成り上がり者であった。ギクユ農民の多くは、植民地政府が擁立した首長たちを「(イエスを裏切った) ユダ、空っぽの頭と大言壮語の裏に、入植民の悪知恵と下心を隠し持った拡声器」³⁷⁾だと見抜いた。

1908年5月には、約100名の新首長が任命された。1911年、マサイ人に対して強制移住が実施され、その結果、彼らは2,300平方マイルの代替地をあてがわれたが、うち1,300平方マイルは渇水地域だった。この結果、1890年代にマサイ人が占拠していた土地の約10分の9を失うことになった。最も勇猛果敢だと思われたマサイ人からの土地没収に成功した白人政府は、アフリカ人の従順さに称賛を惜しまなかったという。なお、1905年当時、ケニアには954名のヨーロッパ人がいたが、うち700名が南アフリカからの移民だった。³⁸⁾ 第一次大戦直前まで、ハイランドは基本的に「南アのコロニー」と言える状況だった。以後、しだいにイギリスからの移民が優勢になっていく。

Ⅱ．抵抗の系譜

イギリスの覇権に対するケニア人の抵抗は 3 期に分かれる。

① 初期抵抗

第 1 期は、1890 年代から第一次世界大戦までの約 20 年間で、はじめは帝国イギリス東アフリカ会社（1880 年設立）³⁹⁾ が擁立するカイライ首長に反抗する海岸地方のアラブ人、ギリアマ人を中心としたマズルイの反乱、ヨーロッパ人による土地の奪取とギクユ人殺りくに抗議するキアンプの首長ワイヤキの抵抗、強引な土地明け渡しと課税に反対し、メ・カティリリ（女性）が率いたギリアマ人の武装抵抗などがこの時期に含まれる⁴⁰⁾。これと同様の抵抗がケニア各地で展開され、いずれも局地的・一揆的性格を呈したが、これらはケニア民族主義のはしりと言えるもので、一般に「初期抵抗」と言われるものである。これらの動きと併せて、キリスト教の受容と西欧的価値の押しつけを分離し、アフリカ人に独自の教会と学校を建設しようとする運動が生まれた。先に述べたルオ人ジョン・オワロの独立教会・独立学校運動はその先駆けであった⁴¹⁾。

② 両大戦間期

第一次大戦中には戦費を賄うために小屋税や人頭税が引き上げられ、アフリカ人の生活は一層苦しくなった。この時期に、人植民はさらに地盤固めに努め、土地保有権の延長（99 年から 999 年へ）、立法審議会への直接代表制の実現、アフリカ人によるコーヒーなど換金作物の栽培不認可の措置を講じ、それまで以上に労働力調達強化を図った。これにより、白人入植地に住むアフリカ人借地人（アホイ）は年間 180 日以上労働供与の義務を負わされた。また白人農園主が地区弁務官に労働力の提供を申請すると、弁務官はウィスキーとかブランデーと引き換えにアフリカ人首長にその調達を命じるという方策も慣例化した。この結果、たとえばムランガでは青年男子の 75% と多数の婦女子がこれに狩り出され、その惨状は奴隷取引よりもひどかったとさえ言われる。アフリカ人首長は、十分な労働力の調達が出来ない場合、罰金刑に処されたが、彼らの多くが一般民衆からは裏切り者・売国奴と見られた。

抵抗の第 2 期は、第一次大戦を経て各地に大衆集会と大衆動員を目指す政治結社が創設された時期である。マウマウ戦争との関係では 1919 年に「東アフリカ協会」（East African Association, EAA）として発足、24 年に「キクユ中央協会」（Kikuyu Central Association, KCA）と改称したものが重要である。

東アフリカ協会（前身はキクユ青年協会）を指導したのは植民地政府財務局の電話交換手をしていたハリー・ヅクで、キパンデ制度の撤回、小屋税・人頭税の引き下げ、土地の返還などを掲げて植民地省に抗議し、ナイロビやケニア西部で大衆集会を開いた⁴²⁾。

キパンデ制度は、原住民登録条例を改訂したもので、1920年に導入された。これは16歳以上のすべてのアフリカ人男子が首から吊しておかなければならない鑑札証で、登録時に指紋を取られた。白人専用高地の中心の一つ、ナクルでは、1923年からは12歳以上の男子に適用された。これらの拘束的諸制度は、強制労働や各種の課税を含めて、アフリカ人を賃金労働者（もしくは労働予備軍）としてリザーブから移動させ、白人農園で働かせたり、白人の召使い身分に固定しておくための方策でもあった。多数のアフリカ人の流民現象、その結果としての都市への人口集中、さらに土地を喪失した農村プロレタリアートの誕生はこうした背景の中で起きている。

1922年3月、ヅクは逮捕され、8年間の禁固刑に処された。この時、ナイロビのノーフォーク・ホテルのすぐ近くで、ヅク逮捕に抗議するデモ隊に警察が発砲し、21名の死者が出た⁴³⁾。ケニヤッタはこの時の模様を次のように記している。

「私は群衆の中にいて、男や女や子供たちが殺されるのを見た。多くの人々が苦しんで横たわっていた。丸腰で、身を守る手だてを持たない人々に対する恐ろしい虐殺行爲だった。ケニア人は、これを決して忘れることはないだろう」⁴⁴⁾。

以上が、デボンシャー白書（1923）⁴⁵⁾で「ケニアは、第一にアフリカ人の領土」(Primarily, Kenya is an African territory)で、「(ケニア植民地では)アフリカ人の利益を最優先とする」(the interests of the African natives must be paramount)との約束（これは空手形に終わった）を取り付けるまでの背景である。

キクユ中央協会は、ギクユ人領土の確保、アフリカ人のコーヒー栽培禁止の撤回、キパンデ制度の撤回、ヅクの釈放などを求めて政治行動を起こした。さらに1928年、ジョンストン・カマウ（のちのジョモ・ケニヤッタ）が書記長となってからはギクユ語新聞「ムイグイザニア」(*Muigwithania*「調停者」の意。アフリカ人による最初の新聞)を発行し、イギリス本国に陳情使節を送るなど活発な活動を展開した。1930年代には、モンバサやナイロビの都市労働者の間

で労働運動が活発化し、36年には東アフリカ労働組合総同盟が結成され、8時間労働や労働立法を要求した。3年後にはモンバサで港湾労働者による大規模なゼネストが打たれた。この間にアフリカ人の政治的地位は次第に向上し、24年の原住民評議会の設置によって、アフリカ人の意見は制度上汲み上げられることになった。しかし、アフリカ人側の運動は主として自力更正、福祉の向上に向けられ、政治的独立を掲げるものではなかった。

③ 女子割礼

女子割礼の問題は、1906年にすでに話題になっていた。1928年に、スコットランド伝道諸派がこれを取り上げて以後、1929年には、プロテスタント諸派の会議で、思春期直前に実施される女子割礼（クリトリス切除）の禁止が決まった。キリスト教への改宗者は、クリトリス切除のみならず、KCAのメンバーになることを禁じられた。女子割礼は、反キリスト教活動であり、同時に反政府活動だと考えられたのである。伝道団は、女子割礼を「政治問題」化し、ミッション・スクールへの非キリスト教徒の参加を禁じた。これに対する抵抗の一例として、アフリカ内陸伝道団のドイツ人女性宣教師フルダ・ジェーン・シュトゥンプフ（Hulda Jane Stumpf）の殺害があったと言われる。これは1930年1月のことで、70歳の彼女は、殺害される前に、強姦の上、割礼を施されたとも言われる⁴⁶⁾。

伝統的な舞踊、ムジリグの歌や踊り⁴⁷⁾は、伝道団の決定に反対する内容を含むものであった。首長たちは伝道団を支持したが、KCAは、伝統的慣習の守り手として、真っ向から伝道団に反対した。KCAによれば「割礼を受けないことは、人格、女性たる属性の成長から締め出されることであり、心理的には未成熟の少女にとどまり、軽蔑の対象、じっさい嫌悪の対象にとどまる」⁴⁸⁾こととして、この慣習を支持した。

かくして、ギクユ民族の間で、キリスト教徒と非キリスト教徒のギャップが拡大した。このギャップは、後のマウマウ戦争時のロイヤリストとナショナリストの間のギャップにも匹敵するものだった。ギクユ人の大多数は、女子割礼を「社会構造の核心」と捉え、その禁止は「社会秩序を崩壊させ、ギクユ人のヨーロッパ人化」を促進するものと考えた。ケニヤッタの弟ジェームズ・ムイガイがKCAの新聞「ムイグイザニア」で、「キリスト教は、ギクユの歴史を壊そうとしている」と書いた⁴⁹⁾。

④ 独立学校運動

独立教会・独立学校運動はグシイ人やカンバ人の間にも見られ、宗教運動の体裁をとりながら、白人支配の拒否、強制労働反対、小屋税・人頭税の支払い拒否、白人追放をスローガンに掲げるものさえあった。この時期、教育は大部分がミッションの経営するものであったが、ギクユ人の場合、キアンブ地区だけで、1918年から1929年の間に、ミッション・スクールの登録者数は604名から3,000名に膨れ上がった⁵⁰⁾。一方、彼らは、これまでの独立学校にくわえて、ギクユ・カリング教育協会（KKEA, Pure Kikuyu）とギクユ独立学校協会（KISA）を結成した⁵¹⁾。

KKEAの学校数はKISAより少なかったが、より政治的であった。キアンブの南部・西部（リムルを含む）など政治的・文化的論議の盛んな地域に起こり、西洋教育にギクユの慣習的価値を取り入れるなど、ギクユ民族主義を育てるのに役立った。「カリング」が純粹ギクユだけに限られたのに対し、後者はカンバランドに住むカンバ人などを含んでいた。ギクユ人地域では女性の割礼問題などを契機に1930年代から急速に独立学校運動（カリング・スクール）が拡まったが、のちのマウマウ戦争の参加者には、この学校で学んだ者が多くいたことは注目される。

1936年までに、中央州には独立学校は44、植民地政府の学校は1つであった。1950年には、独立学校の数字は108にのぼった⁵²⁾。1938年当時、アフリカ人子弟の1%が植民地政府の学校で、23%がミッション・スクールで学んでいた。残りは、KISA, KKEAを除けば、まったく教育を受けていなかった⁵³⁾。

⑤ 第二次大戦からマウマウ戦争直前まで

第二次大戦を経て、抵抗運動は第3期に入る。ソマリアからのイタリア軍の侵入に備えて、大戦中アフリカ人の政治活動は禁止され、主な指導者は拘禁に処された。しかし1944年、「ケニア・アフリカ人同盟」（Kenya African Union, KAU）が結成され、同時に立法審議会に1名のアフリカ人指名議席が認められた。さらに46年、ケニヤッタが15年間滞在したイギリスから帰国し、翌年KAUの委員長となつてからは、ようやく反英独立闘争に火が付いたと言える。

1945年から翌年にかけて、第二次大戦に従軍した約10万のケニア人が復員してきた。復員兵士の多くがスワヒリ語・英語の読み書きが出来た。三分の一がアフリカの外、中東、インド、ビルマ戦線を経験し、インドの独立運動やアメリカ黒人の主張などを知る機会を得ていた。大戦後の、いわゆる「変革の風」（Wind of Change）⁵⁴⁾にあたり、それまで抱かされてきた「白人万能神話」が

崩れ始めていた。一言で言えば、彼らは「政治意識」に覚醒したのだった。

1947年1月、モンバサで15,000~20,000人規模のゼネストが打たれ、400人が逮捕され、市の機能が完全に麻痺した。これはチェゲ・ワ・キバチア⁵⁵⁾が指導したもので、約2週間の間に、家事労働者などを含めて広範なアフリカ人労働者が参加した。この期間に、アフリカ人労働者連合(African Workers Federation)が結成され、ケニア全土の労働者に団結を呼びかけた。チェゲは同年8月に逮捕されたが、騒擾が全土に飛び火して、約10ヶ月間、植民地政府はナイロビでもギクユ人地域でも、コントロール能力を失ったと言われる⁵⁶⁾。1948年頃、ギクユ人口1,026,000人のうち、218,000人が借地人だった。

1949年5月には、5つの組合を結集して、東アフリカ労働組合会議が結成された。この年の9月、有権者同盟が「ケニア計画」(Kenya Plan)を発表、「白人の国」を継続し、入植民の独立を謳い、ローデシア型の植民地にしようとするものだった。アフリカ人への対策として、新たに「黒人のアフリカ」をつくるべく、「二つのピラミッド」政策を提言した。3年後に非常事態が宣言されると、有権者同盟は「われわれはこの地に留まる」との文書を出している⁵⁷⁾。これに対し、アフリカ人も独立を要求し始めた。後にマウマウの指導者の一人になるフレッド・クバイ⁵⁸⁾を中心に、1950年から3年以内の独立を要求するものがあつた。入植民も植民地政府もこれを無視したことは当然で、ケニアは「タブラ・ラサ」(tabula rasa)、つまり「白紙、無人の土地」と考えられた。

じっさい、「ケニア計画」は、アフリカ人の自治を認めるものでさえなくて、「英国臣民身分を最高」のものとして、南アのアパルトヘイト制度に倣ったものだった。これに対しては、9人のアフリカ人がジョージ6世に反対を陳情している。1950年3月、キアンブ地区の多くのギクユ人が逮捕され、カンバランドのヤッタ(「黒い岩の土地」)に拘留された。

一方、この時期には多数の労働者や退役兵がKAUに結集した。KAUの大衆的基盤が確立し、同時に従来 of 改革・自力向上路線の限界が明らかになった。1949年10月には、ナイロビで、タクシー運転手を含む運輸業者が16日間のストを決行し、市の運輸政策の実施を制限させることに成功した。1950~51年頃には、合法的な枠内でのナショナリズムの限界が明白になっていた。KAU内部でも労働組合あがりの急進派が穏健・改革派を駆逐し始めた。

なお、1949年当時、立法審議会のアフリカ人代表は1名だったが、1952年

は指名代表が 6 名に、1954 年には 8 名に増えた。1957 年にはアフリカ人代表を選ぶ選挙が実施された。1958 年、アフリカ人代表数は白人と同数の 14 名に増えた。しかし、アフリカ人総人口は 600 万、白人総人口は約 5 万であったことを忘れてはならない。

⑥ オレングルオネの危機

20 世紀初頭、中央州の肥沃地からギクユ人を追い出した後、植民地政府はリフトバレーのナクル近く、オレングルオネにギクユ人の入植計画を進めたことは先述した。1943 年、いわゆる「キャッサバの飢饉」の年に、この地での耕作に関する新しいルールが定められた。それは、土地を棚田式にし、主食のトウモロコシの栽培を禁じるものだった。土地の自由保有を当然の権利と考えたギクユ農民は、これに強く反発した。彼らは誓約をたて、一致団結して、植民地政策への非妥協を決めた。この状態が 1946 年まで続いた。同年、ギクユ農民は、政府の方針に従うか、より南方のカンバ人の土地、乾燥したマクエニへ再移住するかを選択を強いられた。しかし、農民たちは譲らず、弁護士を立て、一方で彼らの間でのいっそう強い団結の誓約に駆り立てられた。

この頃、オレングルオネでは、たくさんの抵抗歌謡が自然発生的に生まれたが、その一部は今日までうたい継がれてきた。

Olenguruone masses saw with their own eyes,
Saw their cows and goats being penned away in kraals !
The children also witnessed Olenguruone being destroyed,
And all the wealth and hopes of the masses smashed.

They were herded into the colonial office
To have their fingerprints taken
They firmly refused to have their fingerprints taken
They were all detained in Yatta and in Nakuru
And all this because of their own, own land.⁵⁹⁾

オレングルオネで、誰もが目撃した
牛と山羊が、遠方のクラールに囲い込まれるのを
子供たちも見た、オレングルオネが破壊されるのを
我々の財産と希望が打ち碎かれるのを

誰もが政府の建物に集められ
指紋を取られることになった
全員が、指紋を断固拒否したぞ
皆が、ヤッタとナクルに拘留されちまった
自分の、自分の土地を守ろうとしたから。

1948 年、オレングルオネに残り続けたギクユ農民は強制的に追い立てられ、中央州内の人口過剰のアフリカ人リザーブへ戻るか、カンバランドのヤッタの乾燥地へ行くかの選択を求められた。政府はこの立ち退きを強行したが、ギクユ人の間で団結を目指す「誓約」の効力が証明された。「誓約」は、後にマウマウの動員の主要な武器となった。

オレングルオネの危機が始まったのは、第二次大戦の終結と同時だった。復員兵士は従軍記章をもらい、軍用大外套その他を貰っただけだった。イギリス人復員兵の場合は、英雄的処遇を受けた。第一次大戦の場合と同様、彼らはケニアでの定住を勧められ、一人平均 700 エーカーの土地を与えられた。そこは、アフリカ人リザーブから接収した肥沃地だった。アフリカ人復員兵は、とうぜん不満を示した。

以上はマウマウの武装蜂起に至るまでのアフリカ人側の社会的・政治的背景のごく一部である。

Ⅲ. マウマウ戦争（非常事態）

マウマウ戦争の名で知られるケニア土地自由軍による民族解放・反英独立の武装闘争は、ケニア中央州全土に非常事態が宣言された 1952 年 10 月 20 日に始まり、この闘争の最高指導者デダン・キマジが逮捕された 1956 年 10 月 21 日に事実上終焉したとされる。しかし、小規模な白人農園襲撃、白人やアジア人の殺害は非常事態宣言以前にも見られ、政府側はこれに対処して夜間外出禁止令を出し、アフリカ人容疑者の逮捕を先行させていた。また一部解放勢力側の活動はキマジの逮捕後も継続され、非常事態そのものは 1960 年 1 月 12 日まで解かれなかった。

以下では、「マウマウ」(Mau Mau) の用語を便宜上使用した。これは植民者の造語で、一説に「宣誓」を意味するギクユ語のウマ (uma) を聞き違えたものと言われるほか、いくつかの仮説が提出されている⁶⁰⁾。正しくは、解放勢力側の用語にしたがって、「ケニア土地自由軍」(Kenya Land and Freedom Army)

と称すべきであろう。

① たたかいの萌芽期

1944 年、ケニア・アフリカ人同盟 (KAU) が結成された。都市の賃金労働者、特に白人家庭の家事労働者、低賃金の政府役人、港湾労働者など広範な層から参加が見られた。なかでも、復員兵士の多くが、ただちに KAU を支持した。彼らは、祖国の植民地状況に我慢がなくなっていた。白人兵とともに戦場で戦い、近代戦争を経験し、大いに視野を広げていたが、復員後は、農村での耕作か、都市での低賃銀労働に従事するしか選択がなかった。

1944 年、立法審議会に初のアフリカ人代表 1 名が指名された。それ以前は、二人の白人が指名されて、アフリカ人の権益を代表したが、うち一人は伝道団から選ばれた。これら二人の代表は、アフリカ人が政治的存在であるとも、彼らに政治的必要があるとも考えていなかった。入植民が立案した「ケニア計画」(Kenya Plan)⁶¹⁾ に対抗して、フレッド・クバイ⁶²⁾ らが主張したような、1950 年以後 3 年内のアフリカ人の独立を真面目に考えるような白人はいなかった。1952 年にマウマウが勃発してからも、それは政治的動機というよりも、野蛮状態への逆戻りと考えられた。マウマウは、野蛮人の心理的・宗教的問題とされ、社会経済的な問題とは考えられなかった。

1947 年、ケニヤッタが KAU 委員長になったが、まもなく、ケニヤッタを中心とする穏健な合法闘争に見切りをつける者が増えてきた。つまり、1940 年代後半になると、合法的改革のペースの遅さに満足しきれなくなってきた。この年、復員兵士の有志が「Aanake a 40」(「40 年の男子組」の意) グループを結成した。これが、マウマウの先駆けになった。40 とは 1940 年の意で、参加者の多くが、この年に割礼を受けたことを表していた。彼らは、初めインド商人や売春婦の「用心棒」のような仕事についたが、のちには、売春婦を通して(彼女たちが客に取った)政府筋からの秘密情報を手に入れたり、下級の警官や公務員、都市の底辺労働者を通じて武器の横流しルートを確保した。数年後にマウマウが勃発すると、多数の復員兵士が躊躇なくこれに参加することになる。

はじめて「マウマウ」が発覚したとされるのは、1950 年 5 月のことだった。この時、ナイバシャで 17 人のアフリカ人が告発された。彼らは、たがいの結束を固める第一の誓約「団結の誓い」(Oath of Unity, Muma wa Uiguanu) をたて、土地の奪還と自治政府を求める「マウマウ」と呼ばれる非合法結社に参加しているとされた。1950 年末には、クバイ、ビルダド・カギア⁶³⁾ らが KAU の

ナイロビ支部の実権を握り、戦闘的なアジェンダを推し進めた。「誓約」がいつも進められ、KAU の集会の後などに、「団結の誓い」に参加する者が急増した。

1950, 1951 年になると、秘密裏に武器・弾薬の準備が急ピッチに進められた。都市での暴力、特に入植白人に対する暴力事件が増え、入植民の車や家庭からの銃・弾薬の略奪事件が多発した。この状況下で、1952 年までに、植民地政府は、ケニヤッタにマウマウに反対する声明を求めた。これを受けて、ケニヤッタは、クバイが指導するマウマウ中央委員会に、政府批判をもっと和らげるよう求めたと言われる。

1952 年 6 月、スタンリー・マゼンゲ⁶⁴⁾ の指導の下、戦闘訓練を受けるべく、最初の 300 人のマウマウ戦士がニャンダルア山脈の森へ入った。マゼンゲは第二次大戦の退役兵だった。

1953 年 6 月、ゲリラ兵の最前線と後方部隊の連絡を断つために、アフリカ人指定居住地に繋がるニャンダルア山脈とケニア山の森林地帯との間、1~2 マイル幅、100 マイルに渡って 25 万のギクユ住民が強制的に移住させられた。さらに、彼らは、幅 15 フィート、深さ 10 フィートの塹壕を家の周囲に掘らされた。塹壕は、有刺鉄線と地雷で囲われ、その底には尖った杭が何本も打ち込まれた。

1953 年から 1955 年にかけて、キアンブでは 8 万世帯が「非常事態村」に収容された。そこは「泥か木材でつくられ、草葺きか、トタン屋根の家々が列をなして密集していた。・・・警察署のサイレンが、この新しい村を突き抜けて鳴り響き、夕方 6 時 5 分前に夜間外出禁止を知らせた。次に 6 時を 5 分過ぎると、自警団員（ホームガード）を満載したトラックが出動して、眼に見えた誰かれなく、犬を撃つように撃った」⁶⁵⁾ と言われる。

② 武装蜂起の概要

非常事態宣言以前から中央州各地で白人農場やアフリカ人首長に対するテロ活動が頻発し、KAU の急進派内部やアフリカ人農場労働者らの間で秘密の宣誓が行なわれていることが知られていた。非常事態宣言以前、1951 年から 1952 年にかけて、マウマウの宣誓が各地に広まり、1952 年 8 月までにマウマウは本格的に始まっていたと言われる。政府の各種制度に対して、アフリカ人の不服従運動が拡大し、スト、ボイコット、焼き打ち、家畜殺しなどが日常化した。

ケニヤッタの帰国以後、盛り上がる民族意識に危機感を強めていた植民地政府は、1952年10月7日、アフリカ人首長ワルヒウがナイロビ郊外で白昼暗殺されたのを機に、1952年10月20日、ケニヤッタを含む KAU の幹部 185 名を逮捕（ケニヤッタと中央委員 6 名はのちに懲役 7 年の禁固刑を受けた）し、中央州に非常事態を宣言した。植民地政府はアフリカ人新聞・団体の統制、印刷物の許可制、弁務官によるアフリカ人逮捕の自由などあらゆる防衛手段を講じた。表現の自由（書物、雑誌、歌謡など）、政党、労働組合、スト、中央州での 5 人以上の集会、夜間外出の禁止が決められた。ギクユ独立学校の閉鎖も決まり、これにより約 6 万の生徒が学籍を喪失した。リフトバレー地域の 10 万のギクユ人スクォッターが同地から追放され、指定保留地への移住を強制された。

1952 年 10 月以降 3 ヶ月間、特に厳しい弾圧があり、大がかりなマウマウ平定作戦が開始された。嫌疑にかかる者に、まず懲役刑が言い渡された。首謀者として、ケニヤッタと他に 6 名（クバイとカギアを含む）に対し、強制労働を伴う 7 年間の投獄を言い渡した。ケニヤッタは、北部の半砂漠地ロキタウングへ送られた。ケニヤッタ自身は、マウマウの仲間ではなかったが、反植民地闘争を謳っていた。

植民地政府は、ケニヤッタを幽閉することで、マウマウは止むものと思った。実際には、ますます多くの人々が山へこもり、拘留キャンプへ送られた。多くの若者が「誓約」に参加した。今度の誓約は、「団結の誓約」につぐもので、第二次の誓約「バトゥニ誓約」(Platoon Oath, Muma wa Batuni) と言われ、「土地を奪還し自治政府をつくるためなら、必要とあれば、人を殺す」ことが盛り込まれていた。この誓約を立てることで、戦士として、実際のゲリラ活動への参加が許された。

土地自由軍は、ギクユ貧農を中心に構成されていたが、非ギクユ人の都市労働者や労働組合員を含んでいた。彼らは戦争指導会議を設置して臨戦体制に入り、「土地の奪還と白人の追放」を旗印に、ライフル、ショットガン、ピストル、パンガ（山刀）などを武器として、各地の警察署、政府軍駐屯地、白人農場、アフリカ人首長の屋敷などを襲撃した。戦局が深まるにつれて、彼らはニャンダルア山脈やケニア山に立てこもり、巧みなゲリラ戦を展開した。

たとえば 1953 年 3 月 26 日には、カヒウ・イティナ将軍⁶⁶⁾の指揮の下で、わずか 75 名の勢力でナイバシャの警察署を襲い、50 丁の銃、トラック 1 台分の弾薬を奪い、囚人を解放した。これは、もっとも成功した例で、現在に至る

まで、愛国歌謡としてうたい継がれている。

We rejoice and sing
When we remember the Battle of Naivasha

Thousands of words would not suffice
To express our happiness ;

Thousands of songs would not suffice
To praise our Mau Mau army

We can only leap for joy
And shout over and over again.⁶⁷⁾

歓べ、歌え
ナイバシャの闘いを忘れるな

何千の言葉も足りない
この歓びを伝えるのには

何千の歌も足りない
我がマウマウ軍を讃えるのには

ただ、歓び、飛び跳ねるだけ
くり返し叫ぶだけ。

この事件を契機に、「マウマウ」はアフリカ人の所業とは思われず、外部の援助（たとえば、ソ連）があるものと考え人々が出てきた。同年中には、500~600人の規模で政府軍要地の攻撃を繰り返した。1953年半ばには、マウマウは8つの部隊に分かれていた。彼らは政府機関と通じる地下組織によって政府側の動きを把握、武器弾薬の横流しを受けた。また、地元農民の実に95%が食料や隠れ家を提供して、ゲリラ闘争をひそかに支援したと言われる。この頃が闘争の最盛期で、一説にマウマウ解放勢力は当時約20万と言われた。

1954年1月15日。戦闘の流れが変わる事件が起きた。ケニア山で5,000人を率いたチャイナ将軍⁶⁸⁾が捕虜になった。アフリカ人から「最大の敵」「ヨー

ロッパ人の中で最も残酷な男」と呼ばれた公安警察の警視正（senior Superintendent）イアン・ヘンダーソン⁶⁹の尋問で、チャイナ将軍がマウマウの全指揮系統、有力将軍の名前、物資供給ライン、特にナイロビとの連絡網、地元での食料等の供給網を自白した。なかでも、その自白に、戦闘部隊間、特にケニア山の部隊とニャンダルア山脈の部隊間にコミュニケーションが乏しいことが含まれた。これにより、植民地政府は新たな戦術を組んだ。まず「かなとこ作戦」（Operation Anvil）が1954年4月に開始された。

これより1年前、1953年4月、ゲリラ戦のベテラン、アースキン少将⁷⁰配下のイギリス正規軍の応援で総兵力1万以上の鎮圧部隊が組織された頃、警察力も非常事態以前の約2倍（21,000名）に増強された。以後アースキン少将は、ナイロビなど都市のマウマウ支持者とその組織の壊滅→マウマウ・ゲリラと農民の分断→ゲリラの森林内封じ込めという三段階作戦を実行に移した。

1954年4月24日から始まり、約1ヶ月にわたった「かなとこ作戦」では、25,000人の兵士と警官が、ナイロビ在住の10万のアフリカ人を逮捕、約5万人を各地の拘留キャンプへ送った。「かなとこ作戦」で、マウマウに共感しているか支持していそうなギクユ、メル、エンブ人（Gukuyu, Embu, Meru Africans =GEMA）は、ナイロビのアフリカ人リザーブから拘留キャンプへ連れて行かれた。これらの人々と、地元のアフリカ人がマウマウの市民軍を組織した。「かなとこ作戦」により、ナイロビで逮捕されたのは約25,000人であった。

ゲリラの孤立化を図るために各地に「要塞村」が建設された。これは、村の周囲を塹壕で囲み、有刺鉄線をめぐらし、アフリカ人ホームガードを配置して、住民とゲリラの連絡を断とうとするものである。この結果、ギクユ人を中心に約107万のアフリカ人が隔離された。

要塞村計画では、まず住民を一ヶ所に集結させ、ホームガードが見張りに立った。マウマウを近づけさせないために、塹壕が掘られた。住民は、武装したガード付きで、決まった時間帯に野良仕事に出かけた。日が暮れる前に要塞村へ戻るが、場合によっては1日2時間ほどしか畠仕事が出来ないこともあった。夕方から明け方までの灯火管制があった。森の縁には深い塹壕が掘られた。とうぜん、農産物の収穫が減少し、住民にとって、マウマウを支援するリスクが高まった。こうした変化が森の戦士の意気にも影響した。食料と武器の供給を絶たれた解放勢力側は飢えと渇き、寒さと疲労に苛まれて山中を逃げまどうこととなった。飢えで死ぬより、投降する者が多数でてきた。

1955 年 3 月に致命的な出来事があった。ゲリラ側のチェニ集会で、デダン・キマジとスタンリー・マゼンゲのどちらがマウマウのリーダーなのかという問題が生じた。ゲリラ兵が、この二つの派に分かれた。マゼンゲのグループは投降して、政府からのアムネ스티を求めることを決めた。彼らは、植民地政府とこれを協議したが、話し合いは決裂した。彼らは森へ戻ったが、マゼンゲを含めて、全員がキマジの部下に逮捕された。この裏切りを裁かれる前に、マゼンゲの勢力は夜間に逃亡した。まもなく、チャイナ將軍の裏切りが続いた。やがて、マゼンゲの勢力の一部が政府軍を誘導してキマジの勢力を追い詰めた。この結果、マウマウは事実上、崩壊した。1955 年末までに闘いは事実上終了したと言われる。

しかし、以後約 10 ヶ月、投降した元マウマウ戦士のグループを中心に、キマジ狩りが行われた。まだ、約 1,500 名がニャンダルアの山中に残っていたと言われる。キマジの逮捕は、1956 年 10 月 21 日のことだった。

政府軍との戦いで死んだアフリカ人（多くがギクユ人）は 11,503、政府側に立つ一般のアフリカ人 1,819、政府軍内で戦ったアフリカ人 101、白人入植者 32、治安軍のヨーロッパ人 63、アジア人 29（治安軍に従事した 3 人を含む）だった。1956 年末の公式統計（数字が大幅に縮小されている）では、負傷・捕虜 1,035 人、戦闘中に捕虜となったもの 1,550 人、逮捕 26,625 人、降伏 2,714 人だった。多数の死者のほか、508 人が絞首刑になったが、うち 290 人が武器弾薬の携帯、45 人が不法な宣誓の罪によるものだった。この間に、8~9 万人が拘留されたと言われる。

この 4 年間、イギリスは 10 万の兵力で鎮圧に努めた。内 70%がキングズ・アフリカン・ライフル部隊のアフリカ人とホームガードだった。政府軍側の死者は、2,044 名（白人 95 名、アジア人 29 名、アフリカ人 1,920 名）、負傷 4,604 名であった。マウマウ戦争の鎮圧までにイギリスは合計 5 万人の軍隊と警官を注ぎ、約 6,000 万ポンドを費やした。これは植民地政府の約 4 ヶ年分の国家予算に匹敵した。

③ デダン・キマジ

デダン・キマジ (Dedan Kimathi, Kimathi wa Waciuri) は 1920 年 10 月 31 日、ケニア山西麓のニエリに生まれた。誕生以前に父親は病死していた。一夫多妻の大家族のやっかい者で、悪童連中を家来に村々をほっつき歩き、3 日間

の断食という母親のせっかんに平然と耐え、それどころか行方を告げずに何日も放浪するなど、反抗的な少年だった。だが、利発で向上心は人一倍強かった。15歳で小学校に上がったが、詩と英語に優れた優等生で、だれもがこの問題児を愛さざるを得なかった。しかも、夜間は塾を開いて自らの学資を稼いだほどである。のちツムツムのミッション・スクールに進学したが、中等学校卒業後は独立学校教師や白人農場労働者など職を転々とし、最終的に KAU 支部の書記となった。

彼は、1952 年 12 月にゲリラに参加、ニャンダルア山中に立てこもり、アースキン少将配下の鎮圧部隊が組織された頃、マウマウ兵士のすべてを統括する最高指導者（フィールド・マーシャル）に選ばれていた。

1955 年 1 月から大規模な討伐部隊が山中に送り込まれたが、キマジは、最後まで抵抗した。翌年 10 月 21 日未明、ヒョウ皮のジャケット、シカ皮の半ズボンをまとい、ピストルとナイフを隠し持って、ひげぼうぼうのキマジが山麓の村に姿を現した。これより 4 日前、送り込まれたマウマウのニセ部隊の罠にかかって、キマジは 27 時間に及ぶ単独逃亡で疲労困憊、3 日間も眠りこけていた。飢えと寒さから蘇生した彼は、村里で食料を集めて引き返すところをアフリカ人警官隊に見つかった。ゲリラ封じ込めのための山林と村里を切り離す深い塹壕に飛び込み、必死に逃げきろうとした。だが、3 度目の発砲が塹壕から這い上がったばかりのキマジの大腿部に命中。約 1 時間の後、うずくまるキマジの姿が近くの林で発見された。

キマジはニエリで裁判にかけられ、絞首刑が言い渡された。弁護団はこれを上訴したが棄却された。彼は約 4 ヶ月後の 1957 年 2 月 14 日、ナイロビで絞首刑となり、37 年の短い生涯を閉じた。なお、キマジを捕らえた 9 人の警官は懸賞金約 50 万円（当時）を山分けした。逮捕の後、10 万枚のビラがリフトバレー一帯に投下され、1 時間ごとにキマジ逮捕の特別放送があった。一方、マゼンゲ將軍はエチオピアへ逃げたとも言われたが、行方不明のままであった。

非常事態の終結宣言は 1960 年 1 月 12 日であった。1956 年頃から非常事態終結まで、各地に拘留された約 8~9 万人のうち大多数が「マウマウの毒を取り除くりハビリの後」で復員を許された。最後まで、植民地政府は、マウマウを「宗教的問題」と考えていた。なお、白人入植民の多くは、1950 年代の終わりまでにケニアの土地を売り、イギリスか南アフリカへ移った。

⑤ 抵抗歌謡

マウマウ戦争期にはおびただしい数の抵抗歌謡が自然発生的に作られ、多数の民衆に口ずさまれた。いくつかを紹介しておこ⁷¹⁾。

When the British came here from Europe
They told us they only brought us learnig
And we received them with suspicion.
Wuui, iiya, they only came to oppress us !

ヨーロッパからイギリス人が来た時
教育が土産だと、彼らは言った
で、怪しみながらも、彼らを迎えてやった
な、何と！我々を苦しめに来やがった！

Gikuyu country has good arable land.
This land of Yatta is no good
It is full of black rocks and sand.

ギクユの国の土地は肥えている
ヤッタの土地は痩せている
黒い岩と砂だらけ。

We were brought to Yatta to perish ;
There is no rain, it is a desert
We were brought here
Where there are no people
In order to destroy all hope in us.

ヤッタの土地で死ねというのか
雨も降らない半砂漠
こんなところへしょつ引いて
人の住むところではないぞ
希望のかけらも消そうと言うのか。

We are tortured because we are Black ;
We are not white people

And we are not of their kind.
But with Ngai in us
We shall defeat the colonialists.

黒人だから拷問なのか
俺たちは白人ではないぞ
あんな奴らとは違うぞ
我らの神ンガイを胸に秘めて
この地を占領する奴らを、必ず打ち負かすぞ。

Prisons are terrible places
They have swallowed all our sons.
But parents, rejoice now,
For Ngai is great,
Those who survived the prisons have returned.

牢獄は恐ろしい場所
我が息子たちを呑み込んだ場所
だが、父よ、母よ、さあ飲んでくれ
我らのンガイは偉大な神だ
牢獄を生き抜いて息子が返って来たぞ。

And you traitors
Who have joined forces with the enemy
You will never be anything
But the whiteman's slaves
And when we win the war
You will suffer for your betrayal.

お前たち裏切り者よ
敵方に味方するお前たちは
白人の奴隷にすぎぬ
私たちが勝利すれば
お前たちは裏切りをきつと悔いるだろう。

The fountain of our Independence

Sprang from Kimathi

And he said it would be guarded by the Mau Mau army

And it would be protected with stones erected around it.

We shall destroy you, the whites,

Because you only know robbery and violence.

独立の泉は

キマジから湧き出る

マウマウの軍勢が見張りに立つから

周りに石の壁をめぐらそう

白人よ、お前たちをやっつけるぞ

盗みと暴力しか知らぬ輩。

これら何百にもものぼる抵抗歌謡には「独立」(Wiyathi)、「ケニア人の団結」(Uiguano wa andũ a Kenya)、「人民戦争」(Mbara ya Muingi)、「人民の団結・連帯」(Ngwatanirwo ya Muingi)、「裏切り者」(Hinga)、「敵方に味方したブチブル」(Thaka) などの新語がしきりに現れている。それらはマウマウ戦争の目的が単一の民族レベルを越えたケニア独立・反英闘争であり、アフリカ人内部での階級闘争でもあったことを端的に物語るものであろう。このことは、マウマウの内部で民族主義の意識を階級意識へ変えていくイデオロギー闘争がきわめて不十分であり、ケニアの民主革命に向かうプロセスが体系的に分析されることがなかったとしても、何びとも否定できない真実として残るにちがいない。

⑤ ラリ村の虐殺

マウマウ戦争は独立ケニア誕生の苦しみであった。しかしその当時、外部世界ではこの戦争を狂信的なアフリカ人テロリストの白人皆殺し運動、権力欲に取り憑かれたギクユ人政治扇動家の野心に端を発するもの、近代文明に適応できないアフリカ人の心理的緊張と挫折感から生じたもの、はてはモスクワ（ボルシェビキ）側の戦略であるなどと説明された。宣誓や殺害の方法をめぐって残虐さと恐怖が誇張された。それは、マウマウ戦争の真の原因の隠蔽を望んだ植民地政府とイギリスにとって好都合であった。白人植民はこれに一役買っている。

1953年3月26日、ナイロビ近郊ラリ村の住民約100名の虐殺事件が起きたが、これはケニア在住の狂信的な白人の手で行なわれたのが真相のようである。

にもかかわらず、イギリスと植民地政府はマウマウ戦争の残虐と恐怖の宣伝のためにこれを利用した。

ラリ村は、リムルから北へ 8 マイル、ナイロビから 35 マイルくらいの距離にある。1940 年頃に、リムルのティゴニ地区からルカ・ワ・カハンガラ (Luka wa Kahangara) という人物が、一族とごく身近な人々を連れて、この地へ移住した。肥沃なティゴニ地区は、白人のために明け渡しを命じられていたが、ティゴニの住人は代替地をあてがわれるまで、そこから去らないと誓っていた。しかし、同地区でたいした地位を持たないルカ一族は、不毛とも言われたラリ村へ率先して移り住み、政府から首長に抜擢された。しばらくすると、ティゴニに居残った人々も散りぢりになり、なかには、リフトバレーのオレングルオネへ移り住む者までが出た。アフリカ人の間に、先に単独行動をとったルカ一族に対する恨みが残り続けた。

1953 年になってから、キアンプのマウマウ戦士たちがこの一族にリベンジを仕掛けた。夜間に居宅を襲い、家族ら約 20 名を殺害した。マウマウ戦士たちがその場を去った後、次に政府軍が来て、ルカ一族のほか、同地域の隣人を襲い、全部で 97 人がその夜の内に殺害されたという。手足を切断された残虐な死体の写真が後日新聞に掲載され、マウマウの暴力として宣伝された。他にも、29 人が負傷、46 人が行方不明とされた。以上が「ラリ村の虐殺」事件のあらましである。

⑥ マウマウ戦争の評価

マウマウ戦争は植民地期ケニアにおける民族運動の総決算であったが、同時にアフリカ人内部の「持てる者」と「持たざる者」との間の熾烈な闘いでもあった。独立以後も、アフリカ人の側では、植民地政府に忠実だったロイヤリスト（ホームガードはその末端機構である）とマウマウ擁護派の民族主義者との間の鋭い対立は、日本の農民一揆における「起ち百姓」と「寝百姓」の関係と通じるものがあるが、それ以上に堅いしこりを現在まで残す結果となった。

独立以後、元マウマウ兵士の回顧録や自伝が数多く出版され、さらに歴史研究の進展とともにマウマウ戦争の真相は次第に明るみに出てきた。現在、これの評価をめぐって、アフリカ歴史学界内部にも鋭い対立が存在しているが、マウマウ戦争はケニア人による民族解放・反英独立闘争であったと性格づける立場が有力になりつつある。現在では、ナイロビの都心に、右手にライフル銃、左手に剣を握ったキマジの立像が立っている。

デダン・キマジは、マウマウ戦争の政治的・軍事的活動はケニアの将来の発展のために記録され、保存されるべきであると考え、毎日の出来事、あらゆる通信文や書類、すべての会議の議事録などを記録・保存させていた。これらの記録は、戦場に設けられた古文書館に大切に保存されたが、1955年のある日、イギリス軍がこの古文書館を襲撃し、すべての記録を没収した。

その後、植民地当局は、これらの記録（スワヒリ語やギクユ語で書かれている）を翻訳、整理し、1巻30ページのもの14巻にまとめ、それらに「キマジ・ペーパーズ」(Kimathi Papers)⁷²⁾というタイトルを付けた。この貴重な歴史文書は、イギリスと独立ケニアの両政府の間で交わされた密約から、独立以後向こう50年間、つまり2013年まで公開されないことになったが、現在ではその禁は解かれた。マウマウ戦争の研究をタブー視することなく、真実をいっそう究明することは歴史家の責務であろう。「マウマウ戦争」はアフリカ史における最も重要なテーマの一つである。

さて、マウマウは、「異文化と接触しながら、自文化からの支持療法的、抑制的な力を見失い、しかも自らの魔術的思考を失っていない民族が置かれた不安な葛藤状態から生まれた」⁷³⁾とか、西洋文明への適応の失敗から、「野蛮な過去への退行」(regression into a primitive past)⁷⁴⁾であるなどといった見方が有力な時期があった。イアン・ヘンダーソンなどの見解がそれで、植民地支配を弁護し、正当化するもの、入植民の立場から似非科学的な心理学的解釈に立つものなどを含めて、多くの植民地主義者に通底する解釈が生じた。

「野蛮な過去への退行」という説明は、植民地支配を正当化するのに便利な言説であろう。以前は「原住民」に「アフリカのサンゴ、陽気なのおんき者、白人のお守りを必要とする幼児」、あるいは逆に「高貴な野蛮人」といったレッテルを貼って来たが、たちまちアフリカ人は「野獣」に変身してしまった。この他にも、先天的うそつき、盗人、犯罪者といった言説もしきりになされた。イアン・ヘンダーソンの『キマジ狩り』(1958)には、そうしたステロタイプが頻出し、キマジは野獣、私生児(バスタード)として扱われている。

こうした見方からは、当然のように「アフリカ人が自治のために闘ったりするはずがない」、そもそも、「自治などという高尚な理念を知っているはずがない」「彼らは、ただ喧嘩していたのだ、暴力的に争うことは、彼らの本性である」⁷⁵⁾といった考え方が生じた。人殺しは、原住民の本性、野獣性の一部であるということになる。

とうぜん、マウマウは民族解放運動といった崇高なものではなくなる。「それは、邪悪な、悪意に満ちた腫瘍であり、暗く腐食した部族的病巣であり、隠滅しなくてはならない」⁷⁶⁾とされた。マウマウは「イギリスが大変な努力と犠牲を払って救い出したケニアを、再び暗黒へ戻す」⁷⁷⁾ものだということになる。マウマウの原因は、未開人の病理現象であり、したがって植民地支配やその機

構とは何の関係もないとの結論に至った。したがって、この治療法は、「誓いを立てたことを告白させ、収容所に入れ、強制労働によってリハビリするほかに解決の道はない」とされた。

ケニア人の学者の間でも、評価はさまざまであることは先に述べた。図式的には、アンチ・マウマウとプロ・マウマウの二つのグループに大別される。前者の場合は、マウマウがギクユだけの部族単位の現象であるとの考え方ではほぼ一致している。ウィリアム・オチエン、ベスエル・オゴト、ベンジャミン・キプコリールらである。

オチエンは「マウマウは、断じてナショナリストの運動ではない。盗まれた土地の奪還を要求し、キクユランドでの農民の欲求不満と苦悩を晴らそうとした以外、マウマウはナショナリストとしてのプログラムを持たなかった」⁷⁸⁾と述べている。歴史学界の重鎮オゴトは「1960年、マウマウのイデオロギーがナショナリストの陣営から正式に拒否された以上、それはケニア・ナショナリズムの中核とは言えない」⁷⁹⁾とした。

オゴト、オチエンらによれば、マウマウは、ギクユ、エンブ、メル人に限られた部族的次元を超えない運動であり、土地の奪還以上のイデオロギーを持ちあわさなかったと言う。「ギクユが土地を奪われたことは確かだが、ケニア人の全員が奪われたわけではなく、彼らがケニア人のために返せと要求しただけのことで、とてもナショナリスティックとは言えない。したがって、独立の達成とは関係がない」と言うのである。

「マウマウ」に対するケニア知識人の側からの、こうした負の見解は、60年代の権力の移譲時に、植民地政府にとっては都合がよかった。オゴトは、「中央部ケニアの政治・文化・音楽：マウマウ歌謡の研究」と題する論文を書いているが、これら抵抗歌謡のうちから、ギクユの民族的抱負を謳う例だけを取り上げ、アフリカ統一の歌などはなぜか除外している⁸⁰⁾。

B. E. キプコリールもアンチ派であるが、彼の見方は、多少とも融通がきく。彼は「マウマウは、軍事的、道義的に失敗、挫折だった」と言う。つづけて「1960年、ケニアを独立させるとのイギリスの決定に、マウマウがどれほど役に立ったかは疑わしい。なぜなら、1955年以降は闘いがなかったのだから。イギリスがマイノリティ集団の暴力に譲歩したとも考えにくい。しかし、マウマウがアフリカ人への合法的な権力の移譲に役立ったと考えてみたい。マウマウは、イギリス帝国主義の双子の杭（入植民とアフリカ人首長）を無力にするのに役立った。マウマウは、ケニア独立後の政治的諸課題を絞り込むのにも役立った」と言う⁸¹⁾。

C. G. ロスバーグとJ. ノッチングム⁸²⁾は、「マウマウ」をもっとポジティブに評価する、おそらく最初の研究書であるだろう。合法的な改革の積み重ねを

戦術とするような既成のナショナリズムに飽き足らず、マウマウ武装闘争は、他のナショナリスト勢力と一体になって、ケニアを独立に導いたと言う。特に憲法の改正を促し、労働組合の活動を推進する上でマウマウは力があったと言う。

D. L. バーネットと K. ンジャマ⁸³⁾ は、独立達成へのマウマウの決定的役割を評価している。ンジャマ自身は、マウマウ戦士として闘った数少ない教育エリートの人だった。

マイナ・ワ・キニャティは現代の学者の中では、最もプロ・マウマウの立場に立っていると言える。彼は「マウマウ：ケニアにおけるアフリカ人ナショナリズムのピーク」と題する論文で、「革命的盛り上がりは、常に政治意識の最も高いところから生まれる。1940, 50 年代のケニアでは、それがギクユだった」⁸⁴⁾ と明言している。

マロバの見解も傾聴に値する。彼は「マウマウはナショナリズム、反植民地の農民運動である」⁸⁵⁾ としながら、その弱点と強さを分析している。無計画な動員、市民並びに戦士の両者ともが、政治問題化の能力が不十分だったとしている。これは、革命的理論家を持たず、何の擁護勢力をも背景に持たなかったことの限界である。「大衆の自然発生的な怒り」をただ「誓約」だけで結びつけようとした。植民地下の政治経済構造の厳密な分析、それに市民の政治意識化がもっと必要だったと言う。「マウマウだけでは、1963 年の独立に繋がらないが、入植民が主導するような植民地支配は実施が不可能であること、したがって、イギリスにとって植民地支配は高くつくことを知らしめた」⁸⁶⁾ と言う。

IV. ケニヤッタの時代 (1963~1978)

1960 年 1 月、ロンドンのランカスター・ハウスでの憲法会議の決定により、英領ケニア植民地に早期の独立を認めることが決まり、この結果、1963 年 6 月に、ケニアは自治政府を樹立し、同年 12 月 12 日に英連邦内の自治国として独立、翌年には共和制をとった。ジョモ・ケニヤッタが初代首相に、ついで共和制になってからは初代大統領に就任した。彼は、ケニア・アフリカ人民族同盟 (Kenya African National Union, KANU) が結成された 1960 年 3 月から同党の総裁であったが、当時はケニア北方、ツルカナ砂漠の一角、ロドワーの地⁸⁷⁾ に幽閉されていた。

1964 年 11 月、唯一の野党「ケニア・アフリカ人民主同盟」(Kenya African Democratic Union, KADU) が自主解散し、全議員が KANU へ移籍、一党制の下で集権体制の確立へ向かった。KADU は、1960 年 6 月に結成された政党で、弱小諸民族を集め、植民地政府に協力的な立場を取り、政策的には、地方分権的な地域主義・連邦制 (Majimboism) を主張していた。

1964 年 12 月、議院内閣制が廃止され、大統領制へ移行したが、ケニヤッタが無投票で初代大統領に選ばれた。副大統領にはオギンガ・オディンガが、KADU からの「移籍組」の一人で、のちにケニヤッタ後の第二代大統領になるダニエル・アラップ・モイ (Daniel arap Moi)⁸⁸⁾ が内務大臣になった。やがて、上院が廃止され、国会は一院制となり、大統領府直轄の州県制が導入された。

① 対立する二つの路線

「黒人のモーゼ」とうたわれたケニヤッタのもとでスタートした独立ケニアは、その後すぐ、ギクユ、ルオの二大民族の主導権争い、保守派のケニヤッタ大統領と革新派のオディンガ副大統領の対立などで不安な政情が続いた。

当時の最大の課題は、入植民から取り戻した土地の再分配問題であり、経済政策の見通しが鍵となった。

ケニヤッタは、独立に対する「マウマウ」の役割を認めない立場を取った。土地の国有化を否定し、有償での土地売買を推進した。これにより、土地を買い戻すことが出来たのは、富裕層に限られた。一方、オギンガ・オディンガは、土地の国有化、貧困層への無償の土地再配分を主張していた。

この結果、1966 年 3 月、国内の民族的利益擁護派と外国勢力との癒着派の間で、KANU の分裂が生じた。同時に、無裁判拘禁を認める治安維持法 (Public Security Act) の存続が決定した。1967 年には、KANU を離れたオギンガ・オディンガ、ビルラド・カギア (Bildad Kaggia) らがケニア人民同盟 (Kenya People's Union, KPU) を結成した。ケニヤッタは、KPU が東アフリカに共産革命を起こそうとする勢力だと批判し、「草の中に隠れたへび」⁸⁹⁾ に注意するよう国民に呼びかけた。同年には、ビクトリア湖畔の大都市キスム (ルオ人の勢力が強い) で暴動が起こり、警察の発砲で死者が出た。

ケニヤッタは、批判を許さない体制づくりに専念した。1969 年、オディンガの議席を剥奪し、逮捕、ついで KPU を非合法化した。国会議員選挙に立候補するには合法政党 (KANU) の公認が必要とされた。オギンガ・オディンガ、アチエン・オネコ (Achieng Oneko)⁹⁰⁾、ルーク・オボク、ワソング・シジェヨらが拘禁され、スワヒリ語詩人アブディラティフ・アブダッラ (Abdilatif Abdalla)⁹¹⁾ を含む KPU メンバーが投獄された (ワソング・シジェヨは独立ケニアで最も長期間拘禁された人物。78 年 12 月 12 日釈放)。こうして、ケニアは、事実

上の一党制国家になった。独立時の「非同盟中立」の旗はいつしか降ろされていた。

この頃のケニアに対して、アメリカは「アフリカ諸国のなかでは最も希望に満ちたお手本」であると賞讃し、多額の投資を惜しまなかった。日本や西ドイツも同じだった。首都ナイロビ（独立当時の人口は 35 万、2010 年現在は 316 万）が毎年、サファリ・ツアーの外国人観光客でにぎわい、あるいは数々の国際会議（たとえば 76 年 5、6 月の UNCTAD 総会、81 年の OAU 総会）の舞台を提供した。

② 深まる政治・社会不安

この間に、いくつか政府要人の暗殺事件が起きた。めばしいものだけでも、ピント（Pio Gama Pinto）⁹²⁾、トム・ムボヤ（Tom Mboya）⁹³⁾ が虐殺された。二人は、副大統領オディンガ派の重要人物で、前者はインド人であるが、元マウマウ戦士であり、後者は現職の経済企画大臣だった。1975 年 3 月、反体制政治家ジョシュア・ムアンギ・カリウキ（Joshua Mwangi Kariuki）⁹⁴⁾ が暗殺された。警察に拘留されていたはずのカリウキの遺体が、ナイロビ郊外ゴングヒルに無残な姿で転がっていたのである。政府は議会内に特別調査委員会を設け、真相の究明を始めたが、結局、報告書を提出しただけで、「あらぬうわさを流す者はその証拠を提出しなければならない」との布告を出し、迷宮入りを宣言した。1976 年には、M. シクク（Martin Shikuku）⁹⁵⁾、J. M. セロニー（Jean Marie Seroney）⁹⁶⁾ など政府に批判的な国会議員があいついで治安維持法により投獄された。二人は、J. M. カリウキ暗殺事件の国会内調査委員会のメンバーだった。司法長官チャールズ・ジョンジョ（Charles Njonjo）⁹⁷⁾ が、ケニヤッタ以後の権力と地位をねらって地盤固めを始めたのはこの頃だった。ジョンジョは、カリウキ暗殺事件に政府高官と警察当局のかかわりがあったとする国会内調査委員会報告を隠蔽した人物であった。

60 年代中頃には、ナクルでケニア陸軍の暴動があり、政府はイギリス軍を使って鎮圧した。また、ソマリ系住民の多い北東部州で大規模な反政府騒擾が生じ、政府はこれを鎮圧するのに 2 年間に要した。

1971 年には、クーデター計画があったとされ、国会議員ギデオン・ムティソ、オウマ教授他が騒乱罪に問われた。シンバ・オゴンギ、メジャ・ムアンジアら数人が拘禁され、陸軍長官 J. ンドロ、裁判所長ギティリ・ムウェンドウらの更迭がきまった。1974 年には、大統領令により、政府、民間の全部門でのストラ

イキの禁止が決定した。

経済政策の失敗も大きかった。73~74年の石油危機以後、異常旱魃の中、年15%のインフレ傾向が続き、74年中頃には産業スト、ナイロビ・ケニヤッタ両大学での授業ボイコットとその後の大学閉鎖、これから波及した全国的規模での中学校のスト、西部地方でのコレラの流行、隣接諸国との国境領土をめぐる紛争があった。そして、74年10月の総選挙では、現職閣僚4人の落選を含めて、158議席中88議席が交代するという、大きい動揺を生じた。

この総選挙は「独立後、最も腐敗に満ちたもの」と言われ、「国会は腐敗のヘッドクォーターだ。今日、ケニアに生きるためには、人は馬鹿になるか、おベっか使いになるか、でなければ、墮落しなければならぬ」(シクク)とまで言われた。

1975年には、ほかにも、マスキニ(Maskini, 貧者)解放戦争によるテロの勃発、ケニア社会主義統一政党を名乗る非合法地下組織による政府批判ビラの撒布があった。ほぼ同じ頃に、イギリスの「サンデー・タイムズ」紙(*Sunday Times*)がケニヤッタの専横を批判し、その係累をひく1,000家族が国家の富と地位を私物化しているとの暴露記事を発表し、政府は苦境に立たされ続けた。

1976年には、国会議員シェラガト・ムタイが暴動教唆の罪状で投獄された。1977年には、国会議員ジョージ・アニョナ(George Anyona, 1945~2003)が議会問題で拘禁され、ついでコミュニティ演劇「したい時に結婚するわ」の上演許可取り消しがあり、同年末にグギ・ワ・ジオンゴの拘禁があった。1978年には、他に数名のソマリ系住民が拘禁された。

③ ケニヤッタ時代の功罪

1978年8月22日、療養先のモンバサでケニヤッタが死去した。ケニヤッタ時代の評価できる点としては、一般に経済の成長政策があげられる。年10%を超える経済成長が時にはあった。しかし、地域格差の是正が遅れ、土地なし層の貧困問題の解消が進まず、逆に貧富の差が拡大の一途を辿った。要するに、「成長が格差を生んだ」15年間だった。批判勢力への弾圧が強化され、権力の一極集中が進んだ。

独立以後、非同盟中立主義のもとに出発したケニアであったが、これまで見てきたように、独立直後から、とりわけて60年代後半から、しだいに独裁色、

反共色を強め、親欧米路線を取り始めた。一方、隣国タンザニアでは、1967 年、大統領ジュリアス・ニエレレ（Julius Nyerere, 1922~1999）が独自の社会主義国家建設に向けて「アルーシャ宣言」（Arusha Declaration, Azimio la Arusha）を出していた。同年、ケニアは、タンザニア、ウガンダとともに「東アフリカ共同体」の結成に参加したが、10 年後に共同体は解散した。

ケニヤッタは、在職中にケニアでも屈指の大土地所有者となり、息子を協同開発省の高官にしたて、第二夫人の弟コイナンゲを国務大臣に、娘をナイロビ市長に擁立するなど強大な「ケニヤッタ・ファミリー」を築いた。

一方、巨大な怪物都市ナイロビの人口はますます膨れ上がった（1920 年 14,000 / 1930 年 52,000 / 1940 年 65,000 / 1950 年 119,000 / 1960 年 267,000 / 1962 年 314,000 / 1969 年 478,000 / 2010 年現在 316 万）。地方から流れ込んでくるナイロビの「放浪部族」の数は年々増大している。これとあわせて、物価高と失業、売春、犯罪などあらゆる社会悪が蔓延した。これら「放浪部族」の多くはやがて身をもちくずし、転落の道を歩むこととなる。メジャ・ムアンギ（Meja Mwangi, 1948~）の代表作『早く俺を殺してくれ』（*Kill me quick*, 1973）、『リバーロードをくだる』（*Going Down River Road*, 1976）トマス・アカレ（Thomas Akare, 1950~）の『スラム』（*The Slum*, 1981）などは、ケニヤッタ時代の社会状況を赤裸々に描く小説のほんの一部である。

④「ワピ・ウフル？」（独立は、何処へ？）

以下では、60 年代独立当初の政治社会史の一断面を、やや違った角度から理解するために、ケニヤッタの片腕として働いたオギンガ・オディンガ（1966 年まで副大統領）の周辺に注目してみよう。アフリカで最も近代化されたお手本と言われたケニアの裏面が浮かんでくる。

オディンガは、ケニア西部のニャンザ州に絶大な基盤を持つルオ人の指導者だった。彼は、KANU の副総裁として、1960 年、東京で開催された第 6 回原水爆禁止世界大会へ公式招待されたあと、中国、モンゴル、ソビエトを訪問した。これより以前に東ドイツを訪問し、「ケニア政治指導者の共産国への秘密旅行」と騒がれていたオディンガは、この旅行のあと、ナイロビ空港で嚴重にチェックされ、日誌、書類、パスポートなどを没収され、以後、「東アフリカへ komunizm を広めた人物」として植民地政府の監視を受けることとなった。

オディンガの政治信条は、ソビエトの援助のもとで統一的な社会主義の実現

を志向するもので、彼はケニヤッタこそが独立ケニアの指導者たるべきことを確信していた。したがって、幽閉中のケニヤッタ釈放のために奔走し、1961年の総選挙での KANU の勝利にもかかわらず、ケニヤッタを迎える日まで政権を取ることを留保したほどであった。同年 8 月ケニヤッタが釈放され、63 年の総選挙で KANU が大勝利をおさめると、ケニヤッタを首班とする内閣が組織された。オディンガの夢は、ここで形の上では実現した。

しかし、ここでオディンガにとっては予期しない事態が生じた。ケニヤッタが独立記念演説で、マウマウ闘争の功績、強制収容所につながれた何十万のアフリカ人同胞の犠牲について、一言も触れなかったのである。植民地政府から「コミュニスト」のレッテルをはられたケニヤッタであったが、のちには「コミュニズムは帝国主義と同じくらい邪悪なものだ。コミュニズムを叫んで、食料が得られ、病院や学校が建つと考えるのは悲しい間違いだ」⁹⁸⁾と述べている。この新体制下では、「われわれは森の戦いで独立を得たのではなく、イギリス本国の肝入りで独立を与えられた」との空気が支配的だった。自己の政治信条との大きな隔たりに気づいたオディンガが深い失望を覚えたであろうことは想像に難くない。

1964 年 12 月、穏健派の KADU が解党し、全員が KANU へ入党することで、オディンガの敗北は決定的となった。この時、同じルオ人のトム・ムボヤが書記長となり、しだいに勢力をつよめて、欧米の援助のもとで自由経済にもとづく近代化路線を定着させることになった。オディンガは副大統領の地位を保持していたが、事実上、一切の政治的権限を奪われ、演説会をはじめとする政治活動は禁止された。

対外的には、ケニアがコンゴ動乱⁹⁹⁾に際して、アメリカ、イギリスにならい、アメリカのカイライ政権ともいうべきチョンベ勢力の支持にまわったこと、ローデシア問題をめぐってイギリスとの断交を提唱するアフリカ諸国の統一戦線を攪乱したことなどは、外交政策上の明白な転換であり、OAU（アフリカ統一機構）の理念〈パン・アフリカニズム〉の大義に背く行動であった。非同盟中立、アフリカ型社会主義建設という独立時のスローガンは空文化した。

オディンガが盟友ケニヤッタへ訣別の手紙を送り、政治信条をわかち合う A. オネコや B. カギアラとともに KANU を脱退し、新たに KPU（ケニア人民連合）を結成したのは 1966 年 4 月だった。しかし、同年中に制定された治安維持法により、これら 3 人は投獄され、69 年 10 月に KPU は非合法化された。オディン

ガは 71 年 3 月まで獄中生活を送り、釈放後は KANU へ復帰したが、ケニヤッタ死後の新総裁選挙への立候補は許されなかった。

オディンガの身边に起きたこれら一連の政治的事件は、独立後の社会的混迷の縮図でもあった。白人権力と交替した黒い官僚内部で露骨な権力闘争が繰り上げられた。政治家・実業家や、金で中産階級の地位を買い取った新興同胞の一部が、広大な土地を占有し、国家の権力と富を集中して「ベンツ族」（メルセデス・ベンツに乗り、一般民衆をへいげいする特権階級）が生まれていた。

「独立」は誰のためであったのだろうか。一般の民衆が「独立」にかけた夢は、貧困からの解放、失われた土地の回復以外の何物でもなかった。しかし現実には、土地や学校の不足は解消されず、失業者は増大する一方であった。労働運動の懐柔に腐心する国会議員たちは、農民が半生をかけてかせぐ金をわずか 6 ヶ月で得ているありさまであった。悲惨のどん底にあえぐ民衆（ちなみに、当時のアフリカでは総人口の 80%が飢餓ライン以下の生活である）の間から、ワピ・ウフル？（Wapi Uhuru ? スワヒリ語で「独立は、何処へ」の意）との叫び声が高まった。その頃に出版されたオディンガの自伝には、『独立は未だ来たらず』（*Not Yet Uhuru*, 1967）¹⁰⁰ とのタイトルが付けられた。

V. モイの時代（1978~2002）

78 年 8 月 22 日のケニヤッタの逝去により、副大統領ダニエル・アラップ・モイが大統領職を継いだ。彼は、事実上の KANU 一党独裁体制の下で、2002 年 12 月まで、実に 5 期、24 年間の長期政権を維持した。

① 「通り過ぎていく雲」か？

モイは、リフトバレー州のバリngoと呼ばれる半乾燥地域に生まれ、民族的にも全人口比がわずか 1%にすぎない「トゥゲン」（Tugen）と呼ばれる少数民族の出身だった。「トゥゲン」は、「カレンジン」（Kalenjin）グループの一派である。「カレンジン」という名称は、1950 年代以後に定着したもので、「ナンディ語を話す諸民族」の総称として使われ始めた。マサイ人、サンブル人、ツルカナ人などナイル系の諸民族と近い関係にあり、キプシギス、マラクウェートなどの少数民族がこの名に含まれる。現在の「カレンジン」は、優れた陸上選手を輩出し、「走る民族」として知られる。総人口は、2009 年現在 496 万で、ギクユ人、ルヒヤ人と並ぶ規模の大きい集団ということになる。

モイは、教員養成学校を卒業後、1946 年から 10 年ほど地元で教員生活を送

った。1955 年頃から政治活動に入り、1963 年以後、地元選出の国会議員として活動を始めた。1960 年、ケニヤッタをリーダーとする KANU に対抗して、KADU の結成に参加し、中央集権でなく、少数民族擁護を掲げて連邦制（Majimboism）を主張した。KADU は、内陸の牧畜諸民族や海岸地方の少数民族の利益を代表していた。

この結果、独立時のモイは、野党 KADU 所属の国会議員だったが、1964 年に KADU が解散し、全員が KANU に合流したから、いわゆる「移籍組」の一人だった。

モイは、ケニヤッタ死後の 1978 年 10 月 10 日に正式に大統領に選ばれたが、各方面から「通り過ぎていく雲」（a passing cloud）にすぎないと軽視された。彼の大統領後継を阻止する動きさえ見られた。モイは、前大統領と比べて、カリスマ性はむしろ皆無で、ケニアの「顔」としては、国際的にも見劣りがする存在だった。ギクユとルオという独立時からの二大勢力の間の緩衝役として、国内政治で珍重されたのだった。結局、当時の司法長官で政界の実力者であったチャールズ・ジョンジョが、モイの支持にまわり、当面の決着がついた。ジョンジョは、のちに国会議員選挙に出馬し、将来の大統領職を狙うことになった。

② 権力の強化と集中

この政治力学のなかで、モイの取る道は唯一つ、大統領権限の徹底的な強化をはかることだった。すぐに都心の大通り「ガバメント・ロード」の名称を「モイ・アベニュー」と改称した（1978 年 10 月 18 日のこと）のを皮切りに、憲法や市民権の停止の権限を大統領に付与する立法措置を講じたほか、表現の自由、集会の自由、結社の自由などを大幅に制限した。

まず手始めに、批判勢力の多くを KANU から除名し始めた。1979 年、モイ体制下での初の国会議員選挙では、体制批判派のアチエン・オネコ、オギンガ・オディンガ、ジョージ・アニョナなどの立候補を認めなかった。候補の写真の前に列を作る「投票」方式（「行列方式」と呼ばれる）が国会議員選挙での公認候補を決める KANU 予備選挙に採用された。こうして、国政選挙での匿名性が制限された。高等裁判所判事および控訴裁判所判事に与えられていた在職権保全規定を廃止し、死刑に相当する罪（国家反逆罪など）に問われた容疑者の保釈制度が廃止された。拘留期間も、それまでの 24 時間から 14 日間へ延長され、無裁判のまま容疑者として長期間拘留することが合法化された。1980 年には、

結社の自由の保証があるにもかかわらず、大統領令により、ルオ同盟、ゲマ（ギクユ人、エンブ人、メル人、およびカンバ人の一部）同盟、カンバ同盟などの民族的結社が禁止された。

この頃、向こう 3, 4 年の備蓄を保証すると見られた 78~9 年の大豊作にもかかわらず、全土で飢餓が発生した。トウモロコシの密輸出に政府高官が関係していると報じられた。食料援助を求めて自らが数度の国外旅行を試み、1980 年 6 月には、イエローメイズの供与や軍事援助と引き換えに、アメリカにモンバサの港湾や、ナイロビの空港の軍事使用を認める密約をかわした。

同年 7 月には、公務員組合やナイロビ大学教員組合、学生自治会を解散させた。この間、ナイロビ大学やケニヤッタ大学は、1982 年に至るまで繰り返し閉鎖された。南アフリカの人種差別に反対する学生デモの後、教員の逮捕があった。なお、1979 年には、ジョンジョが司法長官を辞任し、対立候補なく国会議員に選出された。

1981 年には、アフリカ統一機構（OAU）¹⁰¹⁾ 首脳会議を主催した。この直前に政府批判の地下文書を配布したとして数人の厳罰処分があり、大学に捜査が及び、ジャーナリスト、労働者、総選挙に落選したワニリ・キホロ（Wanyiri Kihoro）¹⁰²⁾らが逮捕された。キホロは、カリウキ問題の際の学生運動指導者で、特定されてもいない「治安攪乱」文書所持の罪状で拘留されたが、3 ヶ月後に罪状が取り消された。進歩的国会議員ワルル・カンジャ（Waruru Kanja, 元マウマウ戦士）が少額の外貨を持ち帰り、申告しなかったとして逮捕、投獄され、「治安攪乱」文書所持の疑いで自宅搜索を受けた。ソマリ系住民の多い北東部州で新たな騒擾が起き、地区役人の殺害に対して、政府は無差別の暴力行使と残虐さで市民に応酬した。ムゼンバ（ジョンジョのいとこ）の国家反逆罪裁判があったが、その後に無罪放免となった。司法長官カルグが罷免され、ジョンジョの息のかかったカメレが就任した。国会議員シェラガト・ムタイ（Cheragat Mutai）¹⁰³⁾ がタンザニアへ政治亡命した。

5 月には、オギンガ・オディンガが政府高官の腐敗、合衆国への基地供与を批判し、かつ社会主義政党を準備しているとして、ジョージ・アニョナも第二政党結成の必要を論じたとして、二人が KANU から追放された。オディンガは、パスポートを没収された。6 月には、ケニアの大学は「暴力を専攻させる文学シラバスによって、政府転覆の政治学を教えている」¹⁰⁴⁾ と批判し、グギ・ワ・ジオンゴ、ミシェレ・ムゴ、マイナ・ワ・キニャティ、センベーヌ・ウスマンら

の名前をあげて批判した。6月には、密議により憲法が改訂され、ケニアは法律上一党独裁国家となった。この直後にクーデター未遂事件が起きたが、これについては後述する。

③ 無裁判拘禁の復活ほか

この時期に、裁判もなく、判明しているだけでも、以下の7名の政治拘禁があった。

- (1) アル・アミン・モハメド・カシム・マズルイ博士 (Al Amin Mohammed Kassim Mazrui)
1982年6月7日逮捕。スワヒリ語劇『正義の叫び』(*Kilio cha Haki*, 1981)の著者。ケニヤッタ大学言語学講師。
- (2) デイビッド・ムカル・ガンガ (David Mukaru Ng'ang'a)
1982年6月16日逮捕、同6月22日拘禁。多党制を擁護。ナイロビ大学アフリカ研究所講師。ナイロビ大学歴史学非常勤講師。
- (3) ジョージ・モセティ・アニョナ (George Mosei Anyona)
1982年5月30日逮捕、同5月31日拘禁。74年から77年まで国会議員。ケニヤッタ政権期に一度目の拘禁を受けた。78年に釈放されたが、79年の総選挙への出馬は認められなかった。多党制を擁護し、逮捕4日前のKANUへの批判発言のため党から追放された。81年、「治安攪乱」文書所持の罪状で逮捕・拘禁されたが、4ヵ月後に条件つきで釈放された。
- (4) ジョン・ハミヌア (John Khaminwa)
1982年6月3日逮捕、同6月4日拘禁。ジョージ・アニョナ、ムアング・ステイフン・ムリイジ (Mwangi Stephen Muriithi) の弁護に立った。ケニア弁護士協会所属。高等裁判所弁護人。
- (5) エドワード・オユギ (Edward Oyugi)
1982年6月10日逮捕、同7月13日拘禁。ケニヤッタ大学教育心理学講師。
- (6) カモジェ・ワチイラ (Kamoje Wachiira)
1982年6月7日逮捕、同6月12日釈放。同6月28日再逮捕。同7月13日拘禁。ケニヤッタ大学地理学講師。
- (7) ムアング・ステイフン・ムリイジ (Mwangi Stephen Muriithi)
1982年5月22日逮捕、その後拘禁。前情報局長代理。地位左遷に抗議して辞職。

以下は、同時期に「治安攪乱」文書所持の罪状で逮捕された者のリストである。

- (1) ワンゴンドゥ・ワ・カリウキ (Wang'onde wa Kariuki)
1982年5月15日逮捕。7月19日に懲役4年半の判決。

- (2) マイナ・ワ・キニャティ (Maina wa Kinyatti) 1982 年 6 月 3 日逮捕。マウマウ愛国歌謡を集めた『山々からの轟き』¹⁰⁵⁾ の編者。ケニヤッタ大学歴史学講師。
- (3) ウィリー・ムニョキ・ムツンガ (Willy Munyoki Mutunga)
1982 年 6 月 10 日逮捕。「J. M. カリウキ連帯行動日、馬鹿にされてたまるか、ニャヨを拒否せよ」と題するリーフレットを所持していたとされる。ナイロビ大学商法学科講師。大学職員組合役員。高等裁判所弁護人。
- (4) クリスパス・ガンガ・カヒガ (Crispus Ng'ang'a Kahiga)
1982 年 6 月 17 日逮捕。70 歳代の老農夫で元マウマウ戦士。
- (5) アーネスト・ディラング・カマウ (Ernest Ndirangu Kamau)
1982 年 6 月 17 日逮捕。70 歳代の老農夫で元マウマウ戦士。

1983 年 8 月、大統領選挙があり、モイが無投票で再選された。1984 年 2 月、北東部州でソマリ系住民数百人（一説に、数千人）を政府軍が殺害したと言われる。その他、各地で政府軍による殺害行為が続いた。6 月、公務員はすべて KANU 支持者になる必要があるとされた。

④ 政治犯釈放と民主化を求める運動

以下には、ロンドンを拠点とした「ケニア政治犯釈放運動委員会」(Committee for the Release of Political Prisoners in Kenya, CRPPK) 刊行の「ケニア政治犯を釈放せよ」と題するパンフレット¹⁰⁶⁾ のほぼ全文を紹介しておこう。この委員会は、1982 年 7 月に結成されたもので、代表はトリニダード生まれのジョン・ラ・ルース (John La Rose, ロンドンのニュー・ビーコン出版社主)¹⁰⁷⁾ で、情報誌「ケニア・ニュース」(*Kenya News*) を随時刊行し、先述の通り同委員会の国際連帯組織がスウェーデン、ノルウェー、デンマーク、日本、アメリカ、ナイジェリア、レソトなどにあった。

a. 文書「ケニア政治犯を釈放せよ」

ケニア政府は、経済状況の悪化にともなう国民の間での不穏な空気と直面するたびに、政治、文化、学問、労働組合に対する弾圧を繰り返してきた。モイ体制のもとで、この傾向は三つの理由から、いっそう強化されている。

第一に、物価の連鎖的上昇、外貨準備の不足、未曾有の失業率、さらに食料配給を受ける長蛇の列と巨額のトウモロコシ輸入を生じさせるに至った深刻な食料不足などのために、経済問題がますます深刻化し、手に負えない状況にたち至っている。これらが工場や準国営産業や農園でのストライキ、学生デモに見られるような広範囲な不穏の原因となっている。ケニア経済は、合衆国、西ドイツ、イギリス、日本からの巨額の援助のお蔭でようや

く停止を免れていると多くの人びとが観察している。これが逆に、ケニアを債務国の抵当に入れてしまうという結果を引き起こしている。

第二に、高級官僚の腐敗ぶりは、政府のお墨付きの生活様式となっている。82年初め、進歩的な国会議員たちが、バローダ銀行と司法長官と高級官僚と警察高官を巻き添えにしたある不正を暴露したが、モイ大統領は拘禁と議員特権の剥奪をちらつかせて、これらの議員を威嚇した。また、農業協同組合からの横流しが広まった結果、小規模農民の不満の高まりを食い止めるために、政府は若干の役人の解雇に踏み切らざるを得なかった。

第三に、これまでのイギリスの軍事基地とは別に、合衆国に対しても軍事基地を供与した。『ニュー・アフリカン』誌 1982 年 6 月号は次のように報じている。

『ケニアの海岸地域は、合衆国のインド洋戦略上、きわめて重要である。合衆国は 5,000 万ドルを投じて、モンバサ港の海底を掘り下げ、巨大航空母艦の旋回を可能にするとのことである。合衆国は、モンバサ空港に航空母艦の戦闘機のための新誘導路と、その維持施設建設に向けて、予算を計上している。

ケニアの戦闘部隊の装備をアメリカ人が援助している。すくなくとも、F5 戦闘機の一つ大隊がケニア空軍と共同演習中であり、他にそれを計画中のものもあると言われる。OAU 和平軍としてチャドに向かったケニア派遣軍は、合衆国の輸送機を使用した。

ナイロビの巨大なアメリカ大使館には、何百人のスタッフが駐在し、そこは東アフリカ全土とインド洋の監視基地として使われている』。

この他、ナニユキとナイロビに合衆国の軍事基地があり、地下活動施設の建設のために巨額の金が使われている。その結果、ケニア政府は、ことにレーガン政権の強力な後盾のもとに、合衆国の無条件支持を取り付けて、ケニア人の民主的権利の弾圧に自信を深めている。ケニア人の生活の全部門（銀行、保険会社、自動車組み立て工場、農園、ホテル、リゾート他）に合衆国の利権と影響が急速に拡大した結果、ケニア政府はますます右に旋回して、国民の政治、教育、文化生活の全領域での民主的討議にこれまでになく不寛容になってしまった。政府は専制的な全体主義を持ち込んで、何がなんでも欧米の投資家の利益をはかる「安定」を維持しようとしている。

文化・思想の弾圧

文化創造のイニシャチブを握ろうとするケニア人に対する不寛容と抑圧は、1982 年に限っても次の事例に見てとれる。

82年初め、ケニヤッタ大学生によるジョー・デ・グラフト¹⁰⁸⁾の戯曲「ムントゥ」の国立劇場での上演が、暴力を肯定するとの理由で禁止された。この戯曲は1975年、ナイロビの世界教会評議会総会での上演のために全アフリカ教会会議の承認を得ていた。

2月、ギクユ語のミュージカル「母よ、我がために歌え」の上演申請が拒否された。この戯曲は、カミリズ教育文化コミュニティセンターの農民や労働者たちの役者から助けを得て、グギ・ワ・ジオンゴが書いたもので、1920年代から30年代の植民地期ケニアの強制労働とキパンデ（身分登録証）制度を劇化したドキュメンタリー風のものである。この戯曲は、植民地政府の巨大な陰謀と残虐行為の中で、社会的不正義とたたかい、団結して生き抜こうとする一農場の努力を描いている¹⁰⁹⁾。

3月11日、カミリズ教育文化コミュニティセンターの公認許可が取り消され、村の演劇活動は全面禁止となった。3月12日、リムル地区長官によって重装備した警官を搭載した3台のトラックが送り込まれ、カミリズ村の野外劇場が取り壊された。

この他、文化活動に対する弾圧としては、1982年度のケニア学校演劇祭の優秀諸作品、ことにナイロビスクールが上演した「叫び」に対する弾圧があげられる。優秀作品のすべては、現状に見られる腐敗と病弊を批判したもので、高校生たちが執筆したものである。この結果、これらの戯曲はケニアのどこで誰が上演しようとも、政府のお墨付きが必要となった。『ウィークリー・レビュー』誌1982年6月11日号によれば、高等教育大臣ジョゼフ・カモゾが次のように述べている。

来年からは・・・中学生の演じるケニア学校演劇祭参加作品のテーマは高等教育主事が準備

することとしたい。さらに、これらの学校演劇は、視学官長の審査を受けるまでは、いかなる団体・個人によっても、公開を目的にフィルムに収録してはならない。また、演劇テーマの公正な判断を期するために、地区レベルから全国レベルまで、すべての演劇祭の審査員は、視学官長の主宰する委員会の人選することとしたい。

ニエリ地区の学生連盟が、マキニ・ガシュグ作「教育はすべてか」の上演を計画したところ、州当局はその上演許可を出す前に、戯曲の一部カットを求めた。学生たちはこれを拒否した。1981年度ケニア学校演劇祭で第2位となったこの戯曲は、ケニアの教育制度の諸問題、ことに学校卒業生の失業問題をえぐるものである。

植民地支配の時代と同様、すべての演劇集団は政府に登録されなければならない、すべて

の上演活動は州当局のお墨付きを得なければならない。

政治の分野でも、民主的権利の要求はことごとく窒息させられてきた。選挙は不正に操作され、ふるいをくぐり抜けた数少ない民主的意見は攻撃にさらされ、政治亡命すら余儀なくされている。最初の政治難民はタンザニアへ亡命した前国会議員シェラガト・ムタイである。国会は本来の機能を失ってしまった。憲法に根拠のない大統領令が、實際上、立法機関を代行している。

大統領の地位に関しては、これまで一度も国民投票が行われなかった。KANU 内外のどの人物も国民投票によってモイ大統領に対抗できないように、恐怖戦術が使われてきた。1969 年以来、ケニアは事実上の一党制国家になっている。

モイ体制にとっては、これらの制限でも穏やかすぎた。1982 年 5 月、オディンガ・オディンガが社会主義政党の結成を企てたとの根拠のない主張が流布した。当時、対立政党の結成は憲法で禁止されていなかったが、この時、政府は憲法を修正し、ケニアを法律上の一党制国家にしてしまった。1982 年 6 月 9 日、十分な国会討議も国民投票も行われずに、ケニアは一党制国家となった。前司法長官で現憲法大臣〔その後地位を失脚〕のチャールズ・ジョンジョは一党制実現の仕掛け人である。じっさい、憲法修正案を提出したのはジョンジョである。皮肉なことに、1977 年、憲法改正について—いわゆる「憲法改正を求めるグループ」—民主的討議を要求する人びとに反対したのもジョンジョであった。オディンガは新政党の結成を呼びかけなかったが、この問題は唯一の合法政党である KANU から彼を追放する格好の口実となった。オディンガは、現在の経済的諸問題、外国企業による経済支配、政府高官の腐敗、合衆国への軍事基地供与に対してつねに反対の声をあげてきた。

この他にジョージ・アニョナとムカル・ガンガの二人の人物が、対立政党の結成は合法であると公言して、1982 年 6 月に拘禁された。

教育の分野では、教育的努力の全領域、ことに学校や高等教育機関で、政府は組織的かつ巨大な思想弾圧にのり出している。次にあげるのは『ウィークリー・レビュー』誌 1982 年 6 月 11 日号からの抜粋である。

モイ大統領は、ケニアの教育政策担当者に対して次のような不満を表明した。・・現在、国立教育研究所（KIE）は中学校教科書選定では何の役割も果たしていないが、近い将来その役割を担うこととなるだろう。また、同研究所は教育体系を監督し、暴力肯定のテキストが学童の手に渡ることのないよう注意しなければならない。

大統領の関心が、最近のケニアの大学で洪水のように湧き上った騒擾によって高められたことは確かである。大統領は、ナイロビ大学の3人の教師が「暴力を専攻させるテキストを使って国家転覆の政治学」を教授していると批難した。また高等教育大臣ジョゼフ・カモゾは、暴力肯定のテキストがケニア全土の中学校の規定テキストとして使用されることのないよう高等教育省は努力するつもりであると明言した。カモゾの関心は、第一に文学テキストにかかわるものである。カモゾは、来年度からはすべての文学テキストは高等教育主事の最終的承認を得なければならないと発言した。カモゾによれば、ケニア全土の学童が使用する文学テキストの厳格な検閲権は高等教育省にあり、中学教育体系に含まれる一切のイデオロギーを統制する自由な権利を付与されることになる。とりわけて、ナイロビ大学とケニヤッタ大学の教授陣は高等教育省が人事権を持つことになる。

ケニヤッタ、ナイロビ両大学の7人の講師の逮捕は、これらの組織的な思想弾圧の結果である。7名の内4名は裁判なしで拘禁され、残りの者は「治安攪乱」文書所持の罪状を「突き付けられ」、拘置所や警察の独房に閉じ込められている。

大学教師たちへの迫害は（『ウィークリー・レビュー』誌6月11日号によれば）、ナイロビの弁護士たちが弁護を回避しようとするために、いっそう複雑になっている。弁護士たちが、最近同業の一人が拘禁されたことを理由に、権力側の犯罪者リストに名前を出ている人物の弁護に立つことを警戒しているのかどうかは明らかでない。

しかし、これらの弁護士たちがたじろいでいる理由を理解するのはむずかしいことではない。法律家たちも、これら一連の弾圧を免れなかった。ジョン・ハミヌアはジョージ・アニョナとムアンギ・スティフン・ムリイジの弁護に立った後で拘禁された。このあとの二人も拘禁された。

思想弾圧は大学や高等教育機関の外へも広まっている。農民向けの月刊誌『農園』の編集者で、進歩的国会議員ワルル・カンジャの逮捕と投獄の後の空席を争って、1982年進歩的立場を代表してニエリ地区から立候補したワンゴンドゥ・ワ・カリウキが逮捕された。彼は同年5月15日以後、7月7日の裁判まで、保釈措置のないまま拘束されている。判決は7月19日の予定である。彼は「治安攪乱」文書、12月12日運動の機関誌『パンバナ』（*Pambana*, スワヒリ語で「闘うぞ」の意）を所持していたとの罪状を突き付けられている。クリスパス・ガンガ・カヒガとアーネスト・ディラング・カマウの2人はともに70歳代の老農夫であるが、例の文書所持の罪状で逮捕され、拘留されている。この他、どれだけの数の人物が逮捕され、拘禁を受けているのかは、情報がなく推し測るべくもない。

ケニアにおけるこの新たな弾圧の波に抗議し、世界中のいたるところで反対の声を上げ

ることが緊急である。

⑤ クーデター未遂

82年8月1日（日曜日）未明、政権打倒を目指す空軍の一部によるクーデターが発生し、ナイロビの国営放送局、ジョモ・ケニヤッタ国際空港、中央郵便局などを数時間占拠したが、陸軍部隊が出動して、これを鎮圧した。

空軍部隊は「国家救済評議会」を立ち上げ、午前7時頃の放送を通じてモイ大統領の強権政治、汚職の横行、経済政策の失敗を非難、大統領を追放し、全権を掌握したと発表した。中心勢力は、空軍の一部左派勢力と見られるという。彼らは、「8月1日革命である」との声明を発表、腐敗した強権・独裁政権の打倒、政治犯の釈放、汚職の根絶、経済政策の改善、民主政治・自由の回復を訴えた。

クーデターは未遂に終わったが、300人以上の空軍関係者が拘束され、首謀者の大佐は逃亡したとされた。ナイロビ市内の商店街やインド人地区で略奪行為が発生し、治安が悪化した。警告を無視して略奪を続けた数人が都心で銃殺された。事件後の混乱の中で、都心のヒルトンホテルの宿泊者数人が窓越しに発砲を受けて死んだと言う。そこには日本人観光客一人も含まれていた。1日夜、モイ大統領はケニア放送を通じて、若干の者が政府転覆を試みたが、情勢を掌握していると発表し、大統領に忠実な部隊に「職務を完遂」したことを讃え、同時にナイロビと空軍基地のあるケニア山のふもとの町ナニユキに午後6時から翌朝7時までの外出禁止令を敷いた。

「毎日デイリーニュース」(*Mainichi Daily News*) 8月3日号は、UPI電を次のように伝えている。以上の内容とは別の部分をピックアップしてみよう(要旨)。

「ナイロビのあちこちの通りに死体が散乱した。クーデター発生の8時間後に、ケニア放送が、モイの部隊が情勢を『しっかりと掌握』したと英語で放送し、スワヒリ語放送が『ナイロビは平静で、モイ政権は依然権力を握っている』と報じた。しかし、午後になってもナイロビでは散発的に銃声が聞こえ、ある居住者の証言によると、戦火のあった交差点に死体が散乱していると言う。隣国タンザニアの国営放送によると、ケニア空軍の飛行機1機が4人の兵士を乗せて、突如ダルエスサラーム国際空港に着陸したと言う。空軍部隊の一部は、都心から17マイル離れたジョモ・ケニヤッタ国際空港に近いエンバカシ空軍基地に司令本部を立ち上げた。彼らは、午前5時に、英語

放送局、空港、中央郵便局を占拠したと放送した。空軍の F5-E 戦闘機がナイロビ上空を飛んだ。ケニヤッタ通りに面した中央郵便局の辺りで少なくとも 4 人が殺害されたと言う」。

クーデターの翌日は月曜日だった。政府は通常の生活を市民に呼びかけたが、都心は時に銃声が聞こえるなど、人通りは絶えた。月曜日から外出禁止令が敷かれると、市民は身分証明書を高く掲げて、家路を急いだ。マタツタクシーに客が殺到したという。月曜日にも、反乱兵士が都心のどこかに立てこもっているとの評判から、政府は、降伏勧告の期限を火曜日の正午まで延長した。外国人観光客はホテルに缶詰めになり、特に女性客はレイプを恐れたと言う（1 件が確認された）。ヒルトンホテルでは 350 人の客が反乱兵士によって威嚇されたと言う。

8 月 4 日、ケニア軍当局筋が明らかにしたところでは、それまでに約 3,000 人が逮捕されたという。うち約 2,000 人は空軍の将兵で、兵力の約 80% に相当した。残りの 1,000 人は、混乱に乗じて、商店などを襲った暴徒とされた。4 日現在、反乱兵士の抵抗が多少は残っているとされたが、ナイロビ市内の 500 の死体置き場は満杯、病院は負傷者であふれ、ケニア放送は市民に献血を呼びかけた。

モイ大統領は 8 月 6 日、クーデター未遂事件で、129 名が殺害されたと発表した。彼によれば「大多数が反乱兵士であるが、なお身元確認が続いている」とのことだった。未確認情報によれば、死者の数は数百人とも、1,500～2,000 人とも言われた。別の情報では、約 2,500 人の空軍兵が拘留され、1983 年 3 月までに、900 人に罪状の言い渡しがあり、12 人が死刑、約 100 人の学生に数ヶ月から 10 年の投獄が決まったという。北東部州で、1,500 人のソマリ系住民が革命を準備したとして、治安警察によって殺害された¹¹⁰⁾。

なお、クーデターの首謀者は、ヘゼキア・オチュカという名前の大佐だとされるが、空軍内でほぼ同時に別のクーデター勢力が起ち上がり、内部で主導権争いがあったと言われる。後日、オチュカは逮捕され、死刑を執行された。また、クーデター未遂に連座したとして、政敵のジョンジョ司法長官が政界から追放された。8 月 21 日、ケニア政府は、空軍の解体を発表した。クーデター以後、ナイロビ大学は 1983 年 11 月まで閉鎖された。

⑥ クーデターの背景

クーデターに至るまでの 80 年代当初の状況を見てみると、独裁と強権政治、経済政策の失敗、インフレ、腐敗、弾圧等によって、モイ政権が発足以来の試練に直面していたことがわかる。

80 年のインフレ率は 12%を超え、82 年には 20%を超えていた。国民の 60%以上が 19 歳未満という若い国で、失業者は 400 万を超え、国民の 4 人に 1 人が失業者という具合であった。

82 年に入ってから、ルオ人指導者オギンガ・オディンガ元副大統領が KANU から除名され、5 月頃から政治犯の拘禁制度が復活し、進歩的知識人や政治家の自宅拘禁、国外への脱出が相継いだ。6 月には KANU の一党制が立法化され、大学人の逮捕、学生運動弾圧、有力新聞社幹部の追放等、批判勢力抑圧が激化した。

クーデター直前の時期の「亡命者」のうち、グギに最も近い人物としては、戯曲『したい時に結婚するわ』の合作者のグギ・ワ・ミリエ¹¹¹⁾ (ジンバブエへ)、同戯曲の演出を担当したキマニ・ゲシャウ¹¹²⁾ (ジンバブエへ)、『デダン・キマジの裁判』の合作者ミシェレ・ギザエ・ムゴは、ナイロビ大学文学部長在職中のままジンバブエへ、次いでアメリカへ「亡命」した。[このほか、時期は多少ずれるが、マウマウ愛国歌謡を収録した『山々からの轟き』の編者で、ケニヤッタ大学歴史学講師であったマイナ・ワ・キニャティ (1982 年 11 月から 6 年間の拘禁。のちアメリカへ) らがあげられる]。そして 1982 年 8 月 1 日を迎えた。その後の事態はグギ自身をも海外「亡命者」の境遇へ追い込む結果となった。

クーデター事件以後、ケニヤッタ派の重要人物を排除し、憲法の改正により、法律上も一党制国家を規定し、モイ体制を全土に確立した。これに対して、知識人・大学関係者の多くが反発し、クーデター前後には、多数の亡命者が生じ、地下運動組織も活発化した。その一人に、コイギ・ワ・ワムウェレ (Koigi wa Wamwere, 1949~) がいた。彼は、1978 年にグギ・ワ・ジオンゴが政治拘禁になった時、すでにカミティ最高治安刑務所に服役していた人物で、1980 年代に「ケニア愛国戦線」(Kenya Patriotic Front) という反体制組織のリーダーだったが、1986 年に、現職国会議員の身分のままノルウェーへ亡命した。

この頃には、各種の「治安攪乱」文書とされるものが出回った。「パンバナ」(*Pambana*「闘うぞ」)、「ムパタニシ」(*Mpatanishi*「調停者」)などがそれで、

後者は、1986年3月頃から出始め、地下に潜った社会主義運動団体「ムワケニア」¹¹³⁾の機関誌だった。「ムワケニア」は、1988年4月に、経済的社会的正義の綱領を打ち出したが、グギはこの組織に深く関与した。1986年4月15日、ケニア国会では「ムワケニア」のリーダーをグギだとして批難した。このほか、「愛国者」(*Mzalendo*)なども「ムワケニア」の刊行物であった。政府は1986年、「ムワケニア」について公共の場で話題にすることを禁止した。

1987年2月には、キマジ死後30年を記念して、ロンドンで亡命ケニア人が「ウケニア」(UKENYA=Movement for Unity and Democracy in Kenya)を結成した。これは「ムワケニア」と連帯するもので、1987年末には、別の地下組織「団結」(Umoja)に合流した。

このように、「モイ政権への批判勢力」と見なされれば、少人数の集まり(5人以上)、わずかな言論活動を理由に逮捕され、14日間の無裁判拘禁があった。裁判官の任免は政権の支配下にあった。1987年には、モイのアメリカ訪問に合わせて、「ワシントン・ポスト」紙¹¹⁴⁾がケニアの特集記事で、官憲による拷問死などを報じた。じっさい、ナイロビの官庁ビル群の一角ニャヨ・ハウス(Nyayo House, 公安警察の本部)で、凄惨な拷問による多数の死者が出たと言われる。アメリカを訪問したモイは、政府筋からケニアの人権問題について厳しい批判を受けた。(その後、イギリスを訪問したが、ここでは、当時のサッチャー首相から、人権問題のない民主国家として称賛された。帰国後、モイはアメリカのメディアを批判した)。

こうした強権化の流れの歯止めになったのは、80年代末から90年代にかけての世界情勢だった。冷戦構造が終結し、東欧諸国の民主化などが背景にあった。北のエチオピア、南のタンザニアの政治傾向(社会主義ないし容共的な政策)を心配する必要もなくなった。アフリカを覆った「民主化の波」のなかで、国内でも、複数政党制回復の民主化運動が活発化した。この動きを、英米、日本などが支援し、1991年の援助国会合(トップ・ドナー)で「一定の政治的民主化がなければ、次回分の援助額を示さない」と足並みが一致した。モイは、1990年に選挙の「行列方式」を廃止、裁判官の在職権保全規定を回復させた。

⑦ 民族浄化紛争

90年代のケニアでは、土地問題を原因に、各地で民族間の流血紛争が起きた。最初の衝突は、91年10月、モイの地元リフトバレー州ナンディ県で起きた。同地域の先住民であったカレンジン(ケル)の若者が、後からやって来たルオ人移住民

の村を襲い、火を放ち、多数を殺傷したのだった。独立後、国内のどの地方でも、民族間交流が活発化した。他地域から、異なる民族の人々が移住してくることに起因する紛争が多発した。人口圧の増大と土地不足が絡んだ問題であるが、先住民族の数の方が少なくなるような地域もあった。先住民族がこれに反発し、移住民への襲撃（追い出し）が起きた。

そうした地域の一つ、リフトバレー州は、もとはカレンジンやマサイなどの牧畜民族の居住地だった。植民地時代に、白人がそれらの土地を接収して農園経営を始め、以後ケニアの穀倉地帯の一つになった。独立以前からギクユ人の移住などが強制的に行われていたが、独立以後はますます、ギクユ、ルオ、グシイ、ルヒヤなどの農耕民が流入した。こうした趨勢の中で、地域内の土地が、後からやって来た他の民族の手に渡ることを阻止しようとする動きが顕著となり、「民族浄化紛争」¹¹⁵⁾が多発した。先の流血紛争は、ナンディ県だけでなく、リフトバレー州各地へ拡大した。

他にも、たとえば、海岸州各地も同様の多民族共生地となっている。インド洋海岸地方は、観光とリゾート地帯として知られ、もとはミジケンダ、ギリアマほか、スワヒリ系の諸民族の地域だったが、独立以降は、ギクユ、カンバ、ルオなどの人々が大量に流入、先住民の土地を購入、農園や商店を経営し、地域経済に無視できない影響を及ぼし始めた。モンバサ、マリンディなどのリゾート地帯では、ホテルや商店、バーなどの経営者の多くが内陸出身者で占められている。もっと北寄りのラム島などの小さな市場でも、ギクユの人々が多く見られる。

こうした民族紛争で、91年～94年に、ケニア全体で数千人の犠牲、数十万の国内避難民が出た。紛争は、一見、民族間には敵意や憎悪がつきものだとか、西洋型民主主義の押し付けによって、国家よりは民族的利害を優先させるような複数政党制を採用したことが、逆に「部族主義」を助長し、地域集団間の競争を煽りたてたとの説明もなされた。しかし、いずれも皮相な見方と言うべきだろう。より根本的には、植民地時代の土地収奪、独立後の土地政策、とりわけ不公平な土地分配に起因していると言うべきであろう。100年来の土地問題は、独立50年後の今も解決されていない。

モイは、1992年のKANU党大会で、一党制の放棄を決め、次いで国会において憲法改正を成立させた。この結果、たちまち複数の有力野党が結成された。これにより、92年と97年に複数政党選挙が実施されたが、大方の予想に反し

て、モイは敗れなかった。野党支持者を弾圧する「民族浄化紛争」がリフトバレー州や海岸州であった。どちらの選挙でも、モイと KANU の得票は 3~4 割程度だったが、民主主義回復路線の対立から、野党は 92 年の選挙前に足並みが乱れた。オディンガが指導した「民主主義回復フォーラム・ケニア」(FORD-K) とケネス・マティバ派の「民主主義回復フォーラム・アシリ」(FORD-A) に分裂したのである。野党は、候補の絞り込みに失敗し、モイの四選を許した。

VI. 2002 年以後

1999 年、モイは任期の終わる 2002 年 12 月の引退を表明し¹¹⁶⁾、それまで国会議員歴のないウフル・ケニヤッタ (Uhuru Kenyatta, 1961~. 初代大統領ケニヤッタの息子) を後継に推薦した。これに不満の多くが KANU を離党し、2002 年の選挙に向けて、野党は「国民虹の連合」(National Rainbow Coalition, NARC) を結成した。NARC のライラ・オディンガ (Raila Odinga, 1945~. オギンガ・オディンガの息子) が統一候補擁立に尽力し、ムワイ・キバキ (Mwai Kibaki, 1931~, ギクユ人) を擁立、その結果、NARC が 222 議席中 133 名 (60%) を占め、キバキが大統領に就任、KANU は独立後初めて国会第二党に転落した。これは、ケニアでは選挙による初めての政権交代だった。ところが、キバキは、ライラ・オディンガとの間に交わした選挙前の覚え書の約束を破り、身びいきの人事、大統領権限の強化に努め、ライラ・オディンガらを排除し始めた。2007 年 12 月に、キバキは再選されたが、深刻な不正疑惑が持ち上がった。

① 選挙後暴力

2007 年 12 月 27 日の大統領選挙では、再選を狙う国民統一党 (PNU) のキバキに対して、野党候補はオレンジ民主運動 (ODM, Orange Democratic Movement) のライラ・オディンガだった。開票が始まると、初めオディンガが優勢だったが、しばらくして開票速報が突然中断された。その後、全国選挙管理委員会がキバキの勝利を宣言し、深夜に異例とも言える大統領宣誓式が実施された。

年末のあわただしい中「ケニアで暴動・内乱」のニュースが世界を駆け巡った。不正選挙を叫ぶ若者と治安部隊が衝突し、ナイロビをはじめ、各地で暴動が発生、殺人、放火、襲撃で、無政府状態に陥った。

2008 年 1 月には、騒擾が全国に拡大した。それぞれの地域で、移住民が家財を焼かれ、襲撃の対象になった。特にリフトバレー州では、ギクユとルオ、ルヒヤ、カレンジンの若者が激しい衝突を繰り返し、ギクユやグシイの農民が地

元のカレンジンから「民族浄化」の対象にされ、「敵対民族」として攻撃された。たとえば、リフトバレー州の中心都市エルドレド近郊の「ケニア・アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教会」に避難していたギクユ人約 300 人が暴徒に囲まれ、教会ごと焼き殺されたと言う。逆に、ギクユ人は、自分の地元でルオ人やルヒヤ人を襲い、多数を殺害した。騒擾は、2008 年 2 月末には一応の収束を迎えたが、千数百名の犠牲者、数十万の避難民が出た。

アフリカ連合（AU）が混乱收拾に乗り出した。この結果、2008 年 3 月に憲法が改正され、新たに首相職を設け、2009 年 4 月に大統領はキバキ、首相にはオディンガという挙国一致連立政権が成立した。2010 年 8 月には、新憲法が制定された。

以上は、ハーグの国際刑事裁判所に付託された「選挙後暴力」¹¹⁷⁾ と呼ばれる、独立ケニア最初の無政府状態に近い騒擾のあらましである。後日「選挙後暴力」の重大な責任を問う容疑者 6 名の名前が公表されたが、それには、与党 PNU の副首相ウフル・ケニヤッタ、野党 ODM の副代表ウィリアム・ルト（William Luto, 1966～. カレンジン）が含まれていた。2011 年、ハーグの国際刑事裁判所は、ケニヤッタとルトを含む 4 名の訴追を承認し、本裁判が開始されることになった。その後、次期大統領選挙に向けて、ケニヤッタとルトは同盟して、オディンガ首相に激しく対抗し始めた。

2013 年 3 月に、大統領選と総選挙が実施された。その結果、ウフル・ケニヤッタ、ウィリアム・ルトの組み合わせが勝利した。得票率は 50%を少し超える程度だった。対抗馬のライラ・オディンガは不正選挙を訴えることになった。

皮肉なことだが、2013 年の選挙の実際の勝利者は、影の人物モイ元大統領であることは確かだろう。1992 年の多党制導入時から、モイはルトと連携を強め、自己の延命策に出ていた。また 2002 年、彼は退陣する前から、ウフル・ケニヤッタを後継者に望んでいた。政界から引退したはずのモイの隠れた権力は、2013 年 3 月の時点で、なお健在だと言えそうである。彼は、今もなお「朕は国家なり」（L'état, c'est Moi）と言うのであろうか。

第4部：愛と力は家庭から－民族語小説の世界

ながねん、黒人文学の仕事を積んでこられた故橋本福夫¹⁾先生から、次のような趣旨の私信をいただいたことがある。

「ケニアの作家たちは、ケニアだけでなくアフリカの大部分の土地でもそうだろうが、たいへんな問題をかかえていると痛感させられる。彼らはまず自国語を創造し、それを普及させなければならないのだから。僕は英語によるアフリカの作家の作品を読むたびに、これらの作家たちは誰に読ませるために作品を書いているのだろうかという疑問を抱いた。自国語の文学を創造し、自国語による文学伝統を創りあげる前に、外国人に占領されてしまった悲劇によるものに相違ないが、その悲劇をどうやって克服するかが根本的な問題だろう」。

橋本先生の指摘は、今日のアフリカ人作家の位置を的確に要約していると思う。この指摘は、ポストコロニアルの現代的状況に位置づけるならば、グギの現在の問題意識とも見事に整合するだろう。

① 民族語作家への道、あるいは獄中の経験と決意

1970年代、地元でのコミュニティ演劇活動以後、グギは、文学作品の形式や技巧よりは、むしろ内容の問題に関心を注いでいるようである。誰のために、何を書くのか。この疑問は、とうぜん使用言語と読者の問題に集約される。彼は、これまでの「アフリカ文学」における生産と消費の關係に疑問を提起し、この關係に根本的変革を試みているのである。これはたたかう作家にとって、重大な場の転換を意味する。しかも、それは作家自身の現状認識から生じる必然の結果でもある。

1966年、リーズ留学時代のインタビューで、グギは率直な不安を表明した。小説『一粒の麦』を書き上げた頃である。

「読者の問題に関して、ある危機が私の内部で進行している。普遍的価値というものがあるとしても、それは常に社会的現実の枠内に含まれるものだろう。アフリカの重要な現実には、90%の人々が英語を読んだり、話したりはしないということだ。したがって、問題はこうである。私は、誰のことを書いているかはわかっているが、いったい誰のために書いているのかわからないでいる」。²⁾

しかし、長編第四作目『血の花弁』（1977）発表直後には、「この危機に対する解決の方策を見出しつつある」と述べている。先の疑問の未解決なままで書き上げた『一粒の麦』（1967）については、いく人かの登場人物の造型を誤ってしまったと反省しているほどである。³⁾

じっさい、『一粒の麦』から『血の花弁』に至る 10 年間に、彼の文学観に根本的な変化が起きたことは確実であろう。それは、アフリカ内外の批評家たちの反応からも裏付けられる。グギは、『血の花弁』執筆中にマウマウ戦士の歌や民族歌謡にますます興味をつのらせ、それらがケニア民衆の重要な文化遺産であることを再認識したが、それらを英語に置き換えることがほとんど不可能であることを悟り、ケニア人の魂や意識を英語で表現することに深い幻滅を覚えたと言う。⁴⁾

この頃に、地元カミリズ村の農民・労働者のための識字教育とかかわり、ついで村びとによるコミュニティ演劇運動にかかわったことは、ほとんど運命的であった。この経験は、それまでの 17 年間の作家生活を根本的に反省させるものとなった。村びとの全員参加形態によって台本と上演形式が決定され、何万という観客が押し寄せたが、そのなかには、民族語がはじめて公式の場で語られるのを聞くために盲目の老婆までが参加したという。したがって、グギの逮捕と拘禁は、「政府が一つの村全体を拘禁するかわりに、その身がわりとして一人の作家を拘禁した」⁵⁾ ものとの解釈が成り立つ。「民衆こそが私の永遠の教師だ。この劇に示されたカミリズ村の農民と労働者の高度な演技と上演活動を知れば、私たちが農民や労働者に与える以上に、実は、彼らからもっと多くを学ぶことが出来る」⁶⁾ との発言にも説得力がこもるのである。

民族語で書くために文学のレベルが低下するのではないかとの一般の予測に反して、ギクユ語の散文形式を縦横に駆使し、英語以上の成功をおさめたとの評価がすでに確立している。これによって、ギクユ語が世界中の人びとの抱負を述べうることを実証し、この言語が民族的であると同時に、国際的でもあることを証明したと言えよう。ギクユ語による二つの作品の出版（1980）直後、ケニア各地に滞在した筆者は、グギの英語小説に親しんだことのない人びとが、これら 2 作品だけは手に入れたとうれしそうに語っていたのを思い出す。

両作品とも、現代の搾取と抑圧に苦しむ民衆を描くもので、民衆の力の自覚と階級的覚醒を謳いあげ、独立の意味を問うている。小説『十字架の上の悪魔』は、悲惨のどん底から自立に向かって立ち上る女性主人公のたくましさを物語

るもので、特に女性の読者から絶賛の反響が相ついだ。

I. 『十字架の上の悪魔』：新植民地を描く（*Caitani Mũtharaba-inĩ*, Heinemann Educational Books (E.A.), 1980 ; *Devil on the Cross*, (translated from Gĩkũyũ by the author), Heinemann Educational Books, 1982)

小説『十字架の上の悪魔』ギクユ語オリジナルは、B6 版 262 ページの大作で「帝国主義の最終段階、すなわち新植民地主義と闘っているすべてのケニア人」への献辞がある。そのあと、「著者ノート」があるので、これの全訳を以下に載せておこう。（「著者ノート」は、1982 年に刊行された英語版では全面的に削除されている）。

① ギクユ語版「著者ノート」

「これは現代の小説です。1977 年、リムルのカミリズ村で、私が農民・労働者とともに戯曲『したい時に結婚するわ』の上演活動に参加したあと拘禁に処された 1978 年にカミティ最高治安刑務所内で書かれました。

キアンブ地区の長官は、この戯曲の上演許可を撤回した時、それがマウマウ自由戦士とホームガードと帝国主義の役割を鮮やかに浮き彫りにしていると述べました。この長官は、過去は私たちにとっての不吉な悪夢として忘れ去るよう、完全に忘却されるべきだと主張しました。しかし、私たちの歴史を、どうして忘却することが出来るのでしょうか。私たちが自分の過去を自覚しないならば、現在と今後に進むべき道を、どうして知ることが出来るのでしょうか。

拘禁という苦境にもめげず、私はケニアの諸言語の一つである私の母語で書き続けることを決意しました。『力は自らの家庭から』（Ngemi Ciumaga na Mũcĩ）と言います。もし、私たちが自分の言語を育てなかったら、いったいどの外国人が私たちに代わってその仕事を引き受けてくれるのでしょうか。最も憂慮すべきは、子供たちが、農民と労働者の多大な犠牲のもとで教育を受け、歴史・政治・科学・農業・医学・工学など国家繁栄のための知識を学びながら、その知識をただ外国語だけで伝え合っている現状です。子供たちは、ただ外国人とだけ話し合うために知識を学んでいるのでしょうか。私たちの諸言語を忘れ、外国語にかぶれることは、神を冒瀆するにひとしいことです。ケニア人はどこに住んでいようとも少なくとも二つの言語、つまり、自分の母語（ギクユ人にとってはギクユ語）と国家語であるスワヒリ語を話せるはずで、自らの言語を持たぬ民族は奴隷にひとしい。ことに文学の分野においてそう言えるのです。

言語は一民族の文学の肉体であり、よい文学は一民族のたましいであるのです。文学は、伝統文学と現代文学の二つに区分できます。ギクユ人にとっての伝統文学は、巨人や動物が主人公として登場する民話・なぞなぞ・ことわざ・詩のほか、私たちの祖先がヨーロッパ人、つまり帝国主義者たちのケニア到来以前から創っていたものから成り立っています。この文学は、人を楽しませるものであると同時に、すこぶる教育的なものです。

しかし、マサイ人が一つの場所に決して定着しないのと同じく、文学も決して静止しているものではありません。現代文学（書物の体裁を取ることが多い）は、詩・小説・短篇・なぞなぞ・ことわざ・戯曲のほか、現在のケニアについて創り出された一切のものを含んでいます。それは人を教育し、楽しませ、余暇を過ごさせるためにあるのです。

『文学とは真理を語るもの』だとギクユ人は述べています。その意味は、真理を語らないものはよい文学ではないということです。たとえば、ある人が真つ昼間の戸外で、子供たちの見ている前で糞をたれるなら、その人は家庭を大切にしているとは言えないでしょう。その人は二度とそんなことをくり返さないよう批判を受けることでしょう。そんなわけで、この小説のどれかの登場人物が自分のことでないかを感じる読者は、自分のたましいのありかを探し求めるべきであって、悪口をたたかれたなどと言いふらしてはいけないのです。

誰もが自己を探究し、疑問を投げかけてみなければなりません。一民族は自己を探究し、疑問を投げかけてみなければなりません。国家もまた同じことを試みるべきです。これこそ、伝統文学と現代文学に共通する主要な目的であるのです。余暇を読書で楽しむことは、文学のもう一つの目的です。笑い、そして学んでください。文学は真理を語りかけるのです。

この小説は、たいへんな苦境のなかで書かれました。拘禁中には原稿用紙などありません。それで、私はトイレトペーパーに書きつけ、独房のサイザル製のマットレスの内側に隠しておきました。

しかし、困難な状況で書かれようと、安楽な状況で書かれようと、そのことが小説のよしあしの決め手になるなどと結論は出来ません。大切なことは、小説の文体と内容です。これは読者の皆さんが判断してくださることです。

この小説はつくられたもの、すなわち虚構です。したがって、ここに現れる固有名詞、

行為、対話などはただの例示にすぎません。また、イルモログとかルワイニとかイシシリといった村や場所が実際に存在するものではありません。さあ、お聞きます。これから一つの話をお聞かせしましょう」⁷⁾。

② 政財界権力の構図

この作品は、カミティ最高治安刑務所に裁判もなく、罪状も明らかにされないまま、政治犯として服役中に、トイレットペーパーに書かれた著者最初の、同時にアフリカ文学史上最初のギクユ語長編小説である。現代的な小説を持たないこの言語で小説を書くことは、作家として自分自身に対する挑戦であっただろう。同時に、ケニアの全民族諸言語の可能性とその発展に対する信念を自らの力で確証しようとする行為だった。民族諸言語は、他の民族的文化伝統（歌、踊り、各種儀礼など）を含めて、キリスト教伝道団はもちろん、植民地時代には英国政府によって、独立後はケニヤッタ政権、KANU 政権によって、その文化価値と闘争的伝統を圧殺されてきた。したがって、著者によれば、それまで身につけた至高の才能と、あらゆる文学的技法を駆使して書き上げることが至上目標となった。豊富な文学伝統を誇る英語でなく、アフリカの民族語を使用するからといって、文学のレベルで、一切の安易な妥協は許されなかった。その内容は、当然、帝国主義の新植民地段階に対するケニア民衆の闘いになるはずであった。

獄中であって、1978 年 12 月 25 日を目処に、この小説の仕上げを期していたようであるが、それに先立つ 3 ヶ月前の同年 9 月 22 日、刑務所内でいきなり手入れがあり、原稿の大半が没収された。ただし、獄中に置かれてあった聖書の余白に書き込んでいた二つの章の原文は見つけられずにすんだと言う。後年、この時のショックを回想して、次のように述べている。

「その後 3 週間ほどは、刑務所内での最悪の日々だった。全身から血液を吸い取られたような気がした。しかし、私は決意を新たにした。何があろうと、もう一度書き始めよう。チェホフ、ゴーリキー、マン、あるいは聖書（刑務所の教戒師に、信仰心が蘇った証として、大小の聖書を何冊か）を欲しいとまで言ってみようか。あるいは、所持している本の行間にこの小説を再構成してみようか。もはや同じ小説にはならないかもしれない。しかし、敗北を許してはならない」。⁸⁾

これは悲壮な決意である。だが、幸いなことに、新たに書き始める必要はなかった。それから 3 週間ほど経った頃、刑務所長から手書き原稿の束が返されたのである。この時、刑務所長は次のように述べたという。「特に問題はない・・・

しかし、いやに難しいギクユ語で書いているではないか・・・」。⁹⁾

それから約 3 ヶ月後、新大統領による全政治犯の恩赦があり、思いがけず釈放されることになった。その釈放の日付である 1978 年 12 月 12 日（ケニア独立 15 周年記念日）までに、グギはこの小説の最後の章に取り組んでいたらしい。当時の計画によれば、ギクユ語での執筆に 1 年間を、ついでそのスワヒリ語への翻訳に 1 年間を、さらにもう 1 年間を英語訳にかける予定だったと言う。

じっさい、釈放後の 1980 年 4 月にはギクユ語版がナイロビで、1982 年には、スワヒリ語版（翻訳は C. M. カブギ）¹⁰⁾ がナイロビで、英語版がロンドンで刊行された。ギクユ語初版 5,000 部発行の 1 ヶ月後には、さらに 5,000 部が、1980 年 12 月にはさらに 5,000 部が増刷された。発行年度内に 3 刷り、合計 15,000 部が刊行されたのだった。（グギの英語小説で、短期間のうちに、これほど敏速な売れ行きをしめたものはない）。この間、バーや乗り合わせたマタツ・タクシーなど、人の集まる場所で、誰かが声をあげて読んで、それに聞き入った人の数は、想像を超えるものがあるに違いない。¹¹⁾ つまり、この小説は、個人レベルで読まれるだけでなく、人が集まる場所で、誰かが声を出して、他者に読み聞かせる作品にもなった。後でも述べることになるが、これはこの小説の独特な文体と形式の特徴、すなわち伝統的な口承文学の手法によるところが大きい。

『十字架の上の悪魔』は、マタツ・タクシーで、ナイロビから架空の町イルモログまで旅行する女主人公ワリインガと、運転手を含む他の 5 人の物語である。

ナイロビでの生活に疲れきったワリインガが、故郷のイルモログへ帰るところから始まる。彼女が最初に乗り込んだのが古びれたマタツ・タクシーである。イルモログに向かうにつれて、次々と乗客を拾っていくが、同乗客の交わす会話には、現代ケニアのさまざまな社会問題に関する話題が組み込まれている。これらの話題から、現代ケニアの重要な断面が浮き彫りにされる。

運転手の名前はムアウラという。乗客は、ワリインガのほかに、労働者ムツリ、農婦ワンガリ、民族音楽の研究者ガツイリア、金持ち風の黒眼鏡の男ムイレリである。彼らが車内で交わすさまざまな会話は、現代ケニア社会の縮図になっている。やがて、乗客は、皆に共通の目的があることがわかる。誰もが、イルモログで開かれるという悪魔の主催する泥棒と盗人の饗宴への招待状を持

ち合わせていたのである。

ここで先だって、ワリインガの生い立ちにまつわる秘密の事情を紹介しておこう。彼女は1953年の生まれである。ということは、植民地下のケニアで非常事態が敷かれ、山にこもるマウマウのゲリラ兵たちが反英独立の武装闘争を展開している最中だった。ワリインガの両親も、この時の社会動乱に呑み込まれていた。当時、ナクルの叔母のもとに身を寄せていたワリインガは、その土地で小学校に、次いで中学校へ進学する。成績はよくて、大学へ進学して電気か機械か、それとも土木関係の工学の道に進む夢を描いていたという。これらは、当時はもちろん今も、女性には進出が珍しいか、あるいは難しいとされてきた分野である。

その頃、叔父の紹介で知り合ったのがナクルの財界の大立者(Rich Old Man)だった。この大立者とのその後の付き合いが、初心な彼女の道を誤らせてしまった。高級車でのドライブ、映画、競馬と遊興が続くうちに、やがて彼女は妊娠する。当然、Rich Old Man はこれを受け入れない。彼女は捨てられ、その後、墮胎はもちろん、自殺までも考えるが、あわやという所で見知らぬ人物に助けられる。結局、産み落とした赤ん坊をイルモログに住む実母に預けて、傷心の人生をリセットしたいと決意する。彼女の人生は、この他にも、女性であるがゆえの、人知れず悩まずにおれない挫折と屈辱、傷心に満ちたものであることが、小説の進行とともに、明らかにされる。

構成は、むしろ単純である。時間軸としては、二度の旅行が軸になっている。ワリインガが首都のナイロビから、小説の舞台であるイルモログまでマタツ・タクシーで最初の移動をする。その次に、もう一度ワリインガがナイロビからイルモログとナクルまで二度目の旅行をする。これら二つの旅行の間には、2年間の時間的ギャップがある。すべてのドラマがこの間に起きている。この時間的落差を活かして、フラッシュバックの手法が何度も使用される。文体は簡潔で、力強く、修辭的かつ劇的なイメージに満ちている。英語版でも明らかだが、まるで速射砲から連射される弾丸のように、短く、鋭い言語表現が、独特な勢いとリズムをもって、連続的に弾け出る個所も多い。随所に、口承文学に特有の、寓話的要素が盛り込まれている。

さて、イルモログの悪魔の饗宴では、7人の最も「賢い」泥棒と盗人一つまり人民から盗み取る最も高度な技術を身につけている人物を選ぶコンテストがある。政財界の顔役が、自分の成功譚を吹聴して披露するというものである。彼

らは、皆の前に立って、他ならぬ自分の手腕と成功を自慢しなくてはならない。初めに、ニューヨークに本部を持つ「国際盗人泥棒機関」(International Organization of Thieves and Robbers, IOTR)の代表の挨拶がある。他に、海外先進国の代表として、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、イタリア、日本などから審査委員が参加している。この饗宴の場で、外国勢力の利益に奉仕する地元の代表(帝国主義の番犬＝買弁階級)を選考するためである。

各競争者は、ルールとして、①名前を名乗る ②住所を告げる ③妻のほかに、何人の愛人がいるかを明らかにする ④自家用車の車種、妻の運転する車種、ガールフレンドの運転する車種などを告げる ⑤盗みと略奪に関する手練手管を紹介する ⑥国内における蓄財の方法 ⑦外国人とのパートナーシップ強化の方法、などを披露することになる。¹²⁾要するに、独立以後のケニア社会での出世話、金儲けの方法を経験と実践に基づいて誇り立てるのである。

たとえば、こんな人物がいる。ズボン吊りを付けていなければ、地面に垂れ下がりそうなほどの太鼓腹をした男である。その太鼓腹に手足はもちろん、他の一切の器官が埋もれてしまいそうである。首の部分があるのかどうかも知れず、短い手足はもはや肉の塊、頭は手のこぶし程度にまで萎んでしまっている。名前をギツツ・ワ・ガタアングル(Gitutu wa Gataangūrū)と言う。この男は、黒いスーツ、フリルの付いた白いワイシャツを着ており、黒い蝶ネクタイが、見えなくなった首、いや、むしろ顎にまわりついている。杖には純金の飾りが付いている。喘ぎ、息を切って話しながら、左手は片腹を引っ掻きつづけ、右手は杖を振り回している。キリスト教の洗礼名をロッテンボロー・グラウンドフレッシュ・シットランド・ナロウ・イスマス・ジョイント・ストック・ブラウンという。妻1人、子どもは5人(男3人、女2人)。長男はアフリカの大学での全教育を修了して、今は外国留学中である。次男は大学勤務。三男と娘たちは学生で、元ヨーロッパ人子弟専用の金持ち学校に通学中である。その学校の教師の全員がヨーロッパ人である。

一方、私生活はどうか。「備えあれば憂いなし、ヨーロッパ人は歳を取れば子牛の肉を好む」と言うとおり、妻のほかに、2人の若い愛人を隠し持っている。イルモログの高級住宅地ゴールデン・ハイツに住むが、ナイロビ、ナクル、モンバサには別宅が何軒もある。運転手つきのメルセデス・ベンツ 280 で出かけることが多いが、プジョー604、レンジ・ローバーもある。妻には買い物のバスケット用に、トヨタ・カリーナを運転させている。ほかに、商売用にはローリー

とトラクター数台。ガールフレンドにはクリスマスプレゼントとしてトヨタ・カローラを、もう一人には誕生祝いにダットサン 1600SS をプレゼントした。「皆さんに私の両手が見えないとしたら、もはややるべき仕事がないからですな。腹がこんなに大きくなったのは、四六時中、たらふく食い過ぎたせいですな・・・」¹³⁾ と言ってはばからない。

このほか、自分の父親が、マウマウ戦争時のホームガードだったこと。独立後、ナイロビ近くの土地を安値で獲得してからは、銀行業者と手を組んで、莫大な金を得たこと。土地の騰貴を睨んで、金をうまく運用して、荒稼ぎに成功したこと。今は、誰もが呼吸のために必要な大気を独占、その大気（酸素）を売りつける独占企業の設立を計画中であることなどが紹介される。

もう一人の男、キハアフ・ワ・ガゼエシャ（Kīhaahu wa Gatheeca）の場合はこうだ。

黒と灰色の縞のズボンをはき、黒の燕尾服、白いワイシャツ、黒いネクタイを付けている。背は高く、スリムである。その格好は、6 フィートもあるかと思われるカマキリか蚊と見まちがうほどである。英語名はロード・ガブリエル・ブラッドウェル・スチュワート・ジョーンズ。妻は 2 人、金持ちになる以前に 1 人、以後に二番目の妻を娶ったと言う。二番目の妻は英語が話せるので、カクテルパーティへ連れて行く相手である。子どもは全員が英語を話せ、しかも本場の英語を真似て、鼻にかけて発音するのがとても上手である。頼もしいことに、ギクユ語やスワヒリ語など、アフリカの言語を話すのはおそろしく不得手で、その話しぶりを聞けば、人は笑い転げて、小便をちびるほどだという。

女性に関しては、病気を譲り受けるような若い娘をガールフレンド（sugar girl）にするよりも、人妻、それも金持ちの人妻がよい、人妻は絶対に抵抗しないと言う。乗用車は、メルセデス・ベンツ、シトロイエン、ダイムラー、レンジ・ローバー。着物を着替えるように、次々と車を乗り換えるのが趣味である。妻と子どもには、トヨタ、ダットサン、プジョー。趣味は、夕方になると持ち金を勘定することである。土曜や日曜日は、ゴルフ。時間があれば、人妻との火遊びに専念する。独立以前は小学校の教師をしていたが、当時は喉にためたチョークの粉のせいで咳込むことが多かったと言う。今では、居眠り好きの老白人を校長に雇い、ナイロビで学校を経営し、Modern Day Nursery School, formally for European only との看板を掲げている。100 人の生徒を擁し、授業料は一人 1 ヶ月 2,500 シリングである。そんな学校が、ナイロビに 4 校、イル

モログにも開設している。国会議員への野望がある。同一選挙区の立候補予定者2人を買収して、選挙から引きずり降ろしたが、もう一人が買収に応じなかったので、人を使って誘拐、銃を突き付けて脅迫、立候補を断念させたと言う。もう一人は、買収に応じず、銃を突きつけてもひるまなかったので、両足の骨を折ってやったと言う。5番目の候補とは、選挙で争うことになったが、金権勝負に勝利し、今では地元の有力者にのし上がっている。・ ・ 14)

この小説は、国際的な連携で、民衆から搾取するケニアの買弁層の手練手管を描いている。ユーモア、辛らつな批評、風刺がある。ケニアの労働者や農民の血肉が、地元の政治家、エリート、実業家の私腹を肥やし、パイプラインを通じて外国勢力に収奪されている構図が浮かび出る。

同時に、民衆が土地を喪失する一方、国家、教会、警察権力の連携による労働者や農民からの搾取が赤裸々に暴露されている。あわせて、タクシーの同乗客であるワンガリ、ムトゥリ、ガツイリア、ワリインガなどの人生経験を通して、これらに抵抗、もしくは対抗する手立てが問われている。

③ 書かれた口承文学

この小説は、書かれた口承文学としての性格が濃厚である。語法、ことわざ、歌、踊りはもちろん、ギクユの民族史、文化史への数多くの言及がある。民話、寓話、たとえ話、なぞなぞ、ことわざの多用など、さながらギクユ農民の言語文化の博物館となっている。会話の調子、詩的な自己賛歌や他者への賛歌についても、民族の全文化伝統が援用されている。あわせて、聖書のイメージや寓話も豊富に組み入れられている。

風刺とコミカルな要素は、すべての口承文学の構成要素であろう。この小説も例外ではない。その内容、形式、技法のすべてに口承と儀礼の伝統が埋め込まれている。たとえば、洞窟内での会合がその一例である。そこでの競技には、独自のルールと手続きがあるが、それは、何処にでも見られる現代のプラットフォーム上での競技というよりも、アフリカの伝統的な長老会議(キアマ、Kiama)の舞台設定と雰囲気がある。じっさい、伝統的な村の楽隊、ストーリーテラーなどが登場している。

小説の冒頭で、語り手が登場している。神の啓示を受けたというこの語り手は、自らを「正義の予言者」(Prophet of Justice)と名乗っている。また「ギシヤンディ・プレーヤー」(Gĩcaandĩ Player) 15) に呼びかけている。この小説が社

会的正義の問題を扱い、伝統的なギクユのストーリーテリングの手法で語られることを明言しているのである。ギシャンディとは、民衆が使用する伝統楽器の一つで、ギクユの口承説話が物語られる場で常に用いられるものだ。

語り手は、イルモログでの出来事を語り、その後、人々に主人公ワリインガの生き方を問うという手法が採用されている。これもまた、伝統的な口承文学の技法を踏襲するものである。口承説話にまつわる独特な表現と形式が生み出す複合的効果は大きい。歌と踊りが随所で場を盛り上げている。

小説の進行とともに、語り手は遠景に退くが、物語のフレームの中には残る。読者は、こうしたギクユの伝統文化形式から、この小説が始まることに留意しなければならない。第一義的な読者は、とうぜんギクユ人であり、広くはケニア人であろう。そこには、英語を知らず、小説はもちろん、書きことばとも無縁であったような人々までが含まれる。したがって、これをギクユ語原文で読むことの出来る人を除けば、英語版で近づくわれわれ外部の読者は、言語間、文化間で、すでに翻訳のなされた作品を読んでいるということになるのだろう。ここに、英語やフランス語などで表現される西洋文化の優位、西洋こそが文化的発信の中心だという旧来の考え方への挑戦はもちろん、真にケニア的なものの文化的イニシャチブ、そのアイデンティティの自立宣言を読み取ることさえ可能であろう。

繰り返し強調するならば、この小説の本質は、オラリティ (Orality) にある。アフリカ口承伝統とのリンクが、この作品の最も大切な特徴である。したがって、ケニアの農民・労働者を第一の読者に想定していることは明らかである。その多くは非識字層でもあることを思い起こそう。

④ 西欧文学伝統との繋がり

とはいえ、『十字架の上の悪魔』は、テーマ、文体から見て、以前の英語作品の論理的発展であり、著者の社会的・政治的立脚点は不動・確固たるものになっている。そこでは、以前の英語作品の視点が簡潔明瞭に結晶化している。同時に、口承形式に倣うことで、以前の作品からの新たな分岐点ともなっている。その意味で、それまでの英語作品の読者にも予想できなかった表現と形式を備えた作品であると言えよう。自己の思想的・文学的な立脚点を確実にしながらも、作品を単純・簡潔化し、思想をより大胆に、ストレートに提示している。母語によって、読書習慣を持たないような層を含めて、より広範な読者に訴えるための工夫でもある。そのために、主要登場人物のステロタイプ化もなされ

ている。彼らの属する社会階層を読者に明確にしておく必要があるからである。

この小説は、資本主義の何たるかをケニア民衆に教える教養小説でもあると言えよう。その意味では、英語で発表された『血の花弁』（1977）の思想的到達点、ならびにギクユ語劇『したい時に結婚するわ』で扱ったテーマを、広く改めて、より広範な民衆に提示するために書かれた「口承小説」としては、それほどの間違いではないだろう。

だが、西洋の文学伝統との繋がりも皆無ではない。プロットの基本は、19世紀ヨーロッパのブルジョア小説に特徴的な「ビルドゥングスロマン」（Bildungsroman、普通は男性の主人公の精神的・情緒的成長を扱った教養小説）に似ている。「ビルドゥングスロマン」では、一般に若い男性の主人公がさまざまな困難や障害に遭遇しながら成長していくものである。この小説では、主人公の女性ワリインガがその役割を果たしている。

「ビルドゥングスロマン」との違いは、そこでは若い男性主人公がたいていは社会適合を果たす形で終わるのに対し、この小説でワリインガは、社会に抵抗していることである。小説の最後で、ワリインガは、それまでの受身の、搾取を容認するような女性から、誇り高く抵抗する女性、ケニア民衆の革命的な闘いの伝統に身をゆだねるたくましい女性に変身している。

著者はワリインガを主人公に、現代の帝国主義と父権制に挑戦させているのである。女性は、ポストコロニアルのケニアで、最も抑圧された存在であるとの認識が著者にはあるのだろう。言い換えれば、ここでは、ケニアを女性で扱い、新植民地主義によってレイプされている現状が告発されているのだ。その意味で、ワリインガは抑圧されたケニアの象徴である。同時に、ワリインガは、それまでの英語作品に現れたすべての女性登場人物（『川を隔てて』のムゾニ、ニャンブラ、『泣くな、わが子よ』のムイハキ、ニョカビ、ジェリ、『一粒の麦』のムンビ、『血の花弁』のニャキニユア、ワンジャ、アキニ、『デダン・キマジの裁判』の「女」など）の集合的な表象にまで昇華していると言える。

形式上のリアリズムと辛辣な風刺、容赦のない皮肉は、第三世界、特にケニアの作家としての面目を躍如とさせている。これによって、資本主義社会の金権階層を痛烈に映し出している。これらの国際的な買弁層の役割がコミカルに戯画化される。読者は、読み進むにつれて、買弁層と対置された民衆のコミュニケーション的な仲間意識、共同で立ち上がろうとの決意に共感をよせることになるだろう。

小説の末尾は、相当にメロドラマチックな、喜劇的とも言えそうなドンデン返しである。ワリインガはイルモログでの経験の後、子どもの頃からの夢であった機械工となり、自立する。ガツイリアとの仲が進行し、二人は結婚の約束をする。二人で、ナクルに住むガツイリアの父親に結婚の挨拶に出かけることになるが、その父親こそは、こともあろうに、若いワリインガに子どもを孕ませた男（Rich Old Man）であった。

最後のシーンで、ワリインガが、堂々と、ひるむことなく Rich Old Man に向けて護身用のピストルを発砲するというのはどう解釈すべきであろうか。この結末の意味するものは何なのだろうか。

ここでは、ワリインガとガツイリアの父は、むしろステロタイプ化されたカリカチュアだと言うべきであろう。ワリインガは現在と未来の自分の運命をしっかりと掌握したといえる。不条理な運命に受身に服従してきたワリインガではあったが、最後には女として、自由と解放を手に入れたというべきであろうか。だが、試練はなお前方にある。

この小説は、一人の女性が抑圧の束縛を自力で解くまでの物語であることは確かだ。冒頭で、語り手「正義の予言者」は、ワリインガを裁く前に、まずそのドラマを、包み隠さずに語って聞かせようと述べている。恥ずかしがらず、不面目に思わず、闇に隠しておくのではなく、二度の涙を流すことのないように、むしろ真実を打ち明けて教訓を得ようと述べている。

さて、小説を読み終えた読者は、ワリインガをどう裁くことが出来るだろうか。すべてのドラマを知らされた後で、この女主人公にどのような罪を被せることが出来るだろうか。

II. 『マティガリ』: たたかいは続く (*Matigari ma Njirũũngi*, Heinemann Kenya, 1986 ; *Matigari*, translated from Gĩkũyũ by Wangũi wa Goro, Heinemann Educational Books, 1987)

『マティガリ』は、第 6 作目の小説である。ギクユ語版『マティガリ・マ・ジルウンギ』は 1986 年発表。ギクユ語小説としては、第 2 作目である。英語版『マティガリ』は、同じケニア人のワングイ・ワ・ゴロ (Wangũi wa Goro) ¹⁶⁾ による翻訳で、1987 年の刊行である。伝統的な西洋リアリズム小説の手法に加

えて、民族的な口承文学、聖人文学（言行録、hagiography）、神話の要素を取り入れており、全体として、ポストモダン風、脱構築の試みを含むオーラル・ナラティブだと言える。しかも、アフリカの口承伝統に、マルキシズムとキリスト教をミックスしている。シンプルでパワフルな物語の中に、シンボリズム、ユーモア、詩（歌）、政治を多く取り込んでいる。『マティガリ』は、カリカチュア、ランプーン（風刺文）、見せ掛けを誇張的に利用した政治風刺小説である。随所に「誇張」が目立つが、それは、風刺というよりも、シンボリズム、寓話モチーフとして使われていることが多い。しかし、小説の言語は、あくまでリアリスティックである。『マティガリ』は、脱構築を目指しながら、相矛盾する多彩な要素を合わせ持つ小説である。

① メタフィクション：聖者か、キリストか

主人公マティガリは、植民地支配の時代を象徴的に示す二人の人物、すなわち、かつては自分の主人であった入植白人ハワード・ウィリアムズとその現地における協力者ジョン・ボーイ（黒人のパートナー、植民地政府側に立つロイヤリスト。裏切り者）との戦いを終え、勝利者として単身復員してくる。作品の舞台や時代は問わない作品であるが、独立後間もないケニアであることは明らかである。したがって、主人公がマウマウ戦争の生き残りであることも明らかである。とはいえ、舞台と時代は、独立の大義を裏切られたアフリカの何処の国家の、何時の時代であってもよい。

主人公は、自分が使ってきた武器、すなわちカラシニコフ AK-47 ほか、弾薬ベルト、ピストル、短剣などを、長年ゲリラ戦で立てこもった山中の、とりわけて聖なるイチジクの大木の根元に埋める。彼は武装解除して、故郷の地へ、家族の下へ帰還する決意でいる。山越え、川越え、谷越えて、故郷の「家」を夢見て、勝利のラッパを吹き鳴らす希望に燃えて、彼は歩き続ける。やがて、大道へ出たところで、停車中の高級車ベンツから、国営放送「真実の声」（Voice of Truth）が流れてくる。だが、その内容は、独裁政権による一党制賛美、大国との軍事同盟など、民主主義否定の言説であり、どうやら彼が「独立」に思いを込めた内容ではない。さらに歩き続けると、犬を連れた二人の警官とすれ違う。町は以前より大きくなり、近くの工場からはサイレンが響いてくる。この間にも何度か、二人の警官の姿が遠くに見え隠れする。

工場に向かって歩き始めると、トラクターが積み降ろしたばかりのゴミの山に、子どもたちが先を争って群がり、食べ残しや金目のものを探している。ゴミタメを漁るのには「入場料」が必要であるらしい。子どもたちが支払った小銭を、二人の警官、トラクターの運転手、「入場料」を集めた二人の男たちが、たがいの間で分配している。その子どもたちの後を追う中で、主人公は一人の少年と親しくなる。少年は、他の仲間とともに、スラムの

一角、「子ども村」に住みついていると言う。彼らの根城は、そこに運び込まれた数々の廃車である。スラムの子どもたちが、よそ者である主人公に向けて投石する。石が当たり、彼は意識を失うが、居合わせた少年と労働組合の指導者に助けられる。

助けてくれた工場労働者はガルロ・ワ・ケリロ、少年はムリウキという名である。三人は親しくなり、主人公は自分の名前をマティガリ・マ・ジルウンギと名乗る。マティガリは二人に独立戦争の話を聞かせる。一方、ガルロは、工場の重役の一人はロバート・ウィリアムズという白人で、その手下の黒人はジョン・ボーイ二世であることを告げる。その日、工場ではストライキが準備されている。

ガルロが工場に戻った後、マティガリとムリウキは、近くのバーに入る。ここでムリウキの身の上が語られる。父親は独立戦士として倒れ、母親は貧苦の生活を送り、最後に焼死したと言う。突然、一人の女が走り込んできて、警察から身を隠していると言う。彼女はグゼラという名前で、たいそうな美人である。戸外を二人の警官がパトロールしていることがわかったと、彼女はすぐに姿を消す。しばらくすると、外で悲鳴が聞こえ、警官がグゼラに犬をけしかけている。

グゼラは相手を選ばない売春婦であるが、「警官の金は血の匂いがする」との理由で、警官だけは客にとらなかった。二人の警官が彼女に犬をけしかけたのは、その腹いせだった。マティガリは、ひるむことなく警官に対抗し、グゼラを救い出す。現場に居合わせた誰もが、マティガリという見ず知らずの男の素性に興味をかきたてられる。〈マティガリとは、いったい何者なのか〉。

バーへ戻ってきたグゼラが身の上を話す。父親は敬虔なキリスト教牧師であったと言う。ところが、マウマウ戦争の頃に、父親は聖書に弾丸を隠して、ゲリラ戦士に届けていたとして警察に捕まる。ある警察高官（警視）が、彼女が身体を許すなら、父親を無罪放免にしてやると言い寄るが、グゼラは受け入れない。しばらくして、父親は処刑された。次に、マティガリが身の上を話す。マティガリ、グゼラ、ムリウキの三人の間の絆が深まる。

工場のストライキが迫っている。警察や軍の車輛が方々に目に付く。グゼラ、ムリウキらと出かけたプランテーション近くの広大な丘の上に、マティガリはついに探し求めた「家」を見つける。その「家」の前で、乗馬を楽しんできたばかりの白人と黒人の二人に出会う。マティガリは、その「家」は自分の財産だと主張する。その男たちのうち、白人が入植民ハワード・ウィリアムズの息子のロバート・ウィリアムズ、黒人がジョン・ボーイ二世だった。「家」は自分のものだと主張し続けるマティガリは、駆けつけた二人の警官に逮捕される。

マティガリが入れられた牢には、その日に逮捕された 10 人の囚人がいる。嘔吐物と排泄物で不潔きわまりない場所である。農夫や浮浪者、スリのほかに、大学生、教員などが、代わるがわる自分が逮捕され、拘留された理由を明かす。マティガリも身の上を明かすが、誰もが彼の勇気と希望に満ちた話しぶりに驚嘆する。彼は、自分が入植白人ハワード・ウィリアムズの下で働いていたこと、自分の労働が搾取されてきたことなどを、説得的に話す。彼は誇りを持って、「マティガリ・マ・ジルウンギ」だと名乗る。その意味は「弾丸を生き抜いた愛国者」、あるいは「解放戦争を生き抜いた愛国者、またはその後裔」の意である。つまり彼は、「独立の火を燃やし続けるために、山に残った戦士」の一人なのである。

同じ牢に、労働組合の指導者ガルロ・ワ・ケリロがいる。彼は、ストライキ弾圧の現場から逃げる途中で警察に捕まり、牢獄にぶち込まれたと言う。そして、彼の働く「アングロ・アメリカン皮革・プラスチック工場」では、ジョン・ボーイ二世とウィリアムズの二人が最も悪辣な重役であるという。また、明日には、政府から「真実と正義」担当大臣が、労働争議解決のために工場へ来る予定だとも言う。その夜、不可思議なことが起きる。マティガリの合図に従って、全員が脱獄に成功したのである。

第二部。翌日、ムリウキはスラムの根城（廃車）に戻っている。ラジオが 10 人の囚人の脱獄、ロバート・ウィリアムズとジョン・ボーイ二世の肖像がストライキの現場で焼かれたことなどを報じている。子どもたちは、マティガリのことをもっと知りたがる。マティガリに感銘を受けたガルロは、「愛国者は生きている」と労働者たちに訴え、マティガリこそは「真実と正義」の探求者だと賞賛する。〈マティガリとは何者なのか〉。〈その声は雷鳴のごとく、両の眼は火の如し。鼻と口と耳からは煙が吹き出る〉。〈マティガリはイエス・キリストなのか〉。〈天使ガブリエルなのか〉。

その後、マティガリは、荒野に住む老婆から「真実と正義は、人々の行動に現れる。善悪は人々の行為の中に埋め込まれる」¹⁷⁾と教えられ、獄中で出会った大学生や教師、牧師に「真実と正義」の在り処を尋ね歩くが、誰もが恐怖にとらわれて、この質問にまともに答えようとはしない。たとえば、牧師は次のように答えている。

「現世は逆さまになっているのです。これを正されるのがキリストなのです。キリストを信じなさい。神は、だからこそキリストを送られたのです。神の王国は天国にあります。現世のことは、大統領閣下に任せておけばよいのです」。¹⁸⁾

やがて、「真実と正義」担当大臣出席のもと、労働争議の解決のための集会が開かれる。各界の大立物に混じって、ジョン・ボーイ二世、ロバート・ウィリアムズも臨席している。

警官隊、軍隊も出動して、物々しい警戒態勢が敷かれている。牧師がオープニングの祈りを捧げ、偽予言者の出現に注意し、キリスト再臨の風評を流す者に注意するよう訴えている。ガルロが演説し、ジョン・ボーイ二世とロバート・ウィリアムズの解雇を求めるが、マルクス主義の宣伝であるとして逮捕される。最後に、マティガリと「真実と正義」担当大臣の間で、厳しいやり取りが始まる。その結果、マティガリもまた牢に入れられ、のちに二人は「狂人」であるとの理由で、精神病院へ移送される。

第三部。精神病院に収容されている間に、マティガリは武装闘争を決意する。ここで、不思議なことが起きる。精神病院から、マティガリを含む患者たちが脱出に成功するのである。「狂人」らしき人物を見つけた市民は警察に通報しなければならないとの放送がある。また、マティガリが最も危険な「狂人」であるとも言う。一方、警察と軍隊は、予想されるマティガリの襲撃に備えて、ジョン・ボーイ二世の「家」を完全包囲している。グゼラとムリウキの二人は、再び武器を取って戦うというマティガリに従い、武器を取りに山へ向かう。途中で見つけた黒色のメルセデスの中で、素裸の男女が情交しているのを目撃する。車内から流れる放送が、マティガリ、グゼラ、ムリウキの三人を警察が包囲中であると告げている。三人は、メルセデスを奪い、「子ども村」に難を避け、その夜は廃車に泊まる。グゼラが、メルセデスのカップルの一人が「真実と正義」担当大臣の妻であったことに気付く。さらに放送が流れて、ガルロが警官に撃たれて死んだと言う。また、競馬見学に出かけた大臣の妻が、運転手ともども暴漢に襲われ、メルセデスも奪われたと報じている。

マティガリは夜になれば、再び戦うために、ムグモの木の下へ武器を取りに行こうと決意している。「子ども村」では、少年たちが寝ずの番をして、警官の動きを監視している。

その後、武器を取りに向かうマティガリの車を警察が激しく追跡する。逃亡の途中で、先に「家」へ向かうことにする。やがて、マティガリは「家」に立てこもるが、警察と軍が激しく発砲し、「家」は火に包まれる。

燃える家、銃火の中から奇跡的に逃げ延びたマティガリは、グゼラ、ムリウキらと再会し、暗くなった丘の上で話した後、三人で山中のムグモの木に向かう。遠くに警察犬の鳴き声が聞こえ、三人は追われていることに気付く。夜明けも近くなる頃、激しい銃声の音とともに、グゼラが倒れる。マティガリとムリウキは匍匐して進むが、マティガリは、単独で川を渡り、ムグモの木まで行って、武器を持って帰るようムリウキに指示する。マティガリは負傷したグゼラを抱えて、川を渡ろうとする。

ムリウキは、ムグモの木の根元から武器を掘り起こし、それらを身につけていると、ど

こからか、戦士となったムリウキの耳に、「勝利はわれらのもの」と歌う工場労働者の声が響いてくる。

② 評価の視点

『十字架の上の悪魔』は、先述したとおり、一般の読者からも、大方の批評家からも好評を博した。しかし、この後に書かれた『マティガリ』は、ギクユ語オリジナルも英訳版も、誰もがあっと驚かされるような作品だった。既成の観念の相対化を促し、「脱構築」をめざし、さらには小説の新しい地平への可能性を提示するような、極端な革新的様式の小説だったのである。当然のように、まったく相対立する評価が現れた。

ギクユ語オリジナル『マティガリ・マ・ジルウンギ』は、1983年から1984年にかけて、ロンドン亡命中に書かれ、1986年10月にナイロビで出た。ギクユ語で書くことは、亡命中の著者にとっては、ケニアとの絆を確認する大切な手立てでもあった。はたして、地元ケニアでは、前作同様に話題を独占し、大好評を博し、社会問題にまで発展した。真実と正義を求めて彷徨う主人公「マティガリ」を、まるで実在人物であるかのように確信する人々が現れたという。この小説には、キリストの復活、再臨についての言及が多くあるが、おそらく、それが理由となって、ケニアの市民の間で、キリストが国内に復活し、国中を彷徨っているとの風評が流れたのである。

1987年1月に、ナイロビを含む中央州で、マティガリという男が「真実と正義」を求めて彷徨っているとの風評が流れた。直ちにケニア警察は、当時の独裁者であったダニエル・アラップ・モイ大統領の命を受けて、マティガリなる人物の指名手配に乗り出した。その後、この名の人物は、小説の主人公に過ぎないことがわかると、1987年2月、警察は全国の書店を搜索し、その全コピーを没収した。1988年には、ナイロビ近郊の市場町カワングアレの地で開かれた「女予言者」による公開祈祷の場に、何千という市民が集まり、キリスト再臨の奇跡をその眼で確かめようとした。しかも、実際に奇跡は起きたのである。何千という市民の前にキリストが現れ、最後には、ナイロビの市街から車をヒッチして、姿を消すのが目撃されたという。¹⁹⁾

『マティガリ』の英訳版は、1991年にケニアの店頭に置かれた。したがって、1997年、ケニアで一党独裁体制が終わる日まで、ギクユ語版は発禁状態にあったことになる。とはいえ、発禁処分に処される以前に、ギクユ語版初版は売り切れており、官憲が没収したのは第二刷であったと言う。またもやギクユ語小

説が、地元ケニアでは、ベストセラーになった。

前作『十字架の上の悪魔』は、異様な風刺の極致と赤裸々な政治社会要素をつくして書かれた力作であった。『マティガリ』は、文体的には、理路整然、首尾一貫しており、風刺と政治社会要素を組み合わせている。しかし、『マティガリ』に対しては、主に英語版で読んだ読者、それも職業的な批評家の間で、真っ向から対立する評価が生じたことは興味深い。

『マティガリ』を、「無類の共産主義宣伝（アジプロ）作品である」とする見方がある。「マルキシズムについての最良の書の一つである」とする見方もあるが、これは皮肉であり、褒め言葉ではない。「この小説は、エディプス・コンプレックスにとらわれている。植民地宗主国（コロニアル・マスター）であった父を殺害しようとしている」²⁰⁾ という意見もある。「この小説は、グギの他の作品の登場人物を寄せ集めたものではないか。マティガリは、もう一人のキヒカ、キヒカはもう一人のキマジでないか。グゼラは、もう一人のワンジャでないか」。

「歴史的唯物論と宗教的神秘主義の融合、ときに神秘力を持った救世主的存在は、馴染みの登場人物である。キヒカ、キマジ、マティガリへとその系譜が続いている。誰もがキリストの化身だといえる」。「リアリズムから撤退して、寓話、白昼夢に移っていることは、ポストコロニアル・アフリカ文学の危機、社会の混迷の現れである」。「唯物論と神秘主義の結婚といったありえないものの統合によって、ジレンマを解決する手段は、寓話とアレゴリーしかない。奇跡と超自然力への依存が顕著であるが、寓話を非植民地化の物語に仕立てるためには、ケニアの階級闘争に、こうした説話を挿入するという手法しかなかったからだ」。「独立以前のアフリカのリーダーが、独立以後は民族ブルジョアジーに変身し、民衆を抑圧しているといった馴染みの認識は、ファノンの古典的認識方法の踏襲であり、グギはファノンのこの認識を小説化しているにすぎない」。

以上は、『マティガリ』を失敗作、ないしは駄作だと評価する言説の、ほんの一部である。²¹⁾

③ 小説論

『マティガリ』の正当な評価のためには、アフリカの民族諸言語に対する先入観と偏見を捨てなければならない。さらに、グギの作品の多くに認められる社会政治的なメッセージに、マルクス主義やファノン主義といった一枚岩的な

ラベルを貼り付ける習慣からも解放されなければならない。それよりも、ここでは、小説というジャンルの再形成をもくろむ作者の意図、実験的手法（ポストモダニズム）に注目する必要がある。

ヨーロッパ小説の伝統に従えば、一般に 19 世紀は「リアリズム、現実主義の時代」、「20 世紀はモダニズム、近代主義の時代」、そして「現代はポストモダニズム、ポスト近代主義の時代」であると考えられてきた。小説のジャンルについても、ロマンス、ピカレスク、サイエンス・フィクション、歴史小説、政治小説、風刺小説、自伝小説、シンボリック小説、神話小説など、さまざまな分類がなされてきた。

文学の手法についても、さまざまな手立てが積み重ねられてきたが、今では、小説は当然リアリスティックでなければならない、などと考える人はいない。「超自然的」小説もあれば、ファンタジーとリアリズムが混在した小説も多い。グギの場合、初期のリアリズム小説『川を隔てて』では神話的要素が濃い。また『泣くな、わが子よ』は徹底したリアリズム小説で、自伝的要素が濃く、主人公の人生を描いている。『一粒の麦』では、社会風刺と政治的メッセージが表立ってくる。そして、最後の英語小説『血の花弁』では、社会風刺と政治的メッセージは最高潮に達していると言うべきであろう。しかも、グギの作家としての揺ぎない国際的地位を保証したのは、文芸的にも成熟を示した後者二つの英語小説であったことは誰もが疑わないであろう。

これらの全小説に見られる文体傾向、宗教的緊張、神話的モチーフへの愛着は、『十字架の上の悪魔』と『マティガリ』にも持ち込まれているが、それでもこれら二つの小説は、新たなジャンルに属する作品と言うべきであろう。

全作品に浸み込むコミュニズムとナショナリストの思想が、これらの作品では民族語（ギクユ語）の選択に導いたのである。そうであるならば、我々の批評の根っこは、英語から民族語へ移すべきであろう。さらには、批評の原則はアフリカの口承文学に根を張るべきであろう。特に『マティガリ』でのあからさまな政治的主張、大胆な実験的手法は、作家の側の意図的な芸術的戦略を想定して考察する必要があるだろう。

以下に述べるように、小説という文学的装置を、その限界を超えてまで活かそうとするのは、ポストモダニズムの作家たちの読者に訴える意図的な手段なのである。

④ アフリカ小説と「オラチュア」

アフリカ文学と西洋文学の第一義的な違いは、前者では口承伝統が中心にあるのに対し、後者では口承伝統の要素の消滅化へ向かったとされる。したがってアフリカ文学では、これまでから書記と口承の伝統の関係が常に問題にされてきた。じっさい、アフリカ文学の傑作と言われる作品は、口承と書記の伝統を見事に融合させたものが多い。(例、トゥットウオラの作品群²²⁾)。

『マティガリ』はこうした特徴の、最も論理的な帰結と言うべきであろう。今ではアフリカ文学の古典的作品として位置づけられるチヌア・アチェベの『部族崩壊』、ウォーレ・ショインカの『王の馬丁の殉死』²³⁾、オコト・ビテックの『ラウィノの歌』²⁴⁾などは、西洋の文学伝統に倣っているが、『マティガリ』はその美的・文学的本質をアフリカの口承文学に負っている。『マティガリ』では、アフリカの口承伝統が西洋の文学様式に奉仕しているのではなく、西洋の文学様式がアフリカの口承形式に副次的に奉仕していると言い換えることが出来る。

⑤ 『マティガリ』と『十字架の上の悪魔』：小説の構造

そうであるならば、主に西洋が育んできた伝統的な近代小説批評の方法では『マティガリ』のような民族語小説の分析は不可能だということになる。音声言語による口承伝統に立ち戻り、「口承性」(orality)と「記述性」(literacy)が融合してつくり出す‘*literate orality*’「記述の口承性」とも言うべき新ジャンルを考える必要がある。口承文化から生まれる orality に対して、記述文化から生まれる ‘*literate orality*’ の区別も必要であろう。

『十字架の上の悪魔』は、経済的・政治的強欲に関する寓話である。泥棒たちは、寓話でおなじみのライオンやハイエナといった動物ではなく、カリカチュア化された生身の人間である。彼らは、リアルとシュールリアルの境界を曖昧にする存在でもある。『十字架の上の悪魔』は多くの点で寓話の伝統から借用しているが、『マティガリ』は、寓話、寓喩をより密接にモデル化している。たとえば、『マティガリ』に見られる、テーマの反復、繰り返しは寓話の常套手段であろう。しかし、『マティガリ』の叙事詩的性格もまた明らかである。冒頭、武器の描写(ヨーロッパの多くの叙事詩でお馴染み)があり、長く人里から離れていた主人公(ヒーロー)の帰還(これもお馴染みの設定)が紹介される。同時に、叙事詩の馴染みのテーマ、「探求」がある。主人公マティガリが家族や子どもたちを捜すという設定である。「真実と正義」を求めてさまよう旅があり、その間に「危機」「追跡」「救出」といったモチーフが散りばめられている。

『マティガリ』は、「口承説話」(oral narrative)、もしくは「口承叙事詩」(oral epic)と呼ぶべきものであろう。「叙事詩」(Epic)の特徴は「多重形式」(multiformism)であると言われるが、パフォーマンス的要素が豊富であるなど、叙事詩としての特徴を多分に備えている。あわせて、文芸様式のさまざまなジャンルが混在している。歴史、伝説、ことわざ、比喩があり、音楽、歌、対話、物真似、描写、原因論、ラジオ放送、映画からの借用ほかがある。

『マティガリ』がフィクションであることが、意図的に示される場合がある。虚構と現実の関係が曖昧であるために、読者にフィクションを読んでいるという事実を意識させるのである。フィクション内フィクションが挿入されるほか、ストーリーに注釈があったり、登場人物が読者に問いを発する言説も珍しくない。『マティガリ』は、幻想小説と言えるほどではないが、メタフィクションでもあると言えよう。²⁵⁾

『マティガリ』のナレーションは早い。小説の持続時間は、わずかに3日と4日目の午前中を流れているに過ぎない。第一部は第1日目、第二部は第2日目、第三部は第3日目と第4日の午前中という具合である。この間にすべての出来事が生じている。生き生きとした描写、対話の繰り返し、緊張場面の連続、ドラマチックかつ危険な行動の多さ。これらもまた、叙事詩の特徴であろう。

さらに、『マティガリ』には、口承文学形式にのっとった「枠となる物語」(frame story)の中に、いくつかの単位となる短い物語が埋め込まれている。この、いわゆる額縁小説には、少なくとも九つの入れ子物語(劇中劇)が存在している。²⁶⁾これらはメインな筋とは、むしろかかわりが無い。その一例は、売春婦グゼラ(Guthera)の語る身の上話であろう。これが二度まで繰り返されている。²⁷⁾

⑥ 『マティガリ』の意味論

この小説をアレゴリーとして読むことはやさしい。また現実と非現実の織り交ぜとしても読めよう。

しかし、マティガリとは何者なのか。どうすれば、彼を見つけることが出来るのか。彼はどんな容貌をしているのか。そもそも、男なのか女なのか。若いのか、年寄りなのか。現実の人間なのか、それとも想像上の人物なのか。人間なのか、聖霊なのか。これらは多くの登場人物が「マティガリ」について抱く問いであることが、随所で示される。

ここでは、マティガリは、キリストに似ているとだけ言っておこう。マティガリは、故郷で出会う子どもたちのすべてに、自分の子どものように接している。子どもたちはマティガリの周りに集い、その衣装に触れたりしている。つまり、マティガリは、「民の父」(father of the nation) としての風格をもって登場している。

マティガリをキリストになぞらえると、売春婦グゼラはマグダラのマリア(ルカ伝：罪を悔いて、行いを改めた女)、ムリウキは迷える少年として読めなくはない。ユダ(背教者、裏切り者)の例も事欠かないのである。

以下では、やや違った角度から、マティガリの人物像に迫ってみよう。

主人公マティガリ(Matigari)は、英語にしまえば、個人名にすぎないが、この形のままギクユ語の形式としては、本来は複数形である。ギクユ語で、人と別れる時に使われる日常の挨拶に、Tigwo na wega あるいは Tigwoi na wega という受身表現(前者は相手が単数、後者は相手が複数)があるが、その原意を直訳すれば「元気に残されてください」である。つまり、動詞 tika 「去る」の受身形 tigwo, tigwoi 「(私は去りますの) 後に残されてください」というのである。この動詞から派生した名詞が matigari で、「残り物」、特に「食べ残されたもの、残飯、飲み残し」等の意味で使われる。²⁸⁾

ケニアは 1963 年 12 月にイギリスからの独立を果たしたが、早くも 60 年代後半に入ると、政権はますます独裁色を強めていった。当時のケニヤッタ政権に対する幻滅と批判が沸き起こり、独立についての考え方にも変化が見られ、これを神聖絶対視する者から、一方で、独立は完全でなかった(Not yet Uhuru)との認識が広まった。ケニアの人々の、少なくとも一部には、「独立」に対する激しい幻滅があったのである。

当時のケニアでよく知られたことだが、50 年代初期から山にこもって独立闘争(マウマウ)に従った戦士たちの一部が、裏切られた「独立」の後に、山から帰還して、本当の独立のためにふたたび戦うという風説が流れた。つまり、山中でゲリラ戦に従事した者の一部が、降伏せず、山にとどまって、独立の火を燃やし続けるための闘いを持続したと言う。当然、彼らも掃討作戦で追い詰められたが、生き抜いた者がいたのである。

だとすれば、**matigari** とは「山にこもった残留者」、植民地政府側から見ればマウマウの「残党」と言うことになるだろう。「生き残って抵抗を持続している人々」とは、官製の歴史に書きとめられることのない記憶や物語、「残された部分」を生き抜いた人々のことであろう。

このほか、独立以前にも、独立当初の日々にも、**matigari** という用語が「マウマウ」を指して使われることがあったし、むしろ意味不明で、差別的とも言える「マウマウ」(**Mau Mau**) の用語に代えて、ケニア土地自由軍の闘いを「マティガリ」と呼ぶ動きもあった。さらには、ケニヤッタ政権に参加することを拒否したケニア土地自由軍の戦士たちを指すのにも使われたという。また、山に残留した戦士たち、特にスタンリー・マゼンゲ将軍、さらにはマゼンゲ将軍の後継としてゲリラ戦を指導したデダン・キマジ、植民地政府に対する果敢な抵抗の末に虐殺されたギクユの首長ワイヤキなどを指すとも言われた。こうして、マティガリという用語は、ギクユの抵抗の歴史にその名を刻まれるだけでなく、現代ケニアの政治用語になった。

小説では、作者はこの用語 (**Matigari**) を単にケニアだけでなく、植民地支配の時代から現在まで、アフリカ全土で、真の独立達成のために闘い続ける戦士たちを指す用語として使っている。

To the Reader / Listener

This story is imaginary.

The actions are imaginary.

The characters are imaginary.

The country is imaginary—it has no name even.

Reader / listener : may the story take place in the country of your choice !

29)

読む人へ / 聴く人へ

このお話は、つくりもの。

アクションは、つくりもの。

登場人物は、つくりもの。

国もつくりもの—名前もない。

読者 / 聴き手の皆さん、あなたの思う国の出来事にしよう。

語り手による以上の前口上は、そうした作者の意図を雄弁に物語っているだろう。

語り手は、これに続いて、以下のように口上している。

The story had no fixed time.

Yesterday, the day before yesterday, last week . . .

Last year . . .

Or ten years ago ?

Reader / listener : may the action take place in the time of your choice !

And it has no fixed space.

Here or there . . .

This or that village . . .

This or that region.

Reader / listener : may you place the action in the space of your choice !

And again, it does not demarcate time in terms of seconds

Or minutes

Or hours

Or days.

Reader / Listener : May you allocate the duration of any of the actions according to your choice !

So say yes, and I'll tell you a story !

Once upon a time, in a country with no name . . . ³⁰⁾

お話に、時間は決まっていない

昨日、一昨日、先週かも . . .

いや、去年 . . .

それとも、10 年前？

読者 / 聞き手の皆さん、あなたの思う時の出来事にしよう。

それに、場所も決まっていない。

ここ、それとも、そちら・・・

この村、それとも、あの村・・・

この地方、それとも、あの地方。

読者 / 聴き手の皆さん：あなたの思う場所の出来事にしよう。

さらにもう一度、時間も決まっていない、秒

あるいは、分

あるいは、時間

あるいは、日。

読者 / 聴き手の皆さん、出来事の時間もあなたが決めよう！

さあ、いいかな、では、お話を始めましょう！

昔あるところ、名もない国で・・・。

⑦ アン・ビールステッカーの読み方

スワヒリ語学者で、ギクユ語にも堪能な言語学者アン・ビールステッカー (Ann Biersteker) ³¹⁾ の解釈は、この小説の読み方に新たな視点を提供してくれる。彼女は、言語学的分析を通じて、聖書とギクユの民話に基づくものとしてこの小説を読み直している。

まずモンバサ出身のスワヒリ語詩人ムヤカ・ビン・ハジ・アルガッサニイ (Muyaka bin Haji al-Ghassanyyi, 1776~1840) ³²⁾ の詩の一節、Mjenga nyumba halale, yualele ikumbizani. 「家を建てた当人は家で寝ない、外のベランダで寝る」が紹介される。それは、『マティガリ』でも、次のような文章がリフレインとなって何度も現れるからである。

The builder builds a house.

The one who watched while it was being built moves into it.

The builder sleeps in the open air,

No roof over his head.

The tailor makes clothes.

The one who does not even know how to thread a needle wears the clothes.

The tailor walks in rags.

The tiller tends crops in the fields.

The one who reaps-where-he-never-sowed yawns for having eaten too much.
The tiller yawns for not having eaten at all.

The worker produces goods.
Foreigners and parasites dispose of them.
The worker is left empty handed.

Where are truth and justice on this earth ? ³³⁾

大工は家を建てる
建てるのを見ていた者が家に住みつく
大工は外で寝る
頭の上は屋根もない

仕立屋は服をつくる
糸の通し方も知らない者が服を着る
仕立屋はボロをまとう

百姓は畑を打つ
種を播かない者が収穫し、
たらふく食べてアクビする
百姓は食わずにアクビだけ

労働者は商品を生み出す
外国人と寄生階級が処分する
労働者の手は空っぽ
この世間、真実と正義は何処に？

先に上げたムヤカ・ビン・ハジ・アルガッサニイのスワヒリ詩と呼応する上記の詩句は、労働の産物が、労働を提供した者には渡らないで、他者に渡ると言うのである。資本と労働の関係を問い直し、資本主義を皮肉り、揶揄しているのである。

さて、英訳版に短文をよせて、グギは次のように書いている。

「この小説は、部分的には、病気の治療法を捜し求める男についての口承物語に基づ

いている。病気を治してくれるディイロという老人のことを教えられるが、何処で会えるのかわからない。男は旅に出て、いろんな人に会い、その都度老人のことを歌にうたう。

Tell me where lives old man Ndiiro
Who, when he shakes his foot, jingles.
And the bells ring out his name: Ndiiro,
And again : Ndiiro. ³⁴⁾

ディイロ爺さんの住処を教えてください
足を揺らすと、リンと鳴る
鈴が響いて、ディイロと奏でる
また、もう一つ、ディイロと」。

『マティガリ』では、これと似た次のような歌が、4度まで本文で繰り返し現れている。

Nyonia kwa Matigari Njirũungi
Muthuuri uri kiigaamba kuguru
Ariingithagia kiigaamba
Njirũungi ikagaamba
Na ringi ikagaamba !

英訳：
Show me the way to a man
Whose name is Matigari ma Njiruungi
Who stamps his feet to the rhythm of bells.
And the bullets jingle.
And the bullets jingle ³⁵⁾.

どの道を行けばよいのか教えておくれ
マティガリ・マ・ジルウンギに会いたいよ
鈴にあわせて足踏みすれば
鉄砲の弾がリンと鳴る
鉄砲の弾がリンと鳴る。

ギクユの原話は「呪術医ジイル」(Thiiru the Medicine-man)と題するものである。ここでは、ディイロ(Ndiiro)ではなく、ジイル(Thiiru)となっている。アフリカ文学研究者のサイモン・ギカンディ(Simon Gikandi)によれば、ジイルは変幻自在な存在で、『マティガリ』はジイルを土台にしたアレゴリー小説だと述べている。³⁶⁾以下の梗概は、R. N. ゲシャウ『キクユ・フォークテールズ—その本質と価値』(R.N. Gecau, *Kikuyu folktales, their nature and value*, East African Literature Bureau, 1970)収録の原話に基づいている。

ジイルという名の呪術医が自力で畑を打つ。日没まで田を打った後、帰宅した。田を離れた後、一羽の鳥が、仕事を引き継いで、全部の田を打って、飛び去った。

翌朝、これを知って、ジイルは、悪霊の仕業だと警戒した。さらに翌朝、彼は棒を持って出かけた。帰宅した後、例の鳥が飛んできて、その日に残った仕事を仕上げた。翌朝、それを知ったジイルは、悪霊の仕業だと、思い悩んだ。彼は悪霊が自分の呪術よりも強いと考え、争うことは止めた。翌朝、ジイルはトウモロコシの種を播いた。帰宅した後、鳥がやってきて、さらにトウモロコシの種を播いた。ジイルは、何か謀略があると思ったが、見守ることにした。以後、ジイルは毎夕、トウモロコシの成長を見に行っていたが、ジイルが帰宅した後、鳥もトウモロコシの成長ぶりを見にやってきた。

草取りの時期にも、同じことが起きた。トウモロコシが実ると、ジイルは何本かを持って帰った。翌朝、ジイルが畑に行くと、たくさんのトウモロコシがなくなっていた。

ジイルは、トウモロコシを横取りしているのは悪霊ではなく、泥棒の仕業だと考えた。ある日、茂みに隠れていると、鳥が飛んできて、トウモロコシを引き抜くのを見届けた。

翌日、ジイルは鳥を捕まえた。鳥が言うには「自分は盗んでいない。取り分を貰っているだけだ。自分は、田を打ち、耕し、トウモロコシを植えた。自分の分を食べているだけだ」と。

ジイルは「自分の畑を拓けばよいではないか」と言って、鳥を捕まえ、袋に入れて家へ持って帰り、空の水がめに閉じ込めた。

その後は毎日、水がめから鳥を取り出しては、その姿を愛で、また水がめにしまっていた。やがて、ジイルの娘が鳥を見つけ、ジイルが家を出ると、鳥を愛でていた。父には内緒に、村の娘たちにこう言った。「水汲みの仕事や薪拾いを手伝ってくれるなら、珍しいものを見せてあげましょう」。娘たちは、彼女の仕事を手伝い、鳥を見せてもらっていた。

ある日、鳥は娘たちの下から飛び去ったが、ジイルの呪術によって、鳥は呼び返された。しかし、鳥はジイルの家への帰り道がわからなかった。そこで、鳥は村の誰彼なく、ジイルの家の在り処を尋ねた。牛の世話をしている少年たちの姿が見えたので、鳥は近くの木に止まって、うたった。

「幼い少年の皆さん、悪口なんか言わないよ、辱めたりはしないですよ、ジイルの家を覚えておくれ、呪術医のジイルだよ」。

これに気付くと、少年たちが「あっちへ行け。災いを持ち込むな」と、鳥に石を投げつけた。鳥は飛び去った。粟を食べている鳥たちを追っ払っている娘たちの所へやってきた。

「幼い少女の皆さん、悪口なんか言わないよ、辱めたりはしないよ、ジイルの家を覚えておくれ、呪術医のジイルだよ」。少女たちは「あっちへお行き。不幸の運び屋さん」と言って、鳥を追ひ払った。

別の場所では、若者が土を耕していたが、彼らも鳥を追ひ払った。

次に、牛小屋を掃除している女たちの近くで鳥は歌った。

「村の女の皆さん、悪口なんか言わないよ、辱めたりはしないですよ、ジイルの家を覚えておくれ、呪術医のジイルだよ」。

女たちは、土をつかんで鳥に投げつけた。「あっちへお行き。不幸はよそへ持って行くがよい」。鳥は諦めなかった。男たちがビールを飲んでいる所までくると、鳥は、木に止まって、うたった。

「村の男の皆さん、悪口なんか言わないよ、辱めたりはしないよ、ジイルを見かけなかったかい、ジイルの家を覚えておくれ、呪術医のジイルだよ」。

さて、ビールを飲んでいる仲間の中に、ジイルがいた。ジイルが言った。「さあ、ここへ来て、ビールを飲みな」。

鳥は、ビールを少々飲んだ。ジイルは鳥を家に持って帰った。家に帰ると、ジイルは、誰が鳥を逃がしたのかを尋ねたが、娘は本当のことを言わなかった。すると、鳥がうたっ

た。「ジイル、偉大な呪術医の先生、私が教えましょう、私が明かしましょう、あなたの娘さんが私を村の女の子たちに見せたのです。一日目、二日目、そして毎日、そんな風でした。それで、あなたの鳥が、あなたを探しに飛んで来たのです、ジイル、偉大な呪術医の先生」。

以後、ジイルは鳥に触れることを娘に禁じた。お話は、ここで終わり。³⁷⁾

作品に現れる「人名」に関して、アン・ビールステッカーによる言語的分析が興味深い。彼女の考察をそのまま紹介しておこう。³⁸⁾

① **Gũthera** とは「率直な、明白な、穢れてない、正直な、曖昧でない」の意である。彼女は売春婦であり、最初は、この名の示すような女性ではない。警官の犠牲になり、マティガリを嘲笑したり、キリスト教を拒絶したりしたが、ひとかけらの理想主義は持っていた。のちに、グゼラはマティガリらを牢獄から解放し、自らも売春から離れる。グゼラはアクティビストに変わる。

② **ガルロ・ワ・キリロ (Ngarũro wa Kĩrĩro)** という名前には、労働者の抵抗が含意されている。その意味は「涙を拭う」である。涙を拭って、「悲嘆から前進へ」の意である。彼は、マティガリを助けた後、ストライキを指導している。マティガリは抵抗の歴史をガルロに話し、ガルロはそれを教訓として労働者の組織化に活かしている。

③ **ムリウキ (Mũriũki)** とは「復活、再生」の意である。

以上要するに、ケニア近現代史を生き抜く主人公がマティガリであり、アクティビストとして決起するのがグゼラである。社会変革に努力するのは、ガルロであるということになる。彼ら三人の努力から、社会的に再生産されるのが戦士ムリウキなのであろう。

⑧ 『マティガリ』の独自性

『マティガリ』は質的に異なるジャンルを包摂して、新たなジャンルを創始する小説である。いくつものジャンルを、同時に取り入れたマルチフォーム、マルチジャンルの小説であり、従来の批評の分析方法は役に立たない。

『マティガリ』は、口承形式を取り入れたポスト書記文学と言うのでなく、書記と口承を同時に取り入れた聖者伝でもあり、神話でもあろう。それは、「オ

デュッセイ」や聖書のいくつかの書を思い出させるが、同時に、多重の声が聞こえてくる、脱構築の実験作である。つまり、新しいタイプの小説である。

グギはギクユ語で書くことで、それまで身上としてきたリアリズムと訣別したのだろうか。答えは否であろう。『十字架の上の悪魔』や『マティガリ』によって、彼がリアリズムを捨てたと言うことにはならないであろう。これらによって、彼がモダニスト、ポストモダニスト的な実験を始めたと解釈すべきだろう。いや、むしろギクユ語で書くことで、(特に「マティガリ」では)モダニズムやポストモダニズムの形式とアフリカ口承伝統との密接な類似に気付かせたと言うことであろう。

民族語に回帰することで、口承と書記の二つの文化伝統を遊離させようとしたのではない。むしろ、これら二つの区別は無効であることを示したかったのである。英語からギクユ語への転換は、西洋の小説伝統の一切を批判するためではなく、これまでの小説作法に支配的であった西洋の伝統をアフリカの文学伝統と置き換えたのである。かくして、彼はアフリカ小説を西洋の伝統の束縛から解放し、より広い視野から、アフリカ口承伝統の美学哲学の中に位置づけようとした。これによって、グギ自身の文学だけでなく、アフリカ小説のジャンルにより大きな可能性が開かれたと言えるだろう。

『十字架の上の悪魔』で試みられた聖者伝的文体を、『マティガリ』ではよりいっそう展開させている。前者は、女主人公ワリインガの人生を描き、後者はとりわけて偉人・聖者とされる人物の話である。主人公マティガリは、注意深く、かつ説得的に、キリストになぞらえて描かれている。福音書に現れるキリストと、小説の主人公マティガリの間には、並行関係が見て取れる。たとえば、犬を連れた二人の警官は地獄の番人であろう。政財界の大物たちは人食い鬼として描かれている。

マティガリは、キリスト教の教えを新しく、独自に解釈し直していることも注目されてよい。彼によれば、①神の教会は、人々の心の中にある。②再臨を約束された人物なのかどうかと問われて、約束の神はあなた方の心の中にいる、と答えている。③善悪二元論の倫理観を持っている。④自分の屋敷(神の屋敷)を取り戻そうと、現代のパリサイ人(偽善者)を追放しようとしている。⑤そのために地獄の劫火で威嚇する(燃え上がる「家」)。⑥山上で、グゼラ、ムリウキと向き合って語る様子は、さながらキリスト同然である。⑦奇跡的、神秘的な逃亡に繰り返し成功する。⑧致命傷を負いながらも、神の助けを得たかの

ように、敵に捕まらずに姿を消す。

ここには、二つの神話化作用が隠されているようである。一つは、マティガリをキリストになぞらえる宗教上の神話化である。二つは、マティガリを政治的抑圧から民衆を救う愛国者に仕立てる世俗的な神話化である。

聖書への言及とイメージの借用は多いが、非正統的、異端的な聖書モチーフの転用も見られる。たとえば、キリスト教権力の偽善は、キリストの再臨に怯える「牧師」の人物像に端的に現れている。ここには、キリストの教えを、独自の立場から「解放の神学」にまで高めようとする作者の意図が働いている。

⑨ 豊富な象徴形式

豊富な象徴形式が使われていることは、これまでに何度も指摘してきた。冒頭、マティガリが武器を埋めるのはムグモ（イチジク）の木の根元である。ムグモはギクユの神話の時代から聖木として仰がれ、すべての作品で、聖なる場所として描かれてきた。

マティガリは、「家」を取り戻すために帰還したと言うが、これもシンボリックな言い方である。「家」の要求は、独立闘争の目的・成果を確認するためである。「独立にかけた夢と理想、戦いの大義」を再確認するために、マティガリは彷徨を始めたのである。マティガリは、「真実と正義」に基づく新たな社会秩序を期待している。

このほか、随所で言及される天候、気温、雨、旱魃、風、日光などに関する短い言及が持つ象徴機能も無視できない。しかし、最も重要な象徴機能を担うのは「川」であろう。小説第1作『川を隔てて』に顕著に見られたように、「川」は「統一」(union)と「分離」(separation)といった相矛盾する象徴的意味を持っている。同時に「生命」「洗礼」といった意味をあわせ持っている。

さらに、『マティガリ』では、「川」は山中にこもった戦士たちの世界と、ごく普通の人々の住む「日常世界」の境界に位置している。川伝いに逃げるマティガリの背に弾丸が飛んでくるが、マティガリにはあたらない。弾は水滴に変わるかのようである。「川」にたどり着いたところで、警察犬が二人に噛みつく。マティガリはグゼラを抱えたまま、「川」に落ちる。たちまち、稲妻が走り、雷鳴が轟き、大粒の雨が降り出す。荒れ狂う奔流のなかを二人は流される。警察は二人の遺体を手に入れるべく、川岸を搜索し続けている。遠くでは、豪雨が

炎上する「家」の火を消している。やがて、「川」はマティガリとグゼラを神秘的な、永遠の世界へ呑み込んでしまうのであろう。だが、二人の生死を確かめる手立ては残されていない。³⁹⁾

一方、ムグモの木の根元から武器を持ち帰るよう指示を受けたムリウキは、「川」を渡って、山中に入る。⁴⁰⁾「川」は「成人儀礼＝割礼」の場でもある。人は「割礼」によって成人する。ムリウキは、ここで「愛国者・戦士」に生まれ変わり、武装闘争の準備に入るのであろう。

さて、先の疑問に戻ろう。〈マティガリは生きているのか、死んでしまったのか〉。誰もが抱くこの最後の疑問に対して、どう考えればよいのであろうか。読者により、千差万別の解釈がありうるかもしれない。ここでは、一つの読み方を示しておこう。

第3章の末尾に近い部分に見える次のくだりは、この疑問の回答を得る上で、示唆的に思われる。(3章16)。

マティガリが、警察の手を逃れて、グゼラ、ムリウキらとともに「子ども村」へ一時避難し、再び武器を取るべく山へ戻る決意を固めるシーンである。子どもたちが好奇心に溢れて、マティガリの周りに集まっている。

‘Tell us, are you the one whose Second Coming is prophesied?’ asked one of the boys. ‘Jesus Christ? The Lord who will bring the New Jerusalem here on earth?’ added another.⁴¹⁾

「あなたは、再臨を約束されたお方なのですか」少年の一人が尋ねた。

「イエス・キリストでいらっしゃるのですか。地上にニューエルサレムをつくってくださるお方なのですか」別の少年が尋ねた。

マティガリはしばらく躊躇した。彼は子どもたちの顔を見つめた。それから、視線は子どもたちの向こうの廃車の列に注がれ、ついで彼方の山々に注がれた。「違う」と彼は答えて、言葉を継いだ。

The God who is prophesied is in you, in me and in the other humans. He has always been there inside us since the beginning of time.⁴²⁾

「約束された神は、君たちの心の中にいらっしゃる。私の心の中にも、他の人々の心の中にもいらっしゃる。そのお方は、原初の昔から、ずっと私たちの心の中にいらっしゃった」。

Imperialism has tried to kill that God within us. But one day that god will return from the dead. Yes, one day that God within us will come alive and liberate us who believe in Him. I am not dreaming.⁴³⁾

「帝国主義は、私たちの心の中のその神を殺そうとしてきた。でも、いつか、神は死者の下から戻って来られる。そう、何時の日か、私たちの心の中の神が蘇られて、神を信じる者を解放してくださるのだ。これは夢ではない」。

このように読み進めると、おのずから先の疑問に対する回答は明らかであろう。確実に言えそうなことは、一連のドラマを見届けた人々の多く、それも特にムリウキと世代を共有するような次代の若者たちにとっては、答えは自明である。彼らは、躊躇することなく、次のように答えるに違いない。「マティガリは生きている。それも、私の心の中に」。

Ⅲ. 『カラスの魔法医』: 20 世紀アフリカの総括 (*Mũrogi wa Kagogo*, East African Educational Publishers, 2004~2006 ; *Wizard of the Crow*, A Translation from Gĩkũyũ by the author, Harvill Secker, 2006)

1997 年 5 月から書き始めたのが『カラスの魔法医』で、小説第 7 作目（ギクユ語小説としては第 3 作目）である。英語版で 766 ページに及ぶこのマンモス小説は、ケニア、ひろくアフリカの、ポストコロニアル時代の独裁者を取り巻く権力構図を描いている。深刻な問題を扱いながら、コミカルな娯楽要素が強く、アレゴリー、寓喩、寓意、ファンタジー、風刺に富んだ痛烈な政治的笑劇であると言えよう。評者によっては、滅茶苦茶な道化小説、荒唐無稽な滑稽譚であるとの言い方までである。

① 荒唐無稽な政治的笑劇

いわゆる魔術的リアリズムの手法が駆使されるが、こうした手法にお馴染みの、幻想、ユーモア、不条理と不合理をないまぜに、想像力をもって現実を存分に語り尽くした現代のフォークロアであると言えるだろう。物語は、伝統的な口承形式、ストーリーテリングの方法で語られる。初めに、語りの発端とな

る前口上がある。

In the spirit of the dead, the living, and the unborn,
Empty your ears of all impurities, o listener,
That you may hear my story.⁴⁴⁾

「死者と生者と、これから生まれてくる者の意気にならって、
おお、聞く耳ある人よ、両の耳を研ぎ澄ませて、
私の話をお聞きください」。

舞台は、架空のアフリカ独立国家、アブレリア自由共和国（Free Republic of Aburīria）である。実名は明かされないで、ただ「ルーラー」（Ruler）の名のみで知られる専制的独裁者、半神的人物が君臨している。彼は、植民地期には白人政府に積極的に協力して地位を成した日和見主義者、広範な民衆から見れば、裏切り者、売国奴であったが、今ではある独立アフリカ国家の第二代元首として、永久不滅かと思われるほどの強権の座に上り詰めている。

この絶対君主に追従、ただ御意のままに、オウム返しに返答（Parrotlogy）⁴⁵⁾することしか知らず、忠誠を誓い、おべっかを生業としながらも、実際には戦々恐々、疑心暗鬼の画策のなかで、利権を貪り、自己の保身と栄達をもくろむ何人かの側近閣僚たちがいる。彼らの努力は、見事というよりは、むしろグロテスクである。

その一人、国务大臣のシキオクウ（Sikiokuu）は、「ルーラー」の耳となるべく、パリに渡り、彼の地の病院で整形して、自分の耳をウサギよりも巨大なものにしている。シキオクウとは、スワヒリ語で「大耳」「聞き耳」の意である。市民の私的なひそひそ話を聞きつけることは彼の大切な任務の一つである。外務大臣のマチョカリ（Machokali）は、「ルーラー」の眼となるべく、ロンドンの病院で整形して、自分の眼球を電球ほど巨大にしている。マチョカリとは、スワヒリ語で「鋭い眼」の意であり、さしずめ「千里眼」とでも言おうか。その眼を使って、何処に居るかも知れない「ルーラー」の敵を見つけることが彼の重要任務の一つである。他に、情報大臣のビッグ・ベン・マンボ（Big Ben Mambo）がいる。彼は「ルーラー」の声となり、その命令、つまりは「玉音」を全国津々浦々の兵士に届けるべく、パリとベルリンの病院で、自分の舌と唇を巨大に整形している。だが、閣僚の間、特にシキオクウとマチョカリの間には、「ルーラー」に取り入って、権力の梯子を上り詰めようとの熾烈なライバル

意識がある。彼らは、たがいに相手を貶め、隙あれば、出し抜こうと必死である。

しかし「ルーラー」は、そこのところはちゃんと見抜いており、たくみに二人を操っている。実際のところ、「ルーラー」はどの閣僚にもたいした期待を抱いておらず、彼が最も頼りにしているのは、自己保身のための、植民地政府から譲り受けた軍隊であり、欧米・日本など先進諸国との揺るぎない政治的・経済的な友好関係である。軍隊と先進外国勢力との親密な連携、これら二つを戦術的武器として、社会を包む不穏な空気のなか、目下の最大の関心事である一党独裁の維持徹底に腐心している。

アブレリア「自由共和国」(Free Republic)は、その表向きの美名に反して、あくまでも病的な、専制独裁の愚昧国家、汚れた権力の伏魔殿である。小説は、この独裁国家の政治的抑圧と腐敗、愚鈍ぶりを容赦なく暴き出す。政財界の権力機構の残忍なまでの独善と強欲を大胆な寓話で描くのである。「自由共和国」の実態は、反ユートピア国(dystopia デイストピア)である。とはいえ、忘れてならないのは、そこには、支配機構にとっては獅子身中の虫ともいえるべき反政府の地下組織「人民の声」(Voice of the People)が息づいている。

作者によれば、架空の独立国家アブレリア自由共和国こそは、現代のケニアがモデルであるという。⁴⁶⁾だが、ケニアだけでなく、国旗の独立を掲げたポストコロニアル時代にも、慢性的な全身麻痺、機能障害に陥ってきたアフリカの多くの独立国家を形象していることは明らかであろう。政財界の支配階層の愚鈍、卑劣、裏切り、拝金主義などを通して、グローバル化する世界を背景に、現代アフリカの権力構図が、実に陽気で、創意に富んだストーリーテリングの技法を駆使して暴かれるのである。

国家レベルの権力構図の描写と並んで、小説の主人公とも言うべき「魔法医」の勇気と冒険、ラブロマンが重なる。「魔法医」は世直しを志すヒーラー(治療師)であり、人の心、深層に隠れているものを読み取る能力にたけたカウンセラーでもある。この「魔法医」の役を引き受けるのが、男女のカップル、つまり失業中の乞食青年カミティと、その恋人になるニャウィラである。二人は、入れ代わり立ち代わり、他人に気づかれないように巧みに「魔法医」を演じている。

カミティは自分の魂を鳥に変える力を持っている。彼は、鳥になって、アフ

リカ全土の上空を飛んで、嫌な臭いをかぎつける。その嫌な臭いのもとは、独裁、女性の抑圧、少数民族の抑圧、拝金主義、ありとあらゆるコラプションを生み出すものであり、外資銀行や多国籍企業が、かつての植民地宗主国の役割を引き受けている日常的現実である。呪医、ないしは薬草医の家系を継ぐカミティは、野の医療、巧みなオカルト的カウンセリング能力にもたけている。彼は鏡を使って、クライアントの抱く強迫観念・妄想の根っこを把握するなど、心理療法の才能に恵まれており、どうやら魔術的リアリズムの世界にいる。

ニャウィラは地下組織「人民の声」の女性闘士で、反政府活動に従事するアクティビストであり、フェミニストでもある。ニャウィラがカミティをこの運動に引き込むことになるが、二人の同志愛と信頼関係の深まりが小説の縦糸になっている。ニャウィラは、カミティよりも大人である。カミティを地下組織へ誘うのはニャウィラであり、彼女の方が、政治意識に富んでいる。ニャウィラは、『十字架の上の悪魔』の女性主人公ワラインガの延長でもあろう。

この小説には、とんでもない奇想が多い。先述の他にも、身体的に「白人」になりたい、肌の色が白くありたいという欲求、強迫観念（White-ache）に人知れず悩む実業家（タイタス・タジリカ）がいるかと思えば、「ルーラー」自身が妊娠とも疑われるほど、巨大なバルーンのように、張り裂けんばかりに膨張して、ついには話すこともままならず、全身が宙に浮くといった有様である。糞便にまみれ、腐敗した権力者の衰退も描かれている。

これまでの、とりわけ英語小説の、冷徹で徹底したリアリズムに親しんできた読者には、こうしたコミカル要素や糞便学（スカトロロジー）的描写を含めて、作者がこんなにも荒唐無稽な作品を書き得たことに大いに驚かされることであらう。

② 社会的・政治的背景

「ルーラー」は、かつてのウガンダ共和国大統領イディ・アミン⁴⁷⁾、あるいは、中央アフリカ共和国の大統領、皇帝ボカサ⁴⁸⁾を思わせるような絶対権力者である。アフリカ以外では、フィリピンのマルコス⁴⁹⁾、チリのピノチェット⁵⁰⁾、南アのアパルトヘイト政権⁵¹⁾であつても構わないであらう。しかし、小説の舞台アブレリア自由共和国は、実はケニアのことであり、「ルーラー」とは、同国の第二代大統領ダニエル・アラップ・モイを戯画化したものとされる。作者自身が、この小説の「独裁者」のイメージが、モイ政権期に辿られるものであることを明言している。ダニエル・アラップ・モイは、初代大統領ケニヤッタ

時代には副大統領であったが、1978年のケニヤッタの死後、その後を継いで政権を取り、2002年に引退した。実に24年間にわたって、長期政権を維持したのだった。2002年、モイは引退したが、この時代については「インターロード」Vで詳述した。

③ 構成と登場人物

小説の舞台、アブレリア自由共和国では、第二代の「ルーラー」が統治している。彼の好むラッキーナンバーは7である。そこで「ルーラー」は、「1年のうちのどの月をも第7番目の月と制定しうる権限」を持つという。つまり、彼は、カレンダー、天体の動きまでを気ままに操作できるような専制君主であり、「敵の流した血で沐浴」し、「必要とあれば、容赦なく暴力に訴える」ことも厭わない恐怖の支配者である。⁵²⁾

「ルーラー」の下に位置して、「ルーラー」を支える者たちの権力闘争も一つの焦点である。先述したように、閣僚のうちには、この「ルーラー」に忠誠を尽くして、グロテスクな整形を施している者がいる。権力が、権力の側近に位置することが、個人的な蓄財に結びつくことを誰もが知っている。

小説の冒頭で、「ルーラー」の奇妙な病気の原因が探られる。これには5つの解釈がある。①正体不明の「怒り」が原因だと言うもの ②虐待された雄山羊の呪いが原因だと言うもの ③「ルーラー」としての、あまりに長い在位が原因だと言うもの ④「ルーラー」の正妻の、流されぬ涙が原因だと言うもの ⑤特別の部屋に隠している政敵の骸骨の呪いが原因だと言うもの。⁵³⁾

「怒り」が原因であれば、手の施しようがない。雄山羊の呪いというのは、全土での流血事件の禊として、呪術師の指図によって、雄山羊の口以外の穴、つまり鼻孔や肛門や耳の穴に「ルーラー」の髪の毛の束を詰め込んで封印したことを指している。あまりに長い在位は、政権の老化につながるものだ。正妻の流すに流しえない涙とは、バイアグラを愛用する「ルーラー」が若い娘、中高女子生徒（Spring Chicken）と日々戯れるからである。政敵の骸骨とは、「ルーラー」に背いて殺された人々のことである。

さて、「ルーラー」の誕生日が近い。マチョカリの提案を受けて、祝賀委員会が結成され、誕生記念として、「天界へのマーチング」(Marching to Heaven)プロジェクトが立ち上がる。アフリカ最高峰キリマンジャロの1,000倍の高さ、古代イスラエル人のバベルの塔に匹敵するような超高層建築物の建設計画が発

表される。これは、「ルーラー」の権勢を示すための「世界史上、最初にして唯一のスーパーワンダー（超驚異）」と称されるものである。その目的は、「ルーラー」が日々天の門を訪ね、朝に夕に神と挨拶を交わすためである。そのための乗り物としては、エレベーターでは間に合わず、豪華宇宙ライナーの敷設も必要である。

この建設計画の市民代表として、財界の有力者タイタス・タジリカ（Titus Tajirika）なる人物が抜擢される。しかし、その実現のためには、「グローバル・バンク」（世界銀行、IMFを指すのであろう）から、新事業「天界へのマーチング」の実施実現に当てる多額のローンを借款する必要がある。ところが、この壮大な計画は、貧者の地下組織、特に戦闘的な女性組織からの妨害に会う。

小説の政治的アングルは、「ルーラー」、シキオクウ、マチョカリによって代表される。権力の梯子のすぐ下には、墮落し、金で動く多数の役人や実業家がいる。そして社会の最底辺には、群れなす失業者がいる。いずれの場合にも、成功の梯子を上る機会を伺う新興勢力の台頭が見られる。

主人公カミティは、インドに留学し、修士号を持つほどのエリートであるが、帰国後の就活が成功しない。やがて、乞食同然に落ちぶれる。ある夜、乞食に変装して、反政府活動をしていた活動家グループにたまたま合流してしまう。警察が彼らを追いかけるが、この時、カミティは偶然にも、乞食の身なりで活動をリードしていたアクティビストである女性ニャウィラと一緒にになり、ある古家に逃げ延びる。追っ手から逃れ、人を寄せ付けないように、カミティは咄嗟の知恵で、その古家に「カラスの魔法医」（Mūrogi wa Kagogo, Wizard of the Crow）との小さな看板を掲げる。「魔法医」は恐れられている。「魔法医」となれば、特別の必要がないかぎり、誰もが近づこうとはしない。こうして、その夜の警察の追跡を逃れることに成功し、二人の「魔法医」への転身が始まる。

つまり、その看板を下ろし忘れていると、翌日からクライアントが訪ねてきて、思いがけず「魔法医」の仕事を始めなくてはならなくなる。まずためしに、カミティから始める。カミティには、自分でも知らなかった人並み外れた占い、予言能力、他人の深層心理を読み取るオカルト的能力がそなわっていることが分かる。やがて二人の隠れ家、「魔法医」の古家（社、聖堂）の前に多数のクライアントが列をなす。

以上、小説の発端部分を紹介したが、プロットの全体となると、なかなか手

が込んでいる。ファンタジーと誇張、変装とほら話、欺瞞と陰謀、幽閉と逃亡、冒険と裏切り、その他あらゆる両面価値に満ちている。主な登場人物の係累にまで話が及ぶなど、一見、メインな筋から離れ、話が話を誘って、数々のエピソードに及ぶ。したがって、この長い小説の面白さを要約することは至難である。ここでは、どのエピソードにも、したがって、どのページにもサプライズがあるとだけ言っておこう。どのエピソードからも、独裁者と国家権力が生み出す不条理と不合理な感覚、幻想とアレゴリーが付きまとう。とはいえ、「ルーラー」の統治神話の緩やかだが確実な崩壊への道筋、そして「カラスの魔法医」の能力神話の高まり、つまり、社会秩序の変革を目指す「カラスの魔法医」に結集する無辜の民衆の、人間性回復への強い意志の高まりがプロットの中にある。

カミティはカギを握る人物の一人である。小説の初めのあたりで、彼はタイタス・タジリカが経営するエルダレス・モダン建物不動産会社を訪れ、就職面接を頼む。ここでタジリカから、侮蔑的な扱いを受けるが、この時、タジリカの秘書ニャウィラに初めて出会っている。その後、彼は、「カラスの魔法医」となって、自分の隠れた才能が評判を獲得することに自分でも驚くことになる。

「カラスの魔法医」の看板を掲げた翌日、早速にも一人の警官、A. G. が訪ねて来て、職場での出世の方法を尋ねてくる。A. G.とは、アリガイガイ・ガゼレの略称である。

A. G. が相談にやって来るシーンを再現してみよう。

彼は「小さな窓の前」に立たされる。その様子は、あたかも、カトリック教会の告解聴聞席に立って懺悔する人物に似ている。A. G. は魔法医の能力を信じきっている。魔法医のカミティは、自分の正体がばれはしないかと気が気でならない。カミティの方から若干の質問はするが、出来るだけ A. G. に話させようとする。A. G. は「誰か他の人物の影が、自分の影と重なっている」ように思うと告白する。彼が昇進を手にするには、この影から解放されなければならないと魔法医は診断する。魔法医は、「自分の影を見つめ、他人の影が自分の影と重なるのを確認するためには鏡が必要だ」と言う。

さっそく A. G. は鏡を用意する。魔法医が言う。「敵である他人のイメージを心に思い浮かべるがよい。そうすれば、鏡に映ったその敵を捕まえることが出来る。その人物のイメージを鏡に捕えることが出来れば、私は鋭いナイフでその人物に切りつけよう。その瞬間、あなたの敵は永久に消えてしまうであろう」。このオカルト的儀式が終わる頃に

は、A.G. は涙ぐんでいる。それは、悲しみの涙ではなく、長年の強迫観念から解放された歓喜の涙なのである。⁵⁴⁾

「魔法医」のカミティは、自分に魔法の力が備わっているなどとは思ってもない。しかし、彼には、他人の心の底に蠢くものの実態を覗き見る不思議な力が備わっている。彼には、人の心の中に潜在しているものを発見させて、それについて語らせるような生得の能力が備わっているのである。

魔法医の診察室は、教会の懺悔室に似ているが、人に罪を告白させるのではなく、自分が本当は何者であるか、自分をどんな人間であると思っているかを、無意識のうちに告白させるのである。

A. G. の影に他人の影が重なるというが、それは敵の影でなく、もう一人のA.G.の影である。その影こそが、A. G. の正体、A. G. がなりたいたいと思っている自分像なのである。魔法医は、この影を鏡に閉じ込める。そうすると以後、A. G. は二重の影に悩まされなくなる。A. G. は、抱き続けてきた妄想から解放されて、それまでのA. G.ではなくなる。

タジリカの場合はこうだ。

彼は元代用教員であったが、独立後は商人に転じ、ついで農場を買い取るなど財を成した。「タジリカ」とは、スワヒリ語では「成り金」の意である。今では、有力なビジネスマンとして成功し、政界との繋がりも強い。彼は「ルーラー」との握手の機会に恵まれると、握手した手に四六時中手袋をはめて、その感触と匂いを落とさないようにしている。とうぜん、その手は、今では異臭を放っている。やがて「天界へのマーチング」プロジェクトのチェアマンに抜擢されると、たちまち、彼の事務所の前に失業者が長蛇の列を作るが、同時に、建設契約を取り付けようとスーツ姿のビジネスマンたちが列をなし、賄賂もいとわない。

タジリカは賄賂として受け取った三つの金袋を前に、突然、口がきけなくなる。ただ、If「もしも・・・」とつぶやくのみで、後の言葉が続かない。彼は三つの金袋を魔法医のもとへ届けて、この症状から解放される。魔法医は、タジリカの病気が「white-ache」、つまり白人になりたいという妄想=権力欲が原因であったことを見抜くのである。タジリカは、魔法医の前で、自分の喉元につかえていた言葉、「ああ、白人であったなら・・・」(If only I was white)を吐き出

すことで本来の言葉を取り戻す。これが自己発見である。自分がそんな強迫観念に捕らわれていたことを初めて知る。旧植民地の新興ブルジョアたちの多くが、タジリカのように、西洋ブルジョアのイメージに取り憑かれてきたことを思い起こそう。

かくして、魔法医は、「白人になる夢をかなえたタジリカ」を思い描かせる。しかし、魔法医の診断によれば、タジリカは白人になれても、せいぜい貧しいイギリス人程度だという。この警告譚を聞かされたタジリカは、最後には白人になりたいという願望から解き放たれる。⁵⁵⁾

この間、ニャウィラの雇い主タジリカ、ニャウィラの元夫で教員でもあり、「ルーラー」の親衛隊ともいうべき青年組織の重要な一員でもあるカニウルは、国家の名において、賄賂を受け取れるような地位にまで上っている。二人とも、出世のためには手段を選ばず、人を裏切ることもいとわない。

グローバル・バンクから資金融資を取るために、「ルーラー」自らが渡米することになるが、滞在中に、「全身膨張」の奇病に取り憑かれる。「ルーラー」が妊娠したとの風説も流れる。ここでは、アメリカの白人名医も手の施しようがない。ついに、かつてのクライアントであったアリガイガイの進言によって、「カラスの魔法医」が治療のためニューヨークへ招聘される。だが、グローバル・バンクからのローンが得られないことがわかると、「ルーラー」の身体は怒りのために、ますます膨張し、天井にまで浮かび上がる。ハーバード出身の白人名医が呼ばれるが、どうにもならず、結局、「魔法医」の心理療法が功を奏するのである。西洋科学万能主義 (Science) に対するアフリカの魔法医術 (Sorcery) の勝利であるが、白人名医は成果を横取りしようとする。

この時、「ルーラー」は、アメリカ大使に次のように言っている。

「冷戦時代、私は、何千の国民を永久の沈黙に送り込むことで賞賛を浴びた。今では、同じことを繰り返す用意があっても、新たなグローバル・オーダーが口やかましく、抑制を強いてくる」。「冷戦期を過ぎて、グローバル化の現在、専制君主、暴君、独裁者たる者は何をなすべきなのだろうか。アブレリア自由共和国を新世界秩序の時代の最初の協同植民地 *corporate colony*= *corporony* に仕立てるのがよい。国家をまるごと私有財産とし、社会サービスは NGO に任せるのがよい」。⁵⁶⁾

グローバル化の世界をリードしている帝國的な諸勢力と協調して、アブレリ

ア自由共和国を国際植民地に仕立てようというのである。

④ 「魔術的リアリズム」という拡大鏡

『カラスの魔法医』は、独立後の腐敗独裁政権の専横と裏切りを描く空想的、シュールリアルの作品である。その魔術的リアリズムを通して、アフリカの多重の声が聞こえる政治風刺小説として重みがある。しかも大切なことは、語法と言葉のリズム感において、ストーリーテリング、口承の性格が濃いことである。口承形式という大胆な実験と奔放な病理学的描写に富んだ滑稽な作品であるが、ポストコロニアルのアフリカへの怒りの作品でもある。これを風刺、戯画化というだけでは、あまりにグロテスクで、いびつである。

アブレリア自由共和国のグロテスクさ、卑劣さ、経済的疾苦、拝金主義、すべての悪徳が、多くのアフリカ独立国家に通じるとの認識が問われている。魔術的リアリズムの手法で、アフリカ社会の腐敗を風刺しているが、その手法を超えて、むしろリアリスティックな魔術とも言い直せる手法である。魔法医は、「ルーラー」を含むクライアントたちが抱く隠れた妄想の治療にあたるが、この妄想たるや、アフリカの秘めたる機能障害を映し出している。

グロテスクな誇張を伴いながら、権力構図の分析は真に迫っていよう。しかし、民衆の抵抗に対する著者の視線には揺るぎがない。そこに、この作品の意義がある。

この小説は、空間的広がり比べて、時間幅はそう大きくない。比較的に小さな範囲で、登場人物の絡み合いが生じている。こうした限られた時間軸の範囲で、コミカルなタッチで、現代アフリカの病巣に切り込んでいく。「天界へのマーチング」プロジェクト、現代のバベルの塔建設計画などは、「独裁」をパロディ化したものである。古今東西、独裁者は、自分が神の特別な庇護を受けていると強調し、自分の記念碑をつくりたがるものである。

著者は、魔術的リアリズムという拡大鏡を使って、ポストコロニアル時代のアフリカ（ケニア）を観察し、診断している。だが、一切の処方箋はない。著者の言葉にならうと、「この小説は、世界史 2000 年の脈絡の中で、グローバル化する世界を背景に、20 世紀アフリカを総括したもの」⁵⁷⁾ だと言う。

先に述べたように、「アブレリア自由共和国」は、明らかにモイ政権下のケニアである。モイ (Moi) は、「朕は国家なり」(L'état, c'est Moi) そのままの、

独立アフリカに登場した典型的な独裁者である。だが、この独裁者に見られたような政権の腐敗と金権主義は、残念なことに、多くのポストコロニアルのアフリカ独立国家に通じるものだ。「ルーラー」の名前は出ないが、サブサハラ・アフリカ国家の元首によくあるように、彼はフライフィスク、豹皮の帽子をかぶり、危険なほどの救世主的風貌が備わっているようである。そこでは、コロニアル時代が過ぎて、政治的独立の旗を掲げながらも、「帝国」アメリカをはじめ、イギリス、フランス、ドイツ、そして日本など先進諸国のグローバル資本に翻弄されるアフリカの現在がある。これら先進諸国が主導するグローバル化の推進機関ともいえるべき世界銀行やIMFを髣髴とさせる「グローバル・バンク」も登場している。閣僚たちは、ドイツやフランス、イギリスへ赴いてグロテスクな整形を施しているし、「魔法医」の商売道具の鏡を日本ほかに注文するありさまである。そこには、今やグローバル・コロニー、グローバル・プランテーションと化したアフリカの現在が見え隠れしている。

メタファー、シンボリズム、聖書への隠喩にも富んでいる。バケツ一杯の糞尿は、「ルーラー」の腐敗、権力機構に対する嫌悪を象徴したものであろう。「ルーラー」他は、現代の吸血鬼として描かれている。スカトロジック的描写は、社会的、人間的、道義的な退廃を見事に捉えている。現実の背後に潜む恐怖を、その匂いで示唆しているのである。

『カラスの魔法医』は、個人の私利私欲が、すべての意思決定を支配しているアフリカと先進資本主義国に向けられた邪悪な風刺小説である。権力の地位にあるすべての人物は、誰もが利己的であることは、古今東西、人間の歴史が教えている。

⑤ 源流としての口承伝統

『カラスの魔法医』の語りの底には、アフリカの口承伝統の水脈が流れている。ここまで、口承伝統の形式に踏み込んだ作品は稀だろう。語法、ことばの流れ、抑揚などが口承伝統のストーリーテリングに沿っている。ストーリーテリングは、一回性の芸術であって、語られる度に常に新しくなる。その意味では、この作品は、重ねて読んでみる値打ちがある。あるいは、第三者に読んで聞かせてもらうだけの魅力を秘めている。ストーリーテリングは小説のプロットを構成する道具でもある。著者は、語り手となって、絶えず読者を驚かし、楽しませようとしている。

たとえば、熱心なキリスト教信者の、理想的と思われていた老夫婦が、ある

日突然、パートナー以外の男女に肉欲を掻き立てられて、そのことを会衆の前で告白、懺悔するといった話などは、その典型であろう。二人の告白を聞こうと、ますます会衆が増えて、牧師は喜びを隠しきれないでいる。

また、白人になりたいとの強迫観念にとらわれたタジリカが、皮膚の移植（skin transplant）を考えたり、白人女性との再婚を考えたり、あるいはクレメント・クレアネス・ホワイトヘッドといった白人名への改名を考えたりするのも滑稽なことだ。当然、妻のビンジカは、離婚を考える夫に怒りを覚え、自分でも、バージン・ビートリス・ホワイトヘッドへの改名を考えたりしている。

魔術的リアリズムとの関連で、ガルシア・マルケス⁵⁸⁾からの影響を問われて、グギが次のように答えているのは興味深い。

「マルケスは大作家だ。しかし、彼からの影響よりもっと多く、私はアフリカの口承伝統、民話から影響を受けている。口承の物語は、生活の一要素として、マジックを内包している。現実には、とてもマジカルということだ。自然と人間生活には、変化が内在しているが、変化ということ自体が、マジックなのだ」。⁵⁹⁾

口承伝統の再発見は、現代アフリカ文学の自立と自己形成、文化的刷新のためにも大切なことだ。アフリカのストーリーテリングに忠実に先祖返りするのではない。アフリカの真正の声を口承伝統に辿るのである。郷愁を込めて伝統を丸かかえしているのではない。口承伝統との創造的・生産的対話がより大切である。

魔法医の力で、A. G. やビンジカ（タジリカの妻）など、多くの人物が自己発見し、新たな自分を獲得している。魔法医であるカミティ自身が、この自己発見の典型例でもあるだろう。

「天界へのマーチング」プロジェクトの挫折の後、小説の末尾に、新体制がわずかに顔を出す。「ルーラー」による多党制の是認によって「民主主義」、「ベビー・デモクラシー」(B. D.) が芽生えかけている。しかし、立ち上がる全政党の代表は依然として「ルーラー」だという偽善の仕組みがある。新たに組閣された内閣では、タジリカが財務大臣、カニウルが国防大臣に抜擢され、ビッグ・ベン・マンボは情報大臣になっている。

こうして、変わりばえのしない権力構図の交替を経て、最後にはクーデター

が起こり、新しい「ルーラー」が誕生する。その「ルーラー」の名は、タイタス・ホワイトヘッド（タジリカを改名）である。前「ルーラー」とカニウルは、赤い川に投げ込まれて、ワニの餌食にされたと言う。また、前「ルーラー」の四人の息子はヨーロッパへ逃亡して、彼の地で亡命政権を樹立していると言う。

60)

この小説に、ハッピーエンドはない。だが、作者のペンに漲る怒りのなかに、一条の「希望」の光も見える。それは、民衆は自己自身の内側に贖罪、救済の力を発見しているとの力強いメッセージである。こうして、人間性を守る確固たる闘いが持続していく。

『カラスの魔法医』は、社会批評、ストーリーテリングの独特な技法、コミカル要素の全部をあわせ持っている。ここでは、歴史家や政治学者が分析するような、目に見える出来事を辿るアフリカ像でなく、グローバル化する世界を背景に、新興アフリカ国家内部の権力抗争をめぐる登場人物の心理的葛藤を暴くことで、小説としての小宇宙を完成させている。

『カラスの魔法医』は、完全な不条理小説であるが、不条理を描くことで、独立以後のアフリカ国家の鳥瞰図を与えている。植民地から脱却し、ついで冷戦と独裁政権期を経て、グローバル化の20世紀末から、いわゆる「民主主義」に向かおうとする多くのアフリカ国家の試練を描いている。つまり、アブレリア自由共和国の有為転変、機能障害は、ここしばらくのポストコロニアル時代アフリカの避けられない現実であるとしながらも、「魔法医」に結集した民衆の意志、新しい社会秩序の建設を目指す持続する抵抗運動への期待も込められている。

第5部：文学と思想の軌跡

グギ・ワ・ジオンゴが、まだジェームズ・グギを名乗っていた頃、それも、マケレレ大学の学部学生であった60年代初めから卒業直後の1964年にかけて、約80篇のコラム記事を、ナイロビの有力新聞に寄稿していた。それは、1961年5月から1964年8月にかけての40ヶ月のことで、寄稿先は、初めは「サンデー・ポスト」紙 (*Sunday Post*)、ついで「サンデー・ネーション」紙 (*Sunday Nation*)、そして大学卒業後リーズ大学留学までの期間は「デイリー・ネーション」紙 (*Daily Nation*) だった。後者の二紙は、発行曜日の違いから名称が異なるだけで、ともに「ネーション」社¹⁾の発行である。

I. 初期ジャーナリズム

これらを一括して「初期ジャーナリズム」²⁾と呼んでおこう。そこでは、多様なテーマが扱われており、ケニア独立前後の関心のあり方、その後の文学観、思想、社会的関心の変化を辿るうえで興味深い資料となる。

「サンデー・ネーション」紙のコラムは、「私の見たまま」(As I see it) と題されている。同じタイトルで、インド人のトーフアン (N.S. Toofan) が定期的に寄稿していたから、グギの場合は「アフリカ人の視点」ということなのであろう。当初は、最終ページに掲載されたが、のちに第5面ないし第6面に移ったのは、記事が注目を集めた結果だろう。

それらを見ると、その後に大きく変化した思考があり、同時に、変化していないと思われる論点もある。変化した思考の中には、まさに180度の大転換とさえ言える内容が多く含まれている。ここに示された変化は、この50年のアフリカ、とりわけケニアで起きたことを洞察するうえで、大いに啓発的である。なぜなら、「グギの関心事は、アフリカの関心事」(Ngugi's concern is Africa's concern)、*「グギは大陸の声」* (Ngugi Speaks for the Continent) とまで言われてきたように³⁾、これらを知ることは、現代ケニア、ひいては現代アフリカのこの50年を振り返ることになるからである。

この期間は、大陸全土はもちろん、東アフリカの政治社会史上で、めくるめく大変革の時代であった。1960年の「アフリカの年」(17ヶ国が独立)を経て、1961～1963年には、タンガニーカ、ウガンダ、ザンジバル、ケニアが政治的独立を達成した。また、マケレレ大学を卒業し、リーズ大学に向けて出発する直

前の 1964 年 1 月には、ザンジバルで社会主義革命が起き、同年 4 月にはタンガニーカとザンジバルが合併、タンザニア連合共和国が成立した。「アルーシャ宣言」⁴⁾ のあった 1967 年から 1977 年までは、東アフリカ共同体 (East African Community)⁵⁾ が存続し、ケニア、ウガンダ、タンザニアの三国が、鉄道・航空機などの輸送機関、コミュニケーション・システム、通貨などを共通にし、「東アフリカ連邦」の夢が掲げられた時代だった。

① 「サンデー・ポスト」紙の 5 篇

こうした政治史的背景を念頭に置きながら、まず 1961 年 5 月から同年 8 月にかけて、「サンデー・ポスト」紙に寄せた次の 5 つの記事を見ておこう。

- 1) 「アフリカ的人格⁶⁾は妄想だー虎は『ティグリチュード』⁷⁾を持つか」‘The African Personality’ is a Delusion : Do Tigers have ‘Tigritude’? *Sunday Post*, 1961.5.7.
- 2) 「新しい声：アフリカ人作家の登場」The New Voices : Some Emerging African Writers, *Sunday Post*, 1961.6.4.
- 3) 「アフリカの文化：ケニヤッタの誤り」African Culture : The Mistake That Kenyatta Made, *Sunday Post*, 1961.8.6.
- 4) 「『ケニア山のふもと』のノスタルジア」The Nostalgia of ‘Facing Mount Kenya’, *Sunday Post*, 1961.8.13.
- 5) 「新開拓村の問題点」Some Problems of the New Villages, *Sunday Post*, 1961.8.20.

これらのうち、初めの 4 つは、文学ないし文化に関するもので、最後のものは、ケニア社会経済史の最重要問題ともいえるべき「土地」を扱っている。以下、それぞれの内容を簡単に見ておこう。

- 1) 独立ガーナの初代大統領ンクルマの提唱した「アフリカ的人格」(African Personality) というコンセプトを、詩人で、独立セネガルの初代大統領サンゴールなどフランス語圏知識人の「ネグリチュード」(Négritude)⁸⁾ の混ぜ物として批判している。アフリカ人は、ヨーロッパ列強による植民地支配に対して、各地で闘いを展開したが、こうした共通の経験が、アフリカ人に独特かつ共通の「人格」、あるいは一体性を与えたとは思わないという。「人格」は、人それぞれに固有で、たがいに違っている。人種に固有の、独特なパーソナリティがあるとは認められず、ンクルマやサンゴールに反駁している。当時の東アフリカで、それほど知られていなかったナイジェリアの先輩作家

アチェベやショインカのネグリチュード批判に味方している。[なお、「ティグリチュード」(Tigritude)はショインカの造語である。ショインカは、「ネグリチュード」を一蹴して、「森林では、トラはティグリチュードを要求しない、ただ跳びかかるだけだ」と「ネグリチュード」を揶揄・批判した。また、南アフリカのエゼキエル・ムパシチャーレも「ネグリチュードの意義を問う」⁹⁾という文章で、これに反発した]。

- 2) ピーター・エイブラハムズ (Peter Abrahams, 1928~, 南ア)、ノニ・ジャバブ (Noni Jabavu, 1919~2008, 南ア)¹⁰⁾、アモス・トゥトゥオラ (Amos Tutuola, 1920~1997, ナイジェリア)、シプリアン・エクウェンシ (1921~2007, ナイジェリア)、チヌア・アチェベ (1930~2013, ナイジェリア)、ウィリアム・コントン (1925~2003, ガンビア)¹¹⁾らの名が挙げられている。アフリカ人作家にとっての二つの問題、つまり使用言語と読者の問題に触れている。母語で書けば、読者層が部族的レベルに極限されることから、宗主国の言語、つまり英語などの外国語で書かざるを得ない現状を訴えている。また、独立期の数少ない教育エリートが、文学でなく、なぜ医学や法律を学んで、国家の発展と近代化の先頭に立とうとしないのか、という世間の声にも注意を向けている。一生の仕事として、文学の道を選ぶのに、相当な勇気と決断が必要であったことは、時代と場所を問わず変わらないだろう (たとえば、明治期の日本)。新興アフリカ諸国の場合の、より困難な事情は想像に余りある。
- 3) 西洋の生活様式や価値観に幻滅したアフリカ人教育エリート、特にネグリチュードの詩人たちによるアフリカの過去、黒人性の美化、賛美に疑問を呈している。もはや、過去に戻ることは出来ない。「過去が、歪んだ鏡を通して眺められる傾向がある。『ケニア山のふもと』を一読すれば、ケニヤッタにも同じ傾向が見られる」としている。[編集者は、この一文に「ケニヤッタの誤り」との副題を付けた。のちに独立ケニアの初代大統領になるケニヤッタは、この時、7年間の拘留生活を終えて釈放されたばかりだった]。
- 4) 編集者が付けた先の記事の「副題」への抗議、ならびに真意の補足説明である。「ケニヤッタが過去への復帰を説いているわけではない。『ケニア山のふもと』は、部族の伝統への回帰の必要を説いているのでなく、過去の文化への共感と理解を持って書かれた学術書である。政治家ケニヤッタを批判しているのではなく、人類学者ケニヤッタを称賛している」とした。
- 5) 植民地期の土地政策の遺制、農民の土地喪失、ならびに広範な失業問題を扱っている。独立への期待と同時に、過剰な期待が幻滅を招きかねない事態

を予測し、警告している。

以上 5 編の寄稿の後、1962 年 5 月までの 9 ヶ月間に、新聞への寄稿は見当たらない。おそらく、61 年 12 月までは、執筆中の小説『川を隔てて』（『黒人の救世主』）の最終的な推敲、そして 62 年 1 月から 6 月までは第二作目の小説『泣くな、わが子よ』の執筆に専念し、さらには初期戯曲の執筆と上演活動に時間を取られたのであろう。

とはいえ、「ケニア・ウィークリー・ニュース」の 62 年 3 月 23 日号の小さな記事によると、ケニアのある英字新聞が、マケレレの学生に執筆スタッフを募集したところ、ケニアの全新聞社をもってしても雇いきれないほど多数の応募があったという。おそらく、その英字新聞とは「サンデー・ネーション」紙だった。この記事の 2 ヶ月後から、ジェームズ・グギ（後のグギ・ワ・ジオンゴ）が「私の見たまま」(As I see it) と題するコラムを同紙に書き始めた。（一部は、同系列の「デイリー・ネーション」紙に掲載）。

第 5 部 I 末尾に、それらを含め、「初期ジャーナリズム」全 78 編のタイトルを日付順で示し、内容についてキーワード程度の覚え書を添えた。

② 初期ジャーナリズム 78 篇：内容の分類

以下では、先の 5 編を含めて、全 78 篇を内容から 4 つのジャンルに分類した。一つの記事が複数のテーマに跨ったり、あるテーマが一つのジャンルに限定されえないのが、むしろ普通で、ここでの分類は暫定的なものである。

① 【政治・経済】 36 編

5,7,12,13,15,16,17,19,20,22,24,25,28,31,35,41,42,44,46,48,54,56,57,59,62,63,66,68,69,70,71,72,73,74,75,78.

② 【社会・文化】 18 編

1,3,4,8,14,18,26,29,32,33,36,38,40,47,50,52,60,76.

③ 【文学・演劇・言語】 9 編

2,10,21,27,30,51,61,64,65.

④ 【教育】 15 編

6,9,11,23,34,37,39,43,45,49,53,55,58,67,77.

植民地から独立へ、アフリカ民族主義のピークの時代を受けて、政治・経済的内容のものが圧倒的に多い。しかし、それらの内容は、後年に示されるようなラディカル、ある場合には、ミリタントな内容は稀で、むしろ抑制とバランスのとれたリベラル、時には常識的と思える内容が多い。マウマウ武装闘争の記憶が複数の記事で思い出されるが、植民地から独立への移行に、血を見る必要はないとの文章も見られる。また、ンクルマ批判も重ねて見られる。マケレレ大学職員ストの際には、このストライキに反対している。また、タンザニアのモシで開催されたアジア・アフリカ人民連帯会議に触れて、帝国主義を攻撃ばかりしてはならないと述べ、アフリカ・アジアの連帯は、スローガンを叫ぶよりも、実践的な繋がりをつくることが大切だと注文を付けている。

『ケニア山のふもと』の再評価では、アフリカ人の尊厳の復権の必要を説き、精神の植民地化が最悪であるとしている。これは人間の尊厳と自信を掘り崩す。まず政治的自由を、ついで経済基盤の地固めを、そして文化を基盤にした社会制度の発展をと説いて、「その時には、我々の学生を、共産主義的、社会主義的と称されるような曖昧な、半文明開化 (half civilized) の国々へ送る必要はなくなるだろう」と述べている¹²⁾。共産主義・社会主義に反対するか、もしくは揶揄・批判していると見られる。また共和制への移行に賛成し、大統領権限の一層の強化を訴えている。

他方、人種間の悪感情を払拭し、人種協調の必要を説いて、独立への心構えを促す文章もある。独立への挑戦として、貧困、疾病、文盲の退治が緊急課題だとされる。古きアフリカの時代、「黒い人形」(black doll) を懐かしむレオン・ダマ¹³⁾の詩を引用しながら、西洋文化に対して、一方的に反発するのではなく、人類の過去の全遺産から人間性を豊かにするような良いものを選択して取り入れる必要があると説いている。女子割礼や婚資制度は、もはや時代遅れで、廃止すべきであると言う。また、何ごとにも、アフリカ的特性を注入しなければならないのかと問い、『アフリカ』社会主義¹⁴⁾の談義に飽きた」とも言う。

以下では、扱っている問題のキーワードを示しておこう。

【政治関連】

政党の部族的性格の打破。一党制の必要。検閲制度に反対。新聞報道の自由・民主主義の尊重。東アフリカ連邦構想。バンドン会議。アフリカとアジアの出会い。インド独立。ガンジー、アフリカの独立運動を刺激。非暴力肯定。アフ

リカでも非暴力哲学が必要。ナイジェリア＝共和制、ウガンダ＝独立一周年。独立への三段階は、①政治的自由（教育エリートは恩恵に浴するが、大衆はすぐには恩恵に浴せない）②経済的自由（大衆の生活水準の向上へ）③心理的自由（人間的尊厳、自尊心の回復、劣等感からの脱却）。ケニアの共和制の必要。大統領権限の強化必要。ウガンダの独立について。マケレレ大学職員スト。ストライキに反対。独立への挑戦として、貧困、疾病、文盲の退治。

【経済関連】

貧困層、土地を持たない農民層。衣食住の保証が必要。経済発展、国民の一致した協力体制。外国による支配からの自由。

【労働運動】

ケニア労働総同盟の分裂。労働組合運動のためには、統一、結束が大切。労働者の年金制度。都市労働者＝家族との絆崩壊。障害者の雇用問題。保険制度の強化必要。失業問題。年金制度の保証。

【農業関連】

基盤の確立（農業生産の向上から国家経済の向上へ。農民の技術教育の必要。農業技術指導者の不足。農業教育の必要、農業資本の基礎確立を説く）。

【土地政策】

借地制度の問題点。借地人制度（Ahoi）が土地の分割化・細分化を促進している。100万人入植計画。土地開発計画。土地を持たない者の協同組合を提唱。

【人種問題】

人種間の悪感情を払拭し、人種協調の必要を説く。人種主義・部族主義の克服。

【文化：独立への心構え】

西洋文化に対して、一方的に反発するのではなく、過去の全遺産から人間性を豊かにするものの選択必要。女子割礼、婚資制度は時代遅れで、廃止すべきである。女性の権利の拡充、擁護。密造酒、若者の飲酒。失業と飲酒。収賄。幼少時の体験。ナイロビ＝約束の町。都市生活を体験した兄。カンパラの素晴らしさ。演劇活動の魅力、カンパラの国立劇場。ローマ・カトリックとアングリカンの宗教的対立。

その後の作家活動、思想形成との関連で、特に注目される特徴的な見解を若干のテーマ別に見ておこう。

a. 教育関連

教育については、以下を紹介しておこう。

i) 「教育を受けたアフリカ人はこの挑戦に対抗できるか」(1962.5.17)

「サンデー・ネーション」へ送った最初の記事は、教育問題を取り上げている。その内容は、教育に憧れた自身の思い出と経験が二重写しになっている。自身のアライアンス高校進学は1955年のことで、以下の文章に登場する村の少年より、3年後のことだった。

村から初めて中学へ進学した少年のことを、私はよく覚えている。1952年のことで、結構な大事件だった。少年の名前と評判が、野火のように、村から村へ広がった。後に残った我々に、ある老人がこう語った。「未来は教育を受けた者の手にある」。私は、この言葉を何度も聞いてきた。今でも、この時の老人の、熱のこもった言葉をよく覚えている。KAPE（小学校卒業資格試験）のハードルを超えた少年が皆から褒められ、羨望的になることを知ったのは、この時だった。

教育の力によって、この少年は英雄になった。ごく平凡な「我々の仲間」から、「彼ら」ー教育を受けた「彼ら」ーの社会へ飛び立ったのだ。そうしたアフリカ人のポジションについては、さまざまなことが言われてきたが、そんな息子を持つことは、母親の誇りとなるのだ。だが、その子は、西洋式教育を受け、村の価値観から離れて行く。やがて、その子は、二つの世界の子供になってしまう。こうして、社会に階級の分化が起きる。じっさい、大学卒業生の給料は、月1,000 シリング以上、村の労働者は15~16 シリング程度である。社会に亀裂が走り、二つの種類の国民が誕生している。

教育問題は、「初期ジャーナリズム」に、繰り返し現れるテーマの一つである。ケニアにとって、「ウフル（独立）と土地は優先事項の第1位だ。その次は、教育だ」と述べている。

この意味でも、国家発展の先進部分を担う若い世代、将来の指導者への期待は大きい。その場合に、正直（Honesty）、誠実（Truthfulness）、共感（Sympathy）、勇気（Courage）の四つの美德を説いている。「教育は家庭から」（Education should begin at home）ともいう。そうであるならば、アフリカ人の身の回りの生活に関連するような教育内容への改革が必要となる。植民地期の、宗主国中心、民族分断的な（ミッション）教育の弊害を是正しなければな

らない。教育の全面的な非植民地化が必要であるという。

女子教育の遅れも指摘している。たとえば、マケレレ大学では、1949 年の開設以来、これまでの女子卒業生はわずか 3 人であり、1962 年 10 月現在、ケニア人女子学生は 2 人しか在籍していなかった。

さらに、無知文盲の克服は、民主主義の発展のためにも必要であることを指摘している。独立後の民主主義を支える国民の多くが文盲である以上、成人教育の緊急性は疑いがない。KANU の教育政策は、その意味でも重要で、ラジオ、テレビを利用した大衆教育も必要である。トム・ムボヤ¹⁵⁾ の言葉を借りて「教育は投資である」ことを強調している。

教育は、コロニアル・メンタリティ、劣等感、依存心からの脱却のためにも必要である。教員などの人材不足。教育施設の改善と充実（ウガンダに依存している現状の是正）、優秀な人材の多くが、教職よりも政治・行政職へ向かう現状からも、教員の待遇改善が望まれるという。

b. 言語・文学・演劇関連

言語・文学・芸術・演劇については、以下が注目される。

i) 「新しい意識の伝令たち」(1962.7.1)

これは、1962 年 6 月にマケレレ大学で開催された「英語で書くアフリカ人作家会議」への参加の記録である。『トランジション』誌第 2 巻第 5 号、1962.7~1962.8) に再録時のタイトルは「会議に出たケニア人」と改題されている。この文章は、第 2 部で紹介した。

ii) 「アフリカ人作家は新しい見方を」(1962.12.2)

この時期の文学観で、もう一つ興味深いのは、南アのアパルトヘイト下の抗議文学についての考え方である。

南アにおいて、黒人作家やカラード作家は、政治的な屈辱を自覚しないではおれない。「平安がなく」、たえず「逮捕の恐怖」の中に生きているからだ。いきおい、暴力と不安のなかで、作家は抗議に向かい、自由への希求の文学を生み出すことになる。人種差別の状況は、文学的には、むしろ取り組みやすく、そこでは類型化された人物が登場する。作家には、書く以前から、この差別の状況に怒りを覚え、共感してくれる読者大衆が存在しているのだ。それならば、文学の闘いは半ば終わったも同じである。人間の体験の

すみずみを掘り起こす必要がなくなるからだ。南アの作家は、類型化された登場人物をつくりだすことで、作品が凡庸になることを知っている。せいぜい、それは社会学的ドキュメントとなり、政治学や社会学の学生の興味の対象となるのだ。

南アの作家が「抗議」文学に繋がれるとすれば、政治的自由のある他国の作家たちは、「ネグリチュード」や「アフリカン・パーソナリティ」を主張する危険がある。植民地期には、「ネグリチュード」、「アフリカン・パーソナリティ」といった用語にも意味があったかもしれない。しかし、独立後のアフリカでは、「抗議」文学も「ネグリチュード」も役には立たない。それらは一つのポーズ、態度でしかない。文学にとっては、永久不変の人間的経験の巨大な未開拓領域が残されているのだ。アフリカ人作家は、人間の状況の細部に、共感と理解を持って触手を伸ばさなくてはならない。とりわけて、民衆の生命の脈動を感じなくてはならない。「ウフル」（独立）を生み出した国家のエネルギーに対して、文化の発散口（アウトレット）を与えられるべきである。

iii) 「求む—芸術にふさわしい場を」(1962.12.23)

「政治、政治。新聞を広げる度に、政治談議と論争がまともに眼に入る」との文章が冒頭にある。これは、政治より、むしろ文化に重点があることを示す言い方である。作家を含めて、芸術家の生き方を問題にしている。

文化の覚醒の必要がある。特に芸術分野の覚醒が強く望まれる。芸術こそが、确实、安全な文明化の力となるからである。芸術家は、自分が住む世界の日々の雑事から身を引き離すことが出来る。と同時に、芸術家といえども、周囲の諸問題から身を離しておくことは出来ない。民衆の苦悩は彼のものである。国民の喜びは、彼の喜びでもある。芸術家は隠者ではない。日々の生活に関心がある。芸術家は、芸術を通して社会に奉仕し、必要な場合には、歓迎されない意見を出せるほどに孤高を守らなければならない。芸術家は、自分の個性を保持しなければならない。

iv) 「スワヒリ語に正当な位置を」(1962.9.23)

ここでは、アフリカ人作家が英語やフランス語などの外国語を使って書いている現状についての弁明が見られる。

その本当の理由を見つけるのは難しいが、アフリカ語が劣っているからではない。アフリカでは読書人口が少ないために、より広い読者を得るために外国語に頼らざるを得ないのが現状だ。このことから、アフリカ人作家は、外国の読者を念頭に置いていると言えるだろう。もう一つの理由は、アフリカの言語の研究が遅れていることがあげられる。これは植民地教育のブラック・スポットだ。東アフリカで、スワヒリ語が無視されてきたのは不思議なことだ。英語は、日々、ユニバーサルな言語になりつつある。した

がって、学校のカリキュラムで、ヨーロッパの言語が二次的位置になることはないだろう。しかし、ケニアでは、英語は、役に立つとはいえ、不十分である。国民の大多数が英語を理解できないからである。英語は、国民的統一のためには不向きである。私たちの国家的抱負と精神的成長を表現できるような、我々自身の言語を持たない限り、ここしばらく、我々は、多少とも値打ちある国民になれるとは思わない。

演劇に関する記事から、以下の 4 編を紹介しておこう。演劇への関心の原点がここにあり、後のマケレレ大学やナイロビ大学の学生演劇部による移動劇団の活動に繋がるものである。70 年代のコミュニティ演劇の取り組みは、この関心をさらにグラスルーツ化したものであろう。

v) 「アフリカ性は、何にでも必要か」(1962.9.2)

作家の国民文化への貢献の重要な一つに「演劇」がある。たとえば、ナイロビに住むアフリカ人がアマチュアの劇団を結成し、誰かが台本を書いて、皆で演じるのだ。これは、無いものねだりだろうか。そうは思わない。ケニアには人材が多く眠っている。ケニアに根を張った文化を構築することが出来る。

vi) 「新たなムードが蔓延」(1963.11.24)

マケレレ大学では、数年前は政治中心、各国の独立祝賀行事が多かったが、最近は文化行事が中心になってきた。以前の卒業生は、政府、会社へ就職する者がほとんどだったが、今はアカデミックな分野へも進出している。マケレレ大学学生演劇部（ピーター・キニャンジュイが部長）は、1961 年「マクベス」、1962 年「黒人の隠者」、1963 年「ライオンと宝石」を上演した¹⁶⁾。マケレレ大学演劇部に移動劇団をつくることを提唱したい。そうすれば、ナイロビやダルエスサラームでの上演活動も可能となるだろう。[1 年後、実際にマケレレ大学移動劇団が結成され、ウガンダの地方都市とケニア西部で、4 つの言語で上演した。数年後にはナイロビ大学にも移動劇団が出来た]。

vii) 「なぜ、アフリカでシェークスピアか」(1964.4.22)

シェークスピアは、今日も生きている。彼が提起する政治的、道義的問題は、東アフリカとも大いに関係がある。当時の社会は、多くの点で今の我々の社会と似ている。シェークスピアは、社会を精査し、緊張と抗争を詩的・劇的な用語で表現することを恐れなかった。400 年前、シェークスピアが扱ったこれらの問題は、現代のアフリカの作家が自分に投げかける問題でもあるだろう。作家が、秩序と安定を求める我々の国づくりに、道徳的方向を与えようとするなら、シェークスピアを取り入れる必要があるだろう。

viii) 「この演劇集団を絶やすな」(1964.7.19)

ナイロビ郊外で、アフリカ劇団 (African Theatre Company) が新たに結成された。児童生徒向けに、三つの劇が上演された。うち二つは、エゼキエル・ムパシェーレによるアフリカ民話の改作劇であった。もう一つは、レベッカ・ンジャウ¹⁷⁾の作であった。ムパシェーレが指導しているが、支援の必要を痛感する。ナイロビでは、ただの1回の公演の後に、解散に追い込まれる劇団が多いからだ。

c. その他

この他、以下も注目される。

ix) 『自由軍』の広がり止めよ (1962.10.28)

「現代のマウマウ」への批判と言えるだろう。リフトバレーやカレンジン地域での土地不足、その地方へ入植したギクユ農民の問題を扱っている。50年代の「マウマウ」戦争の時代とは異なる社会的背景での、マウマウへの先祖がえりを批判している。

「もし、非常事態となれば、政府は善悪の区別なしに、全員を討つことだろう」。これは、最近のトム・ムボヤの発言である。この言葉で、私は1954年に引き戻された。学校から戻り、母や兄弟に会えると思ったが、彼らは家におらず、私は市場付近にまで探しに出た。1時間もたたないうちに、私は検問を受ける群衆の一人になっていた。警官が何か尋ねたが、どう答えたのか覚えていない。すぐ前方で、一人の男が殴られており、私は恐怖で動転した。警官は私の返答を嫌ったのか、私を打とうと片手を上げるのが見えた。目を閉じて殴られるのを待ったが、殴られはしなかった。少し先で、一人の女が金切り声で叫び、背中の赤ん坊が泣き始めた。しかし、警官は手を引っ込めなかった。・・

ケニアの全員が、土地自由軍の触手が全土に及ばないように協力しなければならない。秘密結社に公然と反対したジョモ・ケニヤッタのような人々の努力を讃えたい。・・土地自由軍が隠していた大量の銃が見つかったと言うのは本当だ。また、多くの人々が土地自由軍のメンバーで、不法な誓約を立てて有罪になったことも本当だ。失業が広がり、全土にかなりの政治的緊張があるのも疑いない。だが、今のこの状況を1952年当時と比べるのは間違っている。あの頃は、民衆がうっぷんを晴らす手立てがなかった。当時の政党 KAU も耳を貸そうとしなかったし、政府は政党を信じていなかった。・・今は違う。土地自由軍は、国民の大多数が解放勢力だなどとは思っていない。国民の不満の声を届ける手立ては、多く存在している。しかも、今の政府は、多くの点で、アフリカ人の政府だ。植民地支配は最終局面に来ている。・・しかるに、秘密結社と不法な誓約が蘇っているのだ。・・仕事もなく、耕す土地もなく、飢えに苦しんでいる人々がいることを私は知っている。皆が協力しなければ、土地自由軍は広がるだろう。多くのキクユ人は、まだこの組織に入っていない

い。しかし、ケニア・アフリカ人民民主同盟（KADU）のリーダーたちが、法を逆手にとって、キクユ人を自分の土地から追い出そうとしている。キクユ人を、リフトバレーやカレンジン地域から追い出すだけで、問題の解決にはならない。かえって、キクユ人を団結させ、土地自由軍の言い分を信じさせて、事態を悪化させるだけであろう」。

「初期ジャーナリズム」での引用や出典は、この時期の読書傾向を示すものであろう。当然、文学作品が多いが、これはマケレレ大学英文科の授業内容と関係が深いであろう。主な名前としては、D. H. ロレンス、ジョゼフ・コンラッド、マッシュー・アーノルド、チャールズ・ディケンズ、シェリー、シェークスピアであり、レオン・ダマ、エゼキエル・ムパシェーレ、ジュリアス・ニエレレ、ジョモ・ケニヤッタ、レオポール・サンゴール、J. P. クラーク¹⁸⁾、ジェームズ・ボールドウィン¹⁹⁾ などアフリカ・アメリカの黒人作家・政治家も含まれる。しかし、興味深いことだが、ジョージ・ラミング、マーカス・ガーバー²⁰⁾、その他カリブ海作家・思想家はもちろん、後年の思想と文学に決定的な刻印を及ぼすことになるフランツ・ファノン²¹⁾ を知ったという証拠はない。また、マケレレ時代の著述に、マルクスやエンゲルスは一度も現れない。（このうち、ラミングについては、1961 年頃に知っていたはずである）。

③ 「初期ジャーナリズム」タイトル一覧

1961

- 1) 「『アフリカ的人格』は妄想だー虎は『ティグリチュード』を持つか」 ‘The African Personality’ is a Delusion : Do Tigers have ‘Tigritude’ ? *Sunday Post*, 1961.5.7.
- 2) 「新しい声：アフリカ人作家の登場」 The New Voices : Some Emerging African Writers, *Sunday Post*, 1961.6.4.
- 3) 「アフリカの文化：ケニヤッタの誤り」 African Culture : The Mistake That Kenyatta Made, *Sunday Post*, 1961.8.6.
- 4) 「『ケニア山のふもと』のノスタルジア」 The Nostalgia of *Facing Mount Kenya*, *Sunday Post*, 1961.8.13.
- 5) 「新しい村の問題点」 Some Problems of the New Villages, *Sunday Post*, 1961.8.20.

1962

- 6) 「教育を受けたアフリカ人は、この挑戦に立ち向かえるか」 Can the Educated African Meet This Challenge?, *Sunday Nation*, 1962.5.27. [村から初めて中学へ進学した少年。賞賛の的。長老の褒め言葉。母親の誇り。少年が受ける

西洋式教育は村の生活とは縁がない。二つの世界の子供になる。社会に亀裂。階層の分化へ。マケレレ卒業生の給料と村の労働者の給料のギャップ。二つの国民が生まれる危機。タンガニーカのニエレレの政治哲学に注目]

- 7) 「未来とアフリカ人農民」 *The Future and the African Farmer, Sunday Nation*, 1962.6.3. [農業の重要性。農民の経済基盤の確立が大切。アホイ（借地人）制度の問題点。土地不足。ローン制度。農業技術教育の必要。技術指導者の不足。長期的農業政策の必要。生産力の向上へ]
- 8) 「暗闇から出て、太陽を見よう」 *Let's Get Out of the Dark and Take a Look at the Sun, Sunday Nation*, 1962.6.17. [人種間の悪感情。人種協調の夢。独立への挑戦、課題。貧困・病気・識字率]
- 9) 「成人教育の取り組みは必至」 *Adult Education Must Be Tackled, Sunday Nation*, 1962.6.24. [若い世代への期待。無知の克服。民主主義の発展条件。教育の恩恵を受けた者の少なさ。成人教育の緊急性。ラジオ、テレビの利用による大衆教育の必要。人間への投資。教育の重要性]
- 10) 「新しい意識の伝令たち」 *Here are the Heralds of a New Awareness, Sunday Nation*, 1962.7.1. [英語で書くアフリカ人作家会議のこと]
- 11) 「もっと学校の統合を」 *Let's See More School Integration, Sunday Nation*, 1962.7.8.
- 12) 「対立意見を聞く自由を」 *There Must Be Freedom to Hear Opposite Points of View, Sunday Nation*, 1962.7.15. [カレンジンーマサイ同盟の結党について。政治生活の変化。政党誕生を歓迎。この政党の反キクユ的性格。部族主義の克服。政党の部族的性格の打破が必要。真の民主主義]
- 13) 「我々の裁定を」 *Why Not Let Us Be the Judges ?, Sunday Nation*, 1962.7.29.
- 14) 「過去から何を受け継ぐか」 *Let Us Be Careful About What We Take from the Past, Sunday Nation*, 1962.8.5. [独立間近。過去の遺産から良いものだけを受け継ごう。すべての black doll を受け継ぐべきでない。女子割礼は時代遅れ。婚資も廃止すべき。20 世紀国家としては時代遅れ]
- 15) 「ここに私の望むケニアがある」 *Here's the Kenya I Want, Sunday Nation*, 1962.8.12. [貧困層の問題。土地なしの農民。独立には経済発展が必要。国民全員の協力。外国支配からの自由も必要。一党制が必要。部族主義・人種主義の克服]
- 16) 「中立主義とは何か」 *What Do We Really Mean by Neutralism ?, Sunday Nation*, 1962.8.19.
- 17) 「連邦はどうなったか」 *What is Happening about Federation ?, Sunday Nation*, 1962.8.26.

- 18) 「アフリカ性は、何にも必要か」 Must We Drag Africanness into Everything ?, *Sunday Nation*, 1962.9.2.
- 19) 「隣人はどうか」 What About Our Neighbours ?, *Sunday Nation*, 1962.9.9.
- 20) 「敵対者にどれほどのロープを与えるか」 How Much Rope Should Opponents Be Given ?, *Sunday Nation*, 1962.9.16. [政治公約のスローガン。部族主義克服。政府は対立する声に敏感に。新聞報道に自由の制限。民主主義の尊重を]
- 21) 「スワヒリ語に正当な位置を」 Swahili Must Have Its Rightful Place, *Sunday Nation*, 1962.9.23.
- 22) 「なぜこの二人の指導者は歴史から学ばないのか」 Why Don't These Two Leaders Learn from History ?, *Sunday Nation*, 1962.9.30. [マウマウに触れる。神経症的に非常事態を恐れた。ガーナ、南ローデシアの非常事態。独立は無血革命でなければならない。ンクルマを批判]
- 23) 「女性たちを先頭に」 Our Women Must Be Allowed to Get Ahead Too, *Sunday Nation*, 1962.10.7. [女子教育の学校開設歓迎。講義科目にアフリカ史ほかを。女子教育の遅れ。1949年設立のマケレレ大学の女子卒業生は3人だけ。現在もケニア人女子学生は2人。女子の社会進出の大切さ]
- 24) 「独立には信頼が必要」 Independence Needs a Degree of Trust, *Sunday Nation*, 1962.10.14. [ウガンダ独立。マケレレ大学職員のスト。ストライキ反対。ローマ・カトリックとアングリカンの対立]
- 25) 「自由軍の広がりには歯止めを」 We Must Halt Spread of 'Freedom Army', *Sunday Nation*, 1962.10.28. [非常事態の思い出。学校から帰宅すると、家がない、母がいない記憶。悪夢。「土地自由軍に反対」。秘密結社に反対。土地自由軍は解放勢力ではない。「植民地主義は最終段階」。KADUにも反対]
- 26) 「この気概を育てよう」 Here's a Spirit Kenya Must Encourage, *Sunday Nation*, 1962.11.4.
- 27) 「アフリカ人作家は新しい見方を」 African Writers Need a New Outlook, *Sunday Nation*, 1962.12.2.
- 28) 「オボテに賞賛、ケニアは自力で」 All Praise to Obote but Kenya Must Help Itself, *Sunday Nation*, 1962.12.9. [ケニアの独立を早めたい。マーティン・シククの意見に反対]
- 29) 「新聞の役割」 Role of the Press, *Sunday Nation*, 1962.12.23 [新聞のあり方。ンクルマ批判あり]
- 30) 「求む—芸術にふさわしい場を」 Wanted—A Proper Place for Art, *Sunday Nation*, 1962.12.23. [ケニア独立の遅れ。文化的覚醒の必要。芸術家は個性が大切。社会から離れて見るのが大切]

- 31) 「神の子たちに大祝祭」 Big Day for God's Children, *Sunday Nation*, 1962.12.30. [一年の計は元旦にあり。独立後への期待。ランカスターハウス会議への期待]

1963

- 32) 「伝道団の失敗」 I Say Kenya's Missionaries Failed Badly, *Sunday Nation*, 1963.1.6.
- 33) 「協力の気概だけでは不十分」 Co-operative Spirit is Not Enough, *Sunday Nation*, 1963.2.3.
- 34) 「目的を忘れるな」 Don't Forget Our Destination, *Sunday Nation*, 1963.2.10.[教育問題。制度の改革。Education begins at home. アフリカ史の教育を。宣教師、キリスト教肯定。教育の非植民地化。科学教育の強化]
- 35) 「兄弟でも喉を切り合う」 Even Brothers Can Cut Throats, *Sunday Nation*, 1963.2.17. [バンドン会議。アフリカとアジアの出会い。インド独立。非暴力肯定。モシ会議。アジア・アフリカ連帯機構。帝国主義の攻撃ばかりでは無益。ケニヤッタに賛成。アジア・アフリカ連帯のスローガンより実践的つながりが大切]。
- 36) 「衣食足りて礼節」 Respect Will Come When We Are Self-Sufficient, *Sunday Nation*, 1963.3.17. [ケニヤッタ演説。『ケニア山のふもと』評価。アフリカ人の尊厳の復権。社会の安定。共産主義、社会主義を批判、揶揄]。
- 37) 「マケレレ、そこはオアシスだ」 The Oasis That is Makerere, *Sunday Nation*, 1963.3.24. [自分の体験。1959 年マケレレへ向けて村を発つ。教育への欲求。白人との共学。教育の普及の必要]。
- 38) 「おそらく家庭に、スウィートホームに」 Perhaps It's a Case of Home, Sweet Home, *Sunday Nation*, 1963.4.7. [幼少時の体験。ナイロビ、約束の町。都会生活を体験した兄。カンパラの国立劇場。ナイロビの魅力]。
- 39) 「ムボヤは正しい—教育は投資だ」 Mboya is Right—Education is an Investment, *Sunday Nation*, 1963.4.21. [KANU の教育政策の重要性。教員不足。コロニアル・メンタリティからの離脱。教員養成。教育施設の不足。ウガンダに依存。義務教育よりも、施設の充実が先決。人材の多くが教師よりも政治、官僚に流れる現実。教師の薄給]。
- 40) 「むかし、酒は老人のもの、今は子供が酒を」 In the Old Days it was for the Old Men to Drink—Now Even Children Tread on the Toes of Their Fathers, *Sunday Nation*, 1963.5.12. [密造酒。飲酒。失業と飲酒]。
- 41) 「共感できる、でも彼らの役に立っておらず悩む」 I Nodded in Sympathy, But Inwardly I was Groaning, for I Was No Use to Them, *Sunday Nation*,

- 1963.5.26. [失業問題。ワイロ。警官へのワイロ。ワイロ社会]。
- 42) 「国に変化が来た」 A Change Has Come Over the Land—A Sense of Destiny Moves in Most People, *Sunday Nation*, 1963.6.2. [選挙終わる。キャンペーン。労働意欲。独立以後の民衆の期待は]。
- 43) 「大学にもっと柔軟性を」 Now Let's See More Flexibility from University Colleges, *Sunday Nation*, 1963.7.7.
- 44) 「連邦化の問い」 Isn't Time the Public Were Asked about Federation ?, *Sunday Nation*, 1963.9.1.
- 45) 「こころが折れる手紙」 The Letter That Made My Heart Sink Inside Me, *Sunday Nation*, 1963.9.15. [教育問題。ウガンダの私立学校の劣悪さ]。
- 46) 「アフリカ合衆国への障害」 Lack of Communication May be Barrier to an African United States, *Sunday Nation*, 1963.9.22.
- 47) 「部族的世界観を壊せ」 It's Time We Broke Up This Tribal Outlook, *Sunday Nation*, 1963.10.20.
- 48) 「独立の三つのレベル」 The Three Levels of Independence, *Sunday Nation*, 1963.10.27. [ナイジェリアの共和制。ウガンダ独立一周年。独立への三段階。①政治的自由 ②経済的自由 ③心理的自由。生活水準の向上、劣等感からの解放など]。
- 49) 「苦難の原因は自分に」 It's Time We Recognized That the Root-cause of Our Troubles May Lie in Us, *Sunday Nation*, 1963.11.10.
- 50) 「新しいムードが蔓延」 A New Mood Prevails, *Sunday Nation*, 1963.11.24. [マケレレの雰囲気。数年前は政治中心、独立祝祭。今は、文化行事中心。今はアカデミックな職場を求める者も多い。マケレレ学生演劇部の活動。ピーター・キニャンジュイが部長。1961年「マクベス」、1962年「黒人の隠者」、1963年「ライオンと宝石」]。
- 51) 「芸術の実験」 Art Experiment Which Deserves to Succeed, *Sunday Nation*, 1963.12.29.

1964

- 52) 「黒人の神話」 The Negro is a Myth, *Daily Nation*, 1964.4.9.
- 53) 「なぜ、アフリカでシェークスピアか」 Why Shakespeare in Africa ?, *Daily Nation*, 1964.4.22.
- 54) 「アフリカ社会主義」 African Socialism : Two Views, *Daily Nation*, 1964.5.9.
- 55) 「教育を受けたアフリカ人への期待」 More is Needed from Educated Africans, *Sunday Nation*, 1964.6.7.

- 56) 「ヒューマニズムとアフリカ社会主義」 Humanism and African Socialism, *Daily Nation*, 1964.6.12.
- 57) 「年金—満足できない」 Pensions—We Still Can't Rest Satisfied, *Sunday Nation*, 1964.6.14. [労働者の年金制度。都市労働者。家族との絆の崩壊。障害者の雇用問題。アホイ（借地人）制。土地問題。保険制度の充実必要]。
- 58) 「教員も現金が欲しい」 Teachers, Too, Want Cash !, *Sunday Nation*, 1964.6.21.
- 59) 「ケニア軍に大量の志願」 Thousands Flock to Volunteer for the Kenya Army, *Daily Nation*, 1964.6.23.
- 60) 「この部族感情をどう殺すか」 How Do You Kill These Tribal Feelings ?, *Sunday Nation*, 1964.7.5. [部族主義の問題]。
- 61) 「アフリカの詩人政治家」 He's Africa's Poet-Statesman, *Daily Nation*, 1964.7.10. [レオポール・セダール・サンゴールについて]
- 62) 「労働者はどうなるか」 What About the Workers ?, *Sunday Nation*, 1964.7.12. [ケニア労働連合の分裂。「団結は力なり」。統一の必要を説く]。
- 63) 「コメンタリー」 Commentary, *Daily Nation*, 1964.7.17. [アフリカ諸国間の連携強化について]
- 64) 「この劇団を絶やすな」 I Hope THIS Theatre Group Won't Die, Too, *Sunday Nation*, 1964.7.19. [アフリカ劇団の結成。ムパシェーレ指導の脚色劇。ンジャウの劇。若い女優。ウガンダの演劇。援助の必要]。
- 65) 「ケニア人子弟にバレエ」 Kenya Children Take to Ballet, *Daily Nation*, 1964.7.23.
- 66) 「ニエレレ大統領が語ったように」 As President Nyerere Was Saying in 1960, *Sunday Nation*, 1964.8.2. [東アフリカ連邦の構想。東アフリカのバルカン化を懸念。東アフリカの同時独立は出来なかった]。
- 67) 「コメンタリー」 Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.4. [ナイロビ大学で開催されたパン・アフリカ学生会議について]
- 68) 「コメンタリー」 Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.6. [欧米市場への経済的依存について]
- 69) 「コメンタリー」 Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.7. [アメリカ駆逐艦攻撃に対する報復としてのアメリカによる北ベトナム魚雷基地の爆撃について]
- 70) 「コメンタリー」 Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.8. [特にイアン・ヘンダーソンの国外追放についての政府の説明責任について]
- 71) 「年末までに共和制へ」 A Republic Before the End of the Year, *Sunday Nation*, 1964.8.9. [共和制の必要。大統領権限の強化を。内閣改造]。
- 72) 「コメンタリー」 Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.13. [政策決定過程の

公開の必要について]

73) 「コメンタリー」 Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.14. [連邦化について]

74) 「コメンタリー」 Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.15. [新憲法下での地方分権について]

75) 「コープの強化を」 Now the Emphasis Must be on Co-ops, *Sunday Nation*, 1964.8.16. [入植計画。土地政策。100 万人の入植計画]。

76) 「コメンタリー」 Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.18. [独立ケニアでの女性の役割について]

77) 「コメンタリー」 Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.19. [学生の役割について]

78) 「怠業者を忘れ、必死の人を思い出せ」 Forget the Quitters, Remember the Desperate, *Sunday Nation*, 1964.8.30. [失業問題。失業者にも内容に違いあり]。

II. リーズ留学時代

1964 年 4 月、マケレレ大学（当時の正式名称は、東アフリカ大学）²²⁾ 英文科を卒業した。卒業論文は、ポーランド生まれで、のちにイギリスへ渡って英語で書き始め、代表作『闇の奥』（*Heart of Darkness*, 1899）で名高いジョゼフ・コンラッド（Joseph Conrad, 1857~1924）に関するもので、学部から同年度の最優秀論文賞を受けた。卒業後、同年 9 月まで、ナイロビで出ている「デイリー・ネーション」紙のコラムニストとして、学生時代に続いて、定期的に執筆した。同紙の編集長はヒラリー・グエノ（Hillary Ng'weno）²³⁾ で、最初のアフリカ人編集長として名の知れた人物だった。彼は、のちに週刊誌『ウィークリー・レビュー』など、いくつかの有力な雑誌や新聞を創刊し、それらの編集長にもなっている。

この頃に、英国文化振興会（ブリティッシュ・カウンシル）の奨学生資格の獲得に成功し、同年 9 月に、イギリスのリーズ大学へ 1 年間の予定で留学した。この時、数えきれないほどの村人がナイロビの国際空港へ見送りに来た。誰もが、口をそろえて「きっと、ケニアへ帰って来るんだぞ」²⁴⁾ と最後の声をふり絞っていたという。

リーズ大学（University of Leeds）は、ウェスト・ヨークシャー州リーズ市にある国立総合大学で、1904 年創立。現在の学生数は約 4 万、英国有数の規模を誇る。前身は、リーズ医学校（Leeds School of Medicine, 1831 年創立）とヨークシャー科学大学（Yorkshire College of Science, 1874 年創立）である。

これら二つは、地域の科学教育（特に医学と織物業）の要請に基づいて設立された。1884年に合併し、1887年にはビクトリア大学連合の一部となったが、マンチェスター大学、リバプール大学が都市大学として独立すると、1904年に、エドワード7世によって設立認可を与えられた。アフリカ文学に関心のある人々の間では、1986年度ノーベル文学賞受賞のナイジェリアの劇作家ウォーレ・ショインカ（1934～）が学んだことでも知られる²⁵⁾。

これが、初めての海外経験であった。当初は、英文学専修コース（Postgraduate Diploma）に籍を置いたが、第1学期の終了した頃、教務を担当するアーサー・レイブンスクロフト教授が、学力優秀により、すぐにも2年間の修士コース（M.A.）へ移るよう推薦したという。小説『泣くな、わが子よ』が、4ヶ月前に出たばかりだった。

渡英直後の1964年10月、インタビューに応じて、次のように述べている。

「リーズ大学には2年間いるつもりだ。ブリティッシュ・カウンシルから1年間の奨学金を貰ったが、もう1年おれるように、奨学金を欲しいと思っている。この期間には、創作もしたいし、学問的な研究もしたい。研究が私の創作に役立ってくれると思う」²⁶⁾。

リーズ大学に在籍する間に、小説を一つは書き上げたいと思っていたという。これが『一粒の麦』（*A Grain of Wheat*）で、最初、仮題として、『神と抗う』（*Wrestling with God*）を考えていたらしい²⁷⁾。この小説第三作は、1966年11月に脱稿し、翌67年4月にロンドンで刊行された。ケニア帰国は、同年7月だった。

さて、修士コースでは、「西インド諸島の小説に見られる『疎外』に関する研究—特にジョージ・ラミングの小説との関連で」（*A Study of the Theme of Alienation in the Fictions of the West Indies with Particular Reference to the Novels of George Lamming*）を研究テーマに掲げた。指導は、アメリカ文学が専門のダグラス・グラント教授だった。

西インド文学（以後、「カリブ文学」という用語も併用する）への関心は、マケレレ大学時代の1961年頃から抱いていた。そこは、多民族・多人種共生の混雑社会であり、同時に、新しい文学が育ち始めていた。その頃に、ジョージ・ラミング（George Lamming, 1927～）の『わが皮膚の砦の中で』（*In the Castle*

of My Skin, 1953) を教室外で読んだが、西インドとアフリカでは、興味深い平行関係と対照があることを見抜いていた。彼はラミングに圧倒され、ほとんど批判の余地がないほど、貪り読んだという。西インドの作家では、もう一人、V. S. ナイポール²⁸⁾ にも関心をそそられた。

西インド文学への関心は視野を拡大させ、後で述べるように、大きな収穫をもたらすことになるが、結果を先に述べれば、これによって 2 年後に、修士号を取得することにはならなかった。提出した予備論文に対して、さらに改訂推敲を指導教授から勧められたが、ついに最終稿を提出できなかった、あるいは、しなかったのである。

① 知的雰囲気

初めての海外生活であった。しかし、すべてがバラ色というわけではなかった。リーズは、とても汚れた産業都市で、いたる所が煤煙だらけだった。その煤煙を避けるために、ヨークシャーの高台（ブロンテの小説『嵐が丘』の舞台）を訪ね、あるいは、リーズとロンドンの間を往復し続けた。また時節柄、学生運動にも参加したらしいが、市中を平和的にデモしている学生を小突き回す英国の警察官が暴力的であると知り、伝統的な英国紳士のイメージを覆されたという²⁹⁾。

この時期に、リーズの同僚学生から受けたインタビューで、次のように述べている。「イギリスの学生をどう思うか」との質問に対する返答である。

「概して、大変失望している。素朴すぎて、アフリカやロシアや中国について、新聞に書かれている通りに信じている」³⁰⁾。そう述べながら、「ごく少数の学生は活発で、視野も広い。その点で、リーズに来ることが出来て、嬉しく思っている。ここには、オックスフォードやケンブリッジにはない、たくましく、ラディカルな伝統があつて、植民地から来たほとんどすべての学生を支援してくれている」³¹⁾ と付け足している。

リーズ大学にも、保守的、因習的伝統と並行して、ラディカルな知的伝統があつたということであろう。グギは、「教室の因習的、保守的な文学伝統とは敵対的矛盾関係にあつて育ちつつある非公式、ラディカルな伝統に身を置いた。これが、私にとってのリーズ大学の重要性であつたと思う」と述べ、「リーズ大学は、より広い文学の世界に私を立ち向かわせ、アフリカ、アジア、ラテンアメリカのラディカルな文学や、社会主義世界の文学を認識させ、あるいはその認識を可能にさせてくれた」³²⁾ という。

リーズには、人を興奮させるような知的雰囲気があったようだ。この時期は、ベトナムが世界中できわめて重要な意味を持ち始める頃で、アメリカ合衆国の帝国主義に対抗するベトナム人民の闘い、さらにはパレスチナ人民の闘いがあり、これらの闘いが生み出した抗争は、リーズ大学の学生に鮮烈な影響を与えた。これは、ヨーロッパ全土で学生運動が始まる時期で、リーズ大学の学生も、その影響から逃れることは出来なかった。60年代後半の世界は、ヨーロッパの労働者階級はもちろん、進歩的知識人と学生運動にすこぶる大きな影響を与え、未曾有の規模の大衆運動へと展開した。ヨーロッパだけでなく、日本を含めて、世界中でそうした変化、運動が起きていたのである。

学位論文や小説執筆とは別に、同大学時代の経験として特筆すべきは、社会主義派の知識人として著名だったアーノルド・ケトル教授³³⁾、ならびに同教授のまわりに集まる進歩的な学生仲間から決定的な影響を受けたことだった。フランツ・ファノン、マルクス、エンゲルスの著作にも初めて親しんだ。英国産業社会の闘争が、資本主義に固有の労使間の利害関係にあることを知ったのもこの頃だった。また同じ頃に、ロンドンで開花した「カリブ芸術家運動」(Caribbean Artists Movement, CAM, 1966~1972)に結集した多数のカリブ出身の作家たちとの深い接触は、従来の世界観を拡大させ、それまで、漠然と抱いてきた社会観に、文学的・イデオロギー的な枠組みを整えさせ始めた。これについては後述する。

② 60年代の世界

67年6月には国際ペンに招かれて、アメリカを訪ねた。以下は、その直後の発言である。当時としては、ごく普通の大学生が抱く素朴な見解であろうが、黒人問題が「こころの問題」「皮膚の色の問題」でないと喝破している点に面目があるだろう。

「(アメリカの)物質的進歩に感銘を受けた。しかし、世界でいちばん金持ちの町の一つ、ニューヨークの通りに乞食が這い、寝る場所のない人々がいた。そんなことは信じられなかった。ハーレムなどへ行って、人々がどんなにすさんでいるかを知れば、その進歩にも反吐を覚えた。思っていた以上に酷いもので、シカゴでは、世界中で最も酷いスラムをいくつか見た。これらのスラムが、最も富裕な地域と隣り合わせにあった。連れて行ってくれた白人の友人が言うには、午後6時以降はそのあたりへは寄り付かないとのことだ。殺されるかもしれないという。この地域で、暴動が頻発するのも無理はない」³⁴⁾。

さらに、こう続けている。

「アメリカ黒人は 300 年以上に渡って搾取されているのに、人種差別は心の問題だと言う人がいる。最も大切なのは、人種差別の経済面であることは確かだ。アメリカの黒人社会は、搾取された労働者階級の一部である。肌の色は、この無慈悲な搾取を継続させるために、国家の経済的・政治的機構が使う都合のよい弁解になっている」³⁵⁾。

60 年代の世界は、アメリカの黒人運動とベトナム反戦運動が重要なトピックスだった。この 10 年を振り返ってみると、61 年には、アメリカが対キューバ国交断絶を宣言、62 年には、ベトナム内戦への直接介入を認め、63 年にはキング牧師に指導された人種差別反対ワシントン大行進（フリーダン・マーチ）およびケネディ大統領暗殺があり、64 年には、ジョンソン大統領による「偉大な社会」建設の政策構想の表明があり、ハーレムでの大規模な黒人暴動があった。65 年には、ブラック・ムスリム運動の指導者マルコム X³⁶⁾ の暗殺、66 年には、エクアドルで、民衆による反軍事政権運動が強まり、政権が崩壊、ガイアナの独立があったが、アメリカでは、カーマイケル³⁷⁾ が「ブラック・パワー」を提唱していた。同時に、北部大都市で黒人暴動が相次いだ。67 年には、チェ・ゲバラ³⁸⁾ がボリビアで捕われ、処刑された。68 年には、キング牧師³⁹⁾ の暗殺があった。69 年には、ニクソン大統領がベトナムからの米軍撤退計画を発表していた。

こうした見聞と体験は、これまでの政治的・文学的傾向に、マケレレ大学時代と比べて 180 度とも言えるような、全く新しい転回点を与えた。

「60 年代の影響力と反帝国主義運動の全体（その中心にベトナムがある）が私に与えた影響の一つとして『ベトナムについて態度表明する作家たち』（1967）で（誤った歴史認識）を正した」⁴⁰⁾ という。

ここには、マケレレ時代に地元新聞に寄稿した数多くのジャーナリズムの文章⁴¹⁾に、多くの点で、間違った思考方法を採用していたとの反省が込められている。どのような決意を、新たな世界観を表明できたのであろうか。モンゴ・ベティ（Mongo Beti、カメルーン、1932~2001）、ジョー・デ・グラフト（Joe de Graft、ガーナ、1924~1978）、ウォーレ・ショインカラとともにアフリカ人作家を代表して、次のような一文を寄稿した。

「私は、ベトナムへのアメリカの介入、彼らがファシストのカイライ政権を存続させるためにガス爆弾を使用すること、ひたすら自由になることを願望し、決意している一民族を、まさにそのことを理由に罪状をつきつけ、無慈悲にも殺りくすることに対して全面的に反対の態度を表明するものである。帝国主義者の介入が、最終的にその正体―「民主主義」「自由世界」「偉大な社会」という仮面をかぶった暴政―を暴露されるまでに、いかほど、いかに長きにわたって、父親を失った子供たちが泣き叫び、夫を失った女たちが号泣したことか。だからこそ、ジョンソンをベトナムと東南アジアの全土から追い出さなければならぬ。なぜ彼は、シカゴとロサンゼルス、あるいは南部諸州の町々に民主主義と自由をあたえるためにその軍隊を使用しないのか。アメリカ黒人に、リンチ、無法な逮捕、飢餓の危険からの放免という最小限の権利をあたえるために。民族解放戦線万歳。君たちが敵にあたえることごとくの打撃は、アフリカとその他全世界の抑圧された人民を守る打撃である」⁴²⁾。

60年代の世界は、アフリカ、アジア、ラテンアメリカの三大陸で、長年の植民地支配の枷を解き放って、政治的独立へ向かう動きと並んで、戦後の東西冷戦下で、特にベトナム戦争と公民権を求めるアメリカ黒人運動に象徴されるような、抑圧された人々が歴史の表舞台に登場する熱い政治の季節だった。「長い暑い夏」(long hot summer)は「黒人暴動」の代名詞となっていたし、「ベトコン」「北爆」などは時代のキーワードだった。

③ 裏切られた独立

リーズ留学は、多数のアフリカ諸国の独立、その他の世界の重要事件と重なった。植民地世界・被抑圧世界民衆の政治的主権回復の闘いが世界中で強まりつつある時期だった。言い換えれば、アフリカはもちろん、アジアやラテンアメリカで、人種的な抑圧状況を跳ね返し、国家の政治的独立こそが無上の栄光とされた時代だった。

1960年代のアフリカは、一挙に17ヶ国が独立した「アフリカの年」から始まり、大量200万の餓死者を出したビアフラ戦争で終局を迎えた(1970)。言い換えれば、ルムンバの虐殺に結果した「コンゴ動乱」(1960)に始まり、モザンビーク解放戦線のモンドラーネ議長の暗殺に終わった(1969)。独立ラッシュの後のアフリカは、各国でクーデターの嵐が吹きまくった。ほとんどが、外国勢力のあおりを受けた軍部主導のクーデターであった。

アフリカ独立運動の主要な担い手は、いわゆる教育エリート、別の用語を使えば、植民地時代から誕生していた地元のプチブル民族主義者であった。「独立」

という至上命令のもと、黒人政権が樹立されると、彼らの多くは外国勢力（特に旧宗主国）と協力し、地元の権力者として君臨し始めた。彼らにとって、闘いの相手は、人種的状况（白人政権）であり、いったん人種的障害が取り除かれると、今度は外国、なかんずく旧宗主国と協力し、土着のプチブルとして君臨し始めた。しかし、60年代後半の世界は、軍事クーデター、民主主義の抑圧、独裁政権の横暴がはびこり、世界の各地で、学生を巻き込んだ反戦平和と民主主義を求める大衆運動が燃え上がった。直接的な植民地支配は終わったが、欧米・日本の新たな帝国主義が「裏口」から舞い戻って、政治や経済を牛耳る新植民地主義（Neo-Colonialism）の時代へ移行していた。

④ 読書と思索

リーズ大学時代には、初めて出会う友人と書物から大きな影響を受けることになった。この時代に大いに感化を受けた学友の一人に、ウガンダ人学生グラント・カメンジュ（Grant Kamenju、マケレレ大学でも同僚だった）がいた。彼はフランスへ小旅行した折に、名も知れないパリの小さな本屋で、フランツ・ファノンの『地に呪われた者』（Frantz Fanon, *Les Damnés de la Terre*, 1966）の英訳版『呪われた者』（*The Damned*）を見つけて持ち帰った（フランスでは、ファノンの『地に呪われた者』の英訳は *The Wretched of the Earth* でなく、Constance Farrington の英訳で、このタイトルで出た）。アフリカ人学生がこれを熱心に回し読みしたと言う⁴³⁾。

この本は、植民地支配の心理学的分析を試みたものだが、グギによれば、「私にとっても、リーズに留学していた他のアフリカ人学生にとっても、目を開かせてくれる重要な本だった」⁴⁴⁾。この本は、日本を含めて、当時の世界の学生・知識人の間で「第三世界のバイブル」と高く評価された。そこに次のような一節があった。

「植民地体制の末期に権力を握る民族ブルジョアジーは、後進ブルジョアジーである。その経済力は無にひとしく、所詮、彼らが取って代わろうとする本国ブルジョアジーのそれとは、比べものにならない。主意的なナルシスムにおちいった民族ブルジョアジーは、有利な立場で本国ブルジョアジーの後釜にすわれるものと、易々と思い込んでしまふ。けれども、独立は民族ブルジョアジーを文字どおり窮地におとし入れ、いまや彼らのうちに破局的な反応を誘発し、旧本国に向かって苦悶に満ちた訴えの声をあげるべく余儀なくさせるであろう」⁴⁵⁾。

この見方を敷衍すれば、アフリカは「独立」によって何も変化しない。根本

的变化は見られず、新たな、より洗練された植民地支配の形態に移行したに過ぎないということになる。内容を伴わない「国旗の独立」(Flag Independence)に、幻想を抱いてはならないと言うのである。

ファノンの著作としては、当時はこれしか読まなかったらしいが、『呪われた者』は、それまでの視野を突き抜けて、より広く、より深い視点から、世界とアフリカを見る機会を与えたようである。ついで、カール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスの政治文献を知ると、しだいにファノンの影は薄いものになった。

「マルクスとエンゲルスの政治文献は、ファノンの重大な弱点と限界、ことにファノンに心理と暴力を機械的に強調させすぎることになる彼自身のプチブル的観念主義、ならびに台頭し成長を始めているアフリカ人プロレタリアートの重要性を見抜く力の欠如を露呈させることになった」⁴⁶⁾。

しかし、こう述べたからと言って、ファノンを全面的に退けたわけではない。同書、とくに「民族意識の陥穽」と題する章は、アフリカ文学、とくにアフリカ小説の理解に不可欠だと、のちの『精神の非植民地化』(1986)でも力説している⁴⁷⁾。

以上のほか、この時期のイデオロギー的發展に影響を与えた著作としては、エンゲルスの『空想から科学へ』、『経済学批判序説』へのマルクスの序文、『ドイツ・イデオロギー』の数章、エンゲルスの『反デューリング論』、マルクスの『資本論』第一巻、階級闘争についてのマルクスの二つの研究書『フランスにおける階級闘争』と『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』を貪り読んだという⁴⁸⁾。

これらの書物は、新しい未知の世界を開放した。いや、古い世界を違った角度から見る機会を与えた。なかでも、『反デューリング論』を読んで、「運動ないし動き、したがって変化というものが、自然、人間社会、思想の根幹であり、この動きは対立物の統一と闘いの結果である」⁴⁹⁾との考えを知った時、とても興奮したという。この時の知的感動によって、『一粒の麦』で、ことに生命を生み出すためには死滅しなければならない「一粒の麦」のイメージを借りて、この考えをケニア史の解釈に使ったのだった。

レーニンの『帝国主義論』も、植民地主義段階、新植民地主義段階にある帝

国主義の性格について目を開かせるものとなった。「今日でも、この著作はアフリカと世界、その他の地域の闘いの文学を学ぶ学生たちの必須の読み物である」⁵⁰⁾と述べている。

この他には、英国労働者階級の苦難を描き、労働者文学の古典と言われるロバート・トレッセルの『ぼろズボンの博愛主義者たち』⁵¹⁾を読んだと言う。文学に関しては、ブレヒトやゴーリキーなど、進歩的な作家たちにも親しんだ。「ゴーリキーの小説『母』は、すべてのアフリカ人愛国者が読むべきである」⁵²⁾と言う。

リーズ大学で、初めてファノンやマルクス主義に接し得たのは、書物だけでなく、学生たちによって組織された数多くの公開講演会のお蔭でもあった。この時期に書かれた文章の多くは、唯物論的・弁証法的な思考の発展を見せている。怒りを宿して書かれたものが多いが、論旨は明快で直截的である。

⑤ 西インド文学への関心

この時期には、当初の目的の一つであったが、カリブ海地域の文学作品をたくさん読んだ。『一粒の麦』を執筆しながらも、植民地主義、新植民地主義、帝国主義の問題について、学生仲間で大いに議論し、かたわら、ヨーロッパとアメリカを広く旅行した。

初めて読んだ西インド文学は、先述した通り、ジョージ・ラミングの『わが皮膚の砦の中で』だった。「この小説は、私に話しかけてくる。私が置かれている状況について語っている」⁵³⁾という実感を得た。ラミングの世界、西インドの「植民地状況」がケニアに生まれ育った者にとっても無縁ではなかったのである。

G. ラミングは、1927 年、バルバドス生まれの作家・詩人だが、のちにトリニダードへ渡り、1950 年以降はロンドンへ移住した。『わが皮膚の砦の中で』は、カリブの民の根無し草的「流民」としての自己検証とアイデンティティの追求を高く評価され、1957 年度のサマセット・モーム賞を受賞した代表作である。彼は、ロンドンへの移住前に、ベネズエラ大学で教えたほか、渡英後の 75 年にナイロビ大学とダルエスサラーム大学へ招かれ、客員教授を務めた。当時、ナイロビ大学に勤めていたグギは、彼をリムルの自宅へ招いた。その時、ラミングは「ここは、私の故郷バルバドスとそっくりだ」⁵⁴⁾と感嘆の声を上げたと言う。この言葉は、リムルの自然の美しい風景だけでなく、そこに埋め込まれ

た悲劇の「植民地の歴史」(Colonial History)をも内包していたことであろう。

「植民地文学」(Colonial Literature) のなかでも、政治小説の傑作と評価の高い『わが皮膚の砦の中で』は、40年代から50年代の西インド諸島英領バルバドスの、人口約3,000人の小村を舞台に、一人の少年の成長を描いている。ここには、ラミングの幼少期の経験と意思が込められているものと思われるが、それはグギ自身の植民地ケニアでの幼少期の体験とも通底するものであった。「パックス・ブリタニカ」による庇護のもと、文明の物差し、基準は常に英国にあり、英国を崇敬し、英国王室を崇拝するという絶対的基準は、世界の英領植民地を通じて変わらなかった。学校で教えられる唯一の歴史は、英国の歴史であり、キリスト教のモラルは絶対であった。

ラミングをはじめ、V. S. ナイポール、E. K. ブレイスウェイト⁵⁵⁾、O. パターソン⁵⁶⁾らの作品を通じて、西インド文学への視野がさらに広まった。そこから知り得たことは、西インド諸島に住む人々の根無し草的な不安、ルーツのない宙ぶらりんの存在状況、永久に続くかもしれない空虚、真空感覚、難破船に揺られているような感覚、疎外感、混沌、断片化した世界感覚だった。

じっさい、西インド諸島には、土着の文化と言えるものが存在しない。西インド人の大多数が「中間航路」(Middle Passage)を渡って新大陸へ荷揚げされた黒人奴隷の末裔だった。作家と作品には、「亡命感覚」、ユダヤ人の存在状況にも似た「落ち着きのなさ」、「我々は誰か、何処から来たのか、何処へ行くのか」といった方向感覚の虚ろさが付きまとった。作家たちは「私の過去、私の歴史はどこにあるのか」というアイデンティティの危機感や強迫観念に苛まれていた。

彼らは、もはやアフリカ人でないことは確かだった。しかし、失われたアイデンティティの根源を問う時、どうしてもアフリカに逢着しないではおれなかった。でなければ、少なくとも、アフリカをシンボルとして承認しないではおれなかった。アフリカから長く切断され、もはやアフリカの記憶はなかったが、多くの者にアフリカの黒い血が脈打っていた。

一言でいえば、西インド文学は、ルーツの探求に専念する文学だった。小説の登場人物には、常に亡命感覚、祖国喪失意識があった。個人としても、集団としても「疎外」が西インド小説の共通点であった。パターソンの『なくなった廃墟』(*An Absence of Ruins*, 1967)では、人種の外側、歴史の外側、一切の

価値の外側に立つ人物が主人公だった。パターソンはこう述べている。「この世界では、我々全員が、荒野に踏み迷ったユダヤ人なのだ。皆が黒人なのだ。この世界、この人生では、誰もがシオンを探し求めるユダヤ人なのだ。誰もが悲しみの白い世界に踏み迷った黒人なのだ」⁵⁷⁾。

ナイポールの作品にも、これと同じ喪失感覚が見られた。そこでは「秩序」と「アイデンティティ」を探し求める登場人物が、混沌と無秩序の世界から外部との「繋がり」を模索するというモチーフが横溢していた。それは、アフリカ人とも意識面で繋がるものであり、ある種の植民地文化の同一性を示すものと感じられた。「亡命」していることが「生きること」であった。直接的な社会から離れる、または身を引くことは、むしろアクティブなプロセス、ほとんど必要なことで、自己を知るために経験しなければならない一時的苦しみ、「浄罪」経験であるように思われた。

これはアフリカ知識人が自己のルーツを知るために、一度はアフリカを離れ、宗主国を経験する（「ビーン・ツ」 *Been-To*）必要があったことと似ていた。亡命は三つ巴だった。歴史および過去的生活様式からの亡命、人種からの亡命、階級からの亡命である。アメリカ黒人文学史に現れる「パーシング」⁵⁸⁾ 小説はその典型の一つであろう。最後に、自己からの亡命があるが、ここには、ナット・ナカサ (*Nat Nakasa*)⁵⁹⁾ など、アパルトヘイト下の南アフリカの自殺作家の系譜を含めてよいかもしれない。

パターソンの『なくなった廃墟』やナイポールの『物まね男』(*The Mimic Men*, 1967) が取り上げる課題は、植民地の教育エリート・中産階級 (*Colonial Middle Class*) に共通するものだ。大衆との繋がり、自分の過去との繋がりを見出せない彼らの真空・混沌・空虚な意識は、アフリカ人作家の多くと繋がった。

これと同時に、西インドの作家は絶えず移動することを運命づけられてきた。故郷を離れて、「エグザイル」として生きるのである。移動を繰り返し、移動の中で作家として成熟していく。ラミングが『わが皮膚の砦の中で』を大西洋の海上「中間航路」で書き継いだと言うのは、こうした事情を象徴的に物語っているだろう。これが西インドの作家の宿命であった。

⑥ 植民地経験：キャリバンとプロスペロ

リーズ時代の文学とイデオロギー的發展は、1972 年に出た最初の評論集『ホームカミングーアフリカとカリブの文学・文化・政治に関する評論集』

(*Homecoming : Essays on African and Caribbean Literature, Culture and Politics*, 1972) に詳しい。本書収録の文章の多くは、初期小説三部作と同じ頃に書かれたもので、小説世界と引き離すことが出来ない。本書には、1962年から1970年までに書かれた文章が収録されており、厳密に言えば、すべてがリーズ時代の執筆ではない。にもかかわらず、ここに盛り込まれた政治や文学に関する発想と思考は、リーズ時代に成熟していたか、もしくは、そこでの思想的成長を踏まえているものと考えて、たいして間違いではないだろう。以下では、本書に収録された文章を、60年代の思考の集約、結晶と考えて話を進めようと思う。

本書では、アフリカ人としての視点から世界を、特に世界に四散したアフリカ系黒人の世界を俯瞰している。この世界を「ブラック・ディアスポラ」(Black Diaspora)、もしくは「ブラック・ディメンション」(Black Dimension)と呼ぶことが出来るだろう。そこでは、パン・アフリカニズムの視点を超えて、アフリカと自余の世界の繋がりの可能性にも言及している。

冒頭の一編「民族文化のために」(Towards a National Culture)は、はじめダカールで開催された「アフリカの文化政策に関するユネスコ会議」(1969)に提出されたものである。この文章は、その後の思想の展開と実践の歩みを示唆し、今日に繋がる新しい社会論、創造的な文化・芸術構想をいかんなく開示している。

まず注目できるのは、植民地支配の実際と心理を劇的に表現するものとして、シェークスピア作『あらし』第1幕2場から、キャリバンとプロスペロの台詞、および娘ミランダのキャリバンに対する台詞を紹介していることである。少し長いが、示唆に富む箇所であり、以下に引用してみよう。

キャリバン：おまえは、はじめて来た時には、このおれを撫でて、大切にしてくれた。木の実の入った水をくれ、昼と夜に光る、あの大きいほうは何、この小さいほうは何と、名前を教えてくれた。だから、おれはおまえが好きになって、この島の様子は何でも教えてやった。真水の湧く泉と、塩水の湧く穴、ものの実るところと実らぬところをな。ああ、馬鹿なことをしたもんだ！シコラックスの呪いが、みんな、がまも、甲虫も、こうもりも、おまえに降りかかれ！今じゃ、おれはおまえのたった一人の家来だが、昔は自分で自分をとりしきる王様だったんだぞ。それを、こんな固い岩の中に押し込めやがって、しかも島は取り上げてしまったんだ。

プロスペロ：この大うそつきの奴隷野郎。おまえは、鞭でなら動かせるが、いつくし

みの心では動かせぬ奴だ！けがらわしい奴だが、情けをかけ、わしの岩屋に住まわせてやったところ、ついにわしの娘を辱めようとしおった。

ミランダ：わたしはおまえをかわいそうに思って、骨を折って、しゃべり方を仕込んだし、いつも何か教えてやったわ。おまえが、野蛮で、自分で自分の言っていることがわからず、下等なけものみたいに、ぎゃあぎゃあ言っていた時、自分の思っていることを、人にわからせる言葉を教えてやったのよ。でも、どんなに物を覚えても、おまえのいやしい生まれつきの中に、心のやさしい人たちとはとても一緒に暮らせないところがあった。だから、この岩の中に閉じ込められたのは当たり前だわ。牢屋に入られても、軽過ぎたぐらいよ。

キャリバンがいなくては困ることを、プロスペロは娘に対して認めていたことに注意しよう。

「・・・あいつは、火を焚いたり、薪を取ってきたり、洗い物をしたり、いろいろ役に立つからな」⁶⁰⁾。

グギは、上の文章を受けて、次のように述べている。

「多くのこと、多くの態度がこの劇から浮かびあがってくる。島にたどりついた異邦人であるプロスペロは、ヘビの甘いささやきをもって近づく。最初、彼はキャリバンに友好的で、彼をほめあげる。しかし彼は、しじゅう島の秘密を調べているのだ。彼にとってキャリバンは、いかなる文化も、意味ある過去も持ちあわせていない。彼は自分の言葉をキャリバンに教えることさえした。そして、キャリバンのそれと知らぬ間に、プロスペロは彼の土地を取りあげ、一人で政府をつくって、キャリバンを奴隷にしてしまう。もとはキャリバンの家来であったエアリエルは、その束縛を解かれるが、新たな隷従におとしこまれる。彼はプロスペロの忠実なしもべであり、スパイであり続ける場合にのみ、最後に解放されることになるのだ」⁶¹⁾。

はじめ、友好的態度を擬装して近づいてきた異邦人プロスペロは、やがてキャリバンの土地（島）を略奪し、彼の過去を野蛮ときめつけ、その言語と文化を抹殺してしまう。暴君プロスペロとキャリバンとの新たな人間関係のもとで、かつてのキャリバンの家来エアリエルは、プロスペロの忠実なしもべースパイとなるのだ。

これをアフリカ植民地化の文脈に置き換えると、岩屋につながれ、新たな言語の捕縛にかかり、自己の文化と言語をただイメージによってしか把握できないキャリバンは、とりわけて、ヨーロッパ的知性を身につけたエリート・アフ

リカ人の運命を予兆するものであろう。スパイのエアリエルは、自己のアイデンティティを弄ばれる土着の買弁階級であり、プロスペロは西欧帝国主義の暴力そのものを象徴していよう。とはいえ、この他に、アフリカの大多数の民衆が残っていることを忘れないでおこう。彼らは、宗主国の言語や文化に位置づけられることなく、植民地社会の底辺で、アフリカの伝統を守り、自らのアイデンティティを危機に曝されることはなかった。

ケニヤッタは、ロンドンで過ごした若い頃、人類学者マリノフスキーの指導を得て、ギクユの伝統生活と社会構造を描く『ケニア山のふもと』(*Facing Mount Kenya*, 1938)を書いたが、次のように、キャリバンの国へやって来たプロスペロのインパクトを見事にとらえている。

「文化は、それが成り立つ基礎である生活の社会組織を離れては意味をもたない。ヨーロッパ人がギクユの国にやってきて、その民から土地を奪うとき、彼らは民衆の生活手段だけでなく、家族や部族を結びつけている物質的シンボルをも奪い去ろうとしたのである。そうすることで、彼らはギクユの人々の社会的・道徳的・経済的な全生活から、その土台を切断する一撃を加えていたのである」⁶²⁾。

伝統アフリカにおいて、生活様式としての文化は、その社会組織と密接に結びついていて、しかも、その社会組織は、人間の土地に対する関係に基礎を置いていた。土地と自己の関係は、人間存在の全的意味を持ち、人間の実体論（オントロジー）を形づくっていたという。したがって、アフリカ植民地化の事業は、アフリカ人の経済的基礎である土地を完全に収奪することで、形の上では完成したといえる。伝統的な部族や種族の統一は、これによって崩壊した。

この見方に立つならば、「今日のアフリカに部族は存在しない。ただ、持てる部族と持たざる部族がいるのである」⁶³⁾ とのグギの発言は説得力を持つ。ポルトガル領ギニア・ビサウを独立に導いたアミルカル・カブラルが同じ趣旨のことを述べている。

「植民地主義者がアフリカに着いた時には、部族的構造は、経済の発展とアフリカを舞台にした歴史的諸事件によって、すでに崩壊状態にあった。今日、アフリカは部族的であるとは言えない。民衆の心的態度という点に限れば、アフリカは部族主義の名残を今もとどめていると言えよう。しかし、経済構造そのものについては、そうではない。さらに言えば、もし植民地主義が、何か少しでも、積極的なことをしたとすれば、それはまさに、この国の一部に存在していた部族主義の遺制の大部分を破壊したということ

だ」⁶⁴⁾。

ここで、人種差別、特に黒人差別のイデオロギー系譜を長々と紹介する必要はないであろうが、文学作品に限っても、ライダー・ハガード、ジョゼフ・コンラッド、カレン・ブ里克セン、ロバート・ルアーク、エルスペース・ハックスリー、アラン・ペイトンなどがいた。これらの作家は、アフリカを舞台に、露骨な人種差別的小説や、「アンクル・トム」⁶⁵⁾ 的な黒人像を再生産して見せる作品を書いた。

自由・平等・博愛を説いた西欧近代の知識人の多くが人種の神話に取り憑かれていた。なかでも、ドイツの哲学者ヘーゲル（1770~1831）に、その典型が見られる。彼によれば、

「歴史の遡及する限り、アフリカ本土は世界の他の地域との関係を閉ざされてきた。そこは、自己意識に照らし出された歴史のない、夜のとばりに包まれた子供の土地である。黒人には、人間性と調和するものは、一切見出せない。アフリカは、世界の有史の部分ではなく、世界—北半球において—の歴史の動きは、アジアとヨーロッパ世界に属している。世界の歴史は、東から西へ、ヨーロッパが終着点であり、アジアが始まりだった」⁶⁶⁾。

先に紹介したような『あらし』の読み直しの試みは、これが初めてではない。ジャリバン⁶⁷⁾の立場から、このシェークスピア劇を再解釈したラミン⁶⁸⁾の『亡命の喜び』(*Pleasure of Exile*, 1960) が先例の一つとして知られていよう。じつさい、ラミンの再解釈は、ポスト・コロニアリズム批評を含めて、いくつものジャリバン論の系譜の中でも画期的な意味を持っていた。征服される側、差別される側から歴史を逆照射するのである。

ジャリバンとプロスペロの出会いをケニアの歴史になぞらえれば、初めに土地の占領と保護領・植民地化宣言があった。入植民プロスペロは、原住民ジャリバンの土地を「白人の国」(Whiteman's Country) だと主張した。彼は、自分の政府をつくり、やって来た土地で経済的地位を固めた。一方、ジャリバンの境遇に突き落とされた「原住民」は、白人に労働力を提供し、税金を収めた。白人は「専用高地」(White Highland) を正当化し、「原住民」を野蛮な幼児であると決めつけ、「文明化」の使命を自らに課して、キリスト教の伝道に熱意を燃やした。政府と伝道団が入植民を支援し、これら三つの勢力はたがいに協力して、ヨーロッパ資本主義のアフリカへの浸透の先鋒となった。

⑦ アフリカ・西インド・メトロポリスを結ぶ

作家・知識人に限らず、ごく普通の西インド人の英国への労働移住は、第二次大戦後から急速に増加し始めた。そんな中で、1946年からBBCで放送が始まった「カリブの声」⁶⁷⁾には、ナイポール、ラミング、D. ウォルコット⁶⁸⁾らがかかわった。厳格な移民規制を実施してきた「北の大国」(アメリカ)よりも、「本国」英国への移住が50年代にピークを迎えることになった。ラミング自身も50年に渡英し、ロンドンに住んで、英国での「カリビアン・ルネサンス」⁶⁹⁾の中心人物の一人となった。

一方、当時の西インドでは、自治・独立運動が活発化し、58年には英領10植民地が西インド連邦を結成、いわばパン・カリブの政治ナショナリズムが頂点に達した。59年には、キューバ革命が起こり、カストロと7月26日運動が政権を獲得した。しかし、62年8月のジャマイカおよびトリニダード・トバゴの独立によって、先に結成された西インド連邦は崩壊した。とはいえ、こうした政治的分裂の後も、パン・カリブの文化運動は形を変えて生き続けた。

地域としてのカリブは、一つの言語にも、一つの人種にも、一つの歴史にも収束しえない多様性を示している。今日「西インド人」(カリビアン)は世界各地に住み、独自の「カリビアン・コミュニティ」をつくっており、まさに「ディアスポラ」の典型である。しかも、中国新疆地区出身のウイグル人にも似て、独自の文化とアイデンティティを強く保持することで、「カリビアン」としての文化的紐帯で強く結ばれている。

こうした背景の中で、1966年にロンドンでCAM (The Caribbean Artists Movement 「カリブ芸術家運動」 1966~72) が結成された。1965年にトリニダードから英国へ渡ったジョン・ラ・ルース (ロンドンで「ニュー・ビーコン出版社」を開く。ここが文化運動の拠点になった)⁷⁰⁾ や、アンドルー・サルキー⁷¹⁾ らが中心人物であったが、ラミングやパターソンも結成に参加した。故郷の西インドでは出会うことのない無数の他島出身の人々が、「本国」イギリスで出会い、「西インド人」「カリビアン」としての共通のアイデンティティを確認したのだった。

リーズ時代のグギもまた、これらの作家と結成時から交流を結ぶことが出来た。彼は、「カリブ芸術家運動」へ参加した、おそらく最初のアフリカ人作家だっただろう。先述の人物のほかに、エドワード・カマウ・ブレイスウェイト、セーラ・ホワイト (ラ・ルース夫人) らも中心的役割を担った。発足後まもな

く、カリブ海地域だけでなく、英国人作家やコモンウェルス諸国の作家・芸術家、さらにアフリカへも視野が広がり、それに学生その他との接触も深まった。エドワード・カマウ・ブレイスウェイトがある友人に宛てた 1966 年 11 月 30 日付の手紙で、グギのことを「西インド文学で博士論文を準備している学生がいる」⁷²⁾と紹介している。じっさい、翌年 1 月 6 日に、ロンドンのパターソン夫妻の私宅で開かれた「西インド美学を語る」会合に、グギが初参加している。この時、他にエドワード・カマウ・ブレイスウェイト、アンドルー・サルキー、ジョン・ラ・ルース、セイラ・ホワイトらがいた⁷³⁾。

グギが西インド文学から得たものは、アフリカも、西インドも「形式的には独立したが、基本的には、植民地状況が継続している」との認識だった。それは、「黒人世界の広がり」(Black Dimension, ブラック・ディメンション)と名付けるにふさわしい視野の拡大だった。アフリカも西インドも、ともに植民地状況のもとで、本来の歴史と価値観が歪められ、転倒してしまっていた。しかも、独立後の社会秩序は、外国のもの、不正義なものと取って代わった。こうして、地方的な違いが生じても、アフリカの物語は、アジア、カリブ海、ラテンアメリカと同じものになる。そこでは、地元のエリートが民衆を裏切り、権力を握ると植民地時代と同じシステムを継続させていた。

こうして、アフリカ人民衆もまた、西インド人と同じで、ルーツへの復帰、見失われた歴史の本道への回帰、一種のホームカミングに辿り着くような社会的闘争に今もかわらざるを得ないとの認識が生まれた。その意味でも、60 年代の文章を集めた最初の評論集に付けられた「ホームカミング」(*Homecoming*)というタイトルは、奥深い象徴的意味を担っている。

本書でグギは、転換期の非ヨーロッパ世界をアフリカから見ているが、まさにこの位置が、アフリカ、黒人世界、第三世界のスポークスマンとして、彼の独自の役割を保証し、正当化しているようだ。

そこにあるのは、奴隷制度や植民地支配を正当化したような、ヨーロッパの諸制度の枠の中では、アフリカに本当の解放を勝ち取ることは出来ないという確信である。黒人は、植民地支配と資本主義のもとで二重に苦しんできた。一つは労働者階級として、もう一つは黒人として。白人労働者といえども、植民地主義、人種主義のもとで、アフリカの搾取から恩恵を受けてきたとの認識である。これが「ブラック・ディメンション」である。リーズの学生時代の渡米経験を踏まえて、1970~71 年のアメリカでの生活経験（イリノイ州ノースウェ

スタン大学) は、この見方をいっそう確信させたことであろう。この時期に、小説第4作『血の花弁』を書き始めている。

西インド人にとっても、アフリカ人にとっても、植民地経験は、自らの文化意識の土台であり、社会構造の中心にあった。西インド人は、アフリカ人と共通の政治的苦難、植民地人としての境遇を強いられてきた。しかし、西インド人の場合、「コロニアル」という言葉は、アフリカ人よりも深い意味を持つ。なぜなら、その言葉には「根無し草」の感覚が伴う。アフリカ人の場合は、一つの継続文化の伝統的な揺籃から完全に切断されたことはないが、西インド人には、常に「ルーツレス」と同時に「流離」の感覚が伴うのである。

⑧ 60年代のケニア

独立ケニアの初代大統領ケニヤッタは、ケニアを「抗争の土地」(Land of Conflicts)⁷⁴⁾と呼んだ。彼は、三つの主要な人種グループ、アジア人(インド人)、アフリカ人、ヨーロッパ人のことを考えていた。アフリカ人は、常にこの人種ピラミッドの底辺に位置し、他の二人種への従属的地位に甘んじてきた。植民地化以降の数十年間、これらの人種間の緊張と抗争はケニアの歴史の主要部分となった。この葛藤は、まず政治・経済面に現れた。アフリカ人は、自分の国で、政治的・経済的地位の向上のために最底辺で闘った。アジア人は、ヨーロッパ人と同じ政治的地位の獲得のために闘った。ヨーロッパ人は、このピラミッドの頂上での政治・経済的な支配的地位の維持と強化のために闘った。

1920年頃までは、アジア人とヨーロッパ人の角逐が中心であった。闘いの主要な場は、立法審議会での代表権であった。アジア人はヨーロッパ人と平等の代表権を求めた。アジア人も英国臣民であり、ヨーロッパ人と同じく移民であった。ケニアの社会・経済的發展に寄与したのは、ヨーロッパ人よりも、むしろアジア人だと主張した。しかし、アジア人の言い分は通らなかった。

第一次大戦を経て1920年代に入ると、抗争の舞台に、アフリカ人が登場し始めた。指導者の多くはミッション・スクールで学び、英語を話せた。こうして、人種抗争は三つ巴(トリレンマ)⁷⁵⁾になった。アフリカ人の闘いは、初めは遵法闘争だった。つまり、植民地体制内での地位の改善、差別の撤廃、福祉の向上などが目的だった。

1923年の「デボンシャー白書」は、「ケニアは、第一に、アフリカ人の領土であり」(Primarily, Kenya is an African territory)、「アフリカ原住民の利益が

最優先」(the interests of the African natives must be paramount)であることを謳ったが、その後長く空文化された。しかし、第二次大戦後には、アフリカ人の間にも、奪われた土地の奪還、即時の自治・独立を求める急進的な動きが活発になり、やがて 50 年代のマウマウ武装闘争に繋がっていった。

しかし、1963 年の独立後も、人種別に沿った緊張と抗争はなくならなかった。三つの人種は、たがいに人種の殻にこもり、たがいの間で文化的接触を持つことを望まなかった。

緊張と抗争は、人種間に見られただけではなかった。アフリカ人のなかにも、いわゆる「部族」間に緊張と相互不信が渦巻いた。KANU、KADU 等の例に見られるように、多くの場合、アフリカ人の政治結社は「部族」別に結成された。

したがって、グギは「当時のケニアには、『国民』(Nation) というコンセプトは存在しなかった」⁷⁶⁾ と言う。人は、ギクユ、ルオ、カンバ、ナンディ、あるいはアジア人、ヨーロッパ人のどれかという具合であったと言う。マケレレ時代の戯曲『黒人の隠者』は、60 年代初期を舞台に、人種と部族の殻を破ろうとの素朴なメッセージの濃い作品だった。この時期に、グギは次のように述べている。

「部族から離れて、より広い人間の集団というコンセプトから展望することが進歩的なのだ。これが実現した時、『単一のケニア民族』(a Kenyan nation) が生まれるだろう」。「部族の殻を破るナショナリズムが助けになる」。しかし「ナショナリズムがまた別の枷になってはならない。ナショナリズムは目的ではない。目的は、恐怖、疑惑、狭い地域主義から解放された人間である。自分のクリエイティブな可能性を、自由に発展させ、実現できることである」⁷⁷⁾。

ケニアにはもう一つの裂け目が存在した。エリートと大衆を分ける水平的な裂け目であった。金持ちと貧乏人、教育のある者となない者の区別は、「ケニア人」を「二つの国民」に分裂させる。言うまでもなく、金持ち、教育のある者が、政治的、経済的実権を握っていた。

少数の持てる者、多数の持たざる者に分裂した社会が危険であることは、誰もが知っている。かつてのヨーロッパ人が掌握した地位を獲得している「教育ある少数」が、政治、経済、文化を独占するのである。社会の上層に立つ者だけの文化は、「民族文化」(a national culture) とは言えないであろう。

教育ある少数のエリートは、西洋の文化と政治制度の吸収に必死になってきたが、そのあまり、伝統的なアフリカのコンセプト「共同体」(community)を忘れるべきでないだろう。「アフリカでは、個人は共同体のために、共同体は個人のために」というのが社会規範であった。このような社会では、文化は全構成員のものであった。誰もがコミュニティの一切の活動に自由に参加できる社会であったことを忘れてはならない。

⑨ 文化の復権と解放

以下の文章は、『ホームカミング』に見られる一節である。

「文化は生きているのであり、決して静止していない。集団としての人間存在は、彼らの自然環境を征服するために闘い、その過程で社会的環境を創り出す。自然環境の変化、より正確には、彼らの闘いの性格の変化は、彼らの制度を、したがって彼らの生活・思考様式を変化させるだろう。彼らの新しい生活・思考様式は、つぎに彼らの制度と環境全般に影響を及ぼすだろう。それは一つの弁証法的な過程である」⁷⁸⁾。

伝統アフリカにおいて、文化や芸術は重要な社会的機能を果たしていた。それは、現代ヨーロッパにおけるような、共同体の物質的・社会的・宗教的必要から切断されたものではなかった。文化や芸術は、個人の知的活動ではなく、常に共同体に向けられてきた。したがって、文化や芸術は、その公共性のゆえに、広狭両義において、社会の統合に役立っていた。共通の信念、行動、価値の中に人々を結びつけることによって、人間生活の、国家の介入範囲外にある部分を秩序づける力を持っていた。これが、文化芸術の独自の社会的統合機能であった。

次の文章では、キャリバンの自己解放の道を示唆するものとして、文化と政治の関係についての、L. S. サンゴールらのネグリチュード思想の曖昧性を批判している。

「〈文化的解放は、政治的解放の一つの本質的な条件である〉(L. S. サンゴール) という信念は、アフリカのほとんどの知識人、芸術家、政治家の間に根強く残っている。彼らは、文化を踊りや密林の太鼓、民間伝承という面だけで考えているので、それらのものを復興する必要を主張すれば十分だと考えている。しかし、文化を政治に優先するものとするのは誤りである。政治的、経済的解放は、文化的解放の本質的な条件、すなわち、民衆の創造的精神と想像力を真に解き放つために欠くことの出来ない条件である」⁷⁹⁾。

「ネグリチュード」(Négritude)や「ブラック・イズ・ビューティフル」(Black is Beautiful)といった肌の色についての神話を生み出すだけでは、社会的不正義の解決とは程遠いことが強調されている。肌の色(人種)と同時に、自己の社会的位置＝「階級」を発見し、この発見を通して、世界のキャリバンたちとの連帯を探ることが重要だということになる。

ここでは、文化の抑圧状況が、じつは政治的・経済的な枷から由来するものであるとの認識が強調されているのである。この認識なくしては、黒人体験、植民地体験を真に描き切ることは出来ず、新たな価値を創造することは不可能だとの確信がある。

したがって、問題はこうである。独立(脱植民地化)によって、アフリカの文化や芸術は、本来の社会的統合機能を取り戻したであろうか。はたして、独立は、ファノンの言うような意味で「民族の権利、名誉、誇りを復活させ、精神的・情緒的平衡を原住民の間に誘発」⁸⁰⁾しえたかどうか。答えは、否定的である。なぜなら、抑圧的な社会構造が、旧態依然として温存されたからである。近代化の美名のもとでの一途な資本主義的發展のなかで、弱肉強食の論理が支配的となり、人間関係は金で左右されて、荒廃化の一途を辿った。映画、演劇、美術、音楽などの芸術活動、出版、放送などのジャーナリズムは植民地時代の桎梏を解き放つことが出来なかった。文化の中樞は一言語生活を含めて一完全に外国資本に握られ続けた。

それでは、真の民族文化を回復し、アフリカ人が正しい自己像を確立するためにはどうすればよいのか。グギにとって、その答えは明白だ。自らを奴隷化した政治的・経済的システムを採用することで、キャリバンが自由になることはない。彼が社会機構について、新しいプログラムを主唱していることは明らかである。

「政治・経済生活を全面的にアフリカ化し、資本主義と手を切らなければならない。資本主義の帝国主義段階－植民地主義と新植民地主義の段階－は、我々の全体性を持った創造的精神の成長を阻害している。資本主義が生み出すことの出来るのは反人間的な文化、あるいは部分的利害の表現にすぎぬ文化でしかない」⁸¹⁾。

彼が構想する新しい文化は、独立後の社会で、生きるために格闘する民衆から生み出される文化である。「民衆」とは、西欧の言語や文化に位置づけられた

一部の教育エリートやプチブルを除いたキャリバンたち、つまり「群衆」のことである。彼らにこそ、伝統アフリカのコミューナルな文化の水脈に繋がる真に人間的な可能性が潜在しているというのである。

その新しい文化は、古い部族的伝統の諸条件や、新たな国境によって狭く制限されることのない全アフリカから全キャリバンの世界、そして人間の必要とするものへと目を向ける文化である。この考え方は、ジュリアス・ニエレレの次の言葉に呼応するものでもあるだろう。

「われわれは抑圧され、搾取されてきた。このように抑圧され、搾取され、貶められる状態を招いたのは、われわれの弱さのためであった。われわれは革命を必要としている。それは、ふたたび搾取され、抑圧され、辱めを受けることのないように、われわれの弱さを克服する革命である」⁸²⁾。

⑩ 文学の視座

アフリカ人は、西インド人と違って、自己のルーツから完全には切断されなかった。「母なるアフリカ」と常に繋がっていた。しかし、アフリカ人は、植民地教育 (Colonial Education) とキリスト教を通じて、自分の過去のイメージを歪曲されてしまった。教育と宗教的洗脳により、黒人には過去がないと教えられた。リビングストンやスタンリーが来て、憐れみと暴力、聖書と銃の力によって、歴史の中へ目覚めさせてくれるまでは、アフリカ人は「暗黒大陸」で眠りこけていたとされた。

したがって、20 世紀のアフリカ人作家が試みてきたのは、アフリカ人を人間の歴史に復帰させることであった。キャリバンを自己の歴史に引き戻すことであった。20 世紀アフリカ人作家の重要な仕事の一つは、アフリカ人に行為の意志、状況を変革する意志を回復させることだった。たとえば、アチェベの小説の歴史的意義は、登場人物のオコンクオやエゼウル⁸³⁾を通して、アフリカ人もまた「我々は人間である。歴史の中に生きている。いや、歴史の作り手である」と主張できたことではなかったか。オコト・ビテックの『ラウィノの歌』(1966)では、主人公の女性ラウィノ⁸⁴⁾が、アフリカ世界の第一義性を見事に謳歌している。

「現代アフリカ文学の父」と言われてきたアチェベが、次のように、アフリカ人作家としての役割を明言している。彼が示すことの出来た文学の意志は、20 世紀アフリカのほとんどすべての作家に共通していることであろう。それは、

アフリカの歴史を書き換えよう、西欧が描いてきたアフリカ表象を塗り直そうとの、強烈な政治的・文化的意志であることを見抜かなければならない。

「私の小説が読者に次のことを教えることが出来れば、大いに満足である。すなわち、アフリカ人の過去が、神の使命をもってやってきた最初のヨーロッパ人たちが我々を救い出したという、あの長い野蛮な夜のごときものではなかったということである。たぶん、私の仕事は純文学というよりは、応用文学というべきものなのだろう。だが、そんなことを誰が問題にしようか、文学は大切だが、私の考えているような教育も大切なのだ。これら二つがたがいに背反するものだとは思えない」⁸⁵⁾。

さらに、つづけて以下のように述べている。

「ここに私が支持したい一つの革命がある－（その革命とは）我が社会が自らへの信頼を取り戻し、積年の汚辱と自己卑下のコンプレックスを払拭するのに役立つことである。これは、本質的には、その最良の意味での教育の問題である。（作家としての）私の目的と、わが社会の最も深いところから生じる抱負が、ここで合致すると思う。それというのも、賢明なアフリカ人であるならば、魂に埋め込まれたこの傷の痛みから逃れることが出来ないからである。アフリカ的人格、アフリカの民主主義、アフリカの社会主義への道、ネグリチュードなどは、誰もが聞かされたことだろう。これらは、どれもが我々を自分の足で再び立たせるために、いろんな時期につくられた支えの柱である。いったん、われわれが立ち上がれば、どれもがもはや必要ではなくなるだろう」⁸⁶⁾。

グギが考えるアフリカ文学評価の規準は、こうしたアフリカの現代的課題をどう理解し、どのような希望を未来の世代に提示できるかということにある。

⑪ 評価の規準

リーズ大学時代以後は、他のアフリカ人作家の作品評価に触れた文章は、ほとんど見られなくなるだけに、この時代に書かれた先輩作家、とくにショインカとアチェベについての作品評価はとても貴重である。これら二人のナイジェリア人作家が、自国の独立後の政治体制を見事に分析し、腐敗や社会的不正義を暴露したことを高く評価している。しかし、その他の点では批判に遠慮はない。たとえば、アチェベには、先の二つの文章を引用した「教師としての作家」⁸⁷⁾と題する有名な評論があるが、以下は、アチェベの思考の限界について論評している。

「必要なことは、過去を振り返って、何処で私たちが誤ったか、何処で雨が

私たちを打ち始めたかを知ることだ」⁸⁸⁾とのアチェベの言説に対して、グギは次のように論ばくしている。

「教師としてのアチェベは、多くの疑問に答えを出していない。疑問を提起して、その答えは生徒の課題として残しておくと言うのであろうか」。「このような社会への対応には限界がある。教師の役割は、社会を再創造することで、偏見や先入観を矯正すること」でなければならない。「何処で雨が私たちを打ち始めたか」だけでなく「継続的に雨に打たれ続けるのは、なぜか。家を洪水からどう守るのかといった問題が、作家の関心事でなければならない」⁸⁹⁾。

ショインカについても、グギの評価は厳しい。

「ショインカは、インテリの無力さをセックス用語で描き、エリートのインポテンスを冷笑するが、それ以上には進まない。彼は、大衆の創造的な闘いを無視している。彼の劇では、普通の庶民、労働者、農民が、岸辺に立つ受け身の見物人、大道に立つ哀れなコメディアンとして描かれている」。「ショインカは自分の社会を広範囲に明らかにするけれども、彼の描く絵は深みに欠け、静止状態にある。なぜなら彼は対立と闘争を歴史的に展望して現在を考えることが出来ないからである」⁹⁰⁾。

アチェベやショインカだけでなく、同じナイジェリアの T. M. アルコ⁹¹⁾ など、多くの作家が社会の抗争を文化の面だけで見ており、社会問題を個々の人間のモラルの問題に還元するなど、社会的・経済的土台の分析にまで及ばないことを批判している。

この点に関連して、アチェベの『国民の中の男』(*A Man of the People*, 1967) の書評で、グギは次のように述べている。

「社会の中のどちらを先に変革するのか—政治・経済的な基盤（本質的に異なる性格の、新しい家のための、新しい土台）が先なのか、個々人のモラルが先なのか」⁹²⁾。

こうした見方が、この時代に孤立した視座でなかったことを知るためには、南アフリカのノーベル賞作家ナディン・ゴードィマの著書『黒人の心を伝える者たち』が助けになる⁹³⁾。以下の二つの文章は、すでに第 2 部で紹介しているが、ここでもう一度思い出しておこう。

「アフリカ文学では、政治は決して〈人生の追求〉という、より高尚なテーマに割り

込む俗悪なテーマとして、描かれてはいない。政治活動を主題とする小説、つまり政治小説の中心テーマは、白人支配からの解放闘争であり、独立以後の内部権力闘争である」⁹⁴⁾。

ゴードイマは、さらに続けて言う。

「(アチェベを含めて、これらの作家は) アフリカの腐敗した政治体制の原型を痛烈に風刺してみせてくれるのだが、現実には目の前に現出している怪奇な現象の、政治的、イデオロギー的意味について、解明のメスを入れようとはしないのである。同じことが、鮮烈なアイロニに満ち溢れたすばらしい小説『通訳者たち』(注: *The Interpreters*, 1965, ショインカの小説) にも言える。この小説の主役たちが結論として到達した、あるべきアフリカの姿とは、アフリカの知識人の理想とする、アフリカ的世界と西欧的世界の総合であり、しかも両者は精神面で決して整合しないことに彼らは気付いている。しかしここでも政治的表現で、社会を再編成して、可能な解決の道を模索するといった方策は、一切暗示されていない。・・・植民地支配以降の政治小説が、植民地闘争をテーマとした政治小説を含めて、アフリカ的状况の表面を、確実に引っ搔いたとは、とても思えない」⁹⁵⁾。

⑫ アフリカ人作家の役割

次の文章は、「作家」について一般論として述べながら、実際には自分のことを述べているようである。

「作家は、自己の全人格をもって、絶えず変化してやまない社会環境に反応する。一種の感度のよい羅針にも似て、作家は、正確さや成功の度合いはさまざまであっても、変化する社会内にある抗争や緊張を書きとめる。したがって、同じ作家が、情調や感情、楽観性の度合、さらには世界観においてさえ、ときにはあい矛盾するような違ったタイプの作品を生み出すことになる。なぜなら、作家もまた歴史のなかに生き、歴史によって形づくられるからである」⁹⁶⁾。

これを裏付けるように、リーズ時代に書き上げた小説『一粒の麦』の扉に、次のように書かれている。ケニア独立の、わずか4年後のことだった。

「この作品は、現代ケニアを舞台にしているが、その登場人物はすべて架空である。ジョモ・ケニヤッタやワイヤキの名前は、この国の歴史や社会制度の一部として言及しないではおれないから登場してくるに過ぎない。しかし、状況と問題とは作りごとではない・・・イギリスと闘いながら、その闘いの目的を今もなお無視されている農民にとつ

ては、それは時には痛々しいほどの真実なのである」⁹⁷⁾。

「闘いの目的を今もなお無視されている農民」にとって「状況と問題とは作りごとではない」と言う。マウマウ戦争を闘った農民の大義が裏切られていると言うのである。早くも、独立の夢が色褪せて、幻滅が広がったと言うのである。

この時期には、小説作法上の変化も大きかった。マケレレ時代の小説『川を隔てて』や戯曲『黒人の隠者』、そして『泣くな、わが子よ』を含めて、それまでのように個人、一人の行為者、それも救世主的人物に焦点を絞るのではなく、大衆、集団としての農民・労働者への関心が圧倒することになった。民衆の闘争への関心が、個人が抱く使命感に根差した生き方や行動よりも、いっそう重要だとの認識へ進んだのだった。視点が、一人の「救世主」への期待でなく、農民や労働者を中心とする「群衆」(キャリバンたち)へ移行したのである。

「独立(ウフル)のために闘ったのは彼らだった。英国の帝国主義者を退却させたのは、農民と労働者の団結の力だった。これらの農民は、独立によって何を獲得したのだろうか。アフリカ人の支配エリートは、植民地の社会的・経済的構造を変革しようとしたのだろうか。農民や労働者は自分を取り戻そうとした土地を所有できているだろうか」⁹⁸⁾。

この時期には、社会の歴史の中で、過去は現在に、現在は未来に繋がるとの認識が深まり、フラッシュバックや意識の流れなどの小説技法が縦横に取り入れられて、マケレレ時代の初期小説二作に見られたような直線的、単純な時間の流れに従うことがなくなった。『一粒の麦』や後の『血の花弁』(1977)に見られるように、そこでは過去が現在に負わせる容赦のない桎梏と内面の苦悩を描き、時間と空間を巧みに交錯させて、底知れぬ深みに人物を造型していくことに成功したのだった。

政治的独立へ導いた反植民地闘争のリーダーたちは、いったん「独立」が達成されると、中産階級としての自らの安逸という祭壇にアフリカ民衆を犠牲に供し始めた。じっさい、この時期のアフリカ小説のほとんどに、台頭する中産階級エリートと大衆の間の抗争が顕著に描かれ、支配階級への幻滅感が濃い。たとえば、アイ・クウェイ・アーマ、オコト・ビテック、レナード・キベラ⁹⁹⁾、チヌア・アチェベ、ウォーレ・ショインカ、オケロ・オクリ¹⁰⁰⁾などの作品にそれが典型的に表れている。

グギはアフリカ人作家として、次のような自覚を示している。60年代の総括と考えてよい見方であろう。

「われわれ黒人知識人、黒人ブルジョアジーは、権力を握った時、農民・労働者の諸要求と一致するような政策を取ろうと努めることはたえてなかった。私は、今やアフリカ人作家がこれらの労働者・農民の名において発言すべきだと思う」¹⁰¹⁾。

「アフリカ知識人は、有意義な民族的理想を追求するアフリカ人大衆の闘争に組み込まなければならない。なぜなら、我々は、新しい国を建設し、新しい歌をうたうためには、枷にはめられた民衆のエネルギーを解き放つような社会機構の形態を確立するために努力しなければならないからである。おそらく、アフリカ人作家は、この闘争の背後に潜む感情をいささかなりとも表現するうえで役立つことが出来る」¹⁰²⁾。

ヨーロッパ人批評家は、このような意識、使命感に支えられた20世紀アフリカ文学を、社会学的・政治学的ドキュメントとみなし、文学とは程遠いと言うかもしれない。アチェベは、以下に紹介するように、それを見抜いていた。アチェベの次の言葉を思い出そう。彼は、作家と民衆との繋がりを強調し、個人の内面の追求に明け暮れる西欧現代文学の空虚さを指摘している。

「西欧文学は、個々人の自律という理想を求めるうえで、中心的な役割をはたした。(ライオネル・トリリングが指摘したように)、西欧文学は、この150年間に『自己の実存の場である文化に対して、激しく、敵対的な想像力を抱いてきた』。西欧文学は、社会と文化を、まるで刑務所 (prison-house) に見立て、個々の人間は、自らの空間を見つけて、自己実現をはかるべく、そこから逃亡しなくてはならないとした」¹⁰³⁾。

「文学の領域では、西欧と、それに追従する地元の狂信者から、我々が書いているようなアフリカ小説は、小説などではまったくないと言われてきたことを思い出す。それというのも、封建ヨーロッパの衰退と資本主義の勃興によって誘発された個人の自由という新たな精神風土に対する特別な反応として、ある時期に誕生し、特化されたこの文学形式に対して、アフリカ小説は馴染まないというのである。この形式は、社会問題よりも、個々人の問題を扱うものだと言われてきた」¹⁰⁴⁾。

ギリシア・ラテンの古典古代はもちろん、西欧近代においても、文学の圧倒的部分は、常に持てる階級、したがって現状の維持を図る保守的な支配層の財産だった。そこでは、作家が社会的なコミットメントに興味を持たないか、エネルギーを失った結果、文学や芸術は、社会変革の力を持つことはなく、民衆

とは直接かかわらない形式になってしまった。

これに対して、現代アフリカ文学は、20 世紀アフリカ・ナショナリズムの重要な一翼、もしくはその産物であることは誰もが認識していよう。したがって、文学はイデオロギーの独特な表現形態であると言い切っても間違いはないであろう。しかし、「政治的な」イデオロギーを掲げて、天下国家の問題を論じることが、文学の課題ではないとの考え方も、伝統的（因習的）に支配的である。

いずれにせよ、文学は時代に生きる人間のドキュメントである。人間の創造力（想像力）は、真空状態で成長発展してきたものではないだろう。ヨーロッパによる奴隷制、植民地支配、そして独立後の新植民地状況に対抗して、現代アフリカ文学は育ってきた。このことは、現代アフリカ文学の一、二の作品を読むだけで、容易に理解できる。特定の社会的、政治的、経済的諸力によって、アフリカ文学はその推進力、形態、方向、そして関心分野を与えられてきた。創造的（想像的）文学とこれら他の社会的諸力との関係は、特にアフリカでは無視できない。

かつて、アメリカ黒人文学について、ソンダース・レディング¹⁰⁵⁾が「必要性の文学」と規定したが、筆者もまた、20 世紀アフリカ文学の主流を「必要性の文学」と呼びたいと思う。次の文章は、この考え方を支持・確証してくれるであろう。

「アフリカ人作家は、孤高を保って、社会を眺め、その弱点を照射するだけでは十分でない。作家はこれを乗り越えて、植民地主義諸国によって引かれた伝統的な権力図をすでに打ち壊した革命的闘争の淵源と大義と潮流とを発見しなければならない。これはアフリカに限ることではない。南北アメリカから、アフリカ、中近東を横切ってアジアの端に至るまで、世界中のいたるところで、搾取されている大衆が自らの権利を主張している。作家もまたこの闘いと無縁ではない。その淵源に身を投ずることで、作家は、一時的な反動の力に苦しむことはあっても、絶えることなく 20 世紀の相貌をかえつつある闘争に対して道徳的な方向と展望を与えることが出来る」¹⁰⁶⁾。

⑬ アフリカ文学の目的

ここまで述べれば、文学の目的はおのずから明らかであろう。作家は、人間と社会をトータルに描かなくてはならない。「文学は、ある社会が自らの環境をつくり、自らを建設する際の闘いのすべてを反映する」のである。

「作家は人を楽しませるだけでなく、社会をより良いものに変革するために書かなくてはならない。社会の現実を写すことだけに興味を向ける作家が多くいる。つまり明日何が起きるかということには関心のない作家である。現実を写す限り、現状（Status quo）を受け入れる作家だ。今日のアフリカでは、単に抗争を写すだけでは満足できない。何かを暗示しなければならない」¹⁰⁷⁾。

ギニアのセク・トゥーレが、かつて文学者の責任について、以下のように語ったことがある。リーズの同僚学生が、これを引用して、あるインタビューで、グギに尋ねた。

Q. 「『アフリカ革命に参加するには、一つの革命的な歌を書くだけでは充分ではない。この革命を民衆とともに遂行することが必要だ。民衆とともにである。そうすれば、歌はおのずから生まれるだろう。真正の行動をなすためには、自分自身がアフリカとアフリカ思想との、生き生きとした一部分になることが必要だ。アフリカの解放、進歩、幸福のために、全面的に動員されたあの民衆のエネルギーの、一分子となることが必要だ。芸術家にせよ知識人にせよ、アフリカならびに苦悩する人類の偉大な戦闘に自ら参加していない者、民衆とともに全面的に動員されていない者にとって、この唯一の先頭の外部に占めるべき座はひとつもない』。あなたは、この意見をどう思いますか」。

A. 「もちろん賛成である。文化について語るだけでは充分ではない。その文化を享受できるような条件を作り出すことが、もっと重要である」¹⁰⁸⁾。

別の所では、次のように述べている。

「アフリカ人作家は、たえず変化しつつある現実世界に、書くべきことがたくさんある。創造的文学は、創造的でなければならない。探求的であると言う意味だ。同時に、美は社会的現実に関係していなければならない。人が飢えていたら、その人にはジャズや詩、小説やベートーベンは無縁だ。換言すると、アフリカ人作家は、現状では、社会に対して、社会的責任を負うべきであるということだ。芸術のための芸術と言った問題は存在しない。現在のアフリカの社会的・政治的諸問題に、私は関心がある。私は、アフリカに変化が起きるのを見たい」¹⁰⁹⁾。

⑭ 危機の自覚：言語の問題

1962 年、マケレレ大学時代に開催された「英語で書くアフリカ人作家会議」については、第 2 部で述べた。この時、これに参加したナイジェリアの作家・

批評家オビ・ワリが、後日『トランジション』誌第3巻10号(1963.9)に「アフリカ文学の末路」と題して寄稿した文章に、次の一節があった。

「現在、理解され、実践されているがごときアフリカ文学は、ヨーロッパ文学の主流の単なる一支流にすぎない。・・・この種の文学の結果は、血液と活力を欠き、豊かに成長する手だてを何一つ持たないものである。それは、ヨーロッパの文学と文化に没頭しているアフリカの新しい大学の、ヨーロッパ志向の、ごく少数の卒業者だけに厳密に限られており、ヨーロッパの伝統に倣った方法では、ほとんど、あるいは全く教育を受けておらず、しかも圧倒的多数を構成している地元の一般読者には、参加する機会が全くない文学である。・・・これらの作家と西洋の仲介者（注、出版社のこと）が、真のアフリカ文学はアフリカの言語で書かれなければならないことを認めない限りは、彼らには、不毛と非創造性と欲求不満の末路しかないであろう。・・・とどまるところ、文学とは、言語の可能性を搾取することなのである。この種の発展を切実に希求しているのは、消耗しきったフランス語や英語でなくて、アフリカの言語なのだ」¹¹⁰⁾。

この見解は、当時のアフリカ文学の代表作家たち、アチェベやムパシエーレ、ショインカらから、即座の一斉攻撃を受けて、その後長く無視ないし冷視されてきた¹¹¹⁾。

この問題との関連では、比較的早い時期に、アフリカ文学研究の泰斗、ナイジェリアのアビオラ・イレレ教授が、ヨーロッパの言語で書かれるアフリカ文学に独自の個性の確立のために、伝統的な口承文学形式との繋がりを訴えるなど、当時としては斬新な見解を出した。

「ヨーロッパの言語によるアフリカ文学が、その内容においてだけでなく、ある程度までその形式においても、同じ言語による旧宗主国の文学との区別立てを自己主張していることに、(すでに) 気づいている人がいるかもしれない。その独自性は、わが作家たちが、アフリカ的なテーマや主題、そして民間伝承の諸要素に訴えるだけでなく、伝統的なアフリカ文学の形式上の諸特徴に由来する、文体の斬新さをも武器とすることから来ている」¹¹²⁾。

イレレ教授は、口承文学の形式と、それに固有の文体に注意を喚起し、口承と記述を繋ぐことを提唱しているが、作家の使用言語の問題については、一歩も踏み込んでいない。

リーズ大学時代に、『一粒の麦』を書き上げたが、その直後に受けたインタビ

ューで、グギは次のように語っている。使用言語に関する、彼自身の最初の発言として注目できる。

Q：「ほかに、ご執筆の計画は？」

A：「今のところ、計画はありません。私は、ある危機を迎えています。これ以上、英語で書くことに意味があるかどうかわからないのです」。

Q：「狭いナショナリズムに走るのではないでしょうね。あなたの読者を限定するのではないでしょうね」。

A：「言葉で説明するのは難しい。私は、普遍的価値について書くことに疑問を感じています。普遍的価値というものがあっても、それらは何らかの社会的現実の枠の中に含まれます。アフリカの一つの重要な社会的現実は、90%の人々が英語を読まないし、話さないということです。問題はこうです。誰のことを書いているかはわかりますが、誰のために書いているのか、私にはわからないのです」¹¹³⁾。

アフリカ人作家は、英語やフランス語、あるいはポルトガル語など旧宗主国の言語を使用することが無条件に運命づけられていると思い込んでいたことへの反省が、作家としての危機意識を生み出したのだった。アフリカ人作家の使用言語について、この時点から、ある見通しを将来に描いていたと言うべきであろう。

Ⅲ. ナイロビ大学在職時代

リーズ留学を終えて、ケニアへ戻ったのは1967年7月だった。同年10月から69年3月に辞職する¹¹⁴⁾まで、最初のアフリカ人スタッフとして、ナイロビ大学文学科で特別講師を務めた。70年から71年までは、ノースウェスタン大学客員准教授として渡米、アフリカ文学を教えたが、71年8月、ナイロビ大学文学科へ復職した。73年4月に上級講師に昇任、アフリカ人として最初の文学科長を兼任した。76年12月、准教授に昇任したが、77年12月31日に拘引されたのだった。

したがって、ナイロビ大学在職は、初めは18ヶ月、アメリカからの帰国後は77ヶ月、合計7年11ヶ月となる。この間に、評論集『ホームカミング』(1972)、短篇集『秘めやかな生活』(1975)、ミシェレ・ギザエ・ムゴとの合作劇『デダン・キマジの裁判』(1976)、小説『血の花弁』(1977)などを発表し、先に詳述したように、地元リムルでのコミュニティ演劇活動に専念するなど、常に話題の中心であり続けた。

ここで、ナイロビ大学在職時代の作家活動以外の出来事、あるいは仕事として、二つを特記しておこう。一つは、旧名ジェームズ・ジオンゴ・グギ (James Thiong'o Ngugi) から現在のグギ・ワ・ジオンゴ (Ngũgĩ wa Thiong'o) への改名の経緯である。もう一つは、ナイロビ大学英文科の改革に関することである。

① キリスト教を捨てる：改名

1970 年 3 月までは、James Thiong'o Ngugi の名で知られたことは確かである。この時までの著作には、J. T. Ngugi もしくは James Ngugi と名前が表記されている。大学などでは、同僚や学生から Professor Ngugi と呼ばれるのが普通で、一方、リムルへ戻ると、村の年配の老人などを含めて、ごく親しい人々の間では、キリスト教洗礼名 James、もしくは、(特に、年配層からは) Wa Thiong'o (ジオンゴの息子) が呼び名として使われた。何時からギクユの伝統的な命名法にならって、Ngũgĩ wa Thiong'o (ジオンゴの息子グギの意) に改名したかを特定することは、厳密には不詳であるが、この表記が評論集『ホームカミング』(1972) で初めて使われた (ただし、Ngũgĩ でなく Ngugi と表記)。ちなみに、グギ・ワ・ジオンゴへの改名の法的な届け出は、1977 年 9 月 21 日付で受理されている。

改名は、単なる名前の変更でないことが重要である。改名は、アフリカにおけるキリスト教、および教会権力についての認識のあり方に基いている。改名に至る経緯については、当時ナイジェリアのイフェ大学で教えていたアフリカ文学研究家イメ・イキデー (Ime Ikiddeh, 1938~2008) ¹¹⁵⁾ が、『ホームカミング』に寄せた「序文」(Foreword) に次のように書いている。

「『私は教会関係の人間ではない。私はキリスト教徒でさえありません』。これは、1970 年 3 月 12 日、ナイロビでの東アフリカ長老派教会第 5 回総会に招かれたジェームズ・グギが、冒頭で発した人を驚かせる言葉だった。この時のスピーチは、『教会・文化・政治』と題して本書に収録されている。彼がこのスピーチを終えるか終えないうちに、怒りを抑えきれなくなったかくしゃくたる老人が、演壇に詰め寄り、威嚇するように前方に向けて杖を振りかざして、ただちに懺悔せよと警告した。この老人は、恥知らずな背教と神に対する冒涇にもかかわらず、この話し手は厳然たるキリスト教徒であり、そのファースト・ネームが隠せぬ証拠であると付け加えることを忘れなかった。この時まで、グギは、指摘されたこの矛盾を真面目に考えることがなかった。後になって、たしかに老人には言い分があると思った。かくして、この不幸な矛盾とも言うべき洗礼名ジェームズは捨てられた」¹¹⁶⁾。

アライアンス高校の時代に、彼が熱心なキリスト教徒であったことは先述した。いつの時点でキリスト教を捨てたかは明らかでない。ある日、突然キリスト教を捨てようと思決意したわけではなく、マケレレ時代に徐々にキリスト教の実践から遠のいたと言う¹¹⁷⁾。しかし、リーズ時代の次の発言を知れば、植民地期のミッション・スクールとそこで教えた教員について、その当時に、彼が何を考えていたかがわかる。

「歴史的役割から見て、ミッション・スクールは植民地支配の先導役でした。ヨハネがキリスト、つまり植民地統治に道を開いたのでした。・・・白人、宣教師はとても親切で、穏やか、人を助けることに熱心でした。しかし、そのやり方はすこぶる温情主義的でした。校長は、アフリカ人びいきだと言われていました。しかし、彼は、ケンブリッジに入学できるほどの才能あるケニア人は、この国には一人もいないと信じていましたし、しばしばそう語っていました。アフリカ人であることから、ケンブリッジに受け入れられることがあるかもしれないが、才能を認めたからでなく、ジェスチュアにすぎないと言うのです。もちろん、我々は異論を唱えましたが、心の中ではその通りに違いはないと信じ、無意識のうちに、白人の少年は偉いのだと思っていました」¹¹⁸⁾。

さて、「教会・文化・政治」に関する講演で、彼は、現代アフリカにおける教会の役割について話した。その趣旨を辿ってみることは、ケニアだけでなく、広くアフリカにおけるキリスト教、そしてキリスト教伝道の功罪を知るのに役立つであろう。多くのケニア人の生活に、キリスト教会、ないしキリストの教え（聖書）は、広く深い影響を及ぼしてきた。ただし、ここでは制度、機構としての教会組織、ないし教会権力について話している。個々の信者や、聖書の教えを取り上げているのではないことを注意しておこう。

植民地支配は、「支配」と「従属」の境界線を軸に、人種・民族間のあらゆる不平等と差別の上に成立するものとの基本認識がある。アフリカの植民地化は、黒人による白人への絶対的服従が前提となっていた。キリスト教が説いてきた愛と平等の教えは、とうぜん植民地支配の精神と相反するはずである。教会権力は、キリスト教を「文明化の力」として、アフリカ人を「白人の重荷」(Whiteman's burden)として「救済する」任務を使命として自らに課したのだった。その結果、教会権力は植民地支配という「社会的・政治的暴力」の宗教的な協力者・必要部分・補完力となったとの認識が生じる。

伝道団と植民地侵略が一体となるのに時間はかからなかった。白人入植民は、

アフリカ人から土地と労働の産物を奪い、伝道団はアフリカ人から魂の自由を奪った。ミッション教育は、アフリカ人の間に、聖書を読む能力を養い、初期改宗者の多くが伝道団のアシスタントになった。ミッション教育を含めて、植民地期の教育は、アフリカ人にとって、より良い仕事、より高い俸給、より恵まれた社会的地位への梯子となった。宣教師は、多くの場合、アフリカ人の労働力を利用する大地主となり、家畜を飼い、農園を経営した。「ヨーロッパ人と宣教師の間に相違はない」(Gutiri Muthungu na Mubia)¹¹⁹⁾とのギクユ語の表現の通り、教会と入植民社会は同じものだった。

その具体例の一つが、ガンダ王国 (Buganda) のムテサ王 (Mutesa) の宮廷の実質支配を目論んだカトリックとプロテスタントの抗争だった。実際には、それはウガンダの支配をめぐるフランス資本主義とイギリス資本主義の闘いでもあった。アフリカ人の魂に福音をもたらそうとするよりも、ガンダ国王カバカ (Kabaka) の政治的実権を骨抜きにしようとの欲求、カバカを自己の勢力圏に組み入れようとの欲求が露骨に見えていた。伝道団、入植民、植民地行政官は、たがいに協力し、誰もがヨーロッパ帝国主義の代理人として奉仕した例は、枚挙にいとまがない。

キリスト教は、アフリカ社会に変化を誘発し、伝統的な部族機構、社会規範を崩壊へと導き、ヨーロッパの価値・白人の生活様式を押し付けた。女子割礼の禁止はその代表的な一例であった。その結果、伝統的な慣習をどれだけ捨てることが出来たか、ヨーロッパ中産階級の価値・行動様式をどれだけ取り入れることが出来たかが、アフリカ人の文明化の指標となった。

ゲギは、次のように述べている。

「キリスト教の受容は、とりもなおさず、アフリカの慣習を完全に拒絶することでした。私たちを一つにまとめ上げていた価値や儀礼を拒絶し、結果的には、ヨーロッパの中産階級の生活様式や行動を採用することでした。ヨーロッパ人の宣教師はアフリカ人の儀礼を原始的なものとして攻撃し、美しいアフリカのダンス、神の観念などは、悪魔的な好色を示唆しているものとして、非難しました。初期のアフリカ人改宗者も宣教師と同じで、時にはもっと熱心に、これらを非難したものです。アフリカ人は、自分の過去の根っこを拒絶することで、キリスト教徒になったことを証明しなければならなかったのです」¹²⁰⁾。

キリスト教は、植民地的搾取の目隠しの役割も果たした。アフリカ人から

見れば、「眼を閉じて、祈れと教えられた。次に眼を開けると、土地が奪われていた」と言うのは本当であろう。「この世はわが住処にあらず、私たちは巡礼者だ」(Thĩ ĩno ti yakwa ndĩ mwĩhĩtũkĩri) ¹²¹⁾ と言うのである。

50年代の「マウマウ闘争」は野蛮で、キリスト教の教えに敵対するものだと教えられた。教会は、「テロリスト」の「蛮行」に反対したが、植民地権力が振るう「暴力」、繰り返された「討伐遠征」や「大量虐殺」は、「文明化のための権限」として反対することはなかった。独立教会の誕生、そしてマウマウ戦争の独特な宗教面は、伝道団が引き起こしたアフリカの伝統的価値との間の、文化的・宗教的抗争の直接的な蹉跌でもあった。しかし、このことを多くの者が認めようとはしなかった。

さらに、聖書を引き合いに出して、次のように述べている。

「キリストは常にユダヤの大衆に味方して、パリサイ人（独善家、偽善者）とローマ人の植民者と闘ったのでなかったか。ここで、パリサイ人とは、アフリカ人の特権ブルジョア層のことである。ともかく、キリストは、ローマ人の征服者の命によって磔にされた。もし、キリストが1952年のケニア、あるいは今日の南アフリカ、あるいはローデシアに生きていたら、おそらく、マウマウのテロリスト、もしくは共産主義者として磔に処せられたことだろう。教会は、当時、植民地主義者のカエサルによる抑圧に沈黙し、武器を取って抑圧と闘った民衆に敵対した」 ¹²²⁾。

「教会は、白人のカエサルが悪事を働くはずがない。白は善、黒は悪で間違っている」と言いたげであった。伝道団は「権力に従え」と説いた。「カエサルのものはカエサルに返すべし」とも教えた。「どれほどカエサルが墮落していても、アフリカ人キリスト教徒はカエサルに服従せよと教えられたのである」 ¹²³⁾。

カエサルとは、言うまでもなく、植民地権力のことである。

独立後、アフリカにも土地の獲得とビジネスの成功に躍起となるような中産階級が生まれた。ケニア社会にも、国家の経済的富の分配において、明らかな階級的分裂が生じた。持てる者と、持たざる者が歴然と生み出された。この状況下で、教会は、官僚的、商業的な中産階級エリート、外国資本の代理人として活動している層と提携しているのが実態である。たしかに、ヨーロッパにおいても、教会と宗教指導者は常に支配階級と結びついてきた。教会が、民衆の抱負と信条を代表してきたかどうかは怪しい。

したがって、アフリカにおいて、キリスト教会の最大の危機は、社会的コミットメントの仕方にあると言えよう。歴史的に見ても、教会は奴隷制度を正当化してきたし、南アフリカにおいては、アパルトヘイトを許容するばかりか、助長してきた。

グギは、キリスト教権力を批判しながら、全面的にキリスト教を排除しているわけではなさそうである。アフリカにおけるキリスト教、キリスト教会の今日的使命として、次のような課題を提起している。

「過去において、教会が、アフリカ人の魂を歪め、文化的疎外を誘発させたとしたら、その反省の上に立って、教会はアフリカの文化的統合のために今こそ活動すべきではないか。教会は、壊されたアフリカ文明のルーツに立ち戻らなければならない。たとえば、アフリカの伝統的な結婚、犠牲の供し方について、なぜ、それらが伝統アフリカ社会では意味があり、健全なこととされたのか。ムンドゥ・ムゴ（Mündū Mūgo, 伝統医、魔法医）や雨乞い師の秘密とは何だったのか。アフリカ人にとって、山々、月、木立、ムグモの木とは何だったのか。太鼓、ダンス、儀礼的飲酒、誓約儀礼とは何だったのか」¹²⁴⁾。

アフリカのキリスト教会は、新たなヒューマニズムの精神に立って、アフリカ人が独自の文化を構築する闘いを助けることが出来るとの可能性に期待しているようである。そのためには、「我々は古い神殿を壊し、新しい神殿を建てる必要がある」¹²⁵⁾ と言うのである。

② 英文科の改革

グギはナイロビ大学の英文科に革命的な変化を持ち込んだことでもよく知られている。これは、当時同大学アフリカ研究プログラムに所属していたヘンリー・オウール・アニュンバ（Henry Owour-Anyumba, 1933~1992, カンバ人、口承文芸、カンバ音楽の研究家）、タバン・ロ・リヨン（Taban lo Liyong, 1938~, 南スーダン、作家・詩人）との共同の努力であった。ここで革命的变化というのは、従来の英文科の廃止、シラバス内容の全面的刷新、アフリカ中心志向を指している。この改革は1968年に始まり、翌69年にかけて実施された。

植民地末期から独立直後にかけて、グギが学んだ頃のマケレレ大学は、東アフリカで一番古く、英文学の学位を与えることの出来る唯一の大学だった。教育課程は、アライアンス高校に続く植民地教育の延長だった。教育は、「アフリカで起きていることとは全く、あるいは少ししか関係がなかった。小説や戯曲

で、英国人のことを学んだ。その場合でも、社会的な問題として学ぶのではなく、自分ではどうすることも出来ない状況に置かれた人間の普遍的価値とか、悲劇を学ぶのだった」¹²⁶⁾。

これと同じ教育内容が、独立後のナイロビ大学英文科¹²⁷⁾にも引き継がれていた。したがって、同大学英文科の改革は、こうしたイギリス文学中心の教育課程の反省に立っている。先の三人は連名で「英文科の廃止について」(On the Abolition of the English Department)と題する歴史的な文書を、1968年10月24日付で提出した¹²⁸⁾。これは、ほぼ1ヶ月前に、英文科長から第42回文学部評議員会へ提出された文書に対するコメントとして出されたものだった。

その結果は、画期的な波紋を投げた。1968年から翌年にかけて文学部内での徹底的な論議を経て、専門委員会が立ち上げられた。委員長には、スワヒリ語学者として世界的に著名なW. H. ホワイトリー教授(ロンドン大学東洋アフリカ研究所。当時は、ナイロビ大学、ダルエスサラーム大学へ出講していた)¹²⁹⁾が就任した。1969年、新シラバスの概要が決まり、1970年に学科名称が改まり、新たに二つの学科「文学科」と「言語学・アフリカ語学科」が発足した。

ここに至るまでの経緯を遡って、やや詳しく見ておこう。

東アフリカ大学(University of East Africa)が組織的連携を解消し、ウガンダのマケレレ大学(Makerere University)、タンザニアのダルエスサラーム大学(University of Dar es Salaam)、そしてケニアのナイロビ大学(University of Nairobi)に分岐したのは、先述した通り、1970年だった。それぞれが、新生独立国家の、独立した個別の大学としてスタートする直前の1968年9月20日付で、当時の英文科長ジェームズ・スチュアート博士が、学科の発展に関する提案を文学部評議員会に提出した。提案の前文に、以下のように書かれていた。

「この大学の英文科は長い歴史を持ち、西欧近代の台頭期に見られる単一文化の歴史的連続性を研究することで、歴史と哲学と宗教研究の重要な手引きともなる堅実な講義体系を打ち立てた。しかしながら、よりイギリス的なものをなくし、比較研究の目的上、英語で書かれた文学(アメリカ、カリブ海、アフリカ、コモンウェルス)、さらに大陸ヨーロッパの文学にも門戸を開かなければならない」¹³⁰⁾。

1ヶ月後の10月24日、グギを含む三人のアフリカ人スタッフが、この提案

に対して、当時のままでの英文科の存続に異議を唱えた。彼らは、イギリスの伝統と西欧近代こそが、ケニアおよびアフリカが根をおろすべき文化遺産の中心であるとの基本的前提に疑問を投げつけた。アフリカは西洋の延長であるとの根本的な前提を拒否したのである。彼らの疑問は次のようなことだった。

『『単一文化の歴史的連続性』の研究が必要であるならば、なぜ、それはアフリカたりえないのか。なぜ、アフリカ文学・文化を中心にすえて、他の諸文学・文化をこれとの関連で考察しないのか』¹³¹⁾。

その結果、後日「ナイロビの文学大討論」¹³²⁾ と呼ばれることになる大混乱が、文学部だけでなく、大学全体を巻き込んで始まった。「イギリス文学の偉大なる伝統」が初めて挑戦を受けたのだった。

三人のアフリカ人スタッフは、次のように主張した。

「我々は、イギリス文学とイギリス文化の優先的地位を拒否する。その理由は、我々自身をケニア、東アフリカ、そしてアフリカの中心に位置づけるためである。他は、我々自身の環境との関連性と、我々自身の理解に役立つかどうかによって考慮されるべきである。・・・このように提案したからと言って、他の潮流、ことに西洋の潮流を拒否しているのではない。我々は、アフリカの大学で、文化や文学の研究が当然とるべき方向と展望を明確にしているにすぎない」¹³³⁾。

「我々は、この学科にアフリカの中心的地位を確立したい。我々の論点を正当化する根拠はたくさんあるが、最も重要な点は、教育とは自己に関する知識を獲得する方法だということである。つまり、我々は自分を検証した後で、外に向かい、我々を取り巻く諸民族や世界を発見するのだ。外国や外国の文学の付属物、衛星となるのではなく、アフリカを中心に据え、アフリカの展望から物事を眺めなくてはならない」¹³⁴⁾。

この声明の後、先に述べたように、二つの新学科が生まれた。それぞれの学科で、アフリカ言語、アフリカ文学がカリキュラムのコアとなった。文学科ではカリブ海文学とアメリカ黒人文学も強調された。

以上は、単にケニアのナイロビ大学だけでなく、独立アフリカ諸国の大学、特に旧イギリス領諸国の大学文学科（英文科）の役割と位置についての基本的認識に関する大胆な問題提起であった。

英文科長の提案は、学科の目標を「単一文化（西欧近代）の歴史的連続性」の研究にあることを再確認しながらも、その **British** 的性格を少なくし、英語で書かれる他の地域の文学（アメリカ、カリブ、アフリカ、コモンウェルスなど）にもっと道を開けようというものであった。

しかし、この考え方の前提には、英文学の伝統こそが西欧近代の出現と裏腹であり、それらがアフリカ人の意識と文化遺産の中心的根っこだという暗黙の了解があった。アフリカは西洋の延長であるということが暗黙裡に了承されていたのである。アフリカ人の文学活動については、英文科のシラバスに、時間と金が許す範囲で潜り込ませようという意図であった。

ここで浮かぶ疑問は「単一文化の歴史的連続性」の研究を云々するのなら、アフリカ人にとって、なぜそれがアフリカ文化ではありえないのか、なぜアフリカ文学が中心に来ないのかと言うことであった。

アフリカ文学は、アフリカの文化的再生のなかで重要な役割を果たしつつあったし、カリブ海文学、アフロ・アメリカ文学とは切り離せない姉妹関係にあるとの認識があった。「我々は、英文学とイギリス文化の優先位置を拒否する。我々は、ケニア、東アフリカ、次いでアフリカを中心に位置づける」という主張のもとに、英文科を廃止し、代わりに、アフリカ文学・言語学科の設置を提唱したのだった。

彼らは、現代アフリカ文学の範囲として、①フランス語、英語で書かれる小説 ②フランス語、英語で書かれる詩 ③ポルトガル語、スペイン語で書かれるものの翻訳 ④カリブ海の小説と詩 ⑤アフロ・アメリカ文学を重要視した。また、アフリカ文学の伝統として、ギクユ語、カンバ語、ルオ語など民族諸言語への視野が開かれ、それらの民族諸言語による伝統的な口承文学は、最重要のルーツであるとされた。演劇、踊り、歌、昔話、神話などの社会的役割を多方面から考察する必要も説かれた。

「口承伝統は豊かで、多面的である。・・・この芸術はきのう息絶えたのではなく、生きている伝統である。・・・口承文学の知識は新たな構成と技法を示唆し、進んで新しい形式を実験させるような心的態度を育むことが出来るだろう。・・・したがって、口承伝統の研究は、現代アフリカ文学の諸科目を（代替するのではなく）補完するものとなるだろう。土着の諸価値を発見し、それに対して忠実であれば、新しい文学は、それが属する歴史の流れの中に位置づけられて、いっそう正しく評価されるだろう。他方では、自らの根

っこを失うことなく、他のさまざまな思想をいっそう正しく吸収同化するだろう」¹³⁵⁾。

スワヒリ語、英語、フランス語の知識が必須であるとされた。スワヒリ文学の伝統は、もう一つのルーツであることが確認された。英文学、フランス文学だけでなく、ロシア文学、ドイツ文学などの重要性も指摘された。

以上、要するに、「アフリカを中心に置く」(Afro-centrism) ことが提唱されたのである。アフリカは、地球のどこか別の地域の付属物でないし、衛星でもない。教育とは、第一義的に、自分自身を知る手段であり、したがって「アフリカから世界を見る」ことが大切だと言うのである。

IV. アフリカの言語宇宙を開く

南アフリカや西アフリカなどの場合と比べると、英語やフランス語などヨーロッパの言語（植民地宗主国の言語）で書かれる文学（特に小説）の出発が、数十年も遅かった東アフリカは、第二次大戦後においても長く「文学不毛の土地」¹³⁶⁾と呼ばれてきた。もちろん、この言い方は間違っており、たとえばスワヒリ語で書かれる文学伝統は古くからあり、それはヨーロッパ人の到来よりはるか以前に遡るのである。

しかし、二つの世界大戦の以前も以後も、20 世紀アフリカの政治的・文化的なナショナリズムを唱導したのは、ほぼ誰もがヨーロッパの言語で教育を受け、宗主国の言語と文化に位置づけられた一握りの教育エリートであった。彼らが、たとえばスワヒリ語などの内発的な文学伝統を軽視、もしくは無視したのも無理はない。彼らの視線は、西欧近代、特に旧宗主国の言語と文化に焦点を結んでいたのである。したがって、20 世紀のアフリカ・ナショナリズムは、もっぱらヨーロッパの言語で語られた。しかも現代アフリカ文学は、そうしたナショナリズムの副産物でもあった。

その東アフリカで、1964 年に最初の英語小説『泣くな、わが子よ』(*Weep not, Child*) を発表し、アフリカ文学史で栄えある位置に立つグギ・ワ・ジオンゴ（当時はジェームズ・グギと称していた）が、小説第 3 作『一粒の麦』発表直後に、英語で書くことへの疑問、少なくとも不安の感情を初めて吐露したのは、1967 年のことだった。それから約 20 年、1986 年には、同じ問題について、次のように述べている。

「アフリカ人作家は、英語やフランス語ほか、旧宗主国の言語を表現手段として使用

するものとの前提があった。私自身もそうした作家の一人であった。私が素晴らしいと思う作家たち、アチェベ、ラ・グーマ、エイブラハムズらは誰もが英語で書いていた。「大部分の作家を含めて、アフリカの教育エリートにとっては、植民地宗主国の言語で書くことのほうがむしろやさしかったのだ。それというのも、彼らにとって、それらの言語は、教育の言語であり、したがって概念作用の言語であり、身のまわりの世界を知的に理解させてくれる言語でもあったからである」¹³⁷⁾。

1967 年と言えば、名作『一粒の麦』(*A Grain of Wheat*) によって、アフリカ人作家として、いよいよ国際的舞台上で確固たる地位を確立した矢先だった。後年、1962 年のマケレレ大学での「英語で書くアフリカ人作家会議」の後、翌年にナイジェリアのオビ・ワリが『トランジション』誌で突き付けた挑戦「アフリカ文学の末路」(*Dead End of African Literature ?*) がこうした疑問の契機となったこと、しかも、リーズ時代も、それ以後も、この疑問がつきまとして離れなかったと述べている¹³⁸⁾。

かくして、さらにその 2 年後、セネガルで開催された 1969 年度のユネスコ会議への基調報告の一部として、「民族文化のために」と題する論文を発表し、そこで言語問題を特に強調することになる¹³⁹⁾。その論調には、アフリカ人作家の使用言語についての、その後の彼の思考展開の原点が認められる。[この記念すべき論文の全訳は、アフリカ文学研究会訳『アフリカ人はこう考える—作家グギ・ワ・ジオンゴの思想と実践』(第三書館、1985) に収録されている]。

「われわれの文化的再生にとって同じく重要なことは、アフリカの諸言語の教育と研究である。われわれは、どんな植民地体制も、従属させた諸民族に自己の言語を強制し、それによって、その民族の母語を貶めたということをすでに見てきた。そうすることによって彼らは、彼らの言語の習得を一つのステイタス・シンボルとするのである。白人の言葉を学んだ者はだれもが、いなか者である大多数の者とその粗野な言葉を軽蔑しはじめる。選びとった言葉の思考方法と価値観を身につけることによって、彼は自分の母語の価値観から、すなわち大衆の言葉から疎外されるのである。つまり言葉とは、民衆によって造られる価値観を、時代を越えて運び伝えるものなのである。人口の 9 割までがアフリカの言語を話す国において、それらの言語を小学校、中学、高校や大学で教えないというのは実におろかなことだと思われる。われわれは国民の共通言語を発展させる必要があるが、それは地元諸言語の恐るべき犠牲によるものであってはならない。・・・我々自身の諸言語の研究が豊かな自己像の形成にとって肝要であるという認識は高まりつつある。・・・アフリカの諸言語の研究が進めば、当然、より多くのアフリカ人が自分の母語で書くことを望むようになるだろう。そして、我々の創造的な想像力に新たな大道

が開かれることだろう」¹⁴⁰⁾。

さらに、それから 2 年後、1971 年には次のように述懐している。

『『一粒の麦』を書いた当時、私はこの小説を育ててくれた人々、つまり農民階層の人々が、この小説を読めないということに心を痛めた。それで、もはや何も書く気になれなかった。もしかすれば、2 年ほど経てば、ギクユ語かスワヒリ語で書き始めることもあるかもしれない』¹⁴¹⁾。

1971 年という早い時期に、民族語による執筆の可能性を語っていることに驚くべきであろうか。ここでは、60 年代末に、ナイロビ大学英文科の改革論議があったことを思い出しておきたい。今日に至るまでの言語認識と実践は、先の引用文にしっかりと凝縮されているように思われる。この認識を、自らの実践にまで移す決定的な契機となったのが、1977 年以降のカミリズ村でのコミュニティ演劇活動だった。

① スワヒリ語の重要性

ここで大切なのは、多言語・多民族のケニアの一民族語で書くという決意、その実践があるからには、独立国家として、国民の利益のために、国民的レベルでの統合・公共性を担保する言語についての考え方が問われることになる。その場合、ケニアのみならずタンザニア・ウガンダを含む東アフリカ全域にとっての言語的特殊性を活かして、グギは国民的統合・公共性を担保する言語としてのスワヒリ語の重要性を以下のように強調している。

「英語を使用し、英語が今後も長く使われることは自明とされるが、ケニアの文化的基盤の力と深さは結局のところ、アフリカ文化とより近い位置に立つ言語によってアフリカ文化の表現法を喚起するわれわれの能力にかかわっているのである。スワヒリ語はケニアでは著しい、ますます増大する役割をになっており、これまで以上にこの言語の重要性が強調される必要がある。この目的を達成するための第一の措置は十分な数のスワヒリ語教師を育成することである」¹⁴²⁾。

さらに次のような発言もある。

「英語は公用語だ。ケニア人にとっての国際的コミュニケーションの言語だ。スワヒリ語は国民的な超民族語（リンガ・フランカ）だ。このほかに、ギクユ語やルオ語など、各民族（ナショナルリティ nationality）の言語がある。大切なことは、これら三つの言語

が相互に作用することだ。言い換えれば、(ケニア人にとって) 英語はいくつかの外国語の一つであり、スワヒリ語は最も大切な民族語であり、他の民族諸言語はスワヒリ語を補完するのである」¹⁴³⁾。

② 民族語で書く決意

かくして、グギが掲げる最初の疑問はこうである。

「我々は、アフリカの言語を豊かにする方策を問いかけることがなかった。我々の言語を豊かにするためには、どうすればよいのか。なぜ我々自身の言語で文学的記念碑を生み出そうとはしないのか」¹⁴⁴⁾。

「1884年のベルリンはアフリカをヨーロッパ諸国のさまざまな言語に分割した。英語圏、フランス語圏、ポルトガル語圏など。自らの大陸のこのような言語的封じ込めからどう逃れるのか。われわれの言語と文化が、ヨーロッパの言語や文化に支配されているということではないのか」¹⁴⁵⁾。

これらの疑問に対して、以下のような結論が導き出される。

「ケニア文学を発展させたいなら、ギクユ語、ルオ語、カンバ語、ソマリ語、ギリアマ語、もちろんスワヒリ語も含めて、ケニアの民族諸言語で書かれるべきだ。全ケニア人のための最も重要な民族語はスワヒリ語 (all-Kenya national language Kiswahili) であるが、だからといって、他の言語を無視してよいということにはならない。ケニアの全民族集団の全言語は、調和と均衡を保ちつつ、たがいに創造的な関係を結んで存在しなければならない」¹⁴⁶⁾。

「話し手が少ないから、存在する権利もないというような言語があるとは思わない」。ファノンが言ったように「言語を選ぶことは世界を選ぶことである」。そうだとすれば、「言語を選ぶことは、読者を、特に階級を選ぶことである」。「英語で書いて、アフリカの農民のために書いているなどとは言えない。民衆がわかってくれる言語で書くことが重要なのだ。どの言語を選ぶかは、作家が何を言うかにかかわらず、まず読者を選ぶことなのである」¹⁴⁷⁾。

こうして、最終の結論が導き出される。

「ギクユ語やスワヒリ語で小説を書けば、私は農民や労働者と直接の対話を持てることになる。私は農民や労働者が消費できるような文学を生産したい」¹⁴⁸⁾。

③ 批判的意見

だが、アフリカ人作家の使用言語についてのこうした考え方には、熱烈な賛同を示す者もおれば、真向から反対の立場をとる者もいる。そして、後者に立つ者が圧倒的に多いことも真実である。その一例を次に示しておこう。対立する見解は、ここではアチェベから出ている。グギとアチェベの作家人生には、交錯するところが多いが、「言語問題」に関して、筆者はその現場に立ち会った。

1986年7月25、26の両日のことである。アフリカ人作家とカリブ海地域の作家の作品シリーズを刊行してきた HEB 社と、ICA (現代芸術研究所、ロンドン) との共催で、バッキンガム宮殿に近いモール・ストリートの ICA を会場にしてもたれた集会の場であった。この集会は、先の作品シリーズの中の代表的作品の新装版刊行を記念するもので、両地域出身の作家同士の対話や作品の朗読を主な内容にしていた。ここには、イギリス在住のブチ・エメチェタ、ベン・オクリなどが出席していたし、他にヌルディン・ファラ、モンガン・セローテなどがいた。アチェベとグギがいたことはもちろんで、この時グギの紹介で、筆者は初めてアリ・マズルイ (Ali Mazrui, 1933~, ケニアのモンバサ生まれ。現代アフリカの代表的知識人・学者。政治学、南北問題などが専門)、ワングイ・ワ・ゴロ (Wangũi wa Goro, ケニア出身。翻訳理論、社会批評、女性問題などの専門家。グギのギクユ語小説『マティガリ』を英訳した) と出会った。後日、この集会の模様を、二つの短い文章にして、新聞と雑誌に寄稿した¹⁴⁹⁾。

「アフリカ人作家の使用言語の問題をことさら騒ぎたてている者がいる。英語を追放しろ、と叫んで拍手喝采を取り付け、そのあとまだ英語でまくしたてるというのは、まことに結構なことだ」。ナイジェリアの作家チヌア・アチェベの言葉である。小説を発表しなくなってから 20 年も経つが、彼の皮肉な毒舌は衰えていなかった。その口調には、当時までに 300 万部を突破した英語の処女作『部族崩壊』(1958) の作者として、自他ともに認めるアフリカ文学界の第一人者としての自信さえ感じられた。

彼はさらにこう付け足した。「現実の複雑さを示すことが作家の役割なのだ。複雑なものを単純化してしまう典型例が言語の問題だ。何語であれ、書く能力があればそれでよい。バイリンガルであるという利点を、なぜアフリカ人が行使してはいけないのか。しかも、英語がなければナイジェリアは分解してしまうだろう」。

アチェベの考えは、有名なエッセイ「英語とアフリカ人作家」(1965) を書いた頃と少しもかわっていなかった。若いセネガル人が「英語なしにやっていけないというのは、帝国主義なしにはどうにもならないということと同じだ」とフロアからかみついたが、「教

条主義をふりかざしても、言語問題の解決にはならない」とアチェベは応酬し、この反対意見を一蹴してしまった。

集会の最後のプログラムを主宰したのは、アフリカ文学評論家として著名なイギリス人だった。彼は自分が対談を始めるケニア人作家をハムレットになぞらえて紹介せざるを得なかった。ハムレットとは、英語作家としての長い経歴のあと、英語との訣別を「声明」し、民族語で書き始めたグギ・ワ・ジオンゴである。

グギは、「ギクユ語（グギの民族的母語）の通訳を連れて来るべきだった」と述べて聴衆を笑わせてから、民族語での執筆経験と抱負を熱っぽく語り始めた。

彼の論点は、要するにケニアの諸民族のなかの、英語で生活しているような上層部エリートではなくて、民族語を使って日常生活を営んでいる中・下層の人びとの諸問題を扱い、これらの層に直接語りかけたいということである。

グギの考えでは、帝国主義からの文化的解放を求めて闘っているのは、これら中・下層の農民や労働者であり、彼らは民族諸言語を使ってこの闘いを進め、彼らの経験と意識は民族諸言語の内部に蓄積されるのである。

それならば、民族諸言語こそが、帝国主義に対抗する第三世界の「闘いの言語」としての普遍性を主張できる。したがって、この闘いに作家として合流し、そこからインスピレーションを得るには彼らの言語を使うほかに方法はない、ということになる。

もちろん、民族語の選択がただちに帝国主義（新植民地支配）の諸問題の解決に繋がるなどと楽観していない。しかし、それはたたかう作家として決定的に重要な第一歩なのである。彼がアチェベと異なるのは、言語の階級的性格を強調し、先の「状況」に変化をもたらすことが可能だと信じている点である。

2日間の集会を通じて、グギの立場は特に若い世代から圧倒的な支持を得ていたといえる。しかし、既成の作家たちからはついに賛同の声は上がらなかった。ただ、南アフリカの詩人 M.W. セローテが、自分は英語で書くことを止めないが、「グギの実践は、アフリカ人作家の地位をいっそう高めてくれるだろう」と述べたのが私の印象に残った。

さらに別の文章を、「アフリカの文学と言語」と題して、ある雑誌に寄稿した¹⁵⁰⁾。

「犬でさえ、母の乳房はありがたい。他の乳房はうまくない・・・
自分のことばを持たない民族は、どれほど洗練されても、第二級なのだ」
(スワヒリ語詩人シャアバン・ビン・ロバート)

スワヒリ社会では、犬は愛玩される動物ではなかった。爪や唾液が不潔なために、むしろ厭われる動物だった。タンザニアが誇るスワヒリ文学の巨匠シャアバン・ビン・ロバート（1902~1962）は、そんな犬でさえ、生まれた子犬は母犬の乳首を慕い、そこから滋養を吸収して成長すると述べているのである。天賦の詩人のスワヒリ語への愛着がにじみでた文章である。

アフリカ人作家が民族諸言語で書く伝統は、サハラ以南のアフリカに限っても、特に目新しいことではない。スワヒリ文学は、残存する詩篇だけでも 18 世紀初頭までは遡るし、南部バンツー諸語（コーサ語、ズールー語、ソト語、ツワナ語など）の文学は 20 世紀初めに「黄金時代」をむかえ、かなりの数の作家と作品を残している。最近出版されたアルベール・ジェラルド著『アフリカ語の文学』（1981）、同じくジェラルド著『四つのアフリカ文学ーコーサ語・ソト語・ズールー語・アムハラ語』（1971）や、B.W. アンドルゼウスキー他編『アフリカ諸語文学』（1985）などは、アフリカ文化の見直しのために、大陸的規模で民族諸言語による文学伝統を再発見する試みだと言える。

アフリカ人作家が民族諸言語でなく、(旧) 宗主国の言語（英語、フランス語、ポルトガル語など）で書くもう一つの伝統は、現在きわめて優勢であるが、前者の伝統とくらべると、はるかに歴史が浅く、量的に見ても 40 年代初めまではむしろ前者に圧倒されていた。しかし、歴史的事情がどうであれ、現在国際的に名前が知られているようなアフリカ人作家の大多数は民族諸言語で書いているのではない。ナイジェリアの作家チヌア・アチェベがその理由を明快に説明している。

「アフリカにおける植民地支配は多くの混乱を引き起こした。しかし、それは従来の矮小で散在的な政治単位のかわりに巨大な政治単位を生み出しもしたのである・・・。アフリカ人作家は、アフリカの新しい国民国家をつくりあげたのと同じプロセスの産物なのである・・・。世界語で書くことにはたしかに大きな利点がある・・・。私は英語がアフリカの体験の重みを背負うことは可能だと思っている。しかも、それは祖先の土地との接触を十分に保ちながらも、新しいアフリカの環境に見合うように変更された新しい英語となるにちがいない」。

アチェベは民族諸言語による文学伝統を完全に無視してしまっているが、この文章は

現在のフリカ人作家や知識人の見解をほぼ全面的に代弁していると考えてよい。アチェベが言うように、現在活躍しているアフリカ人作家の大部分は、植民地化過程の直接の産物であるか、もしくは非植民地化以後も旧宗主国の言語を使用せざるを得ない「状況」に生きているのである。

彼らは外国語の使用を前提としながらも、作品に民族的色彩を盛り込む方法を案出せざるを得なかった。「新しい英語」や「アフリカン・フレンチ」はそうした方法の一つである。さらに、アチェベや、同じナイジェリアのゲブリエル・オカラ（1921～）などに顕著な傾向であるが、たとえばアフリカのことわざや慣用句の逐語訳が積極的に利用されるのである。

東アフリカ最初の英語小説家として国際的に知られるケニアのグギ・ワ・ジオンゴの場合は、民族的アイデンティティの探求が英語そのものの使用を放棄させてしまった。この作家にとっては、母語であるギクユ語の選択は、単に民族的文化価値の表現のためだけでなく、全アフリカの文化的解放のための一つの戦略として位置づけられている。

ところで、言語はどの民族にとっても集団の経験と歴史意識の貯蔵庫となるものである。アフリカの場合、総人口の約 9 割は外国語ではなく、民族諸言語を使って日常生活を営んでいる。彼らの経験と意識は外国語ではなく、民族諸言語に蓄積されるのである。それならば、作家はとうぜん民族諸言語を使って書き、作品が母語以外の言語に翻訳される以前に、まず自らの民族から読者を獲得するのが当然ではないのか。これは、言語と人間の経験とのかかわりから考えても、疑問の余地のない原則ではないのか。しかし、アフリカ人作家は、この当然と思われる原則を実行し得ない特殊な「状況」に立たされている。

アチェベほか大多数の作家は、この「状況」がアフリカに固有の言語的多様性に起因するもので、動かしがたい前提であると考えた。「英語がなければ、ナイジェリアは解体してしまう」というのが、アチェベの意見であった。一方、グギは、アフリカが経済と文化の全領域で帝国主義（新植民地主義）の支配を断ち切れるならば、この「状況」は変化すると考えるのである。グギにとって、民族語の選択は「状況」を変革するための闘争の武器になっている。したがって、外国語で書かれるアフリカ人作家の作品（グギはこれを「アフロ・ヨーロッパ文学」と呼んだ。最近では「ユーロフォン・アフリカ文学」とも呼んでいる）は、アフリカが帝国主義支配からの文化的解放を勝ち取るまでの過渡期の産物として位置づけられるのである。

④ アフリカ小説の源流

グギは、アフリカ小説の言語の性格について結論を述べるのは時期尚早であるとしながらも、自らの母語であるギクユ語の場合、それは農民階層の豊かな口承伝統に根をはることによって独自の形式と特性を発見できると確信している。したがって、彼の課題は、ギクユの口承伝統にどう結びつくかということであった。それは、彼自身が、ギクユの農民文化一タベの暖炉の周りでの歌、昔話、ことわざ、なぞなぞ—および農民の共同体での人間関係を取り仕切る諸価値の影響下で育ったからである。「農民の文化は、口承伝統によって表現されてきた」「私は、ストーリーテリング社会の産物である」¹⁵¹⁾とも言い切っている。

だが、不安が残った。

「ギクユ語の使用は違った種類の小説を書かせるのだろうか」との疑問である。結局、彼は単純なプロット、いっそう単純明快な語り口、いっそう強力なストーリー要素（つぎに何が起きるか）を採用することになる。「私は口承説話の形式、ことに会話の調子、寓話、ことわざ、歌、さらに詩的な自己賛歌や他者の賛歌をめぐる全伝統を借用した」¹⁵²⁾。

彼は、小説を口頭伝承に仕立てる、つまり炉辺を囲む昔からの物語の伝統、芸術の集団的受容の伝統に結びつけようと試みたのだった。後に次のように述べている。「アフリカ人作家はオラチュアから学ぶことがたくさんある。私はカミリズ村の男女から多くのことを学んだ。アフリカの言語で書かれる文学はオラチュアの伝統から多くを引き出せる」¹⁵³⁾。

こうして彼の小説は、その後もますます口承形式を取り入れてきている。『十字架の上の悪魔』(*Caिताani Mutharaba-inĩ*, 1980)、『マティガリ』(*Matigari ma Njirũngi*, 1986)、『カラスの魔法医』(*Mũrogi wa Kagogo*, 2004) などギクユ語で書かれた小説はすべてが、ナラティブの形式を取り入れたものであり、その技法、時間と空間の扱いの点で、全面的にオラチュアに基礎を置いていると言ってよいであろう。こうして彼は、アフリカ小説の源流を口承文学に辿り、書き言葉 (literacy) と話し言葉 (orality) の一体性を回復させることで、両者の調和、両者がたがいに表象しあう関係、言語生活の正常な関係を回復させようとしたのである。これこそが彼の言う「植民地的疎外」¹⁵⁴⁾ を克服する道であるとされた。

⑤ 「真のアフリカ文学」への道

以上に明らかなように、アフリカの言語で書かれた作品を「アフリカ文学」

と呼ぶ、というのが一応の説明ではある。しかし、アフリカの言語で書けば、「アフリカ文学」が成立すると言うほど、ことは単純ではない。彼が「真のアフリカ文学」と呼んでいるものは、まだその彼方に位置している。それは、アフリカの言語で書かれる文学の内容の問題であり、同時に言語的多様性の中における統一の問題であるが、これについては後述したい。いずれにせよ、「真のアフリカ文学」へ至る道は、ようやく第一歩が踏み出されたばかりであると言うべきであろう。

ひるがえって、「真のアフリカ文学」どころか、たとえば「真のケニア文学」でさへ、これから創造していくべきものであろう。個々の民族語文学は、「真のアフリカ文学」「真のケニア文学」の大河へ流れ込む無数の支流の一つというべきであろう。ここでは、アフリカ諸言語間のコミュニケーション・対話が必要不可欠となる。

「まず、アフリカ諸言語間での翻訳がきわめて重要な意味を持つことになる。長い間、アフリカの諸言語と諸文化はたがいにコミュニケーションをするということがなかった。それらは、英語を媒介にしてコミュニケーションをとってきたのである。したがって、アフリカ諸言語間でのこの種の対話がいつそう強化されれば、英語やフランス語やポルトガル語で書かれる作品以上に、文学はアフリカ内部に住むいつそう多くの読者に届くようになるだろう」¹⁵⁵⁾。

『十字架の上の悪魔』のスワヒリ語訳が出た時、グギは次のように述べている。

「これによってギクユ語とスワヒリ語との間に直接のコミュニケーションが成立した。アフリカ諸言語間のこの種のコミュニケーションは真のアフリカ小説の基礎をつくるものだとは私は考えている。どこかの一国家内のさまざまな民族の文学と言語の間に真の対話が始まり、真の民族文学、民族文化、真の民族的感性の土台がしかれるのである。そして、アフリカ全体の中に、文学芸術における真にアフリカの感性の土台がつくられることになるだろう・・・(その結果)より厳密かつ本格的なアフリカ諸言語の研究の必要を促すことになるだろう。すべてがたがいに弁証法的に作用しあって、アフリカ小説と文学に前進運動をもたらすだろう」¹⁵⁶⁾。

「アフリカ人作家がアフリカ諸言語で書き、それらが他のアフリカ諸言語に翻訳される、たとえば、イボ語の小説がギクユ語に翻訳されるとか、ヨルバ語の小説がハウサ語に翻訳されるということは、これらの言語や文化が直接にコミュニケーションし、たが

いに豊かにしあうということだ。これまでは、これらの言語は分断的な力としてあったが、この結果、これらの言語は統合的な力となるのだ。たがいの言語や文化への尊重心が強化され、同時にさまざまな文化とその関心事に類似性があることが示されるだろう」¹⁵⁷⁾。

「ケニアは多くの民族 (nationalities) からなる多民族国家である。これらの nationalities が寄り集まってケニアを作り上げている。これと同様に、ケニア文化 (Kenyan culture) を作り上げているのは、これらの nationalities 全部の諸言語や諸文化である。どの言語も、どの文化も発展する権利を持っている。私が期待するのは、これらさまざまな文化や言語がたがいに対話を始めるような状況が生み出されることである。現在は、これらの言語や文化はたがいに対話することなく、外国語—英語を介してのみ出会う過ぎない。もし、われわれの諸文化、諸言語、諸文学がたがいに対話を始めるならば、その時こそ真にケニアのものといえる民族文学、民族文化を手にすることが出来るだろう」¹⁵⁸⁾。

ギクユの人々によれば、「力は家庭から」「愛は家庭から」(*Ngemi Ciumaga na Mucii*) という。ギクユの箴言には次のようなものもある。「対話のある家は長く繁栄するが、対話のない家はすぐに滅びる」。言語が民族のたましい、その歴史的経験の貯蔵庫であり、その結晶だとするならば、これらの箴言は、言語こそは家庭と民族の力の根源であり、後生大切に守るべき、かけがえのない金剛石であると言っているのであろう。だが、誰もが知っているように、金剛石も磨かなければ、輝きを放つことはないのだ。アフリカの諸言語も彫琢を待っている。

多言語・多民族国家においては、各言語・各民族の間での対話がいかに大切であるか、このことの真実性をいまさら強調するまでもないであろう。そうした対話こそが、(たとえ植民地主義の産物であるとはいえ) 近代国家としての統一と文化の繁栄を保証するのだと思う。各民族語の経験は、超民族語・国家語として、またケニアの全労働者階級の共通語でもあるスワヒリ語の本流に流れ込んで蓄積され、各民族語はスワヒリ語を介して他の民族語との対話を保証されるのである。しかも、スワヒリ語の場合は、アラビア語やペルシア語など東洋諸言語からの多くの借用語を取り入れているとはいえ、分野にもよるが、60～90%の語彙はアフリカ起源であり、したがってギクユ語を初めとする東アフリカの圧倒的多数の言語とは、その感性・イメージ・語源的な意味論を共有している。多言語・多民族国家の繁栄にとって、各民族間の対話は不可欠であろう。先に紹介したギクユの箴言は、「対話のある国家は持続するが、対話のない

国家は滅びる」と言い直せるだろう。

⑥ 危機言語と文学の権利

現代の世界には、ますます話し手を失いつつある危機言語が無数に存在している。21 世紀末には、現在世界で話し手のある約 6,000 の言語のうち、半数が死滅し、残りの半数も絶滅の危機に立つと予測されている。とりわけて、世界の言語の約三分の一を占めるアフリカの言語の運命が懸念されるところである。

そのため、「先住民の権利」や「言語権」についての理解に一定の前進が見られた。また、この動きにあわせて、言語や文学の研究に従事している者の多くが、世界中のいたるところで、絶滅の危機に瀕する言語の運命を危惧し、活性化に努めるとともに、そうした言語自体を記述し、口承文学等の保存（音声であれ文字であれ）に必死の努力を傾けている。

こうした現実を背景に考えるならば、グギが「たとえ 5 人の話し手しかいない言語であっても、文学の権利、文化の権利を持っている」¹⁵⁹⁾と答えているのは、おそらく真実であろう。たとえ 5 人の話し手しかいない言語であっても、何人も、その言語による文学の権利、文化の権利を剥奪することは出来ない。危機言語の運命を危ぶみ、救済と振興の声はそこから上がってくる。なぜなら、一つの言語は、一つの世界を表象しているからである。卑近な例では、アイヌ叙事詩「ユーカラ」¹⁶⁰⁾は、たぐい稀な語り手の存在と文学の遺産を発掘しようとの懸命の努力によって、忘却の淵から救い上げられ、文字に書かれて、今では人類永遠の文化財となりえたのではなかったか。18 世紀ドイツの詩人・哲学者ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー¹⁶¹⁾の、当時はかき消された良心の声「詩はあらゆる世界に与えられたものであり、粹人や教育のある人々の私的遺産ではない」(『歌謡における民衆の声』1885)が思い出されるのである。

⑦ 「たたかい」が歴史をつくる

グギは次のように述べている。「個々の作家は、状況に応じて自分に最も適切な言語を使わなければならない。(アフリカの言語を使うということでは)私は集団が置かれた現在の境遇のことを考えている。今日、アフリカでは、人口の 90%がアフリカの言語だけを話して生活しているのだ。そうした 90%の人々にアフリカ人作家の手が届かなければならない。アフリカの言語を発展させることが出来るのは、この社会に生まれ育ったアフリカ人作家なのである。アフリカ人作家のほぼ全員が言語選択の余地を持っている」¹⁶²⁾。

「フランス語や英語等の外国語で書かれるアフリカ人の作品は、それ独自のカテゴリーに属する。それらをアフリカ文学と呼ぶのは誤称である」。「アフリカの言語で書かれる文学作品は、これまでから常に存在してきた。第二次大戦後は、文学に関する議論が、もっぱら植民地宗主国の言語で書かれた文学によって圧倒されてきたに過ぎない。その種の文学が『アフリカ文学』だとされて、アフリカの言語で書かれる文学の歴史を曖昧にしてしまったのだ。前者のハイブリッドな伝統は、別の、それに相応しい名称を与えられるべきであろう」¹⁶³⁾。

「アフリカ文学とは、アフリカ人によって、ヨルバ語、イボ語、ハウサ語、スワヒリ語、ギクユ語等、アフリカに固有の言語で書かれた文学のことである。それというのも、たとえば、ズールー語で書かれるフランス文学とか、コーサ語で書かれるロシア文学、スワヒリ語で書かれる中国文学などは想定しがたい。これと同じで、英語で書かれるアフリカ文学も想定しがたいのである」¹⁶⁴⁾。

彼によれば、「英語やフランス語が、アフリカ文化を表現する支配的な言語になることはないだろう。これらの言語で書かれる文学もまたそうであろう。一方、アフリカ文学には未来がある。その未来は、アフリカの諸言語に根を張った未来である」¹⁶⁵⁾ と言うことになる。

評論集『精神の非植民地化』を一貫して、「たたかいが歴史をつくる」という主張が漲っている。これこそが、彼の信念である。言い換えれば、彼の文学の意志を支えてきたものは、より肯定的、積極的な社会環境の実現に向かう見果てぬ夢であると言えるだろう。

「社会をよりよい方向に変革するために書かなければならない」「私はアフリカに変化が起きるのを見たい」¹⁶⁶⁾ と言う。この確信・抱負が真に問題としているのは、「アフリカの民族的、民主的、人間的な解放。アフリカの言語の再発見と奪還を求めるたたかい」ということになる。著者にとって、言語こそは、現代アフリカの文化闘争におけるキーファクターの一つとして位置づけられている。この闘争を持続・強化して、旧宗主国言語の支配から、アフリカの言語を解放する必要があるとされるのである。言語の解放は、アフリカの全体社会の解放の中核部分に位置している。アフリカの言語のエンパワメントこそは、アフリカの民主化の要諦であるとされる。

したがって、言語問題との取り組みは、新旧植民地主義の問題とかかわることでもある。彼によれば、現代アフリカの最大の課題は、西洋・アメリカはも

ちろん、経済大国日本をも牽引力とする新植民地主義の覇権から手を切ることである。「グローバリゼーション」「世界は一つ」の響きのよい美名の下に、世界銀行や IMF を運営・管理機関として構築される「新世界秩序」¹⁶⁷⁾なるものは、国連安保理であれ、何であれ、一握りの西洋諸国と日本に警備されたグローバル支配、新植民地主義的な諸関係の言い換えにすぎない。この「新世界秩序」なるものは、とりわけて第三世界の、なかでもアフリカ最貧国群の諸民族と文化にとっては、何物をも焼き尽くさないではおれない災禍なのである。

グギは、こうした認識のもとに、文学者としての責務、自らの世代の責任を次のように述べている。

「われわれは、次世代のアフリカの子供たちに、ヨーロッパの言語的・文化的延長物であるようなアフリカを譲り渡すのか。いま必要な施策を講じないと、21 世紀中にアフリカはなくなってしまうのではないか。われわれが自分の言語を失ってしまえば、アフリカは、フランスやイギリスやポルトガルの言語的付属物になるほかはないであろう」¹⁶⁸⁾。

グギの主張、そして文学的实践は、こうした現状、そこから予想される未来に、何としても「変化」を呼び起こそうとするものである。彼の民族語文学の実践は、小さく、ささやかで、むしろ孤独な営みであると言うべきであろう。ギクユの箴言にあるように「一本の丸太では、夜通し暖炉の火を燃やし続けることは出来ない」ことは確かであろう。しかし、過去と現在、そして未来のアフリカ文学の歴史の文脈において考える時、彼の民族語文学への意志を支えているものは、まことに重いと言わなければならない。

最後に、アフリカの文化革命、ルネサンスを招来するために彼が打ち鳴らす警鐘は、「アフリカ文学」の生み出し手たち、つまりアフリカ人作家だけでなく、世界中のアフリカ研究者に対しても向けられていることに留意したいと思う。アフリカ諸言語の重要性について、広く、いっそうの自覚を促す以下の文章を、日本のアフリカ研究者の一人として、自戒の意を込めて、ここに引用してしめ括ることにしよう。

「作家や研究者はアフリカ諸言語とまともに対峙すべきであろう。たとえば、世界には、たった一つのアフリカの言語も知らないのに、歴史や哲学などの分野でのアフリカ研究の専門家がいる。アフリカの言語など知らなくても、アフリカ大陸の場合だけは、アフリカ研究の専門家になれると考えられているのだ。ひるがえって、たとえばフランス語を知らないのにフランスの歴史や哲学の研究者になれるだろうか。ところが、アフ

リカだけは、フランス語や英語やポルトガル語で、すべてを知ることが出来ると思われてしまっている」¹⁶⁹⁾。

エピローグ：20 世紀アフリカ文学の意志

2013 年 3 月、「現代アフリカ文学の父」と尊敬されてきたナイジェリアの作家チヌア・アチェベが逝去した。82 歳だった。グギ・ワ・ジオンゴは、彼の死をアフリカ文学の一つの時代の「終わりの始まり」と悼んだ¹⁾。ここでいう「一つの時代」とは、アチェベの処女作『部族崩壊』(*Things Fall Apart*) が出た 1958 年から始まるものとすれば、そのタイムスパンは、その後の約半世紀、つまりアフリカ文学がまさに世界の檣舞台に登場した 20 世紀後半から現在までの時期に及んでいる。

グギはアチェベよりも 8 歳若く、今も書き続けている現役の作家であるが、彼もまた、この激動の期間、アチェベとほとんど同時代を共有した作家の一人であり、二人の経験には共通項が多いし、その人生の軌跡は大いに絡み合ってきた。

本書は、アチェベの生涯や作品に照準を合わせるものではないが、にもかかわらず、アチェベが描いた軌跡について最小限の記述を残しておこう。アチェベを知ることは、グギを理解するのに大いに役立つことと思われる。

I. チヌア・アチェベの登場

『部族崩壊』の刊行 50 年を記念して、初期三部作（『部族崩壊』；『もはや安楽なし』；『神の矢』）を収録した『アフリカ三部作』(*The African Trilogy*) と題した合本が出た。2010 年のことである。この時、ナイジェリア出身の、今もっとも将来を嘱望されている女性作家の一人、チママンダ・ンゴジ・アディチエ (Chimamanda Ngozi Adichie, 1977~) がこの合本へ「序文」を寄せている。彼女はアチェベを「アフリカを再発見した人」として紹介し、「小説家にして反体制の活動家。アチェベは一つの大陸のたましいを掴んだ。(彼の作品は) 私が自分の過去を発見するのに役立ってくれた」と述べ、さらに次のように書いている。

「私は英国の児童文学を読んで育ったが、作品の中で歪んだ自分の姿—実際には自分の本当の姿は何一つ投影されていない—を知ることは奇妙な経験だった。大人になってからも、非アフリカ人が書いた文学作品でのアフリカの描かれ方—歴史がなく、人間性が欠如し、希望の片らも存在しない—を知り、私自身の人間性までが疑われていることを悟ると、ある種の身構えと傷心の入り混じった奇妙な感覚におそわれた。そんな時、『部族崩壊』

を読んで、大変な発見をしたという衝撃を受けた。それまで、私は自分のような人間が文学の世界に存在するとは思わなかった。アチェベの作品は、他者があなたについて描き、語っていることを信じるな、と叱責してくれていた」²⁾。

『部族崩壊』はウィリアム・ハイネマン (William Heinemann=WH) 社からハードカバーで出版された。WH 社といえば、1890 年創業、コンラッド、モーム、ゴールズワージー、D. H. ロレンスなどイギリス文学の花形作家を売り出した文芸出版の老舗だった。出版の翌年、同社のディレクター、アラン・ヒル (Alan Hill) がナイジェリアのイバダン大学を訪ねた時、当時同大学で教えていた白人教師たちを含めて誰もが、最近の卒業生の一人が小説を書いて、イギリスの著名な出版社から刊行したという話を信じようとしなかったという。もし、その話が本当なら、ヒルのことを「靈感にたきつけられたうつけ者」³⁾ だと陰口をたたく者までがいたらしい。

刊行後 50 年の間に、『部族崩壊』は約 50 の言語に翻訳され、1,000 万部をゆうに売り尽くし、今では「ペンギン・モダンクラシック叢書」にも入っている。こんな事情からか、世界のどこかで、もし誰かがアフリカ人作家の作品を一つ読んだことがあると言えば、たぶん『部族崩壊』のことであるだろうし、「オコンクオ」(Okonkwo) の名は、おそらく、英語で書かれた現代アフリカ小説の主人公として最も広く知られているとも言われる。

WH 社にとって、『部族崩壊』の出版は不安材料の多い賭けだった。アラン・ヒルによれば「はたして、アフリカ人が書くような小説を、金を払ってまで読む人がいるだろうか」⁴⁾ との疑問が先に立ったという。同じナイジェリアの、ヨルバ民族の伝承に取材した怪奇幻想譚、アモス・トゥトゥオラの『やし酒飲み』(Amos Tutuola, *Palm-Wine Drinkard*, 1952) や、アフリカの中のヨーロッパといわれる首都ラゴスに生きるアフリカ人の生態を描いた C. エクウェンシの『都会の人々』(C. Ekwensi, *People of the City*, 1954) など、わずかな例外はあったものの、誰もがアフリカ人作家の小説の成功を予想することは出来なかった。

そもそも、この小説の原稿は、どのような経緯でロンドンへ届き、出版の道が開かれたのであろうか。

イバダン大学 (Ibadan University College. 1948 年創立。ウガンダのマケレレ・ユニバーシティ・カレッジと同じく、ロンドン大学卒業の学位を取得でき

た。1962 年以後、University of Ibadan 現在のイバダン大学となった) 卒業後、アチェベは 1954 年から植民地下ナイジェリアの首都ラゴスの連邦放送局(NBC)に勤務した。しばらくして、1957 年中の 8 ヶ月間、ロンドンの BBC で研修を受ける機会に恵まれた。この時、アチェベは BBC のインストラクターで、自身が作家でもあるギルバート・フェルプス (Gilbert Phelps) という人物に初めて出会い、密かに書き上げていた処女小説の原稿を「おそろ恐る」(nervously) 手渡したという。この時の様子を、アチェベ自身が次のように書いている。

「彼 (フェルプス) はたいして気乗りした様子ではなかった。しかし、丁重に原稿を受け取って、『面白そうだね』と言ってくれた。(それから何日か経って) ある土曜日、彼は私の居所を探してくれたらしい。その日、私はロンドンを離れて旅先にいたが、私の泊まっていたホテルへ電話をくれて、一度会いたいというメッセージを残してくれた。(そのメッセージを手にして) 私はその場に立ち尽くした。(たぶん、よくなかったのだろう。いや、待てよ。よくなかったのなら、自分を呼び出す必要があるだろうか。気に入ってくれたのだ。そうに違いないと思い直すと、私は興奮した)。ロンドンへ戻って、私は彼に会いに出かけた。『素晴らしいじゃないか。出版社を紹介しよう』。それを聞いて、私は答えた『是非お願いします。でも、今すぐでなくてよい』。この時まで、私は書き上げた作品に満足できなくなっていたからだった。三世代に渡る一家系の出来事を、一つの小説で扱うのは無理だとの思いがつのっていた。『ありがたいお話ですが、もう一度ナイジェリアへ持って帰り、書き直させてください』⁵⁾。

この初稿で、アチェベは、じつに三世代に渡るタイムスパンの長い物語を書き込んでいた。最初は、ヨーロッパ人宣教師や行政官がイボランドに姿を現し始めた 1890 年頃を舞台に、社会変化に抗して生きる一人の男の話、次にキリスト教に改宗し、ある程度の西洋教育を身につけた (この男の) 息子の話、最後に、英国へ渡り、近代教育を受け、ナイジェリア独立の 1960 年頃に、新興エリートの一員として帰国することになった (この男の) 孫の話であった。

ナイジェリアへ戻ったアチェベは、結局この第一世代の男の生き様に焦点を絞ることに決めた。すなわち、19 世紀末のイボランドを舞台に、アフリカとヨーロッパの出会いの状況下に生きる主人公オコンクオの悲劇を描くことに専念したのだった。ちなみに、第二作『もはや安楽なし』(*No Longer at Ease*, 1960) は、1950 年代を舞台に、植民地政府の役人となったオコンクオの孫オビ (Obi) を描き、第三作『神の矢』(*Arrow of God*, 1964) は、1920 年代を舞台に、キリスト教の浸透に抗しきれなくなった伝統宗教の指導者エゼウル (Ezeulu) の権威失墜の過程を描いている。この作品は、時代的にはオコンクオの息子の時代

に相当している。

アチェベは、オコンクオを主人公にした最終稿を脱稿し、『部族崩壊』(*Things Fall Apart*) と題した。印象をよくするためには、綺麗にタイプしておくことが大切だと聞かされていた彼は、「スペクテーター」紙上の広告で知ったロンドンの業者へ郵便為替付きで原稿を送り、2部作ってもらえるよう注文した。

それから、何週間、何ヶ月もが経過した。この間、くり返し、問い合わせの手紙を書いたという。だが、待てど、暮らせど、なしのつぶてだった。その頃を回顧して、アチェベは「ますます身の痩せる思いをした」(I was getting thinner and thinner and thinner) と述べている⁶⁾。

ある日、NBC の上司で、気丈夫なイギリス人女性 (Mrs. Beattie という人物) が休暇でロンドンへ里帰りすることになった。ナイジェリアを発つ前、アチェベからくだんの話を聞かされた彼女は、相手方業者の名前と住所を聞き取り、ロンドンへ着いてから、早速その業者を訪ねた。彼女は、齒に衣を着せずに言っただけ。「何事ですか、お話にならないじゃありませんか！」(What's this nonsense?)⁷⁾。

誰もが啞然とした。アフリカから届いた原稿など、誰一人も頓着していなかったらしい。彼女の剣幕に驚いた誰かが「原稿は届きましたが、税関で送り返されました」と答えた⁸⁾。

この返答を聞いて、彼女は遠慮なく問い詰めた。「では、小包便の着伝票が残っているでしょう。それを見せてください」⁹⁾。着伝票などはなかったのは言うまでもない。(つまり、社内の誰かが受け取ってはいたのだ)。彼女は、さらにことばを継いだ。「原稿を見つけて、タイプで打ち直し、来週にはナイジェリアへ送り返してください。それが出来ないなら、また指示します」¹⁰⁾。

何日か経って、アチェベの手元へロンドンから小包便が届いた。きれいにタイプで打ち直された原稿が、それも1部だけ入っていた。他に、メモや書き付けは添えられていなかった。原稿は、くだんの業者の仕事部屋の片隅に放置されており、彼らはナイジェリアへ送り返す気にもならなかったらしい。

後日、フェルプスは、改めてウィリアム・ハイネマン社の編集者アラン・ヒルにこの原稿の出版をかけあった。フェルプスは、1957年9月23日付のウィ

リアム・ハイネマン社宛の手紙にこう書き添えている。

「ぞくぞくさせる発見だ。ナイジェリアのある地方の、部族生活の解体過程 (break-up of tribal life) が実にうまく描かれている。人物が生きいきと多数登場し、読み始めるとやめられない。興味深いテーマについて書かれた最初の商品だ」¹¹⁾。

フェルプスの推薦文はタイプで打たれていたが、その余白に、ウィリアム・ハイネマン社の編集者の一人モイラ・リンド (Moirra Lynd) の手書きの走り書きが残されている。

「文章はシンプル、効果ある文体だ。コンマが少なく、若干の書き誤りがある。しかし、全体として、平明ですぐれた英語だ。好ましく、斬新で、ぞくぞくする。強く推奨できる」¹²⁾。

この結果、アラン・ヒルは、さらに書き直す気があるかどうかをアチェベに問い合わせた。アチェベは次のように答えたという。「すっかり消耗してしまい、もう書く元気はない。今一度書き直せば、また違った小説になってしまうでしょう」¹³⁾。

『部族崩壊』は、1958年6月17日に刊行された。いきなりハードカバーで出たのは、この頃の慣行として、廉価なペーパーバック本は新聞等の書評に取り上げられないこと、図書館の蔵書選択の対象から外されるからだった。

出版されると、好意的な書評が出た。「ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン」(*New York Herald Tribune*) は「うそ偽りのない、アフリカ側の真正の記録」、「タイムズ・リテラリー・サプリメント」(*Times Literary Supplement*) は「アフリカの部族生活の内側からの描写に成功している。一見、素朴な小説技術であるが、想像力には生彩があり、文体は明晰である」と評価した¹⁴⁾。

だが、この程度の賞賛では、WH社にとっては、ペーパーバックの廉価本を出して、さらに読者を獲得するのは躊躇された。初版は2,500部が刷られた。手堅い、控えめなスタートだった。当時は、アフリカで売れるのは、学校教科書以外にないと考えられていた。読書の楽しみ、愛や死といったテーマは、アフリカ人の生活とは無縁だと思われていた。

しかし、世界の情勢がアチェベに味方し、出版社の冒険を応援した。1960年

(いわゆる「アフリカの年」)に、WH社はハイネマン・グループ内に独立会社として「ハイネマン教育図書出版社」(Heinemann Educational Books=HEB)を起こし、ペーパーバック本の出版を下請させたのだった。これは、英連邦諸国(コモンウェルス)での新たな市場を狙ったもので、同時に『部族崩壊』のアメリカ版の版権がフォセット(Fawcett)社に譲渡された。その2年後、HEB社は、ペーパーバックの廉価本叢書「アフリカ人作家シリーズ」(African Writers Series=AWS)を刊行し始めた。この年には、先述したように、マケレレ大学で「英語で書くアフリカ人作家会議」が開催されたことを思い起そう。

AWSは、その後の40年ほどの間に、アフリカ全土から約370にのぼる作品(小説、詩、戯曲、自伝ほか)を刊行することになった。この「シリーズ」の第1号として、アチェベの『部族崩壊』が収録されたことはいうまでもない。「シリーズ」のその後の発展については、後述する。

II. 『部族崩壊』という小説

アチェベは1930年、ナイジェリア南東部、ニジェール川東岸に近いオギディ(Ogidi)に生まれた。ハウサ(Hausa)、 Yoruba)と並んで人口稠密なイボ(Igbo)民族グループ(現在の人口は約2,700万)に属し、とうぜんイボ語を母語(ホーム・ランゲージ)としてきたが、作品はもっぱら英語で書いてきた。誕生当時、一家はすでにキリスト教に改宗しており、父親は教会の教義問答者、牧師であった。地元のミッション・スクール(CMS=英国国教会派)で学んだ後、作品の主要舞台として知られることになるウムアヒア(Umuahia)の中学校で学び、その後、創設もないイバダン・ユニバーシティ・カレッジに学んだ。アチェベが入学した頃、同大学の卒業生(ロンドン大学卒業資格試験の受験者)は100人程度で、西アフリカ随一のエリート教育機関だった。はじめ、医学を志したが、後に英文学へ転じた。

ナイジェリアは、おそらく南アフリカについて、アフリカ小説の発達の最も早い地域の一つであった。他の国々と比較して、新聞や放送などマスコミの発達が早く、急速に都市化が進むなかで、すでに40年代からシプリアン・エクウェンシ(1921~2007)など、通俗的な読み物を得意とする大衆作家の、俗にラゴス物と言われる一連の作品が書かれていた。それらは社会問題を背景に、都市のさまざまな人間模様を描いて、新興中間層、都市労働者の間に人気があった。

アチェベが、これらの通俗小説はもちろん、イボの土地オニチャ(Onitsha)

で開花したマーケット文学（風刺、コミックを主とした大衆的なパンフレット文学）¹⁵⁾などに親しんでいたことは確かであろう。先に述べたエクウェンシは、このマーケット文学から世に出た作家の一人だった。

だが、アチェベの小説執筆の動機は、それらの通俗作家やパンフレット文学の書き手たちとは違っていた。さらに怪奇幻想譚『やし酒飲み』（1952）でイギリス詩人ディラン・トマス¹⁶⁾から絶賛されるなど、いち早く欧米世界に知られた先輩のヨルバ人作家アモス・トゥトゥオラ（1920~1997）とも大いに違っていた。トゥトゥオラが『やし酒飲み』執筆の動機を「よその国の人びとにヨルバ族の民話を読んでもらうためだった。それを書き残しておくことで、ヨルバ族のことをもっと理解してもらいたいと思った」¹⁷⁾と述べたことはよく知られていよう。

この違いが歴史的な意味を持っていた。アチェベは、J. ケアリー（Joyce Cary, 1888~1957）¹⁸⁾の『ミスター・ジョンソン』（*Mister Johnson*, 1939）、J. コンラッド（Joseph Conrad, 1857~1924）の『闇の奥』（*Heart of Darkness*, 1899）¹⁹⁾など、ヨーロッパ人が描くいわゆる「植民地小説」のステロタイプ（そこでは、アフリカ人の本当の姿が描き切れていないばかりか、人種差別が徹底している）に不満を覚えた。彼はナイジェリア人として、内側からアフリカ人の経験と意識をもっとリアルに書き直したいと考えた。アフリカ文学研究者サイモン・ギカンディは「アチェベはアフリカ文学を生み出した人物である。彼は、『部族崩壊』の構成、言語の面で、アフリカ文学の未来が単なるヨーロッパの形式の模倣にあるのではなく、そうした形式とアフリカの口承文学伝統の統合にあることを示した」と評価している²⁰⁾。

小説の題名は、アイルランドの詩人 W. B. イエイツ²¹⁾ 作「再臨」（*The Second Coming*）の一節から取られている。

Turning and turning in the widening gyre
The falcon cannot hear the falconer ;
Things fall apart ; the centre cannot hold ;
Mere anarchy is loosed upon the world.

ぐるーり、ぐるーり、拡がりながら旋回しつづける
鷹に、もはや鷹匠の声はとどかず
もの皆崩れ落ちてバラバラ；中心はもち耐えられず

ただ無秩序が世に解き放たれる。

『部族崩壊』の舞台となる 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのイボ社会は、ちょうどキリスト教宣教師や白人行政官が踏み込んでくる頃だった。この歴史の転換期、価値の交替期に、社会変化への適応を拒み、伝統的な価値を信じて生き抜こうとしたオコンクオという骨太の人物の悲劇をアフリカの側から描いて、白人によるアフリカ侵略の歴史上「ニジェール川下流域未開部族の平定」²²⁾として片付けられたプロセスをまったく別の角度から照射している。西欧近代の価値と伝統アフリカの価値の衝突、崩れゆく人間関係をテーマに、時代の転形期に生きるアフリカの人々の苦悩、不安、失意、挫折、欲望、裏切りなどがリアルに活写されるのである。

『部族崩壊』の主題は、ナイジェリアに限ることなく、ヨーロッパによるキリスト教伝道と植民地支配に何らかの対応を迫られたアフリカの各地で、多数の人々の、実際の経験として共通に見られるものだ。たとえば、1910 年代に書き上げられていた南アフリカ最初の黒人英語小説がこれを裏付けている。

ツワナ人作家として、また政治活動家として知られた S. T. プラーキ (Solomon Tshekisho Plaatje, 1878~1932) の小説『ムーディー—南アフリカ原住民の生活』(*Mhudi, Native Life in South Africa*, 1930、ただし、1919 年に脱稿していた) がそれである。1828 年のシャカ王²³⁾の死後、ボーア白人の攻撃を受けたズールーのムジリカジ王²⁴⁾の軍勢がツワナの土地に攻め入った頃の南部アフリカの社会変化を描いており、『部族崩壊』のテーマを先取りしている感がある。ついでながら、プラーキの両親はすでにキリスト教に改宗しており、プラーキ自身がミッション・スクールで学んだという経歴もアチェベと共通していよう。(ただし、プラーキは高等教育を受けていない)。この作品では、アフリカ人の過去の生活が歴史的、民族誌的に描かれており、小説というよりも、口伝と歴史記録の中間に位置するものと言えるだろう。

これに比べて、『部族崩壊』は、アフリカとヨーロッパの二つの世界の衝突から結果した伝統アフリカ側の変化に焦点をあてながら、主人公オコンクオの強烈な個性と自我を巧みに形象しており、単なる歴史記録の次元をはるかに超えている。

『部族崩壊』の後、アチェベは四つの小説を発表した。先に多少とも触れているが、第二作目は『もはや安楽なし』(1960)で、前作の主人公オコンクオの

孫が登場、イギリスへ留学している。50年代の都市生活を背景に、夢を追った「ビーン・ツ」(Been-to. 植民地宗主国での生活、特に高等教育を経験した帰国アフリカ人)の夢と挫折が描かれている。第三作目は『神の矢』(1964)で、1920年代のイボ社会を舞台に、伝統宗教の指導者を主人公として、価値の転換、社会の崩壊過程が描かれている。第四作目は『国民の中の男』(*A Man of the People*, 1966)で、架空黒人独立国家の混乱と腐敗を、風刺をまじえて戯画的に描き、クーデターによる既成権力の崩壊劇を予想している。21年ぶりの第五作目は『サバンナの蟻塚』(*Anthills of the Savannah*, 1987)で、ここでも架空独立国家を舞台に、権力と富を一手に握った支配階級のエゴイズムがユーモアたっぷりに風刺され、一方、悲惨な被支配階級の人々の生活が赤裸々に描写されている。

グギ・ワ・ジオンゴの作品群も、アチェベと同様、歴史軸にそってクロノロジカルな発展を示してきたことをこれまでに見てきた。これら二人の作家のテーマの類似は、作家間の影響関係というよりも、むしろ東西アフリカの歴史的経験の類似に起因していると考えられるべきであろう。

Ⅲ. グギとアチェベ：運命の出逢い

アチェベは、1961年にマケレレ大学を訪ねており、この時グギは初めてアチェベに出会った。当時、グギは2回生で、『ペンポイント』に発表したばかりの短篇「イチジクの木」を見てもらったと言う。アチェベはこれを読んで、励ましの言葉をかけてくれた²⁵⁾。翌1962年6月、2度目の出会いが実現した。この時は、もっとドラマチックな出会いとなり、グギのその後の人生を決定づけた。第2部で触れているが、同大学で開催された「英語で書くアフリカ人作家会議」へアチェベがやって来たのだった。

会議の期間中、アチェベは大学のゲストハウスに宿泊していた。昼間のセッションがすんだある日の夕方、アチェベは部屋をノックする音を聞いた。ドアを開けると、若い学生が立っていた。ジェームズ・グギと名乗るその青年は、原稿の束を抱えており、「ケニアから来ている学生です。小説を書いたので、ぜひ読んでほしい」と告げた²⁶⁾。

当時の東アフリカ、つまりウガンダ、ケニア、タンガニーカは、独立前後にあったが、まだ英語の小説家は誕生していなかった。アチェベは、1960年11月にもケニアを訪ねており、その後すぐに隣国タンガニーカを訪れ、ダルエスサラームで開かれた政治集会で、独立直前の同国の首相ジュリアス・ニエレレのスピーチを聞いていた。そればかりか、やや北方の港町タンガを訪れて、詩

人・作家として知られたシャアバン・ビン・ロバート (Shaaban bin Robert, 1909~1962) にも会い²⁷⁾、スワヒリ語の詩や小説が書かれていることを知っていた。しかし、アチェベにとって、タンガニーカは、ナイジェリアと違って「部族主義」(tribalism) のない、スワヒリ語で統一された国だと映っていた²⁸⁾。

さて、マケレレ大学の学生グギからアチェベに手渡されたのは、小説『黒人の救世主』(*The Black Messiah*) と、タイプ印字の臭いも真新しい小説第二作目『泣くな、わが子よ』(*Weep not, Child*) の原稿だった。

アチェベは、その夜のうちに、『泣くな、わが子よ』に眼を通した。翌日、アチェベは原稿を、会議に参加していたウィリアム・ハイネマン社の編集者ファン・ミルン (Van Milne) に手渡した。ミルンもまた、すぐに原稿を読み終えた。

当時は、アフリカからの国際電話は困難がつきもので、かつ料金も高くついた。しかし、ミルンはロンドンにいるアラン・ヒルへ電話した。国際回線がうまくつながり、社内の会議に出ていたヒルが呼び出されて、受話器を受け取ったという。この時のことを、後日、ヒルが次のように書いている。

「(電話の向こうで) ミルンが言うには、マケレレの若い学生が、ほとんど書き上げた小説の原稿をアチェベに見せたい。アチェベはたいそう感激し、すぐにその原稿をミルンにまわした。ところが、ミルンもまたそれを読んで、すっかり興奮してしまったという。『まったく、すばらしい作品だ。君は現物を見ていないが、刊行を承諾してほしい』と電話の向こうでミルンが言った。そこで私は答えた。『君に任せたよ』。そう言うてから、私は会議室へ戻った」²⁹⁾。

かくして、1963年1月1日、ネルソン社から移ってきたばかりの敏腕な編集者ケイス・サンプブルック (Keith Sambrook) の机上に、『泣くな、わが子よ』の最終原稿が届いていた。この結果、『泣くな、わが子よ』は、ウィリアム・ハイネマン社からのハードカバー本と並んで、スタートしたばかりの「アフリカ人作家シリーズ」(AWS) の第7冊めとしてペーパーバックでも刊行された。1964年5月のことだった。この小説は、AWSにとっての新規出版第1号だった (これ以前の6作品は、ウィリアム・ハイネマン社を含めて、他社から版權を買って出版したもの)。ハードカバー本は初版2,000部が刷られたが、うち1,600部が発売1年以内に売れたという (『黒人の救世主』は、『川を隔てて』と改題されて、1965年中にAWSの第17号として出版された)。

1964年5月14日付で、ロンドンのサンプルックが受け取ったグギからの手紙に次のように書かれていた。

「(大学の) 定期試験が終わりました。成績の結果が出た3日後に『泣くな、わが子よ』の出版がありました。今週は多くのことがありましたが、出版を自分で祝って、献血しました」³⁰⁾。

IV. 「アフリカ人作家シリーズ」(African Writers Series = AWS)

ハイネマン教育図書出版社(HEB)の創業は1960年、いわゆる「アフリカの年」で、同年に独立したブラック・アフリカの17ヶ国のうちに、アチェベの祖国ナイジェリアも含まれた。HEBは、植民地から独立へと向かう「変革の風」にのって、アフリカだけでなく、たちまち世界中のコモンウェルス諸国市場で最有力の教育図書出版社として発展を約束された。

HEBでは、マケレレの「アフリカ人作家会議」で、若いケニア人が、自分の原稿をアチェベに見せたということが格別な話題となった。二人の編集者は、ほかならぬアチェベが、アフリカの若い世代に特別な吸引力を持っていることを見抜いた。アラン・ヒルは、すぐにトニー・ビール(Tony Beal)なる人物を特使としてナイジェリアへ送った。これは1962年11月のことで、ビールはアチェベに会って、新規企画「アフリカ人作家シリーズ」の編集アドバイザー(Editorial Adviser)になるよう懇請した。アチェベはその場で了承した。

かくして、1962年12月にアチェベを編集アドバイザーとすることがHEB内で正式に決まった。以後、約40年にわたって、このシリーズは、アフリカ文学とその普及をはかる歴史的大事業となった。

もともと「アフリカ人作家シリーズ」はアフリカの中高、大学生のテキストブックとして企画されたもので、彼らにアフリカ人の作品を読めるようにすること、アフリカ人作家を世界の読者に紹介することが目標だった。これを裏付けるかのように、AWS発足の2年後、アチェベ自身が自分の小説の売れ行きを公表している。

「(『部族崩壊』の) 1964年中の売れ行きは、英国で800部、ナイジェリアで20,000部、その他で2,500部である。『もはや安楽なし』もこれに準じる。私の読者の多くは、中高、大学生、もしくは最近の卒業生で、多くが私のことを、教師と思っているようだ」³¹⁾。

60年代半ば以後、HEBは、アチェベとグギのほかにも、大陸規模で有力な作家を探し始めた。編集者たちは、可能な限り広範な目配りを怠らなかった。たとえば、1961年にイバダンで結成された「ムバリ・クラブ」(Mbari Club)は、1966年までに17作品を地元で出版していたが、そのうちのいくつかをAWSに収録したのをはじめ、ザンビア大統領ケネス・カウンダ³²⁾の『ザンビアは独立する』(Kenneth Kaunda, *Zambia Shall be Free*, 1962)やケニアの政治家オギンガ・オディンガの『未だ独立は来たらず』(Oginga Odinga, *Not Yet Uhuru*, 1967)など独立前後のめばしい政治家たちの著作(自伝を含む)、ジョモ・ケニヤッタの人類学の著作『ケニア山のふもと』(Jomo Kenyatta, *Facing Mount Kenya*, 1979; 原書は1938)、元奴隷オラウダー・エキアノ³³⁾の自伝『オラウダー・エキアノ、別名アフリカ人グスタブス・バッサの生涯の興味ある物語』(*Equiano's Travels*, 1967; 原書は1789)などの古典的著作を収録した。また、BBC (Caribbean Voices, West African Voices, The Voice of Ghana, The Voice of Cairo)など、リアルタイムの放送台本を渉猟した。グギの初期戯曲に例が見られるように、同放送局アフリカ部門制作の1幕物の戯曲を収録している。

アチェベの5つの小説が典型例であるが、WH社からまずハードカバーで出した作品を、後日HEB (AWS)のペーパーバックで出すことが多くなった。ハードカバー本の印税は、アチェベやグギを筆頭に、売れ行きのよい作家を繋ぎとめるために10%、HEB社のペーパーバック版(AWS)は7.5%と定められた。ペーパーバック版はハードカバー本の18ヶ月後に出版するとの原則的方針も立てられた。

結局、1962年から1985年の間に、AWSとして、No.1からNo.270までのナンバーのついた作品が刊行された。No. 270は、1985年に出たアチェベ&インネス編『アフリカ短篇集』(Achebe & Innnes ed., *African Short Stories*)で、以後1985年から2003年の間に、ナンバーのない約100作品が刊行された。合計約370点で、ここには、小説、政治文献、詩、戯曲、自伝、短篇集、散文、口承文芸、人類学、歴史関係などが含まれる。2003年に2冊を刊行して、AWSの終刊となった(このうち、No. 259, 260の2作品は、ついに刊行されず欠番となった)。

AWSの最盛期は、1970年代で、この頃には初版10,000部を刷って、3年間で売ればよいとの方針が立てられた。デニス・ブルータスの詩集でさえ、初版9,000部を刷ったという。とりわけこの期間の頂点は、1970年から1973年に至る4年間で、年平均20作品を出した。一出版社の一企画としては、多すぎ

る出版点数であろう（ただし、大陸規模では少なすぎるとも言えよう）。

最盛期の 1971 年、ジェームズ・カリーがビアフラ戦争³⁴⁾（1967 年 7 月に勃発。アチェベは一時的に筆を折った）後のナイジェリアを訪ね、アチェベに会った。この時、アチェベは AWS の No.100 として収録されることになる短篇集『戦場の女たち』（*Girls at War*, 1972）の原稿を渡したが、これを機に、編集アドバイザーを退きたいとの意向を示した。その場で、後継者としてグギにバトンを譲ることに二人は合意したという。後日、グギはこの話をいったんは引き受けたものの、最終的に辞退した。自分が書けなくなるというのが主な理由だった³⁵⁾。以後、AWS は、アチェベを「初代編集者」（**Founding Editor**）として遇し、別途ロンドン、イバダン、ナイロビを結ぶ「国際三角連携」を強化し、新たな編集体制で臨むことになった。

1975 年、ヘンリー・チャカバ（Henry Chakava）が、HEB（East Africa）の専務取締役（**managing director**）に就任した。グギが 10 年ぶりの長編『血の花弁』を出したのは、その 2 年後、1977 年 7 月のことで、ナイロビ市役所で開催された出版記念パーティに、当時の経済大臣ムワイ・キバキ³⁶⁾（Mwai Kibaki, 2002 年から 2013 年まで大統領）が出席した。その隣には、グギの実母ワンジク、妻ニャンブラもいた。

1978 年には、国際ネットワーク「ハイネマン・インク」（Heinemann Inc）がスタートした。ナイジェリア、東アフリカ、香港、シンガポール、マレーシア、インド、カリブ、合衆国に系列会社を創立したのである。アメリカ市場の開拓をめざし、アメリカの出版社との提携を探り始めた。AWS は、アフリカ内で読まれ、ついで世界中でアフリカ研究の一部としても読まれるようになった。

この間、全米アフリカ学会（1957 年創立）、アフリカ文学会（全米アフリカ学会から独自に結成。1974 年創立）の活動が活発化し、大学のアフリカ史コースなどでも AWS が採用されることが多くなった。文学作品を通じて、学生たちは、「アフリカは一つ」（Africa as a single continent）と見るのではなく、その「多様性」（variety of Africa）に着目するようになったと言う。アフリカ史、アフリカ政治、経済、人類学に関心のある人々の注目もひいた。地元のナイロビ大学でも、政治学のムティソ教授が『アフリカ文学における社会政治思想』（G-C. M.Mutiso, *Socio-political Thought in African Literature*, 1974）と題する専門書を上梓していた。

AWSは「教育図書」の性格から、セックス、宗教、政治関連のテーマには慎重を要した。ほかにも、出版上の制約、自己規制が見られた。たとえば、今では古典的地位を持つガーナの作家アイ・クウェイ・アーマ (Ayi Kwei Armah, 1939~) の小説『美しき者未だ生まれず』(*The Beautiful Ones Are Not Yet Born*, 1968) は、糞便学的記述・腐敗の描写などが、セネガルのセンベヌ・ウスマン (Sembène Ousmane, 1923~2007) の『神の森の木々』(*Les Bouts de bois de Dieu*, 1962) は植民地下ダカールの鉄道労働者のストライキといった政治問題が教科書として不向きだとの判断が出たこともあった(後に、両作品とも収録された)。

こうした制約のほかにも、フランス語やアラビア語、あるいはスワヒリ語などアフリカの民族語で書かれた作品、あるいは女性作家の作品(特にシリーズ開始の初期)が少なすぎる等の限界もあったが、その最大の功績は、大陸的規模で初めて、作家・出版社・読者の広範なネットワークを確立し、(少なくとも)英語で書かれる「アフリカ文学」という一つの読書領域、研究分野を確立したことであろう。アチェベが、1988年に、次のように述べている。

「AWSは、スタートラインに立つアフリカ人作家たちが待ち受ける審判の合図になるものだった。20年ほどの間に、大陸全土から巨大な作品群が現れ出て、史上初めて、アフリカの未来を担う読者や作家たち—中高生や大学生たち—が、私たちの世代が読んできた『デイビッド・コパーフィールド』ほかのイギリスの古典だけでなく、自分たちのことが書かれた、同胞の作家たちの作品を読み始めた」³⁷⁾。

グギもまた、2000年、ニューヨーク州でのアチェベ70歳の誕生記念パーティーの場で次のように述べた。

「(AWSは)アフリカ人の全世代に、自信を植えつけ、誰もが作家になれるという可能性を信じさせることになった」³⁸⁾。

アチェベとグギを頂点に、このシリーズの代表作家として、ジェームズ・カリーが次の6人を挙げている³⁹⁾。これらの作家が、いわばAWSのドル箱だったのである。ベッシー・ヘッド (Bessie Head, 南ア・ボツワナ、1937~1986)、ヌルディン・ファラ (Nuruddin Farah, ソマリア、1945~)、ダンブッツ・マレチェラ (Dambudzo Marechera, ジンバブエ、1952~1987)、マジシ・クネーネ (Mazisi Kunene, 南ア、1930~2006)、アレックス・ラ・グーマ (Alex la Guma, 南ア、1925~1985)、デニス・ブルータス (Dennis Brutus, 南ア、1924~2009)。

① AWS の編集者

AWS の編集に関わった人物として、先にあげた二人、アラン・ヒル（1912 年生まれ。1936 年、ウィリアム・ハイネマン社に入社。1979 年退社）とファン・ミルンのほかに、ケイス・サンプルック（1963 年 1 月から、Heinemann Educational Books に勤務。アフリカ、カリブ、東南アジア部門担当）、アイグ・ヒゴ[Aig Higo: アイボジェ・ヒゴ Aigboje Higo が本名。AWS の最初の 10 年間、西アフリカ出身の作家が多いのは、アチェベとの協同による。1932 年、ナイジェリア生まれ。ムバリ・クラブの出版事業でも活躍した。1965 年以降、HEB (ナイジェリア) のマネジャー。ナイジェリア出版人協会の代表であった]らがいた。

最も中心的な編集者は、サンプルックよりも 4 年後にやって来たジェームズ・カリー (James Currey) だった。彼は、1936 年、イギリスに生まれたが、父は詩人、母は作家で、両親はともに南ア出身だった。カリーは、1959 年から 1964 年まで、ケープタウンのオックスフォード大学出版局 (Oxford University Press) に勤務した。ケープタウンでは、月刊誌『ニュー・アフリカン』(*The New African*) の編集に関与した。この頃に知り合ったのが、デニス・ブルータスであり、ついでベッシー・ヘッド、アレックス・ラ・グーマなど、後に AWS のドル箱になる詩人や小説家であった。1965 年、アパルトヘイト下の南アを離れ、1967 年まで、ロンドンでオックスフォード大学出版局に勤務した。1967 年 4 月、HEB へ移り、サンプルックに合流し、1984 年まで AWS の編集に関与した。サンプルックとは、1968 年以後「カリブ海作家シリーズ」(Caribbean Writers Series) および「アラブ作家」(Arab Author) 作品の出版にもかかわった。

もう一人は、ヘンリー・チャカバ (Henry Chakava) である。彼は、1946 年ケニア西部生まれ。ナイロビ大学文学科に学び、グギの学生でもあった。1972 年、HEB (East Africa) の編集者になり、翌年から 1975 年まで、ロンドンでサンプルックやジェームズ・カリーに合流した。

② AWS 燃え尽きる

グギの最初のギクユ語小説『十字架の上の悪魔』、最初のギクユ語戯曲『したい時に結婚するわ』は、ともに 1980 年、ハイネマン (ケニア) から刊行されたが、前者は同年末までに 15,000 部、後者は 13,000 部が刷られた。翌 1981 年には『拘禁—作家の獄中記』が出たが、これもケニアだけで発売 2 週間で 5,000 部以上が売り切れたという。AWS は好調を維持しているように見えたが、1982 年以後、アフリカを襲った金融危機のため、80 年代半ばにはアフリカ市場での

書籍の需要が激減した。出版事業は、各社そろって「アフリカ本の飢饉」(the African book famine) となった。この不景気の時期に、AWS は、ザンビア、ナイジェリア、ケニアなどで比較的好調を維持できたが、タンザニア、ガーナなどで売れ行きは低迷し、頼みは先進国市場に限定された。1983 年、ハイネマン・グループの経営母体が変わり、「アフリカ人作家シリーズ」の未来に暗い影がさし始めた。

この時期、AWS は絶版が多くなり、確実に売れる本のための出版に限定され、新規出版が激減した。1982 年と 1983 年には 7 作品、1984 年には 4 作品、1985 年と 1986 年には 3 作品、1987 年には 5 作品、1988 年には 2 作品と激しく落ち込んだ。

1984 年 9 月、売れる作家の作品を年に一つか二つしか出さないという方針が確認され、翌 10 月には、AWS に新規企画がないことが決められた。この頃、AWS に収録される平均的な作家 (middle ranked established writer) の場合で、3,000~5,000 部の初版印刷 (アフリカ内ローカル出版社の場合より多い) を維持できたが、1984 年度、AWS の約 250 作品がもたらす全収益のうち、約三分の一はアチェベの作品からの収益であったという⁴⁰⁾。この数字は、アチェベ作品の不動の人気を語ると同時に、AWS それ自体の商業的価値の危機を意味していた。

1994 年以降の一つの特徴として、ナイジェリアのブチ・エメチェタ (Buchi Emecheta, 1944~)、カメルーンのカリクスト・ベヤラ (Calixthe Beyala, 1961~)、ガーナのアマ・アタ・アイドゥ (Ama Ata Aidoo, 1942~) など女性作家の作品の収録が目立つようになるが、この努力も起死回生には繋がらなかった。

これより先、1985 年、ジェームズ・カリーは HEB を辞め、妻のクレア (Clare) とロンドンで「ジェームズ・カリー出版社」を創業した (現在はオックスフォードに拠点がある)。その後は『ユネスコ版アフリカの歴史』の刊行を含め、現在ではアフリカ関連の最有力出版社の一つに成長した。彼は、王立アフリカ協会副会長を歴任した。1988 年には、ケイス・サンブルックが HEB を辞め、ジェームズ・カリー出版社へ移った。1992 年には、ヘンリー・チャカバが HEB を辞め、ナイロビで「東アフリカ教育出版社」(East African Educational Publishers=EAEP) を創業した。これは、ケニアでは地元資本による最初の本格的な出版社である。

2002 年頃、AWS は HEB の女性編集者ビッキー・アンウィン (Vicky Unwin) に託されたが、彼女の奮闘にもかかわらず、当時までの発行点数約 370 作品のうち、70 作品のみが印刷に回されていたに過ぎない。2003 年には、Heinemann Inc が解散した。その後、2008 年当時に、印刷に回されていたのは、わずかに 64 作品に減少した。

V. 比較のための三人の作家：オクリ、ブリンク、ヘッド

以下では、しばらく、アチェベとグギの話題から離れて、20 世紀アフリカ文学への視野を少しばかり拡大してみよう。グギやアチェベ以外にも、実に個性豊かな作家と作品が存在している。以下では、その中から、3 人の特徴的な作家について考えてみる。

① ベン・オクリ

アチェベが 21 年ぶりに第 5 作目の小説『サバンナの蟻塚』を発表したのは 1987 年のことだった。これが最後の小説となったが、この頃までに、「ポスト・アチェベ」(Post Achebe, 「アチェベ以後」) という用語が聞かれるようになっていた。この用語は、ここで紹介するベン・オクリ (Ben Okri, 1959~) との関係で、ナイジェリアの現代文学を語る場合に、特に 1980 年代半ばからよく使われていた。それは、『部族崩壊』によって現代アフリカ小説の原型をつくり、ナイジェリアはもちろん、他国アフリカ人作家に最大級の影響を及ぼしたアチェベにこのうえない敬意を表しながらも、もはやアチェベが敷いた路線に収まりきらない若手が確実に台頭していることを如実に示す用語でもあった。じつさい、アチェベ自身が、新しい世代の代表としてオクリを分類している⁴¹⁾。

オクリは、この頃までに小説 2 編、短篇集 1 篇を出していたが、なかなか捕縛しにくい作家だ。第一世代、いわゆるパイオニア世代の作家と比べて、異例なほど型にはまりきらないのである。彼は、コスモポリタンと言われるが、その名にまことにふさわしい。

オクリは、19 歳でナイジェリアを捨て、イギリスへ移り、エセックス大学に学んだ。週刊誌『ウェスト・アフリカ』(*West Africa*) 文芸欄の書き手として一部で知られたが、短篇集『聖地の出来事』(*Incidents at the Shrine*, 1986) で、87 年度のコモンウェルス作家賞 (アフリカ部門) を受賞して、にわかに注目を集めた。それより以前に長編第一作『花と影』(*Flowers and Shadows*, 1980) を発表していたが、構成上の難点と冗長さが指摘されていた。もっとも、アイ・クウェイ・アーマなど西アフリカの先輩作家たちの影響を認めながらも、国家や社会構造の分析よりも、人間の内面の分析を深めているとして、一部では注

目を集めていた。自分では、まったく自伝的な要素を否定している最初の小説『花と影』の次作は『内なる風景』(*The Landscapes Within*, 1981)であり、筆者としては、前作同様、自伝的要素を認めたい気がする。

だが、気になるのは、オクリのテーマがこれまでのアフリカ人作家とは違い、西洋の作家にもっと近いことだ。西洋文学と共通するテーマが、ナイジェリアの都市生活を舞台に追及されるのである。もちろん、ナイジェリアだけに舞台が限定されるわけではない。「夢は現実の一部だ。夢とフィクションの境界は明らかではない。書くことは夢のつづきのようなものだ。生命をつくり出すことを、私は楽しんでいる」⁴²⁾という言葉からもうかがえるように、いくつかの作品には、シュールリアリズム、それもガルシア・マルケス⁴³⁾、サルマン・ルシュディ⁴⁴⁾などに共通するマジカル・リアリズム⁴⁵⁾の手法が見られるように思われる。

1987年、オクリはパリのアガ・カーン賞(小説部門)を受賞したが、国際舞台への登場を決定づけたのが、『飢えの道』(*Famished Road*, 1991)による91年度のブッカー賞の受賞だった。ブッカー賞といえば、イギリスでもっとも権威のある文学賞である。ルシュディ、V.S. ナイポール、ナディン・ゴードイマなどがこれを受賞している。一作家としてのサクセス・ストーリーだと言えるかもしれない。ナイジェリア国内の出版社が彼の草稿を4年間も放置したまま、ついに出版することが出来なかったことを考えると、作家オクリにとって、ナイジェリア脱出は成功への条件だったと言える。イギリスへ移り住んだオクリは、生計の道に苦勞しながらも、ついにペンを離すことはなかった。

オクリは、1976年、17歳のときに書き始めたという。ナイジェリアで大学入試に失敗し、浪人中に塗料工場につとめる一方で、ルポルタージュを書き始めたという。「自分の眼で見たことを書く。これがルポを書くときの私の姿勢だ」。こうして、オクリはスラムに取材した社会派のルポを書き上げたのである。「それが活字になったのを見て、私は自分がライターになったのだと思った。そのとき、私は17歳だった」と述べている⁴⁶⁾。

その後もオクリはたくさんのルポを書いたらしいが、活字にはならなかった。出鼻をくじかれたオクリは、次に、それらボツになったルポを素材としてフィクションに書き改めた。すると、女性雑誌や夕刊紙がこれを買ってくれたという。以後、原稿料に味をしめたオクリは、「気が狂ったのではないかと友人が心配するほど、原稿を書きまくった」⁴⁷⁾。

オクリは、自分についてそれほど多くを語りたがらない作家であるようだ。「作家にとって、幼少の頃というのは、作品の中で大切な要素となるものだ。むしろ、作品のために、それはそっとしておきたい秘密の部分なのだ。読者のためにも、そのほうが望ましい」と述べている⁴⁸⁾。

だが、数少ない幼少の頃に関するオクリの発言から、ある程度まで、彼の文学的成長の背景を描いてみることは出来る。オクリは、もともと文学者などになる気はなく、医者かエンジニアをめざしていたらしい。文学に感心はなかったと言うが、母親はよく民話を語って聞かせたらしい。母親が聞かせる口承の文学とは別に、ロンドンで法律を学んできた父親が、自分では読みもしないヨーロッパ・アメリカの古典作品（ディケンズ、マーク・トウェイン、オースティン、ギリシア・ラテン文学など）の蔵書を持って帰ったという。その結果、オクリは、ヨーロッパやアフリカの民話、神話に親しんでいたらしく、「アラジンもオデュッセイアも、アフリカのアナンセ（トリックスター）とかかわらない話として耳を傾けた」と述べている⁴⁹⁾。

後年、彼はこれらの本は「私のために書かれ、私に話しかけているように思われた」と述べている⁵⁰⁾。こうした経験が、彼にとって文学遍歴の始まりとなり、作家としての準備期間となった。「小説は、民話と同じだ。面白ければ、人は耳を傾ける。この関係が基本である。文学とは誰かが何かについて書くと、別の人がそれを読みたくなるという関係のなかで成立する」「読書と創作は切り離すことが出来ない。読書は創作を準備する」⁵¹⁾と言ったオクリの言葉のなかに、彼自身の文学体験、そして後年の文学への姿勢に通じる原形が滲み出ているように思う。

「ナイジェリアでは、すべての関係が暴力的だ。平静でおれるなどというのはウソで、暴力の感覚を伴わないでナイジェリアについて書くことは出来ない」とオクリはいう⁵²⁾。ナイジェリアは混沌の世界でもある。「この混沌のなかでは、芸術の役割は、混沌をさらにかき乱すことだ。芸術が芸術であるためには、冷静、透明でなければならない。混沌との関係では、それを否定する妨害物となるか、でなければ、よりいっそう混沌的、混沌以上に暴力的である必要がある」⁵³⁾ということになる。

オクリは、文学一般、特にアフリカ文学では、短篇小説の分野への関心が無視されてきたと指摘している。「小説を川に譬えれば、短篇はグラス一杯の水だ。

小説を森に譬えれば、短篇は一粒の種子だ。それはよりいっそう原子に近い。その原子のなかに、宇宙の秘められた構造が宿っている」⁵⁴⁾と述べて、短篇の重要性を強調している。

ところで、『内なる風景』でオクリは「すべてがよそもので、吐き気を起こさせる。英語は彼を空虚にし、彼を毒している。彼は自由にものを考えることが出来ない。この共通語は深い所で彼を裏切り、苦痛をしいて、とぐろを巻いて、何の意味も伝えない。伝えたい意味と言語形式がいくつもの層をつくって、疎外という真空の中で、ガラガラと音をたてている」と書いている⁵⁵⁾。これは、実に巧みに、借り物の言語で生活しているアフリカ人の空虚感、疎外感を表しているように思える。

だが、アフリカ人作家の使用言語の問題となると、さすがにオクリは冷静である。彼は次のように述べている。「ある言語で書くためには、その言語に精通していなければならない。これが基本である。言語にまつわる事柄は枠組だ。感情と気分と生活様式がある。言語は人に取り憑く。ある言語を十分に知り、自分の感情を強烈に知り、自分の世界にとっぷりと根を張っておれば、そして自分の芸術と生活に注意深くあれば、どのような言語を使っても、言いたいことは言えるのだ」⁵⁶⁾。

オクリにとって、作家はどの言語を使って、誰のために書くかといった、オビ・ワリやグギが提起したような問題は、疑問ともならないように思われる。「書くことのすべてが、書く方法それ自体が、誰のために書くかという疑問への答えとなる。『内なる風景』は、環境と、それが内なる自己に作用するものとの関係を見つめたいと思う全ての読者に向けて書かれた。たくさんの人々を傷つけているものを私は書いたのだ」とオクリは述べている⁵⁷⁾。

オクリは「文学には面白い文学と、面白くない文学があるだけだ。私はアフリカ文学の定義や読者に関心はない」⁵⁸⁾という。コスモポリタンとなったオクリの面目躍如とした言葉である。これまでのパイオニア世代の作家たちが逃れることが出来なかった「アフリカ人」、「黒人」、「第三世界人」としての態度、彼らが強迫観念のように持ち続けたアイデンティティの模索は、オクリのような若い作家たちからは消えてしまったのかという疑問を感じざるを得ない。いわば、「民族派」の作家たちを尻目に、オクリのような作家もまた増えてきている。オクリは、パイオニア世代の作家たちと自分の関係を問われた時、「私は彼らを受け入れる」(I accept them)と、短く、ややぶっきらぼうに答えている⁵⁹⁾。

② アンドレ・布林ク

20 世紀の最後の 10 年間に及んで、アパルトヘイト（人種隔離体制）が法制化されてきた国＝南アフリカ（以下、南ア）は、検閲、発禁、投獄、国外追放と言った国家権力の行使において、自由世界で最も過酷な制度を実施してきた。したがって、そこでは民主的権利の擁護を求める一般民衆、政治家、活動家、知識人の誰もが、国家の体制や社会制度に背を向けざるを得ないという特殊な状況が存続してきた。作家を含めて創造的芸術にたずさわる者は、この抑圧に対して独特な反応を示してきた。

南アフリカの文学は、主に英語、アフリカーンス語、アフリカの民族諸言語で書かれてきた。初期のオリブ・シュライナー (Olive Schreiner, 1855~1920)、アラン・ペイトン (Alan Paton, 1903~1988)、そしてナディン・ゴードイマ (Nadine Gordimer, 1923~2014。1991 年度ノーベル文学賞受賞)、などイギリス系・オランダ系の白人作家、ピーター・エイブラハムズ、アレックス・ラ・グーマ、エスキア・ムパシェーレなどカラード系およびアフリカ系の第一世代の作家たちから、現在活躍している多数の若手作家にいたるまで、英語で書いている作家の場合、作品がたとえ発禁の憂き目にあっても、英語という世界の共通語を介して、南ア以外の地に多数の読者を獲得できる可能性が常にあった。

それに反して、英語とならぶ（アパルトヘイト体制下）南アの公用語の一つ（現在では、他に九つのアフリカ民族語が公用語とされている）、オランダ語系のアフリカーンス語で書かれた作品は、外部世界にはほとんど知られず、南アという人種国家の、それもアフリカーナーの文化の壁の中に閉じ込められてきた。

アフリカーナーの作家としては、劇作家アソル・フガード (Athol Fugard, 1932~)、小説家ブレイトン・ブレイトンバッハ (Breyten Breytenbach, 1939~)、J. M. クッツェー (J. M. Coetzee, 1940~, 2003 年度ノーベル文学賞受賞) などが国際的に知られるが、それはもっぱら英語というメディアを通してのことである。ここでは彼らと並んで、アフリカーンス語文学史上最も才能豊かな作家だとの評判の高いアンドレ・布林クを取り上げて、南ア・アフリカーナー系作家の視座を紹介し、若干の検討を試みておこう。

布林クは、1935 年、南ア・オレンジ自由州の小村に生まれている。だが、彼自身の言葉によると、「次々と南ア全土の小村で育てられた」という⁶⁰⁾。下級

裁判所の判事であった父親の任地が次々と移り変わったということであろう。だが、どの村々もアフリカーンス語を話す、カルビン派教徒が圧倒的に多いアフリカーナー一色の土地柄であった。

作家としてのブリンクは、父親よりも母親により多くを負っているようだ。イースタン・ケープ出身の母親は英文学を好み、その影響で、12歳の頃から英語を学び始めたという。教育熱心な母親は、1週間に1日、家庭で英語だけを使用する日を決めていた。その日だけは誰もがアフリカーンス語を使うことが許されなかったのである。子供たちのなかで、英語だけしか話さないという約束をいちばんよく守れた者は1シリングの褒美をもらえたという。この褒美が幼いブリンクの英語への興味をいっそう刺激したらしい。

その後、ブリンクはトランスバール州のポツェフストローム大学（Potchefstroom）へ進学した。そこはカルビン派の砦ともいべき宗教色の強いところであったが、もっぱら英語が使われていた。ブリンクはこの大学に7年間在学し、アフリカーンス語文学と英文学の分野で二つの修士号を得た。

卒業後、一つの転機が訪れる。早くからフランス語とフランス文化に憧れていたブリンクは、ソルボンヌへ留学、ここで2年間比較文学を学ぶことになる。パリはブリンクにとって、都会生活を経験した最初の場所だった。当時のブリンクはすでに結婚しており、パリでの生活はつましいものであった。彼が祖国南アの政治・社会状況に対していっそう広い視野を開くことになったのは、この時のパリの経験が引き金になっている。

「アフリカの年」といわれた1960年、アフリカはまさに混乱の渦中にあった。祖国南アではANC⁶¹⁾とPAC⁶²⁾が非合法化され（4月）、コンゴでは独立後1週間とたたずに動乱が勃発した（7月）。とりわけて、ブリンクに大きな衝撃をあたえたのは、同年3月21日のシャープビルの虐殺⁶³⁾であったと言われる。この日、ソブクウェ議長⁶⁴⁾の率いるPACはパス法反対のデモを組織し、ヨハネスブルク郊外のシャープビル警察署前に集合したが、これに対し白人警官が一斉に発砲したのである。死者は69名。そして180名の負傷者が出た。

この事件後、ルツーリANC議長⁶⁵⁾は公然とパス帳を焼き、多くのアフリカ人がこれに同調した。政府は非常事態を宣言し、ただちにANC、PACの指導者2,000人を拘留、2万以上のアフリカ人を逮捕した。翌61年、ロンドンで開催された英連邦諸国首脳会議は南ア（連邦）を激しく非難、南アは英連邦脱退へ

と追い込まれ、同年 5 月、共和国を宣言した。

シャープビルの虐殺はブリンクにとって人生の転換点となった。「以前からアパルトヘイトの基本的枠組みを嫌ってはいた。しかし、この問題に頭を突っ込むことはしなかった。シャープビル虐殺は、私の政治意識を強める契機となった」と述べている。「シャープビルの虐殺」のニュースに接したのは、ソルボンヌに留学中のことだった。この事件を契機に、ブリンクは「アパルトヘイトの構造とその致命的な派生問題への単なる反対だけでなく」、アフリカーンス語で書く作家として自身の中に「新生」が起きることを自覚したと言う。これによって、彼は「状況」のなかへ戻ることを決意したのだった⁶⁶⁾。

1961 年、南アへ帰国したブリンクは、「1820 年の入植民」⁶⁷⁾の町グレアムズタウンのローズ大学でアフリカーンス語文学講師として教壇に立った。同時に、創作活動に入り、やがて劇作家、小説家として頭角を現していく。しかし、英語に翻訳された小説『大使』(*The Ambassador*, 1963)を含め、アフリカーンス語で書かれた初期作品は、人間関係の複雑さから生じる個人的な愛、裏切り、不正、苦悩といったありふれた問題を扱っている。

1968 年、パリへ舞い戻った。この時までにはすでに離婚しており、もはや南アに未練はないとの思いでパリに永住する決意で祖国を離れた。だが、当時の世界を席卷した学生運動に巻き込まれるなかで、ブリンクの政治意識が本格的に開花していく。ベトナム戦争、東西対決といった問題への関心は、フランス文化への疑問を呼び覚まし、自らの祖国南アと自己との繋がりを再考させずにおかなかった。やがてブリンクは、祖国から 6,000 マイル離れたパリの地で執筆活動に専念するという自己本位な選択に我慢が出来なくなり、自らの社会に身を置くことを決意した。英、仏滞在 2 年後、「自分が書く内容に責任をとるだけでなく、書いたものが引き起こす結果にも責任をとる」⁶⁸⁾との覚悟で、再び南アの地へ戻って行く。

この時の彼の政治意識の結晶とも言える最初の小説は、8 年間の構想と推敲のあとにアフリカーンス語で発表された。『夜の認識』(*Kennis van die Aand*, 1973)である。この小説は「白人、それもアフリカーナー作家の小説としては、今日の南アが生み出しうる最も革命的な作品」⁶⁹⁾と言われるもので、1974 年 1 月 29 日付で発禁処分を受けた。それまで、アフリカーンス語の作品で発禁処分を受けたものはなかった。これにより、ブリンクは反体制の旗手と騒がれることになった。アフリカーンス語文学の歴史に新しい地平を拓いたこの小説について

ては、後でやや詳しく論じることしよう。

「監獄国家」南アが生むべくして生み出した才能と言われるブリンクであるが、彼ははじめ戯曲、紀行、小説、文芸批評のすべてをアフリカーンス語で発表していた。シェークスピア、カミュ、それにドイツ文学の作品をアフリカーンス語へ翻訳してもいる。1958 年以後、40 以上の作品をアフリカーンス語で発表し、1973 年以後は英語でも書き始めた。この間、南ア最高の文学賞と言われる CNA (Central News Agency) 賞を三度まで受賞しているほか、1980 年にはマーチン・ルーサー・キング記念賞を、1983 年にはフランス政府からレジオンドヌール勲章を受けている。キング記念賞はイギリスのナショナル・ウェストミンスター銀行の肝入りで、キング博士の理念にふさわしい文芸作品（詩・演劇・テレビや映画の脚本も含まれる）に毎年あたえられるものである。そのほか、二度までブッカー賞の候補に、さらにはノーベル賞の候補にもあがった。

ブリンクは、初めラテン諸国などの紀行文学のほか、サルトル的なカメラ理論⁷⁰⁾を駆使し、サド的な没道徳をテーマにした一連の劇作品（シェークスピア的悲劇や不条理演劇）を発表しつつけた。しかし、こうした劇作品よりも、むしろ小説の方が彼を話題の人に仕立て上げた。

1963 年から 1965 年まで、前衛雑誌『セスティガーズ』(*Sestigers* 『60 年代の人々』)の編集に携わったが、その当時から、彼は同じ仲間の J. D. オッパーマン⁷¹⁾、イングリッド・ヨンカー⁷²⁾、ヤン・S・ラビー⁷³⁾など、性と宗教のタブーを破り、高度な実験的手法を採用したグループの中でも、現状に抗し、白人支配体制を激しく批判する作家グループの代表的存在として注目されてきた。彼らは、従来のアフリカーナー作家の偏狭な世界観を拡大する意識的な努力を傾けた。アフリカーナー王国の文化的タブー、ことに硬直したカルビン派の宗教意識、性の問題をめぐる道徳意識への積極的な挑戦をこころみ、性の赤裸々な表現、宗教に対する疑問、教会権力の愚弄を通してアフリカーンス語文学に新地平を拓こうとしたのである。彼らにとって、神と肉体（肉欲）は矛盾しないと考えられた。

小説家としてのブリンクの名を不動のものとしたのは、先に言及した『夜の認識』だった。これの発禁の理由は、宗教の誹謗、セックスの神聖さの冒涇、アフリカーナーへの侮辱、革命思想の鼓吹だとされる。ヨハネスブルクの「スター」紙は「アフリカーンス語で書かれた重要な作品がこのような扱いを受けるのは前代未聞」とコメントしたが、保守的なアフリカーナー層からは「わが

国語を汚すもの」「絶対に書かれるべきでなかった」などという厳しい批判が続出した⁷⁴⁾。のちに、南ア最高裁判所は、この小説をポルノ的、冒瀆的、共産主義的と断じた。

主人公は、33歳のカラードの演劇青年ジョゼフである。彼は恋人ジェシカ（白人）の殺害の罪に服し、独房で闇を見つめつつ処刑を待っている。そして、ジョゼフの家系に刻み込まれた人種混合と性的暴力の歴史がその口を通して語られる。独房は、明らかに南アという「監獄国家」を象徴している。性の不安、暴力、情欲、残虐行為が容赦なく描写されるが、それは恐怖に取り憑かれて狂暴化した国家権力そのものを象徴している。このような描写を通して、ブリンクはアフリカーナーの中世的宗教意識を逆照射し、肌の色に磔にされた南アの現状、南アの悪夢を暴こうとしたのである。

『夜の認識』の発禁処分は、ブリンクにとってもう一つの転機となった。祖国南アに作家としてとどまろうと決意した以上、どうしても民衆の手に届くところにいなくてはならない。これは作家が読者と取り交わす至上命令である。アフリカーンス語で書いたものが発禁処分になる以上、民衆のもとへ到達するための別のメディアを探さなければならなかった。こうして彼は『夜の認識』をひそかに英訳し、その原稿をロンドンへ送るのである。英語版『闇を見つめて』（*Looking on Darkness*, 1974）はこうして誕生した。

次の小説『白く乾いた季節』（*A Dry White Season*, 1979）は、1976年のソウェト蜂起に取材したもので、警察権力の非道をテーマにしている。事件の発端は、白人教師ベンの勤務する学校の黒人清掃作業員ゴードンの息子で、ソウェト蜂起の騒ぎの中で行方不明となったジョナサンをめぐり、その真相を解こうとした父親の失踪と不審な死である。両事件の解明に乗り出したベンは、度重なる妨害と脅迫にもめげず、警察権力の非道を明らかにしていく。ベンや良心ある人々の努力によって、真実はおぼろげな形を取り始めるが、彼らは最後には生命を奪われてしまう。

この小説も発禁処分を受けた。治安警察に悪意をもって描くことで、その活動を妨害し、ひいては国家を危機に陥れるというのがその理由だった。とはいえ、この小説の場合、新刊配本の前1週間のうちに、秘かに個人宛に2,000部を郵送することに成功している（返本は、ただの6冊だけだった）。リプリント版1,000部も同じ方法でたちまち売りつくした⁷⁵⁾。

心理的告白小説、自己否定の文学と言われるブリンクの一連の小説は、個人の罪意識、自己と社会の救済の道を鋭く模索するもので、人間としての永遠の問題、個人と国家の関係を突き詰めるなかで、人間性の解放を激しく願望するものである。ブリンクが南ア人種国家のあらゆるタブーに挑戦しなければならなかったのはこの願望のためである。以後、「狂気と暴力のアパルトヘイト国家に果敢に挑戦し、南アの悪夢を暴く」ことが作家活動の中心となる。彼は次のように述べている。

「苦悩と挫折が直接的に充満している南アフリカの状況下で、なぜ小説の執筆に専念することが出来るのかとたびたび質問され、時にはとがめられたことがある。ものを書くことは、言葉よりも行動を必要とする状況からの逃避だという見方を含蓄しているのであろう。だが、とりわけ南アフリカが置かれているような情勢下では、書かれた言葉自体が重要な行動としての重みをもっていると言いたい。もし、そうでないなら、権威をふりかざす政権は、なぜ検閲という手段に訴えるのか。なぜ、政府は出版された言葉に、とりわけ、また特別なまでに脅威を覚えるのか」⁷⁶⁾。

さらに、作家の役割について、次のように述べている。

「社会における作家の役割の一つは、その社会に何が起きているか、また起きることを許容できるものは何かを人々に明らかにすることである。自らが置かれている社会について疑問を提起することを断念した、あるいは断念させられた人々の沈黙を突き破って、言葉による闘いを挑むことが作家の役割である。作家にとって重要なのは、人間的次元であり、人々が苦しみながら生きている現実である。その場合、作家は用意された回答を伝える必要はない。迫害され沈黙させられている大衆の沈黙を声にすればよいのである」⁷⁷⁾。

「(南アフリカ社会について) 執筆し、探求し、調査し、その根本にまで到達しようとする試みは、こうした制度の存在のすべてに挑戦し、抵抗する行為となる。隠蔽には暴露することによって、偽りには真実によって、沈黙には言葉によって対抗するしかない。この状況のなかでは、執筆すること、そして作品を発表することは、生きることへの衝動の一つである自由への願望の重要な意思表示となる。そして、真実は偽りにとって危険であり、言葉は沈黙を脅かすのだ」⁷⁸⁾。

③ ベッシー・ヘッド

同じ南ア生まれの作家でも、女性作家ベッシー・ヘッド(1937~1986)の生涯は特別な悲しみに満ちている。彼女は、1937年7月6日、ピーターマリッツ

バーグの精神病院で生まれた。その前年、ヨハネスブルクの富裕な競走馬主であった一家は、召使いとして厩舎の番人に雇っていた黒人男性との間に子供を宿したことで、ベッシーの母親を「狂気」ときめつけ、白人社会の面子を汚すとして勘当し、遠く離れたこの病院に監禁していたのである。

ベッシーはただちに孤児院へ送り込まれたが、母親は養育費を送りつづけた。だが、6歳の時、母親は学資を残して自殺した。ベッシーが出生の秘密を知らされたのは13歳になってからだった。ある日、学校の校長がベッシーを呼んで、「あなたは、十分に気をつけなさい。母親のようになってはいけません」と忠告したという⁷⁹⁾。残された学資で、ベッシーは進学して教員資格を取り、ケープタウンへ出て小学校教師になった。有名な『ドラム』(*Drum*) 誌(1951年、ケープタウンで創刊)⁸⁰⁾などでも働き、結婚して一児をもうけた。

1964年、祖国への再入国を許さないパスポート、いわば片道キップを得て、南アを脱出、すぐ北の隣国ボツワナへ亡命した。彼女がボツワナの市民権を獲得できたのは、それから15年後、1979年のことだった。晩年の22年間を独息子とともに、ボツワナの北方の村セロウエで暮らし、この村で作家活動を始めることになった。

南部アフリカの小国ボツワナは、1966年に独立した。現在では、ダイヤモンド、銅、ウラニウムなどの地下資源が注目され急速な人口増加(国民の半数以上が15歳未満)があり、将来に夢を託している国であるが、独立当時は世界最貧国20ヶ国に数えられていた。南部アフリカの高原台地に位置する内陸国で、平均海拔900メートル、国の南部と西部はカラハリ砂漠に侵入され、極端に雨が少なく、わずかに北・東部のウッドランド・サバンナに自給農民と牧畜民が集中しているに過ぎない。独立当時の総人口は約55万だった。

祖国を捨て、家庭を捨て、「カラード」としての人種的アイデンティティを捨てたベッシーはこの地で教え、難民キャンプで働き、協同組合運動にかかわりながら、自己の疎外・亡命感覚を癒し、「新しいアフリカ人」(*The New African*)として、魂の再生をはかるのである。

「私がこの村で暮らすようになったのは、偶然のことだった。それまで私は散りぢりに裂かれた人生を歩んでいた。しかしこの地では、引き裂かれてきたものがいく分かたがり始めたのだった。縫い合わされるという感覚、人生の全体感がここには存在した。つまり、人は何と美しく不思議な存在でありうるのかという感情、自分は生きているの

だという実感を得た」⁸¹⁾。

ベッシーが書き始めたのは、これ以後のことだった。国家の暴力装置（たとえば、アパルトヘイト体制）に翻弄されることなく、さまざまな権力や因習に取り込まれない人間どうしのあるべき関係、そこからの脱出の試み、男と女のあるべき姿を描き続けることで、自己の精神的自立を目指すことになる。

人種、民族、国境を越えた「新しいアフリカ人」になろうとする彼女の努力は、まさに奈落の上の精神的綱渡りと呼ぶべきものであっただろう。しかし、その境遇こそが、彼女を創作活動へと駆り立てる衝動のすべてであったとも言える。今、彼女の魂はセロウェ村の共同墓地に眠っているが、筆者が見たその墓標には「勇気、無私、そして愛はすべてにうち勝つ」(Courage, Selflessness and Love conquers all) と刻まれていた。作品として、『雨雲が集まる時』(*When Rain Clouds Gather*, 1968)、『マル』(*Maru*, 1973)、『力の問題』(*A Question of Power*, 1973)、短篇集『宝物収集家』(*The Collector of Treasures*, 1977)、歴史エッセイ『セロウェー雨風の村』(*Serowe: Village of the Rain Wind*, 1981) などが残されている。

VI. アフリカの「作家」たち

さて、アフリカには、大陸的次元でどれ程の数の「作家」が存在するのだろうか。この問いに答えるのは難しい。「作家」の定義自体がすこぶる難しいことは、アフリカに限らない。アフリカを含めて、「作家」は世界中で毎年、いや毎日誕生し、同時に姿を消していることであろう。

① 「作家」の数をかぞえる

アフリカの場合、明確に言えることは、執筆活動のみで生計を賄っているような「作家」はきわめて稀で、アチェベもショインカも、そしてグギも（政治拘禁や失業の期間を除けば）ほとんど常に大学の教壇に立ってきた。アフリカでは「作家」は大学で教えているほか、新聞や雑誌のジャーナリストであるか、労働組合の活動家や政治家であることが多い。トゥトゥオラは、『やし酒飲み』執筆当時は、ラゴスの労働局に雇われていたが、「暇をもてあます」使い走りが仕事だった⁸²⁾。出版・ジャーナリズムなどマスコミの未発達、読書の習慣が定着しているとは言い難く、アフリカで「プロの作家」として生計を立てることは難しい。ジェームズ・カーリーは、1970年代の終り頃、グギのことを作家業だけで生計をたてようと志した最初のアフリカ人作家の一人だと述べているが⁸³⁾、家族や身の事情が、作家によって大いに異なるはずであるから、この言説の

根拠はそれほど明瞭でない。

以下では、この間に輩出したアフリカ人「作家」を知るために、関連する事典類を見てみよう。

- a. D. E. ヘルデック編『アフリカ人作家』(Donald E. Herdeck, ed., *African Authors, A Companion to Black African Writing 1300~1973*, 1973) によれば、18 世紀以前から 1972 年までに登場したアフリカ人「作家」として、580 人を見出し項目に数えている。このうち、1940 年から 1972 年までに活動した作家は 433 人である。分野別でみると、この全期間で詩人が最も多く、ついで小説家、劇作家の順となる。作家の国別所属では、南アフリカが 124 人で群を抜いて多く、ついでナイジェリア 87 人、ガーナ 55 人となる。ケニアは 29 人を数えるが、ここにはスワヒリ語作家・詩人も含まれている。

この事典では、サンゴールなど、フランス語で書いたネグリチュード派⁸⁴⁾の作家・詩人、ショインカ、ムパシェーレ、ブルータス、トゥトゥオラなど英語圏の年配作家に圧倒的なスペースが割かれている。出版元が、ネグリチュード系の「ブラック・オルフェウス」(Black Orpheus) であることが大きな理由の一つであろう。それとは別に、やや理解しにくいことだが、アチェベはショインカの約 4 分の 1、グギはショインカの約 6 分の 1 のスペースしかあてられていない。ムパシェーレはグギの 2 倍以上、トゥトゥオラはグギの 3 倍以上のスペースが割かれている。

しかし、以下の事典では、上記 D. E. ヘルデックの『アフリカ人作家』とは違って、すべてにおいて、ショインカ、アチェベ、グギの三人に関する記述が、他のどの作家よりも前面に押し出され、圧倒的なスペースが割かれている。1930 年代から 1950 年代初期にかけて風靡し、詩作品を中心としたフランス語による「ネグリチュード文学」が遠景に退き、かわって台頭した英語圏アフリカから不動の上位 3 人、いわゆる「御三家」が登場したのである。

- b. H. ゼル、C. バンディ & V. クロン編『アフリカ文学読者のための新案内』(H. M. Zell, Carol Bundy & Virginia Coulon, ed., *A New Reader's Guide to African Literature*, Second, completely revised and expanded edition, 1983) は、詳細な文献書誌、出版社、書店、各種雑誌の案内書であるが、全ページの 30% 近くをあてて、93 名の作家を紹介している。ここでは、ショインカに圧倒的なスペースが割かれ、次にグギ、アチェベの順になっている。

- c. D. キラム&R. ロウ編『アフリカ文学コンパニオン』(D. Killam & R. Rowe, ed., *The Companion to African Literatures*, 2000) では、344 人の「作家」が見出し項目として掲載されている。上位は、南アフリカ 94 名、ナイジェリア 81 名、ジンバブエ 28 名、ガーナ 26 名、ケニア 20 名である。ここでは、ケニアの場合、スワヒリ語で書く作家は含まれていない。ここでも、最も多いスペースをあてて説明されるのはショインカで、ついでグギ、アチェベの順である。ショインカにはアチェベの 2 倍のスペースが割かれている。
- d. S. ギカンディ編『ルートリッジ版アフリカ文学百科事典』(S. Gikandi, ed., *The Routledge Encyclopedia of African Literature*, 2003) は、600 人以上を見出し項目にあげている。ここで最も多くスペースが与えられているのは、グギである。次にアチェベ、ショインカの順になる。
- e. R. マラン編『アフリカ人作家 A~Z』(R. Malan, compiled, *A-Z of African Writers, A Guide to Modern African Writing in English*, 2009) は英語で書く作家に限定されるが、大陸全土から 215 人を見出し項目にあげている。南アは 110 人、ナイジェリアは 24 人、ジンバブエは 11 人、ケニアは 7 人である。ここでは、グギ、アチェベ、ショインカには、ほぼ同量のスペースがあてられている。この事典の特徴の一つとして、女性作家を多く取り上げている。ナディン・ゴードイマなどに、どの男性作家よりも多いスペースがあてられている。

② 文学シラバスの「非植民地化」

上記 5 つの事典の記述を裏づけるような、興味深い調査結果を、テキサス大学のアフリカ文学研究者 B. リンドフォースが提出している。

リンドフォースは、当代屈指のアフリカ文学、とりわけてその書誌学的研究の大家である。彼は、1986 年夏および秋に 5 ヶ月にわたって英語圏 14 ヶ国の 26 大学の文学科、演劇学科などを訪問した。アフリカ文学がアフリカの大学でどのように教えられているかを調査するためだった。カリキュラムでのアフリカ文学の作家と作品の取り扱われ方、文学シラバスの現状を知り、アフリカ諸国の独立以後、どれほど文学シラバスが「非植民地化」されたかどうかに関心があったという。

そこで、各大学の文学関連学科のリーディングリストを調べ、どの作家、ど

の作品がどの程度取り上げられ、必読とされているかを調べた結果を『ロング・ドラムズ&キャノンズーアフリカ文学の教育と研究』(*Long Drums and Canons, Teaching and Researching African Literatures*, 1995) に発表した。

本書は、その後の追加調査結果をも取り入れて、最終的に当時の英語圏アフリカ諸国の 40 大学のうち、30 大学の調査結果（ただし、カメルーンのヤウンデ大学を含めて、南アフリカの全大学を種々の理由で除外している）を示している。調査は、時間的制限のほかにも、この種の調査（政治的な意図を疑われかねない）を拒んだ非協力的な教育機関もあって、完璧、網羅的でもない。また、データは、西アフリカ、とくにナイジェリアに偏っているが、その一つの大きな理由は、リンドフォースによれば、英語圏アフリカの 40 大学の 60% (25 大学) は西アフリカに存在し、しかも 25 大学のうち 68% (17 大学) がナイジェリアに存在するからである。

東アフリカのデータはきわめて不十分であるという。ケニア、ウガンダの 9 大学のうち、調査は 4 大学のみであるほか、スーダンの大学からの報告はない。中央アフリカ、南部アフリカの場合は、ほぼ網羅できているが、ダルエスサラーム大学およびマラウイ大学の調査は不完全であるという。

にもかかわらず、最終的に 14 ケ国、30 大学の 194 コースを対象（1980 年代中頃の、英語圏アフリカ諸国の大学のアフリカ文学コースのうち約 60%にあたる）に調査結果をまとめた。ここには、学部も大学院課程も含まれている。

これらの大学では、「英文科」(Department of English) の名称を残しているものも多いが、ケニア、タンザニア、ザンビアの大学では「文学科」(Department of Literature) の名称を取っている。リンドフォースによれば、学科名称を問わず、どちらにおいても「アフリカ文学」は重要な位置を占めているという。ナイジェリアのソコト大学は「ヨーロッパ語学科」(Department of European Languages) で、エリトリアのアスマラ大学は「外国語学科」(Department of Foreign Languages) でアフリカ文学を教えている。ヤウンデ大学のみが「アフリカ文学科」(Department of African Literature) の名称を掲げている。一方、モーリシャス大学では、アフリカ文学は一切取り上げられていない。ケニア、タンザニアの「文学科」では、アフリカ文学が特に重要な位置を占めているが、これに反して、ガーナ大学「英文科」、ケープコースト大学「英文科」などでは、植民地時代とほとんど変わらない英文学主体の保守的なカリキュラムが維持されている。

③ 20 世紀アフリカ文学の「御三家」

さて、調査対象になった 194 コースで、いちばん多く取り上げられている作家はショインカ (87 コース) で、次がグギ (77 コース)、アチェベ (57 コース) の順であった。

リンドフォースは、現代アフリカ文学を担う代表的作家約 40 人について調査結果を表にしているが、そのうち不動のトップ「御三家」については、以下のよう示されている。

【著者別】

	作品数	コース	大学数	国家数	合計点数
1. ショインカ	146	87	30	14	277
2. グギ	110	77	28	13	228
3. アチェベ	71	57	27	12	167
以下省略					

【作品別】

	コース	大学数	国家数	合計点数
1. 『神の矢』(アチェベ)	23	16	7	46
2. 『一粒の麦』(グギ)	22	15	7	44
3. 『血の花弁』(グギ)	19	15	7	44*
4. 『国民の中の男』(アチェベ)	19	14	8	41

以下省略。＊ママ。左の 3 項の数字が正しければ、合計点数は 41 となるはずである。

作品別では、36 位まで、20 人の作家の 41 作品に序列が付けられている。それによると、トップ 10 以内に、グギは上記 2 作品を含めて 3 作品（ほかに、6 位『デダン・キマジの裁判』）、アチェベ（上記 2 作品）とショインカ（7 位『通訳者たち』；9 位『コンギの収穫』）はともに 2 作品である。さらにグギは、14 位（『したい時に結婚するわ』）、24 位（『十字架の上の悪魔』）、28 位（『川を隔てて』）を占めている。アチェベは、12 位（『部族崩壊』）、32 位（評論集『未だ創造の日の朝』）、ショインカは、13 位（『イダンレ』 *Idanre*）、28 位（『ライオンと宝石』 *Lion and the Jewel*）、36 位（『地下室のウソの鳥』 *Shuttle in the Crypt*、『戯曲集』 *Collected Plays*、『狂人と専門家たち』 *Madmen and Specialists* の三作品）が並んでいる。このことから、この調査結果によれば、累積ポイントとして、グギ作品の使用が「御三家」のなかでトップに位置していることが

わかる。

以上の調査とは別に、リンドフォースは、世界の研究者がアフリカ文学の専門論文に引用してきた作家と作品名を調べ、その結果を（テキストとして教室で使用するとは別に）作家の「有名度」を示す指標として、序列化した。（ただし、この調査では、フランス語圏の作家、南アフリカの白人作家、およびアラビア語で書く作家は対象になっていない）。

この調査は、1936年から1986年の51年間に発表されたアフリカ文学関連専門論文（世界各国を網羅しているが、英語で書かれた論文に限られる）で引用された作家と作品を通時的な評価基準として指標化し、ポイント順に並べている。それによると、1936年から1976年まで（3,305編）、1977年から1981年まで（2,831編）、1982年から1986年まで（5,689編）、合計11,825編が調査対象になっている。この結果は、「有名度」として序列化されている。これに対して、「調整序列」は、1980年代半ばでの大学教育現場での使用に関する先の共時的調査結果を指標化したものである。ついで、これら二つの結果を独自の方法で勘案し、その結果を「総合序列」として提示している。

この結果、「有名度」順に37位まで、「調整序列」順に33位までが示され、「総合序列」順に21人の作家がリストされている。各序列の上位3人が、いわゆる「御三家」である。いずれにおいても、第4位以下を大きく引き離しており、リンドフォースは、これら三人の地位を「難攻不落」としている。なお、テキストとして使用されることの多い作家や作品が、研究者による専門論文に多く引用されるとは限らないし、その逆もまた真とは言えない。教育現場で多く使われる作品が、研究者による引用の多い作家だとは限らないのである。ただし、ショインカ、アチェベ、グギの場合は、両者の間に、きわめて高い相関が認められる。

【有名度：引用序列】

- | | |
|----------|------|
| 1. ショインカ | 2961 |
| 2. アチェベ | 2463 |
| 3. グギ | 1657 |

【調整序列】

- | | |
|----------|-----|
| 1. ショインカ | 277 |
| 2. グギ | 228 |

これら二つの指標を総合して、リンドフォースは以下の 21 人を、現代アフリカの代表的作家として序列化している。

【総合序列】

1. ウォーレ・ショインカ 2. チヌア・アチェベ、グギ・ワ・ジオンゴ 4. アイ・クウェイ・アーマ 5. J. P. クラーク（ベケデレモ） 6. オコト・ビテック 7. クリストファー・オキボ 8. ピーター・エイブラハムズ 9. デニス・ブルータス、アレックス・ラ・グーマ 11. ゲイブリエル・オカラ、エスキア・ムパシェーレ 13. コフィ・アウノー、オーラ・ロティミ 15. アマ・アタ・アイドゥ 16. アモス・トゥトゥオラ 17. シプリアン・エクウェンシ、ベッシー・ヘッド （以下略）

VII. アフリカ文学の意志

文学表現へと向かうアフリカ人作家の魂の原風景はどのようなものとして描くことが出来るだろうか。「事実小説より奇なり」という。ときには、事実のほうに筋立てが面白く、珍しい話があるという。これは、おそらく偽らざる事実だろう。

だが、すぐれた作品は、現実の経験とイメージを見事に作り替えた時に生まれると言われる。作家の想像力は現実をつくり変えるが、この時にも、現実に対して独特な位置から鏡をかざしている作家の存在、その立ち位置を見失うことは出来ない。作家が立っている現実社会の磁場を把握しないかぎり、作家が問うている強烈に個性的な世界観の全体を掴むことは不可能だろう。

アフリカ人作家の人種的、民族的多様性は、言うまでもない。しかも、人種や民族籍だけでくくれるほど、アフリカ文学の世界は単純でないし、それらを越えて、作家の独自の個性もすこぶる多様である。使われる言語も、英語、フランス語、ポルトガル語、アラビア語、その他アフリカの民族諸言語が多岐にわたることは言わずもがなである。

① アフリカ文学の定義

アチェベが「アフリカ文学を小さな、こぎれいな定義に当てはめることは出来ない。私は、アフリカ文学を一つの単位とは見ないで、連合単位の一つの集合—事実、アフリカの国家語文学（多くの場合、旧宗主国言語で書かれる文学

のこと)と民族語文学の総集計と見るものである」⁸⁵⁾と述べているように、使用言語の種類から見ても、「アフリカ文学」の幅はすこぶる広い。しかも言語の多様性だけではない。一例として、P. N. パレク & S. F. ヤーヌ編『ポストコロニアル時代のアフリカ人作家』(P. N. Parekh & S. F. Jagne, ed., *Postcolonial African Writers*, 1998)は、‘African Writers’に、人種籍だけでも、黒人作家はもちろん、「カラード」、白人、アジア系(インド人)、アラブ系の作家を含んでいる。

「黒人作家」が、アフリカ文学の中枢を担っていることは間違いない。私見によれば、「カラード」は南アフリカの特殊な政治風土に誕生した(させられた)のであり、人種社会の最底辺に位置づけられた黒人との間に、その社会を見る「下からの視線」に、「人種」を越えた共通点が多いということである。これを証明するかのように、アパルトヘイト反対闘争の中では、「カラード」はもちろん、ある場合にはアジア人をも含めて、‘We Black’の概念に含まれた。このことは、アメリカ文学において「黒人文学」をアメリカ文学一般の中に解消することが長くためらわれてきたのと似て、アフリカ黒人や「カラード」の文学を白人作家と同列に論じることを躊躇させるのである。

これに対して、アフリカ出身(または在住)の白人作家の場合はどうであろうか。たとえば、ジンバブエ(旧南ローデシア)で25年間を過ごしたイギリス系の女性作家ドリス・レスリング(Doris Lessing, 1919~2013. 2007年度ノーベル文学賞受賞。イラン生まれ)は、アフリカを舞台とした作品を多く書き、Parekh & Jagne (ed.)でも‘African Writer’として紹介されているが、彼女自身は、かつて来日時の講演で、自らはイギリス文学の作家だと思ひ、その伝統に身を置いて書いていると明言した。

これとの関連で、たとえば英語で書くナディン・ゴードイマ(1991年度ノーベル文学賞受賞)、アフリカーナー系のアンドレ・ブリנק、ブレイテン・ブレイテンバッハ、J. M. クッツェー(2003年度ノーベル文学賞受賞)など南アフリカ生まれの白人作家はどう扱えばよいのだろうか。彼(女)らが、レスリングと同じく、イギリス文学、あるいは広く欧米文学の伝統に身を置いて書いていることはほぼ間違いない。

彼(女)らにとっては、身を寄せるべき「アフリカ文学」の伝統などは存在しないのであろうか。しかし、その作品群は、紛れもなく現代南アフリカの人間と社会を内側から描き出しているはずだ。彼(女)らは、黒人作家や「カラ

ード」作家とは違った独特な視点からアフリカの人間と社会を照射しており、したがって、その作品群は「アフリカ文学」の世界をいっそう豊かに、奥の深いものに仕立てているのではあるまいか。黒人作家との相違をあえて指摘するならば、彼（女）らが拠って立つ言語と文化の伝統がアフリカの埒外にあるということになるのかもしれない。少なくとも、彼（女）らの母語（第一言語）はアフリカ起源のものではない。ちなみに、N. ゴーディマ著『現代アフリカの文学』（土屋哲訳、岩波新書）は、原題を *Black Interpreters* というが、その意味は「黒人の心を伝える者たち」ということであり、アフリカ黒人作家を指している。彼女が、「黒人作家」（「カラード」の作家を含む）を、自分自身を含む白人作家とは一線を画して、特別に扱っていることは確実である。

かつて、J. ソンダース・レディングが、アメリカ黒人文学のことを「必要性の文学」と規定したことが思い出される。それと同じ意味で、人種社会、そして植民地社会の底辺からの視線こそが、アフリカにおいても、黒人作家や「カラード」作家の作品群を特徴づけ、他の人種による作品から峻別させてきたのではあるまいか。文学の評価が人種の間で揺れ動いていることは確かだ。それが、文学にとって健全なことであるのかどうか、それは問題であろうが、この現実に関心をもち、目をこらさずすることは出来ない。アフリカにおいても、黒人や「カラード」の手になる文学は「必要性の文学」であり、その使命の一つとして、そうした文学を生み出し発展させてきた社会的風土を批判的に、彼らの立場から再検討し直すことを読者に要求しているように思う。

② 文学と「人種・民族・階級」

このように言えば、筆者は「アフリカ文学」の人種や民族的な基盤をいささか強調しすぎているだろうか。グギ・ワ・ジオンゴを中心に、本書で対象としてきた 20 世紀のアフリカ文学は、植民地解放、民族の自決を旗印に掲げた 20 世紀のアフリカ・ナショナリズムの申し子でもあるという認識が筆者にはある。19 世紀から引き継がれた西欧列強による植民地支配は、20 世紀の初頭には基礎を固めたが、二つの世界大戦を経て、革命と民族解放の波が地球上を席卷した。

革命と民族自決、植民地解放と反人種差別、そしてパン・アフリカニズム、ネグリチュード運動、黒人意識運動⁸⁶⁾、非暴力抵抗といったキーワードは、黒人や「カラード」が担って来た 20 世紀アフリカ思想の、そして「アフリカ文学」の重要な構成要素となった。それらは、「アフリカ文学」と呼ばれてきたものの枢軸を形成してきた。アフリカ人としての主体性の追求、自己像の確立、新旧のコロニアリズムからの解放、そして自由と平等の社会正義実現への願望は、

ポストコロニアル時代のアフリカ文学のテーマとしても受け継がれている。

アフリカ文学（特に小説）に濃い影を落としている作品の自伝的傾向、そして深い歴史性、叙述の物語性（口承文学性）、宿命としての政治といったことは、アフリカ人作家の作品と人間性についてどんな特質を示唆しているのだろうか。

③ アフリカ小説の特徴

ナディン・ゴードイマは、このような黒人小説の特徴的な性格から、アフリカ人作家のことを「社会変化を立証する証人」だと述べた⁸⁷⁾。文芸批評の対象となるだけでなく、文化人類学や社会学、政治学、思想史などの立場からのアフリカ文学への根強い関心は、アフリカ小説の持っているこうした傾向と無縁ではないだろう。ゴードイマは「アフリカ人作家は、人間という氷山のむしろ海面に浮かび上がっている、目に見える部分に、小説の材料を求めているように見える」とも述べている⁸⁸⁾。

このような特徴は、アフリカ小説について、何を物語っているのだろうか。現実をよりよいものへ変革したいという欲求は、皮膚の色を問わず、創造的芸術家たちにとっての強い願望となる。自分を取り巻く環境、あるいは歴史というものを、世界の歴史全体を含めて、自らの立場で、自らの用語で再定義したいという欲求にそれは繋がる。文学、とりわけて小説は強烈に個性的な自己の世界観を表明する手段であり、新しい現実、新しい人間の創出を目指して、言葉と想像力で立ち向かう孤独なたたかいである。だからこそ、歴史と人間を再定義する道具として、あらゆる芸術形式のなかで最もふさわしい。アフリカ小説が、歴史と現実を直視し、その背後に働くさまざまな社会的諸力をえぐろうとする性格を発展させてきたことと、以上述べてきたことは無関係ではないだろう。

古今東西の作家がそうであったし、またそうであるように、アフリカ人作家もまた、個人と社会、個人と国家、個人と世界が切り結ぶ緊張関係の場で、文学そのもの、人間そのものについての根源的な問いを発しつつしてきた。たとえば、文学とは何か、その目的は何か。文学者の社会的、政治的参加はどうあるべきか。文学とイデオロギー。西欧近代文学とアフリカ文学の相違。英語やフランス語で表現することの問題。アフリカ民族語文学の可能性。口承文学と書記文学の関係。何を書くのか。誰のために書くのか、などといったことである。

作家は、身の出来事を日常の言語で書く。そこに文学が成立し、文学的普遍に至る道が開かれる。黒人文学、在日朝鮮人文学、ユダヤ系文学、フェミニズム文学、プロレタリア文学といったものは、日常の具体的経験の特殊性から生まれて、人間的普遍にいたろうとするものである。文学一般の普遍性がはじめに存在しているのでもなければ、作家はいきなり普遍を描こうとしてペンを握っているのでもない。

圧制と抑圧の支配的なアフリカでは、むしろ自伝的なものほど社会小説、歴史小説、状況小説として読みうるのはそのためであろう。この意味でも、作家の伝記的事実は、その時代と社会に関する知識とともに、作品の理解にとって大切な助けとなる。欧米文学批評の主流として、テキスト批評から逸脱したかに見える、作家の伝記的事実などは作品解釈とは無関係であり、場合によっては作品の理解を妨げるという考え方があるが、これは時間と空間のローカルな制約から、人間の経験をいきなり解き放とうとする性急で誤った考え方であろう。

いずれにしろ、アフリカ小説の多くに共通したこうした特徴は、アフリカ人作家に社会の年代記作者（**social chronicler**）、あるいは「社会批評家」（**social commentator**）といえる風貌をあたえてきた。同時に文学の座標と政治（国家体制）がきわめて近い位置関係にあり、同時に文学が思想でもあり、歴史とも一体であることを自明の事実として立証してきたと言える。

人間が生きる歴史的・社会的環境を重視し、全体として人間と社会の歩みを記録するアフリカ小説の性格は、作家の個人的体験、芸術的感性が人種、民族、階級的な集団的要因ときわめて密着しているから生じてくるのであろう。

人種的、民族的、階級的な要因に対応する方法は作家によって、また時代によって多様であるが、おおまかに次の三つの段階を区別することが出来るだろう。まず、人種をまる抱えに引き受ける段階である。

1930年代から50年代にかけて一世を風靡したネグリチュード文学運動はその典型であった。W. E. B. デュボイスが言ったように「20世紀は皮膚の色による境界線」の時代だった。本書は、ネグリチュード文学運動に代表されるようなフランス語で書かれるアフリカ人の文学営為についてはほとんど扱わないが、この派の作家たち、特に詩人たちは、人種、民族、階級概念のなかでも、特に人種的特性＝黒を強調した。黒人には独特な内的世界、宇宙認識の方法、芸

術的想像力、美的感覚などが備わっているとし、アメリカ、カリブ、アフリカなど地域ごとの隔たりを越えて、黒人の共通の文化的母体としてのアフリカを確認したのだった。これを「源泉への回帰」(*retour aux sources*)という。ネグリチュードはこの派の詩人、特にサンゴールによって白人文明に対抗する一つの神話的イデオロギーにまで高められた。彼らは、アフリカ対ヨーロッパ、黒人対白人という対立の図式で人種について語り、アフリカ、そして黒人社会の優越性を賛美したのだった。

次は民族的な要因(ナショナリズム)を強調する段階であった。それが、1940年代、とくに第二次大戦後の政治的ナショナリズムと連動していたことは確かである。アフリカ諸国の政治的独立の前後、民族自決の夢に希望を託すことの出来た時代の作品、たとえば、セネガルのセンベヌ・ウスマン(*Sembène Ousmane, 1923~2007*)の『祖国よ、わが美しき民よ』(*O pays, mon beau peuple, 1957*)はもちろん、グギの『一粒の麦』にさえ、その傾向が見られよう。

この時代の作品には、政治的独立がもたらすであろう、植民地支配の汚辱を浄化された未来に対する楽観的展望がのぞいている。これは、パン・アフリカニズムの政治家クワメ・ンクルマが「まず政治的独立が第一歩だ。その他のことはそれからだ。政治的独立がすべての問題への解決の道を開く」と抱負を語っていた時代でもあった。

センベヌの『祖国よ、わが美しき民よ』では、青年主人公ウマールがフランス人の妻イサベルを連れて故郷へ帰り、祖国の民の解放を決意している。また、『一粒の麦』はマウマウ独立戦争をくぐり抜けて独立を迎えるギクユ農民の苦悩の傷痕を描きながらも、独立の未来に一条の光を託している。この当時は、ケニアや南アフリカなど、多数の白人が入植し、広大な土地がアフリカ人から没収されたところでも、来るべき人種間の和解が生み出すであろう人種協調の夢、文化の相互影響が明るい未来、独立アフリカの文化的繁栄をもたらすものと信じられたのである。

1960年代の初め、グギもこうした期待を抱いていた。「ネーション」紙にほぼ1週間に1度のコラムを担当していた彼は「私の見たまま」(*As I see it*)と題するコラムで、独立に期待する願望を熱っぽく語り、白・黒・インド人協調の楽観的な夢を描いている。この当時、彼がウガンダ、もしくはマケレレ大学の知的風土をモデルに、たとえば、白人の言語(英語)の能力を身に着けたアフリカ人の増加こそが、独立ケニアの文化的繁栄を約束してくれると考えてい

たことは間違いない⁸⁹⁾。

この時代、南アフリカではエゼキエル・ムパシェーレが次のように考えていた。

「白人を憎んでしまうこと―拒否または逃避―はやさしい。しかし、彼らが独力で創造し達成したもの―西欧文化―のすぐれたもの（文学、音楽、美術など）がアフリカ人の自分の中に血肉となって深く根をはっていること―受容または承認―を私は痛感している。白人と白人文化の登場しないアフリカの将来―アフリカの自由―は存在しない。これは好き嫌いの問題を越えたアフリカの歴史の現実である。この現実を承認することは、アフリカ人が白人に弁明を要する問題ではなく、アフリカ人自身の自己同定確立の問題である」⁹⁰⁾。

1960年代末期から、アフリカ小説のテーマは第三の段階を迎える（アパルトヘイト下南アの文学は、独自に考察する必要がある）。この頃から、人種協調の夢や黒人権力機構への期待を述べるものは消え、むしろ独立への幻滅感が漂い始めている。この頃には、早くも黒人独立国家内部の諸矛盾が噴き出しており、それは西アフリカでも東アフリカでも同様であった。アチェベの小説第四作『国民の中の男』以降、ガーナのアイ・クウェイ・アーマの『美しき者未だ生まれず』（1968）など、ポストコロニアル社会の諸矛盾をえぐる作品が多数登場している。

作家たちがラディカルな、ある場合には階級的な姿勢を強め、政府との間に微妙な軋轢を経験し始めたのもこの頃からである。ナイジェリアでは、60年代末から70年代初頭にかけてビアフラ戦争が起きたが、この時、アチェベ、エクウェンシ、ショインカ、クリストファー・オキボ（Christopher Okigbo, 1932~1967）らが深くこの事態に巻き込まれた。ショインカは政治拘禁を受け、オキボは戦場で殉死し、アチェベは一時的に筆を折った。エクウェンシはビアフラ側の金策のために渡米し、「独立」ビアフラの放送ディレクターとなる覚悟を決めていた。

④ 新しい世界の文学

今、世界の現代文学は、これまで述べてきたような人種、民族、階級的なものをどの程度まで強調しようとしているだろうか。主として先進諸国の文学について、その人種的、民族的、あるいは階級的な戸籍を云々することは、グローバル化の時代以降、ますます流行らなくなったのではあるまいか。はたして、

アフリカ文学の場合はどうであろうか。作家たちはいよいよ人種的、民族的、階級的な傾向を強化しているのであるか。

実際には、どちらの傾向も存在しているのである。文学のあり方は、ますます多様化しているが、すべては文学としての普遍性、作家のレゾンデートルを確立する方向につながっている。

たとえば、フィリピンの作家がスペイン語や英語で書くのをやめて、フィリピン語で書く、ユダヤ系作家がイディッシュ語で書く、あるいはラテンアメリカの映画作家がインディオの言語で映画製作を始めるといった動きは、より民族的なものの選択として注目される。これに対して、前者の方向は日本を含めて、欧米先進国で支配的に見られる。

とはいえ、ここで問題になるのは、第三世界の作家たちの間にも前者の傾向がないわけではないことだ。第三世界にありながらも、自己の人種や民族や階級を前面に押し出さない文学というものが、確かに存在している。国境、人種、民族、言語はもちろん、ジェンダーをも超越して書こうとする立場である。

こうした傾向は、アメリカの黒人作家ジェームズ・ボールドウィンが人類学者のマーガレット・ミードとの対話で次のように述べていることと無関係ではないだろう。

「追い立てられた放浪者のあふれている今世紀ではみんなが亡命者である。国家という概念は、好むと好まざるとにかかわらず、私たちの目の前から消滅してゆく。国家とか民族を背景に持つアイデンティティに疑問を持ち始めた新しい人間の型が現れ始めている」⁹¹⁾。

この現状認識から、「人種について書くよりも、人間について書きたい。黒人作家として書くのではなく、肌の色にとらわれない現代の作家として書きたい」(ボールドウィン)⁹²⁾との意志表明まではほんの一步の距離でしかないだろう。

ボールドウィンとミードの対話の訳者で、作家の大庭みな子は次のような認識を示している。

「国家の概念、人間と個人のアイデンティティの問題、個人がその背後に背負う歴史、こうしたことは、アメリカ国籍を持つ人間、あるいは黒人とか白人とか、その他限定さ

れた特殊な人間の問題ではなく、今や世界中の人間が関心を持たずにいられない問題である。違った国の人間が違った価値観を持っていたのは、すでに過去の物語になりつつある」⁹³⁾。

こう述べながら、大庭みな子は、さらに言葉を継いでいる。

「少なくとも、文明国といわれている国の人間たちは、多かれ少なかれ、共感しあえる桎梏と、苦悩と、希望を持っている」⁹⁴⁾。

大庭みな子にとって、おそらく「アフリカ」は文明国に入っていないことであらう。しかし、大庭は、こうした認識を特に「文明国」と言われる国々に限定する必要はなかったかもしれない。今では、アフリカを含む第三世界の作家たちの中にもこうした考え方が認められる。

ベン・オクリなどは文学の国籍や人種籍を認めようとしないう、新しいタイプのアフリカ人作家であった。また、トリニダード出身のインド系作家 V. S. ナイポールは痛烈な第三世界批判の作家として広く知られている。ナイポールとはやや違った角度から、マリの作家ヤンボ・ウオロゲーム (1940~) はルノード賞受賞作『暴力の義務』(1968) を発表し、伝統アフリカ内部の血なまぐさい権力闘争を描いて、アフリカの過去を美化したネグリチュード運動に死を宣告した。

エスキア・ムパシエーレは、1957 年祖国南アから亡命し、家族を連れてナイジェリアへ脱出したが、その時の解放感のなかで南ア社会について次のように述べている。

「ここ南アでは、人間を人間として考え、政治的環境の犠牲者としては考えない時間なんて、ほとんど一刻もない。私は抗議作品を書くのはもうあきあきしたのに、南アフリカの情勢は、文学の種としてはやり切れない、お決まり文句になってしまっている。彼ら白人は、もう何を書く気もなくさせようとしている」⁹⁵⁾。

現代の作家たちは、皮膚の色や国境を越えて、ますます人間としての共通のものを求めているように思われる。人種、民族、階級を概念を強調し、アフリカの歴史を色濃く投影してきたこれまでのアフリカ文学が一つの転機を迎えていることは確かであらう。人種、民族、階級を概念、はては言語や宗教の壁までを含めて、現代文学がこれらの境界をどう乗り越えようとしているのか、それ自体が世界の文学の重要な今日的課題であり、ひいては小説を中心とした文

学そのものの歴史的課題なのであろう。

しかし、ここで私的な見通しが許されるならば、アフリカ文学は、今なお「歴史と人間の再定義」といった歴史的使命を完遂したとは言えないであろう。

『ユネスコ版アフリカの歴史』(*General History of Africa • 1 : Methodology and African Prehistory*, 1981) 第1巻の編者キ・ゼルボ(J. Ki-Zerbo)が次のように述べている。

「アフリカの歴史は、無知と私欲によって隠蔽され、捏造され、歪曲され、不具にされてきた。何百年もの抑圧の下で、アフリカは何世代となく、ありとあらゆる種類の旅行家、奴隷商人、探検家、宣教師、植民地総督、そして学者たちが、貧困と野蛮、無責任と混沌そのものに他ならないアフリカのイメージを提供するのを見届けてきた。そしてこのイメージが、現在と未来のアフリカを説明する口実として果てしなく時間の中に投影されている」⁹⁶⁾。

アフリカの歴史は、植民地時代の以前も以後も、まだ書かれていない。アフリカ人歴史家たちもまた、アフリカの本当の歴史はまだ書かれていない、あるいは、アフリカの歴史は書き直される(rewrite)必要があると主張している⁹⁷⁾。

今日のアフリカ文学が目指すのは、歴史学と同じで、アフリカ人の経験、つまり歴史をアフリカ人の側から定義し直しているように思われる。つまり、新しいアイデンティティ、アフリカの主体性の確立ということではないだろうか。自分の力で、自分の民族的な自己像を創出する前に、アフリカ人は、白人がつくり出したイメージを世界中に流布されてしまった。今、アフリカの、とりわけ黒人作家たちが、ややもすれば声高に叫んでいるのは、自分たちの真の自己像の回復、もしくはそれを創出するという歴史的使命を自覚しているからだろう。真の自己像の創出のためには、白人がつくり出した黒人イメージ、白人が書いた黒人の歴史から「脱出」しなければならない。民族の体験を一身に背負って、クロノロジカルに歴史を再定義することで、アフリカ文学の歴史的使命を果たそうとするアチェベ、グギ、そしてその他多数の、特に第一世代の作家たちの役割とは、そういうものだったのではないか。

民族の歴史を再定義し、アフリカの本当の人格、自己像を打ち出していこうとする第一世代の作家たちの歴史的使命は、ようやく終わりにかけているのではないかという予感も禁じ得ない。これは、アフリカのアイデンティティが

彼らの努力によって既に回復したとか、真の自己像が確立したからというわけではない。

問題は、アフリカ文学の若い世代から、はっきりと異なる主張を持った作品が出始めていることだ。彼らは、グギやアチェベなど第一世代の作家たちが強迫観念のように抱き続けた民族の意志、あるいはアフリカ人としての人種的、民族的、そして歴史的な桎梏とでも言えるものに、じつはそれほどこだわっていないように思える。彼らの中には、国家とか民族を背景に持つアイデンティティに疑問を持ち始めている者がいる。ナイジェリアのベン・オクリや、今はなくなったジンバブエのダンブッツ・マレチェラ (Dambudzo Marechera, 1952~1987) などは、確実に新しい世代に入る作家だろう。彼らは文学の国籍や人種籍を認めようとしない新しいタイプのアフリカ人作家だ。

今、世界の文学はあらゆる意味で越境を試みている。人種、民族、階級、はては言語の壁を含めて、世界の現代文学はこれらの壁を、乗り越えて行こうとしている。しかし、考えてみると、アフリカ人作家は、とっくの昔から言語の壁を越え、文化の壁を越えてきた。彼らの多くが **bi-lingual** であり、同時に **bi-cultural**、あるいはそれ以上である。その有利さを駆使して、彼らこそは現代文学の先頭に立って新たな地平を切り開いてきたのではなかったか。少なくとも、これからのアフリカ文学にはそうした期待が寄せられる。

本書で焦点を絞ってきたグギ・ワ・ジオンゴの人生と文学が描く軌跡は、まさにそうした歴史的使命を自覚した作家としての苦闘の跡を示してきた。彼が作家歴をスタートさせた 1960 年代初めから 21 世紀の現在まで、この期間に置かれたアフリカ人作家の立場、その使命を、彼ほど時代に寄り添い、時代の危機を訴え、問いつづけてきた作家は他にいないといっても過言ではないだろう。アフリカ文学の価値とおもしろさ、その文明史的意義は、ひとりグギ・ワ・ジオンゴだけでなく、20 世紀アフリカ文学を担った多数の作家が描いたこうした軌跡に明瞭に読み取ることが出来るように思う。

文学から見たアフリカは苦悩と憤怒に満ちている。だが、いかなる文学においても、言葉は憎悪の心から発せられるものではない。プリנקが述べているように「執筆活動は苦痛と憤激を伴うものであっても、決して憎悪の心から書かれることはない。人間は無知や愚かさから救われることは可能で、世界は現状よりも公正で自由になりうる」⁹⁸⁾ との烈しい信念に支えられている。

20 世紀アフリカの現実の苦難は、1960 年の独立後、相次ぐクーデターを経験し、圧制と抑圧の軍事政権下で、200 万の餓死者を生んだ西アフリカの大国、黒人アフリカで最も人口の多いナイジェリア連邦共和国の独立後の歩みに凝縮されている。石油成金経済の破綻後のナイジェリアについてのアチェベの次の言葉は、現代アフリカの多くの国家に共通するものだ。

「ナイジェリアの苦しみは、ひとえにリーダーシップの欠如にある。ナイジェリア人の品性、ナイジェリアの国土、水、空気、その他に何か弊害があるわけではない。ナイジェリアの問題は、真の指導者としての手本になる気もなく、その能力もない、指導者たちの無責任さにある」⁹⁹⁾。

すべての創造的芸術は、本来的に、個人が社会や国家と切り結ぶ激しい緊張関係の中から生まれるものであろう。作家は、文学という言葉の営みを通して、自らの感性と生きる目的、つまりは人間であることの希望を再発見しようとするものだ。そこでは、人間の言葉と感性が生きている。輝いている。したがって、創造力（想像力）は尽きることがない。これとは逆に、国家や社会と切り結ぶ緊張が弛み、個人の磁場が弱まる時、文学や創造的芸術は衰退するほかはない。その時、人は他者との関係、ものごとの歴史性を問わなくなり、過去の集団的記憶は風化の危機にさらされるのである。創造力（想像力）は枯渇してしまう。

アフリカ文学は、民衆の生活と隔絶された個人の内面を追求することではすまされない。アフリカ文学にとっては、民衆との繋がりは第一要件である。作品に埋め込まれた人間と歴史の全体性こそが、アフリカ文学のエネルギーになっているのだ。そこには、世界を変革したいという強靱な意志が宿されている。グギが「社会を、よりよい方向へ変革するために書かなければならない」「私はアフリカに変化が起きるのを見たい」と述べていたことを思い起こそう。

この意味でも、アフリカ人作家が示している「文学の意志」を知るには、テキスト批評だけでは十分でないであろう。テキストが生まれてくる特殊な「ローカル性」、そのローカルな意味、どう読まれ、どんな読者が、どのように反応しているのか。なぜ、そのようなテキストが生まれてくるのか。一言で要約すれば、テキストが置かれた「コンテキスト」を読みとる必要が生じるであろう。ここに「地域研究」として、同時に「人間研究」としてのアフリカ文学研究の座標が存在するように思う。そして、この座標のなかで、アフリカ文学が自ら

の主体性を確立するためには、過去 150 年に渡って、西欧近代が押し付けてきた「近代」の規範の脱構築、つまり「近代」そのものの「非植民地化」(Decolonisation) が何よりも必要であろう。50 年に渡るグギの文学営為の意義と目的は、まさにこの一点に焦点を結ぶように思われる。彼は、20 世紀のアフリカとアフリカ人が置かれてきた強烈な磁場に立って、常に時代と人間の危機を見据えてきたと言えよう。

最後に、アフリカ人作家の意気を語るグギ・ワ・ジオンゴの次の言葉で終えることにしよう。

「抑圧と搾取に対する抵抗、人間性の否定的な側面にうち勝ち、自らの生活の自由な発展を阻害するあらゆるものにうち勝とうとする人間の強い願望、これらこそが人間のもつ資質の最も重要なものであると考える。言い換えると、人間性を肯定的に実現しようとする人間の闘いこそが、人間の闘いの最も輝かしい側面であるのだ。そして、このことは、小説に、戯曲に、詩に反映されるべきである。私は文学における革命的ロマン主義を信じている」¹⁰⁰⁾。

全編注

フロッグ

- 1) James Ngugi, *The Martyr*, *The New African*, Vol.1, no. 6, 1962. のちに短篇集 *Secret Lives*, 1975 に収録。
- 2) Gunther, John, *Inside Africa*, 1955. (土屋哲訳『アフリカの内幕』I、現代史体系 10、みすず書房、1956)。ここでの三つの引用は、順に、邦訳書 p. 264, p. 233, p. 248. ただし、引用文中、日本語表記を変更している場合がある。
- 3) E. Mphahlele, *Down Second Avenue*, 1959. (貫名美隆訳『わが苦悩の町 2 番通り』、理論社、1965)。
- 4) James Ngugi, *The Black Hermit*, 1968.
- 5) 宮本正興「『ジェイムズ・ングギ論』のための覚え書」(『立命館産業社会論集』第 11 号、立命館大学産業社会学会、1974.3. のち、拙著『アフリカとの出逢い』、アフリカ文学研究会刊、2012.1 に収録。
- 6) 宮本正興「エングギ」(上、中、下)、「公明新聞」(1974. 9. 26 / 28 / 10.1.)。のち、拙著『アフリカとの出逢い』、アフリカ文学研究会刊、2012.1 に収録。
- 7) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Korean Peoples' Struggle in the Third World*. (宮本正興編、アフリカ文学研究会訳『アフリカ人はこう考えるー作家グギ・ワ・ジオンゴの思想と実践』、第三書館、1985 に「アフリカ人作家の見た韓国問題」の表題で訳載)。
- 8) 1981.11.4~7. この時の記録は、日本アジア・アフリカ作家会議編『民衆の文化が世界を変えるためにーアジア・アフリカ・ラテンアメリカ文化会議の記録』恒文社、1982 に詳しい。グギのスピーチ「帝国主義と文化の危機」(Imperialism and Cultural Crisis) が訳載されている。
- 9) Miyamoto Masaoki, A Note on *A Grain of Wheat*, in Miyamoto, *Essays in African Studies*, pp. 89~93. Research Association of African Literature, Oct. 2011.
- 10) Alot, Magaga, *The Massacre of Hopes*, *African Perspectives*, No.1, Sep-Oct. 1977.
- 11) *The Guardian*, 30 June, 1977 ; *Times Literary Supplement*, 12 Aug. 1977.
- 12) Miyamoto Masaoki, A First Note on *Petals of Blood*, *ibid.*, pp. 94~99.
- 13) アフリカ文学研究会主催「ジンバブエ・コミュニティ劇団 ZACT 日本公

演」(京都・大阪・東京)。国際交流基金ほか支援。劇団員 15 名他来日。この時、「文化と開発」と題する国際シンポジウムを同時開催した(10月7日、京都精華大学)。基調講演は、グギ・ワ・ジオンゴ「文化・開発・アフリカ諸言語」。トリニダード出身のデール・バイアム(現ブルックリン大学)、グギ・ワ・ミリエ夫人(ワイリム)も来日した。シンポジウムのパネラーは以下の通り。Dale Byam, R.D.K. Mekacha, Fenson Mwape, Ngũgĩ wa Miriĩ, Ngũgĩ wa Thiong'o, 松田素二、砂野幸稔、稗田乃、栗本英世、澤田昌人、神野明、楠瀬佳子、江口一久、宮本正興、吉田昌夫、和崎春日、日野舜也(敬称略)。

- 14) 'an epistemological break with my past'. Ngũgĩ wa Thiong'o, *Decolonising the Mind, The Politics of Language in African Literature*, 1986, p. 44. (宮本正興・楠瀬佳子訳、増補新版『精神の非植民地化—アフリカ文学における言語の政治学』第三書館、2010, p. 129。旧版発行は1987年)。

第1部

- 1) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Dreams in a Time of War, A Childhood Memoir*, 2010, pp. 58~60.
- 2) James Ngugi, *Weep not, Child*, 1964, p. 3. 宮本正興訳『泣くな、わが子よ』第三書館、2012, pp. 10~11.
- 3) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Dreams*, p. 65.
- 4) Ibid., p. 65.
- 5) Ibid., p. 67.
- 6) キスム(Kisumu)は、ビクトリア湖北東畔に位置する町、1901年に鉄道がこの町まで伸びた。旧名ポートフローレンス。カンパラ(Kampala)は、当時の英領植民地ウガンダの首都。
- 7) James Ngugi, *Life in a Village : Memories of Childhood* (in Per Wästberg, ed., *The Writer in Modern Africa, African-Scandinavian Writers' Conference, Stockholm 1967*, 1968, pp. 99~100.
- 8) John Owalo (Johan, Yohana, Johannes, Johnとも。1871?~1920)。1910年、または1912年、地元の伝道団から分かれ、ミッションの影響のない独自の学校を建設。ユダヤ人にとってのキリスト、アラブ人にとってのムハンマドに等しい予言者(預言者)として崇拜された。天上でキリストが握る綱を、地上でオワロが握っているとされ、まずユダヤ人が、ついでアラブ人が彼とともに天上に上り、ついでヨーロッパ人、ゴア人、バニヤン人(インド人の一派)が上ろうとするが、天使が門を閉めて、

足蹴にして追い払うとされた。割礼を守り、十戒を尊重、飲酒喫煙を禁じた。

- 9) Harry Thuku (1895~1970)。ミッション・スクールで学び、植民地政府の電話交換手になった。1921 年、「東アフリカ協会」(East African Association)を創立、強制労働、低賃金、重税、キパンデ制度などに反対した。1922 年逮捕され、ラム島などへ流刑。1931 年、釈放。その後、マウマウ戦争に反対するなど、政府側に立った。
- 10) 第 1 部の注 84 を見よ。
- 11) Shaka (1787 頃~1828) : 19 世紀初頭、南アフリカ東海岸部に強大なズールー王国を建設した。Cetshwayo (1825 頃~1884) : 1873 年に王位についたズールー王国第 9 代の王。D. Livingstone (1813~1873) : スコットランド出身の探検家、ビクトリア滝の発見などで知られる。H. Stanley (1841~1904) : イギリス生まれのアメリカの探検家。コンゴ川の探検で知られる。J. Rebman (1820~1876) : ドイツ人宣教師。クラップフとともに、ケニア山、キリマンジャロの「発見」で知られる。J. L. Krapf (1810~1881) : ドイツ人宣教師、探検家。東アフリカの諸言語研究でも先鞭をつけた。
- 12) Ngūgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 178.
- 13) Charles Dickens (1812~1870)。イギリスの作家。*Oliver Twist*, 1837~39. 養育院で生まれた孤児オリバーが主人公。のちに、救貧院を抜け出しロンドンへ逃亡する。
- 14) Nyanjirũ, Mary Mũthoni (18??~1922)。ハリー・ヅク逮捕に抗議する 1922 年の集会の女性リーダーとされる。ムランガ出身。警察の発砲で殺害されたという。以後、ニャンジルを讃える抵抗歌謡が数多く生まれた。
- 15) Ngūgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 24.
- 16) *Ibid.*, p. 88.
- 17) *Ibid.*, p. 30. よく知られるギクユ民話の一つ。R. N. Gecau, *Kikuyu folktales, their nature and value*, 1970 によれば、初めの部分の展開は以下の通り。

「若い鍛冶屋が、身重の妻を残して、遠くの仕事場に出かける。留守中に、人食い鬼 (irimũ) が来て、妻の出産を助けるが、妻に用意してあった粥などから食べ始める。その間に、妻が、ヒマ (トウゴマ) の種を一羽の鳩にやると、その鳩が飛んで行って、夫に危険を知らせる。夫が急いで家へ帰り、人食い鬼を退治する」(以下省略)。
- 18) Ngūgĩ wa Thiong'o, *Dreams*, p. 19.
- 19) Amooti wa Irumba, Katebaliirwe, Interview given by Ngūgĩ wa

- Thiong'o, 6 & 11 January, 1979 at Ngũgĩ's home in Limuru, mimeo, p. 2.
- 20) gĩtiro (gĩtiro, getiirō, getiro と同)。婚礼の前の歌と踊り。新郎が 1, 2 頭の牛を贈った翌日の朝方、新郎の身内の既婚女性が、新婦の家に集まって踊り歌う。長い革製の外衣をまとう。絞り声のコーラスを伴う独唱があり、頭と身体をリズムカルに動かす。集まった人々に食事がふるまわれる。(グギは「オペラ的一种」と説明している。『したい時に結婚するわ』英語版 p. 38 の脚注)。
 - 21) Elburgon. リフトバレー州ナクル地区の小さな町。ナクルから西方へ 30 キロ。海拔 2,423 メートル。
 - 22) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 78.
 - 23) *Ibid.*, p. 96.
 - 24) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Homecoming*, p. 48.
 - 25) *Ibid.*, p. 49.
 - 26) *Ibid.*, p. 48.
 - 27) Edgerton, Robert B., *Mau Mau : An African Crucible*, 1989, p. 85. 「ミコンゴエ (mikongoe) の木」: ギクユの神話に登場する大木。その根は、地中奥深く、地球の中心に向かって伸び、そこまで行けば、二度と地上へ戻れないという。
 - 28) ワイヤキ・ワ・ヒンガについては、第 2 部の注 96 を見よ。ジョモ・ケニヤッタ (Jomo Kenyatta, 1890?~1978) : ケニア独立運動の指導者の一人。初代大統領。1928 年、キクユ中央協会 (Kikuyu Central Association, KCA) の書記長。1947 年、ケニア・アフリカ人同盟 (Kenya African Union, KAU) の党首。1963 年 5 月、首相に就任。翌 1964 年 12 月の共和制移行に伴い大統領に就任。(ピーター・) ムビユ・ワ・コイナンゲ (1907~1981) : コイナンゲ首長の息子。合衆国のハンプトン校で中学教育、ケニアのアライアンス校で高校教育、その後も合衆国、イギリス (ケンブリッジ大学、ロンドン大学、ロンドン経済大学など) に学ぶ。1938 年、ケニアへ戻り、ピーター (Peter) の名を捨て、民族主義の立場を鮮明にした。1939 年、父の援助のもとに、ギヅングリに教員養成学校を設立し、校長になった。1946 年のケニヤッタ帰国後は、KAU に参加、反植民地活動を展開した。のち、学校は民族主義運動の拠点になり、政府は建物を壊し、1952 年に処刑場として、その場に絞首台を建設した。晩年は、国会議員、閣僚として要職に就いた。一時期、ケニヤッタの後継として有力視されたが、ケニヤッタの死後、政界での影響力を急速に失った。
 - 29) Duerden, D. & Pieterse, Cosmo, ed., *African Writers Talking*, A

Collection of Interviews, 1972. (1964 年 1 月実施のもの)。のち、Sander, R. & Lindfors, B., ed., *Ngũgĩ wa Thiong'o Speaks, Interviews with the Kenyan Writer*, 2006, pp. 1~5 に収録。『宝島』は、スコットランド生まれの作家 R. L. Stevenson (1850~1894) の海洋冒険小説。

- 30) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Dreams*, p. 224.
- 31) Loreto Convent (High) School. リムルにある女子高校。1936 年開校。アイルランドからのカトリック修道女が設立した。
- 32) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 242.
- 33) *Ibid.*, p. 244.
- 34) *Ibid.*, p. 249.
- 35) *Ibid.*, p. 249.
- 36) *Ibid.*, p. 250.
- 37) *Ibid.*, p. 254.
- 38) アライアンス高校で最も長く務めた教員。その名にちなんだスミス学寮がある。
- 39) Eliud Wambu Mathu (1910~)。1944 年、立法審議会初のアフリカ人代表 (1957 年まで)。1937 年、南アのフォートヘア大学卒 (ケニア人として二番目の大学卒業生)。のち、オックスフォードにも学ぶ。1929~32 年、1934~38 年、1940~42 年の期間、アライアンスで数学、理科、歴史、地理などを教えた。ケアリー・フランシス校長と衝突し、AHS を辞め、ダゴレッティ近くのカリンガ・スクールの校長 (1942~44) になった。1934 年、アフリカ人教員組合を創設。1947 年のゼネストで顕著な役割を果たすなど、アフリカ人の立場から活躍したが、のちに「マウマウ」に反対するなど、植民地政府側と妥協的立場を取り、1957、58 年の選挙での落選につながったとされる。独立後は、ケニヤッタの私設秘書を務めた (1964~77)。
- 40) 第 5 部の注 17 を見よ。
- 41) 「ウガリ」(ugali) : スワヒリ語。トウモロコシの粉でつくった固めのポリッジ、オカラ状の主食。「イリオ」(irio) : トウモロコシ、豆、バナナ、ジャガイモなどをゆがいて、潰して擦り合わせたもの。ギクユの主食。食物一般にも使われる名称。
- 42) ここの三つの引用は、Ngũgĩ wa Thiong'o, *In the House of the Interpreter—A Memoir*, 2012, p. 23.
- 43) Greaves, L. B., *Carey Francis of Kenya*, 1969.
- 44) *Ibid.*, p. 148.
- 45) Sicherman, Carol, *Ngugi wa Thiong'o : The Making of a Rebel, A*

Source Book in Kenyan Literature and Resistance, 1990, pp. 389~390.

- 46) Ibid., p. 390.
- 47) Ibid., p. 389.
- 48) Ibid., p. 392.
- 49) Ibid., p. 392.
- 50) Ibid., p. 396.
- 51) Roelker, Jack R., *Mathu of Kenya : A Political Study*, Stanford University Press, 1976. Sicherman, *ibid.*, p. 390.
- 52) Maseno. 1906 年、英国国教会 (CMS) によって、アフリカ人首長の子弟の教育を目的に創設された。カビロンド地方 (湖水地域) のマセノにある。第 1 期生は 6 名、のちに西ケニア出身の生徒を多く集めた。1920 年以降、教員養成コースを設置。ケアリー・フランシスは、1928 年から 1940 年まで校長を務めた。この時、ケニア独立後、ケニヤッタ政権下で副大統領を務めたオギンガ・オディンガもここで教えていた。現在は、マセノ大学に統合されている。
- 53) Sicherman, *ibid.*, p. 392.
- 54) Ibid., p. 395.
- 55) Ibid., p. 394.
- 56) Ibid., p. 394.
- 57) Ibid., p. 395.
- 58) Ibid., p. 395.
- 59) Ibid., p. 395.
- 60) Ibid., p. 393.
- 61) Ibid., p. 392.
- 62) Ngũgĩ wa Thiong'o, *In the House of the Interpreter—A Memoir*, p. 11 から再引用。ケアリー・フランシスが、1944 年 4 月 24 日付で英国の友人に送った手紙に見られる一節。
- 63) Ibid., p. 185.
- 64) Ibid., pp. 79~80.
- 65) Ibid., p. 80.
- 66) Ibid., p. 80.
- 67) Ibid., p. 186.
- 68) Ibid., p. 185.
- 69) Ibid., p. 18.
- 70) Baden-Powell (1857. 2. 22~1941. 1. 8)。英国陸軍中將。作家。スカウト活動の創始者。1890 年から 1910 年までインド、アフリカ等で兵役。南

アフリカ各地での戦闘、兵役関連の著作のほか、スカウト活動の著作多数。晩年は、ケニアで過ごし、ニエリで死去。

- 71) この頃から、土地問題などに触れる時は、決まって声が震えたと言う。のちのマケレレ大学時代の学寮長ヒュー・ディンウィディが次のように証言している。「ある年末の夕食会の時、マケレレ大学芸術学科のブルジョア的性格について述べた時も、感情が高まって、声が震えだした。この烈しい感性は、グギの全作品の民衆に向けられる大いなる温かさ (enormous warmth)、全登場人物が示す温もりと一つである」。Sicherman, pp. 25~26. 「平和を望むなら、戦争に備えよ」：元はラテン語の警句 (Si vis pacem, para bellum) に由来する。
- 72) Elimo Njau (1932~)。ウガンダ生まれ。マケレレ大学での教員生活の後、1960 年代初めにケニアへ移り、ムパシェーレ、オコト・ビテック、ヒラリー・グエノ、ジョナサン・カリアラ、タバン・ロ・リヨン、ジェームズ・グギらと交流を深めた。1964 年、ムパシェーレらとナイロビを拠点にチェムチェミ文化運動を始めた。画家、詩人、彫刻家。1965 年、パア・ヤ・パア・アートセンター (Paa ya Paa Arts Centre) を創立。作品の一つとして、ムランガのアングリカン教会の大壁画が知られる。
- 73) Amooti wa Irumba, Katebaliirwe, *ibid.*, p. 14. アフリカ文学研究会編『民族・歴史・文学』p. 24.
- 74) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 153.
- 75) Henry Kuria. ギクユ民族出身。『好きなんだ、しかし』の主人公はカングアナ。老人と結婚している人妻ローダを好きになる。彼女は、カングアナが金持ちであれば、夫と別れる気である。カングアナは金欲しさから窃盗、殺人を犯し、最後に自分の死に至る。
- 76) Kĩmani Nyoike. ヘンリー・クリアの後継として、アライアンスで台本作家、役者、弁士として活躍した。
- 77) Gerishon Ngugi. ギクユ民族出身。代表作は『恋人が出来ないように呪われた』(*Nimelogwa Nisiwe na Mpenzi*, 1961)。梗概は、主人公ベンがビートリスに恋するが、相手にされない。ベンは、自分が貧しく、恋人が出来ないように呪われていると考え、最後に呪術の力で呪いを解いてもらい、恋が成立するというもの。
- 78) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 26~27. Peter Abrahams. 付録「現代アフリカ文学作家紹介」を見よ。
- 79) *The Biggles Series*. 「ビーグル」は、James Biggleworth のニックネーム。冒険家の船長。ビーグル号シリーズの主人公。著者は、W. E. Johns (1893~1968)。シリーズの最初は 1932 年刊、小説や短篇を含めて約 100

巻に上る。

- 80) 第2部の注177を見よ。
- 81) Edgar Wallace (1875~1932)。イギリス生まれの作家。犯罪小説、戯曲分野で多数の作品がある。代表作に『キング・コング』(*King Kong*, 1933)。
- 82) Booker T. Washington (1856~1915)。アメリカの教育者。バージニアに奴隷として生まれたが、奴隷解放後、同州東部のハンプトン校に学ぶ。後年、アラバマ州タスキーギに黒人のための職業学校タスキーギ学院を創立、校長を務めた。著書に『奴隷より身を起こして』他がある。黒人問題の考え方、解放理論では、「同化」(Assimilation)政策を支持するなど、「統合」(Integration)を求めるデュボイスとは違った路線を説いた。
- 83) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 163.
- 84) マーカス・ガーベイ (Marcus Garvey, 1887~1940) : ジャマイカ出身。黒人民族主義の指導者の一人。黒人は、アフリカに祖国を持つべきであるとの考えから、「アフリカ帰還運動」(Back to Africa Movement)を主張した。ブッカー T. ワシントンとも交流を結んだ。現在も、ジャマイカの国民的英雄とされる。ジョージ・パドモア (George Padmore, 1902~1959) : トリニダード出身。パン・アフリカニスト。テネシー州のフィスク大学で医学を学び、のちハーワード大学にも学ぶ。この頃、アメリカ共産党に入党、コミンテルン活動に参加。1929年、ソビエト連邦へ移住。1934年、コミンテルンから追放され、ロンドンへ移住。1945年、マンチェスターでのパン・アフリカニスト会議で、ガーナのンクルマとともに書記を務めた。ケニヤッタ、デュボイスらと親交を深めた。ガーナ独立後、ンクルマの政治顧問に招かれた。デュボイス (W. E. B. DuBois, 1868~1963) : マサチューセッツ州生まれ。父はハイチ出身。テネシー州のフィスク大学、のちハーバード大学で歴史と哲学を学ぶ。1895年、ハーバードから、黒人として最初の博士号を取得。合衆国の黒人公民権運動の指導者であり、全米黒人地位向上協会 (NAACP) の創立者。晩年は名誉市民として、ガーナへ移住した。アフリカ、アメリカの黒人史上、最重要人物の一人である。代表作は、『黒人のたましい』(*The Souls of Black Folk*, 1903)。邦訳、木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳『黒人のたましい』未来社、1965, p. 5.
- 85) ナイアガラ運動 (Niagara Movement) : アメリカ合衆国における公民権運動の先駆となるもの。1905年、ナイアガラ滝に近いカナダ領フォートエリーにデュボイスら黒人知識人が集まり、差別反対の宣言を発表した。「全米黒人地位向上協会」(National Association for the Advancement of Colored People=NAACP) : アメリカ合衆国でもっとも古い公民権運動

組織の一つ。1909年2月12日設立（リンカーン生誕100年記念日）。デュボイスは、13人の創立メンバーの一人。ローザ・パークス（Rosa Parks, 1913~2005）：1955年12月1日、アラバマ州都モンゴメリーでの出来事。職場から帰宅するローザが市営バスに乗車した。バス内は、白人席と黒人席に分けられ、中間席は、白人客がいない場合は黒人の着席が許された。ローザは中間席に座っていたところ、白人が乗ってきて、中間席の黒人客4人のうち3人が立ったが、ローザだけが立たなかった。運転手が「なぜ、立たないか」と詰問すると、ローザは「立つ必要はない」と拒んだ。運転手が警察に連絡し、ローザは逮捕された。モンゴメリー・バスボイコット：この事件を受けて、マーチン・ルーサー・キング牧師などの指導で、モンゴメリーのすべての黒人にバス・ボイコット運動が広まった。利用者の75%が黒人であったから、モンゴメリー市は経済的に大打撃を受けた。1956年、連邦最高裁判所は、公共交通における人種差別に違憲判決を出した。

- 86) Amooti wa Irumba, Katebaliirwe, *ibid.*, p. 15. アフリカ文学研究会編『民族・歴史・文学ーアフリカの作家グギ・ワ・ジオンゴとの対話』三一書房、1981, p. 27.
- 87) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 167.
- 88) *Ibid.*, p. 173.
- 89) *Ibid.*, p. 48.
- 90) *Ibid.*, p. 97. ギクユ語で Gūtīrī ūtukū ūtakīa.
- 91) *Ibid.*, p. 99.
- 92) Longonot. グレート・リフトバレーのナイバシャ湖の南東に位置する火山。海拔 2,886 メートル。
- 93) Gilgil: リフトバレー州の町。ナイバシャとナクルの間に位置している。Nyandarwa: 中央州の西北部、ニャンダルア（アバデア）山系を含む。
- 94) Lyttleton Plan (Constitution) 植民地大臣リトルトンが、1954年に約束したもの。立法審議会の代表者数を、ヨーロッパ人、アフリカ人、アジア人とも同数にし、大臣制度も人種間の均衡を図るとするもの。
- 95) オギンガ・オディンガについては、「インターラード」IV「ケニヤッタの時代」を見よ。
- 96) *East African Standard*. 1902年、週刊紙として創刊された *African Standard* が起源。インド人 A. M. Jeevanjee が創刊。1905年、イギリス人が買収し、*East African Standard* と改名し、日刊化。この時に、本社がモンバサからナイロビへ移った。入植民の立場からの論調で知られた。1963年、ロンロ・グループが買収し、1995年、ケニア人が買収した。

2004 年に *The Standard* と改名。ケニア最古の新聞で、スタンダード・グループが所有している。「ネーション」に次ぐ二番手の新聞。

- 97) King's African Rifles (KAR)。1902 年以後、独立に至るまで、東アフリカ英領植民地から徴募された植民地部隊。アフリカ兵は「アスカリ」(スワヒリ語 askari) と呼ばれた。将校(指揮官)の多くはイギリス人。植民地期の終り頃には、アフリカ人の将校もいた。植民地領内の軍事行動、平和維持に動員された。
- 98) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 236~237.

第 2 部

- 1) Ngugi, James, The Oasis That is Makerere, *Sunday Nation*, 24 March, 1963.
- 2) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *Ngũgĩ wa Thiong'o Speaks, Interviews with the Kenyan Writer*, 2006, p. 3. (1964 年 1 月に実施)。
- 3) *Ibid.*, p. 3.
- 4) Sicherman, Carol, *Ngugi wa Thiong'o : The Making of a Rebel, A Source Book in Kenyan Literature and Resistance*, 1990, p. 390 (Bogner Regis による 1987 年 7 月 20 日実施のインタビューから)。
- 5) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Secret Lives, and other stories*, African Writers Series No.150, Heinemann Educational Books, 1975, Preface.
- 6) *Ibid.*, pp. 2~8.
- 7) この慣習については、以下を参照せよ。Kenyatta, Jomo, *Facing Mount Kenya, The Traditional Life of the Gikuyu, with an Introduction by B. Malinowski*, 1938, p. 171。野間寛二郎訳『ケニヤ山のふもと』理論社、1962, p. 144.
- 8) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 6.
- 9) 「グンバ」(gumba) : 森に住むピグミー。ギクユランドの先住民とされる。全土に見られる「窪地」「低地」「穴」が彼らの住処だったとされる。「ミコンゴエ」(mikongoe) については、第 1 部の注 27 を見よ。
- 10) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 2.
- 11) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, Preface.
- 12) *Penpoint*, No.10, 1961. 3. pp. 9~13.
- 13) *Penpoint*, No.10, 1961. 3. p. 9.
- 14) チェゲ・ワ・キビロ (Chege wa Kibiro)。ムゴ・ワ・キビロ (Mũgo wa Kibiro) に同じ。「チェゲ」は本来の名。「ムゴ」は「呪術師」の意。第 2 部の注 40 を見よ。

- 15) *Penpoint*, No.10, 1961.3. p. 11. (原文は、冒頭のみを引用しているが、ここでは参考のために、第 1 章節全文を紹介した)。
- 16) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, Preface.
- 17) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *ibid.*, pp. 52~53.
- 18) *Ibid.*, pp. 52~53.
- 19) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 9~14.
- 20) *Ibid.*, pp. 15~20.
- 21) Njahĩ. 黒えんどう豆。4~5 月、あるいは 3~7 月の雨季、涼しい季節に成育し、儀礼に際して食されることが多い。蛋白質に富み、女性が出産後等に食すること多い。
- 22) 「キャッサバの飢饉」:1943 年の飢饉。ギクユ語では Ng'aragu ya Mianga (Ng'aragu ya Mwanga) という。主食のウガリ (ugali) は、本来はトウモロコシでつくるが、前年の不作で、代わりにキャッサバでウガリを作ったことからこの名が生まれた。キャッサバのウガリは、粘ついて美味くないとされる。
- 23) ギクユ語では Ng'aragu ya Ruraya。1898~1900 年の大飢饉。「白人が運んできた飢饉」の意。
- 24) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 22~28.
- 25) *Ibid.*, p. 25.
- 26) Lindfors, B., *Early East African Writers and Publishers*, 2011, p. 16 から再引用。
- 27) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 29~38.
- 28) Mũndũ Mũgo : witch-doctor, medicine-man. 村の生活の平和と健康を司さどる人物で、伝統社会で高い尊敬を受けた。
- 29) 第 2 部の注 225 を見よ。
- 30) Ngũgĩ wa Thiong'o, *This Time Tomorrow, 3 Plays*, East African Literature Bureau, 1970, pp. 1~16.
- 31) 「ザーフ」(thahu)。儀礼を受けておらず「穢れ」があるとされる。「浄化」の儀礼を受けて禊をしなければ、不幸をもたらすとされる。Leakey, L. S. B., *The Southern Kikuyu before 1903*, 3 vols., 1977, p. 1368.
- 32) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 17~28.
- 33) Ngũgĩ wa Thiong'o, *The Black Hermit*, African Writers Series, No.51, Heinemann Educational Books, 1968.
- 34) Yohana, M. Karienyee, "The Black Hermit", *Kenya Weekly News*, 2 November, 1962. Lindfors, B., *ibid.*, p. 16 から再引用。
- 35) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, Preface, pp. vii~viii.

- 36) Ibid., p. viii.
- 37) ibid., p. 70.
- 38) Ngugi, James, *The River Between*, African Writers Series, No. 17, Heinemann Educational Books, 1965.
- 39) East African Literature Bureau. 1947年、英国ハイコミッションにより、スワヒリ語、英語での出版を目的に創設。1977年、東アフリカ共同体の解散により、ケニア教育省の管轄下に入り、1980年ケニア文学局 (Kenya Literature Bureau) と改称。
- 40) Mũgo wa Kibiro. ギクユの伝説上の予言者。本来の名はチェゲ・ワ・キビロ (Chege wa Kibiro)。19世紀後半に、このような予言をしたとされる。1890年頃の白人の到来について、この予言は的中した。ムゴ自身、各地を旅して広い見聞を持っていたが、1840年代から東海岸地方との取引に従事していた商人などから情報を得ていたのであろう。
- 41) Kenyatta, Jomo, ibid., pp. 42~43. 野間寛二郎訳『ケニア山のふもと』 p. 48, 理論社、1962.
- 42) ギクユ独立学校運動については、本書の随所で触れている。たとえば、「インターロード」 II を見よ。
- 43) Kĩama : 複数形は「シアマ」 cĩama。「長老会議」「部族会議」の意。植民地化以前、首長制を敷かなかったギクユ民族の最高決定機関。
- 44) 『旧約聖書』 創世記 9 : 12~26.
- 45) Ngugi, James, ibid., p. 99.
- 46) Ndemi (Demi) na Mathathi. ギクユの伝説上の支配世代。巨人であったとされる。部族の繁栄と統一の黄金時代であった。
- 47) Ngugi, James, ibid., p. 175.
- 48) Ibid., pp. 174~175.
- 49) Sander, R. & Lindfors, B., ibid., p. 138. (1982年に実施のインタビューとされる)。
- 50) Ibid., p. 49. (1971年に実施)。
- 51) Ngugi, James, ibid., p. 160.
- 52) ムバリ作家芸術家センター。南アフリカからナイジェリアへ亡命した E. ムパシェーレが、1961年以降、ナイジェリアの作家や芸術家らと起こした文化運動。イモ州都オウエリ (ビアフラ戦争時、一時的にビアフラ共和国の首都とされた) の地が中心。熱帯アフリカでの最も魅力的な芸術創造の場とされた。神々を祀る泥壁の家々が並ぶ。ボディ・ペインティング、太鼓、ダンス、歌ほかがあり、方形の館には等身大の多数の彩色された土像がある。これらは、主に大地の女神アラ (Ala) を鎮めるもの。

- ほかに、職人や外国人（ヨーロッパ人）、動物、伝説上の生物などの像もある。アチェベによれば、「ムバリ」とは、世界とそこに棲む生物を讃える祭礼である。アラは創造の泉、社会の道德秩序の守護神だという。詳しくは、Achebe, Chinua ; *Morning yet on Creation Day*, 1975, pp. 28~31 を見よ。なお、ムパシェーレは、のちにナイロビへ移り、同様の目的から「チェムチェミ」運動を展開した。
- 53) 「文化の自由会議」Congress of Cultural Freedom. 1961 年、パリを本拠地にした文化組織。1961 年、ムパシェーレはアフリカ部長に就任した。1962 年、マケレレ大学で開催された「英語で書くアフリカ人作家会議」を主催した。後日、CIA の関与があったとされる。
- 54) Ngũgĩ wa Thiong'o, *In the Name of the Mother, Reflections on Writers & Empire*, 2013, p. 2.
- 55) Ibid., p. 3.
- 56) 「アフリカ人作家シリーズ」African Writers Series. 1962 年以来、ハイネマン教育図書出版社が刊行した大陸規模のアフリカ文学のペーパーバックシリーズ。チヌア・アチェベが編集アドバイザー。2002 年までに、約 370 冊を出版したまま廃刊。シリーズを育てたのは、現在、自分の名を冠した出版社を営んでいるジェームス・カリー (James Currey)、元ネルソン社勤務のケイス・サンプブルック (Keith Sambrook、現在はジェームス・カリー出版社所属)、現在東アフリカ教育出版社を営んでいるヘンリー・チャカバ (Henry Chakava) など。本書「エピローグ」を見よ。
- 57) Ngugi, James, *A Kenyan at the Conference*. 『トランジション』誌 (*Transition*) は、アジア系ウガンダ人ラジャト・ネオギの編集で 1961 年 11 月創刊の高級文芸誌。オボテが大統領の頃に第 37 号の記事をめぐって政府と対立。以後、ガーナのアクラから刊行されたが、やがて休刊。1975 年、ウォーレ・ショインカの編集で『チンダバ』(*Chindaba* 「夜明け」の意) のタイトルで再刊されたが、まもなく休刊。
- 58) Ngugi, James, *Weep not, Child*, African Writers Series, No.7. Heinemann Educational Books, 1964. はじめ「作家シリーズ」とは別に、ウィリアム・ハイネマン社からハードカバーで出版されたが、同年中にハイネマン教育図書出版社の「アフリカ人作家シリーズ」に収録された。
- 59) Sander, R., & Lindfors, B., *ibid.*, p. 1. (1964 年 1 月実施のインタビュー)。
- 60) *Ibid.*, p. 51. (1971 年実施のインタビュー)。
- 61) Ngugi, James, *ibid.*, p. 5.
- 62) Mũkũruwe wa Gathanga (Nyagathanga)。ガザンガの地。現在のムラ

ンガの町に近い場所。ギクユとムンビの住居があったとされる。ケニア山から聞こえる神（Ngai ンガイ）の声を聞いて、ギクユとムンビがこの穴から現れたと言う。二人はここで 9 人の娘を育てた。

- 63) Ngugi, James, *ibid.*, pp. 27~28.
- 64) Kenyatta, Jomo, *ibid.*, p. 317. 訳書、p. 256.
- 65) *Ibid.*, Preface, p. x x i . 訳書 p. 8.
- 66) *Ibid.*, p. 21. 訳書、p. 32.
- 67) Ngugi, James, *ibid.*, p. 40.
- 68) *Ibid.*, p. 125.
- 69) *Ibid.*, pp. 41~42.
- 70) *Ibid.*, p. 30.
- 71) *Ibid.*, p. 83.
- 72) *Ibid.*, p. 35.
- 73) *Ibid.*, pp. 35~36.
- 74) *Ibid.*, p. 30.
- 75) *Ibid.*, p. 116.
- 76) *Ibid.*, pp. 140~141.
- 77) *Ibid.*, p. 145.
- 78) *Ibid.*, p. 154.
- 79) Amooti wa Irumba, Katebaliirwe, *ibid.*, pp. 6~7. アフリカ文学研究会編『民族・歴史・文学』三一書房、pp. 13~14.
- 80) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Secret Lives*, pp. 39~48.
- 81) 1922 年 3 月 15 日。ハリー・ヅクの逮捕に抗議する、東アフリカ協会(EAA)主催の 7,000~8,000 人規模の抗議集会がナイロビであった。警官隊の発砲で、公式発表で 21 人（非公式には、210~230 人と言われる。千単位という説もある）の死者が出た。本書「インターロード」参照。グギは、いくつかの作品で、事件を 1923 年としているが、間違いである。
- 82) Ihĩ. マウマウ兵士たちが「森の戦士」を讃えてこの名を使った。Ihĩ cia Mutitu「森のゲリラ兵」。複数は、kihĩ.
- 83) Memsahib : ヒンディー語で「ご婦人、奥さま」。黒人の召使いからの白人女性に対する敬称。スワヒリ語で同意の Bibi があるが、これを使ってはいけなとされた。植民地インドでも 1850 年頃から、ヨーロッパ人女性への敬称として使われた。ヒンディー語 ma'am+ヒンディー語・ウルドゥー語 sahibu.
- 84) Killam, G.D., *An Introduction to the Writings of Ngugi*, 1980, p. 78.
- 85) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 49~54.

- 86) Ibid., pp. 55~70.
87) Ibid., pp. 71~79.
88) このあたりの引用は、Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 74~76.
89) Ibid., Preface.
90) Ngũgĩ wa Thiong'o, *This Time Tomorrow*, *This Time Tomorrow*, pp. 29~50. East African Literature Bureau, 1968.
91) Ngugi, James, *A Grain of Wheat*, African Writers Series, No. 36, Heinemann Educational Books, 1967.
92) Kenyatta, Jomo, *ibid.*, p. 21. 訳書、p. 32.
93) Ngugi, James, *ibid.*, p. 14
94) ムゴ・ワ・キビロの予言の一部を以下に紹介する。

「異国の人々が大洋の向こうからギクユの国にくるだろう。彼らの身体の色は、水のなかに住む小さな淡色のカエル（キエンゲレ、*kiengere*）に、彼らの衣服は蝶の羽根に似ている。その異国の人々は、火を発する魔法の杖をもっている。その杖は、毒矢よりも、人を殺す力がはるかに大きい。その異国の人々は、のちには、ムカデ（ムニョンゴロ、*monyongoro*）のようにたくさんの足をもつ鉄の蛇をもってくるだろう。その鉄の蛇は火を吐き、ギクユの国の東にある大洋から西にある大洋にまでとどくだろう。（その上、と彼は語った）大きな飢饉が起きるが、それが鉄の蛇をもつ異国の人々の近づいたことをしめす前兆なのだ。この鉄の蛇がギクユの国を通ることになれば、ギクユも、近隣の部族も、おおいに苦しめられることになるだろう。国々が無慈悲な態度でまざり合い、あたかもたがい食いあうような結果になろう。息子や娘たちは、ギクユのこれまで知らなかったやり方で、両親を虐待するようになるだろう」。

「異国の人々がやってきても、武器をとって反抗してはいけない。異国の人々は、恐ろしい火を吐く魔法の杖で遠くから人を殺すことができるので、反抗すれば部族がみな殺しになるからだ」。

「異国の人々がくれば、頭から信用しないで、ていねいに扱うのがもっともよい。とくに気をつけないければならないのは、自分たちの家屋敷の近くに彼らを近づけないことだ。なぜなら、彼らは悪事ばかりをおこない、ギクユの土地をむやみにほしがり、最後にはギクユからいっさいのものをとりあげてしまうからだ」。（Kenyatta, Jomo, *Facing Mount Kenya*, pp. 42~43. 訳書、p. 48）。なお、橋本福夫編『第三世界からの証言』（全集・現代世界文学の発見 9、学芸書林、1970）に、該当部分が「ムゴ・ワ・キビロの予言」（野間寛二郎訳）として収録されている。第2部の注40をも見よ。

- 95) Ngugi, James, *ibid.*, p. 248.
- 96) Waiyaki : ワイヤキ・ワ・ヒンガ (Waiyaki wa Hinga, 18??~1892) のこと。ギクユの大予言者ムゴ・ワ・キビロから能力を受け継いだとされる南部ギクユのリーダー。ヨーロッパ人は、ケニア侵略の当初、彼を「最高首長」(Paramount Chief) だと考えた (ギクユは、首長制を採用していないことに注意)。1890 年代に、イギリスによる土地略奪、財産接収に反対して闘った。しかし、別の人物の裏切りで逮捕され、海岸地方へ流刑となった。死因については、諸説があり、流刑途中で死去、途中で生き埋めの刑 (逆さづり)、銃殺、自殺などとされる。Waiyaki, Wyaki, Eiyeki などの表記がある。
- 97) ズールー (Zulu) 人は、アフリカ南東部海岸地方の有力民族。19 世紀に強大な王国を建設した。1838 年、「血の河の戦い」でオランダ系白人に大敗。しかし、1879 年には「イサンドルワナの戦い」でイギリス軍に勝利した。
- 98) ドイツ領東アフリカ (現タンザニア) 南部で、綿花の強制裁培、強制労働、重税などに反対したアフリカ人の武装闘争。「マジ」(Maji) とは、スワヒリ語で「水」の意。「水」の力で、敵の鉄砲の弾を無効にできると考えられた。農民信仰に由来する。
- 99) 筆者によるムランガでのギクユ語・ギクユ文化調査 (1980,1981,1982) による聞き書きから。1992 年 5 月、ニューヨークで会見したマイナ・ワ・キニャティからの私的情報でもある。
- 100) ギクユ語 mūciĩ, itũūra。ギクユは、山の背 (Ridge) から谷へかけて一つの共同体を創る。「背」は「村」(village) と同義と言える。
- 101) Ngugi, James, *ibid.*, p. 3.
- 102) *Ibid.*, p. 221.
- 103) *Ibid.*, p. 221.
- 104) *Ibid.*, p. 261.
- 105) *Ibid.*, p. 280.
- 106) *Ibid.*, p. 280.
- 107) Mūmbi. ũmba 「生む、創造する」というギクユ語動詞からの派生語。
- 108) Ngugi, James, *ibid.*, p. 209.
- 109) *Ibid.*, p. 229.
- 110) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Secret Lives*, pp. 82~96.
- 111) *Ibid.*, pp. 97~112.
- 112) 1947 年 1 月のこと。モンバサで、チェゲ・ワ・キバチアをリーダーとする 15,000~20,000 人規模のストライキがあった。リムルのラリ村に近い

ベーコン工場（イギリス資本）他にも飛び火した。

- 113) 1961 年 8 月 14 日のこと。
- 114) 1972 年 8 月以降のこと。
- 115) 「信仰復活派」に起源する一派であろうか。第 2 部の注 225 を見よ。
- 116) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 113~137.
- 117) シャカについては、第 1 部の注 11、ワイヤキについては、第 2 部の注 96 を見よ。
- 118) ギクユ語で *chang'aa*、スワヒリ語で *changaa*。トウモロコシなどを原料に、家庭内で醸造される。非合法であるが、容易に入手できる。「ヌビア・ジン」(Nubia gin)、「キル・ミー・クイック」(Kill Me Quick) と呼ばれ、アルコール度が高く、品質が劣り、常飲すると、失明するなど危険である。
- 119) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 138~144.
- 120) *Ibid.*, p. 9.
- 121) *Ibid.*, p. 2.
- 122) *Ibid.*, p. 9.
- 123) *Ibid.*, p. 15.
- 124) *Ibid.*, p. 22.
- 125) *Ibid.*, p. 29.
- 126) *Ibid.*, p. 41.
- 127) *Ibid.*, p. 49.
- 128) *Ibid.*, p. 55.
- 129) *Ibid.*, p. 71.
- 130) *Ibid.*, p. 82.
- 131) *Ibid.*, p. 97.
- 132) *Ibid.*, p. 113.
- 133) *Ibid.*, p. 138.
- 134) *Penpoint*, No.10, 1961. 3. p. 9.
- 135) Ngugi, James, *A Grain of Wheat*, p. 3.
- 136) Ngugi, James, *Weep not, Child*, p. 3.
- 137) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Secret Lives*, p. 9.
- 138) *Ibid.*, p. 59.
- 139) Cook, David, ed., *Origin East Africa, A Makerere Anthology*, African Writers Series, Heinemann Educational Books, No.15, 1965.
- 140) *Penpoint*, No.13. 1962.
- 141) Cook, David, ed., *ibid.*, p. 62. ; Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 25.

- 142) *Penpoint*, No.13. 1962.
- 143) Cook, David, ed., *ibid.*, p. 62.
- 144) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 24.
- 145) *Penpoint*, No.13. 1962. Cook, David, ed., *ibid.*, p. 62.
- 146) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 25.
- 147) *Ibid.*, p. 25.
- 148) *Penpoint*, No.13. 1962.
- 149) Cook, David, ed., *ibid.*, p. 64.
- 150) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 27.
- 151) *Penpoint*, No. 13.1962. Cook, David, ed., *ibid.*, p. 65.
- 152) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 28.
- 153) *Penpoint*, No.11. 1961.
- 154) Cook, David, ed., *ibid.*, p. 53. ; Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 49.
- 155) *Penpoint*, No.11, 1961.10. *Transition*, vol. 2, no.3. January, 1962, pp. 5~7.
- 156) Cook, David, ed., *ibid.*, pp. 58~59.
- 157) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 54.
- 158) *Ibid.*, Preface.
- 159) *Ibid.*, Preface.
- 160) Ngũgĩ wa Thiong'o & Michere Githae Mugo, *Trial of Dedan Kimathi*, African Writers Series, No.191, Heinemann Educational Books, 1976.
- 161) *Ibid.*, p. 3, 24, 79, 82. ここでの引用は、p. 3 から。
- 162) 第1部の注97を見よ。
- 163) Ngũgĩ wa Thiong'o & Michere Githae Mugo, *ibid.*, pp. 25~27. (要約)。
- 164) *Ibid.*, pp. 25~26. (要約)。
- 165) *Ibid.*, p. 27.
- 166) *Ibid.*, p. 27.
- 167) *Ibid.*, p. 64.
- 168) *Ibid.*, p. 67.
- 169) *Ibid.*, p. 68.
- 170) *Ibid.*, p. 40.
- 171) *Ibid.*, Preface
- 172) *Ibid.*, Preface
- 173) *Ibid.*, pp. 83~84.
- 174) Kenneth Watene (1944~)。ケニアの戯曲作家。国立演劇学校卒業。新聞や雑誌に詩や散文を多数発表。その後、実業界へ転身。『デダン・キマ

ジ』 (*Dedan Kimathi*, 1974) で、民族英雄とされるキマジを多面的に描いた。

- 175) Ngũgĩ wa Thiong'o & Michere Githae Mugo, *ibid.*, Preface.
- 176) *Ibid.*, Preface.
- 177) カレン・ブリクセンについては、第 3 部の注 198 を見よ。エルスペス・ハックスリー (Elspeth Huxley, 1907~1997) : 1912 年、5 歳の頃にケニアへ移住。両親はコーヒー農園を経営した。夫の Gervas Huxley は、英作家 Thomas Huxley の孫。Aldous Huxley は従兄にあたる。代表作は『ジカの火炎樹』 (*The Flame Tree of Thika – The Memories of an African Childhood*, 1959)。ロバート・ルアーク (Robert Ruark, 1915~1965) : アメリカの作家。代表作に、サファリの経験から得た『価値あるもの』 (*Something of Value*, 1955) があり、マウマウ反乱を描いている。ジョイス・ケアリー (Joyce Carey, 1888~1957) : アイルランド系の作家。代表作に『ミスター・ジョンソン』 (*Mister Johnson*, 1939)。若いナイジェリア人を描いている。ライダー・ハガード (Sir Henry Rider Haggard, 1856~1925) : イギリスの冒険小説・ファンタジー作家。1875 年、19 歳の頃にナタール総督の秘書として南アフリカへ渡った。アフリカを舞台にした多数の作品がある。代表作は『ソロモン王の洞窟』 (*King Solomon's Mines*, 1885), 1885)。ジョゼフ・コンラッド (Joseph Conrad, 1857~1924) : ポーランド生まれの英語作家。16 歳で船乗りになり、ポーランドを出て、フランス船に乗ったが、1878 年に英国船へ移った。以後世界各地を旅行。英国船時代のコンゴ川での経験をもとに書いた『闇の奥』 (*Heart of Darkness*, 1899) が代表作。
- 178) Ian Henderson, *The Hunt for Dedan Kimathi*, 1958. 1926 年、ケニア生まれの白人。1945 年にケニア警察に就職。ギクユ語を流暢に話し、ギクユ名キニャンジュイを名乗った。非常事態時に警視正となり、キマジ逮捕で知られる。
- 179) Ione Leigh, *In the Shadow of Mau Mau*, 1954. イオネ・レイは、入植民の一人で、コーヒー農園を経営した。
- 180) 本書「エピローグ」を見よ。付録「現代アフリカ文学作家紹介」を参照せよ。
- 181) Ochieng' William R. & Janmohamed, Karim K. ed., *Some Perspectives on the Mau Mau Movement*, Special issue of *Kenya Historical Review*, vol.5 No.2, 1977 を見よ。同誌は、ケニア歴史学会の機関誌。この特別号には、マイナ・ワ・キニャティ、B. A. オゴト、B. E. キプコリールらの計 12 論文と、オゴトによる「序説」がある。

- 182) E. S. Atieno-Odhiambo, 'Rebutting "Theory" with Correct Theory : A Comment on *The Trial of Dedan Kimathi*', *Kenya Historical Review*, Vol. 5 no. 1, 1977, pp. 385~386.
- 183) Ndīgīrīgī, Gīchingiri, *Ngūgī wa Thiong'o's Drama*, Chapter 2 (pp. 31~59) 参照。
- 184) Kerinyaga (Kirinyaga ; Kere-Nyaga)。標高 5,600 メートル。「白い縞模様」「白い山」。「神秘の山」(Kenyatta, Jomo, *ibid.*, p. 3. 訳書『ケニア山のふもと』p. 18)。「ンガイ」の住む場所。Kerinyaga を初期のヨーロッパ人が Kenya と聞き間違えたと言う説がある。1849 年、ドイツ人宣教師 L. クラップフ (Ludwig Krapf) が初めてこの山を見た。この時、カンバ語で Kee Nyaa と聞いたと言う説もある。ギクユ語では「雄のダチョウ」の意 (黒い羽のなかに白い縞が散在している) との説もある。
- 185) Anderson, Benedict, *Imagined Communities : Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, 1983. (ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳『増補：想像の共同体、ナショナリズムの起源と流行』NTT 出版、1997)。
- 186) コイタレル (Koitalel arap Samoei, 1875 頃~1905) : 1899~1905 年のナンディ人の抵抗を導いた。父親が白人の到来を予言していたと言う。ムバティアニ (Mbatiani 18??~1890) : マサイ人の首長 (Laibon)。「白い鳥」(白人) と「大きな蛇」(鉄道) の到来を予言した。メ・カティリリについては、「インターロードの注 40 を見よ。ワイヤキについては、第 2 部の注 96 を見よ。
- 187) Ngūgī wa Thiong'o, *Petals of Blood*, African Writers Series, No.188, Heinemann Educational Books, 1977.
- 188) Gordimer, Nadine, *The Black Interpreters, Notes on African Writing*, 1973. 土屋哲訳『現代アフリカの文学』岩波書店、1975.
- 189) *Ibid.*, p. 33. 訳書、p. 77.
- 190) トマス・モフォロ (Thomas Mofolo, 1876~1948)。レソト生まれのソト語で書く作家。モリジャの伝道団で学び、『東方への旅人』(*Moeti oa Bochabela*, 1907) で知られる。「天路歷程」のアレゴリー作品とされるが、アフリカの伝統宗教の価値観も見られる。ほかに、ズールー人の首長の生きざまを描く『シャカ』(*Chaka*, 1931) など。
- 191) Soyinka, Wole, *The Interpreters*, 1965.
- 192) Gordimer, Nadine, *ibid.*, pp. 44~45. 訳書、pp. 109~111.
- 193) Ngūgī wa Thiong'o, *ibid.*, 扉。D. ウォルコットについては、第 5 部の注 68 を見よ。

- 194) 第2部の注46を見よ。
- 195) ニヤングエンド (Nyangendo)。Ndemi の後に続いた、イルモログの開拓者 (女性)。上の前歯の間に、見事な隙間があったとされる。ニャグジイ (Nyaguthii)。ニヤングエンドと並ぶイルモログの開拓者。黒い歯茎と豊かな胸で知られた。
- 196) 1971 年、インド洋岸のモンバサとナイジェリアの首都 (当時) ラゴスを結ぶアフリカ横断ハイウェイ計画があり、調査委員会が立ち上がったが、計画倒れに終わった。
- 197) Mwathi wa Mũgo. 作者の創作であろう。オカルト的宗教の指導者。宗教上の疑問に回答するのが仕事。自分の聖堂を持つが、若者は入れず、誰もその顔を見た者はいない。この聖堂を壊すことは、イルモログの一体性が消失することを意味する。この種の人物と聖堂は、現実にはアフリカ各地に見られる。
- 198) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 10.
- 199) *Ibid.*, p. 10.
- 200) *Ibid.*, p. 16.
- 201) このあたりの引用は、*Ibid.*, pp. 21~22.
- 202) *Ibid.*, p. 136.
- 203) *Ibid.*, p. 136.
- 204) *Ibid.*, p. 31.
- 205) *Ibid.*, p. 38.
- 206) *Ibid.*, p. 57.
- 207) *Ibid.*, p. 65.
- 208) *Ibid.*, pp. 76~77.
- 209) *Ibid.*, p. 98.
- 210) このあたりの引用は、*ibid.*, pp. 128~130.
- 211) *Ibid.*, p. 170.
- 212) *Ibid.*, p. 104.
- 213) *Ibid.*, p. 110.
- 214) *Ibid.*, p. 116.
- 215) *Ibid.*, p. 124.
- 216) *Ibid.*, p. 198.
- 217) *Ibid.*, pp. 198~199.
- 218) *Ibid.*, p. 199.
- 219) *Ibid.*, p. 200.
- 220) *Ibid.*, pp. 240~241.

- 221) Kamwene Cultural Organization. 1969 年、トム・ムボヤの暗殺後、ギクユ民族内の団結を図る目的で結成されたもの。反動的な利益団体である。
- 222) Ibid., p. 291.
- 223) Ibid., pp. 299~300.
- 224) 「弁護士」が J. M. カリウキをモデルにしているならば、1975 年 3 月 2 日の事件である。
- 225) Revival Movement (Rwanda Revival)。ルワンダへの医療伝道団に起源したとされる。ウガンダを経てケニアへ入ったのは 1936 年頃。第二次大戦中から市場などでの信徒による宣伝活動が活発化した。号泣したり、全身を震わせたり、ヒステリー状態で熱狂的に信仰告白をするのが特徴。初めは、アングリカン教会の特徴であったが、しだいに他の宗派に普及した。非常事態時に分散した。
- 226) Ngũgĩ wa Thiong'o, ibid., p. 327.
- 227) Ibid., p. 345.
- 228) *The Weekly Review*, 5 January, 1978. アフリカ文学研究会編『民族・歴史・文学』, p. 187.
- 229) レナード・キベラ (Leonard Kibera, 1940~1983) : 短篇・長編作家。カリフォルニア大学、スタンフォード大学に学ぶ。晩年はケニヤッタ大学で教えた。マウマウ戦争に取材した作品が多い。弟のサミュエル・カヒガ (Samuel Kahiga, 1946~) の作品と合わせて収録した短篇集『ポテン・アッシュ』(*Potent Ash*, 1966) で知られる。他に、モダニズム小説と言われる『暗闇の声』(*Voices in the Dark*, 1966) などがある。サミュエル・カヒガ (Samuel Kahiga, 1946~) : マウマウ戦争に取材した作品が多い。記録小説といわれる『デダン・キマジー真実の物語』(*Dedan Kimathi, The Real Story*, 1990) などがある。トマス・アカレ (Thomas Akare, 1950~) : 都市生活を描く作品が多い。若者のスラム生活を描く処女作『スラム』(*The Slums*, 1981)、都会へ出てきた女たちの売春生活を描く『明け方の女』(*Twilight Woman*, 1988) など。前著には邦訳がある。マイル、ムアングイについては、付録「現代アフリカ文学作家紹介」を見よ。
- 230) *The Weekly Review*, 5 January, 1978, Sander, R. & Lindfors, B., ibid., p. 85. アフリカ文学研究会編『民族・歴史・文学』 p. 187.
- 231) *Sunday Nation*, 17 July, 1977. 『民族・歴史・文学』 p. 203.
- 232) *Sunday Nation*, 1977. 7. 17 ; *Times Literary Supplement*, 1977. 8. 12 ; *The Guardian*, 1977. 6. 30 / 1977. 7. 26 ; *Sunday Times*, 1977. 6. 26 な

ど。

- 233) Sander, R. & Lindfors, B., *ibid.*, p. 68.
- 234) グギ・ワ・ジオンゴからの私的情報。
- 235) *Sunday Nation*, 17 July, 1977. アフリカ文学研究会編『民族・歴史・文学』 p. 202.
- 236) ナザレスの予言。Nazareth, Peter, 'Is *A Grain of Wheat* a Socialist Novel ? ' in Killam, G. D., ed., *Critical Perspectives on Ngugi wa Thiong'o*, 1984. Nazareth, Peter, *The Third World Writer, His social responsibility*, 1978 の扉に以下の引用がある。'Ngugi is too much a believer in the social responsibility of the writer to pursue any art for art's sake.' (Ime Ikiddeh, 1969)。また、ナザレス自身が次のように書いている。'I would therefore say that most African writers who condemned colonialism will find themselves committed to socialism.' (*Literature and Society in Modern Africa*, p. 4)
- 237) Ngũgĩ wa Thiong'o, *The Writer in a Changing Society*, Speech delivered to Makerere Extramural Students at Jinja, Oct. 1969 (in *Homecoming*, p. 47, 50.)

第3部

- 1) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Decolonising the Mind*, p. 34. 訳書、p. 112.
- 2) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Detained*, p. 72.
- 3) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Decolonising the Mind*, p. 34~35. 訳書、p. 112~113.
- 4) *The Weekly Review*, January 9, 1978. 同誌 p. 11~14 に 'Kamirithu (ママ) : Future looks dim' 及び 'The play that got banned' と題する二つの論説を載せている。ここの記述は、これらに負うところが大きい。同誌には、『血の花弁』出版直後のインタビュー記事も再録されている。
- 5) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 34. 訳書、p. 111.
- 6) 「インターロード」の注 111 を見よ。
- 7) 第2部の注 39 を見よ。
- 8) 第2部の注 225 を見よ。
- 9) Ngũgĩ wa Thiong'o, *I will marry when I want*, p. 4. ギクユ語版、p. 11.
- 10) 第1部の注 20 を見よ。
- 11) インターロードの注 112 を見よ。
- 12) Gakaara wa Wanjaũ (1921~2001)。ニエリ生まれ。父はスコットランド・ミッション牧師。1940年代から、『カリウキとムゾニ』(*Kariũki na Mũthoni*) など、中短篇小説、ギクユ文化、風習などに関する小冊子を

執筆。1951 年、Gakaara Book Service を創設、出版活動も始めた。マウマウ戦士ではなかったが、1952 年から 1962 年まで拘留された。その記録『マウマウ作家の拘留記』(*Mwandikī wa Mau Mau Ithaamīrioinī*, 1983 (英訳は *Mau Mau Author in Detention*, 1988)) で、1984 年度の野間賞受賞。1984 年 11 月に来日。

- 13) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Detained, A Writer's Prison Diary*, 1981, p. 76.
- 14) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 98.
- 15) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Decolonising the Mind*, p. 44. 訳書、p. 129
- 16) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Detained*, p. 190.
- 17) Daniel Kamau. ギクユ語で歌う人気歌手。愛称は DK。ムランガの出身で、「地元のエルビス・プレスリー」の異名を取った。
- 18) Mucung'wa : 収穫時に、若い男女が踊り歌う。二列になってたがいに向き合う。男子が足にガラガラを付ける。
- 19) 「インターロード」の注 97 を見よ。
- 20) Wasonga Sijeyo : 1969 年の選挙で国会議員に当選したが、KPU メンバーであるとして拘禁された。George Anyona (1945~2003) : アライアンス高校卒業後、マケレレ大学に学ぶ。ケニアの代表的な政治家であるが、1977 年ケニヤッタ政権により、政治拘禁、以後 KANU に対抗する人物として期待されたが、モイ政権期にも政治拘禁を経験した。1992 年の釈放後は、盟友オディンガの FORD / KENYA へ合流すると思われたが、単独政党ケニア社会会議党 (Kenya Social Congress) を結成した。シクク、セロニーについては、「インターロード」の注 95、96 を見よ。
- 21) この時の日本アジア・アフリカ作家会議議長は野間宏。
- 22) Olaudah Equiano (1745?~1797)。ニジェール川下流デルタ地方に生まれたイボ人。11 歳ごろ、奴隷として拉致され、ギニア海岸へ運ばれ、大西洋 (中間航路) を渡って、バルバドスで荷揚げされた。その後アメリカ各地を転々、1766 年、自由を買い取り、遠洋漁船の船員となって、ヨーロッパ、北米、地中海、カリブ海など世界中で働く。ロンドンで白人女性と結婚し、晩年は奴隷制廃止運動に深くかかわった。自伝『オラウダー・エキアノ、すなわちアフリカ人グスタブス・バッサの生涯の興味ある物語』(*The Interesting Narrative of the Life of Olaudah Equiano or Gustavus Vassa, The African, written by himself*, 1789) がある。邦訳、久野陽一訳『アフリカ人、イクイアーノの生涯の興味深い物語』研究社、2012。
- 23) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 188~189 をも見よ。
- 24) *The Weekly Review*, January 9, 1978. 'Ngugi wa Thiong'o : Writer in

Trouble', p. 5~6.

- 25) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 184.
- 26) *Ibid.*, p. 184.
- 27) *Ibid.*, p. 185.
- 28) *Ibid.*, p. 185.
- 29) *Ibid.*, p. 175.
- 30) *Ibid.*, p. 190.
- 31) *Ibid.*, p. 191.
- 32) *Newsweek*, 1978.1.23.
- 33) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 169~199.
- 34) *Ibid.*, pp. 171~173.
- 35) *Ibid.*, pp. 177~196.
- 36) 「朝日新聞」1979年2月9日号、夕刊文化欄。
- 37) これらのうち、1979~1980年にかけて、地元の有力新聞に出た主な投書は以下のとおりである。

【*Daily Nation*】*Show less Naivety (1979.7. 23) *Since when did Ngugi become a Soviet Writer ? (1979.7.31) *Why drag in Marxism ? (1979. 8. 2) *He was a Pole (1979. 8. 7) *Dangerous line of thinking (1979. 8.7) *Not Created by Socialism (1979. 8.11) *Author's Standards Falling (1979. 8. 14) *Ngugi's Play (1979.8.16) *We must liberate our Minds (1979.8.17) *Ngugi can write only what he knows (1979.8.21) *Comment on Mr Ombongi's letter (1979.8.21) *Was the Critic biased against the Author ? (1979.8.28) *Ngugi wa Thiong'o is now a fallen Idol (1979.8.29) *Author's critic is rather confused (1979.8.31) *Ngugi's critics are naïve and shallow (1979.9.8) *Anglo-Americans controle our life (1979.9.12) *They criticize Ngugi blindly, Three letters (1979.9.18)

【*Sunday Nation* 】*Which is Which ? (1979.8.19) *Reinstate Ngugi at the University (1979.8.26) *Ngugi's 'Sentence' Unconstitutional (1979.9.16) *Clear the Air about Ngugi (1979.9.30)

- 【 *The Standard* 】 *Ngugi wa Thiong'o's novel is a masterpiece
(1980.8.16) *A Literary Landmark (1980.8.21) *He
is a Giant (1980.8.22) *We should study local books
(1980.8.23)
- 38) Chris Wanjala (1944~)。西ケニアのブンゴマ生まれ。ナイロビ大学で学
び、ナイロビ大学で 17 年、エガトン大学で 10 年教えるなどして、現在
ナイロビ大学教授。東アフリカの文芸雑誌の編集、文芸評論活動で中心
的役割を担ってきた。著書多数。来日は数回にのぼる。
- 39) たとえば、*Daily Nation* (1979 年 4 月 7 日号) 第 1 面トップ記事 (Ngugi
was threatened)。
- 40) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. x ii, Sicherman, p. 12.
- 41) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 206~230.
- 42) *Ibid.*, pp. 207~211.
- 43) *Ibid.*, p. 210.
- 44) *Ibid.*, pp. 211~213.
- 45) *Ibid.*, pp. 213~214.
- 46) *Ibid.*, pp. 215~218.
- 47) *Ibid.*, pp. 218~222.
- 48) 「アフリカ文学かアフロ・サクソン文学かーグギの近況」『日本読書新聞』、
1979 年 10 月 8 日号。
- 49) 「グギ・ワ・ジオンゴの近況ーギクユ語による作品をめぐって」『日本読
書新聞』1980 年 10 月 20 日号
- 50) 日本アジア・アフリカ作家会議編『民衆の文化が世界を変えるためにー
アジア・アフリカ・ラテンアメリカ文化会議の記録』恒文社、1982, pp.
44~48 に収録。
- 51) 『流動』1982 年 3 月号に訳載。のち、アフリカ文学研究会訳『アフリカ
人はこう考えるー作家グギ・ワ・ジオンゴの思想と実践』第三書館、1985,
pp. 135~160 に収録。
- 52) 付録「現代アフリカ文学作家紹介」参照。
- 53) (Rius) Edward del Rio (1934~)。メキシコの漫画家。政治漫画で知ら
れる。
- 54) ホルヘ・サンヒネス (Jorge Sanjines, 1936~) : ボリビアの映画監督。1962
年以来、同国「ウカマウ」映画集団制作の全映画を監督。代表作は「第
一の敵」(1974)、「ここから出て行け！」(1977) ほか。
- 55) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Maitũ Njugĩra (Mother Sing for Me) , A Musical
Drama*, A5 版。タイプ印刷。pp. i ~iv. 本文 pp. 1~117。以下、Draft

- と表記する。
- 56) Ngũgĩ wa Thiong'o, Draft, p. ii。注意書き第(6)項は、手書きによる追加である。
- 57) 「沈黙と恐怖の文化」(culture of fear and silence)。ブラジルの教育学者パウロ・フレイレに「文化の沈黙」(silence of culture)、アメリカの言語学者ノアム・チョムスキーに「恐怖の文化」(culture of Fear)と題する論説がある。
- 58) Ngũgĩ wa Thiong'o, ibid. ページ番号欠如。「演出家と役者へ」と書かれている。
- 59) Ibid., p. iii.
- 60) Ibid., p. iii.
- 61) Itwĩka (Ituĩka) : 旧世代が政治生活から引退し、若い世代に実権を移譲する儀礼。前回に実施されたのは、1890~1898年。
- 62) 「インターロード」の注 36 を見よ。
- 63) Mũthĩrīgũ。スワヒリ語の歌謡「ムセレゴ」(Mselego) を取り入れたギクウの歌舞。力強く、情感に富んだ踊り歌で、状況に応じて即興的な歌詞が組み込まれる。「女子割礼」の是非をめぐり、宣教師やアフリカ人キリスト教徒を揶揄・批判するものなど、政治的な内容が多い。1929年10月頃からナイロビ近郊カベテで流行り始めたと言われる。翌年1月に禁止されたが、以後も抵抗歌謡として歌い継がれた。第3部を参照せよ。第3部の注 157 を見よ。
- 64) Mumboist (Mumboism)。元はルオ人の信仰、これをグシイ人が採用した。1913年頃から反白人の抵抗運動に転化した。「ムンボ」(Mumbo) とは、ビクトリア湖に棲む大蛇とされる。
- 65) Dini ya Msambua。西ケニア、ルヒヤ系のブクス人のマシンデ(Mashinde、1908 / 09~1987) が起こした祖霊信仰。ヨーロッパ文化、特にキリスト教に反対し、イギリス支配に抵抗した。植民地解放とケニア人の民主的権利獲得のために闘った。48年の弾圧で、マシンデはラム島に幽閉された。
- 66) Ngũgĩ wa Thiong'o, ibid., pp. 76~95.
- 67) ビルヘルム・リヒャルト・ワグナー (Wilhelm Richard Wagner, 1813~1883)。歌劇で知られるドイツの作曲家・指揮者。「楽劇王」と言われた。反ユダヤ主義者としても知られ、ナチスがワグナー音楽を積極的に利用した。
- 68) Ngũgĩ wa Thiong'o, ibid., p. 4.
- 69) Ibid., p. 5.

- 70) Ibid., p. 3.
- 71) Ibid., p. 3.
- 72) Matiti. スワヒリ語で「乳、乳首」。単数は titi。
- 73) Ngũgĩ wa Thiong'o, ibid., p. 1.
- 74) Ibid., pp. 6~8.
- 75) Ibid., p. 8.
- 76) 「三本の棒切れ」。日本では「三本の矢」「三矢の教え」として知られる。戦国武将毛利元就が三人の子供たちに授けた教訓。一族の結束を説いたもの。
- 77) Ngũgĩ wa Thiong'o, ibid., p. 11.
- 78) 16 歳以上のアフリカ人男子に、出生地、民族名、現住所、写真、指紋、雇い主の署名などの必要事項を書き込んだもの。白人地域に移動する場合の身分証明書で、不携帯の場合に身柄を拘束された。
- 79) Ngũgĩ wa Thiong'o, ibid., p. 12.
- 80) 「インターロード」の注 1 を見よ。
- 81) 「流れる川」「通り過ぎる雲」。第二代大統領モイにも暗に言及している。
- 82) 「黒人の国」。「デボンシャー白書」に言及。インターロードの注 45 を見よ。
- 83) Ngũgĩ wa Thiong'o, ibid., p. 13.
- 84) Ibid., p. 18.
- 85) Ibid., pp. 20~21.
- 86) Ibid., p. 22.
- 87) Ibid., p. 23.
- 88) Ibid., p. 27.
- 89) Ibid., p. 31.
- 90) Ibid., pp. 31~32.
- 91) 「インターロード」の注 36 を見よ。
- 92) Ngũgĩ wa Thiong'o, ibid., p. 33.
- 93) Ibid., p. 34.
- 94) Ibid., p. 35.
- 95) Ibid., pp. 35~36.
- 96) Ibid., p. 38.
- 97) Kikuyu Central Association. キクユ中央協会。創設者は、ジョゼフ・カンゲゼ (Joseph Kang'ethe)。歴史上のカンゲゼは、独立後の体制の批判者として知られ、70 年代に原因不明の死を遂げた。
- 98) Ngũgĩ wa Thiong'o ibid., p. 41.

- 99) Ibid., pp. 42~44.
- 100) Ibid., p. 48.
- 101) Ibid., p. 48.
- 102) Ibid., pp. 48~49.
- 103) Ibid., p. 52.
- 104) Ibid., p. 57.
- 105) Ibid., p. 62.
- 106) 1922 年 3 月、ヅクの逮捕に抗議するデモの際に、警察の発砲で殺害された人数と合致している。ヅク（当時はキスマユに幽閉中）の釈放を求めて、抗議に立ち上がった民衆が官憲に殺害された。ムゾニ・ニャンジルは労働者を率いて、ヅクの逮捕と拘禁に抗議したが、官憲の発砲により、この時に銃殺された。死者の数は、一般に 21 人とされるが、実際には 210~230 人とも言われる。さらに、千単位の説もある。
- 107) Ngūgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 63.
- 108) Ibid., p. 64.
- 109) Ibid., p. 64.
- 110) Ibid., p. 65.
- 111) Ibid., pp. 67~68.
- 112) 第 3 部の注 156 を見よ。
- 113) 歴史上の人物である J. M. カリウキは、マウマウ戦争中の収容所で、死刑を宣告されることがあったが、最終的には処刑を逃れた。この状況と似せている。彼は、独立後反体制の国会議員であったが、警察に逮捕されてから数日後の 75 年 3 月 2 日、ゴングヒルで殺害されていた。「インタールード」の注 94 を見よ。
- 114) Ngūgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 77. カリウキとは「再生・復活」の意であることに注意。
- 115) ギクユの命名儀礼では、後産がすむと、父親が産屋の戸口で「誰を見たか」と大声で訊く。中にいる女たちが、（第一子が）男児の場合は「男の人を見た。おまえの父さんだ」、女児の場合は「女の人を見た。お前の母さんだ」と答える。次に戸口の父親が「何という名前か」と確かめる。女たちが女児の場合は 4 回、男児の場合は 5 回のウルレーションを発する
- 116) Ngūgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 88~89.
- 117) Ibid., p. 89. 非常事態時には 5 人以上の集会が禁止された。モイ大統領時代にも、一時期に同様の措置があった。
- 118) Ibid., pp. 91~92. ワイヤキ・ワ・ヒンガの運命をなぞっている。

- 119) Ibid., pp. 93~94. 歌詞はケニヤッタの経験を指している。
- 120) Ibid., pp. 94~95.
- 121) Ibid., pp. 95~96.
- 122) Ibid., p. 96.
- 123) Ibid., p. 95.
- 124) Ibid., p. 96.
- 125) Ibid., p. 97.
- 126) 第1部の注9を見よ。
- 127) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 99.
- 128) Ibid., pp. 104~105.
- 129) Ibid., p. 106.
- 130) 宗主国イギリスの **British English** の特徴よりむしろ、アメリカ英語 (**American English**) の特徴が濃くなってきたという。アメリカ資本主義の覇権が、宗主国を凌いでアフリカに及んでいることを示唆している。
- 131) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 109.
- 132) Ibid., p. 110.
- 133) Ibid., p. 112.
- 134) Ibid., p. 113.
- 135) Ibid., p. 115.
- 136) Ibid., p. 116. 愛、平和、団結（統一）は、第二代モイ大統領のニャヨイズムのモットーであった。第3部の注151を見よ。
- 137) Ibid., p. 116.
- 138) Ibid., p. 117.
- 139) Ibid., p. 117.
- 140) Ibid., p. 15.
- 141) 特にオランダ改革派教会の選民思想。ユグノーやオランダ改革派など、カルビン派に特有の選民思想を指す。オランダ系住民（ボーア人）は、自ら神に選ばれた選民であると信じ、黒人を無知で劣悪な存在として蔑視した。
- 142) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 37.
- 143) Anglo-American 「アングロ・アメリカン」。多数の大手企業を傘下に抱え、南アフリカのデビアスなど、世界各国で事業を展開している世界最大級の資源企業が実在する。資源三大メジャーの一つ。この名称と二重写しであることに注意。
- 144) Ibid., p. 115.
- 145) 第3部の注97を見よ。

- 146) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 24.
- 147) *Ibid.*, pp. 56~57.
- 148) *Ibid.*, p. 69.
- 149) *Ibid.*, p. 79.
- 150) 「インターロード」の注 94 を見よ。
- 151) 「過去を忘れ」は、独立時の初代大統領ケニヤッタの言説。「愛・平和・統一」は、第二代大統領モイの政治信条。
- 152) Nyayoism. 「ニャヨ」とは、スワヒリ語で「足跡」の意。第二代モイ大統領の政治哲学で、初代ケニヤッタ大統領の足跡（スワヒリ語で Nyayo）を踏襲するというもの。
- 153) スワヒリ語 : mwana / wana 「子供 / 子供たち」 + nchi 「陸、国、国土」、ギクユ語 mūdũ / andũ 「人 / 人々」 + mūrĩmi / arĩmĩ 「土、大地」
- 154) *Ibid.*, p. 8.
- 155) *Ibid.*, p. 115.
- 156) あらゆる祈りの後で、この句が合唱される。thaai=peace, tranquility ; thaathaiya=praise, beseech ; Ngai=God
- 157) スワヒリ地方の「ムセレゴ」は、社交ダンスの一種とされる。フォックス・トロット (fox-trot) の要素を取り入れ、中庸テンポの拍子 (4 分の 4、または 2 分の 2) の音楽に合わせて、二人が組になって踊る。ジャズの前身ラグタイムに合わせて 19 世紀末から 1910 年代にかけて「女子割礼」に反対するミッションに抵抗して流行したとされる。第 3 部の注 63 を見よ。
- 158) Ward, Kevin, *The Development of Protestant Christianity in Kenya 1910~40*, Diss. Cambridge U., 1976, p. 179.
- 159) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Draft*, p. 90.
- 160) Ndĩgĩrĩgĩ, Gĩchingiri, *Ngũgĩ wa Thiong'o's Drama*, Appendix 4.
- 161) *Ibid.*, Appendix 4.
- 162) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 93~94. Mũthũũ (mũthũo) : 割礼直前の少年たちによるコール&レスポンス形式の踊りと歌。剣の形をした棒切れを持って 2 列以上に並列する。合図があると、32 のステップを踏み、33 度目で全員が右足で地面を 3 度踏みつける。次の 32 回のステップを踏む前に、三角形の隊列をつくる。1940 年代以前から行われたとされるが、第二次大戦後、ビルマからの復員兵が流行らせたともいう。カラリ・ンジャマによれば、1942 年頃、10~14 歳の少年の間で始まったという。木製のパンガを振りかざし、小石を入れた空き缶を両足に着けてリズムカルな音をたてる。頭に着けた鳥の長い羽根が揺れるという。踊りながら、

- 自分たちはドイツ人だ、日本人だ、戦争なんか怖くないと叫ぶ。50 年代のマウマウ戦士の多くが、子供の頃に遊んだという。
- 163) Ibid., p. 94. 暗に、初代大統領ケニヤッタの経歴とダブらせている。
- 164) Ibid., p. 94.
- 165) Ibid., pp. 94~95.
- 166) Ibid., p. 95.
- 167) Ibid., p. 95.
- 168) Gicham, Gicam. マウマウ戦争以前、キマジが小学校教員時代に始めた若者による野外劇。民族主義者を支持する内容の政治劇。
- 169) 西部州のルヒヤ人、特にマラゴリ人の歌舞に起源する。権力を振りかざす白人を揶揄するものが多い。
- 170) Ngũgĩ wa Thiong'o, National Identity and Imperialist Domination : The Crisis of Culture in Africa Today, *Barrel of a Pen*, pp. 77~86. アフリカ文学研究会訳『アフリカ人はこう考える』 pp. 8~9.
- 171) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Barrel of a Pen*, pp. 44~47.
- 172) *Daily Nation*, 1982.3.12.
- 173) *Daily Nation*, 1982.3.11 'Licence hitch angers Ngugi', *Daily Nation*, 1982.3.12.
- 174) Ngũgĩ wa Thiong'o, ibid., p. 44.
- 175) *The Standard*, Friday, 1982. 1. 29.
- 176) Education for a National Culture のタイトルで、1981 年 8 月、ジンバブエ大学で行われた。1981 年 11 月、京都でのシンポジウム「第三世界の民衆と文化運動」で「民族文化のための教育」と題して講演した内容とほぼ同じである。訳文は、『アフリカ人はこう考える』所収。Ngũgĩ wa Thiong'o, ibid., pp. 87~100 に収録されている。
- 177) カミリズ村の二つのコミュニティ演劇のその後の経緯については、以下に詳しい。Ngũgĩ wa Thiong'o, 'Women in Cultural Work : The Fate of Kamiriithu People's Theatre in Kenya', in *Barrel of a Pen, Resistance in Neo-colonial Kenya*, pp. 39~51.
- 178) 第 2 部の注 177 を見よ。
- 179) Ngũgĩ wa Thiong'o, ibid., p. 48.
- 180) Ngũgĩ wa Thiong'o, National Identity and Imperialist Domination, in *Barrel of a Pen*, 1983, p. 83. アフリカ文学研究会訳、ibid., p. 13.
- 181) *Sunday Nation*, 1982.2.28.
- 182) *Sunday Nation*, 1982.3.21.
- 183) *Sunday Nation*, 1982.3.21.

- 184) Wanjirũ wa Ngigĩ. 亡妻ニャンブラの実妹。
- 185) *The Standard*, Friday, 1982.1.29.
- 186) Ndĩgĩrĩgĩ, Gĩchingiri, *ibid.*, p.185.
- 187) *The Standard*, Friday, 1982.1.29.
- 188) *Ibid.*
- 189) *Ibid.*
- 190) *Ibid.*
- 191) *Ibid.*
- 192) *Ibid.*
- 193) *Ibid.*
- 194) *Ibid.*
- 195) *Ibid.*
- 196) *Ibid.*
- 197) 「インターロード」の注 112 を見よ。
- 198) Karen Blixen (1885~1962)。デンマークの代表的作家。ペンネームは Isak Dinesen という男性名。スウェーデンのブリクセン男爵と結婚。1914 年以後 18 年間、ケニアで大農園を経営。1921 年別居、1925 年離婚。代表作は、*Out of Africa*, 1937 (邦訳、横山貞子訳『アフリカの日々』晶文社、1981)。
- 199) Noma Award. 講談社が創業 70 周年を記念に創設。アフリカ諸国の出版社と作家の活動を奨励するもの。30 回 (1980~2009) で終了。
- 200) 小田実「日本人とアジア人・第三世界人ー「核」危機をめぐる状況のなかでー」『世界』1982 年 9 月号。
- 201) Committee for the Release of Political Prisoners in Kenya (CRPPK)。代表は、トリニダード出身のジョン・ラ・ルース (John La Rose)。機関誌は「ケニア・ニュース」(*Kenya News*)。連携組織が、スウェーデン、ノルウェイ、デンマーク、日本、アメリカ、ナイジェリア、レソトなどに発足した。
- 202) Mũkoma wa Ngũgĩ は、詩集 *Hurling Words at Consciousness*, 2006 ; 小説 *Nairobi Heat*, 2009 ; *Black Star Nairobi*, 2013 などを発表。Wanjikũ wa Ngũgĩ は、小説 *The Fall of Saints*, 2014 を、Nducu wa Ngũgĩ は小説 *City Murders*, 2014 を発表。

インターロード

I. 19 世紀末~第一次大戦前まで

- 1) アラブ・スワヒリ商人：インド洋海岸地方のモンバサ、マリンディ、ラム

方面からの、主にスワヒリ語（諸方言）を話すムスリム商人による内陸各地への進出があった。カンバ人は、海岸地方と内陸との物資の移動など仲介役として活躍した。ミジケンダ（Mijikenda. 九つの集落の意）は、ギリアマ、ディゴ、ドウルマなど海岸地方の九つの集団を含むバンツー語系少数民族の総称。マサイ人は、やや内陸地方、ケニアとタンザニアの国境地方に住む遊牧民族。ナンディ人は、リフトバレー周辺、ルオ人は、西部のビクトリア湖周辺に住むナイロート系の民族。

- 2) Clough, Marshall S., “Chiefs and Politicians : Local Politics and Social Change in Kiambu, Kenya, 1918~1936”, Diss. Stanford U., 1977, p. 66n 131.
- 3) Watt, Rachel Stuart, *In the Heart of Savagedom : Reminiscences of Life and Adventure during a Quarter of a Century of Pioneering Missionary Labours in the Wilds of East Equatorial Africa*, 3rd ed., 1922, p. 170.
- 4) Cranworth, Lord [Betram Francis Gurdon], *Kenya Chronicles*, 1939, p. 22.
- 5) Ndorobo (Dorobo, Torobo)。ケニアとタンザニアの国境地方に住む狩猟採集民。元は、リフトバレーの平原、近隣の森林に住んだとされ、主にナイロート系で、マサイ人と同義に使われることもあるが、クシ系民族を含むとも言われる。ギクユ人と、先住のグンバ人との混血との説もある。
- 6) Lugard, F. J. D., *The Rise of Our East African Empire : Early Efforts in Nyasaland and Uganda*, 2 vols. 1893. Vol.1, p. 527.
- 7) Eliot, Sir Charles (1862~1931)。1901 年から、東アフリカ保護領弁務官。南アフリカからのイギリス人の入植を進めるなど、「白人の国」の建設に努めた。
- 8) Sandford, G. R., *An Administrative and Political History of the Masai Reserve*, 1919, p. 21.
- 9) Delamere, Lord Hugh Cholmondeley (1870~1931)。1903 年に入植。この年、10 万エーカーの土地を、1 エーカーに付き、年間 0.5 ペニーで、99 年間のリース権を認められた。のち、入植民協会の会長に就任、入植民による自治を主張した。
- 10) Ochieng', William R., “Land as a Crucial Agendum in Kenya's Nationalist History” in his *The Second Word : More Essays on Kenyan History*, 1977, p. 114.
- 11) Mungeam, G. H., *Kenya : Select Historical Documents, 1884-1923*, 1978, p. 3.
- 12) 第 2 部の注 96 を見よ。

- 13) Berman, B. & Lonsdale, John, *Unhappy Valley*, 1992, Table 2. 2, p. 28.
- 14) Meinertzhagen, Richard (1878~1967)。イギリスの軍人。キングズ・アフリカン・ライフル部隊を率いて、ギクユ人やナンディ人などへの討伐遠征を指揮した。著書に『ケニア日誌』(*Kenya Diary, 1902~1906*, 1957)がある。
- 15) Meinertzhagen, Richard, *Kenya Diary, 1902~1906*, 1957, p. 50.
- 16) Meinertzhagen, Richard, *ibid.*, pp. 73~74.
- 17) Berman & Lonsdale, *ibid.*, Table 2. 2, p. 28.
- 18) Meinertzhagen, Richard, *ibid.*, pp. 141~142.
- 19) Meinertzhagen, Richard, *ibid.*, p. 156.
- 20) Meinertzhagen, Richard, *ibid.*, p. 152.
- 21) Ogot, Bethwell and Ochieng', William, "Mumboism : An Anti-Colonial Movement" in Ogot, ed., *War and Society*, pp. 155~156.
- 22) Wipper, Audrey, *Rural Rebels : A Study of Two Protest Movements in Kenya*, 1977, p. 25 から再引用。
- 23) 第2部の注186を見よ。
- 24) Berman & Lonsdale, *ibid.*, Table 2. 2, p. 28.
- 25) Meinertzhagen, *ibid.*, p. 239.
- 26) Berman & Lonsdale, *ibid.*, Table 2. 2, p. 29.
- 27) Ochieng', William R., *A History of Kenya*, 1985, p. 96.
- 28) Ogot, Bethwell and Ochieng', William, *ibid.*, p. 159.
- 29) アインズワース (John Ainsworth, 1864~1946) はインド人。帝国イギリス東アフリカ会社などに勤務した後、原住民担当主任弁務官 (Chief Native Commissioner) などを務めた。ホール (Francis Hall, 1860~1901) は、1892年から帝国イギリス東アフリカ会社に勤務、南アフリカなどで活躍。1895年以降、植民地政府役人となり、ギクユランド、マチャコス (カンバ人の中心地)、ムランガなどが任地だった。ギクユとマサイの紛争解決などに尽力した。
- 30) Mungeam, G. H., *ibid.*, pp. 408~409.
- 31) F.O.2 / 204, Johnston to Salisbury, 13 Oct. 1899 (Magnat, J. S., *A History of the Asians in East Africa, c.1886~1945*, 1969, p. 40 から再引用)。
- 32) Preston, R. O., *The Genesis of Kenya Colony : Reminiscences of an Early Uganda Railway Construction Pioneer*, 1947, p. 172.
- 33) Preston, R. O., *ibid.*, p. 176.
- 34) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Homecoming, Essays on African and Caribbean Literature, Culture and Politics*, 1972, p. 33.

- 35) 第1部の注97を見よ。
- 36) ヨーロッパ人の渡来以前、ギクユ民族は暴君に仕え、その圧制により、定住を許されず、土地から土地へ遊牧生活を送っていたとされる。しかし、1827（マイナス61±10）年頃、定住を始め、農耕生活を選んだ世代が王に反逆した。この世代は、イレギ（Iregi）「拒否・反逆」世代と呼ばれた。この後、人々は森林を開拓し、農耕を始めたが、この世代は「デミ」（Ndemi「伐る人々」）と言われる。その後、「イレギ」はマウマウ戦士を指して使われることにもなった。1920年、ニエリで生まれたデダン・キマジは、その役割から、この世代に属するとされた。
- 37) Gicaru, Mugo, *Land of Sunshine : Scenes of Life in Kenya before Mau Mau*, 1958, p. 17.
- 38) Kaniki, M. H. Y., “The Colonial Economy : The Former British Zones” in Boahen, A., ed., *Africa Under Colonial Domination 1880~1935*, UNESCO *General History of Africa*, Vol.7, p. 386. （日本語版：宮本正興責任編集『ユネスコ版アフリカの歴史第七巻－植民地支配下のアフリカ、1880年から1935年まで』同朋舎、1988, p. 568）。

II. 抵抗の系譜

- 39) Imperial British East Africa Company (IBEACO)。前身は、イギリス東アフリカ協会（British East Africa Association）。1888年8月に王室から勅許状を交付されて誕生した。東アフリカの統治と通商開発を任されたが、1895年に東アフリカ保護領が宣言され、役割を終えた。
- 40) Me Katilili (Kitilili, Mekatalili)。海岸地方ギリアマ人の女性。1913年頃から、強制労働に反対する抵抗を説いた。雄弁術にすぐれ、白人は「魔女」（witch）と呼んだ。1913年10月、逮捕され西ケニアへ送られたが、翌年に脱走し、海岸地方へ戻り、再び抵抗運動に入った。同年、再び逮捕され、1919年まで海岸地方北方のキスマユへ流刑された。晩年にも、ギリアマの土地で民族の団結に尽力した。
- 41) 第1部の注8を見よ。
- 42) 第1部の注9、第2部の注81、第3部の注106を見よ。
- 43) 第1部の注9、第2部の注81、第3部の注106を見よ。
- 44) Ngũgĩ wa Thiong’o, *Detained*, p. 84 から再引用。
- 45) Devonshire Declaration. 1923年7月の政府白書。当時の植民地大臣の名にちなむ。正式名は「ケニアのインド人」（*Indians in Kenya*）。立法審議会の人種別代表制度（インド人5名、ヨーロッパ人11名、アフリカ人は1944年までゼロ）の維持、白人専用高地など土地政策の維持を決めたが、都市の居住区域の隔離などの廃止を勧告した。これにより、入植民の自治

要求は無効とされた。

- 46) Sicherman, Carol, *Ngugi wa Thiong'o : The Making of a Rebel, A Source Book in Kenyan Literature and Resistance*, 1990, p. 64. 広く流布した説であるが、この考え方には根拠（証拠）がないとする見解もある。
- 47) 第3部の注63を見よ。
- 48) Rosberg, Carl G. Junior, & Nottingham, John, *The Myth of Mau Mau : Nationalism in Kenya*, 1966, p. 118, 112.
- 49) Ward, Kevin, *The Development of Protestant Christianity in Kenya, 1910~40*, Diss. Cambridge U., 1976, p. 155 から再引用。
- 50) Clough, Marshall S., “Chiefs and Politicians : Local Politics and Social Change in Kiambu, Kenya, 1918~1936”, Diss. Stanford U., 1977, p. 201.
- 51) Kikuyu Karing'a. karing'a とは「純粋、無垢」の意。女子割礼問題の頃に生まれた用語。伝道団が説くやり方を遠ざけ、拒否し、純然たるギクユの伝統に忠実なことを指す。KISA と同じく、キリスト教伝道団の影響を排除するもの。学童の家庭の共同出資で運営された。
- 52) Ndungu, J. M., “Gituamba and Kikuyu Independence in Church and State”, in McIntosh, *Ngano* , pp. 137~38, 147.
- 53) Leys, Norman, *The Colour Bar in East Africa*, 1941, p. 14.
- 54) ‘Wind of Change’. 1960 年 2 月 3 日、英国首相ハロルド・マクミランが南アフリカ議会（ケープタウン）でのスピーチで使った。アフリカ大陸全土での独立運動の機運（Black Nationalism）をこう表現した。
- 55) Chege wa Kibachia. 代表的な労働組合活動家の一人。1950 年 5 月 15 日のフレッド・クバイ、チェゲ・ワ・キバチア、マカン・シンらの逮捕に抗議して、翌日から同月 25 日までナイロビで打たれたゼネストでは、10 万人が参加した。この時初めて、鎮圧のために催涙ガスが使用された。第2部の注112を見よ。
- 56) Throup, David W., *The Origins of Mau Mau, African Affairs*, 1984. 2 (1985) , pp. 399~433.
- 57) Koinange, (Peter) Mbiyu, *The People of Kenya Speak for Themselves*, 1955, p. 85.
- 58) Fred Kubai (1915~1996)。労働組合活動家。1949 年の東アフリカ労働組合会議の創設者、のちに KAU のナイロビ支部長。1952 年 12 月の、いわゆる「カペンゲリアの 6 人」(Kapenguria Six) の一人で、ケニヤッタ、カギア、オネコらと裁判を受けた。1961 年まで投獄された。
- 59) Maina wa Kinyatti, ed., *Thunder from the Mountains, Mau Mau Patriotic Songs*, 1980, p. 53.

Ⅲ. マウマウ戦争（非常事態）

- 60) Majdalany, F., 1963 によれば、ギクユ語 *uma uma* 「出て行け」の意とされる。音位転換（アナグラム）で、ギクユ人の少年の割礼時での言葉遊びに由来すると言う。Kariuki, J. M., 1963 によれば、イギリス人が KFLA という用語の使用を嫌い、捏造したと言う。スワヒリ語で、Mzungu Aende Ulaya, Mwafrika Apate Uhuru 「白人は出て行け、アフリカ人は独立を」の頭文字を組み合わせたとの説もある。Maina wa Kinyatti, 1987 によれば、1950 年に、白人追放を掲げた結社の一員であるとの嫌疑で、ナイバシャで逮捕された一農場労働者が、法廷で尋問への回答を拒否し、「明かしてはならないマウンドゥ・マウ・マウ（あれこれの事柄）について、絶対に教えることは出来ない」（Ndingĩkwĩra maũndũ *mau mau* nderirwo ndikoige nĩ kĩaama）と陳述した。これを聞いた英語新聞の白人記者が、この結社の名称であると思ったことが始まりだと言う。
- 61) 1949 年 9 月、「有権者同盟」が立案発表。ヨーロッパ人のリーダーシップの下で、「英領東アフリカ自治領」（British East African Dominion）の建設を提唱した。アフリカ人の市民的権利を全面的に制限するもの。エリウド・マツは、アフリカ人の未来に死を宣告するもので、白人入植民からのアフリカ人に対する宣戦布告だと述べている（Singh, Makhan, 1969, p. 239）。
- 62) インタールードの注 58 を見よ。
- 63) Bildad Kaggia (1922~2005)。民族主義者。元マウマウ戦士。カペンゲリアにケニヤッタらとともに幽閉された。第二次大戦に従軍、マカン・シンの逮捕後は、労働運動を指導し、KAU のナイロビ支部の中心人物となった。独立後国会議員になったが、ケニヤッタと衝突、1966 年、オディンガラと KPU を結成した。1968 年 4 月に逮捕されたが、1969 年に KANU へ復帰した。
- 64) Stanley Mathenge (1920?~?)。ニャンダルア山脈、ニエリを中心に展開したイトウマ・デミ軍（Ituma Ndemi Army）の指揮官。はじめ、キマジの上官だった。1940 年に KCA へ参加、第二次大戦では KAR の一員としてビルマ戦線へ。「40 年の男子組」の一人で、1946 年、KAU へ参加。6 フィートの背丈、あごひげ、口ひげで知られた。識字能力はなかったが、雄弁だった。1952 年 12 月、ニャンダルア山脈に入り、半年後には約 6,000 人の部隊を指揮した。1954 年中頃には、キマジとともに全軍を指揮したが、前年にキマジが国防評議会（Kenya Defence Council, のちのケニア土地自由軍）を結成した頃から、キマジと地位が逆転し始めたと言われる。マゼンゲの部隊も、KLFA の一翼となったが、1955 年 5 月、不満分子を

連れて、イギリス政府との降伏協議に応じた。協議は決裂し、4 日後に逃亡した。その後、食料などを断たれ、約 300 人の部隊で北方へ逃げたと言われる。マゼンゲは、1955 年にイアン・ヘンダーソンに殺害されたとの説もある。1970 年、ケニア政府がマゼンゲの消息の確認に努めたが、不明のままである。

- 65) Bullock, Ronald Arthur, *Ndeiya, Kikuyu Frontier : The Kenya Land Problem in Microcosm*, 1975, p. 92. Kibera, Leonard, 'The Stranger', in Leonard Kibera and Samuel Kahiga, *Potent Ash*, 1972, pp. 31~32. Sicherman, Carol, *ibid.*, p. 83.
- 66) Kahiu Itina. ニャンダルア山脈、ニエリを中心に展開したイトゥマ・デミ大隊（第一部隊）を指揮した。
- 67) Maina wa Kinyatti, ed., *Thunder from the Mountains, Mau Mau Patriotic Songs*, 1980, p. 4.
- 68) General China (1921~)。ワルヒウ・イトテ (Waruhiu Itote) 将軍の別名。「ワルヒウ」とは「常に剣を携えている者」の意。第二次大戦で KAR として従軍、復員後「40 年の男子組」に参加。15 ヶ月しか森にこもらなかったが、ケニア山で 5,000 人の大隊を指揮した。1954 年 1 月 15 日に逮捕され、翌日、政府の求めに応じて、森の戦士に停戦を呼びかけた。キマジはこれを裏切りと考えた。政府は死刑の決定を終身刑に改め、1963 年 6 月、ケニヤッタの仲介で釈放された。
- 69) 第 2 部の注 178 を見よ。
- 70) Earskine, General Sir George (1899~1965)。第一次、第二次大戦に従軍、ベルギー戦線で連合軍を指揮した百戦錬磨の軍人。1953 年 6 月から 1955 年 5 月まで、マウマウ鎮圧のための英国軍最高司令官。
- 71) Maina wa Kinyatti, ed., *ibid.*, p. 18, 56, 81, 64, 7, 89, 77.
- 72) Maina wa Kinyatti, 1987 は、これらの記録の原文や写し、没収を免れた多数の手紙や書類を探し出し、元マウマウ戦士からの聞き書きなどで、「キマジ・ペーパーズ」の復元を目指したものである。邦訳は、宮本正興監訳『マウマウ戦争の真実―埋もれたケニア独立前史』第三書館、1992。
- 73) Maughan-Brown, David, *Land Freedom and Fiction : History and Ideology in Kenya*, 1985, p. 50.
- 74) Maughan-Brown, David, *ibid.*, p. 51.
- 75) Leigh, Ione, *In the Shadow of the Mau Mau*, 1954, p. 17.
- 76) Leigh, Ione, *ibid.*, p. 205.
- 77) Leigh, Ione, *ibid.*, p. 205.
- 78) Ochieng', William, Review article of Bildad Kaggia's *Roots of Freedom*,

Kenya Historical Review, 4.1 (1976) p. 215.

- 79) Ogot, Bethwell, “Introduction” in Ochieng’, William & Janmohamed, Karim K. ed., *Some Perspectives on the Mau Mau Movement*, Special issue of *Kenya Historical Review*, Vol.5 No.2, 1977, pp. 169~172.
- 80) Ogot, Bethwell, A., Politics, Culture and Music in Central Kenya : A Study of Mau Mau Hymns, 1951~1956. In Ochieng’, William & Janmohamed, Karim K. ed., *ibid.*, pp. 275~286.
- 81) Kipkorir, B. E., Mau Mau and the Politics of Transfer of Power in Kenya, 1957~1960, in Ochieng’, William & Janmohamed, Karim K. ed., *ibid.*, pp. 313~328.
- 82) Rosberg, Carl G. Jr. & Nottingham, John, *The Myth of “Mau Mau” : Nationalism in Colonial Kenya*, 1966.
- 83) Barnett, Donald L. & Njama, Karari, *Mau Mau from Within, Autobiography and An Analysis of Kenya’s Peasant Revolt*, 1966.
- 84) Kinyatti, Maina, Mau Mau : The Peak of African Political Organization in Colonial Kenya, in Ochieng’, William & Janmohamed, Karim K. ed., *ibid.*, pp. 287~311.
- 85) Maloba O. Wunyubari, *Mau Mau and Kenya : An Analysis of a Peasant Revolt*, 1993, p. 3.
- 86) *Ibid.*, pp. 4~7.

IV. ケニヤッタの時代 (1963~1978)

- 87) Lodwar. ケニヤッタは、「カペンゲリアの 6 人」の一人として、1953 年 4 月から 7 年間の獄中生活を送り、その後、この地に幽閉された。彼は、そこを「この世の地獄」と形容した。炎熱と乾燥、くわえて毒蛇がいる。
- 88) 「インターロード」の V 「モイの時代」を見よ。
- 89) Legum, Colin, ed., *Africa Contemporary Records : Annual Survey and Documents*, 1 [1968~69], p. 157
- 90) Achieng Oneko (1920~)。元マウマウ戦士。「カペンゲリアの 6 人」の一人。1951 年、キスムで KAU 支部長となった。のちに、ナイロビ市議会の最初のルオ人議員。KAU 書記長になったが、1954 年から 1961 年まで拘禁。1963 年、国会議員となり、情報大臣などを務めた。1966 年、KPU へ移籍したが、1969 年、KPU の禁止処分と同時に逮捕、1975 年 10 月まで拘禁された。1976 年、KANU へ復帰した。拘禁生活は 16 年間に及ぶ。
- 91) Abdilatif Abdalla (1946~)。モンバサ生まれ。スワヒリ語で書く詩人。反政府的な内容の「ケニアはどこへ向かうか」(*Kenya Twendapi ?*) を

書き、ケニヤッタ政権期の 1969 年から 1972 年まで投獄された。作品に、『苦悩の声』(*Sauti ya Dhiki*, 1973) ほか。ダルエスサラーム大学で教えたほか、1979 年から 1985 年まで、BBC スワヒリ語放送を担当した。現在はドイツ在。

- 92) Pío Gama Pinto (1927~1965)。ゴア人(インド)の反植民地活動家。インドで教育を受け、10代でゴア人の解放運動に入る。1949年、ケニアへ帰国し、インド人会議、KAU、労働組合運動、ジャーナリズムで活躍、マウマウ闘争を支持した。1954年4月、「かなとこ作戦」で逮捕され、インド洋岸のマンダ島に、さらに1959年までガバルネットに幽閉された。マウマウ闘争で拘禁された唯一のインド人であり、独立後に暗殺(1965年2月25日)された最初の政治家である。
- 93) Tom Mboya (1930~1969)。独立運動、労働組合運動のルオ人リーダーの一人。1955年のモンバサの港湾労働者のストを指導した。1957年、立法審議会代表。KANUの創設に尽力し、ケニヤッタの信頼が篤く、アメリカへの留学生派遣に熱心であった。経済企画大臣在任中の1969年7月5日に暗殺された。政敵にあたる大物政治家が刺客を差し向けたとされる。著書に、*The Challenge of Nationhood, A Collection of Speeches and Writings*, African Writers Series, No. 81, Heinemann Educational Books, 1970がある。
- 94) Joshua Mwangi Kariuki (1929~1975)。ギクユ独立学校で学び、非常事態時の1952年から1960年まで拘留生活を送った。その後、ケニヤッタの私設秘書などを務めたが、やがて「ケニアを、10人の百万長者と1,000万の乞食の国」にしてはならないと発言、農民や底辺層擁護の立場を鮮明にした。一時、ケニヤッタ後の大統領候補と目されたこともある。1975年3月2日の暗殺には、当時の政権の大物の関与があったとされる。以後、JM Dayとして知られる。著作に、*'Mau Mau' Detainee, The Account by a Kenya African of his Experiences in Detention Camps, 1953~1960*, 1963. Munuhe, Kareithi ed., *JM Kariuki in Parliament vol. I, II*, 1975, 1976がある。
- 95) Martin Shikuku (1933~2012)。1960年、KADUに入党。1964年、KANUへ移籍。1963年から1988年まで国会議員。その間、1975年10月の「KANUは死んだ」との国会発言で拘禁された。「民衆の側に立つ見張り人」(*The People's Watchman*)を自称し、1962年のランカスター会議にも参加した。アムネスティから「良心の囚人」の指定を受け、1978年12月12日、セロニー、グギらとともに釈放された。1990年代に「民主回復運動」(*Forum for the Restroration of Democracy=FORD*)の結成に

参加した。

- 96) Jean Marie Seroney (1925~1982)。アライアンス高校、マケレレ大学、アラハバード大学（インド）で学ぶ。ケニアで初期の弁護士の一人。ナンディ人で、1961年に立法審議会代表、1963年、KADUから国会議員当選。「KANUは死んだ」とのシククのスピーチを支持し、無裁判拘禁に処された。アムネスティが「良心の囚人」に指定。1978年12月12日に釈放された。
- 97) Charles Njonjo (1920~)。父親は、植民地期の首長。アライアンス高校卒業後、南アフリカのフォートヘア大学で法律を学ぶ。1963年から1979年まで検事総長（Attorney General）。モイ大統領により司法大臣（1980~1983）に選ばれたが、1983年、突然失脚。大統領職を狙ったとされた。
- 98) Odinga, Oginga, *Not Yet Uhuru, an autobiography, with a foreword by Kwame Nkurumah*, African Writers Series, No.38, Heinemann Educational Books, 1967, p. 294.
- 99) コンゴ動乱。現コンゴ民主共和国（旧ベルギー領コンゴ、ザイール）で、1960年7月から1963年1月にかけて起きた政治動乱。64年6月から翌年3月までの紛争を含める場合もある。同地は、元コンゴ自由国（ベルギー国王レオポルド二世の私領地。1908年以後、ベルギー領）。60年6月30日に、パトリス・ルムンバの率いるコンゴ国民運動の下で中央集権国家として独立したが、1週間と経たないうちに、首都で軍隊が反乱、紛争は地方へ拡大した。豊富な銅鉱で知られる東部のカタンガ州で、チョンベが分離独立を宣言した。国連軍が派遣されたが、ルムンバは殺害された。この政治劇にはアメリカCIAの関与があったとされる。
- 100) 「ウフル」（Uhuru）とは、スワヒリ語で「自由」「独立」の意。

V. モイの時代（1978~2002）から現在まで

- 101) アフリカ統一機構（Organization of African Unity）。1963年5月、アジスアベバで開催されたアフリカ諸国首脳会議で創設を決定。アパルトヘイト体制下の南アフリカを除くアフリカの全独立国家で構成された（84年に、モロッコが脱退）。アフリカの一体性を前提に、パン・アフリカニズムの所産である。2000年に、アフリカ連合（Africa Union, AU）として発展的に解消した。
- 102) Wanyiri Kihoro. 1982年、ロンドンへ亡命。1986年逮捕・拘禁。82年の亡命時には、妻ワンジル・キホロ（Wanjiru Kihoro, 1953~2006）も同行。同地のアフリカセンターなどを拠点に、ケニアの民主化運動を担った。

- 103) Cheragat Mutai (1949~2013)。カレンジンとして最初の女性国会議員だった。
- 104) *The Weekly Review*, 1982.6.1. p. 8.
- 105) Maina wa Kinyatti, ed., *Thunder from the Mountains, Mau Mau Patrotic Songs*, 1980.
- 106) *Release the Political Prisoners in Kenya*. ロンドンの「ケニア政治犯釈放運動委員会」(代表は、ジョン・ラ・ルース) が 1982 年に発行した文書。
- 107) 第 5 部の注 70 を見よ。
- 108) Joe de Graft (1924~1978)。ガーナの劇作家、詩人。アチモタ大学で英文学を学び、教職に就く。アクラに音楽・演劇関係の学院を創設することに尽力した。ナイロビ大学で教え、晩年はガーナ大学でも教えた。『ムントウ』(*Muntu*, 1977) は、神話、フォークソング、語りなどを駆使した史劇。
- 109) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Maitũ Njugĩra*. 未刊。この戯曲の内容については、第 3 部で論じている。
- 110) Sicherman, Carol, *Ngugi wa Thiong'o : The Making of a Rebel, A Source Book in Kenyan Literature and Resistance*, 1990, p. 93.
- 111) Ngũgĩ wa Miriĩ (1951~2008)。ナイロビ大学の成人教育専門家。1986 年、ジンバブエ・コミュニティ演劇連合(ZACT)を結成。2008 年 5 月 3 日、ハラレ郊外で交通事故死。2000 年に、アフリカ文学研究会の招きで、劇団を率いて来日、京都、大阪、東京で公演した。
- 112) Kĩmani Gecau. 元ナイロビ大学文学科教員。カナダ、合衆国などへ留学。1977 年、カミリズ村でのコミュニティ演劇「したい時に結婚するわ」を演出。1980 年、タマドゥニ劇団による「デダン・キマジの裁判」スワヒリ語版を演出。1982 年 6 月、ジンバブエへ亡命。現在、ジンバブエ大学教授。
- 113) Mwakenya. 1986 年 3 月頃に、前身の「12 月 12 日運動」(December Twelve Movement)を引き継いだ反政府地下組織。*Mzalendo*, *Pambana*, *Mpatanishi*などは、その出版物とされる。「ケニア解放愛国者同盟」Muungano wa Wazalendo wa Kuikomboa Kenya (Union of Patriots for the Liberation of Kenya)の略称。
- 114) Currie, Kate and Ray, Larry, *The Pambana of August 1—Kenya's Abortive Coup*, *Political Quarterly*, 57.1 (1986) : 47~59, p. 47 ; Meja-Pearce, Adewale, "Waste and Rumours of Waste", *Index on Censorship*, 18. 6-7 (1989) : 32~33, p. 33.

- 115) 松田素二「民族浄化紛争」(松田素二・津田みわ編『ケニアを知るための 55 章』、明石書店、2012, pp. 96~100.
- 116) モイ時代のケニア、モイの引退などに関しては以下が役に立つ。津田みわ「一党独裁ーさらなる強権化 / 民主化とその限界」「平和的政権交代ーモイの引退とキバキ政権の内実」(上掲書 pp. 91~95 ; pp. 101~105)。
- 117) 松田素二「選挙後暴力」(上掲書 pp. 106~110)。

第 4 部

- 1) 橋本福夫 (1906~1987)。アメリカ文学者、翻訳家。青山学院大学教授などを歴任。アメリカ文学一般、アメリカ黒人文学などで、数多くの翻訳で知られる。『橋本福夫著作集』(全 3 巻、早川書房、1989) がある。
- 2) Marcuson, A. et al., *Cultural Events in Africa*, 31 (1967), i ~ v supp. 'James Ngugi Interviewed by Fellow Students at Leeds University', in Sander, R. & Lindforce, B., *Ngũgĩ wa Thiong'o Speaks, Interviews with the Kenyan Writer*, 2006, pp. 25~33.
- 3) Amooti wa Irumba, Katebaliirwe, Interview given by Ngũgĩ wa Thiong'o on 6th and 11th January 1979 at Ngũgĩ's home, Limuru, pp. 45~46. アフリカ文学研究会編『民族・歴史・文学』p. 71.
- 4) *The Weekly Review*, 1978. 1. 9 ; Sander, R. & Lindfors, B., *ibid*, pp. 88~89. アフリカ文学研究会編『民族・歴史・文学』p. 192.
- 5) Amooti wa Irumba, Katebaliirwe, *ibid.*, p. 56. 『民族・歴史・文学』p. 87.
- 6) Margaretta wa Gacheru, 'Ngugi wa Thiong'o Still Bitter over His Detention', *The Weekly Review*, 1979. 1. 5 ; Sander, R. & Lindfors, B., *ibid*, pp. 91~97. アフリカ文学研究会編『民族・歴史・文学』pp. 120~128.
- 7) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Caitani Mũtharaba-inĩ*, 1980. Uga Īĩtha !
- 8) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Detained, A Writer's Prison Diary*, 1981. p. 164.
- 9) *Ibid.*, p. 165.
- 10) *Shetani Msalabani*, Kimetafsiriwa na Clement M. Kabugi, 1982.
- 11) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Decolonising the Mind*, 1986, p. 83. この小説の読まれ方について、次のように書かれている。

「この作品は家族の間で読まれたということがある。一家族が毎晩集まって、字の読める者が他の者に読んで聞かせるのである。労働者も、特に昼休み時間にグループごとに集まり、誰かが読んで皆に聞かせた。バスの中でも、タクシーの中でも、大衆酒場でも、この小説は読まれた。一つの興味深い点は『職業的な読み手』が、それも酒場の中で成長したことである。酒を飲みながらも熱心に聞き入っている客に向かって、声

に出してこの小説を読む人々がいたのである。読み手が興味深い下りまできて、自分のグラスが空になっていることがわかると、彼は本を置く。すると聞き手の中の誰かが店主に向かって『こいつにビールをもう一本やってくれ』と叫ぶのである。そこで読み手は再び小説を取り上げ、グラスが空になるまで読みつづける。彼が本を置くとまた同じことが毎夜くり返されて、小説の最後までこれがつづくのである」(p. 83; 訳書、pp. 208~209)。

なお、この小説は、はじめ *Devil at the Cross*, もしくは *Devil's Angels* の仮題で執筆を考えていたという。拘禁前の 1977 年 1 月 10 日付のジェームズ・カリー（「アフリカ人作家シリーズ」の編集者）宛の手紙で、グギは英語で書く作品の内容を知らせていた。ジェームズ・カリーの控えめな計算によると、1 冊のコピーを 6~7 人が読むとすると、民族語で書かれた戯曲と小説は、どちらも 10 万人以上の読み手がいたものと推定されるという。しかも、街頭の青空古本市場がある。また、声を出して誰かが読むのを聞いた人の数はここに含まれていない。以下を見よ。James Currey, *Africa Writes Back*, pp.137~138.

- 12) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Devil on the Cross*, 1982, pp. 97~98.
- 13) Ibid., pp. 99~100.
- 14) Ibid., p. 108.
- 15) Gĩcaandĩ (gĩcandĩ, gichandi, gichande)。吟遊詩人（たいていは老人）が、詩を朗唱したり、昔話を語ったりする際に披露する。乾燥させた種子、あるいは小石を入れた小型のヒョウタンが小さな貝殻で飾られた紐に結ばれている。これを振りかざすと、カラコロ、カラコロと音を奏でる。二人が質疑応答を繰り返して、市場など人の集まる場所で競うこともある。
- 16) Wangũi wa Goro. ケニア人女性。女性問題などの人権活動家。言語学が専門で、翻訳理論家。文学博士。主にロンドンで活動している。
- 17) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Matigari*, p. 87.
- 18) Ibid., p. 99.
- 19) Ibid., A Note on the English Edition, p. vii~viii.
- 20) Mbele, Joseph, *Language in African Literature : An Aside to Ngugi, Research in African Literature*, 23.1 (Spring 1992) pp. 145~152.
- 21) Cantalupo, Charles, ed., *The World of Ngũgĩ wa Thiong'o*, 1995, pp. 200~201.
- 22) 付録「現代アフリカ文学作家紹介」を参照せよ。
- 23) Wole Soyinka, *Death and King's Horseman*, 1975.

- 24) Okot p'Bitek, *Song of Lawino*, 1966. 北村美都穂訳『ラウィノの歌・オチョルの歌』新評論、2000。
- 25) Metafiction. フィクションについてのフィクション。小説の中でもう一つの小説を語らせたり、登場人物と作者が対話をしたり、作者が作品に登場したりする。小説というジャンル自体を批判したり、作り話であることを意図的に読者に気付かせたりする。虚構と現実の関係について問題を提示することが多い。ポスト・モダン小説にこの傾向が顕著に見られる。
- 26) 額縁小説（枠物語）。Frame Narrative。導入的な物語を「枠」として使い、より小さな物語群を埋め込んでいる。バラバラの短篇群を繋いだり、それらが物語られる状況を語るような小説技法。埋め込まれた物語は、「劇中劇」となる。ドラマの中で、別のドラマが展開することを「入れ子構造」（story within a story）と言う。
- 27) Cantalupo, *ibid.*, p. 190.
- 28) Benson, T. J. ed., *Kikuyu-English Dictionary*, Oxford, 1964 に、以下の記述がある（pp. 446~447）。*Tiga* : leave, stop ; leave alone, leave off. *Tigwo* : pass. Be left. *Itigari, ma-* : portion left over, remnant, remainder.
- 29) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. iv.
- 30) *Ibid.*, p. ix.
- 31) アン・ビールステッカー。エール大学アフリカ研究部門の代表的研究者。言語学者で、スワヒリ文学、ギクユ文学の研究者。
- 32) ムヤカ・ビン・ハジ・アルガッサニイ（1776~1840）。「スワヒリ詩をモスクから市場へ運び出した」と言われる。多くの世俗的な詩編を残した。
- 33) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 113 ほか。
- 34) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, translated from Gĩkũyũ by Wangui wa Goro, 1987, p. vii.
- 35) *Ibid.*, p. 71, 77, 125, 127.
- 36) Simon Gikandi, The Epistemology of Translation : Ngũgĩ, *Matigari* and the Politics of Language, *Research in African Literature*, 22, iv (1991) pp. 161~167.
- 37) Gecau, R.N., *Kikuyu folktales, their nature and value*, 1970. Thiiru the Medicine-man, pp. 114~119.
- 38) Biersteker, Anne, *Matigari ma Njirũũngĩ* : What Grows from Leftover Seeds of “Chat Trees” in Cantalupo, Charles, ed., *ibid.*, pp. 141~158.
- 39) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 173~174.

- 40) Ibid., p. 175.
- 41) Ibid., p. 156.
- 42) Ibid., p. 156.
- 43) Ibid., p. 156.
- 44) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Wizard of the Crow*, 2006. 扉。
- 45) 「オウム返し」 Parrotlogy. モイ大統領の 1984 年 9 月 13 日のスピーチに次の一節がある。

'I call on all ministers, assistant ministers, and every other person to sing like parrots. During Mzee Kenyatta's period I persistently sang the Kenyatta (tune) until people said : This fellow has nothing (to say) except to sing for Kenyatta. I say : I didn't have ideas of my own. Why was I to have my own ideas ? I was in Kenyatta's shoes and therefore, I had to sing whatever Kenyatta wanted. If I had sung another song, do you think Kenyatta would have left me alone ? Therefore you ought to sing the song I sing. If I put a full stop, you should also put a full stop. This is how this country will move forward. The day you become a big person, you will have the liberty to sing your own song and everybody will sing it.'

「私はすべての大臣、大臣補佐、その他すべての人々がオウムになって歌うことを要請します。ケニヤッタ大統領の時代、私は『ケニヤッタのことを歌うほか何も（言うべきことをもた）ない』と言われたものです。どうして私が自分の意見を持つ必要があったのでしょうか。私はケニヤッタになりきっており、ケニヤッタの望むことは何でも歌っていたのです。もし、私が別の歌をうたっておれば、ケニヤッタは私を見捨てたと皆さんは思われますか。そんなわけで、皆さんは私のうたう歌をうたわなければなりません。もし、私が全休止符をおけば、皆さんも全休止符をおくのです。そうしておれば、この国は発展するのです。皆さんが大人物になった時には、自分の歌をうたう自由を獲得し、誰もがその歌をうたってくれるでしょう」。(Ngũgĩ wa Thiong'o, *Decolonising the Mind*, p. 86. 訳書、p. 215.)

- 46) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 767~768 に、著者による「謝辞」(Ngatho-Acknowledgement) があり、その末尾に次の文章がある。

「ロンドンを拠点に、モイの独裁に反対し、民主主義を求める世界規模のキャンペーンを組織したケニア政治犯釈放運動委員会の仲間の方々のことに言及しておきたい。彼らは、フィリピンのマルコス、チリのピノチェト、南アのアパルトヘイト独裁政権に対してたたかう、ロンドンを

拠点にした他のグループと連帯した。ありがとう、アブディラティフ、ユスーフ・ハッサン、シラズ・ドゥラニ、ワンジル・キホロ、ワニリ・キホロ、ニシュ・ムゾニ、そしてワングイ・ワ・ゴロ。この物語の独裁のイメージは、私たちの闘いのこの時期に遡る」。

- 47) Idi Amin Dada Oumee (1925~2003)。1971 年、軍事クーデターによりウガンダ大統領に就任、1979 年失脚。インド人追放などの政策を実施した。「最も血にまみれた独裁者」と言われた。
- 48) Jean-Bedel Bokasa (1921~1996)。1966~1976 年まで中央アフリカ大統領、1977~1979 年まで同国皇帝。
- 49) Ferdinand Edralin Marcos (1917~1989)。フィリピン第 10 代大統領。20 年間に渡って権力の座にあったが、1986 年の人民革命で失脚。
- 50) Augusto Jose Ramon Pinochet Ugarte (1915~2006)。1974 年から 1990 年までチリ大統領。
- 51) アパルトヘイト独裁政権。南アのアパルトヘイト政権は、法律（体制）上は 1948 年に始まった。1991 年の法的撤廃に至るまで続いた。1994 年の全人種参加の総選挙によってマンデラ政権が誕生。
- 52) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 12.
- 53) *Ibid.*, pp. 3~10.
- 54) *Ibid.*, pp. 113~119.
- 55) *Ibid.*, pp. 170~188.
- 56) *Ibid.*, pp. 580~581. p. 746.
- 57) <http://www.powells.com/biblio/1-03542248x-0>
- 58) エピローグの注 43 を見よ。
- 59) Ngũgĩ wa Thiong'o interviewed on his new novel, *Wizard of the Crow*, *Socialist Worker online*, 4 November, 2006 (2025 号)
- 60) Ngũgĩ wa Thiongo, *ibid.*, p. 754.

第 5 部

- 1) 「ネーション」社：1959 年、インド系資本アガ・カーンが創業。現在、東・中央アフリカ最大のメディア・グループに成長している。
- 2) 「初期ジャーナリズム」。アフリカ文学研究者の B. リンドフォースが使った用語。同氏は、現在テキサス大学（オースチン）の名誉教授、特にアフリカ文学の書誌学的研究で知られる。「初期ジャーナリズム」のリストが彼の以下の著書に掲載されている。*The Blind Men and the Elephant and other essays in biographical criticism*, Africa World Press, 1999, pp. 87~91. 同じリストが、以下にも再録されている。*Early East African*

Writers and Publishers, Ngugi wa Thiong'o, Okot p'Bitek, David Maillu, Africa World Press, 2011, pp. 34~37.

筆者は、1979年8月から9月にかけて、ナイロビ大学図書館でこれらの資料を収集した。当時の文学科の科長は、ヘンリー・オウール・アニュンバ（Henry Owuor-Anyumba）教授で、クリス・ワンジャラ（Chris Wanjala）教授も同大学におられた。二人のご支援で、同大学ガンジー記念図書館などを利用し、関係資料を持ち出して複写することが出来た。当時は、グギ・ワ・ジオンゴの大学解雇が正式に決まった頃で、これらの資料のことをリムルを訪ねた折に話すと、本人は大いに困惑した表情を見せたが、自分にもコピーを欲しいと述べた。「初期ジャーナリズム」の内容の一部が、後日の反省材料になっていることは、本書第5部に収録した「リーズ時代のグギ・ワ・ジオンゴ」で紹介している。

- 3) 「グギの関心事は、アフリカの関心事」(Ngugi's Concern is Africa's Concern)。これは、クリス・ワンジャラの用語。「グギはアフリカの声」(Ngugi Speaks for the Continent)。これは、1962年、カンパラで戯曲「黒人の隠者」公演後に、マケレレ大学教授トレバー・ウィトック (Trevor Whittock) 教授が大学新聞「マケレレアン」(*The Makererean*) への寄稿文で使った用語。
- 4) Arusha Declaration. 1967年2月、タンザニアのニエレレ大統領が発表した社会主義化の宣言。農業開発を基盤に、自律的な経済発展を期した。宣言と同時に、主要外国企業が国有化された。
- 5) East African Community. 1967年6月、カンパラで東アフリカ三国の元首の調印によって成立した三国協力条約で発足。東アフリカ開発銀行などを設置して、共同市場など三国間の平等の便宜を謳った。その後の政治・経済情勢の変化から1977年6月に解体した。
- 6) African Personality. ガーナの初代大統領ンクルマ (Kwame Nkrumah, 1909~1972) の著書の一つに、*The African Personality*, 1963 がある。
- 7) Tigritude. ナイジェリアの作家ウォーレ・ショインカの造語。ネグリチュードへの批判に用いられた。
- 8) 「ネグリチュード」Négritude. 「エピローグ」の注84を見よ。
- 9) Mphahlele, Ezekiel, What Price 'Négritude'? in *The African Image*, 1962, pp. 25~40. 橋本福夫訳「ネグリチュードの意義を問う」『民族の独立』(現代人の思想17)、平凡社、1968。
- 10) Jabavu, Noni (1919~2008)。南アフリカのイースタン・ケープ生まれの女性作家。コーサ民族出身。一族には、ジャーナリスト、教員が多かった。10代でロンドンへ渡り、作家活動やテレビ関係の仕事に従事した。代表作

は『皮膚の色に引き込まれて』(*Drawn in Colour*, 1960)、『赤褐色の人々』(*The Ochre People*, 1963) など。

- 11) Conton, William (1925~2003)。ガンビアのバサースト (現バンジュール) 生まれの作家。ガンビア、ギニア、シエラレオネで小学校生活の後、英国へ渡り、再びシエラレオネへ戻り中学、大学で学んだ。中学校長などの後、政府に勤めた。代表作の『アフリカ人』(*The African*, 1960) は、アラビア語、ロシア語、ハンガリー語などに翻訳された。短篇のほか、歴史の教科書の執筆も多い。
- 12) 独立当初、副大統領オギンガ・オディンガが、社会主義圏、共産国への留学生の派遣に特に熱心であったことを指していよう。
- 13) Damas, Léon (1912~1978)。フランス領ギニア生まれ。フランス語で書く詩人。マルチニックで学び、エメ・セゼールと知り合った。のち、パリでサンゴールらとネグリチュード運動の嚆矢となる『黒人学生』(*L'Étudiant Noir*) 誌を創刊した。
- 14) アフリカ社会主義。ブラック・アフリカでの、独立と国家建設のための開発を目的とした社会主義の総称。さまざまなタイプがあるが、伝統アフリカに独自の社会主義が存在したとの考え方が根底にある。共同体的、家族的、人道主義的な特徴を強調することが多い。タンザニアのニエレレ大統領による「ウジャマア」(Ujamaa) 社会主義は代表的な例で、アフリカに特徴的な大家族の精神に支えられた、農業共同体を基礎に制度化したものであった。
- 15) 「インターロード」の注 93 を見よ。
- 16) 「黒人の隠者」(*Black Hermit*, 1962) は、ジェームズ・グギ、「ライオンと宝石」(*The Lion and Jewel*, 1963) は、ウォーレ・ショインカの作品である。
- 17) Njau, Rebecca, (Rebeka) (1932~)。ケニアの作家。マケレレ大学で教育学を学ぶ。詩劇『傷跡』(*The Scar*, 1965) は、1960 年に、ウガンダ演劇祭で舞台に上げられた。ケニア初の女性戯曲作家とされる。代表作に『池のさざ波』(*Ripples in the Pool*, 1975)。夫のエリモ・ンジャウ (Elimo Njau) と、ナイロビで、文化芸術活動のギャラリー「パア・ヤ・パア」(Paa ya Paa) を開いた。エリモ・ンジャウについては、第 1 部の注 72 を見よ。
- 18) Clark, John Pepper (1935~)。現在は、Bekederemo を名乗る。ナイジェリアの詩人、戯曲作家。1960 年、イバダン大学卒業。同大学で教えたほか、エール大学などでも教えた。代表作に『詩集』(*Poems*, 1961)、戯曲に『山羊の歌』(*Song of a Goat*, 1961) など。

- 19) Baldwin, James (1924~1987)。アメリカの黒人作家。人種や性の問題を扱った作品が多い。代表作に、自伝的な『山にのぼりて告げよ』(*Go Tell it on the Mountain*, 1953)、『アメリカの息子のノート』(*Notes of a Native Son*, 1955)、『次は火だ』(*The Fire Next Time*, 1963) など。
- 20) 第1部の注84を見よ。
- 21) Fanon, Frantz (1925~1961)。フランス領マルチニク島生まれ。フランスで精神医学を学び、『黒い皮膚・白い仮面』(*Peau noire, masque blancs*, 1952) を発表。1956年からアルジェリア革命に参加し、独立直前に病死した。この間に『地に呪われたる者』(*Les damnés de la terre*, 1961) を発表し、植民地支配からの解放を目的にした暴力革命を評価した。これらの著作は、第三世界の解放運動に大きな影響を与えた。
- 22) 第2部 pp. 87~89 を見よ。
- 23) Hillary Ng'weno (1938~)。ナイロビ生まれのルヒヤ人。ケニア人として初めて、ハーバード大学に学び、核物理学を専攻。帰国後、ジャーナリストとして活躍した。「デイリー・ネーション」紙初のアフリカ人編集長。1965年退社。1975年、『ウィークリー・レビュー』誌を創刊、1977年、「ナイロビ・タイムズ」紙を創刊。「ナイロビ・タイムズ」紙は1983年に、『ウィークリー・レビュー』誌は1999年にKANUに買収された。その後、テレビ関係に進出した。小説『プレトリアから来た男』(*The Men from Pretoria*, 1975) などがある。
- 24) Ngũgĩ wa Thiong'o, Dectator's Last Laugh, *The New York Times*, 2013年3月14日号。2013年3月のケニア大統領選の結果に対するコメントが主な内容である。なお、リーズ大学留学のための奨学金獲得には相当に苦労したらしい。1964年4月17日付、グギからハイネマン教育図書出版社のサンブルック宛の手紙に、次のような文章がある。「リーズへ留学出来ないかもしれない。思っていた以上に、奨学金を貰うのが難しいです。今書きたいと思っている小説には、新たな国、新たな環境が必要と出てきたので、とても悔しいです」。(Currey, James, *Africa Writes Back*, p. 116 参照)。
- 25) ウォーレ・ショインカ (Wole Soyinka) は、1954年から1957年まで、学部学生として在籍した。
- 26) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *Ngũgĩ wa Thiong'o Speaks, Interviews with the Kenyan Writer*, 2006, p. 17. はじめ、ナイジェリアのジャーナリスト、脚本家アミヌ・アブドゥラーヒ (Aminu Abdullahi) により、1964年10月に実施されたもの。
- 27) Sicherman, Carol, *Ngugi wa Thiong'o : The Making of a Rebel, A*

- Source Book in Kenyan Literature and Resistance*, 1990, p. 6.この情報は、Nazareth, P., 'Is *A Grain of Wheat* a Socialist Novel?' p. 243. (Killam, G.D., *Critical Perspectives on Ngũgĩ wa Thiong'o*, 1984, pp. 243~264) から。
- 28) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *ibid.*, p. 16. 初出は、注 5 に同じ。V. S. ナイポール (Vadiadhar Sirajprasad Naipaul, 1932~) は、トリニダード生まれのインド系作家。オックスフォード大学出身。2001 年度ノーベル文学賞受賞。トリニダードのインド人社会を描く作品が多い。代表作に『ミゲル・ストリート』(*Miguel Street*, 1959)、『インドー傷ついた文明』(*India : A Wounded Civilization*, 1977) など。
- 29) *Ibid.*, p. 28. 初出は、Marcuson, Alan, *et al.*, James Ngugi : Interviewed by Fellow Students at Leeds University, Alan Marcuson, Mike Gonzales & Dave Williams, *Cultural Events in Africa*, 31 (1967) i ~ v supp.
- 30) Sander, R. & Lindfors, B. ed., *ibid.*, p. 29. 初出は、注 8 に同じ。
- 31) *Ibid.*, p. 29. 初出は、注 8 に同じ。
- 32) Amooti wa Irumba, Katebaliirwe, Interview given by Ngũgĩ wa Thiong'o, mimeo, pp. 21~22. 1979 年 1 月 6 日、および同 11 日に、リムルのグギの自宅で実施されたもの。著者の博士論文の添付資料の一部である。アフリカ文学研究会編『民族・歴史・文学—アフリカの作家グギ・ワ・ジオンゴとの対話』三一書房、pp. 6~91 に邦訳。ここの引用は、p. 36.
- 33) Arnold Kettle (1916~1986)。ケンブリッジ大学卒。名著の評判の高い『イギリス小説入門』(*An Introduction to the English Novel*, 1967) 他多数がある。マルクス主義文芸批評家、活動家として著名だった。1948 年以降、リーズ大学で教え、ダルエスサラーム大学で教えたこともある。
- 34) Sander, R. & Lindfors, B. ed., *ibid.*, p. 29. 初出も上に同じ。
- 35) *Ibid.*, pp. 29~30. 初出も上に同じ。
- 36) Malcolm X (1925~1965)。アメリカの黒人公民権運動活動家。キング牧師らの非暴力路線とは対照的な政策を取った。ネブラスカ州出身で、父親はキリスト教牧師だったが、本人は 1948 年にイスラム教へ改宗、1952 年以後「マルコム X」を名乗った。後に、メッカへ巡礼し、帰国後アフリカ系・アメリカ人統一機構 (Organization of African-American Unity) を結成した。1965 年 2 月に暗殺。アレックス・ヘイリーが、生前のインタビューに基づいて書いた『マルコム X 自伝』(*Alex Haley, The Autobiography of Malcom X*, 1965) がある。
- 37) Stokely Carmichael (1941~1998)。アメリカの黒人差別撤廃闘争のリー

- ダー。トリニダード生まれ。11歳でアメリカに移住。1966年、学生非暴力調整委員会の第三代議長。1966年6月、ブラック・パワー(Black Power)を提唱。
- 38) Ernesto Rafael Guevara de la Serna (1928~1967)。アルゼンチン生まれ。キューバのゲリラ指導者。ブエノスアイレス大学で医学を学び、南米諸国を広く旅行し、見聞を広めた。1959年、カストロとともにキューバ革命を成功させた。晩年、大陸革命の拠点としたボリビアでのゲリラ戦で捕まり、政府軍により銃殺された。
- 39) Martin Luther King, Jr. (1929~1968)。アメリカの黒人公民権運動のリーダー。1964年、ノーベル平和賞受賞。1968年、暗殺された。1963年8月のワシントン大行進の際の「私には夢がある」(I Have a Dream)の演説は20世紀最高のスピーチと評価が高い。
- 40) Amooti wa Irumba, Katebaliirwe, *ibid.*, p. 24. アフリカ文学研究会編、*ibid.*, p. 40. Woolf, C. & Bagguley, J., ed., *Authors Take Sides on Vietnam*, 1967. P. 41.
- 41) これらについては、本書第5部の「初期ジャーナリズム」で考察している。
- 42) Woolf, C. & Bagguley, J., *ibid.*, p. 41. ちなみに、ウォーレ・ショインカの次の一文(全文)と比べると、(少なくとも、この時期の)両者の思想的隔たりが鮮明である。「(ベトナム戦争の)解決は、世界の世論ではなく、ひとえにアメリカ人の手に握られていることは明らかである。ムハンマド・アリ(元の名キャシアス・クレイ)が先導している」(同書 p. 46)。同書には、James Baldwin, Edmund Blunden, Graham Green, Doris Lessing, Arthur Miller, Naomi Mitchison, Iris Murdoch, Joseph Needham, Harold Pinter, Philip Roth, Bertrand Russell, Arthur M. Schlesinger, Irwin Shaw, Edgar Snow, Susan Sontag, John Updike, Colin Wilson など、合計 258 人の作家・知識人が寄稿している。
- 43) Amooti wa Irumba, Katebaliirwe *ibid.*, p. 22. アフリカ文学研究会編、*ibid.*, p. 36.
- 44) *Ibid.*, p. 22. アフリカ文学研究会編、*ibid.*, p. 36.
- 45) 鈴木道彦・浦野衣子訳『地に呪われたる者』(フランツ・ファノン著作集 3、みすず書房)、1969, p. 85. 原書は、Fanon, F., *Les Damnés de la Terre*, 1965.
- 46) Amooti wa Irumba, Katebaliirwe, *ibid.*, p. 22. アフリカ文学研究会編、*ibid.*, p. 37.
- 47) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Decolonising the Mind—The Politics of Language*

- in African Literature*, 1986, p. 63. 増補新版『精神の非植民地化ーアフリカ文学における言語の政治学』第三書館、2010、p. 172.
- 48) Amooti wa Irumba, Katebaliirwe, *ibid.*, pp. 22~23. アフリカ文学研究会編、*ibid.*, p. 37.
- 49) *Ibid.*, p. 23. アフリカ文学研究会編、*ibid.*, p. 38.
- 50) *Ibid.*, p. 23. アフリカ文学研究会編、*ibid.*, p. 38.
- 51) Tressell, Robert, *The Ragged-Trousered Philanthropists*, 1914. 本稿で利用しているアモーティ・ワ・イルンバの *mimeo* (博士論文資料) では削除されているが、アモーティから C. シッシャーマンへの私信によれば、インタビュー時にはこの本も言及されたとのことである。Sicherman, C., *ibid.*, p. 25 を参照のこと。
- 52) Amooti wa Irumba, Katebaliirwe, *ibid.*, p. 23. アフリカ文学研究会編、*ibid.*, p. 38.
- 53) Ngũgĩ wa Thiong'o, 'A Kind of Homecoming', in *Homecoming*, pp. 81~95. ここの引用は、p. 81. はじめ、1968 年 9 月にマケレレ大学で講演したもの。
- 54) グギ・ワ・ジオンゴからの私的情報。
- 55) Edward Kamau Brathwaite (1930~)。バルバドス生まれ。カリブ海作家の重鎮の一人。ニューヨーク大学比較文学教授などを歴任。CAM (Caribbean Artists Movement) の創設メンバー。代表作に『ジャマイカの詩』(*Jamaica Poetry*, 1979)、『第三世界の詩』(*Third World Poems*, 1983)、『中間航路』(*Middle Passage*, 1992) など。なお、カマウ (Kamau) は、典型的なギクユの男性名であるが、これは、ブレイスウェイトがリムルを訪れた時、グギの祖母が彼に与えた名前であるという。
- 56) Horace Orland Patterson (1940~)。ジャマイカ生まれ。キングストン大学、西インド大学等で学び、現在ハーバード大学教授。代表作に『西洋文化形成期の自由』(*Freedom in the Making of Western Culture*, 1991)、『奴隷制の社会学』(*The Sociology of Slavery*, 1967) など。
- 57) Patterson, O., *An Absence of Ruins*, 1967. Ngũgĩ wa Thiong'o, *Homecoming*, p. 90 に引用がある。
- 58) 「皮膚の色による境界線」(Color Line) を越えて、他の人種、特に白人になりすますこと。この種のテーマが、特に 1920 年代のアメリカ (黒人) 文学に流行した。これらは、一括して「パーシング小説」(*Passing Novels*) と呼ばれた。
- 59) Nathaniel Nakasa (1937~1965)。南アのジャーナリスト、作家。『ドラム』(*Drum*) 誌などに執筆した。ニューヨークの摩天楼から飛び降りた。

- 60) Sheakespeare, W., *Tempest*, Act 1, Scene 2. Ngũgĩ wa Thiong'o, 'Towards a National Culture', in *Homecoming*, p. 8. (アフリカ文学研究会訳、ibid., pp. 28~29)。
- 61) Ngũgĩ wa Thiong'o, ibid., pp. 8~9. (アフリカ文学研究会訳、ibid., pp. 29~30)。
- 62) Kenyatta, J., *Facing Mount Kenya*, 1938, p. 317. (野間寛二郎訳『ケニア山のふもと』理論社、1962、p. 256)。
- 63) Ngũgĩ wa Thiong'o, ibid., Author's Note, x vii. ここには『部族』(Tribe)は、植民地体制の特殊な産物である。・・・アフリカで部族主義と言われるのは、実際には、主人のテーブルからこぼれたものを争って奪おうとする『持てる者』の間の内乱のことである」との記述がある。Sander, R. & Lindfors, B. ed., ibid., p. 361 を見よ。
- 64) Cabral, Amilcar, 'Determined to Resist', *Tricontinental*, No. 8, 1968. *Homecoming*, p. 19 より再引用。カブラルは、ポルトガル領ギニア(現ギニア・ビサウ)とカポベルデの独立運動の実践的指導者(1924~1973)。すぐれた理論家でもあったが、暗殺された。
- 65) H. B. ストウ(1811~1896)の『アンクル・トムの小屋』(*Uncle Tom's Cabin*, 1851)に登場する「トム爺や」は、従順で卑屈な黒人像の典型とされる。「アンクル・トム」とはそうした黒人の代名詞となった。ちなみに、リチャード・ライト(Richard Wright, 1908~1960)の代表作『アメリカの息子』(*Native Son*, 1940)の主人公「ビッグー・トマス」(Bigger Thomas)は、抵抗し、たたかう黒人像の代名詞となった(大きくなったトムの意)。ライトには、他に短篇集『アンクル・トムの子供たち』(*Uncle Tom's Children*, 1938)がある。
- 66) Ngũgĩ wa Thiong'o, 'The Writer and His Past', ibid., pp. 41~42 から再引用(要約)。
- 67) Caribbean Voices. ここでは、1943年から1958年頃までのBBC World Serviceの番組を指す。1939年頃から、ジャマイカ出身の台本作家ユナ・マーソン(Una Marson)が、在英の西インド出身の兵士と故郷を繋ぐ番組(Calling West Indies)を制作していた。1946年から、ヘンリー・スウォンジー(Henry Swansy)が週1回の放送を始め、カリブの島々とロンドンを近づけた。サミュエル・セルボン(Samuel Selvon, 1923~1994, トリニダード出身)、カマウ・ブレイスウェイト、V. S. ナイポール、デレック・ウォルコットなどに影響し、「カリブ・ルネサンス」を誘発した。
- 68) Derek Walcott (1930~)。西インド諸島、セントルシア生まれ。父はバルバドス生まれのイギリス人、母はアフリカ系。1992年度ノーベル文学賞

- 受賞。第一詩集『25 篇の詩』(*25 Poems*, 1948)、『詩全集』(*Collected Poems 1948~1984*, 1986) など。「完成した天性の詩人」「英語の魔力を体得した詩人」との評価がある。
- 69) Caribbean Renaissance. 1950 年代、 ロンドンへ移住したカリブ海出身の作家・詩人たちの活躍期、文芸隆盛期を指す。G. ラミングほか、ここで言及した人物のほかに、ガイアナ出身のマーティン・カーター (Martin Carter, 1927~1999)、サミュエル・セルボンらを含む。
- 70) John La Rose (1927~2006)。トリニダード生まれ。詩人、文化活動家。1961 年ロンドンへ移住。1966 年、最初のカリブ海関係出版社「ニュー・ビーコン」(*New Beacon*) を創立。同年、K. ブレイスウェイト、A. サルキーらと CAM を結成、「ベトナム連帯運動」(*Vietnam Solidarity Campaign*) の結成にも参加した。1982 年、「ケニア政治犯釈放運動委員会」(*Committee for the Release of Political Prisoners in Kenya*) の代表に就任。最大の業績の一つに、「ラディカル・ブラックと第三世界のブックフェア」(*Book Fair of Radical Black and Third World Books*, 1982~1995) を組織した。1991 年、「ジョージ・パドモア学院」(*George Padmore Institute*) を創設。なお、2013 年 10 月 2 日、ロンドン大学評議員会館で、*The Third John La Rose Memorial Lecture* が開催され、グギが招かれて「形而上の帝国に抗してー戦場としての言語」(*Resisting Metaphysical Empire : Language as a War Zone*) と題して特別講演した。筆者はこれに参加した。ロンドン大学の *Institute of English Studies* 主催の *AfroEuropes, Black Cultures and Identities in Europe* (1~4 October, 2013) とも連携したもの。10 月 4 日には、大英図書館で、リントン・クウェシ・ジョンソン (Linton Kwesi Johnson) とカ ril ル・フィリップス (Caryl Phillips) の対談も行われた。ジョンソン (1952~) はジャマイカ生まれの詩人。LKJ の愛称で親しまれ、クレオールを使ったレゲエ調の朗詠で知られる。フィリップス (1958~) は、カリブ海のリーワード諸島の一つに生まれたが、生後まもなく渡英。小説・戯曲多数。ノンフィクション『ヨーロッパ部族』(*The European Tribe*, 1987) はマーチン・ルーサー・キング記念賞を受賞。
- 71) Andrew Salkey (1928~1995)。パナマ生まれ。ジャマイカで育つ。小説家・詩人。ロンドン大学で学び、のち英語やラテン語の教師になった。BBC に勤務し、インタビュアーとして活躍。小説に『暴力の真価』(*A Quality of Violence*, 1959)、長詩『ジャマイカ』(*Jamaica*, 1973) などがある。
- 72) Walmsley, Anne. 1992. *The Caribbean Artists Movement 1966~1972*,

- A Literary & Cultural History*, p. 48.
- 73) Walmsley, Anne. 1992. *ibid.*, p. 51.
- 74) Ngũgĩ wa Thiong'o, 'Kenya : Two Rifts', in *Homecoming*, pp. 22~25. この引用は p. 22.
- 75) 「トリレンマ」(Trilemma)。ジョン・ガンサー (John Gunther) の造語。(土屋哲訳『アフリカの内幕』みすず書房、1962, p. 233)。原書は、*Inside Africa*, 1956.
- 76) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 23.
- 77) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 24.
- 78) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 4~5. (アフリカ文学研究会訳 *ibid.*, pp. 22~23)。
- 79) Ngũgĩ wa Thiong'o, 'Towards a National Culture', in *Homecoming*, p. 11. (アフリカ文学研究会訳、*ibid.*, pp. 33~34) .
- 80) Fanon, F., *Les Damnés de la Terre*, 1966. (鈴木道彦・浦野衣子訳、*ibid.*, p. 119)。
- 81) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 12. (アフリカ文学研究会訳、*ibid.*, p. 37)。
- 82) Nyerere, J., *Freedom and Socialism*, 1968, p.235. Ngũgĩ wa Thiong'o, *Homecoming*, p. 13 にも引用がある。(アフリカ文学研究会訳、*ibid.*, p. 37)。
- 83) オコンクオ (Okonkwo) は、ナイジェリアの作家チヌア・アチェベ (Chinua Achebe, 1930~2013) の『部族崩壊』(*Things Fall Apart*, 1958) の主人公。エゼウル (Ezeulu) は、同じく『神の矢』(*Arrow of God*, 1964) の主人公。
- 84) ラウィノ (Lawino) は、ウガンダの作家・詩人オコト・ビテック (Okot p'Bitek) の長詩『ラウィノの歌』(*Song of Lawino*, 1966) の女性主人公、オ Chol (Ocol) の妻。この作品は、最初は 1956 年に、アチョリ語で発表された。
- 85) Achebe, Chinua, 'The Novelist as Teacher', in *Morning Yet on Creation Day*, 1976, pp. 55~60. ここの引用は、pp. 59~60.
- 86) *Ibid.*, pp. 58~59.
- 87) *Ibid.*, pp. 55~60.
- 88) *Ibid.*, p.58.
- 89) Ngũgĩ wa Thiong'o, 'Chinua Achebe: *A Man of the People*', in *Homecoming*, pp. 53~54.
- 90) 二つの引用は、*ibid.*, pp. 63~65 を要約。
- 91) T. M. Aluko (1918~2010)。代表作に、『男一人に妻一人』(*One Man One*

- Wife, 1959)、『男一人に斧一丁』 (*One Man One Matchet*, 1964) など。
- 92) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 54.
 - 93) Gordimer, N., *The Black Interpreters, Notes on African Writing*, 1972. (土屋哲訳『現代アフリカの文学』岩波新書、1975)。
 - 94) *Ibid.*, p. 33. 土屋哲訳、*ibid.*, p. 77.
 - 95) *Ibid.*, p. 44. 土屋哲訳、*ibid.*, pp. 109~111.
 - 96) Ngũgĩ wa Thiong'o, 'The Writer in a Changing Society', *ibid.*, p. 47.
 - 97) Ngugi, James, *A Grain of Wheat*, 1967. 本文前扉。
 - 98) Ngũgĩ wa Thiong'o, 'The Writer in a Changing Society', *Homecoming*, p. 49.
 - 99) 付録「現代アフリカ文学作家紹介」を見よ。
 - 100) Okello Oculi (1940~)。ウガンダの作家。マケレレ大学で政治学を学び、1967年卒業。アメリカ、イギリスに留学し、ウィスコンシン大学から PhD を取得。ナイジェリアの大学で教えた。現在もナイジェリアに住む。代表作に『孤児』 (*Orphan*, 1968) など。
 - 101) Wästberg, Per, *The Writer in Modern Africa, African-Scandinavian Writers' Conference, Stockholm 1967*, 1968, p. 25.
 - 102) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 50.
 - 103) Achebe, Chinua, 'The Writer and His Community', in *Hopes and Impediments, Selected Essays 1965~87*, 1988, pp. 32~41. この引用は、p. 36.
 - 104) *Ibid.*, p. 37.
 - 105) ソンダース・レディング (Saunders Redding, 1906~1988)。アメリカの黒人文芸批評家・歴史家。アメリカ黒人文学を「目的もしくは必要性の文学」 (literature either of purpose or necessity) と規定した。1962年、マケレレ大学で開催された「英語で書くアフリカ人作家会議」に、ラングストン・ヒューズとともに参加した。
 - 106) Ngũgĩ wa Thiong'o, 'Wole Soyinka, T. M. Aluko and the Satiric Voice', *Homecoming*, pp. 55~66. この引用は、pp. 65~66.
 - 107) Sander, R. & Lindfors, B. ed., *ibid.*, p. 23. 初出は、A Discussion between James Ngugi, Author of *The River Between* (Heinemann) Who Is Studying at Leeds University, John Nagenda, a Writer from Uganda Who Has Just Spent Some Time in the United States of America and is Now on His Way Back to Uganda, and Robert Sermaga from Uganda Who Is Studying at Trinity College, Dublin, *Cultural Events in Africa*, 15 (1966) i ~ iii supp.

- 108) Sander, R. & Lindfors, B. ed., *ibid.*, p. 31. 初出は、James Ngugi Interviewed by Fellow Students at Leeds University, *Cultural Events in Africa*, 31 (1967) i ~ v supp. セク・トゥーレ (Séku Touré) の言説は、Fanon, F., *Les Damnés de la Terre*, 1966 に引用されている。訳文は、鈴木道彦・浦野衣子訳、*ibid.*, p. 117 から。
- 109) Sander, R. & Lindfors, B. ed., *ibid.*, p. 24. 初出は、注 84 に同じ。
- 110) Obiajunwa Wali, 'The Dead End of African Literature?', *Transition*, vol.3. no. 10, Sep. 1963, pp. 13~15.
- 111) たとえば、同誌 vol.3. no. 11, Nov. 1963 以後、Barry Reckord, Ezekiel Mphahlele, Gerald Moore, Wole Soyinka, Dennis Williams (以上、vol.3, no.11, 1963.11) , John Clare, Obi Wali, Paul Edwards (以上、vol.3, no.12, 1964.1~2) , Jan Knappert (vol.3, no. 13, 1964.3~4) などが反論、もしくは自説を寄稿している。このうち、Knappert は、スワヒリ文学研究者の立場から、オビ・ワリの見解を自明のこととして支持している。
- 112) Irele, Abiola, 'The Teaching of Traditional African Literature', in *Proceedings of the Conference on the Study of Ghanaian Languages*, ed. by J. A. Birnie and D. G. Ansare, 1969. Ngũgĩ wa Thiong'o, *Homecoming*, p. 16 から再引用。
- 113) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *ibid.*, pp. 32~33. 初出は注 85 に同じ。
- 114) この時の辞職の理由については、本書第 2 部で触れた。
- 115) ナイジェリアの文芸批評家。詩人。口承文芸にも詳しい。ガーナ大学、イフェ大学などで教え、晩年はウヨ大学 (ナイジェリア) 教授だった。*Historic Essays on African Literature, Language and Culture*, 2005 などがある。
- 116) Ime Ikiddeh, Foreword, in Ngugi wa Thiong'o, *Homecoming*, p. x i .
- 117) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *Ngũgĩ wa Thiong'o Speaks, Interviews with the Kenyan Writer*, 2006, p. 28.
- 118) *Ibid.*, pp. 25~26.
- 119) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Homecoming*, p. 33.
- 120) *Ibid.*, p. 32.
- 121) *Ibid.*, p. 33.
- 122) *Ibid.*, p. 34.
- 123) ここの三つの引用は、*ibid.*, pp. 33~34.
- 124) *Ibid.*, p. 35.
- 125) *Ibid.*, p. 36.

- 126) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *ibid.*, p. 26.
- 127) ナイロビ大学 (University of Nairobi) の前身は、1956 年創立の王立 テクニカル・カレッジ (Royal Technical College) である。初年度の学生数は 215 名。独立直前の 1961 年に、王立ナイロビ大学 (Royal College Nairobi) となり、ロンドン大学と提携して、ロンドン大学の学位を出し始めた。しかし、1964 年 5 月、University College Nairobi と名称を改め、東アフリカ大学 (University of East Africa) の一学寮となるとロンドン大学との提携は終わった。1970 年、東アフリカ大学が解消し、University of Nairobi となった。現在学生数 62,000 (学部 50,000、大学院 12,000) のマンモス総合大学になっている。
- 128) *Homecoming*, pp. 145~150 に収録されている。
- 129) W. H. Whiteley. スワヒリ語研究で世界的に知られる。 *Swahili, The Rise of a National Language*, 1969 ; *Languages in Kenya* (ed.) 1974 などがある。
- 130) *Homecoming*, pp. 145~146.
- 131) *Ibid.*, p. 146.
- 132) Nairobi Literature Debate. Ngũgĩ wa Thiong'o, *Decolonising the Mind*, 1986, p. 96. 宮本正興・楠瀬佳子訳、増補新版『精神の非植民地化—アフリカ文学における言語の政治学』第三書館、1987, p. 236.
- 133) *Homecoming*, p. 146.
- 134) *Ibid.*, p. 150.
- 135) *Ibid.*, pp. 147~148. なお、口承文学については、Oral Literature から造られた新語 (カバン語) orature の使用が、ほぼ定着している。これは、ウガンダの言語学者・文芸批評家ピオ・ヅィリム (Pio Zirimu) の造語である。
- 136) たとえば、以下を見よ。Taban Lo Liyong, East Africa, O East Africa, I Lament thy Literary Barrenness, *Transition*, vol. 4 number 19. 2, 1965.
- 137) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *Ngũgĩ wa Thiong'o Speaks, Interviews with the Kenyan Writer*, 2006, p. 234.
- 138) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Decolonising the Mind—The Politics of Language in African Literature*, 1986, p. 72. 訳書、p. 188.
- 139) Ngũgĩ wa Thiong'o, Towards a National Culture, in *Homecoming*, 1972, pp. 3~21.
- 140) *Ibid.*, pp. 16~17.
- 141) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *ibid.*, p. 46.

- 142) Ngũgĩ wa Thiong'o, *Decolonising the Mind*, p. 99. 訳書、pp. 242~243.
- 143) Sander, R. & Lindfors, B., *ibid.*, p. 315.
- 144) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 8. 訳書、pp. 57~58.
- 145) *Ibid.*, p. 5. 訳書、p. 50.
- 146) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *ibid.*, p. 232.
- 147) *Ibid.*, p. 118.
- 148) Sander, R. & Lindfors, B., *ibid.*, pp. 134~135.
- 149) 宮本正興「アフリカ文学における使用言語の問題をめぐって」読売新聞 1986 年 9 月 19 日（夕刊）。グギの見解に対するアチェベの反論・批判は多くある。たとえば以下を見よ。Achebe, Chinua, *Politics and Politicians of Languages in African Literature*, in Achebe, *The Education of a British-Protected Child*, 2009, pp. 96~106.
- 150) 宮本正興「アフリカ文学と言語－アイデンティティを模索する」『国際協力』（特集・多民族国家と国民意識）1986 年 10 月号、国際協力事業団。
- 151) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *ibid.*, p. 298.
- 152) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, p. 77. 訳書、pp. 197~198.
- 153) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *ibid.*, p. 235.
- 154) Colonial alienation. Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 16~17, 28. 訳書、pp. 74~75, 97. 書き言葉の世界と、日常の家庭と共同体、身の周りの環境世界の言語生活コードの乖離状況。日常の話し言葉（民族語）と学校教育の言語（英語など、宗主国の言語。概念化作用の言語）との遊離した状況。
- 155) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *ibid.*, p. 120.
- 156) Ngũgĩ wa Thiong'o, *ibid.*, pp. 84~85. 訳書、pp. 211~212.
- 157) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *ibid.*, p. 120.
- 158) *Ibid.*, p. 120.
- 159) *Ibid.*, p. 327.
- 160) アイヌ民族に伝わる口承叙事詩の総称。「ユーカラ」とは、アイヌ語で「叙事詩」の意。
- 161) Johann Gottfried von Herder (1744~1803)。ドイツの哲学者、文学者、詩人、神学者。カント哲学から出発し、ゲーテと交わるなど、ドイツ古典主義、ロマン主義に大きな影響を残した。
- 162) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *ibid.*, pp. 307~308.
- 163) *Ibid.*, p. 272.
- 164) *Ibid.*, p. 326.

- 165) Ibid., p. 365.
- 166) Ibid., pp. 23~24 ; Ngũgĩ wa Thiong'o, *Decolonising the Mind*, pp. 106~108 をも参照せよ。訳書、pp. 256~260.
- 167) New World Order. 冷戦体制後の国際秩序のこと。将来的に、世界の統一による地球レベルの全体主義体制を指すこともある。20 世紀後半、社会主義計画経済の破綻により、勝利を収めた資本主義自由経済、特にその中核であったアメリカを「新しい帝国」として、世界経済の一極化、単一化をはかり、IMF、世界銀行などを通じて進められる動きを指す「グローバリゼーション」と並行している。アメリカだけでなく、EU 諸国、日本などもこの勢力である。とうぜん、新興国を中心に、反グローバリゼーションの動きがある。
- 168) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *ibid.*, p. 383.
- 169) Sander, R. & Lindfors, B., ed., *ibid.*, p. 271.

エピソード

- 1) Ngũgĩ wa Thiong'o, Achebe's passing : Beginning of the end of an epoch in African Writing, *Vanguard News*, March 30, 2013.
- 2) Chimamanda Ngozi Adichie, 'Introduction' (in Chinua Achebe, *The African Trilogy*, Everyman's Library, 2010 p. viii~ix)。Chimamanda Ngozi Adichie, web.Mar. 22, 2013 をも参照。
- 3) Currey, James, *Africa Writes Back, The African Writers Series & The Launch of African Literature*, James Currey, Wits University Press, Ohio University Press, HEBN, EAEP, Weaver Press, Mkuki na Nyota, 2008. p. 2.
- 4) Chimamanda Ngozi Adichie, *ibid.*, p. vii.
- 5) Currey, James, *ibid.*, p. 29.
- 6) *Ibid.*, p. 29.
- 7) *Ibid.*, p. 29.
- 8) *Ibid.*, p. 29.
- 9) *Ibid.*, p. 29.
- 10) *Ibid.*, p. 29.
- 11) *Ibid.*, p. 30.
- 12) *Ibid.*, p. 30.
- 13) *Ibid.*, p. 30.
- 14) *Ibid.*, p. 28.
- 15) Onitsha Market Literature. 第二次大戦後、ニジェール川下流東岸のオニ

チャに市場町が発達。都市化した商業的な環境から、あらゆる社会層の人びとが集まり、安価なメディアの一つとして大衆的読み物の小冊子が大量に出回った。

- 16) Dylan Thomas. (1914~1953)。ウェールズ出身の英語で書く詩人・作家。英語で書くもっとも偉大な 20 世紀詩人の一人とされる鬼才。詩集のほか、半自伝的な『若い犬の日の芸術家の肖像』(*Portrait of an Artist as a Young Dog*, 1940) がある。
- 17) Lindfors, Bernth, 'Amos Tutuola : Deux Opinions' in *Cahiers d'etudes Africaines*, vol. 38, 1970, p. 310.
- 18) J. Carey. アイルランド生まれ。オックスフォード大学で法律を学び、ナイジェリアでイギリスの植民地行政官として勤務。第一次大戦中は、カメルーン戦線に従軍。1920 年、イギリスへ戻った。植民地を舞台にした小説が多く、『ミスター・ジョンソン』は植民地政府と衝突する若いナイジェリア人の悲劇を扱っている。
- 19) アチェベには、コンラッドの代表作『闇の奥』を扱った次の評論がある。'An Image of Africa : Racism in Conrad's *Heart of Darkness*' (in *Hopes and Impediments*, 1988, pp. 1~13)。
- 20) Currey, James, *ibid.*, p. 27.
- 21) William Butler Yeats (1865~1939)。アイルランドの詩人・劇作家。「再臨」(*The Second Coming*) は、第一次大戦後の 1919 年に書かれた。
- 22) 小説に登場するイギリス人地方長官が、主人公オコンクオの自殺後、書き残したいと構想している著書のタイトル (*The Pacification of the Primitive Tribes of the Lower Niger*)。
- 23) 第 1 部の注 11 を見よ。
- 24) Mzilikazi (1700?~1868)。ンデベレ (Ndebele) 民族の王。はじめシャカ配下の戦争首長であったが、1824 年頃シャカと衝突し、配下を連れてトランスバール西部へ。ついで北上し、現在のジンバブエのブラワヨ付近に落ち着いた。ここで、ショナ人を吸収し、ンデベレ王国をつくった。
- 25) Ngugi wa Thiong'o, *ibid.*
- 26) Currey, James, *ibid.*, p. 3.
- 27) Achebe, Chinua, 'Tanganyika - Jottings of a Tourist' (in *Morning yet on Creation Day*, 1976, pp. 104~112)。
- 28) *Ibid.*, p. 107.
- 29) Currey, James, *ibid.*, p. 3.
- 30) *Ibid.*, p. 115.
- 31) Achebe, Chinua, 'The Novelist as Teacher' (in *Morning yet on Creation*

Day, 1976, pp. 55~60)。

- 32) Kenneth Kaunda (1924~)。イギリス領北ローデシア生まれ。父はキリスト教牧師。1950年頃から政治活動を始め、1964年のザンビア独立で大統領に就任（在位 1964~1991）。2000年に政界を引退した。
- 33) 第3部の注22を見よ。
- 34) ビアフラ戦争。1976年7月から1970年1月までナイジェリア東部で続いた内戦。67年5月、従来の4州制から12州制への移行政策が発表されたが、東部州知事オジュクが、東部州の分離独立（ビアフラ共和国）を宣言した。これにより、連邦政府軍とビアフラ軍の衝突となった。
- 35) Currey, James, *ibid.*, pp.7~8.
- 36) Mwai Kibaki (1931~)。ギクユ民族出身。1978年から1988年の間、モイ政権下で副大統領を務めた。
- 37) Currey, James, *ibid.*, p. 1.
- 38) *Ibid.*, p. 23.
- 39) *Ibid.*, p. viii.
- 40) *Ibid.*, p. 6.
- 41) Parekh & Jagne, *Postcolonial African Writers, A Bio-bibliographical Critical Sourcebook*, 1998, p. 370.
- 42) Wilkinson, Jane, ed., *Talking with African Writers, Interviews with African Poets, Playwrights & Novelists*, 1992, pp. 82~83.
- 43) Gabriel Jose Garcia Márques (1928~2014)。コロンビアの作家。架空の都市マコンドを舞台にした作品を中心に、魔術的リアリズムの旗手とされる。1982年度ノーベル文学賞受賞。代表作に『百年の孤独』（*Cien anos de Soledad*, 1967）、『族長の秋』（*El otono del patriarca*, 1975）。
- 44) Salman Rushdie (1947~)。イギリスの作家。ボンベイ（現ムンバイ）出身で、イスラム教徒。ケンブリッジ大学卒。インド・パキスタンを舞台に、虚構と幻想を現実には織り交ぜた魔術的リアリズムの作品が多い。代表作に『真夜中の子供たち』（*Midnight's Children*, 1980）、『悪魔の歌』（*The Satanic Verses*, 1989）など。
- 45) マジカル・リアリズム (Magical Realism)。日常と非日常が融合した芸術表現技法で、小説や美術作品に見られる。文学の分野では、現代イスパノ・アメリカ文学に顕著な傾向である。
- 46) Wilkinson, Jane, *ibid.*, p. 78.
- 47) *Ibid.*, p. 79.
- 48) *Ibid.*, p. 77.
- 49) *Ibid.*, p. 78.

- 50) Ibid., p. 78.
- 51) Ibid., p. 78.
- 52) Ibid., p. 81.
- 53) Ibid., p. 81.
- 54) Ibid., p. 82.
- 55) Ibid., p. 81.
- 56) Ibid., p. 82.
- 57) Ibid., p. 81.
- 58) 1986 年 7 月 26 日、ロンドンの現代芸術研究所でのスピーチ。現代芸術研究所 (ICA) と HEB の主催。パネラーは、ヌルディン・ファラ (ソマリア)、モンガン・セローテ (南アフリカ) ら。筆者はこの集会に参加した。同様の趣旨は、ナイジェリアの詩人クリストファー・オキボも述べている ‘There is no African literature. There is good writing and bad writing—that’s all. (Achebe, Chinua, *Morning yet on Creation Day*, 1975, p. 37)
- 59) Wilkinson, Jane, *ibid.*, p. 82.
- 60) Killam & Rowe, *The Companion to African Literatures*, 2000, p. 51.
- 61) ANC (アフリカ民族会議。African National Congress)。1912 年結成の南アフリカ原住民会議が 1923 年にこの名に改称。反人種主義、アフリカ人の権利擁護を掲げた。活動が先鋭化し始めた 1950 年代に、白人政府は共産主義弾圧法を制定し、取締りを強化した。1959 年、ANC 内の過激派が分裂し、PAC を結成した。1960 年 3 月のシャープビル事件後、PAC とともに非合法化された。南アフリカ共和国の現政権である。
- 62) PAC (パン・アフリカニスト会議。Pan Africanist Congress)。
- 63) シャープビルの虐殺。1960 年 3 月に起きたアパルトヘイト反対運動に対する大虐殺事件。ANC の非暴力路線から分派した PAC がパス法 (白人地域に入る際、アフリカ人が携帯しなければならない身分証明書) に反対する集会が、ヨハネスブルク郊外のシャープビル警察署前で開かれた。白人警官の一斉射撃により、69 名が死亡した。事件後、ANC のルツーリ議長もパス帳を焼くなど、騒擾が全土に拡大した。ルツーリは自宅拘禁、PAC のソブクウェ議長は 3 年間の禁固処分となった。
- 64) ソブクウェ議長 (Robert Sobukwe, 1924~1978)。ケープ州の貧しい家に生まれたが、フォートヘア大学に学ぶ。1948 年、ANC の青年組織に参加したが、1957 年に ANC を去り、1959 年に PAC を結成した。
- 65) ルツーリ議長 (Albert John Luthuli, 1898~1967)。南ローデシア (現ジンバブエ) の伝道所に生まれた。教師生活の後、1951 年、アフリカ民族会

議ナタール支部長になった。自身は非暴力、白人との協調路線に立ったが、ANC 内の過激グループがパン・アフリカニスト会議（PAC）を結成し、1960 年 3 月にパス法に反対して、シャープビル事件を起こし、ルツーリも逮捕された。1960 年度ノーベル平和賞受賞。67 年 7 月、南ア国内で鉄道事故で死亡した。

- 66) Brink, André, *Map Makers, Writing in a State of Siege*, Introduction : A Background to Dessidence, pp. 13~35 ; pp. 32~33. 邦訳、奥野保男・芝實訳『見えない南アフリカを見る』晶文社、1987.
- 67) 「1820 年の入植民」(1820 settlers)。1820 年にイースタン・ケープに入植した約 5,000 人のイギリス系白人を指す。コーサ人などの動きを警戒し、同時にオランダ系白人勢力に対抗して入植政策が推進された。ポートエリザベス、イースト・ロンドンなどに住みついたが、中心地のグレアムズタウンに入植を記念する巨大な建物が残されている。
- 68) Brink, André, *Mapmakers, Writing in a State of Siege*, 1983, p. 35.
- 69) 邦訳、越智道雄訳『SA! マイブイエ・アフリカ、アフリカをわが手に』三笠書房、1976。「訳者あとがき」を参照。
- 70) カメラ理論。サルトルのイマージュ論。サルトルの現象学的想像力論によれば、カメラ（機械）が、人間不在のなかでイマージュを形成することで、日常生活で人間が知覚するよりもさらに充溢した世界の現前が可能になるという。映画の想像力ともいう。知覚と想像は性格上異なるもので、想像することと心の中にイマージュ（心像）を生み出すことは異なるとする。詳しくはサルトルの『想像力の問題』を見よ。
- 71) D. J. Opperman (1914~1985)。ステレンボッシュ大学でアフリカーンス文学を教えた。アフリカーンス語で書く詩人。
- 72) Ingrid Jonker (1933~1965)。アフリカーンス語で書く白人女性詩人。アパルトヘイト反対の立場から多くの詩を書き、多数の言語に翻訳されている。
- 73) Jan Sebastian Rabie (1920~2001)。アフリカーンス語で書く作家。
- 74) 邦訳、越智道雄訳前掲書参照。
- 75) Brink, André, *ibid.*, p. 254.
- 76) *Ibid.*, p. 205. 邦訳、p. 259.
- 77) *Ibid.*, p. 206. 邦訳、p. 260.
- 78) *Ibid.*, p. 206. 邦訳、p. 260.
- 79) Head, Bessie, *A Question of Power*, p. 16 を参照せよ。主人公エリザベスがミッション・スクールの校長から出生の秘密を告げられるシーンがあるが、ヘッドの実人生と共通している。邦訳、中村輝子訳『力の問題』学芸

書林、1993。

- 80) ドラム誌。1951 年、南アで創刊（当時の名称は、*African Drum*）。南アの富裕な白人により、非白人向けの雑誌として刊行、アパルトヘイト反対の立場から多くのアフリカ人作家、ジャーナリスト、写真家などの登竜門となった。初代の編集者アンソニー・ Sampson（Anthony Sampson, 1951~55）の頃から黒人タウンシップの代表的雑誌となり、ムパシェーレ、カン・テンバ、ナット・ナカサらが健筆をふるった。60 年代に、中央・東・西アフリカへ販路を拡大したが、現在はファッション、セックス、犯罪などを扱う大衆雑誌になっている。
- 81) Head, Bessie, *Serowe, Village of the Rain Wind*, 1981, p. x .
- 82) Lindfors, Bernth, 'Tutuola : Debts and Assets' in *Cahiers d'études Africaines*, vol. 38, 1970, p. 306.
- 83) Currey, James, *ibid.*, p. 113.
- 84) ネグリチュード派（Négritude）。1930 年代以後、パリに集まったフランス領中米インド諸島、アフリカ出身の開化黒人たちが起こした文学・文化・思想運動。マルチニック島出身のエメ・セゼール、セネガル出身のサンゴールらが中心。黒人には独特な内的世界、宇宙認識論、芸術創造力、美的感覚などがあるとし、黒人とアフリカの独特な価値を主張、西欧近代、白人の文明的価値を批判・揶揄した。シュールリアリズム、マルクス主義などを武器に、50 年代初めまで、フランス語で書かれるアフリカ文学（特に詩）に一時代を画した
- 85) Achebe, Chinua, 'The African Writer and the English Language' (in *Morning yet on Creation Day*, pp. 75~84. p. 75)。
- 86) 黒人意識（Black Consciousness）運動。1960 年代から 70 年代後半にかけて南アフリカで、スティーブ・ビコ（Steve Biko, 1946~1977）らによって始められた。黒人の解放のためには、白人に依存するのではなく、自らのイニシャティブ、自らの心理的解放、集団としての力の自覚が必要であるとした。
- 87) Gordimer, Nadine, *The Black Interpreters*, 1973, p. 7.（訳書、pp. 10~11）。
- 88) *Ibid.*, p. 10. 訳書、p. 19.
- 89) たとえば、'Here's Kenya I Want' (*Sunday Nation*, 1962.8.28) , 'The Letter That Made My Heart Sink Inside Me' (*Sunday Nation*, 1963.9.15) , 'The Three Levels of Independence' (*Sunday Nation*, 1963.10.27) などに顕著に見られる。
- 90) 貫名美隆訳『わが苦悩の町 2 番通り』理論社、1965、「訳者あとがき」参照。

- 91) Baldwin, James & Mead, Margaret, *A Rap on Race*, 1971. 大庭みな子訳『怒りと良心ー人種問題を語る』平凡社、p. 309.
- 92) ジェームズ・ボールドウィンとリチャード・ライトの間での「抗議文学」をめぐる見解の相違が思い出される。橋本福夫『黒人文学の世界』未来社、1967；大橋健三郎『アメリカ文学論集・人間と世界』南雲堂、1971などを参照せよ。
- 93) Ibid. 訳書、p. 308~309.
- 94) Ibid. 訳書、p. 309.
- 95) Mphahlele, Ezekiel, *Down Second Avenue*, p. 211. 貫名美隆訳『わが苦悩の町 2 番通り』理論社、p. 296.
- 96) Ki-Zerbo, J., ed., *UNESCO General History of Africa 1 ; Methodology and African Prehistory*, 1981, p. 2. 宮本正興・市川光雄責任編集『ユネスコ版アフリカの歴史』第 1 巻、同朋舎、1990.
- 97) たとえば、ユネスコ版『アフリカの歴史』各巻冒頭に置かれた当時の事務局長アマドゥ・マフタル・ムボウ (Amadou-Mahtar Mbou) の「序文」を見よ。
- 98) Brink, André, *ibid.*, p. 204.
- 99) Achebe, Chinua, *The Trouble with Nigeria*, p. 1.
- 100) Amooti wa Irumba, Katebaliirwe, *ibid*, p. 41. アフリカ文学研究会編『民族・歴史・文学』、三一書房、p. 64.

参考文献

【一次資料】(グギ・ワ・ジオンゴ自身の著作、ただしスワヒリ語への翻訳本を含む)

小説：

- 1964, *Weep not, Child*, William Heinemann.
1971, *Usilie Mpenzi Wangu* (Swahili translation of *Weep not, Child* by John Ndeti Somba), East African Educational Publishers.
1965, *The River Between*, Heinemann Educational Books.
1974, *Njia Panda* (Swahili translation of *The River Between* by John Ndeti Somba), East African Publishing House.
1967, *A Grain of Wheat*, Heinemann Educational Books.
1977, *Petals of Blood*, Heinemann Educational Books.
1980, *Caitaani Mũtharaba-inĩ* (Gĩkũyũ original of *Devil on the Cross*), Heinemann Educational Books (E.A.)
1982, *Devil on the Cross* (translated from the Gĩkũyũ by the Author), Heinemann Educational Books.
1982, *Shetani Msalabani* (Swahili translation of *Devil on the Cross* by Clement M. Kabugi), Heinemann Educational Books (East Africa)
1986, *Matigari ma Njirũũngi*, Heinemann Kenya.
1987, *Matigari* (translated from the Gĩkũyũ by Wangũi wa Goro), Heinemann International.
2004~2006, *Mũrogi wa Kagogo*, Rũgano Ta ũrĩa rwaguũrĩrio (Gĩkũyũ original of *Wizard of the Crow*), East African Educational Publishers.
2006, *Wizard of the Crow* (A Translation from Gĩkũyũ by the author), Harvill Secker.

短篇集：

- 1975, *Secret Lives and other stories*, Heinemann Educational Books.

戯曲：

- 1968, *The Black Hermit*, Heinemann Educational Books.
1970, *Mtawa Mweusi* (Swahili translation of *The Black Hermit*), Heinemann Educational Books.
1970, *This Time Tomorrow, 3 Plays*, East African Literature Bureau.
1976, *Kesho Wakati kama Huu*, Michezo 3, (Swahili translation of *This Time Tomorrow, 3 Plays* by Saifu D. Kiango), East African Literature

Bureau.

- 1976, *The Trial of Dedan Kimathi*, (with Michere Githae Mugo), Heinemann Educational Books.
- 1978, *Mzalendo Kimathi* (Swahili translation of *The Trial of Dedan Kimathi* by Raphael Kahaso), Heinemann Educational Books.
- 1977, *Ngaahika Ndenda, Ithaako rĩa Ngerekano* (with Ngũgĩ wa Mĩriĩ, mimeo. Gikuyu original of *I Will Marry When I Want* for the Kamirĩthũ Theatre).
- 1980, *Ngaahika Ndeenda, Ithaako rĩa Ngerekano* (with Ngũgĩ wa Mĩriĩ, Gĩkũyũ original of *I Will Marry When I Want*), Heinemann Educational Books.
- 1982, *I Will Marry When I Want*, translated from the Gĩkũyũ by the authors, Heinemann Educational Books.
- 1982, *Nitaolewa Nikipenda*, Mchezo wa Kuigiza (Swahili translation of *I Will Marry When I Want* by Clement M. Kabugi), Heinemann Educational Books.

評論：

- 1972, *Homecoming, Essays on African and Caribbean Literature, Culture and Politics*, Heinemann Educational Books.
- 1981, *Detained, A Writer's Prison Diary*, Heinemann Educational Books.
- 1981, *Writers in Politics, Essays*, Heinemann Educational Books.
- 1983, *Barrel of a Pen : Resistance to Repression in Neo-Colonial Kenya*, New Beacon Books.
- 1986, *Writing Against Neocolonialism*, Vita Books.
- 1986, *Decolonising the Mind, The Politics of Language in African Literature*, James Currey, Heinemann Kenya, Heinemann, Zimbabwe Publishing House.
- 1993, *Moving the Centre, The Struggle for Cultural Freedoms*, James Currey, EAEP, Heinemann.
- 1997, *Writers in Politics, A Re-Engagement with Issues of Literature & Society*, A Revised & Enlarged Edition, James Currey, EAEP, Heinemann.
- 1998, *Penpoints, Gunpoints and Dreams, Towards a Critical Theory of the Arts and the State in Africa, Clarendon Lectures in English Literature 1996*, Oxford University Press.

- 2009, *Something Torn and New, An African Renaissance*, Basic Civitas Books.
- 2009, *Re-membering Africa*, East African Educational Publishers.(上記 2009 と内容は同じ)
- 2010, *Dreams in a Time of War, A Childhood Memoir*, Pantheon Books.
- 2012, *Globalectics, Theory and the Politics of Knowing*, Columbia University Press.
- 2012, *In the House of the Interpreter, A Memoir*, Pantheon Books.
- 2013, *In the Name of the Mother, Reflections on Writers & Empire*, East African Educational Publishers, James Currey.

児童文学

- 1982, *Njamba Nene na Mbaathi i Mathagu*. Heinemann Kenya.
- 1984, *Bathitoora ya Njamba Nene*. Heinemann Kenya.
- 1986, *Njamba Nene na Cibu King'ang'i*, Heinemann Kenya.
- 1986, *Njamba Nene and the Flying Bus*, East African Publishers.
- 1988, *Njamba Nene and the Cruel Chief*, Africa World Press.
- 1990, *Njamba Nene's Pistol*, Africa World Press.

インタビュー集成

- 2006, *Ngũgĩ wa Thiong'o Speaks, Interviews with the Kenyan Writer* (ed., by Sander, Reinhard & Lindfors, Bernth with the assistance of Lynette Cintrón), Africa World Press.

ミメオ (mimeography) :

- 1979, Interview given by Prof. Ngũgĩ wa Thiong'o, on 6th and 11th January, 1979, at Ngũgĩ's home, in Limuru, Kenya. (by Amooti wa Irumba, Katebaliirwe).
- 1979, University Acknowledge Secret, Arbitrary Dismissal (mimeo for the Press Interview) 20 August, 1979, Nairobi.
- 1982, *Maitũ Njugĩra (Mother Sing for Me)*. Draft in English written by the author.

【二次資料】

- ① グギ・ワ・ジオンゴの作品・人物を対象にしたもの
Björkman, Ingrid, 1989, *Mother, Sing for Me ; People's Theatre in Kenya*,

Zed Books.

Cantalupo, Charles, ed., 1995. *The World of Ngũgĩ wa Thiong'o*, Africa World Press.

Cantalupo, Charles, ed., 1995, *Ngũgĩ wa Thiong'o : Texts and Contexts*, Africa World Press.

Cook, David & Okenimkpe, Michael, 1983, *Ngugi wa Thiong'o, An Exploration of His Writings*, Heinemann Educational Books.

Cook, David & Okenimkpe, Michael, 1997, *Ngũgĩ wa Thiong'o, An Exploration of His Writings*, Second Edition, James Currey, EAEP, Heinemann.

Killam, G. D., 1980, *An Introduction to the Writings of Ngugi*, Heinemann Educational Books.

Killam, G. D., ed., 1984, *Critical Perspectives on Ngugi wa Thiong'o*, Three Continents Press.

Lindfors, Bernth & Kothandaraman, Bala, 2001, *The Writer as Activist : South Asian Perspectives on Ngugi wa Thiong'o*, Africa World Press.

Lovesey, Oliver, 2000, *Ngũgĩ wa Thiong'o*, Twayne's World Authors Series, Twayne Publishers.

Ndīgīrīgī, Gīchingiri, 2007. *Ngũgĩ wa Thiong'o's Drama and the Kamĩrũthũ Popular Theatre Experiment*, Africa World Press.

Nicholls, Brendon, 2010, *Ngugi wa Thiong'o, Gender, and the Ethics of Postcolonial Reading*, Ashgate.

Robson, Clifford B., 1979, *Ngugi wa Thiong'o*, Macmillan Commonwealth Writers Series, Macmillan Press.

Sicherman, Carol, 1989, *Ngugi wa Thiong'o : A Bibliography of Primary and Secondary Sources 1957-1987*, Hans Zell Publishers.

Sicherman, Carol, 1990. *Ngugi wa Thiong'o : The Making of a Rebel, A Source Book in Kenyan Literature and Resistance*, Hans Zell Publishers.

② グギ作品を含むアフリカ文学全般・歴史関連

Abdulaziz, Mohamed H., 1979, *Muyaka, 19th Century Swahili Popular Poetry*, Kenya Literature Bureau.

Achebe, Chinua, 1958, *Things Fall Apart*, William Heinemann.

Achebe, Chinua, 1960, *No Longer at Ease*, William Heinemann.

Achebe, Chinua, 1964, *Arrow of God*, William Heinemann.

- Achebe, Chinua, 1966, *A Man of the People*, William Heinemann.
- Achebe, Chinua, 1975, *Morning yet on Creation Day*, Anchor Press / Doubleday.
- Achebe, Chinua, 1983, *The Trouble with Nigeria*, Heinemann Educational Books.
- Achebe, Chinua, 1987, *Anthills of the Savannah*, William Heinemann.
- Achebe, Chinua, 1988, *Hopes and Impediments, Selected Essays 1965-1987*, Heinemann.
- Achebe, Chinua, 2000, *Home and Exile*, Oxford University Press.
- Achebe, Chinua, 2009, *The Education of a British-Protected Child, Essays*, Penguin Books.
- Achebe, Chinua, 2010, *The African Trilogy ; Things Fall Apart, No Longer at Ease, Arrow of God*, Everyman's Library.
- Achebe, Chinua, 2012, *There Was a Country, A Personal History of Biafra*, Penguin Books.
- Adeyemi, Sola, ed., 2006, *Portraits for an Eagle – A Festschrift in Honour of Femi Osofisan*, Bayreuth African Studies, Bayreuth University.
- Akare, Thomas, 1988, *Twilight Woman*, Spear Books.
- Altbach, Philip G., ed., 1992, *Publishing and Development in the Third World*, Hans Zell Publishers.
- Amuta, Chidi, 1989, *The Theory of African Literature, Implications for Practical Criticism*, Zed Books.
- Andrzejewski, B. W.; Piłaszewicz, S.; Tyloch, W., ed., 1985, *Literatures in African Languages, Theoretical Issues and Sample Surveys*, Cambridge University Press, Wiedza Powszechna State Publishing House.
- Anyidoho, Kofi ; Busia, Abena P. A. & Adams, Anne V., ed., 1999, *Beyond Survival : African Literature & The Search for New Life*, Africa World Press.
- Armah, Ayi Kwei, 1969, *The Beautiful Ones Are Not Yet Born*, Heinemann Educational Books.
- Arndt, Susan ; von Brisinski, Marek Spitzok, 2006, *Africa, Europe and (Post) Colonialism : Racism, Migration and Diaspora in African Literatures*, Bayreuth African Studies 77, Bayreuth University.
- Baldwin, James, 1955, *Notes of A Native Son*, Beacon Press.
- Beier, Ulli, ed., 1967, *Introduction to African Literature, An Anthology of*

- Critical Writing on African and Afro-American Literature and Oral Tradition*, Longman.
- Benson, T. J., 1964, *Kikuyu-English Dictionary*, Oxford University Press.
- Bertoncini, Elena Z., 1989, *Outline of Swahili Literature, Prose Fiction and Drama*, E. J. Brill.
- Bertoncini, Elena & Said A. M. Khamis et al, 2009, *Outline of Swahili Literature: Prose, Fiction and Drama*, Second Edition. Extensively Revised and Enlarged, Brill Academic Pub.
- Bishop, Rand, 1988, *African Literature, African Critics, The Forming of Critical Standards, 1947-1966*, Greenwood Press.
- Bodunde, Charles, ed., 2001, *African Languages Literature in the Political Context of the 1990s*, Bayreuth African Studies 56, Bayreuth University.
- Booker, M. Keith, 1998, *The African Novel in English, An Introduction*, Heinemann, James Currey.
- Brink, André, 1974, *Looking on Darkness*, W.H. Allen & Co.
- Brink, André, 1983, *Mapmakers, Writing in a State of Siege*, Faber and Faber.
- Brown, Lloyd W., 1981, *Women Writers in Black Africa*, Greenwood Press.
- Byam, L. Dale, 1999, *Community in Motion, Theatre for Development in Africa*, Foreword by Ngũgĩ wa Thiong'o, Bergin & Garvey.
- Cabral, Amilcar, 1980, *Unity and Struggle, Speeches and Writings*, Heinemann Educational Books.
- Carroll, David, 1980, *Chinua Achebe*, The Macmillan Press.
- Chinweizu ; Jemie, Onwuchekwa ; Madubuike Ihechukwu, 1983, *Toward the Decolonization of African Literature*, Volume 1, African Fiction and Poetry and Their Critics, Howard University Press.
- Collins, Harold R., 1969, *Amos Tutuola*, Twayne Publishers.
- Cook, David, ed., 1965, *Origin East Africa, A Makerere Anthology*, Heinemann Educational Books.
- Cook, David, 1977, *African Literature, A Critical View*, Longman.
- Cooke, M. G., ed., 1971, *Modern Black Novelists, A Collection of Critical Essays*, Prentice-Hall.
- Cooper, Brenda, 2008, *A New Generation of African Writers, Migration, Material Culture & Language*, James Currey, University of KwaZulu-Natal Press.

- Currey, James, 2008, *Africa Writes Back, The African Writers Series & The Launch of African Literature*, James Currey, Wits University Press, Ohio University Press, HEBN, EAEP, Weaver Press, Mkuki na Nyota.
- Dathorne, O. R., 1974 / 1975, *African Literature in the Twentieth Century*, University of Minnesota Press.
- Duerden, Dennis & Pieterse, Cosmo, ed., 1972, *African Writers Talking, A Collection of Interviews*, Heinemann Educational Books.
- Edwards, Paul, ed., 1967, *Equiano's Travels*, Heinemann Educational Books.
- Egudu, R. N., 1978, *Modern African Poetry and the African Predicament*, The Macmillan Press.
- Emenyonu, Ernest N., ed. 1989, *Literature and National Consciousness*, (Calabar Studies in African Literature), Heinemann Educational Books.
- Ezenwa-Ohaeto, 1997, *Chinua Achebe, A Biography*, James Currey, Indiana University Press.
- Figueroa, John J., ed., 1982, *An Anthology of African and Caribbean Writing in English*, Heinemann Educational Books.
- Freeman-Grenville, G.S.P., 1973, *Chronology of African History*, Oxford University Press.
- Gachukia, Edda & Akivaga, S. Kichamu, ed., 1978. *Teaching of African Literature in Schools*, vol. 1, Kenya Literature Bureau.
- Gadjigo, Samba ; Faulkingham, Ralph H. ; Cassirer, Thomas & Sader, Reinhard, 1993, *Ousmane Sembène*, Dialogues with Critics and Writers, University of Massachusetts Press.
- Gagiano, Annie, 1994, *Achebe, Head, Marechera – On Power and Change in Africa*, Lynne Rienner Publishers
- Gakwandi, Shatto A., 1977, *The Novels and Contemporary Experience in Africa*, Heinemann Educational Books.
- Gatheru, Mugo, 1966, *Child of Two Worlds*, Heinemann Educational Books.
- Gecau, Kimani ; Chivaura, Vimbai & Chifunyise, Stephen, 1991, *Community Based Theatre in Zimbabwe, An Evaluation of Zimfep's Experiences*, Zimbabwe Foundation for Education with Production.
- Gérard, Albert S., 1971, *Four African Literatures, Xhosa • Sotho • Zulu • Amharic*, University of California Press .

- Gérard, Albert S., 1981, *African Language Literatures, An Introduction to the Literary History of Sub-Saharan Africa*, Longman.
- Gikandi, Simon, 1991, *Reading Chinua Achebe, Language & Ideology in Fiction*, James Currey, Heinemann, Heinemann Kenya.
- Gordimer, Nadine, 1973, *The Black Interpreters, Notes on African Writing*, Spro-Cas / Ravan.
- Gugelberger, Georg M., ed., 1985, *Marxism and African Literature*, James Currey.
- Gugler, Josef ; Lüsebrink, Hans-Jürgen & Martini, Jürgen, ed., 1994, *Literary Theory and African Literature / Théorie littéraire et littérature africaine*, Beiträge zur Afrikaforschung, Band 3, Universität Bayreuth.
- Gurr, Andrew & Calder, Angus, ed., 1974, *Writers in East Africa, Papers from a Colloquium held at the University of Nairobi, June 1971*, East African Literature Bureau.
- Harrow, Kenneth W., ed., 1991, *Faces of Islam in African Literature*, Heinemann Educational Books.
- Harrow, Kenneth W., 1994, *Thresholds of Change in African Literature, The Emergence of a Tradition*, Heinemann, James Currey.
- Head, Bessie, 1974, *A Question of Power*, Heinemann Educational Books.
- Head, Bessie, 1981, *Serowe, Village of the Rainwind*, Heinemann Educational Books, 1981.
- Head, Bessie, 1990, *A Woman Alone, Autobiographical Writings* (Selected and edited by Craig MacKenzie), Heinemann International.
- Head, Bessie, 1991, *A Gesture of Belonging, Letters from Bessie Head, 1965~1979*, Heinemann Educational Books.
- Heron, G. A., 1976, *The Poetry of Okot p'Bitek*, Heinemann Educational Books.
- Heywood, Christopher, ed., 1971, *Perspectives on African Literature, Selections from the proceedings of the Conference on African Literature held at the University of Ife 1968*, Heinemann Educational Books.
- Hurley, E. Anthony ; Larrier, Renée & McLaren, Joseph, 1999, *Migrating Words and Worlds : Pan-Africanism Updated*, Africa World Press.
- Ibrahim, Huma, ed., 2004, *Emerging Perspectives on Bessie Head*, Africa World Press.

- Imbuga, Francis, D., 1976, *Betrayal in the City*, East African Publishing House.
- Innes, C. L. & Lindfors, Bernth, 1978, *Critical Perspectives on Chinua Achebe*, Three Continents Press.
- Irele, Abiola, 1981, *The African Experience in Literature and Ideology*, Heinemann Educational Books.
- Irele, Abiola, 2011, *The Negritude Movement, Explorations in Francophone African and Caribbean Literature and Thought*, Africa World Press.
- James, Adeola, ed., 1990, *In Their Own Voices, African Women Writers Talk*, James Currey, Heinemann.
- Joe de Graft, 1977, *Muntu*, Heinemann Educational Books.
- Jordan, A. C., 1973, *Towards an African Literature, The Emergence of Literary Form in Xhosa*, University of California Press.
- Kariara, Jonathan & Kitonga, Ellen, 1976, *An Introduction to East African Poetry*, Oxford University Press.
- Kennedy, Ellen C., 1975, *The Negritude Poets, An Anthology of Translations from the French*, The Viking Press.
- Kerr, David, 1995, *African Popular Theatre from pre-colonial times to the present day*, James Currey, Heinemann, EAEP, David Philip, Baobab.
- Kesteloot, Lilyan, 1972, *Intellectual Origins of the African Revolution*, Black Orpheus Press.
- Kibera, Leonard, 1970, *Voices in the Dark*, East African Publishing House.
- Kibera, Leonard & Kahiga, Samuel, 1972, *Potent Ash*, East African Publishing House.
- Killam, G. D., 1969, *The Novels of Chinua Achebe*, Heinemann Educational Books.
- Killam, G. D. ed., 1984, *The Writing of East & Central Africa*, Heinemann Educational Books.
- King, Bruce & Ogungbesan, Kolawole, ed., 1975, *A Celebration of Black and African Writing*, Ahmadu Bello University Press & Oxford University Press.
- Koigi wa Wamwere, 1980, *A Woman Reborn*, Spear Books.
- Kurtz, J. Roger, 1994, *Writing the Postcolonial City : The Representation of Nairobi in the Kenyan Novel, 1964-1993*, University of Iowa,

Dissertation.

- Kurtz, J. Roger, 1998, *Urban Obsessions, Urban Fears : The Postcolonial Kenyan Novel*, Africa World Press, James Currey.
- Kwesi Kwaa Prah, ed., 2009, *The Role of Missionaries in the Development of African Languages*, CASAS Book Series no. 66, The Centre for Advanced Studies of African Society.
- Lamming, George, 1953, *In the Castle of My Skin*, Longman.
- Larson, Charles R., 1972, *The Emergence of African Fiction*, Indiana University Press.
- Lindfors, Bernth, 1970, 'Amos Tutuola : Debts and Assets', in *Cahiers D'etudes Africaines*, vol. 38. pp. 306~334.
- Lindfors, Bernth, ed., 1979, *Critical Perspectives on Nigerian Literatures*, Heinemann Educational Books.
- Lindfors, Bernth, 1991, *Popular Literatures in Africa*, Africa World Press.
- Lindfors, Bernth, 1995, *Long Drums and Canons, Teaching and Researching African Literatures*, Africa World Press.
- Lindfors, Bernth, 1999, *The Blind Men and the Elephant and other essays in biographical criticism*, Africa World Press.
- Lindfors, Bernth, 2009, *Early Achebe*, Africa World Press.
- Lindfors, Bernth, 2011, *Early East African Writers and Publishers ; Ngugi wa Thiong'o, Okot p'Bitek, David Maillu*, Africa World Press.
- Maina wa Kinyatti, 1997, *Mother Kenya, Letters from Prison, 1982-88*, Vita Books.
- Makouta-Mboukou, J.-P., 1973, *Black African Literature, An Introduction*, Black Orpheus Press.
- Mangua, Charles, 1971, *Son of Woman*, East African Publishing House.
- Mazrui, Ali A., 1967, *The Anglo-African Commonwealth, Political Friction and Cultural Fusion*, Pergamon Press.
- Mazrui, Ali A., 1978, *Political Values and the Educated Class in Africa*, University of California Press.
- Mĩchere Gĩthae-Mũgo, 1978, *Visions of Africa, The Fiction of Chinua Achebe, Margaret Laurence, Elspeth Huxley and Ngugi Wa Thiong'o*, Kenya Literature Bureau.
- Mĩchere Gĩthae Mũgo, 2012, *Writing and Speaking from the Heart of My Mind*, Africa World Press.
- Miyamoto Masaoki, 2011, *Essays in African Studies*, Research Association of

African Literature.

- Moore, Gerald, 1980, *Twelve African Writers*, Hutchinson Group (NZ).
- Mortimer, Mildred, 1990, *Journeys Through the French African Novel*, Heinemann, James Currey.
- Mphahlele, Ezekiel, 1962, *Down Second Avenue*, Seven Seas Books.
- Mphahlele, Ezekiel, 1962, *The African Image*, Frederick A. Praeger.
- Mphahlele, Ezekiel, 1972, *Voices in the Whirlwind and Other Essays*, Hill and Wang.
- Mũkoma wa Ngũgĩ, 2009, *Nairobi Heat*, Penguin Books.
- Mutiso, G-C. M., 1974, *Socio-Political Thought in African Literature : Weusi ?*, Macmillan.
- Mwangi, Meja, 1973, *Kill Me Quick*, Heinemann Educational Books.
- Mwangi, Meja, 1976, *Going Down River Road*, Heinemann Educational Books.
- Nazareth, Peter., 1972, *Literature and Society in Modern Africa, Essays on Literature*, East African Literature Bureau.
- Nazareth, Peter, 1978, *The Third World Writer, His Social Responsibility*, Kenya Literature Bureau.
- Ngara, Emmanuel, 1982, *Stylistic Criticism and the African Novel, A Study of the Language, Art and Content of African Fiction*, Heinemann Educational Books.
- Ngara, Emmanuel, 1985, *Art and Ideology in the African Novel, A Study of the Influence of Marxism on African Writing*, Heinemann Educational Books.
- Ngara, Emmanuel & Morrison Andrew, ed., 1989, *Literature, Language and the Nation, Proceedings of the Second General Conference of the Association of University Teachers of Literature and Language (ATOLL) held at the University of Zimbabwe 24-28 August, 1987*, The Association of University Teachers of Literature and Language (ATOLL) in Association with Baobab Books.
- Ng'weno, Hilary, 1975, *The Men from Pretoria*, Longman.
- Nichols, Lee, ed., 1981, *Conversations with African Writers, Interviews with Twenty-Six African Authors, Interviews Conducted and Edited by Lee Nichols*, Voice of America.
- Nkabinde, A. C., ed., 1988, *Anthology of Articles on African Linguistics and Literature, A Festschrift to C. L. S. Nyembezi*, Lexicon Publishers.

- Nkosi, Lewis, 1981, *Tasks and Masks, Themes and Styles of African Literature*, Longman.
- Nkosi, Lewis, 1983, *Home and Exile and Other Selections*, Longman.
- Obiechina, Emmanuel, 1973, *An African Popular Literature, A Study of Onitsha Market Pamphlets*, Cambridge University Press.
- Obiechina, Emmanuel, 1975, *Culture, Tradition and Society in the West African Novel*, Cambridge University Press.
- Ogbaa, Kalu, 1992, *Gods, Oracles and Divination, Folkways in Chinua Achebe's Novels*, Africa World Press.
- Ogude, James & Nyairo, Joyce, ed., 2007, *Urban Legends, Colonial Myths, Popular Culture and Literature in East Africa*, Africa World Press.
- Okafor, Dubem, ed., 2001, *Meditations on African Literature*, Greenwood Press.
- Okot p'Bitek, 1966, *Song of Lawino*, Heinemann.
- Okot p'Bitek, 1973, *Africa's Cultural Revolution*, Introduction by Ngugi wa Thiong'o, Macmillan Education.
- Okot p'Bitek, 1986, *Artist, the Ruler, Essays on Art, Culture and Values*, Heinemann Kenya.
- Okri, Ben, 1986, *Incidents at the Shrine*, William Heinemann.
- Oliver, Roland & Mathew, Gervase, ed., 1963, *History of East Africa*, Oxford University Press.
- Olney, James, 1973, *Tell Me Africa, An Approach to African Literature*, Princeton University Press.
- Omotoso, Kole, 1982, *The Theatrical into Theatre, A Study of the drama and theatre of the English-speaking Caribbean*, New Beacon Books.
- Owomoyela, Oyekan, ed., 1993, *A History of Twentieth-Century African Literatures*, University of Nebraska Press.
- Palmer, Eustace, 1972, *An Introduction to the African Novel, A Critical Study of Twelve Books*, Heinemann Educational Books.
- Palmer, Eustace, 1979, *The Growth of the African Novel, Studies in African Literature*, Heinemann Educational Books.
- Parekh, Pushpa Naidu & Jagne, Siga Fatima, ed., 1998, *Postcolonial African Writers, A Bio-Bibliographical Critical Sourcebook*, Greenwood Press.
- Petersen, Kirsten H. & Rutherford, Anna, 1990, *Chinua Achebe, A*

- Celebration*, Heinemann International.
- Pieterse, Cosmo & Munro, Donald, ed., 1969, *Protest & Conflict in African Literature*, Heinemann Educational Books.
- Plaatje, Sol T., 1916, *Native Life in South Africa*, P. S. King and Son.
- Plaatje, Sol T., 1930, *Mhudi*, The Lovedale Press.
- Ricard, Alain, 2000, *Ebrahim Hussein : Swahili Theatre and Individualism*, (Translated from French by Dr. Nàomi Morgan), Mkuki na Nyota Publishers.
- Roelker, Jack R., 1976, *Mathu of Kenya : A Political Study*, Stanford University Press.
- Roscoe, Adrian, 1971, *Mother is Gold, A Study in West African Literature*, Cambridge University Press.
- Roscoe, Adrian, 1977, *Uhuru's Fire, African Literature East to South*, Cambridge University Press.
- Schipper, Mineke, 1982, *Theatre and Society in Africa* (Translated from the Dutch), Ravan Press.
- Sèmbene, Ousmane, 1970, *God's Bits of Wood*, Heinemann Educational Books (translated by Francis Price, *Les Bouts de Bois de Dieu*, 1960).
- Shaba, Piniel Viriri, 1989, *A People's Voice, Black South African Writing in the Twentieth Century*, Zed Books, Ohio University Press.
- Simatei, Tirop P., 2001, *The Novel and the Politics of Nation Building in East Africa*, Bayreuth African Studies 55, Bayreuth University.
- Smith, Rowland, ed., 1976, *Exile and Tradition, Studies in African and Caribbean Literature*, Longman & Dalhousie University Press.
- Soyinka, Wole, 1965, *The Interpreters*, André Deutsch..
- Soyinka, Wole, 1975, *Death and King's Horseman*, Eyre Methuen.
- Soyinka, Wole, 1976, *Myth, Literature and the African World*, Cambridge University Press.
- Taban lo Liyong, 1969, *The Last Word, Cultural Synthesism*, East African Publishing House.
- Tucker, Martin, 1967, *Africa in Modern Literature, A Survey of Contemporary Writing in English*, Frederick Ungar Publishing Co.
- Veit-Wild, Flora, 1992, *Teachers, Preachers, Non-Believers : A Social History of Zimbabwean Literature*, Hans Zell Publishers.

- Vigne, Randolph & Currey, James, 2014, *The New African 1~53, The Radical Review*, James Currey.
- Walmsley, Anne, 1992, *The Caribbean Artists Movement 1966-1972, A Literary & Cultural History*, New Beacon Books.
- Wanjala, Chris, ed., 1973, *Standpoints on African Literature, A Critical Anthology*, East African Literature Bureau.
- Wanjala, Chris, 1978, *The Season of Harvest, A Literary Discussion*, Kenya Literature Bureau.
- Wanjala, Chris, 1980, *For Home and Freedom*, Kenya Literature Bureau.
- Wästberg, Per, ed., 1968, *The Writer in Modern Africa, African-Scandinavian Writers' Conference, Stockholm 1967*, The Scandinavian Institute of African Studies.
- Wauthier, Claude, 1978, *The Literature and Thought of Modern Africa*, Second English Language Edition, Heinemann Educational Books.
- Welz, Dieter, ed., 1987, *Writing against Apartheid*, NELM Interviews Series Number Two, National English Literary Museum.
- Whiteley, W. H., compiled, 1964, *A Selection of African Prose 2. Written Prose*, Oxford University Press,
- Wilkinson, Jane, ed., 1992, *Talking with African Writers, Interviews with African Poets, Playwrights & Novelists*, James Currey, Heinemann.
- Wodajo, Tsegaye, 2004, *Hope in the Midst of Despair, A Novelist's Cures for Africa*, Africa World Press.
- Woolf, Cecil & Bagguley, John, 1967, *Authors Take Sides on Vietnam, Two Questions on the War in Vietnam answered by the Authors of several nations*, Peter Owen.
- Wright, Derek, 1989, *Ayi Kwei Armah's Africa, The Sources of His Fiction*, Hans Zell Publishers.
- Wright, Derek, ed., 1997, *Contemporary African Fiction*, Bayreuth African Studies 42, Bayreuth University.
- Wright, Edgar, ed., 1973, *The Critical Evaluation of African Literature*, Heinemann Educational Books.
- Wylie, Hal & Lindfors, Bernth, 2000, *Multiculturalism & Hybridity in African Literatures*, Africa World Press.
- Zettersten, Arne, ed., 1983, *East African Literature, An Anthology*,

Longman.

③ 口承文学

- Adagala, Kavetsa & Kabira, Wanjiku Mukabi, ed., 1985, *Kenyan Oral Narratives, A Selection*, East African Educational Publishers.
- Chesaina, C., 1991, *Oral Literature of the Kalenjin*, Heinemann Kenya.
- Dorson, Richard M., ed., 1972, *African Folklore*, Indiana University Press.
- Gecau, R. N., 1970, *Kikuyu Folktales, their nature and value*, East African Literature Bureau.
- Njururi, Ngumbu, 1975, *Tales from Mount Kenya*, Transafrica Publishers.
- Okpewho, Isidore, 1992, *African Oral Literature ; Backgrounds, Character, and Continuity*, Indiana University Press.
- Sienaert, Edgard ; Cowper-Lewis Meg & Bell, Nigel, 1994, *Oral Tradition and its Transmission, The Many Forms of Message, Papers given at the Fourth International Conference on Oral Tradition*, University of Natal, Durban, 27-30 June 1994, The Campbell Collections and Centre for Oral Studies, University of Natal.
- Wanjikū Mūkabi Kabira & Karega wa Mūtahi, 1988, *Gīkūyū Oral Literature*, Heinemann Kenya.
- Whitely, W. H., compiled, 1964, *A Selection of African Prose 1, Traditional Oral Texts*, Oxford University Press.

④ マウマウ戦争を対象にしたもの

- Barnet, Donald L. & Njama, Karari, 1966, *Mau Mau From Within, Autobiography and Analysis of Kenya's Peasant Revolt*, Modern Reader Paperbacks.
- Buijtenhuijs, Robert, 1973, *Mau Mau : Twenty Years After, The Myth and the Survivors*, Mouton.
- Durrani, Shiraz, 1986, *Kīmaathi, Mau Mau's First Prime Minister of Kenya*, Vita Books.
- Edgerton, Robert B., 1989, *Mau Mau, An African Crucible*, Ballantine Books.
- Furedi, Frank, 1989, *The Mau Mau War in Perspective*, James Currey, Heinemann Kenya, Ohio University Press.
- Gakaara wa Wanjaũ, 1988, *Mau Mau Author in Detention*, translated from the Gīkūyū by Paul Ngigī Njoroge, Heinemann Kenya.[原書は *Mwandikī wa Mau Mau Ithaamĩrioinĩ*, 1983]

- Gikoyo, Gucu G., 1979, *We Fought for Freedom, Tulipigania Uhuru*, East African Publishing House.
- Henderson, Ian (with Philip Goodhart), 1958, *The Hunt for Dedan Kimathi*, Doubleday.
- Kahiga, Sam, 1990, *Dedan Kimathi, The Real Story*, Longman Kenya.
- Kanogo, Tabitha, 1987, *Squatters and the Roots of Mau Mau 1905-63*, James Currey, Heinemann Kenya, Ohio University Press.
- Kariuki, J. M., 1963, *'Mau Mau' Detainee, The Account by a Kenya African of his Experiences in Detention Camps 1953~1960*, Foreword by Margery Perham, Oxford University Press.
- Leakey, L.S.B., 1954, *Defeating Mau Mau*, Methuen & Co.
- Leigh, Ione, 1954, *In the Shadow of Mau Mau*, W.H.Allen.
- Maina wa Kĩnyattĩ, ed., 1980. *Thunder from the Mountains, Mau Mau Patriotic Songs*, Zed Press.
- Maina wa Kĩnyattĩ, ed., 1987, *Kenya's Freedom Struggle, The Dedan Kimathi Papers*, Foreword by Ngugi wa Thiong'o, Zed Books.
- Maina wa Kĩnyattĩ, 1991, *Mau Mau : A Revolution Betrayed*, Mau Mau Research Center.(Second edition, 2000)
- Maloba, Wunyubari O., 1993, *Mau Mau and Kenya, An Analysis of a Peasant Revolt*, Indiana University Press.
- Muriithi, J. Kiboi with Peter Ndoria, 1971, *War in the Forest, The personal story of J. Kiboi Muriithi as told to Peter N. Ndoria*, East African Publishing House.
- Mwangi, Meja, 1974, *Carcase for Hounds*, Heinemann Educational Books.
- Mwangi, Meja, 1975, *Taste of Death*, East African Publishing House.
- Ochieng', William & Janmohamed, Karim K., 1977, *Some Perspectives on the Mau Mau Movement*, Special issue of Kenya Historical Review, The Journal of the Historical Association of Kenya, Vol.5 No.2.
- Rosberg, C. G. Jr. & Nottingham, J., 1966, *The Myth of 'Mau Mau': Nationalism in Colonial Kenya*, Transafrica (Reprinted,1985).
- Throup, David W., 1985, The Origins of Mau Mau, *African Affairs*, 1984.2.
- Throup, David W., 1987, *Economic & Social Origins of Mau Mau 1945-53*, James Currey, Heinemann Kenya, Ohio University Press.
- Wachanga, H. K., 1975, *The Swords of Kirinyaga, The Fight for Land and Freedom*, edited by Robert Whittier, Kenya Literature Bureau.

Wamweya, Joram, 1971, *Freedom Fighter*, East African Publishing House.
 Waruhiu Itote (General China), 1967, *'Mau Mau' General*, East African Publishing House.
 Waruhiu Itote (General China), 1979, *Mau Mau in Action*, Transafrica.
 Watene, Kenneth, 1974, *Dedan Kimathi*, Transafrica Publishers.

⑤ ケニア史（労働運動史を含む）を主な対象にしたもの

Abuor, C. Ojwando, 1972, *White Highlands No More*, A Modern Political History of Kenya, vol. 1, Pan African Researchers.
 Africa Watch, 1991, *Kenya, Taking Liberties, July 1991*, Africa Watch.
 Africa Watch, 1993, *Divide and Rule, State-Sponsored Ethnic Violence in Kenya*, Human Rights Watch.
 Ananaba, Wogu, 1979, *The Trade Union Movement in Africa, Promise and Performance*, C. Hurst & Company.
 Anderson, David M. & Johnson, Douglas H., 1995, *Revealing Prophets, Prophecy in Eastern African History*, James Currey, EAEP, Fountain Publishers, Ohio University Press.
 Anderson, W. B., 1988, *The Church in East Africa 1840 -1974*, Uzima.
 Atkinson, Ronald R., 1994, *The Roots of Ethnicity, The Origins of the Acholi of Uganda Before 1800*, University of Pennsylvania Press.
 Berman, Bruce, 1990, *Control & Crisis in Colonial Kenya, The Dialectic of Domination*, James Currey, EAEP, Ohio University Press.
 Berman, Bruce & Lonsdale, John, 1992, *Unhappy Valley, Conflict in Kenya & Africa, Book One : State & Class, Book Two : Violence & Ethnicity*, James Currey, Heinemann Kenya, Ohio University Press.
 Blantley, Cynthia, 1981, *The Giriama and Colonial Resistance in Kenya, 1800-1920*, University of California Press.
 Bottignole, Silvana, 1984, *Kikuyu Traditional Culture and Christianity, Self Examination of an African Church*, Heinemann Educational Books.
 Bullock, Ronard Arthur, 1975, *Ndeiya, Kikuyu Frontier : The Kenya Land Problem in Microcosm*, Department of Geography, University of Waterloo.
 Burrows, John et al., 1975, *Kenya : Into The Second Decade, Reports of a Mission sent to Kenya by The Word Bank*, The Johns Hopkins

University Press.

- Cavicchi, E., 1977, *Problems of Change in Kikuyu Tribal Society*, EMI-Via Meloncello.
- Clough, Marshall S., 1977, "*Chiefs and Politicians : Local Politics and Social Change in Kiambu, Kenya, 1918~1936*", Diss. Stanford U.
- Cransworth, Lord[Betram Francis Gurdon],1939, *Kenya Chronicles*, Macmillan.
- Gann, L. H. & Duignan Peter, 1978, *The Rulers of British Africa 1870-1914*, Groom Helm.
- Gertzel, Cherry, 1970, *The Politics of Independent Kenya 1963-8*, East African Publishing House, Heinemann.
- Gicaru, Mugo, 1958, *Land of Sunshine : Scenes of Life in Kenya before Mau Mau*, Lawrence & Wishart.
- Gray, John, 1957, *The British in Mombasa 1824~1826, Being the History of Captain Owen's Protectorate*, Macmillan & Co.
- Greaves, L. B., 1969, *Carey Francis of Kenya*, Rex Collings.
- Hassan, Yusuf, 1987, *From Kimathi to Mwakenya, Resistance in Kenya Today*, UKenya (Umoja wa Kupigania Demokrasia Kenya).
- Kaggia, Bildad, 1975, *Roots of Freedom 1921-1963, The Autobiography of Bildad Kaggia*, East African Publishing House.
- Kariuku-Machua, Rosemary, 2008, *I am my Father's Daughter, over 30 years later JM Kariuki daughter's Quest for Truth & Justice revealed*, Flame keepers Publishing Company.
- Kaunda, Kenneth, 1962, *Zambia Shall be Free, An Autobiography*, Heinemann Educational Books.
- Kenyatta, Jomo, 1938, *Facing Mount Kenya, The Traditional Life of the Gikuyu*, with an Introduction by B. Malinowski, Martin Secker and Warburg.
- Kitching, Gavin, 1980, *Class and Economic Change in Kenya, The Making of an African Petite Bourgeoisie 1905-1970*, Yale University Press.
- Koigi wa Wamwere, 1992, *The People's Representative and the Tyrants or Kenya : Independence Without Freedom*, New Concept Typesetters.
- Koinange, (Peter) Mbiyu, 1955, *The People of Kenya Speak for Themselves*, Kenya Publication Fund.
- Lamb, Geoff, 1974, *Peasant Politics, Conflict and Development in Murang'a*, Julian Friedmann Publishers.

- Leakey, L. S. B., 1977, *The Southern Kikuyu before 1903*, Vol. I , II , III, Academic Press.
- Legum, Colin, ed., 1968~69, *Africa Contemporary Records : Annual Survey and Documents, 1* , Africana Pub.
- Leys, Norman, 1941, 1970, *The Colour Bar in East Africa*, Negro Universities Press.
- Leys, Norman, 1973, *Kenya* (Fourth Edition with a new Introduction by George Shepperson), Frank Cass.
- Likimani, Muthoni, 2005, *Fighting Without Ceasing*, Noni's Publicity
- Lugard, F. J. D., 1893, *The Rise of Our East African Empire : Early Efforts in Nyasaland and Uganda*, 2 vols., William Blackwood and Sons.
- Macharia, Kinuthia, 1993, *The State and the Informal Sector in Nairobi, Kenya*, (Working Papers), French Institute for Research in Africa.
- Magnat, J. S., 1969, *A History of the Asians in East Africa, c. 1886 to 1945*, Oxford University Press.
- Maina wa Kĩnyattĩ, 1977, *Mother Kenya, Letters from Prison, 1982-1988*, Vita Books.
- Maina wa Kĩnyattĩ, 1996, *Kenya : A Prison Notebook*, Vita Books.
- Maina wa Kĩnyattĩ, 2008, *History of Resistance in Kenya, 1884-2002*, Mau Mau Research Centre.
- Maina wa Kĩnyattĩ, Compiled and Edited, 2014, *Mwakenya, The Unfinished Revolution, Selected Documents of the Mwakenya-December Twelve Movement (1974-2002)*, Mau Mau Research Centre.
- Maina wa Mũtonya, 2013, *The Politics of Everyday Life in Gĩkũyũ, Popular Music of Kenya (1990-2000)*, Twaweza Communications Ltd.
- Matson, A. T., 1972, *Nandi Resistance to British Rule 1890-1906*, East African Publishing House.
- Matson, A. T., 2009, *The Volcano Erupts, Nandi Resistance to British Rule, With an Introduction by John Lonsdale*, Transafrica Press.
- Maughan-Brown, David, 1985, *Land, Freedom and Fiction, History and Ideology in Kenya*, Zed Books.
- Mboya, Tom, 1963, *Freedom and After*, André Deutsch.
- Mboya, Tom, 1970, *Tom Mboya, The Challenge of Nationhood, A Collection of Speeches and Writings*, Heinemann Educational Books.
- McIntosh, Brian G., ed., 1969, *Ngano : Studies in Traditional and Modern East African History*, East African Publishing House.

- Meinertzhagen, Richard, 1957, *Kenya Diary (1902~1906)*, Eland Books.
- Mungeam, G. H., 1978, *Kenya : Select Historical Documents, 1884~1923*, East African Publishing House.
- Munuhe, Kareithi ed., 1975, 1976 , *JM Kariuki in Parliament*, vol. I & II, Gazell Books.
- Muriuki, Godfrey, 1974, *A History of the Kikuyu 1500-1900*, Oxford University Press.
- Muongano wa Wazalendo wa Kuikomboa Kenya, 1992, *The Mwakenya Stand : On the Current Situation in Kenya*, Union of Patriots for the Liberation of Kenya.
- Ochieng', William R., 1977, "Land as a Crucial Agendum in Kenya's Nationalist History" in his *The Second Word : More Essays on Kenyan History*, East African Literature Bureau.
- Ochieng', William R., 1985, *A History of Kenya*, Macmillan Kenya.
- Ochieng', William R., ed., 1990, *Themes in Kenyan History*, Heinemann Kenya, James Currey, Ohio University Press.
- Odinga, Oginga, 1967, *Not Yet Uhuru, an autobiography*, with a foreword by Kwame Nkrumah, Heinemann Educational Books.
- Ogot, Bethwell A., ed., 1972, *Politics and Nationalism in Colonial Kenya* (Hadithi 4), East African Publishing House.
- Ogot, Bethwell A., ed., 1972, *War and Society in Africa : Ten Studies*, Frank Cass.
- Ogot, B. A. & Ochieng', W. R., ed., 1995, *Decolonization & Independence in Kenya 1940-93*, James Currey, EAEP, Ohio University Press.
- Orchardson-Mazrui, Elizabeth, 1999, *The Adventures of Mekatilili*, East African Educational Publishers.
- Preston, R. O., 1947, *The Genesis of Kenya Colony : Reminiscences of an Early Uganda Railway Construction Pioneer*, Colonial Printing Works (Nairobi).
- Pugliese, Cristiana, 1993, *Gikuyu Political Pamphlets and Hymn Books 1945-1952*, Working Papers no. 11, French Institute for Research in Africa.
- Pugliese, Cristiana, 1995, *Author, Publisher and Gĩkũyũ Nationalist : The Life and Writings of Gakaara wa Wanjaũ*, Bayreuth African Studies 37, IFRA Nairobi.
- Roelker, Jack R., 1976, *Mathu of Kenya : A Political Study*, Stanford

University Press.

Sandford, G. R., 1919, *An Administrative and Political History of the Masai Reserve*, Waterlow and Sons.

Singh, Makhan, 1969, *History of Kenya's Trade Union Movement to 1952*, East African Publishing House.

Singh, Makhan, 1980, *Kenya's Trade Unions 1952-1956* (Edited by Prof. Bethwell A. Ogot), Uzima Press.

Strayer, Robert W., 1978, *The Making of Mission Communities in East Africa, Anglicans and Africans in Colonial Kenya, 1875~1935*, Heinemann, State University of New York Press

Thuku, Harry, 1970, *Harry Thuku, An Autobiography*, with assistance from Kenneth King, Oxford University Press.

Ward, Kevin, 1976, *The Development of Protestant Christianity in Kenya, 1910~40*, Diss., Cambridge U.

Watt, Rachel Stuart, 1922, *In the Heart of Savagedom : Reminiscences of Life and Adventure during a Quarter of a Century of Pioneering Missionary Labours in the Wilds of East Equatorial Africa*, 3rd ed., Pickering & Inglis.

Willis, Justin, 1993, *Mombasa, the Swahili, and the Making of the Mijikenda*, Oxford University Press.

Wipper, Audrey, 1977, *Rural Rebels : A Study of Two Protest Movement in Kenya*, Oxford University Press.

World Bank, 1975, *Kenya : Into the Second Decade, Report of a Mission sent to Kenya by World Bank*, The Johns Hopkins University Press.

⑥ ケニアの新聞・週刊誌ほか

The Weekly Review, Sunday Post, Daily Nation, Sunday Nation, The Standard, Kenya Weekly News, Joe.

⑦ 定期刊行雑誌

アフリカ文学、もしくは関連した諸分野を対象にした定期雑誌を適宜利用した。ググ関連の記事も多く見られる。ただし、すでに廃刊のものが多く含まれる。

African Affairs

イギリスの探検家・旅行家・民族誌学者として活躍し、当時のイギリスの対アフリカ政策にも顕著な影響を及ぼしたメアリー・キングスリー (Mary

Kingsley, 1862~1900) を記念して、1901 年にアフリカ協会が設立され、機関誌 *A Journal of the African Society* が創刊された。その後、王立アフリカ協会がこれを継続、1936 年に *Journal of the Royal African Society* と名称変更した。1944 年以後は、*African Affairs* の名称で、季刊誌としてオックスフォード大学出版部から出ている。最も権威あるアフリカ関連の雑誌の一つ。

African Literature Today

1968 年創刊。はじめ、エルドレッド・ジョーンズ (Eldred Jones) の編集で、Heinemann, Africana Publishing Company から刊行。のちに、James Currey 社、Africa World Press 社などが継承。 *Research in African Literatures* と並ぶ最重要シリーズの一つ。

Africa Perspective

ヨハネスブルクのウィットウォーターズランド大学 (University of the Witwatersrand) 学生編集の季刊誌。1974 年 10 月創刊。アフリカから世界を見る立場を主張している。南ア問題だけでなく、創刊号では、マウマウ戦争やナミビア問題、モザンビーク解放戦線などを論じている。

African Perspectives

1977 年 9 月~10 月にナイロビで創刊。発行元は Tai Publishers。77 年中は隔月刊、78 年以降月刊を予定した。第 1 号に、作家 Magaga Alot による『血の花弁』の書評記事 'The Massacre of Hopes' が掲載された。78 年 2 月~3 月に第 2 号が出たが、ここにも「グギの拘禁」「マウマウとは誰か」「スワヒリ語はケニアを統一できるか」など興味深い論説が掲載されている。

ALA Bulletin

アフリカ文学会 (African Literature Association) 発行の季刊誌。同学会は、1957 年創立の全米アフリカ学会から、74 年に文学研究者たちが独自に発足させた世界規模の研究・連絡組織。毎年 3~4 月にかけて、アメリカを中心にアフリカ、カリブ海域などの都市で年次大会が開催されている。アビオラ・イレレ (Abiola Irele)、アリコ・ソングロ (Aliko Songolo) などが過去に会長を務めた。毎回、著名なアフリカ人作家が招かれている。2014 年 4 月には、ヨハネスブルクで第 40 回大会が開催された。

Bulletin of the Association for African Literature in English

シエラレオネのフラー・ベイ・カレッジ (Fourah Bay College) 英文科から

出た文芸雑誌。1964年から1966年の間に4号まで刊行した。1970年にKRAUS Reprintから復刻版が出た。エルドレド・ジョーンズ（Eldred Jones）が編集。西アフリカ文学が中心であるが、ジェームズ・グギへの論究も見られる。

Busara

東アフリカを中心に、短篇・詩・評論・書評などを載せているナイロビ大学文学科学生編集の文芸誌。年2回刊。たとえば、第8巻第1号（1976年）に、グギの評論 *Writers in Politics*（1975年10月の文学科公開講演シリーズで話したもの）が掲載されている。のちに、Kenya Literature Bureau 刊。タバン・ロ・リヨン、グギ・ワ・ジオンゴ、キマニ・ゲシャウなどが編集に協力したことがある。*Busara* とは、スワヒリ語で「知恵・分別」の意。

Dhana

1971年創刊。マケレレ大学文学科の文芸誌。年2回刊。短篇・詩・戯曲・書評などを載せている。East African Literature Bureau 刊。*Dhana* とは、スワヒリ語で「思想・アイデア」の意。

East Africa Journal

東アフリカ社会文化事情研究所（The East African Institute of Social and Cultural Affairs）の機関誌。社会文化を対象とした月刊誌であるが、文学特集号を出すことがある。1966年9月に、Ezekiel Mphahlele の編集により、New East African Writing についての特別号を出した。Grace Ogot, Leonard Kibera, David Rubadiri, John Nagenda など19名が寄稿している。1967年9月には、Leonard Okola の編集で、Special Issue on East African Creative Writing と題した特別号を出した。Wilson Mativo, Grace Ogot, Walter Bgoya などの23篇が掲載されている。この刊行は、当時の東アフリカ三国の大統領、ケニヤッタ、ニエレレ、オボテが後援していた。

Ghala

East Africa Journal の文芸特集号の名称。たとえば、第9巻第7号（1972年7月）、第9巻第12号（1972年12月）は文芸特集。前者にグギの短篇「瞬時の栄光」（Minutes of Glory）、後者に David G. Maillu の短篇「イチジクの木の下で」（Under the Fig Tree）、グギの短篇「十字架の前の結婚式」（Wedding at the Cross）などが掲載されている。*Ghala* とは、スワヒリ語で「倉庫・蔵」の意。

Index on Censorship

ロンドンから出ている隔月刊の雑誌。世界レベルでの言論の自由確保のためのキャンペーン、情報収集を実施している NGO の事業。

Isala

Isala とは、Ife Studies in African Literature and the Art の略。Kosalabaro Press 刊。1982 年創刊の思想・文化雑誌。年 2 回刊。アフリカ黒人文化とディアスポラの文学・思想を扱う。創刊号は、Otin Ogunba が編集。Femi Osofisan らが編集に協力している。アフリカ口承文芸、デイビッド・ルバディリによるオコト・ビテックへのインタビュー、アチェベの小説『神の矢』と日本の「能」を比較文学的に考察したりチャード・タイラーの「エゼウルー現代の能」が掲載されている。執筆者はイフェ大学関係者に限らない。

Journal of African Marxists

ロンドンで発行。第 4 号 (1983.9) に、Ngugi wa Thiong'o : Mau Mau is Coming Back : The Revolutionary Significans of 20 October 1952 in Kenya Today が掲載されている。第 9 号 (1986.6) に、ケニア、ガーナでの無裁判拘禁者のリストが掲載されている。1986 年 8 月 11 日~13 日まで、第 1 回コロキウム「アフリカの危機と変容」を主催した。

Kenya News

ロンドンをベースに活動したケニア政治犯釈放運動委員会 (Committee for the Release of Political Prisoners in Kenya) の機関誌。随時発行。

Kunapipi

コモンウェルス財団の資金援助で、オーストラリア政府、コモンウェルス文学言語学会の協力で刊行されている。世界の英語文学を対象にしている。「クナピピ」とは、オーストラリアの先住民の神話に現れる「虹の蛇」(Rainbow Serpent) で、創造と再生の象徴。ちなみに、第 2 巻 2 号 (1990) は「チヌア・アチェベ特集」を組んでいる。

Lotus

1958 年創設の「アフロ・アジア作家会議」(Afro-Asian Writers Association) の機関誌。短篇・詩・書評・エッセイなどを掲載。創設当時の本部はスリランカ、ついでカイロ、バイルート、チュニジア、カイロへ移った。アジア・アフ

リカのノーベル賞といわれた「ロータス賞」を制定。第1回は、アレックス・ラ・グーマ(南アフリカ、1969)が受賞。その後、野間宏(1972)、グギ(1973)、アチェベ(1975)、メジャ・ムアング(1978)、小田実(1981)などが受賞。

Mūtiiri, Njaranda ya Mūikarĩre

グギ・ワ・ジオンゴがニューヨーク大学勤務の頃から編集し始めたギクユ語雑誌。1994年創刊。タイトルは「支柱・大黒柱」の意。

New Beacon Review

「ニュー・ビーコン社」は、トリニダード出身のジョン・ラ・ルースが1966年にロンドンで創業。雑誌は、1985年創刊。カリブ・アフリカ・南北アメリカを繋ぐ総合雑誌で、アフリカ文学関係記事も豊富である。

New Left Review

ロンドンで出ている。政治・経済・文化を中心としたもので隔月刊。1960年創刊。第150号(1985年3/4月)に Ngugi wa Thiong'o : The Language of African Literature が掲載されている。

Okike

ナイジェリアのンスカ(Nsukka)で刊行された文芸誌。副題は、*An African Journal of New Writing*。チヌア・アチェベが創刊時の編集者。1995年10月に第31号を出している。詩・短篇・インタビュー・書評などを掲載。

Penpoint

English Department Magazine, Makerere College。1958年創刊。1970年終刊。

Phylon

1940年、W. E. B. DuBois によって創刊され、1956年まで続いた。現在の *Phylon, A Review of Race and Culture* は The Atlanta University から1960年創刊。季刊誌。たとえば、1981年9月(第42巻第3号)には、Spiritual Movements, Pan-Africanism and Social Change と題する特集記事が掲載されている。

Présence Africaine

アリウヌ・ジョオプ(Alioune Diop)の編集で、1947年11月にパリで創刊さ

れたパン・アフリカレベルの政治・文学雑誌。1949年に独自の出版社と本屋を開設し、ネグリチュード文学運動を担った。1956年、第1回黒人作家芸術家会議をパリで主催。この時、エメ・セゼール、レオポール・サンゴール、ジャック・ラベマナンジャラ、シェイク・アンタ・ジョオブ、リチャード・ライト、フランツ・ファノン、ジャン・プリスマールらが参加。パブロ・ピカソがポスターを描いた。1980年にアリウヌ・ジョオブが死去したが、1997年に、創設50周年がユネスコで祝われた。なお、以下も重要である。*Présence Africaine, Cultural Journal of the Negro World* No. 24-25, February-May, 1959. Special Issue, Second Congress of Negro Writers and Artists (Rome : 26 March – 1st April 1959)。

Race & Class

主に、人種主義や帝国主義をテーマとした季刊誌。ロンドンの人種関係研究所 (Institute of Race Relation) が1959年に *Race* の標題で創刊。1974年以後現在の標題となる (当初は、副題に *Journal for Black and Third World Liberation* とあった)。エドワード・サイード、バジル・デビッドソンらが編集に関与した。

Research in African Literatures

発行元は、The African Literature Association & The African Literatures Division of The Modern Language Association : Indiana University Press in cooperation with The Ohio State University. 1970年創刊。季刊誌。現在、最も権威ある世界規模のアフリカ文学研究専門誌の一つ。

Social Dynamics

ケープタウン大学のアフリカ研究所の機関誌。南部アフリカを中心にした学術総合誌。学際的アプローチに特徴がある。年2回 (6月と12月) 刊。たとえば、第30巻第2号 (2004) で、シンポジウム「アフリカの大衆文学」を特集し、ケニア文学などを取り上げている。

Staffrider

南アフリカ作家会議 (The Congress of South African Writers) の機関誌。1978年創刊。*Staffrider* とは、超満員の「差別」列車の屋根や車両に外側からしがみついて乗っている人々を指すタウンシップのスラング。ジャブロ・ンデベレ、ナディン・ゴードィマ、モンガン・セローテなどが編集に関与した時期がある。Oliphants, Andries W. & Vladislavić, Ivan, ed., 1988, *Ten Years*

of Staffrider 1978-1988, Ravan Press がある。

The Literary Griot

副題は、*International Journal of Black Expressive Culture Studies*. ニュージャージー州ウィリアム・パターソン大学に拠点を置く Black Expressive Cultural Studies Association の機関誌。年 2 回刊。アフリカ・南北アメリカ・カリブの黒人表象文化を扱っている。1998 年の第 10 巻 2 号は、チヌア・アチェベの小説『部族崩壊』(*Things Fall Apart*) を特集している。Traore, O. B., ed., Discourse on Iroko : 40th Anniversary Symposium on *Things Fall Apart*.

Transition

A Journal of the Arts, Culture & Society. インド人ネオギ (Neogy, Rajat) 編集の高級文芸誌。1961 年から 65 年にかけて、第 1 巻 1 号から第 4 巻 19 号までを刊行。1971 年終刊。1970 年に Kraus Reprint から復刻版が出た。

Tricontinental

1966 年、キューバのハバナで創設された「アジア・アフリカ・ラテンアメリカ人民連帯機構」(The Organization of Solidarity with the People of Asia, Africa and Latin America (OSPAAAL)) の機関誌。グローバリゼーション、帝国主義、ネオリベラリズムに反対し、人権の尊重を訴えた。第三世界に社会主義、共産主義を普及させることを目標にした。ソビエト連邦の終息により休刊したが、1995 年に復刊。最盛時は、87 ヶ国に 10 万の予約購読者がいた。

Ufahamu

カリフォルニア大学ロサンゼルス校の大学院生編集の総合誌。1970 年、同大学のアフリカ人活動グループ (African Activist Association) により創刊され、*Journal of the African Activist Association* の副題があった。当時の発行元は、African Studies Center, University of California, Los Angeles。現在の副題は *A Journal of African Studies*. *Ufahamu* とは、スワヒリ語で「理解・認識・解釈」の意。2013 年に第 37 巻第 1 号が出た。政治・社会問題のほか、文学関連の論説も多い。

Uganda Journal

1923 年創立のウガンダ文芸科学協会 (Uganda Literary and Scientific Society) が 1933 年にウガンダ協会 (Uganda Society) と改称し、翌年に創

刊したウガンダに関する総合学術雑誌。同協会は、講演会などを多く主催した。国内の騒擾などで、1983年に活動を停止したが、1994年に再開した。当初は季刊を予定したが、年2回の刊行が常態化した。創刊以後約50年間、当時のアフリカの代表的な雑誌として、海外でも高く評価された。

Umma

ダルエスサラーム大学文学科の文芸誌。短篇・詩・戯曲・書評などを載せている。年2回発行。East African Literature Bureau 刊。

Wasafiri

ロンドンで出ている季刊文芸誌。1979年創設の ATCAL (Association for the Teaching of Caribbean, African, Asian and Associated Literatures) の活動の延長として1984年に創刊。イギリス芸術評議会 (Arts Council) が資金協力。主に、ポストコロニアル文学を対象に、特にアフリカ人作家とディアスポーラ、イギリス在住のアフリカ系作家、アジア文学、カリブ文学を扱う。

Wasafiri とは、スワヒリ語で「旅人たち」の意。

Zuka, A Journal of East African Creative Writing

1967年9月、Oxford University Press (Nairobi) より創刊。James Ngugi が、第2号(1968.5)を単独で、第3号(1969.4)をJonathan Kariaraと共同編集している。*Zuka* とは、スワヒリ語で「出現」の意。

⑧ 作家人名事典類：

Gikandi, Simon, ed., 2003, *The Routledge Encyclopedia of African Literature*, Routledge.

Herdeck, Donald E., ed., 1973, *African Authors, A Companion to Black African Writing, Volume 1 : 1300-1973*, Black Orpheus Press.

Herdeck, Donald E., ed., 1979, *Caribbean Writers, A Bio-Bibliographical-Critical Encyclopedia*, Three Continents Press.

Killam, Douglas & Rowe, Ruth, ed., 2000, *The Companion to African Literatures*, James Currey, Indiana University Press.

Malan, Robin, compiled, 2009, *A-Z of African Writers, A Guide to Modern African Writing in English*, Shuter.

Zell, Hans & Silver, Helene, 1972, *A Reader's Guide to African Literature*, Heinemann Educational Books.

Zell, Hans M., Bundy, C., & Coulon, V., 1983, *A New Reader's Guide to*

African Literature, Second, completely revised and expanded edition, Africana Publishing Company.

【日本語文献】

- アカレ, トマス ; 永江敦訳, 1993『スラム』緑地社。
- アチェベ, チヌア ; 古川博巳訳, 1977『崩れゆく絆』門土社。
- アチェベ, チヌア ; 栗飯原文子訳, 2013『崩れゆく絆』光文社。
- アッシュクロフト, ビル & グリフィス, ガレス & ティフィン, ヘレン ; 木村茂雄訳, 1998『ポストコロニアルの文学』青土社。
- アフリカ文学研究会編, 1981『民族・歴史・文学—アフリカの作家グギ・ワ・ジオンゴとの対話』三一書房。
- アンダーソン, ベネディクト ; 白石さや・白石隆訳, 1997『増補・想像の共同体, ナショナリズムの起源と流行』NTT出版。
- ウオロゲム, ヤンボ ; 岡谷公二訳, 1970『暴力の義務』新潮社。
- ヴォーン, アルデン T. & ヴォーン, ヴァージニア・メーソン ; 本橋哲也訳, 1999『キャリバンの文化史』青土社。
- ウスマン, サンベヌ ; 藤井一行訳, 1963『セネガルの息子』新日本出版社。
- ウスマン, サンベヌ ; 藤井一行訳, 1965『神の森の木々』新日本出版社。
- ウッズ, ドナルド ; 常盤新平訳, 1980『ビーコウ—アパルトヘイトとの限りなき戦い』サンリオ。
- エンクルマ, クワメ ; 家正治・松井芳郎訳, 1971『新植民地主義—帝国主義の最終段階』(エンクルマ選集 4) 理論社。
- エンクルマ, K. ; 秋山正夫訳, 1973『アフリカ解放の道—民族解放と階級闘争』時事通信社。
- 大橋健三郎, 1971『アメリカ文学論集・人間と世界』南雲堂。
- オコト・ビテック ; 北村美都穂訳, 2000『ラウィノの歌 / オ Chol の歌』新評論。
- カブラル, アミルカル ; 白石顕二・正木爽・岸和田仁訳, 1980『アフリカ革命と文化』(A.A.L.A.教育・文化叢書 V) 亜紀書房。
- ガンサー, ジョン ; 土屋哲訳, 1956『アフリカの内幕 I』(現代史体系 10) みすず書房。
- 木島始編, 1969『黒人と暴力』(全集・現代世界文学の発見 10) 学芸書林。
- グギ・ワ・ジオンゴ ; 小林信次郎訳, 1981『一粒の麦』門土社。
- グギ・ワ・ジオンゴ ; 宮本正興・楠瀬佳子訳, 1987『精神の非植民地化—アフリカのことばと文学のために』第三書館。
- グギ・ワ・ジオンゴ ; 宮本正興・楠瀬佳子訳, 2010『増補新版・精神の非植民

地化—アフリカ文学における言語の政治学』第三書館。

グギ・ワ・ジオンゴ；宮本正興訳, 2012『泣くな,わが子よ』第三書館。

楠瀬佳子, 1994『南アフリカを読む—文学・女性・社会』第三書館。

楠瀬佳子, 1999『ベッシー・ヘッド—拒絶と受容の文学, アパルトヘイトを生き
た女たち』第三書館。

『クリティーク 3』, 1986「特集・アフリカの文化と革命—カブラル」青弓社。

ケニヤッタ, ジョモ；野間寛二郎訳, 1962『ケニヤ山のふもと』（新しい人間双
書）理論社。

ゴードイマ, N.；土屋哲訳, 1975『現代アフリカの文学』岩波書店。

サルトル, J-P.；海老坂武他訳, 2000『植民地の問題』人文書院。

スピヴァック；清水和子・崎谷若菜訳, 1992『ポスト植民地主義の思想』彩流
社。

セゼール, エメ；砂野幸稔訳, 1997『帰郷ノート/ 植民地主義論』平凡社。

竹内泰宏, 1991『第三世界の文学への招待—アフリカ・アラブ・アジアの文学・
文化』御茶ノ水書房。

チュツオーラ, エイモス；土屋哲訳, 1970『やし酒飲み』晶文社。

土屋哲, 1978『近代化とアフリカ—新しい価値観への挑戦』朝日新聞社。

土屋哲, 1990『アフリカ抱擁—文化とアパルトヘイト』サイマル出版会。

土屋哲, 1994『現代アフリカ文学案内』新潮社。

ディネーセン, アイザック；横山貞子訳, 1981『アフリカの日々』晶文社。

デュボア, W.E.B.；木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳, 1965『黒人のたましい』未来
社。

寺尾隆吉, 2012『魔術的リアリズム—20 世紀のラテンアメリカ小説』水声社。

西川潤, 1971『アフリカの非植民地化』（叢書現代のアジア・アフリカ 9）三省
堂。

西川潤編, 1973『アフリカの独立』（ドキュメント現代史 12）平凡社。

日本アジア・アフリカ作家会議編, 1979『近代を考える』毎日新聞社。

日本アジア・アフリカ作家会議編, 1982『民衆の文化が世界を変えるために—ア
ジア・アフリカ・ラテンアメリカ文化会議の記録』恒文社。

日本アジア・アフリカ作家会議編, 1985『文化の支配と民衆の文化—第 2 回
AALA 文化会議報告集』社会評論社。

野間寛二郎, 1967『シンバと森の戦士の国』理論社。

橋本福夫編, 1963『黒人文学研究』（黒人文学全集別巻）早川書房。

橋本福夫, 1967『黒人文学の世界』未来社。

橋本福夫編, 1970『第三世界からの証言—全集・現代世界文学の発見 9』学芸書
林。

- 橋本福夫, 1989『橋本福夫著作集Ⅰ～Ⅲ』早川書房。
- ビコ, スティーヴ ; 峯陽一・前田礼・神野明訳, 1988『俺は書きたいことを書く
ー黒人意識運動の思想』現代企画室。
- ピーターサ, コズモ & マンロ, ドナルド編 ; 小林信次郎訳, 1975『アフリカ文学の世界ーアフリカ文学における抗議と闘争』(橋本福夫序論) 南雲堂。
- ヒューズ, ラングストン ; 木島始編訳, 1977『黒人芸術家の立場ーラングストン・ヒューズ評論集』創樹社。
- ファノン, フランツ ; 海老坂武・加藤晴久・鈴木道彦・浦野衣子訳, 1968『フランツ・ファノン集, 黒い皮膚・白い仮面 / 地に呪われたる者』(現代史戦後篇 16) みすず書房。
- ファノン, フランツ ; 鈴木道彦・浦野衣子訳, 1969『地に呪われたる者』(フランツ・ファノン著作集 3) みすず書房。
- ファノン, フランツ ; 宮ヶ谷徳三・花輪莞爾・海老坂武訳, 1984『革命の社会学』(新訳) (フランツ・ファノン著作集 2) みすず書房。
- 福島富士男, 1999『アフリカ文学読みはじめ』スリーエーネットワーク。
- フランクリン, ジョン・ホープ ; 井出義光・木内信敬・猿谷要・中川文雄訳, 1978,『アメリカ黒人の歴史ー奴隷から自由へ』研究社。
- ブリンク, アンドレ ; 越智道雄訳, 1976『SA! マイブイエ・アフリカ, アフリカをわが手に』三笠書房。
- ブリンク, アンドレ ; 奥野保男・芝實訳, 1987『見えない南アフリカを見る』晶文社。
- ブリンク, アンドレ, 大熊栄訳, 1990『白く乾いた季節』集英社。
- プレスリー, コーラ・アン ; 富永智津子訳, 1999『アフリカの女性史ーケニア独立闘争とキクユ社会』未来社。
- ベティ, モンゴ ; 砂野幸稔訳, 1995『ボンバの哀れなキリスト』現代企画室。
- ボアヘン, アドゥ編 ; 宮本正興責任編集, 1988『日本語版・ユネスコ・アフリカの歴史第七巻, 植民地支配下のアフリカ, 1880 年から 1935 年まで』同朋舎。
- ボアール, アウグスト ; 里見実・佐伯隆幸・三橋修訳, 1984『被抑圧者の演劇』晶文社。
- 堀田善衛編, 1968『民族の独立』(現代人の思想 17) 平凡社。
- ボールドウィン, J. & ミード, M. ; 大庭みな子訳, 1973『怒りと良心ー人種問題を語る』平凡社。
- ボールドウィン, ジェームズ ; 佐藤秀樹訳, 1975『アメリカの息子のノート』せりか書房。

マイナ・ワ・キニャティ； 楠瀬佳子・砂野幸稔・峯陽一訳，宮本正興監訳 1992，『マウマウ戦争の真実―埋もれたケニア独立前史』第三書館。

正木恒夫，1995『植民地幻想―イギリス文学と非ヨーロッパ』みすず書房。

松田素二，2003『呪医の末裔―東アフリカ・オデニョー族の 20 世紀』講談社。

松田素二・津田みわ編，2012『ケニアを知るための 55 章』明石書店。

宮本正興編，アフリカ文学研究会訳，1985『アフリカ人はこう考える―作家グギ・ワ・ジオンゴの思想と実践』第三書館。

宮本正興，1989『文学から見たアフリカ―アフリカ人の精神史を読む』第三書館。

宮本正興，2002『文化の解放と対話―アフリカ地域研究への言語文化論的アプローチ』第三書館。

宮本正興，2012『アフリカとの出逢い』アフリカ文学研究会。

ムファールレ，E.； 貫名美隆訳，1965『わが苦悩の町 2 番通り』理論社。

本橋哲也，2007『ポストコロニアリズム』岩波書店。

山形正男他訳，1975『黒人論集』（「ワシントン―デュボイス論争」ほかを収録，アメリカ古典文庫 19）研究社。

吉田昌夫，2000『アフリカ現代史Ⅱ東アフリカ』（世界現代史 14，第 3 版）山川出版社。

リキマニ，ムトニ； 丹埜靖子訳，1993『ケニアの女の物語』明石書店。

ルクレール，G.； 宮治一雄・宮治美江子訳，1976『人類学と植民地主義』平凡社。

歴史学研究会編，1994『世界史年表』岩波書店。

ワンボイ・ワイヤキ・オティエノ； 富永智津子訳，2007『マウマウの娘―あるケニア人女性の回想』未来社。

ケギ・ワ・ジオンゴ年譜

1938

1月5日：植民地下ケニアの中央州キアンブ県、リムルのカミリズ村の農民一家に生まれる。当時は、「白人専用高地」に指定された地域。父はジオンゴ・ワ・ドゥーシュ（ムランガ出身。60年代に死去）、母はワンジク・ワ・グギ（リムル出身。90年代に死去）。母は父ジオンゴの4人の妻の3番目。母ワンジクが生んだ6人の子供の5番目（兄弟3人の2番目）。他に、異母兄弟姉妹27人ほど。一家は、非キリスト教徒。土地を持たず、スコットランド伝道教会（CSM）の長老であるアフリカ人地主の借地人（ムホイ）。異母兄弟の内、2人が第二次大戦に従軍、1人が戦死。

1940

リムルに東アフリカ・バタ靴工場創業（1894年、チェコで創業。その後、外国資本と提携、世界レベルの生産高に）。近くのアップランズ・ベーコン工場（英国資本）は1909年創業。

1945

この頃から、民話ほか、口承文学に親しむ。

1947

リムル（一般に、ルンガイの名で知られた）のカマンドゥラ小学校（CSMが経営）に入学（1946年？）。この頃、両親離婚、母ワンジクが6人の子供全員を引き取る。

1948

カマンドゥラ小学校からマングオ・カリंगा小学校（ギクユ独立学校）へ転校（55年まで在学）。バタ靴工場を拠点に、ケニア人労働者のゼネスト。

1952

10月20日：ケニア中央州全土に非常事態宣言。ケニヤッタ逮捕。

1953

割礼を受ける。マウマウがゲリラ戦に転じる。53年から54年頃に、R. L. スティブンソンの『宝島』（簡約版？）他を読む。

1954

マングオ小学校がキニョゴリ地区へ移転、キニョゴリ小学校として植民地政府に接收され、同地区教育委員会の管理下に入る。英語が教育媒介言語となる。実兄ウォレス・ムアンギ（小学校卒業後、大工）がマウマウ戦士となり、56 年まで山にこもる。これにより、55 年、母ワンジクがカミリズ村ホームガード駐屯所で 3 ヶ月に渡り拷問を受ける。この頃（あるいは、55 年）、口と耳が不自由な義兄が、『一粒の麦』の登場人物ギトゴに似た状況下で植民地政府軍に銃殺される。

1955

キニョゴリ小学校（中等部）卒業。主に英語の成績優秀により、リムル全域から唯一人、ギクユ独立学校出身の唯一の生徒としてアライアンス高校へ進学（1959 年まで在学）。弁論部など課外活動に活発に参加した。この頃、政治的な言論を控えるよう校長から忠告を受け、のち敬虔なキリスト教信者となる。

1956

10 月 21 日：マウマウの指導者デダン・キマジ逮捕。
エドガー・ウォレスばりのスリラー短篇をケニアの新聞「バラザ」に投稿するも採用されず。

1957

2 月 14 日：デダン・キマジ処刑。9 月：最初の短篇「妖術を試す」を発表（アライアンス高校校内誌）。

1958

9 月：エッセイ「ボランティア活動のキャンプ」執筆（アライアンス高校校内誌）。寄宿寮の監督生（12~15 人単位の寄宿生の代表）となる。マケレレ大学英文科学生雑誌『ペンポイント』の前身『英文科雑誌』創刊。

1959

アライアンス高校卒業。ケンブリッジ・スクール資格試験で学内第 2 位。ガトゥンドゥのカフグイニ小学校で短期間教える。カンパラ（ウガンダ）のマケレレ・ユニバーシティ・カレッジ入学。ノースコート学寮に入る。2 年間の予備コースで英語、歴史、経済学などを選択。3 年間の英語優等卒業学位コース（3・1・1 コース。第 2, 3 学年で 1 分野のみを専修）に学ぶ。教室外（図書館）でアフリカ文学、西インド文学に親しむ。ピーター・エイブラハムズ、チヌア・

アチェベ、ジョージ・ラミング、シプリアン・エクウェンシらの作品に感銘。
学生組織の役員として、学内雑誌『学部学生』の復刊に尽力。

1960

1月12日：非常事態解除。12月：英文科の文芸誌『ペンポイント』第9号に、
短篇「いちじくの木」を発表。翌年にかけて、短篇・戯曲を継続執筆。

1961

3月：『ペンポイント』第10号に、短篇「風」を発表。4月：「ケニア・ウィークリー・ニュース」に短篇「村の牧師」発表。6月：「ケニア・ウィークリー・ニュース」に短篇「日照りとともに去りぬ」発表。10月：『ペンポイント』第11号に短篇「帰還」を、「ケニア・ウィークリー・ニュース」に短篇「そして、雨が降ってきた」を発表。年末にかけて、小説『黒人の救世主』を執筆。12月末締め切りの東アフリカ文学局主催の小説コンクール（英語部門）に投稿、最優秀賞を受ける（賞金50ポンド）。これを改訂出版したものが、『川を隔てて』（1965）。

学寮間対抗英語コンペティションで最初の戯曲「反抗者たち」を発表。ノースコート学寮生をキャストに、ウガンダ放送局により62年4月6日に放送。『ペンポイント』編集に参加。演劇部部員。

ニャンブラ（元ティゴニ在住の一族。土地没収の後、祖父の代からリムルへ移る）と婚約。78年までに6人の子供が生まれる。長男ジオンゴ（61）、次男キムニャ（63）、三男ドゥーシュ（65）、四男ムコマ（71）、長女ワンジク（72）、次女ジョキ（78）。

1961. 5~64. 8

ケニアの新聞「サンデー・ポスト」「デイリー・ネーション」「サンデー・ネーション」などに合計78編のコラム執筆。

1962

1月~6月：小説『泣くな、わが子よ』執筆。3月：ケニア人学生弁論部会の会計係に選出。6月11日~17日：「英語で書くアフリカ人作家会議」（マケレレ大学）に参加。アチェベ、ムパシエーレ、ラングストン・ヒューズらに会う。アチェベに『泣くな、わが子よ』の原稿を照会。9月：シェル石油奨学金を取得（63年にも取得）。10月：『ペンポイント』第13号に、短篇「わが心の、この傷」発表。11月16日~18日：戯曲「黒人の隠者」を、ウガンダ独立記念行事の一つとして、カンパラの国立劇場で上演。

62 年度、学寮間対抗英語コンペティションでの受賞作「こころの傷」（原題「わが心の、この傷」）が、ウガンダ演劇祭の検閲で拒否される。白人が黒人女性をレイプするという内容が問題であったらしい。『ペンポイント』編集委員（1964 年まで）。

1963

12 月 12 日：ケニア独立。

『黒人の隠者』の縮約版をマケレレ大学出版部より刊行。学生新聞「マケレレアン」記者。

1964

4 月：マケレレ大学卒業。卒業研究は、J. コンラッドの作品に関するもの。学部最優秀賞受賞。4 月～9 月：ナイロビで出ている「デイリー・ネーション」のコラム担当。編集長はヒラリー・グエノ（同紙初代アフリカ人編集長）。5 月：小説『泣くな、わが子よ』刊行。9 月：リーズ大学留学（ブリティッシュ・カウンシル奨学生。1967 年まで）。第 1 学期終了後、修士課程（2 年間）に入学。研究テーマは「西インド小説における疎外について—特にジョージ・ラミングの小説との関連で」。指導は、ダグラス・グラント教授（アメリカ文学、英文科長）。ただし、最終論文を提出せず、修士の学位は取得できなかった。『一粒の麦』執筆開始（当初の仮題は、『神と抗う』）。アーノルド・ケトル教授と彼を囲む学生グループから強い影響を受ける。学生の一人、グラント・カメンジュからフランツ・ファノンの著作を知る。マルクス、エンゲルスの著作を貪り読む。レーニンの『帝国主義—資本主義の最終段階』が‘eye-opener’となる。短篇「闇夜の逢引き」発表。

1965

1 月：『川を隔てて』刊行（『黒人の救世主』を改題）。1 月 25 日：ハイネマン社がリーズ大学で出版記念パーティ開催。

リーズ大学に学ぶアフリカ人学生の雑誌『アフリカ：伝統と変化』（イメ・イキデー編集）に参加。同誌に、執筆中の『一粒の麦』の一部を「塹壕」のタイトルで寄稿。デイビッド・クック編『オリジン・イースト・アフリカ』（『ペンポイント』に掲載された短篇・戯曲・詩を収録）に編集協力、改作した四つの短篇を寄稿。

1966

4 月：『泣くな、わが子よ』が、ダカールで開催された第 1 回世界黒人芸術祭

で英語部門最優秀小説賞受賞。ラングストン・ヒューズが審査委員長。6月：合衆国での国際ペン会議参加。11月：『一粒の麦』脱稿。

1967

1月：ロンドンをベースにした「カリブ芸術家運動」に初参加。アンドルー・サルキー、ジョン・ラ・ルース、オルランド・パターソンらと交わる。2月：第1回アフリカ・スカンジナビア作家会議（ストックホルム）参加。3月：第3回アジア・アフリカ作家会議（バイルート）参加。4月：『一粒の麦』刊行。7月：ケニアへ帰国。10月：ナイロビ大学英文科特別講師（同学科初のアフリカ人スタッフ）。11月：リーズ大学時代執筆の戯曲「明日の今頃」がBBCのアフリカ向け「アフリカ劇シリーズ」で放送（ブロック・モディサーネ、ロバート・セルマガ、コズモ・ピーターサラがキャスト）。

1968

10月：ヘンリー・オウル・アニンバ、タバン・ロ・リヨンとともに、英文科の廃止、代わりにアフリカ文学・言語学科の創設を提唱。
『黒人の隠者』刊行。

1969

3月：英文科を辞職。学問の自由の侵害、政府によるオギンガ・オディンガの学内での講演不許可が主な理由。新学科のシラバスの概要が完成（新学科創設の準備委員会委員長は、ロンドン大学のW. H. ホワイトリー教授）。4月：『ズカ』第3号に短篇「黒い鳥」発表。6月：「民族文化のために」（ユネスコへの提言）執筆。7月～翌年：マケレレ大学研究員。
小説『血の花弁』の構想を練る。

1970

3月：東アフリカ長老派教会第5回年次大会で講演。7月：マケレレ大学辞任。ノースウェスタン大学客員准教授（71年まで）。10月：『血の花弁』執筆開始。
『明日の今頃』刊行（リーズ時代の作品「反抗者たち」「こころの傷」も収録）。ジェームズ・グギの名前で発表した最後の作品となる。ナイロビ大学英文科改組。学科名称を文学科、言語学・アフリカ語学科として2学科が新たに誕生。

1971

8月：ナイロビ大学文学科講師に復職。

1972

7月：『東アフリカ・ジャーナル』第9巻7号に短篇「瞬時の栄光」発表。12月：同誌第9巻12号に、短篇「十字架の前の結婚式」発表。
評論集『ホームカミングーアフリカとカリブ海の文学・文化・政治に関する評論集』刊行。

1973

4月：上級講師に昇任。アフリカ人初の文学科長代行となる。6月：『ジョー』に、短篇「メルセデスの葬儀」第1部を発表。7月：同誌に、短篇「メルセデスの葬儀」第2部を発表。9月：第5回アジア・アフリカ作家会議（カザフ共和国アルマアタで開催）に参加、ロータス賞受賞。

1974

4月：実弟ジンジュ・ワ・ジオンゴが交通事故死。
ミシェレ・ギザエ・ムゴとの合作劇『デダン・キマジの裁判』執筆開始。

1975

6月：ウォーレ・ショインカ、デニス・ブルータスらによるアフリカ人作家同盟の結成を支持。9月：在ヤルタのソビエト作家同盟のゲストハウスに約1ヶ月滞在、『血の花弁』脱稿。
短篇集『秘めやかな生活』刊行（既発表の11短篇のほか、「グッドバイ・アフリカ」と「ベンツ族の男」を収録）。

1976

6月：カミリズ教育文化コミュニティセンターで識字教育が始まる。同センター文化プログラムの責任者となる。教育プログラムの責任者はグギ・ワ・ミリエ。8月：韓国問題緊急国際集会（東京、小田実らが主催）に出席。獄中詩人金芝河の釈放要求決議に賛同。
戯曲『デダン・キマジの裁判』刊行。同戯曲は、10月にケニア国立劇場で上演。12月：グギ・ワ・ミリエとの合作劇『したい時に結婚するわ』（ギクユ語版）執筆開始。
准教授に昇任。『十字架の上の悪魔』（仮題）を英語で執筆開始。

1977

2月：『デダン・キマジの裁判』がナイロビ大学巡回移動劇団によって上演。

1977 年度の第 2 回世界黒人芸術文化祭（ラゴス）へのケニアからの公式参加作品となる。4 月～6 月：『したい時に結婚するわ』の仮台本完成。6 月～10 月：カミリズ村で『したい時に結婚するわ』のリハーサル（演出は、ナイロビ大学文学科のキマニ・ゲシャウ）。7 月：『血の花弁』刊行。副大統領ムワイ・キバキの参加のもと、ナイロビで出版記念パーティ開催。9 月 21 日：名前を、グギ・ワ・ジオンゴに（改名の公式届出）。10 月 2 日：「したい時に結婚するわ」初演。野外劇場は 2,000 席。11 月 16 日：キアンブ地区長官が、同劇の上演許可を撤回。12 月 29 日：副大統領ダニエル・アラップ・モイがグギの政治拘禁令に署名。12 月 30 日～31 日：家宅搜索。書籍他を押収される。カミティ最高治安刑務所に拘禁。後に政府は、禁書 18 冊を所持していたため、公共治安維持法違反で逮捕したと非公式声明。後日、全書籍が返還された。

1978

1 月 12 日：「ケニア官報」（1 月 6 日付）が治安維持法により政治犯として拘禁したことを発表。1 月：日本アジア・アフリカ作家会議（野間宏議長）がケニヤッタ大統領に抗議電報。国際アムネスティが、「良心の囚人」に指定。ナイロビ大学学生が抗議ビラを撒く。計画された授業ボイコットは実行されなかった。世界中で抗議の声。7 月：日本ペンクラブが客員会員に決める。8 月 22 日：ケニヤッタ大統領死去。11 月 25 日：「グギを守る委員会」がロンドンのアフリカセンターでワークショップ開催。全政治犯の釈放をアピール。12 月 12 日：ケニア独立記念日。全政治犯釈放。カミリズ村で大歓迎。12 月 14 日：ナイロビ大学学生の釈放歓迎市中行進。

ロンドンのケニア・ハイコミッション前で「グギを守る会」およびパン・アフリカ作家・ジャーナリスト協会がピケを張る。ダルエスサラーム大学で 300 人以上のスタッフ・学生らが釈放要求のアピール。サセックス大学アフリカ人学生演劇グループが釈放要求の一環として「デダン・キマジの裁判」を巡回上演。拘禁中、全作品はケニア学校指定図書のリストから外された。獄中でトイレットペーパーに『十字架の上の悪魔』（ギクユ語）、『拘禁』の一部の執筆開始。

1979

1 月～5 月：本人及び家族に対する暴力的ハラスメントが継続。3 月：グギ・ワ・ミリエと深夜営業許可時間を越えて飲酒していたとの「でっち上げ」容疑で逮捕。4 月に罪状取消し。7 月 16 日：ナイロビ大学スタッフ約 400 名が署名して、復職をアピール。7 月 17 日：講演「ルーツへの復帰」（ケニア・プレスクラブ）。

1979~82

ナイロビ大学のカレガ・ムタヒ教授（言語学）を中心に、伝道団作成の旧正書法に代えて、ギクユ語新正書法の検討グループ発足。他にメンバーは、ガカアラ・ワンジャウ、グギ・ワ・ミリエら。

1980

5月30日~6月7日：「デダン・キマジの裁判」をナイロビ大学で、スワヒリ語で上演。演出はキマニ・ゲシャウ、出演はタマドゥニ劇団。

小説『十字架の上の悪魔』、戯曲『したい時に結婚するわ』（ともにギクユ語版）ナイロビで刊行。

1981

11月：カミリズ村で「母よ、我がために歌え」のリハーサル開始。11月4日~18日：日本アジア・アフリカ作家会議主催「アジア・アフリカ・ラテンアメリカ文化会議」（川崎市、藤沢市）に出席。この間、11月11日~15日：アフリカ文学研究会等主催「第三世界の民衆と文化運動」（京都市、シルクホール、京大楽友会館ほか）に、アレックス・ラ・グーマらと参加。

『拘禁—作家の獄中記』、評論集『政治のなかの作家』刊行。「デダン・キマジの裁判」をナイロビ大学で、スワヒリ語で上演。演出は、ムンビ・ワ・キニャティ、出演はタマドゥニ劇団。『十字架の上の悪魔』（ギクユ語版）が野間賞特別メンション。

1982

2月19日：政府が「母よ、我がために歌え」のケニア国立劇場での上演申請を却下。2月25日：ナイロビ大学での公開リハーサルに禁止処分。3月11日：カミリズ教育文化コミュニティセンターの登録抹消、同地域での演劇活動禁止。

「母よ、我がために歌え」上演のため、ジンバブエからのカミリズ劇団の招聘計画に政府が介入、実現せず。3月12日：カミリズの野外劇場の政府による取り壊し。後に、技術訓練所（ポリテクニク）の用地となる。5月：『川を隔てて』の改作劇をナイロビ大学で上演。6月：英語版『十字架の上の悪魔』出版記念のためロンドンに滞在。ケニア帰国後に逮捕が待ち受けているとの報により、ロンドンに残る。7月2日：ロンドン在住のケニア人亡命者らと「ケニア政治犯釈放運動委員会」結成。『十字架の上の悪魔』のスワヒリ語訳刊行。英語版『したい時に結婚するわ』発表。児童文学『勇敢な戦士と羽の生えたバス』（ギクユ語）刊行。

1983

『勇敢な戦士と羽の生えたバス』が野間賞特別メンション。評論集『ペンの銃身－新植民地ケニアにおける抑圧に対する抵抗』発表。ギクユ語小説『マティガリー戦場の生存者』執筆開始。

1984

5月15日～7月15日：バイロイト大学客員教授。7月～8月：オークランド大学で連続講演。10月～11月：ロンドンのアフリカセンターが「ケニア」関連プログラムを開催、「デダン・キマジの裁判」の英国内巡回上演を支援。ケニア政府が、イギリス政府に上演禁止を要求。イギリス政府は認めなかった。児童文学『勇敢な戦士とピストル』（ギクユ語）刊行。

1985

3月：ノースウェスタン大学で開催されたアフリカ文学会で基調報告（「新植民地主義に抗って書く」 *Writing Against Neocolonialism*）。ロンドン（イシリントン）のライター・イン・レジデンス。

1985

9月：スウェーデンで映画製作（86年6月まで）。西洋メディアでのアフリカ・イメージに関する「スウェーデンの中のアフリカ」、南ア制裁問題を扱った「血の色をしたブドウと黒いダイヤモンド」（20分もの）を制作。

1986

4月：ケニア議会が、反体制組織「ムワケニア」の代表としてグギを批難。5月：3週間拘留されていた野間賞作家ガカアラ・ワンジャウが、反体制組織「12月12日運動」（のちの「ムワケニア」）のリーダーがグギであると告白して釈放される。翌月、ガカアラは謎の交通事故。10月：ギクユ語小説『マティガリー戦場の生存者』刊行。3,346部を販売後、87年2月にケニアで発禁処分。

『精神の非植民地化』（オークランド連続講演を収録）刊行。児童文学『勇敢な戦士とクロコダイル首長』（ギクユ語）刊行。『新植民地支配に抗して書く』刊行。

1987

10月：ロンドンのケニア人反体制グループ「ウモジャ」の代表。『マティガリー』英語版（英訳は、ワングイ・ワ・ゴロ）刊行。

1989

イギリスよりアメリカへ移る。1992 年まで、エール大学客員教授。

1991

アマースト大学、スミス大学などで客員教授。

1992

8 月：アフリカ文学研究会・ウリ文化研究所主催「わたしたちと第三世界－アジア・アフリカ文学者会議」（京都精華大学、大阪 YWCA 他）に参加。海外からの他の参加者は、チナ・ムショーペ、デニス・ブルータス、ウィリー・コシツィーレ、ジェリ・ドゥング、サイド・アフメド・モハメドら。他に、金明植ほか韓国人作家 5 名。

ジェリ・ドゥングと再婚。ポール・ロブスン賞受賞。

2001 年まで、ニューヨーク大学比較文学・パフォーマンス学科教授。

1993

評論集『中心を動かす』刊行。映画「センベ－ヌ－アフリカ映画の成立」を共同制作。アメリカのブラック・スタディーズ協会から「ゾラ・ニール・ハーストン&ポール・ロブスン賞」受賞。

1994

ニューヨーク大学をベースに、ギクユ語雑誌『ムティイリ』（*Mūtiiri*）を編集。

ジェリ・ドゥングとの間に、ムンビ（女兒）誕生。

1995

ジェリ・ドゥングとの間に、ジオンゴ・キマジ（男児）誕生。

1996

オックスフォードでクラレンドン連続講演。フォンロン・ニコラス賞受賞（卓越した芸術性、人権尊重）。ニューヨーク・アフリカ学会から栄誉アフリカ賞受賞。

1997

評論集『政治のなかの作家』（改訂拡大版）を刊行。ハワイ大学で連続講演。

1998

評論集『ペンポインツ・ガンポインツ、そして夢』（クラレンドン連続講演を収録）を刊行。

1999

ケンブリッジでの講演で、ギクユ語小説『カラスの魔法医』の第四稿完成（総1,142 ページ）に言及。

2000

1 月：エリトリアで「21 世紀のアフリカ諸言語とアフリカ文学」を司会。「アスマラ（言語）宣言」を採択。10 月：アフリカ文学研究会主催「ジンバブエ・コミュニティ劇団来日公演」（京都、東京、大阪）に際し、アメリカから来日。同公演座長はグギ・ワ・ミリエ。劇団員 15 名。一人芝居のデール・バイアム（トリニダード出身）も来日公演。同時開催の「アフリカに関する国際シンポジウム：文化と開発」（アフリカ文学研究会主催。於、京都精華大学）で「文化・開発・アフリカ諸言語」と題して基調講演。

2001

カリフォルニア大学アーヴァイン校教授（英語・比較文学教授）、同大学創作・翻訳国際センター所長。

2002

モイ大統領引退。キバキ新政権に。

2003

南アフリカでスティーブ・ビコ記念講演。

2004

ギクユ語小説『カラスの魔法医』刊行。8 月：22 年ぶりにケニアへ一時帰国。ナイロビ大学、マケレレ大学、ダルエスサラーム大学を巡回講演。滞在中のナイロビの宿舎で、妻ジェリ・ドゥングとともに暴漢に襲われる。

2006

ギクユ語小説『カラスの魔法医』の著者自身による英訳版刊行。R. サンダース & B. リンドフォース編『グギ・ワ・ジオンゴは語るーケニア人作家とのインタビュー集』刊行。

2009

評論集『破れて、新しきものー一つのアフリカ・ルネサンス』刊行。同じ内容を『リ・メンバリング・アフリカ』と表題変更して、東アフリカ教育出版社からも刊行。

2010

自伝『戦時下の夢ー幼少期のメモアール』刊行。

2012

評論集『グローバレクティックスー知ることの理論と政治学』刊行。アライアンス高校時代を描く自伝『通訳者の館でーメモアール』刊行。

2013

評論集『母の名においてー作家と帝国についての再考』刊行。

2014

5月：バイロイト大学から名誉博士称号授与（これまでに、リーズ大学、ダルエスサラーム大学他多数から同称号を受けている）。

ケニア近現代史年表

1884~1885

1884年11月15日~1885年2月24日：ベルリン会議。大英帝国、ドイツ、オーストリア-ハンガリー、ベルギー、デンマーク、スペイン、アメリカ合衆国、フランス、イタリア、オランダ、ポルトガル、ルクセンブルク、スウェーデン、オスマン帝国が調印。いわゆる「アフリカ争奪戦」。

*イギリス東アフリカ協会結成（BEAA）。

1888

9月3日：帝国イギリス東アフリカ会社（IBEACO；BEAAを改名）に勅許状が付与され、東アフリカ統治を開始（ただし、7年後に解散）。

1889

*キアンブでイナゴによる作物大被害。

1890

7月1日：1886年の英独協定により、タンガニーカ本土はドイツ領、ケニア本土ならびにウガンダ全土はイギリス領となる。

*ルガード卿がダゴレッティにIBEACOの交易基地建設。海岸地域のタイタ人への討伐遠征で首長以下多数殺害。以後、各地への討伐遠征。ギクユ人のワイヤキ首長がダゴレッティの基地を攻撃・放火。盗み、婦女暴行、破壊行為等を理由に、マチャコスのカンバ人によるイギリス人への食料品不売運動。

1892

8月：ワイヤキ首長捕縛。一説に、生き埋めの刑に処されたと言われる。

*タイタ人への討伐遠征。

1894

6~7月：ギズングリ地域のギクユ人へ討伐遠征。6月に90人、7月にそれ以上殺害。

*ハイランド最初の白人入植民として、J. スチュワート・ワット夫妻が到着、翌年から、マチャコス付近に住む。

1895

7月1日：IBEACO に代わり、イギリスが東アフリカ保護領を宣言。8月：ケニア西部のチェタンベでブクス人、他のルヒヤ系住民を討伐。420人以上を殺害。牛 1,900 頭を接收。山羊、羊は無数。11月：ケニア西部でナンディ人の蜂起。最初の討伐遠征で 190 人を殺害。牛 230 頭、山羊・羊 2,400 頭を接收。1897,1900,1903,1905,1906 にも討伐遠征。12月：モンバサでウガンダ鉄道着工。

*ギクユ人口は約 30 万。

1896

8月：大陸本土側で鉄道建設が始まる。

*ルヒヤ系諸民族への討伐継続。

1897

*不満分子、規則違反者、平和と秩序を乱す者を「予防拘禁」、あるいは「移動制限」を課す権限が保護領政府に付与される。

1898

*浮浪者取締法制定。施しを求めたり、仕事もなくうろつくアフリカ人を留置できる。

1898~1900

*「大飢饉」(ヨーロッパから来た飢饉 Ng'aragu ya Ruraya)。ギクユ民族史上最大の飢饉。

1899

5月：鉄道建設工事がナイロビへ達する。

*ナイロビがマチャコスに代わって、ウカンバ(Ukamba)州都を兼ねる。ナイロビに鉄道工事本部設置。

1900

＊原住民通行取締法制定。ドイツ領への出入り、保護領内外での原住民の通行を制限するもの。「パス」（通行証）の代価は 1 ルピー。伝道団により、ナイロビ市内に最初のコーヒー農園開設。以後、アフリカ人によるサイザル、紅茶、除虫菊（1933 年以降）の栽培を制限。

1901

2 月：チャールズ・エリオット卿、東アフリカ保護領弁務官に就任、白人入植を推進。10 月 23 日：小屋税制定。物納、労働提供、現金納（年間 2 ルピー）のいずれかを選択。12 月 20 日：鉄道がビクトリア湖畔のキスム（旧名、ポートフローレンス）に達する。

1902

1 月 4 日：「東アフリカへのヨーロッパ人移民振興のため」の協会発足。以後 50 年間、同目的の組織が逐次結成された。共通点として、アジア人の入植に反対。3 月 5 日：ウガンダ東部の境界変更、インド洋からビクトリア湖までの高地がイギリス東アフリカ保護領に組み込まれる。9 月 27 日：王領地条例公布、「原住民が非占有」とされる土地の売却、またはリース（21 年間から 99 年間に延長）が認められる。非ヨーロッパ人は 5 エーカーの土地の 1 年間リースを認められる。9 月以降、リチャード・マイナーツァーゲン大佐によるギクユ人地域への継続的な討伐遠征。12 月：アフリカ人による最初のストライキで、モンバサの 50 人のアフリカ人警官が数日間の怠業。

＊原住民条例により、王領地内のアフリカ人農民を指定居住地に追放可能となる。部落長（のちの首長）条例により、その選出権を政府が掌握。小屋税の徴収、労働力の調達は部落長の義務となる。キングズ・アフリカン・ライフル部隊（KAR）編成。

1903

＊デラメア卿がケニア到着、10 万エーカーを、1 エーカーに付き年 0.5 ペニーでリース。南アフリカからの白人（特にイギリス人）入植開始。植民者農民協会を創設（1905~1910 年は入植民協会、以後コンベンション・オブ・アソシエーションズと改名）。保護領弁務官エリオットの命により、後の「白人専用高地」での非ヨーロッパ人の土地所有を制限。保護領内に原住民信用供与取締条例を制定。白人入植者、販売協同組合を結成。ナイロビがタウンシップに昇格。

1904

2月：マイナーツァーゲンによる北部ギクユ人討伐、約1,500人を殺害。エンブ地域討伐激化。その他、9~10月、グシイ人討伐。約100人を無差別殺害、牛3,000頭接收。

*マサイ人討伐激化。白人入植のため、リフトバレー全域からマサイ人の追放を計画。

1905

4月1日：東アフリカ保護領の管轄権が、外務省から植民地省へ移る。7月：ドイツ領東アフリカ（タンガニーカ）でマジマジ反乱（1907年8月まで）。10月19日：約10年間続いたナンディ人の抵抗の後、マイナーツァーゲンがナンディ人首長コイタレル・アラップ・サモエイを殺害。抵抗はなお継続。

*保護領首都がモンバサからナイロビへ。この頃、ケニア在住の954人のヨーロッパ人のうち700人が南アからの入植民。

1906

6月：エンブ地域への討伐遠征。407名殺害、牛3,180頭、ヒツジ50頭を接收。7月：「白人専用高地」（ホワイト・ハイランド）創設。

*マスター&サーバント条例施行。ナイロビ人口11,500。

1907

8月16日：総督の諮問機関として、立法審議会と行政審議会を設置。

*東アフリカ・インド人協会設立。

1908

1月：ウィンストン・チャーチルが‘Butchery’（屠殺）と呼んだ、グシイ人への討伐と大量虐殺。3月：モンバサ付近の政府農場労働者、鉄道労働者のスト。5月：カリンディでインド人鉄道労働者がスト。

*他でも、アフリカ人鉄道労働者のスト。ナイロビで人力車夫のスト。イギリスが100人の新首長を任命。

1909

＊集団懲罰条例制定。同一地域に住む原住民の一人でもが、犯罪を共謀もしくは犯罪行為を隠蔽した場合、全原住民に罰金刑。翌年、罰金の代わりに代替措置として強制労働を課す。1913、1914年には、財産没収および投獄処分が追加された。

1910

3月：人頭税（16歳以上の男子に3ルピー）導入。小屋税値上げ（小屋の数でなく、妻1人につき3ルピー）。

＊立法審議会初の（非公式）インド人代表として、A. M. ジェーバンジェーを暫定任命。

1911

＊カンバ人の間で、反植民地の千年王国運動。白人入植民優遇のため、ライキピアのマサイ人を渇水状態の南部指定居住地へ強制移住。ヨーロッパ人入植民の政治団体「コンベンション・オブ・アソシエーションズ」結成。

1912

5月：モンバサのアフリカ人船舶労働者、ナイロビの鉄道労働者のスト。10月16日：原住民条例（1902年の部落長条例に代わるもの）が政府任命の首長の権限を強化、強制労働制度が始まる。

＊当時のインド人人口は約25,000。ヨーロッパ人は約2,000。

1913

＊ルオ人の間でムンボ Mumbo（蛇神）信仰高まる。その影響下で、1914年、グシイ人が蜂起。ムンボ信仰の禁止処分（1954年）まで抵抗が続く。メ・カティリリ（女性）などに導かれて、海岸地方ギリアマ人の蜂起、人頭税と強制労働に反対（1915年まで）。

1914

7月：鉄道労働者が小屋税などに反対してスト。8月：第一次大戦勃発。キングズ・アフリカン・ライフル部隊をドイツ領東アフリカ戦線に動員。

＊ナイロビで最初の自動車が走る。

1915

5月18日：1902年の王領地条例改定。指定居住地内外のアフリカ人占有の土地にも適用。これにより、全アフリカ人が王領地内の借地人（tenants at will of the Crown, Ahoi アホイ）となり、土地権利証書を剥奪された。

*入植民への土地のリース期間は、999年に延長。向こう10年間に、ヨーロッパ人は7,500平方マイル、アジア人は22平方マイルを支配、アフリカ人の支配地は皆無。

9月4日：原住民従軍兵徴募条例により、首長の権限強化、35歳以下のアフリカ人を輸送部隊（キャリア・コー）に徴集。これにより、強制を含め165,000人を徴募。50,000人以上が疾病、過労、栄養失調等で死亡。各地の村で、男子人口が70~95%まで失われる。

*原住民登録法により、キパンデ制度制定（施行は1920年）。南アのパス法にならって、16歳以上のアフリカ人男子に携帯を強制。小屋税・人頭税が各5ルピーに値上げ。

1918

*原住民労働者条例により、農園労働者（借地人）と農園主の間に180日間（休日なし）の年間労働契約（賃金は支払われないこともあった）。同時に、アフリカ人の家畜飼養を制限。コーヒー作付登録条例制定（50年代までアフリカ人のコーヒー栽培不認可）。1918~19年インフルエンザ流行、約10万のギクユ人が死亡。旱魃、飢饉、牛疫などが追い討ち。

1919

*キクユ協会（KA）創設。土地没収や強制労働、増税などに反対したが、首長やキリスト教徒中心の体制側の組織。1932年頃に「キクユ・ロイヤル愛国者」と名称変更、以後自然消滅。立法審議会をヨーロッパ人代表（選挙）11名、アジア人代表（指名）2名に再編成。ただし、アジア人は1920年の選挙をボイコット。退役兵士入植計画実施。第一次大戦退役イギリス人兵士に、主にナンディ人地域の200万エーカーを999年間リース。ナイロビがMunicipalityに昇格。

1920

7月：東アフリカ保護領がケニア王領植民地・保護領となる（後者は海岸地帯の旧ザンジバル・スルタン領）。

*小屋税・人頭税が8ルピー（16シル）に増額。原住民登録条例を改定、キパンデ制度発効（戦後の労働力不足を補う措置となる）。

1921

5月：白人入植民がアフリカ人賃金の3分の1の削減を提案。原住民は1日数セントで生活可能との判断から。人力車夫のスト、大衆集会等での反対により実施見送り。6月：ハリー・ヅクにより、東アフリカ協会（EAA）結成（ギクユ人中心の「青年ギクユ協会」の名称で知られたもの）。賃金削減、土地没収、強制労働、小屋・人頭税値上げ、キパンデ制度に反対。白人支配の原則を認めず、伝統的な「誓約」で結束した。

1922

2月：EAAが、ギクユ地域からのヨーロッパ人の退去、ヨーロッパ人のための労働拒否、キパンデ制度の廃止（キパンデを国会内の芝生に投棄）を呼びかける。ニャンザ州に「ヤング・カビロンド協会」設立。3月14日：ハリー・ヅク逮捕。これに抗議して、ナイロビで、デモやゼネスト。3月15日：ヅクを拘留した獄舎（現ノーフォーク・ホテルの向かい。ナイロビ大学構内）を7,000~8,000名のデモ隊が取り巻く。警察の発砲により21名死亡（他に、27名、56名、150名、200名、あるいは千単位という説もある）。死者の中に、女性活動家ニャンジルを含む。7月：小屋税・人頭税が16シルから12シルへ減額。鉄道職工組合結成（翌年廃止されたが、1937年の労働組合条例につながる）。

*ヅクは無裁判で、海岸地方北部キスマユ（現ソマリア領）に8年間の拘留（1930年釈放）。EAAメンバー50名逮捕、EAA禁止処分。カンパラにマケレレ・カレッジ（前身）設立。当時、キパンデ制度の登録者数は435,584名。植民地大臣チャーチルが、白人専用高地の存続を入植民に約束。但し、セシル・ローズの「すべての文明人は平等」の原則にならい、ヨーロッパ人の標準に達した原住民とインド人をこれに含めた。当時の総督は、1923年の「デボンシャー白書」を先取りして、第一義的に「ケニアはアフリカ人の国で、イギリス白人の植民地ではない」と説明。

1923

7月：「デボンシャー白書」（「ケニアのインド人」）が、ケニアでは、アフリカ原住民の利益が最優先であると明記。

＊土地没収、増税、労働力徴募などに反対するナンディ人の抵抗。指導者アラップ・マニエイを10年間拘留。当時のアフリカ人人口は253万以下（1916年以前は400万と見積もられる。人口減は、西洋から持ち込まれた新たな疾病、第一次大戦での戦死、飢饉が三大原因）。

1924

＊住民評議会（LNC）発足。アフリカ人の政治活動を協力的に組み入れるため。EAAを継ぐものとして、キクユ中央協会（KCA）結成。政府の土地政策、立法審議会へのアフリカ人代表、ギクユ語での法律文書作成、キパンデ制度等をめぐって論議。伝道団による女子割礼、一夫多妻制度撲滅に抵抗、ギクユ独立学校運動につながる。キクユ中央協会は1940年禁止処分。

1925

＊1890～98年に始まったイトゥイカ（Itwika）祭礼（ギクユの伝統権力の世代間継承儀礼）を反植民地体制的として禁止処分。ギクユの伝統的政治権力（観念）の非合法化。ルオ同盟結成。

1926

＊プロテスタント各宗派の提携によりアライアンス高校（AHS）創立。キクユのスコットランド伝道団付近。アフリカ人生徒一期生は27名。アライアンス女子高校の創立は1948年。土地奪還と政治活動の寄金を求めて、「キムリ」（Kimuri「松明」）という秘密結社がリムルに結成。当時のナイロビ人口は29,860。

1928

＊ジョモ（ジョンストン）・ケニヤッタがキクユ中央協会（KCA）の書記長に就任。住民土地信託法制定（内容は、入植民の利益を守るもの）。自動車台数ケニア全土で5,000台、ナイロビにはその4分の3。

1928～31

＊ギクユの女子割礼問題が危機段階へ。聖職者の一部は、クリトリス切除への反対をギクユ中央協会に求めた。ドイツ人女性宣教師フルダ・シュトゥンプフの殺害。伝統的なムジリグ・ダンス、歌謡が非暴力抵抗手段となる。キ

リスト教徒と非キリスト教徒の亀裂が深まる。ギクユ・カリンガ教育協会（KKEA）、ギクユ独立学校協会（KISA）結成。

1929

3月：立法審議会での選挙によるアフリカ人議席を求めて、ケニヤッタがロンドン訪問、女子割礼問題にも言及。8月～10月：ケニヤッタがソビエト訪問。

＊世界経済恐慌始まる。

1930

9月24日：ケニヤッタがイギリスから帰国。12月28日：ハリー・ヅク釈放。

＊原住民土地信託法が、保留地は「永久に原住民諸部族の利益と使用」のためと規定。

1931

5月2日：ケニヤッタの英国滞在（1946年9月24日まで）。初めKCA代表として、東アフリカの情勢報告とロビー活動、ついで、ロンドン経済大学で人類学を研究、この間1932年8月頃～1933年8月まで、ソビエト滞在、「アフリカ人革命家養成学校」に学ぶ。ヨーロッパを旅行。

＊ビクトリア湖に近いカカメガ地方で金鉱発見。以後数年間、ヨーロッパ人が同地方に群がる。1934年頃がピーク。土地調査委員会（カーター・コミッション）を任命。鉄道がカンパラまで開通。

1933

＊換金作物として除虫菊の最初の収穫。当初は、白人入植民のみに栽培が許された。第二次大戦中、極東での需要拡大などで価格高騰。ヨーロッパ人入植者による所得税反対運動。

1934

＊インド人からなる東アフリカ労働組合結成。1949年に、東アフリカ労働組合連合（EATUC）に吸収。土地調査委員会が「ホワイト・ハイランド」の範囲を画定。ナイロビに公営バス開通。

1935

*ハリー・ヅクによってキクユ・プロビンス協会（KPA）結成。これは、植民地体制側の組織。原住民生産物市場管理条例（白人農民優遇策）を制定。

1936

*アフリカ人に対して白人専用高地での牛の飼養を禁止。借地人は、牛を売るか、保留地への移動を強いられる。山羊・羊の所有を厳しく制限。借地人は、妻1人につき1エーカーの割り当て地。東アフリカ労働組合総同盟結成。

1937

*労働組合条例が、すべての労働組合に登録義務を規定。1918年の原住民労働者条令の改訂により、借地人の労働供与義務は年間180日から240日、ついで270日に延長。

1938

*ケニヤッタの『ケニア山のふもと』（*Facing Mount Kenya*）刊行。カンバ社会で牛の売却危機。過放牧を理由に、恐ろしい安値で、アジ川のローデシア人精肉業者に牛の売却を強制するもの。植民地政府と缶詰業者と入植民の共謀とされる。これを受けて、ムインディ・ムビングらのカンバ人協会（Ukamba Members Association, UMA, 1937年末結成）がナイロビで抗議デモ（5月）。ルワンダの医療伝道団起源の信仰復活派の運動（ルワンダ復活）が、ウガンダを経て、ケニア西部へ急速に伝わる。

1938~39

*王領地条令、原住民土地信託法等により、白人専用高地を排他的に認定。

1939

1月7日：ギズングリ教員養成学校開校。コイナンゲ元首長の支援、その息子ピーター・ムビユ・コイナンゲが校長。6月：タイタ人200名以上がタイタ・ヒルから強制退去。これの抗議運動が7,8月に拡大。モンバサで港湾労働者が賃上げ要求スト、150名以上を逮捕。9月3日：第二次大戦勃発。

*非常事態権力令制定、総督に対して、立法・裁判によらずに、何人をも拘禁、国外退去命令権を承認。ナイロビの労働者人口27,769、うち公務員17,000。

1940

5月30日：反英の秘密誓約を実行しているとしてキクユ中央協会（KCA、会員約7,000名）、UMAなどの禁止処分。秘密の「誓約」をたてたとして、指導者23名を拘禁処分。多数のメンバーが地下活動に入る。6月、イタリア軍がエチオピアよりケニア北部へ侵攻、東アフリカでの第二次大戦始まる。9月1日：ケアリー・フランシスがアライアンス高校第二代校長に就任。当時までに550人の生徒を受け入れた。

*リムルのバタ靴工場創業（チェコ、のちにカナダ資本を吸収）。

1940~45

*キングズ・アフリカン・ライフル部隊（KAR）に約75,000人を徴集。多数がスワヒリ語と英語の識字能力があり、うち約3分の1が中東、インド、ビルマ戦線に従軍。インドの独立運動、アメリカ黒人の主張などを知る。「白人万能神話」崩れる。

1941

*主にリムル出身の、土地を失ったギクユ農民がオレングルオネ（マサイランド内）へ強制移住。彼らは、アホイ（借地人）でなく、その土地は補償の代替地であると考えた。

1943

*「キャッサバの飢饉」（前年のトゥモロコシの不作の結果、キャッサバでウガリを作ったことからこの名がある）。イタリア人戦争捕虜によるナイロビ－ナクル道路の建設。後に舗装化。

1944

10月：ケニア・アフリカ人同盟（KAU）結成。

*エリウド・ワンブ・マヅが立法審議会最初のアフリカ人指名代表となる。「コンベンション・オブ・アソソエーションズ」の後身として、ヨーロッパ人政治団体「有権者同盟」（Electors' Union）発足。100名以上のアメリカ黒人兵士が、ギヅングリ教員養成学校を訪問、大歓迎を受ける。オレングルオネのギクユ農民4,000名が「誓約」をたて、政府の土地政策に反対。当時のギクユ総人口は、約130万。

1945

8月15日：第二次大戦終わる。ナイロビで、ミジケンダ同盟結成。

1946

9月24日：ケニヤッタが15年ぶりに帰国。

＊立法審議会に2人のアフリカ人代表。ナイロビ・アフリカ人タクシードライバー組合（政府承認の労働組合第1号）結成。ナイロビ人口6,7000。

1946~47

47年2月1日、約250名のリムルの借地人が政府の土地政策に抗議デモ。6人逮捕。

＊リムルのギクユ人ハイランド借地人協会で騒擾広まる。

1947

1月13日~25日：モンバサで15,000名規模のゼネスト。チェゲ・ワ・キバチアがリーダー。都市機能麻痺。400人逮捕。6月1日：ケニヤッタをKAU委員長に選出。8月：インド独立。8月22日：チェゲを逮捕。

＊キパンデ制度に代えて、身分証明カードを全人種に適用（50年、ヨーロッパ人を同制度の適用外とし、事実上、キパンデ制度は名称を替えたのみとなる）。

1948

＊立法審議会に4人のアフリカ人代表。キアンブ地区農民を最初に、ギクユ人の集団誓約が始まる（マウマウ運動の予兆）。東アフリカ高等弁務府発足。ナイロビ人口258,085。ケニア都市人口の48%を抱える。この頃、ギクユ総人口102万、うち22万が借地人。リムルのアップランド・ベーコン工場（イギリス資本）、バタ靴工場（チェコ他多国籍資本）でスト。アライアンス女子高校創立。

1949

5月1日：5つの組合を結集して、東アフリカ労働組合連合（EATUC）結成、委員長フレッド・クバイ、総書記マカン・シン。9月：「有権者同盟」が「ケニア計画」を発表。10月：運輸関連労働組合の2,000人による16日間のスト。オレングルオネの約4,000人のギクユ農民に退去命令。

＊「ビーチャー報告」（アフリカ人教育に関する10年計画）。マケレレ・カレ

ッジがロンドン大学と提携。1950 年当時、大学教育を修了したケニア人は 6 名。

1950

3 月 30 日：ナイロビへの勅許 (Royal Charter) 付与に対して、EATUC による戦後最大の反政府デモ。ナイロビを「自治都市」(Municipality) から市 (City) へ昇格させるもの。アフリカ人が中心域から周辺部に撤退することになる。

5 月 16 日~25 日：フレッド・クバイ、チェゲ・ワ・キバチア、マカン・シンなどの逮捕に起因してナイロビで 10 万人規模のゼネスト。釈放要求、EATUC の承認要求、賃上げ、非暴力・非協力がスローガン。鎮圧のために催涙ガスがはじめて使用される。6 月 3 日：マウマウ (Mau Mau) の用語が初めて印刷物で使用。8 月 12 日：「マウマウ」を狂気の宗教的秘結社として禁止。

1951~52

*マウマウの「宣誓」(「団結の宣誓」) が広まる。オレングルオネで集団宣誓。スト、怠業、焼き討ち、家畜殺しなど騒擾拡大。52 年当時、英国諜報機関によれば、マウマウ宣誓にかかわったギクユ人は約 25 万とされる。

1951

5 月 17 日：アフリカ人の政治代表、差別立法廃止、アフリカ人子弟への教育支援、集会・移動の自由等を求めて、KAU のケニヤッタ、ピーター・ムビユ・コイナンゲらが植民地省に陳情。

*立法審議会へのアフリカ人代表 8 名に増加。ただし、ヨーロッパ人メンバーも 11 名から 14 名に、インド人は 5 人から 6 人へ。コイナンゲ、アチエン・オネコらが KAU 代表として、土地問題について英国政府に陳情 (67,000 人の署名)。英国政府はこれを無視、その結果、パリの国際連合に提訴。

1952

1 月：マウマウ戦争評議会結成。2 月 6 日：エリザベス王女がケニア訪問中に、イギリス女王に。4 月：政府が、ゾクや L. S. B. リーキーらの協力で「マウマウ」の宣誓者の「浄化」「リハビリ」キャンペーン。7 月：入植民有力者がケニヤッタの逮捕、非常事態宣言の必要を示唆。7 月 26 日：ニエリで開かれた KAU 集会に 25,000 名参加。ケニヤッタ、カギア、オネコらが演説。ケニヤッタが「我々をマウマウだと呼ぶのは正しくない。マウマウとは何のことか知らない」と演説。8 月 24 日：政府側に立つワルヒウ首長がキアンブの集

会でマウマウを批判。9月29日：新総督イブリン・ベアリングがケニア着。10月7日：ワルヒウの白昼暗殺。10月20日：非常事態宣言。ケニヤッタの他185名逮捕。12月3日：カペンゲリアでケニヤッタ他の裁判開始。

*ギクユ独立学校の閉鎖、廃校。6万の生徒が学校を失う。リフトバレーの10万のギクユ借地人を指定保留地へ移送。自動車台数ケニア全土で2,000、うちナイロビに4分の3。

1953

3月26日：ラリ村（リムルの北方8マイル）で、首長を含め97名虐殺。マウマウがナイバシャ警察署を襲撃。4月8日：ケニヤッタ他5人が有罪となり、7年の強制労働刑決定。6月：ジョージ・アースキン将軍到着。ホームガードの駐屯所、要塞村などの建設始まる。6月8日：マウマウに関与しているとして、KAU非合法化。他のアフリカ人政治結社の禁止処分。6月～9月：キアンブで全戸約8万の要塞村化（非常事態村）進む。9月：政府のマウマウ討伐隊約5万。

*闘争のゲリラ化。

1954

1月15日：ワルヒウ・イトテ（チャイナ将軍）負傷・拘禁。4月24日：約1ヶ月間の「かなとこ作戦」（Operation Anvil）開始。ナイロビのアフリカ人住民尋問、27,000名を逮捕。29名の労働組合指導者を拘禁。1ヶ月間に、25,000名の警官と兵士が10万のアフリカ人を検挙し、うち半数を拘留キャンプへ送った。7月、ヨーロッパ人政党UCP結成。

*リトルトン憲法制定（立法審議会代表を人種間で同数にすることを盛り込む）。

1956

10月21日：デダン・キマジの逮捕。10月24日：ナイロビ大学の前身、東アフリカ・ロイヤル・テクニカル・カレッジ開校（学生数215名）。

1957

2月14日：デダン・キマジ処刑。3月6日：ガーナ独立。

*立法審議会アフリカ人議員8名選出（ただし、代表者数の不公正を理由に、

うち 6 名が認証拒否)。

1958

* 立法審議会にアフリカ人議席 6 を追加(全 14 名)。ヨーロッパ人議席 14 名、インド人議席 8 名。

1959

3 月 3 日：ホラ虐殺 (11 名の拘留者の殺害。ホラは、海岸州タナ川流域の人口 2,000 の村)。4 月 14 日：ケニヤッタ他を釈放、ついでロドワーに移し、拘禁。

* 秘密の「人民結社」(Kiama kia Muingi) の会員を、マウマウの再来として拘禁。当時の立法審議会は、アフリカ人代表 25 名、インド人代表 15 名、アラブ人代表 5 名、ヨーロッパ人代表 46 名。ホワイト・ハイランド、教育施設等での人種制限条項を撤廃。ケニア国民党 (KNP)、ケニア独立運動 (KIM) 結成。

1960

1 月：ランカスター・ハウスで憲法会議。1 月 12 日：非常事態終結宣言。2 月 3 日：英国首相ハロルド・マクミランが南アフリカ議会で、大陸全土に「変革の風」と演説。(9 月：ンクルマは「吹き荒れるハリケーン」と表現)。3 月：ケニア・アフリカ人民族同盟 (KANU) 結成。ロドワーに幽閉中のケニヤッタが委員長。6 月：ケニア・アフリカ人民主同盟 (KADU) 結成。

* 当時、ケニア人大学生は、1,159 名が英国で、440 名が合衆国で、51 名が共産諸国で、396 名がマケレレ大学で学んでいた。

1961

2 月：立法審議会総選挙、KANU67%、KADU16%を得票。ただし、ケニヤッタ幽閉中のため、KANU は政権を取らなかった。6 月 25 日：ロイヤル・テクニカル・カレッジがロイヤル・カレッジ・ナイロビと改称、ロンドン大学と提携。8 月 14 日：ケニヤッタ釈放。9 月：白人専用高地を全人種に開放、アフリカ人入植計画を発表。10 月 28 日：ケニヤッタ、KAU 総裁に就任。

1962

1 月：ケニヤッタを立法審議会に選出。2 月 14 日~4 月 6 日：ランカスター・

ハウスで第2回憲法会議。11月：KANUが、ケニア東北部でのソマリ人分離運動に反対声明。

1963

5月：1人1票の総選挙で、KANU圧勝。6月1日：ケニア自治獲得。ケニヤッタが首相、部族主義の克服、スローガン「ハランベ」(「力をあわせよう」=「挙国一致」)を導入。以後、マダラカ・デイ(「自治の日」)として祝日に。
5月：アフリカ統一機構(OAU)発足。6月：ニエレレ、ケニヤッタ、オボテがナイロビで「東アフリカ連邦」結成について協議。6月28日：東アフリカ大学(ナイロビ、ダルエスサラーム、マケレレを連携)発足。12月12日：コモンウェルス内で独立。12月28日：ケニア土地自由軍降伏。1964年1月15日まで期限付きでマウマウ戦士にアムネスティ。

1964

1月：軍隊内で反乱発生。11月10日：KADU解散。12月12日：新憲法制定により、コモンウェルス内で共和国宣言。大統領はケニヤッタ、副大統領はオディンガ、内務大臣はモイ。「共和国宣言日」(Jamhuri Day)として祝日に。

*教員養成大学としてケニヤッタ・カレッジ創立。ロイヤル・テクニカル・カレッジがユニバーシティ・カレッジ・ナイロビとして東アフリカ大学の一部に。
1965年にかけて、ストライキを非合法化。労働組合の弱体化始まる。

1965

2月24日：ピオ・ガマ・ピント暗殺。4月：マルクス・レーニン主義を標榜、ケニヤッタ他の指導者を批判する「アフリカ革命」文書を禁止処分。5月：ユニバーシティ・カレッジ・ナイロビのロンドン大学との提携廃止。

1966

3月：リムルのKANU大会で保守勢力多数。オディンガ副大統領罷免。4月：ルオ人を中心に、オギンガ・オディンガ、ビルラド・カギアラでケニア人民同盟(KPU)結成。主にケニヤッタの経済政策に反対。KANU勢力が国会からKPUメンバーを追放。共産三国大使館員の国外追放。6月：KPUメンバーの拘禁、ナイロビでの集会禁止処分。

*無裁判拘禁、検閲、非常事態宣言などを定めた公共治安維持法存続決まる。

1967

2月：タンザニアで「アルーシャ宣言」（ウジャマア社会主義）。7月26日：『毛沢東語録』禁書に。のちに、北京の外国語出版社の刊行物を禁書に指定。10月：革命を準備しているとして、ケニヤッタが KPU を批難。12月1日：ケニア、タンザニア、ウガンダが東アフリカ共同体結成（77年解体）。

1968

3月：不法集会罪で、KPU のカギアを投獄。ボストン大学での講演を予定していたオディンガのパスポート没収。

* KPU メンバー20名が KANU へ合流。ナイロビに浮浪者取締法制定。

1969

1月27日～2月12日：ナイロビ大学閉鎖。政府がオディンガの学内での演説を禁止。これを契機に学生の抗議デモ。学生5名の退学処分。グギ・ワ・ジオンゴが政府に抗議、ついで大学辞職。7月5日：トム・ムボヤ（経済企画大臣。ルオ人）、ナイロビで暗殺。暴動広がる。10月：キスムで反ケニヤッタ騒擾。オディンガ、アチエン・オネコ（KPU 広報書記）および6名の KPU 国会議員の拘禁。政府転覆を計画しているとして、KPU 禁止処分。事実上 KANU の一党制になる。12月～1970年1月の予備選挙で、現職国会議員の62%が落選。

* ギクユの宣誓儀礼盛んになる。ナイロビ人口 509,286。ケニア都市人口の81%を抱える。人口増加率 7.3%。

1970

1月3日：ケニヤッタ 2 選（以後任期 5 年間）。7月1日：東アフリカ大学解体、ナイロビ大学、マケレレ大学、ダルエスサラーム大学の発足。ナイロビ大学は、64年末当時の学生数 275 名が約 3,000 名に増加。

1971

1月：ウガンダでクーデター、アミンが政権奪取、2月に大統領に。3月：オディンガ他多数の KPU 拘禁者釈放。10月：オディンガが KANU に復帰。

* モンバサとラゴスを繋ぐアフリカ横断ハイウェイ建設委員会結成（ただし、

計画倒れ)。

1972

7月：ナイロビ大学学生授業ボイコット、市中暴動。56名逮捕、49名罰金ないし6ヶ月投獄、3名を放校処分。ナイロビ大学学生自治会解散命令。8月：ウガンダ政府、アジア人の国外追放を宣言。

1974

2月25日：2,000名の学生騒擾で警察が警棒と催涙ガスで鎮圧。以後、ナイロビ大学全面閉鎖。7月：スワヒリ語を公用語・国家語に指定、英語は公用語。8月：ケニヤッタ大学、ナイロビ大学閉鎖（75年1月まで）。以後、両キャンパスでは許可のない集会は禁止。9月：ケニヤッタ3選（任期5年）。

*大統領令により、ストライキ全面禁止。

1975

3月2日：J. M. カリウキ暗殺。5月28日：ナイロビ大学閉鎖（6月8日まで）。8月：ケニア・タンザニア間の鉄道輸送停止。国境閉鎖へ発展。10月15日：反体制国会議員マーティン・シクク、ジーン・マリー・セロニーを拘禁。

*この頃、ナイロビ人口の4分の1がスラムに住む。

1976

2月：ウガンダのアミン大統領、ケニア西部の領土権を主張。

1977

2月：東アフリカ航空解体、ケニア航空設立。タンザニア・ケニア間国境封鎖。4月：KANU 党大会無期延期。6月：東アフリカ共同体、事実上解体。12月30/31日：グギ・ワ・ジオンゴ逮捕、カミティ最高治安刑務所に拘禁。145名の元マウマウ戦士が保証を要求。

1978

5月12日：南アフリカの心臓外科医クリスチャン・バーナードがケニヤッタを診察。8月22日：ケニヤッタ死去。10月10日：副大統領ダニエル・アラップ・モイが大統領就任。10月18日：ナイロビの「ガバメント・ロード」を「モイ・アベニュー」と改称。12月12日：独立記念恩赦により、グギ・

ワ・ジオンゴ他、26 名全員の政治犯を釈放。

1979

*この頃、ナイロビ人口 82,7775。

1980

2 月：ナイロビ大学、ケニヤッタ大学で一時閉鎖。6 月：合衆国と秘密軍事協定調印（軍事援助増大と引き換えに、モンバサ、ナイロビなどの港湾、飛行場の使用許可）。7 月：ケニア公務員労働組合、ナイロビ大学学生自治会、ナイロビ大学教職員組合を禁止。9 月：モンバサでケニア人女性を殺害したアメリカ人に 500 シリングの保釈金で無罪放免。

*ガリッサでソマリ系住民 300~400 人を殺害（政府命令によると言われる）。

1981

*ナイロビ大学に「マルクス主義教員」がいるなどとして 3 月（J. M. カリウキ記念シンポを計画）、5 月（大学閉鎖、ストライキ禁止措置に反対する集会を計画）に閉鎖。5 月：「デイリー・ネーション」主筆ら 6 人を逮捕。6 月：ナイロビで OAU 首脳会議開催。

1982

5 月：ケニヤッタ大学閉鎖。5 月 26 日：社会主義政党を準備しているとして、オディンガを KANU から追放。その後、パスポート没収。6 月：モイ大統領がナイロビ大学文学科のシラバスを批判、グギ、ミシェレ・ムゴ、マイナ・ワ・キニャティ、センベーン・ウスマンなどの作品を名指しで批判。6 月 3 日：歴史家マイナ・ワ・キニャティを拘禁。その後、「パンバナ」（*Pambana*）等「治安攪乱」文書所持の疑いなどで、大学人の拘禁続く。6 月 9 日：法律上、KANU の一党制国家となる。7 月 2 日：ロンドンでケニア政治犯釈放運動委員会（CRPPK）結成、ジョン・ラ・ルース（トリニダード出身。ニュービーコン出版社長）が代表、「ケニア・ニュース」（*Kenya News*）を発行。支援団体が、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、日本、合衆国、ナイジェリア、レソト等に結成。7 月：無裁判拘禁制度を批判した「スタンダード」紙の編集長ジョージ・ギジイを解任、パスポート没収。8 月 1 日：空軍（約 2,500 名）によるモイ政権打倒のクーデター未遂（死者 1,500~2,000 名。但し、政府発表は 129 名）。8 月 21 日：空軍の解体。ナイロビ大学 14 ヶ月閉鎖。

1983

8月：大統領選挙、モイが無投票で再選。9月：総選挙。

＊ナイロビ人口 100 万突破。

1984

2月：北東部州ワジルで、ソマリ系住民数百人（数千人とも言われる）が政府軍により虐殺。他にも、ポコト人虐殺（800~1,000人）など。6月：公務員をKANU 党員に限定。

1985

2月：学生運動指導者の追放などを理由に、ナイロビ大学学生による授業ボイコット。グギ・ワ・ジオンゴの復職などを要求。警察による学生の逮捕、投獄、殺傷害に続き、大学閉鎖 10 週間。7月：ナイロビで世界女性会議。10月：エルドレトにモイ大学開校（学生 5,000 人を収容）。

1986

3月：「ムワケニア」（Mwakenya = Muungano wa Wazalendo wa Kuikomboa Kenya 「ケニア解放愛国者同盟」：社会主義運動の地下組織）の広報活動活発化。「ムパタニシ」（*Mpatanishi* 「調停者」）、「ムザレンド」（*Mzalendo* 「愛国者」）、「パンバナ」（*Pambana* 「戦うぞ」）などの「治安攪乱」文書が出回る。以後、大学人・知識人のジンバブエ、イギリス、スウェーデン、ノルウェイ、オーストラリア、合衆国等への亡命増える。6月：公共の場での「ムワケニア」論議を禁止。7月 30 日：「デダン・キマジの裁判」ロンドン公演（84 年）のプロダクション・マネジャー、ワニリ・キホロ（弁護士）を罪状説明なく拘禁、国際アムネスティが直ちに良心の囚人に指定（89 年 6 月 1 日釈放）。8月：KANU が匿名投票でなく「行列式」投票を決める。この頃、ケニアでは 1,000 人以上の政治犯を拘禁していたとされる。

＊立法と司法の権限を KANU に集中。法曹界、宗教界で、全体主義批判が高まる。ストライキ禁止令にもかかわらず、工場労働者による 65 回のスト、42,527 名が参加。

1987

2月 18 日：キマジ没後 30 年、ロンドンでケニア人亡命者が「ウケニア」

(Ukenya「ケニア統一」民主化運動)を結成、のちに、「ウモジャ」(Umoja「統一」10月、ロンドンで結成)に合流、これらは「ムワケニア」と連帯するもの。6月:「ムワケニア」のメンバーであるとの嫌疑で700名以上を拘留・拷問。7月:国際アムネスティがケニアの人権問題を暴露報告。12月:モイ大統領が国際アムネスティを激しく批判、関係者のケニア入国があれば「逮捕する」と言明。

1988

2月:モイ大統領、無投票で三選。3月21日:総選挙。投票権はKANU 党員のみ。

1990

2月:外務大臣オウコの殺害。

1991

*モイ政権、複数政党制復活を決定。

1992

12月:複数政党制下での大統領選挙と国会議員選挙。モイ大統領四選。

1997

12月:大統領・国会議員選挙。モイ大統領五選。

1999

7月:モイ大統領、スーダン国境の閉鎖を発表。11月:ケニア、ウガンダ、タンザニア3国が「東アフリカ共同体」条約に署名。

2002

12月:モイ、政界を引退。ムワイ・キバキ(ギクユ人。国民虹の連合NARC)が大統領に当選。KANUは第二党へ。ライラ・オディンガ(ルオ人。オギンガ・オディンガの息子)が副大統領。

2007

12月:大統領選挙。キバキ二選(国民統一党、PNU)。野党候補は、ライラ・オディンガ(オレンジ民主運動、ODM)。不正選挙の声高まる。

2008

1 月：大統領選の結果、各地で暴動、治安部隊と衝突。殺人、放火、襲撃など。特にリフトバレー州で、民族対立、いわゆる「民族浄化紛争」激化。2 月末までに死者千数百名、数十万の避難民。3 月：憲法改正、首相職を設ける。

2009

4 月：挙国一致連立政権誕生。大統領はキバキ、首相はライラ・オディンガ。
6 月：元マウマウ戦士が植民地期の「拷問」で、英国政府に補償と謝罪を要求。

2010

8 月：新憲法制定。

2011

* 2007 年選挙後の騒擾、いわゆる「選挙後暴力」の責任者として、ハーグの国際裁判所が、副首相ウフル・ケニヤッタ（与党 PNU、ケニヤッタ初代大統領の息子）、ウィリアム・ルト（野党 ODM の副代表。カレンジン）らを訴追。

2013

3 月：大統領選、総選挙。ウフル・ケニヤッタが大統領に当選。ウィリアム・ルトが副大統領。野党候補ライラ・オディンガは不正選挙を告訴。6 月：英国政府が、マウマウ戦争期の被害者に補償と謝罪を決める。補償対象者約 5,200 名。補償金各 2,600 ポンド。

* 作成にあたっては、「参考文献」リストに表示したような内外の各種文献を適宜利用した。邦語文献では、歴史学研究会編『世界史年表』（岩波書店、1994）、吉田昌夫著『アフリカ現代史Ⅱ東アフリカ』（世界現代史 14、山川出版社、2000）、外国語文献としては、G. S. P. Freeman-Grenville, *Chronology of African History*, Oxford University Press, 1973 などを利用したが、Carol Sichermann, *Ngugi wa Thiong'o : The Making of a Rebel, A Source Book in Kenyan Literature and Resistance*, Hans Zell Publishers, 1990 に最も多くを負っている。ただし、これらの文献の間で記述上の異同がある場合には、独自に判断した。

現代アフリカ文学作家紹介

アイドゥ、アマ・アタ (Aidoo, Ama Ata)

[生] 1942.3.23 アベアジ

ガーナの女性詩人・劇作家・短篇作家。ケープコーストのウェスレイ女子高校で学び、1964年にガーナ大学を卒業。スタンフォード大学でも学んだほか、ガーナのケープコースト大学で教えた。60年代後半から諸雑誌で活躍。在学中に執筆し、ガーナ大学の学生劇場で上演した『幽霊のジレンマ』(*The Dilemma of a Ghost*, 出版は1965年)などが好評を博した。外国留学から戻ったガーナ人青年と、アフリカ系アメリカ人の妻とが、故郷の村で経験する文化的蹉跌を主題としたもの。第2作『アノワ』(*Anowa*, 1970)は、ガーナの伝承民話を劇化したもの。結婚相手を自分の意志で決めた娘と両親との対立を軸に、西洋流の個人主義とアフリカの伝統的価値観との相克が悲劇に結果する過程を描いている。短篇集『ここに、優しさはない』(*No Sweetness Here*, 1970)は、田舎の伝統文化と、都会に見られる新しい文化の衝突を主題としている。ローリングス政権下の1982年、教育大臣に就任。のちジンバブエへ移り、2014年現在、在合衆国。ほかに、最初の小説『アワー・シスター・キルジョイ』(*Our Sister Killjoy*, 1977)、詩集『折々の歌』(*The Song of Occasion*, 1985)、児童文学などがある。代表的なフェミニストで、作品にはオラリティ(話し言葉)が巧みに組み込まれている。

アウノー、コフィ (Awoonor, Kofi)

[生] 1935. 3.13 ウェタ

[没] 2013. 9.21 ナイロビ (集団テロによる犠牲)

ガーナの詩人・小説家。1968年に改名するまで、George Awoonor-Williamsの筆名を使う。ガーナ大学、ロンドン大学、ニューヨーク州立大学などで学んだ。ケープコースト大学文学部長を務めたが、長くニューヨーク州立大学でも教えた。駐フランス、駐キューバ大使他、国連大使も務めた。その詩は、出身のエウエ民族のフォークロアの影響が濃く、フランス、ドイツ、ロシア、中国などでも翻訳されている。ナイジェリアのムバリ出版局から出た第1詩集『再発見、その他』(*Rediscovery and Other Poems*, 1964)や、第2詩集『夜のような、わが血』(*Night of My Blood*, 1971)で民族的伝統の再発見を謳っている。作家活動以外にも、ガーナ映画産業への参加、文芸誌『オキエアメ』(*Okyeame*)の編集など、活躍は多方面に渡る。作家連盟を代表して中国を訪問したこともある。小説に、独立後の社会の腐敗の構造や偽善を描く『この大地、わが同胞』(*This Earth, My Brother*, 1971)がある。ガーナの詩人たちの作品集『メッセー

ジ：ガーナ詩集』(*Message : Poems from Ghana*, 1971) を編集。ケープコースト大学で教えるためニューヨークから帰国直後、政治亡命者を支援したとの罪状で逮捕(1975年)されたことがある。ほかに、評論集『大地の胸ーアフリカ文学・文化・歴史の批判的概説』(*The Breast of the Earth*, 1975)、獄中体験を含む詩と散文の雑集『海辺の家』(*The House by the Sea*, 1978) など。

アチェベ、チヌア (Achebe, Chinua)

[生] 1930.11.16 オギディ

[没] 2013. 3.21 アメリカ合衆国

ナイジェリアのイボ民族出身の作家。英語で執筆。父親は、キリスト教牧師でミッションスクール教師。地元のウムアヒアで中・高校を終え、イバダン大学で医学を、のちに文学、歴史、宗教学を学んだ。1954年ナイジェリア放送協会に入り、66年まで国際放送を担当、その間に多数の作品を発表した。『部族崩壊』(*Things Fall Apart*, 1958)、『もはや安楽なし』(*No Longer at Ease*, 1960)、『神の矢』(*Arrow of God*, 1964)、『国民の中の男』(*A Man of the People*, 1966) は初期四部作といえるもの。これらで、植民地期直前の19世紀後半から独立後の現代に至るナイジェリアの経験を、ナイジェリア人の側から克明に描いた。特に『部族崩壊』は、現代アフリカ小説の原型といわれ、その後の作家たちに深い影響を与えた。ビアフラ戦争(1967~1970)では、連邦政府と対立したビアフラ独立側に立ち、一時創作を断念した。その後、戦争体験を基に、詩集『心に銘記せよ、魂魄と化した同胞よ、その他』(*Beware, Soul Brother and Other Poems*, 1971)、短篇集『戦場の女たち』(*Girls at War and Other Stories*, 1972)を出した。1972年以降はアメリカへ渡ったが、76年に一時帰国。1960年代からノーベル賞候補にあがった。作風は、ヨーロッパとアフリカの文化接触や、価値の衝突を特徴としており、『部族崩壊』は50言語以上に翻訳され、1,000万部が売れたといわれる。最後の小説は『サバンナの蟻塚』(*Anthills of Savannah*, 1987)。『未だ創造の日の朝』(*Morning Yet on Creation Day*, 1975)、『希望と障害』(*Hopes and Impediments*, 1988)などの評論集のほか、児童文学も書いている。20世紀アフリカ文学の代表的な作家の一人である。

アディチエ、チママンダ・ンゴジ (Adichie, Chimamanda Ngozi)

[生] 1977年9月15日、エヌグ

イボ民族出身。ナイジェリアの大学で、医学・薬学を学んだが中退、19歳でアメリカへ渡り、コミュニケーション学や政治学を学んだ。のち、ジョン・ホプキンス大学からクリエイティブ・ライティングコースで修士号を取得。プリンストン大学やエール大学でも学んだ。戯曲・詩・短篇から書き始め、2003年

度 O. ヘンリー賞ほか、早くからいくつかの文学賞を受賞した。小説『紫のハイビスカス』(*Purple Hibiscus*, 2003) で 2005 年度コモンウェルス賞 (アフリカ部門) 受賞。『半分のぼった黄色い太陽』(*Half of a Yellow Sun*, 2006) で 2007 年度のオレンジ賞受賞。1960 年代からビアフラ戦争に至る時代を背景に、首都ラゴス他での人間模様を描いている。チヌア・アチェベが「古くからのストーリーテラーとしての才に恵まれた新しい作家が誕生した」と激賞した。

アーマ、アイ・クウェイ (Armah, Ayi Kwei)

[生]1939.10.28 セコンディ・タコラディ

ガーナの小説家。英語で執筆。名門アチモタ・スクールで学んだ後、ガーナ放送局の脚本家、リポーター、アナウンサーなどを経験。18 歳でアメリカへ渡り、ハーバード大学とコロンビア大学の両大学院を修了。アフリカ各地での生活経験が豊富で、ダルエスサラーム大学、レソト大学ほか多数の大学で教えたほか、合衆国のマサチューセッツ大学やウィスコンシン大学でも教えた。代表作は、独立後のンクルマ政権下のガーナ社会を背景に、黒人エリートの腐敗をあばいた『美しきもの未だ生れず』(*The Beautiful Ones Are Not Yet Born*, 1968)。ほかに、自伝的要素を込めて独立後社会の混迷を描く『断片』(*Fragments*, 1970)、『なぜ我らは、かくも祝福されるのか』(*Why Are We So Blest ?*, 1972)、アフリカの過去の再構築を試みた『二千の季節』(*Two Thousand Seasons*, 1973)、19 世紀後半に起きた第二次アシャンティ戦争 (1873~4) 期を背景に、世直し人たちの暗躍を描き、滅亡したアシャンティ王国の悲史を内側から問う歴史小説『治療師たち』(*The Healers*, 1978) などがある。

アマディ、エレチ (Amadi, Elechi)

[生]1934.5.12. アルウ

ナイジェリアの小説家・戯曲作家。英語で書く。イバダン大学で数学と物理学を学ぶ。小学校教師、校長、兵士、公務員などを歴任。測量技師でもあった。ビアフラ戦争に際して、ビアフラ政権側から二度の投獄・拘禁を受けた。戦後、ポートハーコート大学で学部長職についた。人間と社会にとっての宗教の価値を問う小説『めかけ』(*The Concubine*, 1966)、ビアフラ戦争の日誌『ビアフラの日没』(*Sunset in Biafra*, 1973)、『カラバルの女』(*The Woman of Calabar*, 2002) など。

アルコ、T. M. (Aluko, Timothy Mofolorunso)

[生]1918. 6.14. イレシヤ

[没]2010.5.1. ラゴス

ナイジェリアの小説家。ヨルバ民族出身。イバダン大学、ラゴス大学、ロンドン大学で学び、都市工学・都市計画を専攻。土木技師、ラゴス大学講師、州財務長官を務めるかたわら小説を書いた。新旧秩序が共存する社会のきしみを巧みに描く。40年代から短篇を発表したが、伝統とキリスト教的価値の対立を描く第一作『男一人に妻一人』(*One Man, One Wife*, 1959)で注目された。第二作『男一人に斧一丁』(*One Man, One Matchet*, 1964)では、風刺を込めて植民地支配を批判している。ほかに、『同族の者と工夫長』(*Kinsman and Foreman*, 1966)、『部族長大臣閣下』(*Chief of the Honourable Minister*, 1970)、『恐れ多き皇帝陛下』(*His Worshipful Majesty*, 1973)、『被告席の悪者たち』(*Wrong Ones in the Dock*, 1982)などで、社会風刺、戯画化に冴えを見せている。ナイジェリアでは、英語で書く初期の代表的作家の一人で、1994年に自伝『私の奉公時代』(*My Years of Service*)を出した。

イロー、エディー (Iroh, Eddie)

[生]1946.

ナイジェリアの作家。英語で書く。ジャーナリスト、雑誌編集者。連邦軍の兵士であったが、1967年から1970までのビアフラ戦争時には、ビアフラ戦争情報局およびロイター通信に勤めた。最初の小説『将軍のための48丁の鉄砲』(*Forty-Eight Guns for the General*, 1976)は、戦争時の傭兵の微妙な役割と活動を描くもの。第二作『戦争のヒキガエルたち』(*Toads of War*, 1979)は、戦争景気で人口が5倍に増えたビアフラ側最後の前哨地を舞台に、戦争成金と、これと対照的な戦争犠牲者たちの角逐がニヒルなタッチで描かれている。他に、戦争後の余波を掘り下げた『夜のサイレン』(*The Siren in the Night*, 1982)など。

ヴァサンジ、M. G. (Vassanji, M. G.)

[生]1950.5.30 ナイロビ

ケニアに生まれ、タンザニアで育つ。英語で書く。マサチューセッツ工科大学留学、核物理を学ぶ。のち、ペンシルバニア大学へ移り、カナダへも留学。核物理で博士号取得。トロント大学で教えた頃から小説を書き始めた。代表作は、50年代から60年代のダルエスサラームのインド人社会を描く『ウフル・ストリート』(*Uhuru Street*, 1991)。『ヴィクラム・ラルの中間世界』(*The In-Between World of Vikram Lall*, 2003)ではケニアのインド人社会が描かれている。現在はカナダに住む。

ウオロゲーム、ヤンボ (Ouologuem, Yambo)

[生]1940.8.22 バンディアガラ

マリ共和国の詩人・小説家。フランス語で書く。1968 年『暴力の義務』(*Le Devoir de violence*, 1968) でルノー賞受賞。伝統アフリカの王・首長たちの圧政と欲望、暴力とエロチシズムを痛烈に暴き、植民地化以前アフリカの混沌を描いて、伝統アフリカの美化を否定、ネグリチュード運動に死を宣告したとされる。『ブラック・フランスへの手紙』(*Lettre à la France nègre*, 1969) などで、フランスの頑強な人種主義を批判している。

エイブラハムズ、ピーター (Abrahams, Peter)

[生] 1919.3.3. ヨハネスブルク

南アフリカ出身の作家。エチオピア人を父に、ケープ出身の「カラード」(アパルトヘイト下南アの人種区分の一つ) を母に、ヨハネスブルクのスラムに生れた。貧しい少年時代を過ごしたが、その間に詩作を始め、ケープタウンへ移ってから小説を書き始めた。自伝的小説『自由を語れ』(*Tell Freedom*, 1954) で、人種差別社会に生きた青年期までの貧苦の生活を描いている。1939 年、20 歳からの 2 年間、汽船の火夫として働き、その後イギリスへ亡命、ジャーナリストとして活躍した。1959 年以降、家族を連れてジャマイカに定住し、雑誌の編集、ラジオ番組の制作にたずさわった。作品では、一貫してアパルトヘイト反対を貫き、底辺に生きる人々の悲惨な生活を描いている。都市出稼ぎ民が経験する差別と疎外をテーマとし、マルクス主義的な社会分析を示す小説『町の歌』(*Song of City*, 1945)、『鉱夫』(*Mine Boy*, 1946)、カラード青年とアフリカーナー女性の恋愛の悲劇をテーマにした『雷の道』(*The Path of Thunder*, 1948)、南アの歴史と政治に取材した『野蛮な征服』(*Wild Conquest*, 1950)、ガーナを舞台にンクルマ時代の政治への関心を示した『ウドモに捧げる花輪』(*A Wreath for Udomo*, 1956)、アフリカ、カリブ、北アメリカでの 150 年に及ぶ黒人の歴史を題材にした『コヤバからの風景』(*The View from Coyaba*, 1985) など。現在では、カリブ海の作家としての地位を確立しており、西インド諸島を舞台とした作品も多い。

エクウェンシ、シプリアン (Ekwensi, Cyprian)

[生]1921.9.26. ミンナ

[没]2007.11.4. エヌグ

ナイジェリアのイボ民族出身。英語で執筆。イバダン大学卒業後、ロンドンで薬学などを学んだ。ナイジェリア国営放送局の制作部主任を経て、エヌグ地区の情報局長となる。出版業に関係したこともある。作品の幅が広く、子供向けの物語、一般小説から、市場で売られる、いわゆる通俗的な三文小説の類ま

でを手がけ、都会に生きる人々の生態を活写した。「オニチャ・マーケット文学」と呼ばれる大衆文学サークルの育ての親でもあり、エンターテインメント作家としても人気を博し、社会風刺に独特の冴えをみせている。西アフリカでの英語小説では、早い時期に属する『都会の人々』(*People of the City*, 1954) で、政治意識に目覚めた若者群像を描いた。ゾラの娼婦物語のナイジェリア版ともいべき『ジャグア・ナナ』(*Jagua Nana*, 1961) は、高級外車ジャガーを乗り回すラゴスの高級娼婦の物語である。牧畜民フラニの生活を人類学的な精密さで描く『燃える草原』(*Burning Grass*, 1962)、50年代の政治的覚醒をテーマとした『美しい羽根』(*Beautiful Feathers*, 1963) など。ほかに、短篇集『ロコタウンほか』(*Lokotown and Other Stories*, 1966)、ビアフラ戦争(1967~70)に取材した小説『平和を生き抜く』(*Survive the Peace*, 1976)、『ジャグア・ナナの娘』(*Jagua Nana's Daughter*, 1986)のほか、児童文学も多い。

エメチェタ、ブチ (Emecheta, Buchi)

[生] 1944.7.21. ラゴス

ナイジェリアの女性作家。イボ民族出身。幼時に両親と死別、結婚して、1960年代初めにロンドンへ渡り、ライブラリアンとなるが、まもなく離婚。5人の子供を自力で育てた。社会学を学び、その後執筆に専念。黒人女性の地位向上のために積極的に発言し、アフリカを代表するフェミニスト作家とされる。ロンドンでのどん底生活を克明に描いた第一作『排水溝の中で』(*In the Ditch*, 1972)、『第二級市民』(*Second-Class Citizen*, 1974) はともに自伝的作品で、生活の苦難を描いている。代表作は『母であることの喜び』(*The Joys of Motherhood*, 1979)。多作で、『婚資』(*The Bride Price*, 1976)、『奴隷女』(*The Slave Girl*, 1977)などはナイジェリアを舞台にしたもの。ほかに、ジャマイカを舞台にした『家族』(*The Family*, 1990)のほか、テレビ番組の台本や児童文学など多数。ナイジェリアであれ、ロンドンであれ、それらを舞台に、変化する社会に生きるアフリカ女性の状況を、政治的、文化的、経済的に分析、活写している。

オカラ、ゲブリエル (Okara, Gabriel)

[生] 1921.4.24. ブムンディ

ナイジェリアの詩人・小説家。イジョ民族出身。アメリカのノースウェスタン大学でジャーナリズムを専攻。ビアフラ戦争時には、ビアフラ側に立ち、リバー州情報局に勤務。イジョ語のリズムを取り入れた前衛的な英語詩が多くの雑誌に掲載された。ディラン・トマス、W. ブレイク、W. B. イエイツなどの影響があるといわれる。政治権力と対決する個人の良心の自由の問題を描いた小

説『声』(*The Voice*, 1964) で知られる。詩集『漁夫の祈り』(*The Fisherman's Invocation*, 1978) ほか、イジョの民話や伝統詩の英訳がある。

オキボ、クリストファー (Okigbo, Christopher)

[生] 1932.8.16. オジョト

[没] 1967.8. ンスッカ

ナイジェリアの詩人。イボ民族出身。1956年イバダン大学卒業後、大学図書館や政府の情報局などで働き、雑誌『トランジション』の編集にもたずさわった。大学時代に学んだギリシア・ラテンの古典詩はもちろん、E. パウンド、T. S. エリオットらの現代英詩にいたるまでの西欧詩に造詣が深く、同時にナイジェリアのイボ民族の民間伝承にも詳しい。高度な技法を駆使し、音楽的で、豊かな感性に満ちた独特の詩の世界を確立している。詩を支えているエッセンスの一つは、ある種の宗教意識である。自分のことを、母方の祖父の生れ変わりだと信じており、祖父はイボ民族の民間信仰に見られる川の女神イドドに仕える僧であったという。詩を書くことは、僧としての役割を果たすことだという。ビアフラ戦争時に、ビアフラの独立を掲げて従軍し、1967年東部戦線で戦死した。没後出版された詩集『雷の道のある迷路』(*Labyrinths with Path of Thunder*, 1971) のほか、『天国の門』(*Heavensgate*, 1962)、『限界と距離』(*Limits and Distances*, 1964)、『沈黙と雷の道』(*Silence and Path of Thunder*, 1965) などがある。

オクリ、ベン (Okri, Ben)

[生] 1959.3.15 ミンナ

ナイジェリアの作家。英語で書く。ロンドンで育つ。1968年、家族を連れてナイジェリアへ帰国。その後、エセックス大学に学び、1991年から1993年までケンブリッジで教えた。1987年、王立文芸家協会会員。現在はロンドンに住む。代表作は、独立直前のナイジェリアを舞台に、主人公一家のスラムでの貧困生活、政治的野心を隠すことなく、支持を得るのに躍起の政治家たちを軸に、転換期の社会を描く『飢えの道』(*The Famished Road*, 1991) で、1991年度のブッカー賞などいくつかの国際賞受賞。処女短篇集『聖地の出来事』(*Incidents at the Shrine*, 1986) でコモンウェルス作家賞(アフリカ部門)受賞。最近の『スターブック』(*Starbook*, 2007) まで多作。

オコト・ビテック (Okot p'Bitek)

[生] 1931. 6.7. グル

[没] 1982.7.20. カンパラ

ウガンダの作家・詩人・社会人類学者。英語で執筆。初めは母語であるアチョリ語で小説『お前の歯は白いか、ならば笑え』(*Lak Tar Miyo Kinyero Wi Lobo*, 1953) を発表。農村から首都カンパラへ出て来た青年の夢の挫折が描かれている。のちイギリスへ渡り、ブリストル大学でキリスト教と歴史を、ウェールズ大学で法律を、オックスフォード大学で社会人類学を学んだ。アフリカの伝統文学、歌謡、踊り、音楽などに興味を募らせ、「アチョリ民族ならびにランゴ民族の口承文学と社会的背景」(1963)で文学士号を得た。1964年に帰国、マケレレ大学で社会学を講じたほか、ウガンダ国立劇場の主任、国立文化センター所長を務めたが、反政府的発言で解任された。その後、ナイロビ大学の講師などを務め、11年間の亡命生活を送った。この間、アメリカのアイオワ大学に招かれたこともある。1979年帰国。80年、マケレレ大学教授。代表作『ラウィノの歌』(*Song of Lawino*, 1966) と『オチョルの歌』(*Song of Ocol*, 1970) は、同年代の東アフリカの詩のなかで第一級のものとされる。ことに『ラウィノの歌』は、無学な妻から見た大学出の夫の奇妙な行動を異文化接触という観点からとらえたもので、生き生きとした描き方が注目された。これら詩小説ともいえる作品で、ラウィノはオチョルの第一夫人として伝統的・民族的価値を体現する女であり、西欧近代の価値に取り込まれ、アフリカの土壌とは無縁な根無し草になってしまった夫、ならびに西欧化したアフリカ人を嘆き、揶揄し、嘲笑している。『オチョルの歌』では、逆に教育を受けた新興エリートを代弁して、夫が、妻に代表されるアフリカの「原始」「未開」「非文明」を嘲弄している。その詩は、出身民族であるウガンダのアチョリ民族の口承詩の伝統がよく生かされている点でも高く評価される。ほかに詩集『囚人の歌』(*Song of a Prisoner*, 1971)、『わが愛の角笛』(*Horn of My Love*, 1973) があり、短篇小说、評論なども多い。評論集に『アフリカの文化革命』(*Africa's Cultural Revolution*, 1973) などがある。

オゴト、グレース (Ogot, Grace)

[生]1930.5.15. アセンボ (ニャンザ州)

ケニアの女性作家。英語で書く。ウガンダとイギリスで看護師資格取得。助産師を経験。BBCの海外放送部、インド航空事務所に勤務したこともある。1984年国会議員、モイ大統領時代に女性唯一の副大臣、国連大使などを経験。ケニア作家協会の創設メンバーでもある。処女作は『約束の土地』(*The Promised Land*, 1966)、短篇集『もう一人の女』(*The Other Woman ; Selected Short Stories*, 1976)、小説『雷鳴のない土地』(*Land without Thunder*, 1988) など。出身民族のルオ伝承に根ざした民話風の作品や、伝統と因習のはざまに生きる女性を描くのが得意。第一世代の代表的女性作家である。

オシュンダレ、ニイ (Osundare, Niyi)

[生]1947 イケレ - エキティ

ナイジェリアの詩人。英語で書く。イバダン大学を卒業、リーズ大学から修士号、カナダのヨーク大学から博士号を取得。詩集にコモンウェルス賞受賞の『市場の歌』(*Songs of Marketplace*, 1983)、『村の声』(*Village Voices*, 1984)、同じくコモンウェルス賞受賞の『地球の眼』(*The Eye of the Earth*, 1986)、『月の歌』(*Moonsongs*, 1988)、『ミッドライフ』(*Midlife*, 1993) など多作。1990年度の野間賞を受賞。イバダン大学教授などを歴任、現在は合衆国のニューオーリンズ大学教授。資本主義の弊害など、社会的・政治的テーマを取り上げている。ビアフラ戦争以後の代表的な詩人である。

オショフィサン、フェミ (Osofisan, Femi)

[生] 1946.6. オグン州

ナイジェリアの詩人・劇作家。ヨルバ民族出身。イバダン大学卒業後、ダカール、パリの大学で学ぶ。ナイジェリアの腐敗と不正義を撃ち、社会変革を目指す新しい世代の旗手。ショインカの後を受けて、1984年イフェ大学演劇学科主任教授となり、劇団カカウン・セラ・カンパニーを主宰した。のちイバダン大学演劇学科長となる。戯曲『おしゃべりと歌』(*The Chattering and the Song*, 1975)、『誕生日は死ぬためのものにあらず』(*Birthdays Are Not For Dying*, 1990)、ヨルバ民話に取材した道德劇『エシュと放浪詩人たち』(*Esu and the Vagabond Minstrels*, 1991)のほか、パリでの学生時代に取材した小説もある。作品はユーモア、アイロニーに富んでおり、歌、踊り、フォークロアの要素も多い。

オモトショ、コーレ (Omotoso, Kole)

[生] 1943.4.21. アクレ

ナイジェリアの小説家・劇作家・評論家。ヨルバ民族出身。イバダン大学でアラブ文学を学び、イギリスのエジンバラ大学で博士号を取得、1972年帰国。イバダン大学、イフェ大学でアラブ文学を教えた。ショインカやアチェベの次の世代を代表する一人で、75年アフリカ人作家連盟の設立に尽力、土着文化の育成にも努めた。80年代から、ロンドンで出ている『ウエスト・アフリカ』(*West Africa*) 誌に文芸コラムを連載、好評だった。長くイギリスに住んだが、現在はケープタウン大学で教えている。ナイジェリア初の推理小説『フェラの選択』(*Fella's Choice*, 1974)、事実と虚構を織り交ぜた『夜明け前』(*Just Before Dawn*, 1988) など小説作品も多く、アレゴリーを多用している。相次ぐ軍事クーデタ

一による社会の腐敗を訴える『呪詛』(*The Curse*, 1976) などの戯曲の他に、評論『アフリカ文学の発見』(*Discovering African Literature*, 1982)、現代アフリカの危機をえぐる評論書『南への移動の季節』(*Season of Migration to the South : Africa's Crises Reconsidered*, 1994) などがある。

オヨノ、フェルディナン (Oyono, Ferdinand)

[生] 1929.9.14. グレマコン

[没] 2010.6.10. ヤウンデ

カメルーンの作家・政治家。フランス語で執筆。若い頃からキリスト教関係の仕事に従事したが、のちフランスに留学、法学や行政学を学んだ。『ハウスボーイ』(*Une Vie de boy*, 1956) は、植民地支配と文明化の使命の内実を暴露した日記形式の作品。「黒いフランス人」としてのアイデンティティに疑問をもって死ぬ総督府お抱えの召使いを主人公に、フランスによる同化政策の偽善を訴えている。『老人と勲章』(*Le Vieux Nègre et la médaille*, 1956) は、フランス政府から勲章をもらった老人が、最後には政府の手で投獄されるという顛末を描いている。これらパリ時代に書かれた2作で、植民地白人の偽善、残忍、冷酷などを戯画化して描いた。その成功により、M. ベティと並ぶフランス語圏アフリカ文学の代表的作家としての地位を得た。作品はオランダ語、ドイツ語、チェコ語、ノルウェー語、英語などに訳されている。『ヨーロッパからの道』(*Chemin d'Europe*, 1960) は、宗教団体に身を寄せることでフランス行きの夢をかなえる暗愚を弄ばれる男の物語である。1950年代には、パリで舞台・テレビ俳優としても名を広めた。1960年に帰国し、政治家として、外務大臣や国連のカメルーン代表、ベルギーやリベリアへの駐在大使なども務めた。

キベラ、レナード (Kibera, Leonard)

[生] 1942. カベテ

[没] 1983. ナイロビ

ケニアの作家。英語で書く。カリフォルニア大学、スタンフォード大学で学んだのち、ザンビア大学やケニヤッタ大学で教えた。兄のサミュエル・カヒガと共に出した短篇集『ポテント・アッシュ』(*Potent Ash*, 1968) で、マウマウ戦争の傷跡を描いている。唯一の小説『暗闇の声』(*Voices in the Dark*, 1970) でも、独立のために戦いながら、大義を裏切られたマウマウ戦士たちの悲惨を訴えている。

グギ・ワ・ジオンゴ (Ngũgĩ wa Thiong'o)

[生] 1938.1.5. リムル

ケニアの作家。1960年代には James Ngugi の名で作品を発表。ウガンダのマケレレ大学卒業後、イギリスのリーズ大学へ留学。ケニアのナイロビ大学や、アメリカのノースウェスタン大学で文学の講座を担当した。学生時代からマケレレ大学の代表的文芸誌『ペンポイント』(*Penpoint*)や『ズカ』(*Zuka*)の編集にたずさわった。東アフリカでの英語小説の第1号である『泣くな、わが子よ』(*Weep not, Child*, 1964)は、1950年代ケニア独立闘争の母体となったギクユ民族を主体とする反英独立闘争(マウマウ運動)に巻き込まれていくある一家を中心に社会的混乱を描いたもので、1966年セネガルのダカルでの黒人芸術祭で賞を得た。1963年の独立前夜に舞台を設定しながら、フラッシュバックの手法で同じ時代を異なった面からとらえ直した『一粒の麦』(*A Grain of Wheat*, 1967)は、作品としていっそう成熟し、独立闘争のなかでの人々の苦しみがよく描かれている。そのほか、1930年代の社会的混乱を背景にキリスト教と伝統宗教の板ばさみになった恋人たちを描いた事実上の処女作『川を隔てて』(*The River Between*, 1965)などの小説や、短篇集がある。1977年に発表した大作『血の花弁』(*Petals of Blood*)で独立後の黒人政権の無能・腐敗・裏切りを活写した。同年、地方農村で識字運動に参加し、初めてのギクユ語によるコミュニティ演劇「したい時に結婚するわ」(*Ngaahika Ndeenda*, グギ・ワ・ミリエと合作、1980)を発表。おそらくその反体制的内容を理由に無裁判拘禁に処された。当時はナイロビ大学文学科長であった。約1年後に拘留を解かれたが失職、のちロンドンへ亡命、その後、ニューヨーク大学教授などを経て、現在はカリフォルニア大学アーヴァイン校教授。この間に、ギクユ語による小説『十字架の上の悪魔』(*Caitani Mũtharaba-inĩ*, 1980)、『マティガリー戦場の生存者』(*Matigari ma Njirũũngi*, 1986)、大作『カラスの魔法医』(*Mũrogi wa Kagogo*, 2004~2006)を発表。評論集も多数発表しており、現代アフリカのイデオログとして代表的な位置に立つ。その一つ『精神の非植民地化—アフリカ文学における言語の政治学』(*Decolonising the Mind – The Politics of Language in African Literature*, 1986)では、政治拘禁の後、自らの文学経歴を総整理し、英語で書く作家から、民族語作家へ轉身せざるを得なかった動機と理由を、現代のアフリカの政治・経済・社会・文化状況を背景に説明している。

クズワヨ、エレン (Kuzwayo, Ellen)

[生]1914.6.29. ザーバ・ンチュウ (オレンジ自由州)

[没]2006.4.19. ソウェト

南アフリカの女性作家。英語で書く。ダーバンやラブデールで学び、教員資格を取得。自伝『女と呼んで』(*Call Me Woman*, 1985)で、黒人女性の苦悩を描くなど、広く社会に生きる女性の問題を取り上げた。「クズワヨは、自分自身

の中に南ア女性を丸抱えしている」(ナディン・ゴードイマ)といわれた。結婚生活の破綻、親子の別離などをテーマに、伝統的な因習に取り込まれた女性の苦難を訴えている。短篇集『さあ、すわってお聞きなさい』(*Sit Down and Listen*, 1990) では、自ら語り手となって、口承の語りの方をを活用している。

クッツェー、J. M. (Coetzee, John Maxwell)

[生] 1940.2.9. ケープタウン

南アフリカ共和国の小説家・文芸評論家。アフリカーナ(オランダ系白人)。英語で執筆。ケープタウン大学で学んだ後、アメリカ合衆国で教育を受け、テキサス大学(オースティン)から、S. ベケットの研究で Ph.D を得た。ニューヨーク州立大学などで教えた後、1971 年帰国し、ケープタウン大学で英米文学を教えた。現在はオーストラリア在住。第一作『たそがれの国』(*Dusk Lands*, 1974) はニューヨーク時代に書き始め、南アへ帰国後に完成したもので、南ア最初のポストモダン小説とされる。この作品では、異文化に対する無理解と蔑視がアメリカや南アフリカ共和国の白人に残虐性をもたらすことを精神病理学的に分析している。『夷狄を待ちながら』(*Waiting for the Barbarians*, 1980) とブッカー賞受賞作『マイケル K の生涯と時代』(*Life & Times of Michael K*, 1983) は、アパルトヘイトを推進する白人にとって「文明とは何か」を改めて問い直させる作品である。ほかに評論集『白人は書く』(*White Writing*, 1988) など。『恥辱』(*Disgrace*, 1999) で二度目のブッカー賞受賞。2003 年度ノーベル文学賞受賞。

クネーネ、マジシ (Kunene, Mazisi)

[生] 1930.5.12. ダーバン

[没] 2006.8.11. ダーバン

南アフリカ共和国、ズールー民族出身の詩人。ナタール大学で学んだ後、1959 年ロンドン大学へ転じ、ズールー語とその文化・歴史、特に伝統詩を研究。のちにアパルトヘイト反対運動に身を投じ、アフリカ民族会議(ANC)の主要メンバーとしてヨーロッパ代表、財務担当理事などを務めた。1966 から国外亡命。1975~92 年カリフォルニア大学(ロサンジェルス校)アフリカ研究センターの教授を務めた。1993 年に帰国、ナタール大学教授となる。1993 年、国際連合教育科学文化機関(UNESCO)からアフリカの桂冠詩人に選ばれ、2006 年にはマジシ・クネーネ財団が設立された。初期に書いたズールー語による多数の詩を英訳した『ズールー詩集』(*Zulu Poems*, 1970) や、ズールー民族の伝統詩の英訳がある。レソトの初期の作家トマス・モフォロを紹介した『トマス・モフォロの作品』(*The Works of Thomas Mofolo ; Summaries and Critiques*,

1967)、19 世紀南部アフリカに覇権を確立し、強大な王国を建設したズールーの首長を讃える長編叙事詩『偉大なる帝王シャカ』(*Emperor Shaka the Great*, 1979) など。来日の回数も多い。

クラウザー、サミュエル (Crowther, Samuel)

[生] 1809. ヨルバ、オショボ

[没] 1891.12.31. ラゴス

ナイジェリアの小説家。ヨルバ民族の出身で、ヨルバ語文学の創始者とされる。英国国教会派 (CMS) から主教に任命された最初のアフリカ人としても知られる。12 歳頃、奴隷船からイギリス人に救い出され、シエラレオネに上陸、同地で教育と洗礼を受けた。1842 年、ロンドンの英国国教会派 (CMS) のカレッジに入学、卒業後は故郷のヨルバランドへ戻り、1843~1851 年は宣教師として働いた。ヨーロッパ人によるニジェール川方面への探検に何度か同行したが、その後は聖職と行政面の仕事にたずさわった。ヨルバ語で書いた最初の作家とされるが、作品はキリスト教の教えの紹介、布教を目的としたものが多い。ほかに『ヨルバ語語彙集』(*A Vocabulary of the Yoruba Language*, 1843)、『ヨルバ語文法と語彙』(*A Grammar and a Vocabulary of the Yoruba Language*, 1852) などがある。

クルマ、アマドゥ (Kourouma, Ahmadou)

[生] 1927.11.24. ブンジアリ

[没] 2003.12.11. リオン

コートジボアールの作家。同国に生まれたが、叔父が住むバマコ (マリ共和国の首都) で育った。1950 年から 1954 年まで、フランス軍に籍を置いて、インドシナに駐在、のちフランスで数学を学んだ。1960 年の独立後、コートジボアールへ帰国。しかし、独立政府と敵対し、短期間投獄されたこともある。その後、アルジェリア、カメルーン、トーゴなどへ亡命。祖国へ帰還後、2002 年の内乱で再び祖国を脱出、腫瘍手術の失敗によりフランスで死去。小説『独立の太陽』(*Les Soleils des indépendance*, 1968)、『アッラーの神にもいわれはない』(*Allah n'est pas obligé*, 2000) などがある。作品には、一党独裁や強権発動の常態化した現代アフリカ国家の権力構図に対する鋭い皮肉と風刺が見られる。

ケジラハビ、ユーフレイズ (Kezilahabi, Euphrase)

[生] 1944.4.13. ウケレウエ島

タンザニアのスワヒリ語作家。ダルエスサラーム大学に学び、1976 年に修士号を取得、同大学スワヒリ語学科で教えた。1985 年、ウィスコンシン大学から

博士号を取得。恋愛小説『ロサ・ミシティカ』(*Rosa Misitika*, 1971)、『この世は穢れの広場』(*Dunia uwanja wa fujo*, 1975)などで知られる。代表的なスワヒリ語作家の一人。現在は、ボツワナ大学に勤めている。

ゴードイマ、ナディン (Gordimer, Nadine)

[生] 1923.11.20. スプリングス (ヨハネスブルク郊外)

[没] 2014.7.13. ヨハネスブルク

南アフリカ共和国の女性作家。元国際ペンクラブ副会長。ユダヤ系移民の子。白人として、南ア文学界の中心的存在。幼少期から健康に恵まれず、11歳で通学と交友を母親に禁じられ、6年間の孤独な少女期に読書と創作にうち込む。15歳で書いた短篇が雑誌に掲載されて注目を浴びた。1945年に1年間、ウィットウォーターズラント大学に学んだ。1948年、25歳の時、アパルトヘイト政権がスタートしたが、以後半世紀をこえる作家活動を通してアパルトヘイト政策を非難してきた。作品には、「南アフリカ人」として、「女性」としての自覚が貫かれている。多くの文学サークルの顧問として、非白人作家の育成にも尽力した。1991年ノーベル文学賞受賞。長年に渡ってアパルトヘイトに反対してきた良心的な政治思想が授賞の理由だった。短篇集『ヘビのやさしいささやき』(*The Soft Voice of the Serpent*, 1952)、小説『ブルジョワ世界の末期』(*The Late Bourgeois World*, 1966)、ブッカー賞受賞作『保護管理人』(*The Conservationist*, 1974)、長編小説『造化の戯れ』(*A Sport of Nature*, 1987)、『ジャンプ』(*Jump*, 1991)など多数がある。リベラルな政治意識、信念、行動力、女性のセクシュアリティの分析、描写にすぐれている。発禁処分を経験した作品も多い。

コントン、ウィリアム (Conton, William)

[生] 1925. バンジュール

[没] 2003.7.

ガンビアの作家・教育者。英語で執筆。ギニア、シエラレオネで学び、イギリスで中高・大学教育を受けた。シエラレオネで中学校の校長や教育長を歴任。代表作の長編小説『アフリカ人』(*The African*, 1960)は、アラビア語、ロシア語、ハンガリー語などに翻訳されている。この小説は、奨学金を得てイギリスへ渡った青年が、南アフリカから来た娘と恋仲になるが、人種の違いが理由で破局を迎えるというもの。しかし、故郷に戻ってからは、祖国の独立運動に参加、そのリーダーとなる。ほかにいくつかの短篇がある。教育者として書いた教科書用の西アフリカ史2巻も知られている。

サイド・アフメド・モハメド (Said Ahmed Mohamed)

[生]1947.12.12 ペンバ島

タンザニアのスワヒリ語作家。ペンバ島に生まれ、ザンジバル島で高等教育を受ける。教員養成学校（1966~68）卒業後教職についたが、のちダルエスサラーム大学で教育学と言語学を学んだ。1981年から85年まで旧東ドイツで学び、言語学の博士号を取得。ザンジバルのスワヒリ語外国語学院（現ザンジバル国立大学）院長を務めた後、ケニアのモイ大学で教え、ついで大阪外国語大学で長くスワヒリ語の外国人教師を務めた。その後、バイロイト大学アフリカ文学教授を歴任。多数のスワヒリ語関係の語学書のほか、短篇小说・戯曲・詩集・小説作品も多い。小説『苦い蜜』(*Asali Chungu*, 1977)、『別れ』(*Utengano*, 1980)、『この世は枯れ木のごとし』(*Dunia mti mkavu*, 1980) など初期小説の他、『光の中の闇』(*Kiza katika nuru*, 1988)、『爺が生き返る』(*Babu alipofufuka*, 2001) など多作。現在、もっとも活躍している社会派の作家である。

サザランド、エフア (Sutherland, Efua)

[生] 1924.6.27. ゴールドコースト（現ガーナ）

[没] 1996.1.22.

ガーナの女性劇作家・詩人・児童文学作家。英語で執筆。ガーナで教員養成所を出たのち、イギリスへ留学、ケンブリッジのホマートン・カレッジで教育学を、ロンドン大学東洋アフリカ研究所で言語学を学んだ。1950年代の初めに帰国、1954年にアメリカ黒人と結婚、数々の文化活動に参加し始めた。1957年、ガーナ作家協会の設立に尽力。1959年、文芸誌『オキエアメ』(*Okyeame*)を創刊。ロックフェラー財団とガーナ芸術評議会から援助を受けてガーナ大学に実験劇場「ガーナ・ドラマ・スタジオ」を設立。アフリカ文学や演劇の調査研究、ガーナ大学の移動劇団「クスム・アゴロンバ」(*Kusum Agoromba*)の指導、多数のシナリオの執筆や上演、短篇などを発表した。1960年代には、『エドゥファ』(*Edufa*, 1967)、3幕物の『フォリワ』(*Foriwa*, 1967) など、アフリカの伝統とヨーロッパ流の現代生活との衝突を扱った代表作が上演された。児童文学にも関心をもち、『ハゲタカ! ハゲタカ!』(*Vulture! Vulture!*, 1968)、『タヒンタ』(*Tahinta*, 1968) などのリズム演劇、『アフリカの遊び時間』(*Playtime in Africa*, 1960)、『道路づくり』(*The Roadmakers*, 1961) などの絵物語を発表。

サーダウィ、ナワル・エル (Saadawi, Nawal el)

[生]1931.10.27 カフルタフラ（カイロ北部）

エジプトの女性作家。アラビア語で書く。1955年、カイロ大学を卒業、精神科医師資格を取得。1972年、筆禍のため、厚生省・医師会など医学関係の要職をすべて解雇された。以後、国連の女性プログラムのアドバイザーなどを務め

た。1981年に投獄されたが、サダト大統領の死後の1982年に釈放。この間、数年間の亡命生活があったが、2004年の初の女性によるエジプト大統領選挙への出馬は阻止された。作品では、主として女性が置かれた状況を活写している。道徳、性、性器切除、政治と宗教、家父長制、階級社会などがテーマで、イスラム社会の代表的なフェミニスト作家である。代表作『イブの隠れた顔：アラブ世界の女たち』(*The Hidden Face of Eve: Women in the Arab World*, 1977, 英訳 1980) は、権力者を殺した貧しい農婦の物語。『ゼロ度の女』(*Woman at Point Zero*, 1975, 英訳 1983) は、精神科医として女性の死刑囚から聞き出した物語をベースにしたもの。1981年、アラブ女性連帯協議会を設立したが、1991年に活動停止処分を受けた。

サロ - ウィワ、ケン (Saro-Wiwa, Ken)

[生]1941.10.10 オゴニランド

[没]1995.11.8 ポートハーコート (刑務所内処刑)

ナイジェリアの作家、詩人。テレビ・映画のプロデューサー。イバダン大学卒業。ニジェール川デルタ地帯の少数民族オゴニの出身で、大学教師、地方首長を歴任、風刺小説や戯曲、詩を書いた。90年「オゴニ人生存運動」を結成、原油採掘の国際資本、特にシェルに対抗、賠償要求をするなど、人権保護と環境保全を訴えた。原油採掘許可をあたえてきた連邦軍事政権と対立、国際アムネスティなどの支援があったが、他の活動家8名とともに、軍事政権により処刑された。詩集に『戦時下の歌』(*Songs in a Time of War*, 1985)、『花の森』(*A Forest of Flowers*, 1986) など。

サンゴール、レオポール・セダール (Senghor, Léopold Sédar)

[生] 1906.10.9. ジョアル・ラ・ポルトゲーズ

[没] 2001.12.20. ノルマンディ (フランス)。

首都ダカール南方の漁村に生まれた。セレル民族に属し、両親ともキリスト教徒。地元のミッション・スクール(カトリック)に学んだが、1928年パリへ渡り、31年にリセを卒業、ついでソルボンヌに進学した。フランスの市民権を取得し、第二次大戦ではフランス兵として対独抵抗に参加、18ヶ月間、ドイツの捕虜収容所で過ごした。戦後、フランス制憲議会にセネガル代表として参加したのを契機に政治活動を開始、第四共和政国民議会のセネガル代表議員を務めた(1946~58)。国立学校でアフリカ語の教授を歴任したこともある。1960年のセネガル独立に伴い初代大統領となり、連続5期を務め、1980年に引退した。遺体は、ダカールに埋葬されている。

1920年代にパリで出会ったエメ・セゼール(フランス領マルチニック島出身)、

レオン・ダマ（フランス領ガイアナ出身）らとフランス語による文芸・思想運動「ネグリチュード」（Négritude「黒人的特性」）を起こし、「ヨーロッパの言語で書く最高のアフリカ詩人」と讃えられた。1948年、自らが編集した『ニグロ・マダガスカル新詞華集』（*Anthologie de la nouvelle poésie nègre et marginale de langue française*）を発表、これに哲学者ジャン・ポール・サルトルの序文「黒いオルフェ」（Orphée noir）が付され、カリブ海域、アフリカを中心に、フランス語で書く一群の黒人詩人たちの名が、世界に知れ渡ることになった。

「ネグリチュード」は、想像力や美意識の根っこを民族性や人種から引き出そうとしたこの時期の仏領アフリカ系黒人芸術家の立場を象徴する用語として普及し、やがて白人はもちろん、西欧近代文明に対抗する神話的なイデオロギーまで高められた。彼らは、詩作品を中心に「アフリカ・黒」を普遍的シンボルとして、黒人の過去にまともされた恥辱を拭い去り、民族的な価値を復権させ、人種の誇りを謳いあげた。処女詩集『影の歌』（*Chant d'ombre*, 1945）に収録された「黒いおんな」（Femme Noire）がよく知られる。

「裸のおんなよ、黒いおんなよ、身にまとうお前の色は生命そのもの・・・

裸のおんなよ、締まった肉の熟れた果実よ、黒葡萄酒のくらい恍惚よ」

（サンゴール「黒いおんな」より）。

「ネグリチュード」は、黒人には独特な内的世界、宇宙認識の方法、芸術的想像力、美的感覚などが備わっているとし、世界の黒人の共通の文化的母胎としてのアフリカを確認した（これを「源泉への回帰」という）。

この文芸・思想運動は、1930年代から50年代初めまで、アフリカの文化価値の復権を主張し、反白人・反西欧文明の声として一世を風靡したが、植民地の独立が射程に入るにつれて色褪せていく。その頃には、「人種よりも社会について語るべきだ。植民地支配の後には、黒人による黒人の支配や抑圧が起こりうるかもしれない」という声が、特に英語作家の側から聞かれ始めた。「ネグリチュード」への反論としては、E. ムパシェーレやW. ショインカが知られる。ショインカは「トラは森林でティグリチュード（Tigritude「俺はトラだ」）を叫ぶ必要はない。ただ跳びかかるだけだ」と揶揄した。これに対して、サンゴールは「トラは言葉を持たない。黒人には言葉がある。大きな違いだ」と反論したと言う。

シャアバン・ビン・ロバート（Shaaban bin Robert）

[生] 1909.1.1. タンガ（ドイツ領東アフリカ）

[没] 1962. 6.20. ダルエスサラーム (タンガニーカ)

タンザニア (旧タンガニーカ) の詩人・小説家。現代スワヒリ文学の父ともいわれる。首都ダルエスサラームで学んだのち、役所に勤務。かたわら多くの詩・小説・エッセイを発表し、現代スワヒリ語の標準的文体をつくり上げた。信仰の厚いイスラム教徒で、ことに小説作品では、道德調が濃厚なため、芸術的価値を損ねているとの評もある。他方、詩作の技術やレトリックにおいて優れている。1960 年、アフリカ人作家の最高の名誉とされたマーガレット・ロング記念メダルを受賞。主著に詩集『言葉の装飾』(*Pambo la Lugha*, 1948)、自伝『わが人生』(*Maisha Yangu*, 1949)、『クサディキカー空中の国』(*Kusadikika*, 1951)、民族歌謡タアラブの女性歌手の伝記『シティ・ビンティ・サアド伝ーザンジバルの歌手』(*Wasifu wa Siti binti Saad, Mwimbaji wa Unguja*, 1958) など。詩・随筆多数。ペルシアの詩人オマル・ハイヤームの『ルバイヤート』のスワヒリ語訳 (1952) も知られる。

シャフィ・アダム・シャフィ (Shafi Adam Shafi, Adam Shafi Adam)

[生]1940.6.21 ザンジバル

タンザニアのスワヒリ語作家。両親はコモロ島出身。1960 年、地元の教員養成学校卒業後、エジプト、ウガンダ、スーダンなどへ旅行。旧東ドイツで政治経済を学んだ。1963 年、ザンジバルへ戻り、新聞記者となり労働運動にも従事。この間、チェコスロバキアなどを訪問。1964 年のザンジバル革命時には、一時投獄された。1975 年、ダルエスサラームへ移住、エジプト大使館などに勤めた。搾取に抵抗する労働者と農民の団結を謳う小説『豪族フアドの屋敷』(*Kasri ya Mwinyi Fuad*, 1978)、港湾労働者の苦しい生活を描く『苦力』(*Kuli*, 1979) で知られる。社会派の作家で、最近作に、地元のブックフェアでの受賞作『引くなら引こう』(*Vuta N'kuvute*, 1999) がある。

シュライナー、オリーブ (Schreiner, Olive)

[生]1855.3.24. 北東部ケープ州

[没]1920.12.11. ケープタウン

父親はドイツ人キリスト教牧師。母はイギリス人。兄弟姉妹 12 人。幼くしてキリスト教に反発、一家の経済的破産の後、親戚を渡り歩く。15 歳で家庭教師を始め、エマソンやスペンサー、ミルなど広範に読書した。幼少期から日記を書き、後に映画化されることになる、南アの乾燥高原地域カルーを舞台にした小説『アフリカ農園物語』(*The Story of an African Farm*, 1883) など三作品は、すでに 20 歳代から書き始めていたといわれる。1881 年、医者になるためにイギリスへ渡ったが挫折。やがて本格的に書き始め、女性運動、社会主義運動と

もかかわった。1889年、南アに帰国し結婚、一児をもうけたが夭折。南アフリカにフェミニズム思想を持ち帰った。その後もイギリスとの間を往き来し、女性運動、平和運動とかかわった。1920年、ケープタウンに住み着いた。死後に出版された『水の精』(*Undine*, 1929)は、自伝的な作品であると自らが認めている。多くの作品に登場する子供たちは、家族との希薄な紐帯から深い疎外に追い込まれていく。さらに、植民地化下に生きた白人女性たちの苦悩も生き生きと描かれている。『女性と労働』(*Woman and Labour*, 1911)は、女性運動のバイブルと評価され、女性が教育と職業の世界から疎外され、性労働に運命付けられている現状に警鐘を鳴らしている。女性の参政権、産児制限の主張は、大正時代の『青鞥』に紹介されるなど、日本の女性運動に影響をあたえた。

ショインカ、ウォーレ (Soyinka, Wole)

[生] 1934.7.13. アベオクタ

ナイジェリアの劇作家・詩人・小説家。ヨルバ民族出身。イバダン大学で学んだ後、イギリスのリーズ大学で文学と演劇、特にシェークスピア劇を修める。しばらくロンドンで教職関係の仕事についたほか、ロイヤル・コート・シアターで修行し、60年に帰国。ナイジェリア情報局の役人を務め、その間にオーストラリア、アメリカなどの演劇事情を視察。1960年、劇団「仮面 1960」(のちにオリスン劇団と改称)を結成するなど演劇活動を組織し、戯曲を書いた。イバダン、イフェ(現在のオバフェミ・アウオロウオ)、ラゴスの各大学で教壇に立つ。伝統文化と急激な近代化のギャップに悩むナイジェリアの不条理な現実を批判的、風刺的に描いた作品が多い。ビアフラ内戦時には反戦運動を展開し、軍事政権によって2年間投獄されたが、獄中でも精力的に執筆活動を続けた。獄中体験をもとに、戯曲『狂人と専門家たち』(*Madman and Specialists*, 1965 初演)、詩集『地下室に閉じ込められたウソの鳥』(*A Shuttle in the Crypt*, 1969 年初版、1972 年改題再版)、評論『死んだ男』(*The Man Died*, 1972)、小説『異変の季節』(*Season of Anomy*, 1973)の四部作を生んだ。代表作は、ほかにイギリス留学中に書いた戯曲『ライオンと宝石』(*The Lion and the Jewel*, 初演 1959、出版 1963)、『森の舞踏』(*A Dance of the Forest*, 1963)、『殉死と王の馬丁』(*Death and the King's Horseman*, 1975)など。小説『通訳者たち』(*The Interpreters*, 1965)もある。ベケットなどの不条理演劇、ギリシア・ローマの古典劇にも造詣が深く、西洋演劇とアフリカ(ヨルバ)伝統演劇の手法を駆使し、新境地を開拓したとされる。評論『神話・文学・アフリカ世界』(*Myth, Literature and the African World*, 1976)、『芸術・対話・憤怒』(*Art, Dialogue and Outrage: Essays on Literature and Culture*, 1988)、幼少時代の自伝『アケ』(*Ake: The Years of Childhood*, 1981)、自伝『イバダン: 混乱の時代ーメモ

アール 1946~1965』(*Ibadan : The Penkelemes Years, A Memoir 1946~65*, 1989) 他がある。1986 年、アフリカ人作家、世界の黒人作家として最初のノーベル文学賞を授賞した。

ジョオプ、デイビッド (Diop, David)

[生] 1927.7.9. ボルドー

[没] 1960. ダカール

セネガルの詩人。フランス語で執筆。セネガル人のキリスト教徒を父に、カメルーン人を母に、ボルドーに生まれた。幼年期を西アフリカで過ごし、ダカールとコナクリのリセの教師にもなったが、生涯のほとんどはフランスで送った。幼い頃から病弱で、生涯を通じて病院生活のほうが長かった。33 歳の時、飛行機事故で妻とともに死去、ほとんどの詩の草稿が失われたという。強烈なイメージで、望郷の念を押し出した残存する詩は、多くの若手詩人から熱烈な支持を得た。詩集『杵つき』(*Coups de pilon*, 1956) のほか、サンゴール編『ニグロ・マダガスカル新詞華集』に収録された数編の詩が残るにすぎない。

ジョオプ、ビラゴ (Diop, Birago)

[生] 1906.12.11. ダカール

[没] 1989.11.10. ダカール

セネガルのウォロフ民族出身の作家、外交官。フランス語で執筆。民間伝承の採録者としても知られる。サンルイのリセで勉学後、フランスのツールーズ大学に入学、1933 年まで獣医学を、その後は哲学を学んだ。幼少期から伝統的なフォークロアやフランス文学に親しんだが、33 年にパリでセネガルの詩人サンゴールと出会い、ネグリチュード派の黒人詩人らと『黒人学生』誌の編集に協力。フランス人と結婚、セネガルに戻ってからも、獣医業のかたわら、民話の採録に努めた。旧仏領各地を渡り歩いたが、スーダンに転勤した時、同地で、のちに作品の主題となるアマドゥ・クンバという語り部(グリオ)に出会った。58 年セネガルの独立後、60 年から 64 年までチュニジア駐在のセネガル大使となる。64 年、ダカールへ戻ってからは、家畜病院を経営。1925 年頃から書き始めたが、作品には、フランス文化とイスラム文化の融合社会に生きるアフリカの人間群像が浮び出ている。グリオから聞いた 19 話を基にした『アマドゥ・クンバの物語』(*Les Contes d'Amadou Koumba*, 1947) でたちまち世界的に有名になった。『新アマドゥ・クンバ物語』(*Les Nouveaux Contes d'Amadou Koumba*, 1958)、詩集『おとり餌と閃光』(*Leurres et lueurs*, 1960) など。このほか、1978 年から 1989 年にかけて 5 巻にのぼる自伝的メモアールを出版している。

セパムラ、シポ (Sepamla, Sipho)

[生] 1932. クルーガーズドルフ

[没] 2007.1.9. ソウェト

南アフリカの詩人・小説家。教員養成学校卒業後、中学教師となり、のち文芸誌の編集者を務めた。黒人芸術連合を主宰し、黒人文化芸術の顕揚に努め、1976年のソウェト蜂起以後、スティーブ・ビコが主唱した黒人意識運動の高揚に大きく貢献した。作品は、主に都市に住む黒人の生態を描く。詩集『急いで自分のものにしろ』(*Hurry Up to It !*, 1975)、『わが愛するソウェト』(*The Soweto I Love*, 1977)、『大地の子たち』(*Children of the Earth*, 1982) など。その詩は、風刺やアイロニーに富み、ソウェト住民の話すスラングが巧みに生かされている。他に、小説『散乱した生存者』(*A Scattered Survival*, 1989) などがある。

セルマガ、ロバート (Serumaga, Robert)

[生] 1939. ブガンダ

[没] 1980. 9. ナイロビ

ウガンダ出身の劇作家・小説家・経済学者。英語で執筆。マケレレ大学を卒業後イギリスへ渡り、ダブリンのトリニティ・カレッジで経済学修士を取得。この間に、BBCのドラマ制作にかかわった。1966年に帰国し、演劇グループを結成。1968年、『戯曲』(*A Play*)を発表、カンパラの国立劇場で初演。劇団を組織し、『象たち』(*Elephants*)の上演をはじめとする演劇活動に従事、ロンドンで公演する機会をもった。政治・社会変化を描くこれらの戯曲のほか、小説では、上流社会出身の弁護士とその従僕が、クーデター後、自宅から離れて隠れ住む話を書いた代表作『影へ戻れ』(*Return to the Shadow*, 1969)がある。このほか、雑誌『トランジション』(*Transition*)に多くの詩を発表。アミン政権打倒の運動に与したとの罪状で逮捕されたこともある。

セローテ、モンガン (Serote, Mongane)

[生] 1944.5.8. ソファイアタウン

南アフリカの詩人・小説家・政治活動家。ヨハネスブルク近郊の黒人居住区に生まれ、結婚後は、同じく黒人居住区アレクサンドラで過ごした。高校卒業後、ジャーナリストになるが、1969年テロリズム法に触れ投獄された。コロンビア大学へ留学後、長くボツワナに住み、アフリカ民族会議文化部長として活躍した。1960年代後半から書き始め、アパルトヘイト時代を代表する詩人である。詩集『ヤカリンコモ』(*Yakhal'inkomo*, 1972)、『ママ見てごらん、花が』(*Behold Mama, Flowers*, 1978)、6年がかりの小説『生れ出ずる者すべてに血が』(*To Every Birth Its Blood*, 1981)、評論集『水平線上で』(*On the Horizon*, 1990)

などがある。政治的な正義感、解放への展望、想像的なメタファー、情熱的なリリズムに特徴がある。アパルトヘイト廃止後もいくつかの詩集を発表、特に『第三世界エクスプレス』(*Third World Express*, 1992)では移行期の社会への夢と不安を巧みに形象し、1993年度の野間賞を受賞した。

センベヌ・ウスマン (Sembène Ousmane)

[生] 1923.1.1. ジガンショル

[没] 2007.6.9. ダカール

セネガルの作家、現代アフリカの代表的な映画監督。フランス語で執筆。子供時代は故郷で漁撈の手伝いなどをしたが、のちダカールへ出て石工、機械工、修理工などで生計を立てた。1939年、第2次世界大戦に狙撃兵としてフランス軍に加わり、イタリア、ドイツ、北アフリカで戦った。復員後は労働運動に参加、のち再度フランスへ渡り、マルセイユで働きながら作品を書き始めた。港湾労働者の労働組合委員長として活躍、アメリカ黒人の抵抗文学、ソビエト連邦の社会主義小説の影響を強く受けた。その後、ソビエト連邦、中国、キューバなどを訪問。1961年モスクワのゴーリキー・スタジオで映画技術を学び、フランス語とウォロフ語での映画制作に監督としてたずさわった。1983年、セネガル・ペンクラブ会長。代表作として、小説『黒い沖仲仕』(*Le Docker noir*, 1956)、『祖国よ、わが美しき民よ』(*O Pays, mon beau peuple !*, 1957)、『神の森の木々』(*Les Bouts de bois de Dieu*, 1960)、『ハルマッタン』(*L'Harmattan*, 1964)、『不能』(*Xala*, 1974)、『帝国の最後の男』(*Le Dernier de l'empire*, 1981)。ウォロフ語による映画作品として『エミタイ』(*Emitai*, 1976)と『チェド』(*Ceddo*, 1976)などが有名。ほかに『ボルタイック作品集』(*Voltaïques*, 1962)など。

ソニー・ラブ・タンシ (Sony Labou Tansi)

[生] 1947. キムワンザ (ベルギー領コンゴ、現コンゴ民主共和国)

[没] 1995.6.14. フウドゥ (コンゴ共和国)

コンゴ共和国の作家。演劇活動家。フランス語で書く。フランス語教師や政府役人などを経験。1992年には国会議員になった。ポスト・コロニアル時代の専制的な軍事独裁国家の圧制を描くものが多い。小説『一つ半の命』(*La Vie et demie*, 1979)で、架空のアフリカ国家の政敵の生肉を食うという独裁者による恐怖政治をマジカル・リアリズム風に描いた。演劇方面でも、ブラザビルを中心に国際的に活躍した。

ソファル、アミナタ (Sow Fall, Aminata)

[生] 1941.4.20. サンルイ

セネガルの女性作家。フランス語で書く。サンルイに生まれ、ダカールで育つ。その後、1970 年までソルボンヌ留学、帰国して教職につく。1985 年、女性として最初のセネガル作家協会会長になった。多作で、積極的な社会活動で知られる。都市のブルジョア階層への批判が顕著で、代表作に『乞食のストライキ』(*La Grève des battus*, 1979) など。

タジョ、ベロニク (Tadjo, Véronique)

[生]1955. パリ

コートジボアールの女性作家。フランス語で書く。パリに生まれ、コートジボアールの首都アビジャンで育つ。父はコートジボアール人、母はフランス人。ソルボンヌに学び、博士号取得。1983 年、フルブライト留学生として合衆国ハーワード大学に学ぶ。1993 年までアビジャン大学で教えたが、以後創作に専念。現在は南アのウィットウォーターズランド大学で教えている。児童文学『人魚と怪物』(*Mamy Wata et le monster*, 1994) で、1994 年度野間アフリカ賞選考に際し、特別にメンションされた。ルワンダの虐殺を題材にした『イマナの影』(*L'Omble d'Imana*, 2000) ほかがある。自己のアイデンティティを素材にするなど、多数の作品を発表している。

ダディエ、ベルナール (Dadié, Bernard)

[生] 1916. アッシニ (アビジャン近郊)

コートジボアールの小説家・詩人・劇作家。フランス語で執筆。カトリック系の学校で7年間の教育を受けたのち、セネガルのゴレにある名門ウィリアム・ポンティ校で学んだ。ダカールのフランス国立アフリカ研究所に10年近く籍をおき、1947年に帰国、祖国の独立運動に深くかかわった。この間に投獄も経験している。1957年から1985年に引退するまで、政府の要職につき、77年からは文化大臣を務めた。詩人として出発し、パリで発行の『プレザンス・アフリケーヌ』誌に参加、フランス語で書くアフリカ人の文学運動に尽力。作品には、故郷のバウレ民族の民話、反植民地闘争を謳った詩が多い。主著『アフリカの伝説』(*Légendes Africaines*, 1953)、物語集『黒い腰布』(*Le Pagne noir*, 1955)、詩集『日々のめぐり』(*La Ronde des jours*, 1956)、自伝小説『クリンビエ』(*Climbié*, 1956)、小説『パリの黒人』(*Un Nègre à Paris*, 1959) など。

タバン・ロ・リヨン (Taban lo Liyong)

[生] 1939.

ウガンダ人を両親に、スーダン南部で生まれたアチョリ人の作家。英語とアチョリ語で執筆。カンパラのウガンダ国立教育大学を出てからアメリカへ渡り、

ハーワード大学で政治学を、アイオワ大学創作科で文芸を学び、アフリカ人として初めての文学修士を取得。1968 年以降、ナイロビ大学に勤務し、その間にアチョリ人やマサイ人の口頭伝承の研究を進めた。1975 年、パプア・ニューギニア大学の英文科主任として赴任。その後、スーダンのシュバ大学で教え、南アフリカ共和国のベンダ大学で教えたこともある。現在は、独立後の南スーダンへ戻っている。東洋文化にも関心を示す。詩集『フランツ・ファノンの不揃いな肋骨』(*Franz Fanon's Uneven Ribs*, 1971)、『低開発のバラッド』(*Ballads of Underdevelopment*, 1976)、短篇集『フィクションズ、その他』(*Fixions and Other Stories*, 1969)、評論集『最後の言葉』(*The Last Word*, 1969) などがある。他に、日本での滞在経験に基づく詩集『山をも溶かす言葉』(*Words That Melt a Mountain*, 1996) がある。辛辣な風刺とユーモアが特徴。

ダンガレンバ、ツィツィ (Dangaremba, Tsitsi)

[生]1959. ムトコ (ローデシア)

ジンバブエの女性作家。英語で書く。映画製作でも活躍。イギリスで育ち、ケンブリッジで医学を、ジンバブエ大学で心理学を学ぶ。『ナーヴァス・コンディショニング』(*Nervous Conditions*, 1988) で知られる。1989 年度コモンウェルス作家賞 (アフリカ部門) 受賞。フェミニズム思想が濃い。

チカヤ・ウ・タムシ (Tchicaya U Tam'Si)

[生] 1931.8.25. ムピル (コンゴ)

[没] 1988.4.21. / 1988.4.22. オアーズ (フランス)

コンゴの詩人・ジャーナリスト。フランス語で執筆。マダガスカルジャン・ジョゼフ・ラベアリベロ、セネガルのレオポール・セダール・サンゴールらとともに、最も独創性の高い詩人との評価がある。1946 年、政治家であった父に連れられてフランスへ渡って以来、同地で教育を受けた。大学進学を希望したが父が許さず、さまざまな仕事につき自活生活に。作品は故郷のアフリカの雰囲気強く匂わせ、アフリカの神話的、性的、キリスト教的イメージを並列させ、超現実的な効果を伴って、アフリカ人としての苦悩を謳い上げている。代表作『悪い血』(*Le Mauvais Sang*, 1955)、『野火』(*Feu de brousse*, 1957)、『だまし心で』(*Âtriche-coeur*, 1958)、『エピトメ』(*Épitomé*, 1962)、『腹』(*Le Ventre*, 1964)、『音楽的アーチ』(*L'Arc musical*, 1969) のほか、民間伝説集『アフリカの伝説』(*Légendes africaines*, 1969) がある。民話・伝説を素材にした放送作品も少なくない。作品はポーランド語、チェコ語、ハンガリー語などに翻訳されている。

テンバ、カン (Themba, Can)

[生]1924. マラバスタット

[没]1968. スワジランド

南アフリカの短篇作家。英語で書く。ヨハネスブルク郊外のタウンシップであるソファイアタウンを舞台に多数の作品を発表。フォートヘア大学卒業。50年代に『ドラム』(*Drum*) 誌などで活躍、その他「ゴールデン・シティ・ポスト」(*Golden City Post*) 紙などへも寄稿した。スワジランドで教職についた1966年、共産主義者とされ、作品は発禁となった。短篇集に『死ぬ意志』(*The Will To Die*, 1972)、作品集『カン・テンバの世界』(*The World of Can Themba*, 1985)。アパルトヘイト下の黒人の生活にまといつく苦悩、疎外、不満、絶望などが皮肉とユーモアと哀調を交錯させて活写されている。苦悩を癒すために、自殺行為とも思われるほど酒に溺れ、アルコール中毒死した。

トゥトゥオラ、アモス (Tutuola, Amos)

[生] 1920.6.20. アベオクタ

[没] 1997.6.8. イバダン

ナイジェリアのヨルバ民族出身の小説家。英語で執筆。ココア農園で働く農民の子で、両親ともキリスト教徒。苦学してハイスクールに学んだが、中退。鍛冶師の技術を習得し、のち英空軍部隊に勤務。戦後はラゴスの労働局で働く。ムバリ作家芸術家クラブの設立委員を務め、56年から勤めたナイジェリア放送退職後、1976年からサンヨーなどの電気製品販売業を営んだ。79年イエナ（現フリードリヒ・シラー）大学客員作家となる。作品はヤング・イングリッシュといわれる奇妙な破格英語を使い、ジャングルのなかの霊的物語、民話、空想物語などを好んで素材とし、ヨルバ民話に取材した非現実的な世界を描く。独特のアフリカのイメージに満ちたその作品は、アフリカよりもヨーロッパ諸国など外国に多くの読者をもつ。ラゴスの労働局に勤めていた頃にした代表作『やし酒飲み』(*The Palm-Wine Drinkard*, 1952) が特に有名。他に『ジャングル放浪記』(*My Life in the Bush of Ghosts*, 1954)、『ジャングルの羽根女』(*Feather Woman of the Jungle*, 1962)、『ヨルバ民話集』(*Yoruba Folktales*, 1986) など。

トラーディ、ミリアム (Tlali, Miriam)

[生]1933. ヨハネスブルク

南アフリカの女性作家。英語で書く。ヨハネスブルクのウィットウォーターズラント大学、レソトのロマ大学で学ぶ。1969年に書き上げられていたという、ヨハネスブルクでの経験に基づく自伝的小説『メトロポリタン商会のミュリエ

ル』(*Muriel at Metropolitan*, 1975) が第一作で、アパルトヘイト下に生きる女性の苦難が描かれている。発禁処分を受けたが、これが南ア黒人女性作家による初の英語小説とされる。1976 年のソウェト蜂起に取材した『アマンジャ』(*Amandla*, 1980) は数週間で 5,000 部を売り尽くした後、発禁となった。ほかに短篇集『ソウェトの物語』(*Soweto Stories*, 1989) など。人種差別、性差別の社会に生きる女性の闘いを描いている。

ドローモ、ロルフス・レジナルド・レイモンド (Dhlomo, Rolfus Reginald Raymond)

[生]1901. シヤム (ピーターマリッツバーグ近く)

[没]1971. シヤム

南アフリカの作家。ミッションスクール卒業後、教師となる。地元の新聞に投稿をはじめ、ついで一時ヨハネスブルクで鉱山事務所に勤めたのち、「ナタールの太陽」(*Ilanga lase Natal*) 紙 (ズールー語と英語のバイリンガル) の編集に従事。『あるアフリカ人の悲劇』(*An African Tragedy*, 1928) は、アフリカ人による南ア最初の英語小説で、都会生活の悪に染まる田舎教師の転落を、キリスト教の立場から批判している。他に、19 世紀のズールー人の指導者たちを主人公とした歴史小説の連作がある。1951 年、ビラカージ記念賞受賞。

バー、マリアマ (Bâ, Mariama)

[生]1929.4.17. ダカール

[没]1981.8.17. ダカール

セネガルの女性作家。フランス語で書く。イスラムの伝統的な社会に育ち、女性としての差別を反芻しながら、学問を志す。1947 年、教員資格を取得、以後 12 年間教職につく。のち、セネガルで国会議員と結婚したが離婚、二度の離婚の後、9 人の子供を自ら引き取った。処女作は『かくも長き手紙』(*Une Si Longue Lettre*, 1980) で、第 1 回野間賞を受賞。一夫多妻のイスラム社会を批判した自伝的作品である。第 2 作は、セネガル人男性とフランス人女性の結婚の悲劇を描いた『深紅の歌』(*Un Chant écarlate*, 1981) で、死後出版である。

ビラカージ、ベネディクト (Vilakazi, Benedict)

[生]1906.1.6. グルトビル (ナタール)

[没]1947.10.26. ヨハネスブルク

南アフリカのズールー系の詩人・小説家。両親ともキリスト教徒。マリアンヒルのローマ・カトリック系のミッションスクールに学ぶ。1923 年、教員資格を取得、教員生活を送る。1930 年代からズールー語で詩を書き始め、「ナター

ルの太陽」(*Ilanga lase Natal*) 紙などに寄稿。ズールー語で書き、自ら英訳もした。敬虔なキリスト教徒の立場から、都市に住む鉱山労働者の悲哀をうたった作品が多い。最初の作品が『ズールーの歌』(*Inkondlo kaZulu*, 1935) で、西洋の影響を受けた最初のズールー詩集とされる。他に、国際アフリカ研究所主催アフリカ語小説コンクールでの 1933 年度の受賞作で、ズールー語最初の小説とされる『永遠に、久しく』(*Noma nini*, 1932) がある。当時の著名なバンツゥ比較言語学者、ウィットウォーターズラント大学の C. M. ドウク教授のズールー語のインフォーマントを務めたことでも知られる。

ファグンワ、D. O. (Fagunwa, D[aniel] O.)

[生] 1910. オンド州

[没] 1963.12.9. ビダ

ナイジェリアの作家。ヨルバ語で作品を発表。大学卒業後、ナイジェリア各地で教師生活を過ごし、幻想的で奇怪な物語を発表した。ヨルバ語作家としてパイオニアであるだけでなく、作品の内容が教育的であるため、ナイジェリアでは人気のある作家の一人となった。作品は 1930 年代の終りから発表されたが、代表作『神の森』(*Igbo Olodumare*, 1947) は、禁断の森に入り込んだ男が出会う冒険を描き、森の精、怪物、魔女、神々、呪術師などが入り乱れて活躍するもの。この作品は、A. トットゥオラに影響を与えた。ヨルバ語に関する深い知識とその表現力、アフリカの幻想世界への探求力の豊かさなどで高い評価がある一方、現実性の欠如や、現実の社会状況との無縁性を理由に、高い評価を与えない批評家もいる。『千の悪魔の森』(*Ogboju Ode Ninu Igbo Irunmale*, 1938) を W. ショインカがかなり自由に英訳した *The Forest of a Thousand Daemons*, 1968 によって、ヨルバ語使用地域以外の世界にも知られるようになった。その後の作品の多くも英訳されている。ほかに『守護者の杖』(*Ireke Onibudo*, 1949)、『エレベジェの森を歩く』(*Irinkerindo Ninu Igbo Elegbeje*, 1954)、『全能者の秘密』(*Adiitu Olodumare*, 1961) など。1955 年、マーガレット・ロング記念メダル受賞。

ファラ、ヌルディン (Farah, Nuruddin)

[生] 1945.11.24. バイドア

ソマリアの小説家・劇作家。イギリス占領下のイタリア領ソマリア南部のバイドア生まれ。エチオピア支配下のオガデンで育ち、エチオピアとモガディシオ(ソマリア)で学び、1970 年インドのパンジャブ大学で哲学と文学を学んだ。のち、エセックス大学へ留学し、演劇を学んだ(1974~76)。中学卒業後、ソマリア文部省に勤めたが、インドから帰国後、教員のかたわらイタリア語やソマ

リ語で小説を書いた。76 年からはローマでイタリア文化を研究。のち、北アメリカ、ヨーロッパ、アフリカの各地の大学で教えた。3 部作『甘く酸っぱいミルク』(*Sweet and Sour Milk*, 1979)、『鰯』(*Sardines*, 1981)、『閉じよ、ゴマ』(*Close Sesame*, 1983) のほか、戯曲『地図』(*The Map*, 1985) などがある。作品のメイン・テーマは、独立後ソマリアにおける人間の自由の問題、女性の抑圧状況である。小説第一作は、インド時代に書き終えた『曲った肋骨から』(*From a Crooked Rib*, 1970) で、女性が置かれた状況と役割を問うもので、ソマリア人初の英語小説である。1973 年地元紙に連載中のソマリ語小説が筆禍となり、バーレ政権が全作品を発禁処分にし、作家に死刑を宣告した。祖国脱出に成功し、イギリスへ渡り、現在はケープタウンに住む。

フガード、アソル (Fugard, Athol)

[生] 1932.6.11. ミドルバーグ (ケープ州)

南アフリカの劇作家・映画監督・俳優。父はイギリス系、母はオランダ系。ポートエリザベスで学んだ後、1950 年から 2 年間ケープタウン大学で社会学と文化人類学を学んで中退。のち、船員として東洋を周航、短期間のうちに職を転々としたが、その間に創作活動を始めた。帰国後、南アフリカ放送局や裁判所に勤め、1957 年女優のシェイラ・メアリングと結婚。劇団を組織し、演劇に没頭した。のち、国立演劇機構の舞台監督を務め、欧米、アフリカ諸国を歴訪。アパルトヘイトをテーマとする実験演劇に取り組むなど精力的に活動した。戯曲に『血の絆』(*The Blood Knot*, 1963)、『シズウェ・バンシは死んだ』(*Sizwe Bansi Is Dead*, 1974)、『メッカへの道』(*The Road to Mecca*, 1984) など。映画台本も多い。

フセイン、エブラヒム (Hussein, Ebrahim)

[生] 1943. リンディ

タンザニアの代表的なスワヒリ語劇作家。ダルエスサラーム大学演劇学科卒業後、当時の東ドイツ・フンボルト大学に学び「東アフリカにおける演劇の発展」で博士号取得。帰国して、1978 年以後ダルエスサラーム大学やナイロビ大学で教えた。スワヒリ社会の伝統的価値と現代社会との軋轢、結婚をめぐる新旧世代間のギャップを描いた『時の壁』(*Wakati Ukuta*, 1967) で注目された。代表作に、ドイツ領時代のマジマジ反乱に取材し、反乱の指導者の内面の苦悩を描く『キンジェケティレ』(*Kinjeketile*, 1969) がある。ほかに、植民地支配と新植民地支配の現実を象徴するシンボルを多用し、ブレヒト演劇の影響が濃いとされる『悪霊』(*Mashetani*, 1971) など。この作品は、ザンジバル革命の 2 年後、1966 年頃を舞台にした 4 幕物、社会・政治的状況を鋭くえぐっている。

以上の二作は特に難解との定評がある。他に、心理劇『彼女は見た』(*Alikiona*, 1970)、口承民話形式で植民地支配後のアフリカを取り上げた『村の雄鶏および先祖の楯』(*Jogoo Kijijini na Ngao ya Jadi*, 1976)、アンデルセン童話のスワヒリ語訳『大切なこと』(*Jambo la Maana*, 1982) など。

プラーキ、ソロモン・チェキシヨ (Plaatje, Solomon Tshekisho)

[生]1876.10.9. ボショフ (オレンジ自由州)

[没]1932.6.19. ヨハネスブルク

南アフリカのジャーナリスト・作家・政治運動家。ツワナ民族出身。初等教育しか受けていない。17歳でキンバレーへ移り、郵便局員となった。語学の才に恵まれ、9言語を流暢に話した。1899年、マフェキングへ移り、ボーア戦争時には、裁判所の通訳などを務めた。戦後、ツワナ語初の新聞「ツワナ人の友」(*Koranta ea Bechuana*)を出し、アフリカ人の権利の擁護に努めた。南アフリカ原住民会議(現アフリカ民族会議)の創設メンバーの一人。アフリカ人の側から見たボーア戦争の記録『プラーキのボーア戦争日誌』(*The Boer War Diary of Sol T. Plaatje*)は1900年頃に書かれたものであるが、死後の1973年に刊行された(新版『マフェキング日誌』*The Mafeking Diary*の刊行は1999年)。『南アフリカ原住民の生活』(*Native Life in South Africa*, 1916)では、1913年の「土地法」のアフリカ社会に対する悪影響を批判している。1917年から1920年にかけて書き上げた『ムーディー100年前の南ア原住民の生活叙事詩』(*Mhudi – an epic of South African Native Life a Hundred Years Ago*, 1930)では、アフリカの伝統とキリスト教西欧の価値の衝突を描いており、現代アフリカ小説のモチーフを先取りしている。他に、シェークスピア作品のツワナ語訳『間違いつづき』(*Diphosho-phosho*, 1930)がある。その他未刊の遺稿として『ベニスの商人』(*Maswabi-swabi*)、『から騒ぎ』(*Matsapa-tsapa a lefela*)、『オセロ』(*Otelo*)など、シェークスピア作品のツワナ語訳がある。

ブリンク、アンドレ (Brink, André)

[生]1935.5.29. フレド (オレンジ自由州)

南アフリカのアフリカーナー系の小説・戯曲作家。アフリカーンス語と英語で書く。オレンジ自由州の小さな町に生まれた。父は治安判事で、厳格かつ保守的なカルビン派の一家だった。1959年、地元のポツェフストローム大学から英語とアフリカーンス語の修士号を取得、ついでソルボンヌへ留学。後に南アへ戻り、グレアムズタウンのローズ大学から博士号を取得、同大学で30年ほど教えた。1991年以後はケープタウン大学で教えている。前衛雑誌『セスティガーズ』(*Die Sestigers*, 「60年代の人びと」)の編集に参加、南ア人種社会、

白人支配体制を鋭く批判した。代表作はアフリカーンス語で発表した『夜の認識』(*Kennis van die aand*, 1973) で、アフリカーンス語文学として初めて発禁処分を受けた。著者自身がこれを英訳したものが『闇を見つめて』(*Looking on Darkness*, 1974) で、白人の恋人殺しの罪で、独房で処刑を待つカラード青年の経験と苦悩が暴かれる。凶暴化した国家権力、南ア社会の人種混合と性暴力の歴史が白日のもとに曝される。他に警察権力の非道を描く『白く乾いた季節』(*A Dry White Season*, 1979) など。南ア最高の賞といわれる CNA 賞(セントラル・ニュース・エイジェンシー)を三度受賞。『ブルー・ドア』(*The Blue Door*, 2006) など最近作では、ポスト・アパルトヘイト社会への幻滅と批判が濃い。

ブルータス、デニス (Brutus, Dennis)

[生] 1924.11.28. ソールズベリ (現ハラレ)

[没] 2009.12.26. ケープタウン

南アフリカ人を両親に、ジンバブエ(旧ローデシア)に生れたが、幼少期に南アへ移った。アパルトヘイト下の人種区分では「カラード」。英語で書く代表的な詩人。1947年、フォートヘア大学卒業後、教師となり、南アフリカで14年間英語とアフリカーンス語を教えた。この間、アパルトヘイト反対運動、特にスポーツでの人種差別反対闘争を指導して、1962年高校教師を解雇され、63年逮捕、ロベン島の政治犯収容所へ送られた。65年釈放、66年国外追放となりイギリスへ亡命。その後、アメリカに落ち着き、反アパルトヘイト活動を継続、とりわけ南アのオリンピックボイコット運動で決定的役割を果たした。デンバー大学などを経て、71年からノースウェスタン大学アフリカ文学教授、テキサス大学やピッツバーグ大学でも教えた。作品は主に人種差別を主題にし、広く人間世界全体に見られる残虐性のなかにも、残された良心を見出そうと訴えている。第1詩集『警笛、げんこつ、鉄靴』(*Sirens, Knuckles and Boots*, 1963)は、投獄中にナイジェリアのムバリ出版局から出された。『マーサへの手紙』(*Letters to Martha and Other Poems from a South African Prison*, 1968)、『会釈と非難』(*Salutes and Censures*, 1982)など多数の詩集がある。作品の多くが南アで発禁処分を受けていたが、1990年に禁を解かれた。来日2回。俳句にも関心が深く、英語による短歌・俳句ともいうべき短詩も多い

ブレイテンバッハ、ブレイテン (Breytenbach, Breyten)

[生] 1939.9.16. ボニベイル

南アフリカのアフリカーナー系の詩人・小説家・画家。ウェスタン・ケープ州に生まれ、ケープタウン大学に学ぶ。60年代のパリに住み、ベトナム人女性と結婚、アパルトヘイト下の南アへの帰国が禁止された。パリでアパルトヘイト

ト反対運動を組織し、1975年に南アへ密入国したが逮捕、投獄された。82年に釈放。パリやセネガルに住み、アフリカンス語で多数の詩や小説を書くが、英語でも書く。ナタール大学などで教えた。南ア最高の文学賞とされるCNA(セントラル・ニュース・エイジェンシー)賞を5回受賞。作品は、亡命や政治活動をテーマに自己のアイデンティティを追求したものが多く、無神論、マジカル・リアリズムのテーマや手法が、アパルトヘイトの過酷な現実描写と交錯している。代表作に『鳥たちの記憶』(*Memory of Birds*, 1986)、『スクラップブック』(*Plakboek*, 1994)など。死や記憶をテーマに、シュールリアリズム、仏教思想への傾倒が見られる。

ペイトン、アラン (Paton, Alan)

[生] 1903.1.11. ピーターマリッツバーグ

[没] 1988.4.12. ダーバン

南アフリカの作家。ナタール大学卒業。学生時代から詩、戯曲、小説を書き始め、キリスト教運動にも参加。しばらく高校教師をしたのち、ヨハネスブルク近郊の黒人少年感化院へ移り、1935~48年院長。第二次大戦後、スカンディナヴィア、イギリスなどを旅行、この間に執筆しつづけた『叫べ、わが愛する祖国よ』(*Cry, the Beloved Country*, 1948)をアメリカで完成。南アでのアパルトヘイト政権の誕生の年、合衆国の黒人運動の台頭期と重なり、ミリオンセラーとなった。ついで、少年感化院長時代に深めた政治思想をもとに、『ヒレアシシギは遅すぎて』(*Too Late the Phalarope*, 1953)を発表、作家としての地位を確立。1956年にはアパルトヘイトに反対する人々とともに非人種社会を目指して南アフリカ自由党を結成、1968年に強制解散させられるまで総裁を務めた。1960年フリーダム賞受賞。ほかに、小説『ああ、それでも君たちの国は美しい』(*But Your Land Is Beautiful*, 1981)、自伝『旅は続く』(*Journey Continued*, 1988)など。伝記作家、政治評論家としても著名だった。

ヘッド、ベッシー (Head, Bessie)

[生] 1937.7.6. ピーターマリッツバーグ

[没] 1986.4.17. セロウェ

南アフリカ共和国の女性作家。ヨハネスブルクの富裕な白人競走馬主の家に生まれた母は、結婚に失敗、実家に戻ったが、厩番の黒人と関係を結び妊娠、遠く離れたピーターマリッツバーグの精神病院に幽閉された。その精神病院で生まれたヘッドはただちに里子に出され、13歳でダーバンの孤児院に入れられた。同地で中学を卒業、教員資格を得た。短期間の教師生活の後、60年代初めはケープタウンやヨハネスブルクでジャーナリストになった。61年、ケープタ

ウンで結婚、一児をもうけたが 64 年子供を連れてボツワナへ亡命。教師生活ほかを経験しながら、79 年にボツワナ市民権を獲得した。病弱と神経症に悩みながら書き始め、やがて国際的に知られるようになった。1986 年、肝炎で死去。苦難の生活とボツワナでの生の新鮮さと希望を小説に綴った。第一作は人種差別下での人種間の協調を描く『雨雲が集まる時』(*When Rain Clouds Gather*, 1968)、以後『マル』(*Maru*, 1971)、『力の問題』(*A Question of Power*, 1973)、短篇集『宝物収集家』(*The Collector of Treasures*, 1977)、『セロウェー雨風の村』(*Serowe : Village of the Rainwind*, 1981) など。死後出版の自伝『ひとりぼっちの女』(*A Woman Alone*, 1990) がある。アパルトヘイト体制の犠牲のどん底に生き、死後に世界的に評価が高まった典型的作家である。

ベティ、モンゴ (Beti, Mongo)

[生] 1932.6.30. ヤウンデ近郊ムバルマヨ

[没] 2001.10.8. ドゥアラ

カメルーンの作家。エサ・ボト (Eza Boto) の名でも作品を発表。フランス語で執筆。カメルーンのヤウンデ高等学校卒業後、奨学金を得てフランスへ渡り、エクサンプロバンス大学で文学を専攻、のちパリ大学へ移り卒業。1959 年以降フランスに定住。作品は主に植民地下でのカメルーン人の心理状態と社会情況を描く。主著『憎しみもなく、愛もなく』(*Sans haine et sans amour*, 1953、エサ・ボト名)、『残酷な町』(*Ville cruelle*, 1954、エサ・ボト名)、キリスト教伝道の限界や矛盾を諧謔に込めて風刺した『ボンバの哀れなキリスト』(*Le Pauvre Christ de Bomba*, 1956)、50 年代カメルーンを舞台に植民地に生きる主人公の疎外感を描く『カラへの伝道』(『使命完了』*Mission terminée*, 1957)、『奇跡の王』(*Le Roi miraculé*, 1958)、『道化役者の滑稽な破滅』(*La Ruine presque cocasse d'un polichinelle*, 1979) など。

ベヤラ、カリクスト (Beyala, Calixthe)

[生] 1961. ドゥアラ

カメルーンの女性作家。フランス語で書く。貧しい一家に育ったが、フランスとスペインで高等教育を受けた。現在は、パリに住んでいる。フランス語で書くアフリカ女性作家の中で、もっともフェミニズム思想が濃厚だとされる。自伝的小説『太陽に灼かれて』(*C'est le soleil qui m'a brûlée*, 1987) が出世作。よく知られる作品『ベルビルの子供』(*Le Petit Prince de Belleville*, 1992) はアフリカ人を両親に、フランスで生まれた少年を主人公に、パリの移民労働者の社会を風刺とユーモアをもって描いている。他にフランスで働くイスラム教徒女性の愛と性を描く『失われた名誉』(*Les Honneurs perdus*, 1996)

がある。この作品は 1996 年度のアカデミー・フランセーズ小説大賞を受賞した。1999 年には、顕著な文学活動歴により、ゴンクール賞を受賞した。

ホーベ、チェンジェライ (Hove, Chenjerai)

[生]1956.2.9. ジシャバネ

ジンバブエの作家。カトリックのミッションスクールで学んだ後、教員資格を取り、各地の中学で教えた。南アフリカ大学（通信制）から学位を取得、のちにジンバブエ大学でも学んだ。マンゴ出版社などの編集者や、ジンバブエ大学のライター・イン・レジデンスとなった。ショナ語で書いていたが、のち英語で詩を書き始めた。最初の英語小説『骨たち』(*Bones*, 1989) では、ジンバブエ解放闘争（チムレンガ＝民衆蜂起）の傷跡を巧みに描いて、1989 年度の野間賞を受賞した。清冽なリリシズムとショナ語から借りた独特の表現に特徴がある。マレチェラ以後の、ジンバブエを代表する作家で、他に『影たち』(*Shadows*, 1991)、『もぐり酒場の話』(*Shebeen Tales*, 1994) など。ジンバブエ作家連合の議長を務めた。現在は、合衆国在住。

マイル、デイビッド (Maillu, David)

[生] 1939.

ケニアの小説家・画家・出版人。口承物語作家として活動を始めた。作品は通俗小説、SF 小説、詩、演劇、音楽、哲学、絵画など幅広い分野に及ぶ。1972 年コウムブックス社を設立し、代表作『俗人』(*The Common Man*, 1975) などを出版。「民衆の作家」を自称し、麻薬、売春、不倫、浮浪生活など、都市生活のさまざまな歪みをユーモアと風刺を交えて描くことを得意とする。ポルノ的作品も多い。のちデイビッド・マイル社に社名変更し、多種の出版物を刊行。主著は『煩惱』(*Troubles*, 1974) のほか、社会派推理小説『DXT 作戦』(*Operation DXT*, 1986)、浩瀚な小説『壊れたドラム』(*Broken Drum*, 1991) など。

マゴナ、シンディウエ (Magona, Sindiwe)

[生]1943.8.27. ウムタタ

南アフリカの女性作家。英語で書く。トランスカイに生まれ、ケープフラッツで育つ。南アフリカ大学から学位取得後、合衆国コロンビア大学でも学び、のちニューヨークの国連本部に勤務。2003 年南アフリカへ戻り、ケープタウンに住む。代表作は、1993 年 8 月にケープタウン郊外のタウンシップで実際に起きた殺人事件を素材にした『母から母へ』(*Mother to Mother*, 1998)。殺人者（南アの黒人青年）の母親から犠牲者（アメリカ白人の女子大生）の母親にあてた手紙の形で物語が展開する。処女作『私の子供たちの子供たちへ』(*To My*

Children's Children, 1990) は、1991 年度野間アフリカ賞選考に際して特別にメンションされた。

マシューズ、ジェームズ (Matthews, James)

[生]1929.5.25. ケープタウン

南アフリカの詩人、短篇の名手。カラード。英語で書く。父は港湾労働者、母は家事労働者。新聞売り子、夜間時の電話交換手など種々な仕事に従事。1950年代から書き始め、70年代の文芸復興期に活躍。76年には無裁判拘禁に処された。初期の詩集では、アパルトヘイトの非人間性を激しく非難、怒り、苦痛、抗議が漲っている。短篇集『公園その他』(*The Park and Other Stories*, 1974) は24篇を収録したもので、社会的不正義に対する抵抗の姿勢が顕著である。小説『パーティは終わった』(*The Party Is Over*, 1997) は、60年代のケープタウンのカラード社会を扱っている。

マハフーズ、ナギブ (Mahfouz, Naguib)

[生]1911.12.11. カイロ

[没]2006.8.30. カイロ

エジプトの作家。アラビア語で書く。小官吏の家庭に生まれたが、17歳から書き始め、カイロ大学哲学科に学んだ。公務員のかたわら、1952年7月のエジプト革命までに11の小説を発表。以後数年間は筆を折った。初期には、古代エジプトを舞台にした歴史小説『運命のいたずら』(*Abath al-aqdar*, 1939) などを書いた。その後、カイロを舞台にいくつかの作品を書いたが、エジプト革命後、『バイナル・カスライン』(*Bayn al-Qasrayn*, 1956)、『カスルッシャウク』(*Qasr al-Shawq*, 1957)、『スッカリーヤ』(*al-Sukkariyya*, 1957) で自伝的要素を込めて三世代に跨る一族を通して、現代エジプトの都市生活を描く長編三部作を発表、アラブ世界を代表する作家となった。1988年度ノーベル文学賞受賞。意識の流れや、実存主義的傾向も見られる。生涯に30以上の小説、350以上の短篇を書いたが、晩年は視力をほとんど失っていた。無神論的な宗教思想から身边に暗殺計画が起きるなど、執筆活動の中断が度重なったが、エジプト政府により、国葬が執り行われた。

マパンジェ、ジャック (Mapanje, Jack)

[生]1944. カダンゴ

マラウイの詩人。英語で書く。ミッション・スクール卒業後、教職につき、のちロンドン大学に学び修士号と博士号を取得。マラウイの中学、大学でも教えた。最初の詩集『カメレオンと神々』(*Of Chameleons and Gods*, 1981) は発

禁処分を受けた。バンダ独裁政権により 1987 年から 1991 年まで政治拘禁に処された。その後亡命し、主にイギリスに住んでいる。詩集『縄跳び』(*Skipping with Ropes*, 1998) では、皮肉とユーモアを交えて獄中生活を振り返っている。

マレチェラ、ダンブツォ (Marechera, Dambudzo)

[生] 1952.6.4. ルサペ (ジンバブエ)

[没] 1987.8.18. ハラレ

ジンバブエの小説家。貧困と暴力、厳しい人種差別の社会で幼い魂を成長させた。ミッションスクールで学ぶが、教育内容をめぐって白人教師と対立。ローデシア大学在学中に、モザンビーク解放戦線に味方してデモを組織するなど、反政府行動で放校処分を受けた。のちオックスフォード大学へ留学したが、素行と成績不振を理由に放校処分。客員作家としてロンドン大学などで作家修行を積むが、アルコール依存症となり、それがもとで夭折。短期間のうちに、小説、短篇、戯曲などを発表。小説第一作『飢えの家』(*The House of Hunger*, 1978) は人種差別の暴力をテーマに、意識の流れの手法を駆使したもの。9 つのストーリーの組み合わせで、幻想と現実が入り混じる。1979 年、「ガーディアン」紙の小説部門賞受賞。映画化の計画があったが実現しなかった。他に、ジェームズ・ジョイスなどとも比較されるアナーキー的な作品『黒い陽光』(*Black Sunlight*, 1980) など。死後、評論集『ブラック・インサイダー』(*The Black Insider*, 1990) が出版された。死後に評価の高まった典型的作家の一人である。

ムアンギ、メジャ (Mwangi, Meja)

[生] 1948.12.27. ナニュキ

ケニアの作家。英語で執筆。幼少の頃、マウマウの非常事態時に収容所生活を経験した。ケニヤッタ・カレッジ卒業後、テレビ関係の仕事につく。のちアイオワ大学で作家修行し、帰国後創作活動に専念。代表作は、独立後のケニア社会の腐敗の構造を底辺生活から描いた小説『早くこの俺を殺してくれ』(*Kill Me Quick*, 1973) と『リバーロードをくだる』(*Going Down River Road*, 1976)。これらでケニヤッタ文学賞を受賞。ほかにマウマウ戦争を題材にした『猟犬に喰われる屍』(*Carcase for Hounds*, 1974)、『ゴキブリのダンス』(*The Cockroach Dance*, 1979)、『シャカの帰還』(*The Return of Shaka*, 1989)、『風に挑んで』(*Striving for the Wind*, 1990) など。この他にも、相当な多作で、児童文学や映画製作にも及んでいる。

ムゴ、ミシエレ・ギザエ (Mugo, Micere Githae)

[生] 1942. キリニャガ

ケニアの女性作家・詩人。英語で書く。地元の高校卒業後、ウガンダのマケレレ大学に学ぶ。ケニアへ戻り、女子高校の校長になった。1969年、カナダのニュー・ブランズウィック大学から学位を取得。のち、ナイロビ大学で教え、女性初の文学部長になった。1982年、モイ政権下にジンバブエ大学へ移り、1993年からは合衆国のシラキュース大学で教えている。学位論文となった『アフリカのビジョン』(*Vision of Africa*, 1978) はアフリカ人作家と白人作家のアフリカ・黒人の描き方・表象の相違を比較したもの。他に、詩集『わが民衆の娘よ、歌え』(*Daughter of My People, Sing !*, 1976)、グギ・ワ・ジオンゴとの合作劇『デダン・キマジの裁判』(*The Trial of Dedan Kimathi*, 1977) など。女性学、フェミニズム思想でも知られる。

ムショープ、チナ (Mhlophe, Gcina)

[生]1958.10.24. ナタール

南アフリカの女性作家、詩・短篇・児童文学のほか、ストーリーテリング・ひとり芝居で活躍。父はズールー民族、母はコーサ民族に属する。イースタンケープやヨハネスブルクでの学業と家事労働経験の後、放送局や雑誌記者となった。1983年以後、俳優、戯曲作家となり、ヨハネスブルクのマーケットシアターのディレクターにもなった。自伝的な短篇もあるが、口承文学の伝統の継承に熱心で、『七つの頭を持つ蛇』(*The Snake with Seven Heads*, 1989)、『亀の女王様』(*Queen of the Tortoises*, 1990) ほか、多数の児童文学作品がある。

ムダ、ゼイクス (Mda, Zakes)

[生]1948. イースタンケープ

南アフリカの作家。英語で書く。小説のほか、戯曲、詩を発表、絵画や映画製作でも活躍。子供時代をソウェトで過ごし、レソトで学ぶ。『スタッフライダー』(*Staffrider*) 誌ほか、各種の雑誌に詩を寄稿、第一詩集は『破片』(*Bits of Debris*, 1986)。戯曲『祖国のために歌う』(*We Shall Sing for the Fatherland*, 1973) が1978年度のアムステル演劇賞を受賞。その後、オハイオ大学大学院へ留学し演劇を本格的に学んだ。1984年帰国、翌年にはレソト大学講師、1989年、民衆演劇の研究でケープタウン大学から学位を取得した。『日曜の衣装をまとった娘たち』(*And the Girls in Their Sunday Dresses*, 1993) は四つの劇作品を集めたもの。エール大学リサーチ・フェロー時代には、最初の小説『死に方』(*Ways of Dying*, 1995) を執筆、1994年に帰国して、ウィットウォーターズラント大学客員教授となった。戯曲や小説にはマジカル・リアリズムの手法が認められる。ポスト・アパルトヘイト時代を描く最近作に『ブラック・ダイヤモンド』(*Black Diamond*, 2009) などがある。現在は、オハイオ大学教授。

ムチャーリ、オズワルド (Mtshali, Oswald)

[生] 1940.1.17. クワズールー・ナタール

南アフリカの詩人。人種差別のため地元の大学に進学できず、のちにコロンビア大学に学び、修士号を取得。働きながら、詩を文芸誌に寄稿する。第一詩集『牛皮のドラムの響き』(*Sounds of a Cowhide Drum*, 1971) は、アパルトヘイト下の黒人体験を鮮烈に形象したもので、非白人詩の新しい時代の到来を告げる革新的なものとされ、黒人意識運動にも影響を与えた。1980年帰国し、1987年再び渡米。ほかに、一時期に発禁処分を受けた第二詩集『火炎』(*Fire flames*, 1980) がある。

ムノニエ、ジョン (Munonye, John)

[生] 1929.4.1. アコクァ (イモ州)

[没] 1999.5.10.

ナイジェリアの小説家。英語で書く。イボ民族出身。イバダン大学卒業。長く教職についたが、かたわら小説を発表。『一人息子』(*The Only Son*, 1966)、『オビ』(*Obi*, 1969) などがある。伝統社会の農村部に生きる人びと、家族の人間模様を、民族の伝承などを交えて生き生きと描いている。特に、子供の心理を描くうえで定評がある。

ムパシェーレ、エスキア (Mphahlele, Es'kia)

[生] 1919.12.17. プレトリア

[没] 2008.10.27. レボワクゴモ

南アフリカ共和国の作家。本名 Ezekiel Mphahlele。ソト民族の出身。英語で執筆。現在の行政首都プレトリアのスラムで生まれ、苦学してヨハネスブルクの名門校セント・ピーターズ中学校、ナタール州のアダムズ・カレッジを卒業、高校教師となった。1952年に制定されたバンツー教育法に反対して、同年解雇され、教員資格も奪われた。その後、ヨハネスブルクで文芸誌『ドラム』(*Drum*) の小説担当の編集者となり、この頃から短篇を次々に発表。そのかたわら南アフリカ大学（通信制）で学士号と修士号を取得。1957年、家族を連れてナイジェリアへ亡命。この間の事情は、自伝文学の傑作と評価の高い『二番通り』(*Down Second Avenue*, 1959) に詳しい。ナイジェリアでは、イバダン大学で教えながら、作家・芸術家のサロン「ムバリ・クラブ」の創設に加わり、文芸誌『ブラック・オルフェイス』の編集にも参画した。さらにナイロビへ渡り、ここでも文化芸術運動「チェムチェミ」を起こした。1961年、パリに本部を置く「文化の自由会議」のアフリカ担当理事に就任、アフリカ文化の普及と顕揚

に努めた。1966 年渡米、デンバー大学やペンシルバニア州立大学で教え、1977 年帰国、ヨハネスブルクのウィットウォーターズラント大学教授となった。1987 年、同大学名誉教授。作品には人種問題をテーマにしたものが多い。『生者と死者』(*The Living and Dead*, 1961)、『アフリカのイメージ』(*The African Image*, 1962) などの代表作のほか、小説『放浪者たち』(*The Wanderers*, 1971) でノーベル賞候補にもなった。短篇集『途切れない歌』(*The Unbroken Song*, 1981) など多数。サンゴールなどが主唱したネグリチュード文学運動の意義を問う代表的論者の一人。

ムンゴシ、チャールズ (Mungoshi, Charles)

[生]1947.12.2. マニェネ

ジンバブエの詩人・小説家。英語とショナ語で書く。高校卒業後、営林事務所、書店などに勤めたが、1980 年の独立後ジンバブエ・パブリッシング・ハウスに勤務。1985 年にはジンバブエ大学のライター・イン・レジデンスとなった。第一作はショナ語で書かれた小説で、英語での短篇集『乾季の到来』(*Coming of the Dry Season*, 1972) が続いたが、白人政権から発禁処分を受けた。『雨を待つ』(*Waiting for the Rain*, 1975) では、解放戦争下で、未来が不透明な時代の家庭の崩壊を描いている。都市と農村、新旧世代間の葛藤が主要なテーマで、児童文学作品も多い。コモンウェルス作家賞、野間アフリカ賞 (1992 年度) などを受賞。ケニアの作家グギ・ワ・ジオンゴの『一粒の麦』(*A Grain of Wheat*) のショナ語への訳者でもある。

モハメド・サイド・アブドゥッラ (Mohamed Said Abdulla)

[生]1918.4.25. マクンドウチ (ザンジバル)

[没]1991.3. ザンジバル

タンザニアのスワヒリ語作家。ミッションスクールで学び、公務員を務めた。1964 年のザンジバル革命で、家族全員が殺害された。スワヒリ語最初の探偵推理小説『祖先の霊場』(*Mzimu wa Watu wa Kale*, 1960) で知られるほか、『ゼロの秘密』(*Siri ya Sifri*, 1974)、『一人の妻に旦那三人』(*Mke mmoja, Waume watatu*, 1975)、『ムサ氏の失敗』(*Kosa la Bwana Msa*, 1984) などの中短篇小説がある。スワヒリ語表現の美しさ、巧みに定評がある。代表的なスワヒリ語作家の一人。

モハメド・スレイマン (Mohamed Suleiman)

[生]1945.10.5. ザンジバル

タンザニアのスワヒリ語作家。BBC 放送向けの短篇小説を書き始め、のちに

長編小説を発表。短篇は、ロングマン社刊行のスワヒリ語傑作短編集シリーズ『恋はくしゃみのごとし』(*Mapenzi ni kikohozi*, 1970)、『口は災いの館』(*Kinywa jumba la maneno*, 1977)などに収録されている。小説『渴き』(*Kiu*, 1972)、『レヘマの運命』(*Nyota ya Rehema*, 1976)などの社会小説、恋愛小説で知られる。代表的なスワヒリ語作家の一人。

モフォロ、トマス (Mofolo, Thomas)

[生] 1876.8.2.

[没] 1948.9.8.

レソト生まれの作家。20世紀の最初期のアフリカ人文学者の一人。バンツワ諸語の一つであるソト語で作品を書いた。モリジャのミッションスクールに学び、1898年教員免許を取得。キリスト教関係の出版社で事務と校正の仕事にたずさわった。職場の雇用者から文筆家になることを勧められ、作家活動に入った。1906年、ソト語の新聞に連載し始めた第1作『東方への旅人』(*Moeti oa Bochabela*: 英訳 *Traveller to the East*, 1934)は、一青年が神を探し求めて旅に出る、『天路歷程』を髣髴とさせるような物語で、1907年出版された。伝統的なアフリカの価値とキリスト教の相克も読み取れる。第2作は『ピツェン』

(*Pitseng*, 1910、町の名)で、ソト民族の一少年の身の上や教育問題が、作者の生涯と重ねて描かれている。以上の2作品は、キリスト教と伝統的アフリカ社会との対比を描いている。1925年刊の小説『シャカ王』(*Chaka*)は、ズールー民族の歴史上最も有名な人物を描いた古典的作品とされ、英訳(1931)のほか、フランス語、ドイツ語、イボ語訳などがある。第1次世界大戦後は、政界に進出、工場や農場の経営にも関与したが、人種差別政策下で事業に失敗し、貧困のうちに死んだ。

ライ、カマラ (Laye, Camara)

[生] 1928.1.1. クルッサ

[没] 1980.2.4.

ギニア(当時はフランス領西アフリカ)のマリンケ民族出身の小説家。フランス語で執筆。父は宝石や金の細工人、母も同業者の娘。イスラム教徒としてコーラン学校へ通った後、首都コナクリの工業学校で学び、奨学金を得て自動車整備技師の訓練を受けるためパリへ留学。3年で資金が切れ、パリの工場で働く。その間、祖国への郷愁を込めて自伝的小説『黒い子供』(*L'Enfant noir*, 1953)を執筆。心理的傾向の強い作風で、田園牧歌的な過去への憧憬に満ちている。1955年ギニアへ戻り、58年情報省調査研究センター所長。多忙な仕事のかたわら作品を書いたが、大統領と意見が衝突して自宅監禁を受け、65年に妻とともに

にセネガルへ亡命。以後、ダカール大学のイスラム研究所の仕事にたずさわった。代表作『王の栄光』(*Le Regard du roi*, 1954)、『言葉の守護者』(*Le Maitre de la parole*, 1978) など。

ラ・グーマ、アレックス (la Guma, Alex)

[生] 1925.2.20. ケープタウン

[没] 1985.10.11. ハバナ

南アフリカの小説家。ケープタウンの第六地区（カラード地区）の生まれ。ケープ工業カレッジ卒業。父は南アフリカ・カラード人民会議議長。1948年、南ア共産党に入党。アパルトヘイト反対闘争の指導者で、1955年の「自由の憲章」起草に参加。56年反逆罪で逮捕される。言論面では、55年以降『ニュー・エイジ』紙で活躍、多数の短篇を発表した。同時に、自宅拘禁や投獄、言論禁止処分を受け、66年イギリスへ亡命。アフリカ民族会議の重要メンバーで、78年から同会議キューバ代表。アフリカ文学関係の国際会議やAA作家会議でも議長を務めるなど積極的に活動した。代表作は、第六地区を舞台にカラード青年の怒りと憤怒を綴る『夜の彷徨』(*A Walk in the Night*, 1962)をはじめ、カラードのアイデンティティを問い、団結を訴える『そして三重織の紐は』(*And a Threefold Cord*, 1964)、獄中記『石の国』(*The Stone-Country*, 1967)、アパルトヘイト反対地下組織での人間群像を描く『季節の終りの霧の中で』(*In the Fog of the Seasons End*, 1972)、バンツースタン建設計画とアフリカ人の抵抗を背景として、差別の怨念の深さを語る『百舌鳥が虫を串刺しにする時』(*Time of the Butcherbird*, 1979)がある。他に『ソビエト紀行』(*A Soviet Journey*, 1978)など。1969年、アジア・アフリカ作家会議からロータス賞受賞。

ラディポ、ドゥロ (Ladipo, Duro)

[生] 1931.12.18. オショボ

[没] 1978.3.11. ナイジェリア

ナイジェリアの戯曲作家。ヨルバ語で書く。ヨルバ語のフォークオペラの、本格的な創始者とされる。それまでの聖書やフォークロアから取材し、彼以前の、アメリカのミンストレルショウを模したヒューバート・オグンデなどのオペラでなく、ヨルバの伝統や歴史に素材を求めた。この活動の推進のために、1962年、オショボの地にムバリ・ムバヨクラブを創設。英訳作品に、『ヨルバ語劇三篇』(*Three Yoruba Plays*, 1964)ほか。代表作は『王は死ななかった』(*Oba Ko So*)で、1964年度ベルリン演劇祭で最優秀賞を獲得した。なお、これらの活動では、ナイジェリア文化の顕揚に尽力したドイツ人ウッリ・ベイヤーの協力が顕著である。

ラベアリベロ、ジャン-ジョゼフ (Rabearivelo, Jean-Joseph)

[生] 1903.3.4. タナナリブ

[没] 1937.6.22. タナナリブ

マダガスカルの人。マダガスカル現代文学の父といわれる。ジョゼフ・カジミール Joseph-Casimir の名も使った。主にフランス語で執筆。母語であるマラガシ語による作品もある。仕立屋を営む没落貴族の一人息子として生まれたが、13歳で学校を辞め、フランス語とスペイン語を独習。出版社の校正係をするかたわら、自作をマラガシ語で書き、フランス語に翻訳した。母の影響などを受けて詩作にうち込み、数冊の詩集を出版した。フランス文化に関心を寄せたが、生涯フランスに行く夢は果せず、病身のうえに麻薬中毒となり、36歳で3人の子を残し、自殺した。作品には伝統へ戻ることによって、植民地文化への抵抗を試みようとする姿勢がうかがえる。代表作『シルブ』(*Sylves*, 1927)、『夜からの訳』(*Traduit de la nuit*, 1935)、『詩集』(*Poèmes*, 1960)、『夢のような』(*Presque-songes*, 1934) など。なお、二つの小説が死後に出版されている。

リキング、ウエレウエレ (Liking, Werewere)

[生] 1950. ボンデ

カメルーンの女性作家。演劇、映画製作でも活躍。フランス語で書く。小説『碧玉か珊瑚の女のように』(*Elle sera de jaspe et de corail*, 1983) で、男性中心のアフリカ社会を批判している。フェミニズム思想が顕著で、ジェンダーやセクシュアリティに関するテーマが多い。野間アフリカ出版賞を受賞した『断ち切られた記憶』(*La Mémoire amputée*, 2004) では、無名の女性たちの人生が生き生きと描かれている。

リーブ、リチャード (Rive, Richard)

[生] 1931.3.1. ケープタウン

[没] 1989.6.4. / 1989.6.5. ケープタウン

南アフリカ共和国の作家。英語で執筆。ケープタウンの第六地区に「カラード」として生まれた。ケープタウン大学卒業後、高等学校の教師を務め、のちオックスフォード大学へ留学、南ア初期の白人女性作家オリーブ・シュライナーについての論文で博士号を取得した。帰国後ケープタウン大学などで教え、ハーバード大学、ケンブリッジ大学からも客員教授として招かれた。『ドラム』(*Drum*) 誌などに短篇を多数発表、『コントラスト』(*Contrast*) などの南アの文芸雑誌の編集顧問も務めた。自らは人種区分を否定し、いかなる運動団体に

も身を寄せず、孤高を保ったが、人種問題を描く作品が多く、亡命しなかった数少ない作家の一人でもあった。作品は十数カ国語に翻訳されて、アレックス・ラ・グーマと並んで最高の物語作家と評価された。短篇集『アフリカの歌』(*African Songs*, 1963)、『前へ、後ろへ』(*Advance, Retreat*, 1983)のほか、白人女性との恋愛を描く長編『非常事態』(*Emergency*, 1960)、自伝的作品『第六地区バッキンガム・パレス』(*Buckingham Palace District Six*, 1986)、評論集『黒人を書く』(*Writing Black*, 1981)などがある。ケープタウンの自宅で暴漢に殺害されたが、死後『非常事態継続』(*Emergency Continued*, 1990)が出版された。

ルバディリ、デイビッド (Rubadiri, David)

[生]1930.7.19. リウレ

マラウイの詩人・小説家。マケレレ大学、ついでケンブリッジのキングズカレッジに学んだ。駐アメリカ合衆国、国連への初代大使を務めた。その後、ボツワナ大学、ナイロビ大学などに勤めた。『婚資無用』(*No Bride Price*, 1967)はマラウイ初の英語小説で、独立後マラウイのバンダ政権への幻滅が描かれている。戯曲も書いているが、詩が本領で『トランジション』(*Transition*)、『ブラック・オルフェウス』(*Black Orpheus*)、『プレザンス・アフリケーヌ』(*Présence Africaine*)などに発表。『東アフリカの詩』(*Poems from East Africa*, 1971)、『詩とともに育つ—中学生のためのアンソロジー』(*Growing Up With Poetry : An Anthology for Secondary Schools*, 1989)などを編集した。

レッシング、ドリス (Lessing, Doris)

[生]1919.10.22 ドリス・メイ・テイラー

[没]2013.11.17. ロンドン

イラン生まれであるが、1925年、家族とともに英領南ローデシア（現ジンバブエ）へ移る。15歳で首都ソールスベリー（現ハラレ）へ出て、電話交換手となる。19歳で結婚して二児をもうけた。のち、家族を捨て、共産主義運動に参加、再婚し一児をもうけた。1949年、その息子を連れてロンドンへ移住。代表作は、人種差別や植民地主義をテーマにした『草は歌っている』(*The Grass is Singing*, 1950)。以後、マルクス主義の影響の強い『黄金のノート』(*The Golden Notebook*, 1962)など多くの作品を発表。フェミニズム作家としても著名。2007年度ノーベル文学賞受賞。

ロティミ、オーラ (Rotimi, Ola)

[生] 1938.4.13 サペレ

[没] 2000.8.18 イレーイフェ

ナイジェリアの戯曲作家。ベンデル州生まれ。父はヨルバ人、母はイジョ人。アメリカ留学中の1966年、エール大学で初期戯曲「また夫の気が狂った」(*Our Husband Has Gone Mad Again*、出版は1974)などが上演された。政治風刺劇である。67年帰国後、イフェ大学(現オバフェミ・アウオロウオ大学)に勤務し、「オリ・オロクン劇団」(*Ori Olokun*)を結成した。77年から92年までポートハーコート大学に勤め、以後イフェに戻り、プロの「アフリカゆりかご劇団」(*African Cradle Theatre*)を組織した。作品に、植民地以前のヨルバ民族の裁判を舞台に、ソフォクレスの『エディプス王』をなぞった『神々に咎はあらず』(*The Gods Are Not To Blame*, 1971)、都会の安アパートに住む労働者の生活を描く『もしかしたら』(*If*, 1983)などがある。

ンコシ、ルイス (Nkosi, Lewis)

[生]1936.12.5. ダーバン

[没]2010.9.5. ヨハネスブルク

南アフリカ生まれの作家・批評家・ジャーナリスト・放送作家。黒人の立場から南アフリカの人種問題に激しい批判を行なってきた。ダーバンの大学で教育学を学んだのち、ズールー語の新聞「ナタールの太陽」(*Ilanga lase Natal*)の編集に従事、1956年に『ドラム』(*Drum*)誌の編集に参加した。ハーバード大学への奨学金を受けて合衆国へ渡り、そのまま亡命。以来、アメリカ、イギリス、アフリカ諸国の雑誌に文章を書いてきた。その多くは、評論集『故郷と亡命』(*Home and Exile*, 1965)にまとめられている。ハーバード大学時代に書いた戯曲『暴力のリズム』(*The Rhythm of Violence*, 1964)はヨハネスブルクにおける人種関係を描くもの。ニューヨークのテレビでアフリカ関係の番組を担当したこともあり、のちザンビア大学でも教えた。評論集『仕事と仮面』(*Tasks and Masks*, 1981)、小説『交配する鳥』(*Mating Bird*, 1983)。ほかに短篇小说がある。『地下生活者たち』(*Underground People*, 1993)は、反アパルトヘイト運動の人間群像を描いている。

ンゴボ、ロレッタ (Ngcobo, Lauretta)

[生]1931 クワズールー・ナタール

南アフリカの女性作家。1953年、フォートヘア大学卒業。1960年のシャープビル事件後、夫が拘禁され、1963年以後31年間、イギリスへ亡命。1994年に帰国。第1作は『黄金の十字架』(*Cross of Gold*, 1981)で、60年代南アを舞台に、反アパルトヘイト闘争の暴力的な時代を扱っている。『かくして、彼女たちは死ななかった』(*And They Didn't Die*, 1990)は、50年代後半のナタールで

のパス法反対運動に結集した女たち、特にアパルトヘイト下での男たちの出稼ぎ労働の後に残された田舎の女たちの苦しみ、闘いと団結を描いている。他に、イギリスに住む黒人女性作家のアンソロジー『語り尽くそう』(*Let It Be Told*, 1988)などを編集している。

ンデベレ、ジャブロ (Ndebele, Njabulo)

[生]1948.7.4. ウェスターン・タウンシップ (ヨハネスブルク近郊)

南アフリカの作家。英語で書く。スワジランドで学ぶ。ボツワナ大学などから学位取得。ケンブリッジ大学から修士学位、デンバー大学から博士号取得。レソト大学副学長、ウィットウォーターズランド大学アフリカ文学科長、ウェスタン・ケープ大学副学長、ケープタウン大学副学長などを歴任。南アフリカ作家協会名誉会長。代表作『愚者たち』(*Fools and Other Stories*, 1984)は野間賞受賞。他に、『息子の死』(*Death of a Son*, 1996)など。児童文学、評論集も多い。

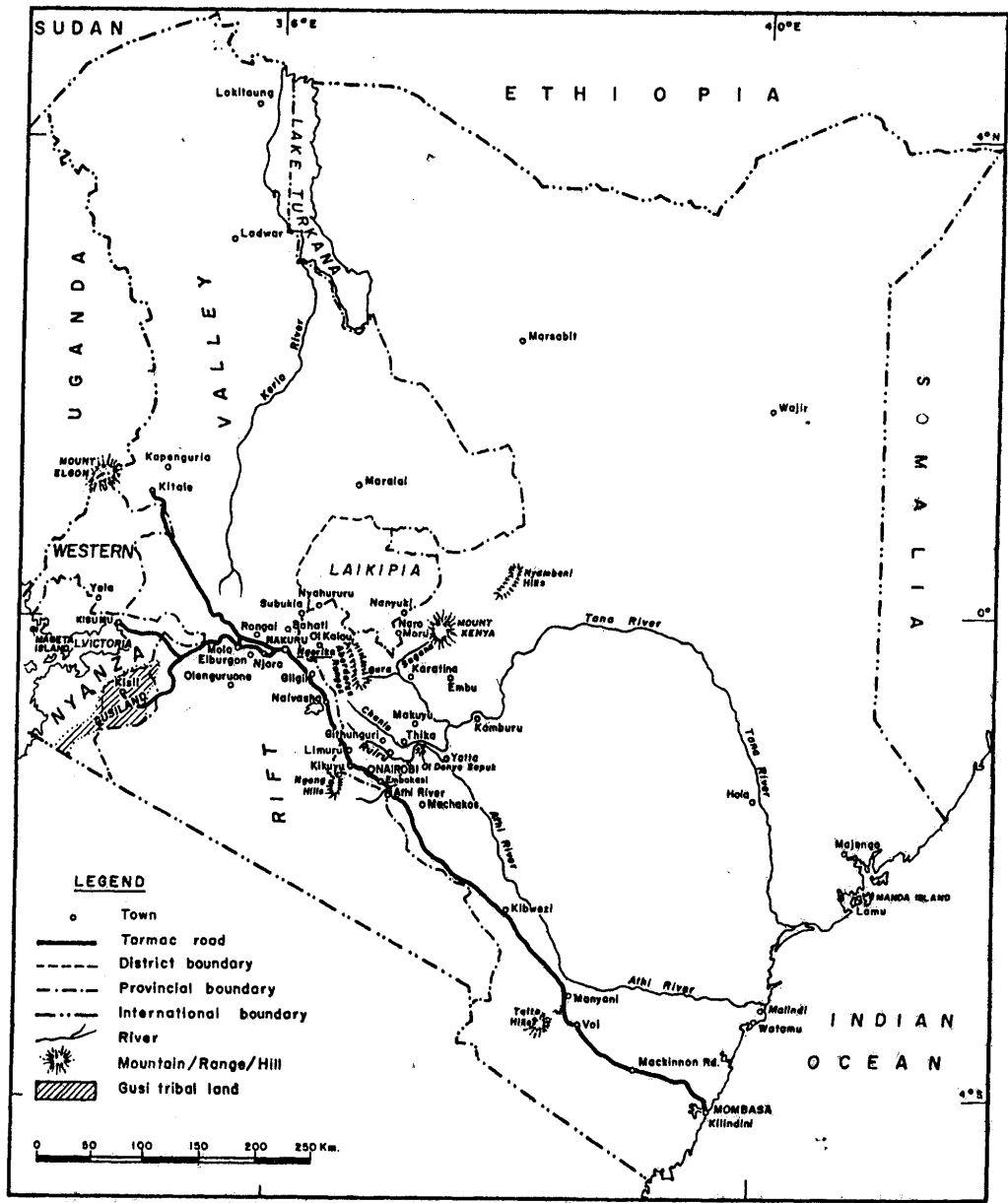
ンワパ、フロラ (Nwapa, Flora)

[生]1931.1.13. オグタ

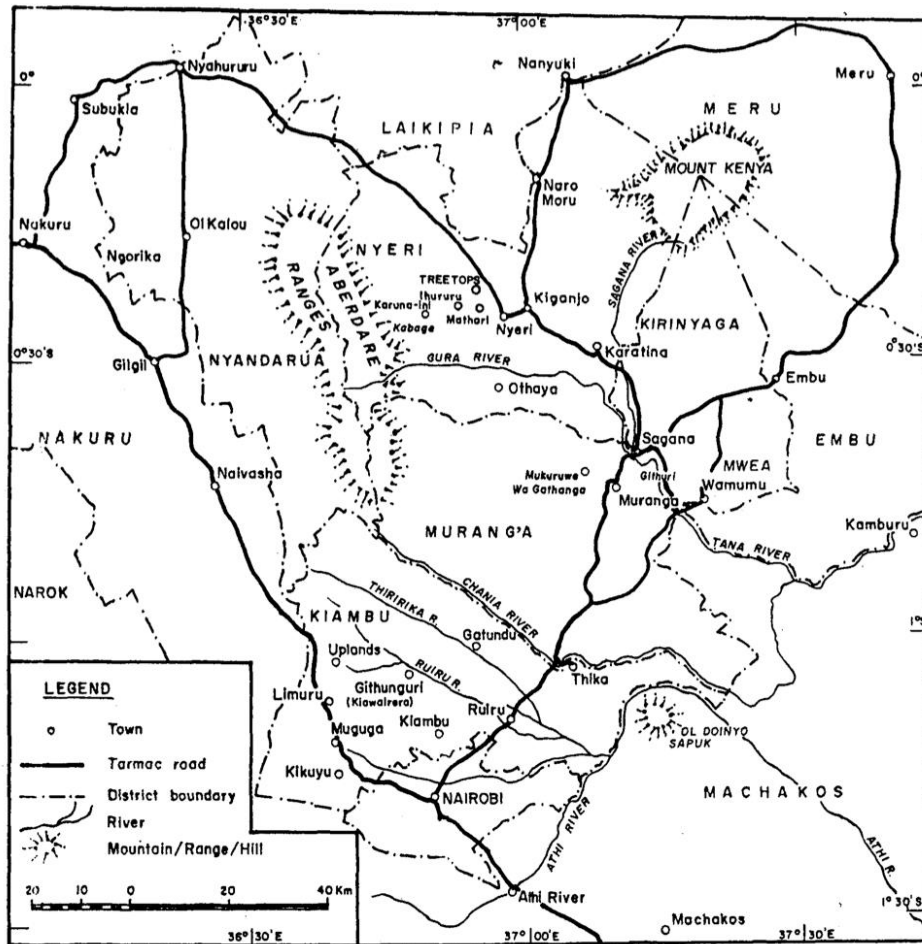
[没]1993.10.16. エヌグ

ナイジェリアの女性作家。イボ民族出身。英語で書く。イバダン大学、ついでエジンバラ大学教育学部に学ぶ。帰国後、ラゴス大学事務官、厚生省などに勤務。のちに出版社を設立した。ニューヨーク大学、ミネソタ大学、ミシガン大学でも教えた。代表作『エフル』(*Efuru*, 1966)、『イドゥ』(*Idu*, 1970)では、女性主人公の愛や悲しみが描かれている。他に、短篇集『これがラゴスだ、他』(*This is Lagos and Other Stories*, 1992)、『戦時下の妻たち他』(*Wives at War and Other Stories*, 1992)など。第一世代を代表する女性作家の一人。

地图(i)

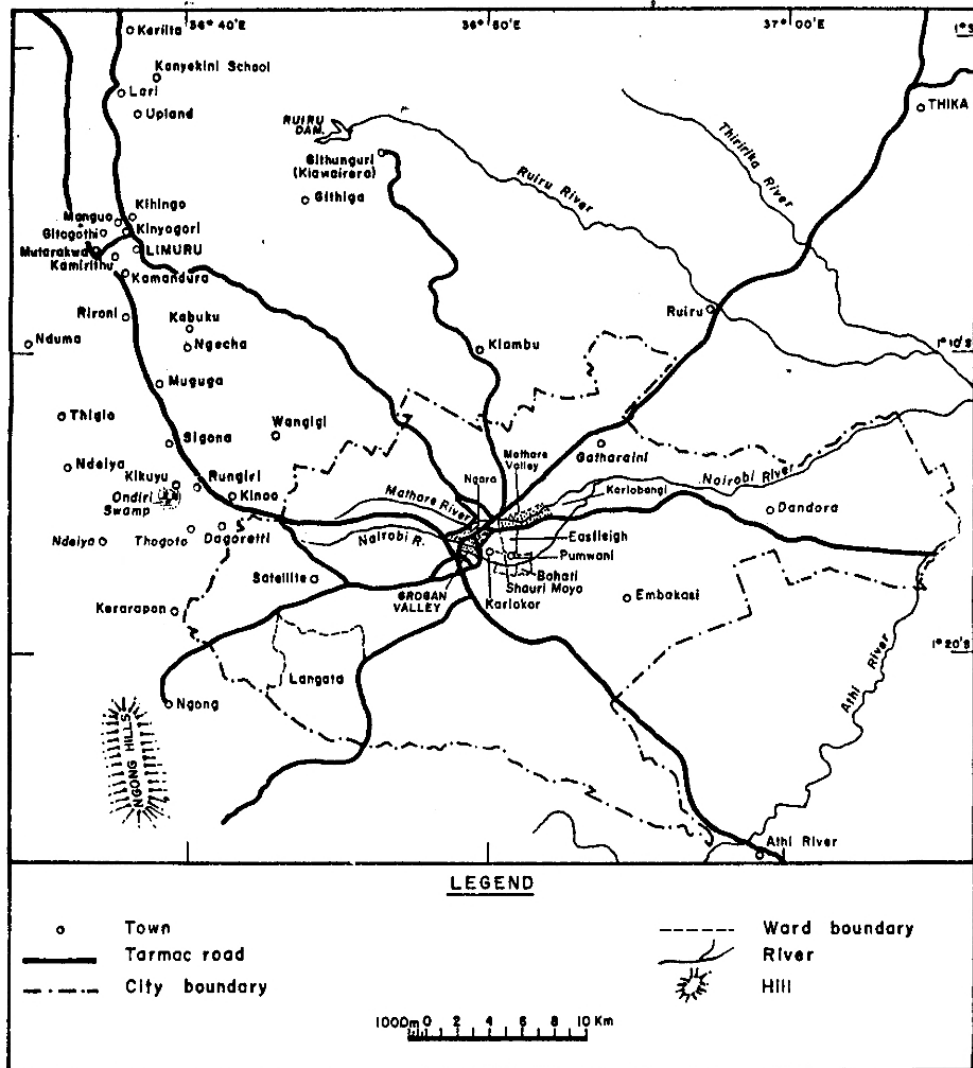


地圖 (ii)



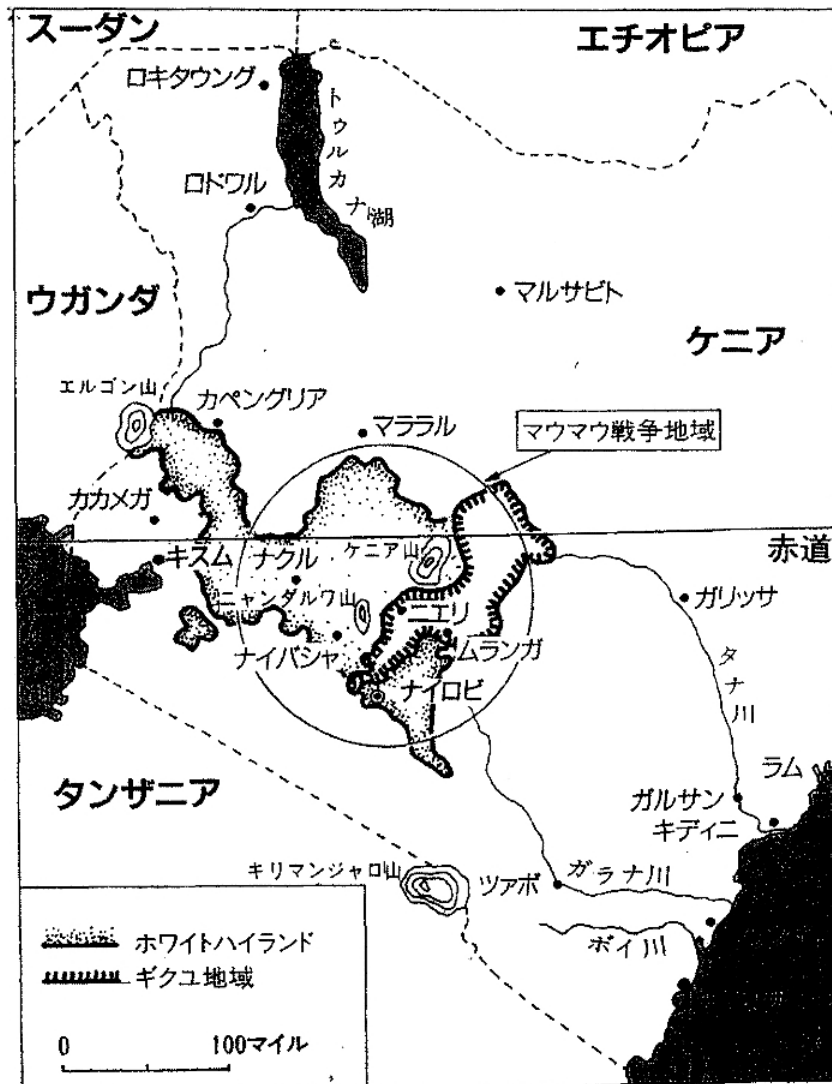
II. GIKUYULAND: KIAMBU, MURANG'A, AND NYERI

地圖 (iii)



III. NAIROBI, LIMURU, AND ENVIRONS

地図 (iv)



マウマウ戦争の地域